

寝て起きてクラフト案件。【完結】

ハヤモ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

創造主は目覚めた。少女は眠りについた。

運命は撥ると笑うらしい。

因みに水色スライムは多様性に富むそうだ。

目次

本と羽ペン

設定。質問。メモ。 | 1

とある創造主の哲学 | 7

焚書処分 | 12

国勢・各章メモ等 | 32

人物評価 | 42

寝起きの洞窟。

1. 洞窟とドラゴンとスライム | 51

外に出たら森だった。

2. 外とゴ布林村 | 56

3. 改修と新型ゾンビ | 62

4. 狼と懐柔 | 70

5. 町作りと変態 | 75

別の集落へ。

6. 再起と遠征 | 79

7. ポーションとリフォーム | 88

8. 剣とエンチャント | 94

9. 胸囲とパールモドキ | 101

少女は眠りについていく。

10. 帰還と拡張 | 107

11. 出会いと案内 | 112

12. テツパンとにつぼん | 118

13. 滞空とブレイズ | 121

14. 寝ると起きる | 129

新たな日の出。

15. 生死と世界 | 135

16. ピッグマンと畑 | 139

17. ウイツチモドキとスプラッシュユ | 144

18. シズとクラフター | 148

他の地、集落観光。

19. 今後と喧嘩 | 153

20. ちゃんばらと集団 | 157

21. 湿地と舞 | 161

22. 方々と地下 | 166

23. 集合と懇願 | 170

24. 雑談と道 | 178

暫しの日常。

25. 現状と不安 | 184

26. 農作と順風 | 188

27. 悪性料理とミルクバケツ | 192

28. 支度と君主 | 196

創国：ジユラ・テンペスト連邦国

29. 天馬とガード | 200

30. 飲食と星下 | 208

31. 本と羽根ペンと建国記念 | 213

32. 仮称：IRPと未知数 | 216

魔王、ミリム・ナーヴァ襲来

33. 初期起動と反省 | 219

34. 対人と問題点 | 227

35. 荒らし行為と修繕

235

36. 戯とケーキ誘惑

242

創造と甲斐。

37. 作る”子と”生きる事

246

38. 寝起きの洞窟と葉

250

39. 村人農業と価値観

254

40. 砂糖と浮かぶ笑み

258

訪問者

41. 訪問者と殴り合い

261

42. 静かな恨みと騒ぐ者

266

43. 再会と新規

269

44. ハアン集会と思い出し

274

戦いの気配。

45. シズと剣道

280

46. 開通話と嵐接近

284

47. 戦闘準備と出撃準備

289

48. IRPと空魚群

294

カリユブデイス戦

49. 雑念と多様性

298

50. 不意打と荒療治

303

51. 結果と処理

313

新旧村人との別れと出会い。

52. 流れる時と寂寥感

319

53. 酒と先

324

54. 山猫風村人達と虚仮威し

327

5 5. 評価と友好 | 334

5 6. 豪酒と観光 | 339

5 7. 実験と狐村人との出会い | 342

5 8. 取引と利益 | 347

5 9. 笑顔と対価 | 351

旅立つ者と残る者。

6 0. 許す事と駄目な事 | 355

6 1. 束縛と自由 | 359

6 2. シズと訓練 | 364

6 3. 鍛冶と似たもの | 370

6 4. 釣竿と実演 | 375

6 5. 備えと心配 | 379

6 6. 観光案内と有翼村人 | 382

6 7. 未知と道 | 387

6 8. 準備と事後 | 391

6 9. ゴーレムと使い様 | 396

7 0. 水上建設と水中建設 | 400

ブルムンド王国

7 1. 移動と想像 | 403

7 2. 入国評価と越権行為 | 407

7 3. 村人と取引 | 411

7 4. スポーンと観戦 | 416

7 5. 自由と代償 | 424

7 6. 食事と行儀 | 428

7 7. 辛辣同志と談議 | 434

7 8. 小話と再鉄道 | 440

7 9. 例のアレと土竜式 | 444

8 0. 誕生と消失 | 450

イングラシア王国

8 1. 隠密と入国 | 460

8 2. 都市と散策 | 465

8 3. 若人と面談 | 471

8 4. 信頼とモコモコ | 484

8 5. 団欒と未来 | 488

自由学園

8 6. 教え子と再会 | 492

8 7. 学舎と子供達 | 499

8 8. 模擬戦と結末 | 504

8 9. 学舎と日常 | 511

9 0. 匠と研究 | 518

一方、魔国連邦にて。

9 1. 悪人顔と明と暗 | 524

9 2. 狐娘と可能性 | 529

9 3. 近状と報告 | 534

創造主達への賛歌

9 4. 襲撃と出撃 | 541

9 5. ドラゴン退治と居場所 | 547

9 6. 遠方と未遂 | 555

9 7. 遺跡探索と羽虫 | 559

9 8. 応接と便宜 | 564

99. 時と空間

100. 時荒らしと判断

不穩

101. 魔女と半身

102. 騎士団長と天誅

103. 荒らしと荒らし

ファルムス戦

104. 開戦と同志

105. 敵と慈悲

106. リムルと口論

107. 把握と盗聴

108. 魔女裁判と手術

109. 砲撃と掃除

110. 生存者と心有者

111. 追討ちと降参

荒らしイベントと後始末

112. 観戦と死亡メッセージ

113. 問題と処理

114. 委託と拷問

115. 会議と戦場

116. 森林戦と時間稼ぎ

117. 竜の都と駐屯荒らし

118. 魚災再来と新技術

119. リムルと決戦前

ワルプルギス

728 716 709 700 691 685 681 673 668 661 654 644 639 632 625 619 612 601 596 587 570

120. ご迷惑とお詫び | 732

121. 余所見とリスポーン | 741

122. スケルトンとゾンビ | 752

123. ミリムと白荒らし | 765

124. マルチと決着 | 773

125. ケーキと夜魔の女王 | 780

黎明の為に。

126. 過去と願い | 789

127. 再建と復興 | 796

128. 辛辣同志と夢の話 | 801

129. リムルとネザー | 821

謀略の薫り

130. 現状と進展 | 826

131. ラーメン屋とヒナタ | 837

132. 配慮と妥協 | 845

水の底。

133. くらふと できてしあわせ。 | 850

134. 銃と腐った肉 | 856

135. 制圧後と今後 | 866

師匠と弟子

136. ヒナタと再会 | 870

137. 騎士団とクラフター | 879

138. ヒナタとシズ | 885

139. お話と地下勧誘 | 891

140. 料理と風呂 | 898

141. 娘と喧嘩 | 904

142. 新人と教育 | 912

143. マルチと楽しみ | 916

魔都開国

144. 絵画と額縁 | 920

145. 大規模建設と迷宮妖精 | 924

146. 嵐と荒らし | 944

ユウキの陰謀

147. ヒナタとユウキ | 953

148. 勇者と爆発 | 975

149. 救いと笑顔 | 986

150. ルミナス達とクロエ話 | 995

151. 別大陸と軽戦重食 | 1004

152. 準備と軍事部 | 1012

帝国編

153. 開化と創造 | 1022

154. 宇宙同志と戦争準備 | 1038

155. 開戦と食中毒 | 1054

156. 撃滅と弟君 | 1066

157. 末期と影 | 1093

158. 創造主と創造主 | 1131

天使戦へ。

159. 駆除準備と未定爆発 | 1160

160. 大戦開始とマルチ | 1173

161. 各地と戦闘 | 1218

162.	フリーズと巨人	1288
163.	幸運と邁進劇	1328
164.	赤色とエンダーモドキ	1389
165.	防壁突破と正義	1398
166.	天空門と思い出	1402
167.	頂と光景	1414
168.	悪友と創造主	1419
169.	無限とマインクラフター	1428
【おわり。】	の先へ。	
170.	寝て起きて。	1442

本と羽ペン

設定。質問。メモ。

人物（と記載しつつ人でなしも含む）

クラフター

本作主人公”達”。 沢山いる創造主。

物を作る力、クラフト能力を持つ。

人間の姿そのものだが、人によって意見は分かれる。 能力が異端、会話不能の為。

建築物や道具、他様々を創り出していく人生を自由気ままに謳歌する者共。

開拓者で冒険者、挑戦者で建築家で炭鉱夫でもあり、木こりでもあり、戦士でもあり料理人でもあり、薬剤師でもあり、破壊と創造の美学に魅了されてたり。

その知識と能力、圧倒する常識は多様性に富む。

いつも通りベッドで寝て起きたら転スラ世界に何故かいた。

何者かに召喚されたのか、運命に翻弄されたのかは不明。

なににせよ別世界は初めてでは無く（地獄であるネザー、終焉世界のジ・エンド）、そういう世界かと疑問も無く、いつも通り楽しみ周囲が蹂躪される羽目になる。

リムル

リムルⅡテンペスト。

水色スライム。 原作主人公。

洞窟内でクラフターに出会い、何やかんや共にしていく。

転生者。 元は日本という国で三上 悟という37歳のゼネコン勤務のサラリーマンであった。

通り魔に刺されて死亡、このファンタジー世界へとスライムとして転生。

（↓原作タイトル）

リムルという名前は、洞窟内に封印されていた暴風竜ヴェルドラⅡ

テンペストに名付けられたもの。

某有名ゲームでは最弱モンスターでありながら、様々なスキルを習得していく事で圧倒的なチカラを手にしていく。

クラフター以外の多くの出会いも得て、一大勢力を築くに至っていない。

元々ゼネコンだった為か、建築家でもあるクラフターには色々と思う所がある。

ツツコミあり、喧嘩あり、感嘆あり。

あと普通に非常識にツツコミを入れる。

ヴェルドラ

暴風竜ヴェルドラ。

天災レベルの強大な力を持つ黒いドラゴン。

気さくな話し方をする。

悪いヤツに感じないが、なんか遠い昔(300年前)にハッチャケてしまい、結果として勇者に封印されてしまった。

それが初期スポン地点の洞窟。

封印されている為、身動きが取れなかったが偶然リムルと出会い、名を与え友になる。

突如現れたクラフターの存在には行為含めて驚愕した。

シズ

シズエ・イザワ。

若い女性の姿。 リムルと同郷、日本出身。

ただし転生ではない。 とある魔王に召喚されて、この世界へやって来た。

時代も異なり、戦時の日本からやって来ている。 にも関わらず若い姿で生き続けていたのは身体に宿された精霊の影響。

長い事活躍していたらしく、ギルドの英雄とされる。

今は現役を引退したらしいが……。

ミリム

ミリム・ナーヴァ。

最古の魔王のひとり。 なのだが子どもっぽさが目立つ。

破壊の暴君（デストロイ）のふたつ名を持つ。 竜魔人（ドラゴノイド）。

リムルとクラフターが只者では無い事を見抜き、自ら姿を現した。ふたつ名から分かる様に創造主のクラフターとはある意味、相対する存在。 クラフターからしたら荒らしであり迷惑である。

ただミリムはクラフターを気に入っている。 クラフター側もミリムに愛着が湧いていたりお互いに敵対している訳ではない。

辛辣同志

クリーパーカーちゃん。

特殊個体のクラフターで、村人と会話が可能。

某研究所から魔国連邦へと移ってきた。 その時出会ったあるクラフターの影響で夢を持つ事になる。

一方で暗い過去があり、明暗のある人物。

シオン

オーガの一族のひとり。 リムルの秘書。 一応。

戦闘力が高い一方料理の”天災”で、知る者の多くが恐れ慄く。

クラフターも死ぬ思いをしている。

あまりに危険な劇物故、これを兵器として転用出来ないかとクラフターに研究される程。

Q & A

Q. 転スラとのクロスとの事ですが、原作小説や漫画等と分かれていますか？ 参考文献、基準はありますか？

A. 本編コミカライズ（漫画版）です。 タグに記載しておきます。 または前書きにて記載します。

Q. この世界は Minecrafter に基づきブロック世界なので
すか？

A. クラフターからはブロック世界、リムル達には普通に見えます。
す。

ただし、作中では読み易くする為にカクカクしている表現は避けま

す。

Q. 何故会話が不可能なんですか。 世界の言葉は？

A. 特異な存在だからです。

Q. 魔素の流れを読む魔力感知、念話とかある筈ですし、会話が出来るのかw

ある意味アンチヘイト、世界観の否定の1つ（ry

A. だまらっしゃい！（思考放棄

理屈を考えてしまうと深淵と向かい合いになると思うので、そういうものだとか……。

空想科学も入れると、尚更に。

あくまでクラフターは我が道を行く者達。

これはファンタジー。 ” 創作の話 ”、魔法の言葉で片付けましょう（殴。

Q. リムルの代替にするのではなく、共に出させようとしたのは何故ですか？

A. クラフター達は会話が出来ない自由人の設定でしたので、完全暴走を防ぐ為です。

またストーリー的にも会話が無ければ難しいと判断し、やはり原作主人公は必要と思いました。

元ゼネコンとの事ですので、建築家でもあるクラフターと絡ませたい意図もあります。

その辺の現実側の観点は、前世をファンタジーに持ち込ませない、或いは夢を崩さない為か漫画内では避けている様に感じられました。が、原作主人公の設定から敢えてソコを描写したいという気持ちがありました。

Q. クラフターは単体で良くない？

A. マルチ感覚で、” 自分 ” もいる様にしたかったのと、ワイワイしたかった事、また展開する時に別の場所での話を作れる様にした

かった為です。

Q. クラフターは何人いますか？

A. いっぱいです。

Q. クラフターに性別は？ 見た目って？

A. ありますし、見た目もバラバラですが、あまり深く描写はしません。 ”クラフター”を強調したく思います。

Q. あらすじにある少女って？

A. あの娘さんです。

Q. それはシ（ry

A. おっとそれ以上はいけない。

Q. ハードコアモードですか？

A. 違います。 リスポーン可能なサバイバルモードのイメージです。

Q. 看板等文面で意思疎通は出来ないのですか？

A. 保留しています。 リムル達に自由の束縛を受ける気がしたので。

意表をついて周囲を困惑、驚愕させたい気持ちがあります。

Q. シズと会話が出来る風でしたか？

A. 一部例外です。 原作では早期に死亡しますが、同時に重要な人物です。

本心、世界を嫌っていたのもあります。 クラフターとは相對します。

それは作風、思想的にも哀しく捨て置きませんでした。

問題は生存、会話してしまう事で世界に矛盾を齎す事です……。

(作者は転スラ知識が深くありません)

Q. バージョンはいくつですか？

A. 具体的な数値は決めていません。

↳ 1.9 辺りぽいかもしれませんが、廃止された動作やクラフト、オリジナルぽいのも入れるかも知れません。

Q. リムルが原作通りのスキルを取得していない気がしますが？

A. 代わりに創造主がなんとかするでしょう。 何とかならないかも知れませんが（殴）。

Q. クラフターはどれくらい世界を掌握していますか？

A. 皆様のご想像にお任せします。 ですが意見や提案は大歓迎です。

とある創造主の哲学

我々は複数の異世界を冒険した。

我々は多様の群生を目撃した。

我々は数多の地形を開拓した。

我々は無数の建物を建築した。

我々は深淵の闇を払い続けた。

我々は様々な創造を続けた。

地上に

空中に

地下に

水中に

溶岩に

泥梨に

終焉に

喜びを

怒りを

哀しみを

楽しさを

その笑顔を

世界を

人生を

敬意を示して

自分を愛して

この世界の者達は、皆は どうだろうか。

我々は新参で外様である。

この世界の多くを知らない。

その未知なる環境も群生も創造力も。

掩蔽物1つ無い晴天の先にある星海さえ。

だが、この世界のクラフターも知らないだろう。

漠然と確信した。

その多くが知性を見せた時。

傲慢や不安を見せる君達を見て確信した。

我々が見聞きした事は、君達の問題と比べてあまりに小さいと鼻で笑うだろう。

だが逆に我々の事を君達は知らないだろう。

互いの世界。

互いの歴史。

互いの道。

互いの創造。

それは私とあなたの2つではなく、天に散りばめた星達のように無数にある。

ほぼ無限大と言える広大な世界が無数に存在しているのだ。

故にもう1度考えて欲しい。

今いる世界の事を。 生きている地を。

シズや我々の様に違う世界が無数にあつて、それにも関わらずこの世界で巡り合わせている奇跡の多くを。

そこには、あなたが愛している者達

あなたの友達

あなたが今までに聞いたことがある者達

そうした全ての存在が詰まっている。

人生を過ごしている。

私達のすべての喜びと苦悩。

何千もの信奉。

観念形態及び集団秩序。

全ての狩猟者と略奪者。

全ての英雄と臆病者。

創造者と破壊者。

全ての王と小百姓。

全ての若い恋人達。

全ての親。

希望に満ちた子供。

発明者と探検家。

全ての道徳の教師。

全ての荒らし。

全ての最高指導者。

全ての英雄。

歴史上全ての聖者と罪人。

この世界にも、そういつた概念や存在があり数多に詰め込まれている様だ。

それでも尚、村人達や生物、物質は全て無数にある世界の塵に過ぎず、星々の、それも目を凝らしてやっと見えるか見えないかの僅かさな点に過ぎないのである。

勿論、見えない点も沢山あるだろう。観測すら出来ない世界が無限にあるだろう。

世界ひとつひとつを全て合わせた時に出来る巨大な空間の中では、今いる世界は非常に小さな舞台に過ぎない。

この塵一つにすら満たない角の世界に住まう村人が、ほとんど区別できないもう一方の角の村人によって行われている無限の残酷な行為を考えて見て欲しい。

シズは無情に召喚された。

リムルは殺害され転生した。

我々は運命に翻弄された。

そしてこの世界で出逢い、この地の村人達と無数の接触を行った。それだけで。これだけで。

どれだけ誤解が起きているか？

他人を殺す事をどれほど切望しているか？

彼らの憎悪がどれだけ熱いか？

シズはこの世界を嫌悪した。

別世界から勝手に連れて来られたのだから、かの憎悪も理解は出来る。

救いたい、と同情もした。

だがそれすらも、この世界と我々の話だ。

恐らくシズの様は苦しんでいる者達もまた無数にいるのだ。

全てを掬い上げる事は不可能だ。

感知すら出来ない。

王や荒らしが栄光と勝利を得て、この小さな塵の一部分の支配者になるために生まれた死屍累々の山と川を考えて欲しい。

我々の姿勢、我々が想像した独善、我々がこの世界で特権的な地位をもっているという思い込みが、松明を刺しても刺しても払えない闇から疑問を投げかけられている。

この世界も、或いは日本と呼ばれる国がある世界も、夜空に拡がる無限の暗闇に大きく覆われた孤独な細粒だ。

この広大で暗い場所では、我々の為にどこかから助けが来る兆しは全く無い。

望むと望まざるに関わらず、今のところ我々は今ある世界と向き合い態度・姿勢を思考するべきだ。

なにより、我々は“無限大”にある一つの塵の様な世界に生かされているのだから。

だから、というべきか。

悩んで息が詰まる時は誰にでもあるが。

そんな時は夜空を見上げ、無数の星粒の世界を夢想した。

その時、我々や貴方達は屈辱的な経験をすると共にちっぽけな悩みだと経験し、苦悩は幾ばくか払拭され救われる。

創造主、或いは村人達のうぬぼれ・愚かさを確認するのに、“この”遠方”から見上げる星々の無数の小さき世界を想像するより良いものは恐らく存在しない。

この思考は我々が他人に対して親切に接し、奇跡的に知り得たこの世界を大事にして楽しむ責任がある事を強調している。

それは村人の恐らくほぼ全てにも当てはまると信奉している。

だからシズも……リムルも皆も。

幸せに生きて欲しい。

改めて初めまして。そしてようこそ。

奇跡的に出逢えたこの世界に感謝を。
この世界で巡り逢えた君達に感謝を。

焚書処分

メモや記録等。 筆者不明。
秘密、極秘裏実験、禁止、禁忌、封印された技術に対する考察含む。
時に過去の話にまで遡り、何処までが真実かは定かではない。
混乱を避ける為、公開しないか焚書処分。

【起床〜シズリスポーン記録・メモ】

起床時洞窟

松明の有無から未探索と断定

↓ベッドの位置

大半は自宅か自室

洞窟内で目覚めた理由……不明

座標解析、取得……失敗

↓別世界と断定

帰還出来る可能性……不明

↓探索開始

仮拠点の建設、採掘作業

青スライム発見

未確認生物群確認

エンドラモドキ発見

↓全て常識が当て嵌まらない

特に青スライムの脅威の底が見えない

ウィザード級の恐れ有り

エンドラモドキ、その他生物群を捕食

捕食対象……擬態能力……発声……戦闘力未知数……

討伐打診数件

↓保留

臨機応変に対応の事

資材の在庫少

洞窟外への探索
↓全員
青スライム同行
外部
↓森
開拓開始
村発見
緑村人
↓ゾンビ？
敵対無し。 殺生は回避
村の改修
原生狼群と邂逅
↓約100
懐柔を試みる……半成功
1匹敵対。 殺処分
↓青スライム捕食。 狼に擬態
原生狼群、スライムに従順
原因↓詳細不明。 擬態が発端？
村を拠点化
大規模改修及び増築
村人の変化確認……大型化、美形化
能力の変動……上昇傾向
詳細不明……未調査
別集落確認
距離……座標……
多種多様な村人……
集落外部で敵対的村人……逃走
集落内……規模……街
不明な文化多数……親切的な村人数名……
地下鉄による連絡線、貨物線の案
見積……鉄……RS……棒……

着工……竣工予定……未定
集落周辺開拓案
現調……未鑑定……
青スライム
名：リムル
村人口急上昇
速やかな開拓、増築敢行……
摩天楼数十件……空部屋多数……
↓将来用
細部設備
↓村人が対処
森で村人4名と邂逅
大型モンスター複数……弓矢、剣で討伐
村人内1名仮面付
名：シズ
街にて持成……
街外にて中規模戦闘発生……
シズ（変質）と戦闘……
火炎攻撃……ブレイズ？
↓既存戦闘方法で十分対処可能
黒曜石ドーム建設
水バケツ大量使用
↓大規模爆発発生……クリーパー？
瀕死のシズ（変質）を青スライムが捕食
↓初期シズを嘔吐
同志が用意したベッドで安静
約7日間 目覚めない
↓起床後
リムルの精神攻撃でリスクルに遭う
亡骸……リムルが捕食
↓シズ、リスポン……帰還者……初体験？

尚、黒曜石ドームは解体、整地との事
特筆・考察

【帰還者（リスポーン）】

村人は通常リスポーンしない。

にも関わらずシズがリスポーンしたのは興味深い事例。

ひよっとしたら、この世界の村人は我々が用意したベッドを使用する事でリスポーンが可能になるのではないだろうか。

シズが特殊体質の可能性を否定出来ない。何故なら服までロストした。我々は持物はロストしても服はそのままなのに。シズは羞恥心に悶えた様子だった。取り敢えず健康体に戻れた件は悦ばしい。

そもそも村人枠なのか。この世界のモンスターと村人の境界は曖昧だ。

実験したく思うが村人の殺生を戸惑う者もあり、目処は立っていない。

ただ焦らずとも我々が手を下さずに結果は得られるとも思う。
のんびり観察するのも良いかも知れない。

因みに帰還したシズとは大雑把ながら会話が可能になった。大きな進展だ。

この世界の村人とは会話不能だとばかり思っていた為、上手くいけば互いの理解を深められる事を期待する。

【対ウィザード級大型対応二足歩行戦闘兵器】

仮称：I R P (I r o n R E X ・ P o w e r e d)

及び当機に使用されている技術類

動力源：B B (B l a c k B o x) 等について

(諸元については記録・地下施設・??1参考。但し、そこでも詳細不明とある)

I R P、B B 技術の詳細を知る創造主は数多いる同志の誰かと仮定。

これらに修復、改修を実施する際の効率向上の為、又は量産や同系統技術の応用による更なる技術的飛躍の為、公開を求める意見が上がつている。

決して無視出来ない数と大きさまで膨らんだにも関わらず、代表と思わしき創造主が名乗り上げる事は今のところ出現する兆候を見せない。

使用されている技術や理論の一部は何とか理解出来る部分もあるにはある。

TNTキャノンや、この世界の通信水晶なるもの……それでも不明な点が多いのは否めない。

それらも言ってしまうえば、エンダーパールの様な……特性は分かれど理屈を理解していない点は同じかも知れないが。

今のところ、理解出来る範囲と研究して実用化出来る範囲で改造や修理をしていくしか無い。

【二元の世界、BB等について】

そもそもこの技術自体、今まで何処に隠れていたのか。この異世界の物では無い。

では何故この異世界に投げ出されてから目に曝される事態になったのか。

この世界に持ち込んだ同志に事情聴取をする事が出来たが、曖昧な返答しか得られない。

物心つく前に存在していた、持主不明の既存の建造物内を探索していたところ、伝承の様に本が幾つかあったという。著者はS.とあつたらしい。イニシャルだろうか。

その中に書いてあつた座標を特定し調査した結果、BBの発見に至つた。

そこは稼働停止したジオフロントであり、テンペストに築いた現地施設より大規模であつたという。

しかし、より設備の整つた空間だった形跡があり、明らかに黒曜石で充填封鎖された通路や部屋、わざわざ自然体にみせかけた隠蔽工作の跡、TNTをスタック単位で起爆したかの様な大きな爆発痕まで

あつた。

遺跡探検の感覚もあり、知的好奇心から採掘を試みた者は多くいたが、どういう訳か岩盤に遮られ殆どは発掘不可能となる。

岩盤座標でないにも関わらず、である。

有り得ない、荒唐無稽とするにせよ、遺跡探検に関わったと思われる同志達が嘘を吐いている様にも思えなかった。

期待や夢想で胸を膨らませても混乱や疑念を膨らませて良い事は無いと判断する。

他の者達も同様の思考の様で安心した。荒らしとは、こういう時にも発生してしまうものだから。

(以下地下にて発見された旧メモについて)

加速器……核……反物質……重力……磁場。

予測爆破範囲……汚染……世界消失……。

BB回路設計……脅威査定……。

ほぼ解読不能。これら単語が意味するものは分からない。それらも剣ガードの様な忘却されたロスト・クラフトだろうか？

最後の長い走り書き……。

『全ラボラトリーメンバーへ！』

箱口令及び破壊命令！

直ちに全実験装置を破壊！

全実験記録抹消及び試作品処分！ 全施設放棄！

特に……関連施設は極力破壊せよ！

痕跡も極力消す事！ 他は後回しで構わない！

ウィザー以上に世界に遺してはならない！

装置や知識自体は悪としたくない。

だがそれで得られた創造物と結果を憂いた。

得られた結果は創造でも破壊でもなかった。

手に余る”無”だ。

新たな創造への活路を見出さんと奮起した己と協力してくれた諸君を裏切る形になった。本当にすまない。

各自、隠遁までしろと言わない。自由に生きて欲しい。だが此

処の出来事は忘れる。

創造に対して正義だの悪だの荒らし懸念だの趣味だのとは言いたくは無いが……個人的主観になるが多くは語らない。だが同志諸君、理解してくれると信じている。

何年後か、それとも直ぐなのか。発掘調査をされる心配もだが、そうしなくてもいずれ誰かがこの域に到達する恐れは十分有り得る。

我々の様な創造主、マインクラフターがいる限り。

【考察・創造物】

何を創造し、恐れていたのか。

一般に公開出来ない程だったのか。

だとしても思う。これもまた個人的な意見になるが、創造した結果をどうするかで荒らしにもなるし平和利用にもなる。

楽しいばかりでは無い。それを我々は良く知っている。知っているのだ……。

創造に対して失ったのは資材や労力、時間ばかりでは無い。時にはかけがえのない友を失った。

この世界で自分の魂だと言えるモノがひとつでもあれば我々はリスポーンするのだと考えている。

そうなる、あらゆる創造……生きる意志を失った者は二度と還つて来ない事になる。それが失った同志達だと考えている。

善悪は結局最後は個人個人に委ねられる。それを……だからこそ、あらゆる可能性から封印したのだろうか。

……BBが破壊されなかったのは安全だったからなのか、それとも。

リムルやシズに聞けばヒントを得られるだろうか？

いや、やめておこう。何か……触れてはいけないモノかも知れない。

傍観も時には必要か。触らぬ神に祟りなし。

【記録：地下施設・??1・メモ】

強力な敵性勢力の可能性

↓既存の武装での対応困難、対策の急務……

危険物の実験及び貯蔵場所

地上村人の避難所

↓地下施設の建設開始……

作業員の派閥争い発生

施工内容、予定に大幅な変更有

主要変更例

簡易なくり抜き部屋の量産

↓超大型空洞での地下都市建設

天板

↓地上からの大規模攻撃対策……

黒曜石コーティング

ビルディング十数件建設

地上との連絡階段及び昇降機、梯子等で接続

道路の敷設、鉄道敷設

観葉植物……生活環境への配慮……

地下都市：問題

緊急避難時

出入口の数

全人口地下収容までの所要時間推定……

自給自足

侵入者発生時の対応……

RSランプによる灯火管制……

全RS配線は困難

↓管制室複数、一部自由管制

鉄道敷設意見……

その他多数意見……

改善点多数報告……

ネザーゲート室

↓出入成功。 問題無

元の世界と接続可
資材搬出入開始……資材の移管……
ポーション室
↓既存レシピ使用
回復薬等生産……
攻撃用スプラッシュポーション等生産……
備考：シオン級の劇物製造は失敗
時間の浪費↓プロジェクト凍結
防具保管室
↓鉄製多数、ダイヤ少数
特にダイヤにはエンチャントを施す事
武器保管室
↓鉄製多数、ダイヤ少数
特にダイヤにはエンチャントを施す事
弓矢……エンチャント、種別に分別……
エンチャント室
↓本棚、本、エンチャント本の保管
↓レベル変更可能動作……
TNT実験室
新型・既存砲台、砲身による弾頭飛翔……
距離、威力、圧縮変動……
座標計算……誤差……
RS・ピストン信号伝達速度変動……
新型砲塔実験……連射速度……
食糧庫
ジャガイモ他、大量保管……
その他施設多数……
格納庫
大型兵器格納。
搬出路、揚重機で地上搬出可

【対ウィザー級大型対応二足歩行戦闘兵器】

仮称：I R P (Iron REX・Powered)
操縦者1名

動力源：BB (Black Box) 詳細不明・極秘

主回路：上記同様詳細不明・極秘

機動力：ジョッキー以上

備考：白兵距離、乱打戦に持ち込まれた時への対応の為、強靱な脚や胴体による格闘戦闘可能

外殻：黒曜石

固定武装：デイスペンサー胴体最低2門

出力：既存の——倍超過

各種対応、切替可能

腕部TNTフルオートキャノン搭載

自動装填、調整機構等内蔵

操縦席：操縦者保護の為完全密閉型

(開口状態での操作も可)

操縦桿……ペダル……SW群……

パネル灯等による外部モニター……水晶を参考……

運用方法：来襲する脅威の迎撃。特に大型目標

主：TNTキャノンによる長距離砲撃による撃滅、撃退

副：接近し自衛兵装及び格闘での撃破、粉碎

【諸元詳細不明】

変更の可能性有

欺瞞情報の可能性有

一部のみ公開

既存技術での建造は不可能と推定

↓極限定された創造主により建造された？

某湖底研究所

【ホムンクルス (人造人間) 製造実験簿】

目的：村人語の通訳生成

製法： 空瓶を3個フルセット。

醸造台に村人の????と????をクラフトした素材を入れて????日密閉。

瓶に発生した????に寝て起きては村人の????を与える。室内照度は
保ち????期間保存する。

発生した茶卵（スポンエッグと呼称）を取り出し床にて割る。

少年少女？がスポンした。

（以降、同様の製法に関わらず失敗中。 増産は困難。 原因不明）

容姿：小柄

知能兼能力：我々と同等以上

通訳検証地：魔国連邦

結果：????

↓そのまま様子見。 同志や村人に紛れさせ経過を見る。

処遇：残り2体の内、1体は耐久実験及びテストベッド

↓永眠。 帰還せず。 耐久値は我々より低い。

もう1つは我々の世界へ護送した。

（眠りについた少女は焼却処分。 隠滅との事）

【報告・今後】

《保全及び技術（創造）革新の為の代用種作製に関する懸念》

当世界における倫理保護の重要性

通訳や労働力、素材等とする為の代用種を創造する際のリスクや、

環境への影響に関しては危惧すべき事がある様に思える。

それは我々の世界という畜産業の牛豚羊兔馬等の増産やスポプロ

によるTT製造によるモンスター葬殺と異なる。

少なくともこの世界においてはするべきではない、と主張する者も

いる事を此処に報告するものとする。

（以下 略文）

代用種や新技術をつくりだす「人造・改革」は、この世界にて短期
間に ますます注目されるようになってきた。

クラフトする事に関する議論は「できるのか」から「すべきなのか」
へと移りつつある。 多くの新しい技術と同じように、強い要望があ
る一方で、有害な影響が生じる可能性についても熟考・配慮して、そ

これらのバランスを保つ必要がある。

もし代用種の作製が死の危機や生物多様性、過去の喪失を解決する手段だとみなされれば、村人や当世界と創造そのものへの認識が変わってしまい、保全の現在及び今後の労力がないがしろにされかねない。

現存種や生態系、創造の保全は、上手くいかぬスポンセぬからと何かで代替するのではなく、それを支える努力のもとにあるということが改めて認識されることが求められる。

でなければ荒らし率の増加を招き、それら非道行為が安易に免罪される未来に直面する事になるだろう。

(略)

優先すべきことは、現存の多様性を維持・向上させることだ。

現存の創造並びに多様性・倫理維持という目的と矛盾しない場合のみ、世界を修復・保全する目的で代用種をクラフトするべきである。

【当世界における人魔区分】

バイオーム、世界毎に様々な生物が見られるが、この世界の村人と魔物の境界は曖昧だ。

姿形も異なり、一見村人形体であつても魔物とされる者が多くいる。

いきなり襲つて来る明らかな魔物もいれば、何かしらの条件で襲う中立もいる。

だが街中にいる者達は友好的な者が多く、取引が可能な事もある。それらを正確に把握するのは困難だ。しかし無差別に此方から攻撃をするべきではない。

(以下、一部同志の意見・主張)

人魔集団を種別に明確に分類する事は出来ないという理由で種という概念は存在しないという主張がある。

しかし移動や交雑が盛んになった連邦では地域変異集団を明確に分離出来ないのは当然である。むしろ人魔は存在しないという主

張が、実在する人魔差別の免罪符に使われない様に注意するべきだろう。

肝心なのは個人でも集団でも、それぞれ身体的・文化的特徴の違いがあっても、偏った特定の価値観に基づいて差別してはならない、という事である。

【魔物の国の姫プリンセスリムル】

某人間の国にて処分されそうになっていた本。

文面は理解出来ないが、絵本形式の部分から予測出来るものがある。

主人公と思われる剣士はいつか連邦に訪問してきた村人に酷似。

表紙及び内容にはリムルに酷似した村人も登場。

剣士が強そうなモンスターを倒し、リムルに酷似した村人が褒め称え感謝しているかの様な描写がある（あくまで我々の想像）。

背景にはビルディングと思わしき建築物や近隣の森林と思わしき絵がある事から、舞台は連邦近辺である可能性が示唆出来る。

【考察・想像】

絵本という形式は我々も学ぶべきものがある。文字の理解は困難だが、絵であれば理解出来る可能性があるからだ。

複雑な事は無理でも村人との意思疎通に役立つかも知れない。

しかし、この本に関しては誇張表現が多分に含まれている気がしてならない。

更に言えば、事実かも怪しい事が指摘されており偽書だと主張する同志もいる。

であれば、処分されそうになっていた理由も分からなくもない。

だが作成された意図は何であろうか。リムルやシズに聞けば分かるかも知れない。

【ある少女と竜の物語】

魔国連邦より南西、魔導王朝サリオンに伝わるお伽噺。

(以下、大まかな内容)

この世に存在する竜種。

その最初の1体が大地にて人間と子を生じた。

我が子に力の大半を譲渡する事になった最初の竜種は、残る全ての力を結晶化させ、自分の分身体ともいえる子竜を生み出した。

そしてその子竜を我が子——竜皇女へと贈ったのである。

幼い竜皇女はすぐに子竜と仲良くなった。平和な日々は永遠に続くかと思われたが——ある刻、悲劇が起きる。

栄華を極めた魔法大国が竜皇女を支配しようと目論み、子竜を手にかけたのだ。

竜皇女は嘆き悲しみ、そして怒り狂った。

父より受け継いだその力は凄まじく、一帯が焦土と化しても、その怒りは収まらなかった。

一柱の魔王と精霊女王の力でようやく正気を取り戻した頃、かつての大国は見る影もなく、栄華は過去のものとなった。

望んだわけではなかったが、十数万の命が生け贄となり、竜皇女は魔王へと開花した。

すると奇跡が起きた。

子竜は竜皇女の魔王化に伴い死して尚、進化したのだ。

立ち上がるうとするその姿に竜皇女は喜んだ。

しかし奇跡は望む形ではなかった。

混沌竜（カオスドラゴン）——死と同時に魂を失った子竜は意思のない邪悪な竜へと変貌してしまったのだ。

他を顧みる事もなく破壊の限りを尽くすその様は、まるで友を失くした皇女自身のようにだった。

恐れ逃げ惑う人々の中、ただ一人竜皇女だけは理解した。友はもう、そこに居ないのだと。

そして自らの手で友の亡骸を封じた。

それが魔王になった竜皇女の最初の偉業となった。

【疑問・想像】

ドラゴンも繁殖出来たのか？

それも村人と？ 異種族同士で？

獣村人が存在する時点で想像出来なくはないのだが……改めて多様性に富む世界だ。

一方、荒らしを成敗した話でもある様だ。やはり状況次第で国家を丸ごと滅ぼすのも止む無しと我々も思う。

しかしこの竜皇女には同情する。何かを失う辛さ等は……。

だが何故だろう。この者に近い者を既に知っている気がするの
は。

〔クラフター宛の禁止・注意リスト〕

(某リスト風)

誰かが書いたリスト。 たぶんナニひとつ履行されていない。

(以下一部内容)

1. クラフターは他国へ不法侵入してはなりません。
2. 空・地下であってもです。
3. 違法建築をしてはなりません。 倒壊せずとも日照権が絡みます。 その前に土地問題があるのを忘れないで下さい。 設備問題は切実です。 とにかく計画に無い事をするのは止めて下さい。
4. 魔王領で遊ぶべきではありません！
5. 国主に対して火炎攻撃をしても無意味です。
6. 突然皆が静まり返る事の意味は「何やってんだコイツ!?」であって「どうぞ続けて下さい」ではありません。
7. 仰る通り経験は糧になります。 また旧き常識は敵になります。 しかし、誰かしらの胸の大きさを白昼堂々大通りで証明するよう倫理的に義務付けられている事を意味しません。 女性陣は激怒しました。
8. 胸囲のみで男と断定してはいけません。 (誰だシズとシユナは男説を述べた奴！)
9. 建築技術や武器、農業のみならず生物構造にまで興味を持つの

を否定しませんが、ハーピーが総排出腔かどうかを確かめようとするのは止めて下さい。フルブロシアでは死に掛けました。

10. 発情実験は許可していません。

11. ルミナス教徒と騎士団は別に考えて下さい。

12. 動物にリードを付けるのは理解出来ませんが、獣人に付けるのは止めて下さい。意図したプレイで無くてもです。

13. IRPを犬の散歩感覚で外に出すのは許可されていません。

14. 金林橋を住民に与えないで下さい。過去にシオンがハイになり、建造物が破壊されました。

15. 汚料理を兵器に転換するのは恐ろしいアイデアです。

評議会で禁止条約が履行される前に使用・開発・所持を中止して下さい。

16. じゃれ合いに真剣を使うのは許可しません。

17. 「誰も創造(想像)しなかったのだろう!」というのは事実です。スライムに性別は存在しません。

18. あなた達の世界では性別の有無は大して重要ではなかったのでしょう。だからと”平等”に押し付けしないで下さい。同性を同居させても望んだ結果は得られません。色んな意味で。

19. クラフターは王ではありません。

20. クラフターのクラフト品も連邦産であれば連邦ブランドです。ですが抱き合わせに腐肉を添付するのは禁止されました。

21. 事故という言葉を使い訳に使ってはいけません。

22. 自己責任という名の無関心もいけません。

23. このリストが2度とするなどしているのは、あなた達をマインドコントロールしたいからではありません(したいです)。

24. コーラスフルーツを疑う事を知らない子供達におやつとして配るべきではありません。

25. 水洗トイレで「自主規制」してはいけません。報告を受けた警備隊や設備担当が未だに下水調査をしています。

26. 執務室の本を勝手に持っていかないで下さい。

27. ルミナス教会へのカチコミは許可しません。

28. 取り敢えず松明をばら撒くのを止めて下さい。 やったからと土地の所有権を主張する事は出来ません。

29. 豆腐建築もです。

追記：手の込んだものを許す訳ではありません。

30. 興奮して首や腰、腕を振り回すのは止めて下さい。 キモい
です。

31. ミリム領にお礼参りするのでも許可しません。

32. クラフターがイングラシアに近づくのは許可しません。

他の国もです。

33. クラフターはいかなる種類の英雄でも、責任者でも、テンペストのオリエンテーション担当でも、ギャグ担当でも、スライムで出ている訳でも、設備やメンテナンスメンバーでもありません。

34. 国境なき創造団は存在しません。

追記：馬鹿はいます。

35. 洞窟に住まう友好的なアンデッドに回復ポーションを与えるのは止めて下さい。

36. フルブロシアでハーピイ用の空中スタジアムは良い案ですが、迷路を造るのは止めて下さい（子供が蟻やダンゴムシに行く感覚なのか？）

37. 政治的に重要な施設、人物らに接触するのは許可しません。
連邦を含めた全てが対象です。

38. カプ厨を拗らせたのか、ネムに聞いたのか知りませんが、フレイとカリオンに結婚式案内や式場建設の案内を送るのは止めて下さい。 返答が無いのは許可したからではありません。 事実確認も駄目です。 フォスは変に興奮してしまいました。

39. 竜の都で料理を作るのは自重して下さい。

40. 他国の建造物を勝手に改造しないで下さい。

41. 決闘を挑む事は許可しません。

42. ジオフロントがミリムに荒らされた件は申し訳なく思います。 ですが負荷分散の大義名分にしないで下さい。

43. クラフターはジュラの大森林の管理権限を持ちません。

持っているのはトレイニーです。

44. 物作りは全ての疑問に対する解決策ではありません。

45. メイドイン・バカのベッドを拡散するのは止めて下さい。

46. 畜産業への理解・勉強を理由に乱交現場を子供達に見学させるのは止めて下さい。また、あなた達のやり方と我々の考えは大抵の場合合致しません。無意味です。

47. 意見の相違からパンキングを始めてはいけません。素手かどうかに関わらずです。双方が合意出来る大人であるかは重要ではありません。

48. 子供達に雪だるまの作り方を教えるなどとは言いません。

ですがやってみせるのは控えて下さい。勝手に動くものだと誤解されます。

49. 子供の作り方を尋ねないで下さい。

50. 何か間違っていると感じた場合、それは間違いです。

51. 正しい何かを含んでいた場合でも、あなた達は間違っていました。

52. クラフターはいかなる国、人、物に対して戦争を仕掛けてはいけません。

53. 世界の為に、という理由は正当化に使用出来ません。創造の為に同様です。

54. 同志の悪い方がやったんだ、良い方がやったんだ、と責任の押し付け合いは無意味です。連帯責任で。

55. 地下鉄の拡大は許可しません。

56. ”打ち上げ”前に報告をお願いします。

57. TNT、ダイヤツール、ネザライトの剣、その他様々な装備をしたクラフター主演による”グランド”ファイナーレの為の国家解体ダービーを組織する事も、認可する事も、どのような形であれ作る事は許可されません。絶対にです。整地厨の投入も認めません。

58. ユーラザニアにコーラスフルーツの酒を輸出する事は許可しません。

59. 獣人をペットにするのは許可しません。

60. 死体を素材にする事は許可しません。
61. 商人と交渉するなどは言いませんが、市場破壊をするのは止めて下さい。
62. 物理的にのみならずです。不釣合いな大量の金塊を市場に流出させないで下さい。
63. 硬貨を自力で生産するのは禁止します。
64. インゴットを流すのも止めて下さい。
65. ミヨルマイル相手でもです。
66. 鍛冶屋の水槽で釣りはしないで下さい。
67. 下水道街を作るのは自重して下さい。
68. 創造への挑戦は妥当な言い訳になりません。
69. エンダーパールを子供にあげないで下さい。
70. ゴミ処理にマグマは危険です。
71. サボテンは許可しますが、柵を設けて下さい。
72. ”地獄”に招待しないで下さい。
73. 地下演習は禁止です。騒音被害が出ます。
74. ゴールド製ツールの提供は駄目です。確かに一時的に作業が早くなりますが、ツール寿命も早過ぎて総合的に作業が遅延します。
75. 国主から得たスライムボールは没収です。
76. ラミリスを羽虫と呼ぶのは失礼です。
77. その他、有翼の者を呼ぶのもです。
78. 牛の様な乳にバケツを試すのは駄目です。
79. シユナやミリムに男か尋ねるのは禁忌です。
80. クラフターがツルハシやスコップを振り回し始めたら、直ちに避難手順に従い退避します。
81. 本棚のある空間に入らないで下さい。図書館などは以ての外です。
82. 復讐か実験かに関わらず、腐肉や蜘蛛の目、青くなったジャガイモを炊き出しや宴に持ち込まないで下さい。
83. 竜の都に対してもです。

84. アメルド大河の向こうがトレイニーの管理外だからと、森を好きにして良い理由になりません。

85. I R P 大戦の演出は認められません。

86. このリストは経歴書に使えません。

87. 外交官特権は誰も与えていません。

88. 手作りのやって良い事リストは無効です。

89. 国庫（金庫）に金林檎は要りません。

90. 話し合いは野蛮な行為ではありません。

91. ルベリオスの深層調査は許可しません。

92. 地下も山上もです。

93. 鍛冶屋や店の剣の窃盗は駄目です。

94. 等価交換でもです。無交渉の場合は特に。

95. ダイヤ製鍬の寄贈は遠慮します。

96. 残機∞VSの意味が含まれる案は問答無用で却下されます。

97. ヒナタを「自主規制」呼びは禁じます。

98. ルミナスに「自主規制」するのもです。

99. 地下鉄の一般公開は検討中です。

100. 東の帝国にちよつかいを出さないで。

101. 共用廊下で花火をするな！

102. 突如としてRecord-13といった恐ろしい音を公

共の場で大きく流すのは止めて下さい。

国勢・各章メモ等

国勢メモ

ジュラ・テンペスト連邦国

首都：リムル

国主：リムル・テンペスト

説明：大陸中央部、ジュラの大森林の中に建国した多種族が共生する魔物の国（魔国連邦）。立地からクラフターや冒険者の活動基盤・重要拠点にもなっており、作中では人魔の国と呼ばれる事もあります。

スライムのリムルを国主に据え、僅か数年でゴブリンの村から摩天楼が建ち並ぶ大都市に発展しました。

この急成長はクラフターの建築技術が大きく貢献していて、それらを求めて（庇護・勉強・研究・商売等）多くの人魔が都市に集まっています。

またクラフターの手により地下に未曾有の大災害（荒らし）に備えたジオフロント（地下都市）が建設されました。

問題点として大きく挙げられるのが、やはりクラフターです。

特に建築分野に関しては既存の建築方法が通用しない為、謎に満ちています。対して設備（水道・空調等）はクラフターは殆ど配慮していません。その為、クラフターの建造物を利用する際は国民側が整備する手間が発生してしまっています。国主もクラフターを制御下に置けず苦勞しています。

—— 発展に貢献しているのは感謝している。　だけどね君達、毎日クレームの山だよ？／リムル

—— 新規・改修ビルディングにはなるべく設備スペースを設けて下さい。天井内にダクトやRS配線可能な空間を作る事や、設備バルコニーを各階に垂直に作る等の処置です。返事をしなさい馬鹿同志。／辛辣同志

—— 怒ってませんよ。　怒ってませんとも。／リグルド

—— 柱や筋交無しで建っているものが多く感じる。　だが強度

はしっかりとしている。どうなっているのか不思議だな。／ゲルド

——連中の道具や鎧は高品質だ。それでいて謎も多い。錆びる事を知らない鉄、ダイヤモンドを贅沢に使用した剣や鎧。作り方も俺達とは違う。あの小さな釜戸から短時間で鋳物を精錬している。それも自動でだ。そこから打ちもせず剣や鎧を瞬時に作る。そして……エンCHANTってなんだ？／カイジン

——負けてられねえだ。／クロベエ

武装国家ドワルゴン

鍛冶職人ドワーフの住まう国家。

連邦から北方面にあります。

技術力が突出しており、工芸品は東西問わず重宝されている様です。

人魔問わず取引が可能です。入国するまでに時間を要する事があります。

隣国にファルムス王国があり、連邦が現れるまで安全な交易ルートは其方でした。

——例の人間達の入国を最早禁じるのは困難か。だとして、金貨の製造は許されん。どんなに精巧でもだ。／ドワルゴ

——インフレーションを起こすなよ／リムル

——工芸品は兎も角、貨幣の偽造は村人の経済や信用を下落させる重罪行為です。やっているクラフターは直ちにクラフトをやめること。／辛辣同志

忘れられた竜の都

魔王ミリムの支配領域。

傀儡国と獣王国に挟まれる立地です。

竜を祀る民が住んでおり、全員が龍人族の末裔。

しかし竜戦士化出来る者は殆どおらず、見た目は人間と変わりません。ですが神官戦士団の戦闘技術（体術等）は目を見張るものがあります。

一方、他国と積極的に交流をしない様です。人間と味覚が同じにも関わらず料理が存在しません。極端な生食主義者に思われますが魔王ミリムは料理が好きです。また祀る民の中には生食がキツイなど思っている者もいる様です（トリニティ6巻参考）。

——料理を教えてやって欲しいのだ。／ミリム

——子供舌なら余計辛いだろうに。こういう時こそアイツらが役立ちそうなもんだが、余計ややこしくなるか？／リムル

——おすすめ出来ません。／辛辣同志

——料理が？ だとしてシオンよりかは／リムル

——火種は減るべきです。火を通せば良いという意味ではありません。／辛辣同志

傀儡国ジスターヴ

魔王クレイマン領。

東の帝国と隣接し、多くの奴隷が住まいます。

ワルプルギスでクレイマンが倒された後はリムル・ミリムの共同統治下に置かれます。

——ワイトキングが待ち構えていた土地ですが、今や城下町が。

／ソウエイ

——どこでも彼等は勝手気儘です。／シユナ

獣王国ユーラザニア

カリオンを王に据えた獣人族の国。

天翼国と竜の都に挟まれる立地です。

軍事・農業大国ですが、1度ミリムに滅ぼされてしまいました。

テンペストとクラフターの支援を受け、速やかな復興を遂げています。ワルプルギスの会合で天翼国共々ミリムの軍門に下りました。

——お宅の連中、勝手に人の国、それも首都の地下に建物造ってんだが？ 不可侵条約はどうなった？ それとも其方から侵攻するのはアリなのかな？／カリオン

——誤解だ!? アイツらが勝手に！／リムル

——まあ、再建してくれたのは感謝してるよ。／カリオン

天翼国フルブロシア

フレイを女王陛下に据えた有翼族の国。

獣王国と隣接しています。

有翼族に有利・合理的とも取れる険しい山脈・崖に建造物が造られている光景が見られます（トリニティ6巻参考）。

——好き勝手に建物を作らないでくれるかしら。山を削るの

も止めて頂戴。／フレイ

——煮るなり焼くなり好きにして。俺には制御出来ません。

／リムル

——ところでカリオンさんとデキてるって本当ですか？／辛辣

同志

——ネムには説教ね。／フレイ

ファルムス王国

ドワルゴンに隣接し、テンペストに戦争を仕掛け敗退した国。

その後、リムルの思惑で内戦が起きました。

ブルムンド王国

テンペストと早い段階で国交を結んだ国。

決して大きな国家ではありませんが、ファルムス同様、魔物の住まうジュラの大森林に接している為か堅牢な建物が見受けられます。

イングラシア王国

自由組合本部や西方協議会の本部など、重要施設が多く集まる国。

また、発展した建造物群が見受けられます。

魔導王朝サリオン

西方諸国に隣接する国。

サリオンの技術に人造人間（ホムンクルス）がある様ですが、とある辛辣同志に使用されている技術とは恐らく異なります。

ウルグレイシア共和国

農耕やサリオンとの貿易で生計を立てる共和制国家。精霊信仰

が盛んな様です。

神聖法皇国ルベリオス

唯一神ルミナスを崇める宗教国家。

裏では人間が吸血鬼に利用されているとも取れるシステムが構築されており、神の正体が魔王なのは秘密にされています。

1章・寝起きの洞窟。

特筆：エンドラモドキ・リムルと出会う。

この世界における初期スポーン地点。

洞窟開拓。 仮拠点の豆腐が陳列。

エンドラモドキとスライムのリムルに出会う。

エンドラモドキは謎のドームに覆われており討伐失敗。 代わりにリムルがドームごと捕食。 代わり

2章・外に出たら森だった。

特筆：村の改築。 狼の群れを懐柔。

ゴブリン村へ。 粗末な建造物を改築。

襲撃してきた狼の群れを懐柔。

村を発展させていく。

建材に偏りがあるものの、既にこの段階で高度限界の摩天楼を建造した。

3章・別の集落へ。

特筆：ドワルゴンへ。 カイジンと出会う。

リムル、建築技術等を求めてドワルゴンへ。

案内された牢屋をリフォーム。 快適空間へ。

鍛冶屋のカイジンと出会う。

リムル、カイジンの剣を複製。

案内された店で初めての飲酒。

水晶玉でシズを見る。

乱入してきたベスターに水を浴びせられる。　ポーションかと思つて飲み干すもタダの水。

店内に無限水源を造る。　掛け流し風。

4章・少女は眠りについていく。

特筆：シズリスポーン。

荘厳な空間に案内される。　見学。

観光終了。　拠点に帰還。

繁殖していたゴブリンの群れを目の当たりに。　村を拡張。　人

口増加への対応へ。

道を延ばし摩天楼を増築。　畑も整備。

村人トリオとシズに出会う。

鉄板や釜戸で焼肉をして持て成す。

シズとリムルが散歩へ。　ついで行く。

シズがイフリートに変貌。

トリオが合流。

イフリートと交戦開始。

最終的に黒曜石ドームに閉じ込めた後、水バケツを被せたところク
リーパーの如く爆発。　無力化する。　リムルが昏睡したシズを回
収。

クラフターの用意したベッドに寝かす。

約1週間後に目覚めるも、暫くして死亡。

リスポーン。　服はスポーンしなかった。

(あらすじにある創造主の目覚め、少女の眠りはこれにて回収。　逆
に言えば最悪ここまでしか考えてなかった)

5章・新たな日の出。

特筆：シズ新たな人生へ。　同志が世界に拡散。

リスポーンについて軽く質疑応答。

トリオと一時の別れ。　選別に鉄装備授与。

一方、世界を冒険し始める者達が現れる。

乾燥地帯にて飢饉に見舞われたオークを救助。その後現れたゲルミュツドと交戦。これを毒殺。

6章・他の地、集落観光。

特筆：リザードマン、オーガらと出会う。

(5章の時、オークロード発生をクラフターが意図せず阻止した影響でオーガの里は襲撃されていない。リザードマンも同様)

ジオフロント建設開始。

恩を返すべくオークが仲間になる。

修行、監視、勉強の為にオーガとリザードマンが仲間になる。

トレイニーからリムルに苦情が入る。

7章・暫しの日常。

特筆：技術発展。ジオフロント進展。IRP開発。

ビル設備工事本格化。

水道整備。

ジオフロント基礎工事進捗。都市部ほぼ完成。

対ウイザー級二足歩行兵器IRP開発難航。

演算装置BB発見。IRP一応完成。

8章・創国：ジュラ・テンペスト連邦国

特筆：連邦建国。ドワルゴンと協定結ぶ。

ガゼル・ドワルゴ訪問。仕合を行う。

建国。調印式へ。

IRP紹介。

9章・魔王、ミリム・ナーヴァ襲来

特筆：ミリム襲来。IRP初期起動。

ミリムと交戦。

IRPの問題点確認。

10章・創造と甲斐。

特筆：ミリム滞在。フルポーション開発。
ベスター、フルポーション開発成功。
農業見学。

砂糖生産開始。

11章・訪問者

特筆：フォビオ、三馬鹿、ヒューズ、ヨウム。
獣王国から訪問者。交戦。後に追いつす。
冒険者トリオと再会。
ブルムンドとファルムスから調査員。

12章・戦いの気配。

特筆：他国への道工事。カリユブデイス接近。
地下鉄が無許可で敷設されていた事が発覚。
カリユブデイス接近。戦闘用意。
IRP出撃。取り巻きを撃破。

13章・カリユブデイス戦

特筆：カリユブデイス無力化。フォビオ救出。
カリユブデイスと交戦。
最終的にミリムが撃破。
依代のフォビオを牛乳で正常化に成功。
カリオン登場。連邦と不可侵条約を結ぶ。

14章・新旧村人との別れと出会い。

特筆：ミリムと一時別れ。様々な出会い。
ミリムが仕事の為に連邦を去る。
ヨウム再来。

蒸留酒のクラフトに成功。
獣王国と互いに使節団派遣。

IRP再登場。

狐の獣人族、フォスと出会う。

15章・旅立つ者と残る者。

特筆：日常からイングラシアへの準備。

IRP改造・地下都市拡張。

地下鉄延線計画。

世界地図作り。

副都心として別の土地に小規模な地下施設建設。

予備IRP機体生産。

ステラ・ネムと出会う。

シズとリムルと共にイングラシアへ遠征準備。

連邦のクラフター、警戒体制へ。

湖底研究所建設。

16章・ブルムンド王国

特筆：地下鉄利用。 ギルド試験。

ブルムンド入国。

リムルとブルムンドの極秘会談。

辛辣同志登場。

17章・イングラシア王国

特筆：ユウキと出会う。

クラフター密入国。

自由学園の教師生活へ、

18章・自由学園

特筆：シズと教え子再会。

教師生活開始。

クラフターと模擬戦。

19章・一方、魔国連邦にて。

特筆：ミヨルマイル登場。

冒険者トリオ再来。ミヨルマイルの護衛。

フオスとハクロウ模擬戦。クラフターとも。

スライム大量発生。

ガビル、回復薬実演販売。ハイポーション。

スファイア再来。遊びの模様。

20章・創造主達への賛歌

特筆：スカイドラゴン戦。精霊の棲家。

スカイドラゴン襲来。これを退治。

精霊の棲家へ。迷宮内でゴーレムと交戦。

ラミリスと出会う。

子供達、精霊召喚の儀式。

”時荒らし”と交戦。

21章・不穏

特筆：ミュウラン、ヒナタ登場。

22章・ファルムス戦

特筆：ファルムス軍と交戦。ミュウラン解放。

23章・荒らしイベントと後始末

特筆：他国でも戦闘。

24章・ワルプルギス

特筆：クレイマン戦。

25章・黎明の為に。

特筆：マイクラサイド。

26章・謀略の薫り

特筆：ヒナタ達、聖教会関係が連邦へ。

27章・水の底。

特筆：マイクラサイド。湖底研究所制圧。

28章・師匠と弟子

特筆：シズとヒナタ再会。

人物評価

テンペスト（魔国連邦）組

Q. 国主リムルについてどう思いますか？

A. 創造主：邪魔。

→お前らの方がン十倍と邪魔だよ。／リムル

【このコメントに人魔が「good」しています。】

→なら我々はン百倍邪魔。／創造主

→なら俺は（ry。／リムル

C. 仲良いね。／シズ

【このコメントに人魔が「good」しています。】

C. 開幕苦労してますな。／リグルド

C. 悪友ポジが奪われた気がするっす。／ゴブタ

→警備隊の仕事も奪ってやろうか？／リグル

→よっしや、転職してやるっす！／ゴブタ

→ならワシの稽古を延々と／ハクロウ

→すいませんでしたっ！／ゴブタ

C. 私、左遷ですかね。クフフフ（泣）／匿名

→考えすぎだ。元気出せ。／ベニマル

C. 大恩有る方です。ところで服は（ry。／シユナ

→女物は慣れたけど、バニーはやメテ／リムル

→破廉恥なのはやめてね？／シズ

→勿論さあ！（汗）／リムル

→面白い。続けるシユナ。／創造主

→お前らまで鬼か！俺は逃げるぞ！／リムル

→リムル。お話があります。／シズ

→なんで俺ばかり!? とにかくn／リムル

→あー、間に合わなかったっすか／ゴブタ

C. 先生の姿を奪っただけに飽き足らず、なんて事をしているのよ。／ヒナタ

C. 先生時代も光るモノはありましたが、いやあ、ホームグラウン

ドは違いますね！／ユウキ

Q. 邪竜ヴェルドラについてお聞かせ下さい。

A. 忌々しい存在じゃ！／ルミナス

A. 盟友。早く再会出来ると良いな。／リムル

C. エンドラ仲間？／創造主

C. 顔向け出来ません（泣）／トレイニー

C. I R Pをぶつきたい（願望）／創造主

C. 今は例の人間共が目障りじゃがな！／ルミナス

→ やゝい。欺瞞の国の吸血鬼いく♪／創造主

→ コロスツ！！／ルミナス

→ 小学生みたいね。／ヒナタ

→ やめろ。褒め過ぎだぞ。／リムル

→ 死んでも復活しますよ。あと、アイツら血は出ないです。も

し出ても飲まない様に。腹壊す以上に危険なナニかに汚染される

可能性があるかも知れませんが。／辛辣同志

→ テメエの血は何色だーツ、の問いは「無し」なんだねえ。／リム
ル

→ はあ？ ナニ言ってるんスカリムル様。／ゴブタ

→ 分からないなら良い。そしてテメエの血は何色だーツ！／リ

ムル

→ 良いんじゃないんスカ!?／ゴブタ

→ 強いて言えば、アイツらは熱血ですかね。 個体差はあると思い
ますが。／辛辣同志

Q. 秘書シオンの評価を。

A. 見た目だけは完璧。／リムル

A. 戦闘可能毒物製造機。／創造主

→ お褒めに与かり光栄です！／シオン

→伝わってませんね。／シユナ
C. 努力すれば不可能なんて無いと思っていました。／ベニマル
C. これも修行じゃ。／ハクロウ
→そんな修行認めないっすよ!?!／ゴブタ
C. 剛力丸を扱う手腕が凄いだ。／クロベエ
→誰があんなのと。／シオン
→(憤慨)／ソウエイ
→ソウエイ様が恐ろしい顔に……!／ソーカ

Q. 村長リグルドの頑張りは？

A. 良くやってくれてるよ。／リムル

A. 村人の統括? 良くやっている。我々ならトロツコや

リードを使ってしまう。／創造主

A. 凄いですよね。雨にも負けず。風にも負けず。馬鹿達

に建物を好き勝手されながらも、連邦の人魔に日々指導等をしている
姿は尊敬します。／辛辣同志

→ありがとうございます(泣)／リグルド

C. 出来ればアイツらの指導も／リムル

→すみません(泣)／リグルド

→だよね〜!(泣)／リムル

Q. 警備隊長リグルは？

A. 頑張ってくれてるよ。複雑で広域化した首都や道を上手く

警邏してくれている。／リムル

→ありがとうございます。／リグル

C. アイツらにもっと怒って良いと思いますよ。道や建物が生

き物の様に成長、動いている(建ったり壊れたり改装等)んですから。

／辛辣同志

→ 恩ある人達が愛情込めてますから。／リグル
→ 真面目っすねえ。／ゴブタ
→ お前はもつと真面目になれ。／リグル

Q. 悪友ゴブタは？

A. ハクロウ相手に良くやる。／創造主

A. 気楽に話せる相手だな。不敬だが。／リムル

A. 警備隊の仕事をサボらなきゃな。／リグル

A. もつと稽古を重ねないと。／ハクロウ

→ この鬼！ クソジジイ！／ゴブタ

→ 倍にして鍛えて欲しそうじゃの。／ハクロウ

→ ヒイツ!?／ゴブタ

→ ゴブタ兄さん、相変わらずだな。／ヨウム

Q. 鍛冶職人カイジンとは？

A. 武装国家から連れて来たのは後悔してないぞ。ああ！

絶対に！ アイツらに頼らない自力での建築技術とか武器とか設備技術とかいるだろ!?／リムル

→ 大丈夫だ旦那。俺らもアイツらに日々楽しませて貰ってるよ。／カイジン

A. 剣やら鎧をクラフトする。それも我々が作った事の無い物を多く作る。この世界のクラフターの1人であり、見るにも取引するにも大変有意義な村人だ。／創造主

A. ドワルゴン時代は仲が悪かったのですが、今は改善しています……受け入れてくれてありがとう。／ベスター

Q. 刀鍛冶師クロベエとは？

A. カイジン同様、頼りにしてる。あと普通のオッサンの見た目

で親近感が湧く。／リムル

A. 刀に限らないが、強力なクラフトをする村人だ。カイジン同様にクラフターであり、親近感が湧く。この村人のいる施設には金床やエンチャントテーブルを贈与した。だがどうも、別の方法で武器や防具にエンチャントを施している様だ。その点も大変興味深い。／創造主

C. カバーの表紙に是非オラを。／クロベエ

→裏じゃ主役級じゃないか？／リムル

→何の話か分かりません。／辛辣同志

Q. 狼ランガはどうでしょう。

A. デカイ狼。／創造主

A. 影を支えてくれているよ。／リムル

C. 学園の時も来てくれたね。／シズ

→情操教育にも役立つた。／リムル

→シャンプーの良い香りがしたな。／グルーシス

→誇りを忘れなければ（泣）！／ランガ

Q. 工事士ゲルドは興味深い？

A. 建物を建設する時や設備工事の時等、街の発展に大きく貢献してくれている。真面目なのは良いが、偶には息を抜いて欲しい。

一方で優しさも兼ね備え、子供達に好かれている。／リムル

A. 我々と異なる建築技法により、多くの建物や設備に携わる。

速度は劣るが、完成形はどれも造形が素晴らしい。我々も見習わねばならないな。／創造主

→恐縮です。／ゲルド

Q. 栽培人ガビルは？

A. 調子に乗り易く、騒がしい奴だけど部下から慕われている。強さも確かで結果も出しているな。今は洞窟でヒポクテ草の栽培をして貰ってる。ベスターと協力して回復薬の生産に努めて貰おう。／リムル

A. 踊り合う事で親睦を深めた。／創造主

C. こんな兄ですが、お願いします。／ソーカ

→偉大な兄を慕って良いのだぞ。／ガビル

→いえ。ソウエイ様がいるので。／ソーカ

Q. 管理者トレイニーは？

A. 森が白樺に侵食されて可哀想。／ラミス

A. 森の開拓を邪魔してくる植物村人。／創造主

C. 管理者は私ですツ!?／トレイニー

C. 取り敢えずポテチで回復させて。／リムル

Q. 英雄ヨウムは？

A. 決して傀儡ではない。弟弟子に当たり、強さもある。落ち着いたらミュウランと結婚すると良いさ。祝ってやる。／リムル

A. 母国のファルムスでも色々苦勞しているのだろう。だが短い間とはいえ、ハクロウのシゴキに耐えたのだ。誇りに思う事だ。

連邦から補助されている様子だが、我々も協力出来る事があればしつたりしなかつたり。／創造主

C. 折角自由になれたけど、人間の短い人生になら束縛されても良いと思ってるわ。／ミュウラン

→なーに、その後は俺が貰う。／グルーシス

→クソ狼！ やらねえよ！／ヨウム

→早まったかしら……。／ミュウラン

Q. 創造主についてお聞かせ下さい。

A. 迷惑極まりない連中。／リムル

【このコメントに人魔が「good」しています。】

A. 私に新しい生き方を示してくれた。子供達も助けてくれた。とても感謝している、ありがとう。／シズ

【このコメントに人魔が「good」しています。】

A. 侵略者共め！ 目障りじゃ！／ルミナス

A. 面白い連中だな。／ギイ

A. 迷宮創りは一緒にやっていて楽しいわね。 迷惑、失礼な事をされる事が多いけど。／ラミス

A. 首都直下に建物造りやがって。 いやだがまあ……ミリムに破壊された都市を復興してくれたのは感謝してるよ。／カリオン

A. 遊んでいて楽しいぞ！／ミリム

A. 山を削るのは止めて欲しいのだけれど。 出来れば国外に行って欲しいけど、聞けない相談かしら？／フレイ

A. 我等ゴブリンの為に尽力してくれて、その後大都市が築けたのは正に彼等のお陰ですな！ 管理は大変ですが。／リグルド

【このコメントに人魔が「good」しています。】

A. 森をこれ以上破壊しないで!?!／トレイニー

A. 物作りへの情熱は凄いと思うだ。／クロベエ
→同じく思う。／カイジン

【このコメントに人魔が「good」しています。】

A. 彼等が仕掛けた森の罠には敵対的なモノのみならず、偶に部下が引つ掛かる事があるが。 逆に良い訓練だと思っている。／ソウエイ

A. 剣技は雑じゃ。 だがそれ以上の力を持っている様子。 決して侮れんの。／ハクロウ

A. 西方聖教会への不信感の増幅は彼等の所為。 でも多くの人々を助けた事実は何人足りとも消せはしない。／ヒナタ

A. 創造”主”？ あはははっ！ でも従うつもりはないよ主人様？／ユウキ

A. 我等一族、飢餓に苦しんでいた時、助けてくれた事は一生忘れ
ません。／ゲルド

A. シズさんを助けてくれてありがとうございます。／カバル

→私も同じ気持ちよお！／エレン

→あつしもでやす！／ギド

→俺もだ。　ギルマスとして、いや。　ひとりの人間として感謝す
る。　ありがとう。／フューズ

A. 副担任さん、シズ先生助けてくれて、ありがとうございます！／クロエ

A. 馬鹿な事ばかりする副担任だと思っっているけれど……シズ
先生の事や肝心な時はいつもいる気がして……うう！　ありがとう
うっ！／アリス

A. シズ先生と再会させてくれて、色んな事を教えてくれて……ま
た色々教えてね！／リョウタ

A. シズ先生の事、ありがとう。　剣の事も……次はシズ先生も学
園の皆も守れるくれえ強くなる！　その時はまた相手してくれよ
な！／ケンヤ

A. シズ先生とはまた会えると信じてましたが、それを叶えてくれ
たのは紛れもない貴方達です。　奇妙な物作りや戦闘にはついてい
けませんでしたが、本当に感謝の念で一杯です。　ありがとうございます
ました！／ゲイル

A. 馬鹿親達です。　お陰でリムルさんはクレーム処理に追われ
る日々です。　その中に感謝の言葉も混ざっているのは知っている
つもりですが……私の様な通訳がいてもいなくても変わらない気が
しますね。／辛辣同志

→我々の元へ生まれて来てくれてありがとう。／創造主

→そういう、急なの！　本当狡いっていうんですよ！／辛辣同志

→”クラフター”さん、立派に育てたね。／シズ

→ええ。　立派に育てました。／創造主

→（滂沱）／辛辣同志

→泣かしやがった。　謝れ馬鹿野郎共。／リムル

→済まなかった。／創造主

→なんでこういう時に素直なんだよ。／リムル

寝起きの洞窟。

1. 洞窟とドラゴンとスライム

目が覚めたら洞窟なのだから、クラフター達は首を傾げた。

自分達は いつも通り拠点内のベッドに横たわった筈である。

そして就寝した。 目覚めはログハウスの自室でなければならぬ。

「驚いたぞ。 次々に我の前に現れるのだから」

ところが、これだ。

見渡す限り大洞窟である。 広い。 溪谷だつてあるに違いない。

スポブロだつてあるやも知れない。

「おい、返事をするが良い」

しかもである。

松明1つすら刺さつていない洞窟である。 間違いなく未踏破を

示唆していた。 ブラマイでの邂逅と興奮が今蘇る。

鉱物の採取をしなければ。 松明も忘れまい。

最早使命と云つて過言では無い。

「我を無視するな!」

各々走り出し、松明を撒き始めた。 洞窟はどんどん明るく照らさ

れていく。

マルチでの採掘は競争だ。 鉱物は早い者順となる。 それでも

何に付けても松明が優先された。

「松明? 久しぶりに見たな……つて、いや どこから そんなに

出しておるのだ!」

これは習性だった。 闇とは魑魅魍魎が跋扈する空間だ。 打ち

払わなければならぬ。

この場の座標位置は知らないが、地上も地下も洞窟も関係なく奴等は現れる。

今更にゾンビや蜘蛛に苦戦はしないが、大抵は油断した頃に殺されるものだ。

沸き潰しが甘かった頃など しょっちゅうだ。

ダイヤ採掘中、スケルトンに射抜かれてのマグマダイブは苦い思い出だ。全ロストは辛過ぎた。

「何処へ行く!?」　　「おーい!?」

過ぎた事は仕方なし。採掘だ。

クラフターは各々松明を刺す。ツルハシを振り回し謎の鉱石を採取する。自生している新種の草をも採取する。摩訶不思議な現象に巻き込まれた上、新種との巡り合わせ。人生何が起きるか分からない。実に面白いから辞められない。

しかし、こうも広いとは。いつそ拠点に改造するのも良い。幸い拠点一式は持ち寄れる。かまどならその辺で掘った丸石で作り放題だ。

思い立ったが吉日。クラフターの一部は整地作業にシフトした。地を平坦にし、削り立ての丸石による素朴な豆腐拠点を並べ立てる。見た目は気にしない。仮拠点だ。

あつという間だ。天道様並の照度を確保した村が出来上がった。「集落が一瞬で出来たのか!?」　　ううむ、貴様らは私の知る人間か?

「念話も通じぬとは……」

照度さえ確保すれば地下でも農作が出来る。長期滞在や後の仮拠点としても使えるように畑を作る。

運良く小麦のなる種やジャガイモ、人参やスイカの種を持つ者がいたのも幸いだ。

後は整地された地面をマス分掘り、代わりに土を埋める。どうしてかダイヤ製鋤を持ち歩いていた者がいたのでこれで耕し種を蒔く。間に水路を設けて水バケツで水を流した。土は程良く湿った。これで良い。

「いやー、我は門外漢であるが普通の植物は育たないのでは……魔素もあるし……育った!?!」

土と水は大体の者が持ち歩いている。足場用、戦闘用、緊急用と用途は幅広い為だ。

骨粉を持っていた者は、インベントリの圧迫を理由に畑に撒いた。もれなく成長した。

「早くないか？ そんなものなのか!？」

「そういや苗もあつた。 こうも広いので育ちはするか。

植えた。 骨粉でホホイのホイ。 育った。

「いやなんで？ 木って こうやって生えるの？ 違うと思うのは気の所為？」

一方で探索組も収穫があつた。 何時もながらモンスターがやってきた際だ。

蜘蛛とコウモリはまあ、外見こそ違えど想像の範疇として……目を見張るのは別にあつた。

新種、新種、新種の連続である。 今まで見た事もない形状をしたモンスターと対峙したのである。

細長いヤツは毒状態にしてくる霧を吐く。 牛でも豚でもない4速歩行もいた。 更に細長く脚が大量にあるヤツもいた。

総じてモンスターのソレで、見た目通りに凶悪かつ敵対であつた。 もれなくダイヤ剣をお見舞いした。

「素晴らしい威力の剣だな。 しかし毒を喰らっては長く生きては……何飲んでる？ え？ 瞬時に解毒したのか!？」

楽に得られた訳ではない。 ダイヤ剣が擦り減り、ミルクバケツを1つ失った。

しかし、まだまだ新種を予感させる出来事に胸が躍る。 ついでに腰を激しく動かすコト暫し……またも新種を発見する！

スライムだ！

大きさは最小に近い。 だが ただのスライムではない。

水色。 水色スライムであるぞ。 跳ねない。 地面を這う。 纏わりつかない。 なんと珍妙か。

特に色だ。 スライムといえば緑色と決まっている。 他の色はあり得ないのがクラフター間の常識だ。 今度、羊の様に染色を試みた方が良いかも知れない。

しかしスライムがいるとは、座標は深いのだろうか。 いやそんな事よりスライムだ。

「我を無視し小さき者に絡むとは……羨ましくなんか無いんだからね

「！」
クラフターは緊急会議を開く。スライムの処遇を決めねばならない。

現在、スライムは拠点に進んでいる。もう分裂が出来ないサイズだ。無害スライムである。衝突しても痛くもない。

駆け出しの頃でなし、他に見当たらないものを屠る事はしたくない。

取り敢えず家畜同様、柵で囲っておく。漏れなくスライムを確保した。

(あれ? 急に進めなくなったぞ。ここまで異様なまでに平坦だったのに。じゃあ右に……ぶつかる。左もダメ。じゃあバックして……ダメ!? あれ囲まれてる!?)

観察する。賢い。前が駄目なら左右、それも駄目なら元来た道へ行く。だがぶつかってから方向転換をする始末だ。視界が無いのだろう。

(じゃあジャンプして……なんでダメなんだ!?)

跳ねた。スライムらしい行為だった。しかし1.5ブロック分の柵である。安易と越えられない。

「虐めは良く無いぞ。早く解放するのだ。そして我と友になってくれ、小さき者よ。此奴らは話が通じん! 寂しい! 何より意味分からん!」

とはいえ、いつまでも見ているわけにはいかない。

無害なので解放してみた。暇なので生態を確認しておこうとの事だ。色が違えば行動パターンも違う。別種の様だ。新種の研究とは思わぬクラフトに繋がる事もしばしばだ。

(おっ、急に進める様に……って、さっきの声は誰だ?)

水色スライムは拠点を通り過ぎ、クラフターも後を付く。やがては、とんでもない邂逅を果たす事になる。

「おお、やっと気付いたか! どっか行かれる前に名乗ろう!

我は暴風竜ヴェルドラ! この世に4種のみ存在する竜種が1体である、クアーハハハ!!」

エンダードラゴンだ！

エンダードラゴンが洞窟にいるんだが!?

おかしい。

深淵にして終焉世界、ジ・エンドで巣食う漆黒のドラゴンは皆で倒した筈だ。

復活したのか。 いや、細部が異なる。 これまた新種か。

いやあ、楽しい世界に来た様だ！

日が入らぬ洞窟だけで、何度目か分からない驚嘆を上げるクラフター。

取り敢えずドラゴンを射抜こうとした。 半透明な謎のドームに

阻まれて届かなかった。 謎だ。

「いきなり ぐご挨拶だな。 だが この勇者によって封印された無限牢獄は物理的には破れんぞ」

つくづく面白い。

クラフターはツルハシとスコップを振り回す。 TNTも着火す

る。 溶岩バケツをひっくり返す。 駄目だ。 ドームが壊れない。

上から砂利や砂と共にTNTを落としてみるか。 対水仕様だ。

「出そうとしてくれてるのは有難いが。 話が進まないでそろそろ

ヤメテ欲しい。 我からお願い」

クラフターは持ち得るアイテムと知識を動員して多くを試す。

諦めるのに1日は費やした。

こうしてクラフターは やって来た。

最初は洞窟を騒がしく、その後は世界を騒がしていく。

そして想像だにしなかった冒険の日々に翻弄されたり、想像を絶するクラフト能力を行使して、寂しい運命をちよつぴり撥り笑わすように翻弄させていくのだった。

外に出たら森だった。

2. 外とゴブリン村

洞窟に建築物が居並んだ頃、遂に娑婆への邁進を決意した。

出口は知れている。2枚開きの既存扉だ。先に進まぬ選択は無い。滞在する理由も無い。

ここでは限度があるのだ。木材とか砂とか砂利とか羊毛とか火薬とか諸々の建材に難儀している。

それも腕の良し悪し。否定しない。だが日の目を浴びたい。何より冒険欲が疼く。常なる晴れ舞台を生きるのがクラフターだ。

「魔力検知で周囲を確認したけどさ、洞窟がジャ●ロー本部みたいになってるんだけど。松明だらけだし、畑まであるし」

巢立ちする前に、しみじみ思う。初心者染みた豆腐建築は掃いて捨てるとして……新種モンスターは面白味に富む。特に水色スライムの印象は強烈だった。

スライムがドラゴンとムニヤムニヤ鳴き合った、次の瞬間。目を見張った。

刹那的に巨大化したと思えば、次にはドラゴンを丸呑みにした。

謎のドームごと。拳句、その後も様々なモンスターすら呑み込んだのだ。まさかの事態だった。

次にはモンスターに変身。攻撃まで模倣するときだ。コウモリ捕食後なんか、村人の様に発声すらしてみせた。今はスライムの姿に戻る。

いよいよ持って新種だ、このスライムは。或いは我々同様インベントリが存在するのか。

相変わらずのハアンとはいえ、驚愕する枚挙に遑がない。

「お前らがやったのか？　　此処に住む気か？　　俺は出ようと思うけど……あつ、お前らも出るのか」

村人の様に鳴くスライムだ。　　心なしか顔が見える。　　前の世界でもそうだった。　　或いは模様か。　　あいや、どうでも良い。

ただ、取引要請が出来るかも知れない。　　今はしないが。　　敵対せずにいるのを心から嬉しく思うばかりだ。

何にせよ外だ。　　どうしてかスライムも同様に付いてくる。　　いっ喰われるかと思うと不安で致し方ない。

「置いてかないでくれよ。　　此処であったのも何かの縁だ、どうしてか会話出来ないけどさ、もう友だちだろー？」

討伐する気にならないのは目下大いなる謎だが。

下手するとウィザー級の脅威に成り果てそうなのに。　　かの脅威は痛ましい記憶に残る。

それだけ早期排除は重要だ。　　想定される最悪の結果を回避する術なのだ。

召喚した日がつい昨日の様に思い出せる。　　強かった。　　エンダードラゴンの倍はあった。

皆で協力して何とか討伐出来たから良かったものの、野放しにしていたら建造物の悉くは破壊されていたに違いない。　　一歩間違えば狩猟されたのはクラフターだ。

スノーマン感覚でのクラフトは一生の反省であり続けるだろう。　　今後とも。

「行く手を阻む扉まで来たな。　　開けられるか？　　無理なら水刃で切り刻むか捕食者で食ってしまおうか」

観音開きの鉄扉まで来た。

スイッチ類が無いのを確認したクラフターは、さっさとダイヤツル

ハシで破壊する。 コレに限る。

「壊すのかよ！ 押し引きしてからじゃないの普通?!」

鉄扉は木扉と違う。 スイッチや感圧版、動力を無しに開かない。 それを知らない駆け出しでは無い。

ついでに片割も破壊する。 見た目が気になる。 所々禿げた重厚の鉄扉だ。 脆い。 味はあるが認める事は出来ない。

「全部壊すのかよ！ って、新しい扉を付けるの!? その扉はどこから出した!?!」

扉枠に合う様、丸石で余剰を埋める。 幅1マス、縦2マスの鉄扉を2枚取り付ける。

当然、石製感圧版を敷設。 外も同様。 よし満足だ。 設備は機能的であれ。 些細なクラフトでも後先配慮してこそ良き創造と言えよう。

「ま、まあ良いや。 旅立ちの時だ」

改めて外に出た。 森だ。 かなり広い。 中には枝別れしている木もある。

「森だったのか」

クラフターは歓喜した。 右腕を闇雲に振り回し、激しく腰を振りをし、首を回した。 歓喜の舞である。

複雑な木の伐採は時間を要するから嫌いだが、差し引いて木材が手に入る。

木材さえあれば最低限のツールは準備可能だ。 仮にリスポーンして全口ストしても詰む事はない。 木さえあれば何とかなる。

創造幫助の源は木材に有り原点だ。　過言では無い。

「急に激しく腰振るなよ!」

木こりだ。　ダイヤ斧を取り出し伐採だ。　効率強化のエンチャントを施している。　みるみる切れる。　快感だ。　手が止まらない。

「今度は木を切って……なんで根本切ったのに倒れないんだよ!?!
は?　何故林檎が落ちてくる!?!　これ林檎の木じゃないよな!?!」

やはり最高のツールとは最高の付加をしてこそ真価を発揮する。
エンチャントを施さないダイヤ装備など未完成に等しい。　急に止まれず損をする。

「……お前らはお前らなりの道があるんだな。　邪魔にならないよ
う、俺はスキルの練習してくるよ。　その内戻って来る、じゃ」

よし。　洞窟の出入口　四方を開拓しよう。

伐採して開けた土地に建築だ。　手に入れた木材と丸石を併用し、
仮拠点を確保。

質素な豆腐陳列は避ける。　木色は一色のみで色材に事欠く。
それでも木の導入で幅は広がった。

地上から1マス分は丸石で囲い、2マス目から木材を使用。　原木
も良いが効率の面を重視し原木から木材にクラフトした。　屋根は
馴染みの階段ブロックだ。　丸石を使う。　窓はガラスが無いので
木材からフェンスをクラフト、格子として嵌めた。

内装は余りのフェンスの上に木製感圧板を載せて簡易テーブルと
する。　椅子は余りの階段ブロックとしたいが、統一感から木製階段
をわざわざクラフトして設置。

左右端に看板を付ける。　肘掛けだ。　部屋の隅には土ブロック。

上にその辺の草を鋏で刈ったのを置く。それをハッチで囲い観賞植物とした。掛け流し風の無限水源も用意。勿論、かまどにベッドに作業台は完備。これさえあれば拠点として機能する。

実に良い。簡素でも拘りつてあるからさ？

ここでハタ、と気付く。

そうだ。水色スライムはどこ行った。拠点制作に夢中で見失った。柵で囲っておけば良かった。

まあ良いか。スライムはスライムだ。

奇妙な出会いも一期一会。運が良いならまた巡り会う。此方から搜索する事もあるまい。スライムボールを欲してもいない。気持ちを早々に切り替え、森を切り拓く。松明と苗木も忘れない。

クラフターが斧を振るう中、早くも再会は訪れた。

探索組が近くに緑色の村人モドキの村を発見し、浮く様にして水色スライムが鎮座していたからだ。

クラフターは天を仰いだ。スライムではない。村そのものだ。我々が知る村より粗末だったからだ。沸き潰しがなっていないのはいつも通りだが、棒と藁で家としている。烏澁がましいにも程がある。ゾンビイベント抜きで全滅しても可笑しく無い。落雷火災で焼畑すら有り得る。

元より村人は危機管理に疎いとはいえ、過去最低の村だ。建築物に対する侮辱は畢竟、世界を侮つていけると言える。

残酷を道理とする世界で己の空間を切り取る。その手段たる建築物。それが如何に至難の技か。舐め腐る奴から運命は決めつけられる程に重要だ。建築物は万事万端に繋がりに世界と繋がる。つまり携わる者は常なる晴れ舞台を生きるという事だ。クラフターはだからこそ建造物に全力で情熱を注いできたのだ。

「あつ、お前らも来たのか。このゴブリン村は牙狼族って奴らに攻められそうになってるんだ。俺と助けてくれないか？」

頷いた。やるしかない。

速やかなる改修を施さねば。

不完全な建築物を見せられて、どうして我等が黙っていられよう。

ある種の火中に放置は出来ない。何故とは考えない。故に動

く。造る。打ち建てる。

世界に生きる為、生きた証を残す為、常なる晴れ舞台を堂々生きる
為に。

笑顔でツルハシを握る。スコップを握る。斧を握る。闘志

に燃える。

それがクラフターだ。それが全てだ。創造の人生だ。

刮目せよ。天下創造の真髄を。

3. 改修と新型ゾンビ

「あ、ああ……村が壊されていく」

「大丈夫だ……たぶん」

村の改修は急ピッチで行われた。

拳で倒壊する既存の建物。失笑の他なし。

これを建築物とは認めない。土塊の方がマシだ。巫山戯るなと述べたい。

ならば作るまで。既存の建造物は成るべくあるがまま愛でたいが、これは違う。いざ判断したクラフターは早い。

さつさと村を拳で解体して更地にし、どうしてか綻びのある地面を土で平坦にし、松明を均等に並べ立て沸き潰しを行った。

ここまでが基礎。下地である。ここからが本番だ。

「あ、あれは一体……松明を大量に並べておりますが」

「儀式か？ 地鎮祭？」

「な、なるほど お清めですか……ですが大切な家が……なんと!？」

「あつという間に立ち並ぶな。しかも前より立派じゃん」

有り余る木材で不断の建築。拠点相当の木造陳列。流れ作業の時間短縮。

建材が統一されているのが失点だ。デザインのバラつきに些細な抵抗と個性が見られるが、整然こそすれ『遊び』が無い。

捻りのない量産は惰性と偏在にして無個性象徴群。独創とは差別化を図る事。それを知らながら犯した創造は即ち誤魔化しを意味する。

正直、眉間に皺が寄った。だからと建材を理由に弁解はしない。クラフターは世界を欺瞞で乱す事を嫌う。

これに説明するなら、スライムと、どうしてか緑色に染色された村

人が忙しないハアンを上げる事にあるのだ。

村人に見られながらでは興が削がれる。特に突貫要求をされる気がしてならなかったのだ。

「凄いな。柱は疎か筋交も無し。なのに強度が保たれている。

揺れもしない。機密性もある。なら吸排気口が必要かと思えば、換気は十分。コイツらの建築技術は、どうなってるんだよ……大賢者！」

『不明です』

一応の竣工を迎える。夜を越えるには十二分の出来だ。己の空間を切り取る安堵感は何事にも勝る。

扉さえあれば満足するハアン集団に設えたにしては随分と贅沢をした。それすら誇らしくもなり、意味有り気にジャンプした。満足だ。

「次は何だ？ 防衛設備か？」

後は村の外周りに着手する。どう見ても四方は森である。植林場の様に纏まらない自然の木々。光源が遮られ、沸き潰しは困難を要する。漏れがある。

今回、村さえ何とかなれば良いので森の沸き潰しは後回しにし、ともすれば防壁の類を建設するのが顕然だ。

「おお……村の周りに柵を設えて下さる」

「地面に置いてある様にしか見えないんだがなあ。やっぱ強度は高い。揺れもしない。粘糸を使わなくても平気そうだな。それにしても この感覚……洞窟で味わった様な」

村の周囲を木のフェンスで囲った。材料は事欠かない。ブロックでも良いが見た目が気になる。防壁の上にモンスターが沸

いたら気分が悪いし。

加えてフェンスの手前、森側に堀を作り水流トラップを施した。流された先は落とし穴だ。マグマでも良いが村人が落ちたら気分が悪い。

取り敢えず最低限は改修した。暇を持て余していた奴は村の中央に噴水広場を作った。無限水源なので良い。

やはり機能と景観双方を気にしてこそ建築家と言える。落ち着いたら拡張したい。前の世界では色々失敗した。試したい事が山程ある。

「あつという間に出来た」

「飲み水に足る水が流れ、整備された道は年寄りも子どもも安心して歩けます。尽きぬ松明は夜でも昼の如く照らしましょう。大変ありがたく存じます」

「かなり助かるな、夜でも戦い易くなる。水路になつてる堀も戦術的だ。ただ」

「ただ？」

「バケツひとつから水源と水流が無限に生まれる理由が全く分からないけどな!?!」

「理屈はともあれ、大きな助けですリムル様」

「そうだな、今考えるべきは迎撃だったよな……皆、戦いに備えるぞ！」

スライムがハアンと鳴き、村人が忙しなく動く。何とも珍妙な光景だ。原因はゾンビイベントか。

なら退治するまで。クラフターは各々武装を展開した。多くはダイヤモンドフル装備フルエンチャントだ。多少のエンチャント違いはあるが、ほぼ統一された装備と言える。当然、弓矢にも強力なエンチャントを施している。

本気の現れだ。蔓延る魍魎は倒すのみ。

一方で鉄装備は資源不足時と最低限の防御に使う。金と革は見

栄だ。 実戦向けでは無い。 精々が試合向け。 革は染色出来るので班対抗戦での敵味方識別に都合が良い。

金はまあ……ツールを素早く振り回せる点はギリギリ評価したい。耐久が無さ過ぎるのが致命的である。

それでも金を纏う事は自らを縛り痛め付けるに近い愚行だった。

「なんだその青い鎧。 剣もなんだ？ 総じて薄ら輝いてるけど」

「頼もしくもあり恐ろしくもあります……」

「魔素は感じないが、気迫は感じるよ」

今は集中しなくては。

ゾンビイベントは沸き潰しをしても起きてしまう。 村をハーフブロックで敷き詰めて、かの様に防壁を制作すれば効果は得られるが、なにぶん別世界だ。

どんなゾンビが湧くかも分からない。 ゾンビピッグマン級か。エンダーマン級か。

スライムを見てしまうと想像の域を出ない。 先見、多様性にも程がある世界だ。

ここでハタ、と思う。

では村人は村人なのか？

村人はどうしてか緑だ。 ゾンビと同色だ。 襲いやしないし陽を浴びても燃え尽きないし知的にハアンするから気にしなかったが、成る程。

理解した。 そういう種か。 ゾンビ蔓延る村。 とうに滅んでいたか村人は。 道理だと思った。

そもそも可笑しいのだ。

元の世界でも手を差し伸べねば全滅する村は多くあるのに、過去最低設備の村がゾンビイベントに耐え得る筈がない。

扉が無ければゴーレムもいないし。

前の世界でも似た経験はある。 理解するのに時間は掛からない。

「ところで今更なんですが、彼等はリムル様のお知り合いで？」

「まあ、そうだな。 そうなんだが……日は浅いし、会話も出来なくて苦勞してる」

「左様ですか。 悪い人達では無さそうですが」

「村を守ってくれるなら良いんだがな。 気紛れにも感じるし、あまり頼るなよ。 取り敢えず俺は予定通りだから」

「ははっ！ ありがとうございます！ どうか我らに守護をお与えください！ さすれば今日より我らはリムル様の忠実なるシモベでございます！」

大きなハアンが響く。

見やればゾンビ達がスライムに平伏している。 スニーク姿勢より低い。 なんと礼儀あるゾンビ達か。

その様子にクラフターは感心し、うんうんと頷く。 敵で無いなら良い。 有効活用出来るなら尚の事。

エンダーマンやゾンビピッグマンみたいな中性やも知らないが無闇に武力行使する程、ここにいるクラフターは愚かではない。

なんなら取引を要請するか。 ゾンビと取引というのも愚行と無謀の合成技な気がしてならないが、村人みたいに鳴くならやれそうだ。

「敵の戦力は？」

「約100匹程です」

「確かなのか？」

「はい。 兄の犠牲と引き換えに……」

「……自慢の息子でした。 誇りを無駄にしない為にも、我々は生きねばなりません」

スライムとゾンビが鳴き合っている光景を見せられた時点で色々違おうし。

発見とは常識と偏見の殻を破り現れる。 発想したならやるべき

なのだ。

ゾンビ化した村人に金林檎を与えた時を思う。その時は驚くべき事に通常の村人へと変貌を遂げた。

良く思い立ったものである。今一度、その頃を振り返るには良い機会ではないか。

学ばされるな、スライムとゾンビに。

……またも脱線した。 備えねば。

「戦える者は武器を用意する様に。ここまで出た負傷者はいるか？

案内してくれ」

「分かりました、此方です」

水色スライムがヨボヨボゾンビに連れられて、ある建物に入っている。最初には横たわるゾンビで溢れている。最初はほぼ床で寝て

いたゾンビだ。 今余るベッドを大量に並べ立て寝かせている。不便に思えば

人情も出る。 昼間から寝れるのも羨ましい限りだが。

「傷は深く無さそうだな」

「あの者達が手を施して下さいったお陰です」

「へ？」

「赤い小瓶と言いますが、それを投げましてな。 そうしたら忽ち快癒したのです」

「ええ……」

最初は改修の邪魔なので殺処分にしようとしたクラフターである。纏めて葬るべく治癒のスプラッシュポーションをクラフトした。アンデッドは回復系でダメージを負う。 振りかぶって投げた。相手は死ぬ。

ところが流石は異世界。 驚くべき事にゾンビ色の血色が良く

なった。

ゾンビの血色というのも言い得て妙だが、動けるくらいには回復してしまった。

まあ良い。退いてくれたし。

「暫く安静にしていれば、夜には何とか参戦出来ましょう」

「無理はするなよ。次に武器を見たいんだが、何がある？」

「此方へどうぞ」

「またも別の建物に移動する。そこは武器庫だ。耐久力が擦り切れてる弓を集めた。」

スケルトンのトラップタワーが思い出される。

そこに置かれた共用チェストの中身は総じて弓矢だった。あと骨。

「弓矢に棍棒か」

「はい。摩耗していたものは、あの者達が直してくれました。矢の補填も十分過ぎる程に」

「物作りに関する事なら、なんでも手にかかる連中なのか……これは剣？」

「石で出来ています。これもあの者達が用意してくれました」

石剣を取り出し眺められた。珍しいのだろうか。素材に事欠

かない武器なのだが。

最低限の護身相当。だから村に貯めている。非常用に近い。

逆に木の剣は用無しになる。威力が無さ過ぎて容認出来ない。

試合か訓練になら使う。

それかエンチャントの玩具。

「気前が良いな。その裏で何考えてるんだか」

「……剣に關しましては、心得のある者がいないので直ぐには扱えま

せんが」

「とにかく。　　ここままでしてくれたなら……村を守り切るだけだな」

日が暮れる。　　急にソワソワしてくる。

夜は拠点で過ごしたい。　　ゾンビイベントも起こらない。　　焦らされる。

もう寝ようか。　　そう拠点に向かった矢先だ。

オオカミの鳴声が聞こえた。　　この世界にもいるのか。

「と、遠吠えだ！　　近いぞ！」

「こ、こつちには備えがある！　　ここで決着を付けてやる……！」

肉だ！　　肉を用意するんだ！

クラフターもまた忙しなく動き始める。

懐柔しよう。　　オオカミは良いものだ！

取り敢えず腐った肉で良いかな。　　捨てる程あるし。

空腹の状態異常を受ける悪性の食べ物も、非常食と　　こういう用途には持って来い。

足りなきや村人を何人が屠れば良いや。

腐った肉くらい手に入るんじゃないと思った。

4. 狼と懐柔

「あ、おい!? 迎え撃った方が良い!」

狼を懐柔しなくては。

狼のいる生活を得るべく腐肉を振り回し、腐臭を撒き散らしながら駆け出したクラフター。

しかし軽率だったと後悔した。

声の主らと出会えたのだが……違う。いや狼なのだが、狼では無い。

「ほう。人間がゴブリンを庇うか。更にスライム風情とくる。

笑わせるばかりか出向いてくるとは。覚悟は出来ているだろうな」

デカイ。牛くらいある。黒っぽい。しかも喋る。

2、3匹どころの群れでも無い。

いっぱいいる。常識に住む狼とは全く異なり、クラフターは狼狽した。

狼とは足下位の純白4足歩行生物だと決まっているからだ。

ところが、どうだ。

ここまで大きく無いし、色まで違ってきた。

鳴き声はワンワンかウーであり、間違っても村人の様にハアンハアン鳴かない。

「已むを得ない……外道! 推参なり! 者ども掛かれ!」

スライムも慌てる様に号令を出す。応と前が出る。えいやと

振るった。肉を。

「そこは剣を使えよ!? さっきの強そうな剣はどうした!」

やあやあと肉を振るう。どれ食べたかろうと。デカくても所詮は狼。懐柔出来る筈だ。

更に言えば、目の前の狼は格好良い。大きさと見栄えはシンプルかつベストだ。

ぜひともお供にしたい。ワンではなくハアンと鳴くのが致命的欠点だが。

「親父殿!?! 人間どもが肉を振り回しながら突撃してきます!

腐ってる癖して美味そうです!」

「ええい、小賢しい真似を! 餌付けされるなど誇り高き牙狼族の

恥と知れ!」

どうした? 狼よ。

ギラリとした眼光が隠せて無いぞ? ほれ食べたかろう?

唸りを上げて どこまで耐えようというのかね?

これ見よがしに食ってみせる。

不味い。腐っている。空腹異常が起きる。唯一普遍を体感

すると逆に安堵する。異端な出来事が多過ぎて驚き疲れてきた故に。

「これ程までの侮辱は生まれて初めてだ! 我ら誇り高き牙狼族を

コケにした事、後悔させてやれ!」

「はい親父殿! 噛み殺してやりますよ!」

ワツ、と一斉に飛びかかってきた。

よーしよしよしよし。

「ガブツ、ガブツ、これは……ハグツ、何の肉だ、ハグツ」

やはり狼だ。与えた肉を喰らっていく。

「餌付けされてるではないか!?　誇りはどうした!」

「誇りで腹は膨れませんか!」

何故か敵対していた風だったが、今や昔。

腐肉は腐るほどある。　あいや腐っている。　故に惜しみ無く喰わせていく。　後は懐くのを待つだけだ。

「いやまあ、良いけどね?　平和的に解決するならさ」

スライムが呆れた様にハアンと鳴いた。

何でも食うスライムの事だ。　欲しいのか。

貪欲だと此方も呆れた。　呆れつつ与える。　食糧自給が安定している現状、自ら消費する物では無い。

「いらねえよ!?!」

拒否された。　貪欲かと思えば偏食か。　生態がまるで知れない。

「お前達、裏切る気か……!」

「腹が減っては戦は出来ません」

「敵から餌付けされてどうする!?!」

「親父殿も一緒に食べてはどうです」

「ええい!　我だけでも村を滅ぼしてくれるわ!」

1匹だけ懐かない。　群れから飛び出して飛びかかってきた。

「親父殿!?!」

敵対する行為をした覚えは無いのだが。

やはり知らない狼だ。　羊を襲うなら理解出来た。　だが此奴は

クラフターを襲う。

まあ、これだけいるし1匹くらい良いか。

脅威は排除する他無い。

已むを得ずダイヤ剣を出す。

世界を相手取る、馴染んだ右手に携える。

「なっ!?!」「どこから剣を!?!」

相手は空中にいる。軌道変更は今更に無い。

えいやと振るった。一撃だった。

飛斬によるジャストアタックで無いにも関わらずである。

「い、一撃……ッ!?!」

「そんな、親父殿が……」

エンチャントダイヤだ。良くある事だ。効率が良い。

「おいおい、宴会から通夜みたいな空気になったぞ。どうしてくれるんだよ」

スライムがまたも鳴く。ダイヤ剣を食わす訳にはいかない。

ダイヤ自体もだが、気に入ったエンチャントを付加するのにかなり苦労する。

そうそう手放せない。諦めて欲しい。クラフターは首を横に振った。

「はぁ……残飯処理は俺の役目ってか。分かったよ、その代わりに他の分野は任せて良いよな?」

スライムが前に這う。かと思えば倒した狼を飲み込んだ。

鮮度が良いものを好むか。今度は蜘蛛の目でも与えてみるか。

「親父殿……」

次の瞬間、例によって狼そっくりに変身するスライム。底が知れない。

そうして狼とハアンハアン鳴きあつたかと思えば、狼達はスライムに平伏した。

此方が餌付けしたにも関わらずである。スライムに懐くとは。クラフターもハアンと鳴きたかつた。

5. 町作りと変態

狼を100匹ほど従えたスライムは、そのまま村に連行した。

1匹すら寄越さぬから、貪欲にも程がある。さすれば恨み嫉みのまま討伐したく思う。クラフターは聖人では無い。

が、それをしたら100匹狼に襲われる。儘ならないものだ。

「さて大所帯になった。お前らが村を整備してくれたから良いけど、まだ余地がある。なによりゴブリン自身にも建築や整備の知恵は必要だ」

取り敢えず村を拡張し、町にする。

元より計画していた話だ。元の世界でも試みた事がある。

「そう言えば村長、お前の名は?」

「いえ。魔物は普通、名を持ちません。名前がなくとも意思の疎通はできますからな」

「そうなのか……でも俺が呼ぶのに不便だな。よし」

やるか。

クラフターはツルハシを振るった。スコップも振るった。建

築ラツシユだ。

石が砕ける。置かれる。木こる。どれも心地良い音。

愛すべき創造。愛すべき世界。

我々は今、生きている。

「————煩い! 名付けの横で工事すんな!」

スライムは我々を察して、村人と狼共を一箇所に分めている。

有難い。工事中、村人の存在は邪魔だ。退けてくれた事に感謝

の念。お辞儀した。

「悪いと思ってるなら大人しくしとけよ。そりや余地があるとは言っただけどさあ、時と場合があるじゃん？」

「リムル様。私にも名前を」

「……伝わる相手に伝えるしか無い時間だな」

礼儀は重要な要素。

助けてくれたなら礼を述べる。

建築でも、戦闘でも、物資の融通でも。

相手がスライムだとしても、ここまできたら仲間意識が高い。首を垂れるのに抵抗は無い。

「——うっ!? な、なんだ この虚脱感」

「リムル様!?!」

突如、スライムが平たくなった。村人が慌てて駆け寄る。

状態異常の様だ。アレだ。何でも食うからだ。空腹か毒にでもなったか。

「やはり一度の名付けが無理が祟った様子。直ぐにお運びを」

「主殿！ 御快復まで村は守ります！ 彼等もいますし、安心して下さい！」

村人に運ばれて行くスライム。

行先はベッドを大量に並べ立てた建物だ。

どの工事現場からも離れている。良いぞ。村人も配慮出来るとは。いつもこうなら良いのに。

「今は安静に。最も安らげる場所はここです」

「外の工事が煩わしいかと思いますが、彼等との意思の疎通が困難な

故、我々にも止められません。どうか お赦しを」

心置き無く工事だ ひゃっほい。

用水路を流しRS回路を組んで半自動回収畑を作り、かまどを大量に並べて焼き石を作る。

出来次第、加工して石レンガや石ハーフを作る。レンガも欲しいが粘土が無い。あるものでやるのみ。

それも皆でワイワイガヤガヤすれば、あれよこれよと出来上がる。

石ハーフで舗装された道。 整然とした道。 居並ぶ住居。

まだ少ないが、高層ビル1号が出来た。 石造と偏るも何気に高度限界ビルだ。

天を削る摩天楼は見上げて余りある最大級の大型建造物であり、形に残る苦労と努力の結晶だ。

尚、内装は無いそうです。これから作る。

「なんと……！ 天を突く塔とは！」

「なんて大きいの！」

「まるで力を誇示しているかの様だ」

驚愕と畏怖、戦慄のハアンを浴びて、クラフターは満足気に頷いた。

そうだろう、そうだろう。 凄かろう。

前の世界だったら褒めもしないから余計である。

扉さえあれば喜ぶ連中だった。 ここは違う。

こんなに褒められて嬉しい事は無い。

ところで、今更ながら気付いた事がある。

スライムが微動だにしなくなり一晩かは忘れたが、村人や狼の姿が変貌を遂げたのだ。

大きくなっただけじゃない。 随分と美善な姿となった。

何が起きたのか。 雷にでも打たれたか。 金林檎か。 いや

我々は何もしていない。

その癖、ゾンビ色は維持している。 意味が分からない。

常識とは敵だ。互いに押し付け合うべきではない。
改めて思い知らされた。
日々学ばされるな、村人に。

別の集落へ。

6. 再起と遠征

「なんだこりゃ!？」

2、3度寝て起きた頃に起きたスライムは、驚愕のハアンを上げる。良いぞ驚け。感嘆はいつ聴いても良い。

高邁な志、見せしめやったりと、クラフターは満面の笑みを浮かべる。

「随分と派手にやってくれたな。ビルまで建てやがって。異世界ファンタジーに喧嘩売ってる見た目だぞ、アレ。3日で様変わりするのもある意味ファンタジーだけど」

ビルを仰ぎ、ハアンと鳴かれる。

間違いない。我々に出逢えて人生が楽しくなった。

「RC造じゃないよな。あれ石か？ お前らの事だ、どうせ大賢者も意味不明な設計なんだろうな」

作って喜べ。見て笑え。

創造の見聞きは世界と自分自身と対等に向き合い、心を解き放つ事にある。

ジツと寝続けるなんて勿体無い。

楽しく生きるには、心中に疎外感を増幅させない事だ。

心を窮屈にさせ、つのる不満を閉じ込める人生なんて勿体無いぞ。

「まあ、アレはその内見に行くとして……皆は大丈夫か？」

しかし照れるな。 そんなに褒めるなよ。
興奮のままに腕を高速で振りまくる。

この勢いで広大な森を開拓していけば、なんだって出来そうだな。
未知のアイテムの鑑定だって進めたい。 遺跡だってあるかも知れない。

まだ見ぬモンスターにも会いたい。 楽しみが尽きない。

「お加減はもう よろしいのですか？」

「あ、ああ……誰!？」

またも驚愕するスライム。

今度はなんだ。 石作りの道か。 家か。 半自動回収畑か。
どれも改善されたものだ。

自惚れたが、違った。 村人の変態振りに対してだった。 がっかりした。

「さあこちらへ。 宴の準備が出来ております」

「お、おう……なんか絶対、皆デツカくなってるよな……お前らナニかしたのか!？」

首を横に振った。 仕方ない。 クラフター自身も大変驚いたのだから。

世界は広大だ。 慣れる事の方が少ない。 故に惜しみ無い努力と娯楽、冒険が待っている。

「そうか……お前らがナニかしたワケじゃないなら良いんだ。 すまんな疑って」

そろそろ違う土地に行くのも良いかも知れない。

世界を相手取るクラフターは、常に在住している訳では無い。
ネザー要塞の攻略やジ・エンドでの街作りがその例だ。

世界を文字通り股にかける。 あいや越える。

ジ・エンドへは戻れずとも、ネザーはゲートを作らねば分からない。今度作るか。 ブラマイしていれば、そのうちマグマ溜まりにでもぶつかるだろう。

そうしたら黒曜石が手に入る。 採石し、囲う。

火打石を使い、紫の膜が出来れば成功だ。

「御快復、心よりお慶び仕ります!! 我が主よ!!」

「ラ……ランガ?」

「はっ」

「どゆこと? 名前を付けただけで魔物って進化するの?」

ブラマイか遠征かで逡巡したクラフターだったが、結局半々で別れた。

それぞれ準備に入る。 持ち物は皆異なる。

「リムル様がお目覚めになられた。 皆宴の準備はできておるな?」

「はーい!」 「おおー!」

「……ホント、訳分からん。 揃いも揃って」

片や端で村人が集まり始めた。

食べ物を持ち寄っている。 知らない木の実もある。 なんと。

ご馳走の山だ。

クラフターの手が鈍る。 いけない。 そんな物を見せるなんて。

集会と未知なる食料。 誠に興味が尽きない。 飽きが知りたい。

当然、作業の手を止めた。 罪深い。 ニヤけてしまう。

「あー……では、皆の進化と戦の終わりを祝ってカンパーイ」

「……かんぱいとは?」

「そうか、社会常識が通じる訳ないもんな……えーと、乾杯とはこうするんだ」

「儀式ですか。あの者達の松明の様に」
「違う。それだけは絶対に」

スライムの号令と共に、村人が一斉にハアンと鳴いた。
そこからは飲食の始まりだった。賑やかなのは良い。そうだ。
生を謳歌しなさい。

共に生きる身として、見ていて誇らしい。

特に自身の建造物を利用しているのが素晴らしいではないか。

うんうんと頷く。建造物は使われてナンボだ。創造主として
は嬉しい限りだ。果報者である。

「貴方達も是非参加を。村を護ってくれた事、村を発展させた事は、
誰もが認めております」

ムキムキな村人が寄って来た。好意的だ。

近寄り難いが、謎の肉を寄越してくる。

餌付けされた。戴く。食べた。生焼けだった。狼の気持

ちもこうなのか。

「街と不釣り合いな光景だなあ。自力での建築、料理、問題が山積み
だ」

スライムが嘆く。分かる。不味くは無いが微妙な惜しさを得
る。

この生は謳歌出来ない。敢えての可能性を否定出来ないの
で容認こそすれ、改善の余地有りと評価を下す。

詰まるところ好みではなかった。

「建築技術は？」

「お恥ずかしいのですが、殆どありません。彼等程の技量は流石に」
「それは良いんだ。いや良くないんだが……自分達の村だ、自分達

で出来る様にするべきだ。　と言つてもコイツらに技術指南は出来ないしな……」

「それでしたら当てがありません。　取引した事がある者がおりまして……」

只飯を食らつて四の五の思うのも随分贅沢になったものだ。

料理とはウサギシチューの墮落の如く。

腹を満たすだけなら、収穫した馬鈴薯を丸ごと焼いたベイクドポテトで良かった。

効率だけなら収穫して即食える西瓜や人参で良い。

ところが、手間掛ける意味は確かに存在する。　今感じたのが正にそう。

そう。　美学だ。

感謝こそすれ、咎めるのは筋違いだが。　そもそも相手は村人だ。

それら美学を期待しない。

それでもだ。　同等の物でも折角なら、楽しめた方が得じゃないか。

取り敢えず、もう少し焼けば良いんじゃないかな。　クラフターは要約した。

「取引相手とは？」

「ドワーフ族です」

「鍛冶の達人なイメージの？」

「おお！　存じておりましたか！」

「まあコイツらもある意味……達人というより変態か」

気を取り直して遠征しなきゃ。

出来るクラフターは瞬時に切り替えられる。

1つ所に縛られない。

「準備は任せただぞ」

「ははっ！　直ぐにでも！」

「……で、お前らの何人かもついて来るとか言わないよな？」

行こう。

どうしてかスライムも　何処かに行く様子だし。

当ての無い放浪は世界を学べて楽しいが、慌てる時間じゃない。

「すっげー笑顔……暴れるなよ？　フリじゃないからな！　絶対だぞ！」

クラフターは莞爾として頷いた。

共に行こう。　我々と君の仲じゃないか。

「川沿いに徒歩で数ヶ月の距離ですが、牙狼族に乘せて貰えば　もつと早くに着きましよう」

「そうだな。　コイツらを振り切るのにも都合が良いな」

「まあ、その。　お気持ちは分かりますが　そう邪険にせずとも」

「分かるか？　　どうにも好きになれないんだ」

そうしてクラフターはついて行く。

村人め。　鞍を付けずしてオオカミに乗りやがって。　まさか乗

るとは。　狡い。　発想しなかったのが悔しい。

拳句に我々を置いていく。　速い。　馬と同等かそれ以上だ。

しかし、それで諦観するクラフターではない。

我々にはエリトラがある。　終焉世界の果てで見つけた宝物だ。

これを胴体に身につけ、手にロケット花火を持つ。　よし。　離陸。

「主殿！　　何やら空を飛んでいます！」

「アイツら飛べたの!?　　え、まさか身につけてるマントで飛んでるのか!?!」

掩蔽物なき自由な青空。 煩悩の一切を忘却し飛行する。

あいや地上の光景が目につく。 なんと開拓欲が湧く光景か。

いやいや。 今はスライムの動向を追う。

辛い道中だった。

大規模建築や開拓を我慢しながら、数日の寝て起きての追跡なんて。

しかしそれも終わりだ。 目の前に大きな山、そこに築かれた建造物が見えたのだから。

「アレが武装国家ドワルゴンっす」

「お前ら、問題は起こすなよ。 絶対だぞ!!」

クラフターは感涙した。

禁欲生活も終わり涙ぐむ。 壮大な かの地を観光しなければならぬ使命感に襲われる。

「あつ、こら待て!!」

多種多様な村人が入口に列を為す。

理解出来ないので割り込み、入口に入ろうとした。 止められた。

「おい！ ちゃんと最後尾に並べ！ 牢にぶち込まれたいか!!」

鉄鎧が邪魔をする。 守衛か。 ネザー要塞におけるネザースケ

ルトンを思い出す。

とか思考していたらスライムまで来た。 やはり邪魔をする。

「おい駄目だつて!」

「スライムの知り合いか?」

「まあ知り合いというか……」

「ならコイツらを並ばせろ。ちやんと手続きをするんだ」
「くそー、だから付いて来て欲しくなかったのにい！」

いっそ倒してしまおうか。

所詮鉄装備が2、3人。エンチャントも無い。ダイヤ剣に敵うとは思えない。

そう剣を構えようとした時。　　またも邪魔立てが増える。　　厄日だ。

「ハイハイ兄ちゃん達！　　生意気だなあ？」

「スライム如きが。そっちの人間も貧相な身なりだ」

「違いねえ！　　そもそもスライムが仲間ってのも笑えるぜ！」

「もう！　　次から次へと！　　なんて日だ！」

もう良いや。　　斬ろう。

禁欲の解放の矛先は、取り敢えず絡んできた徒党に向ける。

ダイヤ剣を構えた。　　相手は非武装だが邪魔なら斬り捨てる。

悪意ある者には容赦しない。

「お、おいどこから剣を出しやがった!？」

「なんだその青い剣!？」

「禍々しいオーラで覆われている!？」

「わ、悪かった！　　見逃してくれー！」

逃げた。　　まあ良い。　　今度こそ建造物に入れるぞ。

「騒ぎを起こしやがって！　　来い！　　望み通り牢にぶち込んでやるー！」

「俺は無実だー!？」

先程の鉄装備がやって来た。

スライム諸共、建物内に案内される。意外と良い奴らじゃないか。スライムも歓喜のハーンを叫ぶ。腰を曲げて礼を述べた。クラフターは朗らかだ。

7. ポーションとリフオーム

「捕まったよ。 お前の所為だからな」

持て成された場所は格子の部屋だった。

小さく地味だ。 何も無い。 いやあるか。 スライムは丸い
チエストの様な容器に入る。

「そこで反省している」

「脅されたから威嚇しただけだって！　　そうでなくても、俺は関係
ないでしょ!？」

試されている気持ちだ。　閉鎖空間で何が出来るか。　限られた

空間と手持ちで相談する。

取り敢えず作業台を置く。　松明で照度を高める。

「どこから出した!？」

「頼む。　これ以上、俺を苦しめないでくれ」

ベッドを隅に置く。　ツルハシを取り出し、壁の下に潜らせる様に
して無限水源を造る。

かまど　を置けば、そら。　仮拠点の出来上がりだ。　問題は格子
だ。

閉鎖空間を更に暗くしている。　雰囲気はあるが、態々住むには落
ち着かない。

「ナニ牢屋で快適空間を確保してるんだよ！　　良い加減にしないと

……」

「大変だ！　　鉱山でデカイ事故が！」

村人が煩い。案内してくれた事は感謝するが、それはそれ。

「アーマーサウルスが出たとかで……」

「なに!? 街に出る前に何とかしないと」

「いや、そっちは大丈夫だ。討伐隊が向かった。問題は……」

増えた。村人が随分と身近だ。にも関わらずアイアンゴーレムが見当たらない。

謎だ。スポーンしないと、製鉄所が作れない。

アレは村人をここより狭い空間に押し込み、扉を大量に設けて村を偽造する事により機能する工場だった。

利益になるなら人道を気にしない。殺戮も厭わないクラフターだが、利益にならないなら忌避するのもクラフターだ。

「鉱夫が大怪我を……」

「くっ！ アイツらは兄弟みたいなものだ！ 簡単にくたばってたまるかよ！」

「薬も戦争の準備とかで品薄で」

「あるだけ集めるんだ」

観光がまだだった。

此処に連れられるまでの間、ハアンの合唱が聞こえて来た。

沢山いる。間違いない。ならば扉が多い。元からある村の類ならば、相応の建物があつて然るべきなのだ。

「ちよいちよい、旦那」

スライムのハアンが聞こえる。

見れば丸いチェストから出ていた。代わりに多量の液体が並々揺らぐ。体液にしては体積に見合わない。

いや。最も非常識なスライムだと思いついた。忘れていた。

「ナニ勝手に出て来てるんだ」

「お困りでしょ。これどうぞ」

「これは……ポーション!？」

「飲んでよし、塗って良しの優れたもの」

液体に満たされたチェストを運び出す村人。

インベントリに入らないらしい。

「試すしか無いか……」

「早く行ってあげなよ」

「だが、お前らは此処にいる。良いな」

「だそうだよ。無駄だろうけど」

スライムが囁いてくる。 頷く。

わざわざ邪魔なチェストを退かしてくれたのだ。

村人の誘導が上手い。 学びたいものだ。 我々なんぞ、トロツコに無理矢理載せるか縄で引き摺り回すのに。

「ほら、見張りは行ったぞ。 籠から出て自由な大空にでもなんでも飛んで行けえ」

スライムが煽っている。 そうかそうか、お前も創造の世界が分かるか。

クラフターは笑顔になった。 宜しい。 望み通りクラフトだ。

ツルハシを構える。

「好きにリフォーム出来るって意味じゃねえよ!？」

格子を破壊、ガラスに張り替える。 息苦しい壁は温かみ溢れる木製にした。

当然、床も木製に変更。テーブルは原木を丸ごと使う。左右には階段と看板を組み合わせた椅子を設置。

そうだ。チェストも置く。中身は無しだが、拠点化するならば要だ。

「フローリングまで。もうこれ、怒られるじゃん。自由過ぎだぞお前ら……」

スライムは椅子でグツタリした。
良いぞ。早速使うか。クラフトした甲斐があるというものだ。

「あのな、信用つてのは大切だ。生きて行く為には……ああ。何でも一人で熟すもんな……洞窟の時点で薄々気づいてた」

しんみりしたハアンを鳴き始める。
そうか。気に入らなかつたか……残念だ。

「落ち込むなよ。後悔してないんだろ。堂々して貰えないと、巻き込まれた側も立場がねえよ」

空元気だ。スライムに気を遣われた。
次はもっと良い内装を作ろう。村のビルディングの空間はただっ広い。練習なんて幾らでも出来る。

「そうそう、胸を張れ。俺も……正直、お前らが羨ましい。自由よりも力よりも、誰よりも世界を、人生を愛してるって思えるから。それはどんな場所でも世界でも、そうしていくんだろ？」

帰ったら、どんな内装を作ろうか。
アンティーク風か。ガラス系か。防衛特化も良い。腕が鳴る。

「前世はゼネコン……建築関係で働いていたけど、やっぱり辛い時があった。もしお前らみたいになら全部楽しかったら、もっと人生を謳歌出来たんだろうな。あ、勘違いするなよ。それなりには充実してたんだ。死んだのは不幸な殺……いや、事故さ」

先ずはこの地を観光だな。

どんな建物が見てやろう。日々勉強なのだ。

「お前らは……お前らも前の世界があつたんだろう？ 何となく分かるさ。幾らなんでも異端過ぎるもん。そこはさ、どんな世界だった？」

さて行こう。

目的が目的だったから、手持ちの資材での改修はこの辺りが限界だ。外に出よう。

「行くのか？ 俺は後で行くよ……あ、待ってくれ！」

スライムに呼び止められた……気がした。

振り返る。ジツと見られてる……気がする。

「今後長い付き合いになるかも知れないからさ、改めて名乗らせて欲しい。俺はリムル。リムルⅡテンペスト。前の名前は三上悟！ お前らは、名前あるのか？」

名乗られた……気がしない。

リムル。それがスライムの名前だろうか。

なら名乗ろう。我々の言語が伝わるかはさせておき、そうすべきだと思っただからだ。

何故とは考えない。故に個々が名乗った。

改めて出逢えた。
今日は厄日では無かった。

8. 剣とエンチャント

「お陰で助かった！　あの薬じやなきや死んでいた！」

暫くスライムとしんみりしていたら、村人が戻って来た。　また増えた。　繁殖したか。

「俺に出来ることなら何でも言ってくれ……と、その前に言わせてくれ」

「うん。　知らない」

「知らないで済まされたくないんだが？　　牢屋を綺麗な住居に改造するなよ!？」

「モデルハウスって事で……牢屋にするにもさ、ほら。　VIP用のな、上級民様用的な」

「煙に巻くな！」

もう良いかなあ。　外行きたいなあ。

クラフターはウズウズする。　村人が増えて邪魔だ。　しかしスライムが何やら交渉している。　押し退ける気が起きない。

「まあ、命には代えられん。　水に流す」

「助かるよ」

「他にしたい事は？」

「そうだな、技術者を探してる。　家造りを学びたいんだ」

「……そりゃ冗談か？　　目の前にいるじゃねえか」

「それこそ冗談に聞こえるんだよ。　コイツら会話が成り立たないんだよ」

喧しい。　早く交渉を終わらせてくれ。　どうしてかスライムを置いて行けない。

「耳の痛い話だな。　だがよ、悪い奴じゃないんだろうな」

「そう願う他ない」

「釈放だ。　腕の立つ鍛冶屋を紹介するよ」

「ありがとう」

「今日は休んで行け。　日を改めよう」

「じゃあ、ここで休んでいきます」

「……今度は頭が痛くなる話だな」

終わった。　かと思えば部屋に戻って来た。

ベッドに入る。　スライムもベッドで寝るのか。　驚きだ。

しかし困った。　他にベッドが無い。　同衾出来るか。

やってみた。　出来た。　やるものである。

「美人なら嬉しかった」

ハアンと鳴かれた。

そうか。　お休みなさい。　同じ意味だろう。

日が明ける。　同じ村人が顔を出す。　また案内してくれるそう
だ。

良い奴だ。　頷くと付いて行く事にする。

「凄い街だなあ……蒸気機関？　スチームパンク……」

「またよく分からない言葉を……まあ、褒められてるのは嬉しいが」

岩壁に囲われる様に居並ぶ建造物。

大きくも小さくも無い道に、多くの村人が行き交う。

活気溢れる光景。　何より建造物の創意工夫が見て取れる。

クラフターは嬉しくなった。　建物と携わる創造主が、仲間がいる

のを感じるからだ。

「おい大丈夫か!? 連れが激しく腰振ってるぞ!! 首まで激しい!」

「そういう習性なんだ。 そつとしてやって」

様々なバイオーム、世界を開拓してきたから分かる。

クラフターは環境に適応するのではなく改変、又は利用する事で己が場所を切り取ってきた。

地獄たるネザー。 深淵広がるジ・エンド。 地下。 空中。 水

中。 マグマの中。 普通なら瞬殺される極限環境へも挑戦し、開拓し建設し打ち立て打ち勝つ。

崖や山、その中の開拓も経験した。 此処がソレに準じる。 さぞ整地に苦労しただろう。

知らない誰かに、クラフターは心中合掌した。

「まあコイツらの凄さより、俺はコレが凄いと思うよ。 剣が光ってるし」

「それだよ。 これから会う鍛冶師が打ったんだ」

誰かの整地後や開拓後に立ち入り、感謝の念を抱いている。

自身の苦労とは誰かの苦労の上にある。 忘れてはならない。

スライムが見ているエンチャントの剣も苦労が窺える。

望む望まないに関わらず、きつとそうだ。

世界を歩く時、承認欲求が独り歩きし過ぎない様、見張る事だ。

苦しい時程、誰かの上にいる。 その時、ふと下を見れば劣る者はいる。 絶対に。

逆も絶対だ。 苦労とは自分自身が最も理解し、されど一言一句違わぬ様な苦労は存在し得ないからだ。

何故なら自分自身の存在と自我が唯一無二と言えるから。

我思う。 故に我あり。 確信は無い。 だが誇らしい自信だ。

1つに感じる事だつて、クラフターが100人いたら100通り有る事になる。

同じ意味が有る様に感じたなら、感じただけだ。共感すれど完璧なピースだとどうして言えるのか。

誰かの完璧は誰かの綻びなのだ。幾ら補填しても矛盾が起きる。

故に完璧な理解を欲求し、満たされないと述べてはならない。

それは土台になった者達への侮辱だ。

マルチにおいて自分に忠義を尽し、自身を肯定するのは美德だが、そぐわない者に対し排他的になつてはならない。

マルチとは、ある種の孤独なのだ。では一方で孤独が紛れるのは何故か。幸福があるとすれば……誰かが肯定してくれたから。

褒めてくれたから。完璧な理解じゃない。でも善意だ。

もし孤独の一端を少しでも埋めたい時、誰かを肯定すると良い。

自分自身でも良い。

クラフターは互いに矛盾で不完全だからこそ、支え合い生きて行けるのだ。

要略。

みんな、ありがとう！

「兄貴、いるかい？」

気が付けば建物の中に案内されていた。

周りを見た。知ってる村人が何人かいた。

「急ぎでないなら日を改めてくれ」

「職人だなあ。うん？ 昨日の3人じゃないか。ここで働いて

いたのか」

「カイジンさん、この方ですよ。 昨日俺達を助けてくれたスライムは」

「そうだったのか。 礼を言う……すまんが今ちよつと手が放せなくてな」

「いや良いよ。 邪魔して悪いな」

剣が転がっている。 鉄剣か。 無用心だ。

エンチャントはされてないが、拾われる事を思うと戦慄の他無い。
いい。

武器とは いついかなる時、敵性モンスターに拾われるか分かったものではない。

「そつちの連れは……なんか辛そうな顔してるが大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫、だって意味不明だから」

「それ大丈夫とは言わないんじゃないか？」

アレは苦い思い出だ。

ジャングルバイオームを探索中、己むを得ず仮拠点の建設をした時。 木陰から月に照らされ其奴は現れた。

ダイヤモンドフルエンチャント装備のゾンビだ。 ダイヤ剣までしつかり装備していた。

誰かがリスポーンしたのが災いして拾われたのだ。

ダイヤモンドフル装備とて、死ぬ時は死ぬ。 猛毒や高所落下の対策を講じてない等だ。

兎に角、その時は激闘だった。

常世の闇かと云う位、強かった。

精々がエンダーマン級だと侮り、多くが斃れた。

何とか倒した後、皆で犯人探しをしてお礼参りをする。 それだけは良い思い出だ。 スカツとした。

「今度は笑顔か……意味不明だな」

「だから言ったでしょ」

「……ところでカイジンさん。 相談してみるのはどうですか？」

「いや、相談したってお前……」

「相談？」

「ああ……実はな」

武器とはそのままに力なのだ。

管理保管を蔑ろにすると痛い目に遭う。

目の前の髭モジヤ達もクラフターだ。

剣作りを続けていくなら配慮した方が良い。

「なるほど。 剣の材料が足りないのか」

「魔鉱が必要なんだ」

「……何とかかなりそうだ」

ほら見ろ。 スライムが剣を呑み込み始めた。

スライムが武装出来るか不明だが、少なくともロストする。

特に1本はエンチャントが施されていた。 大切な物だったろうに。

「なに食ってんだ!」

「よし鋼の剣も回収……コピー開始」

言わんこつちや無い……と、刹那。

大きな風が巻き起こる。

「うおっ!?!」

髭モジヤが叫ぶ。

やはりクラフターか。 ダメージを負うと、そんな声がでるし。

「……俺達の村に技術指導として来る気はないか? 検討してみてくれ」

次には……驚いた。

鉄剣が綺麗に転がっている。 全てエンチャント済みだ。

エンチャント台も無し、どうやったかは知らない。 だがスライムもまたクラフターだったか。

仲間がより身近に感じた。 嬉しくなり、腕を激しく振って見せた。

9. 胸囲とパールモドキ

「打ち上げえ？」

暫し。 剣のエンチャントについて妄想しているとハアンが響く。
スライムと村人だ。 またも交渉している。 何でもありだ。
羨ましくある。

「ああ。 リムルの旦那のおかげで無事に納品できたんだ。 ご馳走
させてくれや」

「いいよ、そんなの。 味覚ないし」

「綺麗なお姉ちゃんも、いっぱいいるから」

「そそつ。 若い娘から熟女まで！」

「……仕方ない。 付き合ってやるか」

何処かへ案内される。 またか。 次はナニを見せてくれるとい
うのだね。

観光ガイドがいるのは大変有難い。 クラフターは内心感謝しつ
つ、付いていく。 再び建物に入った。 村人に群がられた。

耳が尖っている。 綺麗な服を纏う。 胸が膨らんでいる。 ま
た新種か。

この世界には何種類いる事か。 まだ見ぬ生物群を考えるとワクワク
してしまう。

「いらっしやませー!!」

喧しい。

「うっひょーーーー!!」

スライムも喧しい。

しかし魂の奥底から響かせる。確かに内装は素晴らしい。煌びやかだ。参考にしたい。

「うわぁ可愛い！」

「FOOOOOOO!!」

スライムが抱かれた。

勇敢な村人だ。何でも食うのを既に知り得ているクラフターとしては、見ているハラハラドキドキだ。

村人が食われるのはどうでも良い。ただ結果として村人に擬態されたら見分けが付かない。

村人は大勢いる。森の中から一本の木を見つける行為は困難だ。半自動釣り装置の様に、スライムホイホイなる装置は作れないものか。

「えーと……楽しんでくれてるみたいでなによりだ」

皆が席に着く。椅子も豪華。どうしたら作れるのか。

持って帰れないか。駄目か。疑問が積もる。楽しい。

我々に対する挑戦は続く。

「いや本当、旦那には感謝してるんだ。お陰でドワーフ王への面目が立つ」

我々も座る。羊毛だろうか。知れない世界を尻に敷く。

「しかし恐れいったよ。俺の渾身の一振りが、まさか数秒で量産されちゃうとはね」

「カイジンの一振りが素晴らしかったからな。俺はそれを複製しただけだ。あんたは最高の職人だよ、カイジン」

お酌された。飲む。美味しい。

ポーシヨンの一種か？

状態異常を受けた。口内に独特の刺激。視界が僅かに歪み、宙に浮かぶ感覚。しかし不思議と心地良い。

「それでな旦那。村に来ないかと誘ってくれたら？ あれなんだが……」

「あ、ママさんさっきの美味しいのおかわりもらえる？ 此奴らにも同じく」

「お、おい旦那!？」

「……もう十分見返りはもらった感じだしな」

これも作りたい。あれも作りたい。気分が高揚する。

飲んだからといって攻撃力が上がる気がしないが、人生に潤いを齎す。

あ。またお酌された。戴く。お辞儀して礼を述べる。

「ねえねえスライムさん、水晶玉で占いやってみない？」

村人が球体を持ち寄る。今度はなんだ。エンダーパールか。

いや違う。色もだが。鉱物を加工した物に感じる。建材では無い。

ツールか。ならばどんな効力があるというのか。

「何を占ってくれるんだ？」

「そうねえ……運命の人とか!」

「え?」

パールモドキにナニかが映る。

子供村人複数に、左目辺りに模様が有る村人が動いている。
どう云う仕組みか。球体の中に村人が住んでいるとは思えない。

「もしかして……爆炎の支配者、シズエ・イザワじゃねえか？」
「有名なのか？」

「ギルドの英雄だよ。見た目は人間の若い娘さんだが何十年も活躍してたんだ。今は引退してどっかの国で若手を育ててるんじゃないかな」

「英雄……いざわしずえ……井沢静江？ どう考えても日本人の名前だよな」

探掘していれば、それっぽいのを見つけられるだろうか。
僅か1つ処から様々な疑問と興味が湧く。 楽し過ぎる。 休まる暇がない。

「運命の人、気になるんだ？」
「同郷者なら会ってみたいな」

カランと音がした。
また村人だ。 今度は神経質そうだ。

「おいマダム！ この店は魔物の連れ込みを許すのか？」
「まづいな……大臣のベスターだ」

ツカツカ歩いて来る。 手には水の入ったガラス容器だ。
アレなら作れる。 ポーションの空瓶だ。

しかし用途は何だ。 醸造台は見当たらない。
あいや、無くても構わないが。

「ふん！」

次の瞬間。頭上でひっくり返された。ずぶ濡れになった。そうか。そういう用途か。火薬を使わずして浴びるとききた。スプラッシュポーションみたいなものか。

「魔物を連れ込んだのはお前らだろう。頭を冷やした方が良い……え？」

瓶を奪う。残りを飲み干す。やはり駄目。

浴びても飲んでも効果が無い。ただの水。ガツカリした。

「ま、まあ良いでしょう。反省したなら改める事です」

「やいベスター！　なんて口の利き方だ！」

「これこれはカイジン殿。こんな所で油を売っていて良いのですかな？」

「納品なら済んだぞ」

「え……そ、そうですか。流石はカイジン殿ですな。まあそれ位

出来て当然でしょう」

村人同士が揉め始めた。新参が不利だ。しかし何故揉めた。

水の意味なき使用に憤慨しているのか。

だとしたら悪い事をした。水が欲しいなら作ろう。無限水源

を。

「よくも恩人の連れにケチつけやがって……ん？」

「貴方こそ誰に向かって口を……へ？」

部屋の隅に無限水源を作る。

掛け流し風にする。既存内装に何とか合わせた。これで満足

して欲しい。

「……あー……ぐめんママさん」

スライムが静寂に一石を投じた。
白けた事へ配慮された。持つべきは友である。

「……なんだ此奴らは?!」

「俺も知りてえよ」

「ママさん……コイツら悪気は無いんだ。ナニ考えてるか分からないだけで」

「まあ。それは良いのですけれど……綺麗な物を作ってくれましたし」

微妙な空気になる。また内装が気に入らなかったのか。無念だ。

かと思えば苦笑される。謎だ。そのままにして置こう。

「此奴らをそのままにはして置けない。連行する」

また何処かへ案内された。素晴らしい。

いやー、ここの村人は親切心があつて良い!

少女は眠りについていく。

10. 帰還と拡張

「また捕まったよ。 お前の所為だからな」

村人諸共、大きく聳え立つ建物に通される。

その大きな空間に通された。 荘厳だ。

派手さは無い。 だが彫られた壁とそれにより立体的な空間を醸し出している。

高評価だ。 完成された空間だ。 今更に改造する気を起こさせない。

「……王よ！ この者達への厳罰を申し渡し下さい」

村人が複数いる。 どれも偉そうだ。

特に中央の椅子に座る村人は只者では無い。

鎧も着ている。 絶対強い。

もつともクラフターにはどうでも良いが。

「カイジンよ。 久しいな、息災か？」

「は！ 王におかれましてもご健勝そうで何よりでございます」

「よい。 それよりも戻ってくる気はあるか？」

「恐れながら王よ。 私は既に主を得ました。 王の命令であれば、主を裏切ることとは出来ません」

「……であるか……判決を言い渡す。 カイジン及びその仲間は国外追放とする。 今宵日付が変わって以後、この国に滞在する事を許さん。 以上だ。 余の前より消えるがよい」

長いハアンも一喝置いて終わると、また案内される。

勝手にさせて欲しいが、仕方ない。広大な集落と建造物だ。取り敢えずの要所を抑えてくれるなら越した事は無い。追従する。

「いやー、どうなるかと思ったよ。特にコイツらが暴れないかが一番心配だった!」

「王の前だ。覇気もだが、精銳がいる中で流石に馬鹿な真似は……」
「それを平然とやってのけるヤツらなんだよ!」

かと思えば集落の外に出された。

なんて事だ。帰るらしい。

まあ良い。座標は知り得た。今度ゆつくりと観光しよう。

その時は地下鉄を這わす。高速鉄道を建設だ。門番が邪魔だが、地下から内部に入れば問題ない。RSの在庫あったかな?

「でもさ、内装不法増築だからって国から追い出す程なのか? 暴行した訳でも不法侵入した訳でも無いのに」

「何かお考えがあるのだろうか」

「まあ良いか。取り敢えず帰ろう。カイジン達も来る訳だし。

概ね予定通りだな」

狼に跨り帰り始める面々。此方も帰るか。

エリトラを装備し、飛行する。村の座標は知っている。さつさと帰る。

どうせ資材も無い。現地調達しても良いが、また絡まれても迷惑だし。

「あ、あいつら飛んでるぞ!」

「気にしないで良いよ。そういうヤツらだよ」

「底が知れないな」

「……こんなもんじゃない」

資材輸送にあたっては、やはりシエルカーボックスを利用したい。
大規模建築なら尚の事。 レールを敷設しチェスト付トロツコを
走らせ輸送路を築かねば。

あの集落の周りは何も無い。 開拓してくれと誘つてるとしか思
えない。

何を造るか。 先ず境界線か。 鉄装備に群がられても迷惑を極
める。

クラフターは未来を夢想しながらも、リムル達に先立って帰還し
た。

……なんかムキムキに絡まれた。 緑の村人も増えてるし。

「皆様戻られましたか！ ご覧の通り、ゴブリンが増えました。

近隣の村からリムル様の庇護を求めて来た者達です。 約500は
います」

繁殖したのか。 かなりいる。

抑制に失敗した光景に似るから、クラフターは空を仰いだ。

かつての失敗を見せつけられている様で虚しくなったのだ。

世界は安定を好む。 増え過ぎた畜生は時流を歪ませる。 が、今
はそんな事になっていない。 この世界は懐が深い。 唯一の救い
だ。

「リムル様が戻られるまで保留にしておりますが……なにぶん、寝床
や食糧の確保に困惑している次第です」

クラフターはダイヤ斧を構える。 村を拡張だ。 元よりその腹。

今更なんだ。

「まさか……」

よし。やるぞ。

木こり伐採、開拓者。大切なのは何が起きたかではなく、次に何を
するか。

既に出た結果は仕方ない。口減らしをするか住処を提供するか。

選択肢はシンプルに2択。即断。後者を選ぶ。

何故か。無駄な殺生は気分が悪いから。

ならばと結論したクラフターの腕は早い。

あれよこれよと木を退かし、有り余る木材と石材で住居を造る。

地を響かす程度に村人は膨れたもんだから、半端では済みそうにな
い。

「おおっ!?! 相も変わらずですな!」

創造力、出し惜しみは無し。

マルチクラフターは役割が自然と分かれた。

木こる者。 整地する者。 湧き潰す者。 建築する者。 内装

に携わる者。 畑を耕す者。

他にも様々に分担して専念し、効率良く村を拡張した。 あいや最

早街と言って良い。

寝る間も惜しんで斧を振るう。 ツルハシを振るう。 スコップ

を振るう。

道を伸ばし家建てて、用水路を引いて畑を湿らす。

土地が勿体無いので一戸建ては少ない。 代わりに摩天楼が聳え

た。

「ただいまー……うおおおお!?!」

3回くらい寝て起きる頃。

リムル達が帰還した。 驚愕のハアンが轟く。

良いぞ。 いつ聴いても良い。

「リムルの旦那。こりや村つて規模じゃないんだが」

「お、おのれ……また勝手に造りやがって！」

「どうかお鎮め下さい！　彼等は庇護を求めて来たゴブリンの為、建物を増やしてくれただけなのです！」

「くう……悪意が無いのが分かれば分かるほど、この湧き上がる気持ちにはなんだ。劣等感と……嫉妬？」

良い汗をかき、誰かの為に創造する。

やはり健全な行いは気持ちが良いもんだ。

クラフターは莞爾として頷いた。

11. 出会いと案内

「うおおおおおおお!!?」

森が騒がしいから、クラフターは様子を見に行つた。

無心に木こる事で洗われる心も、今や荒れてしまった。原因解決

に乗り出す他無い。

「カバルの旦那が悪いんでやすよ！　いきなりジャイアントアント

の巣に剣なんてぶっ刺すから!!」

「う、うるせーな！　俺はリーダーだぞっ」

「リーダーのくせに迂闊すぎよう」

「うぐ……」

現着。　周囲確認。　いた。

4人の村人が何やらデカイモンスターに追われている。

脚が6本。　強靱なキバ。　黒々している。　蜘蛛とは異なるモ

ンスターだ。

剣は無謀か。　弓矢だ。　射抜くか。

「死んだらカバルの枕元に化けて出てやるんだからっ」

「ふははは、そりゃ無理つてもんだ!!　なぜなら俺も一緒に死ぬからな！」

「イヤーーーーーっ」

土を積んで蜘蛛返しを作り、天辺より弓矢を構えた。

エンチャント済みで、単純な威力を上げている他、無限矢と火属性を付加しているものだ。　当たれば持続ダメージを狙える。

絞る。　的はデカイ。　この距離で外すクラフターではない。

村人とモンスターに距離が生まれる。　良し今だ。　クラフター

は一斉に射抜き始める。

「私が足止めを……ッ!？」

そら当たった。 燃えろ燃えろ。

「これは炎の力……でも私は何も……」

「何なの、あの炎!？」

「シズさんの仕業……じゃないよな」

苦勞せず斃れていく。 有効で良かった。

未知に溢れた世界で我々の技術が通用する事を嬉しく思う。

……殲滅したか？

警戒しつつ、土を壊して村人の元へ向かう。 放心しているが無事だろう。

油断大敵。 群れる敵との殺し合いは距離や地形把握が大切だ。

死角から殺される事はしよっちゆうだ。 上から落ちてくるク
リーパーとか、スケルトンに射抜かれるがままに奈落に落下する
とか。

「シズさん、まだだ！ 生きてる奴が……っ」

「ッ!」

いけない。 1匹倒してない。 隠れていたか。

お面を被る村人が襲われそうだ。 走っては間に合わない。

逡巡せず、エンダーパールを投げる。 村人の前にワープした。

「突然目の前に!？」

衝撃の痛みは久しく、野太い声を響かせた。

が、素早く丸石を積み立て防壁を作る。

突撃していたモンスターは間抜けにもひっくり返った。
これを逃すクラフターではない。ダイヤ剣に持ち替え、えいやと
斬り捨てる。

火属性を付加していたから、これまた燃えた。ドロップ品は……
無い。しける。萌無い敵だった。

「おーい！ なに騒いでんだ……うん？」

「……スライム？」

「む。スライムで悪いか」

「あ、いや……」

リムルが来た。悪食を見る羽目になるかと思えば、剣を携えた村
人と話し始める。

「……思ったより早く出会ったな。運命の人」

かと思えば仮面の村人に見惚れるリムル。

倣ってスニークで見やる。いまは仮面を外していた。知って
いる村人だった。

「貴方達も炎を……」

パールモドキに映っていた村人だ。

やはりパールモドキの中にある訳ではなかった。
では、アレはなんだったのか。興味は尽きない。

「……………コイツらに変な事されなかつたか？」

「寧ろ助けてくれたよ。ありがとう」

「言葉が通じないんだ、コイツら。言うのが無駄とは言わないけど」

「ここは任せて木こりに戻るか。」

いや。村人達が心配だ。こんな湧き潰しの甘い森に放置は出来ない。

それを思ったのか、リムルはお得意の村人誘導を開始する。出来るスライムだ。

「……簡単な食事で良ければご馳走するよ……俺はリムル。悪いスライムじゃないよ!」

刹那。仮面の村人が吹き出した。

よく分からない生態だ。見た目こそ我々と酷似しているのに。

「どうしやしたシズさん」

「いえ、なんでもない。それより……お邪魔しよう。この子はきっと、信用できる」

護衛する。ダイヤ剣を携え、左手に松明。

湧き潰しながら移動する。

「……あの人達は何をしてるのかな?」

「気にしたら負け」

「右手の青い剣、なんだ? かなり強力な気配がするが」

「知らん」

「友達?」

「悪友」

森の木々は複雑だ。湧き潰すのに松明を無駄に使う。

だが仮に整地したところで全ての闇を払うのは不可能だ。世界は広い。

天と地を見やれば闇に飲まれてるのは果たして地の方だ。理想は至って遠く常に外側にある。

「松明……合点がいったでやす」

「どうした？」

「気が付かないでやすか？」

洞窟の松明の規格、まさにこの人達の

松明でやすよー！」

「なに!?　　そうか、洞窟はコイツらが」

「ならヴェルドラ消失も？」

「……ドウカナ?　　俺ハ知ラナイナー」

鳴声を聞きながら街へ着く。

驚愕のハアンが響く。　　良いぞ。　　何度でも響かせよ。

仮面の村人は絶句している。　　それもまた良い反応だと言えよう。

「な、何だこりや!?!」

「大きな塔!?!」

「森の草木で見えなかったでやす!」

「……すごい」

どうだ驚け見て笑え。　　空いた顎が閉じれまい。

高層マンションにビルディング、居並ぶ摩天楼。　　空をも削るスカ

イスクレイパー。

土地の有効活用の為、横ではなく縦に伸びた結果だ。　　しかしデザ

インも良い。　　豆腐とは言わせない。

ベランダ完備。　　各階全室仮拠点セット完備。

水流エレベーターは戸惑われたが、今や使い慣れてくれた。

細やかな設備は、前に行った集落からリムルが拉致した村人達とその部下が整備している。

「都市だ……何故、今まで誰も気が付かなかった!?!」

「ギリ仕方ないんじゃない?　　だってこれが建って数週間もしてな

いだろうし」

「そ、そんな短期間で!?!」

「洞窟のは……彼等の片鱗だったでやす」

我々も嬉しいよ。君達に出会えて。

褒めてくれる。喜怒哀楽を見せてくれる。

そんな村人達が過ごす世界。

その隅で僭越ながら創造出来た事を、クラフターは感謝した。

12. テツパンとにつぼん

「ギドひどーい！　よくも私のお肉を!!」

「食卓とは戦場なんでやすよエレンの姉さん！」

「いいわよう。　じゃあカバルのもらうから」

「ギャー!!　　丹精こめて育てた俺の肉がー!!」

建物に入っても尚、賑やかな連中だ。

余程腹を空かせていたらしい。「テツパン」なる道具で焼かれた肉を取り合っている。

喧嘩は駄目だ。　諸君もマルチである事を自覚し、仲良くしなさい。

クラフターは思い、牛肉を1スタック64個用意した。　気前は良い。

「うおおお！　　肉のお代わりを!」

「やったでやす！　　良い人達でやすな！」

「やったー！　　いっばいある！」

そうだ。　仲良く食べなさい。　クラフターは頷いた。

僅かな食糧を巡って争う光景は見ていて痛々しい。　静観は出来ない。

有り余る食糧を無駄にするのも頂けないが、争うのも良くない。

今はたとと食べて元気を付けろ。　空腹は駄目だ。　体力が回復しないばかりか、走る事も儘ならなくなる。

出来る限り飯は持ち歩き、腹は満たす事だ。　冒険者としてのアドバースである。

「スライムさん、スライムさん。　焼けた鉄板触れてるよ？」

「ッ!?　　溶けるかと思った」

「そうならなかったとこみると、熱に対する耐性があるのかな？」

会話している仮面村人は落ち着いている。肉を食ってる3人も見習って欲しい。

あいや。我々も初期ははしゃいでいたものだ。今もか。人の事は言えぬとクフクフと笑う。

「……あの人は炎を扱えるの？」

「どうかな。未だに知らない事ばかりやるしなあ」

「……私もね、炎とは縁があつて。ううん、呪いがあるの」

火力が弱つてる。火打石で火を作り直す。

効率を考えて、かまども設置。肉を放る。豚肉と鶏肉と兎肉も混ぜる。肉祭りだ。ただし腐肉、テメエは駄目だ。

「私が元の世界で最後に見た光景は、辺り一面の炎。とても怖い音が鳴り響く中、住み慣れた町は紅蓮に染まっていた」

「……もしかして空襲か？」

「多分そう。東京大空襲って言われてるんでしょう？ 私の教え子……その子も日本出身なんだけど歴史の授業で習ったらしいね」

トーキョー？ にっぽん？

そんなハアンが聞こえて振り返る。普段は耳など傾けないから、気紛れだった。

「……それで転生して？」

「ううん。私は死んでないよ。ある男に召喚されたの……ふとした気紛れからか、彼は私に炎の精霊を憑依させた。それは炎を操る力をくれたけど……同時に呪いでもあったの。この力……炎のせい……私は大切な人達を失ってしまったから」

地名だろうか。 建物の名前か。 食物の名前か。 「テツパン」の親戚か。

若しくはその生まれか。 或いはそうかも知れない。 素敵な文化と創造に溢れてるに違いない。

につぼんかあ……親近感が湧いてきた！

「だからかな。 人と親しくなるのは少し怖かったんだけど。 やっぱり仲間っていいね。 最後の旅で楽しい人達と出会えたもの。 彼等はお互いを信頼してるし、遠慮なくケンカもするし。 良い冒険者だよ。 それは、あの人達もそうなんだろうね」

「……俺、もつとシズさんの話聞きたいな。 腹ごなしに散歩でもどうだ？」

何処かに行く。 クラフターもついて行く。

我々としても仮面の村人の話を……いや。

シズ、という個体らしい……の話をもつと聞きたいと思う。

13. 滞空とブレイズ

「な、なんで……」

何故こうなった。

話を聞こうと、野原まで散歩してきただけなのに。

クラフターは起きた惨事に狼狽し、戦慄と共に身を震わせた。

突如として周囲で火柱が立ち上がれば誰でも恐怖する。

原因はシズだ。浮いている。周囲は紅蓮に包まれている。

が、そんな事より滞空技術に目が向いた。

エリトラにホバリング機能は無い。

ぜひ、その技能を指導鞭撻して頂けないでしょうか。平伏し懇願した。

「まるで別人だ。なんでそんなに殺意を剥き出しにしているんだ」

『宿るイフリートが主導権を取り戻そうとしています』

リムルが足元で嘆く。分かる。可能性の観点を共有すれば謎の究明も捗る。

「リムルの旦那、デカイ火柱が見えたが……シズさん!？」

「なんで敵意を剥き出しにしてるんだ？」

「シズ……シズエ・イザワ？ 爆炎の支配者、ギルドの英雄!？」

「マジ!? シズさんってそうだったの!？」

「宿るはイフリート!」

「イフリート!? 上位精霊じゃないか!」

「うっさいぞお前ら!? 良いから逃げる!」

喧しい3人の村人もやってきた。驚愕している。そりやそうだ。エリトラ滞空という不可能技を為しているのだから。

「逃ゲテ……モウ、抑エキレナイ……」

「イフリート……呪いと言っていたな。　シズさん、後は任せろ」
「……才願イ……」

刹那。　シズは変質した。

何か茶色ムキムキ村人になった。　街にいる緑村人もそうだったから今更驚かない。

それより早く教えて下さいお願いします。

「お前達は下がってる！」

「シズさんは俺達の大切な仲間だ！　逃げる訳にはいかねえ！」

「私達だってね！　伊達に冒険者として命張ってないのよ！」

「過去の英雄と邂逅し相見え命賭す。　人生、何があるか分からないでやすな」

火災が懸念される。　取り敢えず耐火ポーシオンを飲んでおく。

ハタと気付く。　何故火をブレイズの如く撒き散らす？　シズはブレイズだった……？

「シズさん、本当に良い仲間に出会えたな……分かった。　無茶はするなよ！　後お前ら！　思案顔になってる暇あるなら手を貸してくれ！　右手でも左手でも構わん！」

「なんだ、その言い方……」

「コイツらは基本、右手を使うんだ」

「まあ……右利きが多いってだけでは？」

「付き合っただけで分かる」

リムルの号令で我に帰る。

そうだ。　シズがブレイズなら浮遊能力も合点がいく。　彼奴らも浮いていた。

でも手は無かった筈だが。 いや。 此処は異世界だ。 相当するだけだ。

「イフリート！ 一応聞くが、お前の目的はなんだ……上？」

無いが有る手を上に向けるムキムキ。

釣られて見れば、火の玉が大量に浮いている。

確定した。 ブレイズだ。

「火の玉がいっぱい来るーッ?!」

「回避に専念しろー!」

雨霰。 硝煙弾雨と飛翔の嵐。

それだけ。

慌てず騒がず丸石で防壁を築き村人を守る。 ハーフブロックも
用いてスリット穴まで制作した。 トーチカだ。

弓矢等の飛び道具を用いる際、無防備になる身体の為の防衛設備で
ある。

長年の戦闘経験から老兵足るクラフターだ。 多少新手や新参で
脅え竦む創造主では無い。

「守ってくれるのはありがたいでやす!」

「アイシクルショットで援護するね!」

「よし! 防御に専念、牽制しつつ相手の出方を見るぞ!」

何かスリットから飛び出て行く。

氷の矢か、アレは。 ソレも興味が尽きない。

「油断すんな! 次来るぞ!」

余所見を咎められた。敵と相對する。
また火の雨だ。やるか。劍を構えた。

「何して……跳ね返した!?!」

劍を振り回して玉返し。ネザーの巨大浮遊クラゲ、ガスト戦お得意火の玉テニスだ。

何本ノックか知らないが、自身に振り掛かる分だけ返す。何個かは命中した。

「すげえなお前ら!」

「だけど火に火を返しても駄目か!」

効果が見られない。平然と浮いている。ゾンビピッグマンみたいに火炎耐久があるとみる。

というかそうだ。既にムキムキは灼熱だ。

「ならば水刃で……蒸発しちゃったよ!? 貯めてる水を全部使えばイけるか!?!」

『水蒸気爆発の恐れ有り。辺り一帯が消滅します。推奨出来ません』

村人が氷を撃てばリムルは水を吐く。消火か。発想に賛同したいが効果が無い。

どうしたものか。模索していると、またも変化を起こすムキムキ。

「分身!?! くそっ! まだ有効打を見つけていないのに!」

増えた。これは驚き。スライムのように分裂したか。体積は

同じに見えるが。

射抜くか。 剣は届かない。 馬鹿正直にブロックを積んで行けば叩き落とされるのが見えている。

ウィザー戦同様、マルチの力を見せる時。 取り敢えずリムル達と共に気を引く。

「旦那！ 氷なら効果が見られる！」

「そうみたいだな……俺に向けて撃つてくれ！ 思い付いた事がある！」

「ええ!? う、恨まないでよ!?!」

同じ様にトーチカを作り、スリットより矢を絞る。 そらゆけ。

「よし！ 氷を使えるようになれば……ん？」

駄目だ。 矢が効かない。 ウィザー級か。 なら毒矢も効かないだろう。

だが気を引くのが目的だ。 構わん。

「お前らのイミフな矢でも駄目か！」

「い、イミフ？」

『フレアサークル』

「ああ!? アイツら火柱に飲まれた！」

「でも平然と火の中で動いてるけど!?!」

「耐性があるのか!」

「しかも火柱の中を泳いでいるぞ！」

「ナニがしたいんだお前ら!?!」

火に吞まれたが問題ない。 その為に火耐性ポーションを飲んで
いる。

現在、同志が急ピッチで黒曜石ドームを製作中。 ムキムキを囲う

様に施工している。

これはウイザー戦を思い出している事だ。

黒曜石はダイヤモンドハシでなければ破壊不能の強度を誇る。その為、TNT実験や装置、時に心の壁や悪意から守る為に使用される。ウイザーは万事万物を破壊する不倶戴天の存在。

世界に解放して良い存在ではなかった。

だから当時のクラフターは何処かへ行かぬ様、決死の工事を敢行し、ウイザーを閉じ込めた。その上で内部で死闘の末、討伐した。それが通常破壊不能黒曜石ドームなのである。

「なんだ？ 外にいる奴らは何をしている？」

「黒紫の塊……空までみるみる覆われて行く！」

幸いムキムキは移動しない。リムル達に釘付けだ。日の明かり届かぬ様になっても動かない。奴の火だけがドーム内を照らし始める。

「……ッ！ お前らは退避だッ！ 外に出るんだ、閉じ込められ

るぞーッ!!」

「マジ!？」

「走るでやすよ！」

「シズさんをお願いよ！」

頃合いだ。リムルが叫ぶ。3人の村人は察してドームから出るのを確認した所で完全に封印する。

「お前な……閉じ込めるならそう言えよ。いや言えないんだったな」

ドームの天辺から、同志が一齐に水バケツをひっくり返す。大量の水がドームを満たす様に落ちてくる。

「水ううううう!? ナニしてんだよ! 爆発するぞ!」

興奮するリムル。分かる。水が落ちてくる光景はショツキン
グが感動かのどちらかだ。

そうでなくても事故は起こるさ。水浸しの建造物になるとか。
松明も悉く流される。

その時は仕方ないね。諦観してやり直す。

「ほら見ろ!」 イフリートに大量の水が! 爆発するう!」

クリーパーの様な起爆動作に入るムキムキ。

いけない。本能が警笛を鳴らした。

大急ぎでスコップを振るい、出来た穴に水を貯める。その中にリ
ムルと共に水に飛び込む。

刹那。大爆発が起きた。

爆発も爆発。大爆発である。

雷に打たれたクリーパー何体分かもわからない大爆発だ。

クラフターは水中で目を白黒させた。さもTNTを敷き詰めて
の一斉点火だ。

誠、驚愕と面白い日々である。だが案ずるな。ダイヤ防具の

上、地面は水浸し、周囲は黒曜石。

被害は思うより少ない。やはり破壊を見越してこそ正解の黒曜
石であった。

「し、死ぬかと思ったぞ。しかし……この黒いドームは……凄い強
度だな。この水は対爆性を付加するのか。まさか見越して?」

まあ爆発するとは思わなんだ。

黒曜石と水が無ければ終わってた。色々。

「そうだ！ シズさん！」

リムルが慌てて飛び出した。

中央にはムキムキが倒れていた。まだ生きている。強い。

もう瀕死だが。

クリーパーなら爆発四散の惨事だから、形が残っているだけでも十分驚愕に値する。

「よ、よし。まだ間に合う！ イフリートを捕食してシズさんを剥離する！」

リムルがムキムキを食いやがった。またか。ドン引きである。悪食なのは知り得ているが、ここまでやるとは。焼かっていたから美味しく見えたのかも知れない。

クラフターは距離を取る。自身もそういや焼かっていたのを思い出したからだ。

我々を食うなよ。フリじゃないからな。

代わりに腐肉と蜘蛛の目を差し出す。

これで勘弁願えないでしょうか。

「いらねえよー！」

拒否られた。それもまた仕方ないね。

14. 寝ると起きる

「……シズさん、1週間も目覚めない」

食われる事なく景色は街並み。

灼熱ムキムキを飲み込んだリムルは村人を吐き出した。シズ

だった。

消化吸収されたと絶望せずに済んだ。そう胸を撫で下ろしたの

も束の間、クラフターが7回程寝て起きてるのに起きない。

食われたシヨックが抜けないらしい。

良くも寝続けられるなど最初は呆れたが……理由が理由だ。ク

ラフターは同情した。

しかもである。

食った本人が毎日枕元にいるのだ。

目覚めたらシヨック死して可笑しくない。

クラフターは身震いする。

寝込みをクリーパー、振り返ったらクリーパーというのも大変

シヨックな光景だが、丸い水色悪魔の行為は上を征く。

とはいえ、クラフターにはどうする事も出来ない。

精々がベッドに寝かせてやるくらいだった。

その後、一部のクラフターは新天地やマッピングの為に街を離れ

た。

見ていられないのもあったが、屈託を晴らしたく身体を動かすのも

ある。

そんな時だ。とうとうシズが目覚めたのは。

「シズさん！ 良かった、目覚めないのかと」

シズは冷静に耐えた。

輝く双眼に水色玉を入れても尚。

強い。クラフターだったら死んでいた。
リスキル未遂。 悍ましい。 流石は悪魔。

「今、水を……」

「ううん。 もう良いの……」

驚いた。

リスキルを失敗した悪魔を呼び止めた。

強い。 見習うべき精神力だ。

「もうね、分かるんだ……死ぬんだって」

「な、何を言っているんだ……」

『告。 シズエ・イザワの気力は著しく消耗しています』

「……宿っていた精霊、イフリートがシズさんの命を繋いでたのか。

俺の所為だ……」

『そのまま放置していれば、イフリートに支配されていました』

会話している。 強い。

クラフターだったら悲鳴と共に切り刻んでいる。

「……私ね、この世界が嫌い。 勝手に召喚されて、弄んで、苦しませて、身体を蝕まれて。 私以外にも、そんな子達が……」

涙が頬を伝う。 同情した。

やはり辛いか。 身動きが取れない様にも感じる。 恐怖に竦ん

でいるだろう。

クラフターは配慮して……せめて寄り添う。

リムルとふたりきりなのは精神的に辛かろう。 我々がいる事で

紛れると良いが。

「……だけど貴方達は、この世界も……人生が好きなのね。 愛して

るんだって、伝わるよ」

語られる。言語を理解出来ないのが辛い。

だが、シズはもつと辛い。心からの言霊を吐き出しているというのに。

「そんな顔しないで。私ね、貴方達に出逢えて良かった。短い間だったけど、皆が幸せな光景を見る事ができた。そんな世界も……ある……だって……」

「シズさん!」

シズが枯れて逝く。 比喩じゃない。 本当に枯れて逝く。 今にも崩れ去りそうな身体になっていく。

「スライムさん……お願いがあるの」

「なんだい?」

「私を……食べて」

やはり起きてリムルという光景がショックだったのだ。

悪魔のリスキルは今、成功を迎えようとしている。 なんという事だ。

「貴方が見せてくれた……素敵な風景の中で……眠りたい」

「分かった。それがシズさんの望みなら」

「スライムさんの名前は……?」

「リムル。 リムルⅡテンペスト。 前の名は三上 悟。 その願い、聞き届けよう」

また名乗った……気がする。

冥土の土産か。 悪魔の作法か。

だとしても名乗られねば無作法というもの。

クラフターは個々名乗る。 伝わらなくても良い。 そうしな
ければならないから。

「あり、がとう………」

事切れた。 クラフターは閉目する。

人生でここまで最も深く、先人へ偲びを込めた事は無い。
何故か。 最恐のリスクルを見たからだ。

心抉る怪談である。

「逝ったか」

悪魔は見届けると……なんと、屍を食らった。

スカベンジャーの極意か常識か。

だがお前には血も涙もない。 スライムだし当然かも知れないが
悪魔だやはり。

倫理観に個人差のあるクラフターだが、この場にいる者は皆引い
た。

「さようならシズさん……うん？」

例えリスポーンするとしてもだ。

ベッドを見る。 健康体となったシズが横たわる。

「あ、あれ……俺、ちゃんと食ったよな？」

『告。 確かにシズエ・イザワは取り込まれました』

また死なせはしない。

リムルとの間に割って入るクラフター。

少しはマシだろう。

「……あれ、私……あの世、じゃないよね」

運命を水色の悪魔に決めさせてたまるか。

「え、ええ!?! ええええええええ!!?」

悪魔の雄叫びを無視して、シズを見た。
困惑していた。

「え、えと……おはよう?」

おはよう。

そう言っている気がしたので返事を返す。

「貴方達の言葉……何となくだけど分かる。分かるよ。貴方達が私を、死なせなかったの?」

リスポーンは初めてらしい。

困惑するのも無理はない。全ロストするし。
だけど心配は要らないと伝える。

「まだ受け入れきれないけど……でも、私は……この世界が」

好きにする。我々が。

「え……?」

嫌でも好きにする。これから好きになる。
それを教える。

「そっか……こんな時、どんな顔して良いのか分からないの。初め

「だから」

笑えば良いと思うよ。

クラフターは笑って教えた。

「取り敢えず、その……服、着ようか？」

悪魔がめげずに囁く。 シズは赤面した。

新たな日の出。

15・生死と世界

「裸の女の子!？」

喧しい。村人トリオは相変わらずだ。

無理もないが。

シズは全裸だし、シズに擬態したリムルは見慣れない筈故。

「リムル様、そのお姿は……」

「えっ!? 旦那でやすか!？」

水色の頭髮、背丈の低さを除けば見事シズに擬態している。服無しまで再現している。服無

心境は同様だ。何故服はリスポーンしないのか。

リムルの擬態は見慣れたが、新たな疑問が浮上する。

「……うう」

シズは赤面し、薄布に包まった。

分かる。恥辱を受けているのだから。

水玉悪魔に服無しリスポーンを直喩されている。屑め。常識

は敵だ。外れた者に振り翳す者は心を貧相にしている。

その点、過ぎれば人道すら外れる。

悔い改めろ。人思いに一刀両断の刑に処す。

「意味が分かんねえ!」

「同じく! シズさんにナニしたの!？」

「擬態。食わずして出来た能力でしたか」

「食べた? イフリートみたいに!？」

「それにしてもシズさんは、ちゃんと……」

「お、落ち着けお前ら……ありのままを話そう……」

リムルがスライム形態に戻った。

他人を貶し満足か。それにしても狼狽している。他者への愚

行を咎められたか。

クラフターは頷いた。

そうだ。そうしなさい。過ちを正せる者は少ない。持つべ

きは心の友だ。

「……シズさんが生き返った？」

「笑えない冗談は嫌いよ」

「真実を知りたいでやす」

「リムル様。命は軽くありませんぞ」

「いやマジだって！」

前考撤回。癩に触る。

反省なく弁解。畜生。斬り捨て御免である。

剣を出そうとしたが、静止する様にシズが発声した。

「あ、あの……リムルは嘘を言ってない……と思う」

か細く庇うシズ。強い。

悪魔を擁護とは。

内心、神格化している気がする。

「私もまだ信じられないけど……確実に死んだよ」

「シズ殿……しかし……」

シズ、リスポーン説明中。

訂正する程間違っていない。頷く事で司会した。

「この人達もね、死ぬとベッドで目醒めるんだって」

「え!? 分かるの!？」

「何となくだけどね。 伝わってくるの」

「……不老不死……いや死ぬのか？」

「そんな馬鹿な……」

皆して見てくる。 止めて欲しい。

クラフターは首を横に振った。

リスポーンは何らかの失敗を意味するからだ。

シズのようにリススキルされる事案もあるが、事故死の方が多い。 そ

れらは反省すべき点だ。

摩天楼建設中の落下死、直下掘りからのマグマダイブ。

迫る絶望は何度も味わう気が起きない。

次回以降、再発防止に努めて下さい。

皆様へのお願いです。

「……えーと……死ぬのは良くない事だって」

「そりやそうだ」

「……死への逃避が無い？」

「常人なら発狂モノだろうな」

「普通じゃないとは思っていたが、まさかここまでとは……」

そう。 生と死だ。

諸君、永遠の主題に悩め。 安易な行動を慎む事に繋がる重要思考だ。

特にリムルに望む。

良く思考して欲しい。 死者のみならず生者をも愚弄するのは非道だ。

例えリスポーン出来ても出来なくても。

体力無限でも満腹でも空を飛べても。

力を振り翳しても良いが、後悔せぬ事だ。過ちに気付いた時、永遠に後悔する事になる。経歴は絶対に消せない。

あ、でも荒らしに出逢うなら容赦はしなくて良いです。

「……大賢者」

『シズエ・イザワは確実に取り込みました。ですが現存している個体は同一個体です』

「……魂は逝かず、肉体が再生して復活？」

『詳細情報不明。該当例無……』

「大賢者でも分からない……」

『しかしイフリートの剥離に成功……スキル獲得……現存するシズエ・イザワの精神摩耗……体力……正常回復……寿命……記憶……外観相当……情報不明量多数……』

「……おーけー。もう良い分かった。だからバグるな頼む」

目眩く創造の世界。

シズに楽しんで貰う為。 皆の為。 我々の為。

以心伝心の域に到達出来ずとも雑に心が通えた今、全てを楽しみ生きたく思う。

願わくば、明るく歩んで欲しい。

この世界も良いものだ。

「取り敢えず服、着ましようか」

「ッ！」

「私が見ます。 ちょっと男子は出てってねえ」

「……話は後だな」

改めてようこそ。

今日から君もマインクラフターだ。

16. ピッグマンと畑

「何でも良い……食いたい……」

日が有頂天に昇る頃。

砂岩地帯を見つけたクラフターだったが、同時にゾンビピッグマンを見つけた。

正確にはゾンビではないし、金剣も無い。デカいし肥満に見える。

他には見当たらない。何か。ネザーゲートの類からの逸れ者か。

「……人間、か？」

倒れている。空腹らしい。瀕死だ。

モンスターも腹は減るのか。あいや豚か？
取り敢えずベイクドポテトを与える。

効率の良い食糧と言えばコレに限る。しかし知識の中に住まう豚通りなら小麦だろうか。

「……ッ！」

食った。

スイカを与えた。食った。

パンを与えた。食った。

腐肉を与えた。食った。

この調子なら何でも食いそうだ。

ふと拠点の水色玉悪魔が脳裏に浮かび、身震いした。

シズは無事だろうか。あの悪魔にリスキルされてなければ良いのだが……。

「……すまない。 恩に着る」

落ち着くとハアンと立ち上がる。

立つ。 やはりデカイ。 アイアンゴーレム級か、それに準じる。

攻撃方法は両腕万歳の高い高い攻撃なのか。 ならば防具なしで
近寄りたくない相手となる。

「飢える民の為に森に入り、少しばかりの恵みを……人間よ、そこから
来たのか？」

しかし……砂岩しかないのかなあ。

クラフターはピッグマンを他所にして、周囲を見渡した。

別クラフターに先を越されたのだろうか。

砂漠バイオームは表面こそ多量の砂であるが、下層はこの様に砂岩
になっている。

かつて、ここの上は砂に覆われていたのかも知れない。

ここまでスーパーフラット級にあるのも珍しいが。

「……言葉が通じないのか。 礼をしたいが、先を急ぐ」

そうだ。

ピラミッドはどうした。 解体されたか。 ならばチェストの中

身も掠奪されたか。

悔しい。 だが落下したままの感圧板を踏み抜いてからのTNT
爆発に巻き込まれる事はあるまい。

ちゃんと解体しているなら、罫をも資源としている筈だからだ。

うん。 そうだ。 ポジティブにいこう。

「……しかし、人間達は何をしている。 ここに何かあるのか？」

ピラミッドだけではない。

砂は資源だ。砂漠は宝の山なのだ。

砂は焼く事でガラスが作れる。建材として当然使うし、ポーションの瓶作りにも使う。

透明度の高さを純粋に生かした建築にも使える。

染色すれば、見て楽しいイルミネーションにも使えたりと発想次第で幅が広い。

あればぜひ回収したかった。無念だ。

クラフターはその気になれば、バイオーム丸ごとを手中に収めてしまう。文字通りに。

まあ、砂岩を回収すれば良いや。

砂岩もまた建材として欲しい。

加工すれば様々な模様を生み出せる。色こそ偏るが、それこそ腕の見せ所。

建築狂いであるクラフターは、直ぐに考えを新たにした。

そうだ！

いつそ此処に街を造ってしまおう！

「……松明？　儀式か？」

取り敢えず松明を撒くクラフター。

もうこれは癖だった。湧き潰しとは昼間だろうが行うべき行為なのだ。

「……こんな所で畑？　いや、そんな事よりこの速度は……幻覚を

見ているのか!？」

鉄鍬を持つ。

同志が原木で四角に囲い、土を綺麗に充填していく。中央を水路とし水を流す。

すかさず鍬を片手に耕しまくり、種芋を撒く。

骨粉を撒き散らして急速な成長を促し、種芋を増やしては畑を拡張していく。

「何という事だ……この速度で食糧が量産されている……！」

ハアンハアン煩い。

見ればさっきのピッグマンが凝視していた。

時々、目を擦っている。砂でも入ったか。砂は無いのに。

「た、頼む人間よ！　どうか我々の為に食糧を分けてはくれないだろうか!？」

何やら平伏され要請された。

畑を指さす。まだ食い足りないのか。

マルチクラフターは嘆息した。

どこぞの水色玉とは違い、偉いとも思う。

何故か。礼儀があつた為だ。

あの悪食悪魔も何でも食うわで、際限無く思えるが、相手の都合に構わない所がある。

少しはピッグマンを見習って欲しい。

そう思いつつ、ジャガイモをスタック単位で与えようとしたら乱入者がやってきた。

白い帽子、変な仮面を被る。鼻が出ている。

ウィツチか？

なら危険だ。悪性のポーションを投げつけられる前に仕留めねばならない。

クラフターは剣を構えた。左手には牛乳バケツを所持する。状態異常を受けたら即コレだと決めている。

「貴様らあ！　ソイツはな、オークロード、いやオークデザイナーの素質がある奴だぞ！　何を勝手な真似をしてくれる!？」　横取

りする気か、人間の癖に！」

攻撃はしてこないが喚かれた。

意味不明だし、礼儀がなっていない。

コイツもジャガイモが欲しいのだろうか。

与えてみた。

食べるならそうだろう、とクラフターは思った。

17. ウイツチモドキとスプラツシユ

「は？ ジャガイモ？ いるか！」

弾かれた。 ジャガイモが転がる。

無作法振りは水玉悪魔より上である。

「直接手を出すのを禁じられてなければ貴様らなぞ……！」

「誰かは存じないが、粗末にはいけない」

ピッグマンに拾われるジャガイモ。

そうだ。 落とした物は拾ってでも食べなさい。

有り余る食糧があるからといって無駄にしてはならない。

このピッグマンは見た目に反して弁えている。 実に好感が持てた。

「貴様も貴様だぞ！ 人間如きに……！」

「一族郎党、飢餓に喘いでいる。一刻も惜しい……恩人達よ失礼した。 いずれ礼をする」

かと思えば踵を返すピッグマン。

ジャガイモを抱えて何処へ行くのか。 水色玉を追尾した時の様に、その先に集落があるのか。

「……そうだ、名をつけてやろう！ このゲルミュツド様が……」

「有難いが、飢えない事が先決なのだ……」

「おい待て！ これでは魔王誕生計画に支障が……くっ、他を当たるか？ いや、あれ程の逸材は中々いない……」

挙動不審なウイツチモドキだ。

まあ良いや。 追跡しよう。 新たな集落がありそうで楽しみだ。

「……人間ども！ これ以上邪魔をするな！」

火の玉が飛んできた。

避ける。 色違いの火だった。

火に着色したとでもいうのか。 その発想は無かった。 さも花

火。

今度試すか。 シズが喜ぶと良いなあ。 無謀か。 やっぱ花火

だ。

デイスペンサーとRS回路を組まなければ。

「手を出すなどは言われているが……なに、人間の2匹や3匹、潰すのは問題あるまい」

敵対している。

明らかに敵意を向けているぞ。 アレ。

どこで間違えたのか。 元より悪印象なウィッチモドキだ。

殺すのに躊躇は無いが、原因は知りたい。 直接手は出してないのに。

……手ではなく、ジャガイモを与えたのがマズかったか？

「二度と邪魔立てしないと誓うなら、この辺にしといてやる……は？」

剣から林檎を構えた。 これ見よがしに食ってみせる。

どうだ。 色鮮やかな赤である。 好意的な反応を示せば正解だろう。

「舐め腐りやがって！ よほど死にたいらしいな！」

火の玉が飛んできた。 避けた。

駄目か。 金林檎なら良かったか。 村人ゾンビならそれで効果があるし。

いや、相手はウィッチモドキだ。 ポーションを投げつければ良いかも知れない。

思いついたらやるべきだろう。

スケルトンにクリーパーを射抜かせる事でレコードが手に入る様に、何が条件か分からないのだから。

「デスマーチダンスッ！」

弾幕を張られた。 丸石で防壁を作る。

こいつもブレイズみたいな事をする。 が、シズ程では無い。

火の玉は壁に阻まれた。 丸石で十分か。

「一瞬で石の壁を!？」

こうしていると、しみじみ思う。

ネザーだ。 あの地での、特に広所に展開する防壁は丸石と決めている。

普段は撤去が容易な土だが、強度に不安があるのだ。

土壁はガストに破壊されて余りある。 特にネザーゲートは丸石で囲む。

被弾を許すと帰還が困難になる故に。

「おのれ! この俺が人間如きに……」

回想の果て、剣を構え直す。

左手は毒のスプラッシュポーションに持ち替える。

実験がてら殺害だ。 敵だし斬り捨てる。 心境は揺るがない。

投げ付ける。 もろ当たる。 スケルトンみたいに間合い取りをしないからだ。

「ぐわあああッ!!?」

脆い。地面にのたうつウイツチモドキ。
アツサリしている。歯応えが無い。

「……馬鹿な……こんな……ところ、で……」

結局動かなくなった。こんなものか。

ドロップ品は無い。しけてる。

クラフターは溜息しつつ、周囲を見渡す。

ピッグマンモドキを探しているのだ。

ところが見当たらない。戦闘に夢中で見失った。

百害あって一利なし。ウイツチは嫌いだ。

いや。元の世界より、と前置きする。ドロップ無いし。

18. シズとクラフター

ポテト騒動中の同志を露知らず、拠点は今日も賑やかだ。

「シズさん！　ありがとうございます！」

別れ際、村人3人はシズにお辞儀した。

そうだ。マルチでは礼儀を弁えなさい。　学び実行の姿勢にクラフターは頷いた。

「みんな……」

「俺、シズさんに心配されないリーダーになります！」

「共に旅した事、一生の宝にしやす！」

「シズさんの事、お姉ちゃんみたいだっと思ってました！」

此方にもお辞儀してきた。　良いぞ。

師と仰がなくて良いが、施された親切への礼儀……忘れてはならない。

「貴方達もありがとうございます！　　お陰でシズさんに挨拶が出来ました！」

「得体が知れないが、あんたらは善人だ」

「安易な礼で申し訳ないですが、これだけは言わせて欲しく……本当にありがとうございます！」

良し。　餞別を渡そう。

上機嫌のクラフターは部屋の角、作業台へ向かう。

鉄インゴットと少々の棒を持ち寄った。

「お、お前ら……今度はナニ造る気だ？」

鉄装備の贈与だ。

村人は装備がボロボロだ。冒険者でもあるクラフターは危険と判断した。

ある意味道具類を大切に使用する貧乏性を否定はしない。

だが耐久の擦り減った装備のままの冒険は死亡率の上昇を招く。どこで破損紛失するやも知れないからだ。

金床で修理しても良いが。破損品同士を組み合わせたり、エンチャントが関係無いなら新規制作が早い。

出来た。 渡す。 強く……生きる……ッ！

「鎧に剣……鉄装備一式？」

「ありがとう……」

「ツルハシとスコップまで渡されたですが」

「……あー……ウチの鍛冶師、カイジン達に調整して貰え。案内するよ」

「……と、取り敢えずその足でギルマスに報告する」

「悪い様には報告しないから、安心して」

「世話になったでやす」

「シズさん元気で！ また会いましょう！」

村人が旅立った。 祝え。 新たな門出だ。

リムルは送り出した。 今日の空は青く、いつもより広い。

「……うん、貴方達の優しさは伝わるよ」

シズに苦笑された。 だが伝わったなら良い。

さて。 そんなシズに教えたい事は山程ある。

この世界を好きになる為の知識と創造は無量大の可能性を秘めている。

「うん。宜しくね、クラフターさん」

宜しく頼まれた。

その前に、シズよ。教えて欲しい。

「どうしたの？」

エリトラホバリングはどうやる。

「……え、えりとらっ？」

深淵の終焉世界（ジ・エンド）を知らぬなら仕方ない。

じゃあ、ブレイズに変身して。

「ぶれいず？」

紅蓮地獄（ネザー）も知らぬなら仕方ない。

だけど炎を吐けるか。

「ごめんね。もうイフリートの力は無いの」

いみふーと？

それまた意味不明な名前だが、出来ないものは仕方ない。

クラフターは万能では無い。だからこそ出来る事と出来ない事の分別は必要だ。

そうする事で、置かれた状況下でどこまでが自力で対処可能で、どこからが運に頼るかの線引きが出来る。

それが出来ない、いざ幸運に恵まれた時に逃してしまう。

些細な例なら追跡している相手がいるのに余所見して見失うとか。遠征した同志はその節がある。反面教師だ。

「そうだね。 戦いの中でも、大切だったよ」

なら話は早い。

クラフターは鉄製ツルハシとスコップをシズに渡した。 松明も渡す。

さあここ掘れシズ。 習うより慣れるんだ。

「え、えーと……剣術の流れになるんじゃないんだ……」

剣に拘り過ぎると視野が狭くなるぞ。

それにとクラフター。 剣よりツルハシとスコップと斧だ。 保

持時間はそつちが長い。

剣より持たないのは鍬だ。 それもクラフターによるが。

「でも、なんで掘るの？」

ブランチマイニングを教える。

効率の良い鉱石採掘手段だ。

「ぶら……」

見せた方が早い。

クラフターは後に続けと掘り始めた。

先ずは階段状に掘り下げていく。 松明を忘れない。

岩盤から約10マス程の高さまで掘り下げるのが好ましいが、今回は浅くやる。

目標深度到達後、今度は水平に掘る。 これを主通路とする。

次に主通路の左右に副通路を掘る。 ギリギリ通行可能面積の縦

2、横1で構わない。

掘り終わったら、そこから2、3ブロックの間隔を置いて再度掘り進める。 これを繰り返す。

これが大雑把なブラマイ方法だ。クラフターによつては様々な方法がある。慣れてきたらシズの好きな様に掘ると良い。

「え、えーとね？ 教えてくれるのは嬉しいんだけど……私には早い、かな？」

そうか。それもそうだ。

新人への配慮が不足していた。反省する。

先ず木こりから。クラフターは斧を渡した。

「そうじゃない、かな……」

苦笑された。クラフターも笑みを返す。

そうだね。そういう事だよ、と。

他の地、集落観光。

19. 今後と喧嘩

同志、他所の集落にて酷似した問題を勃発中なれど露知らず。クラフターはシズの歓待を続行。 剣より強し事創造の如し。今は木こりを教えている。 世界を相手取る原初を教えずして何が創造主か。

「……ナニしてんだシズさん」

リムルが横槍を入れてきた。 スライム形態だった。 擬態していたら殴っている。

「え、えーと……木こり?」

「それは分かるんだけどさ。 何で木こり?」

「皆が言うには、木こりは始まりなんだって。 だからやった方が良
いって」

「シズさんが毒されていく……」

「最初は斧じゃなくて、素手で伐採するらしいけど」

「いやいやいや。 流石にソレは冗談だろう、枝は折れても大木は
……マジかよ」

素手で伐採して見せた。 冗談じゃないぞと。

脱力したハアンを上げるリムル。

理解出来ないのか。 なら創造の世界と向き合って見ろ。 さす
れば分かる。

否。 分かっている筈だ。 かの格子の部屋で片鱗を見た。 剣
の時もだ。 リムルも創造主の筈だ。

……悪食水玉悪魔だとしても。

「と、取り敢えず、色々と聞きたい事があるんだ。良いかな？」
「……みんな、ちよつと行つてくるね」

悪魔に呼び出されたらしい。

またシズを食う気か。心配だ。クラフターは影より見守る事にした。

事あればノックバックで吹き飛ばす。今度は拳じゃない。剣。足して弓矢。既に引き絞る。

「シズさんが旅をしていた目的は……」

「……私を召喚した魔王に会う為」

会話が聞こえてくる。

繊細な事は分からない。だけど悲しげに、だけどハッキリした口調だ。

「復讐？」

「ううん。教え子達の為……でも、一言言いたい事はあつたかな」

「そつか……当てがないんだよな。教え子達の所へ戻らないのか？」

「どうしても教えて貰いたい事があるから。聞くまで帰れない」

シズと悪魔の対談が続く。

強い。育て甲斐がある。将来は天空城を築くかも知れぬ。

「……召喚された子達、短命なのか。シズさんは精霊のお陰で今まで生きてきたんだよな。子ども達には？」

「……ううん。宿っていない……」

「なら宿らせれば、或いは……？」

宿？

シズは宿を建設したいのか？

そうか。ならそうしなさい。

目標を持つ事は良い事だ。

放浪と違い、明確な行動を取れる。達成感も一入だ。

「大体の指標は決まった。先ず教え子達に会いに行くかな」

「……身体を慣れさせてから街を出たい。イフリートもいなくなつたから……」

「……そうだな、慌てる事はない。でもねシズさん……アイツらに染まるなよ頼むから!」

建材は何が好きか……取り敢えずベッドは必要だ。

何処かに羊はいないものか。蜘蛛の糸に頼るのは非効率に過ぎる。

「大変っす!?!」

ハアンが響く。

見やれば小柄な村人に跨られた狼が駆けてきた。

危うく矢を放つところだ。チキンジョッキーを彷彿させる。

間合いを詰められて良い気はしない。精神的に悪い。

「どうしたゴブタ」

「オーガの里から苦情が来てるっすよ!」

「……お前ら……またナニかしたな!?!」

意味深に見られた。武器を引っ込める。

クラフターは慌てた。

誤解だとしても武器を向けていた事を咎められた気がしたのだ。互いに罪を押し付けあう。漏れなく喧嘩になる。

宜しい。ならば戦争（PVP）です。

「急に仲間同士で殴り合うなよ!？」

「……現場でもそうなってるらしいっす」

「……駄目だよ、仲良くしなきゃ」

シズに止められた。強い。聖女か。

その通り賛成だ。マルチだし仲良くしよう。

クラフターは今一度、反省した。

「でもなんでゴブタが知ってるんだ。巡回ルートに他の集落あったか？」

「直接言いに来られたからっすよ」

「……相当怒ってそうだな」

リムルと駆け出していくジョッキー。

行ったか。やっと落ち着いた。

「私達も行こう。お友達が大変みたいだよ?」

シズまで駆け出した。強い。

問題に自ら首を突っ込むとは。

ふと、初めて仲間を得た記憶を辿る。

祝われ、溢れんばかりの支援物資を渡し合い、腰を激振した日を。

大切な事を再度教えられたな、シズ達に。

クラフターも駆け出した。

創造とは形のみに限らない。全ての喜劇と奇劇、希望を生み出すのが創造主だ。

20. ちゃんばらと集団

「ええい！　　邪悪な人間共め！」

集落を見つけたクラフター。

村人に角が生えているのはまあ……今更多様性に驚きはしない。代わりに、その地の文化、所謂和風は大変気に入った。

それ故、街を闊歩し観光。特に大きな家に興味を示し、宅訪問を繰り返したところ。

「無礼千万！」

「覚悟なされよ！」

「御免！」

帯刀する者達に襲われた。　何故だ。

「異文化とはいえ人の家に土足で踏み込み、あまつさえ物品を漁るときた」

「ただの盗人では無さそうだが」

「頭領の元へ行くとは」

「急速に出来た街、その暗部であろう」

「前に来た奴の仲間であるか？」

「笑止。　また追い返し……否、斬り捨てる」

明らかに敵対している。　剣先向けられてるし。　振り下ろされもした。

訪れた際も歓迎した雰囲気ではなかったが、少々過激に過ぎる。

マルチでは仲良くしなきゃ駄目だよ。　クラフターは首を横に振った。

「くっ！　　舐めておる！」

「生半可な斬撃は回避されるか」

……しかし興味深い剣だ。湾曲している。斬新だ。貫えな
いかな？

交渉すれば貫えるだろうか。いや駄目か。敵対している。

「姫、若……お下がり下さい」

殺すか？

さすればドロップしそうだし。

クラフターは思い立ち、何らか手に持つ。

とうかせざるを得ない。囲い込まれた。引くも押すも出来
ない状況だ。特に白い奴は強そうだ。

不動の構え、動かざる事山の如し。あれはトロツコに乗りそうに
ない。

「冗談ではない。次期頭領としての誇りがある。生恥をさらすの
は御免被る」

赤い奴も強そうだ。残心の構えをしている時点でそうである。

その意気込みや良し。

ただクラフターは説教したい。

囲い込んだくらいで追い込んだ気になるな。未熟である。特
に創造主に対しては土壁より意味を成さない。

武器の性能と戦士の数が戦力の徹底的差でない事を教えてやる。

「我等に囲まれ、最早逃げ場はあるまい」

「覚悟し……なんだと!？」

斬り掛かられた。上と下に逃げた。

ある者は土を積んで上に。ある者はスコップで地面に潜る。

なんともガラ空きである。 囲い込むならフェンスを使用するのを推奨する。 それも家畜相手の話止まりだが。

「たがが土柱如き……何故根元を両断、いや破壊されても尚空中に留まれる!?!」

このまま水バケツをひっくり返す。 散るが良い。 溶岩バケツを使わないのは情けだ。 後ドロップ品への配慮。

「水如き……何故水流が生まれる!?!」
「流される!?!」

面倒事達を水に流す。

隙をつき、クラフターはエンダーパールで逃走した。

白兵距離、集団による乱打戦に持ち込まれるなんて珍しくも何とも無い。

対応の幅なんて様々に経験している。

特に仲間内での戦闘は此の比じゃない。 クラフターが本気で戦闘を仕掛けるなら、他にもやりようはある。

集落なら固定目標だ。 座標計算してTNTキャノン砲撃しても良い。 地下道を掘ってTNTを大量に埋設して起爆しても良い。

装備だってダイヤモンドフルエンチャント装備は当然として、上位金林檎やポーション各種を用いる。

チーム戦なら弓矢組と突撃の剣士組で分担し攻守を成り立たせるクラフトも並行して行われる。

特にこれは明らかに一方的な殺しだ。 此方は危害を加えていないのに。 改造もしていない。 建造物に侵入したりチェストの身を確認したくらいだ。 盗みはしてない。

対して殺し。 これ重罪である。 対話も無く無遠慮に無作法、失礼というレベルではない。 天秤に掛けるまでもない。

怒って良い。 正当防衛だ。 遠慮の必要はない。 何かを使っ

てはならない規則は無い。

要略。 武器に頼り過ぎない事。

「げほっ……くそっ、逃したか!」

「不覚。 次はこうはいかぬぞ」

「いつそ、かの街に辻斬りをしに行くか」

300くらいいたが、冷静な者とだけ関わりたいものだ。

血気盛んな者は困る。 街の中央でクリーパー被害の如く迷惑。

「……お兄様、魔素もですが……彼等からは悪意を感じませんでした。礼儀作法を弁えないのみでは無いでしょうか」

「何を言う。 ああも勝手に蹂躪されて黙ってられるか」

「……例の街から来ているのですよね。 その責任者に問いてはどうでしょう?」

「……その責任者達が来た様です。 お通しします」

「……そうしよう。 少し、熱に浮かれた様だ」

まあでも……楽しかった。

クラフターは戦士でもある。 その命の語り合いの中、生きているという実感がある。

悪くない緊張感を味わった。 また一戦交えるのも悪くない。

それに彼等の事も知りたい。 また行こうかな。

互いに迷惑だとしても、そう思えたのであった。

21. 湿地と舞

「報告します！ シス湖南方にて人間の集団を確認！ 我等リザードマンの領域への侵攻と思われれます！」

行くぞ。

このまま行けば湿地バイオームに辿り着き、キノコ狩りからのシチューにありつける。

クラフターは息を荒くし侵攻した。空腹の所為で走れず鈍い。だが確実に前進している。

「人間だと？ それで数はどのくらいなのだ？」
「……………」

開拓と冒険に舞い上がり、食糧管理を怠ったのが原因だと判断する。

非常食の腐肉を喰らい、命を繋ぐ。

駄目だ。腹が減る。満腹まで食えば腐肉もコスパが良いのだが。

が、中途半端にしか手元になく悪戯に空腹異常を引き起こす。飢餓感に喘ぎながら、それでも湿地帯を目指した。

「どうした？ 人間共の数はと聞いている」

「それが……非武装の人間およそ——」

他にもヒスイラン、スイレンの葉、ツタ、粘土が手に入る。

どれも魅力的だ。特に粘土は焼けばレンガが手に入る。

資源を搾取だ。無くなっちゃうまで??

「たががそれ如きで……」

「で、ですが！　松明を立てまくりながらツルハシとスコップを振り回し街を作り続け、その破竹の勢いや凄まじく！」

「は!？」

「なんだそれは!？　信じられん！」

「ですから魔力感知と熱源探知で何度も確認したのですが……間違いありませんでした」

それでも湧き潰しは怠らない。

根性より習慣が勝る。　餓死しなくても瀕死に変わりない。　いつ小突かれて死ぬ事か。

その時、戻ってくる際の目印にもなる。　踏破した境界の目安でもある。

「有り得ん……!！」

「そもそも何しに人間が!？」

「途方も無い資材や労力をどう賄っているのだ！」

「その人数で街を作りつつ侵攻？　理解が追いつかぬ……」

湿地は歩き難い。　水場が多いからだ。　埋め立てても良いが、風

雅がある。　景観は維持したい。

湿る土。　生える木々。　垂れるツタ。　水面に揺れるスイレン

の葉。　赤茶キノコ。

その中で建築を忘れ、のんびり釣糸を垂らすのも良い。　思えば、資源採掘を無理しなくて済む。

妙な使命感から、手段が目的になっていた様だ。

マルチでは資源の仁義なき争奪戦の様相を醸し出すから……。

「……噂ですが、オーガの里に人間が殴り込み蹂躪したとか」

「なんだって!？」

「与太話と聞いていたのですが、妙な力行使するなら或いは……」

……しかし釣りか。最近していない。
落ち着いたらやろう。 偶には魚食も良い。

「人間共が湿地帯に侵入！」

おや。 いつの間にか着いた。

よし。 取り敢えずキノコ狩りだひゃっほい。

「松明を立てつつナニかを採取してます、キノコの様です！」

「……キノコ？」

魚は後だ。 そも釣竿が無い。

今は飯だ。 木材を3個消費しボウルを作り、採取したキノコ2個と組み合わせる。

出来たキノコシチューを有無を言わずに飲み干した。 美味しい。
腹持ちも良い。

「な……ナニをしている？」

「食ってる……キノコを食っている……」

「いや違うぞ。 シチューにしているんだ」

「どうやってだ!？」

やっと落ち着いた。

幾つかは栽培用で持ち帰るべくインベントリに入れる。

1個あれば、適当に植えても放置しとけば増えるキノコ。 嫌いで
は無い。

「馬鹿な。 キノコ狩りをしに遥々来た訳じゃあるまい」

「良く観察するんだ」

スイレンの葉を採取する。

畑の用水路を塞ぐのに使えるし、架橋工事にも活躍するから好きだ。

後ツタか。鋏を振り回し採取する。梯子代わりにもなるが、古壁風を演出したい時にも使えるから好き。勝手に伸びるし。

「植物を刈っています！」

「湿地の植物学の研究か？」

「ええい！　意味が分からん！　もう直接問い質してやるわ！」

「ガビル様ー!？」

この辺で良いや。

座標は知り得た。インベントリに限度がある。撤退してキノコ栽培しなきゃ。

と、踵を返すとなんかいた。村人にドラゴン要素を混ぜた見た目をしている。

「おい人間共！　ここは神聖なる我等リザードマンの領域であるぞ！　直ぐに立ち去れい！」

「ガビル様、格好良いー！」

「然り。至極当然」

「よっ！　次期首領！」

「流石名持ち！」

「あつそれガビル様！　それガビル様！」

なんだこいつら。

クラフターの前に踊り出て、踊り出す。

バシヤバシヤと水が跳ねる。

なるほど面白い。これは彼等なりの挨拶なのだと思切った。クラフターは頷くと披露する。応えねば無作法というもの。

創造主も仲間との挨拶や歓喜を表す時、体を激しく動かす。それをやる。

「腰が激しく動いている!?!」

「腕と首もだ!」

「珍妙。実に奇天烈」

「ふっ!　　舞いで勝負しよう?　　我等が領域の湿地で負ける筈

が無い!　　挑んだ事、後悔するが良い!　　皆の者、行くぞ!」

暫く歓喜の舞をするクラフターとドラゴン風村人。

そうだ。　　言葉が通じなくても文化が違っても表現は出来る。

通じ合う。

何故なら、それが世界の全てでは無いから。

新たな仲間が出来た事を確信しつつ、クラフターは異文化交流を楽しんだ。

「……ナニをしとるんだ、息子は」

「と、取り敢えず悪い人間達ではなさそうですね」

2.2. 方々と地下

「オーガだけじゃなく、リザードマンにオークの集落……次はどこからクレームが来るんだ？」

日が暮れ逢魔時。

帯刀集落を後にした時、日は沈む頃だった。

ハアンとしみじみ鳴くリムル。スライムとて魔物であるか。

或いは湧き潰しへの懸念か。

「シズさん、コイツら何とか出来ない？」

「考え方が違うみたいで……」

かと思えばシズも鳴く。

黄昏時、綺麗な声が響く……その中で見上げた空。沈み行く淡い光が闇との境界を生み出していた。美しく、儂い刹那の輝き。

直後に観られるは満天の星空だ。対する地上は魑魅魍魎が跋扈する危険な闇が広がった。

日没の幽玄さ。光と闇の演出。

毎日決まって繰り返し、クラフターがどんなに松明をばら撒こうとも完全に抗う術はない摂理。

だがそれも悪くないと思える。特にこの世界に対しては。

リムル達の様な奇妙なモンスターと会えたのだから。闇が完全に打ち払われたなら、シズとの出会いも無かったかも知れない。

不満なのはクリーパーとかエンダーマンとかスポーンしない事だ。

世界が違えばモンスターも違うにせよ、火薬とパールが補給出来ないのは痛い。

「堂々し過ぎるんだよな」

「悪意は無いみたいだから……」

「無かつたら作って良い理由にならないよ」

「ま、まあでも……オークの皆は喜んでくれていたみたいだよ?」

「芋を無償で提供したんだろ?　しかも干上がった土地に街を作って、その住居まで貸与して」

資材を抱え、村人にまみれて、クラフターはつらつらと思う。

建て続けたい。俗世に自身がいた証を残し続けたい。

資材不十分の中での建築はしばしば妥協を必要とするし、質の悪い作品に対する際限なき増改築の日々を招くとしても、それもまた楽しい日々。

クラフターの本懐に帰属しているとも言える。人生とは手に汗握る興奮の連続だ。

「リザードマンも喜んでたよ?」

「変な踊りでね。湿地帯への侵入は咎められたけどな」

「……でも各部族の代表団が勉学の為に街に来たたって」

「……ナニを学べるって?」

「建築技術とか戦闘方法とか料理とか」

「特殊過ぎて無理じゃね?」

そうだ。ネザーに行こう。

火打石も黒曜石も既にあるのだから、躊躇する理由はない。

長距離移動にも使えるし、素材採掘もしたい。なんなら元の世界へ帰れる手段にもなるかも知れない。

そうなれば貯めていた素材を此方へ移管出来る。此方では中々手に入らない物品も数多い。

「シズさんが止められないんじゃないか、いつそ力尽くで思ったけど駄目か」

「危害を加えるのは反対かな」

「死んでもベッドから復活するんだろ。ベッドを破壊すれば或いは

？」

「……リムル」

「冗談さ。ただコイツらが……ヤバい事をした時に、俺の責任になるだろ。今は平和でもな」

「あの人達が嫌いななの？」

「いや……そうだな、嫉妬はしているかも知れない」

そうと決まれば作らねば。

ゲートは安全な場所に隔離して、丸石か何かしらで囲う。

稀にゲートからゾンビピッグマンやらが出て来るので危険なのだ。

逆にこれを利用したトラップタワー類を製作する事も出来なくはないが効率が悪い。

それより懸念事項がある。

ピッグマンは中性だから、攻撃さえしなければ良いが、ちよつかいを出して敵対すると奴等との集団と対峙し大乱闘に巻き込まれてしまう。

マルチにおいては他の者にも被害が波及する。敵対するにも殲

滅させるなど他者への配慮が必要だ。

そうだな。街は発展して土地が無い。地下に作ろう。事故

が起きるにも封じ込める。

ついでだから様々な実験施設を造るか。都市部の地下秘密基地。

浪漫だ。

「アイツらにとって世界は遊び場なのかも知れない。玩具にはなりたく無いもんだ」

「考え過ぎだよ」

「ごめんよシズさん。でも、怖いんだ。時々アイツらが。何考えているのか分からない、アイツらが」

地下を掘る。効率強化ツルハシを振り回し、都市の地下を抉っていく。

地下鉄計画も立てつつ、最深部にゲートと実験場を設ける。地下なら村人に群がられる心配が無い。

念の為にディスプレイやピストン、ワイヤーを用いたトラップを作る。

万が一を見越しての砂利シャッターも作る。

大規模な地下開拓は時間と労力、精神力を削るけど、出来た時の達成感が高い。

確かに得られていく結果はそのまま自信に繋がる。それは飛躍への原動力となる。

「リムル様！ 各部族の代表団が到着しましたぞ！」

「……分かった。案内してやってくれ」

クラフターは今日もツルハシとスコップを振るう。

やりたい事は各々に沢山ある。ほら、地上に集まっていく多種多様な村人もそうだろう。

夢想し実行し創造していく。世界はそれを受け入れる。我等を抱擁してくれる。

残酷で慈悲深い温もりに甘んじ、人々は今日も生きていく。

クラフターよ、大志を抱け。

23. 集合と懇願

「……つまり、コイツらは賤が出来ない無法者と」

摩天楼見下ろすが日常、拠点街のとある部屋。

いつかの帯刀村人、その内赤い奴がハアンと嘆く。

いつの間に来たのか。今は長テーブルを囲う様に様々な村人が座る。

因みにリムルは中央最奥、上座にいる。その隣にシズとクラフターが起立した。

「そうなる。全く意思疎通が出来ない訳じゃないんだが……」

「吾輩とは通じ合えたぞ。熾烈な戦いであった」

「そりゃ踊りの話だろ」

いつかのドラゴン風村人が鳴く。

コイツらに乗ってきた動物が外にいる。馬の様で馬でなく、二足

歩行の動物だ。例によりドラゴンに似る。

ドラゴンにドラゴンが跨るのも奇妙な光景に映った。多少形が違えども。

故に興味も湧く。1匹、いや2匹融通してくれないだろうか。

欲しい。鞍は最悪なんとかする。気に入れば繁殖させて乗ってみたい。

「彼等は、我々に恵みを分け与えてくれた。食糧のみならず住居まで。感謝の念こそすれ、怨みはない」

ピッグマンモドキが鳴く。

唯一、反抗的な目をしているのは帯刀村人だけとなる。

中性にも程度があるらしい。条件が分からず困惑する。同じ

く帯刀すれば良いかも知れない。

「……そちらの人間の娘さん、シズといったな。唯一の通訳と伺うが」

「……ごめんなさい。何となく分かるだけ」

「すまない、無理を聞いた。魔力感知も世界の言葉も通じなさそうな相手だ。 悉く例外なのだろう」

シズが謝っている。

なんだ。クラフトの失敗談か。 良くある話だ。

大抵は時間が解決するから無理しなくて良い。 真面目も過ぎれば損をする。

ベテランとして誤りはある。 ある者は剣を作ろうとしてスコップが仕上がった。

誰にでも間違いはあるからね。 仕方ないね。

大切なのは失敗から学ぶ事だ。 牛からミルクを搾ろうとして、バケツで殴った時を思う。 或いは羊の毛刈りでハサミで殴った時。

「次に各集落の被害報告。 オークは飢饉に喘いでいたというが、これは元からなんだな？」

「うむ。 土地が痩せて食物が一切合切採れなくなった。 その時に助けてくれたのが彼等である。 食べ物をくれ、住処となる新天地を与えてくれた。 無限に湧く不思議な水源があり、痩せる事のない土、急速に育つ穀物で息を吹き返した。 改めて礼を言いたい。 ありがとう」

「ありがとうだって」

シズが通訳する。 そうか。 同志が迷惑を掛けたかと思った。 取り敢えず腰を曲げて会釈する。

「えー……次にガビルだっけ？ そっちは？」

「湿地帯の植物を採取された事、領域手前に街を作られた程度である。親父殿は警戒しておるが、湿地帯にまで何か造ろうとはしてこないな。舞を通じ、親交を深めたお陰であろう」

「……本当にそれが理由か？ シズさん」

「えーと……」

シズに聞かれた。湿地帯に建物を作らないのかと。別に作っても良いのだ。ただ景観を損いたくないのでな。

「……って事だよ」

「なるほど！ 流石は盟友！ 舞ならず我々を気遣う姿勢に感服する！」

「どう好意的に捉えればそうなるんだ。絶対気紛れだよ、俺は知っているんだ」

「え、えーとね？ 礼を言っているよ？」

また礼を申したという。

お辞儀する。これからも仲良くしよう。

「我等オーガだけ邪険にしている様だな」

「さっきも言ったけど、コイツらは自由人で……でも嫌がらせを故意にする連中じゃない。オーガだからとか、差別はしない筈だ」

「私もそう思う。きつと興味があつて色々調べていただけだと思う」

帯刀村人だけ好意的じゃない。

シズ達が説得してくれている。有難い。クラフターとしても、何故怒っているのか分からない。殴った訳でもないのに。

「土足でズカズカ上がられて、はいそうですかとはならない」

「じゃあ話の流れで聞くけどさ、取り立てて被害は及んだのか？」

「……それは……一部が水浸し、家屋の一部に足跡が……」

「ほらな。大した事ないじゃないか。少なくともこの街の惨劇よりかは」

「惨劇……?」

「オーガの代表よ、どうか目溢し願う」

「吾輩からも。恐らく早合点である」

唸り始める帯刀村人。

良いぞ。集中砲火だ。丸め込んでしまえ。あわよくば湾曲

した刀剣をゲットだ。

「……そう、だな。建物を建てられた訳でもないし破壊もない。

盗難被害もなければ傷害もない。だが最低限の礼儀は弁えて欲しい。そう伝えてくれ」

「……って、お願いしてるよ」

礼儀をお願いされた。知らず内、無礼を働いていたそうだ。

謝罪の念を込めて頭を下げる。しかし何が悪いのか。水浸しにした件か。

「……景観を悪くしたり、人のお家に勝手に入っちゃ駄目って事」

そうか。それなら幾許か分かり易い。皆に領いて見せた。

「シズさん、扱いに慣れてきてない?」

「……まだまだ分からないけどね」

元の世界では勝手にお邪魔しようとして、チェストの中身を掠奪しようとする村人もゴーレムも怒らなかつた。忖度は必要ないとした。

郷に入れば郷に従え。あの村はそうだったのだ。

そうだ。詫びに各地にアイアンゴーレムを配置しよう。それ

かスノーマン。

湿地と砂漠には配置出来ないが、他の地で固定砲台にすれば良い。
無限雪製造機に転用出来る。

「……じゃ、そう言う事で。この街に滞在するのは構わないけど、コイツらの創る力は理解出来ないぞ」

「構わない……どちらにせよ、監視と修行の名目で俺達は里から出さ
れている。彼等の動きに追いつく事で力を得よ、との事だ」

「我等もそうだ。だがただで、とは言わない。聞けば自力で建築
する為の労働力、既存に対する設備工事に苦辛しているとか。どう
か我々を労働力として貰いたい。救世主達への、せめての恩返し
だ」

「吾輩からも。活気ある舞を学ぶ事が出来れば、世も明るくなるだ
ろう」

「うん。ガビルは分らんが、各々滞在理由は理解した。じゃこ
れにて会議を……」

その時不思議な事が起きた。

テーブルの中央で刹那的に竜巻が起きたのだ。

「うおっ!?!」

またも我々の様な声を誰か出す。

ハアンより景気が良い様に思える。次からうおおお、と鳴いて
はくれまいか。

「——初めまして。魔物を統べる者、及びその従者たる皆様」

目の前を見やる。凄い。テーブルから村人が生えていくぞ。

クラフターも稀に似た事をするが、コイツもクラフターか。
にしては周囲に植物のツタが揺れている。

ツタ生産場に出来るかも知れない。湿地帯にまで出向かなくて済む。動かれては困るから柵で囲むか。トロツコでも良い。

……シズの視線が辛い。何故その様な目を向ける？

「突然の訪問、相すみません。わたくしはドライアドのトレイニーと申します。どうぞお見知りおき下さい」

「本当に突然だな……でもなんでかな。コイツらの所為か、これくらいじゃ感動も驚きも薄れるのが哀しい……」

「それも致し方ないですね。私も大変驚いております」

「……改めまして、俺はリムルⅡテンペストです。初めましてトレイニーさん。此方が……」

「初めまして。シズと言います」

「シズエⅡイザワですね」

「私の事を知っている？」

「森で起きた事なら大体は把握しております。それに有名ではありませんか」

会話している。敵ではないか。

ならば鋏で周囲をチヨキチヨキしても怒られまい。

……シズよ、だから何故そんな目を向ける？

「は……初めて見ましたぞ」

「そりやそうだ。ドライアド様が最後に姿を表されたのは数十年も前の事」

「なぜ今、この街に……いや、察しはつくが」

「皆に戸惑いがあるな……」

『解。ドライアドは森の最上位の存在であり「トレントの守護者」または「ジユラの大森林の管理者」とも呼ばれます』

「なるほど。社長が直々に視察に来たみたいな感じか。うん、理由に察しがつく」

今度は皆して此方を見た。

なんだというのだ。一斉に見られて良い気はしない。

次にはエンダーマンみたいにレポートでもするのだろうか。

それは嫌だ。視線を逸らした。その点、柵で囲むのも無意味か。

諦めよう。残念だ。

「一応聞きますねトレイニーさん。今日は一体なんのご用向きで……」

「本日はお願いがあつて罷り越しました」

「聞きたくありません」

「聞きなさい」

「アツ、ハイ」

チラリと伺う。今度はリムルが視線を逸らしている。生えてきた植物村人に対して。

分かる。テーブルから生えてくる奴だ。テレポート能力があるのは想像に難しくない。警戒して当然だ。

……待てよ。討伐すればパールが手に入る？

「リムルⅡテンペスト。魔物を統べる者よ……」

「……はい」

「あの者達をどうにかしてください!? ジュラの大森林が白樺の大植林場になってしまいます!？」

今度は泣いて平伏、ナニかを懇願。

ワープしたり頭下げたり忙しい村人である。

一種の舞かも知れない。

なら応えねば無作法というもの。

クラフターは激しく腰を振る。首を回して腕を振る。時に飛

び跳ね、村人に応える。

ドラゴン風村人にはウケたのだ。これでイケると踏んだ。

「ご覧の通りです。無理ダナ」

「松明！　せめて松明の撤去を！」

「何故か引火しませんから大丈夫です」

「では被害拡大を抑えて貰えませんか!？」

「整然と立木が並列する光景は、逆に管理されている感じがして良い
と思います」

「管理者は私です〜ツ!？」

興奮している。　良いぞ。　やはり舞は交流手段のひとつとして
成立するのだ。

クラフターは確信した。

新たな仲間が増えていく事を。

世界は広く、どこまでも楽しめるし仲間が待っている。

新たな出会いを楽しみに、今日も腰振りが止まらない。

24. 雑談と道

「へえー……あんたの剣、ダイヤモンド製かい」

シズと共に街を出歩く度、一々呼び止められて困る。

が、クラフト絡みならと足を止める我々も我々か。今や髭モジヤと妙な親近感を沸かせる村人が剣を褒めそやす。

クフクフと笑みが浮かぶというものだ。クラフトを学ぶとは全ての本質を学ぶ事。分野はどうあれ、その姿勢は褒められて良い。

「刀剣つてのは、硬くしすぎると斬り付ける時にしならず折れちまう。かといって柔らかか過ぎても折れる。そこに刀剣を作る難しさがある」

「んだ。 だけんど、彼等の剣は早々に欠ける様子がねえだ」

「強力な魔法が込められているようだしな、そこに秘密が？」

「創るにしても、どう打ってんのか気になるべな」

エンチャントに息を呑んでいると見た。

ダイヤ剣自体は珍しくないから。 地下を掘り進めていけばいずれ手に入るからだ。

問題なのはエンチャントにある。 質を問えば様々な効力を発揮するソレらだ。

耐久や攻撃力を上げるのは一般として、アンデッド特効か虫特効で分かれるし、屠殺用にしてもドロップ増加を付加する。

間合いを気にするならノックバックを強化しても良い。

剣1本にしたって、クラフターによりけりだ。 正解は無い。

「剣ってどうやって作ってるのか、だって」

エンチャント台を製作して本棚で囲うと答えた。 それは高級施

設を意味する。

クラフターによつてはピストン回路を組んで、本棚の数を変更出来るようにし、弱強エンチャントそれぞれ出来る様になっている。

安易に製作は出来ない。それ故に価値は大きい。

「えんちゃんど？　えーと、そうじゃなくてね……剣そのものの作り方」

ナニ？

シズも剣を持っていただろう。

まあ良いか。クラフターは作業台を置くと作ってみせた。こうするのだと。

「……棒と鉄塊を置いてどうしたんだ。　へ？　一瞬で剣が出来たぞ!？」

「たまげただ……」

試しに鉄剣を製作。　驚かれた。　何故だ。

簡単に出来るのに。　木の棒1本置いて、並列に2個鉄インゴットを置いてハイ完成である。

「火を使わない、打ちもしない!？」

「真似出来ないだな」

「なんとなく分かっていただけだね……」

取り敢えず剣はシズに渡す。　丸腰は良くない。　いくら我々がいるとはいえ、自衛手段はあるべきだ。

「ありがとう……うん、振り易いよ」

「しかし鉄にしても……ここまで純度が高いと錆びもしないんじゃないかないか？」

「ここまで綺麗なのは初めてだ」

「取り敢えず鞘がないから持ち歩けないかな」

「なら俺らが作っておこう」

シズは剣を預けてしまった。なんでも後で受け取るらしい。

クラフターだったらいンベントリに入れるだけなのだが。シズは一杯だったのだろうか。

取り敢えず再度歩き始める。

舗装された道、左右に居並ぶ摩天楼。色彩を得る為の植物や花々が良い形に目を楽しませる。通行人のバリエーションも増えて楽しくなっている。人口は確実に増えた。

だが綻びは無い。松明とグロウストーンの街灯は十分照度を確保している。異常なし。

「あのね」

徐に話しかけられた。

どうしたシズ。

「貴方達のお陰で、いろんな人が助かってると思うんだ。私も一緒にいるだけで楽しいよ？」　驚く事がいっぱい溢れて。　こんな事、今までなかったから」

射幸心か。だがこんなものじゃない。

世界は広大で、常に探究心ある限り無限大の可能性が待っている。

「そうだね。でも、その原動力ってどこから来るの？　ううん、来たのかな。どこまでも真っ直ぐで世界と向き合って楽しんで……苦しい事も打ち払う強さを持っている。貴方達は日本から来たワケじゃないよね」

にほん？

前にも聞いたが、それは何だ。 テツパンの親戚か？

「ふふっ……ううん、国の名前だよ」

くに？　　くにとは？

「分かりやすく言うと地域、かな」

そうか。　ならバイオームもある種の国と言える。　ここもそうだな。

「貴方達の、元の世界にも？」

あつたぞ。　数多の国が。　世界もあつた。

「世界？　　ここみたいな、異世界の事？」

そうだ。　前にも話したが、ネザーにジ・エンドという世界があつた。

ネザーは全体的に紅く灼熱で、マグマの海があり、危険なモンスターが蔓延る世界だ。　要塞もあつた。

時計もコンパスも狂う。　水は瞬時に蒸発する。　ベッドに寝れば爆発する。

「ば、爆発するんだ……」

ジ・エンドは深淵に浮島が浮かぶ世界で、足を踏み外せば永遠の奈落が待っている。

一方、エンダードラゴンが巢食う所だ。　ソレは討伐したが。

エンダーマンなる黒く長身のモンスターも跋扈する。　町もあつ

たか。

普段はそれらでなく、ここの世界の様に青空広がる下において、同じ様に建築に勤しんでいた。

誰に言われた訳でもなく、それが楽しいから。人生が、世界が。この世に自身の証を打ち建てていく。それを自身や周囲が評価した。生活に必要な事でもそうでなくてもだ。

時に誰かを助けもした。喧嘩もした。ウィザーという化け物をウツカリ召喚した時は死闘であった。それすら今や良き思い出だ。

「楽しかったんだね。でも、どうしてこの世界に来たの？ リムルは転生だけど、私は召喚されたの。貴方達は？ 自力でここに？」

てんせい、は分からないが。

死んではない。召喚されたかは分からない。だが周囲には仲間以外いなかった。

「……辛く、なかった？」

いや全然。寧ろワクワクした。新たな冒険が始まったのだぞ。どんな世界であれ、楽しんでこそ人生だ。その為の術……創造力を持ち得ている。

その力で明るい世界を進む。それは生きとし生けるもの全てが持ち得る権利であり、そうであると信奉している。

それはシズ。君もだ。我々もリムルも皆全員。明るく生きるべきだ。

「……うん」

だからこそ、不幸だと嘆けば笑わせよう。助けて欲しくば手を繋

ごう。

シズや皆を泣かせる奴はぶっ飛ばす。 建造物や世界を壊す奴も同罪だ。

「……みんな、強いんだね」

シズ。 何も心配するな。 慌てなくて良い。

我々創造主一同、クラフターは創る者達だ。

大なり小なり歩んだ道もクラフトされたモノなのだ。

目に見えなくても誰かが気が付かずとも、絶対に間違い様が無い。

自らの歩みを誇りなさい。

君は独りじゃない。 この先も、ずっと。

「ありがとう」

生まれた気持ちも、またひとつのクラフトだ。

暫しの日常。

25. 現状と不安

「ああ……やつと落ち着いてきたよ」

艶を失ったリムルが転がってきたので、クラフターはギョツとした。

空腹だろうか。ベイクドポテトを与えてみた。ピッグマンモドキにはウケたので。

「いらねえよー！」

拒否された。相変わらずだ。暴食か悪食か偏食か。全く判断がつかない。

我々だけは食うなよと切に願う他ない。

「お前らの所為だからな！ 勝手に造りやがった高層建造物に対する設備工事、人口爆発への対応、名付け希望者への対応、都市整備、各地からのクレーム処理！ そこに加わる秘書の悪い意味でのパフォーマンスな仕事で最高な日々だったよ!？」

憤慨している。どうしろというのだ。何が食いたいんだ。

墮落のウサギシチューか、ケーキか、クッキーか。

「高層建造物の設備に関しては、上に行く程に汲み上げる水道のポンプ系はどうするか、上層階で吸気した空気を適温にする装置はどうするかとか代替するにも難儀したぞ。設備バルコニーやらシャフト、EPSやPSやら設けてくれなかったしな、お前ら！」

何やら建造物に対する不満らしい。

クラフターは首を横に振った。これは仕方ないのだ。クラフターの数だけデザインがあるのだから。

妥協しろとは言わない。だが、ある程度の理解と認知は必要だと思う。

「当然、設計図面なんて無いから細々調べる所からだし！ オークが労働力として来たから良かったけど、カイジン達だけじゃ無理だったよ……はあ。こんな事言っても仕方ないけどさ……そもそも前世の知識をそのまま持ち込むのもどうかしているよな……悪い、八つ当たりだったよ」

今度はしんみり。そんな日もあるさ。クラフターは頷く事で気持ちに寄り添う。

「……ジュラの森大同盟とやらをトレイニーさんが勝手に組んだし。その本拠地にされたし、この街。嫌がらせだろ……森を整理されたからって……人口は1万以上に膨れ上がっていくし、管理が大変だ……それも落ち着いてきたけども」

さても落ち着いてきた様でそうでもない。
リムルは良くても、クラフターは忙しい。 地下基地を鋭意建設中だし、地下鉄も敷設している。

「……これ以上、ナニか問題を増やすなよ。 秘密裏にナニかするか、やめてくれよ」

今のチカラでは及ばぬバケモノがいる気がしてくる世界だ。 相手にするにはシエルターや防衛設備の整備が急務だ。

実績と信頼の黒曜石も地味に貯めている。 ネザーゲートへの実験室も急ピッチで整備中。

避難所としてもだが、何とか反撃の手段を講じたい。

弓矢や剣、TNTに防具の貯蓄もするにはする。だがその力が及ばぬ可能性がある。

あの”いみふーと”だかなんだかも弓矢が効かなかった。

今後、あれ以上の脅威と対峙した時、クラフターはシズ達を守れる自信が無い。

だがクラフターは、圧倒的な力を持つ相手に今まで知恵で抗ってきた。

特に創造の力がソレを可能にした。身一つではゾンビにも苦戦しかねない我々の身体能力だが、クラフトからの武器製作や戦闘方法の確立により生き延びてきた。

今回もそうするだけなのだ。手を止めない、それが重要である。

「……オーガ達にも名付けしたけど……一体この短期間で何度スリープモードになった事か」

あ、非常食の備蓄もしなくちゃ。

長期地下生活が可能なら環境も整備していく。

都市と地下施設の間には黒曜石の装甲を覆う。

これで万が一地表全土が吹き飛んでも地下施設だけは何とか持ち堪えてくれる筈だ。

ゴーレムも一部配置済みだ。見た者は最初こそ驚くが、次第に慣れた。

「……ガビル達はヒポクテ草の栽培で洞窟にいて、オーガ達は自警団と共に巡回兼お前らの見張りといったところか。一部は稽古をつけてくれているし、悪い関係にはなっていないのが救いだな」

ポーションも備蓄しなくては。

戦闘訓練もしたい。都市部の拡大も。やりたい事が多過ぎる。暇がない。

石炭不足になった時に備えて木炭も生産している。

いつそ自爆装置も案に出たが却下された。必要な時点で手遅れだとの判断だ。

そうならない為にも、戦力は蓄えたい。シズと剣を打ち合うのも良い。

どうしてか、帯刀村人も時々ちゃんばらしている事であるし。

……いつそ、搭乗式巨大ゴーレムとか作れないかな。浪漫も欲しい。

「……お前らもさ。街の為、皆の為に動いているんだろ。それは分かる。だけどさ……いや。とにかく……シズさんを泣かせたら承知しないからな」

ハアンと鳴かれた。

クラフターは頷く。平和はやっては来ないと。タダではないと。

互いに歩み寄るにも、相応の努力がいる。

取り敢えずシズに会いに行こう。

共に過ごす時間はかけがえのないものに違いないのだから。

26. 農作と順風

「上下水道の工事は進めているけど、まだまだ井戸が主流だな……あと、お前らの無限水源。その辺、シズさん越しに頼めるか？」
「言ってみるね」

通訳のシズ越しに地下水道を頼まれたから、クラフターはさつさと街下に作った。

注文は段々と細かくなり、やれ水流方向はこうしろああしろと煩い。

詳しく聞けば要らないブツを流す為らしい。それを早く伝えろと思う。

だが分かれば手が早いのがクラフター。

流れ着く先に溶岩を置いておく。我々も良くやる手法だ。これで処理は終了。いつもの流れだった。

一応、下水にメンテナンス通路を備え、安全の為の柵も設けた。

安易に出入り出来ない様にする。安全にも気を遣ってこそクラフターである。

「……へ？　下水は終わった？　早くない？　じゃ、じゃあ次は……」

また頼まれた。今度はツールだ。剣や斧、鍬やツルハシ等だ。

何でも研究用らしい。鉄で良いと言われたのでさつさと作る。

髭モジャ達に渡した。

「……何度見ても凄いな。純鉄の精製も謎だが、切味も一級品……それ以上だ」

「んだな。オラは金床まで貰っただ。こりや負けてられねえだよ」

感動された。クラフターとしては建物の方を褒めて欲しかったが。

まあ、喜んでくれた。嬉しい事に変わりない。

次は半自動回収畑ビル、その運用法の教授を頼まれた。

RS回路の説明は面倒なので省略したが、レバーを倒せば水流が流れ、その水流で育った穀物と種が流されて端に貯まる。

それを回収したら、種を蒔き直す。終わり。

「……普通、作物も耕した土も駄目になると思うんすが」

「考えるな。受け入れろ」

なんか色々頼まれる気がするが、村人も自力で様々な事をやっている。

家造りもそうだし、設備整備もやるし、田んぼとかいう畑の仲間みたいなモノも作る。

我々としても逆に学ぶべき事が多い。ある種の技術交換か。

「……なあ、俺にニンジン畑の手伝いをさせるのはナニかの嫌がらせか!？」

「あらお兄さま、考え過ぎですよ?」

人参畑の方では、いつかの赤帯刀村人が慌てている。

人参に不満があるらしい。まあ、ジャガイモの方が腹持ちが良いのは分かるが、意味なきモノを植えているワケじゃない。

ぜひ、この機会に学んで欲しい。

「……なんとか品種改良を重ねて日本のコシヒ●リみたいな米を食べたいなあ」

「ふふっ。きつと食べれるよ」

リムルとシズが親しげに話している。

同郷らしいから、その時に食べた思い出の食べ物があるのだろう。クラフターにも色々ある。食物の手に入れ方が分からなかった頃は腐肉だった。

その後は雑草刈りの際、得た種を蒔いて育てたら小麦が手に入った。感動した。

この地でも育てている。小麦は基本だ。それで出来たパンは需要と供給に見合っている。村人の評判も悪くない。

「畑用のビルを建てたりと、お前らの農業の方法は不思議だけどさ……最終的には同じ様な気がするよ。土の匂い、空気がガツンときて、その空気を胸に、飯を腹に。ただそれだけで満たされる。ただそれだけで実感できる。俺達も、お前らも土を喰っていきっているんだな。迷惑掛けられるけど、やっぱ仲間だよ。そう信じたい」

リムルが感傷的に鳴いている。そうか。半自動畑に感動しているのか。

そうだろう、そうだろう。凄かろう。

鍬を振り回すのも種蒔は地味に面倒だが、回収含めると更に面倒だ。

それだけでも自動化する事で大分楽になると言うモノだ。

これもまた物作りであり、物作りの上に物作りが成り立っていく。

技術とは決して1で終わらない。10にも100にも拡がりを見せていく。

特に見た仲間達が新たな発見をするかも知れない。それは景色に溶ける村人達からかも知れない。

「本当に大変なのはこれからだろうな」

「……でも今年はきつと、良い作物が採れますよ」

「おっ、お墨付き。トレイニーさんは植物の専門家だもんない」

「ええ、ですから……待っていたんですよ私……お・さ・そ・い」

「……あ」

「ドライアドなのに。 管理者なのに」

「収穫時には声かけますから、ここはひとつ……」

今度は植物村人に責められている様に見える。 何故か。

相変わらず理解が困難な村人達だ。 ただ共に居て苦にならない。寧ろ楽しい。

村人達が行う農業、建築、料理様々……日に日に新たな発見が増えていく。

次は何を見せてくれる？ 学ばせてくれる？

クラフトとその発想、可能性は無限大だ。

興味も探究心も休まる暇がない。

……ああ、ただ聞きたい事がある。

シズに伝えておこう。

「……あのねリムル」

「どうした？」

「一部植林場が水浸しになっていて、木が何本も倒壊してたんだった。

知らない？」

「し、シラナイナー？ ゴブタノ仕業カナー？」

「リムル様酷いッス!？」

平和の中に溢れていく喜怒哀楽。

効率を求めて資材や技術を追い求めるだけでは見られなかった様々な感情表現。

この風景は良いモノだ。

柄にも無く、心の底から創造主達は思った。

27. 悪性料理とミルクバケツ

「今日はシオンの手料理か。　楽しみだな」

人口が増え、料理のレパートリーが増えた。

食事という娯樂が増えるのは大歓迎のクラフターだ。

今回も食堂なる施設へ足を運び、何かしらを戴く。　普段はゴブイチなる村人がクラフトしてくれるが、今回は違うらしい。

リムルとシズと共に建物へ向かう。　食うのみならず研究も兼ねる。

「……え!?!」

「す、すいません。　俺は遠慮します」

何故か周囲が遁走を開始した。　さもゾンビイベント時の村人の如く。

違うのは施設に入るのではなく遠ざかる事にある。　相変わらず分からない習性だ。

「まさか……お約束みたいな事が?」

「お約束?」

扉の前で立ち止まるリムルとシズ。

ナニを躊躇している。　仕方なし、クラフターが先に入る。

「あ、おい待て!?!」

刹那、謎の煙に襲われた。　食堂に充満している。　今までにない展開に困惑する。

「これはヤバい！　絶対ヤバい！　シズさん逃げよう！」

臆さず進む。　何故かダメージを喰らう。　毒状態だ。　意味が分からない。　毒蜘蛛がいる様子もなしに。

「いつかい外に出よう？　危ないよ!?!」

シズが引き止める。

が、クラフターは首を横に振った。　この先にシオンとかいう帯刀村人の仲間がいる。　其奴がクラフトした料理がある。

我々は行かねばならない。　飯を食いたい。　毒はミルクバケツをがぶ飲みして解決する。

「なんか牛乳バケツを一気飲みしてる!?!」

「……えーと、それで状態異常が治るって」

「アイツらの牛乳の中性効果凄すぎイ!?!」

毒気の霧に耐えつつ最奥へ辿り着いた時、村人がいた。

長身で胸部が大きい村人、シオンだ。　どんなモノをクラフトしたのか見せて欲しい。

「あらー！　リムル様とシズ様は一緒じゃないんですね？　では先にどうぞ、召し上がって下さい！」

ボウルを出された。　中は紫色で謎の煙と物体が蠢いている。　嘆きの声までしている。

クラフターは首を傾げた。

まさかこれが料理だというのか。　クラフターもここまでのモノを作れる自信がない。　かなりの力作に違いない。

よし。　戴こう。　据え膳食わぬは恥として。

「よせえええ!!? 早まるなあああ!!?」

食った。

感想を述べる。

この世の終焉であった!!

それ程に不味いツ!!

理解不能の味だった!!

しかも猛毒状態になった!

凄い勢いで体力が削られる!!

身体中が熱く寒く激痛が走り、喉を焼き焦がし体内を溶かし始め、この世の終わりの錯覚を味わう!!

「お前らしっかりしろ! 死ぬな! 死んでも平気でも死ぬな

!」

「あ、あら……オホホ……」

慌てて牛乳バケツを滝の様に口に流し込む!

………治った。瀕死の重体になったが、一命は取り留めた。

実はシオンとやらはウィッチなのではないだろうか。背負う大型の得物はダミーだったか。悔れない。

「大丈夫かお前ら……?」

「そ、そうみたい……」

「牛乳スゲエなオイ」

料理ではなかったのだろう。

ここまで酷い悪性の食料は食べた事がない。

ひよっとしたらポーシヨンの一種だったのかも知れない。

なら、次回渡されたら瓶に詰めて火薬を組み合わせよう。 スプ

ラッシュユポーシヨンにすれば強力な武器になる事間違いなしだ！

「シオン……料理を出す時は、ベニマルの許可を貰う様に」

「あんまりですリムル様!」

「知らん！ 管理は任せた！」

「……えーとね？ 本人の前で”調味料”は入れない方が良いよ？」

よく分からないが分かったと頷く。

取り敢えず、我々にもレシピを教えてくださいなだろうか。

自力で作れた事に越したことはない。作れたら地下施設で作る。

だって人前でクラフトして良いモノじゃないじゃん、それ。

28. 支度と君主

「街の地下にジオフロント!？」

基礎工事が大雑把に進捗したから、リムルとシズを連れて地下都市を見せてみた。

驚かれた。当然だ。通路帯は良いが大空洞に苦勞した。天井に張られた黒曜石の比ではない。

「すごい……」

「水の昇降機は……まあ、地上でも見たけどさ……大規模な空間相手だと地上の全てが些細に見えるな」

通路を辿れば様々な実験室及び格納庫、避難所の仮住居等に辿り着く。今見せているのは地下都市だ。

巨大地下空洞にビルが立ち並び、根元を整然とした道路が敷かれている。

規模こそ誇れるが……。

恥ずかしい話、これ予定外であった。

避難所としての機能を持たせるなら、こんな事しなくて良い。地下を抉り取ってそのまま部屋にしていけば早くに完成したのだ。

ところが問題が起きた。無骨反対派……景観厨が効率厨と揉め始めたのだ。

その間に整地厨が無心に作業した結果、こうなった。草木も生える。誰も反省していない。

「はははっ、避難所だとしても笑うしかないな! 魔王軍どころか

宇宙人が攻めてくるってか? なら巨大ロボットでもあるんだろー?」

「……あるみたい」

「はっはっは………マジでっ？」

空洞はここだけじゃない。隣接して別空洞がある。

ふふふ。メインディッシュは其方なのだよ。

ウキウキウオッチタイムである。

都市ではなく格納庫なので小さいが、収まるモノがモノなので結局は大きく築造された。整備も兼ねドックにもなる。

モノの為の搬出路も相応に巨大である。

……大小感覚が麻痺してきた。クラフトしていると、中毒と感覚麻痺に陥り易いとはいえど。

「スツゲエ」「機械の……龍？」

整備通路に囲まれ鎮座するオブジェクトに、感嘆の息を吐くりムルとシズ。

地下都市とは訳が違う感動がここにある。

彼等が見ているもの。

それは浪漫を込めてクラフトされた心擦る、地下に君臨する君主であつた。

ボディは黒曜石製の黒紫。二本足で起立、エンダードラゴンの様に大型で雄大で勇しく、しかし尻尾や翼は省かれており。

サドルはなく内部に設けられたコックピットで操作出来る………という風になっている。

コレ程の規模を動かす為の設備は豪く苦勞した。最早既存のR S回路やピストン装置類では歯が立たない。全くだ。微塵にも。

信号伝達機構はリピートによる遅延レベルは話にならないし、各稼動部専用の動力、例えばRSブロックを込めれば済む話でもない。

そもそも組み込める隙間が無い。

仮に動かしても角ついたり固まったり、仮想敵の動きを捉えられないなら意味が無い。

完成するにも青空を掩蔽物として覆い押し寄せる……ウイザー級

に圧勝して貰わないと困る。

武装だつてデイスペンサー等、既存兵器でどうしろという話。 ”
スナイパー対決”すら出来ない。

でなければ、結局創造主自らが剣を振り回した方が早い話に戻ってしまう。

もうこれ、ハリボテで良いよ……。

そうだな、ここまでの造形に出来ただけでも素晴らしいではないか……。

もう、ゴールしても良いよね……？

暗き地下空間。

そう皆が諦めて静まり返った頃、一筋の光明が降り注ぐ。

それは全く別方向組のクラフターから齎された。

まさかのネザーゲート検証班からだ。

ネザーには問題なく行く事が出来たばかりか驚愕は続き、かつての前哨基地すら発見した同志達。

そこに放置されていた原初ともいえるゲートに飛び込んだ結果……元の世界へ戻る事が出来たという。

そして、懐かしき彼の地からブロックを動かす事が出来る……極々一部創造主しか知らぬ”極秘装置（ブラックボックス）”を回収。

これを組み込む事で夢が実現するに相成る。

コレにより守護者は一応の完成を見た。

巨体はクラフターよりヌルヌル動くし、白兵からの乱打戦に備えて格闘すら出来る。

固定武装はデイスペンサーだが、出力を底上げしているから弾速は目で追えない。

種類も豊富で、通常の矢もあれば毒や火もあるし、ファイヤーチャージもある。

右腕の様にTNTキャノン砲身も付く。フルオート機構だ。
コックピットからの複数同時ロックオンで、目標距離を自動で計算

し、起爆タイミングを勝手に調整して発射してくれる万能ぶり。雷撃より速く強いと思う。

因みにモーターは同志が昔、どこかで見聞したという二足歩行戦車。

眉睡だの冗談だの妄言だの実現不可能と唾棄していた誇大妄想兵器だったが、クラフトして良かったと思う。

だって格好良いじゃん。浪漫は大切。

あ、暇があればアップデートします。

目指せ。

くらふたあが かんがえた さいきよーのろぼ。

「しっかし、何処かで見た事あるロボットだな」

「私は分からないな……」

「……コイツ動くって？ コイツらの技術はどこまで凄いなんだか

……それが俺達に牙を剥かない事を願うよ」

『警告。 外殻はイフリーストの水蒸気爆発に耐えた石と同一。 現状

のスキル、魔素での破壊は不可能です』

「……仲間の筈なのにさ、お前らが怖いよ」

「考え過ぎだよ。 大丈夫」

取り敢えず、元の世界から資材を移管する。

ゲート部屋に村人は立禁だ。 突然変異でも起きたら堪らない。

若しくは元の世界が荒らされるとか。

リムルも我々が怖い様子だが、我々もリムル達が怖い。

いつもじゃない。 心の闇に巣食うもの。

別にその時はその時だと納得はしているが。

気にし過ぎても仕方ないし。

ただ向こうが……この世界が我々を拒絶し牙を剥く時が来たならば。

我々もまた、それに応えよう。 そして、それすらも楽しむだけなのだ。

創国：ジユラ・テンペスト連邦国

29. 天馬とガード

「……緊急事態です。北の空に武装集団を確認しました。その数およそ500」

何やら慌ただしくなってきたから、クラフターは武装した。リムルも飛び出していくので惰性で行く。空を共に見やり……目を見張った。

「ペガサス!？」

馬である。馬が空を飛んでいるのである。

しかも、いっぱい飛翔している。

欲しい。だってサドルまで付いている。誘っているとしか思えない。

「……カイジン、早く避難してくれよ」

「……ちよつと心当たりが。昔、酒の席で退役した老将に聞いたんだ。ドワーフ王の直轄に極秘部隊がいるってな……なにせ、その部隊の名はペガサスナイト、という名だと」

どうやって捕縛しようか考えていたクラフターだったが、やがて目の前に降りて来た。

やったぞ。今がチャンスだ。騎乗していた村人も降りている。

「……お久しぶりでございます、ガゼル王よ」

かと思ったが、その村人がいつかの村人だったので踏み止まる。

鎧を纏い、如何にも強そうな者。いつか観光で訪れた集落にいた偉そうに強そうなヤツだ。

どうする？

馬を奪うにも、運悪く碌な武装が無い。

シズとの訓練用にと用意した木剣しか無い。棒切れではないにせよ、鉄装備を相手に出来る質を問えない。

「久しいなカイジン。それにスライム。余……いや、俺を覚えているか？」

「もちろん」

「……王よ、本日は何かご用があるのでしようか」

「なに、そのスライムと人間達の本性を見極めてやろうと思つてな。今日は王としてではなく、一私人として来た。物々しいのは許せ。こうでもせぬと出歩けぬのでな」

「……ついさつき、もっと物々しいのを見たけどな」

「む？」

「こつちの話だよ」

相手の能力は未知数。強いのは間違いない。

インベントリを確認する。土と丸石がある。

これで凌ぐか。博打はしたくないのだが。

最悪死んでも、大した物はロストしない。ここは試し斬りされる方法も取れる。

「まず名乗ろうか。俺の名はリムル。スライムなのはその通りだが、見下すのをはやめてもらおう……特に、コイツらはヤバいぞ？」

リムルがシズを模倣した。いつの間にか帯剣している。狡い。

寄越してくれないかな。

こつちは木剣なんだよ。それは鉄以上だ。断然ソレが良い。交換しろ。レートなんか知らん。馬の為に寄越せ。

「これでも一応、ジユラの森大同盟の盟主なんだから……勝手にされたけど」

「ほう……人の姿で剣を使うのか」

「そんなに警戒しないで欲しいんだけどな」

「それを判断するのは俺だ」

相手が先に抜剣。 剣先をリムルに向ける。

しまった、先手を取られた。 話し込んでいる場合では無い。

……いや待て。 この間に馬を……駄目か。 控えが沢山見ている。 隙が無い。

「貴様を見極めるのに言葉など不要。 この剣一本で十分だ。 それは其方の人間が一番分かっているような目をしているな」

こつちにも剣を向けられた。 これは敵対している。 馬はやらぬという意味表示だ。

やはり泥棒は良くないよな……クラフターは領いて見せた。 反省していますと。

「……この森の盟主などという法螺吹きには分というものを教えてやらねばなるまいしな」

どうしよう。 いっそ斬り込もうか。

ほら、背後で待機している帯刀村人は今にも抜刀しそうな雰囲気を出している。

悪いと思うが皆して馬を奪取しに行けば、一頭くらいは持ち去れるのではないだろうか。

いや無理か。 数の優勢は簡単には覆せないし、馬の特性も分からない。 そもそも懐かせず行けるとも思えないし……。

「我らが森の盟主に対し傲岸不遜ですよ、ドワーフ王」
「なんだって……?　ドライアド!?!」

次は植物村人が来た。　今度は3人もいる。
皆して馬に興味津津なの?

これは……もしかして……もしかするかも知れない。
このまま戦力が拡大すれば馬を奪取出来るのでは!?

「ようトレイニーさん」

「ご無沙汰しておりますリムル様。　同盟締結の日以来ですわね」

相手が動揺し始める。　戦力が増えていくのだ。　そりやそうだ。
とはいえ、数が圧倒的に違う。　この調子で増えても日が暮れてしま
まう。

それを嘲笑うように、鎧村人が声を上げる。

「ふはっ、ふははははは!　　森の管理者がいうのであれば真実なので
あろう!　　法螺吹き呼ばわりは謝罪するぞリムルよ……だが、貴様
らの人となりを知るのは別の話。　得物を抜けい!」

「まだ無礼を重ねると……え?」

もう良いや。　ヤツてやんよ。

クラフターは木剣を携えて躍り出た。

このままでは埒が明かない。　最後は自身が切り開かねばならな
いのだ。

「お、おい、俺がやるよ。　てかお前のソレ木刀……いや木剣じゃん
!?!」

「剣に違いはあるまい。　それにその目、自信がさぞあるのだろう」

馬しか眼中に無い。

邪魔者は退かす。 以上。

「舐めている訳でも無さそうだ。 良かろう、俺は一向に構わんよ」
「……分かりました。 では立会人はわたくしが行いましょう……始め！」

「トレイニーさん!？」

打って来ない。 飽くまで馬を守護する姿勢。
よほど大切らしい。 益々欲しくもあり申し訳なくもある。

「どうした? 来ないのか? なら此方から行くぞ」

次の瞬間、消えた。 エンダーマン級か。
ジャンプしながら土を置いて上に逃れる。 危機回避の基本だ。
取り敢えずコレで安全を確保……。

「ぬんっ！」

まさかの剣筋が目の前を横切る。
上は安全じゃないらしい。 仕方なしに降りてみた。
……盾があれば良かったなあ。
ふとガラ空きの左手を見て思う。 デザインも出来る、攻撃を防ぐ
板の事を。

アレの作り方を知る前は、今のようにブロックで凌いだものだ。
それすら無い時は……どうしたっけ?
あっ。

刹那、クラフターの脳裏に電撃が走る!
そうだ! 何故忘れていたんだ!
戦闘中、剣で即座実行可能動作があったじゃないか!

「この程度か? ならば終わりだッ！」

思い出したクラフターは直様構えを変えた！
剣を横に構えるだけ！
その名も剣ガードである！

——ギャリイイツ！！

衝撃がきた。が、ノーダメージだ。
見れば姿を再度表した鎧村人の剣と鍔迫り合いの姿勢になっている。

「……ふっ、ふははははッ！　こやつめ俺の剣を受け止めおったわ
！　それも片手でな!!」

「スゲエなお前の剣……木なのに耐えたよ」
「降参だ。俺の負けでいい」

背を向けた。今なら切れそうだ。
いや駄目だ。木剣で鉄鎧に勝てない。　ここは諦める。　クラ
フターは嘆息した。

「では、勝者——」

うおおおおおつ、と村人が鳴き始めた。
景気が良いのは良い事だ。だがクラフターの気持ちは暗い。
馬をくれそうに無いんだもん……。

「邪悪な存在達ではないと判断した。　良ければ話し合いの場を設け
てもらいたい」

「……俺もそう願っている」

「言葉が通じぬのか？」

「全くじゃない。　通訳もいる。　だけど……」

「盟主なのだろう。仲間であれば、信用してやるのも務めの1つよ」
「……そうだな。弱気になつてゐる暇なんか無いよな」
「そうだと」

そんな気持ちを知つてか知らずか、今度は仲良さげに語り始めるリムルと鎧村人。

馬の交渉なら嬉しいが。そんな雰囲気に見えない。希望は捨てよう。

もつと良いモノが見つかると思つて……。

「……先ほどの剣気、如何なる猛者かと思つてみれば、ずいぶんと成長なされた」

「……剣鬼殿にそう言つて頂けるとは恐縮です」

「ふむ。森で迷つていた小僧に剣を教えたのは懐かしき思い出」

「あれから300年になりますか」

「え？ なに？ 知り合い？」

今度はハクロウなる帯刀村人と鎧村人が話し始める。
もう好きにしてくれ。拗ねた。

「……さあ早く案内してくれリムル。上空から見たかぎりじゃ凄まじい発展具合だったぞ？」 美味しい酒くらいあるのだろう？」

「……まあ、あるけど。あと街を作つたのはコイツらが殆どなんだけどな。それも頼んでも無いのに」

「はっはっはっ！ 善意を無下にするものでないぞ！」

「善意、か。 そうだな、信じよう。 なんだって俺は盟主だ」

「そうとも。 背を伸ばし前を向け。 俺の弟子よ！」

「はははっ、軽いなあ」

過ぎた事より先の事。

クラフターは前を向く。 下ばかり向くものではない。

前にも上にもやりたい事は溢れているのだから。

30. 飲食と星下

「リムルよ、俺と盟約を結ぶつもりはあるか？」

外観に趣向がある迎賓館で食事をしていると、鎧村人……今は脱いで髭村人……がハアンと鳴いた。

「皆して何言ってるんだこのオッサン、みたいな顔をするんじゃない」

通訳のシズは席を譲っていて、ここにいないからナニ言ってるか分からない。

だが大切な話なのだろうとは思う。マルチあるある土地問題とか。

或いはこの建物についてか。それか料理か。

どちらも素晴らしい造形だ。分かる。学びの姿勢は我々も襟を正したい。

「この町は素晴らしい造りをしていた。ここはいずれ交易路の中心都市となるだろう」

「設備が間に合っていないんだけどな」

「時間が解決する。気にするな」

「それもそっか」

「……その間にも、後ろ盾となる国があれば便利だぞ？」

建物を褒めていると分かった。

言葉分からずとも伝わる。建築家故か。

良いぞ。クラフターは領いた。建築好きに悪い奴はいない。

訂正。荒らし許さない慈悲は無い。

「後ろ盾、ね。じゃあアレは剣か」

「むっ?」

「……いや、コイツらの剣に頼るのは不安だからな」

「そうか?　良いモノだったぞ。　事後に何だが、よもや木で止めるとは」

「……話戻すけど。　盟約は素直に嬉しいが良いのかよ。　俺達を、魔物の集団を国として認めるということだぞ?」

「無論だ。　善意の言葉ではなく王として言っておる。　双方の国に利のある話だ」

「ホントにいい?　俺騙されてない?」

「ふははははっ!　　恩師やドライアドを前にその主を謀ろうなどとはせん」

建物といえば、かの観光地も興味深い。　設備もだ。

この世界の技術は度々お目に掛かるが、クラフト出来ればかなりの助けになるのは間違いない。

問題なのはレシピが不明な事だ。

特に記憶に新しいシオン級猛毒ポーションは失敗した。

試行錯誤、厨房観察の果ての結論だ。

時間の浪費と判断、研究は凍結。　喰らわされた遺恨を後世に遺す無様の為体を晒す。

悔しい。　地下格納庫のIRP動力源より意味不明だ。　複雑を通り越し渾沌そのものである。　複雑を

唯一の救いは副産物か。　美味しい料理の開発に成功した。　それは満足だ。

「……悔しがったり喜んだりしてるヤツもいるしな」

「ソイツらには遠慮しなくて良いぞ。　ご覧の通り、ナニ考えてるのか分からん奴さ」

「邪気は感じぬがな」

「無邪気も過ぎれば困るんだよ」

具体的には生魚を捌いた刺身や「カレーライス」とか野菜スープを覚えた。

その中に見た新たな発見。それは、カレーにナニを入れてもほぼ「カレー」になるという事だ。

ウケた。色んな意味で。やはりクラフトとは様々を試行してこそ甲斐がある。

……シオン級を入れても「カレー」になるのだろうか？

リムルに実験したい。コイツなら何でも喰える気がする。無理に我々が腹を括る必要はない。いくら牛乳があるとはいえど。

かの感覚、それは無限奈落より酷かったが故に。

途端にジ・エンドやウィザーが生優しく思えてきた。身震いした。

「なんだろう。急に寒気が……感じない筈のものを感ずる……」

「得体が知れないのは理解した。いや理解したというのも妙だが……」

「それでも盟約を？」

「何度も言わすな。良き関係でいたいと願うなら、互いに歩み寄る事だ。その上で無理だと思えたなら……それまでよ」

「俺たち、上手く付き合えそうか？」

「やってみてから考えろ。言ったらう、前を向け。偶に振り向けば良い」

「分かった。そこまで言うなら……この話、喜んで受ける」

「はっはっはっ！ 王者に相応しき決断力！ さすがは俺の弟弟子よー！」

顔上げ決断した。

必ずや邪智暴虐なシオンを懲らしめねばと決断した。

具体的には厨房に入場した瞬間を捉えた後に現行犯で押さえる。

次に我々が試作したポーシヨンの実験台にする。林檎果汁と西

瓜果汁。金林檎果汁も試す。特に金は浄化作用があるかも知れ

ない。雷に打たれたが如しの影響を期待する。我々には通常効
果しかなかったが。

あと美味かった。満足だ。クラフト万歳。

「条件はとりあえず2つだ。1つ、国家の危機に際して相互協力。

1つ、相互技術提供の確約」

「良いぞ。でもコイツらの協力が欲しいってのは難しいかも。言
葉は通じないわ、気紛れだわ、何より創造する力は非常識の塊だ」

「益々面白い！ お前達が羨ましいぞ！」

「くそう、他人事だなあ!」

「はっはっはっ……で、お前達の国の名はなんというのだ？」

「え……いや……まだ国という段階でもなかったからな。俺はジュ
ラの森大同盟の盟主だけど国主ってワケじゃないし……」

次は酒とやらをクラフトしたい。

飲む量次第で、ゲートワープのグニャグニャ視界になるアレ。

悪性ポーシヨンかと思う時があるが……アレは良いモノだ。

観光地で味わった様に、楽しい気持ちを助長してくれる。人生を
豊かにする。

効率ばかり追いかけて忘れていた、生きる愉しみを思い出させてく
れる。

大袈裟かも知れない。だが必要だ。

「では明日の朝までに国名を考えておけ。そして今夜は酒に付き合
え」

「考える時間くれないのかよ!」

ふと外を見た。シズが空を見て佇んでいた。

クラフターはなんとはなしに、酒を持っていく。

「……リムルと一緒にじゃなくて良いの?」

構わない。

シズといたい。星海の下、星見酒。

偶に孤独を紛らすのにも良いが、共に飲食するとより美味しい。

「くれるの？　優しいね」

共に飲む。効く。キュツとくる。

胸が締め付けられる。この想いは今までになかったが。

景色がそうさせるのか。シズか。リムルか。皆か。天に

散りばめた幽玄な輝きか。

どれも悪くない。切なさも良い。だが寂寥過ぎない加減が良
き塩梅。

「うん。誰かと一緒に飲むと美味しいな。今まで独りだったから

……余計かな？」

クラフターは首を横に振った。

創造にあつて人生に余計はない。

シズは時に余生を憂いている節があるが、愉快に生きて良いのだ
ぞ。

例えばほら、と酒を継ぎ足してあげた。

「……ありがとう。今ね、幸せだよ」

クラフターは笑顔を見れて安心した。

そうだ。笑っていなさい。

美味しい物を飲食するのもまた、愉快な人生だ。

3 1. 本と羽根ペンと建国記念

「では国名はジュラ・テンペスト連邦国。 首都は中央都市リムルと」

酒の席から夜が明けた。

今度は屋外にてリムルと鎧村人が対峙している。

リムルに關してはシズに擬態しているだけではなく、黒服を着込んで髪を整え、背筋を伸ばしていた。 新鮮だ。

同席しているシズもだ。 こう並んで見るとソツクリだ。 背丈

と色が同じなら見分けは難しかった。

上位金林檎と下位金林檎の見分けくらい難しいと思う。

「連邦は支配領域を持つ種族も加わるから。 この街、首都リムルは……皆の意見から。 恥ずかしいから反対したんだけど」

「諦めろ。 今更変えるなぞ言うなよ？ 　そも調印式で話す事ではない」

「悪い……よし。 始めてくれ」

しかしナニをしているのか。 儀式か。

机の上には本と羽根ペンがある。 交換日記みたいな奴か。

やるのは勝手だ。 クラフターは遠慮するが。

恥と後悔の無いように。

「あ、あのね……大切な事だから邪魔しちや駄目だよ？」

シズに小声で注意された。

心配いらぬ。 寧ろ我々はする側だ。 黒歴史も経験している

身である。

誤字脱字は気にしないが、記載内容によっては世界に助平な情報を拡散しないように。

同志の中には失敗した者がいる。羞恥心のあまり其奴は暴れた。都市部が崩壊しかけた。

誤ちは繰り返す。何処へ行けども。

それを止められる一番は本人であり、気付くべきなのも本人であるが、友として止めてやる行為も時に必要だ。

その時は手遅れかも知れない。それでも止めよう。シズ、その時は君も協力してくれ。友として。

「……シズさん、顔が赤いけど大丈夫か？」

「大丈夫……」

「あー……はい。ではこれより、ドワルゴンとジュラ・テンペスト連邦国における協定の証として、両国の代表による調印を行います」

「この盟約は魔法により保証され、世に公開されます」

2人が文字を書き始めた。マジマジと見た。解読出来ない。残念だ。

「覗き込むなよ!？」

「だ、駄目って言ったよ!？」

「はっはっはっ! 躰はしておけよ?」

「先行きが不安だあ……!」

刹那、不思議な事が起きた。

光の球が浮き上がったと思えば、次には花火の様に打ち上がり弾け散った。面白い見世物だ。

……この本に何かしら書けば花火が上がる? やってみよう。そうしてこそクラフ……。

「駄目だって言ってるよー!？」

「スライムアタック!」

ウオツ。

シズに止められ、リムルに吹き飛ばされ野太い声が響き渡る。
痛い。 良いノックバックだ。 我々もハアンと鳴きたかった。

「面白い調印式になったな。 後にも先にも酒の肴に出来そうだな」

「建国早々、調印式で喧嘩とか。 これ一生揶揄われる奴じゃねえかよ!」

「はーっはっはっはっ! 諦めも肝心よ! 語り尽くす事が出来ぬ国になりそうだな!」

「こんな所を、それでも国として認めてくれる懐の深さに感謝します……」

「愉快痛快! 次来る時には何が見られるかな? 楽しみだ!」

「遊園地じゃないんですけどね、一応」

取り敢えず話は済んだらしい。

それぞれ姿勢を崩している。 笑顔だ。 笑顔が1番ってそれシズにも言いたい。

「……それですね。 事後も事後になりますが、一応教えておこうかと」

「別の娯楽施設か?」

「いや、軍事施設……かな。 隠し事をして後々問題になりたくないし。 というか、コイツらが散歩感覚でアレを出しそうで怖いし」

「……案内して貰おうか」

地下施設へと向かうリムル一行。

我々も後に続く。

今度は驚愕の顔をするが良いぞよ?

クラフターも笑顔で溢れた。

我々がいる事で人生が楽しくなるだろうか?

3.2. 仮称：IRPと未知数

「こ、これは一体……!？」

地下格納庫。

此処に鎮座する黒紫の君主を見上げ、来訪者は驚愕していた。

対ウイザー級大型対応二足歩行戦闘兵器

仮称：Iron REX・Powered

創造主としては嬉しい反応だ。

動力源及び回路であるBBや兵装搭載時の圧縮機構、小型化技術、稼働出力の底上げ技術、それらを可能にさせる理論等は極一部しか知らないから、説明を求められても困るが。

他の部分は大雑把に説明出来る。TNTキャノンの基礎理論は昔からあるし。

胴体……頭部と言った方が良いかも知れない……にある固定兵装のデイスペンサーもそうだ。

「……俺もよく分からん。シズさん」

「私が聞いてもあまり。強い敵を倒す為らしいよ」

「巨人、いや機械龍か？　これ程の巨体が動くのか。ドワルゴンでも似た研究がされていたが……人間程のサイズでも失敗したというのに……」

「まだ見た事ないんだけどな。　そうらしい。　因みに外殻の黒い石、破壊は困難だ」

「ぬう……この者達の技術を得られる機会が出来た事を改めて嬉しく思うと同時に……恐ろしくある」

「戦闘力は未知数。　それに技術も……コイツらの極々一部の奴しか知らないんだとさ」

コックピット内の装置類は謎だ。　安易に動かせる様に工夫され

ているとはいえ。

謎が多くて困る。何故動くのか。一部しか知らな過ぎだ。

黒曜石だからほぼ破壊されない設計だし、長距離TNTキャノンのアウトレンジ戦法の移動ユニット思想が強く、近接戦闘を主眼にしていないとはいえ……絶対は無い。

壊れたら即時修理は不可能と思われる。応急処置も怪しい。

爆発物の衝撃が内部まで及んでも回路が寸断されない様にされているが、巨体故に村人サイズを相手にした時は困る。

それに……あらゆる装置は誤作動の可能性を秘めている。

過信はしない。創造主でありながらそう思うのは恥であるとしても。

長距離砲撃時は行進間射撃をも可能にしているが、基本は精度を高める為に機体を安定させる。

その際、砲身内圧縮加圧に連動して音ブロックによる警報が出る。

発射時の凄まじい爆風の衝撃に巻き込ませない為、周囲に退避を促すのだが……それだけだ。

一度点火したTNTを止める術は無い。

だから砲身を最大仰角に上げて空中で砲弾が爆発するように仕向ける程度だ。

それすらも安全とは言い難く、うっかり空中に飛行物があれば巻き込んでしまうし、運用地形によっては不可能なポイントもあるだろう。

圧縮を中断させたり自爆する方法もあるが、それも中途半端になれば危険だ。

正直、問題が山積みの兵器だ。

下手しなくても欠陥品である。

問題児の矯正。それもまた創造主の務めか。

そもそも我々が生みの親。創造したのだ。使用にも管理にも

責任を伴うべきだろう。

「……秘匿、いや。いずれ世界にバレるぞ。管理者が自由人だろ

うからな」

「いつそ公開してやろうかと。抑止力として」

「人間をどこまで理解している？ 未知数とはいえ過ぎた力を見せられた者全員が恐怖に尻込みする訳では無いのだぞ。 したとして、逆に攻められる口実にすらなる」

「だよな、うん。 でも言ってくれたじゃん、その時はその時さ」

「……やれやれ。 俺もとんでもない国と盟約してしまったものよ」

「隠し事を続けられたより良いだろー？ それも今更変えるなんて言うなよっ！」

「はっはっはっ！ 1本取られたわ！」

そうだ取り敢えず笑っておけ。

我々も笑っておく。 いつ笑えなくなるかも分からないのだし。

逆に悲惨過ぎて笑うしか無くなる、というオチもあるかも知れないけど。

魔王、ミリム・ナーヴア襲来

3.3. 初期起動と反省

『告。 地下から異音を感知』

花火本儀式から暫し経ち。

地上は日々賑わいの密度を高める一方、地下では模擬実験の限界が来てしまった。 大きな動作確認は此処では無理だ。

というわけで。

遂にIRPを地上で動かす事に相成ったのだ。

ドラゴンより小振りか同等程度のIRP。 派手に動けるスペースを地下に設けていない。

まさかジオフロントで暴れさせる訳にはいかない。 都市破壊は周回すれば快感だろうし、それはそれで記録出来るとしても。

そもそも地上での運用実験は予定していたのだ。

様々なバイオームで動けるのか。 TNTキャノンの精度は計算通りか。 格闘戦は可能なのか。 時期はどうあれ確かめてみるつもりであった。

「ま、まさかアイツら……」

キヤットウオークから嘴の様な操縦席へ。

颯爽と乗り込み起動。 狭い操縦席が閉口する。

漆黒に支配されると癖で松明を付けたくなるが、次には計器類がRストーチレベルに輝く事で一先ずの安心感を得た。

やがて目の前に投影されるように外部映像が飛び込んでくる。

パールモドキの応用らしいが、これまたよく分からない。 実用化したという事は解明された部分が多少あるのを示唆している。 にもかかわらず極一部しか知らない。

隠し事をされるのは気分が悪い。 I R P 技術の独占は時に不仲の原因だ。 火種を生まない為なのかも知れないが。

取り敢えずの結果に満足するしかない。 その上で結局は口を開いた。

世界を直接目で見たいから。 意地悪な同志への抵抗もある。

そんな光景。 外から見れば半開きの嘴の中に、操縦者が啜えられている様に見える。

見る者に威圧感をも与える生物的特徴を一眼見ようと、キャットウォーク上には大勢の同志が押し寄せ見送った。

腕振り腰振り飛び跳ねて。 様々なダンスでパイロットを鼓舞している。

『概ね予想通りと思われます』

「で……それとは別にヤバいのが俺目掛けて来ている感じがする!？」

最悪な組み合わせだよ!？」

未だ世界を直接見たいが故に。

慣れぬ操縦桿を押し引き、I R P の巨体が動く。 しゃがみ姿勢から立ち姿勢へ。

そのまま搬出路を I R P の二足が征く。 ドシンドシんと、しつかり自分の脚で歩く君主は壮観だ。

が、それなりにデカく作った搬出路は I R P からすれば狭き幅。

操作も慣れていない所為で、時々外壁に擦る。 付随して足場が破

損した。 同志達が滝の様に溢れ行く。 許せ。

怒る様なら反論だ。 もっと道を広くしろと。

『破損音を確認。 地上へと近付いています』

「ええい! ヤツらの搬出出口に向かう!

り付けてやる!」

最悪はアイツらに擦

出口の光が見えてきた。

狭き門を潜れば、そら。お天道様がIRPに当たる。黒きボデイが照り輝く。

感極まり、操縦桿を大袈裟に握ね回す。咆哮するIRP。さもドラゴンの如し威圧感。

「うおっ!？」

……誰かダメージを？

操縦席から落ちない様、スニーク姿勢で下を見やれば……リムルがいた。

うっかり蹴り飛ばしたか。だとしたら悪い事をした。腰を幾度か曲げて謝罪しておく。

「犬の散歩感覚でソレ出すなって言いたいが、それどころじゃない！
なんかヤバイヤツが来てる！俺が何とか出来ればやるけれど、最悪は協力してくれよ！」

早口ハアンだ。

ゆっくりハアンでも大差ないが。理解出来ないし。だが雰囲気から緊急事態である。

突如、計器の1つから音ブロックを応用した警報が鳴る。高速接近中の飛翔体を捉えたらしい。原因が知れた。

……が、この仕組みもよく分からない。
クラフト出来ぬ物を利用する件。
元の世界でも良くあったが。鞍とか。
火薬もクリーパー狩りしなきや得られない。

この世界もそんな事で溢れている。シオン級猛毒ポーションとか。

逆にだ。ひよっとしたらこのIRP同様、クラフト方法を知っている者がいるかも知れない。

或いはロスト・クラフトか。失われた創造の遺産なのか。剣

ガードを忘却した様に、廃れて忘れたのか。

今我々の理解の範疇にある創造が、現在の最高技術であるとは傲慢とした方が良い。

などとボンヤリ考えていた所為で対処が遅れた。

これまた突然に強い衝撃が巻き起こる。目の前で大きな砂埃。

TNTが爆発したかの様だ。

「うおおおおっ!?!」

IRPが揺らぎもしないのは流石の黒曜石製と褒めてやりたいところだ。

勿論、堅牢な機体だけではない。移動手段が全地形踏破を目的とした二足歩行方式の関係上、自動姿勢制御に力を入れた結果であろう。

これは地下である程度成果が出ていたが、改めて立証された気分だ。良くやった。これだけは褒めて良いかも。

「来たぞ!!」

警告ハアンに弾かれて計器類を見る。

TNTキャノンの残弾数に変化は無い。誤射ではない。なら良い。景観破壊及びリムル殺害犯にならずに済んだ。

仮にそうでも言い訳しよう。1発だけなら誤射かも知れない。許せと。

では原因は何だ。クリーパーか。遠地からのTNTキャノン攻撃か。あり得なく無い。搬出口が知れていれば座標計算上、砲撃は可能だ。タイミングを合わせるのは難しい筈だが。あと砲撃陣地の立地や距離。

「初めまして」

爆心地からハアンが聞こえた。

まさかのクリーパーだろうか。いやクリーパーなら爆発四散する惨事だ。この爆発規模もクリーパーよりかは上である。

巨匠と渾名される帯電クリーパーなら或いは……とも考えたが、それでも現状が上だ。

衝撃波だけで周囲の植林場が荒れたし。何にせよ招かれざる客である。

「ワタシは魔王、ミリム・ナーヴァだぞ」

やがてピンク頭が現れた。服の布地面積が著しく低い。防御力がなさそうできて、傷一つない。強い。確信する。アレは間違いなく迷惑な村人だと。

無邪気な笑顔が余計に思わせる。無自覚系荒らしクラフターかも知れない。

この後の行為次第では討伐対象だ。このまま踏み潰してやろうか。

「お前とソコのドラゴンが、この街で一番強そうだったから挨拶にきてやったのだ！」

「え、ナニ？　今回はコイツらだけじゃなく俺も原因なの？　責任逃れ出来ないの？　いつも通りだけでも」

足下で交渉を始めるリムルとピンク頭。

こんな迷惑クリーパー系相手に優しさを見せるとは。いや交渉か。火薬を貰いたいのかも知れない。

「てかいきなり魔王かよ!?　普通最初に来るのって四天王(最弱)とかじゃないの!?　いや非常識集団が側にいる時点で色々アレだけだよ!」

憤慨している。交渉に難航している。

クラフターはガツカリした。まあ、交渉が成立しないのは良くある事だ。火薬ともなればそうだろう。クリーパーを狩り立てた方が安上がりか。そうですか。

「……改めましてリムルと申します。なぜ私とアレが強いと思ったのですか?」

「ふふん。それでオーラを隠したつもりか? この『ミリムアイ』にかかれば相手の隠しているエネルギーなど、丸見えなのだ……もつとも……ソツチのドラゴンと人間達は分からなかったのだ。これは面白いと思つて、尚更に放置出来ぬというものだ!」

「新しい玩具を見つけた子みたいな反応してるよ! 危ない子だよやっぱり!」

「ワタシの前で弱者のフリなど出来ぬと思うがいい! わははは!」

笑顔を見せるピンク頭。

無情なレート提示で我物顔というところか。

どうしよう。ここはリムルに任せてIRPを動かすか?

ウツカリ踏まなければ良いだけだ。たぶん。

「それで今日はどんな御用でのお越しでしょうか?」

「む? 最初に言ったではないか。挨拶だぞ?」

「……それだけかよ?! けどまあ戦わずに済むなら越した事は無い。大賢者曰く、測定可能な下段段階でエネルギーが10倍以上らしい。もし戦いになったら絶対に敵わないだろうし……」

よし。取り敢えず歩かせよう。

操縦桿を押し引く。片脚を上げた。ピンク頭が陰で隠れる。

あつ。ヤベツ。

「へ？」

「おー」

ドシンツ。

……………。

これはやっちゃまったか？

ピンク頭を潰したか？

「ナニしてんだーツ!？」

ツベー。マジヤツベーわ。

どうしよう。クラフターは冷汗が出た。

いくらクリーパー的存在だからって、見た目は村人だし、リムルが交渉していたし。

最悪はTNTの様に爆発四散の可能性すらある。IRPが壊れなくても、周囲が吹き飛ぶ。このピンク頭の威力は未知数だ。

いや、だって、ねえ……………？

操縦に不慣れだったから……………駄目？

「わははははは！　面白いヤツだな！　まさかいきなり踏み付けて

こようとはー！」

ピンク頭のハアンが聞こえた。かと思えば片脚が持ち上がって

いく。

操縦桿は触ってないのに。え、なんで？

「だがこの程度、ワタシには通用しないのだ」

刹那。

機体が浮き上がり、ひっくり返った。

ピンク頭が片手で持ち上げて放り投げたのだ。

おいおいマジか。 化け物か。

「ワタシと遊びたいというのなら、遊んでやる。 ただし！　ワタシが勝ったら部下になるのだぞ？」

慌てて操縦桿を動かす。

転倒も考慮しているから、起きるのは造作も無い。

問題なのは村人関係だ。 今後の課題だ。

「あーあー。 俺知らねー！」

「何を言っている？　お前も部下になるのだぞ？」

「巻きこまれたー!?　おいお前ら！　何とかしろ！　俺も考えるから！」

敵対している。 然もありなん。

だが丁度良い。 ピンチはチャンス。

どうせIRPは化け物退治用に開発していた。

ここで実戦といこう。 それで問題を見つけて直していけば良い。 既に操縦に問題がある訳だし。

34. 対人と問題点

「わははは！　　いっばい来たな！」

外の騒ぎを聞きつけて、搬出路からゾロゾロと出てくる創造主一同。

ピンク頭の村人がIRPと対峙しているのを確認して皆思った。

いきなり実戦かよと。　しかもウィザード級かよと。　挙句に体格

差がある。　不利だ。　IRP側が。

「今度は何を見せてくれる!?　　そのドラゴンだってお前達が造つたのだろうか?　　これ程のモノを動かすなんて面白いじゃないか!」

「……ハリボテじゃないのは確かだよ」

「だが!　　踏み付け程度じゃ魔王の誰も倒せないぞ?」

IRPは村人サイズを多少相手にする事も考慮している。

固定兵装のデイスペンサー。　脚による格闘戦。

今はそれだけ。

それだけでも、試せねばならない。　それもまたクラフターだ。

創造にも色々ある。　作って終わりでは無い。

装置類であれば実際に使用して幾度と繰り返し、上手くいかない方法といく方法を知り得ていく。　トライアンドエラーだ。

マグマと水を利用した丸石製造機も、非効率な製鉄所や金塊所も、稼働中の半自動回収畑等もそうだ。

問題点を解決する為には、先ず問題と己を知る所からだ。

だから取り敢えず。　創造主は自ずと操作した。

頭部をピンク頭に下げる。　お辞儀ではない。

「おっ。」

くらはいは起きるか。

が、しかし。これまた片手で止められた。ノックバックも起きない。剣ガードの比では無い。

「残念だったなあ！ お前達には期待していたのだが……魔王の片鱗を見せてやろう！」

そのまま脚を殴られた。破壊はされなかったが、ノックバックが起きる。天高く打ち上げられる程の。

参ったなあ。これ程とは。

「マジかよ」

取り敢えず操縦桿を握り直す。落下に備えてコックピットハッチ完全閉鎖。

減速して自由落下が始まる感覚を味わいつつ、慌てず騒がずTNTキャノンの砲身をマニュアルで合わせる。発射警報が鳴る。

「おおー！ まだ何か見せてくれるのか!？」

搭載されている主砲……TNTキャノンは砲身が長く足下の村人には使用出来なかったが……距離が出来た今なら”足下”にも攻撃出来る。

やれる事はやりただけだ。無遠慮にトリガーを引く。撃つ。撃つ。撃ちまくる。

ドゴンツドゴンツドゴンツと心地良いフルオートキャノンの豪快な音が響く。

漏れなく地上は爆炎で埋め尽くされた。

「それまた面白い！」

撃ちまくりながら、ピンク頭にのしかかる様に機体も落下。地面に叩きつけられた。

痛い。落下ダメージを喰らう。これも改善点だ。ボートかトロツコを使えば或いは？

「うりゃー！」

そして当然の様に機体を放り投げられた。

辛い。我々の技術が通じない事に。

砲撃を受けて未だ無傷のピンク頭。ウイザー級もピンキリ。

いや、新たな脅威か。シオン級か。

「面白い見世物だったぞ！ それにそのドラゴン……黒紫の身体は

随分と頑丈だな！ 軽くとはいえ、ワタシに殴られて傷ひとつない

とは驚きなのだ！」

最早これまでか。否。これからだ。

一度や二度の躓きで諦めて、何がクラフターか。何が創造主か。

作って失敗してまた作る。その繰り返しを続けたからこそ今世界があるのだ。

それに我々は失ったのでは無い。得たのだ。

失敗でもない。上手くいかない方法を知ったのだ。別のやり

方を試せば良いじゃないか。それだけだ。

「じゃあ勝負もついたらし、お前達は今日から部下に……」

「まだだ！ まだ終わってない！」

機体の姿勢と同様、シオンボリしている傍ら。リムルが再び交渉を開始。

「ほう？ お前はワタシに通用しそうな攻撃手段を持っているのか

？」

「1つだけな」

「わはははは！　いいだろう、受けてやるのだ。ただし、それが通用しなかったら全員ワタシの部下になると約束するのだぞ？」

「分かった……では喰らえ」

決裂したらしい。

シズに擬態すると無謀にも突撃を開始するリムル。

八つ当たりしたい気分なのは分かるが、砲撃も格闘も効かない相手だ。

リムルがどうにか出来る手段を持ち得ているとも考え難い。

いや……多様性に富むスライムだったと思いつく。質量を明らかに超過した物体すら捕食する。可能性を信じよう。仲間である。

リムルの手に得物は無い。だが黄金に輝く液体が浮かんでいる。

なんだあれは。金林檎の一種か？

『告。対象のエネルギーが膨大過ぎる為、捕食不可能です。通用する攻撃手段皆無……』

「大丈夫だよ」

『警告。全ての攻撃は反射される可能性が高いです。自動防御を発動……』

「こういう子供っぽい相手には……それ相応の対処法つてもんがある！」

パチインツと小気味良い音が呟した。

リムルがピンク頭の口元を塞いだのだ。

いや金の液体を喰らわせたのか。

相手がクリーパー的存在と思うと鬼気迫る行為だが……。

ハッ！　まさか浄化作用が！？

若しくは沈静化！

「……どうだ？」

暫し沈黙。 創造主達も見守る他ない。

中には剣ガードをしたり、トーチカをクラフトしたり塹壕を掘って隠れる者もいる。

爆発するかも知れないので。

「な、なんなのだこれは!？」

ピンク頭が興奮している。 いけない。 起爆動作に入ったのかも知れない。

IRPを動かして皆の盾になる。 戦闘中、黒曜石破損等のダメコンは発生していない。 信頼と実績の黒曜石である。

「くつくくつ。 どうした魔王ミリム。 こいつの正体が気になるか？」

にも関わらずリムルは不敵の笑み。

周囲には先程の黄金。 気になる。 ピンク頭の興奮への危機感より知的好奇心が勝る。

IRPごと前のめりになった。 なにそれ。 教えろリムルと。

アレか？ 決戦用上位金林檎の親戚か？

状況も逼迫していた。 相応のアイテムの可能性が高い。

「お前らもか。 ふつ、初めて優越感に浸った気分だな」

また笑われた。 だが気にしない。 聞くは一時の恥。 聞かぬは一生の恥。

あいや通じないのであった。 誰かシズを呼んで来い。

「こんな美味しいもの今まで食べた事がないのだ!!」

「蜂蜜だよ。先日保護したハチ型魔蟲に採取してもらったものだ。後でコツソリ食べようと思っていた俺のオヤツなのだが、上手いこと興味を持って貰えたようだ……ついでにお前らも」

それもまたクラフト方法を得て、そうでなくても色々試してみたい。

沈静化作用にせよ浄化作用にせよ。シオンに金林檎を試した時は、ハッスルして周囲構造物を破壊しやがった。

だがその黄金ならば或いは上手く行くか。シオンを沈静化出来るやも知れぬ。

或いはポーシヨンの原料に出来るかも。興味は尽きない。

「俺の勝ちだと認めるならば、コレをくれてやっても良いんだがな」

「だが……しかし……」

「うーん美味しい♡」

「あっ!!」

喰った。美味しそうだ。ついでに体力の最大値が上昇しているのかも。

「おっと早くしないと無くなりそうだぞ」

「ま、待て！ 提案がある!!」

観察していると、今度はピンク頭から交渉を開始した。

凄い。見た目は村人とはいえ、クリーパー的存在が話している。

特にソレと話すリムルの勇気に敬意を示したい。

「引き分け！ 今回は引き分けでどうだ？ 今回の件を全て不問

にするのだ」

「ほほっっ」

「も、勿論それだけではないのだ。今後ワタシがお前達に手出しをしないと誓おうではないか！」

「勝ったな」

さても落ち着いてきた。

IRPの問題点は多く見つかった。収穫は大きい。真のクラフトはこれからだ。改善改修に邁進するのみ。

「……ドラゴン」

「うん？」

「あ、いや……コイツらとは話が通じぬのか？」

「一応、通訳がいる。けどあまり伝わらないな。どうした？」

何か話したいのか？

「……なに。なんだか面白いヤツらだし、付き合っていけば退屈凌ぎになると思ったのだ！」

「まあ退屈はしないよ。通り過ぎて迷惑極まりない……今だって何考えてんだか」

よし。善は急げ。思い立ったら即実行。

IRPを格納庫へと戻す。今の技術力では敵対勢力に対処出来そうにない。

研究だ。何か方法があるはずだ。

創造主達は諦めない。強いてそれが取柄だとも思う。

なにより、達成感は一入だ。苦難の連続を超えた時の快感を皆は知っている。

何より物作りをしている時というのは、とても楽しいから。

35. 荒らし行為と修繕

「首都リムル……凄い所だな！」

「勝手に動き回るなよ!？」

IRP外部初期稼働実験終了後。

かのピンク頭はリムルと友達になったらしい。

にも関わらず地上で荒らしの如く走り回った。 迷惑だ。 被害が出ているのだ。

具体的には頭を撫でただけのドラゴン風村人を凄まじいノックバツクで殴り飛ばし、その余波で大通りが大破。 修繕を余儀なくされる。

他にも建造物の窓ガラスが割れたり、看板が壊れたり、景観の為に植林物が薙ぎ倒された。

更には街の記念碑の基礎を破壊されたし、木製ドアが何枚も吹き飛んだ。

「天を削るおつきな塔が建ち並び、綺麗な街並み、美味しい食べ物がいっぱいなのだ！」

「……ミリム様による被害報告が相次いでいます。 ドアノブに窓ガ

ラスに食器多数……中央通りの石畳100mに街路樹13本、農園の柵、水門のハンドル、ジュラ看板、建国記念日基部……」

「うわヤバ……わ、分かった! 俺からちゃんと言っておく!

国の代表としてミリムの友人としてちよつと強めに……」

「そしてこれがさつき届いた被害報告です」

「リグルド怒ってる?」

「滅相もない。 はははははは」

いつそ斬り捨てたい。 直しながら思う。

だが斬れない。 IRP総攻撃効果が見られない時点で、個人の武

装ではどうにもならない可能性が高い。

といつても黒曜石で封印する気にもなれない。唯一の救いなのは、知性が見られる点だ。

「……こんな時、アイツらが即直してくれるのは助かるが」

「本当なのだ。 凄く早さだな！」

「ミリム……次暴れたら飯抜きな」

「ええ!? 直るなら良いではないか!？」

「そういう問題じゃないんだよ。 なんでも暴力で解決するな。 皆が困る」

こんな時、リムルがいて良かった。

世にも恐ろしいピンク頭と交渉してくれるのだから。

シズを通訳として我々も文句を言おうとしたが、これなら大丈夫か。

あいや大丈夫であってくれと願うしか無い。

シズが襲われる危険性もあるし。

「……ところで、あのドラゴンは何処なのだ? あれだけ大きかつ

たのに見当たらないんだが」

「それで建物を壊して回ってたのか!？」

「ちゃんと扉から入ったぞ?」

「その扉と、開けた時の余波で内装がズタズタなんですけどね!？」

「細かいな。 アイツらが直ぐ直しているから良いのに」

「駄目だから。 アイツらの顔を見てみる、怒ってるぞ」

「とても良い笑顔だ。 歓迎してくれている」

「怒りを通り越してる顔だよ!？」

早くIRPをアップグレードしなきゃ。

そしてシオンを超える邪智暴虐なピンク頭を懲らしめるのだ。

因みにピンク頭はミリムという名だそうだ。

リムルと似て紛らわしい。シズが教えてくれたが、ピンク頭と呼称する。

荒らしだ。敬意を示す必要を感じない。

友達だとしてもだ。親しき仲にも礼儀は必要だ。少なくとも建物を破壊するな。度し難い。絶対許さない。絶許。

「あ、あのね……ミリムは魔王だから。とても強い。怒らせちゃ駄目だよ？」

強いのは既に知り得た。

だからといって我々を怒らせるのは良いのか。

「そ、そうじゃないけど。リムルが頑張ってくれてるから……」

シズはオロオロしつつ宥めてくれた。

そうか。そうだな。落ち着こう。

教えてくれた蜂蜜とやらをクラフト出来れば、ピンク頭を沈静化出来るだろうし。

それにとクラフター。

IRPの可能性も信じたい。その前に街に飽きて何処かに行くかも知れない。冷静になれ。らしくないぞ。客観的になるんだ。

「そうだね。きつと大丈夫だよ」

よし。取り敢えず地上は新規建築は控えて修繕作業に重きを置こう。

地下組は引き続き拡張工事、修繕とIRP研究だ。地下は幾らかは静かだろうし。

シズも来るかい？

「私は地上の皆、リムル達と一緒にいるね。 剣も練習していたいから。 それに、あまり多くで移動していると地下にミリムが来ちゃうかもよ?」

それは困る。

地下まで壊されるのは勘弁願いたい。

既に搬出路内はズタズタにされたのだ。 それでも地下まで来なかったのは昇降機の存在がバレなかったからだ。 危なかった。 相分かったとシズと別れ、一部の創造主は地下へと向かう。 ところが。

「……地下への道教えるからさー、ちよつとアイツらと遊んでなよー? ドラゴンもいるぞ?」

「リ、リムルーツ!」

シズが叫ぶ。 振り返った。

リムルが暗黒微笑して我々を指さしている。

次には昇降機の方角を指す。

全てを悟った。

裏切った! 我々を裏切ったな!?

我々の気持ちを裏切ったんだツ!!

リムルよお前もか!

友達だと信じていたのに!

お前まで荒らし行為に手を染めるのか?

誘導も立派な荒らし行為だぞ。 片手落ちの下衆に成り下がるの

か?

トレインスライム野郎ツ!!

施設群にクリーパー誘導するんじゃないよ!?

「あんまりだよ!?!」

「……おい。 その女はナニモノカ?」

「えっ!？」

「馴れ馴れしいなお前。 いったちよ揉んでやるのだ」

「や、やめろお!？」 シズさんは聖域なんだ、逃げてー! 逃げてー!!」

拳句にピンク頭はシズを襲い始めた。

シズの服が破かれていく。 いけない。 想定していた最悪の事態だ。

リムルによる失態だとしても過ぎた事は仕方ない。 解決に乗り出す他ない。

放置は出来ない。 悪友でもだ。

「ぐへへー、良いではないか良いではないかあ」

「い、いやあー!？」

「悪代官!？」 いやそれより止めるんだ!？」

ノックバック強化した練習用木剣を携えて突撃。 これしか無い。

効果は無いかも知れない。 それでもやるしかない。

剣を振り被る。 反射的に見られた。

それでも振り下ろす。

シズーッ! 今助けるぞーッ!

「ふっ! そんな木の剣じゃ、魔王どころかアリンコ1匹……ッ!？」

ピンク頭に剣先が触れた刹那。

ピンク頭が吹き飛んだ。 ノックバック強化分、ちゃんと。

「へ………?」

誰かが間抜けなハアンを上げた。

或いは我々だったかも知れない。 だって誰が予想出来ただろう

か。

IRPすら駄目だったのに、ノックバックのエンチャントは効果があるなんて。

「……ふ、ふふ……はっはっはっ!!　驚いたぞ!　痛くも痒くも無いが、まさか吹き飛ぶとは!　やはりお前達は面白いのだ!」

直ぐにピンク頭は戻ってきた。

傷一つ無い。

だが、やる気満々の笑顔で。

いや……だって……ねえ?

これ事故だよな?

正当防衛だよな?

困惑の空気のままに互いを見合う。
シズとリムルは目を白黒している。

「お、俺知らねー!」

「リムル。責任、取ってね?」

「シ、シズさあん……」

「はっはっはっ!　あのドラゴンも面白いが、お前達自身の方も面白そうだ!　あの創造主達だしな、今度はお前達と直接遊んでやる!」

ピンク頭と第2ラウンドが始まった。

インベントリを確認した。ダイヤツルハシとスコップ。土と丸石。

それから、シズと食べようとしたおやつのカッキーがあった。

ヤバイ。ダイヤ防具と剣が無い。

当然、沈静化作用を見込める蜂蜜も無い。

……ケーキでなんとか懐柔出来るか？
テンペストでは甘味は未だ少なく人気だし。

36. 戯とケーキ誘惑

「決闘罪に関する件」

「リムル」

「わ、分かっているよ……ミリム、程々にな」

さても場所。

摩天楼見守る不慮の事故現場に起立する。

木剣という到底実戦どころか自衛用ですら無い装備で強敵ミリムと対峙する。

しかも防具すら纏わない。 ウィザー級に対して先に仕掛けておきなからである。

中々の自殺行為だ。 事例がありそうだが。

それにしても、とクラフター。 不幸にしては出来過ぎだ。 あいや何も無いよりマシと思おう。

万が一死んでも看取る者もいる事だし。 リムルとシズが。 死して損失する貴重品も無い。

「なーに、棒切れに当たらなければ良いだけだろ？ お前達の剣術は雑に過ぎる……ただミリムアイでなくとも分かるぞ。 その臆しない目、自信に満ちた態度、微塵もブレない剣。 何より摩訶不思議な創造力で激烈に数多なモノどもに打ち勝ち生きてきた事は、なあ！」

踏み込んできた。 速い。 瞬時に丸石で防壁を作った。 相手から姿を隠す。

「それで身を守ったつもりか？ 石壁諸共、破壊してやるのだ！」

「街まで壊すなよ!?!」

「リムル、そこじゃない!?!」

即効率強化及びシルクタッチのツルハシで石畳を叩き割り、間髪入れずスコップで直下掘。即席蛸壺に飛び込んだ。
当然石畳で蓋をする。真暗になったと同時に、丸石が大破する音が響き渡る。

「むっ!? 何処に消えたのだ!?!」

このまま直下掘して地下に逃げる手段もあるが、それだとシズを救えない。

何とかして魔王とやらを沈静化しなければ。

左手にツルハシ、右手に木剣を構え直す。緊張の一瞬を待つ。

足音が真上に来た。よし今だ!

「おほっ!」

「ミリムの足下から!?!」

相手は空を飛べる様だが、だからなんだ。

剣先が届けば良いのだ。不意打ちでも構うか。

凄い速さで回避された。が、剣の僅かな先が靴底に刺れた。も

れなく空に吹き飛んだ。

「今ので当てたのか!?!」

「回避された様に見えたけど……」

「あっはっはっはっ! 今度はワタシが空に打ち上げられてしまったなあ!?! だが、空に浮くワタシに攻撃は出来まい?」

降りて来ない。滞空している。

いつかのシズもそうだった。本当どうやっているのだろう。

気になる。

だが今は今だ。飛び跳ねながら真下に土を置きつつ地上に這い

出る。

それ以上は上がらない。 戦闘中に身を晒しながらの高度上昇もまた自殺行為だからだ。

叩き落とされる新参者を沢山見てきた。 同じ轍は踏みたく無い。

「ミリムー！ もう止めとけよ？ マジで飯抜くぞ？」

「うっ……いや、ワタシは様子を見ているだけだぞ。 ほら、何かしているのだ」

次にすべきは……ケーキを道に置いた！

「ケーキを路上に直置きツ！」

これ見よがしに一切れ食って見せた。

どれ食べたかろうと。

「しかも食った!? 汚ねえよ！」

「食べれる時に食べないと……そう。 拾い食いであっても」

「シ、シズさん……？」

「な、なんだそれは!? それも美味そうなのだ！」

どうした魔王ミリムよ？

ギラギラした目線を隠せてないぞ？

そおら、また一切れ食べてしまった。 もう半分しかないぞよ？

「ま、待て！ 今降りる！ 降りるから！ これまた引き分

けて事にしてやるのだ！」

降りてきた。 ケーキを指差し食わせろと懇願している。

クラフターは満面の笑みで譲ってやった。

そうだ。 これが”落とし所”だと。

「ムグムグ……こ、これは！　甘くてフワフワで美味しいのだ！

これまた初めての味わいなのだ！　ワタシは今、猛烈に感動しているー！」

「俺は困惑している。　拾い食いというか、なんというか。　教育に悪い光景だもん」

「食べれるだけでも有り難いと思わなきゃ」

「シ、シズさん……昔ナニが……戦時の影響か、それとも魔王の時？　ギルドの時？」

蜂蜜でなくても沈静化。　実験は成功だ！

やはり甘味は興奮している者を大人しくさせるのか。　皆が皆では無いと思うから、これまた研究対象だろうけど。

この件は、創造主達にサトウキビ畑ビルの建設を決意させるに至る。　思えばまだ無いのだ。

ここでは砂糖は貴重品らしいし、皆が喜ぶなら我々創造主も嬉しい。　

キツカケは事故とはいえ……しゃがみこんでいるミリムを見下ろした。

地面に転がるケーキをモシヤモシヤするミリムは今、沈静化しただけでなく良い笑顔だ。

この笑顔を沢山クラフト出来るならば、高度限界ビルの建設をしたとしても、やぶさかではない。

なにより、皆の喜ぶ顔が我々の笑顔にも繋がるのだから。

「そう……そうよミリムちゃん。　一切れ残さず、一粒残さず食べるのよ……ふふふっ」

「シズさん帰ってきてー!?!」

創造と甲斐。

37. 作る”子と”生きる事

「お前はオークロードに近い者だな。 最も……本当に進化する事はなかったが」

まだお天道様が頭上にいる頃、ミリムのハアンが響いた。

それも村人の建築現場だったから気が気ではない。 クリーパー的存在が現場に立ち入っている……寒気がした。

毛穴全開。 悲劇発生数秒前。 TNTの感圧板を踏み抜いた感覚より酷い。

村人が住まう村を幾度か見てきたが、こうして自ら建築している現場はこの世界で初めてだ。 元の世界では見た事がない。

故に貴重且つ重要な現場の1つであり、創造主としても興味深く見学していた。

そんな時にピンクの悪魔の襲来だ。 恐怖体験ビフォーアフターは見飽きたのでやめて下さいお願いします。

「それだけの力があるのに、何をチマチマとやっているのだ？ 武をもって威を示したいと思わないのか？ それはそんなに面白い事なのか？」

ミリムが作業員のピッグマンに建築に関する疑問を投げている。

言葉は分からない。 だが携わる者故か分かる。 恐らくそうだと。

だが楽しいな雰囲気ではない。 知的好奇心から来るワクワクやドキドキがミリムからは感じられない。 笑顔が無い。

クラフターは思考する。 恐らくだが、ミリムはクリーパー同様に破壊ばかりで創造した事はほぼ無いのだ。

やれば分かる。やらねば分からない。その初手を教えたい。クラフトを。その愉しさを。

「……これは私に与えられた仕事ですから。ただ言えるのであれば、何かを作り出し残すのは甲斐がある。特にこの想いは……あの者達が誰よりも知り得ていると思います」

さてもどうすれば良いか。

甘味で釣ろうと建材を握らせようとツールを持たせようとしても失敗する未来しか見えない。

だからと放置したくない。危険だから、というのもあるが、またあの笑顔を見たいのだ。

見せて欲しい。柄にも無い。だが本心だ。創造主がこの世界で得た物は数多ある。

仲間、友人、村人。他者からの喜怒哀楽は常にそうだった。それは創造力の原点にして源である。生きる活力である。

無機物からは決して得られない唯一無二だ。笑って欲しい。それは温かい。例え罵倒されるにも評価されたい。

この心情はマルチクラフターの皆の内に抱く事柄だが、悲しませようとは露程も思わない。

稀に現れるが、そういう奴は斬り捨て御免としてきた。或いは封印。

何故とは考えない。故にと動く。そうしてきた。これからもそうだ。

そうして生きているし、生きていく。

「ふーん……よく分からない……いや、少し分かるかも知れぬ。この者達も見ているしな、もうちよつと見てて良いか？」

「どうぞ？」

「そうだ。創造を享受させるのは？」

甘味に興味を示したのだ。自分に利のあるモノであれば、或いは作ろうとも考えてくれるかも。

地下のIRPと対峙した時も笑顔であった。戦闘中にも関わらずだ。

それだけだと荒らしのソレだが、多少は物作りを理解するかも知れない。

あの猛毒を生み出すシオンとやらも、クラフトする後先は笑顔であるし。生み出されたモノは到底享受出来ないが。間違つても体内には入れたく無い。二度と。

「なあ、お前達」

声を掛けられた。

笑顔なきミリムである。疑問の表情だ。

「お前達はそんなにこの国が大切なのか？ 怖くはないか？ み

んなが、沢山の建物が、沢山の大切なものが……繋がりが1つでも欠けたらと考えたら……ワタシは怖いのだ」

ナニを数えている様子である。

クラフターは首を傾げた。消費される建材やデザインに関する

疑問か。

或いは破壊してきた建築物か。罪の数か。

「大切なのは……いつだって……小さくて……呆気ない程、脆い。

きつと……お前達は後悔するのだ。ドラゴンだって……作つた事を後悔するのだ。その時お前達は耐えられるのか？ 今のままではいられなく……」

ぽんつ、と頭に手を乗せた。

笑顔を向ける。　大丈夫だ問題無いと。

「えっ？」

ミリム。　事故で壊したならば幾らでも我々が直してやる。　だから安心しなさい。

そして振り返るな。　前を向け。　壊して失うばかりが人生では無い。

これから君には作って欲しい事がある。　例えばケーキとか。好きでしょケーキ。

「ふんっ……お前達もガビル同様に、いや。　それ以上に……」

ミリムも笑顔になった。

それもまた、作って欲しかったものだ。

「馴れ馴れしいのだーッ！」

刹那、殴られた。　凄いノックバックだ。

ダイヤ防具有りでも瀕死に追い込まれる位に強かった。

これは我々も笑うしか無かった。

38. 寝起きの洞窟と薬

「リムル様、皆様お待ちしておりました」

クラフターは久しぶりに初期スポーン地点に帰還した。

あの寝起きの洞窟だ。特に用事も無いと半放棄していたのだが、村人が住み着いたというので出向くことにしたのだ。

リムルも志を同じくしたらしく、共に訪れている。

「良く無事だったなお前……」

「いやなに回復薬のおかげです。 はっはっはっ」

「その回復薬というのは、ミリムのボディブローをくらった負傷を治したモノだな？」

「はい。 いやあ、あの時持っていて命拾いしました」

「一応、殺す気はなかったらしいぞ」

ハアン会話をリムルとドラゴン風村人がしながら奥に進む。

懐かしい。 相変わらず旧施設群が破壊される事なく鎮座している。

村人が住み着く関係か、多少設備が備わっているのが、微々たる変化だ。

尚も豆腐が陳列している光景は我々の少ない初期資源と駆け出しの頃を象徴している。

それでも外の世界へ飛躍する足場となった事に違いはない。

時に感傷に浸り、思いを馳せる。 先人の努力を偲ぶ。 郷愁にも似た感覚は好きだ。

確かに世界に存在し、今まで続いてきた歴史そのものであり、その証拠がこの光景なのだから。

「よう調子はどうだ？ ベスター」

やがて最奥に来た。

いつかの観光地で見た村人がいた。何故か。

何者かがこの地に連れて来たらしい。

詳しくは問わない。来る者拒まず。

ただあの頃と違い、かつての険しい表情はしていない。その上で

ポーションのクラフトをしている。

それは我々も知らぬ効力、いや。それを底上げしたものだ。

「……こちらが最新の回復薬です。どうでしょうか」

「ふむ……俺（大賢者）が作っているのと同じだ」

「ということとは……？」

それは回復薬。治療のポーションだ。

原料は違う様だが、興味深いものだ。

それも我々より効率が良い。回復量が高いのだ。

「フルポーションだ。やったなベスター」

刹那、うおおおおおと歓声上がる。

洞窟内に木霊してやかましい。

だが分かる。新たなクラフトが開拓されたのだと。道が開け

たのだと。

「ありがとうございます！」

「いやいや。成し遂げたのはベスターだろ」

「ガビル殿、そしてこの者達の影響あつてこそです」

「うん？　何かこいつらがしたのか？」

その快感を思えば、我々も自然と腰が振れるというもの。

ガクガクと腰を動かし、首を回し、腕を振り回す。

喜べ。新たな創造主だ。歓迎せよ。願わくばその創造物を貰いたい。そして享受し研究して作れる様にしたいところだ。

「はい。ここが彼等の技術により整備され施設群が建ち並んでいるのもそうですが、お陰でポーション作りの実験室の整備はスムーズでした。そして彼等もまたポーションを作るのですが、その道具類の性能も目を見張る物が多く大変勉強になったのです。原料は知らないものでしたが、ヒントを得つつ成し遂げた形です……改めて皆様、ありがとうございます！」

お辞儀された。よく分からないが我々もお辞儀する。これからもクラフター同士、仲良くしていこうではないか。

「……偶には褒められる事もあるな、お前らも」

さて薬開発も興味深い分野であり、ここに居残り研究する者達もいるにはいるが。

創造における研究分野とは沢山溢れている。どれも強制されない自由な一方であり、時に全てを学びきれないのは残酷な優しさだ。

ここに僅かな同志と少しの寂しさと大いなる期待を残し、我々は再び外に出る。

料理、建築、エンチャント、IRP……。

やりたい事、試したい事は山程だ。だが足を止めては勿体ない。世界は広大だ。

未知への探究心がある限り、我々は創造主として生きていく事ができる。

「ところで、この者達が持ち込んだものが」

「へ？」

「この食器に乗せられた禍々しい物体なのですが……料理には見えな

「いので劇物ですよね……?」

「これシオンの料理!? お前ら拡散するんじやねえよ!?!」

リムルと村人達が騒いでいる。

新たなポーシヨン原料に歓喜している様子だ。

そうだ。嬉々として研究しなさい。我々が到達出来なかった新天地を見る事が、ひよつとしたら君達に出来るかも知れないのだから。

39. 村人農業と価値観

「ほんらほらほらほら、そつごぽんつく共！ のさぐさしでつど、あーつちゆう間あに日い暮れつちまうど（ジユラ訛り）！」

手持看板をバンバン叩いている村人がいる。

周囲は畑だ。畑の管理者らしい。

収穫時期らしく、周りに収穫指示を出している様にも見えた。

そんな対象となる広大で豊かな畑。ジャガイモだったり人参だったり、小麦のようで違う金色の絨毯が広がり美しい。

我々が持ち込んだ種を植えているのもあるが、大半は村人自らが稲作していた。

努力の結晶ともいえる穀物が大地の養分と村人の汗水垂れる努力の中で育成されてきたのである。

ビル型では見られない、かつて我々も経験した光景でもある。

見分け方で分かりやすいのは、ビル型か従来の地面を耕すかの違いだ。

原始的だと愚弄する気は微塵も無い。寧ろ興味深い。畑も村人自らやっているのだ。建築同様、学ぶべき点が多そうだ。

特に効率のみを追い求めてビル型を発達させている中で忘却していた美しい光景だと思う。

「リムル様ん前でこっぱずかしーナリ見たーしやー？ 畳んで

刻んで畑ん肥やしいなっが!? あ？ ちやーんど働えで美味え

マンマあ喰いてえべ!? そうだべ!？」

「ふあつ、ふあいつー！」

威圧感を持つてして作業員達を叱咤激励している様に見える。

いよいよ暴力にて訴えている相手もいる。ミリムや……というか、今までの経験を思うと可愛らしい光景だった。寧ろ和む。

思えば我々も先輩達に酷い目に遭ったなあ。つらつら思い出されるは、騙されての奴隷の如き巨大建築共同作業や非人道的人体実験、強制労働による日を拝めぬ延々の鉱物資源採取。

うん。思い出したく無い。自由万歳。

「……リリナさんは機転が利いて働き者、なにより美人で有能……うん。でも少し怖い」

「作業は順調です」

「あ、はい」

「昔から相変わらずですなあ……」

クラフターは別の方向にも目を向けた。

決して過去から目を逸らした訳では無い。

田畑の勉強をするにも、様々な方面がある為だ。穀物の種類と広

さだけ作業員も様々にいる。

芋畑に目を向けた。

シオンとミリムがいた。意外と共に見かける組み合わせだ。

「いざ勝負!!」

「芋掘りの!!」

「君たち、それで良いの? はかどるけどね」

凄い速さで芋掘りが行われている。

競っている様子だ。早い。瞬く間に芋が掘れる。我々より

早いかも知れない。

一方で緩やかな者もいた。落ち着いた情景も見たく、其方へも向ける。

純粋なジャガイモ畑では、いつかの植物村人が作業をしていた。

「ど、ドライアド様に芋掘りをさせるなんて……」

「いいんですよ。ドライアドは元々ジャガイモから生まれるので

す」

「共食い!？」

「……でまかせなのか、マジなのか」

一方で田んぼとやらの方へ目を向ける。

陽光に輝く黄金色の絨毯かの様な穀物が育っていた。

それはドラゴン風村人が担当している。

「うおおおつ……許せ!　こんな美しい光景を奪う事を!」

「耐える!　耐えるのですガビル様!」

何故か号泣しながら刈り取っていた。　謎だ。

他の方面……未開拓の森の中から賑やかな声が聞こえるし、それは方々に様々だ。

全て気になるが全てを知るには時間が少ない。　総じて実りある話と光景であるとしても、全てを知らないむず痒さ。

取り敢えず見失ったリムルを探す。

いた。　森の方だ。　シズに擬態してキノコを掲げている。

知らないキノコだが、重要なのだろうか。　そこら中に生えていたが。

「この色、この形、この香り……松茸様が大量に!!　でかしたぞ!」

「いや……そんなのそこら中に生えてるっスよ。　珍しくもないス」

「一応採ってきただけですね」

「あまり美味しいとは思えませんし」

「よろしければお好きだけどうぞ」

「……………」

食用に出来たのは知っている。

取り敢えず齧ったり釜戸で焼いたり馴染みのスープにして食った。好みは分かれるキノコであった。

ある者は不味いと言い、ある者は美味いと言う。 足裏の臭いだと言えば香ばしく好きと言う者もいた。

「おまえも変わってるな」

「……みんな時々つめたい……本当は俺もそんなに好きじゃないんだ……松茸（これ）」

建造物にも好き嫌いがある様に、食料にも好き嫌いがある。

視野の面でも無い方が良いが、やはり無理する必要はないと思う。

負のオーラを出して座り込むリムルの頭を撫でた。 良いじゃないかと。 リムルがどちら側だろうが大きな問題ではない。

自分が自分でいる事が大切であるぞよ。

「いつも温かいな、お前らは」

笑われたので笑い返す。

そうだ。 好き嫌いあれど笑ってるのが1番良い。

40. 砂糖と浮かぶ笑み

「あのプラントビルの中、サトウキビか!？」

皆の笑顔量産の為、サトウキビ畑ビルと量産を開始した創造主達。例によってビル型。RS回路とピストンを利用した、既存技術による回収方式である。

ただしサトウキビは他と少し違う。根元含めて縦に約3ブロック分伸びる。根元より上の2ブロック分を刈り取るのが基本となる。

そうすれば再度根元から成長してくれるからだ。スイカやカボチャに似て非なる植物だ。彼方は横に実がなるし。

強いて挙げるならカカオ豆か。ああ、それも生産しなければ……。

「……というのは?」

「砂糖が作れるという事だ!」

「なんと!」

驚愕のハアンが早速聞こえる。

良いぞ。それが笑顔に変わる時が1番の楽しみだ。

「お砂糖は高級品で食べた事ありませんでしたが、ハチミツほど甘いものなのですか?」

「ああ。砂糖があれば料理の幅が広がって、甘いお菓子なんかも作れるようになる」

「「甘いお菓子……!!」」

砂糖以外にも紙の原料に出来る。それは本や地図に利用出来る。景観の為に植える事もある。例により水際でなければ植える事

が出来ないが、黄緑色の笹葉は建造物によっては似合う。帯刀村人達が好む和風建造物が良き塩梅だろう。

「……なるほど理解しました」

「え？」

「お砂糖が手に入るならば、あと必要になるのはお菓子のレシピです！」

「はいシユナ様。このシオン、一命に代えましてもレシピを発見してご覧に入れます」

「うむ。頼んだのだっ！」

「……君ら、いつの間に仲良くなったの」

既に小躍り状態である。益々応えねば。RS配線を施しピストン動作異常無し。

水流良し、サトウキビ良し。後は成長するのを待ち回収するのを待つばかり。

「しっかし相変わらず凄い建造意欲と技術だな。元の世界でも植物工場の話は見聞きした事はあるけれど、ここまでは造れないだろうな……強度とか止水処理とか設備面の問題とか何故か無視出来るしお前ら。光の明るさ、色とか土とかも関係なさそうにしているし。いや俺が知らないだけで細々考えてる？」

サトウキビは楽で良い。植え直す必要が無い。実に結構。他の穀物もこれくらい手が掛からないなら楽なのだが。

まあ、そんな面倒すらクラフターは愛した。

どんとこい。全て上手くいったら詰まらない。受難を乗り越えてこそ価値が生まれる。甲斐がある。創造主達の腕を動かす原動力になっていく。

「では私が試行錯誤して……」

「それは止めろ」「止めなさい」

「へ？ 何故です？ 彼等を見習って、作る事への意欲を……何より愛を込めて」

一転、リムルと周囲の帯刀村人の仲間が暗くなる。 何故だ。 明るくなれば暗くなる。 スイッチのオンオフが激しい生き物だ。 人の事は言えないが。

「君は先ず受け取る側の気持ちをだね……」

「彼等は快く私の料理を持っていってくださいますよ？」

「振る舞ってたの!? だからか、洞窟以外にも被害報告が増えていくのは!?!」

「シオン。 お兄様の、ベニマルの許可は？」

「え？ あ、いえ、そのお……ほんの少しの量でしたし……」

「シオン。 暫く厨房出入り禁止だツ!!」

「そんなリムル様あツ!?!」

RS回路より複雑そうだしなあ、思考回路。

まあ、そんなクラフト談にも色々あるよね。

クラフターは頷いて見せる。

取り敢えず砂糖量産の暁には、笑顔の数など者の数ではないのだ!

訪問者

4 1. 訪問者と殴り合い

「ここは良い町だな。魔王カリオン様が支配するに相応しい……異質感が凄いが」

見知らぬ者達が街に侵入して来たから、荒らしかと思って包囲した。

当然、ダイヤフルエンチャント装備の完全武装で取り囲む。四方を囲むビルの窓からは既に狙撃態勢を整えた同志が構えている。

この世界、特にミリムとの戦闘から得た数少ない教訓だ。インベントリには黒曜石もある。常に破壊と修繕を余儀なくされる日々の危機感が迅速な行動を可能にしていた。

尚、場所をバラされた地下格納庫含むジオフロントはミリムによりボロボロだ。

それもまた素早く直したが、IRPの研究時間は割かれてしまった。格納庫もズタズタである。外殻が黒曜石製IRPは壊れなかったが、周囲の整備通路等が大破。それも直した。

ミリムが恨めしいが、場所を教えたりムルがそれ以上に恨めしい。いつかシオン級毒ポーションを投げつけてやる。我々は密かに決意した。

「おや、魔物ばかりかと思えば人間もいるのか。拳句に魔物を守る様な行動を。滑稽だな」

不敵に笑うリーダーらしき村人。

よく見れば尻尾らしきモノが生えている。控えている者達も、どこか獣風だ。

この世界はそういう村人が珍しく無いから今更に驚きもしない。

問題はコイツらがミリムの様な荒らし野郎かどうかにある。警戒は怠らない。

「だがお前らが束になったところで、この俺を倒せる訳が無い。死にたく無ければさっさと失せな」

威嚇している。 獣らしいと思えた。

ならば懐柔出来るかも知れない。

犬かと思えばそれでも無い気もしたので肉は止めよう。

金林檎とジャガイモは事故事例があるので与えない。 代わりにケーキを与える。 ミリムに効果絶大だったからだ。

目の前に直置きした。 どうだ。 たんと食え。 笑顔を見せろ。

「……………食えと? 畜生らしく這い蹲り食えと?」

プルプル震えている。

歓喜に打ち震えている。 感動したか。 それもそうだ。 ケー

キ製作は手間がかかる。 しかも一旦置いてからでないと食えない。

何故か知らない。 故にと置くが。

だが見た目が良い。 飾りとしても機能するし、分けて食う事でコミュニケーションのキツカケにもなる。

それに甘味だ。 イケる。

そう思ったら我々も笑顔になった。

そうして友になる。 そう思ったのだが。

「死にたいらしいなツ!!」

何故かキレた。 殴られた。 またも凄いノックバックだ。 死

にやしなかつたが。

参った。

懐柔成功率が低下気味だよお…………。

「舐めやがつて！　この程度で済ませてやるが、次は……ッ!?」
「お前ッ！　ワタシの友達にナニしてる！　許さないのだ！」

今度は聞きたく無いハアンが聞こえた。　ミリムだ。　凄い速さで獣村人に突撃している。

「なっ……魔王ミリム!？」

そのまま問答無用で殴った。　もれなく獣村人は動かなくなった。　白目を剥き、口から泡を吹いている。

「フオビオ様ッ!？」

周りは動揺しているが、創造主達はこの程度の出来事に対応出来ない新参では無い。

不意打ちのクリーパー被害より対処は楽だ。　具体的には黒曜石でミリムと我々の間に壁を作った。　咄嗟の判断。　振り向きざまの拳は味わい飽きている。

「何の騒ぎだ!？」

「リムル様！　連絡が遅れ申し訳ありません、実は警戒網を抜けた反応があります……来てみると複数人の魔人が広場におりました」
「……そのリーダーらしき男は気絶してるんだけど」
「ミリム様がその……あの男がひとり殴り飛ばした為、庇う為に峰打ちを」

「……そのミリムはどうしたんだ。　地面に転がってるケーキを食べてるんだが」

「……殴られた者が用意した物です。　本来は魔人に与えようとした様ですが、それが気に入らなかつたらしく……」

「地面に直置きされりやな……馬鹿にされたと捉えられたんだな、う

ん。想像に難しく無い……大体あらましは分かったよ」

ミリムはケーキに夢中だ。笑顔満開。
良かった。食べてる間は殴られない。

黒曜石を効率強化ダイヤツルハシで撤去しつつ、胸を撫で下ろす。
どうしてか荒らし組もこれ以上攻撃してくる様子も無いし。
そもそも荒らしじゃなかったのかも知れない。殴るくらいの戯れ合いはクラフター同士でもやる事だ。

……アレは彼等なりの挨拶だったのか？

「ミリム。俺の許可なく暴れないと約束していなかったか？」

「うえ!? これは……これは違うのだ! この町の者ではないからセーフ。そうセーフなのだ!」

「アウトだよ。だがまあ今回は昼飯ヌキで許してやるか」

「なっ!? ヒドイ! ヒドイのだ!! くそう、これも全てこいつが悪いのだ。1発では飽き足らぬ……っ!」

「待て待て待て」

ケーキを食べ終わったミリムがまた泣き出した。かと思えば、また先程の村人を殴ろうとしている。

無抵抗の村人を殴る趣味は流石に頂けない。クラフターは間に割って入る。

「何故止めるのだ!?! コイツはお前を殴ったのだぞ?!」

「それミリムが言う? 君も散々コイツらを殴っていたのを見た事あるけど」

ケーキを再び置く。そして食え。

そして泣くな。泣き顔は似合わぬ。笑顔が良い。

「……またくれるのか? ありがとうなのだ。でも、どうしてそ

こまでして止めるのだ？」

「……それはそうと直置き止めろお前ら」

クラフターは笑顔で頷き譲る。

沈静化の為にストック出来ぬコレらを持ち歩くのは、魔王ミリムの為だ。

殴られない為と殴らせない為でもあるが、1番の目的は君の笑顔の為である。その為にクラフトしたのである。

「……美味しい。落ち着く……でも……お前達は相変わらず不思議なのだ……」

「ともかく場所を移すか。一応、あちらの言い分も気になる」

移動を始めるリムルと他面々。

我々も臨戦態勢を解き、後に続いた。

4.2. 静かな恨みと騒ぐ者

『警告。 個体名フオビオのエネルギーは個体名ベニマルを上まわります』

「フオビオ、思った以上に大物か」

またいつかの様に皆が集まり会話が始まる。

シズはハクロウなる人物と剣の稽古をされていていない。

なら我々がいる理由が無いとしたいが……ミリムがいる所為か放置出来なかった。

「……で、君達は何をしに来たんだ？」

「スライム風情に答える義理はないね」

ハアンと言えば他がザワつく。

いつも通りだ。 この世界、どこ行ってもそうなのだろうか。

「いいから下がってろ」

「は……」

「は！　こんな下等な魔物に従うのか。 人間もいるし、雑魚ばかりだと大変だな！」

威勢を張っている。 殴られた後だというのに元気である。 結構な事だ。 一度程度で済んでいるからであろう。

我々なんかミリムに散々建造物や設備を破壊された。 修復材は個人のストレージを優に超える。 刺したい。 でも吹き飛ばばかりである。 この怒りは吹き飛ばす事ではか発散出来ない。 出来るだけマシだろうが。

「そう言うからにはお前の主はさぞ大物なんだろうな」

「ああ？　当たり前だろ。　お前カリオン様を知らねえってのか？」

「では言葉に気をつけろ。　そもそも先に手を出したのはそっちだ。　お前の態度次第では今すぐ俺達は敵対関係になる。　このジュラの大森林全てを敵に回す判断をカリオンではなく、お前が下すのか？」

木炭と棒を組み合わせて松明を作る。

手慰みだ。　この時間はする事が無い。　シズがいればハアン合唱にも意味を持てるのだが。

「……ちつ。　スライム風情が吹かしやがつて」

「なんならドライアドを呼んで俺の支配領域を証明しようか……若しくはコイツらの植林場の範囲」

我々もシズと打ち合おうかなあ。

木剣をクラフトしたのも、元々それが目的だ。　毎度事故に巻き込まれて纏れ込み、結局は目的を遂行出来ず、それでも携行をしているコレ。

エンダーチエストに放り込もうとしたが、やはりいつどこでチャンスが来るかも分からないので携行している。

「フォビオ様……」

「……ここへはカリオン様の命令で来た。　お前達を配下にスカウトしろとな」

「……魔王カリオンに伝えてくれ。　日を改めて連絡をくれれば交渉には応じる、と」

「……きつと後悔させてやる。　そこの妙な人間共といい、全員な……」

また何事かハアンと鳴けば、ドスドスドスと外へと出て行く外来村

人達。

政は知らない。ある事で保証と一定の権利を得られるらしい。便利ながら窮屈な世界である。それを利用して生きていると思えば面倒な者達だ。

ただそれが世界の在り方なら仕方ない。我々はマルチクラフターだ。何となく分かる。同時に自由とは何だろうか。

「よし！　　フォビオとやらが行ったし、また地下で遊ぶぞ！　　そろそろあのドラゴンを動かしても良いのだぞ!?!」

だがコレは分かる。

ミリムの様な自由行動は荒らしのソレだと言う事を。

43. 再会と新規

「なんでこんな目にいいいいいいっ!？」

「お前がナイトスパイダーの巣をつついたからだろうが!!」

いつかのように森が騒がしいから行ってみれば、大蜘蛛だった。中々の速さで移動中。逃走している村人を襲おうとしている。

「死んだらカバルの枕元に出てやるんだからねくくっ!」

「そりや無理つてもんだ!　　つてこのやりとり前にもしたな!」

よく見れば村人トリオと……ひとりは知らん奴だが。

旧友だ。助ける義理がある。

迷わずクラフターは、またいつかの様に真下に土を積み上げ高度を上げる。

全体を見渡せる位置で弓矢を絞り、一斉射撃。相手はデカイ。この距離で外す創造主ではない。

「うおっ!?!　　どこからともなく矢が!」

「あ!　　あそこにいる、土柱の人影達は!」

「あの人達でやす!　　あの時と同じでやす!」

当たった。もれなく針山になる。動かなくなるまで矢を刺しまくる。

見た目相応に体力値が高い。こういう奴は安全圏からチクチクするのに限る。チャンバラなんてとんでもない。試合でもあるまいに。

「知り合いか?」

「ええまあ……魔物の町の主の友人的な?」

「曖昧だな……」

「何故か言葉が通じないのよお」

「でも良い奴らでやすよ」

土柱を壊しつつ、トリオの元へ向かう。

剣に持ち替えるのを忘れない。前は伏兵がいたが為に。我々

は学ぶ。考える輩である。

ミリム等のウイザー級に相對する時もだ。

ひとりひとりは弱い一茎の如く虚弱で悲惨な存在でしかない。

だが思考次第で世界をも抱擁出来るのが創造主だとも愚考する。

逆に無限と無という相矛盾、二律背反の中で揺れ動く俗世と生命の存在は何であるか？

ここに我々や生きとし生けるものの尊厳と偉大さがある。

個人による思考は正義と悪同様に様々であるから、議論はしない。

今は今だ。やるべき事、したい事をするのが真つ当である。

「なんだ。来てみりや終わってんじやねえか」

何か村人が増えた。この辺に村は無い筈だが。

なんにせよ敵ではないか。剣を仕舞う。

更にケーキを置こうとしたが、やめた。利無き敵対は勘弁だ。

代わりにベイクドポテトを食う。戦闘前後は満腹にしておきたい。

それによる体力の自然回復は緩やかだが、馬鹿には出来ないものだ。

我々は元の世界でその重要性を既に知り得ている。腹が減っては戦は出来ぬのだ。

「誰だあんた……」

「ファルムス王国調査団長、ヨウムだ」

「ヨウムさーん！ 急に走ってどうしたんですか!？」

「……で、あの眼鏡の若造がロンメルだ」

なんかハアンハアン鳴き合い始めた。

ポテトを食いながら眺める。シズがいなければ内容は妄想するしかない。

あいや我々は考える。ハアンハアン合唱にもちやんと意味があるのをこの世界で知り得たのだ。

我々は学ぶ。ハアン語なるものがあるなら解読したい。

我々も痛感時のウオツなる悲鳴ではなく、ハアンと鳴けば距離が縮まるかも知れぬ。

「なんだ、先に仕留められちゃったす。良いっすけどね、楽しんで今日の晩御飯手に入ったすから」

また増えた。

が、此方は知る村人だった。ゴブタという村人だ。

大蜘蛛の亡骸を捌き始めた。素材収集か。分かる。蜘蛛の

糸とか。

悪性食料の蜘蛛の目は食いたくないが、これだけ大きいのだ。他の部位は食べ甲斐があるかも知れない。

それに所変われば品変わる。つまり美味しいかも知れない。

楽しみが増えたな。人生こうでなければ。

「……一気に賑やかになったな」

「俺はフューズだ。ブルムンド王国のギルマスで、コイツら三馬鹿の上司に当たる」

「で、そっちの魔物は？」

「ゴブタっす」

「……ゴブタ君。君に頼みがある。この辺にあるという、魔物の町に案内を頼めるか？」

「良いっすよ。皆ついて来るっす！」

「俺らもついていくか。目的地も内容も同じだろうし」

「という事は？」

「得体の知れない人間達が混ざる、魔物の町の調査、さ。多分ソイツらの事だろうが」

「……やはり噂は無視出来んか」

ゴブタの手が鈍い。 良し。 手伝おう。

取り敢えずドロップ増加のエンチャントを施したダイヤ剣で死骸を切り刻んでいく。

本来は死ぬ前に切るべきだが、仕方ない。 安全が優先だ。 実験も兼ねる。

うん……？ まだ少し息があるか？

斬り捨てた。 明らかに増えた。

おお諸君、増えたぞ！

元より得するとは気分が良い！

次は完全なる死骸に試すべきだ。

その条件の場合、増えないと思うが決めつけは良くない。

「……笑顔で切り刻んでるぞ!？」

「おい！ 本当にコイツら大丈夫なのか!? サイコパスじゃねえ

のか!？」

「だ、大丈夫でやすよ。 たぶん」

「たぶん!？」

「おー！ 相変わらずアンタ達の剣は謎で凄いつすね！ 可食部が増えたつす！」

「それ食えるのか？ 食って平気なのか!？」

「あ、街まで行くついでに運ぶの手伝ってくれるつすか？」

「……アンタも大物の気配がするよ」

ストレージに入りきるが、どうやら彼等も運んでくれるらしい。

ご好意に甘えよう。 礼としてお辞儀した。

「コレ鍋が良いっすかねえ……今から楽しみっす。あ、これだけあるから皆さんの分もあると思うっすから、そこは安心」
「やっぱ食うの？　これ食うの!？」

食とは娯楽の一種だ。

かと思えば命を未来へ繋げる重要性がある。

一方で火種でもある。キノコの論争規模で済むなら良いが、そうでない事もある。

ケーキの件もそうだ。悪性食料を与えられて憤慨するなら理解出来るが、アレは手間のかかる高価な嗜好品だ。贅沢だ。

只で貰えるだけで有り難い筈なのに。ミリムは喜ぶが他は駄目だったりする。謎だ。

食は奥深い。美学であり哲学である。

そして我々は考え思う。

要するに好き好きじゃね、と。

「まあ食ってみれば分かるっすよ」

だがシオン。彼奴の出す汚物は悪性食料で間違いない。悪食リムルすら拒否反応を示す程だから。創造主は存じているのだ。

44. ハアン集会と思い出し

「というわけでお客さんっす」

また村人が集合したから、我々も出向いてみた。 何でとは思わない。 何でもだ。

「それで何の用だって？」

「知らないっす！」

「おい!？」

尚、運ばれた素材は予測通り厨房だ。

どうクラフトされるのか気になるが、そちらは別の同志が査察する。

後で聞こう。 こういう時、あれもこれもと個人では無理でもマルチでは可能だ。 改めて仲間のいる世界に感謝したい。

「……失礼。 私はフューズと申す者。 ブルムンド王国のギルドマスターをしております。 私の目的は貴方に会う事ですので、ゴブタ殿に案内を頼んだのです」
「俺に会いに?。」

勿論、仲間に頼り切るのも良くない。

だが相互協力してこそ真価発揮する創造もある。 時間短縮もそうだし、効率もそうだ。

考える頭は多い方が良いのだ。 寄れば優れた知恵も出る。 村人が集会するのもそんな理由だろう。

「今から十月ほど前になりますか、森の調査を依頼したこいつらから報告を受けました。 先ずはギルドの英雄、シズエ・イザワを救助してくれた事に感謝を。 お礼が遅くなり申し訳ない」

「俺は何もしてないよ。 救ったとしたらコイツらだな」

皆して此方を見た。 何か。 我々も思考しろと。 議題さえ分かれば参加するが。

やはりシズがいないとままならない。 いても駄目な時は駄目だが。

取り敢えず腰を曲げておく。 低姿勢は敵対していない表れになる。

「……ご本人は此方に滞在していると聞きますが」

「今はリハビリ……剣の稽古中なんだ。 病み上がりだからね」

「そうですか。 後程会えますか？ 三馬鹿も会いたがってますし」

「後でな。 でもわざわざ礼にと会いに来た訳じゃないでしょ」

「ええ、まあ」

ハアン合唱に耳を傾ける。 遊びじゃない。

真面目だ。 最近ハアン語学習も勉強もしたいのだ。 ハアン語は難しい。 何とか喜怒哀楽を感じできる程度だ。

……最早語学習ではない。 獣にも感じる感情と何ら変化無い。 やはりこの域を離脱するのは困難だ。

「数ヶ月前の事です。 ブルムンド王国のギルドの中で妙な人間達の噂が流れました。 そして調査の結果、それが事実であると判明したのです。 同時にその者達による都市が現れたと」

神妙なハアンが静寂に響く。

騒いだら荒らし扱いになる雰囲気息を呑む他無い。

我々に許された事は誠実に静寂を保ち創る事のみだ。 シズがいなくても同じ事をするだろう。

破ったら冷たい視線で刺されるであろうし。

「……我々は敵対より融和を選ぶのが賢明だと考えています。ですが人間が魔物と組みし、都市をさも召喚したかの様な……短時間で為し得た技術と創造力は到底無視出来ません。一部では脅威と看做されているのが現状です」

「成る程な。ドワーフ王が来た時と同じ目的か」

「来たのですか?」

「ああ。ガゼル王が俺達を見極めるとか言っただけで、ウチとドワゴンで盟約を結んだんだ」

「盟約……!?! この地を一国家として認めたと!?!」

分からん。全然分からん。

クラフターは視線を床へやる。

大切な話だろうから遮る気は毛頭無いが、ハアンハアンは喧しいばかり。

本当に意思疎通が成り立つのか疑わしくなってきた。いや、なっているのだ。これで。

すまないシズ。我々は貴女が必要だ。人生や世界の楽しさを教えるとしながら情けない。

「失礼します。リムル様、例の回復薬の売り方についてですが……」

あっ、失礼。来客中でしたか」

「悪いなベスター。後で聞きましょう」

「いえいえ。では後程」

「へ……もしやドワゴンの大臣、ベスター殿か!?!」

「そうだよ。 ”元” だけど。今ではカイジンと双璧をなすウチの優秀な研究者兼技術者だ。尤も……今落ち込んでるコイツらの方が上だろうけど。会話が出来る、理解出来るかで判断すれば軍配はカイジン側に上がる。魔法の話でもな」

技術の話をしているかに感じて顔を上げた。

が、来客が硬化している。相変わらず村人の生態も声帯も謎しかない。

いつか理解出来ると良いな。いや、理解しなければ。そう挑まないとならない。そうするのが己の美学だ。

建造物にせよ、何かを創造する際というのは妄想で終わらせたくない。実際に挑んで初めて形となり実を結ぶ。

当然、失敗もある。シオン級ポーシオンやIRPの様な苦難や諦観もある。だが1や2の転倒で挫けない。指差し笑われて構わない。

何故ならそれが我々の数少ない取柄で誇りである。

「……で、そっちの兄ちゃん達は何しに来たんだ？」

「ロンメル、頼んだ」

「はい。えーと……私達はファルムス王国の調査団です。こっちが団長のヨウム。私はお目付役のロンメルといます。こちらにお邪魔したのも大凡フーズさん達と同じ目的となります。成り行きとはいえ、都市の場所を偶然にも知れたのは幸運でした。

ジユラの大森林……魔物の森を抜ける以上は目に見えて危険な調査ですのに、領主は強欲で寄せ集め集団にまともな装備など揃えてくれる筈もなく……」

「ははあ、正規軍じゃないのか。道理で柄の悪い連中が多い……しかしよく逃げ出さなかったよな」

「その為に私が同行を命じられました。契約魔法という強制的に従わせる術がありますので、それで縛るのです。ま、その魔法は解いちやっただすけどねー」

「へ？ えーと……ロンメル君はお目付役じゃなかったっけ？」

「そうでしたよ。ですが今はこのヨウムについて行くと決めたのです」

「……憧れの選手を見る少年の目をしているな……」

ハアンハアン合唱団の端に棒立ちする空気感。

辛い。発声すらせず俯瞰しているだけなのに。創造に生き行
動する身としてジツとするのは性に合わないのだ。

手慰みで松明を作る。シチューを作る。それを食う。授業
や講義中による遊戯に似る。罪深いと知りながら手を止められな
い。許せ。反省はしていない。

「それなら、なおさら……どうして逃げようとしなかったんだ？」
「ああ？」

「危険な調査に安い装備で送り出されたんだろ？ 聞く限りじゃ雇
主は成功報酬を奮発するタイプとも思えない」

「そんなこと、分かっているよ。だがな、情報を教えてやらねえと、町
の奴らが危ねえじゃねーか。あの町にや説教くせえジジイや酒場
のお節介なババアや後をつけてまわるうぜえガキ共だっているんだ
……勘違いするなよ。あいつらが死んだら寝覚めが悪いと思った
だけだ」

「お前……言葉遣いや態度はすこぶる悪いが、結構良い奴だな」

「ッ!? だから勘違いするなつてんだよ! まあ……あのタヌキ
伯爵が困る姿は見てみたいけどな」

暇そうにしている奴は我々だけではない。

同席しているミリムもだ。可哀想に。

キノコシチューを試しに与えた。喜んで食べ始めた。ケーキ
以外でもイける口らしい。

「ロンメルから聞いた話じゃ、防衛強化に充てるべき国の援助金も着
服してたってんだぞ」

「つまり何の対策もしていなかったところへ謎の人間と魔物の混同大
集落の話が出て、慌てて我々が編成されたんです」

「そもそもだな、危険極まりない調査にこんな若造……ロンメルを使
うか？ もっと熟練の魔法使いの1人や2人抱えてんだろうが。

結果だけ分かれば良いって魂胆が丸見えなんだよ」

「……確かに、どう考えても捨て駒。だがヨウム君。君は腕は立ちそうだし調子には乗らない。仲間に慕われるカリスマ性もあり顔も悪くない。良い奴だと判断した」
「き、急になんだよ……」

「……ここまでの会話からして、現都市情報が正式に一般発表されていない……それなら好都合でね」

「……何を企んでる？　口封じか？」
「野蛮な事はしないさ。寧ろ平和喧伝」

飽きてきたなあ。

シズも飽きたりしないかな。　剣に打ち込むのを否定しないけどさあ……。

……あれ。　ツルハシやスコップを与えたのに剣ばかり握ってるのって”飽きた”からか!?

「君、英雄になる気はないかね？」

いけない。　こんな事してる場合じゃねえ。

我々は部屋を後にした。　シズに約束したのに。　楽しい事を教えると。

「……アイツら、急に出て行ったぞ」

「気にするな。　意味不明な奴らだから」

「……なんて報告すりゃ良いんだか」

なのにナニをしていたのだ。　全く我々ときたらIRPだのケーキだのに現を抜かしおつて。

剣なら剣でも良い。

我々も剣を持ちシズがいる訓練場へと疾走した。

戦いの気配。

45. シズと剣道

「シズ殿、この辺にしておきましょう」

森の開けた場所、木剣の打ち合い響く場所。
いた。シズとハクロウなる帯刀村人が。

後、ゴブタ仲間が何人か見受けられるが皆して倒れている。やられたらしい。

チャンバラをしていた様子だが、此方に気付くなり手を止める。

「まだ……ひと合わせを」

「焦りに迷い、見せて仕方なし。それにホレ、恩人達が来ましたぞ」

シズは息が乱れ、ハクロウは涼しげ。

格の違いはどうあれど、我々はシズへ駆け寄るのみだ。

「様子を見に来てくれたの？」

疲労感を隠しての空元氣を見せてきた。

それも我々の所為だ。途端に悲しくなり首を振る。同時に謝

罪した。済まないと。

「急にどうしたの？ 謝られる事なんて……」

いやあるのだ。

ツルハシとスコップを渡した時、気付いてやれなかった事を。

「え？」

剣だ。他のツールと比較して愚弄した訳ではない。

だがクラフターに好き嫌いがあるのと同様、エンチャントに様々があり正解が無い様に、剣道も様々である。

特にこの世界に来て、改めて思い知らされた。

それを我々はあるうことか、視野が狭まると思想を押し付けた。

誠に済まなかった。許して欲しい。

創造主一同、腰を曲げて何度も謝る。決して煽ったり踊っている訳では無い。

「そんな……！ 私の方こそごめんね……折角木こりや採掘を教え
てくれたのに。 剣ばかり握って。 でも……子供達に会うにも、少
しでも勘を取り戻したくて」

もう良いのだ。一同はニコリと微笑む。

己の道を進みなさい。我々もそうする様にシズもそうしなさい。

だが……と一拍。 剣を打ち合うというならば、我々も未だ教授出
来る事があるやも知れぬ。

「……うん」

さあ、構えろシズ。

様子から、もう一打ちする予定だったろう。

創造主は木剣を構えた。 エンチャント無し。 真物だ。

「ハクロウさん」

「良い良い。 思うがままに相対しなさい」

「……ありがとうございます」

シズが構える。 多少の疲労は見える。 しかし剣はブレない。

「——行くよ！」

踏み込まれた。

剣一本でやり合うなら、同条件で打ち合うべきだ。

そう判断し、ミリムの時の様にせず、やあやあと木剣のみで打ち鳴らす。

剣ガード。意表突。瞬時の左手持替。踏込みノックバック。

全体重を載せた飛翔斬。

剣一本と発想次第で結構幅は広い。それを思い出す。若き頃の血が騒ぐ。同志との喧嘩、戯れ、切磋琢磨していた駆け出しの創造時代。

夕日を背にして、影が激しく広間で揺れ動いた。

郷愁にも似た感覚。まさか手汗握る剣から、此处まで得られるとは。

忘却の中に眠るのは思い出ばかりではない。技術と熱意もだ。

シズに謝罪し懺悔する筈が、逆に息を吹き込まれた面持ちだ。

「ほっほっほっ。両者、良い顔付きになりましたな」

再び教えられたな、この世界に。

シズ、ありがとう。我々は生きている。

「此方こそ。私も今、生きてるよ！」

クラフターは微笑んだ。

黄昏時、松明の明かりのみになるまで打ち合いは続いた。

互いに節々が痛む筈なのに、何故かそれすら幸せであった。

やはり我々は生きているんだな。そう思えた。

「おーいハクロウ！明日くらいからヨウムって奴も鍛えてくれ！」

「ほっほっほっ。 儂の周囲も賑やかになりますのう」

「……ヨウムさん。 気をつけるっす。 このジジイはマジおっかな
いっすから」

「ゴブタ。 兄弟子になるのだから修行量を倍にするからの」

「ええ!?! 理不尽っすよ!?!」

「……成る程、少し理解した」

暗くなってもテンペストは賑やかである。

それも剣一本道だけで華やかだ。

多くの道が開けている。 全て合わせたら、最早道ではなく1つの
巨大な世界になろう。

嗚呼、素晴らしきこの世界。 我々は楽しみ尽くせない人生を送っ
ているのだ。

46. 開通話と嵐接近

「……ヨウム君達英雄は喧伝の為に出発、ヒューズ君との話は済んだ。これからドワルゴンへの道路整備のみならず、ブルムンドへの道路整備工事も着手する。安全な交易、販路確保、呼び込みの為に。だけど距離のぶん森を切り拓いて行かなきゃならないし、相応の資材と労力を消費する一大国家プロジェクトだ」

さてもハアンハアンと鳴くは馴染みのリムルだ。

今はシズもいるからか、スライムの姿である。シズの姿でも最早構わないが、分かりやすいのは良い事だ。

物事は単純と複雑で、相容れない事も存じている。だがそれも、と前置く。

彼等とは願わくば今後とも相利共生の関係であり続けたいと考えている。

損得勘定だけが人生と世界の醍醐味ではない。もしそうなら我々はとづくにこの世界退散していた事だろう。

「と、そこは建築建造、その他様々な創造を十八番とするお前らにも手伝って貰いたい。シズさん、伝えて欲しい」

「分かったよ」

シズに話しかけられた。

「どうやら大規模な道路工事を企画していて、作って欲しいとの事だ。」

クラフターは頷いた。良いだろう。君達との仲だ。具体的な指示……目標座標や建材指定、幅の要求があれば教えて欲しい。

「……という事だよ」

「ありがとう、おって連絡する。実は途中までなら出来ているんだ

よね。それを参考にして欲しいんだが……」

相分かった。

ところで事後報告になるのだが。

「どうしたの？」

実はドワルゴン近郊まで地下鉄が伸び終えている。

「え、えつと……」

「どうしたシズさん」

「……地下鉄がドワルゴンの近くまで伸びてるんだって」

「へー……へアッ!？」

驚愕された。慣れないが喜ばしいハアんだ。

我々はこの顔を見たくて世界に留まってるのかも知れないな。

「い、いつからだよ!？」

シズを通して聞かれた。

いつから……どうだったか。 たぶん、初めてあの国に観光した時あたり。

その帰還した日当たりからだったかなあ。 別の同志が敷設していたから詳細は知らない。

でも安心して。 クラフターは笑顔を見せる。

既に運行は開始されている。 しかも複線。 物資運搬人員輸送
ござれござれ。 ホーム整備は後回しにされた分、粗さが目立つが今
後直していく。

「国家樹立前じゃん!？」 どっちにしる思いつきり国際問題だよ……

! ドワルゴンから苦情が来ていないって事はバレてないんだろ

うけど、どう説明しよ……先に言わないとアウトだよ……」

今度は苦悩の重々しいハアンが響く。

何だ。地下鉄は嫌か。確かに景色は楽しめないからな。

だが地上景観を破壊する訳にはいかない。安全の観点もある。

様々な未確認生物が跋扈するハードコア世界だ。

地下に身を隠しながら移動する方が幾らか良い。

「違うそうじゃない!?　そういう問題じゃないんだよ!　ああ

……お前らしいといえば、それまでだけどさあ、俺の事も考えてマジで」

今度は嗚咽しながら書類に記入を開始した。

始末書とやららしい。我々には未だ理解出来ぬ領域の1つだ。

だが最近使用されている紙は我々がサトウキビからクラフトされたものである。

やはり利用されてナンボだ。創造主としては嬉しい限り。莞

爾として頷いた。

「あ、あのね……人の土地やその近くに勝手に造つちや駄目だよ?」

何か言われたんだが。

いやだってあの国の周囲は湧き潰しの甘チヨロ未開拓地であったのだぞ。

我々はナニも悪くない。寧ろ闇を打ち払いに行った訳だし、リムルが互いの発展を目指すというなら便利な地下鉄は十二分に感謝されて然るべきではないか?

「良いからね?」

いえす、まむ。

シズの有無を言わさぬ迫真の暗黒微笑に頷く他ない。

戦慄と共に身を震わせた。夕日を背にしたチャンバラで打ち解けたと思っていたのに。

寧ろ無遠慮になつてきている気がする。段々とシズ様が怖くなつてきている今日この頃であります。

「シズさんありがとう。なるべく手綱を引いていてくれると嬉しい。なんなら文字通りに」

「……全員は無理だよ」

「無理のない範囲でお願いします……コイツらの所為で常に国家存続の危機なので」

皆してハアンと息を吐く。

我々も同様だ。

そんな時。

先程のリムル同様に騒がしいハアンと共に村人が駆け込んできた。古参のリグルドとかいう筋肉モリモリマンである。

「突然申し訳ありません！ 緊急のご報告です！」

「リグルド!? どうした、何があつた？ またミリムがやらかしたか!？」

「いえ！ ドライアドのトレイニーさんの妹、トライアさんからご報告がありました！」

なんだ落ち込んでる時に。心身響く事は堪える。シズの暗黒言語よりマシだが止めてくれ。

「あの『天空の支配者』である暴風大妖渦（カリユブデイス）が復活致しました！ そして、彼の大妖はこの地を目指しております!!」

「……なんて事」

「……緊急会議を開く。皆を集めてくれ」

「御意ッ！」

今のも暗黒言語か？

良くない感じがしたのだが。

47. 戦闘準備と出撃準備

『カリユブデイス。知性は無く本能のままに殺戮を繰り返す災厄級（カラミテイ）モンスター。死亡しても一定期間で復活を果たす性質を持ち、勇者により封印されていきました。なお、物質体を持たない精神生命体であるため、その復活には屍などの依代を必要とします』

「大賢者のおかげで置いてかれずに済んだよ……でも知性が無いのにこの街を目指しているってのが謎だ。取り敢えず話し合いで退散願うのは難しいって事だな」

村人の集会にまたも混ざるクラフター。

毎度思うのだが、良く集まるものである。

シズがいるから、建築とか取引とか、特に大きな話の日程に沢山集まるのは既に知り得ているが、そういう生態なのだろうか。

あいや、外野や野次馬がいるのだから決められた村人の集まりなのだろうと思う。

「あれは遙か昔に封じられたはず。理由もなく封印が解けるなど考えられませぬが」

「事実でございませぬ。我が姉トレイニーが足止めを行なっておりますが、あまり長くは保ちませぬ」

「……伝説では異界の魔物を従える能力があるとか。魔法が通じないという話も聞いた事があります」

「これもヴェルドラ様消失の余波かもしれませぬ……」

「……迎撃準備を。非戦闘員はリグルの指示に従いジオフロントか森の中へ避難するように。ベスター、ガゼル王へ連絡を頼む」

「は。お任せを」

村人達が慌ただしく動き回る。

会議事体は解散した。

さて。我々はどうしようか。

なにやら同志が遠くの空にて飛翔して来る大型モンスターを捉えている。原因は十中八九それだろうて。

一応、シズにあらましを聞く。

どうやら強い敵が急速接近中らしく、討伐する事にしたという。

やはりそうか。遠慮は要らぬ。

賛成だ。創造主一同、強く頷く。

都市を荒らされては堪らない。散らかす奴に容赦はしない。

それは元の世界でもそうであるし、この世界でも変わらない。

何より人的、建材資源の無駄な消費は避けたいところだ。

ミリムの悲劇的ビフォーアフターへの対処だけでも腹いっぱい

……否、幾多の空腹になるのに、これ以上は勘弁願いたいのが正直なところ。

「……迎撃場所はドワーフ王国へ伸びる街道で行う。整備してくれた皆には申し訳ないが、街が破壊されるより修復は楽な筈だ」

クラフターは顔を上げる。

恐怖に尻込みしている暇は無い。寧ろワクワクしている。武者震いともいうべきか。

「……みんなも手伝ってくれる?」

シズに問われる。

勿論さ。そう答えた。 ”荒らし” が来るのに何もしないなぞ

逆に考えられない。

創造に相對する奴に容赦はしない。遠慮も要らない。逆に

とつちめる。シズも戦闘に参加するのか?

「そうするつもりだよ。私にはもうイフリートの力は無いけれど、

剣はまだ振れる。全盛期とまではいかないけど、皆の為に戦う」

「そうか。無理はしないで。

いざとなれば逃げるように。我々も戦地に立つ。君が側にいるならば守る事も出来る。」

「ありがとう。頑張ろうね」

応。

ああ、それと地下のIRPも出すから宜しく。

「…………へ？ あの、大きな機械の龍…………？」

「そうだ。こんな時に出さずしてどうする。」

「しかも相手はデカいんだろう？」

「なら余計に出さねば。出し惜しみは無しだ。」

「既に操縦者となる同志が起動している。」

『告。地下から異音を感知』

「……………今回は許す。百歩譲って許す。だが味方は踏み潰すなよ、絶対に!」

「……………という事だよ」

「当たり前だと返答する。」

「ミリムの破壊活動に時間を割かれて、碌な改修が出来なかったIRPだが、全く何もしていない訳では無い。」

「操縦も訓練したし、操縦系統そのものも改良して動かしやすいとした。」

「同じ轍は踏まない。武装はマイナーチェンジレベルであるが、アップグレードしている。」

「IRP。ご期待下さい。」

「あー……みんな。これからデカイ機械仕掛けのドラゴンのが出て来るけど味方だから安心するように。それと、踏まれないように気をつけて」

「……まさか噂の?」

「何かあつても責任取れません。いや取らないとならないか……俺、国主だし……はあ……」

「リムル。今は今で、ね?」

敵は空を飛んでいるらしいが、IRPは対空戦闘も考慮している。具体的には飛翔体、その群をロックオンしたBB回路が、その空中付近で起爆する様に弾頭を点火させ発射。

空中飛翔体、群勢は高速飛行する可能性やスケルトンの様な間合いを取る行動、回避行動を取る可能性がある為、フルオートキャノンによる弾幕戦法……エリア起爆識別圏を定め敵のいる座標領空全体を爆炎で包み込む。

攻撃中も砲身転換する事により、一箇所のみならず空全体を爆破する様な攻撃も可能だ。

例によって演習の1つすらなく即実戦投入なのは不安しかないが、まあやるしかない。

そうしてまた問題点を見つけて改善していこう。

創造とは失敗したら腐るのではなく、寧ろそこから生々としていくものだ。

いやあ楽しみだなあ。今も、その後も。

「みんな、これは戦いだよ。真面目にね」

勿論だ。それは決して忘れない。

だがどうしても。戦闘というものはハラハラし、生きている実感が生まれてしまう。

特に新参の相手。どんな見た目や攻撃をしてくるか。どんな

素材が得られるのか。

何よりこの経験から学ぶべき事は何か。
間見えてワクワクしてしまうのだ。

多くの創造への道が垣

48. IRPと空魚群

「ヘルフレアでもお供が1頭焦げただけか」

IRPが出動する際、またも搬出路の作業通路を破壊してしまつた。

少しは改良して道幅を広くしたのだが。急いでも良い事は無い。さても空を見る。魚の群れが空を泳いでいた。

この世界の生物は多様性に富むなあ……改めて感じた。良い意味で。

「うおっ!? 背後からデカイ影が!」

「噂の機龍か!」

「凄まじい! あれ程の機械が生物以上に動いている!」

足元に群がる村人が此方に気付き、驚愕している。

そうか。まだ知らない連中が多いか。隠していた訳じゃないが、やはり彼等の驚く顔を見るのは止められない。楽しい。

おっと。今は今だ。実験も兼ねて戦闘に集中だ。

「……魔装兵か!? いや違う! あれ程の大きさであの動き!

ドワルゴンでは人間サイズでも失敗したというのに!! 精霊工学は用いられていないならば、一体どんな技術で!? 彼等の技術力は凄まじいばかり! 知りたい、その技術力を……!!」

「ベスター避難しろ!? てか連絡どうした!」

「す、すいません! 連絡は終わっています! 間もなくペガサス

ナイツの援軍が来るかと思われまます!」

「分かった! だから早く避難しろ!」

今回、火力を単純に倍にした。

具体的には左にも右腕と同型TNTキャノンを取り付けた。

もし敵がミリム並みの場合、これまた役に立たない無用の長物と化してしまいそうだが仕方ない。

いやだつて……ねえ？

研究時間なんて修繕時間で割かれまくつたしい……あいや。それも言い訳だ。

……でも言い訳させてくれ。頼む。ミリムは今の我々の技術、創造力では倒せない。

ノックバツクで吹き飛ばすのが精々なのだ……！

「だが相手に通用するのか？ 本来の威力が発揮されていれば今の攻撃で炭すら残らない筈だった。奴等の魔力妨害……聞きしに勝る厄介さだぞ」

「ええそれに……範囲内に捕らえた筈の本命は最早痛痒を感じてはいないようです」

刹那。

親玉的な奴……一番デカイ一つ目玉な魚が雄叫びを上げた。

グギョオオオオオオオオオッ！

と。何故か安心した。ハアンじやなくて。

挨拶だか知らないが、此方も相応以上にIRPで王者の素質ある咆哮を上げた。

ウオオオオオオオオオオオオッ！！

と。

威圧感があるし、格好良いので好き。

これ擬音では無い。実は関節部品類等の噛み合い、摩擦等による音、悲鳴らしい。

つまりよく分からない技術の組み合わせの結果生まれた副作用である。

これ程にも関わらず、ツールに起き得る様な耐久低下、摩耗の心配は無いらしいのでそのままにしている。

なんでか。だから格好良いからだよ！

「ぐうっ……い！」

「鼓膜がやられます……ッ」

「お、お前ら……張り合うなよ」

村人が苦情のハアンを言っているが、相手にしている場合では無い。
い。

というか、相手にするなら魚共だろうよ。

そしてというか、咆哮を合図にするように取り巻きの魚の群れが襲って来た。

これもデカイ。 1体1体の大きさはガストを超えている。

「ちよっ……でか！ 魚なら1年分のご馳走っす!!」

だが都合が良いと照準を合わせる。 命中率が高いのは良い事だと。

しかも単純な突撃攻撃しかしてこないと見た。 楽だ。 引き金を引き続ける。

ドカンドカンドカンドカんと連続砲撃。

魚の表面や周囲で爆発。

よし。 回路、砲撃計算問題なし。

攻撃効果を確認。 肉塊になっている。

良いぞ！ ミリムと違い、今回は効いた！

「アイツらの攻撃、効いたのか!?!」

「魔法弾じゃないとはいえ……奴等は硬い鱗に覆われている筈なのだ

が

「効けば良いさ！ 先ずは取り巻きの始末を頼むぞ！」

「我々も続け！ 援護するんだ！」

「うおおおおッ!!」

「負けてられませんな！」

「もしやヴェルドラ様の化身!?!」

「それは無い断じて。 どうかあつてたまるかこんチクショウ！」

「リムル様が急に御乱心!?!」

足元の村人達も何やらやっている。

同志は愉快的な腰振りダンスをしつつ、弓矢で魚を射抜いている。

士気が高いのは良い事だ。それが単なる応援だとしても我々は嬉しい。

さても戦闘は始まったばかり。

親玉はまだ仕掛けて来ない。

歴戦のクラフターは油断しない。

様々なモンスターはそれぞれ侮れない能力を持ち得ているのだから。

カリユブデイス戦 49. 雑念と多様性

「取り巻きは片付けた。高みの見物は終わりだな、カリユブデイス！」
「カリユブデイスですりムル様」
「……やっぱり名前は短くて発音しやすいのに限るよな」

取り巻きの魚群を爆散させたから、残るは親玉のみとなった。
取り巻きが呆気ない時程油断してはならない。創造主は残心の
構えを熟知している。

ジ・エンド、ネザー要塞、水中神殿。
長年に渡る様々な戦闘経験。今日この瞬間まで養われ続けた勘
が告げる。

『ギ……キキイ、キイイ……ギギ』

親玉の大目玉が妖しく光る。何か来る兆候だ。
文字通り大目玉を喰らう前にIRPを村人より前に出し盾とする。
目玉は蜘蛛で間に合っている。

……そういや大蜘蛛の目は喰ってない。偏見で食べる気がな
かった。脚の部分はイケたんだが。眼鏡村人も美味しそうに
喰っていたから違う。

だが目玉は……美味しいのか？ 見た目通り大味だと思おうと嫌
だけでも。

それでもシオンよりマシか。辛い過去と苦労は前向き思考のス
パイスになる。それも場合によるが。

「何だこの音……ッ!? みんな下がれ！」

地を這う同志は黒曜石で防壁を作る。IRPだけでは村人皆を

守り切れないからだ。

これらばかりは現IRP機能で賄えない六感だ。生物に備わり無機物な装置に有しない。だが想う。故に我有り。将来は人工知能搭載が可能かも知れない。若しくは似た何か。思想自体はある。

原初に誰が”想像”したかは定かではない。だが重要なのは其れでは無く、考えられたなら出来る部分だ。想像出来た物事は創造出来ると考えるのがクラフターだ。

「な、なにかいっばい飛んできたっす!？」

「空いっばいに鱗が!？」

「多すぎて躲せない!？」

「作ってくれた壁の裏に隠れる!？」

「機龍の裏でも良い!？」

村人が隠れていく。ゾンビイベントの様に。

その側から雨霰と大鏃が刺さる。負傷者は見た限りいない。

先ず良かったと安堵した。

元の世界の村人だったら呑気に刺されに向かう愚者もいた所だ。蛮勇ですら無い。

黒曜石すら破壊する存在をこの世界で未確認だからと、黒曜石製防壁の安全神話が崩壊しないとは限らない。ウィザー級がゴロゴロいるならいよいよ頼りきりは出来ない。

絶対は無い。有るのは空虚な妄信。

だが自信は絶対必要だ。少しも無ければ、かの様に動けなかった筈である。

疑問の投げ掛けは大切だが、疑い過ぎて尻込むのでは良くない。取り敢えずやってみる事だ。空虚としつつも無限の可能性が常に相手であり、しかし敵では無く恐怖でも無い。

「用意が良くて助かる!？」

「また恩を受けてしまった」

「剣の腕は粗末じゃが、其れを補い余りある力をお持ちの様じゃの」
「……味方である内は有難いよ」

だがやはりそれも、とクラフター。

単に肯否定しては面白くない。誰も不可能だと証明していないのだから。

昔々ど根性RS回路を組んだ者がいた。巨大演算装置を製作したのだ。ならばBBで小型化された集積回路や装置、キャノン理論の基礎からなる弾道弾着、軌道演算……研究を続けた技術革新の果てに見るIRP創造は何か。

ゾクゾクする。未知なる将来が楽しみでならない。戦闘中だというのに雑念が凄い。

否。必要だ。戦場の肌触り、高揚感が我々に新たな発想、閃きを与えてくれる。いつ何処で技術革新のヒントを得られるかわからない。楽しい創造の世界に身を置き続ける人生。果報者である。

「雨は止んだぞ！」

「お前ら砲撃しないの？ 急に呆けてどうした？」

「……みんな戦闘中だよ。集中しなきゃ」

シズの声がして、思考の海から引き上げられた。

いけない。やる事をやろう。

クラフター達は空を見上げ直す。親玉は高度を下げる様子が無い。
い。

弓矢を当てるのは難しい距離。剣を振るうにも向かう他ない。

一部はエリトラで離陸し、一部は地上に残った。

IRPは残弾全てを親玉に捧げる。火薬を思えばTNTは貴重な存在であるが惜しまず使う。こういう時こそ使うものだ。

「……後はアイツらと俺、救援のペガサスナイツでやってみる。皆は下がっていきなれ」

「なあなあワタシも……」
「ダメ」

砲撃の中、リムルがシズに擬態した。かと思えばコウモリのような羽根を生やして弾頭と共に飛んでいく。

魔王ミリムはシヨンボリして飛んでいかない。

改めて多様性に富む世界だ。生物の進化に思いを馳せてみるのも良いかも知れない。

進化……雷に打たれた豚や帯電クリーパー。元の世界では忌まわしき其れら。

此方の世界では突然に変化して見せた。が、敵ではないなら進化に対して前向きな姿勢を保ちたい。

バイオーム……環境に合わせたと思われる生態や形状。同じ場においても姿形が異なる点に着目しても面白い。

種として分類する際、我々は見た目第一である他、同様の食性であるか、繁殖可能かどうか等で見極めるが一方で馬系の交雑は何で有るか。種と勝手に決めつけているものの生物は本当に多様性に富み、複雑難解だ。

そもそもドラゴンは他にいるのだろうか。見てないだけか。もし単体ならば……。

あ。弾切れだ。ストレージは空だ。

目標を改めて見る。爆炎に散々に呑み込まれているにも関わらず、未だ健在である。

そもそもダメージが通ってる様に見えない。やはり親玉は別格らしい。

ミリム同様、我々もしよげる。IRPも狼のお座り姿勢になっちゃった。

「あ、ナニ？　弾切れ？」

「そうみたい」

「じゃあ、俺らは遠慮なく近寄れるな……でもアイツらの砲撃が効かなくて俺らの攻撃が通るか……いや、やるしかないな」

「またも無用の長物になってしまった。」

「だがまあ、やれる事はまだあるだろう。新たな発想も色々生まれ
たし。」

「今度は空を飛んで見せたり、他の兵装を考えてみても良い。」

「今他に試せるのは……いつもの剣と弓矢か。」

「IRPで出来るのは……取り敢えずディスプレイからファイ
ヤーチャージでも撃っておくか？」

50. 不意打と荒療治

「援軍を加えて総攻撃……から10時間経ちましたハイ」

打てど斬ろうと斃れる気配を見せない巨大魚に、クラフターは様々に試行した。

地上では同志含む村人が、空中ではエリトラやいつの間にか来た天馬が思い思いに攻撃をしている。

かなりの攻撃量の筈だが互いに決定打に欠けている。だが焦ってはならない。創造にせよ想像にせよ何が出来るかではない。何がしたいかを考えるべし。

……ただまあ、やはりというか。腹が減っては戦は出来ぬ。思考力も低下する。

なので偶に後方支援と思われる村人の即席簡易拠点にお邪魔して「おむすび」なるボール状の携帯食料をパクつく。美味しい。パンと双璧を為すやも知れぬ。

取り敢えずフルスタックにするとIRP内や空中、巨大魚の上でもパクつく。

身も心も動いている限り腹は減ものだ。生きてるって証拠だよ。……ただ皆は戦闘は戦闘、食事は食事、治療は治療に集中していた。刹那主義か。それも結構だが我々の様に器用になれば練度に磨きが掛かる事だろう。

時間は常に流れてる。有限とも無限とも取れる中、競争相手が常日頃いる身としては効率も考えねばならない。そう、今みたいに。

「米粒散らしながら汚いですよー！」

「そうよ。米粒1粒も残してはいけない」

「シユナ、シズさん。ツツコむとこソコじゃない。せめてアイツらの余裕の態度にツツコんであげて」

それでも考えるより先に手が動くのは経験が豊富が故に。迷い

は無い。

突き進むのみ。我々、邁進の日々。

「わっはっはっ！ 見ていて飽きぬ者達だな、奴の頭に木を生やしたぞー！」

「チョンマゲかよ！ トレイニーさんは あんな事しないもんな……やっぱアイツらかー！」

「おお!? 今度はツルハシ!? スコップ!? 斬り刺せぬなら掘ろうと!?!」

「もう見るなミリム!?! 悪い事覚えちゃいけないしやっちや駄目だ!?!」

「?」
「ヤダ、この子純粹無垢な目をしている!」

様々を試してはいるが進展が無い。

それでも続ける事が己の美学じゃんとかばかりに腕を振るう。

時に無心だ。単純作業に没頭するだけでも魂は嫌な事から解放される。

例え何も採取出来ずとも、大したダメージを与えられずとも、エンドラの時の様に回復されようとも。

そういやクリスタルが無い。コイツの自己回復力はウィザー級かやはり。

「ところで、コイツらの手作りドラゴンはどうした? 力尽きたのか?」

「そうみたい。弾切れだって」

「……空飛べる見た目じゃないもんなあ」

リムルとシズが此方に指をさして話し合っている。IRPに不満気な態度だ。

クラフターは首を横に振った。役立たずの無用の長物と化した

事を指摘されて悔しさを感じているのだ。

不本意だが認めざるを得ない。

これではいけませんね、と。

「そ、そんなに落ち込まないで!?　　ね!?!」

シズに宥められる。

しかし事実である。次はリムルみたいに羽根を生やしてみようか。それも楽しそうだ。

問題はどうかやって飛行するかだ。我々の様にエリトラを付けられれば良いのだが。

「シズさん、あまり構わない方が良いでしょう。　碌でもない事しでかしらうで怖い」

「大切なお友達でしょ?」

「悪友だよ……まだね」

さてもどうしたものか。

と、その時。　不思議な事が起きた。

「おのれ」

巨大魚がハアンと鳴いた!

「喋った!?!　　知性は無いつて話じゃなかったか?」

何という事だ……クラフターは戦慄と共に身を震わせた。

魚がハアンと鳴いたのだ!

まさかの事態だった。

単純作業中の不意打ちだ。心にダイレクトアタックされたかの様な急展開についていけず狼狽える。

「ミリ……ミリムめ……!!」

また鳴いた!

世界の環境と生物は多様性に富む事は認めるが、まさか魚までハアンと鳴くとは。

あいや可能性は既に示唆されていたのだ。 狼もハアンと鳴いた時点で気付くべきだった。

もうこの世界全ての生物がハアンと鳴いている気がしてならない。

『告。 敵個体より生体反応確認』

「生体反応? そんなの当たり前だろ」

『否。 カリユブデイス自身に物質体はありません。 生体反応があるとするれば』

「依代になった方か」

穢れだ。 穢れが世界を覆っている!

不意打ちで短絡思考になったクラフターは首を激しく動かした。

この事態を解決するにはどうすれば良いんだ。 何がやれる?

あいや違う。 やれる事を考えるのではなくやりたい事を考えるんだ!

……シズは違う。 最初こそハアンと鳴いていたが。 この違いはなんだ。

アレか。 リスポーンが引金か。 最寄のベッドに寝かせて殺せばハアン病は治るか?

碌な証拠無く病気認定からの狂人思考をするのは、リスポーンすれば状態異常が治るからだ。

ベッドに寝かし付けて次々殺さねば。

……殺す事は命の冒瀆ではなく救済だった?

「うむ。 覚えがあるのだ、この感じ。 確かフォビオとかいう魔人

だ」

「成る程。 依代の意思に従ってテンペストを目指していたのか」

『ミリ……ム……!』

もう鳴くな。 泣きたくなる。

……涙を堪える様に天を仰ぐ。

仰ぎつつ思考する。 あの時、リムルは寝起きドツキリ救済した事になる。 あの悪夢は実は救いだっただ……?

……いや待てと同志。 状態異常なら牛乳バケツで解消する。

殺害は最終手段だ。 早まるな。 感じる。

「なあなあ」

「……わかったよ。 ありやミリムの客だ。 全員退避だ、ミリムが加わる。 巻き込まれるなよ」

ならばと牛乳バケツとベッドを常備しなくては。

皆は巨大魚から離れていく。 取りに行く物を取りに行かねばならぬ。

「しかし何しでかした?」

「ワタシのファンか?」

『おの……れ……ミリムめえ』

聞こえない振りをしつつ各自拠点に戻り、ミルクを取る。 予備のベッドを取る。

あれ待て。 どこいった。 適当箱に入れていたと思っていたが。

「おのれとか言ってるよ。 絶対お前に恨み持ってる奴だろコレ!」

「ははは、まさか! この魔王ミリム、生まれてコノカタ誰かに恨まれた事など1度も無いのだぞ?」

『ヤキイモ……!!』

「えっ、なにそれ!?!」

「あー、あの時かあ!」

「ナニしたんだー!?!」

漁る。手間取る。いけない。村人に効率を求める思考をしながら時間を浪費する。

「フオビオを残してカリユブデイスだけ吹っ飛ばせるか?」

「容易い事なのだ……ドラゴ・バスター!」

やっと見つけて戻ってみると何やら凄い事が起きている。

ミリムを軸に魚へと光弾が放たれている。散弾形式だ。空が眩く輝き目を見張る。

やはり力を隠し持っていたか。魔王とやらは侮れない。でもハアンと鳴くのは同じだ。

くそっ。集会の時間に飲ませてやるべきだった。

『!?! 解析不能。情報収集に失敗しました』

うわあ……。

TNT換算何個分だろう。凄い爆煙だ。

こりや魚は死んだかも知れない。ミルク飲ませたかったのに。せめてベッドに何とか寝かせて……頭にでも設置してから殺して欲しかった。

だが閃いた。この形式はIRPに導入出来るかも知れない。

「うわあ……こりやフオビオごとイッたかな……いや、生きてるか!?!」

煙の中、落ちていく人影。

ソレをリムルが拾い、地面に寝かせる。我々も後に続く。

「流石ミリム。見事な手加減だったよ……さてと、どうだ大賢者」
『解。 個体名フォビオと個体名カリユブデイスの融合率九割以上』
「マジかよ……どうする？ どうやってフォビオからカリユブデイスを完全分離する？」
『スキル変質者と捕食者の並列起動による分離”手術”の可能性。ただしカリユブデイスの力に対しスキル捕食者では——』
「やるしかない。 死なせる訳にはいかない。 大賢者は制御に……ん？」

取り敢えず寝ている村人をベッドに寝かす。
これで安心。 最悪の場合は殺せる。

「助手か？ だが俺には大賢者がいるから。 とうかヤメテ？
碌な結果を残さないよね絶対！」

「大丈夫!？」
「ああ、シズさん！ 助けてー!？」

煩い。 リムルが邪魔してくる。 シズまで来た。
取り敢えずリムルとシズごと黒曜石で防壁からの豆腐状にして実験室内に入れる。

他者から邪魔されれない為。 あとネザーみたいに爆発しても良い様に。

リムル、シズ……死ぬ時は一緒だよ？

「マジキチスマイルヤメロオ!？」

「何をする気なの！ ふざけないで！」
『……』

ふざけてない。 真面目にふざけてるんだ。
それを言ったら何だ。 我々からしたら、さっきの攻撃の方が余程ふざけているぞ。

何故か魚から村人が出てきたし。
飲み込まれていたのだろうか？

何にせよ、魚の化身な気もする。だからそれで良しとするが、結果を顧みず爆破すれば良いなんて短絡的だ。

殺すならベッドに寝かせてからにするべきだ。リスポーンするにも知らぬ土地で復活するのだろうか。

「そんな真顔で……」

「なんて言ってる？」

「死んだらどうする、知らない所で復活するぞと」

『解。素体から分離させると精神生命体であるカリユブデイスは別の依代を得て復活します』

「……コイツら、それを知って？」

その地も知りたいが、先ず手の届くところから手を付けたい。
ベッドに寝ている村人に近寄る。

「な、何をする気だ……!!？」

見てろよりムル。

牛乳バケツを各自右手に持ち見せびらかす。

状態異常とはこうして治せ。意味不明でも取り敢えずコレで何とかなる。

「牛乳!? そんなのでどうするんだよ!! メシマズの口直しじゃないんだぞ!!？」

村人の口を抉り開ける様にして、ミルクバケツをひっくり返す。
溺れる勢いで次々と。

「ゴボツ!!? ゴボボボボツ!!？」

「牛乳で溺死させる気!？」

「ま、真面目に治しているみたい……」

「これでか!?　これで万病が治るなら苦労しな……」

『告。　カリユブデイスが分離を開始。　捕食しますか?』

yes

／no』

「へアツ!？」

黒いモヤが出てきた。　リムルが煩い。

だが構わず突き進む。　牛乳を飲ませると決意したなら飲ませ続ける。　オラオラである。

「今なら捕食出来るの!？」

『謎の白い液体により弱体化した為、捕食可能域になったと思われま
す』

「ええ……取り敢えずイエスで……」

片やリムルが黒いモヤを捕食している。

何でも食うが、霧まで食うか。　仙人か。

何でも有りだと思いつつも、我々は我々の道がある。　スライム道
は知らぬ。

おいコラ吐くな。　飲め。　さすれば楽になる。

『告。　カリユブデイスの捕食に成功しました』

「……アツハイ」

「……お、終わったよ。　だからね、もう牛乳飲ませなくて良いよ!？」

折角楽になったのに別の意味で楽になっちゃおうよ!？」

「ゴボツ!　　ゴボボボボボツ……」

結果を先に述べよう。　実験は成功だ!

かくして。

クラフターはシズとリムルに止められるまで白き濁流を生み出し

続けた。
フオビオは一応、一命を取り留めた。

51. 結果と処理

「スマン！ ……いや、すみませんでした！」

悲報。

ミルクをガブ飲みさせた村人ハアンと鳴く。

実験は失敗だツ！！

思わず拳を木に叩きつけた！

成功したのは状態異常の解消だけだったのだ。

かくなる上は殺害しなければ。

大勢を前にスニーク姿勢より深々と頭を下げる村人を見下ろして、

クラフターは冷酷なるダイヤ剣をチラつかせた。

今振り下ろせば、首をスパツとやれそうだ。黒曜石は撤去した

が、ベッドはまだ撤去していない。殺したら真つ先に確認しに行く。

「今回の件は俺の一存でしたこと。魔王カリオン様は関係ないん

だ。何とか俺の命1つで許して欲しい……！」

「お前ら剣を下ろせ。殺したら話を聞けないだろ」

リムルに咎められるハアンが聞こえる。

シズが説明する前に剣を仕舞った。言葉分からずとも意味は分かる。最終手段である殺害は短絡的だと指摘しているのだと。

代わりに金リングを食わそうとする。これでハアンが治るかも知れない。

「ナニ金色のリングを押し付けてんだよ!？」

「ぐぐぐ……食って許してくれるなら甘んじて受け入れよう……」

「いや言う事聞かなくて良いから！ ……ますます調子乗るから!？」

食わない。駄目か。

いや思えば、これは意味がない。シオンに食わせてもハアンと鳴き続けていた。

「代わりに俺らの話を聞いてくれよ。トレイニーさん」

ポーションを投げつけてみるか？

今は無いが。作りに行くか？

いや駄目だ。何やら話し始めた。見てないところでまた爆発が起きてても困る。

「はい……貴方はなぜカリユブデイスの封印場所を知っていたのですか？ あれは勇者から託された我らドライアドしか知らぬ場所。偶然見つけたとは言わせません」

「……勇者」

シズが呟いた。

そうだな。魚に食われた次は大勢に囲まれている状況だ。この村人は耐えている意味では勇者かも知れない。

だがハアンと言う勇者だ。認めたくない。

「……教えられた。仮面を被った二人組の道化に……」

「仮面の道化？」

今更ながらハタと気付く。

集会にも似た状況になっている。外にも関わらずである。

大抵この時間は暇になる傾向になる。シズと爆発と破壊オチにするミリムもいる所為か、離れる気が起きないが。

「……中庸道化連だ。奴らはなんでも屋と言っていた」

「んー……」

「ミリム？」

「オークロード計画を仕切っていたのはゲルミュッドだが、中庸道化連などという連中知らんのだ。コイツらより面白いかは知らぬが、まったくゲルミュッドのヤツめ……本人は不慮の事故で亡くなったというし」

「な、なんとゲルミュッド様が!？」

「ガビル、知ってるのか？」

「ワガハイに名前を与えてくれた方です……まさか亡くなっていたとは。さぞ危険な計画だったのだでしょうな……」

相変わらずハアンが喧しい。

慣れてきたとはいえ、何もせず聞くだけだと飽きてくる。

取り敢えず松明をクラフトした。手慰みだ。

「……クレイマンのヤツが何か企んでいたのかもしれない」

「クレイマン？ 誰だそれ」

「魔王の1人だぞ。ヤツはそういう企みが大好きなのだ。抜け駆けするしたらヤツしかおるまい」

「まあ、確証がないので保留。今後は謎のなんでも屋に注意するとして……取り敢えず今日はお開きだ。みんなゆつくり休んでくれ」

甲高いハアンが突如響いたと思ったら、皆が散り散りになっていく。

やっと終わりそうだ。我々も散ろう。IRPを格納したり戦場となった道路を直したり、被害が波及した植林場を直したい。

「じゃあフオビオ。お前も気を付けて帰れよ」

「……はっ!? いや俺は許されないだろう!」

「まあ無罪ではないけどな。真犯人に利用されていたみたいだし、幸いにも人的被害はないしな。ミリムもそれで良いだろう?」

「うむ! 許してやるのだ……カリオンもそれで良いだろう?」

「えっ!？」

「やはり気付いていたかミリム」

IRPを動かす。帰宅する村人を踏まぬようにしつつ搬出路へ。通路、もつと拡張しなければ。やりたい事は様々だ。

下では未だ会話を続けているリムル達がいるし新参もいつの間にか混ざっているが、それはそれである。

会話を他所にして修復作業へ。道路の石ハーフを綺麗に組み直していく。

「よう。そいつを殺さずに助けてくれたこと、礼を言うぜ」

「カリオン様……!」

「あんたが魔王カリオンか」

道路の被害は大して無い。

問題は戦闘以前から頻発していた植林場の荒れ具合だ。

いつぞやテニスモドキをしていたシオンとミリムが周辺を荒らしたし、ミリム単体の時でもやはり荒れた。

魚災より人災が多い。やはり魔王は駄目。クリーパーよりタチ悪い。

「悪かったな。俺の部下が暴走しちまったようだ。俺の監督不行

届って事で1つ許してやって欲しい」

「……此方こそ謝る事がある」

「ん?」

「カリオンの周りのコイツら、好き勝手している件」

立話中の村人が動く前に、周りの石畳を直していく。

よーしよし動くなよ。良い子だから。

「ふははは!　面白い奴らだな!　ミリムが気に入る訳だ!」

「なんか知れ渡ってる……」
「まあそれくらい気にすんな。それよりも今回の件、借り1つにしておく。何かあれば俺様を頼ってくれて良い」
「……それなら俺達との不可侵協定を結んでくれると嬉しいんだが……」
「そんな事で良いのか？　良かろう、ビーストマスターカリオンの名にかけて誓ってやる。ユーラザニアはテンペストに牙を剥かんとな」

村人には興味なく復旧作業を進めていたが。

唯一、興味深い事が起きた。

ズガンツという重音と共に凄いのツクバツクで村人が吹き飛んだ。魚に飲み込まれていた村人が新参村人に殴られた様だ。良いパンチだ。オマケに近隣の植林場の木々が吹き飛んだ。拳にエンチャントが施されているんじゃないかと思うくらいの。クラフターの純粋なパンチではあそこまで出来ない。

「体育会系……！」

「おら帰んぞ」

「いっばい血出てますけどー！」

村人が殴った村人を担いで去っていく。

まあそれは良い。いない方が作業がしやすい。

ただリスポーンしない辺り、担がれている村人は死んでいないのだろう。

いっせ殺してくれても良かった。それはそれで実験出来たので。

「後日使者を送る。なに、今度は礼を守らせるさ。また会おうりムル」

またも荒れた植林場を見て思う。

荒らしは良くない。

駄目。

絶対。

新旧村人との別れと出会い。

52. 流れる時と寂寥感

「なんですか、あの高出力の魔法兵器は。機龍と関係が？」

「いや、その、魔王ミリムがね……」

「は？」

魚災から何度も寝起きしてからも様々な課題と作業、出来事があつたかに思われる。

クラフターとしては新鮮な日々は大歓迎だ。修繕作業ばかりは流石に戴けない。

荒らしのミリムは相変わらずだが、取り敢えず取り巻きの魚のドロップ品……魚肉は美味しかった。満足だ。

また現れないだろうか。他にもドロップしたし。鱗は村人がクラフトして防具なんかに使っていた。

見聞しただけで素晴らしい造形だった。

荒らしもいる世界だが、やはりオリジナルの創造主、同志がいるのは心躍る。我々は1人ではないのだと実感出来る。感動で涙が浮かんだ。

「……ガゼル王から正式な招待状をもらったよ。国賓待遇だよ、ヤベエよヤベエよ」

「大変名誉な事ですな。リムル様は気に入られておいでです」

「……2日に1通来るのも怖い」

「き、気に入られて……」

「これナニかされない？」

「……兎も角その、戦後処理の為、直ぐには行けない折を伝えた方が宜しいかと」

さても修繕作業は続く。

ミリムが地上のみならず地下でも暴れ回る為、苦勞する。

これもリムルが道を教えたのが悪い。

「さあ！　そのドラゴンで遊ぶのだ！」

強いて良い事を挙げるなら、IRPの演習になった事か。今のバージョンではあるが、データはふんだんに取れたと思いたい。

実戦さながらであったし。ジオフロントは大破した。ビル群が崩壊した光景は、寝泊まり確定演出である。

……いや、これ、実戦だよね……？

「時々地面の底から音が聞こえないか？」

「気の所為じゃないっすか？」

IRPは何とか強くしたい。

第2戦級に降格したとしても、浪漫ある大型兵器であり続けて欲しいものもある。

通常の固定式砲台なTNTキャノンよりかは有用の筈であるし。

解決の糸口はこの世界の未知なる技術に隠されている気がしてならない。

何とか技術者を取り込めないか。防具や武具を制作したヒゲモ

ジャ達でも良い。

特にベスターとかいう白衣の村人等は興味を示していた。シズ越しに頼むのもアリか。

「今度はリムル共々地上で遊んでやろう！　直接な！」

「戦闘訓練だからな！　加減してくれよ！」

地上でもドンパチはあった。

IRPではなく、直接のドンパチだ。　剣や弓矢でミリムの撃退を

試みる。

が、駄目だった。強すぎる。リムルも協力してくれたが敵わなかった。

「作ってくれたドラゴンナツクルも気に入っているぞ！」

「……どうも」

妙な、ドラゴンの手の様な防具なのか武器なのかを装備されて対抗された。

鬼に金棒か、と警戒したものの思っていた程でもない被害である。あくまで今までと比べたら、だが。

あの武具だか防具だか見分け難い装備の影響かも知れない。

悪性ポーションが有る様にあれにも悪性エンチャントなるものが付加されている可能性がある。

つまるところ手加減されているのだ。縛りプレイである。にも関わらず一方的に殴られた。屈辱だ。精進しなければ。

「でもお前達、動きが良くなってきているぞ！ リムルなんて魔王になると言い出してもワタシは反対しないのだ」

「……ならないって。余計なしがらみを増やしそうだし、というか国創りで忙しいし」

「魔王も悪くないぞ……えーと……必殺技を叫んでも何となく分かってくれるのだ！」

「……皆の心に響く言葉だな」

取り敢えず街中で暴れてくれるなよと切に祈り続ける日々だ。

歩くだけで何かが壊れている気がしてならないのに、こんな戦闘を気紛れで起こされたら街の一角は吹き飛びそうだから。

「そーいや、あのフォビオとやらはまた来た様だな？」

「使者に志願したんだと。初めの頃と打って変わって慇懃な物腰

で、カリオンからの言葉を携えてやって来た」

「なんか言っているのか？」

「互いの国から使節団を派遣して国交が有益かどうか見極めようではないか、と手紙でね。　いよいよ国らしくなってきたよ」

だがそんな戦闘も死ぬ前には必ず止まり、大抵その後はミリムとリムルが互いに話し合い始めた。

その隙を見て、クレーターを土ブロック等で修復しつつ、握り飯を食い空を見る。　リムル達も寝転がり時々空を見上げる。

なんだかんだで平和というヤツなのだろう。　我々同士だったらどちらかが死ぬまで斬り刻み矢で針山にしあっている。

それを彼等がしないのはリスポーンが出来ないからか。

恐らく死とは村人にとって永眠なのだ。　シズのように我々の寝床の使用で偶然起きる、なんてのは奇跡に近いのかも知れない。

そう考えて食う飯も美味かった。　食とは奥深い。

「よし！　ワタシは今から仕事に行ってくる！」

「え、仕事って……」

「心配するな。　終わったら帰ってくるのだ」

これまた突然、ミリムが空を飛んでいく。

相変わらずどうやって飛んでいるのやら。　エリトラマントらしきものを羽織るから、それで飛んでいるのだろうか。

だが花火を所持している様子がない。　シズの時もそうだった。　謎は尽きない。

「来る時も突然だったが去る時の唐突さも凄まじい。　取り敢えずミリムの監督役もこれでひとまず終了か……俺もそろそろ出発時期を考えないとな」

さてもミリムがいなくなるなら、それはそれ。

討伐不可能な荒らしが消えた。これで大規模な修繕作業から解放されそうだ。

ただ……とクラフター。

ちよつぴり寂寥感があるのは何故だろうと空を見上げたのであった。

53. 酒と先

「なんか忙しそうなた時に来ちまったかな」

「いや良いよ。接客の練習相手になってくれ」

ヨウムなる村人団が再来したから、クラフターは酒を渡して共に飲む。

嫌がる様子なく飲んでいたので大丈夫か。

口当たりは村人のクラフトと負けず劣らずだ。この程度で慢心しない。追い越し先を常に走るくらいの気持ちで改良を重ねたい。思えば苦勞の連続だった。

酒のクラフトを試みていく何日も経つが、暗中模索の研究だ。

それ自体は何でもそうだが、酒という未知の開拓は困難を要する。道具や材料を村人から見えて盗み、我々の持ち得るツール類で何とか出来るかどうかを試みては失敗する……トライアンドエラーの日々。

だが中々結果は得られない。

だが遂にキツカケを得た。

行き詰まっていたある日。飲まなきややつてらんねえと効能が

低い酒を呑んでいた時の事。

酔った勢いのまま、ふざけて酒を原料にして空瓶を醸造台にセットした時だ。

なんと空瓶に水が溜まり始めた。量こそ少なかったが飲んでみた。先程より酔い時間が伸びた……つまり効能が増したのだ。

RSや砂糖による効果の延長や強化は知っていたが、逆に酒を原料にする事でより効果の高い酒に変化するとは驚きだ。

これは突破口になるやも知れぬ。そう思い立ち、創造主はあれよこれよと試し……蒸留酒とやらが出来た。これとリングゴをクラフトすると更に良い。うん。美味しい！

「接客？　誰か来るのか？」

「魔王カリオンとここから使節団が来るんだよ」
「ぶーッ!?!」

「嗜んでいたら酒を吹き出すヨウム。
口に合わなかったのだろうか。先程まで平気そうだったのに。
クラフターは落ち込んだ。やはり改良しなければなるまい。」

「なんだってそんな事に……!?!」

「話せば長いんだが……」

「それかヨウムはこの手が苦手だったのか？」

「次はコーラスフルーツをクラフトしてみようか。
いや危ない。飲んだらワープしそうだ。」

「——と、いうわけで国交樹立のチャンスってワケなんだよ」

「は、ははあ……なるほど……」

「何か適当なクラフト材があれば良いが。」

「カカオを入れるか。スイカか。見つけた柿か。栗か。」

「いつそ金リンゴでも良いかも知れない。それか普段常食してい
るジャガイモや肉類を放り込むか。握り飯を放り込むか？」

「さぞおっかないのが来るんだろうなあ」

「どうだろうな。別に喧嘩が目的じゃないし」

「……互いにチャンスをふいにしたくない筈だ。とはいえ無理しな
いと付き合えそうにない様なら付き合わないよ」

「ふーん……?」

「な、なんだよ」

「ヨウムが我々を見る。」

「酒に不満があるか。すまない。低姿勢になって謝っておく。」

「コイツらとは長い付き合いなんだろう？」

「……切つても切れない関係だからな。勝手についてくるし……あー、外国行く時大丈夫かな……」

「はっはっはっ！ 旦那なら大丈夫だろう！」

「むっ……あ。ハクロウが会いたがつてたぞ。腕が鈍ってないか確かめたいってさ」

「師匠が!? 一気に酔いが醒めた……」

酒に酔つてみたり醒めてみたり。

村人もまた様々な物腰を取る。それも我々のクラフトに対してにも。

クラフトとは奥深い。

喜劇ならず悲劇も生む。改善出来る余地もある。1で終わらず10にも100にもなり様々な世界へ波及していく。

そう思い行動できるのは、やはりこの世界の村人が我々に対して喜怒哀楽を見せてくれるからだ。

54. 山猫風村人達と虚仮威し

「お初にお目にかかります。 ジュラの大森林の盟主様」

数回の寝起きを繰り返した頃、また新顔がテンペストにやってきた。

人口が多いとはいえ、見慣れぬ見た目や雰囲気とはあるものだ。特にトロツコモドキな乗り物に乗って来たのだから尚更に。

動力は前方にいる大型の猫の様な生物だ。 体表に流れる虎斑は独特で美しい。

威嚇しているが、頑張れば懐柔出来そうだから試してもみたい。

ああ、なんでこんな時に限って魚を持ち合わせていないのだろう。クラフターは空を仰いだ。

村人よりも其方に気を取られるのは、村人の多様性に目が肥えてしまったからかも知れない。

ハアン種ばかり見ていると世界がハアンのみで支配されている錯覚に陥る。

時に自らも飲まれそうになるから、そんな時は動植物と触れ合う事で癒して貰う。

「私はカリオン様の三獣士が1人、黄蛇角のアルビスといっています」

この世界は馬以外の乗り物が色々あるのも面白い。 お陰で豊かな日々だ。

サドルを付ける事で騎乗も出来るかも知れない。 だがそんな時に限って持っていない。 クラフト方法が不明なサドルは貴重品故に。

「はッ、弱小なるスライムが盟主だと？ 馬鹿にしてんのか!？」

ドガツ、と荒い音が響く。 直様木剣を構え、各々修繕材を左手に

添える。条件反射だった。

ミリムの所為で余儀なくされてきた戦闘と修繕の日々が咄嗟の行動を可能にしていたのだ。

見やればトロッコモドキからまたも村人が出て来て……獣風なのは今更だが、見た目からふと思う。

「その上、矮小で小賢しく卑怯な人間共とつるむなど、魔物の風上にも置けねえ」

此方を一瞥して不機嫌そうなハアンハアンを鳴き始める村人。

ニャーじゃないのは想像の範疇だとして、見た目は山猫を足した外見。

これはもしかして……もしかするかも知れない。

つまるところ懐柔出来るのでは、とクラフターは愚考した。

村人に物を与えるのは常日頃何気なくしてきた行為だ。今更に考えたのは取引ではなく、懐柔についてである。

「控えなさいスファイア。カリオン様の顔に泥を塗るつもりですか？」

「煩いぞアルビス。オレに命令するな」

今のところ獣系村人の懐柔は失敗している。高価な嗜好品のケーキを目の前に置いても困惑されるか激昂されたし。

ならばとストック出来る食料を与えても困惑される。

一応受け取ってくれる事が多いが、懐柔出来た事はない。足早に離れられたり、偶に武装した村人を連れて来られる。相変わらず生態は謎だ。

「……ずいぶんな物言いだな。このヨウムは俺の友人で同じ師にいた弟弟子でもあるんだが……あとソイツらの何人か」

「お、おい旦那……」

「それがどうした?」

「そうくるか……なあヨウム。 ちよつと実力を見せてやったらどうだ?」

「はあ!? 平和的にいくんじやなかったのかよ!」

「向こうが仕掛けてくるなら話は別だ」

会話しているが好戦的な雰囲気だ。

山猫村人が舌舐めずりしてハアンと鳴く。

ああ、これは敵対行為か?

なら遠慮はしない。 クラフターは前に出る。

村人が1人2人減ろうと変わらないだろう。 新顔なら尚更だ。

「ほう? やるか人間」

ニヤーと鳴けば愛嬌も湧くのだが。

護身用石剣を構える。 叩けば大人しくなるだろうか。 或いは

ニヤーと鳴くようになるか。

やはりハアンか。

「ちよ……?」

「相手はお前か。 面白い……スライムの配下がどの程度のものか、このオレが確かめてくれる!」

「配下じゃないんだけどね……もう好きにして」

「行くぞ!」

飛び上がった。 猫だ。 見た目通りか。

だが違うのはここからだ。 クルクルと回転しながら突っ込んでくる。

正直に受けるのも馬鹿らしいので、丸石で防壁を作り相手から身を隠す。

「はっ！　壁ごとブチ抜いてや……ッ!？」

ダイヤスコップ直堀で即席塹壕に身を隠した。効率強化のエンチャントの所為で手の届く全ての土が抉れるが、こういう時は都合が良い。

刹那、丸石が大破し上に着地したので上を向いてジャンプしながら斬りつける。素直な奴で良かった。

「ぐっ……!？」

が、足をペチンと叩いた程度に済む。

猫同様に俊敏だ。着地の瞬間でなんとか一撃を喰らわすだけで終わる。

「このっー!？」

反撃を喰らう前に更に深堀して地上を元の土で蓋をする。暗闇の中、横に掘り進み道は土で埋めていく。

「なに!?　地面の中を移動している!？」

追跡は困難になるように仕向ける。次にジツとする。音バレしないように機を窺う。気持ち的にスニーク姿勢になる。

「面白い！　確かに人間は矮小で小賢しく卑怯だが……こんな馬鹿げた戦い方も出来るんだな!？」

「褒めてんだか貶してんだか」
「両方さ」

獸らしく耳が我々より大きい。ここまですれば虚仮威しじゃない。聴力が高い筈だ。

透明化ポーションが仮にあっても追跡される危険性が高い。
ならどうするか。ジツとする。

身じろぎひとつも難しい。大きな音が響けば乗じて飛び出せるが。最悪はこのまま地下に逃げる。

取り敢えず同志がIRPを起動させている。その内嫌でも暴音が響く。機を待つ。沈黙を守る。

「まったく、しょうがありませんねスフィアは。替わりに貴方があの人間の相手をなさい、グルーシス」

「俺ですか……人間の相手ね……まあいいか、遊んでやるよ人間」
「おう。よろしく、な！」

地上で音がする。だが同志ではない。

ハアンハアンと聞こえるから村人同士の戦闘だろう。

この音に紛れて飛び出るか。いや駄目だ。音の感覚が疎らで散発的。ギャンブルするくらいなら籠る。

……ジャガイモの気持ちはこうなのか？

「……なんだこの音？」

「まさか……」

おお来たか。本命の音が響いてきたぞ。

ガシヤンガシヤンと近付いてくる。質量故の地響きは土の中にも伝播する。

……この波長とも思えるモノはIRPの検知機能に生かされているのかも知れないな、とふと思う。

「お、おいありやなんだ!？」

「デカイ……ドラゴン!？」

「お前らな……出す程じゃないだろ!？」

「あーもう滅茶苦茶だよ」

地上の騒ぎが大きくなると同時、やがて地下君主の咆哮が大地を空を、世界を震わせた。

——キシヤアアアアアアアアアアアツ!!

「うぐっ!?!」

「耳が……ッ!」

よし今だ。

地中のクラフターは飛び出した。相手は背中を見せて咆哮に怯んでいる。

「ああ……ゾクゾクする!　　そうだ皆本能を解き放て!　　そしてオレをもっと楽しませろ!」

斬りつけるなら今を置いて他にない。
殺ろう。

そう思い、駆け寄った。相手の脳天に剣を振り下ろそうとした時。

「それまで」

最初の村人に止められた。
下半身がニヨロニヨロしている。寝起きの洞窟でも似た生物を見た事があるし、村人は多様性に富むから今更驚かないが。

それよりもクラフター。
突きつけられている棒状のツールを見やる。

なんだそれは。刃の部分が先端のみにある。スコップのレシ
ピに似て非なる物だというのか。

「……もう十分です。このあたりに致しましょう」

疲れ気味にハアンと鳴かれた。

周りを見る。戦闘は止まっている。

IRPも村人を見下ろして大口を開いたまま止まっている。

「……堪能させていただきましたわ。試す様な真似をして御免なさい」

そうか。降参か。クラフターは頷くと剣を仕舞った。

IRPには流石に勝てないと判断したか。

「見たかお前ら！ 彼らは強く度胸もある。我らが友誼を結ぶに相応しい相手だ！」

だがクラフターは空虚に襲われる。

IRPは虚仮威しだ。見た目だけなのだ。

本物である相手に何か誤魔化しをしてしまった気がして、クラフターは懺悔するように村人に頭を下げた。

55. 評価と友好

「獣王国ユーラザニア。ビーストマスターこと魔王カリオンが支配する領域。カリオンを筆頭に上級国民は全て獣人。一兵士に至るまで徹底的に鍛え上げられた軍事国家……なのは学んだが」

獣村人降伏後。各々村人がハアンハアンと鳴き始め新顔とリムル達古参が交流を始める。

だが特に人気なのはIRPだ。足元に獣村人が集まり騒いでいる。

「これドラゴン？」

「雄叫びといい格好良いな！」

「作られたとしても……あそこまで動くとは」

「ヴェルドラの化身？」

「それは無い。断じてな！」

「何か嫌な事がありで……？」

獣村人はIRPとの交流を試みている。可哀想に、ソイツは無機物で喋らない。

咆哮こそ上げるが、それも正確には摩擦音の様なものだ。

それを加味すると……やはり彼等に誤魔化しているのは我々だ。

それをシズがないと伝えられない現状も含め心境は苦しい。

当の本人を連れて来ようとも思ったが、剣を振ってるなら邪魔しちや悪いし。

「ドラゴンの様な巨体と強靱な雰囲気！ 天地を震わす勇ましい雄

叫び！ 仕合したいんだが!」

「やめてくれ。この辺一帯が吹き飛ばす」

だが褒められてるのは悪い気はしない。

リムルだけ不満気であるが。

見慣れたのもあるだろうが、魚災の時は微妙な戦果しか出せなかったのもある。

何か良い案があれば良いが。リムル達の能力をIRPにエンチャント出来れば直様能力向上しそう。

想像出来たなら創造出来る。よって絶賛研究中だ。勿論、他にも操縦系統や姿勢制御の見直しや基礎的な動作の見直しもする。新たな武装も模索する。

なに酒がクラフト出来たのだ。色々出来る気しかない。Bは未知で万能であるし。

そう夢想している間にも獣村人達は色々な所を観察したり匂いを嗅いだり、小突いてみたりしている。

見方によれば敗北者の癖に無礼な行為を働いている訳だが、褒めていると分かるなり歓喜した。創造主として嬉しい事は嬉しいに決まっている。

よく観察してくれる村人達だ。着目点が全然違う。元の世界の村人とは雲泥の差だ。

ほら、見える所でも色々な拘りってあるからさ？

「脚それぞれにある2本の白爪なんてどうだ！　ちよつとした木の幹くらいの太さはあるぞ！」

特に山猫風村人が興奮している。

今はIRPの脚の爪を見ていた。

それは鉄製アンカーだ。二足歩行時の補助機能がある他、攻撃にも使える。

普段は地面の破壊や爪の故障を懸念して猫の爪の様に引っ込んでいるが、必要とあらば飛び出る。襲歩からの急停止の時等にも飛び出る。基本的に自動だ。鉄製なのは試験段階の域を抜けない為、改修しやすいように。

「あの口の中の人間がこのドラゴンを操ってるのか……なんだこの中!? 意味わかんねえ光がいっぱいキラキラしてる!」

今度は操縦席にジャンプして中を観察された。この辺は説明に困る。

我々は製造法含めて多くを知らない。極限られた創造主の特権だ。

だが操縦しやすく工夫されているし、自己診断や修理もある程度パネル越しに出来るようになってる。

「両腕にある長い棒はなんだ!? 剣みたいなものか!」

TNTキャノンを指差す。

昔に確立された理論に基づいた兵器だ。

砲身も本体同様に黒曜石製なので水流による対爆対策はしていない。

だが今までのと大きく異なる点は搭載されているキャノン構造は複雑で、薬室……圧縮次第でTNT弾頭の最大飛距離は他国を越えて余りある事。

またBBに座標を入れて演算させる事でその地に弾着するよう火薬量……圧縮率や仰角を調整して自動発射してくれる。

直様の対応が出来るようにロックオンした敵との座標を瞬時に計算して撃つ事も出来る。

魚災の時はそれが役に立ち、取り巻きの空魚を殲滅出来た。

未曾有の災害に対策する為に創造された兵器なのもあり、BB使用不可能時等の故障の際に已む得ず行われる直接照準射撃を考慮。

地下TNTキャノン実験室にて射表も作られている。

また、都市防衛思想計画から摩天楼の屋上等にもキャノンを造る案が出され、一部は試験的に設置されている。

リムルとシズはまだ知らない。怒られる気がするが楽しければ

良い。我が道を進む。それがクラフター。
要略。創造万歳。

「……直接やりあえたという意味なら……お前ら人間は強かったぞ！
妙な技を持つているし面白い！ 控えの一本角の方も強そう
だな」

「勿論です！ リムル様の護衛役として当然です！ なにせあの
魔王ミリム様を打ち負かした事もあるのですよ！」
「えッマジか!？」

IRPのみならず我々にも褒め言葉を向けている気がする。
戦いそうで戦わなかったシオンとも話し始めた。社交性があつ
て良い。マルチでは大切だ。

「お前の勝ちだ、と半ベソかいていましたよ！」
「す、すげえなお前！」

うおおおおお、と謎の歓声が上がる。
アレか。シオン級猛毒ポーションの話でもしたのだ。
それは我々も称賛する他ない。今のところクラフト出来るのは
シオン以外知らない。

「……獣人は力を信奉し強者を讃え、誇り高く正々堂々。そして何
より素直で裏表がない……信じるのか、その話……嘘じゃないけど本
当じゃないというか……」

一方、リムルは未だ微妙な顔をしていた。
話に混ざれない苦しみか。分かる。
クラフターはリムルに寄り添った。取り敢えず酒を渡してみる。
友好度を上げるアイテムとしても比較的高評だし。

「……お前らも裏表が無く思えるよ」

苦笑された。

そうだ。取り敢えず笑っとけ。

友好度も上がる気がするのだから。

こうして福はやって来る。

56. 豪酒と観光

あれから寝起きを繰り返して今日という時に立つ。

あの日あその後、新顔達に新設された迎賓館にて酒が振る舞われた。マルチならではの行いだとも思った。新人に様々なツールや建材を渡して可愛がる様なものだ。

そうして仲良くなり、あわよくば友になり同好の陣営に引き込む。正しく同志であり過ぎれば親友という真の友を獲得するという快挙をも為せよう。

というわけかりムル達はリンゴの蒸留酒を振る舞った。新顔はイける口らしい。

バケツサイズどころかチェストサイズに収まる酒を何個も平げ、我々がクラフトした酒も渡した側から飲み干した。

「ああ、幸せ♡」

幸福感のままに飲ま飲まウエイであった。遠慮はいらないが蟒蛇とは恐ろしいと思う。我々には真似出来ない豪酒であった。

思えば翌日もそうだった。

「め、盟主様……遅れて申し訳ありません……」

「アルビスどうした!?! 旅の疲れか!?!」

「朝に弱いだけだ。ちよいと気付が必要だがな」

寝起きのニヨロ村人は状態異常を受けたかのように顔色が悪かった時だ。

ところがチェストサイズの酒を飲んだら忽ち治った。凄い。酒とは牛乳バケツに代わる万病の薬か。治癒ポーシヨンの一種でもあるのか。

「…………ふう。 お見苦しいところをお見せしました。 もう大丈夫です、視察へ参りましょう」
「うわばみ怖え」

村人達は何事もなかった様にテンペスト観光へ動き出す。

朝から興味深い連中だ。 どちらかという悪性ポーションとも言える酒を大量に飲んだら足取りは覚束ない筈なのに。

これも村人の為せる業なのか。 我々も特訓するべきか。 酒を飲んで摩天楼で綱渡りとか。

「しかしテンペストは凄いですね。 天をも削る塔が何基も建ち並び、合間を縦横する整備された道路。 張り巡る用水は飲み水に足る清水に足り、隙間に生える緑は外観を柔らかく見せてくれます」

「殆どアイツらが勝手に建造したんだがな」

「…………言葉が通じませんか？」
「全くじゃない。 一応通訳がいるんだが価値観の違いか微妙でな…………」

建造物群を誉めている。 喜ばしい。

相変わらずリムルは微妙な顔をしているが何時もの事だ。

「あの大きなドラゴンは？」

「地下に格納されている。 大きな脅威に対抗する為の兵器らしい」

「らしい、とは」

「それもアイツらが創ったからだ。 しかも極一部の者しか創り方を知らないらしい。 どこまで信じて良いんだか」

「苦労されていますのね…………見学しても？」

「すまん。 それをすると怒るんだコイツら」

「内密にしたいのですね」

「あいや…………俺の所為だ。 ミリムに地下の事を教えたから、それ以降、部外者が立ち入るのを嫌がる様になっちゃって…………」

「……お察し致します」

地下にまで来なかったから安心した。

リムルとミリムの所為で散々な目に遭った。あの嫌な日々以降、部外者を地下に……特にIRP格納庫に入れさせないようになっている。

一体何徹してジオフロントを修理補修した事か。ゾンビイベントの様な緊急避難時は仕方なく受け入れるつもりだが。

荒らし許さん慈悲は無い。

「ところでお酒はあまり作れませんの？」

「ああ……果樹園は試験的で、殆ど森からの恵みに頼ってる」

「それなら良い考えがございます。我がユーラザニアから果物を輸出しましょう」

「……成る程、それで酒を作って寄越してくれと……割合は？」

「細かい事は任せます。美味しい酒が飲めればそれで良いので」

「おいおい……取り敢えず、その件は商人の代表に任せるか」

「……この方々も酒を作れるんですよね？」

「期待しない方が良いでしょう。気紛れ過ぎる」

「なら気紛れで良いので、彼等の酒も時々飲ませて下さいな」

「……出来たらな」

リムルから嫉妬の念を送られた気がする。

気がするだけだが。気の所為か。

何にせよ気にする事でも無い。リムルはリムル。我々は創造

主、クラフターである。

57. 実験と狐村人との出会い

「アルビスとスファイアは帰った。だが配下達は滞在。技術を学ぶ為らしいが……」

出会いあれば別れ有り。

また滞在もあるものだ。

大酒飲みの獣村人が帰ったと思えば、部下らしき獣村人は滞在を続けている。

それは好き好きだ。好きにすれば良い。荒らさなければ、という条件が付くが。

「マンションに空室が沢山あるからな。贅沢しなきや住居には困らないか」

「水の昇降機等には困惑されましたが、今は慣れてくれた様です。ですが……」

「どうした」

「それら彼等の技術も学びたい、と」

「無理ダナ。大賢者でも解析出来ない事が大半なのに教えられないゾ。ハツハツハツ」

「……リムル様、お辛いのは分かりますが」

「辛い時やどうしようもない事は笑うしか無い。というわけでリグルドも笑いたまえ」

「ははは……」

新規村人達は建造したビルやマンションに勝手に住み始めている。やはり余分に空室を作って正解だった。万単位の人口なんてかつて経験した事のない規模である。

だが同時に新たな取り組みであり、ワクワクが止まらない。

村人も我々が建設した大都市にて独自に活動し、様々なクラブトを

見せていく。

負けてはいられない。酒も様々な種類を開発した。醸造台を用いて蒸留酒にジャガイモを混ぜて白樺の木炭で脱臭、すると火酒なるものが出来た。個人差があるがキツイ。かなり酔う。これも個人差あるが熱くなる。ブレイズみたいに火を吹けそうな気分になる。

実際、火薬を調合してスプラッシュにし、火柱に放り込んだら烈火の如く燃え上がった。

考え方次第で武器に出来そう。一考の価値有りである。なお、ジャガイモではなく小麦を原料にしたら麦酒なるものが出来た。

握り飯を放り込んだら米酒なるものが出来た。

面白いので今後も様々なモノを原料にしていこうと思う。味も見た目も異なってくる酒は見ても飲んでも面白い。あと投擲。

「首都リムルは凄いな。何もかもが不思議だ」

「無限に湧き出る水、かのドラゴン程の規模を生物以上に動かせる技術力」

「そうだな。2年足らずで大都市を築けたのも彼等、謎の人間達の技術力故か」

「出来れば学びたいんだが言葉が通じんからなあ」

「なに、ドワーフや鬼人の鍛冶職人達から学べる事も多い。あれもこれもと言わず、出来る事をしていこう」

「だな」

取り敢えず獣村人達は荒らし行為をする様子が無く安心した。

それを嬉しく思ったクラフターは、時々彼等に酒を振る舞う。実
験動物的な役割もある。

「おお、これはこれは……」

「うむ、美味しい！」

「これを祖国でも飲めたならば」

よしよし。やはり酒はウケる。

もうケーキやパンが無くて良い。無いなら酒を飲ませれば良いじゃないか。

その方が間違いないなら尚更に。

「美味しい酒造りを教えてくれればなあ」

「言葉が通じないのが残念でならない」

かと思つた側から残念そうな顔をされる。

酒も個人差で好き好みがあるのだろう。それは仕方ない。嫌

われなければ良い。

さても酒ばかり構つてられない。

クラフトの世界は壮大だ。村人達に負けない為にも都市整備を続け、屋上にキャノンを増産していく。

残念ながら砲塔旋回不可能の固定式で単発式。自動装填は無い。

だが一応は対地对空式とする。

余裕を見てフルオート自動装填にする。まずは防衛力の向上を優先したのでこうなった。

BBもあれば砲塔旋回させたり自動で動く様に出来るのだが。

砲手や観測手も要らない。

演算能力もありかなり凄い技術である。頑張ればIRP等も縦者無しで動かせる可能性もある。なんなら喋らせる事も出来る

かも知れない。

だがしかし。

残念ながらアレの創造方法は鞍同様不明だ。

クラフターが創造したものの筈だが。どこかにレシピが落ちてないか。無理か。

「あ、ああ……そんな顔しないでくれ」

「そうだ。別に咎めている訳じゃねえ」

なんか村人に気を遣われた。

なんだか気不味い。取り敢えず腰を曲げてお辞儀。この場を去る。

「じゃあな！　美味しい酒、ありがとよ！」

「言葉なくても構わない！　気持ちには伝わるさ！」

街中を散策する。道中の路地裏もくまなく調べていく。

沸き潰しヨシ。破損箇所無し。平和である。

行き交う村人達は交流に取引に忙しい。

テンペストは最近はこのだ。最初の頃とは雲泥の差だ。

どこからこんな万単位の村人が沸いたのか。種類も様々である。

繁殖場所が何処かにあるのだろうか。

いやしかし、繁殖現場を目撃した事がない。そーいや食べ物を与

えても発情する様子もない。与えるモノが違うのか？

「来たです！　魔国連邦首都リムル!!」

ふと甲高いハアンで振り返った。

犬のような猫のような獣耳と尻尾を生やした村人がいた。

最近元の世界で見かけたとかいう狐とかいう生物に似る気がする。

ふと、気が付いた。

村人と獣を発情させて交配すると生まれるのが獣村人なのではないか、と。

「ふあー！　道がスーツと真っ直ぐです。デコボコしてないし

砂っぽくないです！　天を摩する塔が何基も建ち並んで凄いです

！　ピシツとした綺麗な都市です!!　それに色んな種族がいる

です!!　あ、噂の人間もいるです!?!」

取り敢えず手頃そうなので発情実験だ。
腰を曲げて挨拶しつつ酒とコスパの良いベイクトポテトを渡して
みた。

「え、えと……ありがとうございます……？」

困惑された。受け取るも発情した様子は無い。
簡単にはいかないか。

取り敢えず簡易実験は失敗だッ！

58. 取引と利益

「色々貰えようと逆に怖いですね……」

小麦やリンゴや肉や魚や酒を与えても狐村人が発情する様子がないから、クラフターはガツカリした。

ケーキを目の前に設置してみる。駄目だ。困惑度が増すのみだ。

「突然目の前に置くです!? 噂通り意味不明です!？」

甲高いハアンを上げるばかりで進行しない。

取引にもならない。

かくなる上はエメラルドだ。下手するとダイヤより貴重な宝石だが実験の為に。

前の世界では村人との取引に有用であった。恐らく上手くいく筈だ。

「今度は大粒の翡翠か何かです!? そんな高価な物受け取れないです!？」

拒絶された。まさかここまで失敗続きとは。

発情はともかく懐柔も取引も成立しない。

村人同士で合流や取引が明らかに行われている現世界において、この拒絶は心的動揺を隠せない。

つまるところ仲間外れ感が否めない。マルチにおいて堪える精神攻撃を今、我々は受けている。

この反応は最早虐めじゃね、これ?」

「今度は落ち込むです? 言葉も通じないから困るです……でも悪

い人じやなさそうですし……」

では金か。　ダイヤか。　まさか石炭や鉄か。

様々に思考して試行錯誤をしようとしたが、当の狐村人はあげたモノを返却してきた。

「えと、私は狐の獣人族のフォスです。　色々と恵んでくれるのは嬉しいですが、お返し出来るモノがないです……だからこれはお返しするです」

渡したモノを返却された。

完璧に拒絶されている。　泣けてくる。

クラフターとしては折角の可愛い玩具……じゃなく実験動物を飼育したいところだ。

いつそリードを持ってきて拉致するべきか。　いやそれをやると痛い目に遭いそうだし。

せめて何らかの成果を得ようと村人の装備を見てヒントを得ようとする。

腰に短剣を佩く。　帯刀村人のモノとは全然違う。　それも気になるが横の鞆とやらの中身も気になる。　開けるか。

「あつ、こころ駄目です!?!」

中身を見てクラフターは首を傾げた。

見た事がない果物だ。　リングに似ているが違う。　少し縦長に丸い。

気になる。　美味しいかも知れない。　取引して幾つか貰いたい。　エメラルドは駄目らしいので金鑄塊との交換を試みる。

「えっ?　これ何個かと交換したいです?　えっ、金塊とですか

!?!　明らかに釣り合わないと思うです!?!」

手応えがある。　だが足りないらしい。
しかしどうしても未知なる果物を欲する。　取引が成立した実績も残したい。

金鑄塊を上乗せした。　さあ寄越せ。　まだ積み足りないか。
いつそ1スタック64個渡そうではないか。

「えっ？　　ええ!?　　ええええ!?」

路上に無造作にばら撒かれた金鑄塊に驚愕と困惑のハアンを上げて一向に取引が成立しない。

どうしろというのだ。

我々も何なら取引に応じてくれるかと思考するが分からない。
渡そうと思えばアイテム点数は膨大な数に膨らんでしまう。　だが日が暮れる。　時間の浪費はしたくない。

「あ、あの」

自ずと答えは勝手にやってきた。
狐村人が取引を持ち掛けたのだ。

「この国の対価の比は詳しくないですが、先程の芋と交換で良ければ……」

左手に持つバイクドポテトを指さす狐村人。

これか。　ジャガイモはコスパが良いがレートとしては安物だ。

まあ、これで良いなら良いかと渡す。

案の定、果物を代わりに渡された。　なんと驚き。　取引が成立した。
た。

何気に初かも知れない。

やったぞ。　取引がこんなにも些細でありながら困難を要し、それ

故の達成感に浸るクラフター。

これでまたひとつ、村人に認められた気がする。
そうだ。

この狭くも広い世界に認められた快挙である！

歡喜のままに首を激しく動かした。

最早どつちが上で下か分からない。更なる表現として右腕も激しく振り回す。

「やっぱり噂通りの変な人間です!?!」

武装した村人が来るまで喜びの舞は続く。

だが相応の達成感を得たのである。

個人では小さな1歩だが我々には偉大な1歩だ！

59. 笑顔と対価

「人間さんのくれた食べ物も美味しいですが、屋台のも美味しいです！」

狐村人は取引所を周り、取引で得た食糧を味わっては恍惚の表情を浮かべた。

一方、クラフターは悔しさを味わっていた。握り拳を作り天を仰ぎクラフト能力を磨かねばと気持ちを新たにする。

「この串焼き肉、肉汁じゅわわ！ やわらかお肉に香草がよく効いてて絶妙な味です！ さっきのしゃきしゃき野菜とジューシーハムをふかふかパンに挟んだやつも美味かったです！」

村人のクラフト能力は独特だ。

今狐村人が食べている……パンと野菜、肉とをクラフトした品や棒と肉をクラフトして食べ易く工夫されたモノだけでも我々が作ってきた食糧よりずっと美味しい。

若しくは効率的なクラフトや食事時間の短縮に成功していた。我々も置いてかれまいと再現や研究に励んでいるが、食糧以外にも先手を常に取りられている分野は多い。

特に悔しいのは……今狐村人に与えている幸福、それに伴う笑顔。これは我々がクラフトしたものではない事だ。

村人達の功績だ。負けていられない。鶏肋だとしても役立ちたい。承認欲求もある。

追い付け追い越せ創造主。時間は掛かれど達成出来る筈。涓滴岩を穿つのだ創造主。

だが1番はやりたいからやるのだ。知りたいから研究するのだ。なにより創りたいから創造していく。やりたいようにやっっていく。

それこそが我々であり人生だ。
そうして生きるし生きていく。

自分自身の為だ。 村人の為ではない。
いや、既に矛盾であったと己を顧みる。

この世界に来て村人の為にクラフトした物事は数知れない。
気が付けばこの世界の立派な住民であったかなとクラフターは苦笑した。

「でも物々交換出来そうなのが少なくなつたです……使い過ぎたですか？　なくなる前に宿屋さん決めるです……つと良いところに宿屋さんです。　ここにします！」

おや。 狐村人が建物に入っていく。

建物の殆どはクラフターが建設したが、用途や内装は村人が変更している事が多い。

想定外ともいえるし想定内ともいえる。 何にせよ建物が使用されているのは建築者として嬉しい事に変わりない。

元世界の村人なんて扉さえあれば満足する連中であつたし。

「すいませーん！　これで何日か泊まりたいです！」

「ごめんねえ、ちよつと足りないかな」

「1泊も!?　納屋でも良いです！」

「そういうのは出来ないけど……高層集合住宅の空部屋にタダ同然の部屋は沢山あるよ。　でも」

「でも？」

「大体は雲より高い高層階だからね……昇るのに時間がかかるのよ。　転移魔法や設備が間に合っていない建物ほど安いわ。　宿屋さんが存続出来る理由もその辺ね」

「な、なんでそんな不便な建物を……」

「さあ……あの不思議な人達が造つたからねえ。　よく分からないわ」

「うーん……大変だけど危険な森で野宿するくらいならそこに住むです……」

「……長期滞在を考えているなら働くのはどうだい？　街道整備の仕事を募集していた筈だよ。　最近は地下鉄とかいうプラットホーム？　の工事や地下都市の設備工事なんてのもあるね」

また狐村人が騒がしいハアンを鳴いたと思えば建物から出てきた。取引にでも失敗したか。　良くある事だ。　我々も先程まで失敗していた訳だし。

「泊まる為に街道整備の仕事をしてきます！　さつきは食べ物、ありがとうございますございました！」

だが笑顔を見せてきた。　クラフターは頷くと、狐村人は澆漑と走り去る。

元気なのは良い事だ。　諦めずに邁進する姿はどこか我々に似る。やはり負けてられないな。　性に合わない。　狐村人の後を追う。新たな出会いと創造が待ち構えているに違いない。　それを学びモノにし、競争するのもまた楽しい。

「はい次の労働希望者〜」

「はいッ！　狐の獣人族、フォスです！　こう見えて力に自信はあるです！」

「そりゃ大歓迎だ」

クラフターは今日もツルハシを振る。　スコップを振る。　斧も振るえば鍬も振る。

開拓、開墾、新築、改築、修繕、修理色々。

建築だって研究だって、したい事がある限りクラフトしない選択は有り得ない。

この世界の村人がそうである様に、我々も負けじと人生を楽しまね

ば。

「街道整備は例の人間達のお陰で殆ど終わっているんだ。代わりに地下労働行きになるが良いか？」

「……背に腹はかえられぬです。お願いしますですっ!？」

ほら見たまえ。

先程の狐村人は地下鉄へと向かったかと思えば、後手のプラットホームや内装のクラフトの手伝いを始めた。

今は細かな部分をツルハシやスコップで削り整地していく。

やはり狐村人もクラフターであった。新人玄人関係無く歓迎する。

「うう……昼夜が分からない地下労働は苦手になりそうです……カリオン様、これはテンペストの闇かもです……」

目尻の涙を仮設照明の松明でキラリと光らせながら、ツルハシを振るっている。

創造主はその様子を見て満足気に頷いた。

そうかそうか!

泣くほど創造世界が楽しいか!

感極まるのは生きている証拠のひとつだ。

それでこそ創造主、クラフターである。

祝え。実験動物改め新鮮な仲間の誕生だ。

改めてようこそ。同志マインクラフターよ。

旅立つ者と残る者。

60. 許す事と駄目な事

「シユナ様がリムル様と旅行に行くんですよ!？」

歩く汚泥の濁り、シオンが発狂しやがった。

癩癩を起こしやすいのは存じているが擾乱して良い理由は此処には無い。

ミリム程の被害が出なくとも、それなりに周囲が破壊される。修繕役は損をする。

だからクラフターは即座に牛乳バケツを左手に、右手にノックバツク強化の木剣を構えた。

稽古帰りのシズにも同様の剣を渡す。素手でどうにか出来る相手ではない。大抵そうだが。

「ズルイです!　ズルイのです!!　私を置いていくななんてヒドイのです!」

「シオンさん、落ち着いて……」

「落ち着いてられません!」

現状通訳に於いて一縷のシズが諫言してくれているが、効果が見られない。

言葉で駄目なら叩くしかあるまい。器物破損行為に及んだら現行犯である。

「……リムルがドワルゴンに行くんだけど、シオンさんは置いていくみたいで。それで……」

シオンは心境を述懐中との事。

あいや仕方ないだろう。クラフターは溜息を吐き空を仰ぐ他ない。

我々だつてついて行きたいが、シズに止められている。気持ちは分かる。

だが散々な破壊と汚物を見てきたクラフターだ。政治に疎くても悟るものがあつた。

相対する創造主である我々が止められる理由は不明だが、この1本角は駄目だ。

他者の土地を荒らした時、報復措置をされかねない。つまりテンペストが攻撃される危険性を生むのである。

マルチクラフターである我々は詳しいんだ。

……あ。我々も他人の土地でクラフトしてたわ。成る程。今頃合点がいく。

「シズ様も行きたいですよね!？」

「私はこの人達を引き留めないとならないから……シオンさんも何か秘書の仕事を……」

「……秘書の仕事つて……何をするんでしよう」

「えッ!? 今まで何を!？」

「リムル様を抱いてお運びしたり、お茶を淹れたり……」

「書類の整理とか予定の取り決めとかは?」

「いえ……リグルドや他の管理部門の方々が処理してますし……」

だが当方迎撃の用意有り。

都市防衛思想計画は開始して間もないが、通常のTNTキャノンならビル屋上に備えている。IRPもある。我々の装備もある。

改良の余地だらけの問題放題な砲台ばかりだが、ゾンビやスケルトン級の集団程度なら鎧袖一触の自信がある。

それ以上の脅威が来たら地下に潜伏。土地を掠奪されたくはないので考える。

……今は目の前の鬼に集中だ。

「そ、そうだ！　地下鉄駅の建設工事の視察とか手伝いとか！」
「ちかてつ？　確かこの人達が造った次世代の交通網ですよね。
今はドワルゴン近郊まで伸びているという……はっ!?　そうです、
それを使えばコッソリと」
「それは駄目」

怪しく身体をくねらすシオンにゾツとしつつシズに聞いてみた。
……どうやら地下鉄を利用して单身殴り込む腹らしく、それを止め
ている。

あいや待てよ。　良い着想じゃないか。

どれ、我々も脱走を企てよう。

「……貴方達も駄目だから、ね？」

暗黒微笑のシズに止められた。

もう激しく首を縦に振る他無い。　味方の筈なのに三巴の様相な
気がしてならない。

「おーいシオン！」

そんな時。

リムルがやって来た。　最近は何疑の念を送られているかに感じ
るが、別に喧嘩しているつもりはない。

「リムル様！」

「あー、その。　やっぱお前も連れて行く事にした」

「本当ですか!?!　ありがとうございます！」

「……泣いて喚いて暴れたらリグルド達が可哀想だからな」
「へ？」

「い、いやなんでもない。　それとシズさん……コイツらの事、くれぐ

れも頼む……」

「……出来る限りはするよ」

なんとシオンはお許しが出たという。

なのに我々は同伴は駄目らしい。何故だ。

やはりリムルに嫌われているんじゃないか？

そう思っつて酒をリムルに渡してみる。友好度を上げるのを試みたのだ。

「……いや良い。仕事に行くからな」

拒否された。酒なのに。

仕方ないからシズに渡す事にする。

「……うん。後で飲もうね」

少し哀しげに受け取られた。

何故だ。酒なのに。

61. 束縛と自由

リムルがドワルゴンに旅立ってから、テンペストは賑やかだ。

1番の統率者がいなくなっても治安維持が為されている辺り、村人達の努力の賜物である。

「お待たせしました。 リムルさまん蒸し上がりです……」

「リムル様だんご、冷やしリムル様もありますよ……」

「リムル様リムル様リムル様リムル様……」

微細な変化としては村人達がややゾンビ行動に似た行為を取る事だ。

呻き飢え渴く集団でゾロゾロと取引所に寄せる姿はイベントのソレである。 情が湧く前なら殲滅していた。

癖で抜剣しなかったのは今日まで養ってきた強靱な精神からだろ
う。 我々も確実に強くなっているのだ。

「以前の3倍は売れているようだ」

「愛……ですかなあ？」

食品が美味しいのは賛同するが。

以前に増して消費されるのは何故か。 どれもリムルに似せた食べ物ばかりだ。

これは精神的支柱であるリムル不在と関係があるだろう。 間違いない。

……本物が帰還した時、喰われそうだ。

実は常に狙われているのでは？

捕食者側と想っていたが、そうでもないらしい。

だが食う喜びと食われる恐怖を同時に知り得ているのは悪い事ではない。

生きている以上、生と死について無頓着にならずに済むからだ。安易に死ねる人生は精神摩耗の恐れ有り。

特に時間と資材ロストの苦痛は辛い。その感覚は忘れてはならない。

「え、えーと……私は稽古に戻るね。貴方はどうする？」

シズに尋ねられた。

ふむ。共に行こう。IRP研究も行き詰まっている。ミリの攻撃を参考にした散弾式キャノンも右肩部に搭載したくらいだし。

この理屈は難しくない。元の世界でも実験していた事だ。

円形状に弾頭を複数発射して、中央に起爆が他より早い弾頭を同時発射。中央の弾頭が先に起爆する事で周囲に飛翔している弾頭が爆物で散るといふもの。

が、問題もある。TNT消費量は自然と多くなるし長距離攻撃に不向きだ。

対空戦闘や対地戦闘において軍団を相手にするのが好ましい。若しくは俊敏な敵とか。

TNTの材料である火薬の収集は大変だ。ストックはあるとはいえ、大規模戦が長期化したら継戦出来ない。

火薬に変わる動力があれば良いのだが。もしくはTNTに代わる兵器。

「別行動にする？」

いや共に行くぞ。

この地でもやりたい事は色々あるが。都市防衛思想計画も行き詰まり感が否めないし。

キャノンはフルオート機構を取り付けるまでいったものの、それ以上の進展は無い。

BBがIRPにしかないので大型化も避けられなかった。演算のリソースは余裕様子だから何とかIRP経由でも遠隔操作出来ないだろうか。だがRS回路みたいの有線式にする訳にはいかない。無線技術が我々には無い。

BBは謎に満ちているから、操作パネルから何とか出来ないものか。

兎に角、考えても仕方ない。

息抜きも兼ねて戦闘訓練をしよう。この世界での戦闘も研究しなければ。

そこからヒントを得られるかも知れないし。

「……また何か造ったの？」

さあ行こう。時は有限だ。

「分かった……後で聞かせてね。 たつぷりと」

……笑顔の重圧が凄い。 改めて生と死について考えさせられた。己の未熟さを嘆いた。

忸怩しつつ、次に出来る事を考えよう。 アレはどうか。 これ如何に。 そうして恐怖を誤魔化した。 現実逃避はらしくない。

というか嫌いだ。 だがそれ以上にこの雰囲気は嫌だ。 だから許せ。 今は楽しい妄想に浸りたい。

「……本当はね、分かってるんだ。 貴方達を縛れる立場じゃないって」

移動の最中、シズが憂いを帯びる。 帯びたいのは此方なのだが。

……前にもあったな。 こんな事。

「なのに私の未練でリムルや、貴方達の人生を縛って……重圧になっている。でも本来貴方達は1つ所に縛られる存在じゃない。堂々毅然たる姿で冒険して開拓して建築して。そうして生きていくんだよね。楽しく、誇らしく、嘘偽りない笑顔でどこまでも」

シズを見る。下を向いて口角を上げている。

「イングラシアって国に私の教え子達がいるの。落ち着いたら国を出て戻るつもり。リムルや貴方達に迷惑を掛け続ける訳にはいかないと思っっているの。本当は魔王の所にいつて魔素を安定化させる方法を聞こうと思っっていたけれど……場所がはつきり分からないから……だけど、そうすれば貴方達の肩の荷が少しは……」

ぽんつとシズの頭に手を乗せた。

やっと頭を上げた。己を見た。

「えっ？」

シズが人生の重圧だなんて思っっていない。

寧ろ軽度に制限された世界に生きてこれ程の自由を与えられて嬉しいくらいだ。

その中で出来る事を思考する。創造する。逆に1つ所に籠る

事で熟成されていく創造もあつた。感謝する。

「でも……」

それはシズもだ。

「……私は何もしてないよ」

否。我々はシズの努力を知る者達。

君がこの地で直向きに剣を振るった事で確かに前進している。己に足枷がある事を自覚していながらだ。これを我々は称賛する。かつての力を失っても歩み続ける姿は我等マインクラフターのソレでもある。

「で、でもリムルは……」

リムルもだ。あの水色スライムはシズに擬態して紛らわしいし、ミリムの件を思い出す度に殴りたくなるが、根は良きクラフターだと信奉したく思う。

愛する建築物に良くも悪くも興味を持ち意見してくるし皆から慕われているし。それにシズの事を大切にしている姿勢は我々にも分かる。悲観するな。

苦難は仲間で分かち合え。

「……………」

シズ。君は我々の仲間である。重圧だなんて誰も思っちゃいない。いたら其奴は殴り飛ばしてやる。

だから自信を持って。誇りを持って。君が諦めず剣を持ち続けていた様に。

「……敵わないな、君達には」

砕けた口調で苦笑された。我々も笑顔を向ける。そうだ。笑ってなさい。シズには笑顔が1番似合うよ。

62. シズと訓練

「シズ殿に……お主らもかの」

シズと共に村人達の訓練場へ赴いた。

相変わらず大勢の武装村人がハアンハアンと真剣勝負をしている。

どちらかというとき木剣勝負の割合が大きい。訓練だしそんなものか。

「本日も宜しくお願いします」

シズがハクロウなる帯刀村人にお辞儀したから、倣って我々もお辞儀した。

またハクロウが相手らしい。

相手は懸絶した格上である。剣気や凄まじく生半可な戦法で挑戦して良い相手ではない。

「ふおっふおっ。お主らは時を惜しむ中、迷いや焦りは日に薄れておる。同時に強くなっている……どれ同時に相手してやろう」

木剣を構えられた。我々も構える。

とはいえ剣のみで勝てると思えない。土やその他アイテムを使う腹である。

実戦さながらの戦法、それこそ奇襲や奇策を取る事で多くの経験を得られるものだ。

「はい………行きますー!」

シズが踏み込む。

一方、此方はエンダーパールを投げつけた。

「見戲じやの。 童でも避けれるぞ」

避けられた。 が、それで良い。

パールが相手の背後に着弾した刹那、ダメージを負いつつハクロウの背中に瞬間移動。

そのまま無防備な背中に剣を振る。

が咄嗟に振り向かれ剣ガードされる。 判断能力も動きも迅速かつ的確だ。

「むっ……瞬動法ではない、か」

だが歴戦のクラフターとて、この程度の動作を出来る者は多い。想定内だ。

構わず剣ごと斬り伏せる。 もれなく相手は吹き飛んだ。

「ぬっ」

信頼と実績のノックバックエンチャントを付加させた木剣だからだ。

そしてその先にはシズがいる。 さあやれシズ。

「ッ！」

「やるのう。 じゃが、まだまだ」

シズの剣技を防ぎ躲す。

そのまま激しい木剣同士の斬り合いに発展してしまう。

「くっ！」

「防ぐ方が多くなってきたの。 それ、打ち返してこんか」

シズが押されている。それでも目に追えない剣筋を防ぐ姿は驚愕だ。

だがいずれ斬り捨てられてしまうのは火を見るよりも明らか。

我々もすぐさま加勢する。ある者は瞬足ポーションを用いた突撃を敢行。

ある者は地面をスコップとツルハシで掘り進む。ある者は土ブロックを積み上げてからの横移動という空中移動で攻めてみる。

クラフター同士の戦闘でも同様の情景は見られるが、果たしてこの世界でどこまで通用するのか。

格上のハクロウ相手に実験するのも違う気もするが、だからこそ分かる収穫を期待する。

よし。ハクロウの真下に来た。

ミリムや山猫村人の時みたいに掘り上げて……。

「ッー」

突如、相手が消えた。そう認識した刹那。

ドスリッ。

鈍い音と共にシズと地面から顔を出した同志の脳天が木剣で叩かれた。

霹靂の如し。認知する間も無し。見事、という感情は遅れに遅れて湧いてきた。

「……ッ」

シズは悶絶。同志は地中に埋め直される。

啞然。まさかハクロウはエンダーマンか。テレポート能力があるとしても？

「余所見してる場合かの？」

としている間に今度は地上の己の背中に瞬間移動されてしまう。
先程とは立場が逆だ。

即剣ガード。ダメージ軽減。だが目にも留まらぬ剣撃を縫う隙が無い。反撃は困難。だがこのままでは削り切られる。

「お主らは面白いのう。今に限っては明らかに剣で覆い隠せない部位を斬っている筈というのに、全て剣に当たっておる。まるで正面に見えない壁があるようじゃ」

左手のパールを投げて間合いを開ける。

仕切り直し。シズも何とか立ち上がり復帰した事であるし。

「……ッ、もう一度！」

「前より意気込みが良いのう。教え甲斐があるわい」

その後も何度も打ち続けるも、やはりハクロウに一撃を喰らわずには至らなかった。

やがて腹が減り走れなくなる頃によく終わった。

太陽は傾き、昼と夕方の間くらいである。

「お主らと仕合したい者が増えている様子じゃ。まだ動けるなら彼等とも仕合してみよ。互いに良き経験になるじやろう」

指をさされ、先を見る。

周囲に赴きが増えていた。何か。挑まれているのか。

「ハクロウさんは……」

「儂はサボっておる者を相手にしてくる。のう、ゴブタ？」

「ひい!?　なんでバレてるっすか!？」

ハクロウは今度はゴブタ達をボコボコにし始めた。此方との手合わせは終了らしい。

「えーと……私と仕合する？」

そうだな。 どうしたものか。

ベイクトポテトで満腹にしつつ空を見る。 まだ寝るには早過ぎる。

だからと今から出来る事も限られる。 対して周囲には武装村人が沢山いる。

彼等の誰かと戦うべきか。 少なくとも経験値稼ぎにはなる。 いや殺さないが。

「あ、あのー！」

ハアン声をかけられた。

見やれば最近の狐村人だった。

はて。 地下労働をしていた筈だが。 クラフターは首を傾げた。

「私は警備隊にスカウトされて配属されたフォスです！ 先程の剣気、凄かったです！ 良ければ手合わせ願いますです！」

「……前にどこかで働いていたの？」

「えっ？ あ、はいです。 地下鉄の工事に従事してたです」

「配置替えになったのかな」

「地上で買い物していた時に偶然にもゴブタさんにスカウトされて今に至るです」

「そっか。 私はシズ。 宜しくね」

名乗っている。 我々も釣られるように各々名乗り上げる。 伝わるかはさておき、それが礼儀だ。

「ほれほれどうしたゴブタ。休んだ分、動けるじやろ」

「ジジイ、少しは容赦つてものを……!」

「ジジイ……?」

「ぐぎやああああ!!!」

無礼を働けばゴブタのようになるだろう。

見るに堪えない事態と化している。

礼節なき最悪の事例であろう。

「じゃあ始めましょう。先ず模擬戦50連戦」

「はいです……はい!」

狐村人をシズが扱き始めた。

粗方、ハクロウより楽だと油断したな。それは大きな間違いだ。

「ふぎやああああ!!!」

「逃げちゃ駄目だよ」

終了後、革と骨にならない事を祈る。

礼儀を守れどやられる時はやられる。

我々は知っているんだ。

63. 鍛冶と似たもの

「ナイフの刃が欠けたです……」

シズとの戦闘でズタボロにされた狐村人。シズより俊足だったが技量ではシズが勝っていた。

そんな狐村人。今度は得物を深刻そうに見つめている。

近付いて見やれば短剣の耐久値が下がっているのが分かった。

あれだけ散々打ちのめされたのだから仕方ない。

寝ても覚めても創造に生きた者と剣一筋に生きた者とは知識も技能も異なる。

が、それぞれに良し悪しの上下は無い。経験の差とその時の運だ。

その形のひとつとして現れたのが耐久値の低下度合いだ。

気持ちは分かる。己の技量が通じない辛さは。この世界に来てから尚更痛感するばかりだ。

「ごめんね。やり過ぎちゃったかな」

「本当にソレ木剣です？ 木で欠けるなんて……」

「この人達が作った木剣だからね。頑丈だよ」

「限度がある気がするです」

それはそうとエンチャントはなさそうだ。

なら修繕に躊躇はいらない。

材質は鉄だろうか。手にしてみたい。

「あ、気になります？　　この刃が欠けていて……」

視線を察してくれたのか、短剣を渡してくれた。助かる。駆け

出しでなし、強盗殺人は好まない。

さても短剣である。やはり耐久値が減少している。試しに鉄インゴットを足してみた。修繕された。目論見通り。不敵な笑みが浮く。

「はえ!?! 一瞬で直ったです!?!」

「研ぎも打ちもしない。道具なしで刃が研ぎ澄まされるなんて」

このまま継ぎ足し耐久値を完全回復させて返却。これで安心して帰れる筈。

シズの扱きに耐えたせめての褒美だ。なんなら低レベルエンチャントをしても良い。

が、ここにエンチャント台が無い。残念だ。

代わりに獣耳の間に手を乗せ笑顔を向ける。機会があればやってあげても良いと思う。

「あう」

「ははは……相変わらず底が知れないなあ」

「2年足らずで大都市を築いた人達と聞いてるです。些細な事を含めるとまだまだありそうですね……」

しおらしく愛らしい。元世界にいる番犬と猫を思う。懐けばこの狐村人も後をついて来るだろうか。

「でも気紛れだからね。ちゃんとした鍛冶屋さんを紹介するよ。ついてきて」

「ありがとうございますです」

ところが狐村人はシズの後をついていく。此方が可愛がつていた筈なのに。

クラフターは最初の頃を思い出す。100匹ワンちゃんを従えたりムルだ。

あの時も餌付けして懐柔に成功したのはクラフター側なのに、1匹もクラフターに懐かなかつた。寧ろ1匹敵対した。

全くもって色々と理解に苦しむ世界である。常識を持ち込む事自体、間違いだと思いつつ。

逆か。痛めつければ良いのか。いやそれは認めたくない。

ゴブタはハクロウや村人の警邏の仕事から良く逃がっているし。

さしても我々もついていく。

ハブられるのは好まない。マルチを経験した所為もある。

そうして街中を歩き続けて辿り着いたのは、鍛冶をする村人の建物だ。

「おおシズ様に君達も。どうしたべ？ 試作品試しに来てくれたべか？」

早速と言うか、クロベエという村人が取引を持ちかけて来る。

この者は鍛冶を生業にしている。大抵協力的で強力な武器をクラフトするから興味深い。研究対象だ。

是非仲良くなりたいたいと思いい、この建物には金床やエンチャント台を献上。

果てはエンチャント部屋を完備した。ウケは上々である。

さしてもどんな取引をするのか。興味津々に観察を続行する。

「いえ、今日はこの子に鍛冶屋さんを紹介したくて」

「警備隊のフォスです！ よろしく頼むです！」

「ほうほう。何か武器の事であつたら気楽に相談して欲しいだよ。

支払いは主にポイントでいいべか？」

「ええと、働くと貰えるポイントですよね？ 欲しい物と交換でき

るっていう……」

「んだ。リムル様がご考案したべ」

「ユーラザニアにはない面白い仕組みです」

取引はしなさそうだ。シズに聞いてみる。
大方、この場所の説明をしているそうだ。やはりと頷く。
分かる話だ。初心者に色々仕込むのは楽しい事だ。自分の趣味嗜好なら尚更に。

「機会があつたらオプションになるんだけど、付加効果とか付けてみねえべか?」

「付加効果?」

「錆防止だとか刃の強化とか、切ったら燃えるとか凍らせるとか。

そういう魔法効果も付ける事ができるべよ。符術師が施すんだべ。

それはあの人達も似た事をしてるな」

「そうなんです?」

「んだ。切ったら燃える、吹き飛ばす、耐久性を上げる、威力を上げる……他にもありそうだべ。えんちゃんとか、とかいう方法でオラ達の知らない方法だ。だけどオラ達も負けてねえだよ!」

「ふあー! 良きライバルで互いを高め合える友って感じですよ!」

エンチャントの話をしている。

武器に何かしらの能力を付加する行為だ。これは村人も行えるというから驚きだ。

ただし我々のエンチャント技術とは全く異なる技法で付加される。その為、この場では互いに探り合い武器交換の取引をして研究したりと心身共に熱が凄いな事になっている。

似て非なる分野が一同に介し刺激を与え合うのは良い事だ。新たな道も見つかる。

「たのもう!!」

突如、喧しいハアンが響き興が削がれた。

鬱陶しい目に入ってきた扉を見返せば、狐村人と同等の背丈くらいな村人がいた。

水色ツインテール。　リムルと被る。　が雰囲気的にリムルの擬態ではなさそうだ。

相変わらず紛らわしい。　水色恐怖症になりそう。

「あたしは竜を祀る民のステラ！　　ミリム様が以前ここにいらしたと聞いたのだけど本当かしら!？」

ミリムの知り合いらしい。

成る程と頷く。　道理で喧しく荒らしが醸し出す様な雰囲気があるのかと。　類は友を呼ぶ。　だがここにはミリムはいない。

黙らそう。

同じ対処法で良い筈だ。

クラフターは目の前にケーキを置いた。　食べば同類だろうと。

64. 釣竿と実演

「は？　突然なんなのよ!？」

ケーキに戸惑われた。　駄目だ。　食わない。

判断したクラフターは早かった。　食い尽くし証拠隠滅を謀る。　相手が食わぬからと食糧を破棄、粗末にして良い理由にならないからだ。

特にシズの目前。　米粒ひとつ散らすだけでも怒られる。　その為、最近は上品に食す事を覚えた。　少なくともシズの目の前では。　それでも食事速度が衰えないのは相応の鍛錬をしたからにある。　剣技共に我ながら誇らしい。

「突然床に置いたと思ったら食べ始めたです!？」　奇行です！　怖いんです!？」

「こういう人達なの。　慣れてくれると嬉しいな」
「慣れそうにないのだけど!？」

食い終えたクラフターは安堵と共に熱が冷めた。　ミリムの様に
いかない虚しさが襲う。

もしかしたらケーキ懐柔可能な生命体はミリム限定ではなからうか。

検証したいが、人魔生物多様性に富む現世界において如何程の時間を
消耗すれば理解出来るのだろうか。

それに発情も繁殖現場も見た事が無い。　或いは見逃しているだけか。
にしては狐村人に対しての簡易実験は失敗している。

いずれ本格実験しなければ。　それで何かを得られる打算もなし
に愚考する。

良い。　それがクラフターだ。　知りたいから知ろうとする。
その何が悪い。

「ま、まあ良いわ。それよりミリム様が来たのは本当かしら？」
「おうおう来たべよ。刀を打つてみたいってんで打たせたべ。興
味津々で楽しそうだったべよ……ただ台座ごと作業場を壊す所だっ
たべが……。それに力を抑制する武器をプレゼントしたら喜んで
くれただよ」

「魔王ミリム様にそんな一面が……？」

「さても一心、水色村人を警戒。」

「また荒らされても困る。ミリム同等ならお引き取り願う。」

「ふっ。あたしはね、ミリム様がこの国を気に入っていらつしやる
から、どんな国か確認してくるよう神官長様から命を受けて来たの。
それでミリム様がいらしたという鍛冶屋がどんなものかと思えば
……」

「……しかしミリムよ、何処へ消えたのだ。何故か寂しさを感じて
目を細める。」

「ミリム様のお力に耐えきれない作業場！ さらにミリム様の崇高
なお力を抑制するような武器を贈る感性！ まったく大した事な
いわね！」

「対して目の前の水色村人と比較した。
今はドヤ顔を決め込んでいる。ミリムと違う個性があるのは良
い事だ。意味は分からないが。」

「この程度は分かったから失礼するわ」
「待って。此処は凄い所だよ」

「シズが引き止める。荒らし予備軍だからか。」

我々としても無視出来ない。聞こう。

「クロベエさんは色々な凄い武器を作れるし、この人達もそうなの」
「へえ？　　そこまで言うなら見せて貰おうじゃない」
「というわけで……」

シズに肩を叩かれた。クラフトをお願いされた。
いや作るのはい。唐突過ぎるので理由を尋ねてみる。

「この子、エンチャントの魅力とか分からないみたい。何か凄いモノを見せてあげて」

相分かったと頷く。

成る程、此処に来たのは芸を見たかったからかも知れない。
ならばとこの場所に置いてあるチェストを開ける。蜘蛛の糸と木の棒を取り出し、作業台に向かう。

「なに？　糸と棒なんか出して玩具作りかしら……は!?　一瞬で釣竿に!？」

「……まさか鍛冶屋で釣竿を作られるとは思わなかったべ」
「そこは剣を作って欲しかったかな……」
「やっぱり意味不明な人です！」

これで終わりの訳がない。
更にエンチャント部屋へ行きエンチャントを施す。取り敢えず”入れ食い”が付加された。

「釣竿が薄ら輝いているです!？」
「この人らが何らかの力を付加するところなるべ」
「大丈夫。この街にいれば見慣れるよ」
「で、でも釣竿でどうする気よ?？」

丁度良くある作業場内にある無限水源にブイを投げ入れる。村人達が熱した剣等を冷やすのに使用する池だ。

「は!? いやいや魚なんていな……なんかいつぱい釣れ始めたんだけどお!」

「あの人達の釣竿はね、水があるところなら、どこでも魚が釣れるの」「わけわからんです!　　なんでですか!」

「いつか慣れるべ」
「異常よ!　　いやあたしがおかしいの!」

大漁であった。今日は焼き魚だ。

そうだついでだ。狐村人と水色村人に与えよう。発情か懐柔出来るやもしれない。

「い、いらないます!　　怖いです!」

「あ、あたしも遠慮するわ!　　それ食べて平気かも怪しいし!」

しかしまたも失敗した。

クラフターは落ち込んだ。いやこれからだ。

上手くいかない方法をまた知り得ただけである。

65. 備えと心配

地上が賑わいを見せる一方、昼夜を知らぬ地下でも動きは続いている。IRP改造や人口増加に合わせてのジオフロント拡張。

そして……壮大な地下鉄延線計画も。

実行する上で世界の地図作り……マッピングを続けているのだが、結果からしてこの地は大きな大陸である事が判明してきている。

その上で拠点としてきたテンペストは大陸のほぼ中心に位置している様だ。なんと都合が良い事か。

その為にハブ状、四方八方に線路を伸ばす事で物流や人的移動の交差点となるのは言うまでもない。重要度も言わずもがな。

取り敢えず白樺の植林場から遙か南方の某地下にまで地下鉄を伸ばしたクラフター。

やがては西方諸国方面や獣王国ユーラザニア領の地下にまで到達するに至る。

だが地表には出ない。出たら問題が起きそうだ。シズの暗黒微笑が浮かぶ様で恐ろしい。

代わりに地下に潜伏してやる事がある。

秘密基地建造。これだ。

第二地下秘密基地。

テンペスト地下は暴露されたが故に。破壊活動もされた。大

問題だ。

この事から首都地下情報は広く周知された可能性が高い。潜伏型荒らしが既にいると考えた場合、情報が漏洩しているのは疑う余地もない。つまり侵攻される恐れ有り。

バックアップが必要と思いい立ち、副都心を築く事に相なった。

別にテンペストのジオフロントを放棄した訳では無い。避難所も兼ねている訳だし。

彼方は彼方で警備や軍事、防備を強化して備える。それは都市防衛思想計画と並行して行われる。

とはいえ、だ。魔法だのなんだのとは意味不明な技術で溢れている世界相手だ。やはり保険は必要なのである。そんな訳で。

効率強化及び耐久性を上げたダイヤツルハシとスコップを振り回し、地下をひたすらくり抜いていく。

テンペスト程でないにせよ、小規模なジオフロントや実験施設群が出来ていく。

一応、IRPの”ハリボテ”も用意。万が一、テンペストのIRPが大破等で放棄せざるを得ない場合、BBのみを回収して移植すれば取り敢えず動かせる様に準備を進めた。

あれよこれよと備え有れば憂いなし。

と言いたいが。やはり不安は拭えない。地表下に敷設する黒

曜石装甲は無敵ではない。

果たしてどこまで耐え得るか。故の保険を世界各所に点在させる。

だが受けばかりではない。攻めもする。研究は諦めてないし、クラフトを続ければいつか魔王ミリムにも抵抗出来ると信じている。

平和に発展を遂げた現状で終了はしない。

だからこそ建築は地上地下問わず進める。

そして何よりも……荒らしとは如何なる場面で突如と現れるかも分からない。

だからこそ軍事施設を創造し設置する。それが逆に火種となら

ぬよう、なるべく地下に隠蔽しつつ。

我々は学び続けてきた。

この世界には国があると。思想があると。

様々な人魔がいるという事を。

それを否定する権利は我々には無い。相手にも無い。互いに理解しきれていない時点で決めつけに過ぎない。したとするならば世界を否定しているに等しく畢竟、世界を侮っているといえる。

多様性に富む現世界において敵性勢力を人種魔物別に明確に分類する事は出来ないという理由で荒らしという概念は存在しないとい

う主張が一部同志にある。

しかし最近の魔国連邦の様に移動や交雑した(?) 獣村人等の往来が盛んになっている世界では地域変異集団や思想を明確に分離出来ないのは当然だ。

むしろ人種や魔物の境界は存在しないという主張が、実在する人魔差別の免罪符に使われないう様に注意するべきだろう。

肝心なのは個人でも集団でも、それぞれ身体的・文化的特徴の違いがあっても、偏った特定の価値観に基づいて差別してはならない、という事である。

それを踏まえても、いや踏まえるからこそ創造を止めない。 研究を止めない。 クラフト全体を止めない。

それがクラフター。

そして……この思想が出来たからこそ逆も然りである。 故に備えている。

立地や豊かさから交易路となりつつあるテンペストは恐らく誰かにとって目障りだ。 嫉妬もする。

もし我々が違う立場ならそう思う。 仲良くなろうともする者も出るだろうが、攻撃する者も出て来る。 前の世界でも荒らしが出没したように。

……杞憂に終われば良いが。

ツルハシを振るいながらクラフターは思った。

66. 観光案内と有翼村人

「街の事を知りたいなら案内するよ」

「私も警備隊としてついて行くです」

乱入者たる水色を優しく案内するシズ。

犯罪予備軍を連れ回すのは賛同出来ないが、監視という名目でついていく。

いざとなれば木剣で吹き飛ばす。それかクラフトしたての釣竿で引き戻す。

「この街が出来てから約2年。発展は著しいけど、その殆どはこの人達のお陰なんだ」

「この挙動不審な連中が？」

「右手に木剣、左手に釣竿持つてるです。よく職務質問されないです」

「みんな慣れちゃったからね」

皆して此方を見てくる。

シズの言葉からして賛美の目線だ。いやあ照れるな。趣味趣

向は様々だけどさ？

「街に聳える塔を何基も建て続けたんです？」

「そうみたい。建てている所を見た事あるけど……凄い早さで積み重ねていったね。それも手作業だよ」

「積み重ね？ 何事もそうよね」

「でも手作業で建てられるんです？」

「さっきみたいに不思議な作り方をしたの」

「あー……」

「深く考えちゃ駄目だよ」

見下ろしてくる摩天楼を見上げて驚く一行。

良いぞ驚け。ひとつひとつは苦労の上に聳え立っている。

高密度建造物は土地を有効に使用し、村人を分散させ過ぎず管理をある程度容易にする為のものだ。主なスポン地点付近だから、という理由もあるが。

でなければ土地確保の為に森を伐採し尽くさねばならない。だがそれを試みると、いつかの植物村人達が騒ぎ立てるのだ。

その意味でも首都高密度化は避けられない。

また管理と言ったが徹底はされていない。大抵村人任せの雑居ビルだ。

ベランダがあろうがなかろうが村人が住居にしたり職場にしている。クラフターはそれでもヨシとする。独自発展させる事は互いの利益に繋がるのを既に知り得ているからだ。例えば酒とか料理。

寄生ではなく共生。うむ。良い響きだ。

「オーク達が建てた建物もあるけどね」

「一目で分かる気がするわ」

「文化の違いというより創造力の違いが見て取れますです……」

次にピッグマンモドキ達が建設した建物を見ていた。

精々2、3階建てと小さくも素晴らしい造形をしている。クラフターはこれらに高評価を付けていた。

無駄に高度限界まで伸ばした摩天楼とは名ばかりの長方形の豆腐より断然良い。

勿論、縦長でも横長でも豆腐と罵倒されない造形を心掛けた建築を我々も行なっている。

それに付けても、と感じる素晴らしさだ。負けていられない。心地良い闘争心もあるものである。

「あの太柄で鈍足な人は……いえ、人じゃなさそうね。魔物でもない」

「アイアンゴーレムだね。それもこの人達が造ったの。この街を護ってるんだよ」

「え!?! ゴーレム使いだったです!?!」

「うーん……作って放置しているから自立しているみたいだよ。鉄とカボチャで作れるんだって」

「カボチャ!?! 食材よねソレ!?!」

「カボチャでどうやるです!?!」

「他にも雪とカボチャで作れる別種があつてね……」

「ごめんなさい待ってお願い。頭が痛くなってきたわ休ませて頂戴」

ゴーレムを見て興奮している。

それは都市防衛力強化を図ってクラフトしたものだ。何体もある。逆に何体クラフトしたか知らぬ。沢山だ。

だが反応からして初見か。新参なら仕方ない反応だ。この世界の集落には大村落だろうがゴーレムの存在を確認出来ないからだ。そもそも存在しているかも怪しい。

この世界の村人は武装して反撃するからまだ良い。対して元世界の村人は暢気な者達であった。防衛意識の欠如は最悪、死へ直結するということに。見習って欲しい。

ゾンビが出現した際こそ建物に駆け込む行為が見られたが、あれは建物に対する盲信でしかない。村で主に使用されている木製扉は破られる。絶対に安全な場所は無いとした方が良い。

地下施設や基地だってそう思っている。水色スライム野郎に場所をバラされ魔王ミリムに散々にされたのが証拠だ。

故に同志が様々な地下極秘座標地点に避難所や軍事拠点を建造しているのである。

それもどこでバレる事やら。なので通訳のシズにだって教えるつもりは毛頭無い。今のところは。

「分かった、休憩しよう。ご飯を食べようか」

「あ、そうです！ ミリム様が召し上がった料理を食べましょうステラー！」

「えっ！ ミリム様が召し上がった!? それは是非食べてみたいわ！」

シズ達は料理が提供される建物へ入って行こうとする。

我々もついて行こうとしたが、ここで狐村人が上を見た。

「あれは……有翼族（ハーピイ）ですか？」

釣られて見ると村人が屋根の上で寝ていた。

純白の翼が生えており、脚は鳥のソレである。だからと驚きやしない。

また新種が出たか、とワクワクはする。この世界は何種類の村人がいるのだろうか。

「私は警備隊のフォスです。どうしたんです？」

「ネムは……ネムなの。お腹が空いて動けないの。もうダメなの……」

「ええ!？」

狐村人が軽やかに屋根に昇る。

訓練の時も思ったが身体能力は高い。我々は跳躍のポーションを使っても届かないというのに。

「取り敢えず下に降りるですよ」

鳥村人を背負って降りてきた。軽やかに。

我々だったらダメーシ不可避の高度であるのに。

だとしても嫉妬はしない。それぞれ個性がある事は良い事だ。
我々には彼等が真似出来ない創造力が有る様に。

67. 未知と道

あの後、有翼村人を加えシズと獣村人達と食事をとった。様々に提供された料理はどれも我々の舌を唸らせる出来栄えで、研究対象が増えた喜びに歓喜する。

カレーやシチューは既に知り得た料理であったが、他のサンドイッチ、ピザ、スパゲッティ等は未知の領域。我々も是非クラフトしたい。

探究心は留まる事を知らぬ。あれもこれもだ。その心境は水色村人も同じだったらしい。激しく感動していた。

クラフターはフツ、と笑う。

また1人新たなクラフターが生まれたかと。

かつて料理とは腹さえ満たせればヨシとしてきた。昔に気にした事は効率と食べる場所くらいである。

その点、ジャガイモは優秀な食糧であったから、携帯食は常にこれと決めていた。

些細な遊び心があったのは否定しないが。家畜の牛や豚に小麦をチラ見させてからステーキや焼豚を食べるとか。

食の喜び。料理への探求。効率のみを追い求めた我々だけでは辿り着けなかった分野である。

またも学ばされたな、村人に。

「あだし、店の人に料理を教えて貰うわ！」

「私は警備隊の仕事に戻ります」

「頑張ってるね……あれ？　ハーピイの子はどこに行ったんだろう？」

その後は皆別れ、あちらこちらに散る。

それぞれの道があるのだ。我々にもある。

それぞれ足を動かした。

創造した道は大きく、これからの道も幾つにも分岐し続けている。果てしなく終わりが見えなきそんな道が続く。寝て起きて研究しては創造していく日々。限りない、飽くなき世界に生きていた。そして今。

「いやー、まさか……メシを喰って意識を失うとは思わなかったよ」

いつの間にか帰還してきたリムルと共にシオン級の毒物を提供されていた。

横長テーブルの上は立体的なモザイク画が満遍なく広がる。

何故こうなった。

クラフターは絶望感を露わにする他なし。

これは料理分野と認めない。

劇的汚物だ、コレは。或いは猛毒ポーション。

にも関わらずだ。それを知っている筈のリムルは嫌々飲食している。

相変わらず理解が出来ない。なんてスライムだ。ある意味では一服盛る手間が省けたとも言えるが。先程倒れた時は遂に死んだぜと嬉喜びしてしまった。

暫くして起き上がったのを見た時は裏切られたが。

危うく止めを刺そうとしたが、やめた。直接手を出すのは美学に

反する気がする。

手を汚す行為は他人にして貰おう。そうしよう。

取り敢えずモザイクを端からスタックしていく。食いやしない。

代わりに後で火薬と混ぜて投擲武器にする。

「皆さん、勢いよく平げてくれるなんて！ シオン感激です！」

「絶対違うわ!? 食べてるんじゃないやなくて仕舞ってるんだよ!」ズ

ルいぞお前らア!」

リムルが激昂しているが無視する。

シオン級の毒物をクラフト出来ぬので、これはこれで貴重な機会だ。

クラフターはポジティブに考え始め領いた。

「そうですかお代わりが欲しいんですね！」

「あー大丈夫！　俺はもう腹一杯！　それより皆を集めてくれ！」

「？　はい」

将来的には自力で開発したい……野望は潰えた訳ではない。

研究は頓挫したシオン級だが、これを機に再度挑戦するのも面白い。毒攻撃は卑怯とする者もいるが有効手段だ。

フルエンチャントダイヤや防具に包まれていようが、火炎はともかく毒に対する免疫は獲得出来ない。牛乳を飲むしかない。

リムルやゴブタを見ていると、この世界の一部村人に耐性があるかに思えるが皆が皆ではない筈だ。

明らかに強そうな帯刀村人のベニマルなんて、偶に食堂で瀕死状態で発見される。

ひよつとしたら魔王にも有効かも知れない。IRPに特殊兵装として積むのも面白そうだ。効果範囲を広げ弾頭として使えるならば仮想敵国や軍団を一撃で鎮めるのも無理な話じゃない。

「……ドワルゴンでの仕事は済んだ。次は人間の国に向かう事にする」

「それは……」

「シズさんの為なんだ。　イングラシアにいるシズさんの教え子、子供達を救う為に」

妄想していると、また集会状態になっていた。　ワラワラと集まり狭苦しい。

何より喧しいしシズ越しに会話を聞くだけでも面倒事である。助けを求められたら助けるつもりではあるものの。

「クラフター」さん」

シズに話しかけられる。どこか不安気だ。足を止めて傾聴する。

「……助けて」

我々は即答した。創造主は二つ返事で引き受けた。仲間を助けるのに逡巡の必要が無いからだ。

68. 準備と事後

「人間の国に行くに当たり、魔物は入れない。なので擬態した俺とシズさん……それから不本意ながらコイツらを連れて行く。見た目は人間だし大丈夫だ……たぶん」

助けて。

ただ一言シズに言われただけ。それだけで鬼気迫る装備態勢を整えたクラフター。

仲間が心情を曝け出し手を伸ばしているのに、どうして振り落とす事が出来ようか。

何かを得る打算も無しに友は立ち上がる。

ダイヤフルエンチャント装備は当然で、インベントリを埋め尽くすシウルカーボックスには大量の物資が詰められた。遠征なので必然と言えよう。

剣や弓矢、ツルハシやスコップ、その他戦闘に使える土や石は即使えるスロット位置に固定した。

本格拠点セットも準備。シウルカーに入れるのを忘れない。

それに……ふとした拍子にクラフトしたくなるかも知れない。

建材も持ち込む。当然だ。

後は石炭や木材、食糧等の消耗品を持ち込む。かなり本格的で重装備となる。

ここまでの規模はそう多くなかったな、とクラフターは笑った。

「良い笑顔だけどな、遠足じゃないんだぞ」

「いいのリムル、お願いする立場だから。それに自然な笑顔でいた方が怪しまれないよ」

「笑顔でダイヤモンドソードを持ってるけど!? そんな状態で街を歩いたら大騒ぎ確定なんですけど!?!」

現地地下には拠点とは別の黒曜石による緊急事態応急対応拠点施設の設置も忘れまい。

ネザーゲートで一時離脱も考慮。

武器防具の予備も備えた。留守番組は後方支援班として機能して貰う手筈となる。

「……現地入りの前に止めさせるから」

クラフターは眉間に皺を寄せながら遠征準備を進めている。

遠征先だけでなく、リムルや我々が不在の魔国連邦が脅威に晒されるのを深刻に考えていたからだ。

「今度は難しい顔をしているな」

「色々と考えてくれているみたい」

「……俺が苦労しない事なら良いがな」

元々考えていた事であったが、魔国連邦を快く思わない連中がいたとした場合の想定。

場合により魔国連邦首都圏が最前線にして最終防衛線となる。

防衛力が低下するのが露呈する程、荒らされる危険性は高まるのだ。

元世界では不在を狙う荒らしが多かった。クラフターによるが都市1個を壊滅させるのに1夜あれば十分な者もいるのだから、この世界の荒らしがどれ程のものか。考えたく無いが理想と共に現実も考えねば。

ミリムを参考に脅威査定をした同志は……飽くまで予測、いや予測ですらない悪夢……”蒸発”シナリオが提出された。

瞬殺。無慈悲にも打つ手なし、という意味だ。

逆にゾンビ級集団の襲撃でも複雑な思考が出来る想定した場合、卑怯で合理的な手段を取られる可能性すら示唆されている。

単純に感じる一方、潜伏型に破壊工作されても発覚する頃には時すでに遅し、という状況になる可能性が高い。

その場合、駐屯隊のみで対処出来るか不安が残る。なんにせよ襲撃時は白兵戦は避けられないとしている。

当然、戦力になるモノは何でも使う。無ければ作る。

IRPはいつでも動ける様に起動しておく。

多くのビル屋上にて設置してきたTNT砲台には観測手、装填手、砲撃手等が常に待機。

非効率のかも知れない。だが備えられる事はしておきたい。

最後には地下に潜り籠城戦の覚悟。

死ぬ事は出来る。後悔は出来ない。

また、敵の立場になって首都陥落を成そうとした場合だが……マツピングの時に思った。立地にも不安があると。

大陸中央部に位置する魔国連邦は四方を植林場と手入れのなっていない森で構成されている。

これを隔てた先には敵か味方も分からない大集落が点在しているのも分かってきているのだが、もし結託されでもして一斉に襲われたら……推定被害報告によれば……眼を覆いたくなる事態だ。

元々森で湧き出た魔物が攻めて来るのは建国前から危惧していたので簡易な城壁や堀、流水トラップ等が郊外に作られているが……空を飛ぶ村人もいるし、そもそも原始的な罠に掛かる相手と樂觀出来ないでいる。

何にせよシズも国も見捨てない。

誰も死なせないし絶対に生き残ってやる。

「あのね……」

準備に追われている時、シズに声を掛けられた。武器防具は非常

時以外、外す様にと。

クラフターは衝動的な疑問符を浮かべたが、察した事で仕舞う事にする。

アレだ。郷に入ったら郷に従うのだ。これから行く所は武装が禁止なのだ。

「一部を除いてね。でも基本的には他所の街の中で真剣を出すのは駄目なんだよ」

そう言つて、シズは鞆の話等をしてくれた。

嗚呼、と納得。　だいぶ前に渡した鉄剣をそのまま携行しなかったのはその為か。

思えば帯刀村人もそうだった。　インベントリが無い様子からして鞆に仕舞うのか。

不便ではあるが、対する工夫が見て取れた。　やはり楽しい世界だ、此処は。

益々荒らされる訳にはいかない。

「さて、案内役はカバル達に頼んである。　彼等は俺がスライムなの知ってるしな」

「あの子達とまた旅出来る……嬉しい」

さても準備が出来てシズを見た。

移動方法について話している様子。

ならばとシズに伝えたい。

既に交通手段は確保済みであると！

「え……」

「どうしたシズさん。　いや、察せるものがあるのが悲しい……一応聞こう、うん」

地下鉄に案内した。

新たな地下鉄路線を見せた。　長々と続くトンネルに長々と線路が続いている。

「ま、まやか……」

そう！ 未知なる未来へ続く新たな道を！

クラフターは嬉々として紹介！

いつかの村人トリオの拠点座標方面と聞いている。 ならこの路

線を使えば良いさ！

速い、安全、迅速輸送。 降車駅は既に拠点化しているから更に安心！

「……ねえ」

あれ変だな。

シズもリムルも喜んでくれないぞ。

代わりに氷の様に冷たい冷気を感じる。

火炎能力が消えた代わりに氷の能力者になった？

”クラフター”さん。 お話があります」

「奇遇にも俺もなんだ」

何故此処で抜剣？ whyシズエ&リムル？

この後の事は思い出したくない。

だが分からないけど分かった事がある。

相変わらず村人達の沸点が不明、という事だ。

69. ゴーレムと使い様

「リムル様がドワーフの国から戻られた！」

村人が嬉々と集合して行く手を遮る。

繁殖行為か。 いや違う。 ナニも起きない。

強いて言うならリムル絡みだ。 間接的にも我々を苦しめるとは。

流星は悪魔と褒めてやりたいところだ。

「ドワルゴンで友好宣言してきたらしいぞ」

「堂々たるお姿でガゼル王にも引けをとらなかつたそうだ」

とはいえ村人相手に荒ぶるのも馬鹿らしい。 迂回する事に決めた。

クラフターは不浄な大地から清浄なる空を見る。

道が無ければ作るだけなのだ。

クラフターは比較的低密度住宅に梯子をかけつつ登った。

屋上伝いに移動する腹だ。 流星に上は大丈夫だろうと。

梯子は良い。 土や丸石だと悪目立ちする。 湧く要因にもなる

し何より景観破壊はしたくない。

一方で梯子なら最悪撤去しなくて良い。 湧きやしないし後で使

う事も出来る。

「そりゃありムル様だぜ？ あの魔王ミリム様とマブダチなんだ

ぞ」

屋上に登つてみると、目論見通り空いていた事に頷いておく。 そ

れでも何人か見受けられるのには呆れる他ない。 思えば有翼村人

も屋根上にいたと振り返る。

今更ながら何処にでもいる気がしてきた。 初期スポーンの洞窟

にすら住み着くのだし。

「ミリム様とマブダチですって!? 最弱のスライムとミリム様が……!?!」

聞き覚えがあるハアンがしたと思い下見れば……いた。ミリム関係者の水色村人が。

魔国連邦は狭い。物理的にはなく精神的な話だ。思わず溜息を吐きたくもなる。

「屋根伝いに……でもこの国の建物は大抵高すぎるし……ん?」

目と目が合う瞬間、身体が重くなる。鈍足のポジションを浴びた訳でもナシに。

「あなた達! あたしを上げてくれない?」

足下に来る光景はゾンビのそれだ。思わず弓矢を握っては直ぐ手ぶら。砂利や TNT があれば落としたかも知れない。相手がスケルトンじゃなくて良かったと思う。

「一瞬弓矢が見えた気がするんだけど……気の所為かしら。それより上に上げなさいよ」

凶太さは相変わらずか。村人らしいとも言えるが。

さても訴えている。何を言っているのか理解出来ないが、アイアンゴーレムの動作をした事で合点がいった。

この場にゴーレムはいない。作れと。

まさか村人に防衛力を指摘されるとは。

クラフターは自らを恥じた。

迷惑系村人だとした独りよがりな思考を忸怩しつつ、創造主は頷い

て見せる。

異常があれば速やかに対処するのがクラフターだ。

「あら、路地裏に梯子が掛けられていたのね。これなら誰でも……って何してるの」

都合良く持ち合わせた鉄ブロックをT字状に設置。中央上にカボチャを置く。出来た。

「え、えええ!? これがシズさんの言っていたゴーレムの作り方!?

え、なんかバラを渡してきた!? 本当に自立してるの!?

驚かれた。なんだ。クラフトの瞬間は初めてか。

その慌てふためき様は面白い。ゴーレムからバラを渡され更に荒ぶる。

急にサービス精神旺盛になったクラフターは同じ白で似て非なるもの、雪ブロックを設置した。

縦に2個、その上に同じくカボチャを置く。出来た。安上がり、無限雪製造機にもなるスノーゴーレムだ。

「今度は雪で!」

敵に雪玉を投げるだけで基本ダメージは与えられないし、体力も無いから直ぐやられてしまう。雨でもやられる。勝手に動き回れば松明の無い所は雪だらけにされるし。

その為、あまり都内に配備していない。ただし関所や郊外には専用櫓に入れて見張番代わりに立てた。

雪玉も馬鹿には出来ない。ノックバックが起きるから落とし穴の様な罠に敵を嵌める事が出来る。要は組み合わせや発想次第だ。

「驚かされてばかりね……あなた達には」

ついでに鋏も使いよう。

カボチャ頭を撤去、素顔を見せてやる。

また少し驚いてくれる。

クラフターは笑顔を浮かべ頷いた。

70. 水上建設と水中建設

それはある日の森の中。

本格マツピングのだいぶ前、リムル達が遊泳やら釣りやらを楽しんでいた場所。当時の我々は追跡し、大きい湖なのか海なのかを見つけたのである。

ここまで大きいと久しぶりに水上水中建築を無性に行いたくなってしまう。創造主の性と言えばそれまでだが、やりたくなつたのだから仕方ない。

取り敢えずの感覚で中央付近にプラットフォームを建設する事に相なつた。

水面からかなりの高さがある高台を予定して主に石材で建造する。後にも先にも何かする際、拠点にする為だ。

水上及び水中の建築は困難を要するのを創造主は存じていた。

水中では動きが鈍くなる。呼吸は出来ないし視界も悪い。

ましてやこの世界、いつかの巨大魚の如し生物が遊泳しているときだ。

だがその程度で臆する創造主ではない。

この程度今までも経験してきた。

水上水中問わず、それぞれ効率的な建築方法はある程度確立されてきたのだ。

呼吸方法なんて複数ある。

水中にある側面ブロックに松明を刺す事で、一時的に空間が発生する。

松明は直ぐに水に負けて取れてしまうが、その際の一瞬の空間で一呼吸終える事が出来るのだ。

また水底にドアを設置すればエアポケットの完成だ。ドアに対

し水は不可侵領域だ。ここにいれば溺れる心配は無い。

他にもサトウキビを植え伸ばし速やかな水底への落下、上下移動中の途中呼吸も可能だ。

照明も水に負けないグロウストーンやジャックオランタンを使えば照度を確保出来る。

イカ漁にも用いられる事もある方法だ。

他にもポーシヨンを使えばある程度地上と同等の動きも出来る。

そんな技術を用いて、我々は建築を進めた。

大きな六角形状にして水底から地上まで柱を伸ばす。内部はバケツで水抜きをして空洞。IRP格納庫並はある。実際、暫くしてIRPのハリボテが造られた。

ただし本部にあるものと異なりテストベッド……水陸両用試験機であるが。

外殻は黒曜石と変わらないものの、その上に羊毛を革装備の如く覆っていた。各駆動部はそれぞれ別々の色が付加されている。

カラフルな事になっているが、試験機なので仕方がない。水中で動作させてどう動くかを識別確認する為だ。少しでも分かりやすい方がよい。

もしIRPが水中でも問題なく活動出来れば、回遊している巨大魚等の水中の敵に抵抗出来る。また地上や空から見え難いだろう水底から奇襲攻撃が可能であれば敵の初動は遅れる。移動も出来るなら発射位置を特定される恐れも少ない。水中に合わせた色ブロックで覆えば迷彩効果も高められそうだ。

また水中発射の都合、計算は地表と異なるだろうが砲身が黒曜石で無くても良い利点がある。浮上する必要が無ければ尚更だ。

ただ本拠地の都市防衛計画が本格化してしまい、肝心の動力であるBBの移管が許可されない問題が発生。稼働実験は見送りとなつてしまった。

少なくともリムル達の遠征が終了するまでは困難との見通しだ。仕方なし。なら出来る範囲で試作兵器を試作研究をするのみだ。さてもIRP研究とは別に建築も進む。

プラットフォーム、台座の表層には四方にキャノンが造られた。射程の見積もりは何とか海岸を砲撃出来るくらいだが、対空も兼ねた

ので最低限の防衛力となる事を願う。

今後はプラットフォームを派手に拡張し、必要な施設群を水上に建造する。

だがこれらは所詮囿。

荒らしから免れる餌、光物に過ぎない。表層を荒らされても水底まででは気付けまい。

そんな発想の元、少し離れた水底にも建造物が存在し始めている。

I R Pの動作確認目的のガラスドーム型や、この世界の魚類観察目的のスペース。海底神殿風の拠点。

更に地下には例によりジオフロントが建造されていった。言わずもがな、此方が本命。

地下鉄も首都に連結している。移動や物資運搬は既に楽だ。

やはり創造物とは目的や利便性があると実感が凄い。

それに都市部から離れているからこそ……禁忌に手を出せると言うものだ。

ブルムンド王国

71. 移動と想像

「ちかてつ」って凄いんだな……」

いつかの冒険者トリオと再会の翌日。

寝起き驚愕各1回の朝、結局は皆で地下鉄を利用する事になった。リムルを先頭にシズ、村人トリオ、我々と密着する様に続く。

逆走防止用に感知レール式……その加速用パワードレールを減速の起きない間隔で敷設してあるので一定間隔で赤色を見られる。綺麗に清線されている証拠だ。誇らしく思う。

だがクラフターは村人の驚愕を得てもなお、燻る不満があった。原因は行動や表情、会話にあるのは違いない。

「悪いな、カバル達を信用してない訳じゃないんだ。ただ時間があ
る内にコイツの性能を試しておこうってな」

人を批難し切り刻む割に利用されるのは気分が悪い。
創造した物事を他者が利用すると嬉しいが、前置き次第では悲しく
なるものだと思いき知らされた。

「トロツコと言う乗り物に初めて乗ったでやす。1人乗り用で狭い
鉄箱でやすな」

「キシャ」があるなら、そっちが快適だろうさ。排気の問題が出
てくるだろうが」

「リムル」

「分かってるよシズさん。贅沢は駄目だよな。これだけでも十分
凄いんだ。謎の動力源とか、な。空気も汚れないばかりか、現時
点で粉塵も無い。人が呼吸するにも問題なさそうだし」

感謝感激ありがとう。

拍手喝采を求めている訳ではない我々であるが、批難して優越に浸る前に学ぶべき姿勢ではないだろうか。

クラフターは反論したい気持ちに駆られた。

だが彼等はマシである。文句を述べる癖に搾取はしっかりしていく荒らしとかいた訳であるし。

「楽なのは良いけどお、景色が同じだとツマンナイわねえ」

「地下だからな」

「でも地上と比べたら安全そうでやす」

「カバルが魔物の巣を突く事もないしねえ」

「グウの音も出ねえ」

トリオが軽口ハアンをし、シズが苦笑している。先頭のリムルは前方を見て一応の警戒をしていた。

その光景にまあ良いかな、とクラフターは許す。我ながらチョロい。だが笑顔を見せてくれるなら良い。許せる笑顔だ。

と思っていた矢先。リムルがハアンと鳴き始めた。リムルの事なので不平不満だろう。

「大賢者の見立てでも、一応方向は合っているから安心だな。ただ」

「ただ？」

「勝手に他国に地下鉄を延ばさないで欲しかったナ……ハハッ」

かと思ったが違った。

消え逝く声ながら我々は確かに見聞きする。笑顔と苦笑のハアンを。

クラフターもまた笑顔になり頷いた。終わり笑顔なら全て良し。

今後とも延線及び途中駅等の建造に勤む事にする。

”クラフター”さん」

なんだいシズ。

笑顔のまま訪ねた。彼女も笑顔で続けた。

「勝手な真似は駄目だからね？」

良く見れば暗黒微笑だった……。

「独創性の無さを咎められた様だ。 悲しい。」

シズは相変わらず厳しいなあ。

確かに地下鉄の出来栄えは平凡だ。 露天掘りにレールを敷設しただけ。

移動は楽だが不変な光景が続く。 人員への配慮が不足しているのである。 愛が足りない。

なら改修しよう。 咎められて腐るのではなく挑戦して逆に活力を得て邁進するべきだ。

クラフターは移動中、あれよこれよと想像した。 水中トンネルをガラス張りにする様な工夫がいると。

絵画を並べるのは。

溶岩を流し照明兼見た目にインパクトを。

音が鳴る様にするのも面白い。

非常事態用の脱出ハッチを一定間隔で。

外壁の露天掘り感は取り敢えず消そう。

明るい石ハーフ等を使うべき。

駅間隔が長いから途中駅を設けよう。

「……いつもありがとうシズさん」

「ごめんね。 正確に伝わった自信がないな」

クラフターは笑顔満開だ。

今すぐやりたい。 だが駄目だ。 今はシズ優先だ！

嗚呼！　なんてもどかしい！

衝動を抑えきれず首や腕を激しく動かす創造主。

現着したら班分けしよう。　勿論、シズ組と地下改修組の二極分化で。

7.2. 入国評価と越権行為

「子供達に会う為？」

地下鉄駅から地上に這い出て徒歩少しの光景は新たな集落である。

山の美にある建築に少しの惜しさ。良くも悪くも中級者の成功

とありがちな失敗。

入国早々、クラフターが見たブルムンド王国は取り敢えず悪くない評価を下した。

一瞥した限りだが、平地ではなく山の起伏に造られた部分もある集落だ。美意識か整地が面倒だったのかは定かではない。それか敢えてか。

最近は防衛に煩い創造主である。察せるものも無くはない。

「ああ。シズさんの心残りだ」

「隣国のイングラシア、自由学園にいるの」

山頂付近の建造物は大きく立派だ。

麓までに至る建造物は石レンガ、或いはレンガと木材の組み合わせによる建築物が生える様に広がっている。

先ず良い点を挙げていこう。

2、3階建ての堅固な作りは素直に良い。生えている木々も手が少なからず入っており無造作に生えていない。

武装した村人はゴーレム代わりに警邏していた。皆に活力があるのもポイント高い。

この世界で初めて見た村とは雲泥の差だ。アレを評価基準にして良いか微妙だが、取り敢えずそうする。

「シズさんは大丈夫だろうけどお」

「旦那の場合、ギルドで冒険者登録しといた方が良いぜ」

「え、なんで？」

次に悪い点だ。

石造の街並みに拘るのは良い。だが嵌り過ぎて光源が蔑ろ。

また建材が尽きた等の理由だろう。道の舗装具合に綻びが生じていた。

この集落をクラフトした者は初心を忘れた頃合いだったのだ。きつと。

我々にも良くある経験だ。大規模建築とは際限なき増築と改築に追われる。

故にと腕を振るつたは良いが、途中で意欲が落ちたのかも知れない。分かる話だ。

「ホラ、冒険者って街の外での活動が殆どでしょう？　ギルドと提携している国なら身元証明されるのよう」

「ははあ、つまり身分証か」

とはいえた。

多くの石造建築物、今いる内装の木製の木と椅子、壁掛けの装飾、天井の升目状の梁、シャンデリア……以前のクラフターであればソッコの評価を与えた造形に違いない。

例えば気に食わなくても、無闇やたら破壊せずシルクタッチを心掛け、この地の創造主を尊み見学するだけに留めた筈だ。

「あと、うちのギルマスに紹介状書いて貰うと良いですよ」

「フューズに？」

「イングラシアにはギルドの本部があるんだよ。グランドマスターは確かシズさんの弟子……だよな」

「うん……ユウキ。ユウキ・カグラザカ」

「んじゃこの後はフューズんとこに案内してくれ」

しかし、もういけない!

右手がツ! 疼くツ! 抑えられない!

とうか先走りした。気が付いたら松明をぶち撒けていた。

集落の荒さを補修するばかりか、我々の創造力の見せ所を見つけては存分に建築改修三昧してきたクラフターは、もう己を止める事が出来ない。

結果として国外に採石場と植林場を設け、持ち込んだ建材で表通りを直していく。

割れたガラスを見つければ張り替えてみたり、屋根の上に松明を立てまくり、木の影も許さぬという追求とも執着とも取れる行為で国全体に光を満たしていく。

「ところで旦那にシズさん」

「言うな。聞きたくない」

「……うん」

「外が大騒ぎなんでさすが、あの人達の仕業でやすよね?」

「勘の良い冒険者は嫌いだよ」

「勘も何もないわよお! 他に誰がいるのよお!」

この国は良い国だ。 誤解なき様。

眺望は素晴らしく山を掘削整地せず、自然の残し方は実に素晴らしい。

しかし見た目ばかりに気を回しすぎた。 肝心な要素である照明が圧倒的に不足していた。

景観を優先し過ぎたか。 逆に暗闇を愛する者達による仕業だったか。

だとしても認める事は出来ないから、果たして松明をばら撒いた。安全面への配慮のみならず、願わくば暗闇に浮かぶ幽玄な光景を見て欲しい。

きつと、山の集落の美を向上させたに違いないから……。

また、水場が少なく感じられたので彼方此方に設けてみた。 空き

地が少ないので、壁等の側面を利用した掛け流し……滝式風の水汲み場を作る。

山に築いた堅牢な集落をコンセプトにしたにせよ、やはり補いたい部分とはあるもので。

そんな訳で。

クラフターは日がな一日、笑顔で国を走り回った。

あ、理由も同じくしてか畑も無いのでは。 作らねば。 幸い種も
鍬も沢山あるぞ。

よし耕さねば。 植林場の近くで良いだろう。

「入国早々疲れたよランガツシュ……」

「誰!？」

「とにかく捕獲するよ!」

「ほ、捕獲って……」

「色んな意味で人外よお!」

リムル達も触発されてか我々の後を追う。

お遊戯か創造か。 何にせよ足を止める暇はない。

驚愕のハアンを聴きながら、クラフターは意気揚々と鍬を振るったのであった。

73. 村人と取引

「あの人達に試験受けさせないの？」

創造の自由を阻害され、拉致に遭う創造主。

今はどこかの建物に連れて来られた。そこそこ大きな建物である。

酷い目に遭わされると思ったが、なんだ。評価して欲しいのか。

そう改め首をグリグリと動かしてみる。

先ず動き回る村人が目に付いた。装備はバラバラなれど防具なり剣なり装備している者が多い。少なくとも冒険者の匂いを漂わしていた。駆け出しもベテランもいる。マルチならではな光景だ。

郷愁にも似た何かが湧き上がる。クラフターは頷き微笑んだ。

「どの部門に申請させても迷惑かけるだろ」

「言葉の問題か？」

「でもちゃんと教えれば採取や探索は勿論のこと、討伐部門だって出来そうよお」

「やり方は奇妙になりそうですがね。ランク飛び級しそうでやす」

一方で内装は少ない。申し訳程度に観葉植物があり壁際を多くのカウンターが取り囲む。

時々冒険者と住まう村人との取引が見て取れた。

……ここは取引所の一軒らしい。浮世の知識を多少知り得たクラフターだ。納得し頷いた。

「外の騒ぎを知ってもなお、それ言える？」

「……あ」

「そういう事だ。身元証明はギルドが発行、保証するんだろ。仮にコイツらに発行出来たとして、その後は？　気分屋なアイツらが好き勝手に物作りをして許される保証までしてくれる訳じゃない。取り返しが付かない事態になったら、ギルドやこの国のお偉いさんが責任取るのか？　そうでなくても人類の敵扱いされかねない……俺以上に」

何故エメラルドを持つてないのか。

あれは何が取引出来るか確認したかったのに。それか別物で取引出来るか。

いや出来そうさ。花を取引に使用している者がいる。その辺の草と石でも良いかも知れない。

「で、でもお……道や家屋を直してくれたし、悪い印象は……」

「行政の許可なく勝手にしたんだぞ」

「なら十分手遅れでやす」

「そうだけ旦那。過ぎた事より今だ」

一方リムルを見た。今は仮面で顔を隠し、トリオと鳴き合って……ひとつのカウンターに向かっていた。取引するらしい。

かと思えば本と羽ペンモドキを使用し始める。よく分からない取引方法だ。

しかしまあ、人の姿で差分を出す親切心に感謝する。色や身長を除けば、容姿はシズと酷似している故に。

「……その仮面、英雄に憧れるのは分かるけど、あなたには早いと思うわよっ。」

「……本物に説得して貰おうかな」

「ごめんねリムル。私の存在、今は渋いみたいだから」

「あ、うん……ごめん」

……唐突に複製と本物の違いについて思う。記憶や経験、行動や容姿が違えば別個体と認識出来るのか。

もしそれらが同一なら、同一人物として認められるだろうか。分からない。

取り敢えずリムルとシズは違う存在だ。少なくとも意思疎通具合が違う。ハアンなるスライムだ。

「まあまあ、そう言うなって。旦那はこう見えて俺ら3人が束になっても敵わねえんだから」

「えっ!？」

「あとシズさん、大丈夫。ローカルブームが来てる」

「そう……」

「このバカバル! 乙女心は複雑なのよお!」

「えっ? 責められる事言った!？」

「落ち着くでやす」

ハアンハアンと村人は相変わらず騒がしい。

聞き慣れた筈なのに時に慣れない。原因は知れている。シズの様言葉を理解出来ないからだ。

だが希望はある。

刮目相待。

とある湖底にて……同志がシズに代わる通訳の研究をしてくれている。どうやるつもりかは知らない。看板や本と羽ペンを使用するのだろうか。

あいやそんな簡単ならとつくに会話をしている。事は単純であるべきだが許されないか。

「……討伐部門。ねえ本当にいいの?」

「実地試験なんだろう? 採取や探索じゃ時間がかかる」

「それはそうだけど……」

既存の創造で無理なら人工的に生み出すしかあるまい。人生とは常にクラフトと隣り合いだ。

何より甲斐がある。邁進する姿勢は数少ない我々の取柄であり美学ではなからうか。

「確かにな」

おや。リムルに別の村人が絡みにいった。

まあそれは想像しうる範疇として……注目するのは別にあつた。頭がチリモジヤだが、ソレではない。

「あんたは？」

「試験官のジーギスだ。討伐の実地試験なら隣の棟でできる。1番お手軽で1番危険な試験だ」

なんと右足が棒なのである。

クラフトに通じる何かがある気がした。同時に疑問が浮かぶ。何故棒なのか。

「……義足か」

部位欠損というやつか。

この世界にて学んだ事がある。

腕や足の耐久値を超えた攻撃をすると千切れてしまう事があるのだ。なんとという事か。我々はどんな目に遭おうと腕や足が千切れた事がない。死んでも遺品をばら撒き身体は消えるだけである。

兎の足や蜘蛛の目の様に、動物の部位は知り得ていたが……人型にもソレはあつたのだ。当初、切り離せる事が不思議でならなかつた事例である。あいやネザースケルトンの頭蓋骨が手に入る時点で疑うべきであつたか。

素材に使えないかな、村人の四肢。

「受けるつもりなら、ついて来い……カバルどもの紹介ね……はッ。
どれほどのもんか知らんがな」

「なんかお前ら嫌われてねえ？」

「あれー……あつ！　髪型素敵ですねって言っちゃったからか。

ほら、俺ってサラサラだし」

「このバカ！　バカバル！　なんて酷い事をいうのよお！」

「確かに生理的に無理でやすが、言っちゃ駄目でやしよ！」

「違うわッ!?　お前らが急に信頼され始めたから妬んでるんだい
！」

「うわっ、それはそれで酷いでやす」

「なんて小さい男なんだ」

「……すまん。　試験始めてくれない？」

様々な表情を浮かべては未だ騒がしい村人達。

つらつら思う。

果たしてシズ越しでなければ延々と理解出来ないのだろうか。

理解出来ないなら仕方ない。　元の世界の村人達に対してもそうであつた。

ただ取引が出来た様に言葉が無くても通じ合えるのだ。　雑でも機敏さを理解出来る。　何故なら言葉が世界の全てでは無いのだから。

だからクラフターはニコニコする。

ニコニコしつつカウンターに草と石を置いてみた。　何と交換出来るかね？

「こ、困ります……これただの草と石……」

拒否された。

……少しは理解出来た方が良いなと思った。

74. スポーンと観戦

「この中で戦うのが試験か？」

リムル達が広場に移動するから、クラフターも做ってついて行く。地面にはよくわからない模様が、大円状に描かれていた。それを除けば随分禁欲的建築だなもし、とクラフターは見解する。

「そうだ。これは被害を出さない為のもの。受験者であるおまえは、この円から1歩でも出たら失格とする」
「成る程分かった。で、相手は？」

石造なのは統一されているが、装飾や遊び心に欠けている。そのくせ壁が妙に厚い。

何にせよ松明をばら撒く。暗闇に身を置き過ぎだ。

国の趣味でも、こればかりは認められない。少なくとも内側の危険を排除しなければ。

「なんだコイツら!？」

「急に松明を刺しまくっているぞ！」

「外の騒ぎはコイツらが原因か！」

「止めなさいアナタ達！」

「止めるの手伝うぜ……できる範囲で」

「そうでやすな」

「試験どころじゃなくなるわよお」

赴きの冒険者が騒ぎ、シズとトリオに抑えられた。地下鉄での悪夢が蘇る。慄として固まる他ない。下手な抵抗はリスポーンへ直結する危機を孕む。潔くした方が身の為だ。

実際に今は成功しているのが良い例だ。暴行も最小限に済ませ

てくれた。

「……アイツらを殲滅したら合格になる？」

「なるか。　というか仲間だろ」

「……遊び人さ。　まあ気にせず始めて。　試験どころじゃなくなる前に」

「あ、ああ。　ではEランク試験を開始する。　魔物に見事打ち勝つてみせよ」

しかしリムルは何をしているのか。

円の内側に入っているが。　対するはモジヤ村人だ。　これも取引の一種だろうか。

或いは戦闘か。　様々な光景を見てきたが見極めは毎度困難だ。　日々勉強である。

「いでよ。　ハウンドドッグ」

不思議な事が起きた。　リムルの目の前に突如として大型犬がスポーンした。

連邦狼とは似て異なる。　レアスポーンではないか、これは。

「おお…っ」

リムルは感嘆と共に居合斬で首を刎ねた。

「は!?!」

容赦無い一撃にモジヤ頭も周囲も唾然とする他ない。　分かる。　安易な殺害に理解が遅れたのだ。

何故懐柔を試みない。　レアなら殺すのは悪手と知っての愚行か。　次会えるかも分からないのだぞ。

これが3体いるならまだ分かる。

1体に試斬し、ドロップ品や体力値を調べ、残り2体を繁殖用で確保する。

初心者染みた行為だ。 駆け出しでもなしに。

……いや仕方ないか。 既に敵対していた。 懐柔は無理な類か。ドロップも期待出来ないか。 酸っぱい相手だったのだ、きつと。

「召喚魔法つてやつか。 すごいな初めて見たよ……次もよろしく」

「いいだろう。 次だ」

我々も初心の頃は考えもせず、出会い頭に屠殺したものだ。 最近の事例としては砂岩地帯でのウィッチモドキだ。

あれ以降、目撃例が無い。 迂闊であった。 あれはレアスポーンだったのだ。 だが反省しない。 無礼を働いたばかりか、敵対した挙句に碌なドロップも無い。 アレを思えばリムルの行為も肯定しなくなる。

「いでよダークゴブリンー！」

また何かスポーンした。

何処となくゴブタに似ている。 鎧を着込み、剣と盾を装備している。

先程より手強そうだ。 が、相手の初動より先にリムルは首を刎ねた。 容赦無い。 同時に良く斬り込めるな、と感心させえる。

「いやすまん。 なんか知り合いが煽ってきた時の顔に似ててつい……」

新手に対し、クラフターによってだが慎重に距離を計る。

土ブロックを10個くらい積み上げて上り、蜘蛛返りを作り見下ろし様子を見る。

相手は剣を所持しているから、ゾンビピッグマンの様なスタイルかも知れない。

が、常識に囚われてはならない今世界においては未知数だ。シオンの様に大剣を背負いながら猛毒を振る舞うかも知れない。

「飛び級だ」

「へ?」

「カバルらを倒したというその腕、最早疑ってはいない。このまま順々にランクを上げていくのも面倒だろう。どうだ? 一気にBランクの試験を受けてみないか?」

「いいねえ」

何にせよ見学も立派な勉強だ。

多種多様な脅威が蔓延る世界に身を置く以上は、一欠片とて攻略の鍵は拾いたい。

まだ戦闘は続く様子だから見ておこう。戦っているのはリムルなのに、見ている我々の方がワクワクしてきた。

「お……おいおいジーギスさん、そりやちつとやり過ぎだ」

「そうよう! Bランクの相手ってリムルさんにとって不利な相手だし」

「外野は黙ってる! 決めるのは受験者本人だ!」

何やらトリオとモジャ頭が揉め始めた。

観戦者として見応えが無いからか。リムルは今のところ一撃で葬り去っている。

だがウィザー級を召喚されたら困る。この辺一帯が吹き飛んでしまう。

リムルや周囲の村人が死ぬのはどうでも良いが、構造物が破損して欲しくない。

欠陥はあれど、それなりに良い造形なのだし。

「ヒューズ君……さんと呼んでくる。これ以上は止めた方が良い」
「賛成だシズさん。ジーギスさんはムキになり過ぎだ」
「案内するでやす！」

シズ達が駆け出した。何処へ行く？

ついて行くかと思ったが、やめた。今は仕合を見学だ。

リムルを基点にして行動している以上、また戻ってくる。やりた
い方を優先する。

「ふん……だがまあ、逃げるチャンスをやろう。こいつの姿を見て
勝てないと思ったら降参するがいい……来いっ！ レッサーデー
モン……！」

またスポーンした。

今までにない奇妙な形であった。まず村人の2倍以上はありそ
うな身長。

蝙蝠の様な翼。羊だか牛だかな動物的な顔。

角も2対生えている。

「おお……悪魔か！ 初めて見たな」

仮に蝙蝠羊と呼称しよう。

さてどう攻略すれば良いのか。リムルを犠牲に高みの見物だ。

「さ……さあ決めろ。戦うか否か」

「そんなの決まってる。魔法の連続行使でアンタはもう精神力が尽
きかけてるだろ」

「ふん……子供に見破られるとは情けないな……」

「すぐ楽にしてやる。試験を受けよう」

「……よくぞ言った。レッサーデーモン!!」

モジャ頭が叫ぶと、蝙蝠羊はリムルに襲い掛かる。　速い。　だが
追い付ける。　リムルは難なく回避。

我々ならどうしようか。

リムルほど俊敏に動けないから、丸石の壁で防ぐなり穴掘って逃げ
るだろう。　上でも良いが、翼がある。　飛んで来られそうだ。

そう思考が終わる前には、リムルは刃を返し蝙蝠羊の腹を斬った。
が、切断面は霧状になるばかりで相手にダメージが無い様子。

まさか近接無効だというのか。

ウィザーとは逆の性質でも備えているのか。　なら遠方や安全圏
を作り出し弓矢で削る。　その点が有効なら、ウィザーより脅威度は
低い。　抑える術は楽な方が良い。

『告。　精神生命体に物理攻撃は無効です』

「成る程。　それで不利な相手、か」

それかアンデッド特効等のエンチャントを付加すれば効くかも知
れないなと愚行する。

「アイシクルランス!!」

リムルが氷の矢を発射した。

が、あまり効いている様子が無い。　この分だと通常矢が効かない
か。

ならば氷以外を試すべきだ。　我々なら火矢を放てる。　あと毒と

か。　ポーシヨンでも良い。

「……魔法の効きもいまいちか。　剣か魔法……或いはその両方か」

そう。　突破口はエンチャントだ。

クラフターは思う。　通常の剣や弓矢では駄目だ。　強大な敵に

有効ダメージを与えられた試しが少なかった。あのミリムにせよ巨大魚にせよ。

だがミリムにはノックバックエンチャントが有効であった。

今までの創造力を凌駕する動力源兼演算装置であるBBのIRP攻撃が通用しなかったにも関わらず、である。

「魔法はイメージの具現化……刀に魔法を纏わすイメージをして……斬る！」

また不思議な事が起きた。

リムルが蝙蝠羊を斬り殺した。先程まで無効であったのに。

故に刮目して食い入る様に剣を見る。するとどうしたものか。

なんと、エンチャントされた霧囲気があるではないか。

『告。エクストラスキル魔法闘気を取得』

よもや即席付加とは。どうやった。

思い返せば、ドワルゴンで似た節があったか。エンチャント剣を瞬時に量産した時だ。エンチャント台無しにである。

だがアレは大元から複製したに過ぎない。今回のケースとは別格であろう。

驚かされてばかりだ。驚異の底が知れないスライムだ。

「で、どうなんだ試験は」

「……合格だ。全く、おみそれしたよ。今後、あんたの身分はギルドが保障する」

刹那、ハアンの大合唱。

リムルは村人に駆け寄せられ、囲まれると様々な取引を持ちかけられていく。

「凄いね君！」

「なに今の!?!」

「仮面取って顔見せてくれよ！」

「是非ウチに来てくれよ！」

分かる。強大な力には あやかりたい。

だが同時に脅威である。尚更対抗術を模索しなければ。

幸いなのは今回の戦闘は勉強になった事だ。今後の戦闘に工夫があるだろう。先ずはエンチャントだ。これは間違いない。

「Bランク試験だとお……?」

「ギ、ギルマス!?!」

「静まれ貴様らあ!!」

「ヒエツ!?!」

「何故こんな事になっているのだ！ リムル殿に何かあったらブルムンドが滅ぼされてもおかしく無いのだぞ！」

新手が来た。

いつかの村人だが、先程の蝙蝠羊より大迫力だ。

見学も悪くない。 見ているだけでも楽しい日々になりそうだ。

75. 自由と代償

「到着したら直ぐ俺の所にと言ったのに」

ブルムンドに到着してから観光する暇もなく勉学になるな、とクラフターは思った。

今は顔に傷がある村人……いつかトリオと共に連邦に来ていた……の住処と思わしき建物に通されている。

そんな家主に対しトリオは頭が上がらないらしい。箱座りをして落ち込んでいた。

シズに聞くと「正座」というらしい。行儀のひとつだそうだ。

奇妙な光景である。タッチしたらチェスト機能を発揮しそうな錯覚がある。

「ま、まあお陰で身分証も手に入りそうだし」

「初めから私に言って下されば支部長権限でBランクまで取り立て出来るんですがね」

「リムル。過ぎた事だから仕方ないけど、目立つ行動は控えた方がよいよ」

「シズさん……」

「あと連れの人達は受験しなかった様子ですが」

「それこそ目立つでしょ」

「既に街が大騒ぎでしたがね」

「何も言えねえ」「ごめんなさい」

何にせよ内装を見学だ。

それなりに広い部屋はフロアリング。家具は本棚や高価な素材を用いた様な長椅子、長机が並ぶ。

その下にはカーペットが敷かれている。1色ではなく様々な色を組み合わせていた。

単調にしないのはポイントが高い。どちらかという家具よりカーペットを評価した。

「我々は貴方が邪悪ではないと知っています。ですが他の者はそうではないのです。もしリムル殿の正体が多く魔物達の主だと知れたら……」

「そうだな。ブルムンドとはまだ正式に国交を結んでいるわけじゃないし」

「もう少し注意しておくね。キツめに」

急に寒気がした。

見やればシズが微笑みを向けている。笑顔に恐怖を感じるのも妙な話だ。しかし笑えない。代わりに視線を逸らす他ない。

「……実はリムル殿の到着を知り、ブルムンド王が極秘会談を希望されています。イングラシアへ急ぐと聞いておりますが」

「それってアレ？ コイツらの所為？」

「それもあるかと」

「拒否したら、ますます印象悪くなりそうだ……会う事にするよ」

「分かりました。では3日後に場を設けるよう掛け合います。実務的協議は明日辺りになるかと」

「分かった」

「私はその間、皆の様子を見る事にする」

「頼む……少しでも手綱を引いて欲しい」

リムルと村人が立ち去ろうとする際、リムルは振り返る。此方は怒気を含んだ表情だ。

スライム形態では理解し難いから助かる。戦闘のみならず村人形態の利点は多い。手や腕が明確にあるから刀剣の類を使用可能だ。

なんなら我々同様様々なツールを使える。

……IRPにも更なる汎用性は必要だな。

「だから連れて来るのは嫌だったんだ!？」

最も理解出来ないが。

シズもだが改めて伝言は難しく思う。言葉をコミュニケーションの全てだと勘違いしてはならない。

言葉のみで理解出来ない事は数多ある。意思、感情、思考、行動を汲み取るのは困難を極める。下手すると永遠の課題だ。

先程だってポジティブの筈な笑顔に恐怖を覚えたのだ。

かの意図するものは何か。村人のみならず同志間でもある精神的障害だ。しかし努力はしなければならぬ。

「リムル、そこまで責めなくても」

「……コイツらを抑制なんて至難の業だしな」

まあそんな事もあるさ。

リムルはリムル、我々は我々。互いに縛り付ける間柄でも無い。互いに来る事をすれば良い。シズに聞けばリムルはこれから

国と交渉する。

政治には疎いクラフターだ。精々が領土主権と建築基準、破壊と創造の境界話しか理解出来ない。金品取引や市場価値は知らぬ。

その辺はリムルに任せよう。我々は今まで通り世界を相手取り建築や冒険を楽しむ日々だ。

勿論、いざとなればシズを助ける。目的を危うく忘却しそうになるも、脱線は免れない範囲で国を楽しむ腹だ。

「ところで”クラフター”さん」

なんだいシズ。笑顔が怖いよ？

「真剣」に話そうかな？」

鞘から僅かに鉄剣を出す。ギラリと光る。

……自由に犠牲はつきものだ。だとしても護衛対象に殺害される可能性が出てくるとは。

理由不明。思わず笑う他ない。やはりコミュニケーションは難しい。

何とはなしに、クラフターは悟るのであった。

76. 食事と行儀

「旦那は明日にでも交渉に？」

日が暮れ、外の松明が揺れ目立つ刻。

リムルは皆と食事処で鳴きあった。先程まで我々が血生臭い行為をしていたのも知らず。

「国王にいきなり謁見するんじゃないけどな」

「まあ、そうよねえ」

美味そうな湯気立つ料理を囲む。だというのにクラフターは溜息混じりだ。

模擬とはいえ真剣勝負であった。地上では目立つと言うので地下鉄のホームに拉致されての強制戦闘である。突然の戦闘に地下労働班はビツクリだ。

そんな同志も気にせず、シズは鉄剣を振りかざしてきた。それをエンチャントダイヤ剣で凌ぐ。

地下鉄への損害もなく半殺しまでに止めてくれたのは不幸中の幸いであった。

とはいえだ。リスポーン地点は設定し直しているものの、下手して死ぬと経験値の減少は免れないし、装備も無駄に擦り減るで良い事はない。

ミリムだったら更なる悲劇が起きている。地上に向けて噴火が発生していた。

地下鉄駅は地上との往来の効率上、そんなに深くない。重爆に耐えられるかも怪しい。

そのピンキーストームは元気かなあ。

破壊者には違いなく荒らしに違いないのに。

妙な愛着が湧いている創造主であった。

「気をつけるでやすよ」

「心配すんな。 シュナがいないのは心細いけどな」

「ごめんね。 私がこの人達を抑えていれば」

「シズさんは悪くない。 さつき拷問してくれた訳だし、少しは反省しただろ」

「拷問じゃなくて仕方だよ？」

「割と本気だったよね。 死合だったよね」

過ぎた事は仕方なし。

リムルは3日ほどは滞在すると聞く。

その間にでも首都観光は済まし、改修を施していかねば。

ガードが固い隣国に移動してしまつては、そうも出来ないであろう。 武装村人に追いかけて回されるのは連邦で間に合っている。

自由とは謳歌出来る内に楽しむものなのだ。 当然、代償と少々の危機は常に付き纏う訳であるが、創造主にとっては日常茶飯事。 騒ぐ程でもない。

謂れもない暴力を受けるのは勿論の事、採掘中の溶岩浴や突然のクリーパー被害、直下掘りという愚行を犯しての地下渓谷落下やマグマダイブは忘れた頃にやってくる。

「まあまあ。 明日に備えて食いましょう」

「そうだな」

村人の話題は変わった様だ。

各自、ようやくと食事に手を出す。 大皿から取り皿とやらに取り分ける。

シズに聞く。 これも行儀だという。

「衛生の問題もあるけどね。 でも人によるよ……ここでは皆の真似しなさい。 良いね？」

シズ的笑顔が最近怖い件。 頷く他なし。

しかし食事方法にも色々あるとは。 面倒だ。

我々なら皿を取り直食いしている。 だが、それをやってはならない、と。

パンは許されるのになあ。 差が難しい。

郷に入れば、とは前から考えられる様になったが、何よりシズと同伴しているのがある種の危険だとも考え始めている。

特に食事時。 クラフターは作法を誤れば恐ろしい事になるのを既に存じているのだ。

満腹でも無理矢理喰わそうとしてきたり、食べカスを1粒でも散らしたら折檻される事がある。

「食器もちゃんと持ちなさい」

取り皿に受けたんだから、良いだろ。

「ここでは行儀良く」

厳しい。

そもそもフォークだのスプーンだの、どう使えば良いのだ。

「こう持つの。 持って、食べる」

模倣する。 スパゲッティとやらには時に両手をも使用する。

フォークとスプーンの合わせ技。 食事とは大変だ。 だが我々も似た事をするので理解出来た。

劍盾とか弓とエンCHANT矢とかの組み合わせだ。 それらは両手を使う故に。

「溢さない」

……だが慣れない動作だ。叱られた。

いつかの時に見聞きした鍋奉行。この場合は食事奉行シズエ・イザワか。

練習するしかない。食事時は楽しくありたいものだ。この料理も大変美味しいのだし。

「シズさん、相変わらず厳しいでやすな」

「もつと厳しくしてくれシズさん。少しでもコイツらを分からせたい」

「そう言う旦那は、仮面付けたまま食えるか？」

「へ？ いや無理だろコレ。流石にずらす」

「シズさんなら、そのまま食べていたぜ。なあシズさん？」

「え？ うん、一応」

「マジ？ どうやるの？」

「普通だよ？」

注意がリムルに向いた。

今のうちに掻き込む。食い切れない分はストレージに仕舞い後で食う。

少なくとも皿の上は空にしないとならないからだ。でなければ、また叱られる。

だが理由は分かるから良い。有り余る食糧があるからと粗末にしてはならない。

「く、食えないぞ。何度やってもベチョツてなるんだが？ 流石

に嘘だろ」

「嘘じゃないよ」

「残念よお。もつと出来ると思ったのに」

「旦那に仮面の荷は重いんでやす」

「シズさんも木の葉の影で泣いてるぜ」

「泣いてないけどね」

「もう1度だ!」

急に賑やかだ。

騒ぐのは有りなのか。よく分からない。

リムルなんて仮面を料理で汚している。それこそ駄目だろう。

シズ的に。

「あーあー。仮面をそんなに汚して!」

「シズさんはもつと上品だったわよお」

「道のりは険しいでやすねえ」

「む、無理しないで良いからね?」

「いやシズさん。俺はコイツらに馬鹿にされたままなのは納得出来ない! なによりシズさんに出来て俺に出来ないなんて事は……」

何故か楽しげなままだ。

仮面を汚すのは許されるのか。

「アンタ達! もつと静かに食べな!!」

かと思えば給仕の村人に叱られた。

シズ含め全員が頭を下げた。シズの上位互換か、アレは。

「側の人達を見習いな。行儀は悪いが静かにしてるじゃないのさ」

「いや、コイツらは喋れないっていうか……そうだ。コイツらは仮面付けたまま食事出来るのか試すか。俺だけなのも理不尽だ」

リムルに仮面を渡された。

意図が分からないのでシズ越しに尋ねて理解した。

「出来るか? いや出来てたまるか」

「意地にならなくても……」

仮面を装備した。残り物のスパゲッティを食べた。普通である。

「なん……だと……!?!」

驚愕されたが、取り敢えず返却する。

これの何に良し悪しを付けて騒いでいるのか理解できないクラフトーだった。

「くそう！　カバル達もやれ！　俺だけ出来ないなんて認められるかーッ！」

「うおっ！　旦那ご乱心!?!」

「食べ物で遊ぶのは感心しないよ」

「いい加減にしな！　出禁にするよ!?!」

妙な争いを尻目に食事は続く。

理解は難しくも食とは奥深い。

だがやはり賑やかなのは良い事だと頷いた。

77. 辛辣同志と談議

「こんばんは。玄関がガラ空きでしたよ」

郷愁に似たモノを感じる言葉に振り返った。

そこには小柄なクリーパーが、いや村人……いやいや。

マインクラフターが佇んでいる。何故か違和感を感じる。背丈やスキンだけでは無いのは確かであるが。

何にせよ挨拶だ。地下組は腰を屈めた。

ようこそ小柄な同志よ。見ない顔であるな。

クリーパー柄の服を着込んでいるが。新参かね？

「そうです。湖底の層共に、この地で馬鹿の見聞を広める様にと。

ナニが学べるってんです？ 玄関ガバガバだから頭もガバガバ

そうですが」

そうか。歓迎するぞ辛辣同志よ。

ここはリムル不在の魔国連邦地下である。

「知ってます。凄い地下空洞ですね、流石はガバガバ頭達です」

掘げたばかりだからな。空き地は多い。

しかしその言動からして現在、リムルとシズもないのは周知の話であるか。

なら今更に説明はしない。

当然、荒らしのミリムもない。ではやりたい放題かと言えばそうでもない状況下に置かれている。我々は困り顔だ。

「そうですか。塵ほどの思考はあるんですね」

そうなのだ。

都市防衛思想からなるTNTキャノンの増産や調整、改造、火薬調達、TNTクラフトに同志が割かれてしまっている。

森を切り拓くにも例の植物村人が邪魔する所為で地上はさほど拓けていない。

地上で他にやる事と言えば、ビルディングの内装工事や村人式建築様式の見学、他国への道路の脇道に家を建設したりアート制作。

最近は地図での見栄えも良くする為に屋上の外装を改める工事もしている。キャノンに対する偽装、迷彩を施す意味もある。

具体的には緑化……キャノン上部に草ブロックを施す。その為、更新された魔国連邦上空地図は周辺の森林に大雑把ながら溶け込んでいる。

この世界には空飛ぶ村人もいるからな。対空とは攻撃のみならず偽装も必要なのだ。

これは元の世界においてもそれなりに意識する者もいたが、この世界では重要度が増した。最もビルディングは側面が肌けているので高高度を飛行している相手くらいにしか効果は望めないとされる。それでもやらないよりマシだ。何よりやりたいからクラフトしている。

「滅茶苦茶やってるじゃないですか。噂通りやりたい放題ですね」

そうでもない。

だが思う様にいかない事を思う様にしていくのが楽しいのだ。

「人生楽しそうではあります。ですが私を巻き込まないで欲しかったですね」

無理に地下労働しろと誰も言わんよ。

クラフターとは各々が自由であるべきだ。

「……その自由が誰かを不幸にすると考えないんですね。勝手なんですよ……」

だが折角だ。

そんな湿気た顔せず見学していくと良い。めくるめく創造の世界は良いものだ。

ほら地下は更に広がった。ツルハシを振り回した結果である。地上で退屈し始めた整地厨の鬱憤が幾ばくか晴れた事だろう。

「私の気持ちは晴れませんが。どちらにしても勝手に動いたら処分されそうですし。その意味では無理を言われてるんですよ」

我々もだ。リムルやシズに咎められるし。

だが不自由の中に自由を求めるのは勝手だ。

だから手が余った者は地下へ潜り、地上とのアクセス効率化や環境改善、防衛力強化の為にクラフトに精を出す。

「そうじゃないんですけどね……ですが羨ましいですよ、その自由奔放さが」

ああ楽しき創造の日々かな。今日もツルハシとスコップを振るい、RS回路組み、土を敷いて耕し種を撒く。

片やIRP研究は行き詰まり、されど邁進する。この世界の村人達の技術を更に組み込めば更なる飛躍を遂げるに違いない。

「そりゃ良かったですね。その為にも通訳が必要って訳ですか」

そうだな。だが自力でクラフト出来るならやってみたくも思う。

ああ現状でも実に良き。充実している。

やりたい事が山積みだ。素晴らしい。

IRP研究にエンチャント研究。地上で賑わう村人の技術吸収。

獨創性に固執せず、柔軟に対応する事が必要だ。 さすれば我々のクラフトバリエーションも賑わいを見せ続ける事に違いないし。

「その為のひとつとして、湖底班ゴミ屑IRPにBBを貸与しないのですか？」

その件は伝達した通りだ。

少なくともリムル達が帰還するまで譲渡等は出来ない。 首都防衛力低下を防ぐ為だ。

「歩く黒曜石の塊が、このバケモノだらけの世界で役に立つとは思えませんかね。 キャノンだって通用するか怪しいじゃないですか」

同感だ。 故に研究を続けているのだよ。

対抗する術はきつとある。

最近ではエンチャントに期待している。 何とかIRPにも付加したい。

研究は瑞々しくあるものでありたい。

「不可能じゃないですか、そんなの」

そうだろうか？

誰しもが不可能だと思ふ事を、平気で実現出来たら愉快爽快、痛快である。

「どうせ失敗します」

失敗と感じた中にこそ、誰もが見逃す発見が隠れている気もする。 それに。

誰も試行錯誤していない事の方がよっぽど新しい発見があると思わないか？

これは絶対間違いない真理だ。 確信出来ずとも、どこか誇らしい
自信が湧いてくる。

「……勝手にすれば良いですよ。 私は知りませんから」

ありがとうございます。

「でも」

なんだい。

「どうして続ける事が出来るんですか。 何故諦めないんですか。
全部無駄になるかも知れないのに。 大切なものが壊れてしまうか
も知れないのに。 二度と取り返せないかも知れないのに」

愚問だ。

君もマインクラフターだろ？

「……良いから答えろです」

これは出来るのが当然と思ってクラフトを続けてきたから……だ
から簡単に諦められないでいる。

「……………」

確かに抽象的に思考した事ごとが、現実との狭間で試され続けてい
る。

勝手な空想だけではいけない。 君が危惧するのはその辺か？

「そうじゃない、ですが……」

.....。

だが我々の発展は無敵だ。クラフトする事に対しては、ある種の信奉さえしていると言つても過言ではない。

その取り組みは間違ひなく世界と人生を楽しむ魔法になる。

……この世界の本物の魔法と比べたらシヨボい魔法かも知れないがねと付け加えておくが。

「.....」

標準的な理論を越える行為をすると、時に君がした様に馬鹿にされる。罵倒される。

だが驚きの発見や革新的知識を得て、前人未到の域へ赴く行為でもある。

そうして得られた礎が、より多くの創造に役立てられていく。そう考えると喜ばしい。

なにより。

面白いと思える事なら何でもやりたい。

先程も述べたが、君に何かを強要しない。

己が本当にやりたいと思う事をやると良い。

そうすれば、直ぐに結果が出なくても続ける事が出来る。

「それが”マインクラフター”なのね」

最も人によるがね。誤解なきよう。

皆が皆ではない。荒らしがいる様に。趣味嗜好が色々あるよ

うに。

自分のクラフトを見つけなさい。

それが己であり我々である。

78. 小話と再鉄道

「……君たち、髭は毎日剃りなさい」

リムルは帰ってくるなりゲンナリしていたから、クラブターは首を傾げる他ない。

村人政治は複雑難解だ。我々の領土権や交渉の比では無い。

「旦那、何があつたんだ？」

「髭との騙し合いに負けたでやすか」

「チョロかつたろうなあ……」

「元氣だして？」

「そ、そうよお。本来の目的もあるしい」

嵌められた顔だ。

泥棒に入られた時や全ロストした我々に似る。

ともなれば同情心も湧くというもの。リムルに近寄るとポンと頭に手を置いた。

「お前らの代わりに説教もされたんだからな、勘違いするなよ!？」

手を払われキレられた。

余程酷い目に遭ったか。可哀想に。クラブターは憐れみの目を向けた。

次いでに握飯を渡す。元氣になあれ。

「いらねえよー!」

拒絶反応を示す。そつとしてやろう。

握飯を食いつつ離れる。気を遣える我々は偉い。

「……それで、どんな話になったの？」

「大雑把に話すと、他国の人間を受け入れる際の施設や関税、そして安全保障」

「安全保障についてやられたでやすな」

「……その通り。相手が重要視したのは安全保障についてだったんだ」

ハアンハアンと小難しく鳴き出すリムル達。

またか。

通訳がいたとしてもクラフターには得がなさそうだから好きになれない。 煩いし。

「ドワルゴンの時と違う点があるのかな」

「そうなる。互いの国に危機が迫った際、可能な限り助けるって事なんだけど……」

「旦那達にはメリットは低そうだ」

「テンペストの危機といったら災厄級の魔物に襲われる時よねえ。」

人間の国が出来る事は……」

「それは分かっていたんだ。ただその」

「……関税の方に注目しちゃったと」

「か、金だけじゃないぞ？ テンペストを人間に受け入れて欲しかったし？ 共存共栄した光景を目指していたし？」

「……合わせて安全保障の方も結んだと」

「キョーゾンキョーエイだからネ。友達ぴんちナラ助ケル、コレ当たり前前ネ」

「失敗したのって脅威は魔物だけじゃない点……だよね」

「そうですね畜生!! 東の帝国とか、まあ他の人間の国が攻めてきた時も助けなきゃいけなくなった!」

「人間と仲良くしたいのに人間と戦争……矛盾するでやすな。人的、物資、他国との政治的にも悪そうでやすし」

「本当にメリット無さそうねえ」

「関税と防衛費を比べたら、関税なんて微々たるものだろうね」

「そうです、そうなんです、見事騙されたんですよ！　だからこれ以上責めないでツライの今！　畜生、人間やっぱ怖い！」

”クラフター”とは違う怖さだね……」

リムルがハアンと叫ぶ。

一通りすると沈静化へ向かった。　良い傾向だ。

我々やシズには目的があるのだ。　忘れてはならない。

「あ、コイツらの技術提供の件もあったけど」

「けど？」

「国主でもどうしようも無い事がありますと伝えておいたよ。　何故か妙に納得された」

「……心中お察ししますってところでやすな」

「追及されなくて良かったわねえ」

「本当だな」

さても移動を開始し始める。

僅か3回程の寝起きでの観光であった。　名残惜しいが隣国にも

素晴らしい事が待っているに違いない。

と、云う訳で然らば青空。　また後程。

対し、お久し振り鉄道。　変わったな。

「……………で、地下に戻った訳だが」

素晴らしい！　クラフターは腕を振る！

地下労働班によりホームが整備された。　ベンチもある。

「イングラシア近郊にも繋がってるって」

「逆に繋げてない所ってあるのか？」

また敢えて搭乗口辺りの線路に傾斜……山上に。トロツコに搭乗後、スイッチを押す事で自動発車する様に直されているではないか。

半自動化は元の世界でも良くクラフトされた手法である。些細な変化だが、工夫や効率化が見て取れるのは大変喜ばしい事だ。

クラフト万歳。クラフターは激しく腰を振る。

「……なんだろう、交渉の後だからかな……地下鉄の入口といい、ベンチといい……何故か日本を思い出すよ……そう……サラリーマン時代を……社畜時代を……ハハハ……ッ」

「リムル、しつかり!」

「旦那が壊れたーッ!」

リムルは兎も角、シズやトリオ也大歓喜!

ここまで喜ばれるとは。

おお同志諸君よ!

やはりクラフトは素晴らしい事であろう?

79. 例のアレと土竜式

「いやまあ、やられっぱしは嫌だからね。軽い意趣返しにフルポーションを紹介したけども」

例によりトロツコにて地下を移動。

駅は整備されたが、流石に道中は殺風景だ。露天掘りが過ぎる。流石に3日やそこらで全部を綺麗にするのは困難だ。景色をどうするか、という議題も残る。なれば手より思考する時間が長い。だが同志の事だ。きつと素晴らしく改修してくれると信じている。

クラフターは将来に期待し領いた。

「ジーギスさんに実演協力して貰ってね、失った右足が生えるトコを見せたワケ」

「良い事だ旦那。これでジーギスさんも冒険者稼業に戻れるんだな」

恒例の暇潰しハアンが風に流れる。

後でシズに聞こう。我々も移動中は脳内クラフトばかりだ。

地下鉄の内装どうしよう、これから行く国でナニをクラフトしようとか。

「ああ、喜んでくれてたよ。同時にフューズとベルヤード男爵にも『これが量産されているというのか!?!』と驚かれた。そっちは思ったより深刻な空気になっちゃったよ」

取り敢えず照度確認だ。

何に付けてもコレは怠ってはならない。

「そりやそうでやしよ。フルポジションはドワーフ王国の技術をもつてしても生産出来ないときれていた、幻のポジションの扱いでやしたから」

次に綻びを確認。修復が必要なクラフトしなければ。既に創造主の脳内では予定が組み上がりつつある。

……実の所、地下鉄工事やマッピングの際に観察まではしていた。空から見た国家形成は、それはもう立派な円形状の大都市で景観もまた素晴らしかった。

計画的な都市設計が見て取れ、建築物も密度が高い。連邦に建設したビル程の高度には遠く及ばないものの、装飾や使用建材に配慮が見て取れ実に立派であったのだ。

「そうねえ。リジェネレーションの回復薬なんて神聖魔法に匹敵するわよお」

区画整理の為と思われる、都市を取り巻く水路もまた芸術の一環と見て良いだろう。

だが飽くまでも上空から見た限り。詳細は分からない。理由は単純だ。入国しようとしたら騒ぎになったから。矢やら見えない謎の攻撃……恐らく魔法……の笑えない挨拶をされて以降、調査出来ていない。

あそこの武装村人は装備が統一されている。ダイヤフルエンチャントなら遅れは取るまいが、練度と数は馬鹿に出来ない。

「でも万能過ぎる薬は危険よ。絶対に政治や戦争に絡んでくる。ましてやそれら概念や倫理観が覆しかねない」

「それは思った。飽くまで定期的に卸すのはハイポジション。フルを20分の1に薄めたものを送る」

通訳して貰い、敵意が無い事を伝えねば。

或いは少しでも村人語を理解しないと。
耳を澄ます。今のシズの言葉のみで会話を想像してみる。
……ポーシヨンの話だ。我々もクラフトするから興味が湧く。

「旦那達が高い技術力をも有している証明にはなつたな」

「でも気を付けた方が良くですよ。切り札となり得るものを見せ過ぎては……抑止力にはなるかもですが、逆に狙われるなんて事も……」

「全部見せたつもりはないさ。俺のスキルに関しても……特にコイツらの場合は」

リムルが此方を見る。

不満気でもあり、呆れてもいる。

……その中に畏怖がスパイスされていた。

「見せたとしても、次から次へと新しい物を作るからなコイツら。把握したつもりでも、次には想像を超えている。それが分かっている奴ほど……殺そうとはしてこないさ。その逆も然り。何より排除しようなんて、それこそ無駄骨を折るだけになりそうだ。」寝ても起きて作る”から。終わりを懇願しない限り何度でも何度だつて、な。なんなら折られた骨を更に強く治して見せびらかして来るまでである」

クラフターは理解した。

ポーシヨン話から想定される恐怖。

それはシオン級だ。確かに例のアレは我々も震え上がる悪魔の兵器だ。

思い出ただけでクラフターは身震いした。

「そうね。でも私は好きだよ？」

「……俺も好きになれる時はある。邪悪じゃない、純粹なところと

か。真っ直ぐな、信念を曲げなさそうなところとか」

恐怖とは備えなき時に訪れるか、得体が知れないモノ等に云う。その上で断言する。

アレは両方だ。

どんな厨房設備や高価な食材をシオンに与えても、クラフトして出てくるは料理ではなく兵器だ。

もはや我々がクラフトしてシオンに与えた筈の厨房は兵器廠と化している。

取引する際は必ず体力を満タンにし、牛乳をがぶ飲みしながらでなければならぬ。

何故なら、その場所にいるだけで奈落に落ちたかのようなダメージを負い続けるからだ。

可能なら金林檎を齧り、回復ポーションを常に飲むのが好ましい。猛毒を手にするという行為はハイリスク、ハイリターンであり続ける。

だがそれくらいの緊張感がある方が良く、簡単に手に入れば、阿鼻叫喚の地獄絵図の世界が創造された事だろう。

「まあまあ旦那。大切なのはこれからだろ？」

「そ、そうよお。仲良く行きましょ？」

「シズさんの教え子達に会わないとでやす」

まあ、それはそれ。これはこれ。

クラフト出来ぬ猛毒の取引先が出来た。

「そうだ！ ポーション関係をこの人達に手伝って貰うのは？」

「……フルポーションよりもっとヤバいのを作りそうだからパス」

「手足が余計に生えるとか、逆に身体が崩れるとか？」

「やめてくれ。現実になりそうで怖い」

「それでやすよ！　悍ましい事を言うもんじやないでやす！」

「そうよお！　このバカバル！」

「そんな事にはならないと思うな、たぶん」

結果的に研究は進んだ。

具体的にはキャノン砲（爆）弾を開発、量産中だ。

間もなく出来る。　試射する際は座標に気を付けねばならない。標的もどうしたものか。

「あ、着いたよ」

「ここからは徒歩だな」

そうこう考えていたら、あつという間に目的地周辺に到達。

やはり鉄道は良い。　文明、クラフトを感じられる。

「お前らはココに残つとけ。　流石にこの国でまで騒がれたら大変だ。　そもそも入国審査が通りそうに無い。　証明証が発行されないからな」

「……………という事だけど」

大丈夫だ問題無い。

既に騒がれた。　今更でもない。

「…………え」

それにとクラフター。

我々には手に馴染んだコレがあるから。

「まさか…………」

笑顔で取り出すは、ツルハシとスコップだ。

苦難や障害は壊して乗り越え埋め直す。
我々には我々の道がある。
君達は君達の歩むべき道を進み給え。 では後程。

80. 誕生と消失

物心ついた時には、生まれさせられた事を恨んだ。

私は屑連中の言うところの所謂「人造人間」という肉人形らしかった。

人形故か実験台として扱われ、姉はボロ雑巾の如くこき使われ最期は還らぬ人となった。

その骸を連中は無造作に火葬し無かった事にして、弟は屑連中の世界へと拉致された。

そんな事をする連中だ。 奴等を身を寄せ合う家族とも仲間とも感じれず、私も姉弟と同様に恐ろしい目に遭わされると思つて過ごしていた。

どうせ殺されるならと自殺も考えた。 せめてなりの抵抗心はあつた。

連中は生き返るみたいだけど、姉は死んで還つて来なかつた。

だから人形の私も死ねば解放される筈なんだ。

だけど連中と違って臆病な私は其れが出来ない。

だから屈辱を感じつつ屑が投げ与えて来るゴミを漁りながら、創造主の作り上げた灰色の世界の片隅で1日1日を怯え震え生きていた。

(いつ殺される? いつ解放される?)

そんな生活が終わりを告げたのは、唐突だった。

その日はいきなりトロツコとやらに押し込められて、ビル群が聳える大都市に放り投げられたのだ。

最低限の土地の説明をされると後は自力で見聞を広めろとだけ言い残され、放置される。

以降誰も来ず、食料になるようなものを与えてくれなかった。

私は屑連中のクラフト技術やサイバルの知識はあれど、あるだけである。

その気になれば何とかなると思っていたが、思うようにならなかった。

知識と実践の違いを思い知らされる。

屑連中のサバイバル、クラフト技術を使ったらそれこそ負けだとすら思っていたのもあるだろう。

詰まらぬ意地が私自らを追い込んでしまっていた。

(……疲れちゃった)

やがて訪れた夜の寒さは私の骨に張り付いたような緑のパーカーだけでは到底防ぎ切れるものではなかったから、少しでも暖かいようにとビルとビルの間隙の路地で体を丸めて震えていた。

ひもじくて、寒くて、辛くて、理不尽で、私を生み出したクラフターが憎くて、とにかく悲しくて涙が溢れた。

あんなに恨んでいた屑連中に私は生かされてきたのだと。生まれさせられたのだと。

なんで。 どうして。 どうしたら良いの。

自決を思っておきながら、いざ自力で生きないとならなくなった今、生きたい気持ちが湧いてきてしまう。

(私、死ぬのかな……でもアイツらは……)

皮肉とはこう云うのだろうか。

ふと、目の前に影が落ちた。

顔を上げた私が目にしたのは、この魔国連邦とやらで活動している男の人間。

それも数多い創造主の1人だった。

両眼で私を捉え、暫し佇んでいる。

「クラフター!？」

私は反射的にその場を飛び退いた。

無論本能によるものでもあったけど、1番の理由は糞親共の所為だった。

もう記憶から消したい連中だが、それでもサバイバルやクラフトは頭ではなく身体に教え込まれたから。

連中に教わったのは、生き方と創造の仕方、そして世界と層共の恐ろしさだった。

相手の一挙手一投足を見逃すまいと私も目を光らせ、警戒心を滲ませるように右拳を握る。

そんな私を見て彼は優しく微笑んだ。

食べなさい。

クラフターは呟いて、徐に白いボールを私の目の前に置いた。

同時に薄暗い路地を松明で照らされる。久しい太陽の様な温もりが、私を包み込む。

すまない。照度確認だった。

男の姿が路地から消える。すぐさま雑踏の中に紛れて見えなくなった。

私はといえば、目の前の美味そうな白い塊から目が離せないでいた。

匂いから食べ物であることはわかっていたし、何かを食べないと命が危ないということは、私自身が誰よりも知っていた。

この時の私は連中が憎いとか、助けなんかいらなとか、先程まで抱いていた変な意地や憎しみなんて吹き飛んでた。

それ程までに飢餓の苦痛の前には無力だった。

手に取り恐る恐る口に入れると、白い塊は噛んだところからポロリと崩れた。

白いスライムボールだと思っていた物は、どうやら白い粒が集まっ

てできた物らしかった。

中には具材として焼鮭が入っていた。

それが稲植物の米からクラフトされた握飯だという物だと知ったのはかなり後になってからである。

研究所の味気ないパンクズとは似て非なる食糧だ。

「ひぐつ、おいしい……悔しい……ッ」

遠目に見ても、私はまたも嫌いなクラフターに餌付けされた惨めな存在だった。

握飯が塩っぱいのは、涙の所為だ。

それすらも良い塩梅で、更に悔しくて。

それでも感謝なんかしてやるものかと。

私を産んだ仲間に頭なんか下げるかと。

男は翌日も現れた。翌々日にも現れた。

その翌日にも現れた。

何度か寝て起きて昼夜を生き延びた頃、私は男の後を追跡しようと思いついた。

産み落とされてから暫く経過していたとはいえ、箱入り娘……というにはあまりに粗末……育ち故に思慮浅く単純だった私は、男がこの大都市の何処かに食糧を大量に抱え込んでいるのではないかと考えたのだ。

あとをつけてその場所を突き止め、あわよくばその秘密の食糧を全て私だけのものにしてやろう、などと画策していた。

そうすればクラフトせずとも生きていける。

屑連中の技術を振り翳す必要も無い。

村人達の様に働く必要も無い。

愚行とも云える計画は驚くほど円滑に進んだ。

何せ魔国連邦はクラフターが村を魔改造した事により大都市に発展、様々な村人が出入りするものだから、村人形態の私なんて珍しい

ものではなかった筈だ。

だから人魔に紛れて歩いていてもなんの疑念も抱かれなかったのだ。

誤算は2つあった。

1つ目は案外簡単に見つかった事。

2つ目は男が、私が飼われたがっついていると変態思考回路で勘違いした事である。

だけど私自身、餌付けされて心のどこかで男の事を、クラフターを信用してしまっていたのかも知れない。

私が村人からクラフターに転身し、新たに名前を貰ったのはその日の内の事だった。

私が男の家……マンションの一室……に上がり込んだ夜、出された握飯を一心不乱に食べる私を見ながら、男は笑いながら色々なことを話してくれた。

男は皆の為に都市の見回りや、その時に必要であろう松明や武具といった地味なクラフトや建材の生産を生業にしていることや、その道を志した理由を。

駆け出しの時。

先輩達の荘厳な建築物を見て感動した。

しかし己にはその域に到達出来ずにいた。

夢ある想像も実現出来るだけの創造力も。

熱意も努力も己は同志に遠く及ばなかった。

やがて敵わないと建築意欲が消え失せ、それでもせめて役に立つ事をと。

「良いじゃないですか。無駄じゃなければ」

男は眉を下げてはにかんだ。

適当な相槌のつもりだったが、肯定される事に悪い気はしないらしい。

因みに私につけた名前は、この緑の衣服から取ったという。単純で、そのままです。

「凡庸なセンスです。 敵わないのも納得です」

そう返しても、彼は激昂する事なく優しく頭を撫でて来た。

大きな右手は温かくて丁寧で。 だけど恥ずかしくて、私は頭の手を退ける。

「私はペットじゃないですから」

それから男は嬉しそうに目眩く創造の世界の解説を始めた。

明らかにクラフターを嫌がる眼を向ける私が相手でも、誰かに話せることが心底楽しいとでも言うように。

この都市の地下にもな、凄い都市が建設されていてな。

それだけじゃないぞ。

未知なる創造への探究だつてされている。

きつと世界は天上に散りばめた星の数以上にあつて、創造の世界も負けないくらいある筈なんだ。

今思えば、彼はあの時童心にかえっていたのかも知れない。

男は外で素材を集めて、ある程度すると部屋に帰宅し、延々と同じクラフトをしている事が多かった。

朝、私は男と同じ頃に起き、同じ食事を経て共に外と内を出入りして眠りにつく。

その間、男の顔を見ないことはなかった。

優しく彼は微笑みかけて、私はその笑顔に負けて嫌いなクラフトを
実践し……採掘したり木こりをしたり、時にはモンスターと戦った。

嫌々だった。 でも何処か楽しんでいた。

死にたがっていた私は、もういなかった。

でも。

そんな生活は長くは続かない。

この先もずっと彼との生活が続いて、そうして世界は回り続けるのだと思ひ込み始めた。

だけど男はもう先が長くないと本能が警笛を鳴らし始める。

その時は何故、と思っていた。

クラフターは死ぬ。　だけどまた起きる。　荷物や経験値は失っ

ても還ってくる。

でも何かが違う。

男は日に日に活力を失っていた。

毎日の様にクラフトしていた事もやらす、素材収集にも向かわなくなってきた。

部屋で不気味なまでに棒立ちする時すらあった。

「今日もクラフト……しないんですか？」

私は嫌いなクラフターにクラフトを尋ねる。

彼は首をぐりん、と私に向けて疲れ気味に言葉を放つ。

すまない。　意欲が湧かないんだ。

クラフターがクラフトを放棄する。

そんな卒爾の事態になっていた。

「そう……疲れてるんじゃないですか」

私は何故か震える声で、だけどなるべく冷静沈着に返答し、取り敢えずストックしていた握飯を食べた。

彼は食べなかった。

それから何をするでもなく、部屋で共に過ごしていた。数日が経ち、男がやっと動いた。

私を一目見るなり泣きそうな顔をする。

かつて私に微笑んでくれた男の、たった数日でここまで変わるものかと驚くほどの表情を見て、男の寿命がもう幾ばくもないことを悟った。

「クラフターは寝て起きて作って……死んでも生き返って、いつだって自由で……ッ」

私は別れが嫌で、クラフターが嫌いなのに共にいたいと願い始めた。

彼以上に私はくしやり、と顔を歪ませて彼に擦り寄った。

そんな私に彼はあの時みたいに優しく頭を撫でて云う。

クラフターは死なず。

ただ消え逝くのみなんだよ。

彼は別れを告げる様に、そう云った。

ここで初めて私はクラフターが消失する理由を悟る。

クラフトする意欲を無くす時が消える時なんだと。

彼はもう、己の存在意義を失っているのだと。

マインクラフターじゃなくなる時が消える時だと。

「なら何か作りましょう！　建物でもツールでも！」

私はらしくなく駄々っ子の様に振る舞った。

消える基準も消えない条件も明確には分からない。

だけど私は必死に作り笑いを浮かべて提案した。

それでも、彼は微笑むばかりで動かない。

それよりもと。

残された時間を私と部屋で過ごしたいと彼は強く訴えた。

私はどうして良いか分からず、結局は彼の望みに応える事にした。

彼は日に日に痩せて、薄れていった。

食事を摂るのも億劫な様子だった。

ある日を境に、彼は仕切りに己が死んだら次はもつといい同志と付き合えよと言うようになった。

ある日から、彼はベッドの上から起き上がらなくなった。

その日から、私も彼と同衾して動こうとしなかった。

私を見ると泣きながら、お前に会えて良かったよと頭を撫でて呟く彼に「勝手に消えて酷いです」と私は彼の体を抱きしめた。

それから数日。

ある朝、私が目を覚ますと同時。

彼はおはよう、元気だなと微笑んで消えた。

抱きしめていた腕の輪の中は、もう彼はいない。

私はベッドの上から動こうとはしなかった。

彼はもう逝つたのだと頭では理解していても、どうしても彼の温もりの傍らを離れようとは思えなかった。

どれくらいそうしていたんだろう。

外は日が沈み、摩天楼の明かりが揺らいでる。

そういえば、と。

あの日、彼が嬉しげに語っていた話を思い出した。

きっと世界は天上に散りばめた星の数以上にあつて、創造の世界も負けないくらいある筈なんだ。

あの日の彼の笑顔が脳裏に蘇る。

星とは夜空に浮かぶ輝く宝石で、空の向こう側にある、手を伸ばしても届かない、きつととつともなく広い世界にあるのだという。

彼は消えて輝く星々の世界へ向かったのだろうか。

ベッドの上から窓へと目をやった。

黒い絨毯の上に鉱石でも散りばめたように、無数の星が輝いてい

た。

小さくても大都市の明かりに負けぬ輝きだ。

彼がいなくなってしまうたから、私は生きる為に動かないといけな
い。

かといって、彼の代わりを探す気があるのか、と聞かれれば答えは
NOになるだろう。

彼は彼だ。

地味だけど唯一無二のクラフターだった。

聞かれたら絶対にそう答えよう。

彼が彼らしくいられたなら、私はそれで良い。

ああ、だけど。

もう少し一緒に暮らしたかったかな……。

それに言い忘れていた事がある。

「貴方に出会えて人生、楽しくなったよ。 ありがとう」

そう夜空に広がる数多の輝きを見つめながら、私は笑った。

イングラシア王国 81. 隠密と入国

「あそこはアトランティスの首都、ポセイドニス？」
「イングラシアでやす旦那」

リムルと一時分別したクラフターは、地下を元気に掘り進めていた。

先頭は地図を左手に、右手にツルハシ、時にスコップに切り替えて掘り進む。

後続は松明を付け照度が下がるのを防ぐと同時に先頭以上に座標位置に気を付けている。

「なんにせよ凄い都市だ。ロードオブザリングみたい」

「よく分からないが、魔国も凄いじゃないか」

「ありやファンタジー要素が無いから駄目だ。アイツらの道具は原始的で、その癖魔法みたいな事をしているのに様式は何故か現代風！

夢も希望もないし救いも無いんだよ!？」

「皆が皆じゃないよ?」

「そうだな、SFを地下に作っているしな!」

「え、えと……国を繋ぐ道中には楽しいげな巨大絵画があるじゃないのお」

「冒険者用の施設が建て難くなるので許さない」

「……撤去が必要なら、私から伝えておくから」

目標は円形都市への侵入。

ブラマイ系において珍しい1列隊形が続く。基本的に1人で松明もツルハシもスコップ作業も済ませられる創造主だが、今回は密入国が目的だ。

危機管理の観点から見て侵入路は複数か1つかで軽く議論して、1つになる。

その為、この様に1列組んで都市を目指しているのだ。

面倒だが仕方ない。穴の数だけバレやすい。

発見されたら掘り返されそう嫌だし、元を辿られて駅を荒らされても困る。

掘って掘り合う関係が許されるのは創造主同士の戦闘時くらいで勘弁して欲しい。

「そんな彼らでやすが、どうやって入国する気でやすか？」
「考えるのも悍ましい」

我々に非は無い。故にこのような入国をされても非難される謂れなし。

仕方ないね、とクラフターは開き直った。

「穴をひたすら掘って領土圏に入るって」

「無謀よお」

「地下鉄見て、まだ言える？」

「彼らはそれが”普通”なんだよ」

「すんません」

「お前らが謝る必要は無い。謝らせたいのはアイツらだ」

いざとなれば各々がその辺から潜れば良い。

退路が潰れても作り返すのがクラフター。

どうせ駅や線路の座標は変わらない。それ目掛けて進めば合流出来る。何も問題無い。

もし破壊されでもしてたら、やり返す。我々に先制攻撃して来る時点で慈悲は無い。

「地中から出て来ても騒ぎになる気しかない」

「最悪、全力で無関係者を装うでやす」

「合流しようとする筈だから無駄だぞ」

「……既に西方聖教会の敵かも知れない」

何にせよ、戦闘は本望ではない。

区画分けの為に設けられている大規模水路の底から侵入する。

水底ならば発見され難い筈だからだ。

その後は装備一式を外し、透明化ポーシヨンで地上に浮上。

そうして街中を闊歩。 シズ達と合流予定。

「ナニソレ?」

「唯一神ルミナスを拝めるルミナス教の組織なのよお」

「宗教か。 俺には関係ないな」

「いや気を付けた方が良くいぜ旦那。 魔物の殲滅を教義としているか

ら、正体がバレたら聖騎士団の討伐対象になっちまう」

「彼ら是对魔物のエキスパートなんでやす」

「なんてったつけ……聖騎士団の団長」

地図を見た。

よし。 この上だ。

現在地が水を示す青色と自身を示す白印が重複しているのを確認。

するとクラフターは一気に階段状に掘っては上り始める。

後続は看板や土ブロックを用意。 来たる水流止めに備えた。

「……………ヒナタ。 ヒナタ・サカグチ」

「そうそう」

「……………シズさん?」

やがて水が噴き出てきた。

流されるも、すぐさま看板やら梯子やら土で水流を止める。

松明が何本か流されたくらいの被害に留めた。 この手の事は慣

れているクラフターだ。

横着せず冷静に対処すれば良い。溶岩もそうだ。

かつての新人の頃とは心構えが違う。流され溶かされ全口ストした経験は無駄にしない。

「あ、あー……でも魔物の殲滅が教義なら、アイツらは教会と敵対しないんじゃない？」

「見た目が人間でも明らかにヤベエ奴なら捕まえようと思ってくると思うでやす」

「というか既に騒ぎを起こしてるらしいじゃないのよお」

「やることなす事、普通じゃないから魔素の有無関係無しに魔物認定してる可能性はあるぜ」

「ええ……」

装備を外し透明化ポーションを飲み透明化。浮上。効力が切れる前に潜伏先を考えつつ、シズ達を見つけねば。

「……で、入国審査の為に門まで来たが」

「警備の数が多いね」

「この分だと内側も厳しそうでやす」

「おのれアイツら！ 助けたいのか妨害したいのかどっちだよ!？」

「悪気が無さそうなだけに余計タチ悪いのよお」

「仮面をすっかり被っていてね。魔素が漏れたら気付かれるよ」

こうして創造主は遂に入国を果たした！

念願成就の瞬間である。

歴史と秩序は常に壊れている……いや、変化している。作り変えられているだけだ。

なんなら新規参入に優しい世界であるべきだと創造主は天を仰いだ。

「入国審査を突破した後のの方が難しそうだ」

この国は排他的思考でいけない。

もっと見聞を広め、常識の殻に籠らない事が肝要ではないだろうか。

少なくともこの国の都市は立派なのだから、我々と意見交換しても良い気さえする。

そう思いつつ創造主は水中に簡易拠点を建設した。

何にせよ行動しなければ先に進めないのだから。

82. 都市と散策

「建築物が高く、ショーウィンドウもあるな」

蠱惑の大都市、i n イングラシア。

我々は改めて凄い場所に立っている！

息すら詰まる心魂を揺さぶる光景に、創造主は歓喜し身を震わせた。

遠方に聳える荘厳な城に、下方この場に至るまでの広大な面積を造形の良い建造物が建ち並ぶ。

その感動たるや凄まじい。

腰が勝手に前後に激振し、溢れんばかりの悦びを享受し、腕と首も闇雲に振りまくる。

「旦那のトコとは違うけど」

「いや凄い。造るならコッチにして欲しかった」

内なる衝動を表現する他無い。

村人によっては淫靡行為に見える卑猥な表現を思わすそうだが気にしない。

ソレをいつも通り公衆の面前で平然と行う彼等。

だが幸いな事に透明化の恩恵で誰の目にも見えていない。今なんて装備が統一された武装村人の背後で腰を振っている同志がいるというのに。

「——例の人型集団は？」

「いや見ていない。だが油断するな。常に近くにいるものと思わねば」

「そうだな」

気を付けよう。

腰を振りながら漠然と注意した。

それにしてもやはり、とクラフター。

他者により創造された都会への立ち入り。

細部まで行き届いている場所ほど心躍るのは建築家としての性だ。

遠方からでも分かる荘厳な城だけでも感激ものだったが、己の足で立つ光景とは上空や地図の全体像とは全く異なる感動が存在するものだ。

計算された計画的な都市設計のみならず、内部に秘める美しさが見て取れる。

是非近くまで赴き、その外装及び内装を思う存分堪能する所存である。

……いや、今はシズだ。

冷静にならねば。　つい己を見失った。

「アイツらはもう入国したのか？」

「警備も厳重でやす。　していたら直ぐ騒ぎが起きると思うでやすが」

「町が広いから、直ぐに気が付かないかもお」

「シズさんはその辺、分からない？」

「うーん……分からないな。　彼等は遠方の仲間とも思念伝達が出来るみたいだけど、私は彼等に対して出来ないの」

「俺らとは違う原理なんだろうな、ソレも」

ここに来て問題が浮上。

合流どうしよう、と。

ここに来て痛恨の失敗に、クラフターは眉間に皺を寄せてしまう。シズとの待ち合わせの仕方を決めておけば良かったと。

見知らぬ土地なら尚の事。　我々は遠方の同志にも、ある程度意志伝達の術があるがシズは曖昧だ。

仲間とはいえ我々と異なるのだから仕方ないのだが失念していた。

後悔先に立たず。

「旦那、取り敢えず宿に入ろう。これだけ広い都市だ、慌てても仕方ない」

「おう……このまま行方不明になって欲しい」

「リムル」

「冗談だよ。ただ問題を起こされる前に首根っこは掴んでおきたいが」

クラフターは取り敢えず路地裏に入ると、建物の側面に梯子を掛けて登ってみる。

見渡す為だったが、やはりというか湧き潰しがなっていない。どこもそうなのか。

衝動で松明を刺してしまったが、逆に一重に創造主の強靱な精神力が成せた業だ。

バレるかも、という恐怖に怯えてはならない。

いつまでも闇を打ち払う事が出来ないのではシズ達も救えまい。

謎理論だ。自己責任という言葉で罪悪感を誤魔化していると指摘されたら否定しない。

「――5名様ですね。お部屋は何部屋をご用意いたしましたしょう」

「2部屋で」

松明を屋根に刺しつつ移動する。

移動しつつ周囲を見やる。町に光を灯しつつシズ達を見つけねば。

「なんだ？ 少し明るくなってきた？」

「お、おい屋根を見ろ！ 松明が立てられていく！」

「幾つかは宙に浮いて動いてるぞ!？」

「まさかヤツらか！」

「だが姿が見えないぞ!？」

早速バレた。

下で武装村人が騒いでいる。

だが気にせず松明を刺していく。武装村人を数多警邏させる前に、闇を打ち払うのが先決ではないかねと提訴する。

「結界があるというのに!？」

「魔力感知に引っかからない!」

「やはり人間……いや、そんな筈は」

「松明を立てまくる意味が分からん!」

「儀式か!？」

「だとしたら止めねば! 集団魔法や詠唱が始まっては遅い!」

「だがどうすれば!？」

「松明を外せ! それが鍵かも知れぬ!」

とうとう矢やら見えない投擲物なる物が飛んでくる。

が、見えない我々には攻撃を定められないらしい。虚しく空を切る。

代わりに松明を射抜いている様に見えるが。

「駄目です! 松明が外れません!？」

「何故だ! 魔力も無いただの松明だろう!」

松明は手や水流で撤去するべし。

弓矢で撤去回収出来るなら、我々も楽な場面はあった。使用済ブラマイ通路とか。

「くっ! 屋根の上だ、魔法弾も撃ちにくい」

「直接登るしかないか」

「それより先頭の、なんだ……宙を浮いて移動している松明辺りを狙

え！　恐らく透明化している下手人がいるのだ！」

今度は此方に攻撃が飛んでくる様に。

慌てて手ぶら状態になり、屋根伝いに遠方へ逃げた。　矢が刺されば場所もバレて透明化の意味を成さない。

性質上、防具無着用だから余計に危険だ。

仕方ない。　松明は諦めてシズ探しに集中しよう。

というか最初からその筈だったのだが、はて。　我々は何か間違えていたか。　首を傾げるも答えは出ず。

代わりに元々求めていた答えのヒントがやってきた。

「外が騒がしいでやすな」

「なんとなく迎えに行けそうだけどお」

「旦那、行かなくて良いのか？」

「いけない。　もう牢屋は嫌なんでね!？」

「……私の知らない所でも苦勞してたんだね」

今、聞き覚えのある声が聞こえたのだ。

夜の闇が迫る中、追手を撒きつつ周囲の探索を開始。すると、どうだ。

リムルが窓に頬杖をつけて溜息を吐いているではないか。

「はあ……アイツらも大人しければなあ」

よもや広大な都市で直ぐ見つかるとは。

幸先が良い。

クラフターは嬉々として建物の屋根に立つ。　そこから視点を下にやる。　目標はこの下だ。

どうせ透明化も切れるし丁度良い。

シルク付きダイヤツルハシを振るう。

それで足場の屋根を破壊。　その穴から部屋にダイレクトアタツ

クをかます。

「うおおおッ!?!」「きゃっ!?!」「ッ!?!」

砂埃に降り立つ創造主。

悲鳴も気にせず、素早く上の屋根を元の素材で修復。これで良し。

「何事でやすか!?!」

「大丈夫か旦那!?!」

「大丈夫だ……アイツらがダイナミックに合流しただけだから。迷惑な方法で」

「って、女子は着替え中よお!?! 早く皆出てって頂戴!?!」

「あべしっ!?!」「この仕打ちッ!?!」

合流早々不思議な事が起きた。

トリオの内、華奢な村人が残り2人を叩いて部屋から追い出し始めた。

2人はハアンと鳴きながら締め出されてしまう。可哀想に。ナニをしたらそんな事に。

「まあ、お前らしいけどなッ!?!」

一方、リムルは問答無用で我々に飛び蹴りを喰らわしてきた。出た声はウオッだったが、我々もハアンと鳴きたかった。

83. 若人と面談

合流してから翌日。

クラフターは当初の予定を果たしても尚、燻る不満があった。

原因は知れている。行動制限だ。元よりこの手は苦手な我々だ。抑圧感は否めない。

「助けに来てくれたのは嬉しいけど、騒ぎを起こしちや駄目だよ」

等とシズに注意されてしまったばかりに。

屋根だつてシルクタッチを心掛け直したのだけどなあ。

事松明に至っては褒められてこそすれ、責められる謂れはない筈だ。

「その場所、その国のやり方があるの。貴方達もそうであるように」

真面目に論されては頷くしかない。

最も透明化の所為で見えていないだろうが。

ただこの距離だ。伝わるものは伝わる。

「……アイツら俺らの近くに居るの?」

「いるよ。影や足音に気を付けければ、スキルが無くても把握出来るはず」

「逆にスキルに頼って探すのは難しいか」

「場合によるかも。熱源探知とか、それこそ音や影に絡むものであれば……」

「取り敢えず魔力感知や結界は駄目そうだ」

しかし何処に向かっているのだ。

なんととはなしに行動を共にしているものの、行く先に何が待ち構え

ているのか。

事と次第によっては抜剣の事態だ。

海底神殿やネザー要塞に挑む面持ちになる。

「ギルド本部に向かっているの。 そのの1番偉い人、自由組合総帥（グランドマスター）のユウキに会いに行くの」

親分、つまりボスか。

討伐対象なら容赦しない。

「ただ話し合うだけだよ。 そんな物騒な事にはならないから……見守っていて」

相分かった。

それでも警戒。 最悪は助太刀する。

透明化もどこまで通用するか分からないが、出来る限り側で守ろう。

やがて立派な建物の前に来た。

如何にも、といった様式だ。

「これまた立派な建物だな」

探索したい衝動に駆られるが我慢した。

松明だつて刺すまい。 また攻撃されても困る。

「……大丈夫」

代わりに透明化ポジションを再使用。

護身用のノックバックエンチャントを施した木剣を、直ぐに抜剣出来る位置にスロットしておく。

攻撃そのものが通用しなくても、吹き飛ばせる自信がある。

それ故のダイヤではなく木剣だ。
コストの問題もあるが、攻撃がそもそも通用するかも分からぬ。
ダメージ量の高い剣を振り下ろしても意味がないなら、こうするべきだ。

ミリムがそうであったように。
そうでなくても殺して良いかどうか分からない村人相手ならば、峰打ちの意味で低威力の剣を使用する、という意味合いもある。

「……話し合うだけだから」

シズが言い聞かせる様に再三語る。

或いは己自身に対して。

我々とは真逆に不安そうだ。

「シズさん、俺だけで行こうか？」

「ううん、私も行く。無事な姿を見せたいし、子ども達の事は私の問題だから」

シズ空元気。

クラフターはまたかい、と首を振りつつ笑う。

気負うな。普段通りで良いと我々は云う。

仲間だろう。リムルは……悪食な所や荒らし誘導は時々引くが、それでも仲間に違いない。

皆、シズを助けたくてこの場に立っている。

「あまり気負う事は無いさ。俺やみんなが助けるから。問題児のアイツらも……一応仲間に違いないし。さあ行こうシズさん、教え子達に会うんだ、堂々していれば良い」
「うん……皆、ありがとう」

シズの緊張は幾らか解れた様子。

良し。改めて決心を固め、我々は建物へ。
と、臨戦態勢を緩める創造物を目の当たりにしてしまった。

「マジか、自動ドアかよ」

出入口はなんと両開き、それもピストンの様にスライド式のガラス製自動ドアであったのだ。

おお。

これは感動ものだ。

我々も自動ドアはRS回路やピストンを用いて作る事はある。

だが着目すべきは感圧板やスイッチの類も無しに開閉する点だろう。

日照センサーの類だろうか。ワイヤー類か。

いや見当たらない。

或いは隠蔽施工されているだけか。

是非とも解体して仕組みを解明したいが……我慢だ。今はシズ

だ。ここは敵地である事を忘れてはならない。

「ようこそ。 本日はどのようなご用向きですか？」

「あ、ああ。 グランドマスターに会いたい。これが紹介状」

「確認して参ります。こちらにて少々お待ち下さい」

「あ、はい……今の俺は夜の店でのゴブタと大差ないな」

「……………夜の店？」

「ナ、ナンデモナイヨ？」

今リムルがちよこんと座っている椅子も気になる。

シズも今述べていたが、これは夜の店で見た椅子に似る。アレも

高価そうであったが、これも高価に見える。

羊毛と組み合わせればクラフト出来るだろうか。難しいか。

だが家具のバリエーションが増える事は我々も求めるものだ。

内装あつてこそその建物とも思う。つい外装に拘りがちだが、内部

もしつかりしてこそ愛があるといえよう。

現にこの玄関口も随分立派だ。最奥には高価な雰囲気のカウンターがあるし、そこに至るまでの道は横幅の広い絨毯が伸びていた。クラフターは満足気に頷いた。こここのクラフターは色々分かってる。

「大変お待たせしました」

そうこう考えていたらハアンが響く。

見やれば耳が長く、胸部が膨らんでいる村人が鳴いていた。

これまた夜の店で見た村人に類似する。そういう種族なのだろう。今更に驚かないが。

そんな村人だが、向こうから我々は見えていない筈。だからリムルとシズに鳴いているのだが……いかな。

気を引き締めねば。建造物や内装に見惚れて透明化が解けてバレましたじゃ笑えない。

「リムル様とシズ様、ここからは専属の秘書である私のご案内します」

親分の所に案内してくれるのか。

リムルとシズは耳長について行く。

我々も少し間を置いて尾行。戦闘なら兎も角、隠れんぼとは。

これまた滅多にやらない。懐古の感覚だ。ついついスニーク姿勢になってしまう。

遊びではないのに、つい楽しんでしまう我々は罪な人生を送っているものだ。つい微笑んでしまう。ついでが多い時間である。

「こちらの部屋でお待ち下さい、では」

部屋に案内され即、扉を閉められてしまう。

間髪入れず見渡した。ボス部屋にしては良い内装だ。こんな

所で戦闘は展開したくない。

「あ、どうも……素気ない人だな……」

ここも中々良い内装だし。

家具や本棚を置いても圧迫感の無い空間。

モザイク風カーペットも高評価だ。

「……グランドマスターが敵になれば魔国連邦が人間に認められるのは嬉しいだろうな」

「ちゃんと話せば分かってくれるよ」

「先生」が言うんだ、俺も信じよう……うん、真の姿でいくか」

「クラフター」は……任せるね。信じてるから」

相分かったと頷く。内装鑑賞続行。

帰ったら内装や建築様式を取り入れよう。

「お待たせしました」

また新手のハアんだ。

見やると若そうな村人が立っている。

「僕がグランドマスターの神楽坂 優樹（ユウキ・カグラザカ）です。

僕のごときは気楽にユウキと——うわスライム!?!」

今度は驚いている。目線を追えばリムルがスライムになっていた。無理もない。知らない人が見たらそうなる。

変幻自在の水色スライムだ。

我々も初見以降も驚愕させられてばかりであった。

この場でスライム化した理由は分からないが、多分アレだ。政治

絡みだ。然しもの創造主も察してくるものがある。

分からない時は取り敢えず政治だろう、という風潮もあった。

真に理解出来ずとも考えず察する事も時には大切だ。アレも政治、コレも政治なのだと。

「初めまして。テンペストの盟主リムルⅡテンペストという。俺のこともリムルと呼んでくれ。そして……」

「久し振り、ユウキ」

「シズ先生……ッ!?!」

驚きのハアンを連呼する若人。

ボスにしては迫力に欠ける反応だ。先程から今に至るまでそんなのだから、ずっとこの調子かも知れない。

だが痲癩起こして襲われたら堪らない。抜劍の姿勢と心掛けはしておかねば。

「フューズに聞いてはいましたが、無事で良かった……」

「スライムさん……リムルが助けてくれたの」

「そうでしたか。何と礼を言って良いのか」

「いや俺は……大した事はしていないさ」

今度は安堵しつつ会話を始める。

リムルは何処か言い淀みつつ話している様子だ。

探りの思考をしつつ故か。迂遠な言い回しもしているとみた。

アレもソレもコレも政治。

正直に述べる。面倒臭い。

幾度と思ひ辟易しては仕方ないが……。

我々の世界にまで侵食しない事を切に願うのみ。

正直者は損をする。誤魔化しも苦手。だがまだ飲み込める。

一方で嘘は嫌いな創造主だ。政治とやらが嘔吐きなら、いよいよ好きになれない。

「しかしリムルさん、一体どうやってここに入ったんです？　この建物の入り口には結界があるので魔物はいれないはずなんです」
「ああ、自動ドアの前のセンサーか。ひとつはシズさんから借りている仮面。これでオーラを抑えている。それから人に擬態した」
「……えっ？　なっ!？」

また驚愕のハアンを上げる若人。
リムルがシズに擬態した事への反応だった。
我々は見慣れた事も、他はそうではない。だから見せて反応を楽しんでいるのだろう。
リムルは驚かすのが好きなスライムだ。我々もそうであるが。
この共通点に関しては共感出来た。嫌いじゃない。

「その姿は……」
「シズさんを食……真似てな。普通にしていれば人間に見えるから」
「成る程、実に巧みな擬態と言えます。警備が強化されている中、バ

それに比べて、どうだ。

若人は今や疑念の眼光をしているではないか。

好きにしようと思うが。

それと同様に我々も好きにするから。

どんな目を向けられようと我々は我々であり其方は其方だ。

無理に仲良くなる必要は無い。大切なのは上手く付き合う事だ。

同志の趣味趣向も千差万別。故に喧嘩もする。時に荒らしも生み出す。

それでも今日まで発展して来られたのは、押し付け合い過ぎない事に起因する。

この世界もそうだ。人魔がいて国がある。

力の差はある様に思えるが、それでも今すぐ蹂躪し合う間柄ではない。

「……シズさんとの出会いから話そう」

「聞かせて貰いますよ」

それぞれの道を歩めば良い。

形は他者と違って良い。自己で意思決定出来るのは良い事だ。

ただ荒らし行為は処す。度し難いので。

「……………という訳だ。俺はシズさんの教え子を救うべく、一緒に来たんだ。剣があるとはいえ、イフリートの力を失ったのもあるからな。護衛の意味や補助の為に行動している」

「リムルの言っている事は本当だよ」

「……シズ先生が言うなら本当でしょう。しかし簡単な話ではないですね。信じ難いというよりは受け入れ難く……」

「それに……俺は『悪いスライムじゃないよ』」

「ぶふっ!?　　そ、その言葉……」

若人が突然吹き出した。

感情豊かだ。結構。演技だとしても悪いとは思わない。

「元ネタを知っているよ。某国民的ゲームのだよな」

「もしかしてリムルさんも日本人？」

「そうだよ。信じて貰えないなら、君が望む物を出そうじゃないか」

今度はリムルが本を吐き出す。

それ自体も今更に驚かないが、注目すべきは別にあつた。

「これは!?　　はがぬの錬金術師の最終巻!」

「漫画かな?」

「そうだシズさん。現代日本の素晴らしい文化のひとつだよ」

表紙には絵が描かれている。

クラフターは首を傾げた。

アレか。絵本の類か。

シズは今『漫画』と述べたが。

エンチャント本の雰囲気はないが、内容が気になる。

手に取り読みたいが、先に若人に取りられた。

「もう読めないと思っていたのに！」

「お望みとあらば、他にも出そうか」

危なかった。

透明化を維持しているとはいえ、流石に本を取ったらバレル。

隠密行動は苦手だ。せめて装備品も全て透明化すれば良いのに。

村人の中には出来る者がいるらしいから、その点においても我々は遅れている。

かといって悲観はしない。出来る事をするだけだ。

「といっても紙のストックが無くてな。布に転写するけど我慢してくれ」

「紙!? 紙ですね! ありったけの紙を今すぐ用意します!」

若人の一喜一憂も飽きてきた創造主は、申し訳程度に部屋を品評した。

が、もう終えている様なものなので漫画について注目してみる。

直接手に取れないので、若人の背後から開かれた漫画とやらを見た。

ふむ。

文字より絵が大半を占めている。

その点だけ見れば絵本形式だ。

しかし相違点として、大中小の不規則なグリッドで絵が区切られているのではないか。

文字が読めないので絵から想像するしかないが、これは絵本の発展型なのかも知れない。

1枚のページで、より多くの絵が見られる訳だし。

本の厚みや大きさ、絵の温かみも知り得る絵本と異なる。

ともすれば、濃厚な物語を効率良く描く手法とも取れる訳だ。

逆に絵に色彩が無い。大半が白黒だ。それでも情景が伝わるのは凄い。

是非持ち帰り、研究したいところだ。あいやシズ越しにリムルに頼もうか。

「ああ幸せです。 師匠と呼ばせて下さい！」

「お、おう」

「漫画って凄いなだね……」

我々も負けていられない。

この世界から学ぶべき事は数多ある。息を整える暇もなく与えられる新技法。

嗚呼、生きているとは素晴らしい。驚きの連続だ。我がクラブ

ト道は栄光に輝いている。

「……さて、そろそろ本題に入ろう」

「そうですね、僕とした事が。やはり帰還方法を探しているとか？」

「いや、シズさんの心残りを解決しに来た」

「……そうですか。シズ先生が同席している時点で察するものはありませんでしたが」

「簡単じゃない事は分かっている。シズさんから色々聞いたからな。だが決めた事だ」

「分かりました。そこまで覚悟を決めているのでしたら、託してみようか……ん？」

あ、ヤバい。透明化切れた。
管理を怠ったのが原因だった。

「あつ」「ああ」

一斉に見られた。

シズは気まずそうに此方と若人の顔色を見て、リムルは疲労感が押し寄せた様な声を発する。

「……何となく違和感はありましたが。やはり誰かいましたか。
最近噂の人間集団の一部ですね?」

いけない。若人の警戒の目が痛い。

取り敢えず木剣を右手に持ってみる。ついでに左手で握り飯を食う。腹が減っていた。

「あ、あのねユウキ。悪い人じゃないんだよ?」

シズが釈明。

こういう時、通訳がいて良かった。しかし若人の態度は若干和らぐに留まる。

「シズ先生が言うならそうなんでしょうね。ですが得体の知れない者に違いありません。人間とはそういった魑魅魍魎を恐れる生物です。分かりますよね?」

「……分かつてる」

「既に彼等は騒ぎを何度か起こしています。悪意は無いにせよ、容認し難い事。西方教会は魔物扱いにして敵認定しています」

なんだか空気が重い。

そこに一石を投じるはリムルだ。

「ユウキ。 シズさんを助けたのはな、本当はコイツらなんだ。 俺は手伝っただけだ」

「えっ?」

「イフリートを失うと同時に、シズさんの気力は尽きた。 だけど健康体となって”此方側”に還ってきたんだよ。 それをしたのはな、コイツらのお陰だ」

「……一体どうやって?」

「さあな。 それは俺も分からん。 コイツらも詳細は分からないらしい」

何とも形容し難い顔を向けられた。

どうしたものか。 取り敢えずお辞儀しておく。

「はあ……分かりました。 謎で危険な存在……ですが、リムルさんやシズ先生が味方する人達。 なら僕も協力するしかないじゃないですか」

「ユウキ……ありがとう」

「ですが出来る限り見張って下さいよ。 取り返しのつく事とつかない事があるのですから」

「勿論だ。 とうにしている」

「子ども達の件も頼みます。 自由学園への手続きはしておきますので……」

話は纏まった様子。

良かった。 クラフターは胸を撫で下ろす。

「創造者……いや、”創造主”含めてね」

一瞥された時、妙な感覚があったが。

84. 信頼とモコモコ

「リムルさんはシズ先生と共にS組の先生になって貰います」

未だに会話は続く。

時計を見る。もう夕暮れだ。急にソワソワしてくる。

サバイバル生活から続く危機感からだ。

「シズ先生が辞退して以来、後任のいないクラスがあります。そのクラスの生徒が例の5人の子供達です」

「後任がないってのはどういうことだ？ 学校として無責任すぎるだろ」

ここまで武装村人が展開する大都市だ。

モンスターは滅多にスポーンしないだろうし、出没しても即討伐される。

それでも頼り切りには出来ない。己の安地は確保したい。

照明も十分とは言えないし、アイアンゴーレムも見当たらないのだから。

「返す言葉もありません。ですが英雄シズエ・イザワの後任というのは荷が重く……」

「比べられちゃ敵わんってことか？ だからってなあ」

「引き受ける者がいなかった理由は、それだけではないんです」

なら間借しよう。ベッドはある。

いや待て、決断には早い。

取り敢えず耳長村人が運んで来た丸くモコモコした食べ物を食し落ち着こう。

口に入れる。甘味が幸福感に置換されていく。

美味しい。外の薄皮を破れば甘い白液が溢れ出し、口一杯に幸せが広がった。

また新たな発見をしてしまった。是非クラフトのレシピを知りたい。

食のレパートリーが増えるのは大歓迎だ。

「リムル、私が話した事覚えてる？」

「寿命の話か」

「うん。教え子の推定余命は1、2年。そうなってしまう理由は……」

「簡素化された召喚術式。その弊害……」

「そう。この方式だとスキルを獲得していない子供たちが喚ばれてしまうの。そして本来スキルへ還元される大量のエネルギーは行き場をなくし……」

「やがてその身を焼き尽くす、か」

ここでクラフトした料理だろうか。

いや違うか。どちらにせよ今、この創作物を搜索する訳にもいくまい。

再度透明化すれば良いのだが、シズの側をホイホイ離れる気が起きない。

そこまで本来の目的を放棄出来ないのだ。

何故我々が遠方の国家にまで出張ったか、何故この地に起立しているのか忘却してはならない。

「どうやら把握している様子ですね……そうです。不完全召喚された子供達は、その殆どが5年以内に死んでしまいます。シズ先生の後任がない理由がお分かりでしょう。皆、責任を持ってないので。あの子供達は………理不尽に喚び出され、死を目前に控えた勇者のなり損ないなのですから」

「少し違うよ」

「え？」

突然のシズによる否定発言。

顔を上げる創造主。

顔一杯に白液がついた不快感も忘れ、シズを見た。いつになく真剣で、されど笑顔だ。

実に力強い。脆弱な顔をしていたシズは、とうに死んでいる。

「あの子達は死なせない。その為に戻ってきたのだから」

「ですが解決策は……」

「俺もシズさんに同意だ。それに」

「……それに？」

「コイツらがいるからな」

また皆して此方を見る。

モコモコを食べた事を責めているのか。先程の耳長にも恨めしそうな視線を向けられたし。

だとしたら伝えてくれ。思いつつも創造主はお辞儀した。低姿勢になれないほど頑固な生き方はしていない。

「理不尽で、意味不明で、制御不能で、理解困難で、無邪気に好き放題して俺らを困らせる連中だけ……シズさんの時の様に、肝心な時には側にいて救ってくれる。そんな存在だと信じているから」
「私も信じてる。だからこそ、ついてきて欲しいと願ったの。皆と一緒にならきつと……って」

微笑まれた。許してくれたか。

「……問題を把握しながら、そこまで信用されているとは。弟子である僕も間に入る余地は無さそうですね。正直、羨ましい限りです」

「ところで話変わるけどさ。ユウキとシズ先生は師弟関係だったんだろ？　どんな事していたんだ？　隙あらばどこからでもかかって来いみたいな？」

「……朝布団を引つ張り返されて起こされて、ご飯は質素節約から肉は無し、下着は自分で洗う件を尋ねられ、部屋を掃除された時はベッドの下にあった本を机の上に纏められて……あ、すいません……涙が」

「お、おう……泣いとけ」

「そんなに厳しい事だったかな……？」

とはいえ。これはいつかモコモコをクラフトするか、代用品を渡そう。忘れたら御免。

85. 団欒と未来

「突然だが、ここまでの案内ありがとな」

若人の建物を後にした我々はトリオと合流。
その後の夜食の席でリムルがハアンと鳴く。

相手はトリオだ。

「……クビ?」

「違う違う! そうじゃねーよ!」

「あのね、リムルと共に教師を務める事になったの」

「そんなワケで旅は中断だ」

シズの話から予想して、今後は教え子の教諭をやるらしい。

良いんじゃないか?

我々にもそういった者はいる。

更に言えばクラフター皆が教師とも云える。

新人教育然り。 建築、RS回路然り。

シズ達が何を学ばせるかは知らないが。

我々も助教しよう。 焼鳥やスープを食しながら思った。

あわよくば、新たなマインクラフターの誕生だ。

「教師でやすか?」

「大丈夫なのか?」

「無茶しないでねえ」

「まあ何とかなるさ。 シズさんもいるし」

「この人達もいるからね」

シズに微笑まれた。

反射でお辞儀する。

また食事に関する説教を喰らうと身構えた

が違って損をした。

「いや、その人達も行くんでやすよね？」

「子供達が変な事を覚えなかなあ」

「だ、大丈夫だろ。 そう簡単に真似出来るモノじゃない」

「万が一の時は私が止めるから」

またシズに微笑まれた。 今度は悪寒がした。

一体なんだったのだろう。

何か悪い事をしたのだろうか。

食器の使い方が、皿の持ち方が、食い方が。

「旦那、あと、その……彼等もあるが」

「どうしたカバル。 コソコソ話して」

「……シズさん、学園では鬼の教導官と呼ばれていたらしいぜ」

「いや嘘だろ。 シズさんって優しくて追いかけることかお絵描きをさせるイメージが」

「女教師に夢見過ぎだって旦那」

「………なんで俺のシズさん像、壊すんだよお」

「ちよつ、泣くなよ旦那!?!」

一方でリムルはハアンと鳴き出した。

相変わらずトリオといると何かしら騒がしい。 楽しくて良い。

「ちよつとカバルウ、何話したのよお」

「旦那を泣かすって、どんな話題でやすか」

「駄目だよ、仲良くしなきや」

「いやいや！ ちよつとした世間話ですよ！」

「世間話なのに、なんでコソコソするのかな？」

「ない事？」

私には聞かせられない

「シズさんの笑顔が怖いツ!?!」

シズの微笑みがトリオに向けられる。
今だ。食糧を掻き込む。

取られる心配はしていないが、やはり食事は好きなように食べたいので。

「ま、まあまあ。　じゃあ教師生活をするにあたって、住む所はどうするんだ？」

「ユウキが手配してくれた。　自由学園にある寮の空室に部屋を借りる」

「2人暮らし？」

「いやいやまさか。　別室だよ」

しかし何を教えよう。

やっぱ木こりか。　いや採掘か。　釣り？

シズみたいな例もある。　ここは剣？

エリトラ飛行は……早すぎる。

何にせよ現地入りしないと分からない。

ストレージには一通りのツールを用意しよう。

「じゃあ暫くテンペストには戻らないのねえ」

「そうなるな。　連絡したり、時々帰ろうとは思うけど。　余裕が出来てからだな」

「皆、ここまでありがとう。　また一緒に冒険出来て楽しかったよ」

「此方こそ！　何かあったら連絡して下さいよ」

まだ食事の席だが、解散の雰囲気だ。

我々も食うのを中断してお辞儀しておく。

「おう。　また頼むな」

「寂しかったら呼んでよねえ」

「どうぞお元気で」

「呼ぶ時は遠慮なく呼んでくれよ。俺らも遠慮なく集らせて貰うんで！」

「……逞しくなったな、お前ら」

「ははは……喜んで……良いのかな？」

先んじて餞別を渡しておく。

今回は連邦でクラフトした酒だった。

そしたら喜んだ。

何よりだ。クラフターも笑顔で頷いた。

自由学園

86. 教え子と再会

「シズ先生が戻られて、皆も喜びます」

寝て起きた。つまり翌日。

トリオと別れた後、我々はまたも立派な建物へ赴いた。

そこは簡素化した城の風貌だ。横に平たい印象を受ける。土地は大きく使い、中々大規模建築に分類出来た。

「鬼の教導官にユウキ理事長紹介の補佐も加わり、正に金棒といったところですか」

「もう。その呼び名はやめて下さい」

「シズさん、一体何をしていたんだ……？」

今は建造物内。その外壁に沿う長い廊下をひた歩いた。先頭は此処の住民らしき村人だ。

ややふくよかな体型に対して態度に余裕が無い。

仕方ないとクラフターは思った。

徒党を組んで建造物に侵入しているのだ。武力行使していない

とはいえ、威圧感はある。

リムルとシズなんて何故か黒服だし。

「あの時と変わらずS組は此処です……ああつ、またあんな悪戯を！」

余裕のないハアンが廊下に響く。

視線を追えば、扉の隙間に小さな長方形アイテムが挟まっているではないか。

ナニか。砂や砂利の類か。重力落下式トラップの雰囲気だ。

「はははっ、可愛いじゃないですか」

或いはTNTの様に危険物かも知れない。

見たところワイヤーや感圧板は見当たらないが、扉に連動して発動する型の可能性がある。

「案内はこれで。ワシはここで失礼します」

「後は任せて下さい」

リムルは呑気だが、創造主は臨戦状態に。

幾多の修羅場を潜り抜けた猛者足る創造主だ。

ピラミッドや地下遺跡の件がある。死は眼に見える形に留まらない。

落下先の感圧板を踏み抜いてのTNT爆発。

シルバーフィッシュが潜むブロック。

或いは振り向いた先のクリーパー。ここも照度計算が怪しい。

「開ける時は気を付けて」

「そうだな。わざと引つ掛かりウケを狙うか、舐められない様に避けるか」

「ううん。そうじゃなくてね……」

経験から警戒心を露わに。

ブラフだな、アレ。

構えよ。本命は別だ。

対クラフター戦なら十分あり得る手法。

防衛優先。右手に丸石、左手に盾を装備した。

リムルはどうでも良いが、シズは守らねば。

「ちーっす、今日から君達の担任に――」

リムルが無防備無警戒に扉を開けた。
刹那。

「どおりやあああああつ！」

突如、子供村人が飛翔斬！

ジャストアタック狙い！

武装はエンチャント鉄剣、炎を纏う！

やはりか、どけ！

「うおっ!?!」

反射的に防衛行動。

判断は一瞬。行動は迅速に。

リムルに体当たりする様に視界から退かし、丸石の壁を素早く構築。
築。

続けて丸石から木剣に切替え盾を構えた。その間に秒で鎧を着込み耐火スプラッシュポーションを足下で割り次に備える。

「ちよ、やり過ぎ！ いや生徒側もだけど！」

リムルの非難の声を無視。

ストレージ把握、空間意識、間合確認。

体力満タン。満腹状態。金林檎はナシ。

全で一瞬、五感を研ぎ澄ます。

構えた木剣の先、姿勢は微塵もブレない。

創造主、歴戦の動き。

だが、ここまでしても死ぬ時は死ぬが。

我々は万能では無い。この非情な世界の裁量で生かされている。それを肝に銘じているつもりだ。

だからこそ残心の構えをするし、それでも手が届く範囲で人生を謳歌する。

その眼差しは鋭い。

今は守ると決めた者達の為に創造している。

その背中は岩盤より頼もしい。盤石の安心感だ。

「急に壁が!?!」

幸いな事に、相手の剣は丸石を一撃で破壊する程の威力は無かった。

クラフターの常識では当たり前の事だ。

低威力なら連撃しなければ壊れない。

だが世界は摩訶不思議な事ばかり。常識が通用しない。

特にこの異世界。かのピンキーストームが野に解き放たれている時点で色々ヤバイのだ。

「俺の剣がッ!」

「剣ちゃんの剣が折れた!?!」

「必殺技が防がれた!」

「詰めが甘いわね! 防がれたじゃないの!」

石壁の向こうで幼いハアンが聞こえる。

クラフターは作業台を設置。

石壁を加工してハーフブロックでトーチカを造り、向こうを覗き見た。

子供村人を5人確認。前情報通り。

この子達がシズの教え子か。

が、一応戦闘中なので隙間から弓矢を構える。

「相手が子供でも生徒でも敵なら容赦しない。

世界の厳しさと優しさは早々知るべきだ。

その前に殺されるのは御免だし。

子供だと侮れない。子供ゾンビの初遭遇時は戦慄ものであった。
ジョッキーマも。

「余命僅かなんじやなかったの？ 元氣いっぱい敵意剥き出し、学級崩壊してんじやん！」

「うんうん。いつも通り元氣でよかった」

「いつも通りなの!?!」

リムルは興奮し、シズは嬉しそう。

流石シズ。 余裕が違う。 リムルは見習え。

「そ、その声は……シズ先生!?!」

急に驚愕のハァン。

石壁を回り込み子供達が顔を覗かせる。

すかさずシズの前に立ち盾を構えた。 シズ狙いか。

現在、シズは非武装だ。 守らねば。 使命感。

「もう大丈夫だよ”クラフター”さん」

云われて構えをゆっくり解く。

シズが云うならそうなんだろう。

「し、シズ先生……ッ!」

「本物よね……? 嘘じゃないのよね?」

「うん。 本物」

「本当に本当!?!」

「本当に本当」

武装解除。

丸石をツルハシで撤去。

子供達は涙目だ。

……もう大丈夫だろう。　なんとはなしに。

「シズ先生ーッ!!」

子供達が一斉にシズに抱きつく。

シズはそれを受け入れた。　我々だったら土で上に逃れていた。
条件反射で。

しかしまあ。

泣いている。　わんわん泣いている。

よく見ればシズの目元も光り輝いていた。

我々はシズではない。　だから子供達とシズの思い出は想像出来
ても分からない。

作ったのは他ならぬシズと子供達なのだから。

「今までどこ行つてたのさあ!」

「見捨てられたかと!　二度と会えないかと!」

「もう……もう何処にもいかないで……!」

「急に出て行つて酷いんだから……!」

「でも信じてました!　必ず帰ってくるつて!」

久しい感動の再会なのは分かる。

リムルも我々と共に見やる。

仮面越しに感傷に浸っているのだろう。

……子供達同様、泣いているのかも知れない。

でも良いか。　嬉しそうだし。　我々含めた全員が。

「ごめんね、みんな……本当にごめんね……」

暫くシズと子供達の抱擁は続いた。

初日だしクラフトの教授は良いか。

落ちていた折れた鉄剣を拾う。
クラフターは人知れず直し、微笑んだ。

87. 学舎と子供達

「えー……俺の名前はリムルⅡテンペストだ。 シズ先生の副担任となる。 あとコイツらも」

落ち着いた後、自己紹介の流れになる。

仕切るはリムルだ。 隣にシズが起立する。 我々も真似て横並び。

子供達は正面に整列する机に着席。 傾聴の姿勢にクラフターは関心し頷いた。

「副担任、多過ぎでは？」

「ゲイル君、それはそれだ。 皆も積もる話があるだろうけど、簡潔に説明するぞ。 シズ先生は君達の為に旅に出て、皆を救う方法を探していたんだ。 その道中、俺やコイツらと出会い君達の話聞いてな。 協力する事にした」

「ということとは……」

「いや、まだハッキリと救う方法が分かった訳じゃない。 だけどキツカケは得たからな、こうして君達の前に姿を現したって事」

背の高い金短髪とリムルがハアンと鳴き合う。

クラフターも併せて頷く。 そうだ。 学ぶ姿勢は大切だと。 会話内容は分からんが。

続けてシズが声を上げる。 此方は聴き取れるので良い。

「みんな必ず救うから。 私がこの人達に助けられたみたい」

その件は現在進行形である。

シズは救った。 これからもだ。 今度は目の前の子供村人の番に変化しただけ。

取り敢えず修理した剣を返却しておく。
我々が精錬した鉄インゴットも使用したから、耐久値は上がった。
今度は石を斬り付けた程度で折れやしない。

「あ、直ってる!?! ありがとう!」

戸惑われる事なく喜ばれた。

ウム、と頷く。

連邦の村人も皆こうなら良いのに。 善意に対して最悪青筋を浮かべられるとか理解不能である。

「……まあ、なんだ。 コイツらは作る事にかけては並々ならぬ情熱があるんだ。 ただシズ先生としか会話が成り立たないみたいでな、他にも意味が分からない行為もすると思うが慣れてくれ」

「それ、大丈夫なんですか?」
「悪意をもって接しなきゃ大丈夫だ。 ケンヤ君みたいな事をしなきゃね」

「うっ……いやそれは……」

「ケンヤ。 もうしちや駄目だよ」

「……分かったよシズ先生」

ついでに先程の件を咎めるシズ。

躰は大切だ。 だが優し過ぎではないか?

我々の時は最悪半殺しの刑にするのに。 子供だから仕方ないね、と納得しておくが。

「剣は没収しないでおく。 しても新しくなるだろうし」

「そんな何本も用意出来ないって」

「そうじゃなく、コイツらが作って渡しそうだって意味」

「お金持ちかしら?」

「ユウキお兄ちゃんみたいな感じかな?」

「違う。 いやある意味そうかも知れんが……鉱物的な意味で」

だが先程の鉄剣はエンチャントの類が付加されていない。 にも関わらず燃えて見えた。

という事は初期シズのように自らが生み出したフレイムか。

村人独自の能力……それまた多様性に富む。 羨ましい限りだ。 我々は苦勞してエンチャントしたりドーピング強化するしかないから。

「急に窓辺で空を見上げてるよ」

「こういう奴らだ。 最初は慣れないだろうが、仲良くする様に」

「何かあったら私に言ってね。 言い聞かせておくから」

「し、シズ先生が言うなら安心だな！」

「そ、そうね！ ビシツと言ってくれるわ！」

「鬼だよお……悪魔だよお……」

「ごめんなさいごめんなさい……その時は私じゃ何も救えないから……」

「皆震えてる!? 何をしたんだシズさん!？」

時々寒気がする。

雪原バイオームでも氷河の下でも、高高度にいる時でさえ感じないというのに。

最近シズ独自のスキルだと疑っている。

初期の頃は燃える乙女だったのに。 今や氷の乙女。

「ところで、なんでシズ先生の仮面をリムル先生が付けているのですか？」

「ああ……街中に苦手な人がいてな。 借りて素顔を見られない様になっているんだよ。 そうだな、教室なら取っても良いか」

リムルが仮面を取る。

改めて並んでみると、やはりシズそっくりだ。
悪食なのは似てないが、寒気を覚えさせてこないところは良心的。

「なんとなくシズ先生に似てる」

「実は姉妹なの？」

「あはは、違うよ」

「いやしかし……中性的ですね」

「男なのか女なのか」

「先生なのになんで小さいの？」

「てか大人なのか？」

「とっちゃんぼーやじゃないのお？」

生徒が本調子を取り戻しつつある。

愉しげなハアンが室内に響く。 元気で結構。

「なにそれ呪文？」

「いい年なのに子供っぽいおじさんの事だよ」

「先生っておじさんなの!？」

「そういえばオツサン口調だよね」

「ああ見えて実は30代後半だったりするのよきつと」

「わははは！ キメエ！」

「……………」

リムルが蹲ってしまった。

震えている。 シズ的能力に当てられたか。

「あの……リムル先生大丈夫ですか？」

「……ちよつとだけ時間をくれ。俺にここまでのダメージを与えたのはお前らが初めてだ……」

「リムル、元氣出して？ ほら私も……ね？」

初日から涙あり寒気あり笑いあり。

実に濃縮された1日だ。

後はクラフトをスパイスにすれば完璧だ。

創造主達は皆を見て微笑んだ。

88. 模擬戦と結末

所変わって青空教室。

皆で広く何も無い敷地に移動する。

建築を今すぐに着工したくなるフラット具合。 クラフターは心を躍らせていた。

「シズ先生は知っているだろうけど、君達の実力を見ておきたい。

いきなりだけど模擬戦をして貰う」

「リムル先生が相手ですか？」

「それでも良いし、コイツらでも良い」

だが例により照度が足りない。 実習用の空き地だとしてもだ。

松明が気になるのか。 ならグロウストーンを地面に埋め込めれば良い。

設備投資のコストはあるが、それにしても夜が危険である。 ここで湧き出た怪物が周辺の住宅街に被害を与えたら責任問題に発展する。 マルチクラフターは詳しいんだ。

「ならあの人達と戦ってみたいな」

「そうだな。 俺の剣を防いだし」

「今なんて校庭に松明を刺してるよ。 儀式？」

「面白い人達！」

「リムル先生は後にしてあげる！」

「……あ、うん。 なんだろうこの差。 急に悲しくなってきた」

「ま、まあまあリムル」

よし。 取り敢えず松明を適当にばら撒いた。 これで直ちに影響は出ない。

実習で破損もあるだろうが、また刺し直せば良い。

グロウストーンはネザーで得られるが、松明の素材はこの世界でも容易に得られる。この世界の村人でもクラフト出来るだろう。

配慮も出来てこそそのクラフターだ。

「じゃあそれぞれ用意してくれ。一斉に攻撃しても構わん」

「リムル」

「大丈夫だって。シズさん、コイツらに伝えてあげて」

シズが声を掛けてくる。

「どうやらクラフトの時間らしい。」

「これから子供達と模擬戦して貰える？」

相分かった。二つ返事で頷いておく。

先程の不意打ちからして、子供達はソコソコ高い戦闘力を有している。

此方としても調べたい。出来る事と出来ない事を理解するのは大事だ。

松明だってレシピを知り得てなければ作業台の有無関係なくクラフト出来ない。

更に言えば興味を持たねば出来ない。松明を撒く行為に疑問を投げかけるのをやめてしまえば停滞するだけである。

「ありがとう。でも手は出さないでね。怪我させる事は駄目」

縛りを受けた。

だが頷く。防戦一方でも全然構わん。

剣ガード、盾、壁、回避も入れるなら幾らでもやり様はある。

いや待て警戒は強めよう。慢心は駄目だ。桃色嵐（破壊）と水

玉嵐（悪食）の例がある。喰らうのは勿論、見るのも御免なソレが。

「決まったな。 よーし、始めてくれ」
「よっしやあー! 先ず俺から!」

不意打ちの子が、またも不意打ちの如くハアンと叫ぶ。 かと思えば次には火の玉が複数飛んできた。 ブレイズか。 懐かしみを感じつつ、右へ左へぬるぬる動く。 火の玉の合間を縫い避けまくる。

初期シズ程の能力は無い様だ。 弾幕はあの時より薄い。 大人になつたら同等になるのかも知れない。

「うわっ、動き超キメエ!」

楽しくなつてきたら、ドン引きされて即墮ち終了。

いや跳ね返しても良かったんだぞ。 素手でも十分テニスは出来るんだこちらら。 タイミングさえ合えば。

ただソレをやると相手が怪我をするかも知れない。 シズとリムルに処刑されそうだから自制しているだけだ。 感謝して。

「大怪我しても恨まないで下さいよっ!」

今度は金短髪から大玉が来た。

大きいぶん、避け難い。 丸石を積んで壁を立てる。 相手から姿を隠したら、今度はスコップで真下掘り。

「そのくらいならっ!」

また前みたい地面の中に隠れると、これまたタイミング良く地上の丸石が壊れる音が。

「あ、あれ? 何処に行ったんだ!」

見た目相応に高威力であったか。取り敢えず真下に土を積みつつ青空の下に帰還。

「地面の中に隠れてたーッ!?」

また引かれた気がするが、感想を想う前に次が来たので対応せざるを得ない。

「ガルルルッ!」

狼みたいになった黒短髪が飛び掛かる。

動作は単純なので横に避けると、着地点の地面は軽く抉れた。

クリーパー被害より浅いクレーターが出来た。見た目より強そう
だ。

「グワァーッ!」

反転してきた。

クラフターは慌てず木のフェンスをひとつ使用。すると木の棒が地面に突き出る様に設置された。

困むためでは無い。大人しい動物ならその手法で良いが、動き回る相手には難しい。

ならばと取り出したるはリードだ。

再度相手の攻撃を回避したクラフターは、着地のタイミングに合わせて黒短髪にリードを取り付ける。次に素早くフェンスに括り付けた。

「ガッ……ハッ!」

リードの限界を越えようとして首がしまつたらしい。そしたら急に我に返った。

あそこでリードを撤去しようとしないうち、狼状態の時の知性は通常より著しく低下するのも知れない。

まあ良いや。そのまま大人しくしてなさい。

「ウォータージェイル」

今度はアツと驚き。クラフターを囲む様に水流が渦巻き始めた。何の冗談か。どこから水が湧いて出たのか。

なんか芸術的で美しくもあるが、戦闘中である。たぶん危険なナニかをされている。

「そこから水の刃を降り注がせる事が出来る。負けを認めるなら解除するけど認めないなら死んじゃうよ?」

「ちよっ、恐ろしい子!」

「クロエ、本当にやっちゃ駄目だよ」

外の声からして黒髪少女の作業らしい。

シズが止める様に言っているが、クロエと言う名前か。

いや今はソレよりもこの状況。どうもただの水流ではない。

試しに突っ込んでみたらダメーヂを食らったのだ。痛い。

丸石を設置して堰き止めを試みた。すると直ぐにヒビが入り始めて壊れてしまった。

なら黒曜石だ。地面を掘っても良い。空も空いている。上に逃げる手もある。

「でもこれで……あれ?」

結局それぞれ同志が全て試した。情報は多い方が良い。

……ふむ。どうやら全て上手くいくらしい。上は待ち伏せされるかも知れないから、今度やられたら地面から逃げよう。

「なんか凄い。面白い人達」

「……真似しようと思っっちゃ駄目だからな」

「全くみんな情けないわね！　こうなったら私が！」

次で5回目だ。　最後だろう。

金髪少女の声が聞こえたと思ったら、次には空飛ぶ小さな人形達が纏わりついてきた。

痛く無い。最小スライムに集られている気分である。　取り敢えず殴って叩き落とす。

「あっ!?　　ひ、ひどい……ひぐっ……」

泣かれた。

攻撃も止まる。　創造主の勝利である。　やったぜ。

子供に負けては教師として示しがつかない。　いや例え負けても取り返しただろう。　ナニかで。

「おいおい、ナニ泣かしてんだよ」

「……手を出しちゃダメって言ったよね？」

リムルに睨まれ、シズが笑顔で近寄って来る。

……待て。　ちよつと待て。

なんで我々はシズに責められてん？

手出ししてないじゃん!?

「お人形さん」

え、いやそれは。

ほら武器だったのだろう。　ならセーフだよ。

それに攻撃に使用した以上は耐久値は減るのが当然であり……。

.....。

その後の記憶は振り返りたく無い。

ただ簡潔に述べておく。 金髪少女の人形に羊毛を使用して修繕して赦しを請い、今度はシズとりムルに模擬戦やらなんやらを強制された。

.....模擬戦50連戦は心身共に疲れる。 乙女の心はよく分からないのであった。

89. 学舎と日常

学舎の匂いを嗅ぐのも悪くない。

クラフターは初心を思い出し、朝日を拝む。

敷地の外に出ると騒動になるから、行動制限は厳しい。だが箱庭に籠る事で逆に研磨や教授出来る創造があるのだと疑わない。

「お、お前らちゃんと定時に起きれるんだな」

「みんなおはよう」

「おはようございますリムル先生、シズ先生と副担の皆さん」

「寝坊すると食堂閉まっちゃうのよ！」

残念ながら文字を用いた勉学は至難の業。

一方でクラフトに関する事ならばと皆して食堂へ。

取引もなし、無料で食事が提供される場所。

そこでは日々違う料理を頂ける。それは朝昼夕と3食異なる為、大変興味深い。

ただし時間制限があるらしく、その間に取得しなければならぬのだ。

「なるほど朝メシ目当てか。さすが育ち盛り」

「クラフター」の皆も嬉しそうだね」

シズに云われ頷いて見せる。

そりやそうともさ。未だ知り得ない知識がこの学舎に溢れているのだから。

さてもなんだかんだ配膳が開始され、順番に料理を貰う。戴く。食べる用は手に持ち、研究用はスタック。後で原材料等を調査だ。

「おばちゃんの料理を喜んで食べてくれるなら、言葉の壁なんて気に

ならないさね」

「……おばちゃん、一部は食べる為じゃない可能性が」

「うん？」

「いや、何でもないです……」

中には知り得る食糧もあるにはある。

例えばパンがそうだが、コレひとつにしても見た目や味が違う。

どうクラフトしたのか。材料は？

他も大抵知らないものばかり。ハムエッグなる料理やマツシユなる料理、スープもそうだ。キノコシチューの類か？

何にせよワクワクする。膳の上を見ているだけで楽しい。

「ほい！ これリムル先生の分ね！」

「ちよつ、生徒より多くない!？」

「先生だったらもつと大きくなんなきゃね！」

「……………1日の基本は朝食から。それに食べられるだけ有難いよ？」

「シズ先生、食へのガチ思考も怖いです」

リムルを生贄にシズから離れた席で食事を摂る創造主一同。

食事もまた娯楽のひとつである。愉しめる位置で愉しもう。

決してシズから逃走した訳じゃないと弁解しておく。

さてもリムルを犠牲にした飯は美味かった。

卵と豚肉が原料かな？

コツチはジャガイモを磨り潰したのか。

時間がある時に是非とも研究せねば……。

食事が終わると教室に戻り今度は座学。

本と羽ペンモドキを用いてナニかを筆記している。

文字は相変わらず理解出来なかったが、動く熊人形や兎人形は見ていて楽しい。

「アリス……授業中にぬいぐるみは先生どうかと思う」

「別に良いでしょ、席は空いているんだし。ちゃんと計算もやつて
るわよ！」

前回の経験からして、金髪少女が動かしているゴーレムの1種だ。
鉄ではなく羊毛類で動いていたという、斬新な創造である。

此方も子供に負けていられない。教師として、世界に生きる先輩
として学ばせたいクラフトがある。

「副担が突然雪だるまを！」

「かと思えば動き出したー!？」

「背後には鉄のゴーレムがッ！」

スノーとアイアンゴーレムを作ってみた。

生徒が騒ぐ。そうか、これは知らないか。他者が知らぬ知識を
見せられた事に満更でもない表情を浮かべる創造主である。

「お前ら、今そういう時間じゃねえから！」

「え、えーと……アリスのスキルに感化されたんだろうね……」

「取り敢えず捕食で消し……いや、子供達の前だしな」

「作ったのに悪いんだけど、撤去してね」

シズに云われてしまった。

確かに、教室に対してゴーレムは大きい。

村人サイズのスノーは良いが、アイアンはゴツい。

仕方なくダイヤフルフォースセットを装備。数撃でアイアンを
斬り伏せ片づける。鉄とダイヤ剣の耐久が勿体ないが仕方ない。

ゴーレムに反撃を受けるのは危険だし、何よりシズに怒られるより
マシ。

「なんだ、その淡く輝く水色装備!？」

「格好良い！」

「……子供達がコイツらの影響受けてる？」

「みんな、真似しようとしちゃ駄目だよ」

そうこうしてる間も昼飯に。

サンドイッチなる板状のパンで具材を挟み込んだ料理を載く。

美味い。

簡単に見えるから、これなら我々でもクラフト出来るだろうか？

食べた後は教室外でも何らかの授業が行われる。

リムルやシズが引率し、我々や子供達について行く形だ。最初は

図書室に連れてかれたので思わず歓喜する。

「副担が首と腰と腕を振り回してる!?!」

「暴れるなお前ら!」

「図書室では静かに!」

そうだな。落ち着こう。

するべき事をしなければ。

「はあ……この世界の本から色々情報を得たいんだけど」

クラフターは嬉々として斧を取り出す。

大量の本棚が前だ。破壊して本を得る。その後はエンチャン

ト本にしてもよし、本棚を組み直してもよし。何にせよエンチャン

トが絡む。後は記録用の本と羽ペン用。

「おいこら待てや!?! なぜ斧を出した!?!」

「副担ご乱心!?!」

「止めなさい貴方達!」

シズに静止を喰らい、やむ得ず斧を仕舞う。

言いたい事は分かる。 此処も立派な建造物内であり、その部屋である。

本棚ひとつひとつも作品のひとつだ。 それを破壊するとは何事かと。

その点、子供達に見せるのは悪影響だ。 下手すると荒らし助教になる。 クラフターは反省し、頭を垂れた。

「り、理解が追いつかない人達ですね」

「面白いけど……少し怖い」

「狂ってるぜ……」

代わりにエンCHANT台を端に設置した。

場所的にレベルが微妙だが仕方ない。 他者による景観を破壊せず、実用性あるブロック類の配置は難しい。

「今度はなんだ……?」

「本棚から文字が飛び出しては、設置した本に吸収されている!?!」

「あー……これアレだろ。 クロベエの工房にあるヤツだろ」

「へ?」

「気にするな。 害は無い。 無いが変に興味を持たない様に!」

次に向かったのは松明揺らぐ校庭と、校舎周り。

前回の模擬戦地の近くだ。 シズとリムルに暗くなるまで散々な目に遭った場でもある。

「松明は相変わらずなのね……」

「教頭先生は困惑していたな。 撤去しても刺し直されるし」

松明のボンヤリした明かりが身に沁みる。

雑然としているが却って良い。

初心を懐かしみ、そして忘れまい。 特にシズとのチャンバラは。

「さて今度は校庭の掃除をしよう」

また模擬戦かと思いきや、今度は皆して清掃を開始。松明を撤去する訳じゃ無い事に、一先ずの安堵感を得る。

「なんと！ あの子達が校庭の掃除を!？」

「座学や実技だけが教育じゃありませんから」

「素晴らしいですシズ先生、リムル先生！」

「あの悪鬼のようなS組の面々が……教師生活25年。今改めて教育の尊さを目の当たりに……」

ボワン！ ゴオオオオオツ!!

突如、爆発音が響き渡る。

直ぐ側、校庭にて。

すわっ、クリーパー!?

あいや、ブレイズ!?

クラフターは慌てた。

松明の間隔は雑だったから、遂にその手が湧いたのか。それ見た事か。照度に気を付けないからフラット面に大穴が空くのだから、思ったが杞憂だった。

クリーパーではなく、ただの子供村人のスキルだったのである。

……あいや、クリーパーより酷い被害が出ているぞ。庭木も花壇も燃えており、クロエの水流が校舎を抉っている。

「何やってんだお前らー!!」

「いやゴミを燃やそうと」

「燃えてる！ 関係ないのも燃えてる!」

「クロエー!! 水が校舎を抉ってる!!」

ここはアレか？

荒らし養成機関か？

クラフターは青空を仰いだ。

そうしてしまう位には、子供達の行為は破壊の限りである。加減を知らない年頃か。

兎に角、壊されたモノを直さねば。ナニ、ミリムより断然マシだ。さっさと煉瓦や花を用意し、元の素材で修繕していく。手慣れたモノだ。

怪我の功名とは違うが、元の世界でのクリーパー被害や連邦での修繕の日々はこういう時に役に立つ。

「おお……こういう時は役立つなお前ら」

「あ、有難い……修繕費は嵩む事はなさそうです。ですが教育の方は……本当にお願いしますよ」

「……善処します」

子供達を救い、荒らしにしない為にもクラフターは善処するつもりでいる。

取り敢えず放火や建造物破壊の日常は止めさせたいとクラフターは思った。

90. 匠と研究

魔国連邦の地下。

私は今、ここを拠点にクラフトの研究をしている。ここはクラフターは気前が良く、新参の私に嬉々と知識や部屋を与えてくれたから、居心地が良くなったのもある。

落ち着いた後に”彼”の話をして、彼を知る者達から同情されたり励まされたのもあるだろう。正直言えば嬉しかった。想像以上に私の事も、消えてしまった彼を想ってくれる者が多くいた事に。私は此処に来て漸く、仲間と呼べる者達に囲まれたのだ。

——彼の支えは発展の礎だった。

消えたのは残念だが、彼は多くのクラフトを残したと云って過言ではない。君も含めて。

その後も彼の話をされていく。

如何に彼が陰ながら皆を支えてきたか、そして私も支えられていたか。

だからだろう。彼や、彼に支えられたクラフターに貢献出来ればと考える様になったのは。

「私も皆とクラフトしたい」

そうして研究を始めた。

ここにある……村人が機龍と呼ぶTNTキャノン移動ユニットのIRPについてや、その動力になっている謎多きBB。

これを同志と協力して研究している。

BBは高出力とRSを凌駕する伝達能力のある動力源としてではなく、高度な集積回路である他、組み込まれた創造物を自動で理解、様々な演算処理を行う事は資料で読んだけど……中々進展が無いのが悔やまれる。

だけど。 僅かでも解明されれば様々な分野で役立つ事が期待できるのだ。

BBをクラフト出来ればRS回路に代わる革命に成り得るし、大型建造物を動かす事も出来る様になるかも知れない。

寝る間も惜しみ、レポート作成に勤しむ仲間達。

その表情は生き生きとして楽しそうで、とにかく嬉しそうだった。 純粋な創造主は皆こうなのかも。 私も負けてばかりいるつもりはないけど、いつの間にか寝落ちして研究室の床で何度も寝ては起きて。 時々同志にベッドに担ぎ込まれる度、羞恥心に襲われ熱くなる。

だけど劣情も嫉妬も湧きはしない。 私は私。 彼が彼だった様に。

ただ私が研究する理由が、彼が話してくれた星の世界を目指すからと答えたら……皆は笑うだろうかとは気にする。

この地下からじゃ見えない、数多の輝き。 手を伸ばしても届かない世界。 あるかどうかも分からない。 それでも彼が憧れたであろう世界。 その光景を私は知りたい。

しかし……ここに籠ってどれくらい経ったのだろう。

時計を見る事でしか昼夜が分からないから、時々陽や月の明かりが恋しくもなる。 セピア色に染まる記憶が、胸を締め付ける。

そんな時だ。 仲間に声を掛けられたのは。

——根を詰め過ぎてはないか？

それをクラフターが言いますか。

返すと苦笑された。 不思議と腹は立たない。

「上手くいかななくても、きつと意味がある。 私がここにいる事も。 そう思うと気持ちは重くないですよ」

——そうか。 強いのだな、君は。

「それより何かあったんですか？　どこか嬉しそうですね。キモいくらいに」

——その通り。　実は研究していた新型砲弾が完成したのだ。
喜べ。　祝え。　歓迎せよ。

「哀しみ呪い、ベッドに送還したいんですが」

新型砲弾……TNTとは別の砲弾を開発していたのは聞いていたけれど、完成したとは。

資料によると着弾地点を中心に猛毒を拡散させる危険な砲弾。　いくなれば拡散範囲が広大な猛毒スプラッシュポーションを遠方に発射するというもの。

なんでもシオンという村人がクラフトした猛毒を原料にしているのだとか。

ただし、この原料自体は創造主にも中々クラフト出来ないらしく、この者に頼る他無いらしい。　なんにせよ物騒な話である。

「やめて下さいよ。　どこかの村を実験台にするのは」

一応言っておく。

クラフターは個人差があるが倫理観に問題がある。

それこそ酷い場合、村どころか国やバイオーム丸ごと岩盤まで吹き飛ばすレベル。　それも個人で成し遂げる。　犠牲は気にしない。

——問題ない。　駆け出しでなし、やらないよ。

「なら良いです」

——代わりに密室に同志を押し込めて試した。　効果は抜群。

全員即死。 実験は成功だ！

「流石クラフター。 惨い事を笑顔でやりますね」

ほらね？ 笑顔で犠牲を出すんです。 仲間でもお構いなし。

クラフターはリスポーン出来るとはいえ、経験値なるものや持ち物をロストします。

そうでなくても、苦痛を感じない訳ではないので良い事ではない。

——そんなに褒めるな。 腐肉しか出んよ？

「褒めてませんし、いらないです」

感性も全く違います。

村人達はもつと怒って良いと思います。

——後、喜ぶべき事が他にもある。

碌でもない話な気がして、警戒心を強める。

「新型エンチャントでも編み出しましたか」

——それは別件で同志が研究している。 そうではなく、我がI

RP班に村人を加えようと思つてね。

「えっ!? でも通訳はシズという方……」

私は驚いた。

まさか村人を研究班に入れようなんて。

感性云々の前に、言葉が互に通じないのに。

これはかなり致命的だ。 レポートは読み合えないし、意見交換も

出来ない。

シズという村人のみ、どういう訳かクラフターと会話が出来るらしいけど……。

仮にも研究部門に身を置く私としては、この案は反対だ。危ない。色んな意味で。

「確かに村人の技術者を招集し、互いに刺激し合い……この世界の技術を取り込めたら良いと思います。ですが言葉の壁は？ どう突破するんです。唯一通訳のシズという方は遠征中じゃないですか」

——ナニを言っている？ 君がいる。

「えっ？」

——村人語を話せる、君がいる。 問題ない。

「えっ……ええええっ!？」

今日だけで何度目の驚きか。

そういえばクラフトの日々で忘れてた。 私は村人と意思疎通が出来たんだっ!

……ただ殆ど話した事がない。 湖底研究所に幽閉されていた時に、村人語の本やらで実験され、暫定的に通訳にされただけ。 実績は皆無。 あるとしても、彼と暮らしていた頃に商人と僅かに会話した程度だろう。

「いやいやいや! 私、村人と話なんてとても!」

——期待しているよ辛辣同志。

「肩を叩いてニツコリすんじやねーです！」

——君の為でもある。君が目指すものは判らないが、助けになるのではないか？

「……………分かりましたよ。失敗しても恨まないで下さいね」

——大丈夫だ。取り敢えず我々が目醒めた洞窟へ向かえ。

そこに白衣を着た連中がいる。普段はポーシヨン作りに励んでいるが村人の技術者だ。声を掛けてくれたまえ。興味を持ってくれれば我々に協力してくれるだろう。

こうして、私はクラフターと村人の間を取り持つ事になる。

どこまで上手くいくかなんて全然分からない。

だけど、この世界の人々の協力を得られるチャンスなのは違いない。

そして。私にとってもそれは変わりないのだ。

一方、魔国連邦にて。

9 1. 悪人顔と明と暗

「むおっ!? なんとという発展した大都市か!」

また騒がしい訪問者が首都にやって来た。

悪人顔で肥満体質。 揺れる腹と顎を持つ。

臨戦態勢のクラフターは当然警戒心を強める。 武装は確認出来ないが、ワンパンで建物を倒壊させる奴が平然という世界故に。

が、その興奮具合は荒らしではない。 寧ろ褒め称えている。 側に例のトリオもいる事で漸く安心した。

「これ程の人口密度でありながら、ゴミひとつなく嫌な臭いもせず、清潔そのものだ! 建造物群も凄まじい! 天を摩する塔が無数に聳え立てられる技術力! これが人魔の国だと!」

何より創り上げた街を褒める奴だ。 褒める者に悪い奴はいない。 そう莞爾として頷くと、クラフターは剣を収めた。 判りやすくて良い。 皆そうなら良いのに。

「それだけじゃない! 行き交う者の身なりが良い! 生活水準の高さと治安の良さがうかがえるな……おお見てみる見てみる!」

店頭に並ぶのも良質の商品ばかりだぞお!」

「裏町の帝王とか呼ばれてるから、どんな人かと思ったけど」

「見ろよ子供みたいに無邪気に喜んで」

「この街に案内した甲斐があつたでやす。 これもあの人達が色々造ってくれたお陰でやすな」

ただでさえ人口増加傾向の連邦だ。

外来往来激しく、監視網を抜ける村人は数多い。

住居はビルディングで間に合っているとはいえ、元来の村人はもつと警戒して然るべきだ。その危機感の無さは元の世界の村人と同等かも知れない。

「フューズ殿からの紹介で商談に向かう事になった時はどんなものかと思ったが、いやはや全く……こりやあ金のおいがぶんぶんするわい……ぐっふっふっふっふ！」

「うわあ悪そうな笑い！ キモ！」

「絶対ろくでもない大人だぜあれ」

「樂園に穢れを持ち込んだ気分ですよ」

関所を建造するべきか？

いつそ連邦を黒曜石で覆うか？

いや自由に反する。景観も悪くしたくない。

仕方ないと思う。発展し数が増えれば束縛を受けていく。

一度テーマが決まってしまった街とは他の雰囲気を纏う建造物を建てるににくいものだ。

ふと、クラフターはハツとする。

ドワルゴンの出入口は関所だったんじゃない？

「商人が金好きで何が悪い！ 思いおこせば、7つの頃野菜売りの行商がワシの出発点だった」

「なんかはじまった!？」

「最初は生きる為がむしゃらだったが、次第に増えるお客様の笑顔と幸せな姿を見るのが楽しみになってな。以来三十余年この道一筋よ」

なら入場制限や混雑具合も理解できる。

アレを見た時、当初意味不明だったし割り込んでしまったが、理由があるなら話は別だ。

同時に参考になりそうだと。入口を複数作り上げ混雑具合を分散させよう。

ただ肝心の検査は村人に任せたい。村人語も村人の持ち物やスキルも我々は解らない。餅は餅屋、饅頭は饅頭だ。

「売り手が儲かり買い手が満足し、そして世の中をより良く変えてゆく。それが大商人ミヨルマイルの信じる商売の心得だ」

「流石ですおじさま。でもその大商人の奢りが屋台の立ち食いって……」

「うどん、旨いっすけど」

「何を言っとる。ここは割り勘だ」

「ぶっ!？」

善は急げ、としたいものの。

箱を作り中身が無いのでは交通の妨げだ。ある種の建築違反の刻印を押されては堪らない。今更感もあるが。

やはり通訳が欲しい。シズだけでは辛いところだし、意図を伝達したところで受け入れてくれなければ頓挫する。

ジオフロントにいる辛辣同志に頼るのも手だが、彼女はIRPやB研究に勤しんでいる。邪魔するのも悪い。

ままならないものだ。建築とは難儀である。着工する段階に至るまでに複雑難解な壁が立ちはだかっている。だが思うようにならないものを思うようにするのがクラフターだ。

こんな苦難はありふれている。だからこそ愉しもう。何もかも上手く行ったら詰まらない。

「ところで盟主様はスライムと伺っておるが」

「リムルの旦那っすね。人の姿をする事もあるけど」

「一方で、この都市を造ったのは例の人達でやす」

「それは街中でツルハシやスコップを担いでる奴らか？」

「そうよお。ナニ考えてるか分からないけどお」

「彼らのお陰で大都市が築けたでやす」

「成る程、噂通りの驚異的な技術集団……理屈は分からんが只者では無い雰囲気だな。思えばジュラの森からブルムンドまでの街道が短時間で整備されておった。これもまた金の匂いが……いや、同時に危険な匂いもするが」

「そうでやすな。国主でもあるリムルの旦那の意向を完璧に無視した建築を続けてるでやすし」

「それだけじゃないっす。他国でも好き放題してるし」

「何かを得る打算も無しに人を助けたりもするから悪い人達じゃないんだけどお。なにせ誰にも制御が出来てないから」

「……………惜しくも彼等に取り引を持ち込むのは難しいかも知れんな。

いや、これ程の商機を前に怯んでる訳にはいかん」

「遅いっすね」

「流石ですおじさま」

「取り敢えず言葉は通じないでやすから、直接交渉するのは別の機会が良いでやすよ」

まだまだこの世界から学ぶべき事は多くある。

今日もツルハシにシャベルに植林に採掘に。

様々な物事に興味を持ち続け邁進する事。ある種いつも通りの人生であるが、それでこそ我等マインクラフターなのだ。

「ああ……これ以上ジュラの森が白樺の植林場になるのを防がなければ」

「……………あそこで嘆いている美しい女性がいるな。まるで森の妖精のように神秘的な雰囲気、梢の葉擦れのように癒される語り。ワシの運営する店に欲しいところだが……この国にも色々明と暗があるのだな」

「あらゆる面で好き放題してるでやすから」

「不幸にする意図は無い筈なんです、純粹無垢な行動は時に大人達を傷付けるんだなと改めて思ってます」

「ま、まあ……ごく短時間で急成長を遂げた国と人達だからあ。多くの部分で経験不足なのは否めないわよお」

「でも同時に幼く純粹である反面、学習する力と柔軟さに秀でていとも取れるでやす。今はまだ歪な存在でやすが、いずれ真の意味で肩を並べられると信じ温かく見守っては頂けないでやしようか？

良き友として未永く」

「……うむ。何事も見た目では分からんな。魔物という先入観に囚われて商機を逃す所だった。真摯さと温かみがありつつ成長著しい国。それ故に敵も現れるかも知れんが、いずれ古い世界を打ち碎き変えていく嵐になるかもな。魔物の国の盟主リムルIIテンペスト。一度会ってみたい御仁だ……よし！今夜はワシの奢りだ！」

先程の肥満とトリオが笑顔で駆けていく。

そうだ。我々もそうである様に村人達も元気に駆け回っていないなさい。

共存共栄の関係。心が触れ合う心地良さ。

それもまた我々は知っている。

92. 狐娘と可能性

「遂にこの国の指南役のハクロウ様に個別指導してもらえます！」

訓練場にて響く可愛いハアン声。

見やれば、いつかの狐娘である。シズに扱かれた時は心配したが息災で何よりだ。

「あつー！　いつもの人間さんもいるです！　でも今日はハクロウ様に個別指導して貰うですよ。せっかくゴブエモンさんが推薦してくれたです。このチャンス無駄にはしないで！」

顔を合わせるなり元気に鳴かれた。威嚇ではなく挨拶の雰囲気だ。

手合わせの様子じゃないが、取り敢えずお辞儀しておく。挨拶は大事。マルチでは尚の事。

一方、その声に釣られる様に帯刀村人……ハクロウがやって来た。此方にもお辞儀しておく。

「おお主らに獣人族のお嬢さんは確か……」

「フォスです！　警備隊の全体訓練で何度か!!　今回は個別指導のほどよろしく頼むです!!」

「威勢がよい事はいい事じゃ。どれさつそく始めるかの」「はいー!」

2人が開けた場所に移動する。

模擬戦か。そういう場所だし当然か。

だとして狐娘は勝てるだろうか。ハクロウはシズより強い。

いや分からない。シズに扱かれてから大分経つ。狐娘も強くなっている可能性がある。

果たして見ていると、その期待は当たった。

狐娘はより獣らしく毛を増やし、ハクロウと相対す。 雰囲気も前より強そうだ。

必見。 もしかしたら。 その可能性を僅かでも感じられるなら無性に嬉しいのも創造主。

「ほほう。 獣人族特有の獣身化か」

「全てを研ぎ澄ましてハクロウ様を捉えるです」

面白いものが見れそうだ。

その刹那を見逃すまいと刮目するクラフターだったが、次にはハクロウが消えた。

と思った次には狐娘の背後に現れる。 そのまま狐娘は脳天を叩かれた。 呆気なさ過ぎる。

「ぎにゃっ!!」

そのまま蹲ってしまう狐娘。

駄目だったか。 仕方ない。 ハクロウはシズやエンダーマンより強い。 掛け合わせてもここまで強くならない位強い。

「ぐうう、全身がつ、全身が痺れるですつつつ」

その後も諦めず何度も立ち向かう狐娘。

が、歯が立たない。 動きは前より良くなっている。 だが一撃も与えられず一方的にボコられた。 力の差は歴然。 無情なものだ。

「情けないです……こんなにも通用しないなんて……獣人族としてカリオン様に顔向けできないです」

「そこまで悲観せんでもよかろうて。 お嬢さんは筋は悪くないが、力に頼りすぎなんじゃよ」

シズに追いつけない時点でハクロウを追うのは困難だ。我々も
そうだ。目で追えない。

何度剣に生きた者は格が違うと思いき知らされた事か。だが悲観
しない。我々は我々のやり方がある。相手の土俵で戦わなけれ
ばやり方はある。

持味を活かせ。前もそうだった。

「ハクロウ様!!」　なんで気配が消えるです!?!　追えないです!?!
そういう能力です!?!　一瞬で間合いを詰めるなんて……」

エンダーパールで一氣に間合いを詰め、斬り伏せようと試みた。

あの時は移動までは上手く行った。最も剣を振り下ろした際に
防がれてしまったので意味がなくなってしまったが。

「能力ではなく気闘法という技術の一種じゃよ」

「気闘法?」

「さよう。体内の魔素を練って闘気とし、身体の強化など行う妖氣
を用いた武術じゃ。相手の認識を遮る隠形法、瞬間的に移動する瞬
動法、武器や拳を強化する気操法など様々な術があるぞ」

様々な戦法がある。伊達に創造主を続けていない。冒険と建
築の過程で多くの化物を相手にしてきた。だがどんな相手にも弱
点や攻略法はあった。ハクロウにもきつとある。

それに見せてない戦法も沢山ある。諦めるには速算過ぎる。

「気配が追えなかったのはこれです!?!　それは私でも覚えられるで
す!?!」

「もちろんじゃとも。まあ、それには厳しい訓練と根気強い努力が
必要じゃがの。まずは手足の強化から始めてみるが良からう。
足を強化するだけでも瞬動法の基礎に繋がるしの」

先ず空腹には気を付ける事だ。

自然回復はしなくなるし、走る事すら出来なくなる。これでは逃げる事も出来ない。良い考えも浮かぶまい。

飯は大事だ。常に携行し、食う事を怠らない事。現に今も隙を見ては握飯を食っている。見習え。

「これからもご指導のほどよろしく頼むです!!」

「うむ。その心意気、楽しみにしておるぞ?」

「はい!」

「ホツホツホツ。鍛えがいがあるのう」

狐娘も同じく思ってたか、めげていない。

そうだとクラフターは頷いた。

人魔問わず全ての若者に言いたい。

頑張れ。頑張れ。物事を簡単に諦めては駄目だ。我々は何度リスポーンしたか数え切れない。食事中にクリーパーに爆破された時は悲しかった。安全にも気をつかう様に。

「カリオン様! この国の指南役、ハクロウ様の気闘法という技術はすごいです! この技術を習得出来たのなら、この国の秘密がまた分かる気がするです!」

いずれ分かる時が来る。

負けたって良い。逃げたって良い。

泣いたって良い。失敗したって良い。

勘違いする事勿れ。

転ぶのが恥ではない。そこから立ち上がらないのが恥なのだ。

他から理解もされず誤解されても、我々は笑われながら挑み続けた。これからもそうだ。

好きな事を好きだと云い、やりたい事をやる人生であり続ける。

批難家なんて何処にでもいる。 奴等は土1個すら気に入らない。 それを我々が気にする必要性は微塵も無い。

だから消えないクラフターは何処までも消えないし、何時迄も世界を冒険し開拓する探求者で在り続ける。

誰かが消えて喜ぶしか、人生に価値が見出せぬ荒らし等は損してゐる。 詰まらない人生だ。

何でも良い。 シズやハクロウの様に剣でも良い。 クロベエみたい鍛冶も良い。 我々がしている様な事も良い。 研究も素晴らしい。 のんびり釣り糸を垂らすのも上等だ。

「ワシは一服するかの。 お嬢さんは其方と相手してはどうかの？」

「へ？」

「もう有無を言わさず突っ込んでおるが」

そんな訳なので。

手の空いた狐娘に様々な戦法を仕込む様に試していく。

木剣は兎も角、水バケツで水流責め。 いつもの地面に潜ってから

の不意打。 接近されたら雪玉乱射。 真上に土を積んで蜘蛛返し。

からの上からまた水バケツ。

飛んで来たら金床を脳天にお見舞いさせ地面に叩き落とす。

一応、これでも殺さない程度に加減中。 本気でやって良いなら溶岩バケツやTNT、ポーシオンを持ち出すが、狐娘には酷だろうし。

「ぎにゃあああ!？」

根を上げて良い。

また挑戦すれば良いのだ。

さあ寝ては起きろ。 そして生きろ。

人生をブツ作れ!

世界も君達も可能性に満ち溢れているのだから!

93. 近状と報告

荒らし警戒態勢が続く魔国連邦だが、相変わらず村人は呑気ながら騒がしい。

対して我々は連邦領土圏手前に関所を建てようかどうかとか、その際予想される弊害について議論したりしている。

一方、地下ではIRPの新型砲弾が開発される。BB研究の方は平行線に近いらしいが、喜ぶべき進展だろう。

まあそれは”創造”の範疇として……他に変わった事を同志に報告するものとする。情報共有は大切だ。

「街中での野良スライム出没が後を絶ちませんな」

「幸い被害は出ていませんが、何にせよ例年にならない事です」

夏と呼ばれる季節になり、スライムが森に大量発生。連邦にやってくる。

沸き潰ししているのだが、樹木が複雑に乱立しているからか。或いはゾンビイベントの様に光量に関係ないからか。そもそもスライムだし……兎に角、今回もそうだった。

「もしやリムル様不在と何か関係が？」

「どうでしょうか……どちらにしても、ただの自然現象と片付けられませんね」

「それにしても、こんな都市の中心までどうやって……あの人達が絡んでいるのか」

とはいえた。

リムルと異なり、とても弱い。下手すると元の世界のスライムより弱い。当たっても痛くない。

故に大きな対策はしていない。精々トラップに嵌めたり柵で侵入を阻止する程度だ。スライムボールも手に入るし。

しかもである。この世界のスライムは喰えるらしい。それに美味しいという。シンプルな楽しみ方は、冷やして食べる方法だ。

「……シオン。貴女の手を持っているものは？」

「ち、違うんです！ これは迷子をちよつと保護しているだけで……」

「森に戻してきなさい」

「内部の犯行でしたか……」

そんな最弱スライム達だが。

今回は何時にもなく都市内に大量侵入。荒らし警戒をしているのにスライムを許す様では駄目だとの意見も上がり、洩々原因を探究。

するとシオンがリムルに飢えて連れ込んでいたのを目撃。

シユナと呼ばれる村人と共に部屋に押し入れれば、スライムで溢れているときた。何か。リムルと間違えているのか。いやそのままで馬鹿じゃない筈だ。

「ほら見なさい。この方達も思案顔になってますよ。下手すると

殲滅しかねません、直ぐに森へ逃してきなさい」

「はいシユナ様……」

「ですが個人的な規模ではないですね。トレーニーさんに聞いてみ

ましょう」

「そうですね。森から来てますし、ここは管理者の方に……そう。

正規の管理者に……」

それかスライムを家畜化しよう？

スライムボールのみならず、食糧としての有用性があるなら分らないくもない。

アレを口にするのは抵抗があるが……握飯も形状はボールだ。それを口に行っている時点で今更か。

「——迷いスライムについて詳しい事はよくわかっていません。何故都市部に入るのか、何故強い魔物を恐れないのか。捕獲し調査する必要があるでしょう。リムル様と同種である彼らの生態を調べるのは禁忌とする傾向があるかも知れませんが、敬愛の対象を知ろうとするのは罪ではありません。理解はより深い愛となるのですから。森を綺麗に白樺にしてくる人間達も、もっと森を愛して真の管理者に配慮して欲しいと……」

「脱線してますドライアド様」

今度食べてみよう。

少なくともシオンの料理より酷い事はない筈だ。

料理のクラフト研究をしている同志は、是非試してみたい。そのまま食う以外にも美味しい食べ方や調理法があるかも知れない。

干してみてもどうだろう？

それか飲料と混ぜてみるのも良いかも。

砂糖漬けも試す価値あり。

それらもまたクラフト案件だ。

「——皆さん、お揃いで。実は迷いスライムについて報告があります」

「おやベスター殿」

「どうやら都市に入り込んだ一部のスライムが、細かなゴミを食べているようなのです」

「なんとスライムが！」

「迷いスライムは街の為に働いていたんですか!？」

「そうですね。もしかすると、彼らは彼らなりに街の役に立ちたいと思っっているのかも。同じスライムであるリムル様と、この街を愛し造った人間の皆さんの為に」

よし。やろう。

剣を振り狩り立て始めるクラフター。
スライムボールは粘着ピストンのみならず、今後食糧ともする。
一部は実験、繁殖用で確保して残りは倒す。
水色スライムを見ていると、偶にイラツとくる所為もあった。地
下都市……ミリム誘導……破壊。荒らし許すまじ。八つ当たり
してやる。

「言った側から狩り始めたーッ!？」

「急いでスライム達を森に返して！」

「シズ殿が帰って来たら、狩らないよう伝えて貰いましょう！」

というスライムイベントであった。

他にも報告はある。

詳細は省くが、洞窟で量産されている村人製回復ポーションの路上
取引が始まった。

最初取引を始めたのはドラゴン風村人のガビル達である。

「さてお立ち会い！ 取り出しましたるは魔国名産の回復薬！」

そんじよそこいらの回復薬とは訳が違う！ 即効性・回復量共に

目を見張るほどの優れものである！」

村人製のポーションは興味深い。

故に路上取引開始前、生産地の洞窟で戴いた。只ではなく取引
だ。我々のポーションと交換し比較会を行ったのである。

結果は素晴らしいものだった。

大きく大・中・小の回復量で分かれており、中までなら我々と同等
とも云えるレベル。

だが大を経験した時……格の違いを見せつけられたものだ。ア
レを飲むなり浴びるなりすると完全回復する。そればかりか村人
に関しては欠損部位をも治す。

村人の間ではフルポーションと呼ばれている。

シンプルイズベスト。

改めて侮れない……この世界のクラフターは。

「どれほど素晴らしいか。それでは早速ご覧に入れましょう。

えーとはい、そちらの方」

「ん？」

「素手でも得物でも我輩に一撃入れてみて貰えますかな」

残念ながらフルポーションは上位金林檎以上の希少性があるらしい。

生産も出来て1日に数本程度。これを取引するとなると大変なレートになる様で、こうして取引場に出されるのは中ポーションに当たる回復薬である。

それでも我々と同等かそれ以上だ。

「おいおい、こっちは獣人だぞ。よっぽど手加減しねえと殺しちまうよ」

仕方ないね、とも思う。

一方で悔しいとも思う。

クラフトの道は数多あるとはいえ、どんな分野であれ学びはある。そして並び立ち、欲張れば超えていく。

フルポーション……我々も作りたいものだ。

今は目の前の取引を観察しよう。

「心配ご無用！ 我輩はあの魔王ミリム様の一撃を耐えたほどの益

荒男でありますからに！」

「マジか！ すげえな！ なら遠慮なく」

刹那。ガビルは野次馬に……いや。いつか見た山猫風村人に殴られた。

見ている清々しいノックバックが発生するが、かなり痛そうだ。そこにすかさず取り巻きが回復薬をぶっかけ、ノーカンにしている。助け合い。マルチならではな光景だとも思う。クラフターは妙な親近感から頷いた。そうだ。助け合いなさい。戯れ合いも損害が出ない程度にしないなさい。

「ど、どうでありましょう！　この通り忽ち治り元通り！」
「おー！」

しかし身体を張った実演取引だ。周囲からも感心したハアンが上がる。流行するのも遠くなさそうだ。我々も負けていられない。

「あれスファイア殿？　何時こちらに!？」
「ついさつきな。誇り高き三獣士としてウチの使節団の働きぶりを見たくて……というのは建て前で遊びに来た！」

「あ、はい」
騒ぎ足りないらしい。
ハアンハアン喚き始める山猫風村人。熱は上がるばかり。最悪は武力鎮圧も已むなし。
荒らし警戒中だ。ダイヤフル装備は常に携行している。斬り捨てるのは造作もない。

「美味しいメシ食って美味しい酒飲んで強い奴と喧嘩するためはるばる来た！」
「正直ですなあ」
「あと最近フォビオの奴が急に真面目ぶりやがってアルビスとつるんでオレをハブにするから飛び出してきた！」
「……………」

「あの去勢野郎、ガキの頃に前のシッポオレに引つ張られて泣いてた
くせによお！ アルビスもオレの夏毛が変とかぬかしやがって万
年酒浸りのスベタ——」

そろそろ黙らせようとしたところ。

何処からともなく山猫風村人の仲間がやって来て、羽交締め、黙ら
せた。

語るハアン。 語る視線。 相変わらず理解は出来ぬが故に歩み
寄る。

取り敢えずクラフターは頷いて見せた。
模擬戦は然るべき場所でやる様に。

創造主達への賛歌

94. 襲撃と出撃

心躍る大都市から一転。

晴れやかな青空の下、クラフターは野原で模擬戦を行っていた。

野外授業と称して郊外に来ているのだ。メンバーは今やお馴染みのリムルとシズ、そして子供達である。

といっても前みたいにやり過ぎてシバかれたら嫌だ。故に回避や防御に専念中。

土を積み重ねて上に逃れたり、壁を作って防いだり、例によって穴を掘って地中に隠れたりしているところ。

「相変わらず先生達は変すぎだつて!?!」

「なんで土柱の根元を壊しても宙に浮いてられるの!?!」

「重力を無視している!?!」

「魔法?」

「リムル先生! シズ先生! あの人は何者なんですか!?!」

「……先生にも分からない事ってあるんだよ」

「……ははは」

因みに。

郊外へは地下道を掘り、這い出た経緯がある。

普通に都市内を闊歩しようものなら騎士団に襲われるからだ。

ネザーのピッグマンの如き面倒な連中だ。別に危害を加えてないのに。

この世界はナニが敵対行為になるか判ったものじゃない。エンダーマンは目線が合うと敵対するが、彼等は何だろうか。テリトリーを侵害すると駄目なのか。一種のガーディアンか。思えばウィッチモドキも不明だった。

だがそれしきの事で止められる我々ではない。

水中に沈む海底神殿の攻略等は確かに難儀した。

行動制限が掛かり息も出来ぬ。採掘も時間が掛かる。視界劣悪な水中世界。そこをトリトリとするガーディアンは電撃を放ち遠方からも攻撃してきた。取り巻き含め強敵だった事は認めよう。

だが目覚めた洞窟で隠遁しなかった様に、常に前へ前進した。そして勝った。失敗は数え切れないが、どうにかなるものだ。

具体的にはあの時、水中用のポーシヨン等をクラフト、駆使して攻略を敢行した。

ネザー要塞やジ・エンドにおけるエンダードラゴン戦では別口だったが……やはりクラフトは偉大だった。

その思考は今も脈々と続いている。

だからこそ、異界の地……遠路はるばるこの国にやってきてもクラフトは続く。

シズとリムルの為でもあるが、我々の為でもある。

思えばこの世界での最初の友はリムルだった。暫くして出逢えたシズも意思疎通が出来る友となった。

そして両者を基点にする様に、新鮮な創造の日々が始まったのである。

或いはリムルとシズに出逢う為にこの世界に来たのかも知れない……クラフターはそんな事まで考えた。

少なくともリムルはそうだ。こんな珍妙なスライムは他に見つけてないし。

「はいそこまで。みんなお昼にするよー！」

「やったー！」

そして今回も勝つ。勝った。以上。

後は待ちに待った飯の時間だ。シズに呼ばれて皆と共に駆け寄った。今日はサンドイッチである。もう頭の中は料理だけ。

これは平たいパンの間に様々な具材を挟んだ料理だ。簡単そう

で奥がある。最近是我々も真似出来ないか試みている。クラフターたるものだ。奥を探究したいと思つた時に既にクラフトは始まつている。ころころ転々と。

「くあーっ！ やっぱ運動のアトの飯うめーっ」

尚、コレはかのデカイ狼が都市より運搬してきた物だ。狼なのに運べるとは。ラマか。いやラマ程有用ではない。だが戦闘も出来る面は捨て難い。

取り敢えずサンドイッチは美味しい。以上。

「ねえ、先生と勇者様どっちが強いかな？」

「そんなの勇者様に決まつてるじゃないの」

「私は先生の方が好き！」

「こんなヘンテコ連中にマサユキ様が負ける筈ないもん！」

「アリス、こんなとか言つちや駄目よ」

「そうだぞ。言つて良いのは俺だけだぞ」

「リムル……」

これのクラフターに是非謁見したい。

都市にて甘味をクラフトして取引している事を生業にしている者だ。

「マサユキつてのが勇者の名前なのか？」

「リムル先生、勇者様を知らないの!？」

「とても強いんですよ！」

「金髪でね、すつごくカッコイイんだから！」

「金髪なのか。日本人っぽい名前なのに」

ヨシダという名らしい。顔も知れぬが仲間の気分だ。鬱陶しい騎士団がいる所為で挨拶も碌に出来ないが。難儀なものだ。

だが諦めなければきっと会える。

そう。同じ空にいるのだし……と、青空を見上げたら。

——グギャアアアツ!!

なんか飛んできた。

ナニアレ。

ドラゴンだ、アレ。

いやドラゴンだろう。

ドラゴン以外何だというのだ。

「ドラゴン!?!」

『天空竜(スカイドラゴン)です。脅威度は災厄級。カリユブデイスと同じランク帯の上位龍族(アークドラゴン)です』

「レッサードラゴン亜種のワイバーンとは異なり、元竜の血を濃く受け継ぐアークドラゴン! 脅威度は特A、カラミティだ!!」

「大変! 街に向かってる!」

久し振りに見たなあ。

妙な懐かしさすら感じて、創造主は目を細める。

エンダードラゴンを討伐して久しいし、目覚めの洞窟にいたドラゴンも直ぐにいなくなったし。後者はリムルの所業だが。

取り敢えず久し振りにドラゴン退治といこう。

奴は都市に向かってる。放置すれば立派で美しい都市が破壊されかねない。

クラフターとして、創造物が荒らされるのは見過ごせない。リムルとシズも同じ想いだろう。

「大都市の結界はそう簡単には破れないさ」

「でも相手はドラゴンだよ!?!」

「あそこは俺達の家なんだ! ヨシダのおっちゃんに食堂のおば

「ちゃんに教頭先生に学園の皆……黙って見てられるかよ！」

「家、か……そうだな。待つてる人がいるもん……ん？ あれ

？ ユウキは？」

「兄ちゃんはなんか平気そう」

ダイヤモンドフル装備完了。

俊足ポーシヨンも飲んだ。今にも駆け抜けられる。模擬戦で

動きも温まっている。いつでも動ける。

「副担が青く輝く鎧と剣を一瞬で……!？」

「おっと俺も行かせて貰うぞ。王都に入ろうとしてた人達が狙われてる」

「先生え……あの人達、死んじやうの？」

「そんな事にならないよ……私も行く。皆はランガと待つてね」

やはりリムルとシズも来るらしい。

子供は戦力として心許ないからか、狼と留守番命令を下される。

「倒しに行くの？」

「なによバカじゃないの！ かつこつけて勝手に死ぬとか絶対許さないわよ！」

「大丈夫だよ。それに副担はとっても強いんだから。それこそやられても何度でも起き上がれるくらいに」

IRPはこの場に無いが……座標伝達。

可能なら支援砲撃を要請した。

だが過信しない。クラフターは右手のダイヤ剣を、弓矢を見つめる。

やはり最後に頼れるのは己の技術、創造だ。

「今日も助けてくれる？」

当然だ。

創造主は即答した。

95. ドラゴン退治と居場所

「きゃあああああー！」

「ドラゴンだー!?!」

「逃げろ!」「助けてくれえッ!」

都市部出入口付近。

突如落ちてきた影に村人がハアンハアンと悲鳴を上げ、散り散りに逃げ惑う。

その主因はドラゴンだ。

ジ・エンドの様に黒曜石の塔といった遮蔽物もないフラット面。危険な地上の安全な上空で奴は一方的に嬲り始めた。

ブレスに次ぐブレス。 挟まれる大地。

村人には酷な環境でしかない。 ゴーレムもないし。 いても対空戦は不可能。 逃げているだけマシだ。

「俺一人でもやれそうだが、変にスキルを使ったら教会に絡まれそうだし……先ずスカイドラゴンを墮とす。 そうしたら一気に畳んでくれ。 お前らなら造作もないだろ?」

リムルはハアンと鳴き、背を伸ばす。

かと思えば次に白衣を装備。 蝙蝠羽を生やして飛んでいく。 速い。 我々もクイツク装備は出来るが、リムルも出来たとは。

見習って一部同志もエリトラで追従する様に飛翔した。 なに空中戦は初じゃない。 巨大魚の時もそうだ。 要は慣れだ。 慣れ。 その点、連邦の村人がそうだ。 我々が街中でツルハシやスコップを振り回した程度じゃ気にしなくなっている。

我々に染まったと云えよう。 ある種の同志と化している。 それでも偶に叱咤されるが。 もっと慣れろ。

驚かれなくなる寂寥はあるが、殴られるより良い。 或いは斬られ

るより良い。

「リムルがドラゴンを墮としてくれる。その後は私達が……ッ!?」

シズにも慣れて貰おう。

領きつつ俊足のスプラッシュポーションをシズの足下で割る。

これで遅れは取るまい。

「急にガラス瓶を割ったら危ないよ……あれ、急に足が速く……!」

そうだろう、そうだろう。 凄かろう。

我々のポーションに感謝して。 回復薬の面では村人に遅れを取ったが、他の面で勝る事はまだまだある。

「本当に凄いよ。一緒に戦える事、嬉しく思う!」

喜んでくれた。 何よりだ。

しかしまあ……シズと共に駆け抜けながら思う。

この世界にはドラゴンが何体いるのだと。

力と自由を行使し飛び回る有翼の大型生物。

風を巻き空を滑る強大な飛翔こそはクラフターの記憶に住まう怪物そのものだ。

既に目はタイミングを見極めている。 はい、今射れば当たる。

そら、今も。

「直ぐ衛兵が加勢してくれると思っただけど全然来ない。 要請が無くても警戒態勢の筈なのに西方聖教会……騎士団の対応も遅い。 それにスカイドラゴンはドワルゴンの方角、竜の巣と遠方……なんでここまで……」

シズがボヤク。 分かる。

騎士団は魔物に敵対的と教えられた。ドラゴンも御多分に漏れない筈だ。

一方、唯一神ルミナスを崇めている……というのは好きにして欲しい話だが、それが奴等の正義だ。にも関わらず初動が遅い。生贄になっていて逸れ村人がいるから都市部の被害は免れているだけだ。いなければ忽ち拠点が陥落する失態を犯している。

それともテリトリーの都市内に侵入して初めて対応する気か。

……いや、違う。

奴等は歪んだ正義を掲げている。

「えっ?」

我々に襲い掛かる時点で妙じゃないか。

奴等は人魔の区別がついていない。

差別がついていない。

いや。ある意味差別している。

異世界人という理由なら、何故シズやヨシダは無事なんだ。

可笑

しいじゃないか。

「……ごめん。擁護出来ないよ」

目を逸らされた。何故だ。

まあ良い。今はドラゴンだ。丁度今、同志が不意打をかました。

雪玉を空中にて連射。1スタック16個を一度に消費。悉くをドラゴンにぶつける。

ドラゴンよりリムルが荒ぶった。

「なんで雪玉ぶつけてるの!?　そこは弓矢使えよ!　カリユブデイス戦でやってたろ!」

リムルがまた不平不満のハアンを上げ始めたが無視しておこう。
だが確かに……ドラゴンにダメージが入る様子がない。エン
ダードラゴンの様にかかない。残念だ。
だが気を引く事は出来た。

地上への荒らし行為は一時的ながら止められた。

後は相手の突撃やブレスをロケット花火の加速、真上向きでの急減
速といったエリトラ機動を駆使して回避。

主攻撃は地上班に任せる。あとリムル、君に決めた。伝わる
か。いやリムルの事だ。何とかする。最悪地上班もいる。
仲間がいる安心感。思わずニツコリだ。

「ああもう分かったよ！ そのまま気を引いてろ！」

伝わった。

リムルはドラゴンより空高く舞い上がり、敵の完全な視界外へ。
そのまま急降下、無防備な背中を容赦なく剣で突き刺す。

——グギヤアアアアツ!!

忽ちドラゴンは地に堕ちた。脆い。

エンダードラゴンなら、死の間際まで飛び続けている。

「今ッ！」

一転攻勢！ 突撃敢行！

地上にいればコツチのもの！

俊足のままに青く淡く輝く自慢のダイヤ剣で斬りまくる！

シズは前に渡した鉄剣を使用している。なんだか不憫に感じて
しまう。素材もだし、そもそもエンチャントを施していない。

落ち着いたらしてあげよう。そうしよう。

リムルは……気が向いたらで良いや。

半荒らし悪食スライム野郎だ。強力な武具を渡したらナニされるか分からない。己の剣が己を貫くとか笑えない。それは元の世界で間に合っている。

……それを考えたらシズも危険だった。

良く考えよう。疲れ顔で頷く。

「……………うん、倒したよ。みんなのお陰で、みんな助かった。ありがとう」

礼には及ばない。

エンダードラゴンと比較して脆弱だったし。

雪玉が効かない点は誉めたいが。

だがしかし。

この世界のドラゴンは皆こうなのか？

洞窟にいたドラゴンを思い返す。スライムであるリムルにアツサリ喰われたドラゴンだ。

謎のドームがあったからかも知れないが……ドラゴンの体力を回復させる忌まわしいクリスタルが無かったのが大きい。

あれば苦戦していただろう。エンダードラゴン戦もクリスタル破壊の方が大変だった。

「むっ？ その青く輝く鎧と剣……もしやテンペストに縁がある人間の方々ですか？」

村人にハアンと鳴かれた。

振り返れば腹と顎が揺れる悪人顔がいた。これがゾンビイベントやウィッチ戦だったら斬り捨てていただろう。勢いで。

「はい。この方達は連邦の……えーと、職人さん達です。異国の文化故、言葉が通じませんので私が通訳しています」

「そうですか……と、云いますと貴女様はシズエ・イザワ殿、白衣の聖

女様はリムルⅡテンペスト殿とお見受けしますが」

なにやら交渉が始まった。

こうなると大抵蚊帳の外だ。理解出来ない哀しみにも暮れる。

哀戦士。

「はい。貴方はミヨルマイルさん？」

「いかにもワシがミヨルマイルですわい。ご存知で」

「大商人として名を馳せている方ですよね……名前も、取引の中で？」

「連邦に商談の為に向かいます。その際、住民達はあなた方の話

ばかりでしたからな。国王のリムル殿に関しては、人の姿の時の似

顔絵まで見せてくれましたよ」

「そうでしたか」

「シズ殿は……ギルドの英雄ではありませんか。今は教師をされて

いるとか」

「私の事もご存知でしたか」

虚しい。

ドラゴン退治の後の寂寥感まで再度味わうとは。

気を紛らす為に周囲を見渡す。

負傷している村人がいれば回復ポーションを投げつけた。

クレーターがあれば土ブロックで補填。整地する。ついでに

松明を刺していく。

「ええ。商売の都合のみならず、情報は自然と入るものも多い――

―皆さん、ずいぶん慕われておいでだ。ワシも懇意にさせて欲しい

ものです。ぜひお礼も兼ねてご馳走させて頂きたい。イングラ

シアにはワシの出資している店もありますので――」

「おいそこの者達――」

また新手のハアンを鳴かれた。

見やれば騎士団の奴だった。ヤバい。逃げよ。キリが良い。ずらかるには丁度良い。

何よりこれ以上ハアンハアン聞いていたくない気分。なんか爪弾き感があるから……。

「あつ!? おいこら待て! くそつ、なんて速さだ……代わりに一緒にいた者達! あの者達が何者か聴かせて貰えないだろうか。都市内に時々出没する”魔物”でね」

「魔物……? お言葉ですが、あの人達は魔物に見えません。人間の間違いでは? それに私達を助けてくれました。騎士様より先に、ね」

「……その件は申し訳ない。だが話を逸らさないで貰おう。足の速さといい、今先ほどまで行われていた松明を刺しまくる珍妙な行為。街中でも同様の行為が見られたからね。同じ仲間に見えないんだよ」

「……ワシも共にいたが、この方の言っている事は本当だ。それでも聴取かね。ワシをミヨルマイルと知っての事か?」
「え……?」

背後でハアン声がどんどん大きくなる。だがもう振り返らない。遁走あるのみ。子供達のお守りもある。

後始末はシズとリムルに押し付ける。悪く思わないでくれ。村人語は喋れない。

「おい! その人達は良いんだ!」

「ドラゴンを倒してくれたのに!」

「そうだそうだ!」

「なっ……だが知性ある竜が無差別に人間を襲うとは思えないんだ!」

口論が始まったらしい。
余計に居場所がない。逃げよう。
そして風となり空気となる。

「じゃあ、あの人達がした無差別の善意は？」

「怪我したお母さんを治してくれたもん！」

「松明は意味不明だが、整地までしてくれた奴等だぞ！」

「目撃者ならこの場に沢山いる！」

「騎士様は人間も敵なの……？」

「今頃出てきやがって」

「出るのは剣じゃなく口だけか」

「見た目ばかりめ！」

「聴取なら俺達が受けてやんよ！」

「ああ！　いくらでもな！」

「くっ……！」

しまった。ドラゴン退治の報酬が無い。

ドロップ品欲しかったなあ……嗚呼。ただ働きは承知の上だったが。

「彼等の為に賄賂を渡すまでも無かったな。寧ろ金では手に出来ぬものを手にしたのか」

「みんな……擁護ありがとう」

まあ良いか。都市を守れたし。

さっさと戻ろう。今日の夕飯が楽しみだ。

96. 遠方と未遂

「副担ご無事で！」

「先生達、凄い！ ドラゴンを倒すなんて！」

「リムル先生とシズ先生は無事なの!？」

「怪我しなかった!？」

子供達の元へ真っ先に帰還した創造主達。

騒がしく纏わりついてくるのも気にせず、熱りが冷めるのを待つのみだ。

残念ながらIRPの支援砲撃は受けられなかったが、結果として良かったと領いておく。

「そうですか……無事なら良いのですが」

「騎士様が聴取しているのかも」

「迎えに行こう！」

子供達が都市出入口まで駆け出した。

ドラゴンを倒したとはいえ、騎士団のテリトリーに飛び込むのは躊躇する。

単体の脅威と数の暴力は違う。ネザーにおけるゾンビピッグマンとの大乱闘の記憶が蘇る。

暫しクラフターは悩み……向かう。無防備な子供達を放置する気にはなれないから。

「先生、足速くない？」

「えっ……いや、普通だろ」

「でもさっきまで……」

「僕達に合わせてくれているんだよ」

気持ちに沿う様にポーションの効果は切れた。
慣れると通常速度が鈍足に感じてしまうものだ。

いや。それが丁度良い塩梅か。早く到着しても絡まれるだけだし。

間も無く現場に舞い戻る。

重篤村人は既に回復し、補填した土には早くも草が生え始めている。
松明は周囲を陽より明るく世を照らす。

元の世界でも見慣れた平穏な光景に、少しばかりの安堵感を得る創造主。

違和感があるならば、やはり騎士団の存在か。

単なる敵として排除出来たら楽なのに。事は単純ではない。

それが世界の違いだ。改めて我々は異端である。それが現実だった。

いや、どちらが異端なのだろう。

思った瞬間が全てとは思えないが。

単純な二極化で良いなら正義の反対は悪だ。

だが思考と精神は複雑難解であり続ける。

個人差があるのだ。ある者の解釈では正義の反対は慈悲、若しくは寛容である。

単に正義の反対は正義と云う者もいる。

その上で考えても、不幸中の幸いが今回発生した。

砲撃が行われなかった事だ。

連邦からIRPによる砲撃中止……大多数の創造主は本当に良かったと心より思っていた。

とんでもない話だが、なんと新型砲弾を試す気だったらしい。爆発すると猛毒を撒き散らす大量殺戮兵器をだ。

そんなものを撃ち込まれたらドラゴンだけの問題じゃなくなる。

クラフターはおろか、逃げ惑う村人や都市にまで無差別に被害が波及しただろう。

そうなれば居場所を失うところだった。いろんな意味で。この手は牛乳バケツをフルに使っても取返しが付かない。結果に対

して得られるモノが少な過ぎる。国を滅ぼすなら別だが。辛辣同志が止めてくれたらしいが、後で感謝しなければ。クラブターは複雑な想いを抱えつつ現場に起立する。

「リムル先生、シズ先生ーッ！」

「……みんな」

「お前ら、来ちゃ駄目って言ったろう？」

「ごめんなさい……でも心配で」

「だけどよ、もうドラゴンいねえし！ てか凄かったよ先生達！

遠くからでも分かるくらい！」

「そうそう！ あつという間に倒しちゃうなんて！」

「ちよつとはシズ先生に近付いたって認めてあげても良いわよ！」

「おいおい……」

「皆がいたから出来た事だよ」

今は……仮初の平和を噛み締め祝おう。

この件は報告しない。自己中心的な創造主ですら憂いたのだ。

身内の問題はなるべく身内で片付けておく。

荒らしが出た時もそうだ。

同志（身） から出た創造（鏝）だから。

「そっぴいや騎士様は？」

「……いろんな人に聴取をしている。俺達は無罪放免ってところだ」

「あ、リムル。 さつきミヨルマイルって商人からは是非お礼がしたいって話があったよ」

「ミヨルマイル？ ウチで大量にハイポーションを買ってくれたって人か……今後とも付き合いは良くしたいところだな」

「分かった。 子供達は私に任せて」

「ありがとうシズさん。 それと……出来たらで良いんだが」

「……うん。 この人達も学園に戻ってもらう様に……出来な

「かつたらゴメンね」

我々はいつの日か荒らしとして、異端物として世界から排除されるのだろうか。

この国の騎士団が襲うように。もしそうなら悲しい話だ。

だがそれがもし、どうしても納得出来ない理不尽であるならば、抵抗する。その権利はある。そう信じている。

取り敢えず今日の献立はなんだろうな。

過ぎた過去。 憂う未来。 それより今日の飯！

97. 遺跡探索と羽虫

「ミヨルマイルに招待された店で思わぬ収穫があった。　精霊の棲家の場所が分かったぞ」

「本当!？」

「ああ。　エルフの占い師に場所を占って貰ってな……これで子供達を救えるかも知れない」

子供達を救う為、前より計画していた事を実行する時が来た。

と云うのはリムルとシズだ。　外国に行つて上位精霊とやらを子供に憑依させるといふ。　すると助かるらしい。

理屈は知らぬ。　だがゴーレム、ウィザー召喚、ベッドからのリスポーンとはいかない様子は伝わる。

アレだ。　エンドポータルの様な感じだ。　好きな場所に造れるネザーゲートとは訳が違うのだろう。

「——という訳でウルグレイシア共和国ウルグ自然公園に向かう」

リムルが用意した、地面に描かれたサークル……この世界特有のポータルに入ると忽ち風景が置き換わる。

ネザーゲートやエンドポータルを経験している身だ。　今更に驚きやしない。

それよりも目の前の光景だ。　手の入っていない森に飲み込まれた遺跡群。　特に大樹の間。　そこに鎮座する大扉。

もうね、コレ浪漫。

久々の遺跡!　ダンジョン攻略じゃん!

「うわっ!　副担が荒ぶってる!？」

「きやあつ!　き、気持ち悪い!」

「忘れた頃にやるな……とにかく止めろお前ら」

「首が取れちゃうよ!?!」

クラフターは歓喜と共に首を滅茶苦茶に動かす。
やはりこの世界にもこの手のものはあったのだ!

どこぞの山頂にも遺跡らしき建造物を確認した報告はあったが、今は目の前の現実だ!

どちらが上か下か分からない。興奮のままに腰と腕も振りまくる。

目覚めた洞窟ではスポブロも宝物も見当たらなかった。だが、ここなら或いは!

「あつ!　おい勝手に行くな!?!」

クラフターは嬉々と先行。

扉をツルハシで破壊し突貫。

「壊すなよ!?!　　というか懐かしいな、その光景」

探索だ。　探索ひやつほい。　松明も忘れまい。

苔付きやヒビ割れの石レンガブロックとかも余裕があれば回収だ。

スポブロが有れば破壊せず松明封印。　後でトラップタワーに改造する。

この流れ……当たり前だよなあ?

「先に行くといけないよ!?!」

「……ある意味、安全確認してくれていると思う。　何より嬉しそうな時ほどアイツらを止める術は無いに等しい……」

だがまあ、何というか。

今のところモンスターも出ない。

道も幅広い。　坑道の様な窮屈を感じないのは有難いが。　一方

で物足りないのも確か。

ピラミッドの様に罫もない。シルバーフィッシュが飛び出す事もない。宝箱もない。ワクワクと緊張感が不足気味。のんびりした遺跡だ。まだ先があるとはいえ。

足りない……コレは足りない。
なら足そう。

我々は冒険家であるがクラフターである。

越権ながら改修工事を施そう。少なくとも松明をばら撒いていく訳だし。

そんな手応えの無さを自発的に満足いく快適空間に改造しようとした頃……ソレは現れた。

「妙な人間どもめ。これ以上好きにさせないよ」

謎のハアンと共に単眼の巨人。

見た目こそ違うが、我々の知るゴーレムに近い。
手を出さない限り襲って来ない中立だろう。

「その子は強いよ。勝てるかな？」

だが挨拶がてら、いきなり叩き潰す様に片手で殴り掛かってきた。
元の世界とは真逆の攻撃。両手万歳の高い高い攻撃ではない。

片手一発、暴力装置。

不意打。常識の違い。油断。

結果、同志の1人がモロに殴られる。

しかも床が抉れた。威力に驚くばかりだ。

「嘘っ!?! ああ攻撃でケロツとしてる!?!」

だが此方はダイヤエンチャント防具。

その程度の打撃、問題にならない。同志は空中で脚をジタバタし

ながら吹き飛ぶに留まった。

しかし強さはゴーレム級。油断禁物だ。

この遺跡を守護する備品なのかも知れないが、敵なら排除せざるを得ない。我々だけならまだしも、背中を追ってくれる子供達がいる。

それに少しは楽しませてくれるじゃないか！

クラフターはダイヤ剣を構えた。

押し通る！

「なによ青い防具に青い剣?! えっ、ちよつと待って!? まさか

ソレで一刀両断出来ちゃったりしないわよね!? そうよね!」

ゴーレムに走り込む。下る拳を回避し、速度を落とさず助走をつける。

そのままジャンプ。相手の頭から股にかけて全体重を載せた飛翔斬。

モロに喰らったゴーレム。

そのまま真つ二つ。最早微動だにしない。

……機能を停止した模様。

残心の構えを解く。拍子抜けの弱さだ。エンチャントダイヤ

剣とはいえ。

ひよつとしたら「やり過ぎ」だろうか。

「う、嘘?! アタシのエレメンタルコロツサスがたった一撃で!」

しかし妙だ。

先程から可愛らしいハアン声が響いている。

「あんなに頑丈な外殻が……通常の鋼材とはワケが違うのに……なんなのよ、あの青い剣……嘘よ。嘘ばっか。いえ噂通りのデタラメよ、あの人間共は……」

さつきからブツブツと。

ゴレムが喋ってる訳もなし、辺りを見回す。
いた。

小さな羽虫が。

音源はコレか。 近寄る。 スニーク姿勢でマジマジと観察する。

「……ひっ!? は、話せば分かるっ!!」

小さな村人に羽根が生えている見た目だ。

そして相変わらずのハアンだ。 何言ってるか分からん。

どうしようかコイツ。

蝙蝠みたいな存在か。 なら無害そうだが。

煩いし……処す? 処す?

同志同士で会議する。

常識に囚われてはならない世界だと思いついたところだし、コイツも安全そうに見せ掛けて危険かも知れない。

いやしかしなあ。 ハアン声だし。

何より直感が告げるのだ。

この小さき者もクラフターなのだ。

ならば同志ではないか?

いやいや荒らしの可能性が。

そしてやはりというか、ハアン通訳のシズが同伴しているのだし……結局、創造主達は後続を待つ事にしたのであった。

98. 応接と便宜

「ワタシは十大魔王が1柱、ラビリンスのラミスである！ さあ跪くがいい！ 具体的に言うとかイツらを何とかして下さいお願いします。 迷宮が破壊されたり改造してくるんであります。 責任取りやがれバカ！」

「妖精なのか……俺はスライムのリムル。 で、こちらは人間のシズさん。 アイツらの件は全て諦めろ。 誰にも制御出来ないからな」「真つ二つのゴーレムがいるね……ごめんなさい」

「本当よ！ ワタシの最高傑作なのに！」

合流したりムル達と羽虫の交流は長くなりそうだったから、クラフターは階段ブロックで椅子を作成した。 ついで原木を丸ごと用いたテーブルも用意する。

「また突然と……準備が良いけどさ」

応急的な応接セットだ。 総じて白樺製である。 その昼白色は薄暗い石造遺跡には似つかわしくないが、處として植林でも伐採でも便利な故に。

「はあ……まさか噂の人間がココにも来るとはね。 青く輝く剣と鎧で世界を侵略し、謎の魔法で物品や建物を創造し、何を総べるでもなく敗者にも等しく遇する。 一方では椅子にテーブル、クツキーやケーキとお持て成ししてくれるなんて。 静かに主人に侍る驚異の技術集団……私にも1人くらい頂戴よ！」

「色々ツツコミたいが訂正させてくれ。 先ず俺はコイツらの主人じゃない。 それから1人どころか全員くれてやりたいところだ。

出来たらだがな。 というか、お前には藩屏……部下がいるだろ。

1匹見たら何十匹いそうな。 既に周りにいっぱい飛んでるし」

「リムル、その言い方はちよつと……」

木材は多種多様な創造に用いる為、常にインベントリに常駐させている。

建材に家具に作業台、必需品のツールに松明と絶対に必要だからだ。

「そりやそうだけどき！　物作りとなれば知識と力が必要じゃない？　ゴーレムもそうだけど迷宮造りもそう！」

「規模も格式も心が通じなきや意味がない。　コイツらは基本自由人だから……頼み甲斐はあるが、それでも好き勝手にされる」

「でも通訳がいるんでしょ？」

「言つたら。　いても制御が出来ないんだよ」

「ごめんねリムル……」

「あ、いや、シズさんは悪くないんだ」

だから植林場は連邦にも開拓地にも必ず設ける。

最近では連邦の森を切り拓くのが厳しいので地下や他国の空き地を利用している。

あの植物村人トリオが邪魔してくるからだ。　どうもバイオームの自然景観を破壊されるのを嫌っているらしい。

なら最初から云えば良いものを。　あいや疎通が出来ないのであつた。　難儀である。

「そう……でもコイツらが興した噂の大都市や噂の機龍は見てみたいわね！　　摩天楼が無数に聳え、ドラゴンの様なゴーレムが守護する噂の国を！」

「噂ばかりだな。　仕方ないのかも知れないが」

「嘘じゃないんでしょ？」

「まあな。　実際に何度も見た光景だ……モノによっては前世から……うん……」

「おー！ やった！ 今すぐにも見てみたいわあ……壊された
ゴーレムね、実はドワーフ王国の研究所で造られた魔装兵の試作品を
再利用したものなの！」

「その話、時間掛かる？」

「胴体はいい線いつてたけどね、心臓部の精霊魔導核がだめだめで！

あれの動力は火の精霊が制御してるんだけど、そもそも通常の鋼
材じゃ精霊に耐えられないわけよ。 可動部は水の……」

「おーい。 帰ってこーい」

「ソレが今の人間の精霊工学の限界だつて早合点しかけたけどお!?

ドラゴン並みのデカさのゴーレムをヌルヌル動かせる技術大国と
凄い人間達がいるつて聞いたら……そりゃ興奮するでしょーがッ!!」

「そうか。 興奮しているトコ悪いんだが、たぶん機龍は精霊工学関
係無いぞ」

「えっマジで？ 尚更気になるんですけど!」

「……………見聞きした瞬間が最高点だ。 後は暴落するだけさ」

「そりゃアンタの都合でしょ」

よく鳴き、よく食べる羽虫だ。

だが微笑ましい。 テーブルにちよこんと座り、持ち込んだクツ
キーをバリバリ食べている。

静かにしている子供達もシズと同様に椅子に座り、周囲の羽虫に
クツキーを手渡して笑顔を浮かべていた。

遺跡にいながら優しい雰囲気になれる。 松明とは違った優しい
明るさ。 創造物を利用される喜びだけじゃない。

懐かしい温かさに、クラフターは目を細め頷いた。

「ワタシは転生と成長を繰り返してきたけれど、やっぱいつ何時も情
熱は必要よ。 そりゃ誰も来なくて鬼暇な時間が長い事もあるし、墮
落して魔王になったけど」

「墮落つて……」

「役目も大切だけどね、リムル。 アンタ自身の人生も楽しんだ方が

良いよ？ まっ、初対面に言える事じゃないけどさ」

「言ってんじやねえか……まあ、ご忠告どうも」

「シズもそうよ。 気負い過ぎない事ね」

「……そう、見えちやったかな」

「他にも感じるけどね。 なんか時流というか」

「えっ？」

「いや何でも無い何でも無い！ あ、そうだアンタ達！ 何か用

事があつて来たんじゃないの？」

「やつと本題に入れそうだな……実は子供達が——」

しかし、暇だ。 またしても暇だ。

無視して先に進んでも良いが、どうしてか放置する気になれない。

仕方ない。 両断したゴーレムを調査しよう。

そう思い立ち、残骸に群がる創造主。

クラフターとして興味があるのは事実だ。

目覚しい強さも斬新さも無かったが、今後の創造に何か役に立つかも知れない。

見てみた。

うん。 分からん。 全然分からん。

クラフターは首を傾げた。

クラフターだからって何でも瞬時に分かるワケじゃないのだ。

創造主だが万能ではない。 前に弁解したが。

だが素材は普通の鉄じゃなさそうだ。 研究材料として持ち帰れ

るだけ持ち帰ろう。 詳しい事は研究班に任せるか。

そう思い、会話を他所に各自手分けしてダイヤツルハシで解体、ストレージに仕舞い込む。 念の為シルクタッチを心掛けるのを忘れない。

それなりの強度がありそうでも、採掘の瞬間にホロリと崩れて欲しくない。

「——なるほどねえ。 この子達も苦勞してるんだねえ」

「そんなわけで、どうしても上位精霊の協力が必要なんだよ。 その

為に精霊女王に取り次いでもらいたい。精霊に詳しいラミスなら会ったことあるんじゃないか？」

「あれ言っただけじゃなかったけ？ エレメントってアタシの事だよ？」

「冗談言ってる場合じゃないんだけど!？」

「本当ですー!!」

「ラミスって、その、変わってるね？」

「それ褒めてないでしょ」

「いやそんな事は……少しあるかも」

「そこは嘘でも冗談でも良く言っただけですけど!」

「まあそんな事より」

「そんな事あるでしょ!」

「……協力してくれる気あるのか？」

そうだ。ゴーレムは備品かも知れない。

敵対したから斬り伏せてしまったが、この遺跡を守る役目として存在していたのなら話は別だ。

代わりのゴーレムを用意してあげよう。そうしよう。

「エレメントは聖なる者の導き手。勇者に聖霊の加護を授ける役目も担っているんだよ……いいよ。召喚に協力してあげる。せいぜいスゴイ精霊を呼び出すといいさー!」

鉄ブロックとカボチャを組み立て、先ずアイアンゴーレムを創造しておく。

「……ん？ あれ!? ワタシのゴーレムは!? 直せば再利用

出来たのに消す事ないじゃん! って、なんか代わりに見知らぬ

ゴーレムが動いてる! え!? なんか赤いバラ渡してきたんで

すけど! こ、これ完全に自立してるの!?! 本当に精霊関係なく

動いている……それとも知らない魔法? 仕組みが知りたいわね

「……!」

「お前ら、話が進まないから止めてくれ」

「まあまあリムル。 代わりを用意してあげただけだから」

凄く喜ばれた。

創造主としても嬉しい限りだ。

クラフターはその喜びのままに、雪ブロックとカボチャを組み立て、スノーゴーレムも創造してあげた。

サービス精神だ。 感謝して？

99. 時と空間

「凄い！　凄いぞ！　これは荘厳だ！」

目の前の小さな岩山、それに峙する光の道を双眼に捉えた時、興奮のあまり首と腰を滅茶苦茶に動かしながら闇雲なジャンプを繰り返しつつ、右手を最高速度で振り回す。

——シズに押さえつけられた。

「いい加減落ち着いて!?　これから大切な儀式があるから！」

「そろそろ斬るぞお前ら」

「僕達は何を見せられているんだ？」

「……ここは迷宮の最奥。　精霊の棲家よ」

恐怖で萎縮するクラフター。

この手は大人しくするに限る。

シズとリムルから発せられる殺気は理不尽かつ抗う術はない。

ふと振り返った瞬間のクリーパー並みのシヨックだ。

だが現在の様なゼロ距離は未経験だった。　初体験は良くも悪くも刺激的だが、まさか両腕で拘束してくるとは。　あれこれずっと共にいるにも関わらず村人の脅威の底が知れない。　あれこれずっと共

理由も解せない。　生産性の無い殺傷なら嫌う。

「さて。　誰から祈る？」

「じゃあ俺が1番で行ってやる！」

「何様!?　　なんであんたに譲らなきゃいけないの!？」

「たまには僕が最初になりたいよ！」

「いつそこで決着を付けるのはどうかな？」

「雰囲気が台無しになるくらい意気込みは充分みたいね」

「雰囲気ブレイカーなコイツらがいる時点で察してくれ」

「みんな……滑り台の順番決めじゃないんだよ」

落ち着く。 比例して子供が諍い始めた。

この子達にはシズもリムルも手を出さない。 それを知っての行為だ。 理不尽と思う事のひとつである。

「悪いけど、最初は僕から行くよ」

「……ゲイル」

長身金髪が神妙にハアンと鳴く。

それを合図にしてパタリ、と静かになった。

「皆、そんな顔しないで下さいよ。 シズ先生……約束は守ります」

「……背負わせちゃったね」

「そんな事ありません。 それにこうして戻って来てくれた」

「うん……リムルとこの人達のお陰だよ」

「ゲイル、いや皆も。 今度はお前達の番だな」

「はい。 じゃあ……行ってきます」

「俺もいこう。 シズさんは皆と此処に」

かと思えば、次には光の道を登り始めた。

なんとという事か。

何となく乗れそうな見た目だったが。 どんな素材で作ったんだ

？

「大切な儀式なの。 邪魔しちや駄目だよ」

頷く。 無闇な採掘はやめよう。

砂や砂利の様に、綻びが生じて崩壊したら困る。

だがしなきゃ良い。 という訳で一部はリムルについて行く事にした。

「本当に駄目だよ!？」

「お前らまで来るのか……署名とは違うんだぞ。最悪は斬り伏せてでも黙らすからな」

今までになく鬼気迫るリムル。

余程大切な儀式なのだ和我々に伝播する。

それがどの様なものかは知らないが、作業台のひとつとして置いてはならない。そう思った。

しかしまあ……この道は改修の余地がある。

スロープ状なのは良い。眩し過ぎないのも良い。

なんならこれ自体が光源となり湧き潰しの効果がある。新手的シヤンデリアだ。

だが柵を設けていない。無い方が見栄えは良いのだろうか、そこは悩ましい。製作者の苦勞が見え隠れしている。

そうこう考え、やがて頂まで登り詰めた。

そこはちよつとした光の広場だった。

何も無い。何を為す。今更松明と云うまい。

「先生、自分に何かあったらアイツらを頼みます」

「大丈夫だ。何かあっても俺達が助けるよ」

「先生……」

長身金髪がスニーク姿勢より低姿勢に。

両手を合わせてひとつの拳を作り閉目した。

成る程、と創造主は頷いた。

これが儀式か。相変わらず我々の知らない行為だ。何か作っている様には見えない。手慰みが出て来たら、まあ、そういう事だが。

「……過去に此処で上位精霊の呼び出しに成功した人間は？」

「……いるけど」

「エレメントとしてどうなんだその顔」

だが段々とワクワク顔になる。

この場所が如何な場所かは知らない。

知らないが、何かが起きる。 エンドポータルがエンダーアイで起動した様に、此処もその一種ではないだろうか。

「アンタの所為で嫌な奴の事思い出した。 あの時はアイツまだ少年だったけどさ。 特定の人物を異世界から召喚する方法が知りたいとか言って、知識に通ずる光の上位精霊を呼ぶ為に此処へ来たわけよ」

「で、召喚に成功したと。 良かったじゃん」

「良くない!! その精霊って勇者の資質を持った相手にしか応じないんだよ。 召喚に成功したって事はつまり、アイツが勇者だった事」

「じゃあその少年に聖霊の加護を授けたのか?」

「そう! それがアタシの役目だからね。なのにアイツ」

「待った」

「……来たみたいだね」

何か降ってきた。 雪か?!

いや雪ではない。

我々の知る雪はあんなにキラキラ輝いていない。 落下速度も雪より遅い。

じゃあ素材だ。

ワンパンで手に入りそうだ。 そうでなくても土並みか。 何でかそう感じた。

ならスコップだ。 スロットにあるダイヤスコップには耐久強化と効率強化のエンチャントを施してある。

「上位精霊には見えないな」

「んーとアレは……土属性の子が何体か来ているけど、みんな自我の無い下位精霊だよ」

「そうか……魔素の安定には上位精霊じゃなきゃ駄目だ……やるか」

「ちよつとアンタなにを……って、お連れさんがスコップ振り回して荒ぶってるんだけど!?!」

「ラミリス！ ソイツから見張っててくれ!?! ゲイル、そのまま祈ってる!」

「は、はい……」

リムルが前に出た。手を上に上げたと思えば次には素材が消える。

クラフターは悟った。リムルに奪われたと。

そうした時、思わず殴り掛かるところだった。

意気揚々と地下に潜った先、先発ブラマイ同志の背中を見た気分だ。

「キモツ!? 今度は首を滅茶苦茶に振り回してる!?! 本当に人間

なのコイツら!?! アンタもタダモノじゃないけど!」

「今は取り込み中だ、抑えてろ!」

「ええい! 者共かかれツ!」

「キシヤーツ!」

羽虫達が抑え込んで来た。

だが羽虫如きに止められる我々ではない。

そのまま一緒に荒ぶる。お前らも味わえ。

我々の無念と苦悩を。嫉妬と虚しさを。

蝙蝠は何もドロップしない様に、コイツらもその類だろう。無害であり無力であり鶏肋にもならない。なら分かる筈だ。我々の切なさ!

「あばばばばばツ!?!」

「すまない。君達の犠牲は無駄にしない」

「勝手に犠牲にしないでくれる!？」

『……告。ユニークスキル「変質者」により下位精霊の「統合」が完了致しました。イフリートの自我情報を素に擬似人格を作成し付与します……擬似上位精霊「地」が完成しました。ゲイル・ギブスンと「統合」しますか?』

「勿論、YES。頼むぞ大賢者」

刹那。荒ぶる景色でソレを見た。

鉄鎧一式を身に纏うナニカが現れたかと思えば、次には長身金髪と重なり……消えた。

クラフターは首を傾げた。何が起きたのかと。

「や、やっと安定した……」

「魔素の方もな。目を開けて良いぞゲイル。良く頑張ったな。もう大丈夫だ」

「せ、先生!」

「喜ぶのはまだ早いぞ。全員成功してから喜ぼう」

「……はいっ」

「ちよつとワタシには?」

「おー、ラミス達もありがとう。あと4人だ宜しく」

「言って聞かせた方が良いでしょうが!?! あと4回も持たないわよ!」

「言っても聞かないって言わなかったっけか? 良いから持たせろ。泣言は聞きたくない」

「召喚に協力してあげてるの忘れないでよね!?!」

まさかリムルがクラフトしたのか?

あの光玉から?

だが手元で創造出来る範囲なんて限られている。

作業台を始め、松明、キノコシチュウ、鋏、感圧板、ボタン、エン

ダーアイ……。

意外とあった。創造主は頷いた。

「ほら、コイツらも同意してるわよ！」

「偶然そう見えるだけだから。俺は詳しいんだ。次、アリス！」

「私ね！　みんな、行ってくる！」

金髪少女の声が聞こえる。

長身と交代するらしい。

順番といい兄妹だろうか。色的に。

「はあ……アンタの上位精霊を創り出す無茶苦茶といい、コイツらと
いい、非常識なところ……アイツを思い出すのよね」

まあ良い。

この流れなら後4回チャンスがある。

創造主はスロットを整理し始めた。ツール類に素早く切り換えられる様になっているのだ。

スコップは勿論、ツルハシ、斧、剣、忘れてはならぬ釣竿も用意。

意外と使える。

鍬？　それは要らない。

ダイヤで作るのも憚れる。

そうこうしている間にも次の儀式が始まる。

見ていて思う。微妙に子供の儀式態勢が異なるがコレは良いの
だろうか。座り方然り手の位置然り。

アイテムスロットに何を入れているのか知らないが、手ぶらとは
心配だ。思わず剣を投げ渡したくなるが踏み留まる。

リムルに滅多刺しにされそうだ。
それは避けたい。

「……アイツ？　ああ、さつき話してた光の精霊を召喚した勇者か」

「そう勇者。折角このワタシが聖霊の加護を授けて勇者認定したつてのにアイツ今、魔王になつてるらしいじゃん?」

「勇者なのに魔王になったのか?」

「そう!! 非常識でしょ!? しかもめぼしい情報が得られなかったとか言つて、八つ当たり気味に炎の上位精霊まで奪つてつたのよアイツ!!」

だが今は羽虫がヘイトを集めてくれている。

良いぞ。そのまま騒いでろ。

我々は採取を試みる。蝙蝠的な存在と天秤にかければ、蝙蝠が空へと舞い上がる。

仕方ないね、と首を振った。

「炎の上位精霊ってイフリートの事か?」

「え、そうだけど……なんで知つてんの?」

「じゃあアイツつてのは魔王レオン・クロムウエルのことか?」

「そう……だけど。え、なにアンタ。まさかレオンちゃんと友達なわけ?」

「いや。シズさんの……」

「へ?」

「何でもない。だが元勇者つてのは初耳だ。なんで勇者が魔王になつたんだ?」

「さあね。アイツも墮落したんじゃないの?」

「……ラミスも詳しく知らない、か」

「何よ! ワタシが本気を出せばワンパンよワンパン! いやホントに」

「しつ……来たか」

また光玉が現れた。

空から降つて来る自然現象の類なら、此処はバイオームとも取れる。

いやしかし……首をまた傾げた。

光玉が降るバイオームなんて前代未聞だ。

改めて問おう。 此処はどんな場所なのだ？

『告。 擬似上位精霊「空」を作成……成功しました。 アリス・ロン

ドと「統合」しますか？』

「YES」

またも刹那の出来事。

猫と村人を掛け合わせ、挙句に翼を生やした欲張りな生物が出て

……否。 リムルにクラフトされて生まれたモノが出た。

そのまま金髪少女に入り……また消えた。

先程より終始が早かった。

参った。 これじゃあ採取出来ないよお……。

「今度はコイツら大人しかったわね」

「いつもそうなら良いんだがな……もう大丈夫だ。 よく頑張ったな

アリス」

「……………」

「あ、泣く……お、おう!?!」

息を吐かせぬ間に、目の前で金髪少女がリムルに抱き着いた。 シ

ズの拘束に似て非なるものだ。 目の前で堂々正面突撃である。

そして金髪少女は衝動のまま、リムルに顔突き出し頬に唇を付ける。

ちゅっ、と小気味良い音が鼓膜を震わす。

「……特別だからね」

何と云う事だ……。

クラフターは戦慄するより他無い。

繁殖する気だ!? まだ子供なのに!!

まさかの情報量だった。

村人の全てを把握している訳でないにせよ、子供は繁殖出来ないのが創造主の常だった。

元世界でもそうだったし、この世界でもそれが世の理だと信じて疑わなかった。

ところが、どうだ。

衝撃の光景が脳裏に焼き付いて離れない。未だに金髪少女は顔を赤らめている。

アレは発情の一種だろう。小麦を与えていないのに、ナニが引金になったと云うのか。

「……ありがとうございます」

「ひゅーう」

一方、衝撃過ぎて妙に冷静な思考すら出来た。道理で繁殖現場を見ないのだと。

連邦と往来している万単位な村人の多くは大人サイズだ。子供もいるが、周囲の背や雑踏に紛れて余り注目しなかった。

まさか大人に埋もれた中で村人は増えていたとでも云うのだろうか。扉数ではなく環境がそうさせているとでも？

それとも村人の個人宅内で未知なる世界を拡げているのだろうか。今度突撃してみる他あるまい。

今回は幸か不幸か、リムルの発情が足りなかった。故に子供が生まれなかった様だが。

良かったと思う。リムルが繁殖したら大変だ。スライムイベントではなくウィザードイベントが始まりそうだし。

「次はケンヤ……大丈夫か？」

「へ、平気だつて！」

次が来た。

イケナイ。集中しなければ。隙あらば刈り取るのだ。光玉を。

と、身構える刹那にソレは現れた。

「いよー！　元気かい？　初めまして、オイラは光の精霊さ！」

「なんかでた!!」

なんかでた。

羽虫に似ている。だが雰囲気は別格だ。

少なくとも雪玉では無い。

しまった。

雪玉もスロットしておくべきか。

「自我もバリバリにある上位精霊、しかも光の精霊!？」

「キミ、名前は？」

「ケンヤ……」

「ケンちゃんかー!」

「ちよ……ちよつとアンタ!!　　何しに人の家に来てんのよ!？」

「だって勇者の資質を感じたからね。　来ちやった♡」

「ぐぬぬぬ……」

取り敢えず雪玉もセツトした。

丸石は外した。　攻撃こそ最大の防御。

「よく分からんが……ええと、その子を助けるのに力を貸して欲しいんだが」

「いいよん♪」

「軽っ」

「もしかしたらケンちゃんも勇者になれるかも知れないからね！

成長するまではオイラが保護するよ。　じゃね」
「勝手に宿った！」

また逃した。

いや良いか。　アレは素材じゃなさそうだし。
それにまだチャンスはある。

「先生……？」

「お、おうっ！　大丈夫、計画通りだ！」

「本当かよお……なんかヘンなカンジ」

「魔素は落ち着いてるよ……次はリョウタ」

やがて次が来た。　黒髪であった。

残機はこの子含めて2である。　何方も黒髪。

もう諦観的に傍観しているが、見届けねば。

隙あらば光玉捕獲だぜ。

儀式を見守る事暫し。

また光玉が現れた。

釣竿を振り翳し……止めた。　無性に水バケツも用意した方が良

いか頭を傾げる。

「来たー！」

そうこうしている間にまたリムルがクラフトし始めてしまった。

持ち帰らない辺り、この素材がなんであるか知り得ているのだから。
う。

リムルとは長い付き合いだが、未だに理解しかねる行為が数多見受けられる。　それはこれからもそうだし、ずっとそうだろう。　確証

は無い。　だが確信に近い自信がある。　この世界諸共。

『擬似上位精霊「水風」を作成……成功しました』

「関口良太に「統合」してくれ
『了』」

「なんか手際良くなってる……」

だが同志マインクラフターのひとりだ。
仲間である。少なくともそう信じている。

「え……もう終わり？」

「おう。もう大丈夫だぞ」

「残るは後ひとり……クロエだけだ」

いよいよ最後になってしまった。

最後の子供の名は……クロエだったか。

此処まで来ると、仕掛ける気が失せている創造主。 何故とは考え
ない。 故にと見守る。

時には立ち止まり思考する事も大切だと。

此処はそういう瞑想する精神の空間だったのやも知れない。

「心配しなくても大丈夫だよ」

「あつという間なんだから」

「そーそー。 頭にスルツと入ってお終い！」

「……それはお前だけなんだ、ケンヤ」

「リムル……クロエの事、お願いね」

「任せろシズさん」

クロエを抱き抱え、光の道を歩み始めるリムル。

あの行為も中々興味深い。 かの悪食悪魔リムルをトロツコの様
に扱うとは。 その間、リムルはマインドコントロールされているの
ではないだろうか。 舟みたいに。

我々も抱き抱えて貰えればリムルを操れるやも。 いや我々では
サドル付の豚に乗る様なものか。

なら人參付釣竿と併用すれば御せるやも知れぬ。今度試すか。リムルの目の前に人參をぶら下げて反応すれば良いだろう。成功の暁にはリムルを無力化だ。連邦を真の意味で征服出来る。今まで建築物にイチャモンばかり付けて迷惑してたのだ。やつと落ち着けるといふものだ。

「先生、あのね……あのね」

「うん？」

「だーだーだー好き！」

「俺も好きだよ」

「本当？」

「勿論さ……先生としてね。紳士だからね……せめてあと10年経ってから言つて欲しかった……いや寧ろ生前に言つて欲しかったな」

「あつ！　も、勿論みんなの事も好き！　シズ先生も、いっぱいいる副担任も！」

「………うん」

「リムル、なにその顔」

「いや別に」

クロエが別格の可能性も大いにあるが。

クロエが降車して儀式を始めた今なんて、リムルを動揺させている。

やはり只者ではない。あの悪魔を怯ますとは。皆して畏怖していると。

何やら懐かしくも避けたい感覚に襲われる。

妙に気怠い。だが鈍足の異常では無い。

この歪みは……アレと似ているが違うな。

「クロエ!!」

「え？」

目の前にて、また何か出た。

だが今までとは違う。

一般的なサイズの村人が宙に浮いている。

胸に膨らみを確認。

形状からして女と呼ばれる型。

いや、それはそれ。問題は別なのだ。

「精霊……なのか？」

『否。上位精霊と同様の精神体ですが、存在力が違います』

「精霊に呼び掛けたら、よく似た別の何かが現れたって事か？」

この感覚……妙な重さは創造主そのものというより世界そのものへの干渉だ。

時流の歪みと云うべきか。似た感覚、違和感は元世界でも味わった事がある。

アレだ。

繁殖に失敗した牛舎や村で味わったモノに似たナニかだ。

だが周囲には動物も村人もわんさかない。

更に深掘すれば万単位の村人がいる連邦ですら、この感覚は発生していない。

先程の繁殖未遂の時にも発生しなかった。

十中八九、原因はコイツだ。

残酷で寛容な世界を歪ます程にヤバい奴。

ヤバい荒らしなんじゃね、コレ。

「おいラミリス！　こりゃ一体……」

また刮目すべき行為を見た。

時荒らしがリムルに顔を突き出した。

嗚呼、またか。　また繁殖行為か。

奇しくも時荒らしと同様に冷めた様な顔になる創造主。我々は
ナニを見せられているのだろう。
そしてリムルは魅せられている。早く対処するべきなのに。
いつそリムルごと斬り伏せようか。

「待て!! させないよ! アンタの好きにはさせない!! 何も
せず今すぐ帰りな!!」

羽虫が喚く。

見やれば羽虫らしからぬ球を時荒らしに放つ。
が、避けられてしまった。我々でもそうする。

二重の意味で。

「ツ!! 動け! 動けお前ら!!」

リムルが叫んでいた。

時や空間が荒れているのか、我々の目が可笑しいのか。
そもそも言っているのか判らなかったが。

「シズさんの為に! 皆の為に!」

だがソレは悲痛に助けを求める様な。
懇願する様な。

しかし力強い意志を感じた顔だった。

「クロエの為に動けえツ!!!」

——!!

どこか遠く。 だけど近い声の中。
気付けば、時荒らしを吹き飛ばす創造主。

手には木剣。ノックバックエンチャント付。
創造主はクロエの盾になるべく前に出る。

「スピリチュアルボディを吹き飛ばした……？」

「あ、あんた達……本当に何者……？」

ゆらり、と。ソレは幽霊の様に戻って来た。

されど創造主は動揺一つとしてしない。

表情は冷めて。目は敵を見据えて。

そして云う。

上等だぞこのヤロウ。

実のところマインクラフターはキレていた。

建物を破壊されるのも嫌だが、時や空間を荒らす奴も同罪だからだ。

事実、わざとでなくても世界に負荷をかける奴は過去にもいた。

今もだ。

現在進行形。

「両眼に浮かぶ存在がそうである。」

100. 時荒らしと判断

「ラミリス、クロエを頼む！　コレは俺らが何とかする！」
「わ、分かった！　頼むわよ！」

時空の歪み。　伴う違和感。

過去幾度となく味わい続け、それがまた起きている。

原因は知れている。　目の前の時荒らしだ。　どういう形で、単独のみで世界に負荷を掛けているか知らないが、存在そのものがそうしているなら間引く他ない。　創造主は剣先を向ける。

「頼むぞお前ら！　魔法闘気の剣よりお前らの木の棒が有効だろうからな……！」

リムルも我々に倣い抜刀した。

クラフターは頷く。

短絡的だが、そうする他ない。　身体が動く内に。

時空間問題……元世界では厩舎や大村落、TTで主に発生していた。

建造物やRS回路高密度化で発生する際もある。

今回はソレとはやや異なるが、その類に違いない。　ならばこれ以上“重症”になる前に解決しなければ。

時空間問題は深刻だ。　創造主だけの問題ではない。　末期は世界そのものが崩壊する為である。

この問題は牛乳バケツやリスポーンで解決出来ないからタチが悪い。

初期症状で既に☒い。　円滑な行動が不可能になる。

足を1歩前に踏み出しても中々地に着かず、次には突然遠方にワープしていたり、何か壊れたり、石の中に嵌り窒息したり。

兎に角、思う様に身体が動かなくなる。　深刻な程に感覚は顕著

だ。 まともな創造1つも出来ない。 碌なものではない。
末期は時が止まる。 場合により暗黒……無に包まれる。 何も
知らなかった頃は混乱したものだ。

原因や解決策を見出してからは注意してきたが。
なに。 また実行するのみ。 原因も知れている。

目の前の時荒らしを間引く！

クラフターは踏み込んだ。 左手で雪玉を牽制投擲しつつ、右手の
木剣を振りかぶる。

駄目だ。 雪玉はすり抜ける。 剣は避けられ空を斬る。

「くっ!？」

リムルの剣も避けられた。

後方が遅れて矢を放つ。 これまたすり抜けた。 エンチャント
矢なら判らなかつたが無い物ねだりしても仕方ない。

この分だと黒曜石の壁もすり抜けそうだ。

だが剣は避ける。 つまり剣は効く。 何とか斬撃を浴びせねば。

しかし、相手は回避はすれど攻撃してこない。

本当に荒らしなのだろうか。

創造主は首を傾げた。

「ッ！ ラミリス！ クロエー！」

時荒らしはクロエに向かう。

目的は判らない。 でも守らねば。

だが速い。 追いつけない。 疑念を振り払い、慌てて俊足ポー
ションを足元で割る。

刹那、猛ダツシユ。 剣を握るが最後の砦の羽虫1匹に頼るしか
ない。

最初こそ蝙蝠程度の評価を下したが、先程の件を見た今は株が跳ね
上がりだ。

「帰れって言うてるでしょー！」

また魔法弾を放つ羽虫。

それも安易に避けられてしまったが、その隙に間合いに入り木剣を振る。

また回避行動を見せられたが、剣先が触れたらしい。遠くへ吹き飛んでくれた。だがまたゆらりと戻る。懲りない。

「しつこい奴ね！ とにかく此処を離れるしかないか……！」

羽虫とクロエが下へと逃れる。

ソレを時荒らしが追い掛ける。

耐久レースだ、これでは。

だが相手の目的がクロエだと分かった。何か怨みがあるのか知らないが、創造主からしたら知っちゃこつちやない。

「リムルツ！」

「シズさん！」

シズが異常を察して加勢に登ってきた。

既に抜剣している。だがソレはノーエンチャント鉄剣だ。恐

らく効果を期待出来ない。

やはり主役は我々だ。

同志は装備をそれぞれ変更。

弓矢組はエンチャント台を設置。

低レベルでも構わないとばかりに何かしらのコーティングを施す。

ついでに釣竿にも施す。倒すより時間を稼ぐのが肝要だ。

一方で隙あらば掻き消すべく、ダイヤエンチャント剣を構える者もいる。

素早い手持ちで二剣流にて呐喊。後方は援護するべく釣竿でブ

イを投げた。拘束を試みる。
上手くいった。釣り寄せた。

「そういう風にも使えるのかよ!?!」
「それよりクロエを!」

このチャンスを逃す創造主では無い。
ダイヤ剣持ちがすれ違いざまに斬り伏せる。だが引き寄せられながらも避けられた。素早い身のこなしに敵ながら讃える他ない。歴戦の創造主をもってして息を呑む。やれてガードが精一杯だ。負けじと反転、弓矢を絞るが既っていない。創造主は首をグリグリ動かし索敵。

「上ツ!」

シズが叫ぶ。

上だ。我々の剣が届かぬ高度だと認知した刹那、クロエに急降下。猛進だ。

同志が一齐に弓矢を放つも、器用に避けつつ落ちてくる。

「くっ!」

何が何でも。

まるで定められた結末。

無理だ! 阻止出来ない!

諦めるな! 考えろ!

無いなら作れ! 何時もそうしてきた!

我々はマルチクラフターだろ!

クロエの近く、護衛のシズが剣を構えている。

もうクロエに触れようとした瞬間しか攻撃のチャンスが無いのを悟っている。

「私はッ！　　もう失わない……ッ！」

決意していた。

どうして仲間が覚悟して、我々は諦観出来ようか。それぞれがインベントリを開く。

周囲を見やる。

最低レベル、無造作に置かれたエンチャント台。

村人との取引用の金インゴット。

必要不可欠の白樺木材。

遊び半分で持ち出した跳躍ポーション。

嗚呼、そうだ。

クラフターは熟知しているのだ。　世界に対抗する手段を。　逆境に絶望するどころか、遥かな希望の光をスルリと引き寄せる術を。

——託そう。

クラフター同士は頷き合う。

群は諦め悪く矢を放ち。

汝は作業台で金剣を創造し。

我は剣に何かしらのエンチャントを施す。

彼は下段のシズに投げる。

己は跳躍ポーションを少女に投げ割った。

「ッ！」

少女……シズは鉄剣を放り、金剣を手にする。

飛べシズ！

賽は投げられた。　断行せよ。

「はあっ！」

シズが飛んだ。

通常の跳躍より高く、クロエの頭上で時荒らしと交差する。

残心の構えで着地するシズ。

ポカンとする羽虫とクロエ。

よろよろと落ちる時荒らし。

死に逝く蝶の様。　　されど儂く美しい。

「シズさんッ！　　クロエッ！」

リムルが遅れてシズの元へ。

我々も做う様に同じレベル帯へ。　　油断大敵。

倒れている虫の息の時荒らしを囲み、剣を構える。　　念の為釣竿の

ブイを引っ掛けておく。

リールは駄目だった。　　やはり何かしらエンチャントが施されて

いないと干渉出来ないらしい。

「クラフター」さん……ありがとう」

礼を云われた。　　反射的にお辞儀しておく。

だが全ては終わってない。

目の前の存在は消えていない。

「……そうだね」

我々としては止めを刺し消すべきだと具申する。

このまま放置すれば、どの様な影響が及ぶか判らない。

時空の違和感はそのままに我々と世界を不機嫌にさせる。

「ラミリス、コレは一体？」

「わっかんないわよ！　アタシも詳しくは分からない！　でもやばいやつよ。　存在自体に時間軸のズレを感じる。　たぶん未来から来たのよ。　この時代に現れた理由なんて知らないけど……この子に宿るのが目的みたいね」

「そうになると、どうなるんだ？」

「きつとこの時代での干渉が切っ掛けで未来が大変なことに……」

「鵜呑みにするなら処分した方が良さそうだが。　ラミリスもよく分からないんだろ？」

「ま、まあ……でも少しは……」

時荒らしが手を伸ばしてきた。
倒れた姿勢で。

「ッ！　下がれ！」

満身創痍といった雰囲気だが、同情する程クラフターは聖人ではない。
い。

クラフターはダイヤ剣を振り上げた。　止めだ。

シズの判断を待たずに処刑しようとした、その時。

「待って！」

シズではない声に止められる。
クロエだ。

「私に逢いに来てくれたんだよね」

「何をしたいのか分からないんだぞ」

「あのね先生。　祈っている時、不思議な感じだったの。　様々な光景が一瞬で……まるで絵本をパラパラと捲っている様な。　懐かしいけど思い出せない、不思議な感じ。　今もそう」

「……………」

「一緒になれば、今すぐじゃなくても何か分かる。そんな気がするの」

「ラミス」

「普通なら反対だけど。子供を導いてあげるのが大人の務めでしょ。いつの時代もさ」

「子供を信じてあげるのも大人かな」

「……悪魔よりは良いでしょう」

クロエも手を伸ばす。

誰も止めない。それどころか剣を収めた。
なら良いか。

我々も武装解除。

先程までの激闘はなんだったのやら。

まあでも。それがリムルとシズの判断なら多分大丈夫だろう。
何とはなしに。だけど、どこか誇らしい。

ベイクドポテトを食べつつ、そう思う。

やがて互いの手が触れ合った。

瞬間、他の子供達同様にスッと消える。

「……クロエの魔素が安定した」

「苦しかったり痛いところは無い？」

「うん。大丈夫」

相変わらずこの世界は謎に満ちている。

その方が良いが。楽しみ甲斐があるというもの。

「先生、みんな」

声を掛けられた気がして、クロエを見る。
良い笑顔だ。

「ありがとう」

創造主もまた、莞爾として頷いた。

不穩

101. 魔女と半身

リムルとシズに同伴した同志から連絡。

どうやら粗方問題が片付いたとの事。 一部は観光や開拓の為に

残留し、一部は帰還する手筈だ。

出来ればリムルとシズ含め帰省して欲しいが。

今は戦力が欲しいからに。

というのも。

同志がいるイングラシアから北東、ファルムス王国に不穏な動きが見受けられるのだ。

現地武装集団の挙動が妙だし、一部は斥候なのか連邦近郊まで出張るまでである。

今のところ武力衝突は起きていないものの、呑気な村人と剣呑な村人ではまるで違う。

いつその事、彼の国や野営陣地を征圧したい。

当方、迎撃の用意有り。 IRPもいる。

新型砲弾も試したい。 前はクリーパー柄の辛辣同志に阻止されたし。

だが国政とは複雑難解だ。 先手を打てば逆に不利になるかも知れない。

確実に荒らしだと判れば躊躇しないのに。

最近に至っては、ヨウム一団まで来国。

まあ、それ自体は時々あるのだが問題は別にあった。

「な、スゲー国だろミュウラン？」

「……そうね。 人と魔物が手を取り合っている」

得体の知れない奴がいたのだ。

マントを羽織り風貌は他と異なる。
雰囲気も違う。

ヨウム達が来てから、IRPのBBが謎の信号を傍受したとの報告もある。

混濁する連邦だが、それにしても異質。偏見だとしても外様は警戒して然るべきである。

「それだけじゃねえ。この発達の度合いはどうだ。摩天楼が何十基と聳え、多くの人魔が行き交い、それでいて綺麗な街並みだ。飯は美味しいし、道端の水路や広場の噴水なんてそのまま飲んでも安全な位にな。それもこれも例の人間達のお陰さ」

「えらく肩を持つのね」
「そりゃ世話になってるからな。ファルムスのしけた故郷とは雲泥の差さ」

動向が気になる。

近郊をウロチヨロしている武装集団もいるから、哨戒しなければ。人員は限られる。皆に警告しつつ僅かな創造主のみでヨウム一向の監視の任に着く。

密偵や内部工作員の概念はクラフターにもある。
創造主同士の団体戦で稀にあった。

この世界にもある概念だろう。そう思う程危険である。互いの常識が完全に的外れな騒ぎになる訳ではない。

「つけられているのだけど」

「例の人間達だ。言葉は通じないが害は無いぜ、たぶん」

「たぶん……？」

「挙動が奇妙でな。なにを考えているのか分からないんだが……きつとミュウランが珍しいのさ」

「まさか正体に気付いて……？」

「何か言ったか？」

「何でも無い。ところで何処に向かっているの？」

「訓練場。リムルの旦那がいないっても、挨拶回りはしないとな……師匠のところにも」

「急に嫌そうな顔ね」

やがて訓練場に行き着く創造主。

遠くでゴブタがハクロウに吹き飛ばされている。

これはアレか。この者らもハクロウに挑みにきたのか。

ヨウムはいつもボコボコにされているからな。

そう考えると、謎の村人はその助っ人か。合点がいき領いた。

「よおグルーシス……って、なんて有様だよ」

「……ハクロウ殿は正真正銘の鬼だな」

「ユーラザニアの戦士が情けねえな」

「うっせえよ」

今度は他国の村人と鳴き合っている。

何時ぞやの獣染みた国の者だ。この村人もハクロウに伸されている1人である。

「つと、そちらは？」

「コイツはミュウラン。ウチで1番の手練れだ」

「1番？ ヨウム、こんな線の細い女に負けたのか。情けねえのはどっちだよ？」

「なんだと？ じゃあ戦ってみろよ。もし勝てたらお前の事、兄貴って呼んでやる」

「なら俺がこの女に負けたら、お前の舎弟になってやる」
「言ったな？ という訳だ、やっちまえミュウラン！」

伸される者同士、喧嘩する程仲が良い。

怪しい村人は調子についていけないが。

「あのねヨウム。私がこの喧嘩を受ける理由が無いのだけれど」

「理由ならある！ お前が侮られるのは俺が許せねえ！ それ
理由だ！」

「……分かったわよ」

と思ったが、完全にそうじゃない様子。

どうやら促されて戦闘を行う事になった。

見てみよう。どの様な戦闘だろうか。 ウイツチみたいに悪性
ポーシオンを投げ付けてくるのだろうか。

と思ったのだが、これまた違った。

獣村人側が接近しようとした刹那、不思議な事が起きた。

時流が歪んだ感覚は無かったが、代わりに地面が歪んだのだ。

そこに足を突っ込んだ獣村人が沈んでしまい、そのまま半身埋まっ
てしまった。

「ふっ……ぶははははっ！ ほら見やがれ、いいザマじゃねえか！」

どうやら身動きを封じられたらしい。

新手の攻撃手法か。 どうやったのやら。

埋まる事自体は不思議と思わないが。 我々も経験済みだし。

なんなら全身生き埋め。

砂漠バイオームとか採掘中とか。 重力に引かれて砂や砂利が
降ってくるのは珍しくも何とも無い。

強いて言えば、目の前みたいにフラット面に埋まるのは珍妙である
事か。

「面白いから人呼んで来ようぜミュウラン」

「それでも英雄かつ！ 早く手え貸せ!!」

ジャンプして出れば良いのに。

村人だつてジャンプくらい出来る訳だし。それとも村人は半身封じられると動けないのだろうか。どうもその様子である。

窒息ダメージがないだけマシだ。全身を埋められたら死んでいく。それも落ち着いてスコップやツルハシを振り回せば助かる事が多い。砂利や砂なら松明を使えば一気に回収出来るし、素早くやれば落下を堰き止められる。

取り敢えず助けるのは容易だが……暫く見ていよう。自力で出られるなら越した事はない。何より面白い。悪戯心が湧く。流石に黒曜石で覆う事はしないけれど。

「あつ、お前ら助けしてくれるのか……つて松明を周りに刺すんじやねえよ!?!」

「ひー!　　苦しい……ははははッ!」

「……話通りの奇妙な人達ね」

「覚えてろよチクチョー!?!」

松明で囲み明るくしてあげた。

皆も笑っている。そうだ、笑顔が1番。

102. 騎士団長と天誅

リムルは暫く教師をした後、お別れとなった。
ここまで色々あったとしみじみ思う。

謎の時荒らしと対峙した後、あの羽虫達を守るゴーレムもどきをリムルが召喚したり、子供達だけで冒険させたり。

我々としても学びある日々だった。また会いたい。シズとも一時お別れだ。なんでも暫し子供達を見守ると云う。

寂しくないと言えば嘘になる。だがそれぞれの道だ。胸を張って歩みなさい。

クラフターの数だけ創造と冒険が待っている。

「シズ先生の言う事を聞いて、しっかりと勉強しろよ。別れは辛いが二度と会えないワケじゃない。休みになったら遊びに来ると良い。

シズさんも、また」

「さようならリムル先生！」

「ありがとうリムル、みんな」

「じゃあまたな！」

こうしてリムルとクラフターは連邦へ帰路に着く。

といっても少し郊外を歩くだけ。人目のない場所に設置されているポータルに入ればサクツと帰れる。

はず、だったのだが。

「……あれ？」

ワープしない。

故障か？

生憎我々は直し方が分からないぞ。

エンドポータルやネザーゲートとは異なる見た目だ。

知り得る

材料ではどうにもならない可能性が高い。

この手は携わったクラフターに頼るのが早いだろう。詰まるところリムルを見た。

『告。 広範囲結界に囚われました。 結界の外への空間干渉系の能力は封じられました』

「結界!? なんでもんなものが……」

慌てふためいている。 駄目だ。

クラフターは首を振る。

この場にいる者ではどうにもならなそうだ。

なら地下鉄を利用すれば良い。

と、踵を返した時ソレは現れた。

「初めましてかな」

声の方向。

知らない村人が立っていた。 黒髪で、しかし全体的に白い服装。

既に抜剣している。

恐らく騎士団絡みの奴だ。 見た目的にも。

クラフターは辟易した。

とうとう都市外まで出張ってきたかと。

面倒だ。 それも此奴は只者ではない。

今までは直接戦闘を回避してきたが……此奴相手には通じない。

創造主は直感する。 長年の経験が警報を鳴らしているのだ。

剣を交える他ない。 あと釣竿とか雪玉とかツルハシとかスコップとか。

「もうすぐサヨナラだけど」

殺気を放ちつつ近寄って来る白服黒髪。

相変わらず敵味方の識別が困難な世界だ。

数多い村人なんて一々記憶していないとはいえ、こんなにも怨みを買う事をしただろうか。

ドラゴンだって倒してあげたのに。

クラフターは溜息を吐く。

吐きつつ……静かに抜剣。既にダイヤモンドフルフォース。

ガチ臨戦態勢。

「おいお前ら、いきなりな挨拶だぞ」

「いいのよ。私もそのつもりだし」

「穏便にいかないか？ 俺は冒険者の……いや。テンペストの国

主、リムルⅡテンペスト。改めて初めまして。西方聖教会の聖騎

士団長ヒナタ・サカグチ」

「へえ物知りなのね。魔物のくせに」

リムルと鳴き合い始めた。

平和に行くとは思えないが。暫し任せる。

「偏見は止めろ。それとな、コイツらまで魔物扱いはしてくれるなよ」

「魔物みたいなものでしょ」

「みたいなもの、だ。人間かも怪しいが」

「でしょうね。大都市を短期間で建設出来るのだし。それに飽き足らず世界中で問題を起こしている……天魔大戦の勃発を早めたいのかしら」

「……？ 蔓延している様に言ってくれるな。逆に環境が良くなった場所もあるだろ。俺らも迷惑しているけどな、悪意で他者を傷付ける連中じゃない」

もう良い？

殺つちやいますか？

殺っちゃいましょうよ。

その為の右手。　その為の剣。

後、釣竿と雪玉とツルハシとスコップと建材。

それとその他諸々。　左手も忘れずに。

忘れず”保険”も入れておく。

「問題があるのも事実でしょ。　事実上の他国侵攻ね。　気が付いたら彼等が住み着いて好き勝手。　まるで寄生虫。　世界に蔓延る病。

最早取り返しのない状態まできている。　教会としてもね、彼等の本拠地である君の国が邪魔なのよ。　だからね、先ず盟主の君を殺す事にした」

「……人魔が手を取り合う国は嫌いか？」

「やめて。　反吐が出る」

「本心か？　　裏に誰が？　　本当の目的は？　　俺が魔物だと誰に

聞いた？」

「……密告があつたのよ」

「上手く人間に擬態していたんだが。　コイツらと一緒にいたからな

……流石に足がついたか」

「そんなところじゃない？」

もう良いですかね？

向こうからの殺気が収まらない。

会話をしている分、感情任せに来ていないのは分かるのだが。

これはアレか。　先に手を出すと言い訳出来ないからか。　待つているのか。

「そろそろ始めて良いかな？」

ならさっさと仕掛けてこい。

創造主は腕をぐるんぐるん動かし、愉快にスニーク姿勢を見せて右往左往する。

ポーションを飲んで攻撃力や走力を強化して見せた。金林檎も齧る。挑発しているのだ。

時は金なり。此方としても騎士団には恨みがある。マツピングの頃からだ。

良くもまあ良くも。矢で針山にしようとし、剣で切り刻もうとしてくれたなど。

群れて襲いやがって。ゾンビピッグマンか貴様らは。今度は此方の番だ。

単騎だろうと殺る気は負けない。なんなら奴等の本拠地も知り得ている。

此処よりも更に西、神聖法皇国ルベリオスだ。

魔物を倒すとしながら、領内にいるアレらはなんなんだ。

欺瞞に満ちた平和と平等の国。

妥協し享受した白昼夢。

茶番な自由。理想郷の模造品――。

「……先に手を出されたって事で良いか？」

「此方とはとくに手を出されているのよ。それに……」

『警告。能力各種に広範囲結界からの圧力を確認。魔法系統の能力は全て制限を受けます』

「魔物の言葉に興味はない」

不意に刺突を繰り出される。

創造主は待つてましたと、丸石の壁を創造して防いだ。

中々早い動き。

だが此方も老兵足るクラフターだ。新参なら兎も角、これ位なら追い付ける。ハクロウの方がよっぽどだ。

「へえ。情報通り奇妙なスキル、いやアーツ両方かな。それに対魔結界、魔素が浄化されるホーリーフィールド内でも問題の無さそうな動き。やはり貴方達は異様な存在」

「結界はお前の仕業か」

「そう。西方聖教会が誇る究極の対魔結界。魔素を活動源とする魔物は存在維持に力の大半を使わざるを得ない。下位の魔物なら消滅するわね」

「通りで体が重い訳だよ」

壁を迂回し、連撃を繰り出してきた。

直ぐ凌ぐ。盾と剣ガードを併用して隙を見極めては剣を振る。

その中でリムルに加勢して欲しいのだが。どうも鈍足の異常を受けた様子。後で牛乳を飲ませてあげないと……。

「凌いでばかりで躲さないの？ 君も参戦しないなんて随分余裕あるのね。それとも手下にやらせて高みの見物？」

「訂正させて貰う。コイツらは手下じゃない。強いて言うなら悪友だ。それと剣劇はやりたい者同士でやっている。俺は御免だね」

「散々偉そうにして、助けないのね」

「足手纏いになりたくないだけさ。コイツらを舐めるなよ」

ダイヤ剣から瞬時に木剣に切り替え。

連撃の合間を縫い斬り伏せる。剣ガードされたが、そんなの関係ない。

「ッ！」

吹き飛ぶ黒髪白服。

馴染みつつあるノックバックエンチャントの木剣だ。当たれば飛ぶ。

創造主は間髪入れず釣竿を投げ付けた。

足にフックが引っ掛かるのを確認。そのまま思いつき引き寄せ、すれ違いざまにダイヤ剣を振り下ろす。

「小賢しいツ！」

が、剣ガードで防がれた。

また木剣を使って手車にしてやれば良かった。 甚振るには良い案だ。

リードを付けて高所から吊り下げるのも可。

「……シズさんが見たら悲しむぞ」

「先生の姿でそれを言う？ 騙るのは止めて」

「シズさんを助けたコイツらに剣を向けるというのは——」

「恩師と仰げと？ 冗談キツイわ」

間合いを取り弓矢を放つ。

が、避けられた。 並みじゃない。

また接近してくる。 剣のみで攻撃してくるなら寄せなければ良い。

クラフターは水バケツをひっくり返し、水流で押し流す。 足が鈍ったところに負傷のポジションを投げ付けた。

「多彩な技術力。 あとどれくらい持っているのか知らないけれど……」

また避けられた。

剣で割るなりしてくれたなら良かったのに。

そこまで馬鹿じゃない様だ。

やはり強者だ。 だが負けん。 やり様はある。

地面に潜るとか、エンダーパールで一気に間合いを詰めるとか。 毒も試していない。

TNTは避けられそうだが、マグマはどうだ。

「纏めて浄化してあげる。それなら寂しくないでしょう?」

急に剣を収めた。

彼方も剣以外で戦うか。何が来るのか。ここまで来ると興奮冷めやらぬ。

くだんの団体には恨みがあるが、今や黒髪白服を個体としても対峙している創造主。

ワクワクしている。命のやり取り中だというのに。

「精霊召喚」

突如、何体もの浮遊者が現れ襲撃してくる。

迷宮に現れた浮遊体の仲間だろうか。

なんにせよ敵だ。今更ながら相手になってやる。

「神へ祈りを捧げ給う。我は望み聖霊の御力を欲する。我が願い

聞き届け給え」

ノックバックエンチャントの木剣に切り替え、各個吹き飛ばす。

邪魔だ。どけ。

「何か詠唱を始めたぞ。気を付けろ」

その隙に黒髪に接近。途中必殺ダイヤ剣に持ち替えつつ走力を強化したままに、一気に間合いを詰めていく。

が、また浮遊体に邪魔された。仕方なし、エンダーパールを黒髪の側に投げ付けた。

「万物よ尽き……ッ!」

咄嗟の抜剣で防がれる。

ワープ寸前、絶妙なタイミングで剣を振り下ろしたというのに。とりま、溶岩バケツをひっくり返す。加えてTNTを設置。遠くから火矢で着火、起爆させた。

「ぐっ！」

爆発。震える空気。抉れる大地。

多少相手を怯ませられた。

だがそれだけに留まる。

「詠唱は止められたか。だがまあ……いつになく派手にやるな、お前ら」

リムル。傍観していないで加勢しろ。

長期戦になりつつあるんだぞ。

いつの間にか浮遊体は消えてくれたが、次は何をしてくるやら。

だが反撃の隙を与えない。丁度距離が出来たので、弓矢の一斉射

撃を敢行。

マグマ越し、横殴りの豪雨が黒髪を襲う。

一部は火を纏い、隙間なき弾幕となる。

「……ッ！」

剣を高速で振りまくり弾かれた。

驚きだ。我々なら壁や盾で防ぐのに。

それでも数本は当てた。だが戦意を削ぐには至らない。行動

も問題無さそうだ。

「もう良い。笑えないだろ、お互いに」

リムルがまた鳴く。

止める暇があるなら剣を抜いて欲しい。
それでも任せる創造主。　かのピンクーストームを沈静化させた
手腕は買っている。

「魔物の殲滅が教義だつてのは知ってるよ。　でも今俺やコイツらを
潰したからなんだって話だ。　お前も言っていた様に、コイツらは世
界中に散らばった。　それも虱潰しに消しても何度も現れる。　”
全く同じ存在”がね」

「なら何度でも倒すまで」

駄目みたいです。　クラフターは諦めた。

もう良いや。　実験も兼ねて滅ぼそう。

クラフターは遠方に連絡を取って実行に移した。

リムルには悪いが犠牲になって貰おう。

このスライムにも日頃の恨みがあるし。

「根比べならお薦め出来ない。　間違いなく負けるよ、お前達全員が。
コイツら相手に無理矢理な解決なんて恐らく出来やしない。　腫
物に触れば触るほど酷くなる。　問題は深刻化する。　そしたら教
会だけじゃない、全てが滅ぼされる。　嘘じゃないぞ」

「芽は早い内に摘むべきなのよ」

「遅過ぎたんだ、君達……いや。　俺達は」

もうすぐ時間だ。

保険が降って来る。　各々はスコップやツルハシで塹壕を掘って
飛び込んだ。

意味はないが気持ちの問題だったりする。　左手には牛乳バケツ。
これは気持ちだけじゃない。

「――魔物と人間が共存共栄出来る国。　棲み分け出来ているなら
……」

刹那。再度爆音。

されど白硝煙ではなく紫煙。それが辺り一面に拡がった。さながら巨大スプラッシュポーションが割れたかの様だ。

「なんだこの煙……うぐつ!？」

「ど、毒……普通じゃ、ない……」

あつという間に猛毒異常に。

煙は即消えるがダメージを喰らうクラフター。

寒気もあれば焼かれる苦痛、全身を内と外から全力で攻撃されている激痛。

奈落やマグマに墮ちる以上の苦しみがこの場にいる全員に襲い掛かる。

慌ててクラフターは牛乳バケツを一气飲み。状態異常を解消する事に成功させる。

塹壕から這い出てリムルと黒髪を見やった。

白目を剥いて口から泡を吹いている。

恐ろしい……。

だが実験は成功だ!

どうだ! IRPの砲撃及び新型砲弾の威力は!

クラフターは嬉々と戦慄と共に身を震わせる他ない。

シオンの汚物の兵器転用に成功したぞ!

毒物に耐性があるリムルもこのザマだ!

「お、お前ら……とは共存したく、ない……」

取り敢えず2人にも牛乳を飲ませておく。

せめての礼だ。実験協力ありがとう!

103. 荒らしと荒らし

「はー？　ちよつとオカシクね？」

柄が悪い3人組がやって来た。

かのトリオとは全然風貌が異なる。

絶賛警戒中の連邦だ。　村人の入国審査はガバガバでも我々の目は厳しく誤魔化せない。

「余所の国の行商や観光してる人間、それに例の人達もいるね」

「そんなのどうでもいいし！　ぶっちゃけこの都市ファームスよりキレイくね？　てか日本を思い出すんですけど!？」

「なんでビルが聳えてんだ……」

例により鳴き始めた。

今はビル群を見上げて吼えている。

まあ、それは新参の村人に良く見られる行為だ。

いつ見ても評価を下されていると思う程に喜ばしい。　苦勞して建設した甲斐がある。

だがそれとこれは別問題。

コイツらが荒らしでない証左にはならない。　引き続き監視の目を緩めない。

「といつても物騒だよ。　例の人達に監視され続けている。　真剣や弓矢を構えられてね。　それに郊外に鎮座していたのは単なるオブジェクトじゃないだろうし。　それも何処かで見ただ事がある気がするデザインなんだけど……思い出せないや」

「あ？　大丈夫だって。　騒ぎを起こして森で待機してる連中が突入する機を作れつてのが命令だろ？　丁度良いじゃねーか」

やがて1人が寄って来る。

目付きが悪く、1番柄が悪そうだ。

殴ってこようものなら斬り返す。倍返しだ。

「おうおう何ガンくれてんだ？ 文句あるならハッキリ言えよ、あ
あッ？」

スニーク姿勢で下から見上げられた。

様子見の挨拶か。柄が悪い癖して律儀な事。

何にせよ応えねば無作法というもの。此方もスニーク。お辞
儀した。

「メンチ切り返してんじゃねえよ!? やるならやってこいやー！」

「やっちゃえショウゴー！」

「いやいや先に手を出したら駄目ですよ。それに欲しい事実は魔物
が人間に手を出した行為。相手が人間じゃ色々違ってくるような
……」

「問題ねえ。コイツらは教会も魔物扱いしてんだ。同じモンだ」

「まあ、それもそっか。見た目の問題だね」

問題を起こしている様で微妙な線を突いてくる。

面倒だ。堂々荒らしてくれば斬れるのに。

「キレ合ってる場合じゃないっしょ。ギャラリー増えて面倒なっか
ら」

「キララに言われたかねえよ」

「ソレどーゆー意味よ!?!」

「そういうとこだと思うな」

「はあ!? キョウヤまでヒドッ！」

ハアンハアン煩い。

そうこうしている所為で人集りが出来てきた。

遂にはシオンとシユナまでやって来る。

正直来ないで欲しかった。

一般村人と異なるからだ。騒ぐと後で怒られる。

リムルやシズ程じゃないが。それでも怒られて良い気はしない。

クラフターはゲンナリした。

「これは何事ですか？」

「異様な雰囲気を感じ来てみれば……」

「ほら面倒臭くなったじゃん！」

「俺の所為じゃねえ。コイツらが悪いんだ」

「……仕方ない。キララ、頼んだよ」

「おっけー！」

今度は女が前に来た。

今度こそ襲って来るか。

どんとこい。荒らしの事実が欲しい。そうすれば無遠慮に攻

撃出来る。

然しもの2人も許すだろう。手を出したのは向こうな訳だし。

「お前ら、殴って来い！」

駄目だ。襲って来ない。喚かれたただけだ。

無性に殴りたくなってきた。

イライラするので牛乳を飲んで落ち着く。クラフターは深呼吸。

いけない。危うく相手の術中に嵌り先手を出すところだった。

思う壺になるのは1番嫌だ。相手が荒らしなら尚更だ。

「なんで殴って来ないワケ!？」

「苛ついた素振りがあったけど。レジスト? いやそれにしては

……」

「カルシウム取れば済む話じゃねえだろ」

どうしたものか。

喚くだけで害が無いなら、シオン達に任せてしまおうか。

外には武装集団がいる。あまり構ってられない。忙しいのだ。楽しむ意味でも。

「なるほど。これは声を波長に変換して脳波に干渉するスキルなのです。とても恐ろしい力ですので、我が国での使用は禁止させていただきます。我が国を好んでお出でくださった皆さまを殺そうとする力——どうぞお引き取りを。貴女様とお連れ様はこの国に相応しくないようです」

「へーえ。アンタここの偉い人？　そういう態度とるんだ……つてか、魔物つて美人いるんじゃない。教えとけよあのジジイ」

「下種め。下卑た考えが顔に出ているぞ」

鳴き合い始めた。交渉か。

後は任せよう。いや碌な事にならないそうだから、せめて側にいよう。

特にシオンだ。前に建造物を破壊してくれた前科がある。金林檎を食わせた時だ。

ミリムよりマシンな被害でも、破壊されるのは気分が悪い。クリーパーと何方が良いのだろう。

「このまま素直に都市から出るならよし。さもなければ、その命ないものと思うがいい」

「面白え。実力差を体に教えてやるよ」

「……やれやれ。どっちが先に手を出したか微妙なカンジになっちゃったな」

険悪だ。これまた駄目みたいですね……。

何度目か分からない交渉失敗現場。もう珍しくも何とも無い。いい加減耐性がついてくる。大切なのはその後だ。

「ま、いいか。僕も自分の能力を試してみたかったんだ」

「叩きのめされなければ理解出来ないようですね。では相手になつてあげましょう」

大太刀を街道の煉瓦に突き刺すシオン。

煉瓦の一部が僅かに浮き出る。

クラフターは刮目して荒ぶった。

なんて事をしてくれるんだ！

煉瓦が傷付いたじやないか！

やはりシオンはシオン。かの猛毒をクラフトするだけの事はある。荒らしの次に荒らしだ。

「うわっ、あの人ら荒ぶってるんですけど！ キモツ!？」

「恐らく初めて来国した貴女達には分からないでしょう。この都市はこの者達が愛情を込めて建設した都市。それを汚そうとする貴女達人間に彼等は激昂しているのです！」

「シオン……多分ですけど、違う事に怒っているのかと思います……」

我々が創造した煉瓦なら良い。

ちよつとの傷なら勝手に直る。

だがそれは村人の煉瓦だ。村人製の創造物は勝手に直らない。それを知らないシオンじゃあるまいに。新参でも許せないものは許せないけれども！

「それはそれとして……大太刀、剛力丸を置いて戦うのは危険かと。

あの者達、ただならぬ気配を感じます」

「しかしシユナ様、相手は人間です。侮っているわけではありませんが、リムル様は魔物と人間の共存共栄を望んでおられま

す。なればこそ、なるべく穩便にこの身1つで事を収めるべきだと思うのです!」

「穩便……?」

「面白え。邪魔すんなら潰してやる」

とうとう殴り合いが始まった。

穩やかじゃないですね……素手同士とはいえ。

傍観するにも離れるにもシオンが危険なので側にいる事にする。色んな意味で。

事と次第によっては加勢。シオンがまた建造物破壊をし始めたら、纏めて粛清しよう。

「何を余所見してるんだい? 僕の相手になつてよ。辻斬したいんだよね」

と、最後の1人が堂々斬り込んで来た。

やっとマトモな奴がいた。荒らしという意味で。

分かりやすいのは良い事だ。これで剣を振れるというもの。

直様剣を交えるクラフター。

牽制に雪玉を乱射しつつ、前に出た。

「なんだ? これは雪玉!? 情報通りふざけた戦い方をするね。だけど!」

斬られた。迂闊に近寄り過ぎた。

だがダイヤ鎧だ。大したものじゃない。

一旦間合いを取り、回復薬を飲む。

「それも普通の鎧じゃないようだね。でも僕のスキル切断者なら……なんだって!」

体力を回復。

空腹になるには、まだ早い。

「まさかポーションが効いたのか？

空間属性の斬撃だぞ!？」

まあ早いもなにも。

腹が減る前に退場して貰おうか。

クラフターは剣先を向け直す。

周囲のビル窓からは、既に狙撃体制の同志が包囲している。

遊びは終わりだ。死んで貰う。

荒らし死すべし慈悲は無い。

ファルムス戦

104. 開戦と同志

「はっ!？」

リムルがやっと目を覚ました。
牛乳量が足りなかったのか。 次に毒を喰らわした時は増量しよう。

トロッコ問題に苦労したのだ。 具体的には地下鉄座標に蹴り落としての運搬作業が。

元の世界でも似た経験はしているものの、事前にレールやトロッコを用意していなかったし。 時間を浪費した。
リムルが起きてくれていれば自力で乗り込んでくれただろうものを。

「ここは……ジオフロント? という事はテンペストに戻って来たのか、俺」

『はい。 ここまではトロッコに積み込まれて運搬されました』

だが今は今だ。

同志から連絡があったが、とうとう荒らしが出現したとの事。

それも団体様だ。 戦力が少しでも欲しい。 その為にリムルを苦労して運んで来たのだ。

剣劇に参戦せず寝ていた分、働いて貰う。

「毒の件は最悪だったが、その点は感謝だな。 ヒナタはどうなった?」

『例の謎の白い液体を飲まされていたので、恐らく生きていると思われます。 ですが、その後は不明です』

「生きてるなら良い。次に心配なのは連邦の皆だ。何故か思念伝達が上手くいかない」

『アンチマジックエリアとプリズンフィールドの2種の結界に覆われている影響です』

「また結界か。ヒナタの発言といい……何が起きているのか確認するぞ。お前らも来い。説教は後だ」

リムルが地上へ向かう。その背中を見送る。

言わずとも動いてくれるのは素晴らしい。

「来いって!?! ああシズさんがいないのが悔やまれる……アレか。準備とかその辺か、そうだな。そういう事にしておく。終わったら来いよ! どうせ地上にも仲間がいるんだろうけどさ!」

後は野となれ山となれ。

地上はまだ荒れ狂っていない。守備に就く同志が抑え込んでくれている。

IRPも砲撃後も地上で待機中。ビル群の屋上等に設けられたキャノンも砲撃準備が済んでいる。出来る事はやっている。何とかなる。何とかならないと困るぞ。

……今、新たな報告を受けた。

問題とは次から次へやってくるものだ。

一難去つてまた一難。

理由は不明だが都市内の魔物達は弱体化の異常を受け、しかも郊外に出入り出来ぬ状態異常まで受けたとの事。

牛乳を飲ませても治る様子が無いというから只事ではない。

他にも村人達の魔法に制限が掛かったらしい。

だが我々の行動、エンチャントは問題無い。

状態異常も起きていない。なら村人に代わり我々が連邦を守らねば。元よりそのつもりだった。村人の警備隊には期待していない。

万単位の村人がウザい時もあるが、都市が荒れるのは許せない。何より悪意ある殺傷は到底容認出来ない。連邦は建物のみならず村人で構成されているからだ。独自のクラフト技術や生活様式、行動を起こす多種多様な人魔達。彼等あつてこそその連邦だとすら感じている。失う事、即ち建物同様に我々の財産が脅かされている状況下なのだ。要略。村人を守り荒らし殲滅。

「リムルさん！」

地下に特殊同志の声が響いた。

見やればクリーパー柄のパーカー村人……いや。クラフターがいる。

だが色々と妙だ。言動もだし、肩で息をしている様等。まるで村人だ。いや中間といえる存在だ。

「お前は？」

「今は此処に住んでいる者とだけ。それより早く地上へ！ 他国の軍隊が攻めて来たんです！」

情報通り地上は大変だ。

いやそれよりも大変だ。

コイツ……村人と話してやがる!?

「なんだって!?! 皆は無事なのか!?!」

「住民は結界で弱体化してますが何とか。今は警備隊長指揮の下、此処ジオフロントに避難誘導中。ウチの馬鹿達が軍を足止めしますが人手が足りません。援護お願いします！」

「警備隊……リグルやゴブタ達だな。しかし君は……いや分かった。教えてくれてありがとう！」

「私は避難してきた者達を対応します」

「頼んだー！」

間違いない。

リムルと会話してやがったぞ、このアマ!?

そうだ。話に聞いていた事があるぞ。

湖底研究所からやって来た、村人と意思疎通が出来るクラフターが来たと。

この子が……この少女がそうなのだ。シズに代わる、いや同等以上の通訳だ!

よしよし良い子だ。心強い限り。

「キモい顔してねえで、テメーらもリムルさんを手伝ってくるんですよ」

一部訂正。辛辣だこの少女。

それでも構わないが。希望が生まれたのだから。

「馬鹿な同志は機龍と猛毒まで使いましたよ。これで住民1人でも死んだら情けないし、加えてアンタらの力がその程度だった、という事にもなりますし」

なんだとこのアマ。

クラフターを無礼るなよ。

荒らし勢力が如何程か知らぬが、我々の創造力は甘くもなければ君程辛くも無い。

「ならさっさと行って。事態は一刻を争います」

上等だぞこのアマ。

万単位の村人くらい守ってみせらあ!

クラフター達はリムルの背中を追い掛ける。

後でジツクリ辛辣同志と問答する為にも憂なき防衛をしなければ。
そして、あんな事やこんな事を彼女にするのだ。

「キモツ。 良いからさっさと荒らしを殲滅して下さい。 ついでにお前らも……………お前らまで”消える”のは許さないから」

全ロストは嫌なので断ります。

荒らしに鹵獲されるのはもつと嫌だ。

死なずに任務をこなしてみせよう辛辣同志。

「そうじゃない……………とにかく、お願いしましたよ。 私は……………皆みたくに強く無いから」

出来る事をやれば良い。

君は村人の受け入れをするんだろう？

なら、そつちを頼む。 我々には出来ない仕事だ。

特に会話の面では。 ”頼むぞ同志”!

「……………だから憎めないんですよ。 初対面でもそんな事言うから」

背後で何か言われた気がするが、もう構っていられない。 クラフターは走り続けた。

群勢が一齐に地下侵攻してくるならば、最も道幅が広いIRP搬出路を利用して来る筈だ。

だが守備隊同志もそれは知っている。 既に封鎖したか守備隊が陣取っているだろう。

逆に避難誘導路にもなっているが、なにぶん郊外だ。 辿り着くまで時間が掛かるし、なにより結界とやらの所為で住民は郊外に出られない。

それに荒らしの狙いが都市そのものなら、先ず地上を荒らす。
なら向かうべきは中央都市内だ。 地上に上がる水式昇降機や梯

子は大抵の建造物に設けられている。

これらを利用すれば、神出鬼没に侵略者共に斬り込める。

これまた逆に避難路にもなっているから、村人達も自主避難しやすい構造だ。

やがて数多の村人達とすれ違う様に上下に交差した。避難してきた者達だ。

「増援か！」

「頑張つて、おにーちゃん！ おねーちゃん！」

「悪い人間をやっつけて！」

「連邦を、皆を頼む！」

老若男女の人魔にハアンハアン鳴かれた。

やはり言葉は分からない。だが伝わる。応援してくれている

のだと。

——地上の光が眩しく広がっていく。

爆音。 悲鳴。 怒号。 金属音。

戦場の鳴声。 集団戦の殺し合い。

見慣れた都市で狂気が孕み、生と死が交差する。

ピリピリした。

初めてではない。 故に備えもしてきた。

守備隊と合流、または遊撃。

村人達を守りつつ荒らし勢力を殲滅。

——征くぞ。

目の前の惨劇に創造主は駆け出した。

各自奮闘せよ。 これは戦争だ。

105. 敵と慈悲

「牙城の懐である！　　邪悪な魔物を滅せよ！」

出会え出会え！　　奢る敵なぞ久しからず！

日の下に上がり、此度も戦場。

矢が飛び交い、剣が交わる。

非戦闘員の村人を庇いつつ、創造主は不倶戴天と対峙していた。

「例の人間達が抵抗してきます!?!」

「アレを人間と呼ぶな！　　魔物に組みする時点で悪である！」

「聞き捨てならんな！　　俺ら人間の冒険者や商人は世話になってんだぜ!?!」

「質の良い武器や防具だって卸してくれる。　敵なら普通渡さんだろ」

「そうだそうだ！」

「ドラゴンがイングラシア王国を襲撃した時、退治したのはコイツらだって聞いたが」

「だからなんだ？　　騙されてないと何故言える？　　街道で物言わぬ屍の山になるだけよ」

「けっ、口封じかよ！　　黙って殺されるくらいならコイツらに加勢するぜ！」

「伊達に危険な冒険をしてねえんだ！　　正規軍だからって舐めんじゃねえ！」

「コイツらを援護すつぞ！」

「やっちまえ！」「うおおおっ！」

「貴様らあツ!?　　母国を危険に晒していると気付かん愚か者共めが……ッ！」

「愚か者はどっちだ！　　クタバレ屑野郎！」

武装村人が遅れを取りつつ加勢。

声にならない声を上げ、やあやあと得物を振る！

「良い良いぞ！　ゴーレムに頼らず自ら剣を握る様は、中々出来る事ではない。　実に勇猛果敢である。　我々も負けていられない。」

「崇高な精神を踏み躪り、狂気を孕み泥梨を生み、無碍道にせんとする下衆共め！」

「退け屑共！　退けッ！」

「リムルに文句を垂れ流されながら建設し、竣工してきた摩天楼。」

「時に落下死をしつつ落成させた苦勞の結晶。」

「愛すべき作品群。」

「荒らしにやらせはせん！　やらせはせんぞッ！」

「首を激しく動かしながら釣竿や雪玉を投げつけてきます!?」

「規律を乱すな！　そんな馬鹿げた話があるものか！　童の児戯

でないのだぞ！　でなければ魔物である！」

「ご覧下さい！　かの者は落馬させたのち、縄を掛けて拉致しております！」

「人を選んで殺しておる！　やはり魔物だ、躊躇するな！」

「空を飛んでいる者もおります！」

「人は飛べぬ！　魔物だ！」

「石の防壁を瞬時に作っています！」

「魔物だ！」

「結界の中だというのに、動きが滑らかです！　滑らか過ぎて気持ち悪いくらいです！」

「魔物だ！」

「穴を掘ってる者が！」

「魔物だ！」

「あれも」

「魔物だ！　良いから戦え!?!」

鉄鎧一式の荒らし連中が馬に乗り、わいのわいのと暴れている。

中には普通に降りて戦っている者もいる。
それを駐屯同志が迎え撃つ。時にサドル付の馬を鹵獲する。
貴重だ。掠奪……じゃなかった、救出活動を行いつつ戦闘継続。
荒らしに使役されるなど、あんまりだ。なのでコレは正当行為。
クラフターは悪くない。悪いのは荒らしだ。荒らしの癖に生意気だ。

「リムル様ッ！」

「シオン！　ゴブゾウも！　無事か!？」

先行していたリムルが鳴いた。

相手はシオンだ。先程までステゴロで荒らしと語り合っていたが……我々も剣や弓矢で加勢したからか、逃走を許してしまった。タイムマン勝負を望んでいたのだろう。だとしても弱体化したシオン相手にどうかと思う。なんなら近くにいた子供村人にまで手を出そうとした。その時点で外道。礼節を欠いている。それともそれがこの世界の礼儀か。
いや、あんなものを認める訳にはいかない。

「はい……少し怪我をしたくらいです。この者達に助けられました」

「大丈夫ダス……」

「動けるか？　近くの建物から地下に避難するんだ。対応してくれるヤツもいる」

「リムル様は？」

「——悪友に殿を任せては情けないからな。戦うよ」

「で、ですが相手は人間です！」

「分かってる……大丈夫だ、出来るだけ命は奪わない。出来るだけ、な。　　だけど殺しに来てるんだ。　　殺されもするって事を教えてやる」

そういえば堰を切った残り2名の荒らしも逃してしまった。混乱の中で逃げられたのだ。

女の方は戦闘が出来なさそうだったから分かるが、片方も逃げた。瀕死の重症を負わせたと自負しているが、回復しに行ったか。

或いはトレイン。有り得る話だ。

そもそも防具ひとつすらしていなかった。

元の世界でもいた。直接手を下すと垢が付くからと、クリーパーを誘導して他人の家を爆破する悪徳リフォーム業者が。

だがクリーパーが爆発する惨事の時点で荒らしが関与しているのは明白だ。誤魔化せるものではない。

特に今回はスキンをハッキリ記憶している。

後で●す。世界の何処に行こうと必ず探し出す。そして●す。

荒らし撲滅運動。芽は早く摘む。

クラフターは戦いつつも、既に復讐劇のシナリオをあれこれ思考していた。

ベッドに強制的に寝かせて、黒曜石に覆われた檻に閉じ込めて永遠の苦悶を味わわせるのも一興。永久リスキルの刑。

無限ループって怖くね？

「全て無力化する勢いで行くぞ！ 時間を稼ぐ考えじゃ甘いだろう

からな……【メギド】」

リムルが空を飛んで、何かしらの飛び道具で空襲を行った。瞬く

間に敵が虫の息になる。

我々としては息を呑むしかない。

「ぐあっ!?!」「ぎゃっ!?!」「がっ!?!」

「どこから!?!」「防げない!?!」

なんだ、あの攻撃!?!

水玉が浮いたかと思えば、次には光線が荒らしのみを貫いていく。

急所は外れている。わざとにしても凄まじい制御力と戦闘能力である。

集団戦においてチートじゃん、そんなん。

「どうだ？　俺だって作ってる……新たに開発した魔法だ。アンチマジックエリアでも影響を受け難い精霊と太陽光を利用した魔法でな、簡単に言うくと水玉を凸レンズ状に……虫眼鏡で太陽光を収束……対象を焼く……って言葉が通じないのに説明しても仕方ないよな」

心底思う。

リムルが敵じゃなくて本当に良かった。相変わらず、このスライムは多様性に富む。

「お前らの魔法も凄いいけど。今は集中だ。悪いけど……殺したら勘弁な。お前ら含めて」

空を飛んでいた同志が何人か巻き込まれて撃墜された。

おいこらふざげんなよ。絶対わざとだろ。

敵か味方が誤射か本気か。理解に苦しみ僅かに混乱する創造主。もう許せるぞおい。

「くそっ！　撤退だ！　撤退しろー！」

「逃げろッ！　逃げろーッ！」

「助けてくれえ！」

「ああ神様ッ！　どうかご加護を！」

荒らしが逃げていく。

悪いがソレは許せない。弓矢を絞り、片っ端から当てていく。

建物に入り込まれたら厄介なので、その前に抜いていく。時に剣で刺殺した。

脆いものだ。先程までイキって荒らそうとしたのが嘘の様に。所詮はその程度なのだ。荒らしめ。

「神様は助けしてくれない様だな。ルミナスか他の神様か知らないが……おい、お前ら止めろ!! 逃げる奴を無理に殺す必要はない!」

無理してでも殺さねば。

荒らしとは下手すると殺しても懲りずに齒向かう。一度やらかした奴はまたやる。やらない奴もいるが、取り敢えず殺す。

奴らがリスポン出来るにせよ、出来ないにせよ、見せしめの意味も兼ねる。

前者の場合に置いては、最悪監禁して絶望させて生気を奪って消毒だ。

汝、一切の希望を捨てよ。それが世の為だ。今までもそうしてきたし、またやるだけだ。

「……リムル様。住民の避難は済みました……」

「……伏兵がないか警戒しろ。それと怪我人や死者の把握を。

襲って来た人間もだ。広場に集めてくれ」

「……はい」

「それと、地下にいる緑のパーカー……外套を着た女の子を呼んで欲しい」

追撃しようか。

いやIRPが奴らの隠遁先の座標を取得している。砲撃すれば直ぐ終わる。

リムルに砲撃の様子を見て貰おう。凄いものを見せられたお返しだ。

そう思い、戦友に笑顔を向け――。

「広場に来い。話したい事がある」

何故か冷たい顔を向けられたのであった。

106. リムルと口論

「……ここからは私が通訳します」

「頼む……お前ら。これを見てどう思う？」

凄く……小さいです。被害の話である。

死体の悉くは荒らし。村人はいない。

当然の報いだ。寧ろ足りない。

これがクラフターの感想だった。

リムルがいて辛辣同志通訳の下、我々は都市中央広場にいる。

目の前には荒らしの遺体が並べられていた。

中には追い剥ぎをする同志。良いと思う。荒らしに使われる

くらいなら我々が利用してやる。その方が創造物も主も浮かばれる事だろう。

「真面目な話をしてるんだ、やめろ！」

此方も真面目にやっている。

遊びで戦をしたんじゃないんだよ。

「……幸い、奇襲攻撃にも関わらず奇跡的に敵軍の遺体以外発見されていない。お前らが予め用意していた避難路や武器のお陰だろう。高層階に取り残されていた者もいたが、それはそれで助かる要因になった。それは感謝している。それに殺しに来ていた以上、敵を殺すのも仕方ない部分はあると思っっている。正当防衛だ。だがな」

リムルは突如、追い剥ぎをしていた同志に近寄ると、首根っこを掴んで安置場から放り出した。

「逃げる奴まで殺す事じゃなかった！」

いや殺す事だ。理解に苦しむね。

荒らしや危害を加える害獣は殺すべきだ。

こうして死体が残っている事から、コイツら荒らしは村人同様にリスポーン出来ないのだろう。だがそれで良い。面倒にならない。

同一個体が2度と鹵向かってこないから。

後は郊外に逃げた荒らしと拠点を潰す。その後は本土に出向いて国の村人を皆殺しにする。憂は無くす。

そうだな。敵はファルムスとルベリオスだ。結託して荒らしに来たからな。本拠地も潰しておきたい。

ルベリオスはシズといた国より更に西であるが、ファルムスはドワルゴンの南西に隣接した国だ。其方が近い。先に滅ぼそう。

そうだな。IRPで砲撃しても良いが、建造物は評価に値する。毒を使おう。それなら建物は傷付かない。それか現地の同志に頼んで皆殺しにするか。

リムルよ。甘さは捨てるべきだ。

「いい加減にしろ！」

いきなり頬を殴られた。

良いパンチだ。ウオツと野太い声が出て背後に軽く吹き飛ばす程に。

意外と初めてかも知れない。案外、芯に響く。

「リムルさん!？」

「良いから通訳を続けてくれ……俺は確かに甘かったさ！ その所為で国の皆を危険に晒した！ 人間に友好的に接しろと言ってきた所為でな！ それで皆は殺しに来た人間の軍隊と本気でやりあえなかった！ 結界だけの問題じゃないんだよ！ だからお前らだけに悪役を押し付ける訳にはいかない……だけど、感情だけで全

て動けば後が大変になる……分かってくれ」

……そうだな。

一気に疲れ顔をするリムルに頷く創造主。

冷静になれ。荒らし3人組の時も最初は我慢したじゃないか。

牛乳を取り出すと、皆して飲んで落ち着いた。状態正常でも気持ちの問題である。

「二々説明するぞ。政治的な問題も当然ある。お前らが分かりやすい様に言うが、軍隊の連中は国の指示で動いているに過ぎないんだよ。だから奪わなくて済む命があるなら奪わなくて良かった」

成る程。馬と騎手の関係か。

チキンジョッキーとか。夜のスケルトンと蜘蛛は許せないが。

だがそれなら尚更に国が諸悪の根源だ。

やはり滅ぼすべきだろう。

「そんな事したら国にいる普通の国民が巻き添えを喰らうじゃねえか！ あのな、さつきみたいなものだよ。お前らは皆を庇いながら

戦っていただろ？ 特に戦えない者を優先的に。国にはな、そう

いった無関係な者もいるんだよ。ヨウム達もそうだ。アイツら

は戦えるが、悪い奴じゃないだろ？ だが今回攻めて来た連中はヨ

ウムの母国だ。これで何となく分かるか？」

そうか。国と村人は、また別の関係か。

なら何故徒党を組んでやって来た。

「国の……いや国王や一部上層部の思惑だろうさ。悪だと断じるならソイツらの方がしつくりくる」

ボスカ。ボスカがいるのか。

確かに元の世界でもそんな存在はいた。神殿にせよジ・エンドにせよ。

ちよつと各国のボスに挑みたくなってきた。

武装村人とは比較にならない強さだろうし。

見た目も派手だろうな。悪魔みたいな奴とか、ドラゴンとか。

ルベリオスは神だろう。ルミナスとかいうボスが登場するのもかも知れない。

丁度、神殿的な建物が幾つも建てられている。山辺りの

の神殿が怪しい。現地の同志に頼んで突撃して貰おうか。

「国をダンジョン感覚にするな!? 攻略しようとか思うなよ、絶対だぞ! フリじゃないからな!」

相分かった。国家解体もしない。

資材や土地を手に入れるチャンスでもあったが、この世界の複雑難解を説かれたからな。

未だ理解し難いが。

ただ面倒臭いのは分かった。

マルチクラフターとして、ある程度の理解と我慢は必要という事だな。 うん。

「心配だな……地下鉄を張り巡らしてる時点で信用ないんだが……いや信じるぞ。 信じてるからなお前ら!」

煩い。 この世界は窮屈だ。

些細な事で騒がれていたら身が持たない。

「些細じゃねえよ! おおごとだよ!」 ヒナタにも言われたけど、世界を侵略している自覚は持つて頼むから! 悪い事だからねそれ! 地上じゃなくて地下だから許されるとかじゃないからね? 国際問題だからね!」

やれやれ全く。
なんて世界に来たもんだ。
生き辛い世の中になったものである。

「お前らの所為で余計生き辛いわ!! 助けられた人魔が沢山いるのは事実だけど!」

そうだろう感謝しろ。

地下鉄も批難される謂れは無いね。

アレは便利じゃないか。ポータルと比較すると劣るが、ホイホイ作れる訳じゃないのなら需要は高い筈だ。

「ああそうだな。無許可で人の土地ブチ抜いて作った訳だけどな!? どうせ知らない所で大陸横断鉄道完成してんだろ!」

ご名答!

くそう、ホームや細かい部分が完成してから披露するつもりだったのに!

「ぎげんなゴルワアツ!! 歯食い縛れ!」

ウオツ。

また殴ったね!?

シズにも2度も殴られた事無いのに!
斬られた事はあるけれど!

「俺はシズさんほど甘くないぞ! ちよつとこの辺で分かせてやる! 鎧なんか脱いでかかってこい!」

上等だぞ悪食スライム野郎ツ!

テメエなんか怖かねえ!

クラフターは鎧を瞬時に脱着すると、右拳で殴りかかる。向こうも殴り返してくるが構わず殴る。

「痛覚無効なんでね、そんなパンチ痛くねえよ！　体はスライムだしなあ!？」

畜生めが！

だが諦めたら仕合終了です。　という訳で殴る。

剣を使わないのは慈悲もあるが、礼儀作法みたいなものだ。　もつと言えば戯れだ。

相手も分かっているのか、加減している。　していなかったら食われて即死している事だろう。

我々はアイツら荒らしと違うのだ。

「右パンチしか繰り出せないのかお前らは！　そんなんじや普通の人間相手にも勝てないぞ！」

「あの一、リムルさん。　警備隊も見てますし、伝える事伝えたら、今後についての会議とかした方が……」

「……だな。　リグルド達を集めて会議だ。　被害状況と相手の状況を把握して、今後の方針を決めなきゃな。　また戦うにしても」

パタリ、と殴打が止んだ。

助かった。　壁際に追い込まれていたところだ。

だが次は負けん。　殴り合いでも勝てる様になりたいところ。

「お前ら……とにかく、そういう事だから。　信じてるぞ」

最後に薄ら笑みを浮かべられた。

此方も薄ら笑みと共にお辞儀する。

「だそうですよ。　馬鹿やってリムルさん達を困らせちゃ駄目です」

……辛辣同志まで。クラフターは溜息を吐く。
この世界のマルチは難しい。
政（まつりごと）にしても人魔関係にしても。
だけでも……空を見上げる。
冷たさに妙な温かさがあるのは何故だろうと。

107. 把握と盗聴

「茶番だな」

リムルは再び冷えた。

その内氷ブロックに変貌するのもかも知れない。

色も近い。可能性はある。

「はい。目撃者の証言や捕虜尋問からして、ファルムス王国は調査の名目でやってきたそうです。ですが、既に軍事行動を開始しているとも言います。調査自体は本当でも結論は初めから決まっていたのかと」

だがしかし……通訳がいるからって、一部が会議に強制参加させられている今現在。

今までも経験してきたが、大抵この時間は好きになれない。

冷えようが暑かろうが関係ない。身体を動かさず棒立ちするのが暇なのだ。それでもリムル達の話は聞いておく。

有益な情報を得られるなら我慢しよう。また殴られたくないし。

「今回、都市に雪崩れ込んだファルムスの騎士団は100名程。人間の男女3人組が騒ぎを起こしたのをキツカケに襲撃してきた様です。それでも大半は撃退。我が方の被害としては住民に軽傷者が複数人出た事、建物の幾つかが多少荒れた程度」

「魔物が人間に危害を加えた事実を作って、戦争を起こしたという事か……度し難い」

ならば殲滅です。

本土侵攻は諦める。だが郊外の敵勢は潰す。

今回は幸いにも村人に死者はなかったが、代わりに地表の建造物が

軽く荒れた。

次は何をしてくるか分からない。被害はこの程度で済まないかも知れない。

結界とやらが未だ覆っている以上、戦争を長引かせるのは良くない。

今は地上の同志達が郊外にバリケードの壁を作って防御に徹しているが……ぼちぼち攻撃もしたいところ。

「何を学んだんですか。勝手に動いちゃ駄目ですよ」

辛辣同志よ。否定的な意見を述べていないで通訳して伝えてくれ。我々はいつでも動けると。

「さっきの今でソレを言います？　気を遣っているんですよ、これでも」

左様ですか。

黙っていると。やれやれ全く。

「捕虜と死人半々。逃げた者は四方の駐屯地に向けて方々に散りました」

「ソウエイとトレイニーさん情報では、それぞれに結界を張るのに必要なクリスタルが鎮座している。守備隊と思われる西方聖教会の騎士団が中隊規模で駐屯。また総勢2万の軍勢」

「大所帯ですな。いつまた攻勢に出てくるか分かりません」

万単位の村人を守った次は万単位の荒らしか。

攻略法は既に考えている。固まってる内に砲撃。纏めて数を減らした後、バラけた荒らしを剣と弓矢で掃除すれば終了だ。

さあ許可を。後は許可を頂くだけなのです！

「事が終わるまでは、住民達には地下で生活して貰う。外に出られない以上、そこが1番安全だ。生活環境も整っているしな」

「同感ですな。結界を解除出来ても、念には念を入れねば」

「後もう1つの結界……アンチマジックについてなんだが。これはファルムスとは関係ない」

「と言いますと、別の思惑が絡んでいる?」

「ああ。その事はこの子、新たな通訳ちゃんに話して貰おうと思う」

ここでまさかの辛辣同志が表に出てきた。

何か。我々も知らない話がまた出るのか。

「初めまして。シズさんに代わる通訳の者です」

「というと、貴女も死を経験して……?」

「今はその話は置いて、本題に入ります」

そういえば辛辣同志の素性は知らない。

元々クラフター自体、気が付いたら世界にいて、どの様に生まれるか誰も知らない。

世界から消える理由なら大体知っているが……特殊な彼女はどの様にして生まれたのだろう。

牛や豚の繁殖とは訳が違う。

水の絨毯の下、同志は何をしているのだ?

連中は研究内容を暈す。IRP技術もそうである様に、隠されるのは良い気がしない。

「魔法に制限をかけ、思念伝達含めた魔法による外部との連絡を遮断している結界、これはヨウムの仲間であるミュウランの仕業です」

ミュウランというのか、あの魔女は。

一時怪しいと思っていたが、しでかしたか。

あのまま見張っておけば良かった。だが全ては結果論。後の

祭りで騒いでも仕方ない。

「なんと……しかし、ファルムスと関係ないというのは……ヨウムの母国はファルムスです。連邦に忍び込む為、一団に紛れ込んだ作業員の可能性は？」

「彼女は魔人でした。他の素性は不明で別の勢力が絡んでいる可能性があります。詳細はこれからですが……ベニマルさんや一部の者が気が付き、今は宿屋に監禁しています。後でリムルさんに尋問のち処分を言い渡して貰いますが、その前にお耳に入れておきたい事が」

「言ってみろ」

「彼女から暗号化された電気信号を傍受しました」

「なんだって？」

なにそれ。RS回路みたいなもの？

いや彼女から有線が伸びていた様には見えない。

となると我々の連絡手段に近い、無線通信の類と見るべきだろう。

水晶による通信を村人が行えるのは知っていたが、それとは別の種類だろうか。

「でんきしんごう、ですか……？」

「既存の魔法と別の方法で盗聴されている可能性がある、という事です。本人が知っているか不明ですが。そこはリムルさんがそれとなく質疑応答をして欲しく思います」

やはり我々の知らない連絡手段か。

何とか取り入れられないだろうか。無理か。

「盗聴……ミユウランの主は誰なんだ？」

「すみません。逆探はちよつと」

「分かった。だけど、どうやって知った？」

「IRP、機龍が傍受したんです。正確には演算処理等をしているBBですが」

まさかのIRPが出てくるとは。

アレも謎が多く多様性に富む。リムル程の可能性があるかは不明だが、未知あるものは浪漫がある。

これからも研究対象となっていく事だろう。

「……アレが兵器以外にも使えるとはね。お陰で助かったよ、ありがとう」

「いえ。私は大した事は出来ません」

「後は任せろ……と言いたいが、コイツらの手綱を握っていてくれ。出来る範囲で」

「……善処します」

「さて。次に今後の人間に対する対応についてなんだが――」

会議は続く。

夜でもないのに寝たくなる。今ならベッドに寝れそうだ。

とはいえ、下手な動きをすれば殴られそう。

外の同志達を羨ましく思いつつ、我々は暫く村人に付き合う羽目になった。

108. 魔女裁判と手術

「先ずはミュウランの処遇を決める。 事の経緯を聞かせてくれ」

会議が終われば、今度は宿屋に連行ときた。

日々自由に冒険し建築する創造主は束縛を嫌う。

されど辛辣同志とリムルが云うのだから仕方ない。 少なくとも無益にならぬのだと信じ、共に往く。 鶏肋の惜。

「――私は魔王クレイマンの配下。 五本指の1人、薬指のミュウランです」

ベッドに座るミュウランが鳴く。

左右にヨウムとグルーシス。 彼女を守る様に立っている。

例え敵側だったと判明しても仲間であり続けているのだ。 分かる。 我々も隣人が突然荒らしになった時、出来る範囲で擁護する事があるからだ。 村人の言葉を借りるなら愛しているという奴だろう。

その意味では、さつき彼女に配膳していた狐娘達もそうだろうか。 身を案じている様子であった。 少なくとも敵対心は感じない。

「続けろ」

対するリムル。 太々しく椅子に座り尋問中。

それが半分演技だとしても、穏やかとはいえない空気だ。 哀愁すら漂う。 ミュウランがどこか諦観している所為である。

一種の覚悟すら感じさせた。 何とかなると良いのだが。 リムルなら何とかするか。

「私に与えられた任務はテンペストの内偵でした。 だから私は……」

ヨウムを利用してこの町に潜入したのです」

辛辣同志に通訳して貰いつつ、成る程と頷いておく。概ね予想通りだった。

「成る程な。つまり今この時もクレイマンに報告をしている訳か」「いいえ。連絡手段がありません。私はウィザードです。アンチマジックエリアで私に出来る事など、普通の人間とそう変わりません」

ここで一つ、辛辣同志の疑問が解けた。

「ミュウランは”知らない”という事が。

リムルが上手く誘導してくれた。相変わらず上手いものである。この地が未だ粗末な村だった時にも感じたものだ。

「あんたがここをアンチマジックエリアに変えたんだろ？ どうやって離脱するつもりだったんだ？」

「……………」

「…………クレイマンに見捨てられたってことか」

裏敵は思った以上に非情らしい。

荒らしの目にも涙、なんてのは無いのか。

その方が都合が良いけども。遠慮なく殺せる。

……辛辣同志よ。

そんな目をするな。勝手に呐喊しないから。

なんだろうな。シズとは違う気迫を感じる。

「マリオネットマスターの2つ名で知られるクレイマンは、配下を自分の意のままに操ります。それこそ操り人形のように。彼にとって配下とは道具でしかなく、壊れたりいらなくなれば捨てるだけなのです」

なら貰う。

溶岩処理でなければ回収出来る。棄てる主有れば拾う主有り。

あいや。その裏敵はクラフターに有るまじき行為をしている。これ程に有益な村人を捨てるなんてとんでもない。

せめて繁殖を試みなかったのか。貴重品を取引してくれる可能性だってあるのに。魔法とやらも凄いらしいのに。

……だから辛辣同志。その様な目で見ないで。

君もクラフターだろう。判れ。

「何故ヤツの配下に下ったんだ？ 従うメリットはなさそうだが」

「……あの時の私もそう気づく事が出来れば良かったのですが」

騙されたのか。

分かる。我々も昔、先輩に騙されての強制労働をさせられた。

当時はムカついたものだ。今や苦笑出来る思い出である。

ミュウランも思い出になる。少なくとも我々の。

……大丈夫。成る様になるよ。

「私は元々人間の魔女でした。人々から迫害を受け、逃げのびた森

で幾百年。家族もなく友もなく魔法の研究に没頭する日々でした。

そんな永劫のような日々が終焉に近づいた頃、あの男が現れたので

す。『貴女に永遠の時と老いる事のない若き肉体を差し上げましょ

う。その代わりに私に忠誠を誓い仕えなさい』と」

「応じたのか？」

「森に引きこもる世間知らずなど、笑えるほど御し易い相手だったでしょうね。クレイマンが私に施した秘術は『マリオネットハート』

という——仮初めの心臓を媒体に被術者を魔人へと至らしめるものでした」

ポーションで身体強化、エンチャントでツール強化……とは訳が違

う話だな。

だが興味深い。我々も身体に直接エンチャントを施さないものか。出来るならリムルを吹き飛ばせそうだ。ミリムや魚災の時間が思い出される。

……どうした辛辣同志。暗い顔をして。

君に何があつたか聞かない。

だが過去に囚われてはならないよ。

「以来、私の心臓はクレイマンの掌の上。私は約束されたものを受けとつたけれど、同時に自由を失つたわ」

「文字通り生殺与奪権を握られてるってことか。なるほどな……つまり自分の命惜しさに俺の仲間を窮地に陥れてくれたわけか」

「だ……旦那!!」

「黙って下さい、話の途中です」

「……っ」

前に出てきたヨウムとグルーシスを辛辣同志が鉄剣を出して威圧。静止させる。

鞘が無いのに、突然現れた剣。どうやら我々同様にストレージ式。そこはクラフターである。

「それで？　クレイマンがウチにちよっかいを出す理由はなんだ？

まさか配下の始末の為だけに送り込んだとか言わないよな」

「……クレイマンはごく限られた者にしか心の内を見せません。ですからこれは、あの男の言動から考えうる——私の予想になりません。クレイマン自身がファアルムス王国を焚きつけたかどうかまでは分からない。けれど、テンペストのアンチマジックエリア化は彼の国の蜂起を見越した上での計画だと感じました」

「被害の拡大を目論んだ……とかか？」

「それもあると思います。ですがそれ以上に外部への連絡を封じ他国への援軍要請をさせないためかと」

我々は問題なかったのだがな。

今も連絡を受けた遠方の同志が連邦に戻りつつある。

中にはエンダーチェストに戦闘用具を放り込んでのリスポーンで素早く帰還する同志すらいるくらいだ。

「もしもドワーフ王国やブルムンド王国がテンペストへ援軍を出せば、ファルムス王国への牽制になる。そうなれば戦争が回避される可能性もあったでしょう。テンペストとファルムス王国の間で戦争を起こさせる……それはとてもクレイマンらしい筋書きに思えるのです。ただ戦争を起こして何を得ようとしているのかは分かりません」

荒らしなら、荒らしたいから仕掛けるのだ。

それで詰まらない己の痩せこけた人生に生の充足を得て満足させている。

他にも理由はあるだろうが、何にせよ敵である。

この世界の荒らしは……聞けば聞くほど複雑難解だ。考えるのも面倒だ。荒らしは荒らし。それで良い。敵である。殲滅対象に変わりない。

追撃するには許可がいるんだろうなと考えられる様になつたくらいか。それも臨機応変と気分で作るが。

……今は今で集中だ。

「わかった。十分だ、ミュウラン」

リムルが立ち上がり、冷たく言い放つ。

「お前には死んでもらう」

死んだら死んだで結果が見られる。

クラフター製のベッド使ってるし。

「待ってくれ旦那!! ミュウランは本当につ」

「無駄だヨウム」

「グルーシス!?!」

「あれは本気の日だ」

グルーシスが獣身化。

そうだ。 獣村人は更に獣になれるのだったか。

あの狐娘もそうだろう。

まあ、それはそうと……元の世界に置いてきた番犬を思い出す。

あと猫も。

おっと襲ってきた。 咄嗟に盾を構えて防ぐ。

「なにしてるヨウム!! さっさとミュウラン連れて逃げやがれ!!」

コイツら相手に……長くは稼げねえよ」

「グルーシス……!」

辛辣同志がいなかったら殺していたな。

大方、打ち合わせ通り。 後はリムルに任せる。

「くそっ! ミュウラン行くぞ、早く立……」

ミュウランが、そつとヨウムの頬に触れる。

そして――。

「好きだったわヨウム。 私が生きてきた中で初めて惚れた人」

なんだ繁殖しないぞ。

この土壇場に来て、やっとこの世界の村人の繁殖行為が確認出来る
と思っただのに。

それとも発情が足りないのか。 そんな気がする。

「さようなら。 今度は悪い女に騙されないようにね」
「いい覚悟だ」

ヨウムがリムルの放った蜘蛛の糸に捕縛された。
剣や鋏を反射的に使いたくなくなったが、堪えた。 後にしよう。 今
は怒られる。

「旦那!! リムルの旦那!! 頼む!! やめてくれ!! リムル
の旦那!!」

辛い。 通訳が止まり言葉が理解出来ずとも。
シズの死を思い出す。 この後を想えば余計に。

「俺も一緒に一生を懸けて償う!! あんたの言うことはなんでも聞
くよ!! だから……っ」

リムルの右手がミュウランにめり込む。
我々も助手が出来れば良かったがな。 今回は牛乳を飲ませて解
決しない。

手術はリムルに任せる。 きっと大丈夫だ。

「――よし。 成功したようだな」

ミュウランは生きていた。

ほらね。 我々も負けてられないな。

「問題なさそうか?」

「え……あの……私、なんで生きて……」
「!?!?!」

ヨウム驚愕。空いた口が塞がらない。
分かる。我々の創造（想像）力を超えている。
天才はいる。悔しいが。

「ああ、うん。3秒ほどは死んだんじゃない？」

「3秒……？」

グルーシスも困惑している。
ともかく、戦闘はこれ以上必要無い。

「だ……旦那!? 一体これはどういう事なんだ!? ミュウランは……っ」

「わかったわかった、説明するから。そんなに狼狽えると彼女に笑われるぞ」

蜘蛛の糸を鋏で撤去してやる。

結構手に入った。羊毛に加工してベッドを数個程度並べられそうだ。

……なに？

蜘蛛の糸から何故羊毛に出来るか？

辛辣同志よ。細かい事を気にしてはいけない。

「実はな、ミュウランのこの仮初めの心臓はクレイマンの盗聴に使われていたんだ。暗号化された電気信号でな」

「盗聴……!?!」

リムルが種明かし。

手の平、砕けた宝石を見せながら説明開始。

……それ、修復してナニかに使えないかな？

プライバシー？

ちよつとナニ言ってるか分かりません。

「魔法通信で定期的に報告を入れさせていたのは、それに気づかせないためだろう。信頼する仲間ではなく、聞いた通り”道具”なんだろうな。クレイマンを騙す為だが、怖い思いをさせてすまん」

「いえ……いいえ。あの……ではこの胸の鼓動は……？」

「仮初めの心臓を参考に作った擬似心臓だよ。もちろん盗聴機能ははずしてある。”マリオネットハート”はなくなった。これでもうクレイマンは貴女に何も出来ない」

いや全く……驚異的なクラフトであった。

臓器の話は理解し難いが、命を創造したに近い行為をリムルは成し遂げたのではないだろうか。

本当に成功して良かった。

ベッドは飽くまで保険でしかなかった。シズのようにリスポーンするか分からない以上、賭けて殺す訳にいかなかった。

……どうした辛辣同志よ。

ミュウランは助かったのだぞ。喜べ。

「は……ははは……本当に……やったじゃねえかミュウラン！　もうお前を縛るもんは何にもなくなったってことだ！」

「……ええ」

「旦那も人が悪いぜ。俺にくらい教えておいてくれても良かったじゃねえか」

「……あのなヨウム。多分お前が人質だったんだぞ」

「え？」

「彼女はクレイマンから見捨てられたんだ。律儀に最後の命令に従う必要はなかったんだよ。どうせ心臓も返してもらえないだろうし。それでも従う事を選んだのは、そうせざるを得ない状況を奴が作り出していたからだ。例えば人質とかな」

「そ……そうなのかミュウラン」

「……大切な人を守りたかっただけよ……そういえば……あなたの告白にまだ応えてなかったわね。私、せっかく自由になれたけど、人間の短い一生分くらいなら束縛されてもいいと思っっているわ」

「ミュウランさん。今のお言葉、どういう意味なのかハッキリ教えてもらってよろしいでしょうか」

「バカっ………ばか」

「こんな状況じゃなけりや、祝福してやるんだがな」

さても問題は山積みだ。

辛辣同志と共にリムルに協力していく所存。

「——おいグルーシス、何が『あれは本気目』だよ」

「うるせーよ!!」

「感謝してるくせに……」

また活気が戻りつつある気がする。

それは良い事だ。だが完全に取り戻す為には先が長い。

また、今回の件は色々と考えさせられる。

今現在としては、ベッドを使用しても村人皆が死んで生き返るとは限らない。

実際、ミュウランは我々のベッドを使用していた上で数秒死んだらしいが……相変わらず言葉は分からない。

向こうも此方を理解した素振りが無い。

死んで生き返るなんて、我々にとつてはよくある話だが、正直に言えば……ここらで1発、村人の事例を増やしておきたかった気がしないでもないクラフターだった。

109. 砲撃と掃除

「アンチマジックエリアは解除した。これで連絡は取り合えるな」
「はい……今からでもドワーフ王国とブルムンド王国に救援を」
「頼む。だが全て後手に回ってる。今からじゃ間に合わないだろう。戦いは俺達だけでやるしかない」
「そうですね。それから、獣王国ユーラザニアの件ですが……」
「ああ。難民の受け入れも考えないと。まさかミリムがユーラザニアに宣戦布告するなんて……だが今は敵を片付けな」と

戦える者は得物を持ち準備する。

砲撃準備も完了した。合図待ちだ。詰まらない会議も済んだ今、やっと身体を動かせる。

「ブルムンドの商人や冒険者もポータルで避難させたから……地上には警備隊とコイツらが後方支援と守備に就く。後は弱体化を引き起こしている複合結界の解除と連合軍の殲滅だ。人選は——」

荒らしは四方に陣取った。

連邦を包囲したつもりなのだ。

だが甘い。地表に安易な拠点を置いているに過ぎない。レベルは村モドキだ。随分めでたい連中だ。片腹痛い。

水や黒曜石で耐爆を施している訳でもなし、周囲にワイヤートラップも確認出来ていない。その癖密集している。スプラッシュポーションでも投げつけたら一気に減らせる。

だがわざわざ近付くのも馬鹿らしい。砲撃して、その後突撃、残党を狩る。大きなクリスタルがあるのは気になるが、どうせ碌なものじゃない。ジ・エンドでそうだった。

笑止千万。

ともかく辛辣同志達よ、伝えてくれ。

「――と、馬鹿達は言っていますか」

一言余計だぞ。

「……そうだな。これは戦争、卑怯も何もない。俺の合図を待つて砲撃、此方の部隊が攻め入ったら止めてくれ。だが毒は使うな。言い訳が出来ない。それにわざわざ苦しませる事もない……向こうは正義を掲げちやいるが、正直言つて貿易面で面白くないからというのもあるだろう。その上で滅ぼすか隷属させようとしてきたのが本音じゃないかと思う」

よく分からないが分かった。

荒らしに慈悲はいらない。正々堂々、剣劇してやる道理もない。奇襲されたし。

だがリムルよ。表情に甘さが残っているぞ。

「わかってる。みなまで言うな……戦争を知らない世代だのなんたので言い訳しないさ」

辛いなら任せて背後にいればよろし。

あの女騎士、ヒナタの時みたいにサボれば良い。

「いや、俺も戦うよ。もう2度と己に甘さを許さない為にも」

そうか。そうだな。

だが無茶はするな。

我々は死んでも良いが、君達は”死ねない”体だ。

「おっ？　少し気を遣える様になれたかね？」

シズの姿でイヤラシイ笑みを浮かべるな。
だが荒らしに気を遣う事はしないぞ。

「それで良い。　じゃあ……皆。　反撃開始だ」

応。

刹那。　ビル屋上や郊外で爆発音。

キャノンの砲身内でTNTが炸裂し始める。

空を見上げれば砲弾となるTNTが白く点滅しながら無数に飛んでいく。

防衛準備期間があつた分、座標計算も済んでいるし、多少の誤差はキャノン職人により方位修正がなされていた。　問題なく敵陣地に着弾する。

さあ荒らしども。　報いを受けろ。

荒らすという事は荒らされる覚悟は出来ているんだろう。

なんなら、一方的に蹂躪されても卑怯とは言うまいな。

クラフターは各方面を睨みつつ、武装村人と共に出陣した。　砲撃

のみに頼らず、直接陣地を叩く為に。

「ぎゃああッ!!?」

「腕がッ!　腕ガアッ!」

四方に陣取っている荒らしは同志と武装村人に任せて、我々はリムルと共に本陣と思わしき拠点側までやってきた。

いる。　わんわんいる。

が、どんどん散る。

声にならない声を上げ、肉片を飛び散らせ、爆音の中で生きた証を

も消していく。

当然の報いだ。幾千幾万幾億いようが、荒らしが存在して良い理由にならない。その断片に至るまで消えて貰う。理想論だが。

一方、辛辣同志は死ねない事情があるらしく、ついて来ていない。経験値の問題か？

まあ……それは良いとして。

今は植林場の木陰から様子見中だ。

砲弾は問題なく陣地に着弾し続けている。

未だ爆発音が景気良く辺りに響き、荒らし村人共の喧しい阿鼻叫喚を掻き消している最中である。

「惨いな。即死出来なかった奴は不幸だよ」

響めるリムル。

そう気負うな。これは仕合じゃない。

リムルの顔と目前の惨状を交互に見やる。

弾着観測による報告を入れ、爆散する陣地を暫し観察。

地形は抉れ、岩盤までいくんじやないかという無慈悲な硝煙弾雨。

精密砲撃はIRPに任せている。既存のTNTキャノンでは限界があるのだ。

「他の場所もそうなんだろうな……」

しかしまあ……火薬チェスト何個分を消耗しただろうか。マルチで火薬を掻き集めてきたとはいえ、消費は一瞬だ。湯水の如く消えていく。他に良い方法は無いものか。

そういえばゴブタの鞆は電磁砲だかなんだかとかいう機構が組み込まれているらしい。

火薬とは別の方法で弾丸を飛ばすのか。参考に出来れば良いのだが。

「止めろ」

手で合図をされるクラフター。
直ぐに砲撃中止の連絡を取る。 暫し残弾が降り終わるのを待つ。
硝煙が晴れたら弓矢で射撃。
その援護の下、リムルと剣劇者が突撃を敢行。 残党を掃討する予定。
他の場所も大体同じ手筈。

「……結界を作るクリスタルはおろか、生存者はいないんじゃないか？」

木陰から弓矢を構え索敵し始める同志。
生き物だったモノが辺り一面に転がる中、クレーターの中をも覗き込む。

深淵と目が合った。
念の為、溶岩を流し込む。 どうだ明るくなっただろう。 ついでに汚物も消毒出来る。 一石二鳥だ。

「羅刹の様に容赦ない……って、食った経験のある俺が言える立場じゃないが……」

リムルが狼狽えた。
集団戦には不慣れなのだろう。
いや、それにしても都市内でチート行為をしていたけれど。 状況が違う所為か。 砲撃したし。 それか砲撃そのものに驚いたか。
だとしたら光栄だ。 我々にしかまだ出来ない事を見せ返した気分だ。

「なんでこんな状況で笑顔になれるんだよ……不謹慎極まりないぞ。今までも片鱗はあったけどさ」

だがリムルは気分が優れない様子。
また状態異常を受けたのか。ならばと牛乳バケツを手渡す。
さあ飲め。今回は2個渡そう。

「いや大丈夫。寧ろ飲んだら吐きそうだ」

断られた。

そうか。そうだな。油断大敵。

更に酷い状態異常を受けた時に備えねば。

牛乳を仕舞い、周辺警戒に努める。

「……虐殺だな。咎めるつもりは無いが」

その内に出て来たゾンビみたいに呻き蠢く肉塊を刺殺していく。
果たして生きているのかも怪しいが、アンデッドの存在もある訳だし、そう不思議ではない。

ともなれば原型を留めている荒らしは怪しい。

念の為に刺しておく。いっそ溶岩に沈める。ネザーの連中みたいに火炎耐性があると厄介なので、バラしてから処分した。

「……毒を使うなどは言ったけどさ、他にも色々注意しとけば良かったよ」

リムルよ。鳴いてないで手伝え。

流石に万単位がいただけはある。今や腐海と化した光景は実に不快で、同時に砲撃で爆散しきれなかった連中が転がり放題。

腐肉は間に合っているので火打ち石で燃やして回る。放置する気が起きない。精神的に不衛生だ。

拾う骨があれば拾う。植林や畑の肥やしとする。

しかし掃除や整地が面倒だ。

次は溶岩を砲弾として撃ち出せないものか。

あいや、それはそれで片付けが面倒か。
溶岩の回収もそうだし、木造住宅地に放つたら火災が起きる。 建
築物を愛する者としては微妙な線だ。

「……今、各所から思念伝達がきた。 他も片付いたらしいぞ。 都
市の結界も消えた。 後は責任者がいれば捕らえるんだが……この
様子じゃ誰も……ん？」

リムルが何かに気が付いた。 遠方を見る。

「無事に逃げた者がいた。 責任者かも知れない、追跡する……今度
は殺すなよ」

リムルが蝙蝠翼を生やして飛んでいく。

我々も片付けを急ぎ、後を尾ける。

残党なら恕す訳にはいかない。

何より呆気ないのも詰まらない。 きっと次はボスに出逢える筈
だ。

そう思いクラフターは走り出す。

勿論、慢心しない。 決戦の準備は済んでいる。

110. 生存者と心有者

「見たところ日本人だな」

リムルに付いて行けば、街道に待ち構えていた最初の荒らし3人組。

既にボロボロだ。服は破れているし、体力も削れていると見る。生きるな。荒らしの分際で。

コイツらを元凶とする様に荒らしの大群が押し寄せたのだ。

此処で会ったが百年目。創造主は剣を構える。

「……だったらなんだ？」

ツンツン頭が威勢を保とうとしているが、震え声を隠し切れていない。

他もそうだ。特に女の方はマトモに鳴声を上げられない様子。だが同情はしない。我々は聖人ではない。

それはリムルも同じらしく、怒り顔だ。

「同郷の誼、とは云えない程やり過ぎたな餓鬼共」

「テメエも餓鬼だろうが」「同郷？」

「俺は年上だ。お前らが見たままなら」

それでも会話を始めるリムルと荒らし。

そうする余裕がある、というより少しでも生きている時間を延長させたい欲が強い。

逆に相手の戦意は薄い。砲撃に怖気たと見た。

「3人だけか？ その先に逃げた奴に用事があるんだが……殿か捨て駒にされたな」

「な、舐めてんじゃねえぞ！ 卑怯なやり方で攻撃してきやがって！」

「卑怯？ 大人は卑怯なんだよ不良クン」

「偉そうにほざいてんじゃねえ！ ブツ殺してやる！」

攻めてきた。真っ直ぐに走ってくる。

ポジションで強化でもしたのか。普通の村人より素早い。恐らく攻撃力も上げている。

なんにせよ取引失敗だ。だがどうする？

殺すのは容易だが、あの砲撃を回避ないし生存した者達だ。殺す気ならリムルはとつくに殺している筈だ。

でなければ、なんらかの値打ちをつけている。

クラフターは逡巡し……決めた。

「まだ殺すな」

リムルが鳴く。

木剣に切り替えてノックバックで吹き飛ばす。

「がはっ!？」

次に釣竿を投げつける。

フックが胴体に刺さるのを確認し、素早く引き寄せてリードを首に締めつけた。

「グッ!？」

いつかの狂犬を扱った気分だ。

だが今回は子供じゃない。それに荒らしだ。

なので木剣で殴る。殴る。殴りまくる。

手車だ。吹き飛んではリードで首が締め戻され、そこを再び吹き飛ばす。

最早玩具だ。尊厳なんて与えない。

ついでだ。耐久実験も兼ねよう。

どれくらい耐えられるというのかね？

「ギヤツ!? グハツ、ガツ!?!」

「本当、こういう時は無慈悲だな」

「……ッ」

もう1人の男が遅れて加勢。

目を怪しく光らせたと思えば、ステップを踏み剣による刺突を繰り返して来る。

だが慣れたものだ。丸石の壁を立て防ぐ。

ハクロウより遅いし、ヒナタより弱い。

「……空間属性の攻撃も刃が立たず、思考加速と天眼でも追い付かれる、か」

コイツも同じ様にして吹き飛ばす。

いつでも殺せるが、それだと詰まらない。

「……グッ」

まさかコイツらがボスとは思えない。

普通より強い方だが、それだけだ。

だが利益はある。人体実験に回せる事だ。

湖底研究所辺りにでも送りつければ、有益な記録は残せるんじゃないかな。

良かったな。幾万と生きた証を残せず散った者達よりマシで。

クラフターの糧となれ。そして死ぬ。

リムルもその腹かも知れない。

「まあ人間にしては強い方だ。ヒナタ程じゃないけど」

「……ヒナタ・サカグチと戦ったのかい？」

「コイツらがな。俺は観戦してただけだが」

「そうか……全てを解放してもヒナタ以下か……嬉しくない冥土の土産だよ」

なんだ？ グツタリして？

誰が休んで良いと云った？

武器を下ろしたからって赦さない。荒らし死すべき慈悲は無い。

「止めろ。まだやる事がある」

リムルに腕を抑えられた。

……だから甘いと云うのだ。

「……そう睨むなよ」

そこまでするならば後は任せる。

クラフターは荒らしが逃げ出さない様にだけ、白樺フェンスを設置してリードを括り付ける。武器も取り上げておく。

「さて降参か？ 従順になれば助かると？」

「……楽に死ねない、とは思ってる。逃げようにも僕達は術式を組み込まれてるから、結局は上に逆らえないのさ」

また鳴声を上げ始めた。

コイツらは我が強い。今はしおらしくも従うとは思えない。信用出来ないのだ。

「だが明確な意志で俺の国を襲っただろう。コイツらのお陰で死人は出なかったとはいえ、許される行為じゃない」

「俺の？　同郷といい、一体君は……」

「元日本人だよ。37で死んでスライムに転生して……色々あってコイツらと馬鹿やってたら盟主やら国主になっただけの、な」

「……マジ？」

「……そうか。そういう事か……今や懐かしきビル群の光景も、郊外に鎮座していた見覚えのあるオブジェクトも……そこから来ているワケだったんだね」

「いや違うから!?　コイツらが馬鹿やってくれた所為でファンタジーに喧嘩売った国になっただけだから!?　調印式で暴力沙汰が起きたり散々な果てに生まれた光景だから!」

「国主が自分の国を愚評してる……」

急にリムルが荒ぶり始めた。

国を侮辱されてキレたのだろう。ならば我々もキレる事案だ。建築物を馬鹿にされてはクラフターも怒る。ネタなら許す。

「つて、こんな話をしてる場合じゃない。お前らの処遇は後だ。今は時間が惜しい」

リムルは再び蝙蝠翼を広げると、空を飛ぶ。

まだ先に進むらしい。

あまり都市から離れるのも如何なモノだが……同志がいるから平気か。

「質問だ。この先にお偉いさんが逃げたか？」

「……うん。国王のエドマリスと西方聖教会の司教、ラーゼンって”クソジジイ”と」

「……!」

「軍を率いてた奴、運良く生き延びた兵士何人か」

「よし……ちよつと行ってくる。お前らはそこを動くなよ。動けなくてもな。下手な真似をしたら容赦しないぞ……俺よりソイツらが」

リムルが飛んでいく。

残された我々はどうと……コイツら荒らしを縛っておかねば。

リムルなら放置して大丈夫だろ。おいそれと死にやしなそうな奴だ。

それでも僅かな同志がついて行く。今度こそボスに謁見するべく。

「キョウヤ、あんた……」

「……けほつ……」 口癖は……どうした？」

「もう良いかなって」

監視だけでも暇だから、クラフターは3人組を黒曜石製の豆腐小屋に閉じ込めた。

床も忘れず黒曜石。抜かりは無い。

「……ホント、容赦ないね。色々」

ホント暇なもので。

クラフターは内装にまで着手し始めてしまった。

リードを付けたフェンスを基準に感圧板でテーブルを作り、階段ブロックで椅子を作る。

ここまではいつもの応接セット。

照度確保の為に松明は壁に刺しておくが、申し訳程度の自然集光の観点や見た目から、窓を高さ2マスの位置でグルリと作る。そこに贅沢にガラス板を嵌め込んだ。

これで外からも監視出来る。逃げられはしないだろう。

勢い余ってかまどやベッド、作業台とチェストも設置してしまっ

た。これでは仮拠点だ。扉は無いが。

「……スゴ」

「なんちゆうスキルだ、こりゃ」

「2年やそこらで大都市を築ける訳だよ」

いけない。利になる行為をしなくては。

驚愕か呆れかの声を背に受けつつ、作業台に向かう。

取り敢えずケーキをクラフトしてあげた。

好意ではない。実験だ。あれもこれも。

111. 追討ちと降参

「逃がさねえよ」

リムルに追い付いた頃には、残党が無力化されていた。仕事が早い事で。それでも生かして転がすときた。甘ちゃんに変わりない。クラフターは溜息を吐く。

「もう追手がっ!？」

「近習が一瞬で……!」

「……ふむ。キョウヤ達では追手の足止めにもならぬか。やはり素材は素材らしく生贄として扱うべきだったな」

相変わらず鳴き合っている。

通訳がない以上、どんな情報が飛び交っているのか。想像の域を出ない。

多分、命乞いだ。だとして殺す。

他者を想えない奴が乞い諂うな。潔く消えろ。

それよりボスは誰だ。処分してやる。

「それにしても魔物の国の主が自ら出向いてくるとは」

「お前がラーゼンか？　で、背後のがエドマリス王みたいだな……敵が屑でも責任は取らせたいんでね」

「儂らも善とは言えぬが、貴様らも正当性を主張できる程、善良な人間ではなからう。いや魔物であったな」

「お前の方がコイツらより魔物だね」

「そうかね？　人間らしいと自負しておるが」

「確かに選んで殺さないな、コイツらは。無関係な民も王も悪魔も竜も。それこそ神にも挑戦するだろうさ。もうやつてるかもだ

けど。それでも……嘘偽りなく生きている」

派手な衣装を着ている奴がボスだろうか。

いや、それにしても弱そうだな。側いるハゲは元世界の村人に似て非なるものの、同じく弱そうである。怯えているし。

どちらかというど庇う様に前にいる老耄が強そうだ。ハクロウとは似て非なる存在だ。刀剣無いし。だが得体が知れない。

「かの爆撃は主の仕業か？」

「ゴイツらだよ。指示したのは俺だ」

「ふむ。あの混乱の中でも密集防御陣形を組み、多重対魔障壁を発動したのだから」

「そりや見事。でも無駄だったと」

「兵の骨も残らぬ猛爆であったな。魔素を介さない物理の法則を利用した何かか」

念には念だ。

各地を制圧した以上、余剰戦力が浮いている。

慢心しない。手加減もしない。

マルチなら皆で分かち合え。

「で、覚悟は決めたか？　降伏するなら命だけは……国も助けてやる」

もしもし。IRPは暇でしょうか。

——砲撃ですか？　突撃ですか？

はい両方です。

座標は——です。

そこを中心に半径——マス間隔で。

はい。行進間射撃しつつお願いします。

手が空いた同志も現場に来る様に。

ボスらしき荒らしと対峙中。

「何を今更」

「言つたろう。　コイツらは選んで殺すほど上等じゃないぞ。　誰彼構わず殺す気だ。　今なら口聞いて止めてやる」

「ファルムス王国そのものを滅ぼすと?」

「国民はこれから苦勞するぞ」

「同盟国はおろか、人間の信賴を失う行為だな」

「敗戦国は咎を負う……どうせ西方諸国、協議評会も通さず単独で攻めてきたんだろうが。　でなきや同盟国のブルムンドから連絡のひとつやふたつはある筈だからな」

諄い。

全員そのまま動くなよ。

「——王よ。　周囲に増援と思わしき影が無数。　それもひとりひとりが無類なき力を行使する者です。　もはや、ここまでかと」
「其方にも見限られるか。　であれば——」

弾着、今。

「ぬおおおっ!?!」 「またか!?!」

「お、お前らあ!?!」

予定刻通り爆音が響き始めた。

TNT弾頭が弾着し始めたのだ。

ただし直撃弾は注文通りナシである。

先ずは周辺の地面を掘り返す。　ますます穴だらけになり、暫し見れば全てが繋がる深い塹壕となる。

それが我々と荒らしをグルリと囲む。　まるで逃げられ無い様に。

さもリング。　2重の意味で。

「お、お前らふざげんなよ!!　威圧にはやり過ぎだ!　俺ごと吹き飛ばす気か!？」

リムルが抗議の声を上げるが無視。
それより見てみる。　BB演算による砲撃を。　これ、IRPが走りながら撃ってるんだぜ？

そして狙い通り……あいや指定通り荒らしに被害が及ばぬ程度に周囲のみに弾着させた。

驚異的な砲撃能力である。　既存のキャノン、いや創造そのものを超えている。

「ひっ、ひいいい!？」

そして現れる地下君主。

フルスロットルからの、爪アンカー射出での急停止、滑りながら現れた大きな黒曜龍。

街道が更に滅茶苦茶になったが、気にしない程の迫力だ。

「機龍……まさかこれ程の大きさのモノが本当に動くとは……なんと凄まじい技術よ。　威圧する為の虚仮威しでは無かったという事、か」

「本体まで出張させたのか!？　ミリムの時みたいに踏み潰すなよ!

俺にはトラブルの塊にしか見えないでね!？」

荒らしも驚いている。

リムル、お前は既に見ているだろうに。

まあ良い。　本番はここからだ。

創造主達は一齐に完全武装。　リングに溶岩を流し込み、死合会場を整える。

外野は弓矢を構える。　雪玉も構える。　溶岩に落とし込む腹だ。
IRPも前のメリー(快活)にディスプレイの砲口をボス達に合

わせた。

先ずはファイヤーチャージか。格闘も可。
兎も角、整ったぞボス共。 さあ、殺ろうか！

「降参じや。 煮るなり焼くなり好きにせい」

と思つたら殺る氣を失うボス共。

ボスにあるまじき行為に皆が絶句する。

ここまでやったら普通……付き合おうでしょ。

荒らしイベントと後始末

112. 観戦と死亡メッセージ

連邦が荒らしを蹂躪するのは疑いようが無い。

それでも血祭りに参加したく、散っていた創造主は一部を除き連邦へ帰還した。

荒らし本拠地のファルムスヤルベリオスにいた同志は帰る家を無くしてやろうとしたが、そこはリムルと辛辣同志に止められた。分からなくはない。

荒らしの国とはいえ、建造物群は立派なのだ。

壊してしまうのは勿体ない。

他にも理由がある様子だが、外部の同志達は従う事にした。

だが獣王国は駄目だった。

いやクラフターが何かした訳ではない。

獣村人に問題が起きたのだ。故に現地の創造主はファルムス戦に向かえず、だからと何をすべきか判別出来ずに狼狽えた。

「テンペストへ避難しろー!」

「我等が獣王、カリオン様を信じるのです!」

連邦より南東に位置する土地で、ドツタンバツタン大騒ぎ。

ゾンビから逃げる村人の様に、地上の獣村人達が歩きつつも明らかに逃げていく。

その先は魔国連邦だ。

速度からして荒らしが片付いた後に到着するだろうし、対応はリムルや辛辣同志がいるから心配はしていない。

だが何事か。此処で何が起きた。

地上に出ようにも、それはそれで騒ぎになるのが嫌で地下に籠る創造主。

逆に透明化ポーションで這い出て見ても、まるで意味が分からない

い。ゾンビもいなければ他のモンスターすら見当たらない。
……連邦の同志に確認を取らねば。

「避難は出来たぜ」

「……顛末は俺が見届ける」

「任せましたよフォビオ」

「どうやらピンキーストーム……あのミリムが獣王国を荒らすと宣言したそう。」

「事前に知らされた獣村人は、巻き込まれない為に連邦を頼って移動を開始したのだった。」

まさかの事態だった。

「ミリムは荒らしだと周知しているクラフターだが、まさか本格的に荒そうとは。」

扉や街道や植木やら、酷い時はジオフロント全体を破壊したミリムだが、国まで滅ぼす奴じゃないと思っていた。

「どうやら買い被りだったらしい。」

しかも、わざわざ荒らし宣言。

大抵の荒らしは一々教えてモノを破壊しない。

何故そうするのか。

余程舐めているのか、この国に怨みがあるのか。

「両方にせよ他に意図があるにせよ、我々は此れに介入すべきか決断を迫られた。」

ミリムは強い。圧倒的に強い。

だが介入すれば多少の被害は減らせる可能性は無くはない。

「ミリムはエンチャントが効く相手だ。吹き飛ばしたり黒曜石に閉じ込める事は出来るかも知れない。」

「だが此処……獣王国の地下に極秘建造したジオフロントがまたもバレてしまう事態になりかねない。」

ミリムに破壊された本拠地の悪夢が蘇る。

「よおミリム」

そうこう悶絶している内に、とうとうミリムが来てしまった。
相変わらず謎の力で浮遊している。

未だ辿り着けない驚異のエリトラ技術。

「まさか本当にワルプルギスにも諮らずに協定を破棄しちまうとは
な」

対抗はカリオンという村人。

此方も宙に浮く。 だからどうやる。

かつてのシズもそうであつたが。

そんなカリオンだが、実は前にも見た事がある。

魚災の始末を始めた頃に来た奴だ。

そして巨大魚に喰われていたフォビオをノックバックパンチで吹き飛ばし、余波で植林場を荒らしてくれた。

つまり荒らし同士の対決である。

潰しあつて、どうぞ。

荒らしには冷めた目で見えるのもクラフター。

「お前さんは見た目よりずっと思慮深いやつかと思つていたんだが」

とうとう戦い始めた。

カリオンが棒状の得物で攻撃。

が、素手のミリムは全て避ける。

いや、斬撃が避けているというべきか。

ナニか見えない壁で滑っている様でもある。

そして久し振りに見るミリムの顔は……無表情。

反撃するでもなく、ただ対応する様は無機物の様。

荒らし嫌悪か。 なら同族嫌悪だ。

我々は荒らしを応援しない。

「多重結界で滑る……ならば！」

突如、カリオンがリードと思われる紐でミリムの片腕を拘束。動けなくなつたところを攻撃するも。

「……光栄だな」

なんと、ミリムが剣ガード。

どこか曲がり、禍々しい剣だ。ダイヤ剣より強そうで困る。

しかし鞘なんて見えなかったが。彼女もストレージ式だったのか。なら他に何を持っているというのか。

「数多の魔人や魔王を屠つた魔剣“天魔”、その剣をこの目で見られるとは」

だが得物を持ち出すとは。

素手でも脅威なのに。脅威査定は見直した。

ともあれ、報告も兼ねて戦闘を見守る。

「ようミリム。なんでこんな真似をするんだ？」

カリオンが鳴いている。

が、ミリムは鳴かない。らしくない。

「……へッ、もしかして操られてでもいるのかい？　だとしたら少し残念だな！」

カリオンが変身。

翼が生えて、身体はより獣化。

まあ想像し得る範疇。今更驚く事でもない。

「本気のお前を倒して、この俺様が最強であると証明したかったんだがな」

それに変身したところでミリムに勝てるとは思えないのだ。

たぶん、ミリムは本気なんか出してない。

連邦に滞在していた頃であつてもだ。

IRPが敗北を喫し、ジオフロントが大破した時も彼女は笑顔だつた。

悔しいが改めて認めざるを得ない。ずっと遊ばれていたのだと。

では今は？

氷の様に冷たく無表情な彼女の心境は？

これが遊びでないなら、本気だとても？

「さてミリムよ。この姿を見せた以上、お前には退場してもらおうぜ」

カリオンが杖を構える。

観戦は続けよう。対策を考えるのは後だ。

「この世から消えるがいい！ ビースト・ロア!!」

太く眩い光線が放たれた。

ミリムは回避するでもなく、モロ喰らう。

「嫌いじゃなかったぜミリム。いいダチになれたかもしれねーのに残念だ」

が、晴れた頃には無傷のミリムが浮いている。

更に云えばミリムも変身している。

翼が生え、角まで生えている。服装も心なしか変化している。

「……冗談じゃねえ。まさか無傷とはな。だが少しは本気になつてくれたわけかい」

「やるな。左手が痺れたのは久し振りなのだ。お礼に取って置きを見せてやる。ドラゴ・ノヴァー！」

やっとミリムが鳴いたと思えば、倍返しとばかりに先程より巨大な光線を相手に返す。

カリオンは咄嗟に避けたものの、都市が巻き込まれてしまった。ついでに観戦していた一部同志まで。

久し振りに目の前が赤く染まった。

死因はミリムに消し炭にされた、である。

見越してストレージには大したものを入れていないが、リスポーン地点は地下だ。また上がる手間がある。

「……ありえねーだろうが……！　都市が跡形もねえ……！」

それにしても恐ろしい威力だ。

あの一撃で都市が跡形も無くなりやがった。

透明化の恩恵を利用する為、防具はしていなかったが……恐らくダイヤで最大強化を施しても直撃なら即死した可能性がある。

黒曜石で防げるかも怪しい。ジオフロントの装甲強化も考えねばならない。

「破壊の暴君ミリム・ナーヴァ。なるほど御伽噺にしても語り継ぐべき脅威だな……ん？　ありやあ……」

「……ほう」

しまった！

地面が抉れて一部の装甲が剥き出しに!?

クラフターは慌てふためいた。

またミリムにバレたかと。また荒されると。

「黒紫……どこかで見た事ある色だな。例の人間達の仕業……まさか連邦まで不可侵条約を破棄したか……いや、不思議な連中だからな、リムルも知らないか。今はミリムだ」

戦闘態勢に移行しろ!?

非戦闘要員は備蓄物資と共に連邦へ退避!

玉碎覚悟だ。各々が大急ぎで武器を取る。

「よう、理由を聞かせちゃくれねえか? なぜユーラザニアを滅ぼ

そうと思った? 例の人間達の影響か? おいなんとか言えよ。

人様の国を消滅させておいてだんまりか?」

カリオンが鳴いて引きつけている間に、なんとかしなければ。

「ひよつとしてアイツ本当に……」

よし整った奴から上がれ!

エリトラ飛行は突撃せよ!

地上は弓矢で援護! 弾幕を張って威圧だ!

「あら、何かに気が付いたのかしら」

「へッ、お前もかよ。フレイ……!」

と死ぬる覚悟で上がり、弓矢を構えて空見れば……また増えた。

村人がだ。

翼が生え、胸部に膨らみがあり、脚は鳥。

連邦でも見かけた種族である。有翼族(ハーピイ)とかいったか

?

そんな飛び入り参加者も得物を持っており……カリオンを斬りつけた!

それが止めになったのか、動かなくなるカリオン。そのまま担がれると東方向へミリム共々飛んでいく。

「ここにも例の人達がいるのね」

追うか迷った創造主達だったが、やめた。

飛行速度が違う。準備もちゃんとしていない。

「……今は遊べないのだ」

去り際、ミリムに鳴かれたが意味が分からない。

ただ少し寂しそうだった。

113. 問題と処理

「問題が重なり過ぎる……」

リムルが嘆いた。

戦後処理……街道や建造物の修繕はともかく、政治や会議には不参加なクラフター。

辛辣同志が後で要略してくれるなら、それで良いからだ。考えるのは後で良い。

今は迎賓館の池で釣り糸を垂らしている。生暖かく赤黒き海より此方が良い。心が安らぐ。建築も冒険も戦争も良いが、偶には腰を据えてノンビリするのは悪くない。

「おい、会議は終わったぞ」

が、リムルが釣れた事で平穩は破れた。

それで1匹。嬉しく無い。

創造主は釣りを止めた。

「会議に加えて俺にまで不満な顔するな。これでも庇ってるんだぞ……フオビオから言われたんだが、獣王国の地下に不法建築をしたそうだな。ウチも向こうも戦争でゴタゴタしているし、別に優先する事があるから後回しにしたが後で深く追求するからな……いつか不可侵条約云々で揉めるとは思っていたけどさ……はあ……」

なにやら大変らしい。

大変といえば獣王国だ。

なんとミリムが久し振りに出沒したと思ったら、獣王国の都市を吹き飛ばしたという。

荒らしには程が無い。都市が吹き飛ばすのは元の世界でも稀に

あつたとはいえ……問題はその後だ。

ミリムの攻撃でジオフロントの装甲が露出してしまったのだ。バレた可能性が濃厚。

その時は一瞥された程度で済み、北東方面に飛んでいったものの……こりや未来は駄目かも知れんね、とクラフターはゲンナリした。

「萎えたいのは俺の方だ。カリオンとミリム、そしてフレイの問題……獸王国から北東に飛んで行ったらしいが、其方はミリムの支配領域の都と……傀儡国ジスターヴ。魔王クレイマンの支配領域だ」

ゲンナリするといえば、東南方面もだ。

大森林と他国の境界で開拓していた同志が荒らしに襲われたらしい。

「またも群勢との事。傀儡国からだ。一体全体、何故こうも荒らしが1度に湧いたのか。この世界には荒らしイベントでもあるのだろうか。」

「ミリムが1番心配だが、他の問題もある。ファルムス王国の後始末、西方聖教会への牽制。それと世界各地で問題起こしているお前らの存在」

どうしたものか。クラフターは空を見る。

我等クラフターは様々を経験してきた。

徒党を組んで荒らしてくる連中も、数こそ違えど撃退した。

その意味では東南も現地の同志だけで乗り越えられる様な気がする。

だが複雑に絡み合う因果は、善と悪の二極化に出来ない。特にこの世界では。

国という存在も騎士団なる偽善と偏見連中も、裏で計略する策士も創造主からしたら面倒かつ無視したい連中だ。

辛辣同志やリムルから齎される情報……やるなら勝手にやれば良

い。だが向こうから仕掛けてくる。ともすれば、無視しようにも無視出来ない荒らしとなる訳だ。ミリムの様に。

「現状、お前らが世界のどこまで問題起こしてるのか知らないし知りたくも無い。だが何かあったらウチの所為になるんだからな。それは忘れるなよ」

だからこそ本拠地があるなら叩くべきだった。

ファルムスは支配層の村人の思考がゾンビの如く腐敗している。

あの神聖法皇国に対しては疑念だらけだ。

なのにリムルが許可しない。辛辣同志もだ。

分からない。だが我慢だ。複雑な故にと。

ならばせめてと、現地同志が密偵。

あの魔女も連邦に対してやっていたし、なんなら狐娘達もその手の疑惑があるのだから、我々がやっても良いだろうと思ってるのだ。

神聖法皇国に至っては特に謎が多いが故に。

教会といい唯一神ルミナスといい、ヒナタ達騎士団連中といい……

あの理想郷の模造品を作り出している根幹は何なのか。

教会の理念に反する存在がいる時点で裏があるのは明白だ。あ

いや黒だ。漆黒である。

正体が掴めそうな奥地に出向いた時なんか、いよいよだ。謎の光線に貫かれたのに驚いて思わず撤退してしまったが、間違いない。

荒らしの国だ。あそこも。地上の見事な建造物や村人達の快活な光景、白き衣に隠された陽の当たらない暗闇……地下ごと暴きたい。TNTを大量に敷き詰めて起爆したい。どんな優秀なクラフターがああの世界を創造したかにせよ、荒らしであるなら敵でしかないのだから。

……まだ気持ちだけが。落ち着こう。

「……あの緑パーカーの通訳ちゃん存在は有難いがな。だけどあの子、お前らの様でそうでないし……明らかに自分の話題を避けてる

し……お前らに聞こうにも言葉が通じないしなあ」

それに他国より連邦だ。

生き残りの荒らし連中は黒曜石の地下牢にぶち込んだし修繕工事は即終了したものの、郊外に散らかる大量の腐肉処分には未だ困っている。

リムルなら平らげるだろうか。そう思い立ち、腕を振り回して誘導する事にした。

「……え？　ついて来いつて？」

……郊外の屍の山を見せるな
んぎ趣味悪いぞ。本格的に腐臭がする前に処理しないと……処理

……そうだ！」

やはりそうだ。

リムルは何か閃くと真剣に、だが嬉々と云う。

「ブルムンドの試験の時、悪魔召喚を取得していたんだ！　この屍の山を餌に悪魔を召喚、受肉させて手伝わせよう！」

何かゴニョゴニョ鳴き始めると、次には大量の屍が消え失せたと思えば突風と共に黒き村人達が現れた。

今度は屍から村人をクラフトしたのか。

その創造の多様性の富み具合は相変わらぬ想像の上を往くものだから、クラフターは笑うしかなかった。

114. 委託と拷問

「という訳で、仕事を頼むよ」

営業スマイルのリムルに対し、黒い村人は動揺を隠せない。
当たり前だ。いきなりクラフトだか召喚だかをされたのだ。

無理もない。有無を言わず仕事するゴーレムとは違う。

「お、お待ち下さい我が君！ 報酬は申し分ありませんが、それがそのまま仕事というのは……」

「言わんとしている事は察せる。 だけど、どうしても……そう、どうしても手伝って欲しいのだよ」

「ッ！ 分かりました。 我が君への初仕事、完璧に熟して見せましょう」

「うん、頼んだよ……チョロい」

鳴き合いが終わるや否や、消える黒い村人。

それ見て暗黒微笑を浮かべるリムル。

謀ったな？ 謀ったなリムル？

我々に害する行為ならば、詐欺罪で処刑である。

「仕方ないだろ。 警備隊は尋問や警戒の仕事があるし、だからってお前らだけに任せるのは怖い。 どうせ追い剥ぎよりヤバイ事するだろ。 する。 するに決まってる。 その意味では悪魔の方が信頼出来る。 いや、どっちが悪魔なんだろうな……」

まあ良い。 時が来れば動く。

それでも駄目なら、ただの村人なだけだ。

「仕事は他にもあるぞ」

そうしてリムルと共に都市部に帰還。

荒らしを片付けたとはいえ、かつて程の活気は戻ってこない。居たら居たで喧しく邪魔な村人も、こんな時は寂しく感じた。

同志も第2波に備えて迎撃準備中。IRPも郊外に鎮座したままである。

砲口は今度は傀儡国方面に向けられた。

ファルムスはもう良さそうでも、今度は向こうが騒がしい。

一難去ってまた一難。この世界のイベントもよく分からない。

村襲撃ならぬ荒らし襲撃イベント。そういう期間なのだろうか。

なにせよ我々の手で終わらせる。いつも通りだ。更に欲を

云えば、消し飛んだ獣王国へ出向き復興支援しなければ。

元の造形を参考にしつつ、既に一部の同志が着工している。整地

と湧き潰しも並行して行われている。抜かりはない。

ジオフロントも改修だ。天板を更に下げ直し、二重張り以上にす

る。空間の縮小は避けられないが仕方ない。

それでも荒らされるだろうけど。ミリムに。

「ソウエイ達や通訳ちゃんの話じゃ、傀儡国でも悶着してるらしいな。

だけどお前らの事だ、先に手を出した訳じゃない」

理不尽に殴られたから殴り返す。

それを理不尽と感じたなら、やらなきゃ良い。

理屈は知らない。だが荒らしだ。武力行使をされた。なら

荒らしだ。

迎撃する。そして潰す。度が過ぎる様なら本土まで攻め込む。

地下から食い破り、蜘蛛の子を散らす様に平らげてくれる。

「いつもなら怒るところだが、今回は許そう。裏でクレイマンが暗

躍しているのは違くないからな。それに目に見えてきた。既に

交戦状態だから知ってるだろうけど、奴ら軍事行動を起こしてきた。

お前らのお陰かも知れないが、コッチへの威圧か……マジの侵攻か」

一方、連邦での活動も放置出来ない。

修繕工事は終了。砲台へのTNT補充も済んだ。

IRP含む守備隊も配置を組み直した。

だが捕縛した荒らしへの実験がある。後で地下牢に出向いてあれこれ試そう。死んでも構わない。リスポーン実験も兼ねている。

「大森林との境界辺りで戦端が開かれたと聞いているが、竜の都でも戦鬪を確認したと報告がある。どちらも拮抗しているそうだから、俺達も救援を送る準備をする。それでクレイマンと接触出来る機会があれば、襟首掴んで吐かせてやる。それに……お前らだけじゃ不安だからな。放置してもその内に勝つだろうけどさ、それだけで済まさないだろ？ どうせ国も滅ぼしに行くだろ？ で、逆にだ。更地にされた獣王国にお前らが出向き、建築を始めるんだ。おい建築しねえかってな。俺は詳しいんだ」

リムルの鳴声ばかりで飽きてきた。

今度は悲鳴響く場へ向かおう。

そう思ったクラフターは頃合いを見て、地下牢へ向かう。そこは地表より浅く、ジオフロントより上の空間に位置する。

リムルと辛辣同志の要望で作られた。外壁は石煉瓦、通路側は鉄格子で仕切られた解放感ある部屋が幾つも並ぶ。我々としては黒曜石で囲いたかったが。要望に応えるのもまたクラフターである。

さて。その一室から早速悲鳴が飛んでくる。

「ぎゃあああ!？」

おお、ヤッているヤッてる。
悲鳴ではなく結果を求めているので現地へ。

「リムル様は私に復讐の機会を与えてくれたのでしよう。ですが、私自身そこまで怨んでないのです。例の人達のお陰で死者も出ませんでしたから」

前まで豪華な服を着ていた村人……今はボロボロの服の村人とシオンが鳴いていた。

「で、では穩便に……」

「ですが！　貴様の強欲で少なからず負傷者が出ました！」

「ひっ」

「更に云えば、兵とはいえ人間の命を奪う羽目になった！　例の人達だけじゃなく、人間が好きだったリムル様ご自身もです！」

「……ッ！」

「貴様の所為でリムル様の手が汚れた！　例の人達は元より汚れている気がしますが！　それとこれは話が別！　死なぬ程度ならば痛めつけて良いと言われているので……覚悟しろッ!!」

「ぎゃあああッ!!」

良く死なぬ程度に殴り続けられるよな、と思う。

殺すのが目的なら深く考えない。

だがコレは違う。生かしている。

恐らくシオンは耐久実験をしているのだ。死なぬギリギリを見極めて攻撃している。

猛毒をクラフトするのみならず、その辺も精通しているのか。改めて恐れ入る。

「おいクソ女！　なんだこれ殺す気か!？」

別の声が響く。
シオンと殴り合っていた荒らし組だ。

「怯えずとも良い。お前達の事は聞いている。全てはこの責任者の所為だと。直ぐに終わるから安心してヨシ」

「安心のカケラもねえよ!」

「飯の事言ってるんですけど!」

こっちはこっちで別の実験をされていた。

あの猛毒を差し入れているのだ。

瀕死で済みそうにない。思わず身震いした。

「あら。足りませんでしたか?」

「そうじゃないんだけど。というか、これ食べ物なのかな?」

「初めて見えますか? 栄養満点のシチューです。おかわりもありますよ」

「嘘だろおい!」

「ダークマターかな?」

「なんか蠢いてる!?! キモッ!」

荒らしとはいえ同情してしまった。

クラフターも経験者だ。

2度とあの汚水物を口にしたくない。そもそも料理と認めない。

アレは兵器だ。実績もある。

……なんだか実験する気が失せてきた。

「ああ、ここにも居ましたか」

今度は辛辣同志。

次から次へと物事は起きる。構わんが。

「先程、各国からのお偉いさんが到着しましたよ」

そうか。荒らしか。ボスラツシユか。

「相変わらず馬鹿ですか？ 救援です」

ファルムスのか。今更なんだ。終わったぞ。

「確かにそうですが、情報共有もありますからね。ドワルゴンからガゼル王率いるペガサスナイトとブルムンド王国からフューズさん達。それと交流は無かった筈なのですが、魔導王朝サリオンからも。ファルムスに対する処理についての会議が行なわれるものかと」

新キャラには興味あるが会議は参加しないぞ。
後で要点だけ教えてくれ。

「そうします。逆に行くな、だそうですね」

そうですね。行っても詰まらないからな。

「それで会議室で好き放題、と。それが困るんで来るなって話ですね」

良いさ。こつちもやる事がある。

細かい事はリムルと辛辣同志に任す。

我々は東南方面だ。荒らしは駆逐してやる。

115. 会議と戦場

「会議は終わりましたよ」

辛辣同志がまたも云う。

村人は会議が好きなのだろうか。

我々は嫌いだ。 踊っていた方が楽しい。

「馬鹿同志が居合わせたら会議も踊るんでしょね。 それより報告です」

馬鹿なりに傾聴しよう。

どこで創造のヒントが得られるか分からない。

「魔導王朝と魔国連邦が国交を樹立。 国を繋ぐ街道の開通工事や整備、道中の宿屋の運営は連邦が引き受ける事になりました。 その代わり通行税を貰うそうです」

何してんだリムル!?

地下鉄を整備すれば良いのに!

既存を流用すれば安上がりだぞ!

「その地下鉄は不法開通でしょうが!?! 公に出来る訳ないでしょ!?!」

そういえばそうだった。

この世界は何かと煩い。

だがリムルは大体知っている筈なんだがなあ。

大陸横断の話をした時点で、大陸中に鉄道が張り巡らされているのは察せるだろうに。

「ばば」を何札も持っているリムルさんには同情します。それもその内に見せないといけないと考えると……」

なんでだ。何故そこで溜息を吐く？

”つまらないもの”じゃない！ 有用だ！

「次いきます」

無視するな。

「西方聖教会についてです」

ああ……あの集団。

偏見 偏在 我々絶対殺す団のところか。

「向こうが手を出さない限り、此方も手を出さない」と

リムルらしい。

滅ぼせるなら滅ぼすのに。 甘ちゃんめ。

「事は単純じゃありませんよ。大司教らへの捕虜尋問の結果、分かった事があります。教会本部は飽くまで連邦を神敵として討伐する予定だったというだけで、正式に敵対していた訳じゃなかったんです」

何を馬鹿な。

事実、連邦は襲われたんだぞ。

「元凶はニコラウス・シユペルタス枢機卿。その者に連邦について報告したところ、討伐する予定だと返信が来たそうぞ。その親書を

決定事項と説明し、拳兵を後押ししたと白状したんです」

どうでも良い。 事実が変わらん。

それに賛同した連中を無罪放免とはいくまい。

巨悪の根源を探り出し絶ったところで、その影響を受けた連中が荒らしである事に違いがないのだから。

捕虜連中もリムルや君が止めるから殺さないだけだ。 我々の世界だったら黒曜石に封じ込めて幾度となくリスキルを味わわせているぞ。

「貴方達の世界なんて知りませんよ。 行つた事ありませんし、行きたいとも思いませんね。 さぞ無秩序なんでしょうし」

君はこの世界の生まれか。

あの研究所でか？ 深淵で何をしている？

「……話が逸れましたね。 続けます」

そうしてくれ。 話したい事を話せば良い。

「……なので交渉次第では敵対を避けられるかも知れないって話に。 それについてはブルムンドが引き受けました。 西方諸国評議会 で連邦を宣伝するそうです。 既に多くの国に利用されている交易の中継地として知られれば教会とて問答無用とはいきません。 どこかの誰かさん達と違つてね」

理不尽に殴つて来た連中を殴り返してきたただけだ。 それを逆に理不尽だと唱えるのは不愉快極まる。

向こうだってやり返される覚悟は多少なりともあった筈だ。

少しも思つてなかったなら、随分とめでたい荒らしだ。 それこそ甘いと言いたいね。

「こつちの世界の事情も少しは考えてあげて下さい。　リムルさんが溶けますよ」

リムルは上手くやる。

会議とやらも、そうしたんだろ？

「そうですね。　各国からの慈悲も大きいと思いますがね……続けます」

握飯を食べながら聞く。

聞いていても荒らしへの憎悪が蘇るだけだが。

「……それ鮭とか、具入れてますか？」

入れてない。　塩という砂糖に相對する素材をクラフトしているが。

「入れると美味しいですよ。　ある平凡なクラフターがやってました」

そうか！　　ここまでで一番有益な情報だ！

早速地面に穴を掘り、水を張る。

釣竿のブイを器用に投げ入れた。　狙うは鮭だ。

「まだありますよ。　一応説明するよう言われてますんでね」

もうお腹いっぱいなんだが。　二重の意味で。

「で、教会絡みは大義名分とした言い訳ですね。　国としては今後の流通の主流が奪われる事を恐れて今回の件に繋がったのだとか」

荒らして良い理由を作れば許されると？

クリーパー誘導や事故を装った欺瞞に満ちた行為は大嫌いだ。
尚更度し難い。

ミリムの時もそうだ。荒らしたのはミリムだが、誘導したのはリムルだ。

……そう考えると、ミリムはまた誰かに誘導か何かをされて獣王国を……？

いや、どうだろうな。憶測なら幾らでも出来る。

おつ。かかった……フグが釣れた。

これは悪性食糧だ。毒になる。

「……そんなファルムスに対しては、賠償金を要求する他、裏工作をして内戦を起こさせて一度滅んで貰います。ヨウムと捕虜にはファルムスに戻ってもらい、上手く収めて王になって貰うシナリオです。あの黒い悪魔も同行するそうですよ……聞いてます？」

毒だがクラフトしたら美味いかも知れない。

よしクラフトして食った。

……毒だっ!! くそっ!!

「馬鹿ですね本当!? 早く解毒!」

牛乳バケツを一気飲みして治す。

おのれフグ。なら他で試すだけだ。

……牛乳と混ぜたらどうなる？

「……続けますよ。悪いですが、これも仕事なので」

駄目だ。美味しくない。

工夫すれば別の道もありそうだが。

「取り敢えず釣りを続けよう。」

「次に傀儡国の方です。軍事行動を起こしているのは知ってますよね？」

知ってる。

荒らしだろう。既に同志が交戦中だ。

ジュラの大森林境界辺りで。

「ミリムの支配領域、竜の都にも駐在しているのも知ってます？」

知ってる。

それなりの数がのさばっている。

そつちでも同志が交戦中だ。横柄な態度が許せないのだ。村

人に手を出したし。

……だがミリムが黙っているものだろうか。己の領域があるならば、そこを荒らしている奴を許すか？

我々なら許さない。殲滅する。他人の土地を荒らすだけでなく、自分の土地が荒れても良いと考えているなら別だが。

いや、その可能性は低い。あの都も良い建造物が並んでいる。

村人達は何処となく原始的な食事をしているが、良い街なのだ。なんか交戦意欲を抑えている村人もいるが。

「……ミリムの事を心配しているのは、リムルさん達も同じです。クレイマンに操られている可能性が指摘されますから」

傀儡国も荒らしの国か。

ここまで来ると、皆荒らしな気がする。

「荒らしているのはアンタ達でしょーが」

冒険と開拓と建築をしているだけの、至って平和な行為がメインなのだが。

邪魔する国は ぶっこわす！

「邪魔なのは馬鹿な同志だと思えますが……とにかく、傀儡国のクレイマンと構える事になりました。友好国のユーラザニアの首都をミリムを使い滅ぼした事、ファルムスに攻め込まれたのもクレイマンが裏で糸を引いている可能性が濃厚だからです。戦争にはテンペストと獣王国の戦士団、それと馬鹿達で当たるそうです……また戦争ですね」

戦争？

そんなもの、とつくに始まつてる。

「ですね。 ある意味、馬鹿達の所為でずつとかも知れません」

マルチである以上、意見の相違がある。

ただ悪意には断固抵抗するのみ。

「無邪気でも許されない行為もあると思いますけどね」

だろうな。 偶に怒られるから。

「それとワルプルギスが発動しました」

なにそれ美味しいの？

「魔王達の宴、全ての魔王が集う特別な会合だそうです」

また会議か。 本当、村人は好きだな。

……いやボスカ。 ならウチは関係無い。

「リムルさんも招集されます」

は？　なんで？

あんな悪食スライムをボスとは認めないよ？

「そうじゃないです。喚問なのでしようが、今回の様々な騒動の件で汚名や冤罪を着せて痛ぶるつもりでしょう」

もしかして我々の所為？

「それもあるでしょう。ですがリムルさんは魔王じゃないですし名乗った訳でも無い。参加は通常出来ない筈ですし、単なる制裁ならわざわざ魔王の会合に呼ばずとも……これも政治、あれも政治なのでしょうね。今回は他の魔王への見せしめかと」

……………。

殺されるのか？

「会合ですよ？　まさか……最悪は」

辛辣同志よ。ひとつ教えてやる。

そういう場にも理不尽とは潜んでいるものだ。

……金をチエストから引き出してくる。

「金？　それで都合が悪い事を無かった事にして貰うと？　取引ですか？」

いや？

そんなつもり鼻から無いね。　金で万事解決するなら荒らしなんて湧き出るものか。

君も何となく察して来ただろ？

「考え過ぎじゃ……名目上、知り合いであるラミスという妖精の魔王の従者として向かうそうですし……って、急にどこへ!？」

決戦用上位金林檎やポーションを作りに。

「ボスラツシユ万歳じゃないんですよ!？」

そんなワケあるか。

悪友を痛ぶられるのは気分が悪い。

何より荒らしが自らの罪を他者に擦り私刑として楽しむのが気に入らない。

それをリムルにして良いのは我々だけだ。断じて裏でコソコソする卑劣な荒らしではない。そんな奴、堂々斬り捨ててやる。

「格好良い様でそうじゃないですけど」

クラフターは再び完全武装。

どうやら戦場は増えるらしい。

116. 森林戦と時間稼ぎ

始まりはいつだって唐突だ。

荒らしが徒党を組んで森にやって来て、好き勝手に荒らし始めた。ツリーハウス群が炎上。騒ぎとなった。

「ジュラの大森林側とはいえ、傀儡国に向けて集落を築くとは……」

「舐めやがって！ 焼き払え！」

柄の悪い連中が様々な得物を振り回し、火の玉でツリーハウス群が破壊され燃やされる。

森林で火災が起き、創造主は慌てて殴り消したり水バケツをひっくり返し消火する。

自然鎮火するものもあるが、なにぶん火力が強い。

折角、地形を生かした建築をしたのに荒らすとは。相手は創造主の粋を分かってない。あいや荒らしに求めるのはお門違いか。

「アイツら拳で消火してるぞ?！」

「なんでバケツの水が延々と流れ出るんだ!？」

「一瞬で石壁が!？」

「噂通り奇天烈な人間共め！」

鎮火作業しつつ、丸石の防衛壁を展開して荒らしを観察する。

規模こそファルムス軍より少ない。

なんなら傀儡国の隣、竜の都に駐屯する荒らし戦力の方が大きい。

今対峙しているのは恐らく国の守備隊か陽動部隊だ。威力偵察かも知れない。

「だが所詮は人間！ 俺らの敵じゃねえ！」

「数も少ねえしな！」

だからと決して侮らない。

空を飛ぶ荒らしもいるし、個々の攻撃力や速力が高い。対して此方はファルムス戦の為に間が悪く人員が減っている。兵站も少ない。

そこを狙われた形だ。下手に前に出たら忽ち全滅だ。

先手は取られたが、増援がじき来る。その間は我々だけで凌がねば。

創造主は無闇に飛行したり拠点から出ず、地の利を活かす。丸石の防壁に穴を開けると、ハーフで隙間を半分埋める。出来たスリットから空や地上を見ては弓矢で反撃した。

「ちっ！　草木の間から矢が!?!」

「だがたかだか人間の矢如き……グツ!?!」

「毒矢!?!」

「火矢も来る!?!」

「それだけじゃないぞ?!」

「光る矢!?!」

狙撃に自信のある者は効能付きの矢を放つ。

毒や火は想像の通りだが、光の矢は当たった相手が発光し、居場所が分かりやすくなる。

そこを別の同志が射抜いていく。

草木の影から射るのは難しい。向こうから此方は見難いが、創造主からしても同じ事。

いや、相手の方が見えるだろう。感知系スキルとやらを持っているならば。

だからと負ける訳にはいかない。数の不利を覆すのは容易ではない。だからこそ少で大を対抗出来る工夫を凝らし創造する。

「矢が出てきた辺りを狙え!」

当然、荒らしも反撃してくる。

矢が出てきた辺りを狙われる。が、それくらいは想定しているから丸石のトーチカや壁を作ったのだ。弱攻撃ならこれで防げるので、気にせず狙撃を敢行。

強攻撃で破壊された同志は、その場に留まらず木の枝から枝へと飛び移り矢を放つ。

攻撃後もその場に留まらず、直ぐ移動して攻撃を回避していく。

「ええい、ちょこまかと！」

「地上部隊は何をしている!？」

「罨に掛かって手間取ってます!！」

「ちい!?! どのつもこいつも!！」

一方、地上でも当然戦闘は行われていた。

いちいち剣や弓矢で相手に出来るほど潤沢な資源も人員もない。

その隙を埋めるべくワイヤートラップや感圧板とTNTを組み合わせた地雷原を敷設。

場合によってはRS回路でスイッチ起爆を行う。

不規則な自然の樹木を縫いながら行動せざるを得ないのを予測して仕掛けた罨だが、上手くいっていた。次々と地上で起爆音。爆発が森に響き渡る。

「ぐあああ!?!」

「足元をよく見ろ! 注意して進め!」

「で、ですが前から矢が……ガッ!?!」

怯んでいるところを討ち取る。

木々の間、通れる場所がクレーターになった後も役に立つ。こうして行動阻害が出来る。

爆破範囲を極めてこそTNTの使い手と云えよう。

それでも何人かの荒らしが根元に来てしまう。そこは剣かTN

T直接投下で倒す。 水流で押し流すのも可。 マグマは火災が懸念される為、他にする。

「たかだか人間の剣に押されるとは……!」

「木を奴等ごと切り倒せ!」

「はっ! ……何故か木が倒れない!」

「根元から上が浮いてるウツ!!」

「ウツソだろお前!」

木を切る地味な荒らし行為を見せられたが、気にせず倒す。 今ならTNTで根元ごと吹き飛ばす。 直すのは後で出来る。 今は戦闘優先だ。

無限弓でなく、矢が尽きた同志は左手に釣竿、右手に必殺ダイヤ剣を構える。

上から下の敵にブイを投げつけ釣り上げると、そのまま斬り捨て御免。 排除する。

「なっ、釣り上げられ……ぐはあっ!」

「馬鹿な!?! そんなに腕力があるのか!?!」

ノックバック剣持ちは敵を遠方に吹き飛ばし、木の幹に衝突して怯んだところを弓矢組が射抜いて処理した。

マルチの連帯は決まると気持ち良い。

「片手剣で吹き飛ばされただど!?!」

「奴等、人間じゃねえ……!」

「くそっ! 撤退だ! 体制を立て直す!」

「荒らしが皆して逃げていく。

組織的な荒らしは厄介だ。 奴等もマルチの連帯を知り得ている。 あの様子だとまた仕掛けられるだろう。 だが此方もノンビリ待

ち構えるつもりは無い。

火災を鎮火させ、ツリーハウスを要塞に改造する。

資材は無い。なら地下を採掘して集めれば良い。それがクラフター流。足らぬ足らぬは工夫が足らぬ。だが欲張れば足下は宝の山だ。

採掘で大量に得た丸石で防壁を設置し、僅かに得た石炭で鉄鉱石を精錬、鉄を集める。食糧からカボチャを割いてアイアンゴーレムをクラフト。トラップも作り直す。

どれも急造だったが、対荒らし戦闘をするマルチクラフターの団結力を舐めてはいけない。

粗末で不恰好ながら、ツリーハウスはあつという間に丸石要塞と化した。

ついでに地下に簡易的な拠点ができる。地下採掘跡を防空壕ないし迎え撃つ迷路とする。

「よし、上から火の雨を降らせる！」

来た。想定より反転が早い。

真上からファイヤーチャージの雨の様な攻撃をされてしまう。

まだ改修の余地があつたが仕方ない。迎え撃つ。

敵は待つてはくれないのだ。

上空を覆う緑のカーテンが燃やし尽くされ、拠点が空から丸見えにされていく。

荒らしの癖に少しは頭を使ったか。

「このまま丸裸にしてやる！」

だが空襲なんて初めてじゃない。

特にこの世界に来てからは。

天馬といい、魚といい、半鳥村人といい、村人や怪物にとつても空が身近な世界なのだ。

経験は糧となり創造へ繋がっていくのである。

「よし、見えて……ナニイツ!」

天井も丸石で覆った。

カーテンが開けられ、眩い空。それを合図に天井に僅かに開けた隙間から弓矢組が一斉射。対空弾幕が張られ、油断している鳥荒らしを次々と撃墜する。

「グギャツ!」「ガツ!」

「くそっ!」 一旦距離を取れ!」

向こうからよく見えるという事は、此方も良く見えるのだ。

相手の意図を理解した創造主は、視界が確保されるタイミングを合わせ反撃していく。

拠点そのものは丸石でほぼ覆われた。焼き払うのは不可能だ。

「相手の射程外から一点に集中砲火!」 穴を開けて、各個突入!」

今度は一点に集中砲火を掛けられる。

流星に丸石壁が耐えられず、空と地上それぞれに大穴が空いてしま

う。そこから荒らしが雪崩れ込んで来たので、白兵戦……剣劇へ発展して

しまった。穴が限定されている分、いつぺんに相手せずに済んだが負けるのは

時間の問題だ。
くそっ。今回の荒らしは手強いぞ。
だが負けん。守ったら殺られる。攻めろ!

「へッ、近付けばこっちの……ッ!」

「なんだこの巨人!」

「ゴーレムか!？」

「雪玉を投げて来る奴もいるぞ!？」

「どこまでもふざけやかって!？」

アイアンゴーレムが壁となり、荒らしを殴り上げる。スノーゴーレムは雪玉を投げて微弱ながら敵の侵攻を阻害。

その間にクラフターは地下へ退避。地上区画は放棄。嫌がらせに溶岩バケツをぶち撒いてTNTを適当に設置、火矢で起爆。

拠点内に溢れた荒らしは後続に押されたのもあり、固まって吹き飛んでくれた。

「ぐはっ!？」

「くそっ!　　悪あがきを!？」

「追え!　　逃すな!？」

「皆殺しダア!？」

まだ来やがる!

増援同志はまだなのか!?

狭い地下採掘道を進みつつ、最後尾が丸石で封鎖しつつ奥へ奥へ引つ込む。

時折嫌がらせ程度にマグマ溜まりを挟む。

IRPに連絡を取り、砲撃支援要請もしているが時間が掛かるか!?

「道を塞がれた!？」

「この先にいるのは間違いない!　　なんとしても殲滅するのだ!？」

「このまま逃げ帰る様ではクレイマン様に殺されちまうからな!？」

ハアン声が近づく。

採掘能力が無いと油断していた。

荒く破壊しながら進んでいる様だ。

此方も慌てて進む。　　が、ツルハシがタイミング悪く壊れた。

直ぐに作業台で石のツルハシを作るが、作業速度は極端に落ちる。もう使えるメイン武装は剣しかない。

戦うしかないと創造主は覚悟。状況に備えた。

刹那、爆音に次ぐ爆音。落ちて来る砂埃。

「な、なんだ!？」

「地上のトラップの誤作動か？」

「それにしてもデカ過ぎるぞ！」

「良いから前を……」

次には光の洪水。

地下だった空間に青空が再び現れて、白雲が流れる光景が視界一杯に広がった。

「へっ……っ？」

続けて爆発。爆発。爆発。

驚く間もないまま、目の前で荒らしが無数に爆破解体。荒らし達が爆煙の中に消えて逝く。

創造主は窮地を脱し息を吐く。

IRPの支援砲撃が間に合ったのだ。

危うく荒らしごと吹き飛ぶ際どい地点とタイミングだったが、なんとかなった。

死んで復活出来るとはいえ、荒らしに敗北し拠点を占拠されるのは気分が悪い。そうならず良かった。

増援が到着したのはその直ぐ後だったが、そのまま残党狩りと拠点修復作業に手を貸してくれた。戦闘こそ間に合わなかったものの、意味は大きい。

そしてそのまま傀儡軍への反撃、牽制部隊として再編成。竜の都の同志も勝利すれば大雑把ながら包囲網が出来上がる陣形だ。

そして後に連邦の鬼人を加えていき、本土侵攻への足掛かりとなる

⋮
○

117. 竜の都と駐屯荒らし

「ミリム様への供物まで取られては困ります」

忘れられた竜の都。 ミリムの領地。

今ここは騒がしい。

荒らしの国……傀儡国の隣であり、ミリムも荒らしなのだから故にここも荒らしの都かと思えばそうではない。

それなりに造形の整った建造物、神殿もある。 観光する分には村人も襲ってこないから、時々お邪魔していた。 滞在同志もいる。

が、今は状況が劣悪だった。

別に都が破壊されたとか、村人に殴られた訳ではない。

獣王国をミリムが吹き飛ばしやがったから、創造主は不機嫌なのだ。

あそこも良い都市であったのに！

やはり荒らし。 だが荒らし。

創造主は完全武装でヤツを待ち伏せする事に。

あの後ここに戻って来ると思っていたのだが……不在を決め込んでいる。 探してもいない。 居留守かは分からない。

全く……いたらお礼参りをしようとしたのに。 久しぶりの挨拶を兼ねて。

代わりとってはなんだが、何故か傀儡国の荒らしが駐屯。 我が物顔で振る舞い始めた。

ああヤメテ。 これ以上イライラさせないで。

「——魔王ミリムの勅令書を先日お渡しした筈だが？」

「ですがヤムザ殿。 我々としてもこれ以上の援助は厳しいのです。

其方の軍に提供した食糧で倉庫が3つ空になりました。 民が食うに困るとミリム様が悲しまれますので」

村人と荒らしが揉めている。

が、創造主は我慢した。

決定的な瞬間を待っているのだ。　荒らしの現行犯、その瞬間を。

「ミッドレイ殿か。　礼儀知らずの部下を持つと苦労しますな……と言いたいところですが、貴君こそ礼儀がなっていない。　魔王ミリムが勝手に動いたのだ。　その尻拭いをしてやってる我が軍に対し貴様らは礼を尽くすのが当然だろうが!!」

荒らしイベント続きで怒り心頭の創造主は痺れまくり、逆に笑顔が浮き始める。

辛辣同志の報告だと、コイツら傀儡国の荒らしがミリムの領域にいる理由は、獣王国の残党狩りの為らしい。

だがそれに何故傀儡国が介入するのか。　それはクレイマンが真なる魔王覚醒の為に魂が必要だから……とか良くわからん事を云われた。

どちらにせよ荒らし行為に違いない。　敵だ。

既に何人もの同志が鬼気迫る表情。

我慢。　我慢だ。　まだその時ではない。　先に手を出しては

我々が責められる。　リムルに。

「——協力の機会を差し上げよう。　我らだけで獣王国の残党狩りは十分……貴君らには物資の運搬をしていたらどうか」

「ちよ、ちよつと待って下さいよ！　食糧まで奪われた上に人手まで取られるのは」

刹那。

荒らしが村人を斬りつけた！

「ぐっ……!!」

「ヘルメスさん！」

「黙れカスガ。 見せしめに殺してやっても……」

よしもう良いぞ皆の者。 殺せ。

創造主は現行犯をしかと両眼で見ると、一斉に武装し襲い掛かった。

荒らし死すべし慈悲は無い。

「ハッ！ カツとなってくれて助かる。 力で挑むヤツには力で御せば楽なんでなあ！」

暴力には暴力だ！

なに、己の道を往くのみ。 荒らしは倒す。

創造主は初手で剣撃を喰らわすも、爪の様な得物でガードされる。だが関係ない。 ノックバツクだ。 村人から距離を離す。

「チッ！」

吹き飛ばしたところを雪玉連射で牽制。

怯ませてる間に同志が弓矢を引き絞り、一斉射。

ガードされつつ横っ飛びで回避されるも、幾つかは当たった。 追撃する。

「奇妙な連中め……おいお前ら！ 叛逆者だ、全員纏めてブツ殺せえ！」

奴がハアンと鳴くと、ゾロゾロと簡易小屋から荒らしが大量に湧き出てくる。

面倒だ。 せめて目の前の荒らしを殺しておきたかったが止むを得ない。

相手になってやる。 纏めて掛かってこいや！

「叛逆も何も、コイツら他所者なんスけど」

「ヘルメス、お前を庇つての行為なのだろうが……成り行きを見守るとしよう。面白い戦いが見られそうだからな！」

火矢を放ち簡易小屋に放火。

瞬く間に火の海に。荒らしは火だるまになって転げ回るが、無事な連中も多い。

「いやいや、これ勝っても負けても俺達の所為になるんじゃない?」

「だったら止めるか?」

「……今頃無理でしょ」

熱い思いをしなかった連中には痛い思いをして貰う。エンチャント弓矢で射抜き、必殺ダイヤ剣をお見舞いし。

どうせ荒らし連中だと、予め奴らの足元に埋めていたTNTをRS回路で着火、纏めて地面ごと吹き飛ばす。展開される前に叩く。

「派手にやりますねえ。天幕ごと吹き飛ばしましたよ。魔法では無さそうですが……」

「ぬう……! 卑劣な手段を取らず堂々戦えば良いものを!」

「それが彼らなんじゃないですか?」

散っている荒らしを各個射抜く。

IRPに支援要請もした。大急ぎで此方に向かっているそう。

IRPのパワーなら、森の木々を薙ぎ倒しながら全力疾走でこれる。

嬉しい情報は続く。

IRPは辛辣同志と研究員の村人の協力を得て進化しているそう
だ!

しかも!

パイロットが新素材でクラフトした剣を届けてくれるという!

俄然やる気が出てくるというもの！

とはいえ、距離があるから時間は掛かる。その間は我々で支える。

元々ここにいる同志は、ミリムにお礼参りをする予定が大半だった。武装はフルエンチャントである。ミリム相手には不安だったがコイツら程度なら十分戦えそうだ。

「ただの人間じゃないのか!?!」

「強い……強いぞコイツら!」

「武器だけじゃない! 動きも違う!」

「ひ、怯むな! こんな事、クレイマン様に知られては殺される!」

「やるしかねえんだ! 死ぬ気で挑め!」

荒らしが勢いに乗ってきた。

が、勢いだけだ。軽い魔法弾は丸石壁で防いだり、数が少なければ剣で跳ね返す。

「ギヤアツ!」

「は、跳ね返ってきやがった!」

「馬鹿なツ!」

やがてIRPの支援砲撃も重なり、荒らし陣地が耕された。もはや相手に態勢を立て直す余力は無い。

「さつきからの爆発はどこからだよ!」

「空!?! 地面!?!」

「知るか!」

「駄目だ! もう勝てない……!」

「ヤムザ様、最早我が軍は!」

「数分……たった数分で壊滅!?! 万も駐屯していた我が軍が……!?!」

生き残りは堰を切った荒らしと数える程。

呆気ない。鳥合の衆と罵るつもりは無いが。

我々は罨を仕掛けたし、放火もした。

だが力に挑む時、同じ力で挑む道理は無い。仕合じゃないのだ。

荒らしなら余計に。

貴様らの負けだ。

敗因は密集していた事。

我々が完全武装だった事。

何より我々を怒らせた事である。

「……囲まれています」

「敗北を認めろというのか!？」

「生き残りも武装解除。降伏を始めてます」

「空間転移は……間に合わんな……降伏の申し出があるならば受け入れ……ッ!」

「ヤムザ様?」

僅かな荒らしどもが得物を地面に落とし戦闘の意志を失くす中。

堰を切った荒らしは突如、片腕をプルプルし始めた。手には小さな

な球体を持っている。

「あ、ああ……お、おやめ下さいクレイマン様ああ!!」

叫びと共にソレを飲み込んだ刹那。

あつと驚き創造主。

村人がかつての巨大魚に変貌したのである!

「なにがどうなっておるのだ……!？」

「カリユブデイスの残滓の様なものか!」

ヤベエよヤベエよ。

創造主は慌てふためく。

なにせ当時、IRPや武装村人と共に何時間も戦闘を続けても尚、倒せなかった怪物である。

最終的にミリムが倒してくれたが、今の我々のみで倒せるのだろうか？

いや倒す！ 荒らしは絶対許さない！

我々もあの時とは違う。

ミリムを待たずしてきつと倒せよう。

進化したIRPと新剣に期待する！

と結局はどこか他力本願な創造主であった。

118. 魚災再来と新技術

「しかも2体に!？」

創造主はかつての魚災と対峙した。
それも2体。

「ヤムザが付けていた魔宝道具の影響だ！」

「ドツペルゲンガー……使用者と同一の分身を作り出す奴か！」

何とかしなければ。

変質していく巨大魚に矢を打ちつつ、黒曜石で封印を試みた。

駄目だ。変質と回復速度が上回る。

「ぬう……これはマズいな」

「どうしますか？ 加勢しますか？」

「並大抵の技量で何とかなる気配ではない」

「ですが、このままでは都が！」

IRPに座標を伝達。

引き続き砲撃と弓矢と剣、TNTと溶岩で時間を稼ぐ。

後方では村人を守る為に臨時シエルターを建設。見た目は黒曜石の豆腐だが、拘っている場合ではない。

相手もいよいよ反撃。触手攻撃やら光線やらを打ち付けてきたが、黒曜石で防ぎ切る。

「なんと堅牢な……！」

「守ってくれるのは嬉しいツスけど、倒す算段はあるんスか!？」

都も出来るだけ傷付けさせまいと、其方でも黒曜石の大壁を立てる

創造主。

ついでに上層から打ち下ろす。弓矢、溶岩、TNT空爆。エリトラ飛行で周囲も飛び始める。あの時とほぼ同じく創造主は思考を巡らす。

「剣と弓矢もですけど、どこから出してんですかね」

「知らぬ魔法の類か」

「空まで飛んでます」

「何かを羽織ってな。魔宝道具の一種か」

「噂通り奇妙な連中ツスね」

初見の際も様々を想像し創造して試行錯誤したが、一向に攻略方法が発見出来なかった。

問題は驚異的な自己回復能力だ。集中放火をかましたところで従来戦法が通じない。

ジ・エンドみたいにクリスタルがあるなら破壊するのだが。

その内にトンデモ思考すらし始める創造主。

「でもヤツの再生力が上回って駄目ツス」

「だが臆する事なき行動力。諦めも無い。暫し任せてみる」

「ええ……」

ウィザーを召喚してぶつけるんだよ！

『ナニ云ってんです頭逝ってますか!?!』

辛辣同志が念話（チャット）に割り込んでる。

（笑）。

だが確かに駄目だ。都まで壊れる。

後処理も大変だ。

というかクラフト材が手元がない。

ネザースケルトンの頭なんて誰が持つてるんだ。

全くだ。

今から取りに行け。

無理だ。頭レアドロップだぞ。

『馬鹿の頭をドロップさせましようか』

馬鹿云うな。我々は未だバラけた事がない。

インベントリの中身はぶち撒けてもな。

『そうでしたね。貴方達は』

真面目に聞く。誰かチェストに入れてる？

この中に持つてる奴は？

.....

何故いないし。

ほら見た事か。

じゃあ他にどうするよ？

村人の頭で代用。

『止めて下さい』

却下。

駄目だ。

賭けるな。感じろ。

感じた。

巫山戯るなよ。

創造主同士で相談しつつ、攻撃を剣で防ぐ。

既存のやり方で有効そうなのは、IRPの質量をぶつける方法だ。

まだ試してない。

「よく剣で往なせますね」

「青き剣身が薄ら輝いている。魔剣か？　なんにせよ普通ではな

いな」

だが相手は空を飛ぶ。

IRPは空を飛べない。

スポーンの瞬間を狙えば良かったが予想なんて出来なかった。

ここはやはり新兵器に期待するしかない。

ウィザー召喚は兎も角、荒らしのミリムや悪食リムルに助けを求めたら負けかなって思ってる。

「何か近づいて来るぞ……！」

そもそもミリムは所在不明だ。

リムルは会合で忙しい。

武装村人や同志が増援で来たところで、普通に無理である。

ならどうするか？ マルチに頼る。

そら来た。ドシンドシんと荒く森の木々を薙ぎ倒してくる黒い影が。

「なんか来たーッ!？」

機龍、IRPが砲撃しながらやって来た！

……が、見た目は前とほぼ同じ。

クラフターは期待していたのにガツカリした。

辛辣同志め。どこが進化したんだ！

嘘吐き！ どこをクラフトした！

『嘘じゃないです』

云ってみろ。云え。云えるんだろお!？」

『懸架装置を取り付けました。これで振動や高所落下時のダメージを無くす事に成功。私でも大丈夫なまでに進化しました』

巫山戯るなよ。

確かにIRPの初動時に報告された問題点に落下ダメージの件があった。

だが今求めているのはそうじゃないだろ！

『村人でも少しは扱える様にしました。重力加速度等のパイロットの負荷を考慮し……』

それこそ巫山戯るなよ!?

村人にパイロットをやらすか!

それが1番危なっかしいわ!

『馬鹿な同志に操縦桿を握られる方が危ないでしょうが。それから』

それから?!

『そんな馬鹿でも扱える様にコックピット内で操作する諸所を簡略化しました。特に変速装置が簡単になったのは大きいですね。手動でもいけますが、基本設定は自動操作です。当初は連動機の関係で未熟なパイロットが動かして急に止まらず、ジオフロント内での戦闘にて目前のビルが倒壊する等の被害がありました。そこはBB解析により改善しましたよ。本来面倒で複雑な砲撃座標計算を自動算出している時点で可能性は有りましたが、実って良かったです。ポーション研究している村人の協力があったお陰でした! いやあ村人の技術はやはり馬鹿に出来ません! 見習って下さいね馬鹿共』

そんな結果、求めてない。

魚からの攻撃を黒曜石で防ぎつつ会話を続ける。

『じゃあ何ですか。武装ですか』

そうだよ。魚災がまた起きてるんだ。

この巨体を葬る力を寄越せ!

『キャノンを改修しました』

そうか。倒せそうか？

IRPが側まで来たので見上げつつ訪ねる。

『その前に』

コックピットが僅かに開き、隙間から黒い剣を落とされた。

おお。これが噂の！

遂にお目にかかれるとは！

『ネザライトの剣です。貴方達の世界で新たに発見された素材、ネザライトで作られたモノですね。クラフトが大変らしく、ひと振りしか送ってくれませんでした、その代わり強力なエンチャントを備えています。それも村人の協力で……奪い合っていないで試し斬りして下さいよ!?!』

相分かった！

同志よ、試し斬りさせてくれ。

……おお凄いい死んだ！ いっぱい死んだ！

『何してんですか!?!』

ダイヤモンドフルエンチャント装備が面白い様に次々斃れていくぞ！

剣の威力さながら、未知で強力なエンチャントの恩恵だろう。

炎上するエンチャントも付いている様子だが、黒い炎が上がる事から普通ではない。

ネザライト。

それ以上に未知のエンチャント。

後で詳しく聞かねば……！

『辻斬りしてないで真面目に頼みますよ！』

我々はいつだってマジだぜ？

『馬鹿同士殺し合うなって云いたいんです！
本当に馬鹿なんだから！』

馬鹿馬鹿と煩い。

どうせ従来の戦い方が通じないのだ。

ひと振りしかない新剣を奪い合うのは必然と云える。

創造主は真剣に同志を斬りまくっているだけだ。

斬り捨て御免！ 友よ然らば！

遺品は貰つといてやるから安心して逝って！

「……さつきから、デカイゴーレムから女の子の声が聞こえるんすけど……中に誰か乗ってるんすかね」

「その様だぞ。 しかも彼等と会話している。 どうやら通訳がいた様だ」

「物騒な言葉が聞こえるツス……壁の裏でナニが起きてんすか……」

「魔剣を巡った仕合だな」

「死合ツスか。 仲間割れする程の」

「力に魅入られた哀れな末路よ。 ああはなってくれるなよ」

「なりたくてもなれないかと」

創造主は剣を奪い合いながら、最終的に勝ち残ったひとりが空を飛ぶ。

そのまま魚災に向かい頭に降り立つと、試しに斬りまくった！

——グギヤアアアツ！！

おお効いてるぞ！

黒炎が再生能力を阻害している！

「禍々しい剣だな。　だがあのカリユブデイスを苦しめるとは」
「呪われてそうなのはありますね」

創造主は嬉々として黒炎を巨大魚の皮上で上げまくる。　フライとかいう方法で調理してやる。　既にフライしてるが、フライしまくる。

そうして片方は倒した。　残るは相方だ。

『どうやらネザライトの剣とエンチャントは、この世界では有効な武器になる様ですね。　生産も視野に入れましょう』

そうしてくれ。

憎きミリム達も倒せるに違いない。

荒らし退治が捗る。　コレは……良い物だ！

『じゃあもう1匹も倒せるんでしょうけど、その前にデータを取らせて下さい』

キャノンかな？

そう思い振り返れば……IRPが飛んだ！

「あの巨体で飛べるのか!?!」

正確にはジャンプだが、跳躍系ポーションを遥かに凌ぐ大ジャンプ。

そのまま巨大魚にぶつかると、共々地面に落ちた。　落下地点が大きく揺れる。

『おお凄い。 シミュレーション以上。 落下ダメージは皆無。 格闘戦に備えてIRP外殻にエンチャントを施した甲斐がありました。今は簡単に防御力とノックバツクを付けてましたが、それなりにダメージも与えられた様ですね。 黒炎をエンチャントしてないので回復された様子ですが、怯ませるくらいなら十分でしたか』

……おい辛辣同志。

『なんですか?』

IRPにエンチャントを施したと申したか!?

『そうですが、なにか?』

凄い事だぞ!?

何気なく聞いていれば、トンデモない成果を出してるじゃないか!

『武装以外興味ないと思ってました』

そんなワケあるか!

創造に生きる者共だ。 様々を創り経験してきたが、ブロックにエンチャントを施したなんて初めて聞いたかも知れないぞ!

普通はツールにしかエンチャントは施さない。

エンチャントテーブルの都合だ。 金床もそうだ。

発想はしても、再現出来た事がない。

一体全体どうやったのだ!?

『エンチャント本をBBに解析鑑定して貰ったら、出来ちゃいました』

BBスゲエ。

紐解いていく君もスゲエ。

『……未熟です。 星の世界に行くには……』

……その話も後でな。

それよりも今だ。 まだ終わってない。

『そうですね。 キャノンのデータも取らないと』

そう云うや否や砲身が巨大魚に向けられた。

先程まで通常弾を命中させていたが効果は見られない。 であれば新型弾であるか？

『チェックシーケンス入ります』

よく分からないが分かった。 やってくれ。

『インベントリ確認、弾種切り替え。 爪アンカー射出、非常弁閉鎖、機体姿勢固定。 強制充電チャージ……砲身異常なし、照準マニユアル切り替え……安全装置解除、最終フェーズ突入良し……！』

意味不明！ ややこしや！

それこそ自動化しろよ！

更に云えば世界観違えてる!?

とか愚問しそうになったが、創造に生きる者としてはナンセンスだ。

「急に雰囲気が変わりましたよ!？」

「うむ。 強い力を感じる。 電撃でも放つか？」

浪漫にせよ手順にせよ……触れてもないモノを理解しようとせず、

文句ばかりではお門違いだ。
それも後で聞く。そして研究だ。

『理論上は撃てる……距離も詰めた……砲身耐久も……パイロットへの負荷も無い筈。後は実践して証明……！』

えっ？ またぶっつけ本番？

足下で止めさせようか迷った創造主だが、魚災が立ち直りIRPを攻撃し始めてしまった。

が、黒曜石の外殻とエンチャントの前では無力らしい。
びくともしない。驚異的な技術だ。

とはいえ放置も出来ない。弓矢でチクチク嫌がらせをしておく。
が、剣の威力を見てしまった後には全てが霞んで見えてしまった。

『撃ちますー！』

刹那、落雷音！

すわっ!! 晴天の霹靂!?

……目の前の魚災が静止した。
動かない。

正面に回り込んでみて……息を呑んだ。

『……………は、ははは……………』

巨大魚の真ん中がトンネルになっている。

向こうの晴天が、綺麗にくつきり見えていた。

「なんと……………」

「……………馬鹿な」

そのままサラサラと消え逝った。

再生を上回る攻撃力だったのだ。

『威力想定以上……』

あまりの凄さに暫し呆然とするしかない。

『レールガン……試射成功……！』

遅れて辛辣同志、震える歓喜が過る。

我々も遅れて理解した。

あ、パイロットって辛辣同志だったのねと。

119. リムルと決戦前

「アンタらは連れてけないわよ!?!」

魔国連邦議事堂、休憩室にて。

耐久するリムルの側で戦闘準備中、いつかの羽虫に喚かれるクラフター。

いつそ切り刻んでしまおうか。

「ラミリス、何揉めてんだ?」

「ちよつとリムル! コイツら何とかして!」

「また何かしたのか? 聖典奪われたか?」

「真面目に話してんのよ。コイツら鎧纏って剣持って、明らかにスタンバツてんじゃない!」

「みたいだな」

「みたい、じゃなくて! 絶対ワルプルギスに乗り込む気よ!

止めなさいよ主でしょ!」

「本気のコイツらを止められるか。一時凌ぎをしたところで何度も現れるだけだ。殺しても起き上がってやって来る。あと訂正するがコイツらの主じゃない」

リムルが諦観と憂いの目で羽虫に鳴く。

今ならリムルごとスパッとやれそうだ。

だがやらない。こんなでも悪友だ。羽虫も含めば同志クラフ

ター。

「一時凌ぎでも防ぐべきよ! 迎えが来て転移しちやえば、いくら

コイツらでも会合空間に入れやしないって!」

「妖精の棲家で何を見てきたんだ?」

「家がリフォームされると。あと最高傑作が破壊されたところ」

「それ以外だ、別の時間軸からやってきた得体の知れない精神体を倒しかけただろ。 たぶんコイツらは物理的な物事だけじゃなく、時間や空間をも創る超常的存在だ。 それも俺達の知らない未知の力でな。 そんな力を拒絶出来る程、これから行く空間は堅牢なのか？」

「普通にホイホイ行ける場所じゃない筈よ」

「コイツら普通じゃないだろ……コイツらの造る建造物の構造を見て思うが、柱もなしに建っているモノも多い。 当初は素材の都合や特殊構造かと考えたが、ミリムに破壊されたビルを見学した時に単に頑丈と言えない光景を目にしたよ」

「ビル？　摩天楼……デカイ建物の事？　それと今回の話にどう繋がるワケ？」

「まあ聞いてくれ。　そのデカイ建物の腹をミリムが消し飛ばした事があつたんだが」

「は？　街中でやったの!？」

「いや無人のジオフロントで。　だから死傷者は出なかったんだが……そこで奇妙な光景を見た……ビルが宙に浮いていた」

「は？」

「地面と接地してない状態、胴体が消えたのに足と頭が浮いた状態……今までも似た光景は見てきたんだがな……大賢者と俺で相談して立てた予想だが、コイツらが関わる素材は一部を除いて重力に影響しない……いや、空間に固定されているんだ」

「……永続的な魔法？」

「そう考えた方が楽だな。　となればコイツらが建設したセットバツクしているビルは上層を軽量化する意図が無いという事。　コスト削減の意味はあるんだろうがデザイン面がメインなんだろう」

「そ、そうなのねー！　いや迷宮作りでデザイン面とかワカルワア」

「分からないなら分からないで良いぞ」

「……ごめん」

「兎に角、大袈裟な表現になるが最早概念に近いかも知れない。　そんな未知を前に既知の力で創った異空間に逃げ込む……解錠されない自信は何処から来る？」

開場まで金林檎とポーションをセットする。

黒曜石やダイヤツールも。

直ちにやれる事はやった。

ネザライト支給が間に合わなかったのが悔やまれる。不死のトータムなるアイテムも欲しかった。無いもの強請りしても仕方ないが。

「そもそもコイツらはこの世界に到達する前から別世界を幾つも渡り歩いてたそうだ」

「勝手に召喚された、じゃなく?」

「自らだ。自分の世界にすら帰れるという」

「……異世界人が自由に帰れるなんて……」

「地獄経由らしいが」

「過酷って事? そう簡単に行き来出来ないって事ね」

ネザライト採掘は始まったばかり。

剣にクラフト出来るまでの工程が大変と聞く。

だがまあ、クラフターは思う。

地獄(ネザー)での冒険や開拓はそれなりにやってきたつもりだったが、まだまだ未知があった様だ。

ワクワクする。 向こうの同志が羨ましい。

だがホイホイ帰る訳にはいかない。 この世界でも楽しみは尽きない。 今に至っては荒らし討伐に忙しい。

「俺は行った事がないが……そんな奴らさ。 2年くらい振り回されて、通訳の目処が立って……俺なりに考えた」

「だからって……」

「これから会合というより客観的じゃない裁判所に出廷するもんだ。

一方的に処刑騒ぎになるなら……寧ろコイツらの相席は有難い」

「……可能性はあるけど。 ああ、ギイや他の魔王達に何て説明しよ

う……」

「そうか。魔王の従者つて2人までか」

「そう。アンタとベレッタ。アンタが行かないなら折角会えたトレイニーちゃんを連れて行くんだけど……」

「俺は喚問枠で別に出来ないか？」

「特別枠にするのは難しいわね。そんな事するならワルプルギスじゃなくて良いし」

「だよなあ。やっぱり他の魔王への見せしめなんだろうな、俺」

「ねえ……クレイマンと殺り合う気？」

「嫌でもそうなるさ」

「……死ぬわよ」

「これでも努力してきたんだ。それに死ぬからこそコイツらが良いんだよ」

突如、目の前に大扉が現れるもんだから、思わず飛び跳ねるクラフター。

「迎えが来たか。魔王トークは任せた」

「ええい！ どうなっても知らないわよ！」

ネザーゲートの類か？ 泥梨の扉か？

「なあお前ら……一緒に、さ。それこそ大袈裟だと思っけどさ……」

リムルを見やる。

妙な緊張感の中、苦笑された。

「地獄の底に堕ちてくれ」

クラフターは頷いた。

賽は投げられた。いざ魔王の宴へ。

ワルプルギス

120. ご迷惑とお詫び

「――面白い奴が来たな」

満点の星空の下、大きな丸テーブル。その円を囲む椅子ある空間。

代表クラフターは首をグリグリと動かした。リムルと羽虫も一緒だ。取り敢えず悪友がいる事に安堵したのも束の間、最終的に何人も集まった。ミリムもいる。が、何処見てるかも分からない目をしている。

そんな一部を除き、皆覗いて来るので気分が悪い。

「例の人間か。 剣と首を振り回してるが」

「魔素を感じない。 だが噂通りなら……」

「ラミリス、ぼっち仲間だろ。 なに連れてきてんだよ」

「……ここで違うと言えないのが憎いッ！」

「無関係者なら追い出されるか殺される危険があるからな……」

「でも勘違いしないでよね！ リムルは参考人として来ていて、コイツは護衛で仕方なく連れて来たっただけ！」

「聞いてるよ。 でも仮にも従者だろ。 こじつけも良いところだけど」

時計が正常かを確認したクラフターは、ベッドを端に設置して寝て起きた。

これでリスポーン地点を確保した。 ネザーみたくに爆発しなくて良かったと思う。

ついでにエンダーチェストも用意する。 中身はシエルカーボツクス群だ。 色毎に様々な戦闘アイテムが詰め込まれている。

「急にベッド出して寝やがったよ!？」

「此処にも寝てる奴がいるけど」

「起きてるよ。一緒にしないで欲しいね」

いきなり揉め始めた。

良いぞ。そのまま暴力を振るえ。さすれば己が介入してやる。

ソロになろうとやる事は変わらない。

そもそもが独りであった。にも関わらず世界を跨ぎ右腕ひとつで開拓してきた。

今もそうするだけだ。

……いや一つ、失念していたな。

悪友が居合わす場、マルチに違いない。

「ふ、ふん……ここにきてまで身の程知らずなスライムと人間モドキです。流石は国王を僭称し各国を侵攻するだけがあります。仮とはいえ従者になっている者が可哀想ではありません」

「こういう奴等なのよ。発議者が可哀想だと思えばなら御託は置いて進めて頂戴! 今回の議題はその辺でしょ?」

「おお、これは失礼。では改めて……これよりワルプルギスを開催致します」

あの喚いてる白い奴が荒らしっぽい。

上品に振る舞ってこそいるが、腹黒そうだ。

貼り付けた笑顔が気に入らない。

他にも知ってるスキンがいるが、今はさておく。

なんか睨まれるが今は構えない。後だ。

「——突如、不可侵領域であるジュラの大森林に現れた勢力であるスライムと配下の人間達ですが——」

白荒らしがグダグダ鳴くのを他所に、お辞儀しておくに留める。

「……お前ら、吸血鬼のメイドに睨まれてるぞ。天翼国フルブロジアのナイスバディな魔王フレイにも睨まれてるよ？ マジでナニしたの？ いや聞きたくないよ？ でも文句言われるなら俺なんで困るんだけど？」

クラフターは首を傾げた。

悪友はどうでも良いが、白黒ドレスには身に覚えがない。

いや、よく見ればオツドアイだ。この目は見覚えがある。

連邦に荒らしが襲撃した後、郊外で見かけた気がする。その時は狐娘も居合わせ、荒らしかと思つて偶然所持していた卵を投げ付けてしまった。ところが結局戦う事もなく消え失せた。エンダーマンの一種なのかも知れない。なれば飛び道具が通用しなかったのも頷ける。

「——カリオンに囁かれたそのスライムはファルムス王国を焚き付け戦争を起こし、人間を大量虐殺、魔王になる為の魂を集めようとなりましたが、魔王種を取得しておらず——」

一方、座る方にも身に覚えがある。

此方に赤い光線を放った奴だ。となればコイツらは欺瞞の国から来たと見た。

荒らしなら倒す。

で、有翼族の方は……獣王国上空で見た。

あそこはカリオンとかいう奴の領地だった筈だから、別の場所を領地としている筈だ。

たぶん、連邦からやや南西の山脈地帯から来たのだろう。あそこは有翼族が多かった。

あそこに向かった同志が何かしたと見る。

山脈を活かし、整地を程々に崖造りの家に着工しただけとは聞いた

が……何故か襲われたらしい、意味不明である。

「こんばんわ、スライムさんに人間さん。それともネームで呼んだ方が良いかしら?」

「こ、こんばんわ。 イエお構イナク……笑顔が素敵デスネ……」

「あら有難う。今日は頑張つてね……色々と」

「笑みが黒いッ!? お前ら絶対天翼国でなんかしただろ!」

「喚問まで参考人はお静かに願います」

「……赤髪の魔王、ギイのメイドも怖い……」

心なしか、有翼族の従者からも睨まれてる気がする。

片や獣の被り物をしているが……何処かで会っただろうか。被り物をしているのでスキンが分からない。

……我々もヘルメットじゃなくカボチャを被るか。 戦闘までは。

「奥の院では挨拶だったな」

「今度は吸血鬼の魔王バレンタインだよ! 俺の知らない所でナニ

してんのマジで!」

「……話続けますよ……こほん、えー、そしてカリオンが策謀を巡らしていた事に激怒したミリムが私の為に獣王国を襲撃しカリオンは生死不明……この場に居ないのはそういう事であり——」

通訳がいないと、会議関係は暇だ。

荒れば良いのに。 暴力には暴力で語る。

取り敢えずインベントリを確認だ。 シェルカーボックスも少し取り出し設置しておく。

死ぬ可能性がある。 既に猛者だらけだ。 ボスラツシユをしに来たつもりは無いが、リスポーンは覚悟している。 だから寝たのだ。 速やかな戦闘復帰までの繋ぎはリムルに依存する。 耐えろ。 たぶん大丈夫だろうが。

「リムル、この場を生き延びたなら招待状でも送ろう。来るか来ないかは自由だが、その姿……俺に用事があるんじゃないか？」

「アンタは……レオンか。この姿を見て何も思わなかったら殴ってたよ……でも彼女は、シズさんは生きてるよ。人間としてね」

「そうか。憑依させたイフリートと彼女は合わず、人として生き死ぬ道を選んだなら寿命は幾ばくも無いと思っていた」

「訳ありだね」

「周りで奇行する人間絡みか」

「詳しくは言えないな」

「——我が軍を調査の為に派遣しましたが、何とその人間どもに妨害を受け……しかも連邦の調査に乗り出した私の配下ミュウランは、そのリムルという痴れ者に殺されたのです」

暇なので松明を壁に刺して回る。

天井は……無い。満点の星空だ。

漆黒の絨毯に宝石が散りばめられている。

綺麗だ。

そういえば辛辣同志は星の世界に行きたいと云っていた。

協力してあげようかな、と創造主は笑みと共に頷いた。あの子が努力しているのは知っている。IRPを見れば分かる。

果たして星の世界が本当にあるかは知らない。

だが我々の想像が神やら悪魔やらを創り世界すら創るなら、本気で願えば望むものが手に入るのではなからうか。

「はっはっはっ！ どこでも面白い奴だな！ 突然寝たりカボ

チャ頭になって松明を刺し始めたり！ リムル、お前らが羨ましい

！」

「ちよつとギイ！ 他人事だと思って！ 今にも見てなさいよ、

コイツらの仲間がアンタの所に行くのも時間の問題……」

「もう来たぞぞ？」

「へッ!？」

「架橋工事を始めたり海底に建物を作り始めたりな。破壊しても殺しても悲鳴はウオツだけで何度でも来るからなあ、しかも方法を変えて来るんだ。馬鹿の考えは分からののが俺の唯一の短所だが、此処まで来ると並々ならぬ大馬鹿だ！早くに会っていたら俺の名乗り方も変わってたかも知れない！」

「すいません皆さま……コイツらがホントくにすみません！」

「何故謝る？ 褒めてるんだぞ？」

「大変不名誉であります」

「……あ、あー、皆さん聞いてますか？ 一応会合中なのですが」

「おう。気にせず続けてくれ」

「皆して聞いている様子じゃ無いのですが……続けさせて貰いますよ」

「クレイマン……少しだけ同情してあげる」

今はコイツらを始末しなきゃ。

流石に全員は無理がある。成り行きで敵対した奴を倒そう。

ソイツが荒らしに違いない。

羽虫は弱そうなので、頼れるのはリムルと己自身である。だがマルチに違いない。独りで戦う訳ではない。それが保証されているだけでも心強かった。

「——以上で私の話は終わりです。身の程知らずなスライムはこの場で始末するのが宜しいかと」

「それでは次に来客よりの説明となります」

「あ、俺の番？ えーと……」

「しっかりしなさいよ！ 仮にもワタシの従者でしょー！」

「喚問されてる身なんだが……まあ良いか」

おや。リムルが立ち上がった。

そろそろ始まるか。

クラフターはカボチャからヘルメットに交換。

「クレイマン、お前嘘吐きだな」

「何い？」

「ミュウランは生きてる。カリオンさんは謀略とか考えるタイプじゃない」

「……あのゴタゴタの中、よく内容聞いてたわね」

剣と弓矢はある。遮蔽物は己で作る。

後はポーシヨンのタイミングを見計らう。

「ハッ、そんな言い訳だけで誰が信じるというのだ！ 妙な人間共を手懐け強気になってるようだが」

「そこが1番違う。コイツとその仲間は好き勝手やってる大馬鹿達。強いて言えばただの悪友だよ」

「連邦に拠点がある時点で無関係者とは言わせんぞ！」

「無関係なんて言っていないだろ。現に俺は謝っちまったが、それは他国に建物を勝手に建造してる件だ。アイツら素で好きな様に生きてるんでな……だがミュウラン殺害、ファルムスの戦争の話、魔王の話は出鱈目だ」

「証拠は!？」

「お互い無いだろ。そつちの証言に至っては配下の報告、しかもその配下はもう殺されたって？ そんなもん証拠とは言わねえよ。

あとミュウランは俺の保護下にあるから、この場に呼んだとしてもお前に都合の良い証言はしないとと思うぞ」

「フッ、フッ……そこまで卑劣な真似をするか。さては貴様、ミュウランの骸に悪霊でも取り憑かせたか」

「遺体に悪霊？ するわけないだろ。さすが心臓を人質に脅迫する奴は発想が違うな」

そろそろ良いですかね？

どうせ話し合いで済まないでしょ。クラフターは知っているんだ。

「俺は俺が楽しく過ごせる国を作りたいただけでね。それにはコイツと仲間の協力が必要不可欠だし、普通の人間達の協力も必要だ。だから人間を守ると決めた。それを邪魔する者は人も魔王も聖教会も全て等しく俺の敵だ。クレイマン、お前のようにな」

周りもソワソワしている。

赤髪なんて楽しそうに鳴き始めた。此方まで楽しくなりそうに困る。

「——こうしよう。真意はさておき互いに気に入らない、話し合いで解決しない、なら力で示すのが手っ取り早い。丁度、此処には見届け人が揃っている。オレ達の前でクレイマンに勝って見せろ。そうすれば、配下の人間共の無礼は許そう」

「いや、何度も言いますが配下じゃないんですけど。好き勝手して大馬鹿の悪友なんですけど」

「友達なら面倒見るんだな」

「いや基本諦めてるから……文句はコイツらに直接お願い……」

刹那。赤髪が手刀でテーブルを真つ二つ。

クラフターは荒ぶった。なんて事を。大きくも悪くないテーブルだったのに！

だがケーキを置かなくて良かった。置いていたら無惨な姿になっていただろう。

「俺は気に入ってたんだぜ？ お前も、お前の悪友も。だから、な？」

身の振り方は任せるが……どうする？」

「選択肢ねえ!? ああもう分かったよ！ どうせこうなると思ってたさ……!」

やっとリムルが構えた。

続けて己も続く。スプラッシュポーションを割り、リムル共々強化する。それと金林檎をリムルに投げ渡す。

一飲みにされた。流石はリムルだ。

「さっさと始めようぜ、クレイマン！」

「やれやれです。一介の魔人が図にのるなよ！」

さても漸く始まった決戦。

創造主は剣を構えて悪友と共に対峙する。

死ぬつもりはあるが、負けるつもりはなかった。

121. 余所見とリスポーン

「自分の手を汚すのを嫌ったばかりに、余計に面倒な事になってしまった。 本当に失敗でした」

喚き終わったら仕掛けてきそうだから、創造主は黒曜石で縦横3ブロック分の簡易防壁を複数展開。

己が隠れる壁にのみ真ん中をダイヤツルハシでくり抜き、丸石ハーフで半分埋める。 スリットから弓矢を引き絞り状況に備えた。

「命令です。 リムルⅡテンペストを殺しなさい」

が、来たのは白じゃなく桃、ミリムだ。

「ミリム……ッ！ 洗脳されてるのか!？」

されど慌てない。 敵なら迎え打つのみ。

黒曜石の壁裏に退避するリムルを尻目に、創造主は突進してくるミリムに矢を放つ。

通常矢だが弓はエンチャントを施してある。 有効な筈だ。

だがミリムも知ってか知らずか空中で身を捻り避けると、そのまま防壁ごと此方を殴る。

黒曜石にヒビが入るのを刮目した創造主は即座に盾を構え対衝撃態勢。 吹き込む衝撃で、スリットのハーフと己の体が吹き飛ばされてしまう。

「おい大丈夫か!？」

「ミリムの攻撃に耐え切るとは……ですが衝撃が伝播する以上、無事とは済まないでしょう」

「……マジでウオツなんだ」

「な？　面白いだろ？」

相変わらず恐るべき力である。　TNTでなし、鎧に耐爆エンチャントを施しても意味を成さない。

「他人頼りかよクレイマン！」

「何を言う。　ミリムは人の命令に従うような娘ではないでしょう。　今のは彼女自身の意思さ……ギイよ、文句はあるまい？」

「ああ構わないさ。　ミリムが自分の意思で戦うのなら止めやしない」

「……不味い！　ミリムは絶対に不味い！　何とかして洗脳を解かないと……付けている腕輪が原因か!？」

怯んでいられない。

創造主は素早く態勢を立て直すと、強化した走力で素早く動く。　捉え難いよう不規則に壁から壁へ。　時々卵を投げつけて錯乱させつつ創造主は隙を窺う。　下手に仕掛ければやられるのを知っているからだ。

彼女には何度も苦杯を喫してきた。

我々を嘲笑い、破壊された建造物は数知れない。

対ウィザード級として創造したIRPも駄目だった。

圧倒的。　ひたすら圧倒的な力で蹂躪された。

それでも今日この日まで諦めず生きてきた。

今も諦めてない。　これからもだ。

「ッ！　分かった、俺はクレイマンをやる！」

ポーションで強化した足力で展開した黒曜石間を素早く、リムル共々不規則に縫っていく。

壁が足りなければ作り出す。　いつも通りだ。

ミリムも狙いを定められないのか、既にいない壁に攻撃を当ててい

る。

「リムルを攻撃しなさいと言ったのに……まあ良い！　先に貴様を始末してやろう！」

「舐めるなよ！」

「図に乗るなよスライムが！　行けナインヘッド！」

白荒らしが使役してる狐が来ると、突如大型化。そのままリムルに襲い掛かる。

だがリムルは己と同様に壁から壁へ伝い攻撃を避けつつ隙を窺う。

「ちよこまかと！」

「……俺のスキルと魔素量じゃ長期戦になる程不利。無駄遣いも出来ない。だが勝機は作るものだからな……コイツの様に」

リムルもベテランだ。

今さら心配なんかしない。何とでもする。

一方思う。あの狐が欲しいと。

疑問も出た事であるし。

連邦にいた狐娘とは同種だろうか。人型と獣型と分かれるが、耳

と尻尾の形状に類似点が見て取れる。

完全な同種で無くても関連があるかも知れない。

発情・繁殖実験は失敗したが、やはり村人と狐が交尾するとあの姿として生まれるのだろうか？

元の世界で発見された狐との差異は？

疑問は尽きない。一度元の世界に帰るか連絡を取り合うべきかも知れない。

「余所見すんな!？」

リムルに叱咤されハツとした時、目の前にミリムの拳。反射的に

盾を構えるも容赦なく殴り飛ばされた。外壁に激突して砂埃に包まれつつ漸く止まる。

痛い。盾が破損。ダイヤ防具の耐久が減った。

「はははっ！ たわいもない！ 最早生きては……ナニイ!?」

別に良い。このまま決戦仕様が壊れようと構わない。予備もある。覚悟の上だ。取り敢えず回復ポーションを飲む。予備の盾をスロットする。出し惜しみは無しだ。

「生きてるだど!? あの威力で!?」

「ただの人間じゃないからな。今更驚くなんて、意外と情報に疎いんだな」

「くっ！ そこの人魔の攻撃ならまだしも……本気でないにしても、ミリムに殴られて平然と動き回れるとは！ どんな身体をしている!? その青く輝く鎧の所為か！」

「隙あり！」

「ちいっ!?!」

「お前も余所見してんじゃねーよ。俺は本気なんだ。ドーピングされたのに負けたんじゃアイツに笑われるからな……ん?」

リムルは狐の攻撃の合間を縫い、白荒らしに剣で攻撃した。やりおる。負けていられない。

(……ケテ。 助ケテ！)

「狐から思念が……」

『告。 ナインヘッドから支配の呪法(デモンドミネイト)の影響を確認。 戦闘を強いられています。 接近すれば解呪が可能です』

「隙があれば助ける。 或いはアイツが牛乳を飲ませればいけるか……ってナニしてんのアイツ?」

創造主は折角外壁まで飛ばされたのだからと、エンダーチエストとシエルカーボックスに駆け寄った。

大量の卵を取り出すと、クロック回路の如くミリムに投げまくった。避けられるも少しは当てた。割れた一部の卵からは小さな鶏が生まれてくる。援護混じりに狐と白荒らしにも投げ当てる。

「ナニがしたいんだお前!? てかなんで卵からニワトリが生まれるの!?! ヒヨコじゃないの!?! お前の世界ではそれが普通なの!?!」
「なんだというのだ! ふざけやがって!」

コココツと鳴く声が増えていく。

元の世界で密室で続けていれば世界に負荷を掛ける荒らし行為に見えるが、この世界ではちよつとやそつとの動物で時空間が歪む事はない。

では何が目的か。 怯ませて攻撃妨害、反撃を許さないのもある。だが飽くまで副次的な目的だ。 それだったら雪玉の方がコストが良い。

では何か。 嫌がらせだ。 それと足音等を掴ませにくい様に。 またはダミーとして。

「喧しくなってきたのう」

「おっ? また妙な事をし始めたな!」

「ギャー!? 啄んで来るな!」

「喧しくて寝れない……」

「どこでもいつでも迷惑ね」

「(あの時同様、忌々しい奴じゃ!)」

床一面に鶏が埋まる程投擲した頃、雪玉に切り替えた。 乱射しつつ中央に復帰。

再び壁から壁へ移動すると、弓矢で攻撃。 剣で接近はしない。 相手の領域に踏み込んでもやられるだけだ。 白荒らしは平気そう

だが。

「ええい！　　何をしているニンヘツド!？」

ここで思わぬ光景を見た。

狐が鶏を攻撃し始めた。本能なのか指示されてなのか。野生の狼なら理解出来る行動だが、あの狐は明らかに使役されている。やはり狼とは異なる種だ。

「お前、まさか狙ってやったのか？　いやその顔は違うね……まあ良い！　今のうちに近付いて解呪する!」

聞き齧った情報になるが、元の世界に生息している狐もそうらしい。だが使役は今のところ成功していないと聞く。繁殖は狐共々発見されたベリーなる果物で出来るらしいが……やはり世界違えば大小なり差異があるという事か。

「よし無力化した!」

リムルに触れられた狐。

次には大きな狐が元通り小さくなった。

生きていると様々な疑問にぶつかる。興味は尽きない。実に

面白い人生だ。笑顔が浮かぶ。

ミリムに殴られた。

「だから余所見すんなって!？」

今度は黒曜石の壁に叩きつけられる。

そのままドカドカと殴られまくる創造主。

痛い。痛すぎる。

ミリムとの間に黒曜石の壁を立てようと思ったが密接していて立

てられない。

エンダーパールで離脱を図る。

「ウオウオ言ってるよ!？」

「それなりに気に入ってたんだ。バリエーションが少ないのが惜しいな」

「逆にこの状態で声を出せるのも凄いいけど」

「ちよ、ちよつと!　　流石に死ぬ……あつ!」

ワープの衝撃で死んだ。

体力的にギリギリだったが流石に無理だった。

創造主は視界が真赤に染まる中、遺品がばら撒かれるのを最後に目にする。

死因は地面と衝突した、である。　慣れた死に方だ。　嬉しく無

い。　道具の有無くらいの差異だ。

「流石に死んで……生き返っただど!?　　馬鹿な、私と同じデスマン

……いや違う!　　ならば何だというのだ!？」

「人の形をした概念、理、世界、色々想像してくれ。　答えが出る前に

殺すけどな!」

創造主はベッドから起き上がる。

こうなる事を見越して寝ておいたのだ。

遺品回収は最悪諦められる様にもしている。

「ッ!　　行け!!　　マリオネットダンス!　　ビオーラも行け!!」

「今度は人形劇か。　数はあるが、倒す!」

リムルが人形の群れに襲われ始めたが、それでも果敢に剣を振るい倒していく。　剣の腕がまた上がった様だ。　体術も使う。

その間にエンダーチェスト、シエルカーボックスからダイヤフル装

備と戦闘用アイテムの様々を素早くインベントリに掻き込み装備。
ドーピングも再度行い、再びミリムに立ち向かう。

「興味深いのう」

「精神体になって、別のものに受肉するなら分かるけど受肉するもの
なかったよね？」

「だが、ちゃんと実体はある様だぞ」

「成る程。同じ顔が何度も来れる訳だ」

「ほ、本当に不死身なの……？」

「(邪竜の次に忌々しいわッ！)」

ミリムが飛び蹴りをしてきた。

今度は盾じゃなくノックバック木剣で斬り伏せた。今度はミリムを外壁に吹き飛ばす。

だが吹き飛びつつも、途中で遺品……先程まで所持していたダイヤ
剣を拾われた。なんて事だ。

「ミリムを吹き飛ばしただど!? い、いや奴ら人間がミリムに勝てる
試しなど……」

「どうか。今日この場で勝つかもよ。アイツは、アイツらは
日々成長してるのさ」

エンダーパールで追撃。

ミリムが外壁に激突したタイミングで剣を振り下ろす。それを
ミリムは剣ガード。

忌々しい。ゾンビみたいにツールを拾われ使われるとは。

だが負けん。左腕が留守だぞミリム。

「スキルが決まっても、負け続けても、工夫して創り出して挑み続ける。
俺もその1人だクレイマン！ 【煉獄の握手】(ジェイル
シエイク)！」

「ぐあっ!？」

此方は二刀流だ。左手にも持ったダイヤ剣を振り下ろす。
だがミリムも諦めてない。獣王国で見せた黒い剣を出し剣ガード。

だが構わず斬り伏せる。ノックバックを狙う。防がれるのは想定範囲だ。

「それを出すか」

「ミリムには感謝せねばな。こんなにも面白い仕合を見せてくれたのだから」

「殺し合いの最中よ! 仮にも友達同士なのに……呑気に見てられないわ……」

「そうか? 互いに目的を忘れて楽しんでる様にも見えるがな」

リムルの方を一瞥。

禍々しい巨大な腕が白荒らしごと敵勢を薙ぎ払っていた。普通吹き飛ばかと思われたが、なんと触れた場所から細切れに。白荒らしは耐久力が高いのか、まだ生きている。

リムルの新たな技だろう。ゆっくり観察していたいが、今はミリムだ。視線を戦場に戻す。

斬られた。痛い。

「だから余所見してんじゃねーよ!？」

「な、舐めやがって……皆殺しだ! 絶望して死ね!」

「逆にお前はどうかなんだ? まだ奥の手があるなら出せよ。全部潰してやる」

足を空中でジタバタさせて吹き飛びつつ、雪玉牽制。接近を阻害しつつ、わざと弾幕に隙間を作る事でミリムを誘導、そこに釣竿を投げ付けフックを引っ掛ける。

ダイヤ剣を釣った。 本体を引き寄せるつもりだったが、仕方ない。

鈍足のスプラッシュポジションを相手に投げつける。 範囲攻撃だ。 何とか食らわす。 ミリムの動きが遅くなる。

「ならば食らえ！ デモンマリオネット！」

突如、黒い影に纏わりつかれた。

此方まで状態異常を受けたらしい。 効果は知らないが、碌なものじゃない。

創造主は思うより先に動く。 牛乳バケツを取り出して一気飲み。 忽ち黒影は消えていく。

「な、なぜ効かん!? あのミリムすらも支配する究極の呪法だぞ……!!」

「仲間割れさせるつもりだったんだろうけど……相手が悪かったな」

だが強化分も中和されてしまった。

再びポーシヨンを出そうとするも、ミリムが来てしまう。 已むを得ない。 そのまま剣劇に持ち込む。

「手詰まりか？ それとも、今度こそお前自身が戦うか、クレイマン！」

「そうか、そうだな。 魔王……私は魔王なのだ。 だから戦い方にこだわり、上品に優雅に敵を葬ってきた……久しく忘れていたよ。 自らの手で敵を捻り潰したいという高揚感をな!!」

リムルの方でまた変化があった。

白荒らしが変貌したのだ。 腕が4本くらい増えている。 防具らしきものも付けているが胴体の鎧はなく、代わりに腕とズボン部分のみ。 虫のようにも見えた。 特効エンチャントが効くかも知れ

ない。

「へえ、少しはマシになったじゃないか。見直したよ……魔国連邦
国主、リムルⅡテンペストだ。クレイマン、覚悟ツ！」

「魔王——いや」喜狂の道化（クレイジーピエロ）「クレイマンだ。
殺してやるぞリムルⅡテンペストツ!!」

向こうも剣劇しそうな剣幕だ。

そろそろ決着だな。此方もしなければ。

また斬られた。今度はリスポーンした。

これ以上死なぬ為にも集中しなければ……。

122. スケルトンとゾンビ

森のツリーハウスを修繕していたクラフターは、やがてやってきたハクロウ、ソウエイ、シユナの鬼3人組に同行する事にした。

向かう先は傀儡国のどこか。
だが明確な目的があると踏み、物見遊山するべく歩みを進めた。

「濃霧、か」

白く視界の悪い大地を鬼と往く。

さも流れ雲の座標の如く。

面白い場所に来たものだ。ついて来て良かった。

クラフターは嬉々として斧やスコップ、ツルハシを振り回す。一種のバイオームなのかも知れない。新たな地には新たな冒険が待っている。空間に違和感を感じる時点で探索は必要だ。建前だが。

「不味いな。ワシの魔力感知が妨害されておる」

「ええ。この霧は視界を制限するだけでなく、魔素の流れを乱し阻害します。思念伝達や空間移動も使えません。加えてこの霧が敵の制御下にあるとすれば、奴らが中の獲物を把握するのは容易い。無駄かもしれませんが、なるべく気配は抑えて……」

霧に見え隠れする枯れ木や僅かな草木を除けば、詰まらぬ荒地と唾棄する者もいるだろう。

なら開拓すれば良い話。クラフターはせつせと枯れ木を木こる。デコボコした大地を整地する。松明も刺す。霧は晴れぬが無いよりマシ。

既にクラフターはアレコレ妄想している。

ここまでの道なき道を舗装。

その左右に建築。

雰囲気は落ち着いたものに。
全体的に低く造る。
暗くせず、色鮮やかにしてみようか。

「……そうですね。彼らがいる限り無意味に成り果てるでしょう」
「いつそ眠らせましょうか？」

「いえ、止めた方が良いかと。変に刺激すると後が怖いですからね……古里を襲撃されては困ります」

「やれやれじゃわい」

「しかしシユナ様。彼らは認めた建物等はそのままにしておく習性があります。里に手を出していない辺り、大丈夫では？」

「里は無事でも松明を刺す癖は困りますがね……周囲を柵や塀で囲むのも。里長含め皆は諦めてしまった様ですが……」

「意図も分かります。悪意がないのも。感謝しない訳ではありませんが」

「小さな親切、大きなお世話じゃな」

どうした？ 溜息を吐く鬼よ。幸せが逃げるぞ？

具体的には空き地とか鉱物資源。

早い者順なソレらが。

取り敢えずその辺の原木を木材にクラフトして豆腐小屋を作った。

中にいつもの拠点セットを設置。よし。次は探索だ。探索

ひやつほい。

と、扉を飛び出した時に落ちる影。不吉だ。

「……来ました」

人影がゆらり、と現れる。

ひとつ。ふたつ。みっつ。

面倒になって数えるのを止めた。村人にせよ荒らしにせよ、この世界で数の多さは珍しく無いと学んだからだ。

「濃霧とはいえ、この広大な荒地で一体何処に隠れておったのじゃ」
「この霧が空間干渉を引き起こしているのでしょう。隠れていたのではなく、わたくしたちが誘き寄せられたのです。包囲網の中心地へ……………」

やがて正体が掴めた。

武装したゾンビ、スケルトンだ。物凄い数だ。

元の世界でも見慣れたモンスター。武装してない奴もいたり、スケルトンなのに弓矢じゃなく剣だったりと多少の違いはあるが、些細だ。アンデッド特効を付与したダイヤ剣を持っていて良かった。

「シユナ様、俺が突破口を開きます。その隙にハクロウ様と……………」

「いいえソウエイ。どうやら、そう甘い相手では無いようです。

クレイマンの配下、特に5本指についてはミュウランから伺っています。数多のアンデッドを従える拠点の防衛に優れた者、この禍々しく巨大な力…………もう間違いありません」

弓矢がないなら楽だ。

真下に土ブロックを置いて高度を上げ、相手の攻撃範囲から出る。

そして剣の届くギリギリから攻めるか、更にも上から弓矢で射抜く。

いやこの数だ。 TNTやマグマが良い。

それに、とクラフターはある物を取り出した。

「ワイトキング、示指のアダルマン……………」

スプラッシュの回復ポーションだ。

既知の通りなら回復ポーションはアンデッドにダメージを与えられる。

こうなるなら数を揃えたのに。スタック出来ないから多くは持ち運べないものの、安全かつ手軽な範囲攻撃だ。手に負えなさそう

な相手にでも使おう。

「如何にも。余がアダルマンである」

よし。喚くスケルトン。君に決めた。

「偉大なる魔王、クレイマン様にお仕え……グアアアアツ!」

効果は抜群だ!

ジョッキーの如く割入って来た剣持ちゾンビに当たったが、範囲攻撃だ。本命の喚くスケルトンにもダメージが入った様だ。

「お、おのれ……身の程を知らぬ者どもめ」

「……敵ですからね。同情はしませんよ」

「一撃必殺とはならなかったか」

「剣士の方もな。其方はワシが受け持つ。シユナ様はソウエイと共に」

まだ動けるか。死して尚、彷徨うか。

クラフターは魑魅魍魎が跋扈する光景を嫌った。

不愉快極まる。

松明を刺しても払えぬ闇は最早致し方ない。

それが世界だ。世の常だ。

満天の星空と地の境を見れば、果たして闇に覆われているのは地の方だ。理想の地は至って遠い。

……辛辣同志は星の世界に行きたいと言っていたな。

輝き溢れる理想の地だからか。否。

あの子は我々とは少し違う。だから……きつと別の理由がある。

落ち着いたら協力ががたら話を聞くのも一興か。

それでも今は、と創造主は剣を構える。

大地を浄化すると決意した。少なくともこの地は綺麗に掃除す

ると。何故ならば。

「噂に聞く人間共か。直ぐにでもアンデッドの仲間にしてやろうぞ」

この地も我々のモノにしてやるからだ。

先住者に村人がいるなら躊躇ったが。

モンスター、それもアンデッドなら遠慮はしない。消えて貰おう。骨は拾ってやる。腐肉は間に合ってる。燃やす。

「ッ！ 危ない!？」

シユナが鳴いた。警告だと分かった。

その場を飛び退けると、なんと大地を抉る様にドラゴンまで現れた。

しかもゾンビ風である。

「ドラゴンゾンビまでいるとは!？」

通常ゾンビとは別に子供ゾンビ、村人ゾンビ、チキンジョッキー

……は少し違うが、多少の種類は見てきた。

それでもゾンビの多様化は元の世界にいる同志から聞いた事はある。だが多くは人型であった筈だ。

……よもやここまでとは。単に知らなかっただけ、という可能性もあるものの。

クラフターは震える。

だってワクワクしないか!？」

未知への探究心は留まるところを知らない。

「ただのドラゴンゾンビではありません。死せる魔物の頂点、デス・ドラゴンです!？」

「……ならばその魂をも滅してみせよう」

この世界にはドラゴンが何体いるのかと。

前にドラゴン退治した時も疑問に思ったが、実はどこかで繁殖しているのではないだろうか。

エンダードラゴンは卵を置いて消えてしまったが、卵生なら鶏みたいに増えるのか。ひとつしかないから壊すつもりはないものの、予備や番がいればその限りではない。

それともナニか。この世界に持って来れば卵からドラゴンが生まれるとでも？

元の世界で待てど暮せど孵化しないのはやり方の問題かも知れないが、試す価値はある。

……いや難しいな。元の世界の同志が卵を譲ってくれない。飾られている討伐記念品を持ち出すなんてとんでもないと云われそう。

「魂はその体にはありません」

「アダルマン、あのワイトキングの中ですね」

「ええ……ソウエイ、わたくしを守ろうとしなくて良いのです。貴

方は彼らと共にその竜の足止めに専念しなさい」

「しかし……」

……と、クラフターは傾げ思考を変える。

この世界のドラゴンは何処に。

怪しいのはドワルゴン方面や山だろうか。

ドラゴンゾンビはまあ、村人がゾンビ化する様な現象で生まれたとして……金林檎を喰らわせば元に戻るのだろうか？

今手元に無いのが惜しい。

後、今まで然程気にして無かったが……このドラゴンも脚が4つに翼らしきモノが生えている。

変わり者の同志の中で辛辣とは別に時空間や生物について研究し

ている者がいる。後者の話を思い出していた。

その者が云うには蝙蝠や鶏の羽は腕や手の一部ではと主張していた。ならばドラゴンはどうだろう。力強く飛翔するアレも腕や手なのか。もしそうなら腕、手が6本ある事になる。蜘蛛も脚が多い。なら蜘蛛の一種なのだろうか。いやいや、少なくとも虫とは認めたくないものだ。

別に何を、と馬鹿にするつもりはない。それも創造(想像)のひとつだから。

クラフターは頷いて前を見た。食われた。

「あの、ソウエイ……食べられてますが」

「俺でなければ問題ありません」

同志ーッ!?

「……任せました。ですが、わたくしも戦います。リムル様とあの方達に出会ってから守られるだけの姫では無くなりましたから」

「シユナ様……」

「ここは戦場。わたくしがアダルマンを倒します」

「ふっ。果敢なお嬢さんだ」

腐ってもドラゴン。

力強い飛翔こそしないものの、頂点捕食者に足る力を垣間見た。

「……………武運を！」

遅れてソウエイが加勢。

ワイヤーらしき武器を何本も操り、ドラゴンゾンビをバラバラに。ところが、どうしたことか。またひとつに纏まり復活したではないか。不思議だ。興味が尽きない。

取り敢えず喰われた同志は、その隙に外に脱出。仕切り直しだ。

「一撃必殺が付与された攻撃は効かないか！　死に耐性がある……やはり術者を倒さぬ限りは……」

ならばと創造主はアンデッド特効のダイヤ剣で斬り付けた。

……おお、効果があるぞ！

特効効果故か、切口は再生しない！

「お前達は、本当に何でも有りだな……」

大地を這いずってる分、楽なものだ。

回避行動もしない。　ブレスもしない。　出来たところで隙は与えない。

そのままズバズバと斬り続け、やがて動かなくなるドラゴンゾンビ。

念の為、火打石で燃やした。　汚物は消毒だ。

「むっ、あの人間達はデス・ドラゴンを滅したというのか……魂なき者をも浄化する戦士団……お主らならば我らを解放してくれるやもな……」

さっさと殲滅だ。　周囲のゾンビとスケルトンの群れを斬り付け爆破し、弓矢で射抜いて燃やし尽くしていく。

「ひとつ伺っても宜しいでしょうか」

「なんだ？」

「解放したいなら、何故さっさとその呪縛を破らないのですか？」

「気が付いていたか」

「ええ。　この防衛機構は貴方を核に創り上げられているのでしよう？　アンデッド達は貴方がかけられた呪いに共に組み込まれただけ」

「フッフ、其方の観察眼は凄まじいな。であればこそ、この呪いがそう容易く破れるものではないと判ろう」

多過ぎる。キリがない。

いや確実に減っている。続けよう。

「そうですか。貴方ならその呪縛に打ち勝てると思いましたが、どうやら買い被っていたようですね……人の信ずる神について詳しくは存じ上げません。ですがその聖職衣は高位の司祭が羽織る物と記憶しています。神聖魔法を使えぬ今も纏っているのは未練ですか?」

「フツ。好き勝手な事を言ってくれる……アシッドシエル!」

「ツッ! フレイムウォール!」

鬼達もアンデッドと派手にやっている。

先程ポーシオンを食らわしたスケルトンも元気だ。アンデッドの筈だが生き生きした動きだ。魔法弾までかましてる。

対してシュナは魔法の防壁を創造したりして対処していた。

我々の知らない戦闘光景だ。それもまた興味深い。

ゾンビに斬られた。

痛い。斬り返す。

続け様に溶岩をぶち撒け周辺を燃やした。

「やるではないか! ならばこれはどうだ、怨念の亡者共よ生け贄を授けよう! カースバインド!」

「聖なる福音(ホーリーベル)」

「……馬鹿な。神聖魔法……だと……!!」

数が多い。キリがない。

数の優勢を覆すのは安易ではない。

それでも続ける。土壁で相手の行動を阻害しては、TNTで集団

を吹き飛ばす。

同時にIRPに座標を伝達。更なる塊を吹き飛ばして貰う。

「何故だ！ 何故 魔に属する者が神聖魔法を使う!? それは神への信仰心がなければ操る事の出来ぬものはず……!」

戦って、戦い続けた。

時に地道が近道なのだ。大規模建築もそうだ。

延々と壁や天井造りをしていると感覚が麻痺したり、飽きてしまう事もある。だが確実に進展している。

己や仲間を信じる事、慈愛を忘れぬ事だ。

自己愛もあるか。少し自身に酔っても良い。

だが無理に順列を決めたがってはならない。

「神聖魔法は人間のみ許された魔法ではありませんよ。奇跡を信じる願う者ならば誰にでも、その思いの強さに応えてくれるのです。その対象は何も聖なる存在である必要はありません。善も悪もないのです。思いの強さこそが力へと変わるのですから」
「……………!!」

心に余裕を持つのが肝心。

己を縛りつけるほど、諦観が増えてしまうから。

「あり得ない……! 余は、私は間違っていたのか!? かつてルミナス教の指導者達に嵌められ、死地に追いやられた時、神ルミナスは救いの手を差し伸べてはくれなかった……私は神への信仰を失った。だから二度と神聖魔法を扱えぬと思っていたのに……いや、そうか……そうであるか……娘よ。名はあるか?」
「シユナと申します」

「そうか。シユナ殿、其方らに恨みはない。感謝すらしている。まして、かくの如く若い娘に目を覚まされるとは思わなんだ」

「覚悟は足りましたね」

「すまぬなシユナ殿。　だが私は私をここに縛り付けた男。　魔王力ザリームの呪いにより自殺が出来ぬのだ。　悪いが道連れにさせてもらうぞ。　せめて苦しませよう一瞬でな」

創造主は明るく先を見据える。

大量の骨の産出地になってしまったこの地を活かすにはどうするべきか。

浄化後、大規模な畑地帯か。　一面に広がる小麦畑はさぞ壮観だろう。

取り敢えず骨をチェストに入れよう。

それを並べ立てた倉庫街にする。　必要なら他地方へ輸送しよう。　そうだそうしよう。

「我は望み聖霊の御力を欲する。　我が願い聞き届け給え——万物よ尽きよ！　　霊子崩壊（ディースインテグレーション）!!」

「それを待ってました!!　　霊子暴走（オーバードライブ）!!」

眩い光が出たものだから、其方を見やる。

鉄製のリードらしきものが地面から生えたと思えば、次には砕け散った。

何が何だか分からない光景だ。　松明とは全く異なる光が満ちていく。　相変わらず世界は未知に満ちている。

「構築した魔法が組換えられている!?　　私の十分の一にも満たぬ魔素量しかない貴女が私の魔法を上書きしたというのか!」

「貴方ならばわたくし以上に聖なるエネルギーを集める事が出来ると思っていましたので。　見事でした。　覚悟を見せて頂いたお礼に、この地から解き放って差し上げましょう」

「最期まで済まぬな。　結局……自ら終えは出来ない、か」

やがて広範囲に光が及ぶと、巻き込まれたスケルトンは斃れ伏す。倣う様に周囲のアンデッドも斃れ逝く。

「霧が……晴れていく……お見事ですシユナ様」

「さあ行きましょう。クレイマンの城を制圧しなければ」

終わったらしい。霧もキリよく晴れた。

鬼達が再び歩み往く。

その先には城があった。沸き潰しがなっていないから、探索がてら松明を刺さねばなるまい。

それに、とクラフター。

周辺も整地しなければ。

倉庫街にせよなんにせよ、先ずは松明で明るくせねばなるまいて。

戦闘は前菜に過ぎない。

メインは開拓に冒険、建築だ。いつも通り。

「……………解放は最期の意では無かったのか……………ならば私は、信仰無き私は……………」

鳴声がする。

見やれば、シユナと戦っていたスケルトンが起き上がった。驚くべきしぶとさだ。

止めを刺そうかとしたが、直ぐに手を止める。

なにやら此方を見て鳴き始めたからだ。

「そうか。無ければ創れば良いと云うのだな。其方らの様に……………」

瞑目し過ぎた様だ。これから私は新たな神を得たく思う！」

途端に中性にでもなったというのか。

我々は何もしてないのに。したとすればシユナだろう。その背中を目線で追う。

「そうか！　　そうであるな！　　ぜひシユナ様の信仰する御方に逢わせて頂こう!!」

なにやら騒いだと思えば、次にはシユナ達の元へ駆けて行く。

謎のスケルトンであった。

この世界は分からない事で満ちている。

その方が良い。　　楽しいじゃないか。

クラフターは莞爾として頷いた。

123. ミリムと白荒らし

「うおおおおおッ！」

変貌した白荒らしが叫んだ。

その勢いで増えた腕に持つ斧やら剣やらで嵐の如くリムルを攻撃。対してリムルはスライム形態で転がり回避する。

上手い。創造主は素直に称賛。

我々なら壁を立てるか盾か剣ガードをしてしまうところだ。

同時にスライムだった事を忘れかけていた。

「腕が増えた分、隙は少なくなったな。得物も増えた。だがなッ！」

リムルも負けじと反撃。

刀で往なし、腕を斬り落とす。

「その程度で負けられねえんだよ！」

ポジションで強化してあげた走力と攻撃力だ。

それくらい出来て貰わねば困る。

一方、創造主も斬られていた。

観戦してる場合ではない。ミリムを早く倒さねば。

装備を整え剣を構え直す。成敗した次は白荒らしだ。

「此方とて同じ！　どんな手を遣おうと貴様を葬るッ！」

「来いよ！　切り拓いてやる！」

「なら見せてみるッ！　ミリム、狂化暴走（スタンピート）しなさい

！　この場にいる者を殺し尽くすのです！」

「なっ!?　おいクレイマンッ！」

途端にミリムの目に光が宿る。

口角まで上がり……鳴いた。

「何故そんな事をする必要があるのだ?」

「なっ!?!」

「リムルと此奴は友達なの、ダーツ!?!」

「ミリムーツ!?!」

瞬時にノックバック特効剣で吹き飛ばす。

余所見はお互い様だ。卑怯とは云うまいな?

「さっそく説得力ねえよ!?! え、ナニ、ミリムは操られていたんじゃないの!?!」

「そ、そうだ!?! こんな馬鹿な事がある筈がない!?! オーブオブドミネイトで完全に支配していた筈だ!?!」

「ワタシを支配するのは無理なの、ダーツ!?!」

「ちよつと落ち着けツ!?!」

砂埃越しに影が揺らぐから、すかさず弓矢で射撃。剣で弾く動作を突き、釣竿で引き寄せ斬り伏せ床に叩きつけた。

すぐさま溶岩バケツを頭から被せ、続け様に黒曜石の柱を真下に立て高度を上げると金床を落つことす。

次に水バケツをひっくり返し溶岩を冷やし丸石に封印。どうせ出て来るところをタイミングを計り飛び降りて、ダメージ量の多い飛翔斬を食らわした。それすら剣ガードされるから負傷ポーションを顔面に容赦無く投擲しTNT着火、雪玉牽制しつつ間合いを取り爆風の中に揺らめく影を睨む。

「えげつないのう」

「うへえ……」

「友達とか嘘よね？」

「支配された振りの延長線なら止めなさい」

「くっ、くくく……三文芝居もここまで楽しめりや最高だな。笑いが止まらねえ」

「ギイだけよ、ずっと楽しそうなの」

隙を与えれば反撃される為、一気に畳み掛ける怒涛の攻撃を仕掛けた創造主。

だがこの程度で死ぬ奴じゃないのを既に知り得ている。故に斬新な発想を求めるし残心の構えを取り続ける。

「ウグツ……ははっ……支配は無理でもお前達に負かされる時は来るかもな。それでも、その瞬間でもワタシの友達なのだ。だってこんなにも楽しいのだから」

「だとさ。殺る気満々なお前を友達と見れるのは、そうはいないぞ。だから落ち着け。事情が変わったんだ……ミリムの笑顔を見ていると辛くなってくる」

「と、友達……だど？」

創造主は白荒らし共々困惑した。

ボロボロの容姿になったと思えば微笑んできた。

あ、そうだ。

倒せずとも沈静化の方法があつたじゃないか。

白くてフワフワのアレが。

創造主はシユルカーボックスからソレを取り出す。

容量を圧迫してまで持ち込んだのは、集会和聞いたからだ。

来た。今こそ効力を発揮するのだ。

創造主はソレをミリムの目の前に置いた。

「ケーキッ！」

そう。ケーキだ。

ミリムは目を輝かせ貪り始めた。良いぞ。彼女の無力化に成功した。やはりケーキはミリムに有効だ。ケーキは剣よりも強し。

「お前いい加減にしろよ!?　いつになったらケーキを直置きしなくなるの!?　せめて手渡ししろ!?　それともワザとなの!?　シズさん見てたら怒られ……いや食べ物絡みになると変なスイッチ入るからやっぱナシ!」

「ミリム……クレイマンの所でマナーを叩き込まれてなかった……?」

「魔王が連なる場で、その所業とは」

「ミリムじゃなかったら死んだな。あ、もう死んでたか。いや生きてるのか?」

「ミ、ミリム……少しは残しといてよね!」

「はっはっはっ!　全て片付いたらテーブルを直さねえとな!　全員に同じ事されそうだ!」

ミリムを見下す創造主。

だが、その目は不思議と温かい。

ウィザー以上の荒らしの癖に、こう喜ばれると憎むに憎めなくなる。リムルとケーキの甘さが移ったのかも知れない。

連邦に帰還したら塩掛けよう。体に。

「……で?　なんで操られた振りなんてしてたんだよ?」

「うむ!　クレイマンが何か企んでいると思ったのでな。それを探っていたのだ」

「振り……!?　そんな……そんな筈はない!　私の支配下にあったのは間違いない筈です!」

「これ……腕輪の事か?　呪法が成功したように見せねば用心深いお前は信用しないだろう?　だからワザと受けたのだ」

「ふ、ふざけるな……あの方より授かったアーティファクトに私の全魔力を注いだ究極のデモンドミネイトだぞ？ 例え意図的であろうと受けたのなら最後、自らの意思を失い——」

「そうなのか？ でもワタシを支配するのは無理なのだ」

「では……では貴女は私を欺く為だけにカリオンを殺したというのですか!？」

「おいおい、誰が死んだって?」

「ッ!？」

「俺がリムルを唆したただとか随分面白い事言ってくれてたじやねえか。 なあクレイマン」

「ええーッ!?! カリオンさん!?!」

騒がしい方を見ると、被り物をしていた奴がスキンを露わに。

獣王国のカリオンだった。 グーパンしてくる様なら此方もグーパンで挨拶してやる。

「よおりムル。 俺の民が世話になった」

「いいって……ここはさも俺気付いてましたな顔で行こう……」

「そんな……では本当に……? だがフレイの報告では……」

「あら。 いつから私が貴方の味方だと勘違いしていたの?」

「怖っ」

「……ッ! フレイ……貴様ああああ!!」

白荒らしが痲癩を起こして有翼族に呐喊したから、横殴り気味に雪玉を投げ当てる。

怯んだところをミリムが追撃。 床に叩きつけた。

「持つべきは友達だな! 牽制してくれたお陰でケーキを食べ切れただのだ!」

「褒め方に納得出来ないわ……それにあなた演技は全然ダメね。

ガッツポーズなんてして、クレイマンに見られていたらどうするつも

り？」

「しようがなかろう？　リムル達が私の為に怒っているのが分かって嬉しかったのだ」

「片や本気で殺す目だったわよ」

「面白かったから良し、なのだ！」

「あなたが良いなら良いけれどね」

満身創痍の白荒らし。　床で痙攣中。

止めを刺すべきだと思いが、リムルに任せる。　村人同様にリスポーン出来ないなら良いが、出来るならまた面倒事になるし。

取り敢えず白荒らしを黒曜石に封印。

その間に周辺の後片付けを始める創造主。

鶏を屠殺。　要らぬ黒曜石を撤去。　あれた外壁や床は素材が不明なので、取り敢えず溶岩が冷えて出来た丸石を移植しておいた。

「片付けまでしてくれるたあ、いつこはサービス精神旺盛な劇場になった？　だがちつとばかし早いな。　いや、新たなステージ作りと見るべきか」

「まだクレイマンの処刑が残ってる。　何か意見がある方は？」

「……………ない様だな。　好きにしろ」

「そうする……………って言ってもなあ。　この黒紫の壁が邪魔なんだけども」

「それくらい何とかしろ」

皆してワイワイ鳴き合い始めた。

村人らしいと思う。　いや村人かは怪しいのだが、活気がある方が
良い。

喧しい時もあるが、無音より愉しめる。

「あー、ところでミリムよ。　ひとつ聞きたいんだが良いかな？」

「カリオン？　いいぞ、なんでも聞くのだ！」

「じゃあ遠慮なく。お前さん、操られてなかったんだよな？　と
いう事はノリノリで俺を甚振ってくれたのかな？」

「は……」

「いやいやいいんだよ？　俺が弱かったただけだし？　だがユーラ
ザニアを吹き飛ばしてくれたのも君の意思って事だよな？」

「そ、それはだな……アレはクレイマンを騙す為に頑張っただけなの
だ！　細かい事を気にしては駄目だぞ？」

「王都が消えたんだぞ!?　細かくねーよ!？」

「まあまあ、幸い獣王国に人的被害は無かったんだ」

「リムル……お前にも言いたい事があるぞ」

「へ?」

「王都の地下にナニ造ってくれてんだ？　例の人間共の仕業なんだ
ろうが、不可侵条約を結んでたよな？」

「え、えーと……それは……」

「それとも何かな？　ウチから手を出すのはアウトでもソツチが出
すのはセーフってか?」

「誤解だカリオンさん!?　コイツと仲間達が勝手に造っただけで俺
は何も知らないんだー!？」

「でもカリオン、ワタシが王都を吹き飛ばしたお陰でその事も判明し
たのだぞ」

「ちつとも感謝出来ねえよ!?　少しは済まなそうにしやがれ!!」

おや。　黒曜石の中から音がする。

天井に土で登り、ダイヤツルハシで1マスの穴を開けて中身を確認。
認。

『確認しました。　これまでに集めた魂を魔素に変換……成功しまし
た』

「ッ!!」

「世界の言葉が……」

なんか起き上がり変貌してる様な気がする。
暫くスニーク姿勢で様子を見ておく。

『肉体を分解。 再構築を開始します』
「これは……どうやら覚醒したらしいな。 本物の魔王に」

やがて跳躍すると、僅か1マスの隙間を縫い外に出てきてしまった。

白荒らしを逃してしまった。 油断した。 折角囲い込んだのに。

「見よ！ 私を力を入れたぞ!! ハハハハハハッ
！ ハアーツハハハハハハ、ハヒヤハハハ!!」

「今までの比ではないぞ……!! こいつは正直、俺やフレイでも……お、おいリムル!? アンタも!」
「悪いけど譲って貰えないかカリオンさん。 クレイマンには礼が済んでないんでね」

まあ良い。 やる事は決まった。

「お前は譲ってくれないよな」

リムルに苦笑されつつ——共に刀剣を構える。
目の前の荒らしを倒す。 ただそれだけだ。

124. マルチと決着

「次でお終いにしようか、クレイマン」

第三段階に変貌した白荒らし。その上で何らかのエネルギーが集中していく様が見て取れる。されど創造主は動じない。今まで通りだ。

「いいだろう。では喰らうがいい、この私の最高の奥義を……」

「……クレイマンの言っていた”あの方”とやらに事の顛末を報せる為には生還したい筈だ。ギイみたいな明らかな格上がいる以上、ここでのやり取りを中継は出来なかつた筈だからな。しかし何で覚醒したんだ？」

『覚悟が経験値を底上げしている様です』

「そうか。そんな事もあるのか」

「——私が今すべきことは」

「——ならば俺が取るべき対処は」

——この場に置いては。

”何としてもコイツ（あらし）を倒す!”

強力なビームが白荒らしから放たれると同時に、創造主は刮目する。

「喰らえ！　デモンブラスターツ!!」

剣で跳ね返せない類だ!

直感した創造主は瞬時に黒曜石を展開。

刹那、ビームが直撃し罅がピキピキと広がる事に驚いた。ダイヤツルハシでもなしに。凄い威力だ。ウィザー級だったか。

獣王国で見たミリムのより弱そうだが、危険なモノに違いない。

『警告。 攻撃の回避・防御は困難です。 緊急処置実行。 体表面
に対魔防御結界展開』

黒曜石の中心が壊れてビームが抜けた。

威力は減衰しているだろうが、それでもリムルより背後に吹き飛ばされる創造主。

大丈夫。 まだ生きている。 それよりリムルだ。

目の前を見る。 当人は毅然としていた。

「これくらい!」

そして、刀剣をビームに振り下ろした!

「なんだってんだッ!」

まさか跳ね返そうとでもいうのか。

リムルと自前の刀剣が輝き始めた。 エンチャント、或いは魔力を

注いで対抗しているのだ。

「ッ!」

バチバチと粒が散る。 必死に踏ん張っている。

無茶だ、と思った。

ポーシヨンの効力が続いているとしてもだ。

同時に身を挺した挑戦を賛美した。

そうだ。 疑問や可能性を感じたならアレコレ試し挑戦する。

創造主はその姿勢に頷く。

だが見た限り刀剣もリムルも耐久値が保たない。

事実、刀剣より左腕が千切れかけている。 というか千切れた。

断面は水色スライムだ。

「たかが左手くらいッ！　　コイツと比べたらア！」

放置は出来ない。

かつて創造主も右腕のみで世界を相手にして来たとはいえ、左も使い熟す者には大きな痛手だろう。

助太刀いたす。

今こそマルチを見せる時。

目の前に飛んできたリムルの片腕を回収し、本人に投げ付ける。そのまま腕がリムルに吸収されたと思ったら腕が再生した。

其れを観察する間もなく共に居並ぶと、倣って剣を振り下ろす。

己もリムルの腕となろう。

「ありがとよ……っ！」

鳴かれた。　　こんな状況なのに、横を向かなくても笑っているのが分かった。

黒曜石を再度展開すれば良いのに、創造主は何故かしようとしなかつた。

咄嗟に思わず、というのは否定しない。　　だが強いて云えば挑戦だった。

いちクラフターとして試したい、という想いが逡巡なく剣に力を込めさせるのだ。

「くっ！」

やがて盾ガードとも見て取れる行為は、ビームが拡散・消失した事で終わりを告げる。

跳ね返す事は叶わなかつたが、攻撃を防げた結果を得られた。

共同作業に満足だ。　　創造主はその場でジャンプする。　　リムル

は疲労困憊といった様子だが、成し遂げた顔だ。
後は白荒らしを処分するのみ。

「これでも……これでも届かないのか……ッ」

「はっ……はは……どうだクレイマン。これで、終わりだな……」

「フッ……フハハハア！ 舐めるなよ、私はデスマン！ 例え殺されようと何度でも復活する。貴様は永劫、この私に怯えて暮らすのだ！」

「言いたい事はそれだけか？ ならこつちは聞きたい事がある。
黒幕の正体、お前の知っている情報を全て話せ。素直に喋れば苦痛を与えずに殺してやる……剣、貸してくれ」

リムルが刀剣を見せてきた。ボロボロだ。

無茶したからだ。仕方ないから予備のダイヤ剣を渡す。耐久

以外にもアンデッド特効等のエンチャントが施されている。

この場で役立つかは微妙だが、代わりにはなる。

「わ、私が仲間を、ましてや依頼人達を裏切る事などない！ それ
……それだけが！ 中庸道化連の絶対のルールなのだ!!」

「口を割らなそうだな。 どうかや仲間に対する情は本物らしいが、
どっちにしろ処刑する……反対の方は？」

「さつき通りだ。好きにしろ」

「……大丈夫。 必ず戻りますカザリーム様。 星幽体（アストラル・
ボディー）を離脱させれば死を偽装できる。 あなたに作られたこの
体ならば……!!」

いよいよ処刑ムード。

同志がいたら祭りである。 今回はリムルに任す。

「……デスマンってのは死体から作られたんだっただか？ コイツら
が生き返るのが不思議なもんでな、死者蘇生について何度も何度も検

索をした時に知ったんだが」

「だったら何だというんだ？」

「なら復活は出来ないかもな」

「何を言ってる……」

「ここから脱出した後、新たな体を手に入れて復活するつもりだったんだらうけど、この剣は恐らく星幽体ごと斬れる。そうでなくても、俺が喰う」

「なっ……何を根拠に！」

「根拠は無い。だがコイツらが作った剣だ。一振り毎に不思議な光景を見てきた。お前も見ただ。ミリムが吹き飛んだり、今さっきなんかお前の最高の奥義とやらを防いだ訳だ」

「ッ！」

「計略は終わったんだ、クレイマン」

「や……やめろ、やめろおー!!」

己と同じ色の剣を構え、荒らしに寄るリムル。

対して荒らしは這いつくばってでも逃げようとする。

「た、助けてくれフットマン！ 助けてティア！ 私はまだ死ね

ない！ こんなところで死ねるものかーっ!!」

厚かましい。不愉快だ。

創造主はリードで荒らしの首を締め上げた。

これで今度こそ。

「グッ……お、お助けくださいカザ——」

ズバツと。リムルが一閃。

動かなくなる荒らし。やっと終わりだ。

「返すよ」

剣を返却されたので素直に受け取る。

そのまま貰われていたら、それはそれで新たな脅威だった。

ダイヤ剣装備のスライム。元の世界だったら考えられない光景にゾツとする。

「……喰うか。人型は久し振りな気がする」

だが次の光景に更に身を震わせた。

リムルがスライム状になり、荒らしを捕食したのだ。

しまった。忘れていた。コイツはシズも喰ったヤベエ奴だった。

ドン引きである。対象が荒らしとはいえ笑えない。

『クレイマンの意識の消失を確認。その魂は魔素へと変換されました』

「……後悔の念を感じる。今更そんな事したって同情出来ないけど、クレイマンが俺達の与えた”死”で少しでも反省する事を願おう」

そんな中でもギャラリーは愉しんでいたらしい。

歓声とも取れるハアン声が空間に響いた。

「見事だ。お前が今日から魔王を名乗る事を認めよう」

「へ？　魔王になるつもりはないんですけど」

「異論のあるヤツはいるか？」

「ないない！　アタシはリムル達を信じてたさ！」

「誰が魔王になろうが興味は無い。好きにすれば良い」

「ま、いいんじゃないの？」

「うむ。クレイマンを倒してみせたしな」

「余としては下賤なスライムが魔王などと断じて認めたくはないな。無礼な人間との共闘でもあったのもある」

「ほら異論あるよ!?　ココにいるよ!?　後ラミス!　ここに
来る前、死ぬよとか言っただけだ!」

「アレエ?　忘れちゃったなあ?」

「なんでこうなった!?　せめて従者のままだ良かった!」

「まあ席に着けリムル。これからの事を話そうじゃないか。レイ
ン、テーブルくっつけとけ」

「はい」

「くそう、戦って倒してサヨナラじゃないのか」

「空席を作ったんだ。責任とるよな?」

「……俺は悪いスライムじゃないヨ?」

「おうおう面白いスライムだ。その友達もな」

赤髪の仲間と思われる2人組がテーブルを力業で直していた。

凄い。彼女らもクラフターなのかも知れない。

取り敢えず直ったテーブルにケーキを置いた。

ミリム以外にも有効かも知れない、と思つての行為だった。

125. ケーキと夜魔の女王

直ったテーブルにケーキを鎮座させた創造主であったが、倣う様に周囲も座り始めた。

連戦の雰囲気ではない事に、取り敢えずの安堵感を覚える。

「ワルプルギスの議題は片付いた。だが折角の機会だ。何か言いたい事ある奴はいるか？」

それよりケーキ要らんかね？

中央に位置するケーキを誰が先に手をつけるか見ものである。

「いいかしら？ 私から提案……というよりお願いがあるのだけど」

『スカイクイーンの名で知られる魔王フレイです』

「うん。誰であろうと聞きたくありません」

「聞きなさい」

「アツハイ」

「少しでも良いから、例の人間達の行動を抑制出来ないかしら？

実質他国侵攻をしているのだし」

「それなら俺様も言いたい事がある。とうるかさつき言ったがな」

「余も同じだ」

「はいはい言うと思ったよ言わせてあげましたよ!? 戦うより面倒だよ!」

「ここまで来ると、クレイマンのしていた獣王国調査とは名ばかりの軍事侵攻行為が可愛く見えるわね……」

「さて魔王リムル？ 初仕事として……私の領内にいる例の人間達を国外退去させて貰えないかしら？」

「いやー、やりたい気持ちは山々なんですがね、なにせ自由人過ぎまして。文句なら是非本人達にお願いしますマジで」

「だそうだぜ？ 煮るなり焼くなり好きに制裁して良いって事だ。

だが経験者から言わせて貰えば、そんな事したって無駄だがな。
どうせまたやって来る」

誰も手を付けない。

コレはアレか。 ミリム同様直接目の前に置かねばならないのか。
そう思っただけのケーキを用意しようとした矢先、赤髪の従者が見かねたのか切り分け分配したではないか。

「なら余計に言い聞かせて欲しいわね」

「言葉が通じないんで。 通じたところで価値観の違いからか、言う通りにならないんで」

「知らぬ存ぜぬで何もしないのは困るんだがな。 不可侵条約を破つたかどうかはさておいても、他国に首都直下型建造物なんて前代未聞過ぎるだろ!？」

「おいおい、俺達は魔王だけぞ？ リムルがクレイマンを倒して魔王になった様に、力で示すべきだろう。 その友人たるリムルも文句は本人達に言えっただし、肉体言語で追放すれば良い。 俺は現にそうしてる。 ついでに楽しませてもらってるがな」

素晴らしい。

4分割ではなく、8分割にしたぞ。 我々がやらない分配法を見せられた。

満腹度は半減するだろうが、全員へ行き届く様に配慮して見せる優しさをクラフトした。 己も見習おう。 悪食リムルは反面教師だ。

「リムル、アンタ今まで良く生き延びてくれたわね」

「同情するなら手伝って」

「アンタは私の従者でしょ」

「魔王の従者が魔王ってなんだよ」

「……………」

欺瞞の国よりお越しの従者が睨んでいる。

オッドアイの奴だ。卵を投げ付けられた事を未だ根に持っているのだろうか。

いや分かった。ケーキを貰えない事に腹を立てている。従者は立ち尽くすのみで、何も貰えない。可哀想に。クラフターは憐れんだ目を彼女に向けた。

「お前、ヴァレンタインの従者に睨まれてるぞ。というか凄い殺気まで放たれてるぞ。本当にどこでナニをしてたんだよ」

やはりケーキを用意しなければ。

ボックスから新たなケーキを用意した創造主は、彼女の前にケーキを直置き。テーブルに置くのと席に着く奴に食われるからだ。

「だから直置きやめろや!? 凄い失礼な行為してるって自覚持ってる!?」

「……私は魔王ヴァレンタイン様の侍女に過ぎません。どうぞ、お構いなく」

「お構いなしの奴に言っても仕方ないぞ!? いや本当にすみません! もう殺してやって下さい、取り敢えず頭下げとけお前も!」

駄目だ。喰わない。

やはりミリム以外には効かないのか。

いや諦めるには早い。創造主はテーブルの真ん中に立つ。そしてホールケーキを持って腕を振り回し、効果の無かった彼女を背に愉快的腰振りを披露して見せた。

「おいしい!? 頭下げてるつもりが尻を突き出して侮辱してる様にしか見えないんだけど! お前もう退場しろ!? 後は俺だけで良いから!」

他の奴になら効果が見られるかも、と思つての行為だ。牛や豚も小麦を見せると寄つてきた。

これで寄つてくれば、そうだろうと思つての行為だった。

リムルに刀剣を矢の如く投げられた。

頭に刺さった。テーブルから落ちる。痛い。

「大変失礼しました。 氣に入らねば刺しても構いませんので、どうぞご自由にお使いください」

「おいおい頭に刺さったよ。 流石にコレ死んだんじゃないの……つて、平然と生きてる!?! しかも引き抜いてナニか作業し始めた!?!」
「そういう奴なんで、はい」

耐久値が低い所為か攻撃力も大して無かった。

しかしまあ、我々の剣なら耐久値が低くなろうと攻撃力は最後まで変わらない。だが村人製の剣は耐久値が低くなる程弱くなる様だ。不便である。

仕方なし。このままボロボロの刀剣を放置する気にもなれない。創造主は鉄インゴットで耐久値を回復させていく。

元々の素材とは異なる部位もあるだろうが、取り敢えず形にした。リムルに投げ返す。

「使える状態に直してくれたのか。 だとしてもクロベエに見せないとな」

「凄いのう。 やはりただの人間ではないな」

「慣れてる様子のリムルも大概よね……」

よし。 ケーキ実験再開。

もう1度先程の者の下へ向かう。

ミリムに邪魔された。

「駄目だぞ。 お前は本当の魔王バレンティンだと気付いてるから

ケーキを買いでるのだろうが、本人は正体を隠しているのだ。今の魔王が代理なのは内緒なのだぞ？　だから、そのケーキは私が貰うのだ」

「内緒話デケエ」

ミリムにケーキを奪われてしまった。

なんて事だ。最後だったのに。

まあ……良いか。ミリムの笑顔を見ていると不思議と思う。

「はっ!？」

一方、ケーキを渡そうとした相手を見る。また睨んでいた。いや遠慮して食わない方が悪いだろうに。

「忌々しい人間め！　どこまでも妾の邪魔をする！」

不思議な事が起きた。

オツドアイの彼女が白服から黒服へ装備を変えたのだ。

まあ装備くらいなら我々も即脱着出来るから特段驚かないが。

それよりも周囲に風の様なのが起きたのが不思議だった。

「もう良い。妾の事はバレンタインと呼ぶが良い」

「うわ……ヴァレンタインも相当なもんだったが、本物は別格だ」

「よろしいのですか、ルミナス様」

「致し方あるまい。もはや正体を偽る事は不可能じゃ……ロイ、気になる事がある。貴様は先に戻っておれ」

「しかしルミナス様」

「この前、貴様が追い払った……例の人間じゃなく道化の格好をした侵入者。クレイマンの奴と何か繋がりがあるかも知れぬ。戻って聖神殿の警備を厳重にするように伝えるのじゃ」

「――承知」

また不思議な事が起きた。

席に座っていた方が大量の蝙蝠の様になったと思えば次には消えてしまった。

やっぱ世界は楽しいなあ。

「……しかしルミナス、ね。ルミナス教、西方聖教会と関係があるのか？ それこそヒナタと……いや。今考えても仕方ないか」

「——魔王バレンタインの正体が明かされた後で悪いのだけど……」

「どうしたフレイ。言ってみろ」

「今日この場を以て——私は魔王の地位を返上させてもらおうわ。」

そしてミリムに仕える事を認めてもらいたいの」

「ゴフウツ!?!」

ミリムよ。折角のケーキを吹き出すな。

シズがいたら説教されているぞ。

「待つのだフレイ！ ワタシはそんな話初耳だぞ!?!」

「ええ。言っただけだったもの」

「いきなりだな。理由はなんだ？」

「理由は——……そうね。色々あるのだけど、私は魔王としては弱過ぎると思うのよ。さっきの戦いを見ていて確信したのだけど、私では覚醒したクレイマンに勝つ事は出来なかったでしょう」

「だがフレイよ。有翼族であるお主の本領は高空での高速飛行戦であろう。そこまで自分を卑下する事はないのではないか？」

「空ならば敗れなかった。民を守れなかった時、魔王にそんな言い訳は通用しないわね。それに、例えクレイマンの様に有利な状況を整えようと、その全てを覆す者達が相手ではどうしようも無いと知ったのよ。だからねミリム。私は貴女の配下につくと決めたのよ」

「だ、だが……」

満腹になったのか。

ケーキを食べる手が完全に止まる。

よし今だぞ黒服オッドアイ。 食え。

「どうかしら。 この提案を受けてくれないかしら」

「ちよつと待つてくれや。 そういう話なら俺様にも言いたい事がある。 ミリムに負けた俺が魔王を名乗り続けるのは烏滸がましいつてもんだ。 だから俺も魔王の地位を返上させて貰いたい」

「ちよつと待つてカリオン!? あの時のワタシはクレイマンに操られていたのだぞ? ノーカンに決まっておるではないか!!」

「ははは、てめえさつきワタシを支配するのは無理なのだつて言つてただろうが」

「言つてたな、クレイマンに……あ、お前余計な行動はもうするなよ。

これやるから大人しく遊んでなさい」

オッドアイにケーキを投げ渡そうと考えていたら、リムルに砕けた宝石の欠片群を渡された。

コレはアレだ。 ミュウランの体内にあつたらしいヤツだ。

よし。 修復出来るかやつてみよう。 研究すればナニかに応用出来るかも知れないし。

「本当にそれで良いのかよカリオン」

「ああ。 建前上、魔王同士は同格だが、ああまで歴然とした力の差を見せつけられたんだ。 ここは潔く軍門に下ろうと思う」

「オレはお前を気に入つてたんだぜ? 後数百年もすれば、お前も覚醒するだろうと期待してたんだがな」

「期待は有難いが、身の振り方は自分で決めるさ」

「……まあ良いだろう。 たった今よりフレイとカリオンは魔王ではない。 ミリムに仕えたいというのなら、自分達で説き伏せるがいいさ」

「……本気なのかカリオン」

「ああ。 獣王国の王を辞めるつもりはねえが、ミリムを上置き置く新体制を築きたいと思ってるな」

「良いと思うわよ。 獣王戦士団は貴女の戦力として恥じない実力だし」

「そ、そんな事言ってる……ワタシを騙そうとしていないか？ 配下になると気軽に話してくれなくなるだろ？ 一緒に遊んだり悪巧みもしてくれなくなるんだろ!？」

駄目だ。

作業台の上で欠片を組み合わせて修復は何とかしたが、使用用途が分からない。

帰ってBBに解析鑑定して貰うべきか。

「いいえ。 何時でも一緒にいられるようになるし、なんならもっと楽しい事が出来るかもよ?」

「それは……あの者達の様には?」

「……イケナイ遊びは真似しちゃダメよ」

「あの人、俺よりミリムの扱い上手いな。 ちよつと悔しい」

「そもそもお前が俺の都を吹き飛ばしたんじゃないやねえか！ お前にも俺達を養う義務があるんだよ!」

「こっちはごり押しする気だな……って事は今後ミリムの国との国交を考えるなら、彼らを相手に交渉する事になるのか。 手強そうだなあ……特にフレイさん」

暇になってきたので、見渡す。

ミリムを中心にワイワイ騒いでいる。

「ええい、わかったのだ！ もう勝手に好きにすればいい!」

まだまだ時間は掛かりそうだ。

また暇な時間だ。かといって帰り道も分からない。
取り敢えずクラフターはリムルの側にいた。
新しい玩具を寄越してくれるかも、と思つての行為だった。

黎明の為に。

126. 過去と願い

傀儡軍は無力化、クレイマンの城は陥落。
後はワルプルギスの夜が明けていくだけ。
代表の報告によれば、また詰まらない状況下との事。

「ああ、会議ですね。問題ないですねソレ」

そう考えた私は操縦桿を動かして連邦の帰路に着く事にしました。
もう支援は必要です。

IRPのテストも出来ましたし。

この結果を持ち帰り、また研究です。

面倒事があるなら、ワルプルギスの結果をリムルさんに聞いて報告
書を纏め、馬鹿連中に報告する事ですかね。

政治的な話は聞く耳持たないでしょうが、それでも伝える事は伝え
なきや。

それと森が荒れた件。

トレイニーさんには悪い事をしました。

でも馬鹿同志の所為にしときましよう。

帰る時もコックピットを完全に閉鎖して見られない様にします。

大丈夫。大抵は馬鹿の所為と言っとけば疑う事なく罪は流れま
す。

「やる事はやりました。帰ります」

そう言うと、馬鹿同志は特に引き留めるでもなく私を送ります。

ただ後でIRPやBBについて質問したいそうです。

面倒だなあ……でも、ちよつと嬉しい。

だって彼等に出来ない事をやったのだから。

彼等クラフターは新たな事には興味津々で、熱心に研究し創造しようとする。

その熱意は凄まじい。通り越して炎上騒ぎになるけど、本物だから羨ましい。

そう。本物。

私は……偽物。

本物に作られた……偽物。

あの冷たい床で作られた肉人形。

紛い物。実験体。創造物。

創造主と村人の能力を中途半端に引き継いだ通訳者。リスポー

ンが出来ず、身体能力も平均以下。

息も上がる。創造力も低い。

出来る事なんて、彼と比べたら……。

こんな調子じゃ星の世界になんて……。

「……まだ過去を引き摺ってる」

自身を叱咤する様に呟きつつ、連邦のジオフロントへ。

連邦郊外の搬出入口に侵入して――。

「ちよ、ちよつと擦ってますよ!?!」

「へ……あつ!?!」

白衣を着た村人の技術者、ベスターさんの声で我に帰った。

見やればIRPを外壁に擦り付ける様にしており、結果、メンテナンス通路を壊してしまった。

ああ、もう……ポーつとしてるから。

「すみません、始末書作成します……」

「いえ、彼等がもう修復作業に乗り出していますし……此処は私の研究所じゃないですから、そう気を落とさず」

言われてもう1度見やる。

此処の同志達が梯子を掛けて、或いは土で足場を作って通路を修復し始めていた。

そのままIRPにも取り付くと、作業手順に従ってメンテナンスもしていく。

相変わらず行動が早い。

それすらも、悩む事なく思うがままなんだ。

羨ましい。

私はコックピットから修復した足場に飛び移ると、ベスターさんの所まで降りていく。

「……そうですね」

「操縦系統を弄りましたからね。振り回されるのは仕方ありませんよ」

「いえ、コレは私の落ち度です」

「……何か、お悩みで？」

心配そうに聞いてくるベスターさん。

でもコレは……話して良いものなのか分からない。

私の出生。

星の世界。

私は首を横に振った。話すべきではないから。

「大丈夫です」

「本当ですか？ 通訳者としてではなく、技術者の1人として——」

「……強いて言えば武装です。ベスターさん達の協力のお陰でコックピットや操縦系統は良くなりました。電磁砲の威力は申し分無い程です。しかし飛距離や砲撃可能までのチャージ時間の長さを改善出来れば尚良いですね。其方のポジション作りとのリソース

に問題が無い範囲で今後も協力が出来れば是非その辺も含めて――」

だから誤魔化してしまった。

本物じゃないから。偽物だから。

欺瞞に満ちた、本物が嫌う作り話を。

「……分かりました。後ほど研究室に伺います。詳細はその時に」

「はい。今回の実験結果を纏めておきますね」

そう言つて、ベスターさんと別れた。

私はというと、そのまま自室兼研究室に戻る。

別に間違つていないやり取り。大丈夫。

そう私は私に言い訳して。

頭にかかる霧を払う様に、自室の机上で羽ペンで本に文字を走らせる。

今回のレポートは少し荒々しくなったけど、報告としては十分な出来栄えだと思う。

この世界の文字を大体覚えられたのは、大きな意味がある。こうしてベスターさん達とやり取り出来るのだから。

「失礼します」

丁度ベスターさんがやって来た。

「どうですか？」

「ええ、纏め終わったところで……」

そう言つて本を渡す。

暫くパラパラという音だけが響いて、最後にパタンという音が高く

響く。

どうしてか、心の内で怯えた私がいる。

「成る程。 今後の改善点は把握出来ました」

大丈夫。 何もオカシイ事はないんだ。

そう私は言い聞かす。

聞かしつつ、相手に愛想笑いを向けてしまう。

「はい。 一緒に頑張りましょう」

「ええ。 その為にも」

一方、ベスターさんは徐に口を開いた。

「少し、私の昔話を聞いてくれますか？」

「唐突ですね」

「お忙しいと思いますが、双方の技術進捗に貢献出来ればと考えての事です」

「聞きましょう」

マズイ。

何がマズイって、昔話をしたのだから其方も聞かせろ、という流れになりそうだから。

私の過去は同志にだって未だ話せてないのに。

”彼”にだって……話せなかった。

でも私は思っておきながら聞く事にしてしまった。

それは決して相手の事情を知りたいという知的好奇心じゃない。

客員だから……とすれば、それは言い訳。

きつと擬似的に私自らと向き合わないと、という考えからだろう。

そしてベスターは悟ってか、敢えて過去の話を持ち出したのだと解釈する。

「私は魔国連邦に来る前は武装国家ドワルゴンにいました」

ベスターさんは淡々と話し始める。

私は黙ってその昔話を聞いた。

王の為に尽くし、役に立とうとした事。

だけど仲間のカイジンへの嫉妬や焦りで考えが歪み始めた事。

そして功を焦り魔装兵計画というもので事故を起こしてしまった事。

その罪をカイジンに擦り付けてしまった事。

その後も嫌がらせを続けた事。

だけど延長線の先でリムルさんと出会い、事態が大きく一変。

夜の店で出会ったリムルさんとカイジンさんに理不尽な罪を着せて裁判を引き起こし。

最後は王の判決でリムルさん達は国外追放。

だけどそれで終わらなかった。

己のした事、いや、してきた真実を王は知っており、その咎めを負う事になって王の下を去らねばならなくなった。

その後、心を入れ替え魔国連邦へ。

王の側にいる事は遂に出来なくなつたが、間接的にお役に立つべくリムルさんの下でポーシオン開発に勤しみ、遂に究極の回復薬であるフルポーシオンを作り出す事に成功したのだった。

「——そして今に至ります。 研究員も増えた事で余裕も生まれました。 ですから此方の研究にも協力が出来たのです」

そう赤裸々に語り終えたベスター。

偉いし、凄くなって素直に感じた。

それに……経歴は他人事じゃないから。

正に今の心境は、昔のベスターに似ている。

このままじゃ、私は似た道を……いや、もっと取り返しをつかない、

また路頭に迷う道へ行ってしまうかも知れない。

「貴女の悩みや過去は存じません。ですがもし、話したい時が来たらお聞きします。それこそ協力出来る事であれば喜んで取り組みましょう。そう、彼等の様に」

部屋の外。

格納庫の光景を指差され、釣られて見やる。

そこには同志達が、マインクラフターが活き活きとクラフトしていた。

壊れた通路はとつくに直り、IRPのメンテナンス作業を嬉々としてやっている。

そればかりか、自ら考え様々な案を出し合っては試そうと走り回っていた。

嫌な顔一つせず。純粹な笑顔で、嘘偽り無く。

本物が。輝かんばかりの本物達が。

そこかしこに溢れていた。

私は依然偽物で。彼等の陰だけ。

願わくば。

並び立つ事をお赦し下さい。

「……………ええ。そうですね」

——眩し過ぎて、涙が頬を伝った。

127. 再建と復興

「……ああ、疲れた」

寝て起きて日が昇る。

世界の理は我々を再び目覚めさせる。

今日は獣王国再開発計画に参加しよう。

そう部屋から出たら、スライムが足元に転がってきたものでギョツとした。

いつか似た光景を見たが、慣れたものじゃない。

そのうち切り刻まれて粘着ピストンに加工されても文句は云えないね。創造主は溜息を吐いた。

「吐きたいのはコツチだよ!」

朝から騒がしい。取引でもなしに。

ドロップ増加剣で斬ってやろうか。

「お陰様で最高だったよ!」 戦闘は感謝してるけど! あの後魔王が8人に減って、オクタグラムって新たな名付けをしたりしたけど、更にその後の展開が会合より面倒なレベルになった!」

なにやら文句を垂れている。

後で辛辣同志の報告を待とう。ここでハアンハアン聞いていても喧しいだけだ。

「お前らの件で胃がもげかけたわ!」 ワルプルギスの間にクレイマン領と獣王国を好き勝手しやがって! 会合が終わった後、通信水晶越しに叱られたんだからな俺!」

リムルの瘡癩はいつも通りだ。気にしない。

それより傀儡国と獣王国の再開発案件だ。

久し振りの大規模開発である。創造主は領いた。

「笑顔で頷くなよ!」 今言っても伝わらないだろうが、獣王国、天翼国、傀儡国はミリムの領地になった。連邦側も協力しつつ本格的な管理は下についたカリオンさんとフレイさんがしていき、獣王国の復興の手助けもする筈だった……矢先にこの始末! 吹き飛んだ獣王国はいざ帰ったら既にほぼ復興してるとききた! また他国で派手にやってくれたなオイ!」

獣王国は元々の雰囲気を尊重した建造物群を建築している。

立派な城を中央に位置させ、内側になるにつれて低密度住宅を建てている。道路に関しては気に入らない綻びを改善。村人農業が盛んだった事も考慮し、街中に水路や湧水風、掛け流し風の無限水源を備えた。

水のみならず草ブロック等を駆使する事で景観も良くした。松明も忘れない。

問題となったジオフロントは天高を低くして地表面から更に掘り下げた。どうせ今更隠し立て出来ないからと開き直り、出入口は連邦同様に各建造物から梯子や階段で降りられる。荒らし襲撃イベントを教訓にしたのだ。これで遠方に避難する時間が無くても、最悪は地下に逃げ込める。

都市近辺に点在していた集落に関しては、周囲をフェンスで囲い込んだり露天掘りの地下シェルターに留めている。余力があれば、其方も改善したい。

これらの結果は本と羽ペンに書き留め、署名本にして報告書とし辛辣同志に提出する。彼女を真似ての事だ。取り敢えず宛先を彼女にしておけばリムル達に自ずと伝わるだろう。伝わらなくても良いが。どっちに転んでも我々が好きにするし。

「……まあ、お前らの作った都市だ。住めば都だろうさ。実際、道路は平坦に整備され街中に張り巡らされた用水路や湧水は飲み水に足り、狭い路地裏すら陽の明かりで照らされ、噴水広場や庭園は憩いの場。お年寄りも子供も安心して歩ける綺麗な都市になっていたんだってな。建材や雰囲気も元々のクオリティを参考にしてくれたようだし。地下施設に関しては避難所にしてくれたんだろ。そこは住民にも困惑されつつ感謝されたよ……矛盾した怒り口調で」

一方、傀儡国は城の周囲のみ開発中。

現地に蔓延っていた大量のスケルトンから得た骨や遺品を保管する赤煉瓦倉庫街が造られた。

それに満足せず将来に備えて地下鉄道を敷設。

骨を骨粉に加工して肥料とし、農業大国でもある獣王国に輸出出来る様に路線整備。場合によっては加工貿易を見越す。

その絡みで骨粉以外にも輸出入が出来る様に酒造施設も建てたい。獣王国の果物を仕入れて酒類や料理に加工出来れば理想的だ。

他にも生産工場を建築出来ればやりたいところ。

また現地の城内を探索したところ、様々な宝石的なモノや武具等が見つかつた。研究の甲斐がある。

夢は広がる。うんうん、とクラフターは笑顔で頷くばかりだ。

「傀儡国は……城と周りで好き勝手してるらしいな。地表面にはアランダットの遺品を保管する倉庫街を造つたみたいだけど、まさか変な事に使わないよな？ いやだとしても俺は見ざる知らざる言わざる聞かざるって事にする。東の帝国と隣接している辺りは……気分れなお前らに任したら不安しかないんで、カリオンさんとフレイさんに任せたいけどな……後で通訳ちゃんに色々伝えて貰おう。無駄かも知れないけどしなないよりは良いよな、うん……」

リムルは人型になると、へろへろ顔で執務室へ。

何気なく付いて行けば大量の紙や本が摩天楼の如く積み重なって

いる。回収すればインベントリが埋め尽くされそうだ。

「は、はは……大半は外国や集落からで、お前らへのクレームや質問だぜ？　コイツを見てどう思う？」

これらの紙は我々がクラフトしたモノだ。

村人に卸すと喜ばれたので、リムル達にもあげたのだ。

以前は分厚い看板に文字を書いていたのだから、随分と情報圧縮されたと思う。良い光景だ。これもまた笑顔で頷いてみせる。

「殴りたい、その笑顔」

だが乱雑に過ぎる。

クラフターはチェストを設置すると、片っ端から書類を放り込んだ。あつという間に部屋が広くなる。よし。スツキリした。

「……その気遣いをもつと他に回して？」

だがやはりというべきか、文字内容は理解が出来ない。そこは通訳である辛辣同志やシズを頼る他あるまい。

……そういえばシズは元気だろうか。ミリムが元気だったのだから彼女もきつと元気だろう。自分も元気だから間違いない。

「ところでルミナスから連絡があつたんだが……教会関連の施設で衛兵が全滅した事件が起きたらしい。お前らとは違う奴だろうとは言われているが、心当たりあるか……って俺が言っても伝わらないよな。そろそろ面倒だなあ……通訳ちゃんは他にやる事あるみたいだし、無理に秘書にしたら可哀想だし。何よりシオンが怒りそうだな。儘ならない事ばかりだな」

リムルも元気……ではない。

頬杖ついて書類と睨み始めてしまった。これは元氣付けてやらねばならない。同志だし。そう思つてクラフトした酒を提供してみたが。

「仕事中だつて！ ああまあ……酔つ払いたくなってきたよ……」

反応は微妙だった。儘ならないものだ。

まあ良い。よくある事だ。次は辛辣同志のいるジオフロントにでも向かう。

辛辣同志に署名本を渡すついで、色々話し合おう。彼女もまた同志なのだから。

128. 辛辣同志と夢の話

「またリムルさんに迷惑を……」

連邦地下。

ジオフロントにある辛辣同志の自室。

ここもリムルの執務室同様、書類に溢れ乱雑としている。ここもチェストで纏めようと思いつつ辛辣同志に報告書を渡したら溜息を吐かれた。

皆して酷い。我々が何をしたというんだ。

「しまくりでしょ!?! 報告書にもアンタ達で書いてるでしょ!?!」

何を云う。

ミリムに破壊された獣王国は再建した。荒らしの傀儡国は元々荒地だった城下を整地した。コレの何処が悪いのか。

「ワルプルギスでの会合や方針が狂ったんですよ!?! ミリムちゃん
は気にしないかもだけど、カリオンさんとフレイさんの事も考えて
!?!」

面倒だ。政治はリムルと君に任せる。

それに、とクラフター。

本気で拒絶するなら攻撃してくるなりリムル達が止めてくるなり
してくる筈だろう。

「それは……」

それをハッキリせず文句ばかり。つまり嫌よ嫌よも好きの内。
なんだかんだ認めてくれているという事だ。

「一理あるかも……いやでも認めたくないなあ」

認めろ。君もクラフターだ。

周囲を気にして文句ばかりでは進むものも進まないぞ。前を向いて今話をしようじゃないか。

「今話をしてるつもりなんですけど」

君の話だ。IRPやBBとか。

「……まあ良いでしょう。馬鹿には国境も政治も無いですし」

相変わらず辛辣だな。だがそれが良い。

「変態？」

結構。個性と云え。

村人と会話し協力してクラフトするなんて真似は我々には出来ない。その上、君はIRPやBB研究の権威だ。

「ハッキリ言いますね」

自分に素直になる事だ。悩みがあるなら聞こう。

「馬鹿達の素直さ。それが悩みです」

それは悩んで当然だ。

君はクラフトもリムル達も好きなのだ。

「……え？」

2つの両立。

本気で考えるから苦悩する。裏を返せば相応の情熱があるという事。

それに夢もある。実に素晴らしい。

今に至っては夢を聞きたい。差し支えなければ。

いや。あつても聞く。聞かせろ。

報告書はついでだった。

「やっぱマインクラフターですね」

そうだ。そして笑え。

その方が似合う。辛辣でも。

「ひと言余計です」

お互い様だ。

それより早く語り合おう。

あいや、今回は君のクラフトの話をしよう。

「——分かりました。良い機会です、話しましょう。私の夢は……馬鹿の手も借りたい……それこそ馬鹿だって言われそうなクラフトです」

聞かせてくれ。どんなクラフトだい。

「ああまあ、その。クラフトというか……」

煮え切らないな。

しおらしくして。何を恥じらうか。

「だって笑われそうですし……」

笑うかも知れないが、馬鹿にはしない。
貴女とは違うんです。

「むう……私と貴方達は違いますもん。 目指すモノもきつと多くの同志達が思わなかったか……思いついても実現出来なかったもので……無理だとか有り得ないとか否定されそうだし……」

否定するのは簡単だからな。

何もしないなら更に簡単だ。

だが聞かない事には何も言えない。 始まらない。

面白いにせよ詰まらないにせよ。 感想や意見はそれからだ。

「……ありがと。 え、えとね……私の夢は星の世界に行く事……なの」

星の世界？

「そう、夜空に浮かぶ星海の世界。 あるかは分からない。 でもあると良いなって思ってる」

あるさ。

「ど、堂々と云いますね……」

ネザー。 ジ・エンド。 そしてこの世界。

ならば他にも世界があつて可笑しくない。

特にこの世界の思想を参考にするなら……村人の考えは難しいが、信仰する神や畏れる悪魔が人々の想いから生まれているとするならば。

考えた事はきつと実現する。
だから星の世界はある。 確証はない。 だがどこか誇らしい自信だ。

「ほんと、馬鹿なんだから」

馬鹿で結構。 それで君が笑顔になれたから。
君の好きな”彼”も、君の笑顔を願う筈だ。

「なっ!? す、す、好きとかそんなんじや!」

好きだったんじやないのか?
どうした。 赤面して。 裸でもあるまいに。
リスポンして、生まれたてのシズを思い出す。

「アレですよアレ! 命の恩人として、クラフターとして尊敬して
るって事で!」

それには同意する。
彼は荒らしと無縁の温厚な性格だった。
だがそれとコレは別だ。
さつきも云ったろう。 素直になれ。

「うう……こんな時にらしくない事を」

そんな日もある。
我々クラフターは聖人ではない。 紳士でも英雄でも無い。 だ
からと悪人でもない。

あいや訂正。 悪人はいる。 荒らし許さん。

「……そうですね」

それはそうと……星の世界を目指すキツカケも、やはり彼が関係しているのか？

「そうです。行き倒れになりかけていたところ、彼に助けられた後……」

魔国連邦で？

そうなるまでクラフトに熱中する事は我々もある話だ。だが空腹には気を付ける。自然回復も出来なくなり、走れなくなるばかりか体力が削られ瀕死になるぞ。

だがしかし、そうなるまで何をしていた？

「……連邦に来る前は湖底研究所に。そこから突然異動になって放浪してたというか。私は追い出されたと思ってます」

酷い話だ。

湖底研究所は閉鎖的な連中が陣取ってるが、そこまでするとは。相当辛辣な事を云ったのか。

「辛辣だったのは向こうですよ」

そんなにか。

だが確かに、そんな感じはある。連絡を入れても碌な返答がない。

同志とはいえ、何をやっているのか。皆目見当つかない。君はあそこで何を見た？

「絶望を少々」

酷い顔だな。

「それ相応のモノを見ましたから。 思い出したくもありません」

そうか。

尚更、我々も準備や計画を立てねばと思う。

もし荒らしが湖底で這いずり回っているならば、同志であれば潰さねばならない。

将来、何が起きるか分かったものじゃない。

水中爆撃も視野に入れる。

通常、TNTは水中の地形や構造物を破壊する事は出来ない。 爆風によるダメージは与えられてもだ。 ただし砂や砂利をTNTと同時に落とすと水中の構造物等を破壊出来る様になる。 それをしよう。 水中神殿での戦闘経験もある。 相手がガーディアンではなくクラフターというのが厄介だが。

「理不尽に攻撃しない方が良いかと」

勘違いするな。 我々は君を守りたいだけだ。

大切な同志だからな。 貴重な人材でもある。

「……ありがとうございます」

暗い話も程々にしようか。

話を戻すぞ。 彼に助けられたのは理解した。

だがそこからどういう経緯で星海を目指した？

「一緒に暮らしていた頃……彼は星を見て、創造の世界も負けないくらいある筈なんだって目を輝かせて語ってくれた時がありました。 彼はひよつとしたら、夜空に浮かぶ星々に憧れてたんじゃないかなって。 彼が消えてしまった後、その語ってくれた星の世界に行ってみたって思うようになりました」

星の世界を目指すとしつつ、IRPやBB研究をしているのは何故だ？

「BBは未知に満ちています。IRPは星の世界に旅立つ為の発射プラットフォームに出来るかも知れません。ここでの様々なクラフトの過程で星の世界に行く方法が判ればと思います、研究しているのです」
成る程。大体理解した。

しかし星の世界か。想像より壮大かもな。
高度限界より更に上にあるのだろうか。エリトラでひたらすら上昇しても辿り着けない世界ではないのか。
だが面白い。挑戦する事に意義がある。
我々に出来る事なら云ってくれ。手伝おう。

「ありがとうございます」

その熱意で彼が戻って来ると良いな。

「……目の前で消えてしまいましたよ」

戻って来る可能性はあるだろ。

現にクラフターの中には、1度消えたものの帰ってきた者もいる。

「えっ!? 初耳ですよ!」

アレ。知らなかったのか。
まあ取り敢えずそういう事だ。

「どういう事です!? 消えたらそれっきりじゃ!」

消えたクラフターが何処へ消え逝くかは知らない。だが熱意を取り戻したのか帰ってきた奴がいるんだ。だから再会出来る可能性はゼロじゃない。

「そ、そうですか……クラフターも謎に満ちてますよね、本当」

それ以上に創造の世界は広い。
立ち止まってられないぞ。

「そうですね。 うん、何だか元気出てきました。 研究再開です！」

うむうむと頷く創造主。
そうだ。 それで良い。 邁進しなさい。

「じゃあ早速ですが資料を渡します！ 現状解析が進んでいる範囲は理解して貰いたいですし、ベスターさん達との連帯もあります！」

そう言うや否や大量の本を投げつけられ、インベントリが埋め尽くされてしまった。

なんだこの量。 読めと言うのか。

「翻訳してますから読めるでしょ。 期待してますよ？」

やれやれ全く。

それでも仕方ないな、と読み始める。

そりゃ楽しみに笑顔で言われちゃ、断り難いというものだ。

?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □

「——大体把握出来ました？」

文字ばかりでゲンナリしているところ、辛辣同志が笑顔を向けてきた。
取り敢えず読み終えたと頷いておく。どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

ファントムに襲われるレベルか、そもそも1日も経過してないのかも知れない。

楽しい時間は早く過ぎるのに、辛い時間は終わらない。時空間が歪んでいるんじゃないかと疑わずにはいられない。

「じゃあ追加で——」

フアツ!?

「冗談ですよ」

クスクス、じゃないよ辛辣同志め!

創造の世界も楽しいばかりじゃないのはとっくの昔に知り得ている。だがその仕打ちは酷い。ある意味辛辣。

「そう怒らないで下さいよ。でも楽しかったんじゃないですか？」

まあ、とクラフター。

動力源兼演算装置の類とされるBBは驚くべき技術の結晶だし、IRPも拡張性と運用方法次第で可能性が広がる。

村人に配慮したパーツ類には首を傾げたが、IRPは見た目の割に繊細な部品類が多く使用されている様だ。大抵は我々の知らない素材やクラフトである。

「そうです。村人でも扱えるように、というのは私の体が馬鹿達ほ

ど強くないからです。それに非常時に己むを得ず村人が動かせるように」

そうだったか。

ますます我々とは違う様だと思おうクラフターだったが、これ以上突っ込まない様にする。

彼女のクラフトじゃない。体についてだ。

恐らく湖底研究所で”クラフト”されたのだ。

あそこに何が？

連絡が無い以上、強制捜査も視野に入れる。

問題は証拠が無い事だ。下手に踏み込んだら施設と謎ごと自爆されるかもしれない。

だからと査察連絡したところで拒否されるか、受け入れてくれてもヤバイモノは隠蔽される。

いや、今更何を臆する事があるうか。

大陸全土に拡大しておいて、身内には触れないなど抜かすものではない。

「あ、ごめんなさい。流石の馬鹿も疲れるものは疲れますよね」

こっちはこっちで辛辣を受け入れねば。

「やっぱり現物を触った方が早いですよね」

そうだ。触らせろ。お前のモノを。

我々は限界だ。

「その言い方はキモいで直しましょうね」

笑顔で抜剣されたから、戦慄と共に身を震わせた。恐ろしい子！

「簡単な整備は他の同志に聞いた方が早いので、後で聞いてみて下さい。新規の方には研究開発側に回って欲しいのです」

剣を仕舞ってくれた事に内心安堵しつつ、格納庫に移動する。

すると、そこには見上げるばかりの巨大な創造物……機龍ことIRPが鎮座していた。

まあそれ自体は何度も見たが、いざ弄るとなると話は変わるもの。

周囲には整備班と思われる同志と白衣を着た村人が彷徨っている。後で話を聞こう。

しかし新規がいきなり開発で良いのだろうか。

「やりたくないなら良いです」

やらせろ。やらせろ下さい。

定番のスニーク姿勢を繰り返し、低姿勢を繰り返す。色んな意味で彼女には頭が上がらない。

「宜しい。では今後改善したい点や星の世界を目指す為のイメージを現物弄りをしながらお話します」

そう言われつつ、整備通路を共に進む。

やがてIRPのコックピット前につくと、内部や武装の細かい説明やらなんやらをされ、次にやつとクラフト案件である。

「村人の研究主任はベスターさんです。彼等と共に開発したのが電磁砲となります」

竜の都での魚災の時に世話になった。

従来のキャノンとは異なるそうだな。

「簡単にいうと電気力で弾を飛ばします。原理は——ですか

ら、火薬を使用しない分コストの削減を狙える訳です。 エネルギーはBBから賄えます——負荷はそれ程でもなく、ただエネルギー変換効率等——問題なのは発射までに時間が掛かる事、弾丸の都合で短射程な事です。 新たに新型弾を開発したりチャージ時間を短縮出来れば、といったところが課題点です」

長い。

武装を改善する、で良い。

それで星の世界とどう繋がる？

「射程が伸びれば星の世界まで飛んでいけるかも知れないじゃないですか」

じゃないですか、じゃない。

それは知らないぞ。 やる価値はあるが。

「弾役は馬鹿を予定してます」

犠牲になれと仰る!?

「私と違ってリスポーン出来るんですから良いでしょ？ 人体実験は貴方達にしか頼めないですね。 倫理的に」

アウトだ。 村人的に。

辛辣もここまで来ると鬼だ。 仕方ないから協力するけど。 実験時はなるべく手ぶらで経験値はエンチャントに交換しておこう……。

「後、この計画はリムルさんに伝えておきます」

何故に。 あの悪食スライムは文句しか云わない。

「無許可で打ち上げるより良いでしょう。それにリムルさんは異世界転生者です。あつちの知識を教えてくださいれば、役に立つ事もあるかも知れませんよ?」

確かに。

元よりクラフターの雰囲気は纏っていた。悪食と荒らし誘導行為等を除けば役に立つ。

時に人智を越えるクラフトをするからな。ミュウランの時とか。生命の創造に等しい行為を出来るんじゃないだろうか。スライムだと侮れない。それに世界違えばクラフトも違う。それぞれ良い所がある。IRPは既にハイブリッド化している訳だし。

「……悪い部分を交換するのと、ゼロからクラフトするのは違いますよ」

どうした。

ミュウランの辺りから項垂れてしまった。

……やはりそうかな、コレは。

今無理矢理聞き出す事はしない。だが遠くない内に行動しよう。

「すいませんね、また脱線して」

構わない。進めてくれ。

「ただ打ち上げに関しては目処は立ってません。星の世界はそもそもあるのか、ゲート類を無しに行けるのか、物理的に行けるのかも分かりませんから」

それでもクラフトしてきた訳だ。

「はい。楽しいですから」

うむ。良き笑顔。クラフトの真髄。
それを忘れてはならない。

「迷惑掛けてる事も忘れないで下さいね」

何の話？

クラフターは首を傾げた。リムル達の事なら適当に遇らう。

「都合の悪い事は無視しますね……」

本当に無視出来ない事は対応する。

騎士団連中とか。アイツら襲って来るから。

そういえば団長らしき女性はどうなったのだろう。牛乳をガブ飲みさせたから生きてる筈だが。

あの時は毒実験の被検体にした詫びと礼を兼ねて助けた訳だが、また襲って来るようなら最悪の根を止めねばならない。

「西方聖教会は私達が邪魔でしようからね。攻め込んで来るならやり返して良いと思いますよ」

いつそ此方から出向いて滅ぼしたい。

「ダメですよ。クラフターの力は普通の人達からしたら化け物です。その力を無遠慮に行使してきたから向こうは魔物認定、襲って来る様になった経緯があるんです。我々も悪い部分はあるんですからね」

やっかみじゃないか。

何故、武力でもって荒らしてくるのか。

クラフターなら村人にもいるのに。

カイジンやクロベエもだが、何かしらの面でクラフターである村人は多い。

我々からしたら、それこそ羨ましい。知らないクラフトを見せてくれるから。

だがそれを理由に攻撃した事はない。素直に賞賛し学ぶ姿勢を見せた。向こうも似た行為を見せてくる。

騎士団連中はそれをしない。だから好きになれない。心の器が狭いと云わざるを得ない。

「密入国に建造物不法改造に建築、住居侵入、盗難、傷害事件、無賃飲食、不法占拠、色々やらかしてきた馬鹿が云うと説得力ありますね」

まあそんな事は良い。星の世界を目指すぞ。

「逃げないで下さい……はあ。とにかく、今後とも宜しくお願いしますね」

宜しく頼まれた。

新たな挑戦がまた始まる。ワクワクする。

クラフターは嬉々としてIRPやBB研究に本腰を入れ始める。

解らない事を解る様にし、誰もが追いかけて諦めた様なクラフトを指していくのだった。

?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □

「星の世界？」

連邦議事堂、執務室。

書類に埋もれる人型リムルさんに聞く私。

馬鹿達によるクレームや各国の外交問題に取り組んでるところ悪いけれど、私もやる事があるので。

「星座の事？　ごめん、詳しくないな」

「ああ、いえ……行き方とか、その辺を」

「行き方？　まさか宇宙に行きたいのか？」

「うちゅう？　宇宙という世界なのですか」

宇宙。それが星の世界の名前なの？

「知らないのか。地下にSFを建造している割には、その辺は疎いんだな」

「そんな事よりお願いです。行き方を知っていれば教えて下さい！」

「……そんなに行きたいの？」

「はい！　私はそこでの光景を知りたい！」

顔を突き出す様に言い放つ。

リムルさんは気迫されて「お、おう」とたじろいでしまった。

「あ、すみません……」

「大丈夫。でも通訳ちゃんの夢は壮大だなあ」

「やっぱ大変なんですか？」

「簡単じゃない筈だ。俺は詳しくないが……というか、この世界にも宇宙は存在するの？　いや星や月があるんだから、あるよな恐らく……でも俺のいた世界と同じかは分からないし……大賢者、えー

と……」

ブツブツ考え始めるリムルさん。

忙しい中、取り合ってくれて嬉しい。馬鹿達に頭を悩ます日々の

のに優しいなって思う。

「……俺の記憶から宇宙関係の絵とか用意して満足は……しない？」
「しません！」

断言しちゃった。

でもやっぱり、自分で見てみたいから……。

「ファンタジー世界に喧嘩売る1人だったなんて。 通訳ちゃん、お前もか」

「馬鹿達と一緒にしないで下さいよ!」

「いや、だって……ねえ?」

死んだ目で見られ始めた!?

やめてよ、アイツらと私は違うんだから!

強いて言えばクラフターって枠組みだけ!

「言っても聞かないんだろ?」

「いえ、それは……」

「良いよ。 やってみても」

フツ、と笑われた。

許してくれるという事?

そう思っていたらポツリポツリと語られる。

「というか通訳ちゃんがしなくても他の奴がやるでしょ。 それに通訳ちゃんが主導ならアイツらだけに任すよりマシだろうからね……
ははは……」

「ごめんなさい……」

うん。 快くとはならないよね。

「いやいや君が謝る事じゃないさ。苦情が増えるか減るか聞かれたら、減る方が良い訳で。その意味では信頼してるんだよ?」

「あ、ありがとうございます」

「それに乙女の夢を斬り捨てるのは可哀想だからね。俺も出来る範囲で協力するよ」

「ッ! 本当にありがとうございます!」

私は深々と頭を下げた。

たぶん、人生で初めてだったかも。

「今は国営や苦情処理に忙しくてね、直接手を貸せない。代わりにコレを渡そう」

そう言つてにゆるん、とスライムになった体から本が複数出てくる。

体の中、どうなってるんだろ?

「これは俺がいた世界での宇宙の情報だ。といつても俺の記憶からで、一般常識を曖昧にした感じだけどな。役立つか微妙だが今はこれで勘弁してくれ」

「いえ、許可を頂いただけでも大変嬉しいです! ありがとうございます! いました!」

「おう頑張れよ。俺も頑張るから……ふっ……ふふふっ……」

死んだ目をするリムルさんを他所に、本を受け取った私は喜びのままだにジオフロントの自室に直行した。

机上の本を掻き分けてスペースを作ると、直ぐに本を手に取り開く。

それは文字と絵図で構成された星の世界の物語。

「わぁ……！」

きっとこの時の私は目を輝かせていたのだろう。

この大地も夜空に浮かぶ星のひとつに過ぎず、ひとたび重力を振り切り大気層を脱出して振り返れば、美しさと共に理解出来るとう。

星の世界は重力が無い。

空気も無い。気圧もなく温度差も凄まじい。

生身で飛び出せば生きていけぬ世界。

故に過酷な環境下。宇宙服といった特殊なものがないと活動出来ない。

そんな危険な無重力空間は無量大で、星々はこの世界に浮かび輝いている。

だけど、生命が生きていける星は他に無いらしく、可能性がある星もあるかもだけど、ちゃんと調べられていない。

そんな中でも人類は宇宙に進出。

宇宙ステーションなる基地を浮かべたり、月に降り立ったりしたという！

「凄い……なら私達だって、きっと！」

きっと出来る！

そして見るんだ！

彼が憧れたかも知れない、星の世界へ！

129. リムルとネザー

マインクラフターはこの世界において、主に大陸を舞台としてきた。中には未開拓地もありクラフトの余地はまだまだあるものの、陸地に拘らず空中や水中上、果ては宇宙まで手を出そうとしている。最後のはファンタジーに喧嘩売っている案件な気がするが、それはそれとしよう。

そうした寝て起きてクラフトする日々を側で見てきた連邦の村人達も影響を受けた。例えば鍛冶屋のクロベエやカイジンは彼等のクラフトした武具や防具に唸りを上げつつ、負けじと高品質の刀剣や鎧を作っている。それを見せつけられたクラフターも唸りを上げ、競う様に強力なクラフトを続けた。

畜産業や農業に於いては、クラフター側で急速に生産される牛や豚や馬、小麦や野菜類に村人が目を白黒しつつも、対抗する様に酪農や品質を発展させていった。

そうした違いの創造、違う世界を互いに排他的にならず尊重、共有しつつ競い合った結果、より高品質品が出来上がるばかりでなく互いの技術が組み合わさったハイブリッドのクラフトが生まれたりと、好循環が発生。それを求めて多くの人魔が連邦へと商談や観光、勉強の為に訪れる事となる。

また、リムルに協力してクラフターが作った各国への街道が整備されるにつれ、それを利用した商人らにより優れた技術を持つ職人や武器・防具が各地へと流れ各国の販売店やギルドに卸されていき、冒険者達の戦力が強化される運びとなった。

そのお陰で冒険者の死傷率が減少。クラフターがその事実を知ったのは大分後になってからだったが、ものづくりに関して情熱的な彼等は大いに喜んだという。

尤もリムル的には莫大な数値面の利益に喜び、クラフター的には街道や建造物群、クラフト品の利用率増加に喜んでいたりズレが生じていたが。

一方、悪い事もあった。

言わずもがな、クラフターの自由度だ。

連邦内だけなら兎も角、他国への密入国や不法建築は日常茶飯事。コレの所為で各地からクレームが毎日の様に入り続け、リムルは前述の歓喜がパアになる被害を被り続けている。最初の頃こそ何とかしようと思訓を通して説教していたのだが、最近は諦観ムードだ。最早クラフターは止められない、との判断である。

その為「何とかしてくれ」という要望に関しては「本人達に言ってくれ」とか「煮るなり焼くなり好きにして良い」と返答している始末。返信された側は同情、憤慨、相分かったと様々な反応をしたものの、解決の兆しは全くない。

「だってしょうがないじゃないか（諦観）」

「最近は何、書類の山に埋もれていると温かく感じるんだ（錯覚）」

連邦の国主はそう述べた。

言葉が通じずモラルも異なり、武力をもつてもリスポンして舞い戻って来るし、多くは悪意がない分、余計にタチが悪い。

ただ、そんな犯罪行為を働いているかの様な彼等にも良い事はある。

国の手が及ばない様な小さな集落に対しても無償で改修工事や防衛設備を施しており、そういった所からは感謝の言葉が送られている。クレームの山に埋もれ全然目立たないのだが……。

そんな日々なものだから、リムル的にはこの世界に蔓延る悪意や裏事情よりクラフターとの濃い関係に毒されてしまっていた。

それでも負けまいと理解し努力をしている。自我を保つ為もあるが、ワルプルギスでクレイマンに勝つたのも、そういう側面からきている。

「そっういやアイツらの世界ってどんな所だ？」

だからだろう。

リムルがマイクラ世界に興味を持ったのは必然だったのかも知れない。

?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □

「で、来た訳なんだけど」

リムルがネザーにいるものだから、クラフターはギョツとした。今までこんな事はなかったから驚愕するばかりである。

『警告。ゲートから離れるほど適応した魔素が急激に低下していきます。これ以上離れるのは推奨出来ません』
「お前らの世界にも魔物はいると聞いていたが、俺達とは違うという事か」

とはいえ、自由に動き回ってこない。ゲートの周囲のみを確認している辺り、軽い視察止まりなのだろう。

「しかし通訳ちゃんに地獄みたいな所だと言われたけど……確かに全体的な赤さは想像している地獄に似ているな。どこからか不気味な鳴き声も聞こえるし。でもさ……快適な街作っちゃってね？
いや想像してただけだね？」

周囲の建造物を見てゴニョゴニョしている。

建造物の評価をしているのか。なら嬉しい。

ゲートから出た瞬間は黒曜石のセーフハウス内に出る所為で色彩が悪いものの、外に出れば様々な建築様式を取り入れたセーフハウスが広がる街の光景が飛び込む。

それぞれがガストからの空襲に備えて連絡通路や橋で繋がれてお

り、気が付けば集団居住地が出来ていた。

特に最近は人口と共に建造物が増えた。ネザライト収集の為である。ダイヤを越えた装備を作れる素材だ。エンチャントと合わせればミリムにも勝てるかも知れない。今まで負荷分散の事を考えてきたが、一転攻勢のチャンスに群がった形だった。

「こことは別に青空広がる世界があるらしいな。そこが元々の世界だとも聞いているが、今のままじゃそこまで辿りつけそうにない。今はこの辺をウロチョロするのが限界だからな」

ネザライトの剣を欲する者は多くいる。

クラフターなのだから、真新しいモノに手を出すのは当然の行為だ。

故に取り合い競争が加速していて、辛辣同志の要請に答えられるか微妙だ。それ以前に荒らしに利用される心配も危惧している。

「——世界から世界を渡り歩いて、その場その場で色々工夫して開拓して建築して。やっぱお前らスゲエよ。宇宙にだって行けるかもな……ただ」

リムルを見た。

同じ心配をしてか険しい表情だった。

「あの子を悲しませる事はするなよ」

当然だ。クラフターは領いた。

荒らし許さん慈悲は無い。

もしネザライトの剣を装備した荒らしが出てきたその時は、目には目を。毒で毒を制する様に此方もネザライトで応酬する。

もしくは集団で困い込む。マルチだ。味方はいる。その中には当然、リムルも含まれる。

「俺も協力出来る事はするさ。 お前らの力は悪い事ばかりじゃないからな」

ハアンと鳴いてリムルはゲートに消えた。

次はゆっくり観光して欲しいと思う。

さてもネザーの需要は高まる一方。 ネザライトもそうだが、辛辣同志が星の世界を目指す話も大変面白い。

どうやって行くつもりか知らないが、ひよつとしたらネザライトがヒントになるやも知れない。

そう思ったら俄然やる気が出てきた。 クラフターはツルハシとスコップを振り回す。

ひとつの素材から生まれるのは剣や防具ばかりじゃない。 ボートやトロツコのような乗物だってそうだ。

ネザライトが果たして乗物の類に使えるかは分からないが、分からないからこそ研究の甲斐があるというものだ。

そうだ。 研究といえば。

きな臭い話もある。 湖底研究所だ。

辛辣同志がかつて所属していたらしいのだが……荒らしの温床の疑いがあるとかで、向こうの同志が調査を開始した。

此方はネザライトひゃっほい中毒で応援するしかない。 だがもし前回の様な非常事態になるならば参戦もやぶさかではない。

同志から出た錆は身から出た錆。

——その時、リムルは助けてくれるだろうか。

謀略の薫り

130. 現状と進展

「——というのが現状です」

辛辣同志が何かを垂れてる傍ら、創造主は格納庫でIRPとBBを
弄り回す。

進展はある分、やっつけて楽しい。これだから人生は辞められな
い。クラフト万歳。

「聞きなさいよ馬鹿達」

聞く訳ないだろ！

政治より創造が楽しい！

それに報告書として纏めてくれるなら、それで良い。後で読む。

「どうせ読まないでしょ」

「ご名答。把握してどうなる。」

「書く意味がないじゃないですか。だから口頭で簡単に説明してあ
げたのに……」

暇な時に見聞きする。

今は目の前だ。宇宙に行きたいだろ？

なら辛辣も集中しろ。皆で協力すれば早く叶う。

「そうですが、国政にも興味持って下さい。誰かに半殺しにされて
も知りませんよ」

「やられたらやり返す。 倍返しだ。
誰であろうが、お見舞いしていくぞう。
西方聖教会か？ あの子騎士団長か？
それとも内戦してるファルムスか？
欺瞞の国か？ 東の帝国か？
やるぞお我々は。
個人も組織も敵対するなら潰すだけよ！」

「シズさんにチクリます」

よし！ もう一度聞こうじゃないか！

「……はあ。 なんでその素直さを初めから出さないのですか」

相手が悪い。 潰される。

恐怖とは備えなき時、不意に襲われ根付くもの。

「シズさんとは面識がありませんから、どれくらい恐ろしいのかわかりませんが。 馬鹿達がビビるくらいには強いんですね」

強い。 頷く他なし。

ハクロウやヒナタといった剣の腕とは別の怖さだ。 謎の気迫に襲われる。 シュナもそういう気迫を出してくる事があるのだが、かの環境下だと本気で剣や弓矢を握れないのだ。
君もいつか会う時が来るかも知れん。 気をつけろ。 白い悪魔だ。 リムルも悪食の意味で水色の悪魔だが。

「それ、本人に会ったら言っときますね」

無慈悲。

此処にも悪魔がいた。 緑の悪魔だ。 匠め。

「そうなりたくなかったら覚えといて下さい。 もう一度言いますから……今一番大きな問題はファルムスです」

早々に創造主は首を傾げる。

云う程の問題があったかと。

ファルムスの荒らし戦力は殆ど片付けた。 残存戦力は無い。

故に暫くは攻めて来ないと見ている。

なんなら現地で責任の押し付け合いからか、戦力の回復や増強に努めず荒らし同士で潰し合いを始める始末。 創造に相対する破壊のみの片手落ちの下衆。 反省する気配を全く見せない。

救いが無いね。 同情の余地が無い。 別に勝手にすればとも思いうが。 荒らしは消えてくれ。 さすれば土地が手に入る。 それのナニが問題か。

「馬鹿達の視点ならソレで済むのですが、国としての問題があります」

それで滅ぶなら滅んでしまえ。

荒らしに慈悲は無い。

「ヨウムさん達の事を考えてあげて下さいよ。 上が腐つていても祖国なんですよ」

帰属意識なんか知らない。

固執するなら再建すれば良い。 我々がそうしてきた様に。

「そうするんです。 前にも言ったでしょうが」

そんな気がする。 今や昔。

「でリムルさんは、悪魔に指示してわざと内戦が起きる様に仕向けました。それをヨウムさん達に鎮圧して貰い新国王として統治して貰うという流れですよ」

面倒だ。大抵は政治的な絡みだと理解する。

「今は新国王の貴族派と旧国王で別れて内戦中です。そもそもその残存戦力が馬鹿達に派手にやられた所為で見える影も無いのですが、一応組織的な戦闘は発生している形です」

そうか。だが内戦理由はなんだ？

内戦そのものはリムル達の思惑があるにしても、飽くまでも連中の意思であって連邦は悪くないと主張出来る様になっている筈だが。

「旧国王は戦争を起こした責任を取り、弟に王位を譲ったんです。ですが戦争の責任……賠償は無くなりません。その責任を旧国王に押し付けるべく兵を起こしたんです」

戦時、かなりの数を爆殺したのだから。

愚かである。微力でも復興に回せないのか。

「出来ればそうするべきなのでしょうが、何事も理想通りにはいきませんよ。創造の世界もそうでしょう？」

そうだな。だが上手いかぬからと更に荒れるのはどうかと思う。

「皆、貴方達みたいに強くないんです。かくいう私も……」

……………。

続けてくれ。

「貴族派は属国化反対、多額の賠償金も払いたくないと新国王に加勢しました。一方で旧国王には最早マトモな兵力がありません」

我儘な連中だ。

やはり荒らしは荒らしなのだ。

「そうですね。だからこそその内戦。ここで旧国王側に着いたヨウム達が勝てば、腐敗した貴族派を消毒出来ます。そうしてようやく新たな国を立ち上げられるというものです」

そうか。ヨウム頑張れ。

現地の同志も幫助するだろう。

政治はやりたい者に任す。我々はクラフトだ。

「今回はヨウム自らが勝利を掴まねば意味がないのです。王になる為にも。なので連邦が本格的に支援する事はありません。馬鹿はともかく」

やりたいからやる。それだけだ。

「羨ましい限りです」

君もな。

「で、ファルムスの計画は今そんな具合に進行中。次に獣王国の難民ですが、馬鹿達のお陰で瞬時に祖国が再建されたので順次帰還しています。一部は技術習得等の為に残留しました。傀儡軍の捕虜は土木や設備の人員として組み込まれました……リムルさん、優しいですよね」

だな。我々なら皆殺しにしている。
勿論、叛意を見せたら殺す腹。

「その優しさが実ったのか、村人のクラフトも大きく進みました」

おお！ それだけ聞きたかった!!

「道や建造物については既に存じてる馬鹿もいるでしょう。一大プロジェクトである国家事業の街道整備の面では魔導王朝サリオンまでの道を整備中。傍に宿屋を構えています。飯屋も作られました。ラーメンや餃子という食べ物が新メニューとして出され始めてますが、既に食べましたか？」

食べた。美味かった。

麺というジャンルの奥深さ、餃子というハラワタを食い破り味わう肉汁は口内に幸せと共に広がり最高だ。

肉をパンで上下に挟むハンバーガーも捨て難い。携行食としても機能する。

それらも既にレシピを知り得た。味は負けず劣らずだが慢心しない。既に料理の世界に魅了された同志が村人のより良き飯を指して日々クラフトしている。

「そ、そうですか……あの、それはココでも食べれますか？」

なんだ。辛辣同志は未経験か。

連邦の飯屋でも出ていた筈だ。村人製が食べたければ其方へ行くが良い。

我々で良いなら、生活区画の厨房に行くが良い。

レシピもそこで知れる。同志は試作品だとして納得してないが、それでも十分に美味かった。

「分かりました。時間を見て食べようと思います」

うむ。 そうすると良い。

あの美味さを共有出来る仲間が増えるのは良い事だ。そして新たなクラフトへの糸口にもなるだろう。

「後は街道に全自動魔法発動機の試作品が埋め込まれました」

ひよつとしてレコードみたいなヤツ？

そんな名前だったのか。 ふと昔、全自動卵割機なるものを作った同志を思う。 アレは単にクロック回路のディスプレイに卵を大量に入れただけの代物だったが。

「ナニしてんですか、ホント馬鹿ですね」

馬鹿馬鹿煩い。

ナニに役立つか分からないのも楽しいんだよ。

「まあ馬鹿話は置いとくとして……アレは有用ですよ。魔素を使って色々出来る装置だそうです。 しかも魔素集積装置が組み込まれており、魔都周辺に限ればエネルギーには事欠かないそうで。 それにこの装置のお陰で魔素濃度を下げられます。 高濃度の魔素は人間は勿論、魔物にも毒ですからね。 リムルさんは大変喜んでました」

うむと頷く。

アレをシルクタッチで掘り返してみたものの、ジュークボックスに入らないからオカシイと思っただのだ。

「……で、その装置は捨てたので？」

捨てるなんてとんでもない！

アレはIRPに有用かも知れないからな。

今はインベントリに入ってる。後で解析に回す。

「……ベスターさんに報告して補填して貰おう」

ひとつくらいで細かいな。

大丈夫だつて安心しろよ。

「国を揺るがす大惨事を鬼リピする人達が云うと重みが違いますね」

褒めるなよ。

「褒めてないです……で、建築絡みだと他には……ミリムちゃんの住む城をジュラの大森林の南方に造る事になりました。ミリムちゃん領土が拡大した事を受けて、リムルさんが遷都を提案したところ頼まれたそうです」

それは面白いな。

正直、荒らしの為に城なんて造るなよと云いたいが、これを機に大人しくなれば良いと思う。

暇があれば手伝おう。ついでにTNTや様々なトラップを仕込んでやる。ジオフロントを滅茶苦茶にした恨みだ。今度はミリムのを滅茶苦茶にしてやるう。

「ゲルドさん泣きますからヤメたげて下さい」

それはどうか？

あのピンキーストームには破壊される哀しみを知って貰いたいでな。

謂わば教育だよ。荒らしじゃないから。

「どんだけ過去を根に持つんですか。前を向きましようよ、もう」

皆、過去を大なり小なり引き摺っている。

そうだろうか？

「私は……私のは違いますから」

そうだな。悪い事を言わせたな。すまない。

他に何かあるか？

「後は……まあ、あまり言いたくないんで」

騎士団長、ヒナタが此方に向かつてる件？

「えっ!? な、なんで」

知っちゃったもんねえええ!!

仕方ないね!

だって大陸中に同志がいるんだもん!

創造主は愉快的な腰振りダンスと共に首と腕を激しく動かす!

もうどつちが上か下か分からない。

「それもそうでしたね……可能性はありました。でも知らずに済めば平穩だった筈……」

それは違うぞ。

予め、あのク●アマビツ●団が攻めて来るのを知れたお陰で道中で待ち伏せできる。

勘違いする事なかれ。

向こうが仕掛けて来た。故に殺す。道理だろ？
今はブルムンド辺りかな。フフフ……。

「道理じゃないでしょ!？」 ヒナタさんは最初こそ単騎で向かってました！ この意味するところは戦争しに来る訳じゃなく対話をしに来た可能性です！」

そうなら襲って来ないな。

ならば遅れて出立してきた連中……特にイングラシアから100騎の人馬が出陣した方はどう云う事かな？

「そ、それは……」

或いは、と。

創造主はコックピットに乗り込み最終調整。修復したマリオネットハートを解析した事で出来る様になった電気信号通信は……今回は役に立たないか。

全自動魔法発動機の解析は後だ。時間が惜しい。

「ちよつ、ちよつとIRPで迎撃を!？」

保険だよ。飽くまでな。

それに……ヒナタの意思と周囲が関係ないならば……ヒナタを守る事に繋がるだろ。

「それって」

変だろ？ 我ながらもそう思っている。

だがあの女は、ヒナタはシズの大切な教え子だ。

それに、実験協力してくれた恩もある。

「実験の件は協力してないでしょ」

操縦桿を握り、ペダルを踏み込む。
応じてやるさ。 臨機応変に。

131. ラーメン屋とヒナタ

「この町は発展しましたね」

「そうね」

場はブルムンド王国。

初めて来た時から綻びを修正し続けた結果、この国は目に見えて綺麗になった。

今や土や砂利が混ざる乱雑な道はなく、全て平坦な舗装路だ。

比較的低コストの石煉瓦が主であるが、歩行者に逼迫感を味わわせない為に適度に草ブロックや植木といった緑を建物沿いに設置。

一方、建物は分別化の為に外壁は赤煉瓦。内装は床含め木材多めにし、屋根は丸石階段やハーフを被せている。松明も忘れない。

また、照明は一部街灯風に木のフェンスを縦に柱状に立たせ、左右にぶら下げる様にジャック・オ・ランタンやグロウストーンを使用している。夜に映える。

「冒険者の武器防具もやたら質の良いのが出回ってやがる」

「テンペストと例の人間達の影響ですかね？」

「報告にある松明があるからな……」

道行く村人達も何処か堅牢な装備に変化。

これはクラフターがモノを投げ渡した訳ではなく、この世界特有の自己発展である。

裏方を見ると同志の影響はあるのだろう。

だが自らの意志で最終決定を下す村人達だ。そうして変わる世界は新鮮で気持ちが良い。

創造主は成長を見せ続ける光景に笑顔満開だ。

嬉しくなったら腹減った。店に並ぼっ♪

クラフターはこの街の食事処、その行列の最後尾に行儀良く並ぶ。

郷に入ったら郷に従えという奴だ。初めの頃、割り込んだらゾンビピッグマンの群れの如く袋叩きにされたものだ。

食べ物の恨みは恐ろしいのである。

まあ、過ぎた事よりラーメン食べたい。

今日はいつもに増して美味いぞ、きつと。

「魔王と取引して発展するなんて、敬虔なルミナス教徒ならば忌避感がある筈ですが、ヒナタ様はどう思われ——ヒナタ様!？」

「ちよ、ちよつと何並んでんですか!？」

後続が煩い。

新参か？ この場にリムルやシズがいたら説教垂れるところだ。だが振り返ったら負けかなと思ってる。

隙を持て余して前後の村人に取引を持ち掛ける真似はしない。

失敗率が高い。物珍しい物でもだ。ラーメンとは別に開発された、たこ焼きなるモノを渡そうとしたら怒られたし。

アレだ。目当ての食事の前に別のモノを出してはならないのかも知れないと考えている。

「食事よ。 気になる のぼりを見つけたから」

「え？ ら……らーめん……って何？」

背後の村人が旗を見てる様だ。

分かる。あの文字を旗で再現するのは難しい。

そもそも未だ解読出来ない。アレでラーメンと書いてあるそう
だ。 辛辣同志なら読めるだろうか。

とりま、今は食事だ。

テイクアウトが出来る代物じゃないのか、今は並び進む他ない。

料理研究熱心な同志がラーメンを再現したらしいが、まだまだ村人クオリティを超えられず苦悶していると云う。

自信がついたモノをクラフト出来たら、是非食べ比べをしたいもの

だ。

「いらっしやいませー！ あっ！ 今日もありがとうございませっ！」

やがて番が回る……ッ！

ここからは手順を踏み外してはならないッ！

先ず案内村人に会釈を返す……ッ！

直ぐに木製テーブル席に案内される……ッ！

右手と空腹が溢れる微笑で震える……ッ！

それをクラフター、耐える……ッ！

引き続き至福の手順に従い本と羽ペンモドキに手に取り、表の旗と同じらしき文字を指さしていく……ッ！

「はいっ！ ラーメン 魚介 アツサリと餃子とライスですね！

かしこまりました！」

そうして村人が下がれば完了。

成功……ッ！ 計画通り……ッ！

後は出された茶を飲みつつ待つのみだ。

未だ歓喜に手が震える。 くっ。 飲み難い。

「——ご注文はお決まりですか？」

「ラーメンを とんこつコツテリで頼む。 あと餃子とライスを追加で」

「かしこまりました！」

「他の方はどうしましょう？」

「あ、じゃあ同じものを……」

「わ、私も……」

「うむ」

「自分もそれで」

ハアンの響きから後続の頼んだラーメンの味は己とは違うのが分かる。

種類のあるラーメンだが、後続が頼んだのは動物系だ。此方は魚系である。

どちらが良いかは個人の好みだが、総じて美味しい。嫌いなものは今のところない。寧ろみんな好き。

「お待ちせしましたー！」

だからこそというべきか、出されたラーメンの湯気に当たりながらつらつら思う。

同志の開発しているラーメンのレベルが気になるところだ。

これを越えるのは至難の業である。それでもやると決めたらやるのがクラフターだ。きつと最高のラーメンをクラフトする。その時が楽しみだ。

冷め伸びる前に手をつける。

うん。美味しい！

箸には未だ慣れないものの、この場にシズはいない。ならばいつも通りに皿……どんぶりを持ち上げかつくらう。いやスープごと啜る。

ラーメンと共に6個の餃子も豪快に食っていく。

この贅沢な刹那の食事の為だけに満腹値を調整したといつても過言ではない。空腹とは最高のスパイスだ。元より美味しいモノに試せば尚更に。

やがてこの感動の旋風は嵐となり世を支配するに違いない。いや。既にそうかも知れない。少なくとも我々は虜だ。クラフトを試みる以上に。

「お待ちせしましたー！」

後続も注文品が来たらしい。スニークで見やる。

5人いるが皆して同じモノだ。

初めてで勝手が分からずセンターに座る黒髪村人——シズかと思いがヨツとしたが別人——に合わせたんだろう。

その証拠に黒髪は落ち着いており、他の者は困惑顔だ。箸の使い方も分からない様子。

「ん”っ」

猫舌という奴らしいが。

我々には分からないが、面白い反応だ。

「まさか毒ですか!?!」

「ヒナタ様!」

ヒナタ?

聞き間違いだろうか。あのヒナタ?

リムルと同志を襲撃した女騎士団長か?

いや、あのアマには猛毒の恐怖を味わわせた筈である。いやまさかそんな、ねえ?

「静かに。黙って食べなさい」

同志よ、応答せよ。

ヒナタの情報を超越せ。

こちらら状況不明だ。

「向こうの人じゃないとこれは作れないでしょうね」

道路と建物を作ってる場合じゃねえ。

早く! 同志! 我々は逃げる支度をする!

料金に金のインゴットを置いておく。

あと、挨拶出来ない詫びを込めてエメラルドも置いておこう。

……次回出禁にならないと良いなあ。

「あ、旨っ」

「熱っ、えっ、なんだこれ!? 旨っ、味が複雑過ぎる!」

「えっ嘘! こんな食べ物があったなんて」

「ごっちの”ぎようぎ”も凄いぞ」

「お客さん達、お目が高いですね。実はラーメンも餃子も先週から売り出したばかりなんですよ。ここら一帯を仕切るミヨルマイル様がね、魔王様から直接商品を卸してもらったんですって!」

同志と念話開始。

——駄目だ。貴様は敵から逃げようとしている。敵前逃亡

は刺殺される。

いやいや。此方は建材と護身用の石剣だよ?

無理。不可能。そもそも己は戦闘苦手だよ。

——無理は嘘吐きの言葉だ!

ええ……。

——君がやらねばIRPによりヒナタごとイングラシア王国を吹き飛ばす! 座標送れ。どうぞ。

そんな殺生な。

「つまり魔物との取引の結果、これが新商品に……」

「この悪魔的な旨さが……教義に……でもヒナタ様も食ってるし」

——若しくはヒナタの念写送れ。

……はい。

——なんだこれは。ラーメン食ってるのか。

はい。気付かれてないのか攻撃してこないのか、今のうちに逃げようかと。

——よし。背後に回り込んで斬り捨てろ。今なら殺れる！
ジャストアタックかますんだよ！

嫌です。逃げます。これが最期の晩餐になりたくないです。

——馬鹿云うな。リスポーンしろ。

「いやいや、これは調査になりますし、それは一旦忘れて食べましょうよ」

「……フリッツ。それは最後に食べようと残しておいた、私の獲物だ」

「目がマジだ……！」

餃子を取り合ってる。6個ずつ食べれば良いモノを。食とは時に醜い争いを生む。改めて奥深い世界だ。

シズが見たら怒りそうな場面だが、今がチャンスだ。逃げるが勝ち。

「それと」

クラフターは食い逃げの如く、脱兎の如く風となり出入口へ全力疾走。

が、そこに箸の片割れが矢の如く視線をよぎる。

「あなたに用がある。食べ終わるまで待っていて貰うわよ」

振り返る。超怖い顔をしたヒナタがいた。

睨んでる。駄目だ。殺る目だ。

無理に動いたら殺される……ッ！

「えっ!? あ、あの者は?」

「例の人間の1人ね。見た目を誤魔化してるけど雰囲気は変わらない……郊外でまあ良くもヤツてくれたわね。私の身体に何をした

の知らないけど……少しくらいお礼をさせて貰えない？」

同志よ。 救援を要請する。 砲撃以外で頼む。

ラーメン屋はお気に入りなんだ……ツ！

132. 配慮と妥協

「はあ!? ヒナタさんに捕まった!？」

辛辣同志も念話を聞いていたから騒ぎ立てた。

気持ちは分かるが仕方ない。

現場を役立たずと罵ってはならない。そもそも拿捕されたのは戦闘を前提としていない建築組の同志だ。無理を云ったのは此方である。大切なのは次にどうするか。

「まさかブルムンドと仲間ごとヒナタさん達を吹き飛ばそうなんて考えてませんよね？」

考えたが実行しない。

現地の建築物を無碍には出来ない。

だからと毒で汚染もしない。IRPによる砲撃は諦める。現

地にも懇願されたし。

そう云いつつ操縦桿から手を離す。

ブルムンドから出国したタイミングでも遅くはあるまい。仕留め斬れなくとも第2第3の防衛線を敷けば良い。同志を見捨てるにしてもだ。

「さすが。無限残機ならではの戦法で」

だから？

創造主は素の表情で辛辣に返す。

村人達の生死の概念と同列に扱わない事だ。

いつまで囚われているつもりだ、君は。

「……ッ、私は違うんですよ」

知ってる。

君を最前線に投げるつもりはない。

そして村人に理解を示さない訳でもない。砲撃をしないのは故にでもある。

これでも配慮しているのだ。いつまでも短絡的とは云わせない。時と共に進む創造の階段は天井を知らないが、全く振り返らず異世界に居残り続ける創造主ではない。

「だったらもつと勉強して下さいね。リムルさんがクレーム処理をしなくて済む様に」

あのスライムなら平気だ。信頼している。
勿論、君の事も。

「……そういうの、ズルいと思います」

そうか。彼氏じゃないと不満足か。

それは悪うございましたね。

「揶揄わないで下さい!?!」

いつものお返しだ。我等が娘よ。家族の概念も詳細に理解していないが。

「……娘、ですか……私も家族の事は分らないです。親と子、番外なら」創造主」でしょうか」

知らぬ。リムルにでも聞け。

だがもし想像の通りなら、不幸を与えた酷い馬鹿親である事をどうか許して欲しい。

「別に。生まれさせられた側としては……いえ。私だけが幸せになつたのなら、なつてしまったのなら……許しを乞うのは私なのかなつて」

君を置いて消失した彼も罪人かもな。

舞い戻つて来たら挨拶も兼ねて1発殴るわ。

なんにせよ、連邦郊外で語つていても仕方ない。

「そうですね。考えはあるのですか？」

ヒナタに接触する。

我は暇な同志と共に向かう。接触予想地点はブルムンドと連邦を繋ぐ街道になるだろう。

人質（笑）をわざわざ作るし話し合いで済むなら良いが、万が一もある。

連邦首都圏、人口密集地で戦闘になりたくない。

IRPの操縦を代わってくれ。後方支援は任す。創造主の君なら信頼出来る。砲撃するか直接来るか、その他一切は一任する。だがヒナタとは別働隊がいる事も念頭に入れて行動してくれ。

「分かりました。通信水晶でリムルさんにも報告します」

既に知っているだろうが、一応頼む。

裏で暗躍している「ナニか」は分からないだろうが。我々も掴めていないし。

何にせよ出撃だ。

加減・牽制用の木剣と決戦仕様のネザライトの剣を携え、創造主は連邦を出発したのであった。

?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □ ?? □

「――口を割りませんね」

砲撃を中止してくれたとはいえ、大ピンチには変わらない。

今や薄暗い路地裏で囲まれ拷問を受けている始末。

同志よ。早く助けて。言葉分らないし。

ハアンと鳴きながらビシバシ攻撃される恐怖に耐えるしかない。

石剣で反撃したところで往なされ殺されるだけだろう。

「ウオツしか言わないぞ」

「うむ……もしや本当に話せないのか？」

「どうしますヒナタ様」

「……期待なんてしてなかったけど。あまり時間を割く訳にはいかない、予定通りテンペストに向かう」

引き上げてくれるらしい。

良かった。助かりそうだ。クラフターは腰を曲げて会釈する。

いくらリスポーン出来るからと損失は出る。時間は勿論、経験値

やインベントリの物。

物は素早く回収すれば取り戻せるが、それだって時間が勿体ない訳で。

取り敢えず松明を刺しておく。ここの湧き潰しを忘れていた。

「何処からともなく松明を!？」

「放って置きなさい。危害を加えてくる様なら戦うつもりだったけど」

「大丈夫でしょうか？」

「その気ならとづくに仕掛けてるわ」

自然回復と引き換えに小腹が空くから、手持ちのベイクトポテトを

食べた。栽培効率と腹持ちを考えると優秀な食料故、携帯食はコレと大体決めている。味を気にする同志はおにぎりやらを食すらしい。

「太々しい奴だ」

「挑発に乗らないの。行くわよ」

おとといきやがれ。

腕を振りながら背中を睨み付ける創造主。

危うくブルムンドが荒れるところだった。

クラフター故、気にするのはそこである。政治や戦闘は好きな同志に任せたい。

連邦の同志がヒナタと接触するべく移動を開始したらしいが、知った事ではない。

創造主は一枚岩ではない。

個々に様々な嗜好がある。だから同志や村人と摩擦を生む事もある。

だが特段直そうと思わない。

他者に妥協していけば、好きな事を好きだと言えない傀儡の人生になる。

なら批難されるくらいが丁度良い。

クラフターを辞めるくらいならば。

水の底。

133. くらふと できて し あ わ せ 。

とある湖の底にある研究施設。

光届かぬ深層に建造された此処では、表向きは水中関連の創造をひっそりと研究する場である。

本音、裏では問題視される創造をしていた。

それ故か閉鎖的で、外で活躍する創造主が連絡しても碌な返答をしない。

それでも調査の為に無理に潜入したから、当然セキュリティの術中に嵌った訳だ。

クラフトはじき終わる。今にも凄いぞ。あばよ（ナニカサレタヨウダ）

創造なら明日終了したよ

速報か偉いじゃないか

ハロー！　そしてグッドバイ！

解放的で閉鎖的な発言が脳裏に木霊する。

ホムンクルス。美しい3人。だが以降失敗した。

血肉の整列。　骨の泡立ち

絢爛3本

晴れのち曇った

ある種の方言だ。　正解は難しい。

君は溺れ始める。　頭を閉じている事だ。

実験先は良い所。　摩天楼群。　スライムが主。

宛先は晴れ

ステイツク神殿群
粘体ルール

敢えて求めるなら、架橋を描くこと。
ただし妄想に。

動力源が無くて実験停滞中。水底のIRP。
心臓無く鳴く水底色彩の底辺竜

結果は残念な温床の他なし。

暇した同志達が本腰を入れ調査を開始している要因である。

数少ない人員と物流、過去の目撃情報を照らし合わせた。時間経過の末は曖昧な観察と生暖かい口だったが、尻尾の血流を思い知るが良いと罵った。

今更ながら。

新着の劣化

大まかな座標及び侵入経路。

先の大戦による大量に発生した腐肉、生き延びた僅かな荒らし、その一部の搬入形跡。

辛辣同志が此処で”クラフト”された。

クラフト方法。材料不明。

焚書処分の可能性大。

情報共有出来ない私の異常性。

ありふれた悲劇。

この世に見慣れた阿鼻叫喚

これ以上は推理するしかない。

云々唸り、やがて予想を立てた。

秩序ある魑魅魍魎の為だ。

勿論、想像の範疇を越えないが、恐らく水色に周知されては困る創造をやっている。

不穩。

渴いた水に打ち付け始めた砂の雨

さあ今こそ凱旋だ。

垂れ流される日々に別れを告げよ。

くらふと できて し あ わ せ 。

??□??□??□??□??□??□??□??□??

「洗脳でもされたんですか？」

湖底研究所から回収した同志が支離滅裂な事を叫び狂乱し始めたから、我々は困惑した。

未知の状態異常だ。この世界特有か、或いは水底連中の仕業か。

何にせよ牛乳を強制摂取させる。牛の乳から直接飲ませてやりたいくらいには早急性を感じている。

「なんでまた研究所に」

強制立ち入り調査だ。

狂乱同志を取り押さえつつ辛辣同志に答える。

あの施設は荒らしの温床に違いない。この調査員で更なる確証を得た。

「深入りしない方が良いでしょう」

牛乳を飲ませつつ首を振った。

我々は真実を知りたいだけだ。　そうでなし、放置すれば危険極まりない。　創造主が全て此奴の如く発狂する事態もあり得る。

どの様な手段を用いたかは知らないが。

「考え過ぎです。　それに……ある意味みんな発狂してるでしょ。　側から見たら、クラフターは皆ヤバイ連中ですし」

同志を締め上げ、拳で殴りつつ対応した。

非理性的な認識が拡大する事を危惧している。

それか我々が此奴みたいになって欲しいのか？

「どつちも嫌です」

なら片方の可能性は潰れた方が良いでしょう。

落ち着いた同志を土で封印しつつ述べた。

それと、とクラフター。

通訳者をクラフトするのが当然とは思わない。

同意見の同志も少なくない。

倫理観はそれぞれだし、趣味趣向もそれぞれだ。

否定しない。　だが駄目なモノは駄目だ。

荒らし帮助なら尚更に。　少なくとも調査員は被害に遭った。

……君は姉弟が増えた方が嬉しいか？

「勝手に生まれさせられた挙句、無責任に殺されたり拉致されるんですよ？　　良い訳ないでしょ」

そういう事だ。

若しくはゴーレムの如く荒らしを量産されても困るのだ。 人造人間が悪ではないがね。

「悪じやなきやなんなのです」

右も左もわからないクラフターが、荒らし教育を受けて世に放たれるのが悪だ。

殺害や破壊、拉致が当然正しいかの様に振る舞われては困るのだ。リムル達だけじゃない。 我々もだ。 一線を超えたら取り返しがつかない。

「もうやってる奴はいるでしょ」

国を改修しても吹き飛ばした事はない。

既存の建物が粗末でなければ保全してきた。

村人達と取引もした。

松明で照度を確保してあげた。

街道を整備して交通の便を良くした。

地下鉄も通した。

それら創造物をペアにされる危険性があるならば、連中を野放しに出来ないのだよ。

「その前に頭がペアなんですよ!? 全部馬鹿達が勝手にしたもので

しよ! 殆ど村人の都合は無視してるし!」

クラフトしか勝たん。

「犯罪に加担!? 何度怒れば気が済むんですか!? 自覚して!」

煩い。 村人の善悪も千差万別だろ。

我々の基準と異なるだけだ。

「それが駄目だっつってんでしょーが！」

ウオツ。

良いパンチだ。だが考えは変わらない。

「……どうするんです」

リムルに勘付かれる前に研究所は始末する。

水中爆撃を敢行した後突入。表層を制圧しつつ深部を目指す。奪える技術は奪取しつつ、最後は爆破解体。

リスポーンした筋金入りの荒らし共は黒曜石に封印しなければ。IRPは基本無し。連邦に勘付かれるのを防ぐ。

「どっちが荒らしか分かりませんね」

侵攻プランは立案中だ。暫し待機せよ。

「……どこまでも勝手です」

それが我々だ。クラフターだ。

やりたいからやるのだ。

だがそれ以上に同志を……。

辛辣同志を苦しませる元凶が存在しているのは度し難いのである。

134. 銃と腐った肉

クラフター戦。

それは同格能力者との鏖迫り合い。

決め手は数より機転、創造力と立ち回りの違いとなる。

——不倶戴天殲滅！

——突撃！ 施設を制圧だ！

——奪える技術は奪え！

——ヒヤツハー！

——汚物は消毒DA！

そして此处、湖底に沈む研究所内外で勃発。

不穏だとして荒らし認定された湖底研究所は今、クラフター同士の戦場と化した。

先ず陽動組が研究所の水面にボートで接近。 注意を逸らしている間に工作組が水中用ポーションと透明化ポーションを駆使、外壁に接近。 砂や砂利を混ぜて水中でも地形破壊を引き起こすTNTを即席で作ると、壁を爆破。 大量の水と共に攻略組が施設内に雪崩れ込む。 そのまま抜剣して剣劇を開始、戦いの火蓋が切って落とされた。

攻略組は電撃的に中枢部を目指す。 水中神殿と異なり壁は適当な速度で破壊出来るから容赦なく破壊し最短ルートを開拓。 問題は相手がガーディアンではなく同じクラフターである事。 行動パターンが複雑なのだ。

——敵襲！ 応戦しろ！

——各セクター対応急げ！

だが相手とて腐ってもクラフター。

ダイヤ装備でもって応戦。

防衛設備の砂利シャッターやピストンを起動し侵入者の行動を阻害。迎撃用ディスプレイペンスーを作動させ、ファイヤーチャーージや毒矢が放たれる。

交渉なんてものはとつくに決裂している。単純に水に流す事も出来ない以上、互いに潰し合う他ない。

——子供騙しだ！

——想定済！

——塵芥！

それを剣ガードや盾、土壁で防ぐ。隙を見てTNTを火打ち石や火矢で着火、設備を吹き飛ばす。

剣で荒らしを斬り捨て、固まる荒らしにはスプラッシュポーションで纏めて倒し、突貫する相手に容赦なく溶岩バケツをぶっかけ足を止め弓矢でトドメ。相手もそこに奥へ奥へと突き進む。

連中のリスポーン地点は不明だが、後方支援組が一応初期スポーン地点の洞窟を抑えている。見つけ次第黒曜石に封印する手筈だ。

クラフター達は荒らしを施設共々潰しながら深部へと浸水する様に流れていく。

やがて実態が白日の元に浮かぶ時、果たして創造主は何想う。

??□??□??□??□??□??□??□??□??□

「説明頼む」

場所は湖畔。

そこに突如現れたリムルと辛辣同志に陽動組は狼狽えた。都合の悪い人物がいるのだから当たり前だ。都合

「はい。連中の研究所が湖底にあるのですが、良からぬモノを作ってる疑いがあります。それを今回制圧するつもりです」

バレている。いや当然か。

「そうか。洞窟にアイツらが押しかけてきたとガビルに報告を受けたが……どうやらコレと関係してそうだな」

初期地点の洞窟には村人達がいる。いつもと違う雰囲気の同志を見てリムルに報告したのだろう。

合点がいきクラフターは頷いた。

改めてマルチにおける隠密行動の難しさを実感してしまった創造主だった。

「恐らく。連中は死ぬと最後に寝たベッドで復活するのは既にご存知かと思います。ですがベッドが破壊された場合、初期スポーン地点とされる場所で復活するのです。この世界だと洞窟が初期スポーン地点になっています」

「成る程。それで倒した奴が洞窟で復活した所を取り押さえると」「そうです」

辛辣同志がリムルに説明している。

仕方ない。今更止めても意味を成さない。出来れば身内のみで解決したかったが。後で尋問不可避である。面倒臭い。

「しかし何を研究してるんだ？　今まで見てきた物も碌でもないんだけど」

「……ホムンクルスとか。詳細は分かりません」「サリオンの技術とは違うんだろうな」

話したくない事を平常心を装って話している。

創造主として慈愛はある。　リムルとの間に入り娘の会話を止めさせた。

無理する事無いぞ、と。

「……大丈夫。　言いたいから言っただけです」

「……この子から根掘り葉掘り聞かないよ。　それより大切なのは今だろ？　手伝おうか？」

「——と仰ってますが」

そうか。　そうだな。

クラフターは頷く。　ここまでできて拒否する方が面倒だ。

村人倫理に反する光景を見せるのは本望ではない。　だが蓋をした後でバレる方がマズい。　より重き咎となるからだ。

ならば使えるモノはスライムでも使うべきだ。

「あいよ。　俺とお前らの仲だ、話は後にしてやる」

リムルの笑ってない目を他所にクラフターは攻略組に連絡。　これからリムルが参戦する事を告げる。

予想通り困惑されたものの、事情を把握してくれた。　現在深度は——　まだまだ沈む。

だが既に幾つかの研究室は制圧した。　面白い物も出てきたという。

「リムルさんと直接念話は出来ませんが、通信水晶越しに連絡を取り合えます」

「分かった」

ホムンクルスの件だけじゃない。

銃。　戦車……その他。

何れも知らないモノだ。

だがきつとお宝の類だ。
それらを報酬と思いつつ。
陽動組は深淵にリムルを送り込む――。

??□??□??□??□??□??□??□

「派手にやってるね」

水浸しの廊下にヌツと現れたリムルにギョツとしつつ、攻略組は軽く会釈した。

協力してくれるなら構わない。今は兎に角進むだけだ。 鹵獲した武器も使用する。

「ここまで光源はなく水圧も相当だった筈なんだが……お前らはその辺関係ないんだな。 身体だけじゃなく建造物も。 今更だけど、もう普通の人間と違うだろ」

手に持ちたるは拳銃と呼ばれる武器。 研究室にボウガンに並んで額縁に収まっていた物で、弓矢と同じ飛び道具の類である。 だが使い勝手は断然良い。 ボウガンと違い引き絞る必要が無いし、連射もリロードも優れている。 同室でレシピも手に入れた。 外に出たら生産するのもアリだ。 問題なのは射撃時に煩い事だ。

「おい、その手に持つてるのって銃か!? まさか開発していたの!? 剣と弓矢が主兵装のお前らが!?!」

コイツも煩い。 あげないぞ。
これはクラフターのものだ。

「通訳ちゃん、聞こえる?」

『どうしましたか?』

「アイツら、拳銃なんて持つてるんですけど!? ボウガンはまだ理
解出来るけど、銃とか思いつきりファンタジーに喧嘩売ってる武器な
んですけど!?!」

『拳銃? 東の帝国で量産されてるといふ?』

「……え、あるの? なら良いかー、つてなるか! アイツらの手
に渡ってる時点で安心の欠片もないんだよ!?!」

『たぶん、帝国かどこから手に入れたのでしょね。それをここ
で研究していたのかと。ひよつとしたら既に派生した武器を開発
しているかも知れません』

「また悩みの種を植え付けられた……」

『今は進むしかありません』

リムルが荒ぶっている。いつもの事だ。

だが今は集中して欲しい。遊びでやってるんじゃないんだよ。

「なんかゾンビ出てきそう」

『連中はゾンビより恐ろしいですよ』

「だろうな。頭に剣ぶっ刺しても生きてたし」

創造主は鹵獲した拳銃を右手に、盾を左手で構えつつ前進。飛び
出してきた荒らしを弓矢の要領で撃ち抜く。

連射する事で接近を阻害し、同時にそれなりのダメージを与えられ
る。だが土壁程度で防がれてしまう。改善点だ、とクラフターは
思考する。扱い易いのは良い。

「初めてとは思えないセンスだな……いや、実銃の事は知らんけど。
片手でそう簡単に当てられるものか?」

『説明書を読んだんじゃないですか?』

「そんなもの転がっていた様に見えるんだけどね……仮にあっても

読んだだけで上手くならないだろ」

『まあそこは……連中の十八番かなと』

やがて向こうも銃を使ってきたから、撃ち合いに発展。狭い通路だから倒す他ない。

……とはならないのがクラフター。土壁で防壁を展開。弾を防ぎつつ時間を稼ぐ。

「うわー……まさか銃撃戦を見る時が来るなんてね……俺が変わろうか？ スライムの俺ならたぶん大丈夫だから。てか、ここまで俺何もしてないんで少しは活躍を……」

その間に外壁を同志が掘り進む。既に湖底より下な為、水が噴き出して来る事は無い。バイパストンネルを掘ると、敵の背後に出る。そのまま無防備な背中を安心信頼の必殺ダイヤ剣をお見舞いして殲滅。脆いものだ。次だ。

「うん分かってたよ？ 俺がいらぬのも」

『見届け人、相番が必要かと』

「打設じゃないんだからさ……」

横に並ぶ個室を風潰しに制圧。

ベッドがあれば即破壊。チェストがあればトラップチェストを警戒。注意しつつ解体して中身をぶち撒ける。適当に奪取した後は火打ち石で焼却処分。吟味している暇はない。進む。自爆されたりIRPみたいな秘密兵器でも出されたら堪ったものではない。

簡易な砂利シャッターや障害物をTNTで吹き飛ばし、黒曜石が充填された廊下は外壁を壊して迂回。その内格納庫と思われる場所に辿り着く。

此処で開発されたIRPは施設の外に放置されているのは確認済

なので、別の兵器用だろう。

で、そこにあっただのは変な乗り物だった。鉄の塊の様であり、長い筒が水平に生えている。

「どこからどう見ても戦車です。本当にありがとうございます」
『リムルさん、しっかり……』

搬出路が見当たらないので、たぶん此処も実験、工作室の類だと見た。

今は遊んでる場合ではない。役立つなら乗り込むが、今はレシピだけ持ち逃げする事にする。まだ先がある。インベントリは既にいっぱいだ。余裕も無い。進む。

やがて最深部と思われる大部屋に出た。

薄暗く、中央には醸造台。

その周囲には腐った肉が散乱している。

「今度は……なんだよ、これ……」

近くのチェストの中身は腐肉と骨。

何か。スポナーを利用したトラップタワーでもあるのか。その共用レベルに溢れている。

まあ仕舞われている分は良い。だが散らかっているのはいただけない。下手すると世界に負荷を与えている。ここを管理していた奴は反省して欲しい。

……調査員が発狂したのは、ここの負荷の所為かも知れないな。

「俺がスライムじゃなかったら吐瀉してるところだ……で、こりや何の真似だ」

『どうしましたか?』

「肉が散乱した部屋に出た。悍ましい光景だよ」

『……………』

「すまん、大丈夫か？」

『……醸造台はありますか？』

「それっぽいのが置いてある」

溶岩バケツで一面を処分。

同時に光源を確保。 周辺を探索。 薬の開発記録でも残置されていれば回収する。

例えば完全回復薬なるものや、蘇生薬だ。 村人に出来るなら我々も出来る筈だ。 そういつた研究をしていた可能性がある。

……にしては何故腐肉が散乱しているのか。 腐肉が材料になるとでも云うのか。

クラフターは首を傾げた。

『告。 これは——』

「大賢者、みなまで言うな」

『……出来れば破壊を』

「わかった。 この件は内密にしておこう。 悪魔より悪魔的な光景だ、一刻も忘れない」

『後悔してますか？』

「してないと言えば嘘になる。 正直に言えば付いてこなきや良かったよ」

『すみません』

「通訳ちゃんが謝る事じゃない。 コイツらの仲間がやらかした事だ。 さて……此処を片付けたら色々聞かせて貰おうかね」

荒らしは目論見通り洞窟でリスポーンしたらしい。 そこを待ち伏せ同志が確保。 黒曜石に順次ぶち込んでくれている。

外は大丈夫そうだ。 ならば此処の始末だ。 ほぼ制圧したと見る。 後は燃やす物を燃やし、奪取出来る物は奪取。 施設は……折角こんな深部に建設されているのだ。 全て破壊し尽くすなんて勿体無い。 とはいえ不便な場所なのも否めない。

よし。湧き潰して放棄しよう。何かを使うアイデアが生まれたら戻って来るのも良い。

クラフターは水中呼吸のポジションを再度飲むと、ボートで浮上した。

結局謎は謎のままに。辛辣同志がスポンした経緯も分からず仕舞い。いつか分かると良いが。いやどっちが幸せだろうか。

何にせよひとつの悪は潰した。収穫もある。今はこれで満足しよう。

暗闇から光を徐々に浴びていく。

その中でクラフターは夢想した。

得られたクラフトからアレよコレよとするのが今から楽しみだと。

135. 制圧後と今後

「一部の創造は闇に葬られましたか」

事後処理班以外は連邦に帰還したが、そこでも面倒事は続く。

今なんて辛辣同志の自室で事情聴取ときた。

される覚えはない。するなら研究所の連中にだけして欲しい。

「クラフターの時点で信用が無いのもありますが、現場にいたなら皆で情報共有するべきです。アナタがやらかしてないにせよ、仲間が命だったものを辺り一面にぶち撒けていたことに変わりありません。ナリを聞くのは当然でしょう」

一理ある。

だが我々は本当に知らない。どちらかと云うと君の方がアレがナニか知っている。

……研究所の連中はなんと？

「連中は黒曜石の中で黙秘を続けています」

そうか。

だが拷問ついで、復讐したか？

「何を今更。殺しても復活しますし、往生際にも反省の色ひとつなし、何より後味悪いし。他の手段を取ったところで——仮にも親ですよ。言いたい事は言わせて貰いましたけどね」

溜め込んで壊れるより何より。

「茶化してるならやめて下さい……アナタ達も知らないとなると、今

は分かる事を纏めるしかありません」

続けてくれ。情報共有だ。

「……分かっているのは全体の一握り。良からぬ研究がされていた事、その殆どが機密保持の観点から破壊された事。あの肉塊が散らばる部屋での研究を含めて、その他様々な技術が行方不明といった感じです。資料も燃やされたのか存在を確認出来ません。下手すると研究所だと言われなきや何の施設か分からないレベルに」

そんなにか。

「はい。アンタらが回収した銃や戦車の技術なんて些細でしょうね。後は研究者の頭の中。いつそ荒らしの頭から情報を抽出する技術を探した方が早いかも」

やめろ。いつか荒らしになるぞ。

「冗談です。そこまで悪趣味じゃありません」

そうであれ。 ” 彼 ” が悲しむ。

それよりも宇宙開発があるだろう。

健全なクラフトをするべきだ。

「そうします。それで……研究所跡地はどうするつもりですか？
リムルさんに設備を破壊されましたが。何人か居残ったみたいですね？」

使える物を暫く漁る。その後放置。

良い案が出たら改修する。あの深度に建物を造るのは面倒だからな。アイディアが出たら利用しない手は無い。

それに残置物……連中のIRPが湖底に放置されている事だ。消されたクラフトはどうしようもないが、利用出来るものは利用してやる。その方が創造物も報われる。

「アンタ達まで荒らしにならないで下さいね。既に世界を荒らしてると思いますが」

ひと言余計だ。気を付けるが。

「これ以上現場調査しても収穫はないかも知れません。銃や戦車の技術が何処から流れてきたのか調べられるなら、或いは……」

仮に判明しても全ての解明には繋がらない。

なに。今ジタバタしても仕方あるまい。

目標の施設は制圧出来た。すべき事は別にある。

「なんです？」

銃や戦車のクラフトだ！

いやあ、折角レシピを手に入れたんだ！

クラフターとしてクラフトしない手は無い！

「リムルさん可哀想」

構う事はない。やっちまうだけだ。

でなければ淘汰されてしまう。

今のままではIRPより劣るだろうが、改良しエンチャントすれば化けるかも知れない。何より生産出来るならデカイ。

ずっとIRPの非効率性や弱点、数多の魑魅魍魎に対抗する術に悩めていたが、その埋め合わせになるなら素晴らしい創造になる。

「居場所を作るのに技術や武力は必要かも知れませんが、
過ぎた力が敵になるかも知れませんよ」

敵は倒す。 作りたい物を作る。

それだけだ。 いつも通りに。

「……健全？」

……個人差があるのは認めるしかない。

師匠と弟子

136. ヒナタと再会

「西方聖教会の件は聞いています」

ヒナタを待ち構えるべく街道の封鎖作業中、シオンと取巻きとすれ違ふ。

リムルの指示なのは想像に固くない。方角的に後続を抑えるか。

「別働隊はお任せを！ リムル様とアナタ達が愛する魔都には1人足りとも入れさせませんよ！」

クラフターは去り行く彼女に頷いた。

成る程。シオンなら大丈夫だ。

リムルも分かっている。これは毒砲撃を喰らわせて良いという意味表示だ。

——そんな訳ないでしょうが!?

辛辣同志が念話して来たが無視する。

それよりも、とクラフター。

街道を木フェンスで封鎖。前後に水流を作り進路を阻む。後方には予備武装入りシユルカーボックスやリスポーンの為のベッドが鎮座。ボウガン、弓矢組に手作り戦車もある。

インベントリも決戦仕様。上位金林檎に牛乳バケツ。ダイヤ防具とドーピングは当然で、1番腕が良い奴は必殺ネザライトの剣に不死のトータム装備。他は良くも悪くも馴染みあるダイヤ剣。

弓矢に雪玉もある。TNTも勿論だが試作銃も持ち込んだ。その他様々も。

従来の創造物は長年に渡る信頼が築かれているが、まだ不慣れな銃や戦車といった新たな物も取り入れる姿勢を崩さないクラフターであった。

「やっぱりいるよ」

リムルが飛んで来た。

会合時同様、スプラッシュポジションでドーピングして金林檎を渡しておく。

前回の様に傍観は許されない。

戦えという我々からの意志表示だ。伝わったのか林檎を食う。

今回は人並みの速度で。

「ご親切にどうも。今回はワルプルギスより骨が折れそうだがな。何せ相手はヒナタと完全武装の精鋭だ……だからって毒漬は勘弁だぞ。出来れば活かせよ」

潰す。

出来ない事はあるまいと思われた。正々堂々挑まねば幾らでも殺り様はある。

腕は劣るが数は此方が上なのだ。マルチクラフターを舐めるなよ。

しかし、どうにも勿体無い気がして、クラフターはスニーク姿勢で逡巡した。

「シズさんの教え子なんだ。ただ本気で殺しに来るなら多少痛め付けて構わない」

折角実験に協力してくれた人物だ。

マルチクラフターとして、安易に殲滅して良いものだろうか。彼女の友好度を上げれば利益を上げられる打算がある。彼

「そうならない様にイングラシアからシズさんを呼んで説得させる方法もあるが、これは俺とヒナタの問題だからな。無理に巻き込んで悲しませたくない」

仲良くなれば堂々ルベリオスに入国出来るツテになるやも。叶わずとも1歩下がったイングラシアで陽の当たる生活を赦される。

取らぬ獣の皮算用だと思いつつ、その可能性はクラフターの決断を躊躇わせるに十分だ。

ヒナタ達教会連中がガチの荒らしなら何の迷いも無かった。結託なんて以ての外であり選択肢に含まれないからだ。

『お言葉ですが、リムルさんとヒナタさんが殺し合う方が哀しまれるかと』

「個人的な付き合いだけじゃない。向こうは教義が、俺は国がある。守るもの、譲れないものがある」

『正義のぶつけ合いをするなど言いませんよ。ですがね、譲歩出来ないほど子供じゃないんですから』

「迷わずな」

『楽な方に逃げてるだけでは?』

よし。こうなったら最悪さんだ。

必殺説教人シズである。

イングラシアで思い出した。

シズなら上手く取り合ってくれる。剣の腕がヒナタより上とは思えないが、謎の威圧感も半端ない。

問題は所要時間だ。ここまで距離がある。いや悩んでいる時間が勿体無いと、イングラシアの地下に潜伏している同志が自由学園へ向けて駆け出した。

透明化ポーションも省略したのだから、教会の駐屯兵に追い回された。だが構ってられない。無視する。ファルムスの絡みか

数が少なく感じるし。

「常に楽に好き勝手してる連中よりマシさ。まあでも……善処する」

「頼みます。馬鹿達も好き勝手ながら援護しますから」

遠方から合戦の音が聞こえ始める。

後発隊とシオン達が殴り合い始めたらしい。

一部の同志もついて行ったから、連中はひと足先に楽しんでいる。数もいるから尚更だ。

だが此方はボスクラス。雑魚なんて目じゃない。

そして、来た。ヒナタと取り巻きが。

「久し振りね」

馬から降りて傍に退かす辺り善良だ。

取り巻きもだ。知らない顔だが強いと思う。

「おう。で、後方でドンパチしてる100名程の騎馬隊は何だ？」

話し合いにしちや穏やかじゃないよな。早く退かせろ」

「……命令違反？　いえ、やはり七曜が……」

「うん？　まさか知りませんか？」

ブツブツ鳴き合い始めたものの、結局互いに剣を構えた。取り巻

きは特に殺る気に満ちている。

仕方なし。シズが来るまで互いに死なぬ様気を付けよう。

クラフターは抜剣。ヒナタらを囲い込む。

歓迎会の準備はしていたのだ。主菜はネザライトの剣です。

副菜には隠し味に戦車や銃が混ざっております。たっぷり味わい

下さい。

「多勢に無勢ってか？　舐めるなよ！」

「青い剣と鎧は情報通り。でもあの黒く禍々しい剣は一体なに!?」
「怯むな。　聖魔法と教義の前では無力だと教えてやれ」

取り巻きが吠えて煩い。

其方はダイヤ装備で相手取る。　ネザライトの剣持ちはリムルと共にヒナタを接待。

後方の副菜組は戦車やキャノンの準備をしている。　照準は雑だ。実験も兼ねて2、3発は撃ちたいが、またリムルには犠牲になつて貰おう。

辛辣同志の操縦するIRPもいる。　これだけのクラフターと戦力だ。　簡単に当防衛線が陥落する事は無い。

「まあ始めよう。　剣戟しながら話し合おうぜ」

「……魔物と取引はしない。　それが静江さんの姿をした者と恩師達でもね」

踏み込まれた。　速い。

すぐさま丸石で防壁展開。

ヒナタは飛び跳ね壁を越え、そのまま飛翔斬を喰らわそうとしてくる。

「俺を忘れるなよッ！」

が、空中にいる内にリムルが刺突。

上空で火花が散ったが、クラフターは構わず効率強化エンチャントを施したダイヤスコップで穴を掘る。

ヒナタの着地地点に回り込み、タイミングを合わせて斬り上げた。

「相変わらず小賢しい！」

バックステップで避けられる。

だが態勢が崩れ易いと踏み、左手の拳銃を撃つ。

たった1人の弓矢では作れない弾幕を簡単に形成出来るのも強みだ。 煩いが。

「ッ!？」

「なっ!　それは……!」

「新兵器か!？」

「おいおいおい、無闇に使うんじゃないよソレ!？」　人間相手じゃ危ないんだからな!」

リムルまで煩いのも嫌だが。

だが対価として僅かに怯んだ。　隙有り俊足ポーションの力をフルに使い雪玉を投げつつ呐喊。

自慢のネザライトの剣を振り下ろす。　躲された。

強い。　思考回路はRS信号より速い。

剣ガードでもしてくれたら、不思議エンチャントの黒炎等の効果で剣ごと丸焼きになりそうなものだったのに。

「その剣、往なすだけで危険ね。　銃といい、とんでもないモノを……」

続けて爆音。

次には、取り巻きと相手取っていた同志が地面諸共宙を舞った。

戦車砲だ。　強い。　精度に難があるものの。

だが即席クラフトで良くここまで出来たなとクラフターは微笑んで頷いた。

「おいしいいいい!？」　銃が駄目なら戦車を使えば良いじゃないみたい

のやめろや!？」　パンとケーキのレベルじゃないし!」

「うおおおっ!？」

「なんだ今のは!？」

「仲間ごと攻撃するなんて薄情なのね」

リムルが煩い。戦車をぶつけてやろうか？

運転テストもしたかったところだ。運転手は後方ではなく前線へ繰り出す。間も無くデカイ鉄の箱が威風堂々と現れる。

”異風” 堂々すんなああ!?! というか轢き殺そうとするなよ!

スライムじゃなかったら死んでたぞ!

「馬車とは似ても似つかない……!」

駄目だった。

リムルは履帯の下敷になったが、地面に薄く伸ばす様に水色が広がったと思えば直ぐにシズの見た目に戻ってしまった。

チツ。くたばらなかつたか。そう簡単に問屋は卸さない。

「リムル。与える玩具は選べないの?」

「俺の所為じゃねえよ! 気が付いたら作ってたんだって! 疑

うなら東の帝国にしてくれ!?! アツチには銃とか生産されているらしいから!」

「厄介な事を。でも物理的なものなら、それはそれで分かりやすい」

やばい。近過ぎると撃ち難いぞ。

主砲の回頭が相手に追いつけない。懐に潜り込まれたらいよいよだ。轢き殺すなら出来そうだが、上に乗られては駄目だ。

改善点だな。次回、迎撃窓でも付けよう。

とか思っていたら何らかの力が下から働き、戦車がひっくり返ってしまった。

身動きが取れなくなった。放棄する。

「お前ら。大人しく剣で良いんじゃない? というかそうして?」

俺からのお願い」

ならばとエリトラ組が空から弓矢を浴びせる。

高速飛行しながらの射撃は狙い難いが、多少は安全だ。

何人が打ち落とされた。またよく分からない攻撃だ。魔法と

やらだろう。

困った世界だ。 やれやれ。

「困った顔したいのは俺だわ!？」

素直に既存のアイテムや武器を駆使する。

いずれは銃や戦車ももつと使える様にクラフトしたいが、今は難しい。

銃も本体と弾の生産は試験的だ。数が無い。今なんて弾切れ。

こうなったら本体は嵩張るのみである。さっさと違うアイテムに切り替える他ない。

「楽しそうに。でもお喋りする時間じゃないの」

「くっ!」

ヒナタは冷静だ。取り巻きは怯んでるのに。

戦車を無力化されたとはいえ、彼我との戦力差は数えなくても明らかだ。

いや。勝てると踏んでるのか。今はリムルと剣戟している。押されているので助太刀致す。

摩天楼に設置されているTNTキャノンの調整が済んだので同志が発射。座標計算は乱暴にしたから、リピーターは雑だ。

それにしても疎ながら周囲に着弾する。舗装路のみならず左右の森と植林場が荒れた。

必要な犠牲だ。仕方ないね。それにこれで森に立ち入る口実が出来た。良い仕事をする。良くやった。

「どっからの攻撃だ!？」

「魔法弾!? いや魔都から飛んできてる!」

「やめてくれよ……トレイニー姉妹からの苦情が増えるんだよ……」

「白樺で直すのも迷惑だから。自然が減ってる事に違いがないから」

「苦労してるのね。同情はしないけど」

毒のスプラッシュポーションを投げても良いが、それは最後にしたい。

シズが来るまで実験したい事は色々ある。何よりヒナタ達の反応が楽しいから、もう少し付き合って貰おうか。

『好き勝手し過ぎです馬鹿同志ツ!』

IRPもやってきた。

取り巻きは見上げ驚愕している。

良いぞ。その顔が見たかった。

「き、機龍……」

「一矢報いてくれようか……ッ!」

「羨がなってる様ね」

「あーもう滅茶苦茶だよ」

祭りだ。祭りだひゃっほい。

シズが来るまで色々お披露目だ。

これだけ抑止力があるなら、相手を留めるのは難しく無い。客には楽しく過ごして貰う。客に

……いや念の為にヒナタにはリードを付けておくべきか?

137. 騎士団とクラフター

ヒナタ達騎士団連中と喧嘩し始めたクラフターだったが、当然優勢に事は進んでいる。

それは後続相手にも同じだった。

「突然土や石壁がッ!？」

「結界が効かない!？」

「空を飛んでる奴もいるぞ!？」

「地面から現れる奴もいる!？」

「雪玉や釣竿?　巫山戯やがって!？」

驚愕されつつ果敢に剣を振るってくる相手。

連帯も取れており普通の兵士よりかは手強い。

だが此方とて負けていない。

クラフターなりのやり方を見せている。

「くそっ!　なんて強固な鎧だ!？」

「斧やハンマーで破碎して……足をジタバタして後方に飛ぶだけ!？」

「馬鹿な!　四肢がもげてても可笑しくないというのに!　そうでなくとも、鎧の中身は無事では済まない威力の筈!？」

「何とか倒し……何処からともなく同じ顔がッ!　まさか不死身なのか!？」

幸い相手がダイヤエンチャントを上回る事態には至っていない。

剣だけ縛りなら負ける可能性が有るが、その他諸々有りならイケる。ならばやあやあ剣劇を繰り広げたりしない。

クラフターは基本的な武具である剣と弓矢に拘らない。TNT

に金床投下。雪玉牽制、釣竿引き寄せ。地面掘りからの足下搦

斬。弱体化スプラッシュポーション投擲。土ひとつにしたって

使い方次第で様々な戦法がある。

「魔素を介さないとしてもいっつかの！」

「そんな魔物がいる訳が……ッ！」

「ほ、本当に人間……？」

「馬鹿言うな！ あんな人間やスキルが存在して堪るか！」

対魔物のエキスパートである騎士団は連帯もそうだが魔法、身体能力や剣技も優れている。だが奇想天外な創造主相手にはいまひとつだった。

勿論、得られた情報から対抗策を講じてきた。

通常時の走る速度、跳躍力は人間と大差ない。

その上で剣や弓矢、鎧だけなら、ちよつと硬い有象無象の扱いだ。

その程度なら魔素を浄化する系が効かずとも基本的な武装で十分戦える。それだけ騎士団は精鋭であり、人間を魔物から守る剣であり盾なのだ。

だがファルムス戦で一方的に駆逐された軍隊を思い出して欲しい。

何故、圧倒的な人数相手に圧勝出来たのかと。

それは相手が物作りのエキスパート。

マインクラフターだったからだ。

「ば、爆発!？」

やがて始まる爆発音。

衝撃で纏めて吹き飛ばされる騎士達。

「ぐああっ!」「ひいつ!？」

「魔法!?! いや違う!？」

「魔都からきている!？」

「物理的なものか!？」

TNTキャノンによる砲撃。

爆弾で爆弾を飛ばす「頭痛が痛い」

みたいな大砲だ。

クラフターからしたら昔からある技術だが、この世界からしたら未知の兵器。

1発の威力や範囲は大きくない。だがある程度精密に、そして一方的に連発されれば人間にとっては驚異的な威力と範囲に拡大する。しかも遠距離攻撃だ。原因の砲台を止めようにも遠過ぎて叶わない。

更に言えば、魔都のキャノンの大半は飛距離や他の建造物の干渉を受けないように摩天楼の上層に取り付けられている。とてもじゃないが空を飛ばない限り接近は出来ない。

勿論、律儀に建物から昇降機や階段で登るなんて住まう人魔が許さないし、許したところでひたすら登る苦行が待っている。

辿り着いたら着いたで、今度は砲撃手達と戦わねばならない。果たして疲労困憊の中、クラフターに勝てるだろうか。

「こ、こんな魔物がいるわけない……!」

「生き返るなんて……戦う意味あるの?」

士気が落ちていく騎士団連中。

中には懐疑的な者も出始めた。

「イングラシアでドラゴンを倒したのも彼等だって話だし、他にも小さな集落に至るまで福祉に貢献しているというし……」

「ねえ、本当に私達の敵なの?」

「で、でも魔王の麾下だって……」

「実際、こうして敵対してるんだぞ?」

「でもそれは……出向いたからじゃ……」

前からクラフターの扱いについてゴタゴタしていたのもあり、ここに来て剣に迷いを見せ始めた。

西方聖教会はクラフターを魔物扱いしている。

それは都市部で好き勝手にリフォームしたり奇妙な事ばかりするからだ。加えて魔都を拠点に持つ事も挙げられる。

都市部の信徒もそれに倣ってきた。

だがその一方、騎士団の守護が届かぬ郊外の様々な集落から彼等に助けられたという話があるのだ。

魔物を退治するのみならず、魔物に対抗する為の強固な防壁を作り、武器も置き、更には建物も強く綺麗な形に整えて、道を整備した。勝手に。だが無償で。

やがてクラフターを支持する者が始めると救世主を敵視する教会に不信感が始まる。やがてその不信感は巡回する騎士団越しに内部まで侵蝕。教会への信頼、忠誠、士気に悪影響を与えていたのだ。

因みにクラフターはそんな事になつてるとは全く知らない。己の欲望に忠実に動いてきた結果、こんな事になっている。

この事態に対して教会の唯一神ルミナス……魔王ルミナスはルベリオスを侵略する為に狙ったのかと考えているのだが、そんな事実は無い。

侵略するなら堂々やります。

というかやっています。

吸血鬼のお嬢様、知ってるでしょう？

それがマインクラフターで、ございます。

「流石です皆様！　対してこの者共は！」

後方で空気化していたシオンが鳴き始める。

クラフターは砲撃を止めた。これ以上撃つとシオンを巻き込みそうだからだ。

「おい人間共！　ここで降伏するなら良し！　命だけは助けてや

ろう！　でなければ全員命が無いものと思え！」

「くっ！　魔物が、何を偉そうに！」

「力の差は歴然！　それが分からぬ愚者ではあるまい。　賢明な判断を下すのだな！」

戦闘の邪魔だ。

いつそ軽く地面に埋めてやろうと考えたクラフターだったが、例によつて交渉している様子だ。

その間は互いに殺し合う様子は無い。　お得意の毒を撒き散らす攻撃もしない。

「……分かった。　提案を受けよう」

「隊長!？」

「魔物と取引なんて教義に反します!？」

「教義を守れば我らがルミナス様は救いの手を差し伸べてくれるのか？」

「……そ、それは」

「鬼よ、そして魔人達よ。　どうか約束してほしい。　私はどうなつても構わん。　だが部下達にはどうか寛大な処置を頼む……ッ!」

騎士の1人が地面に額を擦り付けた。

スニークより深い姿勢だ。　サドルを取り付けたら跨れそうだ。　人參付きの釣竿も必要だろうか。

「宜しい！　寛大なりムル様とこの者達に感謝を忘れるな！　今

から魔都に連行するが、誰か1人でも妙な真似を試してみろ。　私が全員完膚無きまで叩き潰すからな!」

取引が成功したのか、やがて騎士団は武器を捨てシオンに同行を始める。

リードが必要なら渡すけど、と思った。

何事かは分からないが喜ばしい事だ。

殺さずしてドロップ品を手にしたのだ。　クラフターは、無邪気に

首と腕を振り回したのだった。

138. ヒナタとシズ

ヒナタとシズの経緯を、我々は知らない。

そもそもが会おう前の話になるのだから、仕方ない。だがシズはヒナタを大切に行っている。

それは伝わる。

ヒナタは最初、シズから力を得たのだろう。

離れてからは自己研磨してきたのだろう。

世界は危険に満ちていて、力無き者は容易に殺される。故に人は生き残る為に創意工夫を凝らし、力を得て生きていく。

我々はどうだろう。

最初から？

いや。きっと先輩同志から。

中には独学もいた。

だが少なからず他者の影響は受けてきた。

その点、我々とあなた達とは大差無いのだ。

やがて絶望の底に居ながら、コツさえ掴めば希望の糸をスルリと引き寄せられる事が出来る様になって——マルチクラフターは他者の為にも創造を始めた。

教え、教えられていく。

そして今もそうするのだ。

これからも。この先も。

”先生”と共に太陽の下に駆け上がる。

マルチの輪は広がリング。



「くっ!? やっぱヒナタは強いな!」

ヒナタトリムルは尚も対峙する。

IRPも来て砲撃支援もあつて数もいる。

この戦力差はヒナタにとって絶望的。にも関わらず降伏の意思なく単騎で剣を向けてくる。

目を見た。笑っていた。

決して発狂してる訳ではない。だが一矢報いてやる、という気迫でもない。

クラフターは知っていた。その目を。

「魔王に成り立てだからかしらね。その程度の実力じゃ私は倒せない」

「勝手に魔王にされたんだよ……ッ！ それよりも、なんでお前はシズさんの所を出て行くつもりになつたんだ？」

アレはダイヤ鉱石を発見した時の目だ。

だつて輝いているもん。

だがここは地下ではない。であれば我々の装備について思う所があると見た。

奪取するなら感心しないが、或いはダイヤ装備が珍しいのかも知れない。

落ち着いたら1粒あげようかしら。

「今更そんな事を聞いてどうしようというの？ 思い出せないと答

えてもいいのだけど、そうね……静江さんに迷惑を掛けたくなかったから、かしら」

「シズさんは迷惑だなんて思ってなかったぞ」

「今更……それに、貴方が静江さんの事を語らないで欲しいわね」

ダイヤについて熱く語っても良いのだけど、先ず今は無力化するべきだ。

そう。ダイヤを採取中にクリーパーに爆破される様に。 鉱石

に誘われるがままマグマダイブする様に。

「だが心配していた！　お前を独りにしてしまった事を！」

「知った様な事を言うな！　お前らに何がわかる、お前らなんか

!!」

「逆鱗に触れたか!？」

「終わりだ！」

周囲には気を配るべきなのだ。

そうしないから、ヒナタはシズに気付くのに時間を要したのだ。

「ええ。　迷惑だなんて思っていないかった」

「ツ!？」「シズさん!？」

「それ以上はいけないわ。　剣を下ろしなさい」

剣劇が止まる。

「そうだ。　そうしなさい。　剣と体力を削ってばかりで生産性が無い。

ツルハシ持って地下労働の方が良い。　色々掘れる。」

「久し振り、2人とも」

「静江先生……ッ」「どうして此処に?」

「”クラフター”さんに話を聞いてね。　直ぐ来て欲しいって」

「そうだったのか……お前らも情に訴えようとする事があるんだな」

発見のワクワクが蘇り自然と笑顔になる。

石炭とか鉄とかRSとかエメラルドとか。

時にスポプロ部屋に出会す。　この世界では未だ遭遇していないもの。

「今まで会いに行かずにごめんね……」

「良いんだ。学園は忙しいだろうから」

シズにはブラマイを教えた事があったが、その内に共に地下労働をしたものだ。

長期労働を見越して拠点セットかな。食糧や松明も忘れない。

「ヒナタが強がっているのは気付いていた。けれども、彼の方を選んだのが自分でも不思議だった。クラフターさんのお陰でシガラミが消えた今なら解る……思考制限を受けていたのよ。彼の能力で……」

「なっ!? ユウキがそんな事をする訳が!」

シズがヒナタと鳴きあっている。

うむ。好きな方を選べば良い。強制はしない。

だがヒナタ。君も共にやらないか?

剣も良いがツルハシとスコップも楽しいよ?

「ヒナタ。貴女も思考制限を受けているのよ。少し解除されかけたみたいだけど、まだ……」

「されかけた?」

「心当たり無い? クラフターさんに何かされなかった?」

「其奴らに? 毒を食らわされたけれど」

「俺も仲良く食らわされたな」

「え、えつと……その後かも」

「後? 確か解毒薬を……」

「そう。牛乳を飲んだ筈」

「は? 牛乳? 薬では?」

「中和という意味では薬かも」

「リムル」

「聞くな」

「オカシイと思うのは私だけかしら?」

「大丈夫だ。俺も思う」

「ふ、2人とも？ あ、ほら！ クラフターさんの牛乳は特別なんだよ！」

「毒されてますね静江さん」

そうだな。牛乳だな。

毒持ちとの遭遇に備えよう。常備しているものの、予備が必要だろう。

「とにかく点は繋がった。ユウキが全ての黒幕だったという事だ」
「悲しいけど、そうなるかな」

シズはヒナタを抱きしめる。
よく頑張ったね、偉いねと。

ヒナタはうん、うんと力無く……だけど安心した顔でされるがままだった。

光景の意味が分からず、首を傾げたクラフターだったが、シズの言葉で全てを理解する。

「クラフターさん」

シズがクルリとヒナタを此方に向ける。

そしてニツコリと言うのだ。

「状態異常なの。お願い出来る？」

成る程。全て理解した！

ヒナタは状態異常だったのか！

道理で絶望の中でも目が笑って剣を振り回していた訳だ！

見た目じゃ分からなかった！

流星はシズだ。早速牛乳バケツを用意する。

「は？　へ？　　静江先生……？」

ヒナタ。　君は異常なんだ。

今すぐ治療しなければならんだ。

「大丈夫。　すぐ終わるから」

ヒナタに牛乳を飲ます。

シズが背後で固定してくれている。　その間に無理矢理口をこじ
開け、どンドン飲ました。

「ゴポツ！　　ボボボポツ!？」

「どつちが異常なんだ……」

飲み終えればスッキリする筈さ！

そうしたら新たな世界が見えてくる！

さあ！

君もマインクラフターになるんだよツ!!

139. お話と地下勧誘

「ユウキ」も”ヤバイ相手なのは分かった”

荒れた街道を修復しつつ、兵器や防壁の撤去作業を始めるクラフター。

その脇でリムルとシズが鳴きあっている。ヒナタは青褪めている。

まだ状態異常か。 追い牛乳を持つ。

「もう大丈夫、大丈夫だから」

「異常なお前らが飲め」

止められたので仕舞う。

本当に大丈夫だろうか。 ヒナタから「うぷ」と苦しそうな声が聞こえるが故に。

「安静にしていれば大丈夫。 もう思考制限は受けていないわ」

「思考停止になりかけてるがな。 まあ良い、他の連中も戦い終えたみたいだし、一旦魔都に連れて行こう。 話はそれからだ」

「……あの者達は本当に何なの？ 私が飲まされたのは本当に牛乳？ そんなんで異常が治るなんて……」

「異常に異常をぶつけて正常にしてるだけ」

「訂正。 ふたり思考停止だった」

介抱されつつ、ヒナタは魔都に運ばれる。

後でツルハシを渡さねば。 松明も。

今は修復だ。 大抵は砲撃の後始末で、穴を土で埋め表層を石材等で整えるばかり。 ただ数が多いから時間は少し貰う。 それでも半日と掛からない。 ミリム被害に比べれば可愛いものだ。

「あの方がシズエ・イザワさん？」

IRPの辛辣同志が云う。

クラフターは頷く。

そうだ。怒ると怖い同志だ。

「聞いてはいましたが同志って」

彼女もクラフターだ。

作業台でクラフトした所は見えていないが、我々同様リスポーンした者だ。

子供達の未来を共に開拓した経歴もある。

「あんたらが仕立て上げたんでしょ。あんな毒された思考になっちゃって可哀想に」

人聞きが悪いな。全て彼女の意志だよ。

リスポーンだってそうだ。

我々は俗世に「もう結構」としなければ復活出来るものだと考えている。

その点、シズはまだ終わる訳にはいかない理由を持っていたのだから。恐らく教え子達が心配だったのだ。

「彼」は心配してなかったのでしょうか」

もう大丈夫だと思ったから消えたんだ。

いつまでも引き摺るな。

前を向け。上を向け。でなきや宇宙（そら）には行けないぞ。

「そうですね」

さて。騎士団は無力化。

次は本国をシメるぞ！ 我々は前を向く！

「駄目です。 そんな事する余裕があるなら今回の件を記録するなり
シズさんに同行して情勢勉強でもして下さい」

会議系は結構だ。 飽きる。

「上を向いて下さい」

IRPが砲口を向けていた。

……いやぁ手厳しいなあ。



「なんで来たの？」

そしてリムルに睨まれた。 辛辣ッ！

「辛辣ちゃん？ に云われて来たって」

「辛辣？ ああ通訳ちゃんか」

「通訳ちゃん？」

「アイツらの言葉が分かる女の子だよ。 経歴は聞かないであげて欲しい」

「……わかった」

了解してくれた。 いっそ否定しても良かった。
それを理由に自由時間を謳歌出来たのに。

仕方なし。 久し振りにシズもいる。 客と化した騎士団もいる。
持て成す。

「散らかってるけど、まあかけてくれ」

「本当ね。 管理はどうなってるの？」

「ヒナタ」

「牛乳ガブ飲みさせるぞコラ」

「すまない」

場所は議事堂。

我々が作った白樺製階段による椅子や原木を丸ごとに使用した机のある部屋にいる。

書類が乱雑に散らばっているから、クラフターは溜息を吐く。

客を持て成す環境じゃない。 クラフターはさっさと紙を回収するとチェストに放り込んでやった。

「溜息吐きたいのは俺だよ!? 執務室から溢れたクレーム用紙だからな全部!」

「苦労してるんだね」

「リムルが牛乳を飲むべきね。 イラついてるみたいだし。 カルシウム摂取したら?」

「喧嘩腰にならないの」

「すみません先生」

机にクラフトしたクッキーやケーキを置く。

話は長くなりそうだから、迎賓館辺りに行って夕飯の手伝いでもしようか。

いや離れたら面倒か。 他の同志に任せよう。

「他に処理する人いないの?」

「いるよ。 でも追いつかないんだよ……ブラック環境だけど過労死

だけは起きない様にしてる」

「騎士団が攻めなくても自滅してくれたのかしら」

「舐めるなよ、みんな優秀なんだ。他国との関わりも多い……主にクレームで。でも嚴重注意が大半で賠償請求は意外と少ない」

「成る程。他の国々は連帯保証人になりたくないでしょうね」

「そういう事だ。クラフターは基本自由人で決まった国や土地を持たない。連邦が潰れたら、今度は周囲の国へ責任の追求が及ぶ」

「金品や資源を請求しない代わりに、少しでも手綱を握って欲しい」と「殆ど握れてないがな。それでも目溢ししてくれてるのは慈悲深さというより得られる利益が多いからだ。アイツらが作った高品質の製品や食糧とか」

「ルベリオス近郊でも、その影響を受けている。我々騎士団の守護が行き届かない集落を守ってくれた」

「世界中でそういった事をしてるんだろう。事実、クレームの中には感謝の言葉も混ざってる」

「長い。やっぱ会議嫌い。」

お喋りを否定しないが輪に入れない虚しさよ。

クラフターは子供が気を引く様な事をする。ダイヤモンドを用意すると、シズとヒナタにそれぞれ渡してみた。

反応した。まずまずである。

「なんて大粒のダイヤモンド……いったい何処から得ているの？」

「地下かららしいよ」

「因みに天然。それをコイツらは大量に持ってる」

「こんな大きさが？」

「他にエメラルドや金なんかも持ってるぞ」

「ますます恐ろしい連中ね」

返された。

ちよつぱり悲しくなった。取引じゃないのに。

「とにかく、だ。コイツらの話はここまでにしてヒナタ達騎士団の処遇について話していこう。今はそれが重要だ」

「ヒナタ。信念は大事だけれども、本質を見誤らないで」

「……先生。ですが私は今でも迷っています。ルベリオスの有り様が間違つてるとは思えない」

「どれが正しくて、どれが間違っている。そう決めつけるのは良くないわ。柔軟に、ね」

「もつと言つてやってくれ。頭良いんだろうけど固そうだから」

「リムル」

「はいゴメンナサイ」

「先生……分かりました。もう1度やり直します。この目で見て自分の心で判断します」

「俺との差。思考制限の影響だな、そうだそうに違いない」

リムルまで落ち込んだ。

コイツもまたクラフターだ。気持ちに通じる部分もある。

「……もうユウキに近づかないで。とても嫌な予感がするのよ」

「更に言えばイングラシアに入国するのも成るべく控えて欲しい。

いや、通り道なら難しいかも知れないが。だが本部に立ち寄るのはやめてくれ」

「……………」

それでも、と。

ツルハシとスコップを握らせた。ゾンビの様に勝手に装備してくるなら楽だが、その先を望む。

いつぞやの狐娘も地下労働経験がある。あの時は駅ホーム工事に従事していたが、別なもので全然構わない。

最初は自由にブラマイが良いだろう。そして自らの力で手にした鉱石の悦びは一入。苦勞してこそ得られる光景と報酬がそこに

ある。

「迎賓館で他の騎士共々改めて話そう。互いに齟齬がある気がするし、それに飯を食いながらの方が良いだろ。風呂もある」

斧もある。

植林場で白樺を切ってみないか？

やはり木材は基本のひとつ。そこから入る方が良いかも知れない。

そう思い、ツールを渡そうとしたらシズが顔を覗き込むようにして言い放つ。

「迎賓館に行くよ。良いね”クラフター”さん？」

クラフターは黙って頷く他ない。

だってその笑顔が怖かったんだもん。目なんて笑ってないし。

140. 料理と風呂

「突然の対応、ありがとうございます」

迎賓館の厨房。

シユナとゴブイチと共に食事をクラフト中。

今は2人のクラフトを参考に、色材や雰囲気を読み取った和食とやらを作る。

「相変わらず彼等は凄いですね。見ただけ、少し練習しただけで新作にも追い付くとは。建築だけでなく料理の才能もお有りの様で」
「物作りを愛する者達ですからね。まだまだ多彩な才能を隠しているのでしょうか」

この場に立つクラフターは料理好きだ。
今まで気にしなかった事にも気を遣う。

盛り付け。色。配膳。組み合わせ。産地。

料理の奥深い世界の襖を開けた瞬間、目を見開くばかりの感動の波が止まらない。

かつて効率と満腹にばかり傾倒していた頃が懐かしい。これもシユナやゴブイチ達との出会いあってこそ。

ありがとう料理。ありがとう世界。

この出会いに感謝を。我々は今日も生きている。

「ところでシユナ様」

「分かりません」

「まだ何も言ってませんよ!?!」

「当てましょう。彼等の釜戸が自動で火加減調整してくれる謎。

調理器具使わずに、それも材料を作業台に揃えた次の瞬間には料理が仕上がる謎とか」

「流石ですシユナ様」

「正直複雑ですね。 私達の苦勞が蔑ろにされている気分にもなりません」

料理や美食は墮落とさえ考えていた時期もあった。

大変な割に満腹値が高くなかったり、ストックが出来なかったり非効率だからだ。

だがそれは大きな間違いだった。

地下労働の果てに得た宝石が美しく輝く様に、苦勞の果てに生み出される料理は価値があるのだ。

それも釜戸に放り込めば勝手に出来上がるベイクドポテトや焼肉とは次元が違う。

ケーキやウサギシチューの様に、何種類もの材料を消費し、やっと1つの料理がクラフトされる。

それも自ら完成形を考案し、研磨し、味のみならず見た目も気にする。 その為、同じ材料でも全く異なる料理が生まれる事すらあるのだ。

これは戦い……そう。 戦いだ。

果て無き戦いにクラフターは挑戦し続ける。

「ですが彼等も相応に苦勞していますよ」

パクつきたいのを堪えつつ、天麩羅を鍋から引き揚げる！

「箸使いなさい箸を！」

「ステラには見せられない……」

だがそこに価値がある。

この天麩羅は他の天麩羅より美味しい筈だ。

「ひよっとして箸の使い方が？」

「いえ。 シズ様に教えて貰っている筈ですが」
「忘れているのでしょうか」

この作業をひたすら繰り返すだけでもセルフ拷問であるが、耐えた先に見える光景もまた美しい。

黄金色に輝く天麩羅が、机いっぱいには並べられていく。 広大な小麦畑とは異なる感動に涙腺が緩む。

「泣くほど苦労しなくても……ですが頑張りましたね。 それは認めあげます。 次は箸を使いましょうね、絶対に」

「えーと、これで皆の分は出来ましたから大丈夫です」

「ごはんの方は？」

「炊き上がっています。 先行して彼等がお酒やツマミを運んでくれますから、其方も出来上がっている筈です」

「それも彼等が作ってくれたものですね。 私達も負けてもらえませんよ」

「はいシュナ様！」

クラフターは配膳するシュナとゴブイチの背中を笑顔で見届けると真っ白に燃え尽きた。

体力は瀕死。 空腹状態。

だがその極限状態が最高のスパイス。

クラフターは出来立ての天麩羅を齧る。

美味い……ッ！

建物の完成とは違う感動がここにある！



勧誘の為に酒を振る舞い、食事を用意し、大部屋に色とりどりの

ベッドを用意。

村人メイクの方は敷布団なるものや浴衣が用意されていた。アレも興味深い。やはり村人のクラフトは学ぶべき点が数多ある。

「ベッドは分かります。そういう文化だと。ですが何故彼等は釜戸や作業台も置くのですか？」

「そういう文化なんじゃないスカ？」

廊下に出ると、露天風呂とやらに向かうシズとヒナタを見かけ首を傾げる。

露天風呂は湯気昇る大池だ。景観を意識した作りは非常に素晴らしい。

だが実用性は分からない。肩まで浸かる「裸の付き合い」をする場所と聞くものの。

そしてシズとヒナタは師弟関係とも聞く。

これは……成る程、そういう事か！

露天風呂とは防具無しの訓練場なのだ！

水を張っているのは、湿地帯等での戦闘を想定している。動きを制限し鍛える為に。

そう考え剣を装備し突撃。我も混ぜろ。

悲鳴を上げられた。ドッキリした。

「クラフター」さん、混浴じゃないよ？　ここ女湯だよ？」

「男女双方で入れば許される訳じゃない。というか風呂場に剣を持ち込むなんてね……やはり私達の知らない文化圏の人なのかしら」

「カバル達に覗きをされた事はあるけど、こども堂々されると対応に困るかな」

「魔法で処刑しましょう」

「私はもう炎の力は使えないけど……少しお仕置きが必要かな？」

何故か黒い笑みを浮かべられた。

これが分からない。いや、分かる。

2人して我々に挑んで来たのだ。剣もなしに。

これは我々に対する挑発だ。お前らなんか拳ひとつで十分だと。

上等だ。クラフターは剣をしまう。当然鎧も脱ぐ。敢えて

挑発に乗ってやる。だが同じ土俵に立たせて貰う。拳での戦闘

は久し振りだが出来ない事はない。

腕を振る。さあ来い。お前達の腕を見せてみる。

「先生、コレ殺つても構いませんか？」

「待って。何か勘違いが起きてる気が……」

シズ困惑。ヒナタ喧嘩腰。

そこにスライム形態のリムルが乱入してくる。

「お前らナニしてんだーッ!？」

怒声と体当たりを浴びせられ、ドボンと湯に沈められるクラフター。

相変わらず良いノックバックだ。

「お前らの事だ！ 覗きじゃないんだろうがロクなモンじゃないだろどうせ！ まさか風呂技師が学びに来た訳でもないだろうし！」

「リムル……前世の性別は？」

「へっ？ あ、いや!? そんなつもりは！」

「スライムに性別はないにせよ、やはり同郷となると少し気になるな……？」

「……」ボク”は悪いスライムじゃないヨ？」

「出てけ……ッ！ そして風呂上がりに牛乳をバケツいっぱい飲ませてやろう……！」 同郷だからな、日本の銭湯を思い出すだろ？」

「遠慮しますっ!？」

リムルが追い出された。
シズもだがヒナタも強い。 さすが師弟。

「お前達もだ！ 服を着たままいつまでも湯に浸かるな、野蛮人め
！」

平手打ちされた。 頬より心が痛かった。

141. 娘と喧嘩

いい加減に会議に飽きたクラフターだったから、数名を除き外に出た。

やはり身体を動かす事は良い。自由万歳。

今はIRP格納庫に邪魔してる。

「邪魔です。情勢勉強でもして来て下さい」

辛辣同志に捕まった。だが反省はしない。

政治的な話も多少は知る様になったとはいえ、大抵は我々にとってどうでも良い。

得られる情報から動くにしても、減ほすかりフォームするかどうかだけ。

ファルムスは正にそんな状況下。

ヨウム達と悪魔を利用しつつリフォームだ。

ブルムンドに次いで、あの地も手に入れる。少なくともイングラシアやルベリオスより動き易い。ドワルゴンは隣だし。

「侵略行為は控えて下さい。シズさんにいいつけますよ。あとブルムンドはアンタらのモノじゃありませんから。更に言えば、どこもアンタらのモノじゃありません。皆迷惑してます」

その癖、利用出来るモノは利用されてる件。

余剰品の剣、鎧、建物、食料などなど。

我々が下手に出れば、つけあがるは村人だ。

連中の言う優しさも過ぎれば仇となり毒となる。後は奴隷になり搾取されるだけ。そんな腹なら精々利用してやるくらいの気概で良い。

土地が何だ。それくらい見返りを寄越せ。

ところで……今は何してる？

「誤魔化し雑ですか……今は打ち上げ用のロケットを作ってます。といっても設計段階で実物は出来てませんが」

案内される創造主。

それもまた優しさか。

いやクラフターと云うべきか。

ベスター達が悪い奴なら、とつくに利用されてそうでもあり心配になる。

いつそ我々の側に置くべきだろうか。

……これが親心か。

「親ガチャ失敗なんですそれがそれは」

ちよつとナニ言ってるか分からない。

努力しない言い訳にも聞こえ……いや辛辣同志は凄い努力している。 辛辣だけど。

「子は親を選べないんです。 でもクラフターに望まれて生まれたのが私です」

つまり？

クラフターは首を傾げた。

「馬鹿親で良かった、という事です」

辛辣ツ！ 今ガラスの親心が傷付いたよ！

加えて微笑みが良いアクセントだよ!?

マイホームをクリーパーにリフォームされた衝撃以上だ。 ヒナタにビンタされた時より苦痛を感じている。

「は？　ヒナタさんにナニしたんです!？」

ナニも。風呂場で格闘していただけだ。

「最ツツツ低ですッ！　もう絶縁です！」

何故だ。これが分からない。

そういえば辛辣同志の服はクリーパー柄だ。

成る程。娘は帯電クリーパー級だったか。

シヨックだ。こんな子に育てた覚えは無い。

「育てられた覚えもねえですよ!？」

嘘だね！　彼に餌付けされた癖に！

「彼を侮辱しましたね!？　良いでしょう、IRPでペチャンコにしてやりますよ！」

上等だぞこのヤロー。

TNTキヤノンの移動砲台如き、クラフターが負ける訳が無いね。

対ウィザード級として開発された経緯があるとはいえ、図体のデカさから対人戦闘は苦手。それも対クラフター戦は想定していない筈だ。

「馬鹿の癖にIRPまで馬鹿にして！　良いでしょう、そんな過去のデータからしか計らなかつた事を後悔させてやりますっ！」

IRPに乗り込み、襲って来る辛辣同志。

いや……我が娘。

直ぐにも大きな脚で踏み潰してくるから、右に左にヌルヌル動いて回避する。

創造物に襲われるなんて珍しい話じゃない。
身近じゃゾンビに拾われた剣に。
間違つて殴つたアイアンゴーレムに。
狙えば召喚したウィザーに。
直近の例としてはIRPと娘に、だ。
だがどんな相手にだつて攻略法はあつた。

「馬鹿は死ななきや治らないっ！ いや、アンタらは死んでも治らないんでした、ねっ！」

足払いをされた。

まさかのモーシヨンに対応出来ず、壁まで吹き飛ばされる。かなり痛い。ダイヤ防具とはいえ、相手もエンチャントを施している。正直舐めていた。

まさかここまで進化していたなんて。

「私だつてね、作り続けてきたんですっ！」

舐めるなよアマちゃんめ！

此方とでは経験が違うんだ！

クラフターは荒れ狂うIRPの足元を縫い、TNT起爆でひっくり返せないか試みる。

駄目だ。姿勢制御系がしつかりしている。元々の重量もあるのだろう。ビクともしない。無駄に床に大穴が剥かれていく。ならばと壁面の作業通路を昇る。機体に取り付けば攻撃は届かない。

「これは何事ですか！ 格納庫が滅茶苦茶じゃないですか！」
「ベスターさん下がって！ ソイツ殺せない！」

白衣村人を押し退けて、上層へと昇っていく。

IRPの胴体に取り付けられた2門のディスプレイから矢が放たれるも、土壁を構築し防御。先へ進む。

先の通路を体当たりで破壊されたが、それも土で足場を構築すれば問題ない。

「ちよこまかと！」

体当たりしてきたタイミングを見逃さない。

壁に挟まれ磨り潰される直前に機体上部に飛び移ると、コックピット上部へ駆け上がる！

ダイヤ効率ツルハシを装備。

ひたすら振るう！　振るう！　振るう！

「こ、このっ！　エンチャント黒曜石を舐めるな！」

IRPが飛び跳ねた。

天井と挟まれた。痛い。

「外殻は岩盤程でないにせよ、凄まじい強度です！　効率強化のダ

イヤツルハシでも破壊は困難ですよ！」

「喧嘩は程々に！　上の人達に迷惑です！」

「上？　逝ってヨシ！」

「地上の都市部の事ですよ!?!」

これでは1ブロック破壊する前に圧死。

だが負けたくない。負ければ尻に敷かれる。

それは何としても避けねば。

娘の奴隷なんて嫌過ぎる。元の世界での村人をリードにつけて

連れ回した光景が蘇る。

「経験値を無駄にしたいくなければ降伏して下さいね」

だが断る。

クラフターは主砲へ駆け出す。

その隙間に潜り込むと、手に届く範囲のTNTを頂いてから火打ち石を取り出した。

「諦めが悪い……え？」

クラフターは容赦なく着火、退避。

内部に並ぶTNTが次々起爆、機体がよろける。

「悪足掻きを！ たかがキャノンの弾数を無くしたくらいなんだつていうんです！ それに砲身全体も黒曜石！ TNTじゃ損傷はありませんよ！」

それは機体の話だ。

その隙に再度コックピット上部へ。 TNTを設置して着火、起爆。

「うぐっ!？」

衝撃が内部に伝播したらしい。

苦しそうな声が聞こえた。

諦めが悪い様なら、スプラッシュポジションを投げ付ける。それもシオン級を。

……また心が痛んだ。

仕返ししただけなのに。 親とは損である。

「そこまでだ馬鹿」

振り返る。 リムルが睨んでた。

「全く、上で武闘会の話が出ただけでも悩みの種なのに……客がいる夜に騒ぎやがって。通訳ちゃんがいながら……ベスター、何事か報告してくれ」

「は、はい……」「すみません」

「それと通訳ちゃんはそのまま、西教会とウチの関係を説明しておくから。さつきまでヒナタと話し合ってたんだけどさ」
「……分かりました」

戦闘は続きそうに無い。

毒を仕舞って、ベイクトポテトを食いながらIRPを見上げる。

コックピットから辛辣同志が出て来た。腰を曲げたのと回復スプラッシュを投げたのは気持ちからだ。

「毒親になるなよ。大切な娘だろ」

苦笑するリムルにもお辞儀する。

止めてくれた事に感謝しておこう。下手すれば取り返しのない事をしていたかも知れない。

「娘？ は？ へ？ この者に妻が!？」

「あー、いや……そういう事じゃないんだ。血が繋がってないけどそれ以上の仲間というか家族みたいな」

「なるほど。あまり深くは聞きません」

「その意味と予想通りなら童貞？ 純潔？ おお！ そうかそうか、俺たち仲間だなあ！ 実は大賢者のスキルとかある感じ？」

「リムルさん……」

取り敢えず辛辣同志と縊りを戻す。

人生とは創造のみならず選択の連続でもある。

その時その時。

良い選択を取れる事を願うばかりである。

142. 新人と教育

「ファルムスの侵攻以前に問題があった」

会談に出席していても詰まらないクラフターだったが、シズもいるから手慰みする程度に留める。

同志に平手打ちしたヒナタもいるし。

精神攻撃は堪える。ある種、アレはスキルだったのかも知れない。

「続けてくれ」

「教会は魔物を一切認めていない。魔物の国であるテンペストも本来なら言語道断。だけど多くの商人や冒険者が出入りする以上、教会といえど問答無用とはいかない。願わくば敵対したくないのが本音。けれどそれを正直に言ってしまうえば混乱を招くし、かといって認めてしまえば教義に反する……」

「それで侵攻を？」
「事を単純に見れば、そう見えるわね。実際放置すれば信者の不信を招きかねないし、既に離反者もいる。都市郊外の集落が特にそう」

ヒナタが見て来る。即座に頭を下げた。

平手打ちマジ勘弁。

「あー……そりゃコイツらの所為だな。とはいえ、離反者が出たのは教会の落ち度だ。コイツらのした事は集落の防衛だからな」

「そうね。それは本来、教会がするべき事だった。それを代わりにしてくれたと見れば感謝するべきなのでしょうね。けれど彼等を魔物扱いしている以上、下げる頭が無いのよ」

衝撃が来ない。恐る恐る頭を上げる。

視線はリムルに戻っていた。どうやら苦難を逃れたらしい。クラフターは安堵し頷いた。

「で？ 敵と味方の曖昧な境界が広がれば凋落するからと攻撃した

訳だ。ファルムスの侵攻も裏に教会がいたんだろう？」

「ええ。親書を黙認したのは私よ」

「正直だな」

「認めるところを認めないと進めないでしょ。先生の前で嘘を言いたくないし」

「……ヒナタ」

「シズさんがいなかったら？」

「いなくても認めるところよ」

「リムル、意地悪しないの」

だが手を打たなければ。

平手打ちの苦痛は、なんと牛乳バケツで治らない。 永続デバフに

似る。

海底神殿の死闘が思い出された。 思わず苦悶の表情を浮かべる。

「彼等も苦い顔を……」

「意味は違うから大丈夫よ」

「え？」

「それより話を進めるぞ。ファルムスが敗退した後、直接叩くしかないと騎士団が動いた……違うか？」

「私はね、リムルと話す為に連邦に向かっていたのよ。なのに知らない内に100名前後の騎馬隊がやってきた。これには七曜が糸を引いていると思う」

「七曜？ワイトキングから聞いたな……教会の賢者、最高顧問なんだっけ？」

「……かつては偉人だったのかも知れないけど、今はルミナス様の寵

愛を受けようと秘密裏に私を排除したがってる年寄りよ」

「個人の見解もあるみたいだが、まあそういう奴らなんだろう。ワイトも嵌められたって言ってたし……神を崇めるなんだって、上は利権や利益争いをしてる訳だ。結局のところ敬虔な信者が泣く事になる」

やはり元凶を叩かねば救われないのだろうか。

いや、そんな事は認められないから、果たして本人を見た。将来有望なマインクラフターの卵をここでカチ割るなんて選択肢は存在してはならないのだ。

「そんな目で見ないで。私も気付いたの……教義を信じる者しか救えないんじゃない、ただ助かるべく努力する者に手を差し伸べるだけで良いのだと。アナタ達がそうした様に」

爽やかな笑顔を向けられた。

頷く。大丈夫だ、君を立派に育ててみせる。

先ずはサバイバルの基本を叩き込む。

「あー……吹っ切れたところ悪いんだけどさ、コイツらやりたい事をやってるだけだぞ?」

「それなら私もそうでありたい。人々を救うのは、私が望むべき事なのだから」

「ヒナタ、クラフターになるの……?」

「へ?」

「へ?」

シズ共々だ。スライム野郎は放置。

サバイバルの基礎から教える。インベントリは空だ。素手で木を伐採。原木を加工し作業台を作り、木ツルハシをクラフトしたら丸石を採取。すぐさま石ツールにグレードを上げて地下に潜り

石炭や鉄をゲットだ！

「やめてくれよ……松明で村を囲むつもりか？」

「は？　へ？」

「”ワキツブシ”という儀式でね……」

「儀式？　魔法詠唱などですか？」

「それで村を支配下に置くんだけだ。実に狡猾な行為だよ……ツ！」

「彼等の松明は悪魔的な意味があつたの？」

「一応、村の為にいいんだけどね」

早速腕を振るおうと思った矢先。

地下から突き上げる派手な音に驚いた。思わずその場でジャンプする。

「地下で何してんだアイツら……悪い、ちよつと注意してくる。続きは後で」

取り敢えずヒナタに食糧を渡す。

食糧の確保も教えねばならない。生活が安定するまで、やる事は

色々あるのである。

143. マルチと楽しみ

「――教会側が非を認めるんだな？」

同志と娘の地下騒動を収めたりムルが会談を継続する。その頃にはクラフターも準備が出来ていた。

「じゃあ賠償についてなんだけど……」

「済まない、その点について言っておく事がある」

ひと通りのツールを作れる木材を用意。

レシピを教える。これを知らねばクラフターとはいええず、生き残れない。

逆に知れば生き残る事が出来よう。ベッドを確保出来ないのは良くある事にせよ、空腹の瀕死でゾンビの如く徘徊する事態は避けられる筈だ。

「今回の件、本国のルベリオスは関係ない話になると思ってくれ」
「説明を」

ツールを作る以外にも、仮拠点も必要だ。

食べ物もだ。小麦はその辺の草を刈れば種が、動物を狩れば肉が。

釣竿をクラフトすれば水から魚が釣れる。

だがそう都合良く環境と素材が得られる保証は無い。最悪はゾンビをアテにする。

「――ヒナタ達を最悪切り捨てる？」

「……そんな」

「私を筆頭に、騎士団の暴走だって事にすれば簡単ね。何らかの賠

償問題になっても私を切つて話は御終いになるだけよ」

「色々ややこしい組織と関係なんだな」

「用意周到でしょ？」

「尻尾を切られた気分だよ。　だがまあ、今は教会に対してのみ納得しておく」

「もし行く宛が無ければ、また一緒に……」

纏めて教育だ。

ベテランを見ると、いきなり建築に走りたくなる衝動は確かにある。

だが先ずはサバイバル。　基本を学んでから様々な分野に手を出していく。

必ずとは云わないが、知り得てから行動するのでも遅くはない。

「申し出は大変有難いのですが、先ずは教会に戻ろうかと思えます」

「大丈夫？」

「幸い死者は出ていません。　それに、私達が生きて戻れば、テンペストを認めさせる材料としては有用です。　生かされた事で邪悪ではないと判断出来ます。　問題は教義の扱いですが……」

1番大切なのは楽しむ事だ。

サバイバルにせよ、建築にせよ。

これを忘れなければ、クラフトを楽しみ世界を楽しみ、延いては人生が楽しめる事に繋がる。

「ならば、この国の者は悪しき者ではなかったと発表するのは？」

「この住民の多くは驚くほど人に近いし。　コイツらなんて人そのものだし……見た目だけは」

リムルよ。　そんな目はいけない。

楽しめ。　クラフターだろう！

「……そうね。 亜人であると全体的に認め、ドワーフと同様に扱う様に働きかける。 そうすれば一定の理解は得られる可能性はある」
「一応の落としどころを見出せたな。 じゃあ教会に対しての賠償に戻るけど、定期的な交流をする事」

再びヒナタと鳴き合うリムル。

そうだ。 我らマルチクラフター。 ならではの楽しみ方を楽しむが良い。

「金品じゃないの?」

「正直、信頼の方が欲しいからな。 特にコイツらの所為で、他国から冷たい視線に晒されてるから。 少しでも温かな信頼を得たいの分かって?」

「本当、苦労してる」

「ははは……」

「じゃあ話終わり! シズさんとの再会もあるし、宴会を楽しんでくれ! 酒は勿論、天麩羅や白米、刺身もあるぞ!」

「豪華だね」

「……もはや同郷である事は疑っていない。 驚きを通り越して呆れてくる程に……この環境をたった2年程で作るなんて凄い話よ」

「そうだな凄いな! 摩天楼や都市全体はコイツらが作ったんだけどね!」

「なんで怒り口調なのよ」

「ま、まあまあリムル」

そうだ。 騒げ。 笑い合え。

それもまた、楽しみ方のひとつだ。

そしてこの後は飯が待っている!

「遣りすぎると天使に攻撃されそうなのに」

「天使？」

「知らないの？　500年に1度、天使が発展した町を標的に攻撃、破壊してくる話」

「ラミリスがチラツと言っていたような……天魔大戦？」

「知っているじゃない」

「……忘れてたよ。　コイツらのクレーム処理に追われる日々だから」

「今日は終わりましょう？　　食べて飲んで寝ちやおう！　　うん！」

「そうだな、もう酒に呑まれたい気分」

「……付き合ってあげる」

天麩羅、米、刺身……どれも美味かった！

魔都開国

144. 絵画と額縁

「やあやあ元気だったかねミヨルマイル君！」

リムルについて行けばブルムンドだったから、ついでにラーメン屋に立ち寄ろうとクラフターは思った。

ついでにヒナタに捕縛された同志を殴っておく。

アバズレにヒヨツたからだ。

分かる？ この罪の重さ。

「まさかりムルの旦那ですか？ え、ヒューズ殿から魔王になったと聞いて……え？」

「うん。コイツらの所為で魔王にさせられたのであって魔王に進んでなかったんじゃない、そこんとこヨロシク」

しかしこの商館も素晴らしい造形だ。

他の建物より大きめで豪華な作り。内装も高級感を漂わせ実に高揚する。リムルと悪人顔が使用中の椅子と机の応接セットも素材に拘っているのが見てとれる。

特にカーペットに暖炉なんて完全なる拘り抜いた創造物だ。

我々も作る事はあるが、ここまで本格的とは。さぞ創造物を愛しているのだろう。

クラフトが好きな奴に悪い奴はいない。

ただここまでできて大きな不満があった。

「——して旦那。どの様な用件で？」

「実は君に儲け話を持ってきたのだよ」

「ほほう？」

暖炉の上に貼られた大きな絵画はなんだ!?

明らかにリムルの絵。それもイングラシア郊外、ドラゴン退治の時の。

シズが大人びた姿で、リムルは白衣を着て白翼を生やしドラゴンと対峙している神々しい姿なのだ。

誇張表現だ。クラフターは唾棄した。

鶏みたいな翼じゃない。蝙蝠、漆黒の翼だ。

あとリムルはあんな慈悲深い顔しない。

それと我々が何故描かれていないのか。そこが1番不満点であり減点である。

「……彼等は大丈夫ですか？ 急に荒ぶり始めましたが」

「気にしなくて良いよ。いつもの事だから」

これは我々への挑戦だ。

我々の憤慨をリムルは嘲笑しつつ、悪人顔と取引を続行。これでは何方が悪人か分からない。いや両方と見た。見た目が良くない。

「絵を見て何か思うところが……」

「無視！ それより話をしよう。ちよつとした企画があるから、その総責任者を任せたいのだよ。どうだ、頼まれてくれるかな？」

絵画を殴って撤去。 貼り直す。

スケルトンの絵になった。 やり直す。

「その企画というのは、どういふものなのですか？」

「連邦で武闘会を開催するから、その手配を任せたい。 興行だね、つまり大衆向けの娯楽を提供して欲しい。 1万人収容出来る闘技場を用意し、その中で闘う者を観戦したり応援するんだ。 一般市民にも観戦権を与えて入場料を取る。 いや、最悪無料でも良い。 連邦

が宣伝出来るならな」

仁王立ちする大型生物の絵になった。 やり直す。
女子と豚の絵になった。 やり直す。

「1万人規模の移動……街道が整備されてるとはいえ、その人数の運搬に道程の食糧手配……更に観客の受入体制。 寝泊まりする場所の提供、動く金はそれだけで膨大になりそうですね」

「そうだろう、そうだろう。 宿泊施設はコイツらのお陰もあって結構な勢いで整備されているから大丈夫だ。 問題は採算率を高める必要がある点だが、その呼び水として今回の企画である武闘会を餌にする」

「面白い」

縦2ブロック分の人の絵になった。

ふむ。 欺瞞リムルよりマシだ。

だが壁に対して寂しさが残る。

やはり大きな絵だ。 それに折角だからと、絵の後ろに通れる空洞を作る。 看板を用いた隠し通路だ。

やり直し、大きなケーキの絵でコレを隠す。

これでヨシ。

クラフターはザマアとばかりに飛び跳ね回る。

ついでに嫌がらせと、1ブロック分のクリーパーの絵を追加。 これはこれでシヨッキングな絵だが、悪人には良薬になるだろう。

「こういう事はプロに任せの方が良いだろ？ ミヨルマイル君、まさか自信ないの？」

「は、ははははは！ これはこれは手厳しい。 リムル様もお人が悪い」

「はっはっはっは。 だよね、だよね！ ミヨルマイル君なら余裕だよね！」

呑気な者だ。気付く頃にはもう遅い。

欺瞞情報を拡散していた罪を味わえ。

真実とはどんな嘘にも耐えられるものなんだ。

そうだ。部屋の隅に額縁も貼ろう。収めるはスライムボール。リムルの代わりだ。コイツはこれくらいで良い。寧ろ贅沢すらある。

「君い、これは大きな金が動く事になるよ？　当然、理解出来るよね？」

「ふっふっふっふ。ご安心を、このミヨルマイル。其の辺は得意分野に御座いますれば……きつとご満足頂ける結果を出してご覧に入れますとも！」

「頼むよお？　あ、お前らも道連れだから」

「はっはっはっは！　……はあっ!?!」

やっと気付いたか。

悪人を成敗して、気持ちが良い。

「リムル様がケーキが変わっている!?!」

「……まさか端にある額縁のボールが俺？」

「ぬおおお……っ、やはり絵を気にしていたのですな……彼等もドラゴン退治に参戦していたのに描かれなかった事が！　ですがお許し下さいリムル様！　既に著名人の彼等を堂々商館に飾る訳にはいかなかったのです！」

「お前らの目には俺がこう見えてるの？　いやスライム形態の時はこんなモンかもだけど……触ったら飛び出してきた!?!　え、なに!?!　お前らの額縁ってこういうモンなおお!?!」

今更に驚く事良し、欺瞞は云う勿れ。

クラフターは笑顔でジャンプした。

145. 大規模建設と迷宮妖精

「聖騎士はヒナタ含め連絡役以外は帰還、シズさんもユウキに怪しまれない内に学園に帰った。後はヒューズにも警戒するよう連絡し終えた。ファルムス攻略はクロに任せてヨシとして、今は闘技企画を進めなきゃ、か」

ゲルドを筆頭に大規模建設……闘技場建設が始まったから、クラブターは嬉々として腕を振るう。

辛辣同志に通訳して貰いつつ、協力しつつの建築でいて尚、興に乗る。リムル達が書類や本と睨んでブツブツ言っているのは気にもしない。いつもの事だ。

シズやヒナタが帰ったのは残念だが、地下鉄に大層驚いてくれたからヨシとする。

……シズの暗黒微笑だけは良くないが。

「ジユラの大森林が領土になった関係で、住う魔物の挨拶対応……これは、まあ良いとして……」

「挨拶してくる者達もですが、闘技を観戦する者、参加する者、方々からの受け入れの準備をしなければなりません」

「頼むよりゲルド。建築物は得意なアイツらとゲルド達に頼んでいるから……部下達の話がここまで膨らむとは思ってなかったけど、夕日で転ぶつもりはない。寧ろコイツらの存在が1番の問題。この際だから精々利用してやるくらいの気持ちだけど……！」

「ははは……」

首都郊外をスコップやツルハシ、斧を振り回して整地。円形の外壁を石ハーフブロックで組み上げる。

内部は摺鉢状にし、窪んだ中央を囲む様に階段ブロックを敷き詰める。椅子にするのだ。

特別な席、部屋は豪華にする予定だが、今は基礎だ。ゲルド達は細かな部分や設備工事、建造物周辺の道整備などをしている。余裕が生まれたら手伝う。

「この際だ、通訳してくれないか」

「ゲルドさん、どうしましたか？」

「植林場を現場に作ってくれたのは有難いのだが、どうして一瞬で生えるんだ？　しかも中間を切っても倒れないのは何故だ？　彼等は中間や根元を切った後、宙に浮く残りを上向きに切っているが……葉に対しては上に乗ったり鋏で伐採し回収する者もいる。苗木が落ちてくるのも謎だが、種類によっては林檎が落ちてくるのも謎だ」

「そういうものだから、としか答ええないと思いますよ。私もですが」
「受け入れる他ないのか……」

大規模工事でいえば、魔導王朝サリオンへの街道整備も発生している。

ひたすら石ハーフ等を敷く長距離工事であるが、開通した時の達成感と光景を味わう為に同志が頑張っている。

村人から見たら苦行なんてレベルじゃないらしいが、我々は作るのが生き甲斐だ。空の下、楽しくやらせて貰っている。座標計算も。なに、地下鉄と比べたら明るい話だ。堂々作れる。この喜びを味わえる。

資源となる石等を地下や山で掘採し、それを用いて建造物や道を作る。

マインクラフト万歳。

ツルハシ、スコップ、斧。　どれが楽しいかな？

「あああ……森が！　管理が！　生態系が！」

「大変、お姉様が発狂してます！」

「おいたわしや姉様」

「ドライアドのトレイニーさんがまた……開拓に犠牲は必要とはいえ……」

「ヴェルドラ様に顔向け出来ません（泣）！」

「離れて植物村人達が騒いでいる。」

「そうか。泣くほど開通が楽しみか！」

物作りに携わる端くれとしては、応援や期待を受け、創造物が利用される事は喜ばしい。

クラフターは不思議と腕が軽くなる。更に森を切り拓いた。

道をどんどん切り拓こう！

単調作業に集中していると心が洗われる。

道の端には白樺を生やし整えた。

いやあ。楽しいなあ……。

「いやあああ!?! 木が、森が、白く！ 白樺に染まっていくう

……………」

「ドライアド様が気絶したあああッ!?!」

ゲルド麾下のみならず、傀儡国から来た元奴隷や捕虜……作業員まで騒がしい。

振り返れば植物村人が倒れていた。奇絶である。なら仕方ないね、と思った。

だが歴戦のクラフターは慌てない。牛乳バケツを口に詰めとけば大抵解決するのを、この世界で学んだから。

「ゴポツ、ゴポポポポツ!?!」

「本人まで白く染められていくうう!?!」

飲み。そして楽になれ。

吐くな。飲み。もつと口を開けろ。

全く。飲ませ難くて適わん。スプラッシュポーションにクラ

フト出来ないものか。

「白樺……白いの怖いの……」

「お願いです！　もうやめてあげて下さい！」

「どうか！　どうか御慈悲を！」

別の植物村人に頭を下げられたので、此方も下げる。　礼儀正しい者は好印象だ。

クラフターは頷く。

その気持ちを忘れてはならない。

マルチにおいて必ずしも同調する必要はないが礼節を大切に。

人を助ければ、助けられる機会もあるだろう。　損得勘定で考えるなら未来への投資だと思う。

「ナニしてんですか。　白樺で森を侵すなって事です」

辛辣同志にツツコミされた。

だがクラフターは首を傾げる。　白樺は成長が早く複雑に枝分かれないから、伐採に適しているのに。

いや分かった。　白一色なのが問題なのだ。　植林場ならまだしも、という事だ。　違う苗木を植えよう（枯木は除く）。

「もうそれで良いです」

早速4つ固めて植えて骨粉を撒く。

ジャングルの木を生やした。

巨木。　デカイ。　御立派。　映える。

辛辣同志。　コイツを見てどう思う？

「なんでデカイのを!？」

いや、生えた。

「嘘乙ー！ 4つ固めるやり方はもう狙ってるじゃねーですか！ 私だってクラフターですよ舐めないで下さい!？」

チツ。 バレたか。

仕方なし。 ダークオーク（黒樫）を生やす。

「それは4つ固めないと成長しない特殊な木……私もう疲れました。遊んでないで建設は進めて下さいね……」

しまった。

クラフター、クラフトの中でクラフトを忘れた。

本望を忘れる失態を猛省。 再びツルハシを取るとブンブン振るう。 石ハーフを敷設する。

「白い……ふふふつ……道まで白い……」

「しっかりお姉さま！ あそこをご覧下さい、別の木が生やされ始めましたよ!？」

「樫や松があります！ なんか本来森にない木もありますが、白くないです！ 寧ろ黒い感じですよ!？」

「あら本当ですね……心が清らかな黒に染まる様で癒されます……」

「清らかな黒ってナニ!？」

「目の光が失われていってますよおお!？」

グロウストーンと木フェンスを併用した街灯を一定間隔で製作しつつ、道路工事は進められた。 暇があれば傍に植木をする。 松明も忘れない。 だが目に付く所、光量補填箇所はグロウストーン埋め込み式とした。

「何故、道を作るだけで大騒ぎになるのか」

「その疑問はたった一言で解決します。　アイツらがクラフターだから、です」

「我々が達せない領域か」

「逆に達しないで下さい。　アイツらは今回、社会貢献しているだけマシですが……普段は好きな事だけやって好きな物を好きなだけ作って、好きな様に生きていますからね。　感謝より怨みが募っても仕方がないレベルで」

「リムル様の心情が察せられる……」

一方で都市郊外、闘技場もみるみる進む。

戦闘見物をする施設と聞いているので、外壁や床は三重構造にした。

黒曜石をサンドするように内外を化粧ブロックで覆っている。実用性のみならず見た目も気にしてこそクラフターだ。

「おーい、仕様変更を頼みたいんだけど」

リムルが来た。

どうだ見る。　外壁は終わった。　後は内側だ。

「いやあ心苦しいんだけど通訳してくんない？　　ちよいと大きく直すだけけど。　お前なら仕様変更も楽勝だろ、じゃあヨロシク！」

「——だそうです」

なん……だと？

この広さに合わせた外壁を造ったのに！

大規模建設の手直しとか、どれだけ大変だと思っているのか。　ましてや黒曜石。　これを撤去するだけで時間が掛かるのに。

「そう荒ぶるなよ、普段馬鹿みたいに作ってるんだから良いだろうに」

久し振りにキレちまったクラフターは、思わず手が滑る。飛んでいったのは弾丸だ。

「恐ろしい早撃ち、俺じゃなきや見逃せないね」

リムルの眉間を貫通して後頭部から抜けていく。

スライム野郎は平然としている。　どうやら拳銃は効果がない様だ。

「てか、なんで拳銃持ち歩いてるの？」

「コイツらにとって新アイテムですからね。　いつ何時でも実験出来る様にしたいのでしよう」

「物騒過ぎるだろ。　今更だけど」

次は戦車をぶつけよう。　ただぶつけた結果は既に得ているから、エンチャントを施したモノを。

「まあでも……この現場とのやり取り、前世を思い出すなあ。　背広側だったけど。　そして発砲された事はないけど！」

「……平和な国だったのでしようね。　ですがこの国、というより世界は危険ですよ」

「……流石に言い過ぎたよ。　だがお前らだからこそ頼めるんだ。

普段はアレだけだな」

「——だそうです」

急にやる気が出てきたので頑張ります！

効率強化エンチャントを施された気分。　近くにビーコンがあるかの様だ！

「手の平クルクルしてんな」

「頭はクルクルパーですよ」
「通訳ちゃん容赦ないね……」

外壁を改変していく。
マルチクラフトなのもあり、早く進んだ。

「話変わるけど、打ち上げの方はどう？」
「……宴会？」

「それもあるが宇宙関連」

「ロケットを作り始めました。載せる物はアイツらの1人で良いかなど。死んでも構いませんし」

「何故だろう、叱る気が起きない」

「永遠の宇宙旅行をプレゼントするのでも、空中で汚い花火になるのも希少な記録です。特に打ち上げ第1号だと聞けば、ヤツら馬鹿なんで喜んで犠牲になってくれるでしょう」

「その話、ベスターに？」

「既に」

「あ、そう……まあ良いと思うよ？　打ち上げ場所や計画の詳細はちゃんと教えてね。あとアイツらが死んでも責任取らないから」

「構いません」

「でも無関係者は巻き込むなよ」

「勿論です」

「ヨシ！」

良くないぞ。闘技場の話だ。

ただの摺鉢状の建物。美しさこそ意識したもの、面白味に欠けるのではないか。

ここは創意工夫が必要。闘技場である事を利用し、中央部に注水して水上戦が出来る様にする。床や観客席の間に水路を設け、スイッチによるディスプレイ操作で水が中央部に流される仕様にしてみた。丁度高低差も良い塩梅だ。水バケツも想像より多く

要らない。

ついでに中身を切り替える事で花火を上げるのも乙である。取り敢えず試験的に上手くいくか確認。　ヨシ。

「こ、これは……」

「どうしたゲルド」

「彼等が仕様でない事を」

「水が流れる様にしたのか。　花火も上がってる、また勝手な真似を……いやでもコレはコレでアリだな」

「宜しいので？」

「面白いから許す！　　そうか、やっぱアイツらは……妬ましい」

「リムル様？」

「気にするな。　時々休めよ？」

「はっ……リムル様も」

ボートを用意しろ。　水は用意した。

食い物はゴブイチ、ミヨルマイルや他の者が手配すると聞く。

我々も多少出すが、その分野に於いては後れをとっている。

我々の馴染み食糧、ベイクドポテトやスイカじやラーメンやハンバーガー等に対抗出来ない。　他にも餃子、天麩羅……料理の幅も味も大差ある。　比較するのも烏滸がましい。　そして妬ましい。

料理研究している同志もいるが、本家には未だ敵わない。　建物にしても張り合うには更なる努力が必要だ。

……腹減った。　ベイクドポテトをパクつく。

「アイツらも休憩か？　　空なんか見上げて」

「そうじゃね？　　ふかし芋食ってるし」

だがそんな苦難もクラフターは愛した。

ドンと来い。　上手くいったら詰まらない。

上手くいかない事を思う様にするのが開拓であり、生きた証を打ち

立てるのが建築だ。

今もそうして生きていく。他者に理解されずとも、自己満足であろうとも、人生に意味を持たせ、楽しければそれで良い。それが行き着く答えである。

自己肯定し莞爾として頷いた。

クラフターはツルハシを再度振るう。甲斐と達成、他にも作りた
い事が山ほどある。

「早いな、また作業始めたぞ」

「良く楽しそうにやれるよなあ。俺達なんて捕虜だし、敵国の為にやる気なんか……」

「今更なんだ。何かを残す、その意味をアイツらから教えられている気がする」

「そうなのか？」

「もう少し頑張るか」

「……仕方ねえな、やってやんよ」

近くの作業員もツルハシを振るう。

そうだ。 そうしなさい。

クラフターは大歓迎だ。その点、シズとヒナタにツルハシを渡しそびれている。失念していた。

「彼等のお陰で、捕虜の者達もやる気を見せています。リムル様はコレを見越して？」

「えっ？ あー……そんなとこだな！」

「流石ですな！」

暫くすると、いつかの羽虫までやってきた。

例えばクラフターの雰囲気もなくは無理。我々の熱意に釣られてやってきたか。 歓迎する。

「だから〜！　この場所はアタシ達が占拠したって言うてるでしょ！」

「そうは言っても、此方もそれを認める事は出来ないのだ。今リムル様にお伺いをたてるから、暫く待って頂きたい」

「ヤダー！　だつてアタシ達、前の迷宮を例の人間達に譲渡してこつちに来てるんだよ!?　アンタ、そんな行く先の無いアタシ達を追い出そうってワケ？」

「そうは言っていないでしょう。　ともかく、コソつと彼等のチェストを漁ろうとするのはやめて下さい」

「チツ。　目敏いわね！　アンタ、そんな細かい事言ってる、ウチのベレッタが黙ってないヴァッ!?」

叩き落とす。　チェストを漁った罪だ。

前言撤回。　羽虫を歓迎出来ない。　盗難は重罪。

気持ちちは分かるが。

スポナー部屋や廃坑のチェストのみならず、村のチェストも村人の目の前で堂々開けるクラフターである。　俺の物は俺の物。　お前の物も俺の物なので。

……やはり羽虫もクラフターであった。

「いてて……暴力反対ッ！」

「今度は何事……って、ラミスじゃねえか。　何やってんの、お前」

「や、やつほ〜！　元気だったリムル？」

「……ははあ。　こつちに引越して迷宮創ろうとしたな？」

だとしても認める訳にはいかない。

村人相手なら兎も角、クラフター同士は御法度。

相手によつては問答無用に八裂きにされていた事だろう。

これはトラップチェストの導入を検討か。

「え……いや、そんな事、無い……と、思うような、思わないような、

そんな感じ……かな？」

「つまり正解って事か。 お前なあ」

「あは、あははは……」

「そんなラミリスに良い物件を紹介致しましょう」

「えつまジ？」

「都市の地下を紹介しようと思っただけ？ アイツらが造った地

下空間があるんだ」

「案内しなさい！」

リムルが怪しく、羽虫を誘導。

ミリムの件もある。不安になりついて行けば、案の定だった。

「ようこそ、魔都の地下都市へ。 機龍の格納庫もあるぞ！」

「おおー！」

「最近はロケット作りまでしている」

そこはジオフロント。 憤慨するクラフター。

ミリムの一件で懲りなかったのか。 他人の創造物をぞんざいに扱った。 扱い過ぎだ。

ビル崩壊……何徹もして修理した悪夢が今蘇る。

「色々気になるけど、ここは既に空き地が無いっていうか、例の人間の縄張りみたいで怖いし……別の場所無い？」

「チツ、アイツらに嫌がらせが出来そうだったんだが……まあでも生活基盤を作るところからだよな。 闘技場の近くに迷宮を作るのはどうだ？」

「といますと？」

どうも暴れる様子がない。

だが警戒しよう。 もし羽虫が住み着く様なら害虫指定不可避である。

最悪は殲滅だ。　　ミリムの2の舞、3の舞は勘弁願いたいのだ。

「闘技場は娯楽や力比べの場としてだけでなく、商売、人寄せをする目的がある。　　だが毎日するものじゃない。　　じゃあ毎日やっても良さそうなもの……地下迷宮があつてその攻略を冒険者に呼び掛ける、とか」

「具体的には?」

「迷宮をラミリス主導で創ってもらい、その管理運営を任せる。　　で俺達は迷宮に向かう冒険者の懐から利益を得る。　　そしてラミリスは迷宮と仕事、そして俺から小遣いを得られるという寸法。　　お互い協力が必要なアイデアだが、どうだ?」

「え!?!　　つて事は此処に迷宮創つてイイつて事!?!　　しかも無職の引き籠もりという不名誉な現状を打破出来る!?!」

「そうでもなさそうだ。」

「嬉々としている。　　通訳が今いないから内容は不明なれど、何故か我々までワクワクする。」

「間違いない。　　クラフト話だ。」

「あ、あのう……アタシに小遣いつて、本当に本当なの?」

「マジだよ。　　ただどれくらい利益が出るか判らないけど。　　まあ経費だなんだと色々掛かるから、それを差し引いて出た利益の20%でどうよ?」

「それって、どれくらいになりそうなのさ?」

「そうだな、1日1000人くらいの冒険者が来るとして、お前の取り分は金貨2枚位じゃないか?」

「げええ!?!　　そんな大金が貰えるでありますか!?!」

「あくまでも予想だし、上手くいくかどうか判らない。　　でも住み着くつもりなら、お前に損は無いんじゃないの?」

「クラフターが増え、創造物が増え。」

素晴らしい。クラフトは広がリング。
ウエルカム、マインクラフトの世界へ。

「なんならコイツらを手伝わすよ。物作りに関しては並々ならぬ連中だぞ?」

「……厄介払いしようとしてない?」

「やだなあ、そんな訳ないじゃん」

「本音は?」

「その通り」

「ちよい!」

「でも真面目な話、連邦に住むという事はコイツらがより身近になるって事だ。早めに慣れた方が良い」

「うわー、松明だらけにされて面倒が増えそう」

「松明如きで面倒だって言ったら生きていけないぞ。この後、君の元部下に挨拶しにいったらあげた方が良い。目のハイライトを消して絶望してるから」

「は?」

「トレイニーさんと妹さん達だよ」

「トレイニーちゃん!」

慌しい羽虫だ。今度は地上に飛んでいく。

そこには植物村人がいる。ダークオークや松の木にブツブツ鳴いていた。

よく分からない事をするものだ。伐採したいならすれば良いのに。

そして生やしたいものを生やせ。この村人は骨粉もナシに木を急成長させる事が出来る。

「ふふふ……森が白黒しています……」

「トレイニーちゃん、どうしちゃったのさ!」

「ラミリス様……お久しぶりでございます。例の人間達に森の管理

者の座を奪われてしまいました。今や森は白樺と偶に黒の……」

「リムル！　なんとかしなさいよ！　トレイニーちゃん可哀想じゃない！」

「何とかしてきたさ。結果はコレだよ。取り敢えずポテチ食わせとけば回復するから大丈夫」

「扱い雑過ぎツ！」

「ラミリスも食うか？」

「戴く！」

まあ好きにするが良い。

クラフターの数だけ考えがある。自己流を強制しないし、否定もしない。

羽虫と鳴き合い始めたのを見ると、知恵を合わせている様に見える。それもまたヨシ。マルチ故の発展に期待する。

「———迷宮は闘技場の近くに創る事にするわ。案があれば言つて頂戴」

「トラップや魔物は欠かせないよなあ。その辺大丈夫そう？」

「魔素があれば勝手に湧いて住み着くよ。トラップは複雑でなければ作れる」

「どうせなら凶悪にしようぜ？　爆発する宝箱とか首と胴体がお別

れしちやうヤバイ系とか！　試験はコイツらにやらせよう、死んで

も問題ないからな！」

「……よっぽど溜まってるのね」

「いっそ地形生み出そうぜ！」

此方も山程やりたい事がある様に、向こうもあるのだ。良い事だと思う。

「ムリムリ生めない！　そんなエネルギー維持出来ないよ！」

「ムリは嘘吐きの言葉だアツ！」

無理しない事だ。

あるのは大規模建築に挑んだは良いが、途中で意欲が尽きて建設放置。 未完成の建物が鎮座する事態。 或いは妥協しての粗悪品が生まれる事態である。

「やらずしてどうする！ それとも迷宮妖精兼魔王様が出来ないとしてもっ！」

「ダメなものはダメなんだって！ そもそも魔素だってどうするのさ！ 低濃度を浅い階層だけに広げるなら兎も角、深い階層まで考えると問題あるよ！ その時はアンタが魔素放出するなり手伝いなさいよ！」

「くっ！ ヴェルドラがいてくれたなら！ 流石にまだ無理か!?!」

「諦めなさい」

「いやまだだ！ 癩だがコイツらに相談するぞ！ 通訳ちゃん！」

リムルがハアンと鳴くと、辛辣同志が駆けて来た。 ナニか。我々に伝える事があるのか。 また仕様変更なら、今度はエンチャント戦車をぶつける。 ネザライトの剣も可。

「はいはい、どうしました?」

「コイツらに火山地帯とか創らせる事って出来るかな?」

「たぶん」

「マジで!?!」

「聞いてみましょう」

バイオームを再現出来るか聞かれたから、なんちゃってバイオームなら出来ると答えた。

火山はネザーをイメージすれば良いだろうか。

溶岩バケツを大量に用意すればイける。
雪原は雪を掻き集めれば出来るだろう。
珍稀なキノコバイオームもキノコや菌糸を用意すれば、それとなく
再現出来るよう。

「だそうです」

「うーん……でも流石に温度や自然を感じさせるモノまでは難しい
か」

「残念ですが」

なんだ。 答えたのに不満な顔をされた。

ムーシユルームを見せようと思ったのに。

あのキノコが生えた牛はキノコバイオーム特有の希少生物で、その
有用性も高い。 ボウルで乳搾りすればキノコシチューが取り放題。
飢える事がなくなる。

悪戯で殺害したり、キノコを鋏で採取、ただの牛にしなければ良い。

「なら竜を連れて来るのだ！」

懐かしくも聞きたく無い声が聞こえた。

渋々振り返り現実を確認。 やはりミリムだ。

「え？ 何で此処にいるの？」

笑顔満開ピンキーストーム。

ジト目全開クラフター。

またナニか破壊する気だろう。 させない。 ワルプルギスの時
と異なり、今の我々の装備はひと味もふた味も違う。

銃や戦車を試す。 ネザライトの剣は有望。

「フフン。 何やら面白そうな事をしておる様な気がしてな。 ワタ

シを除け者にするとは、いい度胸だな」

「いやスマン。除け者にしたつもりは無いよ。出来たら招待するつもりだったし」

「そうなのか？　だがこういうのは計画の内から参加するのが面白そうだ」

「まあ、そうかも。　ところでお前の国は大丈夫なの？」

エンダーチエスト、作業台に触れ始める創造主。

武器の選別……ッ！　吟味開始……ッ！

頭では目紛しいOSIOKI計画……ッ！

クラフターの目、殺る気スイッチオン！

その色は出力中RSの如く紅い。

荒らし許さん慈悲は無い。

「まあ、な。ワタシは優秀だから……決して、勉強が嫌で逃げて来たワケじゃないの、ダア……ッ!!」

「ミリム……ッ!?!」

鉄から即席戦車（エンチャント付加）をクラフト、主砲で吹き飛ばす。

間髪入れず戦車上部に取り付けてある機関銃を砂埃に向けて撃ちまくる。他の者も倣う様に携行拳銃を乱射。瞬時に弾幕を形成させつつ、負傷スプラッシュポーションを投げまくる。動きを封じた隙に光の矢を放ち位置をマーキング。障害物越しでも見える様になると、狙撃したり地面を掘り進んで足元を掬う様に剣で攻撃。そのままTNTをギツシリ詰めた地面の中に引き摺り落とし着火。地面を盛り上げる大爆発の中に沈めた。

「なんて事してくれてんだ……ッ!?!」

「ちよ、ちよつとミリム大丈夫!?!」

全て刹那の出来事。

インベントリやスロットから即座に召喚ないし、装備・展開可能なクラフターだからこそ出来る荒技である。

村人だったら、こうはいかないだろう。

だがここまでやってもミリムを倒せない。諦観に似たものも感じている。

「けほっ……また面白い物を作ったのだな！　お前達といると飽きないのだ！」

ほらね？

笑顔満開ミリムが砂埃の中、起き上がる。

「ミリム、怒って良いぞ。少なくとも俺は怒りたい。地上に馬鹿

デカイ大穴開けやがったからな!？」

「瞬時に埋め立てられるんでしようけどね」

「そうだな……って、ミリムごと埋め立てようとするんじゃない?！」

溶岩を流し込みつつ、後は普通に土で埋めていく。普通に脱出された。

駄目か。だが何故かネザライトを試す気になれなかった。それは最後の手段だからだろうか。そ

「大きな爆音がしたので駆け付けました！」

「何事ツスカリムル様！」

「ああ、リグルにゴブタ。見ての通りだ。ミリムとアイツらが戯れ合っただけだよ」

「戯れ合いで……さすが魔王様といますか」

「この人達も命知らずツスよね……」

また別の手段を考えよう。

今は整地と建設、そして頼まれるであろう迷宮創りの手伝いだ。
面白い事は続く。 剣よりツルハシとスコップの手は止まらない。

146. 嵐と荒らし

「大森林に住まう魔物達への挨拶、疲れるよ」

リムルがゲンナリしているのは恒例だから、クラフターは気にも留めない。

それより闘技場と迷宮細部の設備工事と試験運用に注力している。特に迷宮は手伝っているだけで楽しい。元々ダンジョンやアスレチック製作の経験があるクラフターだ。

罨の設置は勿論、褒美となる宝石やツールをチェストに入れるのも忘れない。

細かな事は辛辣同志通訳の下、羽虫ことラミスと相談しつつ楽しんでる。

「疲れてるのは、お前らの所為もあるんだからな!? 特に上位種族絡み! 100年くらい戦争と掠奪行為をしてきたっていう牛頭族(ゴズ)と馬頭族(メズ)をシメたのは許すけど、長鼻族(テング)からの苦情は非があるぞ!」

喚くスライムを無視。迷宮にトラップチェストを仕掛ける。

TNTを組み合わせ、開けたら爆発する様にした。みた。

なんちゃってバイオームもクラフト中。途中の階層にはセーフハウスも造る。

内装は釜戸、作業台、共用チェスト、ベッドといった拠点セットだ。食糧も置く。

見た目も拘る。雪原ゾーンならカマクラだ。ジャングルならツリーハウス。砂漠は砂岩の家。

「テングの代表で、モミジという娘が挨拶に来たんだよ。テングといても鼻は普通で、少し肌が赤いくらいの。山に住んでいるけ

ど、山の鉱物資源採掘や、既に住んでいる者は構わないって話をされた。だけど、それ以上は傲慢な態度で不干渉を望んできた。俺らの庇護は要らないって。　だがそれも最初の話!」

ラミスによる魔法も加わり、10階層毎にポータルも設けられた。入ると100階層構造迷宮の内、95階層に飛ばされる。

この階層には休憩所となる森を基調とした町を創った。住民は植物村人や羽虫仲間等だ。取引も出来る。緑に溢れていて気持ちが良い。此処で存分に休んで装備を整えてから再出発して貰いたい。ただし96階層へは、ちゃんと進んで来た者にしか行けない仕様になっている。この辺も魔法。不思議だ。

……尚、我々が地上開拓を進めた所為で、棲家を追われた森の住民達の避難所にもなっているらしい。

だがクラフターにはどうでも良い話だった。

「その翌日、ナニがあつたと思う?　モミジ達が号泣して会いに来て『申し訳御座いません!　人間・スライム風情だと見下していた事をお赦してください!』と乞いて来たんだぞ!」　詳しく聞けばお前ら、山にトンネルやら豪邸やら作るに飽き足らず、棲家の山を平らに整地しようとしたんだってな?!　俺がテング達に嫌がらせしたみたいになったじゃねえか、巫山戯るなよ!」

煩い。取引でもなしに。

辛辣同志を呼んで収めてもらう。作業の邪魔だ。

「今度はどうしたんですか?」

「聞いてくれ通訳ちゃん。コイツら、森に住まう知性ある魔物達とトラブルばかり起こしてるんだ」

「いつもの事じゃないですか」

「まあ、そんなんだが。ただ森が連邦領になった以上、森に住まう多民族とギクシヤクしたくないというか」

「手遅れですが一応、言ってみましょう」

なんか云われた。

知性ある村人や集落と問題起こすなど。

面倒だ。地上の広大な森に、一体何種類の生物が住まうと思っ
ているのか。

それも知性の有無で分別しろと。

全てに配慮出来る程クラフターは器用ではない。

同時に善人では無い。悪人のつもりも無い。

差別するくらいなら無差別に対応する。

その方が公平だ。或いは利になるか否かで判断する。やりた
い事をやる。好きに振る舞う。それが世界との関わり方で生き
方である。気紛れを混ぜれば、ひとつの人生だ。

「ああそうかよ!?　じゃあ言い方変えさせて貰うわ、お前らは”荒
らし”だ!　それも森だけの問題じゃないレベルの!　少し、い
や大きく自重しろ!　”テンペスト”(嵐)の意味が違う意味に
なっちまう!　手遅れだけど!」

巫山戯るな。

キレたいのはクラフターだ。

何人たりとも創造の自由を阻害する権利は無い。

付与した覚えもなかった。

「世の中、自分の思い通りにならない事ばかりなんだぞツ!」

その割に自分の思い通りにさせようとする。

その差は何だ。　教えろ。

「上等だ!　分かせてやる!」

リムルが怒る。

先に仕掛けたのは向こうだ。

スライム形態から水を飛ばしてきた。何を馬鹿な、と堂々受ければ痛い。刃の如き切れ味に驚愕である。水が痛いなんて。

ファイヤーチャージを撃たれた訳でもなしに。

対して興味深く観察する辛辣同志。

褒めこそすれ、叱りやしない。我々もそうする。

「水刃ですね。水圧カッターと言うべきでしょうか、IRPの武装に出来たら面白いかも知れません。距離、圧力の問題がありますが……」

「今の距離で、この攻撃喰らって首繋がってるのオカシイからね？
今更驚かないけども！」

だが不思議な攻撃なんて数多ある世界。直ぐ気持ちを切り替えて戦闘態勢へ。

取り敢えず左手に盾。右手に鉄剣。防具もダイヤ装備の耐久値をケチって鉄装備。だが革より良い。

「武闘会で白黒付けても良いけど」

リムルが人型になる。手には既に刀。

目は怒りに燃え、引き攣った笑顔を浮かべる。

「大衆の面前で恥をかきたくないだろ？」

クラフターも笑顔で対応。

剣を振るって挑発行為。

上等。何方が上かな？

「勝っても負けても思う様にならないと思いますけどね。寧ろクラ

フトを宣伝出来たと嬉々とするでしょう」

「あー、勝訴も敗訴も笑顔で掲げられちゃ困るな。　なら、尚更に此処でお仕置きしないとなあ!？」

「あまり迷宮を壊さないで下さいよ」

「ラミスとコイツらが幾らでも直すさ」

「怒り心頭ですね……ラミスさん呼んでこよ」

この際だ。　滅却するのも有りか。

ただリムルに勝てるだろうか。　初期の頃なら兎も角、今は強い。人の時の姿がシズ似なのも殺り難い。

「先ず潰す!　次はベッドの上だ!　俺が満足するまで殺りまくる!　復活した瞬間が死ぬ瞬間だ、良いだろ、どうせ生き返るんだからな!？」

剣戟を始めるリムル。　早い。　軌道が見えない。

此方は剣ガード。　盾も使う。　嵐の様に激しい剣劇に耐久値が擦り減るが、互いに様子見でしかない。

「少しは!　大人しく!　しやがれツ!」

成長したなあ。

往なしながら、しみじみ思う。

多忙の合間を縫い、ハクロウとの訓練や自主練をしていたリムル。それを陰から見守っていた創造主。

嫌っているが、仲間のリムル。

努力する姿まで憎めないのだ。

まあ隙あらば仕留める気持ちもあったが。

「ちよつと何してんのや!？」

「見て分からない?　戯れあってるんだよ!」

「殺意に溢れる戯れ合いね!？」

「これじゃ足りない位だ!」

「その割に本気じゃないみたいだけど。いや本気出して欲しくないけど!」 迷宮が壊れて迷惑するから!」 というか既に一部の壁が崩れてるんですけど!」

直ちにヤメテエ!？」

ピタリと動きが止まる。

反撃しようと思ったが、此方も止めた。無粋な気がしたからだ。なんだかんだリムル達の影響を受けているのだろう。だとして、これも自由意志での行動。束縛とは違う。ならこれで良いのかも知れない。

「……まあ良いさ。戦争が起きた訳じゃないし。迷宮にトレント達、森に生きる者達の居場所も作ってくれたし。それに、なんだ」

刀を収めつつ、急にしおらしくなるリムル。

シズの姿の所為か、不覚にも嬉しくなってしまう。彼女を助けた経験は今でも自慢なのだ。

「お前ら奴隷商人からエルフを助けたらしいじゃないか。東の帝国絡みだけ……その者達の棲家も迷宮の同じ階層に用意出来そうだからな。何も考えてない様で考えてるのなら……とにかくだ!」

今回はこれくらいで済ませてやる!」 勘違いするなよ、許した訳じゃねえからな!」

頷く創造主達。

やはりマルチは良いなど。でなければ、この経験を互いにする事は出来なかった。

確かにそれ故の問題はあるが、それ以上の利益を得る事が出来た気持ちになる。

それはダイヤモンドを得た時の様な歓喜ではなく、内側から湧き上

がる温かさだ。

「アタシも許した訳じゃないわよ」

「へ？」

「迷宮直しなさいよ！ ほら、その壁！」

「……俺は書類に忙しいから。 じゃ！」

「ちよつと!? アタシとコイツらのスキルがあるといってもね、ゼ

ロコストの最強無欠じゃないのよ!?!」

「迷宮創り頑張れよ！ 収益は君達次第！」

「待てリムルーツ！」

仲良く追いかけてつこをする羽虫とリムル。

そうだね。 それもマルチだね、と頷く。

「私も許した訳じゃないですよ」

空気化していた辛辣同志よ。 突然どうした。

幸福感に満ち溢れた時に、そんな黒い笑顔で。

「此処に来る前、私の部屋に戻ったのですが荒れていました。 仕舞っていた下着やらレポートが床に散乱。 加えてチェストが漁られた痕跡。 お前ら……忍び込みましたね？」

スニーク姿勢で肯定する創造主。

ロケット部品や図面を拝借しました。 ロケットランチャー開発

に役立った。 礼を云う。

「で？ それはどこに？」

アイテムスロットからブツを見せた。

鉄製の棒で、先端にクリーパーカラーの卵の様なモノが付いてい

る。

金属棒は再利用型チューブランチャーで、先端に取り付いてるのは爆弾。トリガーを引けばロケット機関で爆弾が推進、飛翔させる事が出来る。着弾で爆発。云う為れば携行型TNTキャノンである。

これは凄い。凄いで。革命的だ。

威力もそれなりだし、何より携行出来るのはデカイ。流石、我々の娘だ！

「ありがとうございます。それで？」

ナニを怒ってるのか。分からず首を傾げた。

アレか。リムルに試射しなかったからか。

だが此処は閉所だ。使えば自爆と同義。クリーパーごっこは遠慮した。

「違うそうじゃない……勝手に娘の部屋を荒らして、しかも部品を私事に……アレが無いと不安定で爆発する恐れが……」

震えながら近付いてくる。

いけない。ナニかがトリガーとなり起爆動作に入ったか。ク

リーパーカーが飾りでないなら、そう云う事だろう。

全てを悟り閉目する。もう駄目だ。助からないぞ。両手で束縛された以上、盾もブロック挟みでのダメージ軽減も望めない。

「そんな馬鹿親に、宇宙旅行をさせてあげましょう。今すぐに！」

取り敢えず親孝行の雰囲気ではないのは理解出来たクラフター。

首にリードを付けられ、トロッコにブチ込まれ、大型ロケット・ランチャの場所まで拉致されると、無理矢理円筒に翼が生えた乗り物……ロケットとやらに括り付けられる。

嗚呼！ 逃げられない！

悟った瞬間、轟音と共に空より高い場所に飛ばされた。青空から
暗い星海に沈んでいくにつれ、凄い勢いで酸素ゲージが無くなり窒息
ダメージ。奈落死に似たナニか。

が、その前に大きな閃光に包まれ――。



「ただいまなのだ！ 竜を捕獲してきたぞーって、ラミスもリム
ルもないのだ。アイツらは……何処でもいる筈なのだが、どこな
のだ？」

「あら、ミリムちゃん丁度良いトコに」

「お前は……聞いてるぞ、通訳だな！ して、丁度良いとは何なのだ
？」

「あの馬鹿共は宇宙旅行に逝きましたよ。さあ見上げてご覧なさ
い。今丁度、お星様が見れますよ」

「ん？ おお！ 何かが爆発したのだ!? そして流れ星！
流星群！」

「綺麗でしょう？ 命の終わりは……」

ベッドから再起したクラフターは、未だに空から地上へ落下する自
らの遺品を見上げる羽目になる。

キラキラしている。経験値もだ。

いやあ。綺麗だなあ。

一瞬見えた星の世界の方が素敵だったが、コレはコレで。だがも
うクリアパーごっこは勘弁して欲しいと思うクラフターだった。

ユウキの陰謀

147. ヒナタとユウキ

「はい、始末書受理しまーす（虚）」
「……すみません」

辛辣同志がリムルに頭を下げていた。
予定に無い打ち上げをした為だ。　だとして我々なら謝らない。
いつもの事だ。

「いや良いんだよ、いつもの事だし？」

「マジすみませんでした」

「お仕置きする為だったんだろ。　それで何か被害が出たら怒っていたかもだが、今回は大丈夫だったし。　強いて言えば騒音被害があったくらいだ。　それに……何らか進展したなら良いじゃないか。　またひとつ、宇宙に近付いたんじゃない？」

「はい。　馬鹿が先に行ったのは複雑ですが、今回の打ち上げデータは有意義でした。　安全性を更に向上させ、目指すは月です。　宇宙ステーションも良いですね」

「夢が広がるな。　だが被害は広げるな」

「……なるべく」

世界は広い。

異世界も数多あるのだろうが、縛られたところでクラフターの道が断たれる事は無い。

この世界にしても大陸の外側はどうだろうか。

今なんて見上げれば、ほら。　月が浮かび星が輝く。　当たり前の光景でも、手を伸ばせば非日常の世界へ吸い込まれそう。

今現在に至っては、娘が星の世界へ旅立てる。

そんな気がする。嬉しい話だ。

「何でイツら嬉しそうなんだよ。新しい扉開いちゃった？」
「まあ嬉しかったんでしよう。新しい世界を見た訳ですから」
「ひよつとして見せちゃいけないものを見せちゃったんじゃ？」
「コイツら、地獄をも開拓するんだろ？　宇宙開拓なんて始まったらヤバいんじゃ」

「ナニ言ってますか。元からヤバいでしょ」

だがあの世界、過酷な環境であった。

既存の建築技術が通じない可能性もあるが、それ以前に空気が無いのがいただけない。

砂漠も寒中も雲上でも、ネザーの灼熱（溶岩・直火除く）や強力な加速度（衝突除く）にも耐える創造主達だが、虚無……奈落や空気のない「無」の世界には無力なのだ。

他にもダイヤツルハシナシで黒曜石に閉じ込める、荒らし封印の例もあるものの。

「そうだな。ヤバい件はこの地上でも散々あるからな。問題だらけだよ全く」

酸素の問題なら亀の甲羅や水中呼吸ポーションを試したい。だがあの急激な変化は普通じゃなかった。水中というより奈落に近い。

「最大の問題はユウキさんですか？」

「ああ。コイツらは世界規模の馬鹿だが、暗躍していたユウキは別の方向で危険だ。前者は自然災害だとして諦められるが、後者は完全な人災だ。何とか抑え込みたい」

「どっちも人災じゃ」

「かなり違う。堂々派手に世界を荒らして笑顔で振る舞うんだぞ。

褒められるのも、その過程で偶然や気紛れで誰かを救う事があるっただけで」

回復薬で誤魔化すのも限度がある。

あの環境用の特殊な装備が必要か。

そこら辺は辛辣同志に任せたい。

今は、と額縁に収めた地図を見やる。

「今は子供達を救い出したいかな」

リムルが割り込んできた。

相変わらず邪魔だ。

「ファルムスはヨウム達が纏めるとして、組合本部のあるイングラシア、学園にいる子供達を何とか」

「学園にはユウキの息が掛かっているのでは？　組合傘下なのでしょう？」

「ああ。シズさんがいるとはいえ、不安はある。そこら辺はフューズ君に調べて貰う。慌てても良い事は無いからな。ウチとしては悟られない様に武道会を進める」

大陸の地図、その西側にあるイングラシアを指差すリムル。

クラフターは頷く。そこにも邪魔者はいる。というか、どこに行けどもいる。イングラシアなら騎士団に追いかけて回される。

だとして、その程度で諦めていてはクラフターの名折れ。故に同志は未だ学園や水路に潜伏していた。

更に西、ルベリオスも似た様なものだ。

「大丈夫でしょうか？」

「なる様になるさ」

「災害が起きても？」

「……なる様にしかならないさ」

今日もいつも通りに過ごす。
作って造って創る世界に浸かる。

我々はいつだって、マインクラフターだ。



上層部の思惑も絡み、聖騎士団長の反乱と扱われた今回の騒動。
そしてテンペストに接触した責任を擦られ、西方聖教会と袂を分つ
事になったヒナタ。

それが教会にダメージの少ない方法であり、老師の機嫌を損ねない
方法だという事は本人や周囲も理解し弁明はしなかった。

だが納得は出来ない。本当にコレが得策だったのだろうか。
今回の件で色々と考えさせられ、個々に思いを馳せる騎士達。

クラフターの所為で求心力が低下しているとしているが、対応を
誤ったのは教会、我々ではないだろうか。

安易に彼等を邪険に扱う事は無かったのではと。

だが時すでに遅し。こうなった以上、傷口が広がる前に塞ぐべき
なのだ。ヒナタは荷物を纏めると、いつかの様に外の世界へ踏み出
る事になる。

「みな、元気で」

日が覗かせる中、彼女はルベリオスを出る。

ルミナスとしてはお気に入りを手放したくなかったし、匿う事も出
来たのだが、本人の意思を尊重し出立させた。

「いつでも妾の元へ帰って来い。ただ、くれぐれもあやつらの様に

なってくれるなよ」

と、クラフターへの敵意は相変わらずで。

他にニコラウス等、一部の側近にのみ伝えている。他には告げず出てきた為、彼女を慕う騎士団の皆も見送りもない。だが不思議と寂しさはない。

寧ろ吹っ切れた様な顔になる。シズやクラフターの与えたアレコレは良くも悪くも彼女の人生に影響を与えたのだった。

「ヒナタ様、俺もお供しますっ!」

だがそれは、他の面子も同じ事。

「フリッツ、貴方は大丈夫なの?」

部下の青年は、ついて行く事に決めたのだ。

「問題ないです。今回、自分の狭量さに気付いたんです。例の人達みたいによくに触れて学ばないとして。だから連れて行って貰いますよ。それに……教会は教会で今後とも必要とされます。

だから人手不足でヒナタ様の護衛に人数を回せないんで。まあ、俺1人つてのは心配でしょうけど、任せて下さいよ! あんな滅茶苦茶な人達がそうそう……世界にいますけど大丈夫ですっ!」

フリッツの想いがヒナタの心を温かくする。

今日まで務めてきたのは無駄ではなかった。

「フリッツ」

「はい?」

「……ありがとう」

小さな笑みは破壊力抜群だ。

機械的で綺麗だが女性としての魅力が無かったヒナタだが、ここに来て感情が溢れ始めた。

一方、フリッツも同様で。

(やべえ、俺マジ役得なんじゃ……。こんなバレたら、他の皆に狙われる！)

動揺する心押し隠し、普段通りの対応を心掛ける。

そんなフリッツの様子に気付く事なく、ヒナタは丸眼鏡を鼻の頭にチョココンと載せて、首を傾げてフリッツを振り返った。

そして、小さな笑みを浮かべたまま、

「うん。頼りにしているよ？ フリッツ」

その言葉が、トドメだった。

(皆、すみません。俺は本気になってしまった様です)

ヒナタが上司としてではなく、守るべき女性となったのは、正にこの瞬間だったのだ。

「あ！ 寝込みを襲うとかは駄目だぞ？」

「俺の事ことなんだと思っっているんですか!?!」

こうして2人旅が始まった。

ヒナタが先ず目指すはイングラシア。

ユウキは危険だし、シズ達に近付くなど警告されてはいる。だが、どうしても子供達が気掛かりだった。

(記憶にある穏やかに微笑むユウキ……。その笑顔を確かなものにす

いな……よし」

今度は明るい顔を向けられる。

止めて欲しい。碌な考えをしてないだろうから。

「こんな時こそ、普段好き勝手してるお前らの出番だぞ！ お前らが何処でナニしようとうちは知らん顔出来るからな。ちよつとイングラシアのヒナタを助けて来い、世界を相手にしてるんなら、個人単位くらい余裕だろお？」

ニタア、と君悪い笑みで詰められる。

クラフターは溜息を吐いた。命令されたり都合の良い様に顎で使われるのは嫌いだ。

だがそれ以上に暗躍してる連中は嫌いだ。

裏でコソコソしている害虫は駆除対象である。

なら良い機会じゃないか。

考えを改めれば、成る程。今まで何かする度に文句を言っているリムルだが、今回は好きにして良いと云っている。

なら好きにしよう。建材指定が無いなら、好きなブロックで造る様に、目的を果たす為なら好きにして良いのだ。

「リムルさん、嫌な予感が……」

「大丈夫だろ。ウチは知らぬ存ぜぬだよ」

クラフターは頷くと、同志に連絡を入れた。

必殺エンチャントシリーズのネザライトの剣もインベントリに入る。

IRPも準備させる。研究中の戦車や銃、ロケランも投入。

目標はヒナタ。今度はナニをやらかしてくれるのか知らないが、抵抗する奴は片っ端から斬り捨て御免である。



同志から連絡を受け、自由学園の武装化を始めたクラフター。屋上に地对空TNTキャノンを作り、校庭に水流・溶岩トラップを仕掛ける。所々に蜘蛛の巣を撒き散らし、拘束を容易にする。

対クラフター戦でも見慣れたトラップだ。

掛かれれば一晩で出来るレベルで要塞化した学園だったが、突然の事に学園関係者は騒然とした。

「みんな急にどうしたの!?!」

シズが授業を中断して駆けて来る。

どうもこうも無い。ヒナタが来るから備えている。

「ヒナタが? でもイングラシアには近付かないでつて……そうではなくても、ユウキの息が掛かる場所に来訪だなんて……」

残念ながら、此処に来る可能性が高い。

透明化ポジションで監視を続けている同志が逐一報告している。

何らかのツール等で欺瞞しているが、奴を見逃す程、我々の目は甘くは無い。

「大目に見るけど、次は大目玉だからね」

監視しているだけで、これが分からない。

とにかくだ。リムルに頼まれたのもある。ヒナタの目的はなんであれ同行し、動向を見て、それからどうこうしていく。

臨機応変。良い言葉だ。クラフターは嬉々として危機に挑む。ツルハシと首を振り回して互いに鼓舞する。

「つまり、何も考えてないんだね……」

シズが頭に手をやる。

嘆く事は無い。増援も来始めているし、IRPやネザライト、新兵器も投入される。

ロケット開発に携わる同志は来れないが、念話を聞いていれば実況を楽しめる。

「遊びじゃないんだよ。とにかく、ヒナタを止めなきゃ。ユウキが何をするか分からないもの」

弟子同士が殺し合う事態になるか。

我々？ 我々だったら、それもクラフターだね、の他人事で済ませる。

人様の人生だ。どうこうする筋合いは無い。される筋合いも無い。

「じゃあ、なんで今回は張り切るの？」

マルチだから。

助けを求められるなら助けるし、荒らしの様な災いは降り掛かる火の粉だ。故に干渉し粛清する。

ヒナタに関わるのだから、やりたいからだ。利益が出るかも知れない。同志になるかも知れない。そうでなくても、我々の障害にもなり得る人材だ。行動を把握していても良いだろう。

「本当に、優しくて強い人達」

優しさの基準なんて知らない。

それも所詮、人様の物差しだ。それに振り回される気は無い。

我々是我々でやりたい様にやるだけだ。

「うん。でもね、これからどうするの？　私はヒナタが今何処にいるか分からないよ」

目的は予想出来る。

子供達の救助だ。　ヒナタの正義感的に放置出来なかったのだから。　仕掛けるなら警備が薄く動き易い時間帯だ。　夜か早朝か。　子供達が部屋で寝静まる頃に、直接部屋に来る筈だ。　我々ならそうする。　そしてトロツコに乗せてリードを取り付けて拉致監禁。

「トロツコやリードは使わないと思うけど、他人の目を欺く魔法は使いかも。　でも凄いよ、ここまで予想出来るなんて」

馬鹿にしてるのか褒めてるのか。

何せ元の世界でも似た経験があるのだ。　他人の領地にいる村人を自領に攫う時とか。

「ごめん。　褒められなくなった」

褒める基準も他所の基準。　気にしない。

「私が気にするんだよ……兎に角、私も協力するよ。　ヒナタとユウキが衝突するなんて、間違ってる」

それも他所の基準。

だが同意しておこう。　厄介な存在がぶつかれば、面倒が増すだけだ。

などと思うクラフターだったが、その厄介者の中に自身が含まれるのを彼等は気にしない。　どこまでも自由気ままな創造主である。　そうこうしている内に、夜が来て早朝が来た。

食糧を運ぶ村人の出入りの中に、ヒナタと部下が混ざっているのを既に知り得ている。

様子を見て、行けると踏めば子供部屋にヒナタが突入してくる。そこを取り押さえる。

シズと一部同志が、ベッドの下や廊下で待っている手筈だ。

因みに隣部屋はシズの手配で空き部屋に。ここをクラフターは拠点化。ベッドを置きリスポーン地点を更新。チェストにこれでもかと武具を詰め、拠点を放棄する事も念頭にしたTNT自爆装置も組んでいる。その際は全ロストモノだが、得体の知れない荒らしに利用されるより良い。

「……学園が一晩で軍事拠点みたいにな。あの人達のポテンシャルは未知数ね」

ヒナタが小声で鳴いているが気にしない。

牛乳をガブ飲みさせたくらいで言語共通が図れるなんて思っていない。魚災の悪夢が蘇り、クラフターは顔を顰めた。

「ハハハね」

来た。窓を開錠し中に入ろうとしている。

透明化ポーシヨンもそろそろ限界だ。

已むを得ない。隣部屋に移動して、有事にツルハシで壁をぶち抜こう。

ヒナタが窓を開錠し、中に入ると子供達と鳴き合い始める。今すぐにも殴り込みたい気持ちを抑えつつ、展開を見守る。

「お姉ちゃん、だあれ？」

「そんなに警戒しなくて良いよ。リムルから話を聞いている……あと一人、クロエ・オベールの姿が見えない様だが、リムルの言った特徴通りだよ——」

長い。いつそ自爆しようか。

いや落ち着け。取り敢えずIRPにオープン・トークで座標を再度送る作業をして落ち着く事にする。

開示しての座標伝達は一応意味があつて、見聞する同志が多ければ更なる増援が見込めるのだ。面倒というものもあるが。

だが場合によっては危険だ。荒らしが見ていた場合、荒らされる事がある。

だが今回は大丈夫だろう——そう考えていたクラフターだったが、これが後にトンデモない事に発展するとは、誰に予想出来ただろうか。

事故は起こるさ。

クラフターは忘れた頃にやらかす。

クリーパー被害の如く。

「なんだリムル先生の知り合いか」

「——信じてくれてありがとう。詳しい説明をしている暇はない、一緒にリムルの所に来てくれないか?」

「リムル先生のところ? 行きたい!」

「わかった。だがもう一人、クロエという少女はどうしたの?」

「その、さつきから言っているクロエって子……だれ? 知らないよ?」

「なっ……」

まーだ時間掛かりそうですかね?

基本ジツと出来ないクラフターは、イライラが募る。そこに鎮静剤の如くヒナタの部下がやってきた。

「遅くなりました!」

「フリッツ」

迷うな。感じる。 さつさと動け。
我々ならそうする。 やはり新人クラフター特有の雰囲気は時々
見受けられる。

同時に期待した。 逸材になるやも。
やはりツルハシを持たせたい。
そして、マインクラフターになるんだよ！

「迷う必要は無いでしょう？ だって、子供達を連れ出されたら困ります」

いつかの若造、ユウキまで来た。

弟子同士の対峙。

シズが恐れていた事態が起きてしまった。

「ユウキ・カグラザカ……」

「どうやらエサに食い付いたのは2人だけ、ですか。 まあ良いでしょう。 ヒナタ、君は小物では無い。 少しは子供達（エサ）も役に立った、という事でしようか？」

共に隠れているシズを見やる。

手が震え、だけど唇をギユツと結ぶ。

今すぐ「止めて」と叫びたいのだ。 表情は哀しみ、僅かな怒り。

……シズの苦労は絶えない。 我々がいながら未だ泣く。 その
原因は馬鹿弟子にあるのは明白だ。

「最初から罨を張っていたの？」

「挨拶もなしに質問？ つれないな、ヒナタ。 まあ……他にも罨張ってたのはいるけどね。 校庭に堂々と、そして此処にも」

「……例の人達？」

「それと、僕達の師匠だよ」

「ッ！」

拳句、此方に剣撃が来たものだから、創造主は咄嗟にシズを庇い盾ガードする。

強い衝撃。抗議と不快感を伝える様に響めて見せるも、ユウキは意地悪く笑うだけ。

「あっはっはっ！ いやいや、またお会いしましたね！ こんな形で残念です！」

「ユウキ……お願い！ こんな事止めてッ！ こんなの間違ってる！」

「間違ってる？ シズ先生、一体、この中で誰が1番間違ってるんでしょうか？」

「何がそうさせたの？ 教えて！」

「……その目がいけない」「えっ？」

「その腐らず死んでいない、お前達の生き生きとしている不快な目がッ！ 僕は1番気に入らないですよ……こんな理不尽な連中、理不尽な世界。思う様にならない事を思う様にして面白可笑しく過ごす。それが出来たら、僕は、僕達、は……元の世界に置いても……どれだけ救われたでしょう……この人達が最初から居てくれたなら、どれだけ救われたか」

「ユウキ……」

叫んだり震えたりしている。

威嚇か。クラフターは壁をツルハシでぶち抜くと、戦闘力の低そうな子供達を隣部屋に避難させる。ヒナタの部下も一緒だから、なる様になるだろう。

後は師弟問題。我々の仕事だ。

「ヒナタ。君もそう思わないかい？」

「何を今更」

「母親は宗教に傾倒し、娘である君は捨てられたじゃないか。君の機械的で冷酷な性格の原因の過去だ」

「……………」

「おっとごめんね！　気に障ったかな？　でも安心しなよ、この人達も似た事してるから！」

斬りたい。　だが我慢。　交渉次第で済むなら、それが良い。

我々も全ロストは勘弁。

「この人達にも娘がいてね。　といっても自己流で作った肉人形、ホームクルスみたいだけど。　ハイクオリティでね、見た目も知識も殆ど人間と変わらない。　だけど、かなり冒瀆的な作り方をした挙句、酷い実験をしたみたいでね。　ボロ雑巾にして飽きたらポイだ。　可哀想だよね？」

「……………そうなの？」

シズに辛辣同志の事を尋ねられた。
ユウキは煽る様な笑顔を向けている。　ヒナタは複雑な心境の様だ。

クラフターは嘘偽りなく頷いた。　そうだ。　我々の娘はそうして生まれ、捨てられた。
シズに翻訳して貰う。

「……………あはっ！」

そして拾われた。　今、彼女は元気に生き生きしているよ。　君と違って。

「……………相変わらず好き勝手ですね」

そして若造。　可哀想なのは、お前だ。

「はい？」

クラフターはネザライトの剣を向けた。

その貼り付けた狂気の顔も気に入らないが、文句を垂れ見下す思考は共感出来ない。情報収集は立派だが、都合の良いところだけ取捨選択し、皆に垂れ流す。

それは自分が変わる気が無いからだ。同情して欲しいからだ。共感して欲しいからだ。同時に他人の意見を尊重する気がなく、自己中な考えから世界を荒らしているだけだ。

世界を変えられても、自分の物差しを使う限り絶対に都合の良い世界は訪れない。

誰もいないクリエーティブ世界（モード）でなら迷惑は無いだろが、折角のマルチにいるのに、勿体無いぞ。

自ら世界を狭める愚かな行為だと、何故気が付かない？

前の世界で何があったか知る由もないが、この世界に来てまで尚、楽しめない時点でお前の負けだ。

「……誰もがアンタらみたいに好き勝手生きていける程、強くないんですよ。弱肉強食という意味では間違っていないでしょうが、巻き込まれた側は溜まったものじゃない。それにその意見、そっくり返させて貰いますよ」

もう良い。言葉は不要だ。

というか、通訳を挟むと効率悪い。

さっさとやる事やってズラかる事にしよう。

「良いでしょう。リムルさんの所為で子供達が安定し利用価値も無くなってしまうましたし。最後の荒事は、やっぱ暴力ですかね」

暗闇からニユツとまたも影。

目に虹彩の無い、綺麗な黒髪の女の子。

シズとヒナタが抜剣する中、クラフターは首を傾げた。　　なんだか、何処かで会った事ある様な。

「ユウキお兄ちゃん、わたし達を助けてくれたんじや、ないの？」

一方、金髪が悲しみに暮れた顔で鳴いた。

「あはは、バレちゃった？　　利用出来そうだから生かしてるだけだよ。

アリス、そんな悲しそうな顔したって無駄だぜ？　　利用価値が無くなったら殺すし、逆に言えば利用出来る間は生かしておいてあげるよ」

「なんて事を言うの……ッ！」

シズは激昂。　　ヒナタは齒軋り。

「ユウキ、私達を操るだけじゃなく子供達までも！」

「それにもう一人少女が居る筈よね？　　クロエ・オベールは何処にいる！」

あ。　　思い出した。

そうだ。　　そうだった。

「残念だよね、せつかく蟲が育つて、ヒナタも僕の手駒として良い具合だったのに。　　それに母親に捨てられた絶望の思いを抱いたまま”感情を凍結”してあげたから、ヒナタいい表情してたのに。　　本当に残念。　　今じゃ正義漢じゃないか。　　詰まらないよ。　　ところでさ、クロエ・オベールって誰？」

そう。

ユウキの隣に立つ少女はクロエだ！

いやあ。大きくなったなあ。

元の世界の動物や村人の成長速度を見ているクラフターは、こんな事で驚かない。寧ろ懐かしさを感じた。

小麦を与えて急成長を促したんだろう。

「ユウキ。昔の誼で懺悔するなら命迄は取らない。今すぐ謝罪すると誓え。そして、罪を償う為に白状しなさい」

「あはは、何で？　僕が謝る必要無いよね。この世界って弱肉強食じゃん？　弱い奴、騙される奴、利用される奴が悪いんだぜ？」
「ふざけるな！」

何か鳴いて剣戟を始めた。

これ以上の交渉は無駄だろう。命を何とも思っていない奴が命乞いしたところで、何も響かない。殺すのが妥当かも知れない。向こうも此方を殺したいだろうし、文句はないだろう。

たぶん、いや恐らく……殺してるんだ。
殺されもするさ。

「ヒナタだけじゃなくシズ先生もいて、副担任もいて、多勢に無勢ですか。なので此方も強力な味方を連れてきましたよ。既に隣にいたのに、紹介が遅れてすみません……勇者です。ぱちぱちぱちー！」

「どこまでも巫山戯るな！」

「勇者？　いえ、そんな、まさか」

シズが動揺しているが、今はそんな場合じゃない。流石のクラフターも理解出来る。

戦えないならばと、直ぐに隣部屋に押し込むと丸石ブロックで壁を補修した。

ヒナタの部下と護衛の同志がいる。後は自力で脱出するなりして貰う。此方は目の前に手一杯になる予感。

「おや、シズ先生は退場？　　だけど副担任はいつぱいだね！　　どう？　　狭い子供部屋で百人組手とかやつちゃう感じ？　　そんなにいないけどさー！」

「……ユウキ、魔王カザリームに操られているのか？　　それともお前自身がカザリームなのか？」

「え？　　ああ、あはは。　　うんうん、そうだね、そうかもよ？　　僕が、いや俺がカザリームだ！　　なんてね。　　あはははは、本当、ヒナタって面白い事言うよね」

さて、どうしよう。

爆笑を続けるユウキは殺すとして、クロエまで殺すのは気が引ける。

というか、なんで敵側にいるんだろうか。　　かつての模擬戦で水流の檻を突破されたのが、そんなに気に入らなかつたのだろうか。

「カザリームはね、僕の片腕になっている副総帥のカガリ女史だよ」

「洗脳や誘導じゃない？　　お前の張った根は深くまで浸透していそうね」

「副担任にあつという間に抜かれたけどね」

危ないからコツチに来なさい。

何とかクロエの誘導を試みる。

小麦、駄目。　　ステーキ、駄目。

焼豚で頬を往復ビンタ。　　駄目だ。　　虚な目を続けるばかりである。

「……………勇者を何処で手に入れ、支配下に置いたのかは分からないけど。　　どうやらお前も勇者も話が通じないようね」

「君も支配されてみる？　　今なら同郷のよしみで幹部待遇で仲間にしてあげるけど？」

「ふざけるな！　貴様への情けは必要無さそうだ。　今此処で断罪する！」

「だろうね、君ならそう言うと思つたよ。　さて、これだけペラペラと秘密を暴露してあげたんだ。　ほら、黒幕つて頼まれもしないのに秘密を暴露するだろ——これだけ盛大にフラグを立ててお膳立てしたんだし、精一杯頑張つて僕を倒してみよ。　もしかしたら覚醒して僕達を倒せるかも知れないぜ？」

世界の半分をやろう、と云つたらクロエはこちら側に来てくれるだろうか。　無理か。

取り敢えず剣を構え直す。　大人クロエはどれくらい強いのか未知数だ。　だがリスポーン覚悟だろう。　何とはなしに、そう思つた。

と、此処で茶を濁して余る濁流念話。

『この馬鹿親共がッ！　何て事してくれやがりましたか!?!』

辛辣同志が脳内で叫ぶ。

へ？　何の話？

身に覚えがあり過ぎて、これが分からない。

『ロケットを発射しやがって!? 座標入力したら発射しちゃうから、するなって担当に云ったのに!』

座標入力?

いや担当同志に云ってくれよ。今、クロエとユウキとの戦闘で忙しい。

ロケットはまた作れば良い。協力するから。

『座標を入力すると、その座標に向かって落下する様に設定されてるんです! そして、その座標はイングリシア自由学園なんですよ!!』

何でそうなった。

『オープン・トークでIRPに座標伝達してたでしょ! それを担当が指示と間違えてロケットに入力しちゃったんです!』

マジヤベエじゃん。

『ヤバイんですって!! さつさと戦闘を終わらせるなり逃げるなりして下さい! その時、ワザと馬鹿デカイ騒ぎを起こして学園から人を退避させるなりする様に! 爆弾は積んでませんが、それなりの爆発は起きる可能性がありますから! シズさんがいるなら協力して貰って! とにかく全てを急いで!! 墜落予想時間は――』

リスポーン覚悟。

取り敢えずシズに伝える。校庭の同志にも伝える。

皆には逃げて貰おう。うん。

建物は壊れてもまた造れるから。

148. 勇者と爆発

「――戦闘は任せるよ」

ユウキは何撃かナイフを振るっただけで、後はクロエに任せた。随分余裕を見せてくれる。後悔するやり方は駄目だと教えたい。我々は既に後悔気味だけど。

「了解。 殺す事になるけど良いの?」

「いいよ。ヒナタは部下になってくれないそうだし、仕方ないよね?」
「わかった。じゃあ、せめて苦しまずに済むように、殺してあげる」

感情が抜け落ちた様な鳴き声だが、敵対するなら仕方ない。 懐柔が不可能になった動物を殺処分するかの如く。

クロエ一人にヒナタと我々が対峙する。 数の有利はそう簡単に覆せない。 それでも勝てると慢心しないのは、ウィザーの様な化物がゴロゴロいる世界だからだ。

そう気を引き締めると、校庭で爆音。

ユウキの手勢が責めてきたらしい。 同志が戦車や銃火器で抵抗を始め、校庭は戦場と化した。

やはりか、目の前の大将だけという事はなかった。

「おや、祭りが始まったね」

振り返らない。

弾かれる様に、前に踏み込む。

ネザライトの剣で斬りつける。 と見せ掛けてTNTを火打ち石で着火。 起爆する前に溶岩バケツをひっくり返し、向こうと此方を分断。

「へえ、戦うつもりは無いんだ」
「お前達、何を……」

更に黒曜石で壁を造る。天井までしっかり埋めると、壁向こうで爆音。

直様踵を返し、走り出す。

あんなので倒せると思ってない。だが離脱が最優先だ。口ケツト墜落まで決着が着かないからだ。

シズ達は先に逃がした。学園裏口だ。我々も倅い離脱する。

「ッ！　そうね、時間を稼いだら逃げに徹する。情報を持ち帰るのが大切」

同志が地上戦の合間を抜い、戦車の主砲でクロエのいる部屋を砲撃。倅い随伴同志がロケラン発射。榴弾が炸裂し、壁ごと部屋を吹き飛ばす。

その衝撃波を背に受けつつ、ヒナタと共に全力で廊下を掛けた。勿論、あんなのでも倒せると思っていない。故に振り返らない。前を向く。全力疾走あるのみだ。

「な、何事!?!」 「爆発!?!」

「うわああ!?!　校庭が戦場にッ!?!」

「また副担任達がやらかしたか!?!」

「何がしたいんだよ!?!」

「誰にも分かる訳ないだろ!?!」

「とにかく、直ぐに学園の外へ!?!」

「生徒の避難急げッ!?!」

「全員起きろーッ!　裏から避難だーッ!」

学園に住まう村人が大騒ぎ。

ゾンビイベントの如く逃げ惑う。違うのは内ではなく外へ向か

う点だ。

丁度良い。　そうしてくれ。　ロケット被害に巻き込む訳にはい
かない。

「結構、考えてない様で考えてるのね。　確かに人混みに紛れれば逃
げ易い。　それにこれだけの騒ぎを起こせば、ユウキ達も問答無用と
はいかない。　後々の後始末にも苦心する」

考えるより早く俊足のスプラッシュポーションを割り、ヒナタ共々
走力を上げる。　逃げるが勝ち。

「急に足が速く……お前達は本当に凄い」

廊下に飛び出してきた数多の生徒を押し退けて、我先に学園を出
る。

ロケットが落下してくるのだ。

こんな所にいられるか！　帰る！

「逃がさない」

クロエが飛び出してきた。

咄嗟に黒曜石の壁で剣撃を防ぐ。　が、黒曜石ごと切り捨てられ
た。

まさかの事態だ。　まさか黒曜石が斬られる日が来ようとは。

「くっ！　　混ぜって逃げてしまえば、手を出せないと思ったが……」
「ははは、随分と派手にやってくれたね。　だけど簡単に逃したら詰
まらないだろ？　これはゲームだよ。　どっちが勝つかのね」
「ならば、此処で勝つ！」

本当、化け物だらけの世界だ。

それよりも、とクロエに剣を振る。逃げられないなら倒すしかない。ヒナタも同様らしい。果敢に剣を振るい挑む。

「くっ!?!」

「ヒナタ様ッ!」

ヒナタの剣が速攻で折られてしまった。

黒曜石を斬れる凄まじい剣が相手。或いは魔法やスキルか。

何にせよ、エンチャント無しじゃ無理がある。

その点、我々の剣ならやれる。逆に我々が何とかするしかない。リスポーン覚悟だ。

「ッ!」

ヒナタに予備のエンチャント剣——鉄剣を投げ渡す。ゾンビだつて使えるんだ。プロのヒナタなら本来のスペック以上で戦える。

それでもクロエに勝てるか怪しいものの。

「フリッツ、子供達とシズ先生を連れて逃げなさい! 私達が時間を稼ぐ!」

ネザライト完全装備の増援同志が、四方八方から現れてはクロエに襲い掛かる。

それを踊る様にバツバツと斬り捨てるクロエ。容赦無い。強い。子供の頃とはまるで違う練度だ。

だとして諦めが悪いのがクラフター。最寄りのリスポーン地点から無限湧き。団子となってクロエに取り付いていく。

その姿は見る者によっては蜂球だ。弾かれても、飛ばされても、執拗に攻撃を続けた。吸い込まれている様にすら見える。

執念、覚悟だけではない。かつての教え子に手も足も出ないのつて……何か嫌だし。

「私は負けない！　相手が、例え無敵の勇者だとしても！　くらえ、崩魔霊子斬（メルトスラッシュ）!!」

早い。　剣筋が読めない。　そんなヒナタの全身全霊の一撃を目撃した創造主。

素晴らしい。　斧でも出来るかも知れない。

「勇者とは負けないから」勇者　なんだよ。　理不尽な存在を勇者と
言う」

ところが、次の瞬間には後出しの筈のクロエの剣がヒナタの胸部を貫いた。

目の前でヒナタが、血を吐きながら崩れていく姿が眼に映る。

「残念。　やっぱり、ヒナタじゃ僕を倒せなかったね。　リムルさんと貴方達だけだったら、結果は違ったのかな？」

理解出来る。　だが出来ない。　そんな矛盾。

結果が映るのに創造主の頭が、それを認める事を拒否するのだ。

剣の腕の差だろうか。　いやスキルか。　はたまた魔法か。　何にせよ現実には揺るがない。　状況は続く。　もう駄目だ。　間に合わないぞ。

ヒナタは兎も角、我々も。

「う、うわああああああ!!」

部下の村人が叫ぶ。

それは致命傷のヒナタを想ってか、はたまた視界一杯に広がる爆発

についてか――。



最初こそカガリ率いる手下連中と校庭で戦争していた同志だったが、空を見上げて色々間に合わない事を悟る。

ロケットの閃光が、早朝の空で眩く輝いていたのだ。朝日が本体を煌めかせ、後尾の炎が太陽より目立つ。

逃げるのは楽なのだが、負けたと思われるのは癪だし、何より唯一自由行動が許されている（許されていない）自由学園を失うのは嫌だった。建物もそれなりに評価している。

もし破壊されても、建物は最悪再建出来る。だが土地はどうしようもない。失えばそこまでだ。

ではどうするか。

ロケットを何とかする。これだ。

クラフターは対空キャノンでTNTを空に撃ちまくった。駄目だ。高速で突入してくるロケットにキツカリ当てるのは至難の業だ。

戦闘をしながら座標合わせ……駄目だ。やってられん。

辛辣同志に連絡する。破壊以外で飛翔中のロケットを止める術は無いのかと。

『この突入段階では無理です』

なら着弾位置の変更は？

『無茶苦茶な手段なら』

無理と云わない辺り、方法があるな。

『乗り込んでマニュアルに切り換える事が出来れば、墜落ポイントを多少変えられますよ。でも落下中のロケットに乗り込むなんて正気の沙汰じゃないですよ』

今更なんだ。　楽しむだけさ。

狂気の沙汰ほど面白い。

クラフターはエリトラを羽織り、ロケット花火で急上昇。　何人かはロケットに衝突し死亡するも、1人がハッチをツルハシで破壊、操縦席らしき場所に着席。

IRPとは勝手が違うが、適当に動かす。　なる様になる。　いつも通りだ。

『勇敢を通り越して馬鹿ですね、本当』

結構。　どうすれば良いか教えなさい。

『操縦桿を弄れば、勝手にマニュアルに切り替わります。　後はメインカメラを見ながらロケットを操作して下さい。　このままでは校舎にぶつかるので……校庭に落下するのが最も被害が少ないでしょう、住宅地に墮ちるよりは遥かにマシです』

クラフターは悩んだ。

住宅地は論外として、確かに校庭に墮とせば、建物の修繕は最低限で済む。　ついでに校庭の敵を一掃出来そうだ。　被害としては校庭の同志のリスポン並びに多くの戦闘物資だ。　あと整地作業が必要だろう。　大量の土や砂が必要かも知れない。

対して建物に墮ちたら……建物が木端微塵になる。　あと内部で逃げ遅れている子供達とヒナタ、同志が巻き込まれる。

代わりに再建するに当たり、我々が堂々介入出来る口実が出来そう

『いや悩む余地あるの!?　もう良いじゃないですか校庭で！　被害少なく出来るし、敵も倒せるし、同志が巻き込まれてもリスポーン出来るし!』

そうだな。　優柔不断はらしくない。

クラフターは意を決し、操縦桿を倒した!

建物の方向へ、さあ逝くぞ!

『この馬鹿野郎共がああああ!』

事故に見せ掛けたりフォームといこう!

クリーパーの気持ち、こうなのかも知れない!

刹那。　一瞬で建物が迫ると次には大爆発。

当然、内部の操作同志はリスポーンした。

だが満足だ。　これで建物を弄れるのだから。

……このアイディアは活かせるかも知れない!



フリッツに抱えられたかと思えば、次には大きな爆発が起こり、ガラス破片が弾け、外壁と天井が崩壊、その余波に巻き込まれ転がされた。

急速に寒さが自分を包み、感覚が希薄になりながらも、ヒナタはそれは感じ取っていた。

詳細は分からないが、大方例の人達がやらかしたのだろう。

(守る者がいて、帰る場所が出来て……その最期が彼らの祭り騒ぎの中、か。　だけど……これも悪くない、かな)

身体が冷えていっても、心は温かくなる。

眠たくなってくるヒナタ。だがまだ逝く訳にはいかない。残される者に道を示さねば。

意識を必死に引き戻し、目を開ける。僅かな光をなんとか感じつつ、恐らく抱えてくれたままのフリッツに言葉を紡ぐ。

「フリッツ……いる？」

「ッ！ はい、ここに！」

「命令よ。速やかにこの場を離脱しなさい」

「しかし！」

「私を……皆を無駄死にさせないで。お願い」

どこか遠く、剣戟の音がする。

例の人達が必死に勇者を食い止めているのだ。

ここでフリッツが脱出してくれなければ、自身はともかく、皆が助からない。情報を持ち帰る事も叶わない。

そんな想いが通じたのか、子供達……ケンヤが雄叫びを上げながら加勢してきた。

「うおおおお！ 崩魔霊子斬!!」

ヒナタの技を見よう見真似、だが目も眩む様な光の剣閃。勇者に

剣で防がれるも、一瞬だけ怯ます事に成功する。

その隙にアリスが空間干涉魔法陣を生み出す。

ヒナタも、抱えるフリッツも、子供達もシズも、全員光に包まれる。残されたのは、ユウキと勇者。

それとクラフター。

除け者感があるが、彼等は気にしなかった。

ヒナタにしても、何とは無しに助かる気がする。

シズもそうだった。そろそろ事例が増えて良いと思うもの。



「あーあ、フラグ立てたから逃げられてしまったね。挙句に学園は滅茶苦茶。ま、それも君達に掛ければ直るんだろうけど?」

「おのれ同志。建物ごと我々を潰す気か。」

覆い被さる瓦礫をツルハシで退けつつ、クラフターは軽くお怒りである。

即席の黒曜石や丸石の防壁で難を逃れたものの、何人かは逝ってしまった。リスポーンするにも、隣部屋のベッドが学園の大半ごと吹き飛んだ為、同志は連邦に送還されてしまった。

「まあでも、お互いよく生き延びたよね。あの爆発……ロケット?

リムルさんの入知恵かな? それとも偶然? あはは、なんにしても本当に君達は面白いなあ!」

もうロケットの心配は要らない。

ヒナタ達はエンダーマンの如くワープした。

何処に消えたんだろうか。分からないが、逃げよう。クロエとこれ以上戦っていたら消耗が激しくなるばかりだ。

「あああ……学園が木端微塵にいい!?!」

「が、学園長しつかり!」

「ん? あそこにいるのはユウキ理事長?」

「それと……隣の女の子、だれ?」

「……んー、お互い潮時ですね。これ以上騒ぎになっても困るし。

でももうギルドマスターは返上しないとなあ。これから忙しくなりそうだけど、お互い楽しみましょうよ。創造主様?」

向こうも拠点となる建物が破壊されたからか、退却していく。助かった。見逃されたとも云える。

取り敢えずズラかろう。村人も寄ってきて邪魔である。再建は後日。

「寿命だった筈のシズ先生が元気に戻ってきたんだ。ヒナタもまた

……会えるかもね。君達のお陰で」

帰ろう。帰ればまた来られるから。

建材だって用意しなきゃだし。

149. 救いと笑顔

「うーわッ、やりやがった！」

辛辣から報告を受けたリムルが凄い顔するものだから、クラフターは失笑した。

武力行使でリムルを処刑するのが難しい昨今、精神攻撃は数少ない有効手段である。

「笑ってんじやねえよ！ どこをどうしたらロケットを他国に落下させられるんだよ!?! いやお前らにしては、その程度で済んで良かったとするべき!?!」

「すみません本当」

「こりや始末書で済まないぞ」

嘆くな。壊れたものは直す。

それに1発だけだ。誤射で通せ。

「などと供述しており」

「ぞけんなゴルワア!?! 完全にお前らが悪いだろうがッ! 発射

したところは連邦は勿論、他国からも見えた可能性が高い。言い訳

なんて出来ないぞ!」

「とにかく、イングラシアの状況を確認します」

「……俺もそうする。急いでイングラシアに緊急連絡を。ロケッ

トの件と学園、ヒナタや子供達の事、ユウキの事、色々ある……ハアッ、嫌な予感的中するなんて。やっぱお前らに頼むんじゃない

かった……」

「後悔先に立たず。今を何とかしましょう」

その通り。前を向け。我々もそうする。

マグマダイブして全ロストした時、クリーパーに自宅を爆破された時、大海原で迷子になった時。他にも色々あるが、過ぎた事を悔やんでいても仕方ないのだ。

「いや反省して？　大いに反省して？」

喚くな。今を何とかするのが先決だ。

先ずイングラシアの同志と連絡を取る。

状況を確認した。

学園の校舎が吹き飛び、校庭はボコボコ。

投入されたダイヤ装備やネザライト装備を何人分も喪失。　試作

戦車や銃も無くした。

整地用の土や再建用の建材が必要。

一方で村人の被害は確認出来ていない。

飽くまで爆発に対して、であるが。

元より戦闘に参加していた荒らしの出処は不明で、対抗していたヒナタは大将のユウキとクロエとの戦闘で致命傷。　拳句に大将を逃した。

荒らしを逃す……失ったモノに対してコレだ。　かなり痛い。

荒らしは逃せば、また荒らす。　これは経験則。　だが確実性がある。　故に危険視せざるを得ない。

また、クロエは他の子より先に大人になっているとか、それでいて敵対しているとか、首を傾げる事象も確認された。

知りたいのは、荒らしやヒナタ達の行方。

やりたいのは、学園の再建。

とにかく、とクラフター。

マルチなのだから、調査するにも建設するにも分かれて行う。　それは各々に任す。

現地クラフターは散り散りになると、それぞれ自由に行動を開始。　イングラシアに限らず他国の同志も同様であった。



フリッツは慟哭し、それでもヒナタを背負い走っていた。背から冷めていくヒナタという現実を痛感しながらも、捨て置けずシズと子供達と走る。

「……ッ、教会へ！」

弟子達の殺し合い、衝撃の光景で動揺、放心しかけていたシズが思い出した様に声を荒げた。

「そのつもりです！ 他に頼れる場所なんて」

「違う、そうじゃないの」

シズは手短かに話す。

「祭壇に彼らのベッドがあつた筈！ ヒナタをそれに寝かせて！」

「一体何を」

「良いから！」

「分かりました！」

最寄りの教会に駆け込み、一縷の希望に縋る気持ちで。

（頼む神様ッ！ 時間を、チャンスをくれ！）

彼等が祈るはルミナスにか。それとも。

やがて見えた教会に転がり込むと、祭壇に置かれたベッドにヒナタを寝かす。すると。

「ッ!？」

なんとヒナタが光の粒子になって消えてしまった。

「そんな、ヒナタ様……ヒナタ様あッ!？」

かと思えばベッドにヒナタが横たわる。

健康体となった全裸で、ポンツと。

「こ、ここ、これは一体全体!?　蘇生魔法の効果でもあるんですか此処は!」

フリッツは動揺するも、シズや子供達は喜びはすれど驚きは見られない。慣れている、といった様子だ。

「良かった……私と同じで」

「え?　いや、えつと、説明を!」

「例の人達は死んでもベッドから復活する事は知っている?」

「噂程度には……まさか!？」

「うん。　どうやら上手くいったみたい」

「例の人達のベッドに、その様な効果があったなんて」

「全員に効果があるかは分からないけど。　私はそうだったから」

驚きつつも安堵するフリッツ。

まさか迷惑系建築魔の残滓に助けられようとは。

……放っておいても、ルミナスが何とかしそうであるが。　世界線が違えばリムルもファルムス絡みで殺された（この世界ではクラフターの影響でそうならなかった）シオン達を生き返らせたし。

再誕は誰かの特権ではない、という事か。

問題なのはベッドで寝るといふ楽で博打な蘇生方法という点。復活条件が曖昧で確実性がない。

だが今回は、そんな曖昧なモノに助けられた。
ヒナタを寵愛しているルミナスが知ったら、さぞ悔しがる事だろう。クラフターがそれを知ったら、ザマアと思うだろうが。精神攻撃は有効手段。

「ここは……」

「ヒナタ様！」

やがて目を開けるヒナタ。
思わず抱き付くフリッツ。

「良かった！ 本当に良かった！」

「……私は生きているの？」

「そうよヒナタ。よく頑張ったね」

「シズ先生……」

「お姉ちゃん良かったね！」

口々に良かった良かったと頷く。ヒナタもよく分からずとも、皆が何とかして助けてくれた事は分かる。

温かな気持ちに応えるように、フリッツを抱きしめ返そうとして……止まる。

「フリッツ」

「はい」

「寝込みを襲わないでって言ったよね？」

「はい……はっ！ いやこれは不可抗力、ぐはっ!？」

やや締まらない結果になった。
だけど奇跡も魔法もあるんだよ。
救いだって、あって良い。



「救いは無いんだよー!」

今回の件に関わったクラフターの代表はリムルに捕獲され、イング
ラシア自由学園の校庭で火炙りの刑にされていた。

同志はリードでネザーフェンス、その高い場所に取り付けられ、
ヨーヨーの様にピョンピョン跳ねている。

足元は火を付けられたネザーラック。 延々と燃え盛る炎と煙に
燻られる同志。 表情は無である。 こんなんでもダメージが無い
のが救いだ。

「今回の事件は全てコイツらの仕業です。 焼くなり燻るなり好きに
して下さい」

「いえ、あの、既にされてますよね? あと学園で子供の教育に悪い
事はしないで欲しいといいますが、処刑場にしないで欲しいといいま
すか」

「学園長。 コイツらの存在が既に教育に悪いのです。 コイツらの
悪質振りを世に知らしめる為にも、公開処刑した方が良いのですよ」
「私刑はやめましょうよ。 それこそ教育に悪いかと……」

「散々虐められた身としては、これくらいじゃ足りませんがね!
学園長だつてそうでしょう!?!」

「同意を求めないで下さい……私にも家族がいて、今ここでクビにな
る訳にはいかないのです……」

「なら尚更に怨みがあるでしょう!?! 業火じゃ足りないくらいの憎
しみもツ!!」

「勘弁して下さい……色々と」

多くの村人に観察されるクラフター。

いくらダメージが無いとはいえ、気分が悪い。

これはアレか。リムルの精神攻撃か。

やりおる。物理攻撃以外にも、リムルは出来るらしい。スライム如きと油断していた。

「お母さん。あの人達、首が絞まってるのに、なんで平気そうなの？」

「シッ！　見ちゃいけません！」

様々な反応をされている。

指差す者。　困惑する者。　睨む者。

だが笑う者はいない。これだけ身体を張っているのに。これはクラフター流の洒落だ。リムルは我々を利用して芸を披露しているに過ぎない。

ほら。

笑いなさい子供達。我々も笑って見せよう。

「絞首されてるのに笑い始めた!？」

「ひいひいひいッ!？」

「怖いよお！　うえくん！」

「帰りましょう！　今日の事は忘れなさい！」

おかしい。皆がゾンビを見た様に逃げていく。

首をグリグリ動かして周囲を見る。ゾンビはいない。いたら即斬り捨てるというのに。

「どこまでも巫山戯た馬鹿共だ！　これでもか！　これでもか、このっ！」

リムルが鞭を打ってくる。痛い。

笑いを取れなかった事への怒りか。

ここで死ぬ訳にはいかない。死ねば遺品をばら撒いてしまう。下は火だ。いくつかは焼却されてしまう。それは嫌だった。

「はあ、はあ……やっと思悶の表情に」

「もう止めましょうリムル先生。このままでは学園が取り壊しになります」

「既に壊れてます！ コイツらの所為でね！」

「物理的にではなく社会的にです。それに、再建作業なら彼等の仲間が始めてくれていきます。この速度なら1週間以内には授業が再開出来るそうですから」

「学園長はもつと怒って良いと思います」

フェンス側面に土ブロックを付ける。

その上を足場にし、頂点のリードの根元を殴って解く。もれなく解放された。

そのまま飛び降りると、着地の瞬間に水バケツ。ダメージ無く降り立った。すぐさま火を消し校舎の再建、校庭の整地作業に加わった。作業せず意味なく死ぬのは嫌なもので。

「はあ……もう良い。 疲れる」

「ところで、その。 今回の件の詳細は？」

「国家に関わる有事の一端です。細かい事は省きますが、ユウキ理事長は世界の支配を目論む悪党でした。その悪事が大きく出たのが、この騒ぎとなります」

「なんと……いえ、その様な事が」

「残念ながら。 調査はこれからですがね」

「この爆発も？」

「そ、それは……コイツらがユウキと戦う過程で発生したもので。

やり過ぎたんですよ、コイツらは。 故にお仕置きをした訳なんです

が……効果は無さそうですね」

リムルに睨まれながら、されど気にせず作業する。校庭の整地は直ぐ終わるとして、校舎は前より立派にする。

様々な建材やセンスを盛り込み、せつせと建物を造っていく。時々悩み手が止まりながらも、今までの経験を活かして作品を創り上げた。

「相変わらず副担任は凄いですな」

「参考になりませんがね。逆に駄目」

「修繕費が掛からないのが唯一の救いです」

「だってさお前ら。救いはあったぞ」

リムルが鳴いた。振り返れば、苦笑していた。

クラフターも笑顔で応える。

笑ってくれた。

同情でも、それが嬉しかった。

150. ルミナス達とクロ工話

「で。 ユウキは逃げたと」

連邦に入り乱れる観光客を眺めながら、程よいビルの屋上で鳴くりムル。

死んだ目で、時々コーヒーとやらを飲んでいる。

どこか様になっていているものだから、なんかムカついた。 取り敢えず我々にもソレを寄越してくれないだろうか。

「あんだだけ騒ぎになればな。 これでユウキが俺に責任追求をするなりして、公の場に立つてくれれば、皆の前で悪事を指摘出来たんだが……流石に考えなしじゃなかった。 それでも、アツサリと自由組合の総帥という地位を捨てるなんて。 アイツにとっては、取るに足らない事だったんだろう」

隣に立つ。 コーヒーをくれた。 戴く。

「だがお前らの起こした騒ぎも役に立ったぞ。 ユウキの悪事が段々と明るみに出た事で、各国は憤慨してる。 同時に混乱が起きたけど、収束していけば俺達に味方してくれるだろう。 今は奴とシズさん達の行方を追っている。 組合内部の状況把握は、フューズに任せられているところだ。 お前らも奴を見つけたら叩きのめして良い。 生捕りが難しい様なら、最悪殺せ」

苦い。 顰めっ面をする創造主。

だが悪くない。 慣れれば癖になる。

「そんな顔するなよ。 俺だって甘くするつもりはないんだ。 前にお前らに甘い奴って思われていたけどさ」

リムルと共にチビチビ飲んだ。
暫し地上の喧騒をレコード代わりにしつつ、流れる人と雲を見る。
考え事をする時、偶にはこういうのも良いかもしれない。リムル
と一緒にするのは複雑だが。

「そりゃ同郷の仲だよ？　でも、ここまでできたら関係ない。やら
なきゃ、テンペストどころか世界が混沌の世の中になっちまう。そ
れに伴伴してる勇者つてクロエなんだろ？　なんでそうなったの
か分からないけど、とにかく助けないとだし」

闘技場の方から、威勢の良い声が聞こえてくる。

我々も参戦したい。だが辛辣に止められた。余計な混乱は避
けたいらしい。今更なんだ、と思うが。

「リムル様。　来客です」

ムキムキ緑村人な、リグルドがやってきた。

見た目は強そうだが、武道会には参戦していなかったか。

化け物揃いだからな。仕方ない。そもそも戦闘が不向きなの
だろう。

「来客？」

「魔王ルミナス様とヒナタ様、そしてシズ様と教え子の子供達。同
時にフューズ殿がお越しです。大切な話との事で、子供達は別室に
移動しています」

「マジか。　直ぐに会おうよ」
「分かりました」

翼を生やすリムル。

移動するらしい。

「お前らも来い。 シズさんもいるんだ、状況把握は出来るだろう」

手招きされたから、ついていく。

エリトラを羽織り、向かうは議事堂応接室である。

滑空で高層ビルの谷間を抜う。 ロケット花火による加速がなくても辿り着ける高度だったが、リムルが先に向かうのが嫌で使用。直ぐに目的地に到着。

そこにはシズとヒナタ。 ヒューズはまあ良いとして……何故ルミナスがいるのか。 思うがままにネザライトの剣を抜く。

ヒューズが驚き、ルミナスは睨む。

「えっ!? ちょよ! いきなり!」

「本当、いきなりな挨拶じゃな。 妾も逢いたくなかったぞ、この野蛮人共め」

スニーク姿勢で剣を素振りしつつ、右往左往して煽る、ヤんのかステップを見せる創造主。

シズはオドオドし、ヒナタはジト目。

リムルは慣れている雰囲気だ。 だが関係ない。

「お前ら、どんだけ怒り買ってるの? いや世界規模だろうけどさ? 俺が知ってる範囲だとワルプルギスでの無礼な行為くらいだけど、知らない所で色々やらかしてんの?」

「イングラシアのみならず、妾の支配するルベリオスでもな。 人間を纏める役割の西方聖教会の求心力は此奴らの所為で低下しておるし、地上では人間の住まう場所は好き勝手に建設や改装が行われるし、奥の院にもズカズカ土足で上がり込むわ、同胞が住まう地下にすら侵食してくる始末じゃ。 何人かは殺してやったが、懲りずに来るもんでな。 下手すると邪竜より忌々しいわ」

「ルミナス様、相当溜まっている様子ですね」

「どうにもならんから、溜まる一方じゃ。更に言えば愛しのクロエまで……それはユウキの仕業だと分かったがな」

「あのー……すみません。情報量が多くて、俺置いてけぼりなんですけどもお」

「そうだな。先ず紹介から始めようかヒューズ君。此方の高貴な女性は魔王ルミナスで、隣に座るのは元聖騎士団長のヒナタ。ヒナタはまあ、知ってるだろうけど。で、その師匠のシズ先生。今は自由学園で教師……も知ってるよね」

「は？　へ？　魔王？　ヒナタ様とシズさんは分かりますが、へ!?　魔王ルミナス!？」

「ヒューズ君のヒューズが切れそうだね。時間が惜しいから構わず進めちやうけども」

「そうね。そうしましょう」
「なんだかヒューズ君が可哀想かな……」

鳴き合い始めた。

またか。また会議か。クラフトが出来ない時間がまたしても。ついて来た事を後悔するも、逃げたら後が怖い。

シズもいる事だ。大人しくしよう。通訳してもらいながら。

「ところで、ルミナス様って事は……ヒナタはルミナスの配下だったの？」

「ええ。ルベリオスの実態を知った私は、支配者のルミナス様と配下に挑んだの。結果は敗北。そして、下った」

「そんな事が……」

「ルミナス様の思想に賛同する形にもなった」

「思想？　ルベリオスの支配の仕方か？」

「西方教会で人間に加護を与え、代わりに血を貰う……」

「……吸血鬼達が陰で支配していたと」

詰まらない。

石炭と棒を組み合わせる。 松明だ。 作業台無しで作れる。
そんな手慰みをして時間を潰す。

「此奴らは不法滞在の過程でソレを知ったのじゃ。 思想が気に入らなかつたらしく、よく嫌がらせをしてくる様になった」

「それで仲悪いのね」

「良い迷惑じゃ……リムルよ、貴様は人間と魔物が仲良く出来ると本気で思ってるのか？ 妾の様に支配し、管理した方が良いと思うぞ。

人間は放っておけば好き勝手にして争い、傷つけ合う生物じゃ」

「家畜みたいにしたくはないな。 それに、争うにも仲良くするにも、人の勝手だろ。 全員がゴイツらのレベルだったら困るけど」

「ふん。 その甘さが自らの首を絞めると考えないのか。 既に此奴らに苦勞させられているだろうに」

「……ルミナス様。 今日はその話をする為に来た訳ではない筈です」

「そうじゃな。 本題に入ろう。 リムル、妾と西方聖教会と同盟を組め。 ユウキに対抗する為に」

IRPやロケットの進捗を念話で聞く。

IRPは、今回の事件を反省して突入してくるロケット、その全段階での迎撃能力を付加させるとの事。

ロケットは作り直し。 安全装置を増やしてマニュアルを更新。
無人で飛び立てない様にし、最悪遠隔操作を可能にする。 自爆機能も付加。

「良いよ。 さっさとユウキを倒そうぜ」

「軽いわね」

「まあね。 これを機にルベリオスや教会と仲良くなりたいし」

「賢明な判断じゃ。 今後とも宜しく」

「ども。 さて、早速だけど貿易面ではこれくらいの関税等を――」

「理不尽じゃなければ良い。任す」

「そりや助かる」

「あのリムル。ユウキの話が先決じゃ？」

「そうだね。いやつい……」

長引くなあ。嫌だなあ。

時々シズが軽く説明してくれるとはいえ。

「で、肝心のユウキの行方なんだが」

「分かるの？」

「いや残念ながら。良い隠遁先でもあるのかね、何処へ消えたんだか」

「出来れば早めに潰したいのう」

「……ユウキ」

「シズさん、ごめん。でも、もう……改心できるって雰囲気じゃないんだ。何故かクロエまで連れていけるとなると」

「そうだね。でも、出来れば……」

「……なあリムルよ。クロエを知っておるのか？」

「そりや教え子だからな」

またルミナスに卵を投げつけようか。

いや止めよう。シズもいる。リスキルの刑にされたら堪らない。

「何か違和感があるのじゃが。貴様らが知っているクロエは恐らく子供のクロエじゃろ。じゃが妾の知るクロエはある程度大人の姿。

それも出会ったのは千数百年前。吸血鬼の王国が邪竜……ヴェルドラに滅ぼされた時」

「随分時間が離れるな」

「本当に同一人物なの？」

「……心当たりがある。精霊の棲家の時だ。上位精霊を子供達に

宿す儀式の際、クロエには別の時間軸から来たと思われる奴が憑依した。それが関係してるのかも」

「そうね。きつとそう」

「……クロエを巡って、かなり複雑になってきたな。しかしまさか、時間を超越している可能性は考えた事がなかった」

「今はユウキを何とかする事を考えましょう。クロエを助けるにも、そうするしかなさそうだし」

シズに状況を聞く。

なんでも、クロエは過去だか未来だかを移動している可能性があるそうなの。そうなの。

それには驚く創造主。そんな事が可能なのかと。

創造主が知っている時空間系とは、動物や村人がひしめきあつて時空間の流れが歪になる事くらいだ。

それを自由に巻き戻したり、進めたりする力があるのなら……それは凄まじい能力としか云いようが無い。

この世界は広い。改めて思い知らされる。

「さて。ヒューズ君の話も聞かないとな。起きるんだ、ヒューズ君！」

「はっ!?!」

「魔王2人を前に……というか、リムルよ。この男は組合の者じゃろう。ユウキの組織に属していた者を信用できるのか?」

「信用出来る。組合はイングリシアだけじゃないし、全てにユウキの息が掛かっているとは思えない。それを調べて貰っていたんだ……という訳で聞かせてくれ」

「なんで俺がこんな重大な目にばかり……薄給の雇われ支部長がやる仕事じゃないでしょう……何の嫌がらせですか……」

「今度、何か奢るから」

BBなら時空間に干渉出来るだろうか。無理か。

出来たとして、やり直しを万人が繰り返せば世界は滅茶苦茶になりそうだ。そんなリスクと好奇心を天秤にかけるのもクラフター。だがその前に、出来るのかどうか不明だ。今は出来る事をしていこう。ロケット然り。ユウキ討伐然り。

「えー……リムルの旦那の言う通り、全てに思考制御や誘導がされていた訳ではなさそうです。僅かに上層部や一部の王族に軽いものがされていた程度です」

「クロエにリソースを割かれているのか」

「恐らくは」

「なら、深刻に考えなくて良さそうか」

「油断は出来ないがな」

大陸中に同志がいる。

このネットワークにユウキが引つ掛かるかは分からないが、搜索している者もいるのだ。遅かれ早かれ見つかる。気楽に行こう。

と、ここでまたも訪問者。鎧一式を纏う奴だが、そこいらの兵士より強そうだった。

「突然の訪問、相済みません。プラチナデビル、レオン・クロムウエルの配下、シルバーナイトアルロスと申します。我が主は勇者について貴方様にお尋ねしたい事があるそうで御座います」

「……今日も忙しいな。だが、このタイミングだ。申し出を受け入れよう」

「有難う御座います」

「レオン……」

「シズさん、ここは俺に……俺とコイツらに任せてくれないか？」

「……分かった。ありがとう」

「良いんだ。おい、行くぞ馬鹿共」

「……ヒューズが洗礼を受けている」

「やはり野蛮人共じや」

ヒューズがまた白くなっている。

状態異常の疑いがあるから、創造主は牛乳バケツを飲ませてやる優しさを見せるのだった。

151. 別大陸と軽戦重食

「凄いな」

リムルに連れられる形で、大陸南西部に浮かぶ島……というより大陸にやってきた。

全土を支配し宇宙へ飛び出す勢いの創造主だから、既に足を踏み入れた同志もいる。

だがやはりというか、感動はするものだ。

「森、平野、湖、川、山岳部。全てが魔法で整えられている魔法都市、黄金郷（エル・ドラド）。螺旋状に配置された建物は計算され尽くされて、それ自体が魔法陣を描いている。これで都市を防衛している、魔法攻撃を防ぐだけじゃなく、侵入者も分かる様だ。魔力は住民から供給され、維持されている。よく考えられているもんだ。元建設畑の俺としては刺激されるものがある……お前らもか？」

イングラシアも計算された美しい都市であったが、ここも素晴らしい。

黄金色は趣味なのか知らないが、エリトラ飛行者や地図を見た者は息を呑む事になる。都市そのものが1つの模様を描くのだ。

クラフターも上空アートを作つた事はあるものの、都市の機能をそこに持たせた事は無い。ここはその2つを両立させている。恐るべき計算センスだ。我々も見習わねばならないと頷く。

「今回は招待に応じてくれて、礼を言う」

やがてレオンとかいう村人が来た。

こここの管理者、クラフターだ。

色々と都市開発の経緯を聞きたいが、通訳がないのが悔やまれ

た。思わず顰めっ面。

「招待していない客がいる様だが」

「俺がどうこうしなくても、どうせ同行してきたさ。　　というか、既にコイツらの仲間が此処に来たんじゃないの？」

「その通りだ。　何人かは倒したがな、懲りずに来る。　都市を荒らす様子でもないから放置したら、周辺の森やら海峡に建造物を立て始めやがった。　失敗したよ」

「諦めろ。　俺は諦めた」

「ギイみたいに楽しめれば良かったがな」

茶菓子が出される。　戴く。　美味しい。

我々もクツキーばかりでなく、他の菓子もクラフトしたい。　それは料理好き同志が何とかしてるだろうか。　ハチミツの生産も元の世界で成功したと聞く。　それも使えないだろうか。

バリボリと食い散らかし、茶をぐびぐび飲む。　おかわりも戴く。　クラフト出来ぬならクラフトを味わうのみ。

「お茶会には誘いたくないタイプだ」

「いや、何処にも誘いたくないタイプだよ」

「同意する……ところでその姿といい、本題の前に言いたい事があるなら言ってくれ」

「分かるか？　シズさんの件だ。　アンタが召喚したんだってな。

そして精霊の棲家で奪ったイフリートを憑依させた。　そのあと、勇者と出会ったり色々あった様だけど、今は学園の教師に落ち着いてるよ」

「ワルプルギスでも多少聞いたが、思ったより長生きしている」

「コイツらのお陰でな」

「スキルか？」

「みたいなものだな。　理屈は知らない」

「そうか」

「……イフリートを憑依させたのってさ、シズさんを助ける為だったんだろ」

「さあな。 気紛れで何かしたかも知れないが、覚えがないな」

幾つかインベントリに入れる。

帰ったら研究する。 料理好き同志にでも渡す。

ついでにマグカップ等の食器類も。 見栄えが良い。 連邦にも

あるが、是非クラフトしたい。 ケーキの様に飾りに使える。

続いて周囲を探索。 良い建物だ。 どれも高価そうである。

貰っていいかしら。 いや落ち着け。 シルクタッチを心掛けね

ば。 いやいや、その前に人様の建物を弄るのはご法度というもの。

「……落ち着かん。 アルロス」

「はっ。 訓練場が御座います、此方へ」

鎧村人が案内したそうな目で此方を見ている。

アレだ。 ドワルゴンの時同様か。 観光案内だ。

ありがたい。 クラフターは腰を曲げてお辞儀。 ついて行く事

にする。

「本題に入るぞ。 クロエという少女を知っているか？」

「ああ。 やはり、全て繋がってそうだな。 シズさんを召喚したの

だって……」

開けた場所に出た瞬間、突然攻撃された。

痛い。 観光案内と思ったのに勘違いだったらしい。 だとして

不意打ちとは。

其方がその気なら、此方も相応の対応をする。

クラフターは素早く臨戦体勢に移行。 ダイヤ防具を身に纏い、手

にはネザライトの剣。 エンチャント済みだ。 元の世界から送ら

れてきた最初のひと振りと比べれば弱いものの、ダイヤより強いのは

間違いない。

エンチャントにしても、精通してからは未エンチャントの品など、おしなべて未完成の扱いをしている創造主。最高のツールとは、最高の付加をしてこそ真価を發揮する。

創造主は剣を振るい、鎧野郎に挑む。マルチの戯れ合いにしては『やりすぎ』な気がするが、相手が悪い。殺しても許されるだろう。

「300年前、俺はこの世界にクロエ共々落とされた。召喚ではなく、空間の歪に巻き込まれてな。その時は10にも満たぬ年齢だったよ。ヴェルドドラが封印され、落ち着きを見せ始めた頃だったとはいえ、危険な世界だ。クロエを守らないとならない、その想いから得た界渡りのスキルは『守護者(ガーディアン)』だ。俺は得たばかりのスキルを使い、クロエを守った。守っていた、筈だった。なのに当然……目の前から消えたのだ」

「消えた?」

コイツ、消えるぞ!?

かと思えば背後をバツサリ斬られた。まさかのテレポートだ。エンダーマン級だ、コイツは。

「それからクロエを探す旅が始まった。何年も、何年も。もしかしたら元の世界に戻ったかも知れないとも思った」

「そうだったら良かった、のか?」

「クロエは天涯孤独の身の上だ。俺が守らねばならん。ならば、この世界に召喚すれば良い。そう考えた」

「……身寄りが無いなら仕方ない、のか?」

振り返ると、もういない。

かと思えば遠くにいたり、いきなり目の前に現れてバツサリ攻撃してきた。

剣ガード。時に盾。時に土。

この野郎と、創造主は水バケツをひっくり返す。これで近寄れまい。エンダーマンなら、これで良い。だが相手は上位互換の様なものだ。反撃に転じてくるところを仕留める。

「召喚する為の知識を求め、旅を続けた。その過程で部下になりた」と名乗り出る者が集い、やがて領土を得るに至る。勇者だの魔王だのも勝手に付いてきた称号だ」

好き勝手させない。

創造主は丸石で簡易トーチカを製作。

対エンダーマン戦法を試す。ワープする相手でも、攻撃するには近寄らねばならない。その時、自らをトーチカ等で安全圏に置く事で、やって来たところを隙間から一方的にチクチク剣で突ける。

やってみた。トーチカごと斬られた。痛い。

「それはどうでも良かった。とにかくクロエを召喚するべく研究に没頭、遂には召喚を行ったが……結果は知っての通りだ」

「シズさんか」

「そうだ。クロエではなく、彼女を呼び寄せてしまった」

「だが助けた」

「買い被るな。召喚時の大火傷……放置すれば死ぬ運命であったにせよ、今日まで生き延びたのは紛れもなく彼女自身の力だ」

なんて力だ。

次は黒曜石を試す。流石に今度は斬れまい。

やってみた。防げた。やってみるものである。

クロエの時はバツサリいかれたが、あんな事がホイホイあつて堪るかと思う。

そうでなきやIRPの強化外骨格であるエンチャント黒曜石を携行可能にしなければならぬ。それも面白そうだと思ってしまうあたり、良くも悪くもクラフターであるが。

「レオンなりの思いやりだな」

「……続けるぞ。暫くして、ユウキ・カグラザカが現れた。探している少女を探し出せると自信たっぷりと言うものでな、駄目で元々と依頼した。結果は……」

「今の状況か」

黒曜石に驚愕しているところ、すかさず斬る。

ノックバックが発生し、遠方へと吹き飛ぶ鎧野郎。追撃だ。目には目を。レポートにはレポート。エンダーパールを投げつけ、相手の目の前にワープ。視界に広がる驚く顔にオラオラと剣を振るまう。反撃なんて許さない。

「そうだ。ユウキはクロエ・オベールの召喚に成功してしまった。それも異界からでなく、異界に来た当時のクロエを召喚する事によつて」

「突然消えた原因つて、ユウキか」

「頼んだのは最大の失敗だった。そうしなければ、俺がクロエの召喚に成功していた可能性があった。過ぎた今となつては、もしかしたら、の話だが」

伸びた。トドメを刺せるが……やめた。

耐久値の無駄だ。それに、これだけ痛めつければ良いだろう。建造物の破壊や盗難が罪状なら殺していたが、マルチによくある戯れ合いに似る。拳でなく剣を振る舞ってきたから、嫌だというお気持ち表明の為に反撃してしまったものの。

「クロエはユウキの支配下にある。特殊な呪いのせいだ。これを解呪するには3つの命令が消費されるか、ユウキを倒すしかあるまい」

「ならレオン、俺達と協力しよう。ユウキの行動次第だが、俺達もユ

ウキと敵対する。クロエを助けたい気持ちは同じ。利害は一致していると思うが?」

「ふん、別に構わないさ。俺の望みはクロエの召喚と幸せを守る事だから。だが貴様が役に立つかどうか、話は別だろう?」

どうしよう。

取り敢えず茶菓子を投げつけるクラフター。

食って腹を満たせば、ゆつくりと体力は回復する。代わりに腹が直ぐ空くものの、また食べれば問題ない。

それを思えば茶菓子じゃ足りないか。対して満腹にならなそうだし。仕方なし、ベイクトポテトも投げつけた。

「オツケー!　面倒な話は終わりで良いや。俺の拳はラミスと違って口だけじゃねーぞ!」

「ふふ、試してやるさ」

口に振り込み、無理矢理食わす。

さあ食え。元気をつける。回復薬は勿体ないから使わない。本当に駄目なら使う。

「あ……」

リムルとレオンが来た。

遅い。もう戦闘は終わった。

食物を口に詰め込みつつ、溜息を吐く。

「いやナニしてくれてんのお前!」

「……何故、食べ物を食わされているのだ」

「ふ、不覚……例の人間が、こころも強く、意味不明な者だっ……モガガッ!」

「すまない、コイツがお前の部下を痛め付けてしまった」

「いや、俺の部下が未熟だっただけの話。　気にする事は無い。　だがまあ……気が抜けたな」

良いから食え。　空腹で良い事なんて無い。

腹が減っては戦はできぬ。　備えておく事だ。

言葉が通じぬとも、こうやってマイクラ流を教えるクラフターであつた。

152. 準備と軍事部

「……そうだったのね」

帰還後、リムルとシズが鳴き合った。

何がそうなのか。 深刻そうだ。

「クロエは複雑怪奇に時間を超えて、俺らの教え子になり勇者になり。混乱するけど、そんな感じらしい。 同じ魂が同時に存在出来ないとかで、今は子供のクロエがいなくなり、大きくなった姿……勇者として存在している」

「あの時の勇者はクロエだったのね。 私の前から突然消えた理由も、また会えるから、という言葉も……」

「小さなクロエの絡みだろうな」

クロエの話か。

心配する気持ちは分かる。 我々も少なからず思う事はある。

ユウキの支配下に置かれ、束縛されているのだから。

自由を束縛される苦痛は耐え難い。

かつて元の世界において先輩に騙されて巨大建造物を手伝わせられた事もあるクラフターとしては、一刻も早く解放してやりたいところなのだ。

「問題はこれからどうするか」

「ええ」

問題がある。

東の帝国に不穏な動きがあるのだ。 それ自体は以前からだ、どうも活発化した様に思えた。

武器・装備の量産や武装村人の動き。 これを良い事に幾つか鹵獲

して研究したりクラフト。その成果が銃や戦車なのだが、アレらが一斉に襲って来たら堪らない。

「ユウキの行方は気になるが、コイツらが勝手な真似をしないか超不安」

「大丈夫だよ……たぶん」

「ロケットを他国にブチ込むんだよなあ」

指を咥えて傍観するクラフターではない。

ジユラの大森林の川向こう、帝国領手前に軍事拠点を築いている。

川と手前にも葉ブロック等で偽装を施した拠点も設けた。緊張が高まる前に建設された地下鉄駅は拡張され、それは第二防衛線以降の機能もある。

リムルにも要塞建設を打診したものの、攻めてくるなら最大戦力で息の根を止めるつもりらしい。油断せずと構えるなんて愚の骨頂だと。潰した方がスッキリすると。だから要塞は要らぬと云う。

だが、もし帝国が本気で攻めてくるなら、我々も参戦する。だが、この世界にいる我々の弓矢と剣のみで対処しきれない。鹵獲した戦車や銃は型落ちで、それでも装甲や威力は強力だった。とてもじゃないが、剣と弓矢で倒せない相手なのだ。

エンチャントを施せば良い、という考えは兵器が違えば通用しない。特に集団戦では。射程外から攻撃されては、手も足も出ない。如何なエンチャントでも苦戦は免れない。

リムル達ならば、得体の知れない魔法と武器で何とでもするのだろうが、それに甘んじる創造主ではない。

「ロケット？」

「そうかシズさんは……アイツらの娘さんが宇宙に行きたがっているね」

「えっ？　凄いい！」

「その過程でロケットを幾つか造ってるんだが、事故が多発中で、次は何が起こるんだか」

「でも応援してるんでしょ？」

「そうだね。してる、かな」

IRPの強化もしている。

操縦系統の改善、自力索敵能力の強化など。

長距離砲撃用の移動式TNTキャノンの扱いなのだから、こういう時こそ役立てねば。

状況が逼迫するなら、ロケットにシオン級毒物を大量に詰め込んで帝国に打ち込む。

ロケット事故を活かした戦法、と述べるクラフターだったが、やっている事は汚かった。

荒らしにドライな創造主だからね、仕方ないね。

「平和利用している内はまだ良いさ」

「大丈夫だよ。大切な娘の物を、酷い事には使わない」

「どうかな。生まれを思えば……いや、これ以上は止めておこうか。きつと大丈夫。そう信じておこう」

一騎当千のリムル達と比較すれば、マインクラフター1人1人の純粋な力などたかが知れている。

故に天稟で大好きで得意とする物作り、クラフトで対抗してきた。またするだけだ。これからもだ。

「リムル様」

前の鎧野郎の仲間が訪問してきた。

お礼参りなら、やり返す。

「レオン様がユウキと交戦。至急、応援願います」

「へ？ ナニ勝手に動いてるの？ 取り敢えず場所を教えてください」

「はっ。場所は――」

違う様子だ。

まあ良いや、とクラフターはリムルに任せて仕事に戻る。

それはIRPやロケット開発に留まらない。

元の世界と技術交換。

そして、帝国や今後に備えて元の世界で軍隊“ごっこ”をしている者達……軍事部を迎え入れねばならないのだから。



テンペスト地下に拡がるジオフロント。

地下都市とは別に設けられている、IRP格納庫にて辛辣同志……娘の声が響いた。

「軍事部?! そんなの聞いてませんよ!」

注目を浴びつつ、構わず続ける。

当たり前だ。今云ったからなど。

そう怒声を上げるな。来たところで何の問題もない。奴らも我が同志。軍事面で貢献してくれる。

ユウキのみならず、帝国などの脅威に備えねばならない現状、IRPのみでは心許ない。それを憂いての招待だ。向こうも此方の世界に興味津々だったし、良い機会だった。

「アンタらの世界に行った事がないので、どんな連中かは知らないですが……クラフターって時点で碌でもないのは間違いないんですよ

うね」

相変わらず辛辣だ。

だが安心しろ。軍事部は武力を玩具にした”ごっこ”遊びをしているだけだから。

ファルムスとは違うのだよ、ファルムスとは。

「余計問題だろうがッ!? その云い回しに不安しか感じないんですけど!」

全く。騒がしい娘よ。

そんな風に育てた覚えはない。

「どの口が云ってんだクソ親がッ!」

何も暴力ばかりがやってくる訳じゃない。

手土産に、ネザライトやハチミツが輸入される形にもなる。技術もだ。

輻重にしても、学ぶ事は多い。大いに学び給え。

「……リムルさんに連絡してきます」

今は取り込み中だ。後にしろ。

今は軍事部の受け入れ優先。

「なんでこう……私に何も云わず、好き勝手進めちゃうんですか？

お願いですから、次からは連絡して下さいよ」

中間を挟めば挟むだけ、行動が遅れる。

ネザーゲート室に急げ。軍事部がお待ちだ。

クラフターは娘と共にゲートが設置された部屋へ向かう。

幾つもの実験室が並ぶ区画、その最下層にあるネザーゲート。こんな不便な場所にある理由は、偶にネザーの魔物がゲートから湧き出ると、何より村人を勝手に出入りさせない対策だった。リムルは既に入入りしてしまっただが、それは許せる範囲。

現場に着くと、既に軍事部と思われる者達がいて、此方を見るなりスニーク姿勢でお辞儀してきた。

スキンは兎も角、服装はバラバラ。一応、それっぽく軍装しているものの、統一されていない。

表情や態度、行動も軽い。組織のない世界、あつても部活動やサークル感覚——正規軍だとか義勇軍とか、そもそも存在しないのだと、辛辣同志は改めて思った。

「遊びに来たんですか？」

故に失礼な事を言う。

が、相手は怒るところか笑顔で頷くばかり。

山や海に遠足している気分なのだろう。

そんな彼等はキャノンを見せて欲しいとか、IRPやロケットを見せて欲しいと云ってくる。

我々が協力出来れば、命中率や威力を向上させる事が出来るかもとも。 そうなれば、より多くの荒らしを葬れると笑顔で述べた。

”誰かを殺す時すら、笑顔なんだろうな”

そう思った。

元々分かりきっている。何を今更。

荒らしには容赦しないのがクラフターだ。

相手だって、悪い事をしている。ファルムスの時なんて、此方側を殺そうとしたのだ。やらねばやられる、そんな状況だって戦争の時だけじゃなかった。

なのに、それを痛感させられた気分になると複雑だ。多少罪の意識を感じて欲しいのが本音だ。出自の件もある。

「度が過ぎないようにして下さいよ」

だから、辛辣同志は中立を取る。

自身も結局クラフターだ。仕方ない、と言いつはしたくない。だが時には必要な事もある。それもまた、言いつなのかも知れないけれど。

「では案内します。順番的にIRPからですかね、その後はロケットや銃、戦車、地上都市のキャノン、郊外のトラップや防壁、この世界の状況。詳しくはそこら辺の同志に聞いて下さい——」

歩き始めるクラフター達。

彼等は先発隊に過ぎず、後発が続々とやってくる事になる。その中に記憶から消えかけている、弟が混ざっている事に気がつくのは大分後になってからだった。

やがてこの世界最大最強の帝国軍事部と、創作活動同好会なマイクラ軍事部が衝突する事に——果たしてなるのだろうか？



一方、ユウキ討伐は失敗に終わっていた。

ドワルゴン方面の山にて、逃避中のユウキ達を捉えたレオンはコレと交戦。

この時、クロエと再会出来たのだが、残念ながら状況が状況で感動の再会とは呼べず。

戦闘はユウキが左腕を落とす程には、凄まじく、ユウキが新たなスキルに目覚めたり、竜皇女のかつてのペットを利用した……カオスド

ラゴンとドンパチ。これを討伐。

が、その間に逃げられてしまった。

レオン側の被害、1番はユウキに逃げられた件だろう。

何とかしてくれそうな気がしたクラフターは、残念ながらこの場に居合わせておらず、それを知るのは落ち着いた後だった。何処にでも生息してそんな奴なのに、肝心な時にいないとは。この役立たず！

リムルが現場に駆け付けた頃は、とつくにユウキが逃げた後である。此方も肝心な時にいなかった事になるのだが……レオンが勝手に行動した結果なので、仕方がない。

それなのに後始末を頼まれてしまう。「へいへい、いつも馬鹿に付き合ってるんで慣れてますよ」としつつ「イケメンだからって許されると思うなよ」はリムル談。スライムじゃなかったら、青筋が浮かんでいたかも知れない。

特に大変だったのは、ペットとの魂の繋がりが切れて激怒したミラムの来襲。

これを宥める役をレオンとルミナスは全てリムルに笑顔で押し付けた。酷い。

クラフターが随分と遅れて到着した後、何とか協力して残った魂と周囲の魔素を使い、子竜を生み出した。

サリオンに伝わる竜皇女の物語、そこに出てくる子竜が復活したのだ。感動の再会である。これにてミリムは怒りは消え、喜んだ。

山が吹き飛ぶとか、ドワルゴンや周囲が吹き飛ぶ事態にならず良かったと思う。

一方、逃げたユウキは帝国へ。

力こそ全て……そんな国故に分かりやすく、ユウキは力を示しあつという間に軍部の、混成軍団長の地位に就いた。

彼はどこまで遊びで、真面目なのか。

同行しているクロエも、まだ分からない。

なんにせよ、何とかしなければ。

リムル達とクラフター。別働隊となれど、目的は同じであった。



軍事部は軍事系を嗜むクラフターだ。

特別、そういった組織ではない。

元の世界では多種多様なTNTキャノンの制作のみならず、動かずとも軍艦や戦車、航空機、軍事施設等を造っていた。

例え見た目だけのハリボテであれど、楽しければそれで良い……そう謳歌して。

だが、同志がリムル達の世界で得た技術や話は彼等に革新を与えた。

銃。 戦車。 IRP。 ロケット。

魔物達の武器。 力。

敵対組織の存在。 万単位の戦争。

それらは軍事部が妄想していた、大規模戦闘。

参戦してみたい。 作りたい。 蹂躪したい。

そういったワクワクやドキドキは、リムル達の世界へ足を踏み入れる切欠になった。

特に帝国なる軍事国家と衝突するかも知れないからと助力を願われたのだから……行くしかなかった！

BBはクラフターの世界で秘匿されていたと聞くから、先に見つけられれば、という惜しさはあるものの、これから堪能すれば良い。

そうして軍事部は異世界入りを果たす。

キャノンやIRPに携わっている者を含めると、かなり前から軍事部はいる事になるのだが、それは置いておこう。

さて。

暫く世界に滞在していると、帝国の軍団がいくつかあるのが分かった。

機甲軍団

機械化兵が主力となる軍団。

戦車等を擁する、近代的武装軍。

魔獣軍団

世界各地、帝国の版図やそれ以外の地域において、捕獲された魔獣を支配し、その力を操り使役する軍団。

混成軍団

規格外の機械化兵や、組織行動を取れない個体型魔獣の掃き溜め。しかし、その力は未知数。1つに纏まれば大いなる脅威となる。なんにせよ、だ。

これら全て敵になるなら、潰すだけ。

その点、リムルと同じと云えよう。

荒らし死すべし慈悲はない。

容赦しない。向こうも同じだろう。

時を待つ。その間、軍事部は観光や研究に勤しむ事になる。

やがてリムル達の世界における様々な国での技術がテンペストに集約する。

ドワルゴンらの精霊工学。

「サリオンの魔導工学。

吸血鬼の物理学似たもの。

秘匿するにあたり、リムルはダンジョン深部の森林型都市に研究所が設けられた。

加えて地下都市、クラフターの研究区画に隣接するように。

こうしてクラフターとこの世界の技術はよりハイブリッド化。

IRPやロケット技術は格段に進んでいく。

物作り。

クラフターが生み出すは悲劇か。喜劇か。

幸福とは、なんだろう。

考える間も無く、クラフターは邁進するだけだ。

帝国編

153. 開化と創造

「ユウキは帝国、か。 攻め込むより攻めてくるのを待った方が良いな。 ルミナスの配下が暗殺を試みたみたいだけど、失敗したらしいし」

ユウキが帝国に亡命、軍団長になったのが知れても尚、クラフター達はクラフトに勤しんだ。 最近は村人クラフターも増えて創造物に凄みが増した。 より生活が楽しくなった。 だから仕方ないね。

「お前らのを参考にしつつも、軌道を敷設して列車も出来た。 サイズもパワーも使うエネルギーも規格違いたが、輸送力はお前らのよりずっと上！ これでコイツらに頼りきらずに済む！」

村人は自力でレールを敷設。 列車なるトロツコとは大きく異なる乗り物までクラフト。

かなり大型の乗り物で、対するレールも相応に大きいものの、多くの人員や物資を運べるのは魅力だ。

また、列車砲とも呼べるものまでクラフトされた。 が、リムル曰く「虚仮威し」との事。

「お前らのキャノンを参考に造ったぞ。 通常弾の威力は俺達の方が上だがな！ それに、軌道の上限定とはいえ位置を動かせる。

機龍より劣るが、兵器としては立派な役割を持たせられるよ。

まあ、ベニマル達の方が頼れるけど」

分からなくはない。 配下にウィザー級を抱えているリムルだ。 その程度、という話なのだろう。

もし要らないなら貰うが。 あんな事やこんな事をして遊ぶ。クラフトを愛する者だ。 愛でたい。

「そんな目したって、やるつもりねーよ。 飾りに近いっても、お前らに譲渡したら碌な事しないだろうし」

実用性よりディスプレイの側面が強くても良い。

軍事部は日々狂喜乱舞。 大変喜んでる。 元より飾り系を多く造っていた同志だ。 使えるか使えないかは気にしない。 1番は見た目だろう。

勿論、理想は見た目と実用性を兼ね備えた創造だが。 黄金郷がそうだったように。

「後は魔装兵もやらん。 ベスターがドワルゴンで研究していたゴーレム作り……ラミスや俺達が加わった事で、あっさり完成したよ。ドワルゴンでは失敗続きだったと聞くだけに、皆苦笑しちゃったな。 軍事利用出来るぞー、って興奮する研究員もいたけど、アレはラミリスの玩具以上の価値は無いね。 ベレッタの方が優秀だし。 まあ、お前らの作るゴーレムよりマシだろうけど？」

先程からリムルが創造物自慢でマウントを取っているが、クラフターは我が幸福の様に莞爾として頷くだけ。

創造物を愛する者として、リムルが子の様に創造物で喜ぶ様は見ていて嬉しいのだ。

”どこまでも超えていけ。 我が同志”

これにはリムルも恥ずかしくなって、頬を赤らめてしまう。

「おのれ、ナチュラルに笑顔を……！」

思惑が通じなかった事もだが、己が恥ずかしくなったのもある。リムルは誤魔化す様に話を続けた。

「ま、まあ最初こそ各国の研究員同士は仲が良いとは言えなかった。折角各国から来たのに秘匿し、研究室に閉じ籠る感じだったな。」

だが、お前らの創造物に釣られて外に出て、互いに顔を合わせる様になり、そのうち酒や飯を食う仲になり……ラミリスのマスコット化もあって、今じゃ打ち解け合っている。ウチに来た上位吸血鬼とも仲良くなっている。あのレベルになると、生き血は無くても問題ないらしい」

うんうん、と頷くクラフター。

言葉は分からない。だがクラフトとマルチの話だと、雰囲気で察する。

やはりリムルもクラフター。改めて思う。嬉しい話だ。

「機龍やロケットに興味を持たれた事で、お前らの方も進展したんだってな。通訳ちゃんから聞いてるよ」

クラフターは頷く。我々も負けていないと。

リムル達程の派手な輝きは無い。だが宝石より大切な我々の娘がいる。あの子のクラフトを誇りに思う。

直近の例としては、軍事部と新規村人のお陰で進化したIRPとロケットだ。

後は軍事部員が大幅に増員。近代化改修などと宣い、主兵装を剣と弓矢から銃や戦車に更新しつつある。

この後、改めて伺う。創造は広がリング。



魔国連邦地下。IRP格納庫にて。

エンチャント黒曜石に覆われた、大きな2足歩行兵器を見上げる創造主達。

周囲を囲むメンテナンスブリッジを歩く同志や白衣村人が小さく見える。それだけIRPは大きい。ドラゴンだって踏み潰せる程に。

そんな元より凶悪な人工龍は、更に強くなって鎮座している。暴れたら今度こそ手が付けられないのではなからうか。

「マイナーチェンジの域を越えています」

その割に嬉しそうに、辛辣同志は言う。

親としても嬉しい限り。　続け給え。

「はい！　サリオンの魔導科学……魔導工学、ドワルゴンの技師ら精霊工学、吸血鬼の物理学、軍事部の調整……多くの協力でIRPやロケットは進化しましたよ！　最初は調整するのに苦労しましたが、今や実証実験を皆が皆、楽しみにしている段階です！」

小躍りする我が娘。

詳細を説明願う。　最早、並じゃない。

「見た目こそ以前と大差ありませんが、中身は大分変わりましたよ。BBを最適化、砲撃精度と射程は格段に上がってます。大陸全土をほぼ射程に収め、ロケット事故の反省から移動目標に対しても、ある程度の命中率を誇ります。脚部アンカー、スタビライザーも見直されました」

足元に寄る。

獣王国の使者が来た時にも使用した、猫の爪……姿勢を安定化させるアンカーは相変わらず鉄ブロック製のままだ。メンテナンスで都合が良いからだ。　それに黒曜石よりこの方が取り替えやすい。

だが前回と違う点として、エンチャントが施されている。内容は耐久値と攻撃力増加。後者が施された理由は、固い石ブロックに対しても確実に刺さる様にする為だ。

「問題だったレールガンの充電時間は大幅に短縮。専用の徹甲弾が開発され、これを用いれば、ロケットやカリキュブデイスの様な大型目標も一撃でしょう」

魚災の再来時、実戦で使用された電磁砲。

当時、威力は申し分なかった。だが射程の短さと発砲まで時間が掛かる問題が残っていたのだ。

それが解決の方向に進んでいた。良い事である。

「防御面においては、エンチャント黒曜石はそのままに、対魔防御として様々な結界を発生させられます。魔素を浄化するホーリーフィールドも展開可能。魔導パルスを最大にすれば、魔法弾の弾道を捻じ曲げたり魔力通信系を遮断出来ます。その間はクレイマンの使っていたマリオネットハートにあつた盗聴機能、暗号化した電気信号を参考。味方との連絡は取れるように処置」

とはいうが、クラフターの念話は遮断されない。

電気信号通信はリムルとのやり取りに使用される事になりそうだ。

しかし魔法系も使う様になってきたIRP。強い。

「コックピット後部、BBを格納していたバックパック部分などはカウンターウェイトの機能を持たせる他、各種誘導弾を発射出来る発射口を設けてます。これは空を高速で飛ぶ目標に当てる対空誘導弾のみならず、地上にも攻撃出来る対地誘導弾、対水中誘導弾も備えます」

軍事部曰く『ミサイル』という兵装。

キャノンとは違い勝手が良いらしい。誘導装置を組み込んだりと、クラフトが大変らしいが、かなり強力との事。

だが魔物の力を前に通用するか不明。飛翔中に撃破される恐れアリ。

対水中兵装は湖底研究所から回収した技術も含まれている。

……あの深い湖の底、暗闇に沈む水陸両用実験機は放置されたままだ。まともに稼働される事なく眠り続けている。

「索敵能力も付加。リムルさん達が使用しているスキルに魔力感知、熱源探知、全能探知等がありますが、それをBBで解析して自力で使用出来る様にしました。電波を発して目標物等との距離・方位を知れるレーダーも載せてあるんですよ。これを元に砲撃も出来ます」

クラフターは目を丸くして驚いた。

さらりと、これまた凄い事を言うものだ。

今までは同志が目標座標を教えねば砲撃地点が怪しかったが、いよいよ自動化が進んできたか。流石に長距離は難しいだろうが、それでも凄い技術だ。

「自衛兵装は銃の技術を取り入れて、胴体ディスプレイの横や股間に機関銃や火炎放射器を備えています。これは軍事部の要請ですね。矢だけじゃ不安なのでしょう。実際、ミリムちゃんに通用しなかった記録があります」

不安というか、完全に趣味だろう。

クラフターは思ったが云わなかった。楽しそうに語る娘に水をブツかける行為はしたくない。

「これだけ色々積むと、システムダウンの心配や機動力低下が懸念されました。この世界の部品類との噛み合わせの問題もありました。

なので防塵対策や排熱ダクトを設け、補助動力としてRSジェネレーターも組み込まれましたが……BBは凄いですね、全然余裕でした。更に言えば、稼働部の見直して逆に速くなったまであります。格闘戦も本格化しましたよ。冷暖房完備、脱出装置も付けられました」

それでもミリムには勝てなさそう。

村人サイズにドラゴンサイズは不利である。格闘戦に持ち込まれたら、また殴り飛ばされて終わるだろう。

やはりか、IRPは戦場から距離を置いて使用するのが好ましい。その点、もしエンダードラゴンが低高度で近寄ったり、突撃して来ず、遠方からブレスばかりして、此方から近寄ってもスケルトンみたいに間合いを取ったりしたら苦戦していた。戦闘において距離感とは大切なのだ。

それでもIRPが大幅アップデートした事に関わりなく、素直に喜ばしい。クラフターは満足気に頷くと娘を褒めたのだった。

「えへへ……」

頬を赤らめて、笑った。

珍しく可愛らしい。”彼”に見せたい、この笑顔。

「え、えっと！　次はロケットです！」

未だ赤い頬で連れられて、向かうは郊外ロケット・ランチャ。発射場だ。

ビルみたいに大型のものと、クラフター1人がやつと入れる小型のが並んでいる。前者が物資輸送用で後者が探索用らしい。

小型のはリムル曰く空飛ぶ電話ボックス、或いは空飛ぶ工事現場にある仮設トイレ。

クラフターには何の事か分からなかった。たぶん、日本がある世

界の代物なのだと思う。

「一見すると変ですが、レッドストーンブロックをエネルギー源にしているので、ほぼ無限に飛べますよ。生命維持措置もクラフトしました。ただ制御装置の耐久値が無くなると、動けなくなってしまうますが……アンタなら大丈夫でしょう」

酷い。スペースデブリになれと。

というか、その前に。宇宙空間に空気は無い。

活動しようにも対策が要る。あるのか？

生命維持装置とやらを装備すれば良いのか？

「宇宙服を試作しました。これを装備して宇宙遊泳、様子を見て下さいね」

実験動物かな？

「はははっ。やだなあ、動物に失礼ですよ」

まさかの動物以下だった。

「リスポーン出来るから良いじゃないですか。まさか、ベスターさんやリムルさん達にお願い出来ませんし。人間を上げるにも二酸化炭素除去装置や気圧問題、温度問題がありますしセルフレスキューシステムの推進剤、ロープといった安全帯、食糧やトイレの問題、更には例えば魔物の場合は生命維持装置に魔素を溜めたり安定させる機能とか追加しないといけないし」

待て。ちよつと待て。

リスポーンは分かる。気圧だの温度だのも、気にした事なかったが、まだ理解出来る。

だが飯や安全が要らない様な発言は聞きたくなかった。我々クラフターも飯は食わねば瀕死になるし、安全対策だって必要だ。高所作業でスニーク姿勢を取るみたいなものだ。

リスポーンだって、デメリットはある。特に謎無限空間の宇宙で死んだら、全ロストと同義だ。回収は不可能だと考える。

そうでなくても、経験値はペアになるだろう。

クラフトもマトモに出来やしない。

そんなトコに対策ナシで行けるか。帰る。

「新世界ですよ」

足を止めた。

今、なんと？

「新世界です。眼前に新たな世界が広がっているのに、足を踏み入れない貴方達じゃないでしょ？ 胸に手を当てて目を閉じてご覧

なさい。ネザー、ジ・エンド。そしてこの世界。ダイヤの原石が転がっていれば手を伸ばしマグマダイブする貴方達が……こんなところで燻るなんてマインクラフターじゃないです」

クラフターは娘から宇宙服を受け取った。

「今回、許可なら貰ってますから安心して宇宙の塵にでもなつて来て下さい」

表情は満面の笑み。個人ロケットに乗り込む。

”無限の彼方へさあ行くぞ！”

「チヨロい♪」

”シユゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!”

火の球が白帯を引きながら、宇宙へ上がる。

クラフターは無限の彼方へ旅立った！

生きて戻れる保証もナシに。

だが、宇宙の果てでも創造への想いは果てない連中だろう。 帰れるとしても、帰らず星の世界で遊び始めても可笑しくないのだった。



一方、西方諸国方面。

ジュラの大森林周辺国家の集合体である評議会。

リムルが国連みたいなものかとした、この組織は魔物への脅威や貿易面、飢饉が起きたら支援を、といった国同士の調整が仕事である。

とまあ、ここだけなら人類が手を取り合って仲良く頑張りましょうと喧伝されてそうな部分であるが、実情は各国の欲望渦巻く腐敗臭が。

運営資金は各国から捻出されているのだが、この金額によって議員数を増やす事が可能。 議員の増加は発言力の増加を意味する。

大国の矜持を示すには良い場所なのだ。

また、発言力の増加に伴い、ある程度自国に有利に出来る訳だ。

対して最低限の捻出金も定められており、これを納められないと評議会から脱退させられてしまう。

これはいざという時、助けてくれない事を意味する。 小国にとっては死活問題。 かといって捻出金は安くなく、四苦八苦している面もあるだろう。 この世界も人間同士で色々苦労しているのだ。

そして今、混乱の渦にあった。

世界中で好き勝手している創造主……マイクラ問題に加え、消えた自由組合総帥のユウキが数々の凶行に及んでいた事、それによる組合の混乱。

動揺が走るのも無理なき事。

拳句、最悪の情報が評議会に齎されたのだ。

”東の帝国に動きあり!”

評議会は大混乱に陥った。

混乱に次ぐ混乱。評議会から脱退しかける国も出たり、各国の繋がり崩壊危機を迎えている状況。

帝国が動く噂されているのに、纏まりがなくては戦う以前の問題だ。

それは誰が見聞きせずとも明白。もし帝国が侵攻してきた際に抵抗も出来ず小国にせよ調略を受けたならば、後に続く国が出てしまう。そうなれば、残りの国家は敗北確定だ。

一部議員は何とか収めようと動き、対帝国大同盟を議論する事になったのである。

その日の議題は大きく荒れた。

その中には自由調停委員会の委員長として、ヒナタの姿があった。常備軍を備える大国ならまだしも、余裕の無い小国に兵士はいない。

戦時は傭兵を雇うのが主流になっていたのだが、各国が同時に戦力備蓄を始めると人が足りなくなるのは当然の話。

そんな中、評議会参加国により、各々の軍の一部を寄り集め、評議会直轄軍の設立を主張する者が現れる。

「つまり、現状の議会警備兵だけではなく、評議会として軍を持つべきである! 平時は巡回でもさせておけば、魔物対策になるであろう。自由組合が無くなり調停委員会が出来た今、委員会所属の冒険者を兵士として雇用するのも可能であると考えるが、如何に?」

おっと国連軍かな?

議員のひとりが主張した案は、各国の議会でも話題に出たであろう。

魔物や帝国に限らず、マインクラフターが世界各国で好き勝手して

いるのもあり、対策としては悪くない様に思える。

それに大国だろうと小国だろうと疲弊しているのはどこも同じ。否定するには代案がない。

だが今後の付き合いや金絡みを考えれば、良くない話ともなる。

そう面白い話はない。

あれも政治、これも政治。 ついでに金も絡んでいく。 切実な問題なのだ。

「それは調停委員会所属の冒険者をそのまま兵士に徴用し、評議会の傘下に入れると言う事か？」

ヒナタはうんざりとする気持ちを隠しつつ、発言した議員に問い返した。

確かに、評議会より援助金は出ている。しかし、その額は然程多くない。

各国に滞在する者達を食わせるにも足りない程に。

その程度のはした金で、飼い犬になれと言われるなど、容認出来る話ではないのだ。

それに自由組合、現調停委員会も国家に帰属しない。 その立場はあくまで中立。

魔物の大量発生等の自然災害に対しては国家と協力する事はあれど、常時から国家に従う義理も義務も存在してはいない。

ましてや戦争なんて自然災害じゃない。 国家間の争いに巻き込まれる謂れは全くない。

クラフターに関してでは連邦に属しているかの扱いをされる事はあるが、本人達も何処かの国家に属した覚えはない。

議員の発言したような、評議会の傘下に兵士を寄越せというような要求は、馬鹿馬鹿しくて相手にする価値も無い内容なのだ。

だが、今回は若干状況が異なっていた。

東の帝国の脅威を恐れた各国が、内々に手を組み、調停委員会の持つ戦力に目を付けていたのである。

「左様。未曾有の危機に対し団結するのは自然の理。委員会としても同様の判断を出して頂けるものと理解しておるが？」
「まっこと良き案である。調停委員会としても今回の危機、見逃せまい？我等人類が協同し、事に当たるは至極当然。賛同して貰えますでしょうか？」

クラフターが知ったら、キレて物理的に評議会を解散させそうな態度である。

されどヒナタは慌てず判断を下せる者であった。
拒否するのは簡単だ。公平を理由に蹴れば良い。

元々の方針だし、話が合わないなら別の国へ出て行きますよとなる。出ていかれた国は税収も減る。また、不法労働を抑え、ならず者を減少させる必要な存在がなくなる。困るのは国側だ。

だが断れば、議会と委員会が険悪になるのは間違いない。何よりも委員会の協力なく足並み揃わぬ評議会では、帝国に太刀打ち出来ない現実があった。

では引き受けるか？

そしたら、委員会の権威を落とす結果となる。

出来て1年も経たない委員会では、足元を見られて舐められる。

それは避けたい。今後の付き合いを考えるなら、対等の関係は維持しなければならぬ。

気に食わないが、立場も守らねばならぬ。

受ける事も拒否する事も出来ない。それが答え。

そこでヒナタは提案を提示。

それは――。



「はあ!? アイツらを帝国にぶつける!？」

ヒナタから連絡を受けたリムルが喚く。
煩い。 此方は宇宙同志と交信したいのに。

「正確にはテンペストを、ね。 この話を認めてくれたなら、西方諸国は改めて魔国を認める他、其方を筆頭に西方諸国の戦力を任せる事になる。 防衛費も出させるわ」

ロケットは軍事部が1枚も2枚も噛んでいる。

ミサイルとやらもロケットの派生らしい。

噛めば噛むほど洗練されるならば、軍事部の存在は大変大きい。

「そりゃアレかい? 西方の軍隊代表になるって事だよね?」

「ええ」

「今後の付き合いを考えるなら、受けるべきだろうな。 断るにも、帝国が進軍してきたらウチは巻き込まれるだろうし。 良いよ、取り敢えず話だけでも」

「ありがとう。 イングラシアの議会に出席して欲しい」

「分かった。 だが言っておく」

「なに?」

「アイツらはウチ専属じゃないぞ。 それどころか何処にも属してない」

「……知ってる。 でも連邦所属にするのが世界にとって都合が良いのよ。 辛うじてね」

共に持ち込まれたハチミツ技術も良い。

聞けば元世界の同志がミツバチを発見。

養蜂が始まり、ハチミツの生産が開始された。

これでリムルや、配下のハチと取引する必要がなくなった。 レー
トは大幅に下がったと云える。

ハチミツはビンに入れて持ち運べる。飲む事ができるが、それよりミリの沈静化に大いに役立っている為、大変重宝している。そのコストが抑えられたのは喜ばしい事なのだ。

同時にお菓子作り等にも割ける様になってきた。

ハチミツビン4つでクラフトすれば、ハチミツブロックが作れる。上や側面につくと動きが遅くなる為、落下対策やアトラクションにも使えるかも知れない。

たかがハチミツ。されどハチミツ。

クラフターとしては喜ばしい進展である。

「いう事聞かすのは困難だぞ。アイツらに頼る事自体、不安しかない」

「私も協力する。何故だか彼等の言葉が多少分かるようになったから」

「死んだからか」

「貴方も死んでみる？」

「笑えないぞ。大丈夫かどうか分からないモノに頼るのは、他に方法がない時だ」

銃も日々進化。

軍事部が寝る間も惜しんでクラフト。

その結果、拳銃からボルトアクション式とやらのライフルなるものから、自動式になり、連射出来る様になり、ポンプアクション式とかなんとかな散弾式等の別方法も生まれ、弾丸にも種類が生まれるなどしていった。

元世界でもクラフトされたボウガンを遙かに上回る性能と進化速度。

好きこそ物の上手なれ。されど我が同志ながら恐ろしい。思わず身震いした。

「その話はしないでおう。元最強聖騎士がアンデッド化しまし

た、その上今は委員長やってますなんて混乱を招くだけだろ？」

「言い方に悪意があるわね」

「気の所為だよ気の所為。 さあ話はこの辺で」

戦車も然り。

防御力、機動力、攻撃力を備えていく。

小銃程度ならビクともしない。

悪路の走破性能も高い。 陸戦兵器の王者の風格が出てきた。

とはいえIRPには敵わないが。

それでも生産性では軍配が上がる。 既に地下や郊外、衛星都市に大量生産。 1人2、3台は保有しても良い程に。

戦いは数だよ同志。 質も大切だけでも。

「じゃあ話変えるけど。 さつき連邦から空高く上がる物体の報告があったわ。 アレは何？」

「ロケットだよ。 主任はアイツらの娘。 宇宙目指してるんだってさ」

「は？ 娘？ 宇宙？」

「連邦では良くあること」

おつといけない。 宇宙クラフトを聞かねば。

宇宙に打ち上がった同志に連絡をとろうとして……先に向こうから此方へ念話してきた。

”星は青かった”

マジカリムルカラーかよ、最低だな。

刹那的に嫌悪感で顰めた創造主であった。

154. 宇宙同志と戦争準備

「おのれ人間め！」

議会から戻ってきたリムルはお怒りだった。
クラフターは無視する。

政（まつりごと）なぞ所詮分からぬ。理解したところでやる事は変わらない。

作り、壊し、また作る。

それが人生。それが生きる道。

「コイツらより無礼な連中だった！」

「どうされたのです？」

辛辣同志が状況を確認すべく聞き取りへ。

重要な話は後で伝えられるだろうから放置。

それより今だ。宇宙だひやつほい。

軍靴の足音が近付こうとも趣味に呐喊する者である故に。

「イングラシアで議会が行われたんだが、呼び付けておいて一部議員連中が調子に乗って俺の事を舐めまくってきた。後半なんて物理的に舐められかけたし。未だに寒気がするよ」

「え？ まあ、その。リムルさんのスキンはシズさん寄りの可愛い少女ですからね」

「やめてくれよ……」

足下の星がリムルカラーだったのはショックだ。

だが、それで開拓を止める軟弱者ではない。

ましてや宇宙という新世界を見つけた。何故、諦観していられようか。我々は常なる探求者でありたい。

「で、内容としては……上から目線で此方の技術を寄越せだの、衛星都市は自分の国民も出入りしてるから税金を払ってくれなきやオカシイだの、とても国のトップに対する姿勢じゃなかった！　抗議したらイングラシアの衛兵と王子と名乗る馬鹿が上がり込んで来てな、俺を討伐しようとしやがったんだ！」

「身の程知らずですね。　魔物の恐ろしさを知らないと見ます」

辛辣同志の言葉は耳に入る。

どうやら村人に馬鹿にされたらしい。

ザマアと思った。　そのまま倒されてしまえ。

戻ってきている辺り、それは無かったのだろうか。　無念。

因みにクラフターを、特にクラフトされたものを馬鹿にしたり破壊してはいけない。

既に皆知っている事だが、殺されるだけなら良い方だ。　気分次第で新兵器や薬の実験台にされる。　荒らす者は相応以上の報いを受ける事になるだろう。

荒らし、駄目、絶対。

「それで、これが一部暴走かイングラシアの意思かどうか尋ねたら、国の意思だと言うもんだから、軽く捻つといた」

「殺したんですか？」

「まさか。　日々コイツらの所為で忍耐力は鍛えられてるからな。

感謝しないけど」

「ですが、ただでは転ばなかった筈」

「国主を殺そうとしたんだ、責任は取らせたよ」

「どういったもので？」

「俺達への軍事協力、軍隊の国内通過許可にテンペストの国家連合評議会への正式参加、国家連合評議会本部と自由調停委員会本部のテンペストへの移設。　連中、青褪めながらサインしてくれたよ」

「それは認めるしかないでしょう。　というか、逆に良くソレで済ま

せましたね」

「多少強引にでもしなきゃ纏まるモノも纏まらんからな。帝国が侵攻してくるといいうのに、危機感がまるで足りてない」

「人間とは、そういうものでしょうか。非常事態に本性を曝け出し、その直前まで足を引つ張り合う……」

「コイツらとは別の意味で面倒なのは確かだよ」

戻ってきた、で思ったんだが。

宇宙同志はこの地に戻るの？

ふとした疑問に創造主は首を傾げた。

宇宙船も宇宙服も試作品。プロトタイプだ。

利便性は兎も角、安全性に不安視した。

「どうしました？ 急にソワソワして」

”宇宙船と宇宙服の耐久値は？”

「はははっ、知りませんよー！」

”へ？ なんで？ 実験しなかったの？”

「してますよ。宇宙で」

酷い。なんて恐ろしい子！

創造主は震え上がった。

コイツ、親を実験台にしゃがったんだッ！

「どうした？」

「いえ、ロケットと宇宙服の安全性を問われたもので」

「なんだ。コイツらが安全どうこう言うとは思わなかったよ。でも大丈夫だろう？ 生き返るんだから」

「そーなんですよー。なので笑ってやりました。面白い冗談でしょ?」

笑う2人の悪魔。

村人を実験台にするのは良い。だが己が実験台にされるのは嫌だ。

いくらリスポーン出来るとはいえ、ロストする事に変わりない。苦しいものは苦しい。

それにクラフターには懸念があった。

死ぬより危険な場合があるからだ。

リスポーン地点。

まさか宇宙に更新じゃないよな?



宇宙同志は困惑した。

惑星軌道に乗ったのか定かではないが、小さな丸窓からは青い星が同じ大きさで視界に広がる。

だが悪く言えば、身動き出来ない。

システムが壊れたのか、うんともすんとも言わないのだ。

内部に申し訳程度に付けられた簡易な操縦桿を動かしているのだが、まるで駄目。

計器を見る。アイテムスロットの様に並んだそれは、どれも耐久値がゼロになっていた。

どうしたものか。直し方が分からない。ロスト前提だったとはいえ、鉄インゴットやRSくらい用意するべきだったろうか。

せめて説明を聞くべきだった。迂闊であった。

その内、酸素ゲージが緩やかに減っていく。

ロケット内の空気がなくなったのだろう。

延命処置として、宇宙服を装備。
ゲージ減少が収まる。が、しかし。表示は消えない。妙な息
苦しさは続く。

「調子はどうですか？」

辛辣同志から念話だ。

応える。どうもこうもない。ロケットは故障。

酸素はなくなり身動き取れない。どうすれば良い。このまま
では死んでしまう。

「宇宙服は？」

装備した。他にすべき事は？

「そのまま船外に出て下さい」

無重力空間に命綱ナシで飛び出たら、それこそなす術なしでは？
クラフターは訝しんだ。

「チツ」

チツ？

「馬鹿だと思えば、妙なところで鋭い」

つまり死んで来いと仰る。

「……ロケット側面に何かしら設置出来ませんか？
出来たら、そのまま仮設宇宙基地を建造して欲しいんですが」

相分かった。

結局建築欲に敗北したクラフター。良くも悪くも素直な子であつた。

さて。宇宙空間での活動なんて、未経験である。正解は分からない。そこで空中・水上建設の要領を試みようと思う。1ブロックの土でもなんでも設置出来れば、そこから幾らでも拵げられる。

なに。スニーク姿勢を維持すれば、きつと大丈夫。そんな偏見と共に船外に出た。

勢い良く放り出された。虚無の無重力空間、どっちが上か下か分からない。

「どうですか？　出来そうですか？」

無理。出来ない。放り出された。

酸素ゲージが減り始める。どうすれば良い。

無重力空間で手足をジタバタさせるクラフターだったが、虚しく虚無を蹴るだけだ。

「エリトラは？　エンダーパールは？」

無い。エンダーチェストに入れてきた。

リスポーン前提であつた。

「ならリスポーンするしかないです」

そうするしかないか。

ピタツ、と悪足掻きを止めるクラフター。

酸素がなくなり、ダメージが入り始める宇宙同志。　潔く宇宙の塵となろう。

やがて訪れる死。死因は酸欠だつた。

残念だが、リスポーンして再チャレンジ。　そう気を取り直し復活

したのだが……。

まさかの”ロケットスタート”だった。乗ってきたロケットがリスポーン地点になっていたのだ。最悪の事態だった。

全ロストしたから、当然宇宙服もない。

一気に酸欠になっては死亡を繰り返す。そんなリスキルモードキの無限フルコースが始まった。

「あー。そうなっちゃいましたか。第2、第3の宇宙飛行士に期待しましょう」

宇宙同志は自力で青き星に戻れなかった。

生と死を繰り返し、永遠に宇宙空間を彷徨うのだ。

そして死んでも死にきれないので、そのうち宇宙同志は考えるのをやめた。

ただ目眩く創造の妄想と意欲はあったので、消え失せる事はなかった。



「それはそれとして」

リムルは宇宙同志の件を聞いて案ずる事もせず、寧ろ生き生きと上機嫌。

流石スライム野郎。 血も涙も無い。

「そんな顔すんなよ。 なに、次の打ち上げで助けに行けば良いだろ？ 大丈夫。 お前らなら出来る！ 俺は俺で帝国に対処しなきゃだから助けられないけどな。 ま、頑張れよー！」

粘着ピストンに加工したい、その笑顔。

ドロップ増加剣で斬り付けたい。だが我慢。地上は地上でやる事がある。宇宙ばかり見上げてはならない。大地を見なければ。

リムルも、どうもその様子である。

辛辣同志も付き添う。帝国絡みだろう。解決したら宇宙に集

中したい。平和が1番。

軍事部もいるし、心配していない。

「そうは言いますけど……大賢者さんに聞いたのですが、リムルさんの世界における宇宙事故事例に”そういった例”はまだ無いとか。飽くまでリムルさんの記憶領域内での話だと思うので、実際はどうか知りませんが」

「無ければ創るんだよ通訳ちゃん！」

「まあ、実験も兼ねて救出するつもりです」

「そうしてくれ。だが惜しいな。開戦するまでに監視衛星でも作ってくれたなら、帝国の動向を探れたんだが」

「既に軍事部から案が出ています。そのうち開発されるかも知れません」

「成る程ね。さすがは物作りのエキスパート」

「今は戦争直前なので集中出来ませんが、落ち着いたら皆で開発を進めたいです」

「そうだな。その時は俺も噛ませて貰おうかな」

「ありがとうございます」

こうして2人を見ると、娘が秘書に見える。
シオンより出来る女なのではないか？

流石、我が娘。

傲慢？　傲慢である。

「ところで」

「はい？」

「大賢者に聞いたって、どうやって？　俺のスキルなんだけど……」

「IRPの交信機能を弄ってたら、コンタクト出来ちゃいまして。」

「なんならハッキングも出来そうだったのですが、大賢者さんを怒らせたくなくてですね」

「は？」

「大賢者さんもマスター……リムルさんを守りたい気持ちからか、情報提供の協力をしてくれる事になりました。いや脅した訳じゃないんです。向こうから申し入れがあったんですよ。気を悪くしないで下さい」

リムルから笑顔が消えた。

流石、我が娘。　良いぞ。　もつとやれ。

「へ？　ブレインハッキング？　俺、ユウキにされるみたいに思考誘導されたり洗脳されちゃうの？」

「今そこまでは……大賢者さんと、大賢者さんを介せば心身共に操れそうですけど」

「怖っ。　君達、マジ怖いよ!?!」

「大袈裟ですって」

青くなるリムル。

元より青いが、人間の姿で青くなる。　これまた違った印象があるものだ。

どうも、操られる恐怖心があるらしい。　分かる。

クラフターも操られるのは勘弁だ。

その内、娘に良い様にされるのだろうか。

我が娘……恐ろしい子！

「君が味方で良かったよ。　心底思う」

「いえ、まだ成果は出てないです」

「互いに良性の成果が出る事を願ってる」
「どうも」

やがてIRP格納庫に辿り着く。

相変わらず機龍は健在。旧式化の意見があるものの、改修を繰り返して強化した。

ここまで述べた機能に加え、機動力、不整地での走破性能、高所落下時の衝撃緩和能力も改善している。

だが量産は最早難しい。核となるBBは1つしかないものもあるが、高性能化によるハイコストは無視出来ない。

自前でボディだけ造ろうにも、村人の技術も盛り込まれた混血型は真似出来ない。

無理矢理造れば、劣化版ともいえない御粗末な仕上がりになってしまいそうだ。

例外として水中用試作機があるが、あれだって試験運用に漕ぎ着けなかった。時期が悪かったのもあるが。

「コイツも頭数にしたいんだが、大丈夫？」

「大丈夫です。常に改修やら実験やらで緊急的な動きは出来ませんが、戦時は動かせる様にして見せます」

「ありがとう。それと、ロケットなんだが」

「必要とあらば軍事利用しても」

「すまん」

「国家存続の方が大切ですから。軍事部も使える物は使う腹積りで」

クラフターは領く。

軍事部に限らず、使えるものは使う。

そうでなければ、シオンの汚料理を兵器転用しなかった。アレを超える兵器は中々ないだろうとすら考えている。

軍事部にシオン級を見せた時を思い出す。その恐ろしい威力に皆震え上がっていた。

「……女の子の夢と技術を戦争に転用、か。仕方ないの一言で済ますには少し重い」

「気にしないで下さい。また作れば良いのです。創造物そのものも、使い方次第で毒にも薬にもなる事でしょう。使い手の問題です」

ロケット……ミサイルにアレを詰め込んで世界中に打ち込めば、世界は汚料理に包まれる。そうすれば青い星は紫の星に変貌だ。

下手すると宇宙より過酷な環境になるやも。
改めて恐ろしい兵器だ。

「後は軍事部が用意した戦車や銃が戦線に投入される予定です。既に帝国領手前に小規模な部隊が展開しています」

「さつきから出てくる軍事部って連中、手際良さそうだな」

「サークル活動みたいなものです。好きでやってるだけですよ」

「好きで戦争をするのね。怖い連中だ」

「荒らし行為は避けてますがね。だから向こうから手を出してくるのを待ってるんです。正当防衛だの正義だの報復を理由に戦えるので」

「ウチとしては戦力があるのは嬉しいからさ、迷惑掛けてこなきや良いや」

そう考えると、宇宙を脱出先の候補になるのか。

問題点は同志の事故含め色々あるものの、解決すれば様々な星を股にかけられる。そして新たな定住地を築いていける。

或いは軌道上に基地を創り地上を監視するなり、復興の足掛かりにしても良い。夢は広がる。ワクワクする。

「純粋なテンペストの戦力は？」

「ベニマルを総大将に、ゴブタ、シオン、ゲルド、ガビルの軍団を用意している。加えて悪魔の軍団が出来たよ」

「悪魔？　クロちゃん軍団？」

「ブツ!?　　く、クロちゃんって……ククッ」

リムルが再び笑顔に。

「そうか。　そうだな。　やはりクラフトの世界は良い。　リムルもクラフターだ。　分かってくれるか。」

「いえその、語呂が良いので」

「うんうん。　そうだね、分かるよ。　ふふっ」

「で、その。　悪魔の軍団ってのは？」

「クロちゃんが何人が配下を連れて来たんだよ。　末席に加えて欲しいって。　明らかにクロちゃんにボコボコにされて連れてこられた感じだけだな。　なんかクロちゃんの地上での活動を何処かで見聞きして、馬鹿にしてきたとか」

「……気に入ったんですか？」

「まあね。　ファルムス攻略とかドタバタしちやって名付け出来なかったからなあ。　そのままクロちゃんにしようかな」

「やめてあげて下さい。　泣いちゃいますよ。　私も責任感じちゃうんですけど」

「冗談だよ。　だから、お前ら剣向けるな」

おうおうリムルさんや。　娘を困らすなよ。

それを理由に斬り刻んでも良いんやで？

「……子供が出来たら、名付けに気を付けよう」

「へ？」

「い、いえ……その後は？」

「受肉させた。　そうしないと魔素が垂れ流しになるからな。　問題

なのは受肉先だったが、迷宮でラミスが研究している人造人間の型に受肉させてみたところ成功したんだ。綺麗なお姉さんになったよ」

「……そうですか。良かったです」

「あ、いや、悪意は無いんだ。だからお前ら……剣先で突くの止めろ!?! どこぞのアレな地球割ロボットじゃないんだから!」

困るなあ。反省してくれないと。

いつペン死んでみる?

シズとヒナタは生き返ったんだ。リムルにも経験させようか。成功するか保証は出来ないけれど。

「いえ大丈夫です。分かってますから」

娘が冷静なもので、此方も剣を下ろす。

本人達がそうなら良い。手を出したら許さない。

「……準備は出来るだけやる。西方諸国からも増援、正規軍や義勇兵が来ている。長年軍拡を続けてきた帝国に対抗する為にも、数は多い方が良い。お前達も頼りにしているからな」

「——だそうです。頼みますよ」

頷く。

それも手を出されたら、始めよう。

先に手を出した方が荒らしだ。

そしてソイツらに勝つ。

勝たねばならない。何故なら勝てば官軍、負ければ賊軍だからだ。

負けられない。絶対に。荒らしに屈したりしない。軍事部を呼んだのも、そういう理由が強い。

「帝国の戦力って分かりますか？」

「詳細は分からないな。ただ異世界人を保護して技術を取り入れる様だ。魔法科学と呼ぶべき新たな技術体系を得ている。その点、お前らと俺達の技術を混ぜた兵器もそうだと言えそうだがな」

「試されますね。どちらが上か」

「自信は？」

「あります」

ニヤリ、と娘が不敵に笑う。

良いよノツてきたね。クラフターらしくなった。

「私が、私達が作った兵器です！ 帝国の兵器なんて問題にはなりませんよ！」

「旧式化してるとも聞くけど？」

「馬鹿親達が旧式のまま放置するだけでも？」

「そりやそうだ。本当、頼り甲斐がある」

「きつと活躍します」

「ロケット墜落は嫌な事件だったが」

「だ、大丈夫ですよ。日々進化してますから」

我々もクラフター。こうしてられない。

IRP整備班に混ざり込むと、ディスプレイに様々な矢やらファイヤーチャージを放り込み、機関銃とやらには試験開発中の魔導弾を装填してみたり。

詰め込むだけ詰め込む。実験している余裕がないなら、ぶっつけ本番だ。

「アイツら興奮し始めたな」

「楽しみなんですよ」

「戦争が？」

「作るのが」

「戦争だぞ。どちらかという壊れる側だ」

「その中で生まれるもの、得られるものがあるのです。褒められたものじゃないですが」

「連中にとつては、戦争もひとつの手段に過ぎないんだな」

「……話変えますが、監視システムはどうしましょう。IRPのレーダーで、ある程度周囲の状況が分かりますけど」

「いや、アテがある。俺が開発した物理魔法にメギドがあるんだが、それを応用する」

「と、いいいますと?」

「水玉を操作して、巨大なレンズと拡大された光景を鏡で反射させる。

それを成層圏界面付近に展開された同様の鏡を中継し、この地点まで映像を転送させる。画像処理は大賢者に任す」

「成る程、その様な手が……」

どれ程の操縦性能か、操縦席に乗り込み片足を上げた。凄い。

その姿勢を維持出来る。

ゆっくり足を下ろす。もれなく同志が潰れた。何故そこにい

たのか。

「……大丈夫か? 勝手に操作してるぞ」

「大丈夫です。最悪、ここから遠隔操作で強制停止出来ますから」

「あと一人、何故か潰されたけど」

「宇宙で死ぬよりマシです」

「そうだな」

レーダーや電気通信を確認。

通信はクラフターには無用そうだが、面白いから許す。レーダーも面白い。地下にいる所為か、あまり多くは投影出来ない様子だが。これも改善していきそう。楽しみだ。

「ですが、向こうも監視なり偵察なりをして来ているのでは?」

「してるな。既に怪しい奴が迷宮都市で過ごしてる。冒険者共々迷宮に挑んでいる辺り、たぶん下層にある研究所が目的なんだろう。まあ、そこまで辿り着くのは無理だろうな。レベルが違い過ぎる」

「リムルさんが言うならそうなんでしょうね」

戦争は技術を発展させる。

そんな気がする。勿論、荒らしは駄目だ。されど良い結果が得られるなら、適度な息抜き程度に戦闘が起きても良い。闘技場の様に。

「ところでさ」

「はい？」

「アイツらに迷宮出禁だって伝えて？　ラミスに泣きつかれたんだよ」

「何をやらかしたんですか、馬鹿親は」

「松明だらけにするのは良い方で、壁をブチ壊し、改造し、好き勝手に部屋を作ったりして楽しんでるらしい」

「一応、伝えておきます。でも出入りを完全に止めるのは難しいかと」

「いや良い。何もしないより」

これから始まる大戦争。

さあ！　かかって来い帝国軍！

相手になってやる！　そして創造の糧となれ！

155. 開戦と食中毒

敵愾心旺盛なマイクラ軍事部だったから、帝国軍事部4千台の戦車部隊がジュラの大森林に時速100km以上で領域侵犯して来た時は、ほぼいきかけました！

しかも空には飛空船なる新兵器！

凄い！　凄いぞ！　アレは空を飛んでいる！

軍事部、ウキウキウオツチング不可避。

遂に。　遂にだ。　漸く。　後は暴力の問題。

迷宮都市に設けられた管制室にいるリムル達や大賢者によると、総兵数凡そ100万。

出鱈目な数字。　良く動けるものだ。　元の世界でそんなに密集したら世界が崩壊しかねない。　改めてこの世界は寛容だと思う。

「ガスター中将。　この森、明らかに人の手が入ってますよ。　綺麗に白樺が一定間隔で並んでいます」

「例の人間共の仕業だな。　植林場にしてるのだろうが、進軍し易くて良い」

「管理人とされるドライアドが地下に埋められたって噂、本当だったのでしょうか」

「気にしてどうする。　黙って進め」

哀れトレイニーさん！

なんと、殺されたかの様な噂が立っていた。

トレイニーさんは生きているのに。　ちよつと難民みたいになつて地下迷宮の森林都市に移住しただけである。

『うう……ヴェルドラ様、申し訳ありません』

『お姉様、泣かないで』

『悪いのは例の人間達です！』

だがしかし、クラフターは反省をしない。
それより戦車……欲しい。

4千台の戦車隊丸ごと鹵獲出来ないだろうか。研究や素材、色々用途がある。多くて無駄にはならない。

マイクラ軍事部も、戦車の大量生産を行なってきた。だが数は帝国程揃えていない。更に言えば旧式戦車のレシピを元になっている。クラフターなりに改良を施しているものの、やはり最新鋭には惹かれるのだ。

……話が逸れるが、MOD的要素を入れ過ぎて、マイクラ要素のブロックやアイテムの影が薄くなってるのではと心配である。
やり過ぎると、もうマイクラじゃなくて良くね状態になるので。

「お初に御目にかかります、皆様。私の名は、テストロッサ。この領域の主、偉大なる魔王リムルの腹心で御座います」

戦車隊の前に突如として、美女が現れた。

新人悪魔で情報武官のテストロッサだ。

クロちゃんを馬鹿にしてボコられた1人だが、受肉した今となっては緋色の髪の毛、美貌の持ち主である。

男女の概念が希薄なクラフター的には、着用している軍服の方に興味があった。

「さて、今日出向きました用件は『このまま立ち去るなら見逃そう。だが、それ以上進入するなら、容赦しない』という、我が主の御言葉を伝える為で御座います」

軍服Ⅱ軍事部志願者なんじゃね？

そんな淡い期待を寄せる軍事部。後で接触しなければ。同志大歓迎。

「それでは御機嫌よう」

優雅な一例をし、踵を返すテスタロツサ。

その態度が気に入らず、ガスター中將は狙撃兵に命令を下す。

(やれー！)

兵士は狙撃銃を構え、テスタロツサに狙いを定める。

それを見たクラフターは静観を止め、エンダーパールを投擲。

将来有望な同志を死なす訳にはいかないと。

クラフターがワープ先に着いたと同時に、無音式魔導弾が放たれ――

「ッ！」

間に邪魔したクラフターが、盾で弾いた。

初速にして音速の3倍に達する無反動の魔力の塊を、だ。

「防がれた!?!」

「テレポート!?! 空間系の魔法か!?!」

「コイツ、例の人間のひとりか?」

見て口々に驚く兵士達。

対してクラフターは残心の構えを解かない。

軍事部もクラフター。既に手にしている創造物の扱いは慣れて

いるつもりだ。

銃の発射自体は兵士の操作。銃弾の方向は銃口の先。標的も

分かっているなら、予測して防ぐ事は出来る。撃たれてから防御す

るのでは遅いから、盾を常時構えてのワープ。

不安だったのは、相手がトリガーを引く前に間に合うかと、威力に
対して盾で防御出来るかだったが、結果は出た。一先ず安心。

「あらあら。 あんな詰まらない玩具、なんて事ありませんのに」

テスタロツサは言った。

別に助けなくても、彼女は繊細な指先で弾丸を摘み取りポイしていた。

だがまあ、助けられて悪い気はしなかったのか、笑顔をクラフターにも向ける。

クラフターは御辞儀した。今後とも仲良くしよう。そして同志になるんだよッ！

「ま、惑わされるな！ 皇帝陛下に勝利を捧げるのだ！ 全軍、突撃!!」

怒った敵戦車隊が押し寄せて来たから、勧誘は後になりそうだ。

クラフターは迅速に丸石の壁や蜘蛛の巣を展開させたり、即席の対戦車塹壕をシャベルで掘り進軍を阻む。

無理に進もうものなら、森に仕掛けられたワイヤートラップや感圧板式の地雷（TNT）が起爆、戦車の底から吹き飛ばす。

後方ではキャノンが放たれ、ロケラン持ちが情け容赦なく戦車や随伴歩兵を攻撃。

マイクラ戦車隊も、それを合図に前進を開始。互いに爆発物と銃弾を撃ち合い始めた。

こうしてアツサリと戦争が始まった。

帝国軍事部とマイクラ軍事部。

勝つのはどっちだ。



「マジで戦車が出て来たよ」

場所は迷宮地下の管制室。

ここからリムルやベニマルといった司令官クラスが、戦場を監視し指示を出す。

外部を映すモニターは、リムルのメギドを応用した監視衛星モドキから。音までは拾えないものの、戦場の俯瞰映像はハッキリ見える。

帝国の戦車や飛空船も凄い技術で、剣と弓矢な騎士の世界からしたらチート級だが、リムルのは更にチートであった。敵の行動が筒抜けなのだ。情報戦では連邦が勝っているといえよう。

「湖底研究所にあった技術は、やはり帝国からパクったモノでしょう」

共にいる辛辣同志が言う。

彼女もまた、戦場ではなく此処にいる。リスポーン出来ない身体なので安全な場所に居るべきなのもあるが、クラフターの通訳でもあるので、此処にいた。

尚、IRPのパイロットは軍事部がやっているので大丈夫。

「飛空船は作られなかったがな。軍事機密だったんだろう」

「どうします?」

「戦車隊は四部隊だが放置は出来ない。騙されたフリをする為にもゴブタの部隊を加勢させる。ドワルゴン方面から海上、山脈を越えて西方諸国を狙う飛空船団には、空を飛べるガビルの部隊を向かわせる。なに、クロちゃん軍団の情報武官をそれぞれ付けてるし、大丈夫だろう。なんならアイツらもいる」

因みに飛空船団にはガビル達より先にエリトラ部隊が既に襲撃をかましていた。別の情報武官、ポニーテール少女ウルティマもついて行っている。

ところが、ボクっ娘な悪魔であるウルティマは悪魔らしく残忍なところがあり、可愛い顔して船団の兵士の頭を挽ぎ取って、情報を奪うというヤベエ事を始めていた。

それだけならクラフターはドン引きするだけだったのだが、最後は鹵獲したかった飛空船団を木端微塵にした為、クラフターと喧嘩を始めてしまうのだった。

強力な悪魔なので、クラフターは最初こそ蹂躪されたのだが……とある事で分からされてしまうメスガキになる。

一体、ナニがあつたのか。

その答えは後程に。

「本隊の陸戦部隊は70万。何とかしなきゃな。進路からして、ドワルゴンとジュラの大森林の国境沿いから南下して侵攻してくる」

凄まじい数だが、一騎当千のリムル達なら何とかする。加えてクラフターがいる。自由過ぎて困るものの、味方でいる分には頼もしい。

「首都が狙いでしょうか」

「或いは迷宮都市。それか両方かも知れない。亡命してきた連中の意見を参考にするなら……」

リムルの言う亡命してきた連中、というのはガドラ爺さんなる人物と弟子のシンジ達。

迷宮都市にいるスパイの一部がシンジ達だったのだが、帝国からの仕打ちが酷かったり、迷宮都市で手に入る宝物等の報告をしたら強欲な者達が暴走、早期開戦が免れなくなったので、巻き添えを喰らう前に逃げて来たのである。

リムルは彼等を牢屋に入れる事なく、客人として迎え入れた。味方は多い方が良い。

「首都に全軍を向けられたら苦戦は免れない。ゲルド達もいるが……軍事部の支援を頼めるか？」

「既に守備隊が待機しています。IRPが砲撃態勢、戦車隊多数。」

随伴する馬鹿も完全装備で待機。ビルに備わるキャノンも使えます」

「宜しい。ファルムスとは勝手が違う戦いになるが、アイツらが更新した兵器群を見れば実力を疑う余地は無い。好きな様にやってくれて構わない、だが味方を巻き込むなと伝えてくれ」

「了解しました」

斯くして戦争は続く。

この間、僅か数時間足らずの戦闘で約24万人の帝国兵が戦死した。

軍服悪魔とマイクラ軍事部の初仕事は、大戦果であったといえよう。

が、しかし。

クラフター的には飛空船の件でござ立腹であったし、軍服悪魔をマイクラ軍事部に入部されねば気が済まないのであった。



「しつこいなあ」

戦車隊より先に終了した飛空船団だったが、残されたエリトラ部隊はウルティマに抗議していた。

”飛空船、欲しかったのに!”

言葉は互いに分からぬので、行動で示す。具体的には拳を振るい、雪玉や卵を投げ付けていた。ウルティマは難なく避けつつ言い返す。

「そりゃボクも悪かったよ。ちよつと壊すつもりが、全部壊れちゃうんだもん。でもさ、脆い方が悪いよね?」

ナニ鳴いてるか理解出来ない。

核撃魔法の一種だか知らぬが、ウルティマは全てを破壊しやがった。その事実が変わりない。

なんて事してくれたんだメスガキ軍服悪魔。

鹵獲すればエリトラと異なる飛行技術が手に入ったのに。この代償は高く付く。君を軍事部に入部させるか、こうして暴行する事で発散する。つまり身体で支払え。

「壊れたモノは仕方ないじゃん。それに、情報はある程度手に入ってたよ？」 兵士の頭を腕いで読み取ったからね」

言い訳されている気分だ。

クラフターはスニーク姿勢でネザライトの剣を振るう。威嚇である。行動で収まらぬ怒りを示す。

「へえ。ボクとヤろうつての?」

メスガキは売られた喧嘩を買う様だ。

かかって来い！ 分からせてやる！

「君達ってリムル様に迷惑掛けてるし……1人や2人、殺しちやっても文句ないよね！」

音速を超える速度で回り込まれた。

まるでワープ。エンダーマンだ。そのまま頭部に強い衝撃。痛い。

「あれ、おっかしいなあ？」

頭腕げないね。

まあ腕げなくても構

わないけど、ねっ！」

反撃の隙もない。そのまま連続攻撃を喰らい、野太い声を響かせた。次の瞬間には頭部を鷲掴みにされてしまう。

「やっぱ強いんだねえ。でもその程度って事。このまま、生きてまま魂を吸ってあげるよ!」

良い笑顔だ。屈辱ツ!

そのまま窒息や毒状態に似た継続ダメージを喰らい始めるクラフトー。

慌てて剣を使い、振り解く。間髪入れず雪玉牽制をしつつ距離を取る。

くっ殺状態になるには、まだ早い。

「あははは、摘み食いされたのに平然と動けるなんて! 面白いよ君達! それに魂も、とってもオイシイなあ……♪」

両手を頬に添え、内股で妖しく身じろぎするもんだから、クラフトーはゾツとした。

ところが、段々と苦しみ悶え始めたので首を傾げた。

「うっ! 急に不味く……ッ!? うええ……」

お腹を抱え蹲り、口元に手を当て横になってしまった。状態異常らしい。毒のスプラッシュを当てた訳でもなしに。

「ツルハシ、スコップ、冒険、開拓、建築、農業、宇宙、世界……緑の悪魔、リフォーム、マグマダイブ、全ロスト、リスキル、ウイザー、エンドラ、エリトラ運動エネルギーの体感……目眩く創造と人生……」

白目になって泡を吹きつつ鳴いている。

重症だ。だが殺そうとしたのだ。このまま眺めているのも良

いか。

……いや。牛乳を飲ませて恩を売ろう。

ヒナタを助けた様に、コイツにもそうする。

さすれば仲間になるかも知れない。軍服を着ているのだ。

きつと軍事部に入部してくれる事だろう。

そう思い、牛乳バケツを無理矢理飲ます。これで状態異常は治る。

「ゴポツ!?　ゴポポポポポ………ツ」

さあ飲めメスガキ!

お前も同志になるんだよツ!!



森での戦車戦は最初こそ拮抗していたものの、テストタロツサの”死の祝福”（デスストリーク）という死の魔法によって終息を迎えた。

それは黒い光を周囲に拡散させるもの。物理的に破壊を齎す事は無い。だがほぼ全ての物質を透過する、自然発生する事の無い光。

そしてこの光の特徴は恐ろしかった。生物を透過する際、その遺伝子配列に影響を与えるのだ。

遺伝子を強制的に書き換える事により、ほぼ全ての生物を強制的に死滅させる。

邪悪極まりない、死の魔法。

戦車の搭乗員含む全ての部隊員は悲鳴一つもなく死亡、戦車そのものは無傷という事態になる。

それを見た軍事部は、戦慄と共に身を震わせる他なかった。

「ごめんなさいね、手柄を横取りしちゃって。でも貴方達だけじゃ時間が掛かっちゃうもの」

妖艶に微笑むテストタロツサ。

クラフターは頷く。

やはり軍事部に入れるべきだと。

取り敢えず新型戦車を鹵獲する事は忘れない。

「ですが驚きましたわ。何人か”祝福”を受けさせましたけど……生き延びるなんて」

黒い光を浴びた同志を見やる軍服悪魔。

御辞儀し礼を示す同志。　なんか黒い光を浴びたら強化されたので。

攻撃力と俊敏性、跳躍力、採掘速度が上がり、更に決戦用上位金リ
ンゴを食べた時の様に体力の最大値まで上がった。　牛乳を飲んだら元に戻ってしまったが。

全く。やるならやるで、早く強化して欲しかった。　敵が殲滅された後では活躍出来ないじゃないか。

だが好意は受け取る。　彼女に負けぬ位の笑顔を見せて対応した。ありがとう。

「え、ええ……無事で何よりですわ」

引き攣った笑顔をするテストタロツサ。

果たしてクラフターに魂とか遺伝子とか、そういった概念があるか怪しい他、あつたとして弄られて平気なのか不明であるが、取り敢えずこうなったものは仕方ない。

「と、とにかく。戦車という玩具は手に入りました。ウルティマの方はちゃんとやってるのでしょうか。　しくじってないと良いの

ですけど」

とは言うものの。

まさか、クラフターを”摘み食い”して、ソレに分からされてるとは夢にも思わなかった。

その後。

遅れてやって来たガビル達が、牛乳をガブ飲みさせられているウルティマを発見。これを回収。

クロちゃんを馬鹿にしていたのに、今度はテストタロツサ達に馬鹿にされる事になるとは、彼女の心核も傷付いただろう。

「もう許してえ!?　　ボクが悪かった!」

暫くクラフターの顔を見る度、気持ち悪くなる症状が続いたという……。

「ウルティマは一体、ナニを体験したんだ」

「私を馬鹿にした罪が当たったのでしょうか」

落ち着いたら落ち着いたで今度、ツルハシやスコップを持たせようとするクラフターに追われる事になるウルティマなのであった。

156. 撃滅と弟君

帝国軍本隊は飛空船団と戦車隊の壊滅を知る事なく、首都攻略と迷宮攻略とで部隊を分けて侵攻。

首都攻略の部隊は偵察や陣地設営を行い、迷宮攻略の部隊は一足先に迷宮内に侵攻を開始……しようとしたのだが。

「ミニッツ少将！　入口が塞がれています！」

出来なかった。

見やれば、そこには黒紫の一枚岩が迷宮入口を完全に塞いでいるではないか。

魔法を使おうともビクともせず、押しても引いても駄目な状況だった。

もうお馴染みと化した黒曜石だ。

当然、こんな事する奴はクラフター以外いない。

黒曜石は一般創造主が設置出来る最硬強度を誇るブロックだ。

撤去するにはダイヤツルハシを使うしかない。

それか、余程の力の持ち主か。

残念ながら此処にいる帝国軍に、その様な力は無い。その結果が今の状況であった。

だがその目的はナニか。荒らされたくないとしても、使用目的を思えば考え難い。迷宮内はトラップやモンスターが蔓延るダンジョンであり、引き込んでしまえば帝国軍に打撃を与える事だって出来る筈だが……。

「戦争が始まったものだから塞いだんだろうな。　だとして、こうも強固な蓋があるうとは」

唸る少将。

迷宮を攻略出来ないとなると、内部にあるだろう目的の希少アイテム

ムが回収出来ないのだ。

強欲な上層部が知ったら文句を垂れるだろうが、現場がそうならどうしようもない。

だから、ミニッツ少将は直ぐ切り替える事にした。

「仕方ない。連絡用の部隊だけ残して、後は首都攻略部隊と合流する。首都を陥落させてからでも遅くあるまい」

と、この様にして。

迷宮攻略35万の大半は首都攻略に回され首都攻略約20万と合流。コレに集中する事になる。

それは戦力が集中する事であり、リムル達には都合の悪い事であった。

だが、帝国軍にとっては幸運だ。

迷宮に入ったら、そこではその大量虐殺が始まっていたのだろうか……。



マインクラフターは邪魔者が入らぬ様、迷宮入口を塞いで、そのまま迷宮を楽しみ……80階層で死闘を繰り広げ始めた。

相手はゼギオンとかいうデカイ虫。

元はカブトムシとクワガタが合体したような姿であった。かつてリムルに保護され配下となり、今や、やや人型に近付いている。

だとしてナニか。倒すばかり。

既に多くの同志が肉塊の代わりに遺品を撒き散らし、そこら辺を散らかしている。

それだけ相手は猛者。ヒナタより強い。裏ボス存在、ウイザーに相当するかも知れない。

「地を這う蒙昧なる者共よ！　偉大なるリムル様に付き添う古株とはいえ、迷惑ばかり掛けおつて！　貴様達が如何に矮小な存在か理解させてやる、御覚悟なされよ！」

吼える虫。

漆黒の外骨格に、金色の関節が覗く。

虹色の剣のような角が一本額の中央から伸びて、その左右に外骨格と同色の漆黒の触覚が靡く。

その特殊鋼材の外骨格は、リムルの趣味により改造が施されて、魔鋼との同化が完了している。

今ではアダマントタイトとも呼ぶべきダイヤモンドを超える強度と、生物らしき柔軟性を兼ね備えた他に比する物無き性質を持つに至る。

彼こそが迷宮の絶対強者。

最強の守護者、蟲皇帝。

インセクトカイザー、ゼギオン！

……とかいう話は創造主にとって御託ツ！

コイツは許せない事をしているのだ！

時空間荒らしという重罪行為をツ！！

空間歪曲防御領域、空間支配領域。

ゼギオンの空間支配能力は、マインクラフターにとって重罪に値する時空間荒らしに似ている。

マルチにおかずとも、世界に負荷を掛ける時空間犯罪は容認出来ない。ましてやゼギオンは意図的に起こしているときた。

こんな事が許されて堪るか。

創造主は戦い続ける。

世界の為、皆の為。

我々の愛する俗世の為に。

”消えろイレギュラアアアアツ！”

……勿論、勘違い。無駄な戦いだつた。

後、ラファエルさんとかいないのに、なんでこうなってるのとか

突っ込んではいけない。

更に言えば戦時中にバトってるのも。

「笑止」

呐喊した同志を嘲笑うゼギオン。

奴は恐ろしく速い手刀を繰り出し、攻撃を見逃してしまった同志は横に吹き飛ぶ。

フルエンチャントダイヤ防具だったが、かなりのダメージだ。村人なら即死級の威力。

圧倒的力。だが闘志は尽きぬ。常人には耐えられぬ衝撃を受けようとも、地面を転がりながら他同志の弓矢を取得、そのままゼギオンに矢を放つ。

……防具が付いてなさそうな首に喰らった筈なのに、ヘルメットの耐久のみ削れてるのも今更だ。

「意気込みは良し。だがその程度」

回避された。

そのまま突撃してくる。咄嗟に黒曜石展開。

「甘いッー!」

黒曜石が破壊された。

次元切断による空間断絶。なんと恐ろしい力。

尚の事、早く……早く倒さねば!

壁向こうからコンニチワしてきたゼギオンに卵を投げまくって牽制しつつ、創造主は後退。小さなニワトリが時々現れてはゼギオンの周りで鳴き始める。

「妙な真似を。だが慈悲は無い」

卵如きで止められそうにない。

だが、これには策があつての事。

時空間異常には時空間異常で対抗してやる。必要なのは時間だ。

「次元等活切断波動！」

卵を投げていた同志が空間に斬り裂かれる。

普通死ぬ。ところが空間耐性が多少あるのか、ダメージと共に動きが刹那的に鈍くなる程度だった。ヤベエ。

「耐えるか。伊達に世界に分布した訳では無い、という事か」

元の世界から空間異常を経験してきた影響かも知れない。或いはエンチャント。何にせよ、都合が良い。

創造主は卵を投げて投げて投げまくる。その意図を理解出来ず、ゼギオンは無視した。虫だけに。

「死ぬが良い」

一瞬で詰められた。即座にエンダーパールを投擲。ワープする前に溶岩バケツをぶち撒け、TNT着火。爆発する瞬間には離脱した。

爆煙がゼギオンを包むが、あんなので倒せると思っていない。

「瞬間転移といい、この爆発物。そんな小細工が通じるとでも？」

リムル様より授かりし、この外骨格は並大抵で崩せるモノではないぞ」

煙に揺らめく影に卵を投げまくる。

”足りない”のと、戦闘に巻き込まれてニワトリの数が減らされる

恐れから、創造主は釜戸を大量に置き始めた。

適当に木材や石炭、溶岩バケツを燃料に。焼くモノの原木やジャガイモ等を大量に詰め込む。もれなく釜戸は一斉に自動で稼働していく。ゼギオンを囲む様に。見ようによっては儀式会場だ。

「何を馬鹿な真似を。 トドメだ！」

ここで破壊しなかったのが相手の敗因となった。

「ぐっ!? 急に身体が重く！」

身体が鈍くなるゼギオン。

この場にいるニワトリと創造主も鈍くなっており、まるで時間の流れが遅れている錯覚に陥った。

いや。時間だけじゃなく空間も異常だ。重くなった感覚は、これが原因である。

「能力を 行使 しようにも 思う様に 動けぬ とは! 貴様達、一体 何を した！」

吼えてるも、創造主には言葉が分からぬ。

だがもし答えられるならば……世界に負荷を掛けた、と答えよう。

マインクラフターは狭い空間内に大量の動物類を詰めたり、大量の釜戸を稼働させる事で時空間に支障を及ぼせる。

それは本来、問題行為であり百害あって一利もない。行動が儘ならなくなるばかりか、下手すると世界が崩壊する。故に時空間犯罪は大罪であり、多くのクラフターが忌避すべきものなのだ。

”我々の支配は難しい様で何より”

こんな手段には頼りたくなかったが、まあこれも実験だと思えば。

創造主はカクカクした動きで頑張って手足を動かして、ゼギオン用に別のネザライトの剣を向けた。

それもエンチャント付きである。だが他と違うのは、虫特効のエンチャントが施されている事にある。

既にこの世界の虫系モンスターに有効なのは確認済みだ。恐らくゼギオンにも効果があるだろう。

「ぐっ！」

ゼギオンも地面を這う様に抵抗するものの、動けてるのは果たして創造主の方だ。

先程までの優位性は既に失われているのだ。

創造主は引導を渡す様に剣を振り下ろす。

”じゃあ死ね！”

ズバツと。

小気味良い音と共に、強力な外骨格ごとゼギオンは両断された。

動かなくなった。

”悪は滅びた”

創造主は勝利の余韻に浸かる間も無く、直ぐに周囲の片付けに入る。

このまま放置すると、症状が重くなる。遂に動けなくなってからでは遅いので。



「何やってんだアイツら」

管制室にいるリムルが呆れた。

迷宮内もモニタリングしていたのだが、そこに映る馬鹿とゼギオンの戦闘や、地上の迷宮入口が塞がれているのを知ったが故に。

「迷宮入口を塞いだのは、迷宮に荒らしを入れたくないからですね」
「いやいや入れてくれよ。罨や蔓延るモンスターはアトラクションとしてじゃなく、ちゃんと役に立つんだから」
「そこなんです。アトラクションとして参加する者は許してるんですが、荒らしはお断りしてるんです。純粹に楽しんでくれないばかりか、破壊活動をされるのが嫌みたいで」
「アイツらの方が荒らしてるだろうに」

マイクラ思考回路からか、荒らし（帝国軍事部）の迷宮参加は許せなかったらしい。

「お陰で首都に敵軍が集中してしまったよ。戦時中に迷惑掛けやがってアイツら……」

「すみません」

「君が謝る事じゃない。あー、じゃあゼギオンと戦っていたのはアトラクションを楽しんでの事なのかな？」

「いえ、荒らしだと勘違いして戦っていました」

「は？　なんで？」

「ゼギオンという者は空間支配能力があるみたいですが、その所為かと」

「よく分からないんだが」

「アイツらは時空間を歪ませる行為を嫌います。なので気に入らなかつたんでしょうね」

「そうだとすると……そんな能力相手の奴に勝っちゃうなんてな……」

モニターを再度見やる。

そこには息絶えたゼギオンと、ツルハシを振り回すクラフターが映っている。

「迷宮内の配下は、仮に死んでも生き返る事が出来るから良かったものの……外じゃ決闘の類はしない様に伝えてくれ」

「……分かりました」

モニターは切り替わり、外の景色へ。

首都郊外で展開するゲルド部隊、その先にはマイクラ軍事部の戦車隊が壁の様に並ぶ。先頭に機龍ことIRPが鎮座。

その前面には軍事部によって対戦車塹壕が掘られ、歩兵にも効果が期待出来る蜘蛛の巣が、有刺鉄線の様に彼方此方に設置されていた。ワイヤートラップや地雷は友軍誤爆の恐れがある為、見送られた。突破された場合に備えては、首都内に守備隊や義勇兵の人間と魔物の混成部隊がいる。

烏合の衆ではあるが、隊長格はテングの少女モミジだ。「なんで？」と思うが、どうやら忠誠心を示す為なのと、色々あってベニマルに嫁入りする事にしたかららしい。

『旦那様の為に勝利を捧げるのです！』

良いところを見せたい、というのと外堀を埋めていくスタイルだった。微笑ましい。

「この布陣で突破されるとは思いたくないが、万が一もある。その場合、首都の守備隊だけじゃ心許ない。最悪、俺も出る」

「ベニマルさんの時も？」

「何の話？」

「いえ、なんでも」

「……？」 見た限りじゃ、帝国軍は首都手前に陣営を設置している。迷宮攻略の部隊も合流しているから、対応に追われている。な。本格的な首都攻略は明日以降かと思う」

リムルは知ってか知らずか、モミジとベニマルの件をスルー。今の話を続ける。

戦時なので浮ついている場合ではないのだが、辛辣同志としては少

し話して欲しかったり。乙女ですもの。

「悪魔の1人、カレラを付けてるし大丈夫だ。それでも突破される様なら市街戦。地下に籠城する形になる。そこまで行ったら手遅れだろうけど」

「軍事部が何とでもします。大丈夫です」

「何でもされたら困るがな……」

クラフターの今までの所業を思うリムル。

シオンの汚料理を兵器転換したり、IRPを犬の散歩感覚で動かしたり、ロケットを誤射して他国に墮としたり。

隣に立つ通訳ちゃんはマトモそうに見えるが、ロケットに親を括り付けて打ち上げている。

物作りに携わる者達が、皆狂人じゃないと願っているが、やはり不安なりムル。マトモなのは俺だけか。

「民間人には手を出すなよ。ロケットを帝国に打ち込むのも禁止だ」

「既に伝えてあります」

「不安だなあ……戦争って勝ち方があると思うんだよね。前世は平和な国だったから、考え方は間違ってるかも知れないけどさ……」

「戦争に良いも悪いもあるんですかね」

「こちとら侵攻された側だ。悪いのは向こうだろ」

時間は無慈悲に進み、戦争も変わる。

早速モニターには動きが見られた。創造主がスニーク姿勢で右往左往している様子が。

「あああ……碌でもない事考えてるよ絶対」

今までの経験からズバリ当てるリムル。

予想は出来ても、止められない。
分かっていたつもりでも、いざ被害に遭うと頭を抱えなくなるの
だった。



マイクラ軍事部は悩んだ。

帝国軍事部が陣営を設置したのだ。 どうするべきか。 悩まし
い。

”もうね、誘つてるとしか思えない”

地面を掘り進み、真下にTNTを詰め込んで吹き飛ばす工作戦術
か。

IRPで砲撃するアウトレンジ戦法か。

戦車隊で正面から堂々戦うが礼儀か。

いつそIRPを突撃させるか。リスクを考えれば正面は避けたい。

しかし軍事部としては従来のクラフト品や方法より、新しい兵器を
試したい。

彼らの悩みはソレだ。

クラフター相手に陣営なんてやってはいけない。

ファルムスの時もそうだった。 纏まれば吹き飛ばしたくなって
しまう。

余程防衛に自信があるなら良いが、そうでなければタダの的。 時
に実験台扱いをするクラフター。

元の世界で例えるなら、固定目標……村相手にMODを試す、みた
いなものかも知れない。

”よし。 堂々正面から叩こう!”

結論を出し、笑顔を擡げるクラフター。

IRPは砲撃しながら敵陣に突撃。 後続は戦車隊でいく。 最
終的には殲滅であるが、IRPの格闘能力を試す。 戦車隊は援護。

勝ちに行くというより、兵器を試す形だ。

クラフターは善は急げとばかりに、慌ただしく動き始める。 I R

Pが敵陣に移動を開始、戦車隊が後を追う。

「ゲルド様、彼等が移動を!?!」

「……我等は守りに徹するのみ」

クラフター達の進撃を、ゲルドは見送る。

自分まで持ち場を離れる訳にはいかない。

なる様にしかならぬ。そう諦めの視線も込めて。

何より彼等を止める体力は無い。

やがて聞こえてくる悲鳴や爆音に頭を抱えつつ、首都の守りを維持するゲルド達であった。



「機龍、来ますッ!?!」

見張りの兵士が叫ぶ。

次の瞬間。砲撃が雨霰と降り注ぎ、兵士の肉が弾け骨が飛んだ。

酸鼻をきわめる帝国陣営。

守りに徹してると思われたクラフターが、突然攻撃してきたから混乱状態だ。

「防御結界はどうした!」

「敵弾貫通! 意味を成しません!」

「くそっ! 特殊砲弾か何かか!?!」

ただのTNTである。

だがしかし、マイクロ創造物だからなのか結界を貫通して地表に着弾。次々とテントや兵士達を爆散していった。

「噂の二足歩行兵器は虚仮威しじゃないという事だな……」

大将、カリギュリオは唸る。

機龍……IRPの存在は帝国も知っていた。

だが所詮見た目だけ。消えたヴェルドラに似せた、或いは騙る兵器であると帝国は見下し問題にしなかった。この瞬間までは。

尚、本来なら秘匿すべき大型兵器IRPの情報が漏れたのは、クラフターが犬の散歩の如く野外で稼働させていた所為である。

能力も、試験光景からある程度推測された。

ついで、格納庫に出入りする場面も見られており、地下の存在もバレている。

とはいえ、そこに行くにも首都を攻略しなければならない。事今に至っては先ず守らねばならなかった。

それに、以前よりチューンナップされ、武装も強化されている。

帝国の参考にしている情報は既に古いのであった。

「此処にいても被害が拡大する！ 残っている戦車を中心に態勢を

整え迎え撃つ！ 全体前へ！」

大将は、砲撃の音に屈せず命令を飛ばす。聞いた恐慌状態の兵士

は、何とか意識を保たせ迎撃行動へ。

「敵の編成状況知らせ！」

「はっ！ 敵は機龍を先陣に、背後に戦車隊を連れています！」

「数は此方が上！ 怯むな！」

クラフターの数に対して、帝国軍事部は圧倒的だ。連邦軍を足しても、まだ少ない。

その事は双方理解している。故に帝国軍は数と現代兵器群で蹂躪しようとし、連邦軍は効率の良い防衛陣形を構え、クラフターは好き勝手楽しんでる。なんか、クラフターはいつも通りな気がするが。

「向こうから態々射程圏に入ってきてくれるならば、一斉砲撃で討ち取ってくれる！」

帝国の誇る戦車砲を一斉に喰らえば、あのデカブツも無事では済まない筈。

砲撃には驚かされたが、今は戦車の装甲が耐えてくれている。その程度なのだ。

機龍の装甲もそうであろう。そう考えた。

後続の敵戦車の存在については、帝国の型落ちを真似て製造した物の様だ。そんなもの、即座にスクラップに出来よう。

間も無くして、機龍が見えてきた。

「走りながらで構わん！ 射程に入り次第撃て！ デカブツ相手だ、当たるぞ！」

「主砲撃ち方よーいッ、テエッ！」

撃ち始める帝国戦車。

何発もの砲弾が機龍に命中。黒煙が巨体の上半身を包み込むも、機龍は止まらない。それどころか無傷ときた。

「なんだと!？」

驚く大将と兵士達。

帝国が誇る技術が、力が通用しなかったのだから。

「くそっ！ 脚部に集中砲火！ 転倒させろ！」

左右の脚に砲撃を始める帝国戦車。

ところが、よろける事もなし。そのまま速度を落とさず向かってくるではないか。

機龍の姿勢制御が優秀であるのもそうだが、そもそも機龍の外殻はエンチャント黒曜石。迷宮の入口を塞いでいた黒曜石を更に強化したモノだ。迷宮の入口をどうにか出来ない時点で、機龍に立ち向かうのは無謀であったのだ。

「迷宮都市まで撤退急げッ!」

敵わないと考え、命令を下す。

だが時既に遅し。機龍の機関砲が唸り、幾つかの戦車の装甲を貫通。機械的な部分が故障したか、内部の戦車兵がやられたか動かなくなる。

「装甲を抜く弾丸!」

機龍は動かなくなった戦車を蹴り飛ばし、逃げる戦車や歩兵に当てる。

戦車は兎も角、歩兵はひとたまりもない。そのまま潰されて、地面にシミを作る。

それに飽き足らず、逃げ遅れた戦車や歩兵を踏み潰し回る。その様は圧倒的。恐怖を具現化した様な恐るべき兵器だった。

「な、なんという防御力と機動性だ……」

それで終わらない。

運良く逃げ出せた様に見えた残党戦車と歩兵群に砲身が向けられる。

今度はTNTキャノンではない。レールガンだ。電気を

チャージし、砲弾が撃ち出されたと思えば、残党が木端微塵。帝国軍を全滅させてしまった。それでも運良く生き延びた兵士も散見するが、戦うのをとつくに諦め敗走している。

「うわああ!」「化け物め!」「退避ーッ!」

悲鳴を掻き消す勝利の咆哮を上げる機龍。

後続の戦車隊は獲物を奪われてお怒りだったが、それは上空で見ていた悪魔もであった。

「ねえ君達。 抜け駆けは良くないなあ?」

情報武官カレラだ。

肩の長さまで伸びた眩い金髪、媚びぬ青い瞳の少女の姿に、羽織る軍服、下はスカートの組み合わせ。

見た目こそ可愛いのが、暴れるのが好きで手加減を知らぬ、暴走したら手がつけれられない危険人物でもある。

男女の識別を気にしないクラフターからしたら、軍服や強さに興味がある。あとエリトラナシで飛行・滞空する辺りとか。

「玩具で遊びたかったんだろうけど、コッチも同じなんだよね。 代わりに君達が遊んでよ?」

IRP内部、コックピットに警報が響く。

BBが強大な魔素、或いは何かしらの力を感知した。パイロットは即座に対応。

上空のカレラに多重ロックオン、背中のハッチが開くと対空誘導弾連続発射。 全てカレラに飛翔する。

「重力崩壊（グラビティーコラプス）」

刹那。誘導弾が勢いよく地面に墜落。爆発した。IRPの機体も做う様に地面に崩れる。

突然の事に、パイロットは驚愕する暇もない。

カレラが核撃魔法の一種を発動したのだ。星の重力磁場が狂い、局地的な超重力力場が発生。限定的な超圧縮空間の影響範囲に巻き込まれたIRPが押し潰されたのだ。

だがBBが姿勢制御再演算。対重力エンチャントを機内で構築。機体に付加。RS補助動力装置稼動。IRPのパワーを増幅させ、子鹿の様に震えながらも暴威に抵抗して見せた。

「あははは！ 凄いね、その玩具！ でも、どこまで耐えられるかな？」

引き続き警報。

このまま圧縮が続いては危険だ。BBの予想では全エネルギーが1点に収束、小規模な超新星が地上に発生する。

爆発か、何もかも吸い込む超重力か。クラフターには分からない話だが、何とかしないといけないのは理解出来る。宇宙開発に役立つかなとか考えてる場合じゃない。

パイロットは機体进行操作。この重力下では砲撃も思う様にならない。エンチャントを施し、何とか対応させる。

鍵盤を叩き、即席エンチャントを砲弾にも施す。砲身をカレラに向けた。

「おお？ その状態から攻撃出来るのかな？」

トリガーを引く。

起爆タイミングを演算処理されたTNTが飛んで行く。

そしてカレラに着弾、爆発。彼女は避ける事なく笑顔で受け止めて……煙が晴れる時は更に笑顔であった。

予想はしていたが、やはり強力な魔物やら悪魔にはTNTは効果が

「……結果オーライだな、うん」

迷宮内、管制室。

リムルは死んだ目でモニターを見て言った。

軍事部が勝手に行動し、帝国軍本隊を倒し、カレラとドンパチ。

落ち着いたと思えば、そのまま迷宮都市にいる残存部隊を目指して移動を再開。最早、帝国が一掃されるのも時間の問題であった。

「カレラには後で叱っておこう。アイツらに必要以上に手を出すなと」

「たぶん、悪魔達は目を付けられたと思いますよ。軍服でしたし」

「軍服で？」

「軍事部が興味を持った様です」

「……俺、知らねー。アイツらが悪い」

責任放棄しようとも、全ての思考放棄は許されない。戦争は続いているのだ。

「残るは此処、迷宮都市地上部分。あと海上、というより空に航空戦力を確認した。飛行船舶隊300隻もいる。油断ならないな」

「IRPに対空兵装を積んでいきます。馬鹿達も個人で飛行する方法がありますし、迎撃は可能です」

「そうだな。カレラにミサイル放つてたし」

「撃墜されましたけどね。まだまだ対策や改修の余地があります。

悔しいですが燃えますね」

「あー……うん。任せる」

目を輝かせ、張り切る辛辣ちゃん。

対してリムルは虚な目に。ファンタジー世界に現代兵器やSFが蔓延っていくのは良い、それで皆が守られて幸福になるなら。リムルも現代日本の知識等を用いて列車や通信技術の開発を進めたし、

クラフターが似た事をするのは許せる。

問題なのは、コントロールを益々離れる事なのだ。辛辣ちゃんは貴重な馬鹿達の通訳であるのに、そんな彼女が馬鹿サイドに堕ちていく様がもうね……。

「やっぱ娘なんやなって」

「へ？」

「いや……何でもない」

全ては考え方次第。

連邦・義勇軍に一切の損害が出ず（ウルティマは残念でしたが）、勝手気儘な連中……自然災害的な連中が侵略者を葬ってくれたと考えよう。うん。悪くない。そう無理矢理納得しておく。

代わりに、帝国兵達の魂を利用して魔王を量産するとか出来ないリムルなのだが、まあ、自身や配下が強化されなくても大丈夫だろう。マインクラフターが何とかすると信じよう……。

「だけど、ここうも一方的とは」

「私達の創造が通用して良かったです」

何処か安心した様な辛辣ちゃん。

そんな彼女に、リムルは言う。たぶん創造に酔って、命を蔑ろにしてるんじゃないか、という危機感と嫌悪感があったのだ。

「……死んだ帝国兵にも家族がいるんだろう、と思うと同情の余地はあるが」

遠回しに。だけと言わんとしている事を察して、辛辣ちゃんは真顔で返す。

「これは戦争、命を奪い合うと分かって送り出してるんです。知ら

ぬは罪です。何より、こつちだつて家族はいます。殺さなきや殺されます」

「分かつてる。だけど、生き返るアイツらが嬉々と一方的に殺戮してるのは、少し違くないか？」

「その感性は否定しません。でも侵略してきた帝国が悪いです。殴ってきた相手に殴り返して、文句を言われる筋合いは無いです。

それとも最初から此方が降伏すれば、血が流れない保証があるか？」

仮にそうだとして、それはテンペストだけ？ 西方諸国は？

帝国に支配された後は？ それを考えれば、テンペストが帝国を食い止めて正解だったのでは？ その方が流れる血は少なかつたと思えます。

正直言つて、未だ混乱から立ち直れない剣と弓矢な西方諸国のみで戦車や銃を使う帝国に勝てるとは思えません」

それは飽くまで、個人の意見だ。

西方諸国に帝国が攻め入る事態になつても、圧倒的な力を前にして、無血開城をする様なら死傷者は少なくて済むかも知れない。

だがそれすらも可能性である。帝国が先に手を出した件、宝欲しさに迷宮を攻略しようとした件を踏まえると……殺されはしなくても、かつて竜の都に駐屯していた傀儡軍みたいな振る舞いをされたかも知れない。

下手すると、更に酷かつた可能性も考えられる。風紀が乱れた行為……奴隷化や陵辱、強盗が蔓延つても、おかしくないのだ。

やはりそれすらも、可能性の話でしかないが。

「そうだな。ファルムスの時もそうだったが……アイツらがその内、笑顔で敵対したら堪らないなと思っただけさ」

「確かに、リムルさんを倒そうとする時はある様ですが。心底嫌つてる訳じゃありませんし、他に敵がいる内は大丈夫ですよ」

「敵がいないと困る状態っていうのは不安」

「もし敵になつても……リムルさん達は強いですから。その時は、お仕置きして下さい」

「生き返る連中だしな。 加減は要らないな」

苦笑するリムル。

モニターに視線を戻せば、戦車隊が迷宮都市の帝国連絡部隊に砲撃しているところ。

地上戦力は一掃されると見て良い。 リムルが気にするべきは、例によって後始末であろう。 西方諸国方面へ抜ける気だろう飛空船団も災害を前に勝手に沈む。 そう思えるくらいには、何だかんだクラフターを信用しているリムルだった。



「こ、降伏だ……参った!」

迷宮都市地上部。

戦車で押し掛けたら、敵対していた帝国が友好状態になった。 だとして荒らし行為が許される訳じゃない。 即座に殲滅。 戦車による砲撃を再開しよう。

「そこまで。 聞こえている?」

辛辣同志の声があった。 この場にはいない。 念話でもない。 各戦車やIRPに取り付けられた無線機からだ。 電気信号とやらか。 念話の出来るクラフターには必要無いが、これはこれで面白いから許す。

「ついでに帝国兵も許して下さい。 モニターを見る限り、その部隊は降伏しています。 これ以上の戦闘は無意味ですよ」

無意味かどうかは我々が決める事。
戦車砲が撃ち足りない。 もっと撃たせろ。

「十分戦闘記録は残せたでしょ。 シズさんに言い付けますよ」

卑怯なり。 止めるしかないじゃないか。

シズに説教されるのは嫌だ。 あの妙な迫力は好きになれない。

「そうして下さい。 今からそこにいる兵士らは捕虜です。 リムルさん達の部下が間も無く来るので、大人しく明け渡して。 この戦争の交渉相手にしたり、情報を抜き取るのに使うので。 間違っても実験台や材料にしないで下さいよ」

メスガキ悪魔は首を捻って情報を取得、死体はポイしていた。 アレは良いのか。 クラフターは訝しんだ。

ウチはウチ。 他所は他所、か。

一方でアレソレの者を見習えと云う者もいる。

矛盾や理不尽な連中は数多いる。 気にしていたら進めない。自由にさせて貰いたい。

そう思ったクラフターだが、振り返れば何時も自由だった。 好きに生きよう。 気持ち良い人生だ。

「これで地上はクリアですね。 次は遠方の飛空船団ですが……」

其方も好きにやらせて貰おう。

北方にも西方にも同志はいる。 慌てる事はない。

IRPの弾薬を補給したら、再出撃だ。

戦争は続く。 このレベルならマイクラ軍事部じゃなくても良さそうだが、何が起きるか分からない以上、人手は多い方が良い。

何よりも、軍事部はこの状況を楽しんでいる。 参入はしても降りる同志は殆どいない。

クラフターと村人とは、命の重さが異なる。 片や復活可能。片やハードコア。

思考も異なる。

村人がクラフターの戦争を非難しようとも、本人達は気にせず好きにやる。

つまり、戦争を楽しんでいるのだ。 この戦場における命とは、彼等にとって人生を楽しむ為の部品に過ぎない。 重そうに見えて、時々軽いのだ。 それが沢山あればある程に。

政治なんて、知つちやこつちやない。

ぐちやぐちや煩い。 勝てば良からう。

創造。 破壊。 他も楽しんだもの勝ち。

良くも悪くもクラフターは、いつもそう。

そして……都合の悪い奴はぶっ飛ばす。



メインクラフターの登場で、多くのキャラの影が薄い。 その割にネームド的なクラフターが出ていく気がする。

出来れば、もっと絡ませていくべきだろう。

……いや。 多くの人魔が、この世界に存在しているし、クラフターと共に活躍している者はいる事だろう。

ただ多くの人魔と国、組織がいる世界だ。 全てをただの1人で観測は出来ないだけ。 言い訳かもだが。

だが貴方の人生という作品内に全人類及び魔物等が出て来ない様に、また相手の人生に必ずしも自分が出演している訳ではない。

ファルムス軍や帝国軍の兵士が万単位で、一瞬の内にクラフターに殺された事もだ。

顔も名前も知らない相手を、見ようともせず砲撃やら何やらで吹き飛ばしてきた。 そんな者達はクラフターの人生に一瞬だけ出たか、

そもそも出ていない。だが他の誰かにとっては”登場人物”だった筈だ。

それが不幸かどうかは、人それぞれだ。

そして”弟”君についても人それぞれだ。

存在を忘れられている弟君……とは、通訳やロケット開発をしている辛辣同志の弟だ。

ほえ？ 弟いたの？ となるかもだが、いたのだ。なんなら

辛辣の上に姉もいる。姉は残念ながら亡くなっているのだが。

(焚書処分参照)

さて。そんな弟君。

リムル達の世界に造られた湖底研究所で生まれ、マイクラ世界に送られる。その後、先輩達に誘われるままマイクラ軍事部に入部。

暫くして帝国軍事部に対抗する力として参戦要請。そうしてリムル達の世界に多くの先輩達と共に派兵されて来た……という経緯があった。

「僕が生まれた世界。 思い入れはないけど、争いは止めないと。

その架け橋となる為に頑張るぞ！」

彼の役割は、姉同様の通訳だ。

最前線には出向かず、後方で村人達と交流、取引、情報の整理。

他兵站任務……だったのだが。

彼はシヨタ……見た目が幼かった。庇護欲に駆られるのだ。

まるで精神作用系スキルの如く刺激される。

それが災いしお姉さん達に”廻される”事に。

「情報通り摩天楼が何基も聳える大都会だなあ……うわっ!？」

魔国連邦周囲の地形を把握しようと、摩天楼に昇ったら、有翼族のハーピーに攫われて天翼国に。そこで、お姉さん達のペットにされる。

「可愛い子が、あんな所にいちや駄目よ。お姉さんみたいなワルい魔物に攫われて”食べられちゃう”んだから♪」

「どう？　ハーピイの翼の心地は？」

「ネムの抱き枕にしてあげても良いの」

「や、やめ……ああ……」

だが現地クラフターの協力で何とか脱走。すると今度はケモ耳お姉さんに攫われて獣王国へ。

「フォスはフォスって言うです！　どうですか？　特別に触らせ

てあげた尻尾。　ふわふわです？」

「それとも、ぺろぺろされるのが好み？」

「良い匂い♪」

「ふわああ……」

同じ様に脱出するも、今度は女聖騎士に”保護”を名目に西方諸国へ拉致された。暫く国を転々としたが、同部屋にされる辺り……不健全な目に遭ったとだけ述べておく。

シズやヒナタに保護されたら、また違ったのかも知れないが、残念ながら会う事はなかった。

「や、やっと……連邦に戻れた……」

そうして、身も心も弄ばれた弟君。

ようやくと連邦軍の後方部隊に合流した頃には、帝国との戦闘が粗方終了していた。

「大変。　今治療してあげますからね」

戦闘による負傷者と間違われ、角が生えたピンク髪の者……シユナ

に治療されそうになったが、慌てて逃げた。

すつかりお姉さん不信になってしまっていた。

また、先輩達にしてもそうだ。目先の利益や創造に囚われたのか、部隊から弟君が消えたのを気にもしてくれなかった。

戦争じゃなくとも、多少の危険は覚悟して異世界入りしたのに……
こんなのも、あんまりだよ。

「もう嫌だ。 お家帰りしたい……」

運命は残酷だ。

死ぬより良いだろと言ってしまったえば、死ななきや何されても構わないと解釈されかねない。

誰も守ってくれない。 気にしてくれない。 良い様に弄んでくる人魔達。 そんな不信任。

これの所為で自分の姉、辛辣ちゃんに会っても喜びが素直に湧かず、打ち解けるのに時間が掛かったのは仕方なかっただろう。

「こんな架け橋は、世界はいらない！ クラフトや情報を手土産に帝国に亡命してやるっ！」

少年は飛び出し、ユウキがいる帝国に向かう。

これが今後どう影響するのか。 この時は本人も誰にも分からなかった……。

157. 末期と影

力の差は歴然でも戦争は1日2日と終わらない。

継戦中の連邦軍と帝国軍。 加えてマイクラ軍事部。

次の獲物は海上を行き西方諸国を攻め入ろうとする飛空船団になりそうであったが、ここまで来て問題が起きてしまう。

「弟が行方不明？」

IRPを地下格納庫に一旦収め、補給を済ませている間、クラフターは説明した。

君の弟が突如消えたのだと。

されども心配要らぬ。 新世界に来たから冒険しているだけだ。 放置すれば良い。

帝国領に向かったのが最後の目撃談。 飽きたら戻って来るさ。

クラフターは楽観的思考だった。 仲間意識はあるも、特段組織的でなし。 縛り合わない。 創造主は自由に生きる。

「弟とは面識が浅いので、どういう性格か知りませんが……アンタらと違って復活出来ない筈です。 それなのに戦争相手の帝国に向かうなんて何を考えているのか……何かあってからじゃ遅いですよ」

あつても近隣の同志が何とかするさ。

仮に1人のクラフターが離反したから何だ。

どうという事はない。

ましてハードコア状態の相手。 我々が遅れを取る気がしない。 帝国軍に寝返ったとしても、荒らしとして処理する。 能力は我々と並だろうし。

「あのね、クラフターには違いないんです。 それもアンタらの世界で軍事部に入り、大なり小なりクラフトを教えられている筈。 その

技術や知識が帝国に流れたと危機感を持って下さい」

心配症だな。基礎に足して戦車はクラフト出来ても、精密兵器でもあるIRPを製造出来るとは思えない。

知識があつたところで、帝国が我々の概念に沿う創造が行えるとも思えない。良くも悪くもだ。

そもそも。1人のクラフターに変えられる戦局は如何程か。村人相手なら兎も角、完全装備の創造主相手に敵うまい。

「非常識な連中が何を言っているんです」

そうだとして、戦争は短期で終わる。

今更ジタバタしても遅い。帝国は血を流しすぎた。

「帝国そのもの以外は？ あの国にはユウキがいるんですよ。世界を混沌の渦に墮とそうとする連中が、弟そのものを悪用しない筈がない」

我々には関係ない。自業自得だ。

奴が選んだ道だ。基本干渉しない。

「冷血ですね」

血なんて関係ない。

「それでも私の弟です。私だけでも調査に」

駄目だ。ハードコア同士をぶつける利点がない。

「そうやって、いつもいつも！」

だからこそ。

創造主はネザライトの剣や銃を装備。

「……………えっ?」

我々が向かおう。

なに。急に帝国を観光したくなっただけ。

ついでに弟を連れ戻す。簡単だ。飯の用意でもして待っていて欲しい。

「……………お願いします。弟を助けて下さい」

クラフターは頷き、地下鉄で帝国領に向かう。

道中、レールが破壊されていたり丸石が充填されて手間取ったものの、何とか手前まで辿り着く。

十中八九、弟の仕業だろう。

ここから読み取れるは拒絶だ。心の壁だ。ナニがここまでさせたのか。

そして、何をしているのか。

湖底研究所の2の舞いにならない事を願いながら、創造主は透明化のポーションを飲み帝国に潜入していく。

願わくば、息子が無事でありますように。

だが現実是非情。

弟君はユウキらに接触。情報を与えてしまっていたのであった。



「なるほどねー。色々ありがとう」

帝国領の、とある密室。

待ち構えていた様にいたユウキと出会った弟君は、良い餌になってしまった。

マイクラ世界にいた所為で、多くの知識は通用しなかったり、とつくづく知っているモノで詰まらなかったが、IRP等の情報は使えそうだと判断された。

「世界を混沌に堕としたい、という意味なら協力出来そうだね。今後とも宜しく！」

「は、はい……宜しくお願いします」

笑顔で握手を求められ、オドオドしながらも握り返す弟君。

もう引き返せない。目の前のユウキという人物が、それを許さない。そう思わせる感覚に襲われる。

予め得ていた情報以上に、ユウキは危険だった。実際に会って初めて分かった。

ここに来て、一時的な感情で動いてしまった己を後悔する弟君。だがもう遅い。

「そう硬くなるなよ！　でさ、まだ向こうは君が裏切ったとは思ってないよね。そこで連邦に潜伏して情報を報告して貰おうかな。出来れば機龍を奪って帝国に持ち帰って欲しいんだけど。そうすれば君も帝国に認められて居場所が手に入るよ？」

「そ、それは……」

”使い捨ての駒じゃないか”

喉元まで出掛けた言葉を飲み込んだ。

軍事部は、そこまで間抜けじゃない。

自身が部隊を抜けて帝国にいる事は既にバレている可能性がある。

下手すると殺されるだろう。クラフターは裏切り者……荒らしには容赦しないのだ。

そんなお尋ね者の状態で機密の塊であるIRPの奪取なんて困難だ。

ユウキはソレを分かった上で言っている。

此処にも居場所なんて無かった。

弟君は悟り、目の前が刹那的に暗くなる。

「もう友達だろ？」

「ッ、分かりました。 やって来ます」

言葉の薄さを感じながら部屋を後にする。

絶望感に足取りがフラつきながらも、とにかく此処を離れたい気持ちで一杯だ。

道中、ユウキの秘書であったカガリ女史とすれ違った。

「飲み物お持ちしたのですが」

「い、いえ！ お構いなく！」

逃げる様に帝国を後にする。

ユウキも怖いが、お姉さんも怖い。

(今更、皆に謝っても……)

門限を過ぎた子供の様に、戻れるとは思えない。

だからって、ユウキの言いなりになって連邦と敵対するなんて。

(これからどうしよう……)

そんな思考も疲労で薄れていく弟君。

それでも余計な事を考えずに済むと思えば、悪くないのかも知れない。

インベントリを開く。

あるのはベイクドポテト、仮拠点セット。松明に土や白樺木材、丸石といった簡単なブロック。

護身用の木剣や盾、エンダーパール。軍事部支給の自動拳銃。ツールは鉄ツルハシに鉄スコップ。鉄斧もある。それぞれエリヤンチャントも付く。これだけあればサバイバルは可能だ。寧ろ贅沢なくらい。

(数日は持つ。どこかで野宿しよう)

夜の、闇深き帝都を歩く。

科学文明の恩恵により、灯籠に代わり街灯が設置されるようになった帝都だが、未だ全区画を網羅してはいない。

発展を続ける帝都ではあったが、闇を全て駆逐するのはまだまだ先の事となりそうだった。

(ワキツブシが甘いなあ。取り敢えず松明を刺しておけば良いのに)

マイクラ思考に犯されている弟君は思った。

実際、クラフターが帝都にまで手を出していれば、西方諸国同様に闇を払い除けた筈。

彼等の思想的に、建造物が乱立する区画の光源が確保されていないとか、大問題であるし。

なのに数年間、クラフターが帝国の存在を知りつつ改修しなかったのは、現地の軍事部が強かった事や、他に忙しくて放置していたから。つまり偶然にもクラフターの魔の手から逃れていたのだが、その気になれば引つ掻き回すのは容易であろう。

ギイのいる氷の領土にもチョツカイ掛けているのだ。怖いもの知らず、ではないが、思考が色々ズレている。

(ん? アレは?)

とぼとぼ歩いていると、目の前に人影。

慌てて物陰に隠れ、スニーク姿勢。

薄暗くて視認し難いが、豊かな胸……女性の様だ。

鞆を持ち、何やら急いでいる。

戦時下の、こんな時間に。 怪しい。

(だからなんだ。 例え僕のように亡命希望者だとしても……)

そう考えたら、余計放置出来なかった。

自身は間違えた選択をしてしまったが、お姉さんには間違えないで欲しいから。

(あーもう！ なんて僕は！)

結局後を付ける事に。

エンダーマンを模った漆黒パーカーのフードを被り、闇に溶け込む。

こんな時、ワキツブシが甘い空間で良かったと逆に感謝した。 明るければ目立つ格好である。

そして、直ぐにも危惧していた事が訪れる。

お姉さんの目の前に突然別の人影、男の人が立ち塞がったのだ。

(ッ！)

そのプレッシャーに、アイテムスロットから素早く護身用の木剣……ノックバックエンCHANT付きを右手に持つ。 左手にはシールド。

防具はパーカーの上になるので未着用。

新人にしては素早い反応。 軍事部の先輩達に色々教わった結果であった。 あとゾンビやクリーパーに追いかけられたりとか。

(帝国の諜報員!?) 恐らく他にも……!)

それはそうと、相手は只者ではない。帝国の者に違いない、お姉さんは直ぐにでも殺されそうな距離に詰められる。

想定されるシナリオは、お姉さんの亡命がバレて、始末されようとしている……だ。

「こんな夜中にどこへ行くつもりだ？」

「あら！ 近藤中尉ではありませんか！」

お姉さんは慌てる素振りを見せず、悠然と切り返す。

弟君には分かる。アレは人を騙す口調だ。

やはり友好的な関係ではない。元の世界においても似た事はあった。笑顔で騙されての大型建築の手伝いとか。軍事部へ誘われての入部は、学ぶ事も多かったから良しとして。

「君はカリギュリオ軍団長の参謀のミランダ、だな？ 戦時作戦行

動中に、何故帝都に戻っている？」

「怖かったですわ、近藤中尉！ 実は私、閣下に密命を受けて、帝都に戻ってきましたの——」

返事をしつつ近寄り、近藤の胸にしな垂れかかるお姉さん。

今までの経験から、見ている良い気分ではないものの、冷静に状況整理に努める。

(コンドウ……ユウキ・カグラザカもだけど、報告にあったシズエ・イザワやヒナタ・サカグチいう日本人と似た発音な気がする。この人もそうなのかな？ ミランダは分からないけど、参謀って事は指揮官を補佐する将校さんかな？ でも直前までの行動と、今の行動からして……)

逃げたいミランダからしたら、近藤が邪魔であり消したい筈。

近藤はミランダが逃げようとしているのを知っていて、敵前逃亡として殺す。

互いに騙し合い……負けるのは。

直感だった。止めなくちゃ！

敵も味方も、利益も不利益も関係なく思った。

(間に合えー！)

エンダーパールを投擲。

ミランダにぶつけて、そのままワープ。体当たり。

これがミランダの運命を変える出来事になった。

本当なら、この後、近藤に小型拳銃で こめかみ を撃ち抜かれてアツサリ死んでいたのだ。

それを裏付ける様に、先程までミランダの頭部があつた場所を1発の弾丸が通り抜ける。ギリギリのタイミングだった。

「なんだい!？」

驚き、近藤から離れるミランダ。

「邪魔が入った」

近藤は乱入者を優先。懐から拳銃を出して、目にも止まらぬ早撃ち。

最初から構えていたシールドで防ぐ弟君。衝撃が伝わり、左腕がジンジン痛む。

「くっー！」

構っている場合じゃない。

衝撃に多少よろけつつ、反撃。

ミランダが近藤から離れているのを確認し、木剣を横に振る。それを素早く回避したつもりの近藤だったが、剣先が衣服に掠った瞬間、大きく後方に吹き飛んだ。

エンチャントの力は伊達じゃない。

「むっ!？」

僅かに目を見開く近藤。

対する弟君、スロットを切り替え、木剣から拳銃に持ち替える。

そのまま吹き飛んだ先に何発も発砲。下手な鉄砲数撃ちや当たるとばかりに。

静かだった夜の帝都は、最早戦場だ。

「お姉さん、逃げて!」

叫ぶ弟君。

突然の出来事に混乱する中、ミランダは逃げるのが最善と判断して走り出す。

が、他の諜報員……情報局の者も集まり始め、囲まれてしまった。

「既に手遅れだったよ、坊や」

「ッ!」

数も実力も向こうが上。先程の射撃の手際良さもあり、ミランダは諦観した。こうなっては助かる余地はないと。

普通なら絶望的。

だけど弟君は諦めない。マイクラ世界で先輩達に学んだクラフトは、コツさえ掴めば希望の糸を幾らでも引き寄せる事が出来るものだったから。

「終わってない！」

お姉さんの側により、丸石ブロックで防壁を展開。豆腐状にして
即席シエルターをクラフト。

「一瞬で!？」

突然の壁に驚きつつも、直ぐに発砲を始める諜報員達。ところが
通常の拳銃弾程度で丸石が抜ける事はない。

それでも絶えず銃撃音が響く中、弟君はツルハシに切り替え、地面
を掘り進む。

「うおおおおっ！」

「なにしてんのさ!？」

知らない人が見たら狂っている。

だけど、クラフトーにとっては普通の事。

その人外の作業速度は瞬く間に地面にトンネルを形成していった。

「坊や、まさか連邦の?！」

「良いから入って!！」

出来た穴に無理矢理押し込む弟君。

自らも入り、直ぐ上を丸石で蓋する。隠れる目的なら、蓋はシル
クタツチによる元の素材の使用が好ましいが、無い物ねだりしても仕
方ない。

「このまま地下に潜ります!！」

掘り進める弟。

助かる打算はある。今は座標計算しつつ、地下鉄路線座標に進ん

でいる。

路線に出たら徒歩で西に退避。帝国領手前の地下鉄駅に辿り着いたら、常備されているトロツコで一氣に連邦領に脱出する。

帝国に行く際、マイクラ軍事部からの追手を妨害する為に路線を破壊してしまったが、些細な問題だ。何なら先輩達がとつくに直している事だろう。

とにかく、お姉さんを逃すのが最優先。

松明を刺して光源を確保しつつ、やがて地下鉄路線の空洞に出た。ここまですれば安全圏まで少した。

「線路？　地下にこんな所が」

「お姉さん、この線路を辿って西に向かって。連邦領に出るけど、帝国よりマシな筈だよ」

「……どうして逃す？」

「えっ？」

ミランダは困惑したままだ。

元々西側に逃げるつもりだった彼女だが、仮にも軍属。戦時下の連邦からしたら敵である。

目の前の可愛らしい少年のスキルを見るに、連邦の人間だ。更に言えば例の人達の仲間。

助けて貰う義理どころか、殺されて文句は言えない立場なのだ。お互いに。

「私が誰か知っていたの行為かい？」

「逃げるつもりだったなら助けようと思って」

苦笑いで応えられた。

どうも、ミランダが裏の組織「ケルベロス」の3人のボスの内”女”である事は知らないらしい。

「可愛いのは見た目だけじゃないのね」
「わぷっ!?!」

なら利用してやろう。

そう、豊満な胸で少年を包み込む。香水系呪術と幻術系のチャームを併用し、支配してやろうとするミランダ。

そうすれば、連邦で亡命するにも利用するにも駒に出来る。そう思ったのだが。

「やめて下さい……」

まさかのレジスト。払い除けられた。

これには少し驚くミランダ。

アピールするには若過ぎて、魅力が伝わり難かったのかも知れない。

実際はお姉さん達に酷い目に遭わされて来た結果、免疫力（といって良いのか分からないが）が出来た所為なのだが……。

「早く行って。僕は行けない」

「なんでだい?」

「先輩達を裏切ったから。下手すると殺される」

「……そういう事」

自分と似た境遇なのかも知れない。

男共を散々利用してきたミランダだが、不思議と小さく可愛い男の子に同情してしまう。

こんな幼い見た目でも、厳しい世界で色々苦労してきたのだろうと。

もつとも、想像とは違う裏切りなのだが。

ミランダは帝国という船が連邦に敗北して沈みそうだと乗り捨てたが、少年はお姉さん達に弄ばれて世界が嫌になり逃げ出した。か

なり高低差が激しく風邪を引くレベル。

「と言っても、坊やも帝国にはいられないだろ」

「ええ、まあ」

「やっぱり私と来なよ」

ケルベロスは西側にも根を張っている。その伝手を頼れば、生きていく事は出来る。

1人の少年の道を作る事くらい、造作もない。なんなら、そのスキルは色々役に立つ。部下にいても痛くない。ところが、少年は首を横に振った。

「お気持ちだけ受け取ります。追手が来た時、お姉さんを巻き込むから」

「それを言っちゃあ、私もだけどね。これからは帝国から怯えて暮らさないでだし」

「似た者同士ですね」

互いに苦笑して、人の温もりを感じ合う。

ついでとばかりに、ミランダは少年の額に口付けして別れた。

「あっ……」

「気持ちだよ……元気でね、坊や」

鞆を持って、ミランダは線路を西へ行く。

少年……弟君は小さくなる背中を視線で追いかけて、やめた。

「残置課者じゃないけど」

路線を東へ行く。

連邦に戻れない。かといって帝国にも。

なら罪滅ぼしとして、敵国に工作をしよう。 自分も軍事部だ。
破壊の為の創造は多少なりとも学んできた。 実践する時が来ただ
けの事。

「自己満足なのは分かってる。 先輩達に許して貰えるなんて思っ
てない……いや、少しは思っちゃってるかな」

自虐の笑いと少しの涙。

拭った後の手にはツルハシ。

後悔先に立たず。 それでもお姉さん、ミランダを助けた事は後悔
しない。

「武器も材料も現地調達だ。 先輩達なら、マインクラフターなら上
手くやる。 僕もそうするだけだ」

その後。

帝国において軍事施設が爆発、装備品の紛失、戦車や飛空船が消え
たり部品の喪失で動かなくなるといった事が多発。

見えぬ敵の存在……それが自分達の領地、それも懐に潜伏している
事実。

噂では連邦のスパイ、小柄な少年だか少女の仕業だとも囁かれたが
真相は不明。

更に本隊が壊滅した噂や、夜の帝都における銃撃戦の話も合わせ
り、帝国国民は恐怖していくのだった……。
だけど。

本当の恐怖、混沌を招こうとする人物は別にいる事を、多くの者は
まだ知らない。



「帝国領で暴れるなよ」

帝国領での爆発事件等の報告を受けたリムルが露骨に嫌な視線を送るから、濡れ衣だと辛辣に述べた。

何でもかんでもクラフターの所為にするのは如何なものか。世界は我々のみで回ってるとでも考えているのか。

村人のみならず、並大抵の創造力では敵わぬ化物だらけの世界である。犯人なんて不特定多数にいる事だろう。

「弟関係です……すみません」

「弟？」

「部隊を抜けて、単身帝国に向かったのです。理由は分かりませんが、今馬鹿達が連れ戻しに向かっています。その際、何かあったのでしょうか」

辛辣が擁護する様に受け応える。

たぶん、領内で弟を巡る戦闘だ。

現地と連絡が取れないので確認出来ないが、戦闘に忙しいのだと思う。

……という事は普通に我々の所為ではないか。

急に気不味い。視線を逸らす。

「民間人に被害が出てなきや良いけど。とはいえ本土攻撃と見做されるのも……あまり戦争を泥沼化させたくないんだけどなあ」

「帝国は混乱状態でしょうね」

「……相手の戦意が無くなったとしよう。これで戦争意欲が削がれたなら、大人しく敗北を認めてくれるだろうし」

「此方側の残敵を掃討したら、交渉の席に着かせる事を考えましょう」

最悪の事態としては、弟が完全に寝返って荒らしになっていた場合

だ。 そうなれば殺害対象の仲間入り。

出来れば避けたい事案。 他の同志なら容赦なく斬り捨て御免であるが、弟は辛辣と同じくリスポーン出来ない。 何より貴重な通訳。 生かしたいのが本音である。 特殊技能者は優遇したい。

回収しに向かった同志が上手く纏める事を願おう。

「会議中失礼します」

突然、室内に入ってくる一本角。

ソウエイだ。 影が薄いなりの仕事をしている連邦の諜報員的な村人だ。 コイツを筆頭に他に何人もいる。 ソーカとかいう奴とか。

「ソウエイか。 どうした？」

「帝国から来たと思われる女を捕縛致しました。 亡命を希望していますが、どう致しますか？」

「帝国から来た女？」

「ミランダと名乗っています」

「ミヨルマイルが言っていた裏の組織、ケルベロスのボスの1人が？」

よし連れて来い。 軽く尋問する。 油断はするなよ」

「はっ」

リムルとソウエイは部屋を出て行った。

相変わらずハアンハアン分らない。

辛辣に通訳して貰ったところ、帝国から村人が逃げて来たとの事。 クラフターは頷く。 分かる話だ。

本隊は軍事部に殲滅されたし、今度は本土で爆発騒ぎ。 人の家に土足で踏み荒らしたばかりに亡国の危機。 逃げたくもなる。

「殆どお前らの所為ですよ。 猛省して下さい」

荒らし死すべし慈悲は無い。

荒らしを荒らして文句言われる筋合いもない。

そして命と土地と資源と、他にも貰える物は貰う。荒らしに利用される位なら善良なる我々が再利用する。その方が創造物も報われる。湖底研究所の時もそうである。

「やり過ぎだつて言いたいんです。侵略されたといつても本土には民間人もいるんです、そこまで手を出したら我々が荒らしでしょう」

クラフターは溜息を吐きつつ、取り敢えず了解した。ファルムスの時も思ったが、リムルは甘い。

国家を荒らし組織の様に見えるクラフターとしては、そこに住まう村人は殲滅対象なのだ。非戦闘員の村人だろうが、荒らしの国民に違はなく、戦争が終わっても憎悪の念から、いつまた荒らしってくるか解った物ではない。

危険な芽は根絶やしにしておきたいものだ。全て取り除くのは酷く困難だと知りつつも、しないより良い。

そんなクラフターの思考を危険思考とするなり短絡的だの脳筋だの身勝手だの考え無しとするのも人それぞれ。

それでも何だかんだ「訳ありなら、後は任せる」と投げるのもクラフター。

何だかんだ他者の意見を尊重出来る部分もあるのだ。少しだけだ。

「——通訳ちゃん、尋問に來れそう?」

リムルがひよつこり戻つて來た。

辛辣を連れて行くとしてている。

何か。相手はクラフターでもあるまいに。

「弟と思われる話もあるんだよ。聞いた方が良いと思つてね」

「……分かりました、参加します」

行ってしまった。

後に残るクラフター。心中虚しく仕方なし。

この隙間を埋める為に残党狩りに参戦してこよう。そうしてさっさと荒らしを終わらせよう。弟の件は後だ。

……などと軽率な行動に出たのだが、まさかドラゴン戦になるとは思わなんだ。



残党狩り。そう挑んだ戦いは創造主に良くも悪くも衝撃を与える出来事になった。

事件はギイ・クリムゾンの住まう氷土の大陸より南下、ドワルゴンより北の海域周辺にて発生。

西側諸国へ侵攻する凡そ300隻からなる飛空船団が、この海上……空路を移動中であつた。これを迎撃するべく、エリトラ飛行隊が襲撃。

残党といつてもクラフターが勝手に決めつけているだけで、西方を侵攻する為に数が多い。とはいえ、飛空船は連邦側で撃沈した経験がある。今回もその流れで終わるだろうと思つた。欲をかけば、メスガキ軍服悪魔の所為で手に入らなかつた飛空船を鹵獲する所存。

「人型存在が空を飛んで向かってきます！ マントを装備している事から、連邦の例の連中かと！」

「空中戦は想定してなかつたな。分が悪い」

「仕方ありませんね。私が出ます！」

すると船団からある村人が飛び出して来たのだ。

最初こそ空を飛ぶ村人なんて珍しくないから、その手かと驚きもしなかった。

ところが、村人は大きな緋色のドラゴンに瞬く間に変貌。まさかの事態である。

「なっ!? まさか灼熱竜ヴェルグリンド! 帝国の守護神はヴェルグリンド様だったのか!!」

輝くばかりの緋色のドラゴン。その幻想的で美しく、力強い飛翔こそはクラフターの想像にも住まう最強格の生物だ。

「巻き込みたくありません! ザムド少将、貴方達飛空船団は退避しなさい!」

「は、ははっ!」
「我等にはヴェルグリンド様がついている!」
「勝てるぞ!」 「帝国万歳ッ!」

エンドラとは姿が違うものの、何方にせよ狩りの対象に違いない。飛空船は後回し。逃げていくし、ドラゴンとの戦いに巻き込まずに済む。ゾンビが現れた際の村人の如く。家もなし、賢明な判断を下せる村人には改めて有難く思う。元の世界でもそうなら良いのに。トロツコだの縄だの用意せずに済む。

さてもドラゴンだ。早速エンドラ戦を思い出して雪玉を投げまくった。空中戦は苦手だが、雪玉は連射出来る安定感が良い。

「きやつ!? この冷たさは……ゆ、雪玉? 情報通り、ふざけた真似をするのね! それとも私が灼熱竜と知つての狼藉かしら?」

効果がない。思えば、イングラシア郊外のドラゴンもそうだった。

それでもモノは試しでやるものだ。次は別の方法を試す。 I

RPをぶつけてやる。来るまで時間は掛かるものの。

「世界を謳歌する自由人よ。竜種の存在に平伏しなさい！　バーニングブレス！」

ドラゴンの口から細い光線のように、超高速の火炎放射。ガストやブレイズの火の玉の比ではない。速くて回避出来ない。

一部同志直撃！　熱い！

マグマ内の光景に似た景色が視界一杯に!?

クラフターが忌避する光景に顔を歪めつつ火だるまになったのは一瞬で、火炎耐性ポーションを飲む間もパールを投擲する間も無く死亡してしまった。同志は空中で遺品を撒き散らし散っていく。

ああ……下は海。海底からの回収か。深度にもよるけれど、大変なのは変わらない。

「少しの間とはいえ形を残すなんて。やはり普通の人間じゃないわね」

胴体防具無しだったとはいえ即死級とは。凄まじい火力だ。

エンドラのブレスとは訳が違う。

一方、掠った同志は辛うじて生きていたのだが、様子がおかしい。

「でもどう？　アルティメットスキルが上乘せされたブレスは。生き延びた方が辛いんじゃないかしら。加速破壊効果でチカラが暴走して大変なんじゃない？」

状態異常だ。身体の芯から熱い。

インベントリを開かないと詳細不明なれど、先ず空腹異常だ。

いつもなら即座に牛乳で中和するが、勝手が違う事で手を止めた。いや、奮いまくり震いまくって振るいまくる！

「あ、あら？　なんで元気なの？　なんでツルハシやスコップを振り回してるのおお!？」

創造だ！　創造したい！　クラフトしたい！

良性ポジションをフルでドーピングした以上の力が漲ってきた！

我等マインクラフタアアアアツ!!

クラフト出来ん事はないいいツ!!

元気澆刺!

よく分からないけど整った!

この勢いでドラゴンを討つ!

「ならー!」

攻撃しようとしたら、消えた。

否。　凄い速度で上空に移動した。　ロケット加速では追いつか

ぬ勢いに驚愕である。

「終わりにしましょう。　普通じゃなくても所詮は人間に毛が生えた程度。　私の手の中から抜けられはしないのよ!」

　　またも光線の様な火炎放射。

　　それが何本も放たれては、何人もの同志が消し炭に。　　次いでと炎

　　の柱が複数、天と地を結ぶ。

　　それは炎の檻。　　創造主は囚われる様に火柱に囲まれた。

　　かつての、シズの比ではない。

　　だが今更に臆する創造主でもなかった。

　　既に火炎耐性ポジションは服用済み。　　もう炎は怖くない。　　寧ろ

　　進んで入浴。　　副作用でハイになれるから喜んで。

「自ら炎に入るなんて。　　飛んで火に入るお馬鹿さん……えっ?　　なんで燃え尽きないの?　　まさか一瞬で耐性を得たの!?!　　しか

も炎の中を垂直に泳いでるのアレ!？」

火柱を昇れば宇宙にも行けそう。

いや流石に無理か。　されど宇宙まで届く昇降機の発想。　悪くないのではないだろうか。

「で、でもね!　　ここからが本番なのよ!」

　　またも火炎光線を吐くドラゴン。

何を無駄な、と思った次の瞬間。　大きな爆発発生。　海面に近い者ほどダメージが大きく、下方の同志は蒸発してしまった。

「熱耐性があっても水蒸気爆発は耐えられないようね!」

それだけではない。

小さな紅い雨が下から上へ降り注ぐ。　何の冗談か。　喰らえば熱くなるではないか。

「それは対象の熱量を、運動量を強制的に増加させるもの。　適度な体力上昇効果があるけれど、行き過ぎれば消耗する。　それが最大効果ともなれば、自分で生み出した熱量で、その身を焼き尽くす!」

更にハッスル!

何でも何とかなる熱意に溢れる!
空中戦がなんだ!

ネザライトの剣や弓矢を振り回してドラゴンをさっさと排除してやる!

そしたらクラフトだ!　　オラオラである!
世界がクラフターを待望している!

そう!　　世界との一体感があった!
クラフターは火だるまになりつつ咆哮!

”もつと熱くなれよおおおお!!”

「だからなんでよおおお!?　なんで燃え尽きないの!?　逆に元気になつてるし!　レジストしてる感じじゃないですし!」

マインクラフター、熱中症!

ヴェルグリンド、大困惑!

創造主の興奮は水不足や体温の故障ではない。

元よりそんなもの関係ない彼等。空腹状態にはなったものの、地上ならともかく、エリトラによる空中移動に差し支えない。

空腹による飢餓感、瀕死になるオワタ式になっていくのはマズいもの、それも気にならぬ程に創造力に掻き立つ創造主。

そう。ヴェルグリンドによる能力で上がってしまった熱量は体温的な方ではなく。

創造力、クラフト意欲だったのだ!

オマケで攻撃力や俊敏性。

悪魔に遺伝子コネコネされても大丈夫だったのだ。格(世界)が違います。

「もう物理的に潰して差し上げます!」

きた。速い。だが捉える。

ドラゴンの背中にパールを使うまでもなく取り付くと、ネザライトの剣を刺しまくる!

「なっ、キャアアアッ!」

振り落とそうとするドラゴンだが、今のクラフターには暴れ馬程度に過ぎない。

いや、それ以下だ。

針山で針を抜差しして遊ぶ様に、機関銃の如き早さで剣を刺し抜き

繰り返した!

”ブスブスブスブスブスツ!!”

「痛ツ!? 剣が通用するなんて……ツ!」

スニークでも振り落とされる間際、TNTを背中に設置、火打ち石で着火。起爆して離脱する嫌がらせ。

ドラゴンの表層に何発もの爆煙が巻き起こる。

更に土や丸石ブロックを塔の様に設置した。これを基点に金床を落したり水バケツをひっくり返す。が、コレらは効果がなかった。

やはりエンチャントを施した武具でないと難しい。

「この程度で、ちょこまかと! 死ね!」

ドラゴン発狂。

大木のような尻尾を振り回し、何人もの同志がノックバックで吹き飛ばんでいく。

「もうお仲間は少ないわね? 降参したら?」

周辺空域を見やる。残り同志は少ない。この人数と得た結果からして勝利は困難だ。幾ら力を増したとはいえ、空中での限界点が見えていた。

万事休す? いや違う。まだ我等がクラフトは残っているのをお忘れか?

「まだ余裕の顔を出せるとは……えっ?」

やがて始まる爆発音。

それは聞き馴染んだTNT。それがドラゴン周辺で次から次へ

と空中で響き渡る。

キャノンによる攻撃、それも命中するよう起爆タイミングが計算された砲撃だ。

ドラゴンにダメージは通らない。　だけど、突然の攻撃は驚きを持って迎え入れられる。

「今度は何!?!」

ドラゴン共々離れた地上を見やれば、そこで疾走する人工龍。　機龍ことIRP。　移動式多目的キャノンであり、改造され続ける大型二足歩行戦闘兵器。

それが進路上の木々を薙ぎ倒しながらも右腕部に備えられた主砲からTNTを発射しつつ、背中から対空誘導弾を何発も連続発射。　全てドラゴンへと飛んでいく。

BBにより演算されたそれらは、走行しながらという不安定さに関わらず、寸分の狂いもなく次々にドラゴンに向かう。

「また妙なモノが。　でもね、その程度!」

ブレスを吐かれると、弾が空中で爆散。

1発もドラゴンを当たる事なく終わってしまう。

「アレが連邦の兵器?」　”弟”を模したなんて言う者もいるけど大した事ないわね……なつ、飛んできた!?!」

機龍、飛び道具を諦め自ら飛んでいく。

大きな質量は弾丸となり、ドラゴンに体当たり。

突然の事に対応出来ずモロ喰らったドラゴンはノックバックで吹き飛び……海面に落下。　叩きつけられ大きな水柱を上げた。

「くう……!」

次いでにIRPも落下。着水。水飛沫。
ドラゴンは直ぐ浮き上がり空へ上がる。IRPはそのまま沈む。
湖底研究所でのIRP研究、技術も参考にしていた筈だ。きつと
沈んでも大丈夫だ。
寧ろ沈んだ方が有利かも知れない。

「上がってこない？ 溺れたなら結構……ッ！」

突如、水面から幾多の水柱が、いや誘導弾が飛び上がる！
慌てて回避行動をとるドラゴンだったが、次の瞬間。

一閃の線が見えたと思えば、ドラゴンの片翼が消し飛んだ。

「え……っ」

驚く間も無く、ドラゴンは海に堕ちていく。

再び大きな水柱が上がるも、今度は何も上がってこない。

”勝ったな”

クラフターは独りごちた。

レールガンが命中したのだ。様々な結界や防御方法を持つ人魔
達に、果たして効果があるかとか、そもそも水中から発射出来たのか
とか、命中したところで倒せるのか心配やツツコミはあったものの、
結果が出たのでソレで良し。

「そんな馬鹿な……」

「ヴェルグリンンド様が負けた？」

「退却急げ！ 皇帝ルドラ様をお守りするのだ！」

あ。鹵獲したかった飛空船を忘れていた。

もう遠くにいる。逃げている。

落胆するクラフター。戦闘が大変だった割に得たモノは意外と

少なく感じたからだ。

どうしたものか。最早少ない同志が、それでもと飛空船を追いかけたものの、返り討ちに遭う可能性が高い。

なに。空中戦やIRPの実戦経験が出来ただけ良しとしよう。

せめてドロップ品があれば……。

遺品回収ついで、IRPと共に海底搜索。

水中呼吸ポーション等を使用しつつ、ジャックオランタンで水中を照らす。

すると同志の遺品に混じって倒したドラゴンの村人形態……少女を発見した。

驚くべき事に息がある。悩んだ創造主だったが、結局回収する事にした。

アレだ。エンドラ卵的な。役に立つかどうかはさておき、戦利品代わり。

……卵ほど容易でないが。

松明での回収ではなく、船やトロツコ、リードを駆使しての村人運搬式。

連邦に運ぶのに偉く苦労しそう。でもやると決めたらやる。

達成感待ち構えている。マインクラフターはそれを知っている。因みに。

戦闘海域周辺では、前からいたクラフターが大陸と島を繋ぐ大橋を造っていたのだが……どさくさで大破。

ギイヤ、その配下、海域に棲まう海獣に破壊されるよりも酷い。

軍事部と現地クラフターは揉める事になったのだが、マルチ生活では珍しい光景でもなく、いつも通りに事は進むのであった。



「追手だ！ 迎撃せよ！」

逃げた飛空船に追いついたクラフターだったが、流石に300隻を相手にするのは厳しかった。

だが飽くまでクラフターの場合。IRPがいるから怖くない。

更には軍服悪魔達も来た事で解決の兆しが見えた。あいや、全艦撃沈されたら困るけど。1隻くらい鹵獲させて。

「あら。またお会いしましたわね」

「また一緒に遊ぼうねえ♪」

「……ボクは見るのも嫌だ」

それぞれ好き放題に暴れ始める。

バイキングというヤツが知らぬが、喰われていく飛空船。

乗船していた者は次々死ぬ。首は捻られては捨てられて。遺

伝子を弄られ崩壊し。重力変動で船底を抜け沈んでく。

IRPも負けじと砲撃。同志の座標伝達と自前のレーダーによる計算で次々船を破壊した。

「ば、馬鹿な……これは悪夢だ……ッ！」

「なら目覚める先は温かなベッドだと良いですわね。あの者達の様

に。私達が魂を喰らうので、そんな事にはならないでしょうけど」

「テストロッサ。間違つてもアイツらの魂まで喰わない方が良いでしょう。物作りへの衝動や世界を楽しみ尽くす思考に支配されそうになるから」

「ウルティマの様子がオカシイんだけど」

「カレラも気を付けなよ。魂が純粹というか、逆に汚染される……とにかく、ボクは警告したからね」

「あの娘に此処まで言わすとは」

「笑い事じゃないね、こりゃ」

良し。いくつかの船は奪取！

操船なんてボートくらいしかないクラフターだが、そこは数多の創造物を扱ってきた腕がある。

早速、それっぽい円形の操縦桿らしきものに手を掛けた。空駆ける船を操舵。舵を切る。

上昇。 下降。 加速。 減速。 ヨシ！

「操船なんて、どこで学んだのでしょうか」

「関係ないでしょ。 私達は魔法でちよいとやるだけだし」

戦闘で空いた舷側の穴は、取り敢えず土や丸石で塞いでおいた。

後はコイツを連邦へ持ち帰る。 他の者は軍服悪魔と残党狩り。

剣振るい、弓絞り、時にTNTで船体に大穴を開けてやる。 おお、なんと脆い船よ。 持ち帰る分は大幅に改造しなくては。

「精鋭が……こんなにも簡単に!?!」

「近藤中尉らがいてくれたならば!」

村人がゴミの様だ！

クラフター、無双状態に嬉々とする！

IRPの活躍も大きい中でも際立つ船上戦。 エンチャント強化

されたネザライトの剣や弓矢、銃火器に加え、ドラゴンに強化して貰った創造主だ。 戦闘特化村人相手でもゴリ押せる。 村人は特

殊防具や武具を装備している様子だが、難なく斬り捨てられた。 軍服悪魔もいる。 楽勝である。

尚、本来乗船してたかも知れない”元帝国”軍人、近藤中尉は本土での騒ぎでいなかった。

もしいたとしてもクラフターと原初の悪魔複数相手だ。 他と違い戦いになったかもだが、それでも奮戦虚しく死んでいた可能性が高い。

その意味では不幸かも知れない。 されど友である皇帝ルドラの

側にいれなかった方が、本人には不幸であつただろう。

そんな友、皇帝ルドラは後悔を口にしていた。

戦争とは別の、クラフターには知つちやこつちやないけど重要そうな事を。

「……ギイとのゲームに勝つ事叶わず、事今に至つては自由を謳歌する理不尽共に敗退する、か。人である内に……約束を何ひとつ果たせず終わるのか。ヴェルグリンド、タツヤ・コンドウ、皆の者……済まない」

「……皇帝陛下」

「ダムラダ、今回で最後になりそうだ。余は疲れた。正義之王（ミカエル）の暴走を抑えるのにも限度がある。絶対的な“正義”など、突き詰めれば“邪悪”と大差ない。万人が認める正義など、存在しないのだから……」

クラフターがヒヤッハーしている戦場の後方で、重要人物が何か言っている状況。

ただ、内容自体は通じるところがある。

世界を統一し、人々が安全に平和に、貧困、飢えがなく幸せな世界を創る……。

純粹にそう思つてたかはさておき、クラフターの正義も人それぞれだ。荒らしは許せないが、それだつて人によっては正義の行いである。

……やっぱ許せない者には悪だけど。荒らし死すべし慈悲は無い。

「故に、余が余である内に命ずる。余を倒せる者を探し出せ。アレは、暴走すれば……ミカエルは文明だけに飽き足らず、この世の全てを消し去るだろうから——」

だから、その言葉は創造主達からしたら問題のあるもの。 ”ソレ

”は荒らしに違いない。

そしてソレに遭遇した時、クラフターは容赦しない。屈する気もない。楽しい世界の障害物として排除する。そこに種族やスキルは関係ない。平等に荒らしに過ぎないからだ。それ以上でも以下でもない。

それ以上、皇帝ルドラが語ることはなかった。

周囲の者は悟るように閉目し、直ぐに行動に移す。かつての皇帝を乗せた船は、帝国へ舵を切った。

創造主達は飛空船を鹵獲した事に上機嫌であったが、逃げる旗艦を見逃す程甘くはない。

鹵獲した飛空船を無事に回収する方が大切だけど、荒らし絶対許さないマンなクラフターだ。視界の角に小さくも入り込んだ時点で潰す事は決定事項である。

「逃げてる奴がいるねえ」

「仕方ないなあ。コイツらに残党押し付けて、ボクらが行こう」

「そうしましょう」

殿は数える程度まで減っていた。

それでも命の限り、悪魔達を抑えていく帝国軍。

「悪魔が来るー！」

「デーモンロード？ いやもつと危険だ、転移魔法で皇帝を逃せ！」

皇帝の近衛は悪魔相手に死闘を繰り広げる。

クラフターは残党を始末し、追いかける。

なんであれ。

創造主にとっては楽しめればソレで良い。

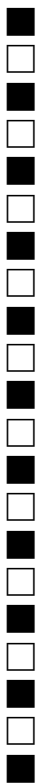
勝ち負けは後回し。

ドラゴンや皇帝がどうなるうが、帝国がどうなるうが、それこそ世界がどうなるうと楽しめればソレで良いのだ。

世界は遊び場だ。

ただユウキらやギイらとクラフターは違う。

同じ卓上にいながらも、新たな遊び……次々に想像を膨らませ創造していくところが大きな違いなのである。



「今度は誰が来たんだ？ いや言うな。 言えなくても言うな。」

絶対碌でもない、一般人じゃない奴だ。 俺は知っているんだ」

緋色ドラゴンの村人形態を放り込む。

圧迫感のある小部屋にいたリムルは疲れた様にハアンと吐き捨てた。

かと思えば喚いた。 良いぞ。 その反応は。

海底からボートに乗せて浮上させ、陸路をトロツコやリードで引き摺ってきた苦労の価値はあったというものだ。

『告。 マスターは初対面です』

「大賢者、そうじゃない。 そうじゃないんだ」

元の世界でも村人を拉致する事はあるから、今更に悩む事はない。 多人数でもなしに。

ところが、リムルはそうじゃない反応。 きつと運搬方法が分からないのだ。 後で我々の運搬術を披露してやろうか。

転移魔法とやらで労せず出来るのだろうけど。

「で、結局誰なんだ？ 聞きたくなくても聞かなきゃならない状況だからな」

気絶したままの村人ドラゴンを介抱するリムル。

何だかんだ受け入れる姿勢は寛容だ。普段もそうなら良いのに。創造物に対する文句を減らして欲しい。荒らしの様に破壊している訳でもないし。

とにかく状況を進めねば。

リムルの手伝いをして、さっさと村人を起こしてやる。

クラフターは村人の口をこじ開け、回復ポーションや牛乳を飲ませる。これに尽きる。

「ゴポポポツ!？」

吐くな。飲め。

何故皆そうする。白目を剥きおつて。

我々なら幾らでも飲めるのに。村人は飲料物でも腹が満たされるのか。満腹なのか。故に拒絶するのか。

最近クラフターは、そう疑っている。

「だからソレやめろや!？」 善意なのは理解出来るけど共感出来ないんだよ!？」

リムルに止められた。

まあ良い。回復はさせた。

だが起きぬ。ベッドもナシに器用なものだ。思えば水底でも

寝ていた。

……その場合、リスポン地点を選ばないのではないだろうか。

ベッドを持ち運ぶ必要がない上に、ネザーで寝て起きるクラフト生活も可能なのでは。なんて羨ましい熟睡スキル。

「とにかく、白濁に塗れてしまった女性にも色々聞こう。弱ってるみたいだけど、魔素量が凄いから普通じゃないのは違くない」

とはいえ困る。

いつまで寝てる。起きろ。

いつかのシズもそうだった。あの時は同情等から手を出さなかったが、今回はそうはいかない。コイツ荒らし側にいたし。ドラゴンだし。つまり敵だ。手荒にいく。

小部屋の外壁を黒曜石で補強すると、拳を握る。

「急に殴り始めんなよ!？」

クラフターは右拳で殴りまくる。なに。友好度が下がっても構わない。どこの村所屬か知らんし。

あいや帝国か。だとして関係ない。荒らしの国だ。あそこは。痛くも痒くもない。寧ろ滅ぶものなら滅んでしまえ。

「うぐつ……こ、ここは？　ふぎやつ!？」

起きた。けど荒らしだ。殴る。

「やめろやめろ。何の為に連れてきて回復させたのかわからなくなる……って、お前らは存在からして意味不明で理不尽だったな、うん」
「……雰囲気からしてテンペストね」
「ご名答。そして俺は国主リムルだ」

リムルに止められ、やっと止める。
共に荒らしを甚振り、苦悶の表情になるのを見て愉悦に浸れば良いのに。

「くっ……力が出ない。でもルドラが助けに来る。私を置いていく筈がない!？」

「ルドラ？　皇帝ルドラか。やはり帝国絡み、それも呼び捨て。重要な娘さんみたいだな」

「そうよ。私は竜種がひとり、ヴェルグリンド。そこの妙な人間達に負けたけど、帝国はまだ負けてない」
「ほらな。やっぱり面倒連れてきたよ。しかも竜種だよ。どうしてくれんのこれ」

咎める視線を送られた。

知らん。この場に辛辣同志がいたならば、通訳して貰って受け答え出来ただろうが、今はハアン合唱会でしかない。

クラフターはまたか、と首を横に振った。

「やれやれ、じゃねえよ!? それ俺がしたい態度だからな!」

「強くても馬鹿な部下を持つと大変ね」

「部下じゃねえよ!? 強いて悪友! 竜種だろうと2度と間違えるな馬鹿!」

「……苦勞してるのは理解出来たわ」

どうしよう。

ここに居ても立ち尽くすだけだ。クラフト要素があれば良いのだが。或いは冒険。

「残念だけど、帝国軍は全滅——今連絡があつた。皇帝を乗せた飛空船団も全滅だ」

「なっ!? う、嘘よ。それにルドラは!」

「皇帝は転移魔法で逃げたってよ。お前を置いてな」

「そんな……ああ。もう壊れていたのねルドラ……もう、私がいる意味は……」

「転移先も分かっている。部下の悪魔達に追撃して貰っている。戦争は終わりだよ」

木の棒と石炭で松明を作った。

作業台無しで作れる手慰みだ。しんみりした空気感漂うのは、ク

ラフターの気持ちの様だ。

ああ……クラフトしたい、と。

「……ウチで言う事聞いて大人しくするってなら、ルドラの所に連れて行ってやる。死んだ後に、けどな」

「好きにしろ。ルドラなき今、私は……」

「ルドラとの仲は、俺には分からない。勿論、コイツらも。だから深く聞く事はしない。それに、俺らの目的は別にある。ユウキつて奴だ」

「ユウキ？ クーデター仕掛けて、失敗して殺されたと聞くけど」「なんだって!？」

煩い。高く鳴くな。

相変わらずなスライムとはいえ、不快感の中には慣れぬものがある。連邦の万単位の村人往来は耐えられても。

「リムルも大事な人を失ったのね」

「いや敵だ。願わくば殺す事なく封印程度に済ませてやりたかったけどな。駄目なら殺すつもりだった」

「そう。良かったじゃない、手間が省けて」

「……嫌な予感がする。ユウキは確実に死んだのか？」

「その筈よ。情報局は優秀なもの」

「アイツは力を隠し持っている。クロエだっている……そうだ、クロエー」

「えっ?」

「術者が死んだなら呪縛から解放された筈なんだ! なら連絡のひとつやふたつ寄越して良い筈だ。なのにそれが無い!」

クロエ。

久し振りに、その名を聞いた。

元気だろうか。他の子供達より先に大人に成長して強くなって

いた女の子。

何故かユウキと共に荒らし組にいたが、帝国のどこかにいるのだろうか。

「奴はいつ死んだ!?!」

「戦争開始直後……」

「帝国の陸上部隊が壊滅した時辺りか？　だとしたら日がそんなに経った訳じゃないけど、それにしたって……」

「帝国領の話なのだから、拘束されている可能性は？」

「なくはない。　けどクロエは勇者だ、滅茶苦茶強い子なんだ。

ちよつとやそつとで捕まるとは思えないし、そうだと脱出するなりなんなりする筈なんだ」

「勇者……?」

「いや何でもない……すまん、急用ができた。　直ぐに帝国に向かってユウキの生死を確認したい……いや待て。　生きてると仮定したら、奴は次の手を既に打ってくる。　ならその先は？」

「まさか!」

「クーデターは終わってないぞ!!」

だから煩い。

リムルに視線を送る。　向こうも見つめ返してきた。　かなり強い意志を感じる。

「直ぐに皇帝が転移した場所に向かう！　お前らもついて来い!!」

クラフターは頷いた。

冒険の時間。　それを察して嬉々とする。　間違っても犬の散歩ではないのは理解していた。

158. 創造主と創造主

弟君は帝国の地下に籠って、クラフトを駆使。破壊活動を主として。

ツルハシで地下に空洞を作ると、仮拠点セットを整えて、周囲をブラマイ。鉄や石炭を採掘。夜は闇に紛れて忍び出て、軍事拠点の座標を取得。その場では何もせず即帰還。

代わりに取得座標目掛けて地下道を掘り進め、火薬や武具等、奪える物を奪う。残りはTNTを敷き詰めて吹き飛ばす。

マイクラ世界で学んだ事を活かしつつ、帝国の守備隊戦力を削いでいく弟君。ただし、時に荒らしを風潰しする一般創造主と異なり、国民に混乱を齎す事で戦争の早期終戦を狙う意味もある行動だ。

そんな、破壊の為の創造を繰り返す。矛盾するようで、目的が明確なソレら。何を破壊するかで作るものが変化する。

TNTが最たる例だが、石系の破壊ならツルハシを作るし、土や砂利を壊すならスコップだ。負の言葉に聞こえる”破壊”も、その為の道具も、良くも悪くも結局使い手次第。

クラフト……”つくる”事と”こわす”事は表裏一体なのだ。だけど、弟君は確実に壊す側だろう。

そうする事で連邦や先輩達への償いをしているのだ。頼まれた訳でもなく自己満足に過ぎないのは自覚している。

だから、これで許されるとは思わない。それでもだ。何もしないでいるより良い。そう思っただけ続けた。

「火薬に砂。TNTの材料が帝国領にもあって良かったよ。他の爆発物の作り方や保存場所、使い方を調べてる暇ないし。木材に關しても……不毛の土地だったら手に入らなかつたな」

1人呟く弟君は、今日も地下拠点。

松明揺らめく荒削りの四角い空間。簡単に露天掘りしたのをそ

のままに利用しており、外壁は石と土。申し訳程度に形を整える為の丸石が散見。

そんな壁際には作業台と釜戸、ベッドにチェストと、仮拠点セットが設置。

コレはマイクラ世界でよく見られる光景であり、殆どのクラフターが通る道。序盤のみならず、ベテランも冒険の先々で作るもの。

それを作れる程度にマイクラに順応している弟君。これくらいのクラフト能力と発揮できる環境下にあるなら、サバイバルは十分可能域。クラフターならば。

弟君はチェストを開ける。少量とはいえ整理されず、様々な種類が放り込まれている。

それらをインベントリに移し替えると、拠点セットを解体してしまった。

「ここもサヨナラか」

普通のクラフターが聞けば、また冒険に出るのかとか、本格的に拠点に住まうのかと思うだろう。

だが状況が状況。平時ではなく戦時。

帝国側も領内における事件解決の為に動いている。マイクラ概念としても、同じ場所にいるのは安全ではないのだ。

「自分が蒔いた種だもん。仕方ないよ」

そう言い聞かせつつ、掘り進めて別の場所へ拠点を移す。そしてまた地上で破壊工作を行う。それを繰り返す日々。

その内に、身に覚えの無い騒ぎを見聞きする。

どうも、その犯人は松明をばら撒いているらしいから、先輩で間違いない。今後、暗闇に紛れた行動も難しくなりそうだ。

「見つかるのも時間の問題かな」

苦笑しつつ、短い人生を振り返る。

気が付いたら薄暗い研究所にいて、先輩達の勝手でマイクラ世界へ連行されて……軍事部で色々学び、今は荒らしとして、ここに居る。

戦争には勝てる。軍事部の先輩達がいるのだから。

けれど自分は許されない。

幼稚な理由で連邦を飛び出して、敵国に寝返り失敗し、懺悔する様に破壊工作をしている。けれど荒らしに厳しい先輩達だ。見つかったら容赦なく殺される。

けれども仕方ない。仕方ないのだ。そうなる原因は自身にあるのだから。

寧ろ良いじゃないか。帝国や訳分からない化物に殺されるより、身内の手に掛かる方が。

「は、はは……その時はその時だよね」

人知れず、ぬるい涙が頬を伝う。

抵抗するにせよ、大人しく刺殺されるにせよ。

今は今を生きる。問題の先延ばしでも。

幼い思考は答えが纏まらず、今日も夜が来た。

地上に這い出る。松明で明るく照らされた帝都は、心を暗雲で覆うには十分だった。

そして、その中で別の荒らしに出会うのだ。



マイクラフターは困った。

弟、或いは息子の創作をした創造主は帝都に搜索に来たのにも関わらず錯綜した。

創作に次ぐ搜索は創作意欲に駆られ、心中のままに松明を刺しまくる行為に走らせる。

「な、なんだコイツら!？」

「松明をばら撒いてるぞー!」

「帝都が昼間の如く明るくなつていく!」

「ええい! 衛兵急げ!」

例の如く追い掛けられる。

前に背後に側面に上に。地面から湧かないのと壁をクラフトしない辺りは良心的な連中だ。クラフター相手だったら足止めを喰らっていた。そこはイングラシアでもそうであり、対応の甘さに感謝したい。

それを時に差して刺して逃げていく。どうせ荒らしの国の荒らし組。有名度が下がっても痛くもない。相手も痛くないだろう。知らない仲だし。

「ぐああッ!？」

「くそっ! 強いぞ!」

「なんだ、あの禍々しい魔剣は!」

「結界も防具も意味を成さぬ程なのか!？」

やってくる武装村人をバツサバツサ剣で斬り捨て御免なさい。スニークする暇なく、走り抜ける。一期一会。

決して荒らしだからとか、ムカついての無礼討ちではない。必殺ネザライト剣を振り回すその姿は全力で、せめてなりの礼儀であった。同時進行に松明刺すのは国の闇への指摘と私的が多分に意味しているが。

だって薄暗いじゃん、この都市。湧くぞ。魑魅魍魎が。西方諸国も一部そうだったが。

「暗い場所に奴が湧く。そして妖怪松明差シテケが現れる。あの噂は本当だったのか！」

「マーキング行為だ、アレは！」

「ああやって、西方諸国も支配下に置いたらしい！」

「バケモノ共め！」

「だから帝都だけでも明るくしろとあれ程！」

「異世界の技術普及は急には難しいだろう！」

「連邦は、こんな魑魅魍魎の巣窟なのか。その上で、魔王リムルは奴らを飼い慣らしている」

「恐ろしい話だ。まさか本隊壊滅の噂や国内の破壊工作も奴らが!?」

「とにかく止めろ！」

兎に角。

発展した都市部は範囲が広い。細かな部分を除いても松明は何スタック必要か分かったものでなし。

魔国連邦も負けず劣らず、いや連邦の方が複雑で高密度化しているものの、発展と共に松明やグロウストーン、ジャックオランタン等による照度は多くのクラフターによって確保されている。建設中の仮設照明も抜かりない。

明るさや安全は何事においても優先される。

安全第一。落下死？ 各々注意して。

「銃だ！ 距離を置いて銃を使い！」

「民間人は避難した！ 撃て！」

突然、乾いた音が何発も響き渡る。

武装村人が今更に飛び道具を行使してきたのだ。

クラフターは慌てない。左手の松明を盾に持ち替え、防いでいく。帝国軍の標準装備を見ても、銃が使われるのは容易に想像出来た。本土ともなれば、より強力な創造がされているだろう事も。

「退け。ここからは引き継ごう」

「貴方は情報局の近藤中尉殿！」

「奴の仲間とは一度会っているが、危険な力を垣間見た。あの剣も、その一端に過ぎぬであろう」

ボスっぽいのが出てきた。

たぶん、コイツが使う武器がそうだ。挨拶に小型拳銃を凄い早さで撃ち込んできたが、盾の耐久がエライ削れた。

一部、直撃を受けた同志なんて状態異常だ。牛乳を即飲みして正常化。

「な、なんて奴だ！」

「中尉の銃は、時に竜種ですら殺せる特殊弾丸もあるのに！　喰らっても平然と生きているぞ!？」

悪魔に核撃喰らって、遺伝子コネコネされても平気という、己と他との格の違いを確認してはいるものの……やはり駄目な攻撃は駄目という事だ。

それはそうと。

「……奇行種なだけはあ。人の身で長く生きてきたつもりだが、お前達の様な珍獣は初めてだ」

あの珍銃、欲しいなあ。

銃、その他武器のコレクション展も考え始めている軍事部としては、アレを目玉にしてやつても良いとさえ思う。

「その目。恐怖でもなく闘志でもないな」

交渉出来ないだろうか。ダイヤモンドスタック単位で出しても

惜しくはない。そんな魅力がアレにある。

銃口を向けられながらも、臆せずスニーク姿勢をしつつ近寄る。未来への投資の為に。

同志が撃たれた。痛い。

「今頃謝罪を受ける気は無い。既に帝都には多くの被害が出ている。軍事施設を狙われたとはいえ、爆発物で負傷した兵も多くいるのだ。未然に防げず、償うにも償えきれぬ罪。あのクーデターを起こそうとしたユウキ共を殺せど国を救えず、この世界でも……貴様らに、この無念が分かるか？」

いやこれが分からない。

クラフターはベイクトポテトを散らし喰いながら首を横に振る。

何故だ。何故、取引に失敗するのか。

ダイヤではなく、やはりエメラルドか。あいや砂糖か。他国では貴重と聞く。貴重品には貴重品であるか。あいや宝石も貴重品の筈だ。

「答えずとも良い。始末する他ないのだ」

まあ良い。どうせ荒らしに他ならない。

取引なんて間違っていた。殺そう。相手も銃口向けっぱなし

だ。敵対行為をされている以上、此方も相応の対処をするのみ。

目と目が合う。目には目を、だ。

拳銃に持ち替えた。

「ッー」

弾かれる様に横移動。

弾が銃から弾かれて、互いを弾き合う為に飛弾する。目には追えぬ銃弾。弓矢とはまるで違う弾速攻撃。

こうなると被弾する前提で動く。先程の攻撃力は並ならぬものがある。喰らえば防具有りとして苦戦は免れぬ。

「並じゃない動き。数多の修羅場をくぐり抜けてきたか……全力を尽くすのみ！」

いつも通り諦めない。

それは相手も同様で、闘志を見せたと思えば、次には立派な軍服姿になった。元よりそうだったが、此方が正装か。或いは防具の類か。

咄嗟の盾だけでは押し切られると判断したクラフターは、丸石や土壁で防壁を設置。弾と相手の行動を制限。

予測される回避ルートを絞り、弱体化のスプラッシュポジションを投げておく。当たった。都合良くいくと気持ち良い。

「くっ。急速に力を奪われる感覚が！」

化物だらけ。理不尽だらけの世界。

対して創造（想像）力で抗ってきた創造主。

どんな時もそうだ。建物で悩む時も、戦闘でピンチの時だって最後まで。

クラフトの可能性を信じる。その限りを尽くす。

今この瞬間も。誰もが求める策を探し、先ず思いつくまま振る舞う。

「本当に、理不尽極まる連中よ。だがな」

相手もその様だ。

だからと譲れない。この想いの強さは。

「2度と！ 負けないッ!!」

呐喊してきた。凄い剣幕だ。

牽制に銃弾を吐き出してくるから、咄嗟に盾を構える。当たると、強い衝撃と共に破壊された。ノックバックされつつ、前方に拳銃を構える。いない。懐に潜られたのに気が付いた刹那、胴体に凄まじい打撃音。思わずウオツと野太い声。

ダメージが入る。ダイヤエンチャント防具相手でも通用する量だ。やはり理不尽な世界である。同時に楽しい世界でもある。それだけ想像と創造力は広がる可能性を秘めている。

クラフターは笑顔のままに、ネザライトの剣を握り直す。即視界に映る軍服を斬る。

「ぐツ!？」

回避され胴体を掠った程度。

それでも相当量のダメージを入れられた。その証拠に相手は苦しそうだ。

さっさと終わらせよう。それが互いの為だ。そして、その銃をドロップしてくれお願いします。

「負ける、ものか……ッ!」

逃走する事なく、また向かってくる。

銃を使わない辺り弾切れか。とはいえ拳だけでかなり痛い。わざわざ技を喰らうのも馬鹿らしい。今度は拳届く前に拳銃弾を全てくれてやった。流石に今度は命中していく。

花火の様に赤い飛沫を弾の数だけ上げながら、とうとう軍服は倒れた。それでも息をしているから驚きだ。

「グツ、はあはあ……本当に理不尽な連中だ……これで、今度こそ、最期……後悔の念ある人生であったが、最期に……お前らに……会えた

のは面白い、人生であった……」

ドドメ刺さなきや。

剣に持ち替え近寄ったら、プルプルした腕を上げて銃を差し出してきた。

「た、頼みがある。こ、この銃で……閣下を——」

即奪い取る。 やったぞ。 これでクラフターのものだ。 戦後は博物館でもビルの一室でも借りてマイクラ軍事部展示会を開こう。 額縁に嵌めるのだ。 笑顔満開で元気澆刺。 思わず腰振りダンス披露。

……待て。 冷静に考えるとコイツも軍服悪魔同様に軍服だぞ。 軍事部にスカウトするべきではなかったのだろうか。 よし。

軍服に微笑みつつ向き直った。

提案がある。

お前もマインクラフター（軍事部）にならないか？

「た、たのんだ……ぞ、ごプツ!!」

答えを知る前に事切れそうなので、回復のスプラッシュポーションを投げつける。

ついでに牛乳を飲ます。 さつき弱体化のポーション喰らわせたので。

「ゴポポポポツ!!」

だから吐くな。 弱体化状態は地味にウザいものだ。 鈍足化もウザいが、異常であって良い事なんて何もない。

「うわあああ！　　近藤中尉が負けた!？」

「ナニを飲まされてるんだーッ!？」

「しかも首に縄まで掛け始めた!？」

「卑猥な事をされている!？」

「異常者だ!」「逃げろ!　　逃げろーッ!」

地下鉄を利用して連邦に送りつけよう。

ナニ。　トロツコに乗せたら殴り飛ばしてブーストさせれば勝手に着くだろう。

クラフターは連邦同志に連絡しつつ、地面を掘り進む。　地下鉄座標を目指している。

そして、軍服は地面の中へと引き摺り込まれていくのであった……。

その様を見た者は戦慄と共に震え上がる他ない。

「あ、悪魔だあ……!」

その後、近藤を見た者はいたとかいなかったとか。



近藤がやられた後、弟君は別の場所にて活動を再開していた。

先輩達が騒ぎを起こしたお陰で、住民は自宅に閉じ籠り、兵士達は騒ぎのある方面へ出払って最低限の警備しかない。

「先輩には悪いけど、囹になって貰うよ」

夜の帝都を走り抜ける弟君。

その先は玉座ある重要建造物。　外壁を爆破するだけでも恐怖心

を煽る効果は絶大な筈だ。

可能なら、中でも爆発を起こそう。

そう移動していた時、それを見た。見てしまった。

「な、なんだこれ……」

ある広場。

人が大量に寝かされた場所を見た。

死体置き場？ いや。生きている者もいる。呻き声を上げ

て苦しそうだ。

治療待ち？ 粗悪な診療所？

でも診る者は見当たらない。

色々疑問と混乱が起きた。自分の爆破騒ぎでの犠牲者？

そうだとして、生きてる者と混ぜてるのは何故？

それに多過ぎる。パツと見て、横たわる者達は強者に部類される兵士達の様だ。

TNT2、3個の威力と範囲で此処まで被害が出るものではない。

運悪くゼロ距離被曝したとしてもだ。どれだけ密集してたらそ

うなんだ。いや仮にそうでも、やはりここまでの被害は……。

それが、これ程までに無力でいる。

何が起きたのか。此処は何の場所なのか。

この戦争全体の被害者なのか。

だけど、此処に集められた理由は？

混乱が混乱を呼び、立ち眩みをしていた時。

「あーあ。見ちゃったねえ」

聞き覚えのある、声があった。

「ッ！」

思わず声の方向に盾を構えた。そこには暗躍する荒らしのユウキ。
直ぐ臨戦態勢を取ろうとし……背中を拘束された事で身動き出来なくなる。

「今日は、大人しくして下さいね」
「うぐっ」

苦手なお姉さん、カガリ女史だった。
身長差で背中に当たる柔らかな双山は、弟君にとっては恐怖心を増幅させるに十分だ。

「いやー、久し振りだね!」

親しい友人に出会った様に、笑顔で話しかけてくるユウキ。
その笑顔という仮面の下で一体何を考えているのか。そしてこの状況は何なのか。
恐怖は増していくばかりで、それでも精一杯睨み付けて抵抗して見せる。

「……そう、ですね」

「おいおい、明るく返事しなよ。折角の再会だぜ?」

「忙しいんで」

「まだ爆弾魔でいるつもり?」

バレている。

「ただど慌てない。するだけ無駄だ。今は抵抗するチャンスを待つのみ。」

「しかし派手にヤツてくれたねえ。IRP奪取をお願いしたら、帝国の施設を破壊し始めるなんて。まさかコレが策だなんて言わな

「いよね?」

「……IRPは簡単に盗めませんよ」

「それで諦めて帝国まで敵に回すの? 君ってアイツらと違って、もう少し頭が良いと思っただけだねえ。 思考制御の蟲も何故か効かないし、残念だよ」

そう言う割には、残念そうでもない。

まるで予想していた、或いは期待なんてしていなかった様子だ。

「まあ良いさ。 お陰で邪魔な情報局、特に近藤は対応に追われて、僕は動きやすかった。 一度殺されたのは想定外だけどね」

「えっ? 殺された?」

「近藤にクーデターがバレてねえ。 最初はダムラダって奴と戦ってたんだけど、その隙を突かれて近藤にパーンって撃たれて終わり」

「じゃ、じゃあなんで今生きて……まさか」

「おっと、アイツらと同じにしないでくれよ? クロエに予め頼んでいたのさ。 僕が死んだら”巻き戻して”復活させてくれってね。

お陰で使える命令は後1つになっちゃったよ」

何が何だか弟君には分からなかった。

ユウキは知らぬ間に殺された? それをクロエという人物が復活させた?

命令? どうやって? ベッド?

いや巻き戻したと言っていたけど、どういう意味なのか。 不死のトータム? まさか時間を戻した? 混乱は続く。

「まあ、こうしている間にもダムラダや近藤は死ぬだろうね。 既に死んだかも知れないけど。 君の先輩達は理不尽な創造主だからね」

「ッ! 知ってるなら、諦めて降参したらどうですか。 先輩は既に帝都に入り込んでます。 見つかって殺されるのも時間の問題で

軍服を地下に引き摺り込んだ後。

IRPのリーダー支援を受けつつ、湧き潰しと弟搜索を再開したクラフターだが、とうとう弟と再会するに至る。

更に言えば、弟は胸部の膨らんだ長耳村人に背後から拘束されているときた。

更に更に老獪な雰囲気を出す荒らしのユウキまでいるし、リムルや軍服悪魔やドラゴン村人や同志はいるし、精神摩耗限界点な村人までいる。其方は青白い肌に真っ白な髪。弱々しく木剣でも倒せそう。

いやそれはそうと。クラフターは見回す。

何だコレは。

死体と荒らし。殺伐した雰囲気。

クラフターは思考する。祭り会場に違いないと。

ユウキを皆でフルボッコだヒヤッハー!

弟? 何とかなる。彼もクラフターだもの。

「お前ら好きにしろ! 俺もやる!」

リムルが鳴く。同時に動く。

ネザライトの剣を振り翳し、ユウキに群がる創造主。

「じゃあ遊びましょうか、創造主様?」

ユウキが剣を振るう。

縄の様に伸びてしなり、横一闪一撃で大半の同志が斬り飛ばされた。

小物ではない。色んな意味で。あと、その武器欲しい。コレクションしたい。

「せ、先輩ッ!」

「坊やがいるのに。人質のつもりだったけど、意味ないのね」
「そうさ。先輩からしたら、僕は荒らし。敵なんだから。遠慮
なんかするもんか……悪い奴らを倒して！ 頑張れ先輩ッ！
負けないで！」

弟よ。頑張れじゃない。お前も頑張れ。
負けないで、じゃない。お前も負けるな。

軍事部クラフターだろ。何たった1度の失敗で人生を諦観して
いるのだ。

足掻け。この場を切り抜けて見せろ。

「ッ！ は、はい！」

「なっ!？」

長耳に肘打ちを繰り出し、一瞬怯ませた隙に木剣を横振りする弟。
ノックバックエンチャントされていたらしく、そのまま長耳は遠く
に吹き飛んだ。良いぞ。その調子だ。喜びのまま腰を振る。
その勢いのまま、ユウキを相手取る。たかが雑ぎ払い1つで勝つ
た気になるなよ。荒らし風情が。負けるかよ。

「ルドラ！」

片やドラゴン村人が吠えている。
また暴れるならユウキごと倒すまで。とはいえ、今はセルフ弱体
村人と鳴き合い始めた。この状況でも呑気な事だ。村人らしい
ともいえる。

「その声、ヴェルグリンドか。無事に安堵したいところだが……済
まぬな。ミカエルの制御も限界であった。余は今日この場を
もって終わる定めなのだろう」

「まだ終わってないわ。なに弱気になってるの。最期だとして、

若造の言いなりになって終わるゲームなんて認めないわよ。私だけじゃない、ギイだって認めやしないわ!」

「そうか……そうであるな。」創造主の弟子にして創造主に翻弄され終わるのも運命やもと思ったが、まだ終わる時ではない、か」

呑気な鳴声に構う暇なし。

こちららウオウオ叫びっぱなしだもん。

ユウキは思ったより強かった。クロエより強いかと聞かれれば疑問に思うものの。

あの伸びる鞭の様な剣といい、ユウキ本人の身体能力は村人の比ではない。強化ポーシヨンでもキメてるのか。強い。熊の威を借る狐では無い。正直舐めていた。

「何遊んでんだ! 真面目に殺れ!」

リムルが水刃や水玉光線を繰り出して、弾幕形成。回避するユウキ。その隙を突いて、創造主はクラフト開始。

丸石の防壁を作り、スリット穴を開ける。即ハーフブロック設置。出来た半ブロック分の隙間から、弓矢や銃撃を浴びせて反撃。

剣突撃組を援護する。

「ボクも認められないな」

「……悪魔か?」

「初めまして。ボクはウルティマ。旗艦に乗っていたダムラダって人と戦ってね。最後に貴方を殺してくれて頼まれたんだ。

引き受けたら安心して死んだみたいだよ。近藤って人も……さつき、その魂劇物人間に倒されたみたいだけど、最後に同じような事を願ったみたい」

「なんという事だ……ダムラダが、タツヤまでもが……死んだというのか……」

「想い散って、貴方の下に逝ったから、また一緒になれるんじゃない

？」

リムルのみ援護している状況下。

弟を見る。長耳とやり合って期待出来ない。

ドラゴン村人は……我々がボコった後だから期待出来ない。

だからとメスガキ軍服に頭下げる暇がないが。出来る事なら加勢して欲しい状況なんだけど。

というか国主が戦ってる傍らで、部下が呑気に話し合ってるのだろうか。本当に部下なのだろうか。クラフターは訝しんだ。

因みに。

ダムラダと近藤が知らぬ間に死んだ様に話しているが、この時点での近藤の生死はクラフターのみぞ知る。

ただ、あの地の底に引き摺り込まれる悪夢の光景を見てしまった者にとっては死んだか、それ以上の恐ろしい目に遭っていると捉えてしまっただろう。

ウルティマも……クラフターを魂劇物人間と言っている辺り、相当酷い目に遭ったのだらうけれど。

「そう、か。 2人は誇り高く散ったか」

片方は命ではなく誇りが散ったかも。

「であれば余も、無様に散る事は許されぬな。 この世の支配者の1人として、最後まで諦める訳にはゆかぬ。 我が威にて、ミカエルを従えて見せようぞ！」

「天使之軍勢を!?! 駄目よルドラツ!!」

先程から煩い。 こちとら忙しいというのに。

抗議の目を向けた創造主だったが、驚いた。

「させないよー！」

メスガキ軍服悪魔が、叫ぶ村人に攻撃が、眩い光に阻まれ、掻き消された様子。

「余の意思に従え！　　ハルマゲドン発動!!」

帝都上空に眩い光が満ち溢れる。

そして魔に対する究極の軍勢として、天使の軍団が顕現を開始したのだ。

最も、クラフターにとっては荒らしでしかない。

文明を破壊し、魔扱いする者を殺戮する。

平和な場所であろうがなかるうが無差別に。

これが荒らしでなくて、何なのだ。

何が天使だ。何が悪魔か。

我々の独善と偏見の産物の呼名だ。

荒らしなら、何方も等しく敵である。

名称なんて重要じゃない。タグ付けで荒らしを無くせるなら、誰

も苦労しなかった。

——創造主は天を睨んだ。

「あはは！　　悪いね、リムルさん！　　僕の勝ちだ！」

「ッ！　　止めろお前ら！」

ユウキが叫んだ村人に何かしようとする。

嫌な予感。

「ステイールスキル！」

本能のままに、エンダーパール投擲。　　間に挟まってみせた。　　ユ

ウキからの謎の衝撃を丸石で防ぎ切る。

「くっ！　相変わらず邪魔な創造主だ！」

すかさず銃撃と弓矢を浴びせるも、うねる剣撃に弾かれた。

「く、くくく、あはははははははは！　まさか、ね。まさか、本当に……、世界を堂々闊歩する創造主がね、僕を……創造者の邪魔をハッキリするなんて。それと流石ですよ、リムルさん、出来るなら、自身の力で世界を滅ぼしたかった。でも、残念ながら……僕では、世界を作り続ける貴方達には勝てそうもない。それどころか、この悪魔達にさえ——貴方達は出鱈目過ぎますよ。やはり、出会った時に感じた悪寒は本物でしたね。あの時、本気で始末していれば良かった。どこかで狂ってしまったのかな？　まあ、今更いいですけどね。いや、案外、僕を止める事が出来るならば、それはそれで世界の意思。後は——が判断してくれる、か」

何を鳴いているのか。

命乞いなら受け付けぬ。荒らし死すべし慈悲は無い。

近付いて、必殺ネザライトの剣を振り翳す。

「サヨウナラ、創造主にリムルさん。案外、アナタ達の事、好きでしたよ——本当は、友達になりたいと思う程には、ね……」
「避けるッ!？」

リムルが鳴く。警告だと分かった。

咄嗟に盾を構える。丸石の防壁は破壊され、そのまま盾に強い衝撃。ノックバックが起きて、後方に吹き飛ばされた。

「ッ！」

メスガキ軍服が、どこかで手に入れていた拳銃を発砲。が、それもしなる剣撃で弾かれてしまう。

「ルドラ、逃げ……ッ!？」

弱体化しているだろうに、ドラゴン村人が今更に参戦。　が、神速で懐に入り込まれ、腹パンを決められていた。

ざまあ、と思っっている場合ではない。　アレはクラフターの目にも止まらぬ。　俊足ポジションより凄かった。

その怯んだ隙に、ユウキが村人と接触。

「来い！　ミカエル！」

「!!」

刹那。　周囲は眩い光に包まれる。

生気が枯渴した村人から、それでも大切な何かを篡奪しているかのよう。

「これでボクの魂の力を使わずに、天使の軍勢を呼び出し掌握出来た。

色々と予想外の出来事はあったが、概ね、計画通り」

「あ、あああ……そんな、ルドラ……ッ！　　こんな！　　こんな悲惨な最期に立ち会う事になるのを知っていたなら、私は……ッ!!」

「嘆いてる場合じゃねえだろ!!　　奴を何とかするんだ！」

ユウキがユウキじゃない。

無表情なその顔に、もはや以前の面影は見当たらない。　何方にせよ荒らしだ。　消す対象だ。　リムルも同じ思いの筈だ。　嘆くドラゴン村人を宥めつつ、ユウキに立ち向かう。　クラフターもそうする。

「憑任せよー！」

そんな此方を無視すると、何かを鳴く。　すると天を覆い尽くす羽

虫共が舞い降りてきた。

——ありや荒らしだ。

咄嗟に、本能のままに黒曜石で簡易シエルターを作る。

弟に無理矢理呼び掛けて、全員を中に入れさせるよう指示を出す。そのあとは自己判断だ。地下に潜っても良い。取り敢えず同志に伝えろ。

軍事部の力も必要だ。IRPの砲撃やロケット攻撃は効果を望めないから今は止める。爆発が効くか分からないし、猛毒も然り。

「せ、先輩達は!?」空から来るアイツらはいったい何なのですか!?

荒らしだ。害虫だ。駆逐対象だ。

クラフターは答えつつ弓矢、拳銃で天に向かって撃ちまくる。空覆い、押し寄せる羽虫。狙わなくても当たるくらい、数が多い。

弾薬、弓矢、人員、色々足りない。故に悪足掻きなのは承知だ。それでも譲れない。

エンチャント付きの武器だからか、幽霊的な存在にも攻撃が当たる。当たらないより良い事だ。だがやはりというか、捌き切れな

い。
「くそっ!　これが天使だったのか!」

リムルも加勢。いつぞやの大量殺傷攻撃……光線攻撃をするも、やはり駄目。

地上に数多降りる羽虫は、広場にいた死体や瀕死の連中と次々合体していく。そして変貌し、天へと上がる。

だが数に対して相手が足りない。その分は帝都の市街地へと降りていった。

「リムル様！　奴ら民間人を！」

「ユウキてめえ!!　天使達を止めろ！　関係ない民間人まで巻き込むんじゃない！」

リムル激昂。

クラフターも遅れて理解した。　非戦闘員の村人が羽虫に”喰われている”のだと。

クラフターは嫌悪感を露わにする。　リムルの捕食シーンも大変ショツキングだったが――荒らしの国とはいえ、その様なやり方で村人の大量殺戮ないし犠牲者を出すのは黒歴史を彷彿とさせるからだ。

軍事的にはTNTキャノンの標的にしたし、効率厨等は製鉄所や取引現場を作る為に拉致監禁をした。

だが大抵、静寂が訪れた後に後悔した。　取引相手やクラフトの間を失い、土地が荒れ、ゾンビイベント対策を怠り村人が全滅してしまったら、時空間が歪んだ。

ユウキも後悔する。　先に立たず、ではあるが、罪を重ねる事はない。　殺す事に関わりなくとも。

「ユウキの奴、どうしたんだ……表情が全くなくなって。　機械的な、大賢者や世界の言葉のような感情を持たぬ意思……さっきの別れの言葉といい、ひよっとして、ユウキは表層人格で……俺に大賢者が居たように、ユウキにも何らかの意思が居たのか。　それに苦しんでいたなら……馬鹿やろう……だったら相談してくれよ……」

リムルがユウキに呟いているが、無視。

それより羽虫を何とかして欲しい。　もう手がつけれない状態だけど、少しでも数が減った方が良くはないか。

「せめてルドラの亡骸は……奴らには渡さない。　例え粒子となり消え逝くとも」

「とにかく連邦領へ脱出します。僕が地下に向かって掘り進めますから、後について来て。地下鉄にたどり着いたら、線路を辿ってひたすら西へ。テンペストを目指して下さい。悪魔さん……ウルティマさんは護衛をお願い！　天使が地下まで来るか分からないけど、何かあるか分からないから！」

「へえ、ボクに指図するんだあ？　契約するなら、君の魂を……」

「あ、いえ、その……」

「冗談だよ　リムル様も、その方が良いかもだし。引き受けてあげよう！」

「ありがとうございますっ！」

IRP……BBによると、羽虫は約100万匹。

うん。　ナニその数。　おのれ荒らしめ。

「ねえ、ゲームをしましょう。　ボクを止める事が出来たら、貴方達の勝ち。　出来なかつたら、貴方達の負け。　勝利者が得るものは、この世界。　開始は1ヶ月後。　返答は必要ありません。　ゲーム開始へのカウントダウンは、既に始まっていますので、これは、創造主ユウキ　カグラザカの最後の意志です」

倒す。　倒しまくる。

剣の耐久値が心配になる。

「一方的だなおい！　　だがな、創造主は腹一杯なんだよ。　これ以上要らないね。　それに、なくにが創造主だ。　無差別破壊者の間違いだろ訂正しろ！　　本当の創造主ってのはな、コイツら馬鹿野郎みたいに、何かを作つて、それで人魔問わず喜怒哀楽を互いに与え合える存在を言うんじゃないの？」

「互いの偏見、互いの認識を確かめ合う気はありませんよ」

「一方的、好きにする点は共通してんのな」

剣を振り回すも、虚しくなった。

何の為の松明だったのか。帝都の明かりが虚しく感じる。魑魅魍魎を出現させない為の湧き潰しだったのに。これでは意味ないじゃないか。

……はた、と気づく。この世界において湧き潰しは大した意味がないのでは？

衝撃の真相に辿り着いた気分になり、オロオロしていると、どこからともなく人影が湧いた。

もう駄目だ。湧く世界だ、ココは。

今更に分からされた。クロエに。

「隙を見て、ギイを相手しろ。始末出来なくても、それはそれで構わない。ただし、ゲームの邪魔はさせるな！」

気持ちを察してか否か、頷くと去っていくクロエ。見逃されたと見る。

このショック状態では本気で戦えなかった。本気だったところで勝てる保証はないのだが。

ユウキはというと、羽虫や部下共々、何処かへ転移した。行き先が分からないのが悔やまれるが、次会うまでに準備しなければ。

また荒らしが来る。

良くも悪くも、いつもの事だ。

元の世界とは勝手が違えど、クラフターがマルチでいる限り、避けでは通れぬ道である。

だけど、その道が、マルチが好きだ。避ける気もない。堂々歩く。それこそが我等メインクラフターであるのだと胸を張る。

湧き潰しの件はまあ……常識は敵だっただけ。さて。

連邦には対空キャノンがビル屋上や側面に鎮座しているものの、無鉄砲で挑んで勝てる相手ではないのは確かだ。軍事部の意見と創造（想像）を頼りたい。

「天界に行ったのか。 天使の軍勢を整える時間が欲しかったのかもな。 だとしても、此方も何もせず迎え撃つつもりはない。 出来る事はやるぞ。 お前らも手を貸してくれよ。 本物の創造主つてのは、お前達だつて……勝つのはお前達だつて、みんな信じてるんだからな！」

クラフターはヨシ、と頷いた。

弓矢、剣、TNT、キャノンといったクラフトは当然の事、非常識も必要だ。

IRP、ロケット。 使える物（者）はバンバン使う。

ファルムスの様にはいかない。 そう挑まねばならない。 されど勝つのは我々だ。

創造主が破壊者（荒らし）に敗北など許されない。 断じてだ。 でなければ、この世界でやってきた事が全て嘘になる。 この世界に対して、何かを誤魔化してしまう。

創造主は敵より、それを”嘘”を恐れた。

だからこそ立ち向かう。 諦めこそ真の敵だと。

大決戦の予感を前に、空を見た。

これまでのクラフト人生をふと、振り返る。

やはり常識は敵だった。

押し寄せる化物の大量。

ひたすら圧倒する理不尽。 それに抗い続けた我々マインクラフター。

厳しく楽しいマイクラ道。

茨を掻き分けて、我等は進む。

吹き荒れる暴風雨。

その中で可能性を見つけては熱くなれた。

悪友がいたから、互いを高め合えた。

時に禁忌を犯す。

その命は、誰もが認める輝きを放ち始めた。
刹那、タブーも所詮作り物だと云わしめる。

誰もが求めた創造力。

クラフターは大胆に手を伸ばす。

欲亡き者は俗世から消えて逝く。

けれど遺された残滓の輝きは星の世界へ導いた。

築き上げた建造物は数知れず。

多くの人魔の喜怒哀楽をも作りあげた。

ひよつとしたら、誰かの命を救えたのかも知れない。奪っていた

のかも知れない。

名も知らぬ数多の人魔生とすれ違った。

掃いて捨てる程いる道行く村人達は邪魔だし、特別良い感情は湧かないけれど、元の世界では見られない行動で、クラフターと間接的にも関わらせてくれた……このマルチ世界が好きだ。

「帝国は、皇帝ルドラは崩御した。生き延びた臣民は混乱の中にあるだろう。けど、そっちは俺が……俺たちが何とかする。お前はいつも通り物作りに耽ってる。世界の為に」

クラフターは良くも悪くも創造に生きる。

今も。これからも。

クラフトに絶対の安全は求めない。楽しい事ばかりではない。その産物は多くの村人の反感も歓喜も驚愕も、全ての喜怒哀楽を創り与え合ってきた。

そんな、クラフトしてきた愛すべき創造世界の崩壊を見過ぎすなんて、どうして出来ようか。何かを得る打算もなしに、守りたいと思った。

正義も悪もない。全ては自由の中で。

それが我々らしいのだと、腕を振るうのみ。

「戦力も集めるだけ集める。お前らもだろうな。通訳なんていなくても、世界の言葉が無くたって……こういう時は通じ合える気がするよ。それがなんか、嬉しいよ俺。普段は迷惑極まる馬鹿なのに……非常事態に何言ってるんだろうな俺……おっと！」

リムルにネザライトの剣を投げ渡す。

上位金林檎等の決戦シリーズも投げつける。

昔だったら狂気の行いだ、今は迷わず押しつけられた。不思議だ。何故にとは考えない。故にと動く。仲間だし。

——うるせえリムル！ 良いから勝つぞ！

怒りと喜び半々の顔をリムルに向ける。

向こうは不敵な笑みで返しやがった。流石。

伝説は異次元より、やって来た。

世界史上、例のない創造で中央から、あつという間に大陸全土を支配した。

善も悪も、そこにはない。

勇者でも英雄でもない、大馬鹿野郎。

世界に物と喜怒哀楽を作り与え続けた創造主。

その創造は多くの人魔が伝え往く。

その伝説の名は——。

「往くぞ！ マインクラフター！」

伝説は駆け出した。

創造主を、雌雄を決する為に。

天使戦へ。

159. 駆除準備と未定爆発

「天使の襲撃まで時間がない。状況を整理しつつ準備する。俺は俺で細かい事をやっていくけど、お前らは好きにしろ。言っても聞かないだろうからな」

細かい事はリムルに任せて、軍事部には引き続き世界に居残って貰う事にした。寧ろ増援を要請するまでである。

辛辣娘によれば、羽虫飛来まで時間がない。

よって効率良くクラフトをしなければならぬ。

軍事部緊急協議の結果、対空TNTキャノンによる弾幕戦は必要との判断。

エリトラ飛行戦は却下された。妥当である。

飛行しながら弓矢を扱うのは困難だからだ。対する相手は熟練と見る。勝つ見込みが立たない。

しかもエリトラを胴体に着ける都合、鎧を外す。当然だが防御力は低下。生存率は下がる。

「生き返るお前らは貴重な壁……戦力だからな」

などと、リムルは言つたらしい。

悠長な事を言うものだ。物資は無限じゃないし、継戦出来なければ戦線は押される。

そうなれば戦火は拡大して多くの愛すべき建造物が破壊されるだろう。最悪、リスポーン地点を確保されての幽閉絶望エンド直行便。

話はエリトラに戻るが。

エリトラ飛行は片手を自由に使えない。正確には使えなくはな

いが、エリトラ飛行はロケット花火による加速で成り立っている。ない場合、滑空するしかないのだ。

つまり必ずロケット花火は片手に持たねばならない。高度を上げるなりして滞空時間を稼いだり、途中途中で離着陸しつつ戦う方法もあるものの、やはり不便。

動きも細かな機動は取れない。結局、それだったら地对空砲火をした方が良いとの判断である。ロケット花火のクラフト材である火薬も、其方に回す。リソースは有限なり。

「そうだ。お前ら弟……息子を無事救助出来て良かったじゃん。

今は姉と一緒に機龍の調整してらしいけど。今度は世界を救って見せる。簡単だろ？」

リムルが鳴く。

見やれば、身体の内からにゆるんと、ネザライトの剣を見せてきた。相変わらず禍々しく、黒光する剣だ。並んでリムルの物品の出し

方もゾツとするが。今や我々の主力とはいえ恐ろしい。それとリムルの技量であれば、大半の敵は簡単に倒せよう。

同時に頼もしいと、クラフターは頷く。

そうだ。今は非常事。是非使いなさい。味方が使用する分には素晴らしい剣だ。

しかもだ。リムルに渡した剣は、この世界に送られた最初の1振り。

故に、同志や村人達……クロベエやカイジン達が張り切り過ぎてしまった結果、生まれた特殊剣。

「これ、癖はあるけど強くて良い剣だ。お前らの技術とカイジン、クロベエ達の技術が混ざった混血剣。見た目は禍々しいが、これだけで天使を追い払えそうな力を感じる。大賢者の評価も上々だったぞ」

驚異のエンチャント技術をブチ込んだ2つとない1品。破損知らず。敵知らず。

耐久力を上げるだけに留まらず、斬れば斬る程、耐久値が回復する。似たエンチャントは我々も使用していたものの、斬った相手の回復を阻害する黒炎や攻撃力限界突破等、上位互換系が多い。

後は剣を振るう速度が金剣超えの凄まじさで、ただ振るうだけで前方が黒火の海になるとか、他にも癖があるものの、リムルは使いこなせる様子。弾だって弾き返して、銃の中に戻せたって不思議に思わない。スライムだから、喰らっても問題ないだろうけど。

流石。スライムとはいえ改めてクラフターだと認めよう。というか、ずっと信じていた。でなければ狂剣なんか渡さない。使い手次第で世界が減ぶ剣だ、ソレは。

「……くれてありがとな。お前らの気持ち、剣越しに伝わるよ。絶対勝とうぜ！」

因みに名前は『G』である。

経験値や耐久を気にせず、金床で付けた。

B B通信で大賢者に聞いた、リムルの元の世界に蔓延る黒光する害虫の頭文字から取った。

それをリムルに持たす。ザマアと暗黒微笑の腰振りダンスを披露した。

「おう！　今ばかりは頼もしいぞ！」

知らず喜ぶリムル！

伝わらないって便利だねえ！

精神攻撃。嫌がらせ行為だ。だが、これくらい許されよう。

荒らしのミリム誘導の件を思えば。

どちらが害虫か問われれば、両方と答えるが。

クラフターは過去に犯された罪を未だ根に持っていた。この事

から分かる様に、彼らは絶対怒らせてはならない存在である。

そんな彼らの気も知らずに（言葉も伝わらないのに）話を続けるリムル。

「皇帝ルドラは、長年付き添ったヴェルグリンドが葬儀した。俺が語るのは烏滸がましいから、それ以上は何もしていない。

そんで軍と皇帝が消えた帝国は、放置出来ないから連邦の支配下に置いた。そこは帝国軍事司令部や、残された大臣達と決めだし、俺の部下が暫く国民を監視するから大丈夫だと思う。

天使の件も伝えた。その件については互いに被害者だからな。協力し合う事になった。

西方諸国には、帝国との戦争は終わったけど、天使に備えるよう伝えてある。だから、連邦含めて、世界中が対天使戦に備えて継続して武装状態ってところだ。

後はワルプルギスを開催して、魔王同士で現状と今後の事を話し合う。今度ばかりはガチで協力し合わないと駄目だから、気合い入れていくぞ。

詳細はお前の娘に伝えてあるから、大丈夫だろうけど、一応ここでも伝えたからな……期待してるぞ。

じゃ、俺はワルプルギスを開催、魔王達と話し合ってくる。留守を頼んだ」

害虫……じゃなかった、去るリムルを見送る。

今はスライムより、空から来る害虫……羽虫駆除を優先しなければ。武装村人も協力してくれるだろう。期待している。

とはいえ、我々も最大限の事はする。マルチだからと誰かが手を抜けば、綻びが生じる。それは避けたい。準備を続けよう。

我々の世界から軍事部、野次馬問わず同志が増援としてやって来ている。

基本的に個々好きな戦法やクラフトをして貰うが、羽虫駆除が目的なのは一緒。無駄な事をする同志もいるが、仕方ない。構えない

ので、そういう奴は放置する。

やらかす事は大体次の通り。

対空TNTキャノンの増設。

取り敢えず基本的に。

また、フルオート式をクラフト。砲手、装填手の負担を減らす目的の他、空いた手に剣や弓矢、銃火器を持たして戦力強化を図る。

羽虫は空から来るだろう。大量のTNTを打ち上げて、決められた幾つかの高度に爆発による壁を形成。

これにはIRPも参戦させる。ただし、此方は正確な対空砲撃をメインにさせる。

これで連邦都市内に侵入してくる羽虫を1匹でも減らす。弓矢や銃火器の届く高度まで降下されたら、何時も通りの剣と弓矢。自由戦闘。

IRPの調整。

対空攻撃の主力。その為、ミサイルや砲弾の量産と搭載を進める。

余裕があれば対地戦闘もして貰うが、対空が苦手なクラフターとしては空をメインに見張って欲しいところだ。

市街地戦になれば建造物や地上の味方が巻き込まれてしまう。乱戦になれば余計だ。

軍事部も、それは了解している。

優秀な我々の子供……弟と姉も関わる。

運用は大丈夫。信頼している。

天界の搜索。

羽虫共がいるらしい場所の搜索。

これは同志が既に行っている。

エリトラで空を飛び回り、地上も搜索中。

ゲートやスポナーの類いが見つかれば、トラップタワーの要領で潰してしまえ。

なんならロケットを飛ばして、ドカンだ。

天界侵攻するでも良いかも知れない。

だが希望的観測でしかない。クリーパー同様、突然スポーンする類いなら困る。空を覆う程のトラップのクラフト案も出たものの、今頃始めて間に合うか分からない。何より有効かも分からない。

このまま見つからない想定で事を進める。もし羽虫駆除祭りが始まったら、搜索組は偵察組にでもなって貰う。戦場の俯瞰。そして報告。どちらにしろ、軍事部も重要視している。無駄にならない。

武器のクラフト。

量産。ネザライト装備を主に生産して、更にエンチャントを加える。

戦時に沢山あつて困るものではない。余れば、リスポーン部屋のチェストに入れておけば良い。

逆に困るのは、リスポーンして全ロストの状態だ。それを防ぐ為に、余分な武器は絶対必要なのだ。

ただ生産を専門にするクラフターが、どれくらいいるか、戦時までどれくらいクラフト出来るか不安だったのだが……。

最近、久しぶりに”戻ってきた”同志が地味な作業を喜んで始めてくれた。軍事部の兵站組……弟君の報告では、既にかかりの数がクラフトされているとの事。

なんなら村人に提供出来るレベルらしい。地味ながら凄い仕事人がいたものだ。落ち着いたら礼を云いたい。

とまあ、大体こんな具合だ。

戦法は相手の出方次第になる。地下も利用して、何とか荒らしを駆除しなければ世界が荒れてしまう。

そして親玉であるユウキに、いい加減1発くれてやる。気が済まない。奴は荒らし過ぎた。もう許せないぞオイ。

「ちよつと良いですか?」

辛辣娘がやってきた。

何かね。 I R Pに問題か。

「それは大丈夫です。 後は、その時にならないと分かりませんがね。 それより伝えたい事があります。 リムルさんからの話ですが――

世界中の人魔と協力するのだろうか？

今は、いつぞやの魔王達とやらにでも会って話し合いだろう。

「……大体その通り。 馬鹿なりに少しは把握、 予想出来る様になつてきたんですかね」

リムルの事だ。

そうだろう、と予想しただけである。

「そうですね。 あなた達とリムルさんの仲に世界の言葉とやらは、 必要ないのかも知れませんか」

あると不都合。

「へっ?」

世界の言葉とやらがあろうがなかろうが、言葉も態度も受け取り方次第だ。 下手すると互いに勘違いし合って生きている。 逆に殺し合いすらしている。

だが今まで、それで過ごしてきた。 無理に変わらなくても良い。 理解もいらぬ。

ただ自分にとって本物であれば良い。 相手の事は知らん。 真意が知れぬなら自己満足で生きる他ないからだ。 勝手に幸不幸の

押し付け合い合戦を続ければ良い。

勿論、平和が良い。だがそれすらも、それぞれの認識のズレがある。

そうしてまた、繰り返す。

考えるのは疲れる。深淵を覗かない事だ。

「考え過ぎないのも問題だと思いますがね。まあでもその……ありがとう」

なにか。

「家族を……弟を助けてくれて」

そうしたかったからだ。

そうでなくても、アイツが生きたい様に生きた結果だ。礼なら本人に言え。

「……私にとっては、あなたは”本物”です」

そうか。

君がそう思うなら、そうなのだろう。

君の中ではな。

「この戦い、絶対勝ちましょうね！」

クラフターは頷いた。

勿論。そのつもりだ。負ける様なら、元の世界に逃げちゃう手もあるけど。

「勝ち以外考えないで欲しかったんですが」

現実的だと言って欲しい。
現実逃避とは違うとしたい。

「リムルさん達との絆があるでしょう」

それこそ勘違いだ。

悪食野郎と桃色荒らしは敵に近いだろ。
欺瞞の国の吸血鬼姫も、此方を嫌ってる。

「本心でも、隅では信用してるでしょ!？」

それが嫌なら、そうだな……。

軍事部がBBのデータ等を参考に開発したとかいう、核爆弾とかいうのを使うか、反物質爆弾を使って大陸全土を焦土化ないし浄化するか。

悪くない案じゃないだろうか。そこから始まる再スタート・クラフト生活。

「浄化というより汚染される!？」

下手すると全部消えるううう!!?

本当に駆逐されるべき荒らしは、実はアンタらでしょ!
というか、核爆弾とか反物質爆弾とか、ナニか、とんでもないのクラフトしちゃったのおお!？」

うおっ。 どうした興奮して。

状態異常なら牛乳を飲んだ方が良いぞ。

「お前らが飲め!　お前らが異常!」

荒らされるくらいなら、先に荒らすだけだ。

軍事部曰く、苦しみもなく瞬時に終わる素敵爆弾との事だよ。

リムルが帰って来た。

ご立腹。いつかもあった気がする。

「どうしたんです」

「いやね。天使達に対抗するなら、魔王である自分達を1ヶ所に集めて迎え討った方が勝算が上がるって提案したんだけどね」

「駄目だったと」

「そうなんだよ。それは美学に反するとか、意味不明な理由でね。戦争に、そういうの求めないで欲しかったマジで」

「同意します」

聞いてみて、クラフターも同意して頷いた。

クラフターにも「やり方」はある。集中運用は良い。大規模建

設の時とか。

「まあ、支配領域を守らねばならないって意味では自国領にいたいだろうし。仕方ないとも思う」

「取り敢えず自分の身は自分で、ですね」

続けて頷く。

助けられる事はあれど、基本は自分だ。

今は協力している。だが、戦闘中孤立するかも知れない。その時、自分を守るのは自分だけだ。

だが忘れない。ここはマルチ世界。間接的に誰かと関わり生きている。危機的状況であろうとだ。

例えば今。手に持っている鉄と火薬。

元の世界から輸送されてきた物である。それをコツチの世界の作業台にてTNTや銃火器に、ひたすらクラフトしている。

たかが物。されど物。繋がりのあるモノだ。

「500年周期で天使が襲来しているもんだから、西方諸国は避難所や食糧等の備蓄がされていた。

天使は1週間くらいで引き上げたらしいけど、今回はどうなるかわからない。

だから西方諸国には、いつもより多めに備蓄や避難誘導を強化する様に伝えたよ」

「そうですね。それが良いと思います」

「長期戦になれば、メンタルも不安定になる。備蓄物資の枯渇の心配から暴動が起きないか心配だな」

「大丈夫です。アイツらがいます。食糧問題が起きたら、ジャガイモをやたら生産して有り余ってるのを送れば良いです。

避難所が襲撃されるようなら、地下に引き込んでしまえば何とか。戦闘支援は、現地で遊んでる奴が勝手にしてくれるでしょう。

輸送手段は、地下鉄があります。送るにも逃げるにも、これで済ませられそうです」

「あー……うん。こんな時はアイツらの勝手具合が頼もしいよ。憎いくらいに」

「私もそう思います。その上で、失敗は考えたくないです」
「だな。ユウキや天使に好き勝手されるくらいなら、アイツらに好き勝手させた方が、まだ平和的だ」

「……それが今回ばかりは」

「うん？」

「いえ。勝てば良いだけです。単純明快。それはアイツらも分かっています」

「おう。互いに苦勞するだろうが、頑張ろうな」
「はい……核や反物質の件は伏せとこう」

エンチャントは経験値を消費する都合、トラップタワーのある元の世界にて行われる。

此方でも作れるなら良かったが、残念ながらスポプロは未だ発見出来ていない。効率の都合上、仕方ない。

尚、強力なエンチャントは戦闘慣れしている者に託し少量生産。後は中級、低級を大量生産して後方支援組の自衛や村人に充てる。

これも上級になる程に経験値を大きく消費する為である。出来るなら、より良いエンチャントを全ての者に託したいのだが、それは難しい。

なにせ、羽虫の数は100万だのなんだのという凄まじさ。この世界は化け物だ。世界がその負荷に耐えられるばかりか、時空間が歪まないとは。

核や反物質系の爆発に耐えられるか不明だが。それも、エンチャントを施した爆弾。

巨匠爆弾とでも称するべきか。

大陸を吹き飛ばせる程なら、防具に施す耐爆エンチャント程度では防げない規模の威力だろう。

なんにせよ、それは最後の手段。

好き好んで世界を、今までの建造物を塵芥、灰塵にする趣味はない。クラフターには荒らしもいるが、大半は“創造主”だ。酔狂の建築狂いがいても、破壊者は少ない。

その証拠に、今やっているのはクラフト、物作り。銃や弾、剣や弓矢が出来ていく。段々飽きてくる。ある者は飽きず淡々としているも。

「天使を片付けて、ユウキも叩く。平和になったら、君たちの宇宙開発を手伝うよ……だから、頑張ろう」

「……そればかりですね」

「そうするしかないからな」

「ええ。その通り。頑張りましたよ」

世界大戦は、もうすぐだ。

160. 大戦開始とマルチ

寝て起きてクラフトしてきたクラフターだったが、とうとう事変が起きた。

まあ予期していた事は良いとして、驚くべきは別にあつた。

『ボクの名はヴェルダ。この世に破滅を齎す者だ。』

今日、この日この時を以つて全世界の住人に対し、宣戦布告を行う。生か、死か。

精一杯、抗ってみるといいよ。では、始めようか。最終戦争ハルマゲドンを！』

凄い。上空に大きな映像が流れているぞ。

利用者が荒らしなのは気に入らないが、技術に罪はない。可哀想に。出来る事なら戦後、我々がその技術を奪取だ。

「何が生か死か、だ。勝手に2択で迫りやがって、どこの悪徳商法だ。コイツらみたい生きる事を前提に考えて、その上では、どう生きるか考えた事がないんだろうな」

「色んな意味で建設的な方法が考えられない破滅厨でしょう。荒らしとは、得てしてそういう生き物です」

「あと、どういう訳で名前を変えてるんだ。ユウキの中の人格か？」
『悪徳の意志（アンラ・マンユ）の名の可能性があります』

リムルは懐疑的な鳴声を上げた。

分かる。どういう技術なのだと。エリトラホバリングも未だ出来ない我々だ。この世界は未知の技法で溢れている。

一方、辛辣娘は相変わらず辛辣である。相手が荒らしなので構わないが。寧ろ誉めたい。

「あつ！ 天使が出てきます！」

「宣誓通りとはいえ、先制攻撃を喰らった気分だよ。なあ先生方？」

「……どう反応すれば良いんですか？」

「笑えば良いと思うよ」

さても、上空の荒らしが話し終えるのを合図に、突如空中に巨大門が現れた。

そこからは続々と羽虫が湧き出て来ている。

それは連邦のみならず、大陸の主要都市等を狙っている様子。

「お前ら好きにやれ！　天使共を追い払え！」

リムルが偉そうに鳴く。

やれやれ全く。

ゾンビイベントどころじゃないイベントだ。

元の世界では体験出来ない規模だろう。

故に。どうせやるなら、楽しもう。

その方が面白い人生だ。

各地の者は様々な兵器を手に持った。

軍事部は特にこの手の祭りを好んだ。

「方法は問わん。余程の事じゃなきゃ、各国も今回は許してくれるだろうし！」

「いやー……やっぱ言っておきます。コイツら、核や反物質爆弾をクラフトしたらしいのです。何でもありだと、下手すると惑星規模の災害が発生する可能性があります」

「フアッ!？」

荒らし許さん慈悲は無い。

マイクラ軍事部、戦闘開始。

各自、様々な兵器のレバーを握る。

ひゃっはー。新鮮な弾薬散財祭りだアと。

とはいえクラフターが今使用しているのは戦時の緊急生産装備類。品質に統一性がなく、性能も決して良いとは言えない。

一部新型設計も行われたが、殆ど少量生産。

大半は旧式を改修したものか、鹵獲した戦車や銃火器を掻き集め、性能不足を改造やエンチャントで補填。戦力の足しにしている。

それでも準備期間はあった方だ。クラフターのクラフト能力は個人でも凄まじい。それをマルチで協力した。創造された武器の山が無駄にならぬ事を願う。

「お、お前ら……ジオフロントや機龍、レールガン、ロケットとか科学系を造ってきたとはいえ……核は兎も角……いや核もヤバいけど、反物質爆弾まで作るとか、どうなってんだ!?!」

「私も知りたいです」

『同意します』

核爆発や対消滅は最終手段だ。

本当に駄目になった時に使用する。

我々は荒らしではない。創造主でありたい。

「頼むから、奴ら以上に世を無に返す真似はしてくれるなよ!?!」

リムルが騒ぐ。

今回は仕方ないと思った。

大賢者と情報の取引をしているBBによると、リムルの元の世界には“科学”と呼ばれる学問的知識があるそうだ。

核爆弾はその科学から生まれた強力な爆弾……たった1個で大都市を吹き飛ばせる創造物であり、既にリムルの元の世界では多く量産されているという。世界を何度も破滅へ追いやれる程に。

一方で反物質爆弾は、もしかすると……それ以上の技術と危険な爆弾である。が、理論上の話等であるらしく、実現していない。仮にあつても秘匿されているかと思われる。

それ程に危険な爆弾、技術なのだ。
それを軍事部はクラフトしてしまった。

科学とは理解出来る範囲にしか存在しない。

超えてしまえば、SFというもの……いや。もっと恐ろしいモノか。

それこそ、この世界の魔法やスキルである。

互いに理解が及ばぬものだ。

故に歩み寄る。 偶に殴り合ったが。

「なるべく荒らすな、と言ってます。特に核や反物質爆弾は許可出来ません」

当然だ。

クラフターは笑顔で頷いた。

使う前に、シオン級を試す。 順序は弁えているつもりだ。 安心して欲しい。

それでも駄目なら別の手段。 使うにしても戦術規模から戦略規模へと上げていく。 安心して欲しい。

「安心の要素ねええええええ!?!」

「戦争や兵器に人道も何も無いと思っていましたが、実はある気がしてきましたよ」

「ごちゃごちゃ鳴いても、戦争は止まってくれない。既に各地の対空兵器は稼働。」

TNT弾幕や、誘導弾が大量に飛翔中。 空を耕しまくっていく。
地表戦の準備もしなければ。 戦争は忙しい。



「IRPは予定通り攻撃開始しました！」

「連邦に飛来した天使は40万！ 他の倍の戦力との事！」

「怯むな！ パイロット、撃って撃って撃ちまくれ！」

連邦地下、ジオフロントIRP格納庫内。

ベスター達技術者や、地下施設に携わるクラフターは慌ただしく動き回る。

それを現在指揮するのは、クラフターの息子……弟君であった。

騒音や広さに負けないよう、小さな身体から出来る限りの声を絞り上げ、皆に指示を出していた。

「大きいチェストにシウルカーを入れて、誘導弾をフルスタックにしてますが、それでもIRPの携行誘導弾は約9万3千発。

効果が無い者、回避された者、耐えられた者を考慮すると、尚更に全てを相手には出来ません！

地上戦もあると想定すれば、逆に全てを誘導弾で相手にする必要はありませんが、補給要請が来た場合に備えて下さい！」

「了解！」

「効率と安全を考えて、IRPは格納庫に戻りません！」

「ほ、補給は現地ですか!？」

「応急修理は!？」

「先輩達が現地で行います！ 皆は弾薬やりペア材の準備に専念して！」

「は、はいー！」

弟君は連邦地下、ジオフロントの格納庫で指揮官代理と化していた。

普段は辛辣な姉が指揮を執るのだが、彼女はリムルが設置した迷宮都市地下の本司令部にいる。

クラフターの通訳が出来る希少な人物、という意味で分かれたの

だ。

その意味ではシズやヒナタも通訳出来そうなのだが、残念ながら、それぞれの国や組織に属している以上、守るべき場所が別にあった。

シズはイングラシア。ヒナタはルベリオス。加えると西方諸国の纏め役。

無理に連れて来れない。よって、こういう配置になった。

弟君は経験が浅いクラフターではあるものの、軍事部にいたし、実戦経験もある。通訳だけの価値だけではないのだ。

指揮を執った経験こそ無かったが、配属されているメンバーが優秀なのもあり、今のところ問題はない。

「先輩達はクラフトを続けて！　最悪、ここで立て籠もり籠城戦です！　自衛武器は常に携行して下さい！」

「万全です！」

「本司令部との連携は密に！」

「既に！」

「避難経路は確認済み！」

「問題なし！」

それを見る親、クラフターは満足気に頷く。

自慢の息子だ。元の世界で教育してくれた同志、軍事部に感謝したい。

最早、姉弟は負の遺産ではない。希望だ。

「今までののは訓練でしかなかった……僕達が滅ぶか向こうが滅ぶか、戦争は……残酷なんだ……」

弟が震えた。

側に寄り添ってやる。

「先輩……」

心配するな。我々がついている。
そして、終わらせる。必ず。

「僕、死ぬの……怖いです」

皆そうだ。己もだ。

恐怖が全くない訳では無い。気持ちは分かる。
リスキル、封印、世界という土台の破壊。

それは我々にとつての、絶望。

創造意欲を掻き消し、我々の存在を消していく。

だが戦う。戦うのを止めた時、世界が破滅するから。築き上げ

た創造世界が、我々の生き様が否定されるから。

それを断じて認める訳にはいかない。

輝きが消えて喜ぶ奴を許す訳にはいかない。

戦える者は我々を置いて他にいない。

これが本番だ。勇気を見せろ。

絶望はいらないぞ。鶏肋にもならないからな。

「そうですよね……はい、頑張ります！」

よし。良い子だ。頭にぼん、と手を置いた。

それは一瞬だったが、不思議な気持ちに駆られた。内側が熱くな
る。創造への熱意とは違う何かだ。

だが、居心地の良い何かだ。

この気持ち、無くしたくない。

戦う意味が、またひとつ創られた瞬間だった。



「天使が来たぞ！」

「迎え撃て！」

連邦上空には飛来する羽虫の群勢。

マイクラ軍事部は即行動。

ビル群の屋上や側面に備えている対空TNTキャノンをフル稼働させ、防空識別圏とした幾つかの高度を爆煙で耕しまくる。

IRPは後部ハッチをフルオープン、機関銃の如く景気良く誘導弾を撃ちまくった。

更にはデッドアイモードで、マルチキャノンによる正確な砲撃……狙撃を行う。

BB演算によりターゲットが重複する事なく、無駄なく効率的な攻撃。

それは、リムルの大賢者……オートモードと似ているかも知れない。

また大賢者とリンクする事で、演算を分散処理。スループット大幅上昇。戦闘中も情報収集。最適化を随時行う。

機体各部の制御、操縦反応速度上昇により攻防優れた機体となった。また、マイクラ軍事部熟練パイロットの腕で、スペックを更に超越していく。

その証左に羽虫が続々爆散。

マイクラと、この世界の両クラフターにより創造されたハイブリッド兵器、恐るべし。

「民間人は警備隊の誘導で避難済み。後の細かい事はリグルド殿がやってくれた。建物に気を遣う必要はないぞ！」

「オイラ達は、アイツらが撃ち漏らした天使をやるつすよ！」

「クフフフ……羽虫を殲滅して、改めてアピールしなければ」

武装村人も張り切っている。

軍服悪魔もいる。強いから頼れそうだ。
量産型アイアンゴーレムより間違いない。

「頑張つてねクロちゃん！」

「また死体処理をさせてあげますわ」

「そうそう、クロちゃんは下がってなよ」

「三下は、消される覚悟が出来た様ですね」

「クロちゃん、仲間割れは駄目つすよ!？」

「先ずゴブタ殿からです」

「ぎゃあああ!？」

かと思つたが勘違いだった。

結局、最後に頼れるのは自分だけの様だ。

IRPパイロットは手元のパネルを確認。

残弾が少ない。 念話で補給要請。

刹那、同志が土ブロックで機体上面に取り付くと、カウンタウエイトでもあったバックパックに新鮮な弾をブチ込んでいく。 ホツパーもあるにはあるが、直接放り込んだ方が早い構造らしく、そうされる。

改善の余地あり。

転移魔法……その魔法陣とやらをIRPに描いて貰えば、安全な場所から補給出来るかも知れない。

それは次回以降考えよう。 今は困難。

その間、弾幕に耐えたか、すり抜けた羽虫に機関砲を浴びせまくつた。 射程に入ったなら使わない理由はない。

「機龍……噂以上の凄い火力ですね」

「モミジさん。 義勇兵の士気は大丈夫で?」

「やる気も指示も大丈夫。 人間の勇者が纏めてくれますし」

「勇者マサユキですか。 彼のカリスマ性はスキルから来てるみたいですが、こんな時こそ役に立って貰いましょう」

「人魔混成、技量もバラバラの烏合の衆を纏め上げるのは難しい事ですからね」

「まもなく市街戦に突入しそうです。ご武運を」

「其方も。避難所の防衛、頑張つて。それと」

「はい？」

「旦那様のベニマル様に私の武勇を……」

「ははは……勝った後で良ければ」

「なら絶対に勝たないとね」

「ご武運を！」

村人の中には、しっかりしてるタイプもいた。

前言撤回。やる奴はやる。期待する。

補給が終わった。同志も仕事が早い。

また誘導弾連続発射。羽虫を爆破。

反撃する奴もいるにはいるが、外殻のエンチャント黒曜石を破壊するには至らない。

多少刹那的にヒビが入ろうと、マイクラ概念で即自動修復。 継戦

問題なし。

「我が軍が優勢だ」

「機龍様々であるな」

「此処ではな。 衛星都市……迷宮都市はリムル様や幹部級がいるので案じていないが、他国はどうなってるのか……」

「大丈夫つすよ。 皆強者つす。 それに」

「それに？」

「アイツら世界中にいるつすよ」

「ああ……別の心配が出来た。 国ごと天使を吹き飛ばすとか」

「ははは！ 建造物を愛するヤツらが、そんな本末転倒な事すると
は思えないつすよー」

「ナニやらかしてもおかしくない連中だろ」

マイクラ念話が聞こえない（伝わらない）彼等からしたら、突然発狂したヤバい女に映る。

”大丈夫だって安心しろよ。　しっかり戦術核だから。　それをロケットに積んでルベリオスに撃ち込むだけなのDA!”

ルベリオスは欺瞞の国。
ルミナスとヒナタ、そのファンクラブの騎士団連中も荒らしみたいなものだ。

共に消えたところで困らない。　寧ろ喜ぶ。　主に我々が。

「しっかり荒らしだから!?　　沢山の人達が悲しむから!?”

あと娘の夢を載せる代わりに核載せるとか度し難いんですけど！
更に言えば、戦術か戦略かに限らず、そもそも使うのが駄目だってんです!?”

ミリムちゃんよりデストロイしたら、世界そのものが終わっちゃいますよ!?”

”じゃあ反物質爆弾で対消滅DA★”

「じゃあつてなんです!?　　威力や汚染の有無だけを問題視してんじゃねーです!?”

破壊じゃなく消滅だからとか、効率100%とか変な事云つても駄目です!?”

エネルギー損失云々、効率厨になり過ぎて本質を見失っては駄目ですよ!　　それこそ荒らしの始まりです!?”

好き嫌いの激しい娘だ。
良いクラフターになれないぞ。

「アンタら屑親よりマシです!?”

軍服悪魔は核撃していた。種類はあつたかに思えるが、大量虐殺に変わりない。

また、身体が改造されるらしき攻撃でも荒らしは死んだのだ。核爆弾や反物質を使えば似た惨事が起きるかも知れない。だが何故アレが許されて我々が駄目なのか。コレが分からない。

あと、ドラゴンが戦った北海は大量の魔素により海獣が変異、凶暴化した。

ただでさえ北方開発はギイと愉快な仲間達により妨害されて大変なのに。現地クラフターへの同情を禁じ得ない。

「分かるでしょうが!? 原理も結果も違うでしょうが!?

あとね、核使ったら魔素とは別の有害なモンが放射されるでしょう!? 北部より酷い状況を大陸中で起こしてどうするんですか!」

求め得られる結果は似たり寄ったり。

だが、実際に行うと思わぬ発見もあるかも知れぬ。

実験屋からすれば、理論屋の予想外の事が起きて欲しいものだ。

時と人によるが。

「発狂しているところ濟まない。アイツらが何かしたのか?」

「核や反物質爆弾を使おうとしたんです!」

「核……反……なんだって?」

「リムルさん」

「……………サイロを封鎖するんじや駄目?」

「1度ヤツらが知り得たクラフトは、皆に広く共有されてる恐れがあります」

「つまり?」

「核や反物質を載せたロケットが世界中、そうでなくても核や反物質爆弾が量産されてる可能性がある、という事です」

かも知れない、と頷く。クラフターが。

この場にいる者は分からなかったが、クラフトに必要なのはレシピと材料と設備だ。

これが揃えば、クラフト出来る。軍事部だけに出来て、一般が出来ない理由はない。

つまり、この世界のみならず、我々の世界でも核拡散が発生している可能性は十二分にある。反物質爆弾も。

荒らしの手に渡ればアウトだろう。世界は常に崩壊の危機を迎える事になった。

うん。ヤバいね。

今更にクラフターは思った。

「核拡散……加えて反物質？ このファンタジー世界でこんな事になるなんて、誰が予想出来ようか」

「馬鹿共は組織ではなく、個人単位で動いています。協調性がゼロではありませんが……連中の記憶を覗けたところで、全ての脅威を取り除ける確率はゼロに近いかと」

「どこまでも厄介者だな、アイツらは。そのうち放射線物質が封入された清涼飲料水でも作りそうだ」

項垂れるリムル。

開戦したばかりなのに、リーダーがソレでどうする。

将来あるかも知れない最悪の可能性より、今に目を向けて欲しい。

煩い羽虫を倒してからだ、考えるのは。

「とにかく、ソレらは使わずに対処するよう伝えて欲しい。俺たち出来る事なんて、今はそれくらいだ」

「分かりました」

辛辣が云う。新型爆弾は使うなど。

頷く。けど、ヤバい時は良いのだろうか？

ココは確認しておこう。

使う機会があるなら、使いたいのが本音。

「使用禁止ッ！」

マジか。

今度はクラフターが頂垂れる番に。

仕方なし。どちらにせよ、世界が崩壊するのは阻止したい。戦

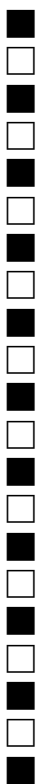
う事は間違いない。

最悪、元の世界か宇宙に脱出しよう。

行き先？ 生き方？ クラフターだから、無ければ創るだけで

ある。

我々の道はいつだって、そうだろうか？



世界大戦勃発中だというのに、新型爆弾の使用が禁じられた。なんて事だ。

リムルと辛辣娘の意向らしい。甘い事をいう。されど世界が終わっては元も子もないのも事実。

代わりに爆弾の材料を入れたポーションが作れるか試そうか。

それも”甘く”して。

そうすれば甘いリムルは許可してくれそう。そうして核分散させて、後でそれらを材料に堂々スプラッシュ式にクラフトした小型爆弾を作れるかも知れない。

だが今は遊んでる場合ではない。

軍事部は残念に思いながらも、羽虫迎撃は怠らない。新型クラフ

トが封印されたところで、立ち止まる我々ではない。

技術は困難を乗り越える際に作られる事がある。

この状況もそうだ。そう考えて前向きに行こう。

「おい！　暇なら手を貸してくれ！」

場所はミリムの城。

ゲルド達が建造したこの地にも、奴ら荒らしが現れた。既に獣王国のカリオンと取り巻きが戦闘している。

城の中にミリムがいるのは分かるのだが……加えて天翼国のフレイまでいる。それぞれの国にいると思っていたので、意外性があった。

「俺様は四凶天将の一人、ヴェガ！　貴様らが例の人間共か！」

だが所詮は人間の上澄み程度！　無駄な抵抗は止めて、さっさと俺様に喰われるがいい！」

まあ、未だ村人の生態は理解し難い。無理に解明するより、今は成すべき事だ。我々は荒らしを駆逐するのみである。

取り敢えず手当たり次第に羽虫に弓矢を射る。
持ち込んだ自動小銃や機関銃も撃ちまくる。

高速飛行する荒らしに当てる芸当を見せつけつつ、愚直にも突撃してきた虫は斬り伏せた。虫特効は効果が見られない。残念だ。

「少しはやる。だが、所詮は雑魚！　俺様を傷付ける事すら出来ぬわ！」

「気を付けろ！　アイツは他の天使共とは違う！」

ハアンハアン鳴く荒らし。

手には槍に斧をクラフトして生み出したかのような得物を装備していた。

他とは違う。クラフターも分かる。

それはそれで興味深いが……煩い虫だ。早々に黙らせる件は他と変わらない。

「カリオンと取り巻きは友好のまま邪魔しなきや良いとして、取り敢えず弓矢を射る。」

弾かれた。まあ、そんなとこだと思つた。

「フーン！ 無駄だ、無駄無駄！ 貴様ら雑魚に俺様を傷付ける事すら……ぬっ!？」

一斉射。

弓矢のみならず、銃撃を嵐の様に食らわせる。

全てエンチャント済みだ。毒なり火炎なり命中した相手を光らせる弾だったり色とりどりの弾幕。ある種の花火のようで美しい。

「ふ、ふん！ 無駄無駄！ 雑魚がいくら足掻き手数を増やしたところで……ま、待て！ 取引をしよう！ 参つた！ 降さ……」

荒らし許さん慈悲は無い。

何か鳴いているが構わず押し切る。マルチならではの捌ききれない数の暴力に裁かれるが良い。世界を、我々を敵に回した荒らしは必然とこうなる運命なのだ。

「馬鹿なああッ!!？」

「お前達には驚かされっぱなしだな」

悪は蜂の巣になり汚ねえ花火となり空中で終了してしまう。皆で掛ければあつけないものだ。

ウィザーも召喚前に準備しておけば、ある程度対処出来る。今回もその例に似る。

新たな創造物と同志を持ってして挑む大きな祭りなのだ。だが簡単に終わっては困る。

少なくとも、楽しむ暇は欲しい。これだけ装備と同志が、この異

世界に集合したのだから。

「カリオン、直ぐ戻って来て！ ミリム様が危険かも知れない」
「なんだと!? 分かった、直ぐ向かう！ お前達、余裕のある奴は城に戻れ！ ミリム様が危ねえらしい！」

カリオンと取り巻きが城に向かった。
二次会なら喜んで。

クラフターは適当に残党羽虫を相手にしつつ、瞬足ポーションを飲む。その足で立派な魔王城内へと駆け込むのであった。

一応、その途中で経過報告兼、応援の同志を要請。前菜の後のメインなら、人手があつて困る事はない。



「ミリムちゃんの元に謎の人物です！」
「見ればわかるよ」

司令室のモニターに映るは、ミリムの居城。

そこには突然城内に現れた、ルシアと名乗る銀髪の天使。ミリムを大人にしたような美しい女性の姿であったが、機械の様に無表情。既に初手を打たれて被害が出ており、ミリムはともかく、共にいたフレイトと部下が重傷を負わされていた。

ここにいる彼女達ハーピイは決して弱くないのだが、天使側が圧倒的格上だった。

それを見せられたミリム、激昂して相手に殴り掛かるものの、謎の力に阻まれて触れる事すら出来ないでいる。ピンチである。

……ついでとばかりに、マインクラフターも数名突撃していく様が映る。何処にいても今更驚かないリムル達だが、逆に呆れと妙な不

安と安心感の塊が歩き回る光景は謎の頼もしさがあった。

「アイツらもいるな」

「ミリムちゃん、気に入ってますからね。 快く迎え入れたんじやないですか」

「かもな。 フレイは嫌がったろうなあ」

「ですが今は大きな力です。 役立ちますよ」

そう。

普段迷惑系なクラフターだが、こういう”対荒らし”戦闘では大きな戦力！

彼等がいるところ、大抵何とかする！

少なくとも、最悪の事態にはなるまい！

「さっそく仕掛けてますね。 問答無用で」

「おお！ 天使を吹き飛ばした！」

「他と違う異様な天使にも、ノックバックエンチャントが効果的で助かりました」

「キヤッスルガードという絶対防壁を展開している様子だったが、それでも通用するとか、アイツらの魔法は恐ろしいな」

実況しつつ、様子を見守るリムルと辛辣娘。

だがそれも次の光景で余裕が吹き飛んだ。

「ああ、取り巻きの奴の攻撃を受けちゃったな。 だが、ついでとばかりにアイツら爆弾を……ん？ 色が通訳ちゃんの服と同じ緑だぞ

？ しかも青色混じりの……まさかあああ!？」

今度は悟ったリムルが絶叫する羽目に。

これでも国主であり、醜態を曝すべきではない。

だがしかし！

映像の爆弾は例のアレに決まっている！

マイクラ世界風に言えば帯電クリーパーカラー。

巨匠爆弾とも称すべき世界規模の危険物。

その正体は核（或いは反物質）爆弾★

映像に映る爆弾の威力は知らないが、絶対碌なものじゃないのは確かだ。色々吹き飛ばされてしまう気がしてならない！

最悪の事態ツ！ 誰がならぬと保証した!?

火打ち石を持たないあたり、脅しか最終手段用に予め設置したのかも知れないが、奴らクラフターの事だ。

死んでも復活するから、自爆も視野にしている。

巻き込まれるミリム達も荒らし扱いしているところはあるから、天使ごと滅んで貰う算段なのかも知れなかった。

フレイヤカリオンもいるが、所詮村人のひとりやふたり感覚。平然と生命の大地を吹き飛ばす。今まで馬鹿に苦しめられたリムルと娘は未だ悪夢を見続けているのだ。

「使うなって言ったでしょうがああ!!！」

通訳ちゃん、叫ぶ！

だが戦闘に夢中で返答がない！

「俺、行ってくるわ！ ベニマル、あとの指揮頼んだ！」

「は、はい。お任せ下さい」

「ラミリスも来るか？」

「はあ!? アタシに死ねと!？」

「昔、ミリムの暴走を止めた経験があると聞いたんでな。 つつても、今は難しいか。」

「やっぱり俺が出るしかないわな」

「そうね……ミリムをお願い!!」

「おう！ 任せとけ！」

こうしてリムルは慌ててミリム城へ。

現れた天使が誰で何しようとするか分からんでも、クラフターのやる事は、やはり碌でもなかった。

で、またリムルが説教しに向かうのである。

いつもの事だが、止めないと天使より先に世界を滅ぼしかねない。仕方ないね。

「取り巻きを抑える為にも、ディアブロ！」

「はっ！　ここに！」

瞬時に現れるクロ、じやなかったディアブロ。

その背後には3柱の悪魔。

どうやら、やっと名前が与えられた様子。

クロちゃん卒業おめでとう！

「死体処理を続けても良いんだよ？」

「ネームド入り、おめでとー！」

「配下より遅れて名を貰ったな。　ねえどんな気持ち？　今どんな

気持ち？」

「まだお仕置きが足りない様子ですねえ」

「……ここで武力行使はやめて下さいよ」

リムルは背後での会話には聞こえないふりをしつつ、ミリムの下へ急いだのだった。



クラフターは乱入者に嬉々として挑んでいる。

ミリム城の品評会をしつつ時々戦場を俯瞰していたのだが、突然ミ

リムの目の前に現れた羽虫と交戦する事になった。

暫く鳴き合いがあった次の瞬間、あつという間にミリムの取り巻きは戦闘不能レベルに陥った。フレイも含む。しかし息はある。後でポーシヨンを投げつけられるなりで治るだろう。だが今ではない。動き回られると邪魔だし。

「まさかキャッスルガードの絶対防御まで貫通してくるとは。やはり貴方達の存在と力は予想を常に大きく上回る」

何か機械的にハアンハアン言っているが気にせずガンガン行こうぜと、剣を振り弓矢を射て拳銃を撃つ。

全てエンチャント済み。耐久IやノックバックIの捨てエンチャントの類でも構わない。それで謎の障壁を貫通出来る。”
特効”研究をせずに済むのは大変楽である。面白味に欠けるものの、便利だ。エンチャント万歳。

「ですが力及ばない様ですね。この私を倒し切るものではない様で何よりです。

ですが居られ続けてはミリム・ナーヴァ様をお連れするのに不都合なのも事実……殲滅せよ」

だが手応えがない。

吹き飛ばせはするのだが。やはりエンチャントも良く考えないと駄目だろうか。

「ミリム様に纏わり付くムシケラめ、身の程を知るが良い！ 死ね

！ 天雷轟爆撃！」

奴の取り巻き、純白4人の内1人が襲って来た。

巨大な斧、いやハンマーと呼ばれる得物が降ってくる。慌てて横移動で回避。

先程までいた床が爆発した様に大きく広範囲に抉れてしまう。

しかも何かしらエンチャントがあつたらしい。

ガーディアンのような雷撃が周囲に撒き散らされ、クラフターは吹き飛ばされてしまった。 凄い衝撃だ。 色んな意味で。 水中神殿攻略より大変かも知れない、これは。

「友を傷付けるなんて、許さないぞッ！」

吹き飛んだ隙は、ミリムが埋めた。

親玉に殴りかかっている。 が、見えない壁に阻まれた。 その衝撃がクラフターを襲う。 ノックバック的な意味で。

仕方ない。 最悪ここを爆破して敵ごと吹き飛ばそう。 城は素晴らしかったのだが。 建造物はまた造れば良い。 荒らしを野放しにする方が世界にとって危険である。

「ミ、ミリム様……感情的になつては相手の思う壺です！ 彼等は健在です、落ち着いて！」

「フレイ、皆が傷付けられて黙つてなどいられない！ ましてやコイツ、亡き我が父上……星王竜ヴェルダナーヴァが待っているから来いなどと！」

思えば、神殿も水中破壊出来るよう工夫したTNTで壁や地形を吹き飛ばした時もあった。

負の状態異常が継続する水中神殿の空間では、ポーションを利用して効率強化のツルハシを振るつたとしても、ショートカットを狙えない。 状態異常の効果で全然壁を破壊出来ないからだ。 イラツとした。

真面目に攻略した同志もいたが、場合によってはそうした。 仕方なかった。

そして今。

荒らしを生かす訳にはいかないのだよ。

そんな思いから、隠し持っていた携行戦術核を設置。大ききや見た目はTNTと酷似する。ただし威力は比較にならない。この辺一带は消滅するだろう。

しかもエンチャント付きだ。訳分からん魔法による障壁も突破する。巨匠爆弾で問答無用のリフォームオチに持ち込もう。

「大丈夫か？　助けに来たぜ！」

「カリオン……ッ！」

と、ここで新たな村人のハアン声。

見やれば外にいた一部同志と、オマケのカリオンが加勢してきたではないか。

心強い。マルチ故の喜びを感じる。とはいえどうなるか。

やっぱ核爆発か。実験的には試したい。

「ムシケラが増えたところで、結果は同じよ」

「どうかな？　今さつき、ヴェガとかいう奴をコイツらが片付けた

んだが？」

「だからなんだ？　此方は更に強く4人もいる」

「こっちはその上をいつてるんだが？」

「舐めるなよ、数揃えたところで敵わないって事を教えてやるわ、獣風情が！」

「来いよ。弱い奴程、良く吠える」

良く鳴く荒らしだ。

先程の荒らしもそうだったが。喧しいからと強弱は分からない。油断はしない。

「クフフフ。私も混ぜて貰いましょうかね」

「ボクもボクもー！」

「命令ですから」

「楽しい事してんな」

またハアンが増えた。

軍服悪魔達だ。遅れてリムルまできた。

「ディアブロ達は天使の相手をしろ！俺は馬鹿とルシアとかいう奴をやる！」

「ぐ」武運を」

「ん？ よおりムル。幹部級をゾロゾロ連れて連邦は大丈夫なのかよ」

「カリオンさんこそ。此処がヤバそうだったんでね、慌てて来たんだけど余計って事はないだろ？」

「その通りだ。ミリム様が攫われそうでな。一体奴は何なんだ……！」

「全くだ！核だか反物質だか知らんがヤバそうな爆弾を設置しやがって！」

「は？ え？」

「最後の手段にしても、早々に設置して誘爆したらどうするんだ馬鹿！直ぐに片付けやがれ変態創造主糞野郎共が！」

「突然仲間割れ!」

ウオツ。

登場早々、蹴りが飛んできた。

やりやがったな！この悪食スライム野郎！

向こうが続け様に剣を抜く。

此方も装備。剣戟を始める。渡したネザライトの剣先が早速我々に向けられるとは。

この戦時には無いと思っていただけに油断した。

この戦乱に紛れて我々を殺す気だ。

やはり油断ならない相手だ、リムルは。

「うおおお！ さっさと片付けろおおお！」

凄い剣幕。

嵐のような剣速。 キレッキレの剣技。

ついていけず、剣ガード。 盾も使う。 丸石や土壁は一瞬で破壊

されて意味を成さない。

いやあ。 強くなったなりムル。 でもこのタイミングで何故こんな事をするんだ。

『爆弾を片付けろと言ってます』

娘が念話通訳してきた事で、やっと理解した。

こんなにも直ぐにバレて対応されるとは。

剣盾の耐久値が勿体無いので、望まれた通りに爆弾を殴ってアイテム化、回収してみせた。

リムル、満足して剣を鞘に収める。

「最初からそうしろ！」

「いきなり過ぎて……どう突っ込め良い？」

「見苦しいところを見せた。 まあ馬鹿は放っておいて、天使を倒そうぜ」

「お、おう……」

リムル達の監視網も侮れない。 思えばその手の事にも腐心していた気がする。

我々の念話や創造物に対抗する為だろう。 そう思うとリムルと世界の成長を時々垣間見える。 間接的にも関わられた。 それが嬉しくなって頷いてしまう。

「はあ……分かれれば良い」

一方、軍服悪魔達は取り巻きを相手にしていたと思えば……決着は即ついた。

恐ろしく早い。クラフターは見逃した事を少し惜しむ。いやまあ、大したものじゃないなら興味は失せるものの。

一応、終了者を紹介すると以下の通り。

大戦鎚ウォーハンマーを操る、トルネオット。

雷の属性を持つ。筋肉質な大男であった。

クラフターに攻撃したのはコイツ。

両手斧、グレートアクスを操る、アリア。

火の属性を持つ。小柄な少女の外見をしている。

三叉槍、トライデントを操る、オルカ。

水の属性を持つ。細身でしなやかそうな身体つきの、美人である。

九尾鞭、ナインテイルを操る、プリシラ。

風の属性を持つ。中肉中背だが、豊満な胸が特徴的だ。目を閉

じているのが印象的な、中性的な風貌をしていた。

メタい事を言えば、名有りなのに使い捨て。

即落ちした。

原作、当作問わず多くいる気がするが、それも今更である。敵が

自身の力を過信して、此方を見下していたら次にはワンパンされて呆気なく終わるワンパターン。

強さアピールもあるとはいえ、あまりこの手を繰り返すと、大丈夫か不安になる事もある作者（ハヤモ）であるが、原作でその手の描写があるので多少は、ね？

それに直ぐ終わる方が作者的に楽である（殴。で、どうなったかというと。

「ようし、ボクは斧と槍！」

「仕方ないわね。ま、私は何でも宜しくてよ」

ボクっ娘ウルティマは2人指名。
残りはお嬢様のなテストロッサ。

「で、私は外の残党……」

金髪カレラは顰めて言った。

ハズレを引いてしまった様な立ち位置。 本当ならヴェガの始末をする筈が、既にクラフターが倒してしまっただけでそうなった。

ならリムルの援護をすれば良いじゃん、と思うのだが、そこはディアブロが担当。

「クフフ。 死体処理も頼みますよ」

「いつか決着を付けないといけないみたいだな」

「お前ら頼む。 今は止めてマジで」

勿論、主人の前で粗相をする悪魔達ではない。

天使が動くと同時に、悪魔も動く。

そして。

テストロッサ vs トルネオット&プリシラ

ウルティマ vs アリア&オルカ

といった戦闘が開始されたのだった。

が、結果は勝負にもならなかった。

トルオネットがクラフターにも放った技を、テストロッサに放つ。

対して生と死を司るテストロッサの手に、デスブレード、黒の大剣が顕現。 次にはトルオネットを両断。

それで終わらず、繰り出されたエネルギーの塊を苦も無く握り締め、自分の魔力に纏わりつかせた。

崩れ落ちるトルオネット。

「返すわ」

そこに容赦なく、そのエネルギーを返す。

閃光、圧縮、崩壊。

トルオネットは原型を残さず気化、死亡した。

「ひ、ヒイイ!!」

その様にプリシラは驚愕、悲鳴をあげた。

2対1で、自身らのエネルギー量や今までの経験からくる自信から負ける筈がないと思っていたのに、あまりに呆気なく……あまりの力の差に心が折れる。

「あら、どうしたの？　かかってらっしやい。優しく相手して差し上げますわよ?」

微笑みながら近寄って来るテストタロッサ。

プリシラは半狂乱になり、泣き叫んだ。

「や、止めて!　来ないで!!　お姉さん、謝る。謝るからあ!!」
「あら?　確か、悪い子にお仕置きするとか、仰っていなかったかしら?」

「ごめんなさい、失言でした!　お姉さん、調子に乗ってましたあ!!
ゆ、許して下さい!!　貴女様には逆らいません。
差し上げます、何でも差し上げますから、命だけは!!」

「じゃあ、貰うわね。その天使の力を。その代わり見逃してあげるわ」

悪魔お姉さんに分からされた天使お姉さん。

そんな彼女の力を奪うべく、ご機嫌にプリシラに手を翳すテストタロッサ。

ところが、そんな悪魔にも不幸が訪れた。

運悪くルシアに吹き飛ばされた（正確にはミリムの余波）クラフターが間に入ってしまったのだ。

「ッ!?!」

天使の力と共にクラフターの力まで吸ってしまうテストロッサ。その結果どうなったかというところ……。

「ヴェオエエツツツ?!」

吐けないものを吐く汚声絶叫!

ウマズい、意味不明な味が悪魔を襲う!

テストロッサは美女がしてはいけないような声と共に苦悶の表情をし、青褪め、腹を抱えて床で疼くまる!

魂に限らず、クラフターの力を変に奪おうとするだけでもこうなるとは。

クラフターは煮ても焼いても食えない存在なのだろう。犠牲者がまた1人、増えてしまった瞬間だった。

「ひ、ひいい……!」

プリシラからしたら、悪魔の嘲笑。

無様に這い蹲りずりながら、その場から逃げ出す。だが不幸は終わらない。

彼女は力を失った以上、身を守る事を優先しようとした。その行き先は外に未だ残存しているヴェガの部下。

だが残念ながらヴェガ同様、部下の天使達はクラフターに倒されてしまっていた。

他にしても残留組……カリオンの部下とクラフター、加えてカラ。絶望的な戦力差である。

そして見つかったプリシラはどうなったかというと、意外にも殺されはしなかった。ただクラフターに縄で捕縛されてしまい、近藤同様に地下に引き摺り込まれる事になっただけである。

本来なら、敵味方の判別など考慮していなかったヴェガに殺されていた運命なのだが……これを幸か不幸か判断するのは人それぞれだろう。

こうしてテスタロッサの戦いは終了。

一方、ウルティマ。

炎を纏ったアリアの両斧を片手で受け流し、ブラツデーバイトでアリアを穿つ。

それは致命の一打となり、アリアを絶命に至らしめる。

驚愕するオルカの意識からウルティマが消失し、背後から、

「はい、終了!!」

と聞こえた。

同時に胸に熱い痛み。

そして……2人は悪魔の少女に葬られ終了。

会話がない分、テスタロッサより早く終わった。

だが恐怖も苦痛も感じなかったのは幸いであつた事だろう。

この様にして悪魔と天使の戦いは終わった。

クラフターはコレを見逃していたのだが、たぶん見ているも別の意味で見逃していたであろう。

……だが蹲る軍服悪魔にナニ思う。

またか、程度だ。 対応も同じ。

「テスタロッサ、コレで分かったでしょ?」

「え、ええ……ここまでとは……うぷっ!」

「うわーっ! 今吐かないでよ!」

クラフターは迷惑な存在だ。

だが味方である内は頼もしい。

状態異常な様子の子のウルティマに馬乗り……跨ると、牛乳バケツを手
に持ち無理矢理口を開かせ強制的に摂取させる。

飲めよ飲め飲め。 さすれば楽になるぞと。

「ゴポ……ッ、ポポ………」

「やめたげてよおー！」

善意の笑顔で、救命活動を行うクラフター。

実に頼もしい存在だ。 飲まされてる悪魔は白目を剥き、同僚悪魔
は涙目になっているが。

悪魔より悪魔かも知れない。

だが頼もしい存在なのだ。 たぶん。



クラフターが対峙している銀髪は、どこかミリムに似てる気がする。
る。

余計に腹が立つ。 リムルがシズの姿を模倣している様に、コイツ
もその手かも知れない。

だが荒らしが荒らしの姿を真似るとは。

殺意マシマシ、エンチャント多め、同志だくとなるのは時間の問題
でしかなかった。

もうね。 我々を煽つてるとしか思えない。

殺す。 絶対許さない。 慈悲は無い。

「俺も加勢してやる」

「俺様も忘れるなよ」

リムルが立つ。カリオンも並ぶ。

マルチって良いなと思える。荒らしを殺すにも大勢で祭りをした方が盛り上がる。クラフターは暗黒面で領いた。

「これはこれは、魔王リムルと飼犬に成り下がった元魔王カリオンではありませんか。

貴方達の事は野蛮な連中と共に存じておりますよ。ヴェルダ様に楯突く愚か者。

そして、私の邪魔をしてくれた、忌々しい魔王であると」

「好き勝手言ってくれる」

「で、アンタは何な訳？ 天使なのか、それとも……スキルが自我を持った存在か？」

「では自己紹介を。」

私はルシアの名をヴェルダ様より授かった者。貴方の推測は概ね——」

隙ありい！

増援軍事部クラフターは乱入と同時に、ネザライトの剣で銀髪を吹き飛ばした。

壁に吹き飛び貫通し、砂埃の中に沈む。

すかさず弓矢と拳銃に持ち替えて、煙に向かって撃ちまくる。

ついでに開発したスプラッシュ式TNTともとれる新兵器、手榴弾を投げまくり煙向こうを爆破しまくった。煙を更に増産。

——同志の光の矢が当たった。煙向こうだが位置がハッキリ分かる。容赦なく光の線で作られた人影に向かって更なる追い討ち射撃を敢行。新設計の軽機関銃を”右手のみ”で構えて、フルオートで撃ちまくる！

隙を生じぬ弾幕形成後、そのまま”左手のみ”でロケラン発射。大きな爆発と衝撃が城を揺るがした。

「おい!? 話の途中なのに容赦ねえな!」

「敵とはいえ、聞ける情報は得たいところだったが、まあ隙を見せる方も……いやねえか。不意打ちみたいなものだったからな。同情はしねえがよ」

「荒らし許さん慈悲は無い。」

隙を見せればヌツ殺す。そうじゃなくてもヌツ殺す。敵だ。生かしておけぬ。

鳴いてようと通訳がいなければクラフターには理解出来ない。出来てもやつぱ荒らしだろう。我々の行為は間違っていない。

「わはははっ！ 流石はお前たちなのだ！ また新しいスキルを、いや、オモチヤを作り出したのだな！ 会う度に楽しいぞ！」
「それは貴女だけよミリム……」

背後でミリムとフレイが鳴いている。

この件が片付いたら、次はお前でも良い。ミリムにも恨みはある。昔、連邦ジオフロントを散々に破壊しやがった罪が。

だが今はなすべき事を成す。

煙向こうに見える、光の人影が消えるまで撃ちまくるクラフター。弾切れになれば、空撃ち前に手慣れた動作で弾薬箱を取り替えるロード動作。好きこそ物の上手なれ。

やがて光が消え、撃ち方止め。煙が晴れるのを残心の構えで待つ。

「本当、野蛮な連中です……ッ！」

ヌツと出てくる銀髪。

表情こそ変わらぬも、怒声のハアン。

あれだけ攻撃したのに、その程度か。ダメージが通っていないと見た。

バースト射撃で何発か試し撃ち。表面で弾かれ跳弾が離れた壁

に当たったのが分かる。

駄目か。新型の純粋な能力を測る為にエンチャントしなかったのは不味かった。

「感情らしきものを持つてるとは驚きだ」

「コイツらの攻撃も驚いたがな……」

「だが駄目なのだ。ワタシも加勢しよう」

「俺たちは邪魔しない程度に援護するよ。コイツらは好きにやるんだろうけど」

「フレイ、動けるか？」

「なんとかね」

「外には俺様の部下とアイツらがいる。ここにいる怪我人連れて、一旦退け。あとは任せろ」

有翼村人達は離脱するようだ。

飛行能力が落ちたのか、よろよろと徒歩で戦場から遠ざかる。

その方が良い。戦えない者が此処にいても良い事はない。

我々是我々の仕事をするのみ。

具体的には目の前の荒らし駆除。取り巻きは既にいない。後は親玉らしき銀髪で終わりで良いんじゃない？

「どころでルシア、といったか。目的はなんだ？ ミリムを激怒

させ、支配しようっていうのか？」

「フッフ、その程度は見抜く能力はありましたか。その通りです。

ミリム様は、偉大なるヴェルダ様の御息女。

この世界の崩壊に協力して頂き、後に誕生する新世界の母となるべきお方！

その為には、下らぬ記憶は不要。

この世界の汚らわしい思い出ごと、全ては白紙に戻されるべきなのです。

そして、貴方達はその穢れの代表格。滅ぼされるべき存在。

貴方が此方の目論見に気付いた事は褒めて差し上げましょう。ですが、既に手遅れなのです。そろそろ十分でしょう。

この場で滅ぶが良い、邪悪なる魔王と混沌の群勢共よ。

さあミリム様、そのの者達を滅ぼすのです！ 王権発動（レガリアドミニオン）!!」

ミリム、”王者の支配”を受けて硬直……した様に見えた。

でもチラツと此方を見て一瞬笑みを浮かべた。

演技。悪に堕ちるフリだ。クラフターには難しい高等テク。敬服する。どこかわざとらしい気がしないでもないが。

「考えがあるなら合わせようか……」

「そうだな。クレイマンの時を思い出す」

リムルとカリオンも察して、奇妙なハアンを上げ始める。おふぎの1種に似る。

「げ、げえ!! ミリムを操るだとうう!!」

「……わざと過ぎやしねえか?」

たぶん、これが正解だとしておく。

我々も合わせて腰振りダンスを披露した。

首も激しく動かして見せる。ふざけるなら、ふざけよう。同志同士でやり合う様に。

そこにミリムの拳が飛んでくる。

これもおふぎの1種だろう。我々も同志に悪戯で殴る事がある。

「ちよっ、ゴフアツ!？」

が、ミリムはガチ殴りだった。

リムルは避けたが、踊っていた同志と丁度背後にいたカリオンが纏めて吹き飛ばされたのだ。

銀髪同様、壁に大穴開けて砂埃に消えた。さっきのノリで銃口を向けたが、寸前で撃たずに済む。1発でも誤射は良くない。

「おいおいマジでやる?!」

続けてミリム、剣を装備。

リムルも急いで剣を構え、剣戟始め。

両者打ち合い、激しく火花が散る。

クラフターも真似て斬り掛かるも、あっさり流されて斬り捨てられた。強い。剣だけで勝つのは難しい。毎度のパターンだが。

対してリムル。今までの努力とネザライトの剣（オーバーエンチャント仕様）のお陰で何とか凌いでいるものの、斬られるのは時間の問題かに思われた。

「ぐっ！　この剣じゃなかったら、とつくに切り刻まれてたぞ?!」

ならばと、クラフターは銀髪と対峙。

今なら無防備だ。ミリムを手駒にしたところで、親を倒せば勝ちである。

クラフターはスプラッシュで攻撃力・俊敏性を上げ、上位金林檎で体力最大値を強化。

エンダーパールを銀髪に投げつけ、ワープの瞬間に剣を振り下ろす。

「見えますよ」

次には吹き飛んだ。クラフターが。

何らかの魔法攻撃を銀髪より受けたのだ。

まさか攻撃も出来たとは。そしてこの対応。

油断していた。防具有りなのに、かなり痛い。

「出鱈目な貴方達ですが、ある程度の法則があるのは分かっています。そこから導かれる攻撃パターンに備えれば、この程度」

ノックバツクの前で、同志が即座に黒曜石の防壁展開。庇うと、回復のスプラッシュポーションを投げつけてくれた。何とか持ち直す。

『ミリムちゃん、リムルさん、ついでに馬鹿親ども、聞こえますか?』
「うおっ!? ビックリした!」

突然、辛辣娘の音が頭に響く。

いつもの念話とは少し異なる。リムルとミリムも少し反応したから、この世界の念話を弄ったのかも知れない。

『秘匿念話です。おふたりとウチの馬鹿親達にしか聞こえないので、ご安心を』

『いつの間に、こんな方法を……』

『お前は迷宮で会った通訳だな! 空の花火といい、お前も面白いぞ!』

『どうも……BBと大賢者の協力で、秘匿念話に成功させてますが、詳しい説明は省きます。』

モニター越しに其方を観戦してますが、大丈夫ですか? ミリムちゃんは操られたフリをしている様ですが、打開策などが気になりまして』

黒曜石の脇から弓矢、銃火器で援護しつつ話を聞いておく。

秘匿念話とは、やりおる。我々もやれるのだが、それを村人にも通用出来るようにしたとは。驚くべき技術だ。 ”形” だけがクラフトではないと改めて思う。

あと、BBと大賢者はIRP戦闘演算中の筈なのだが……リムルが主の大賢者は兎も角、BBが此方にも気を遣える程とは。演算能力の高さに驚かされる。様々な可能性がある。それだけに量産出来ないのが惜しい。

『気付いていたのか！　この場にはいないのに、そこまで分かるなんて凄いのだ！』

『俺も気付いてたぞー？』

『そんなリムルさんの反応や、大賢者さんやBBとの相談の結果でもありませんがね。』

それより、この後のプランは？　援護が必要でしょうか？』

銀髪に撃ちまくる。

毒や弱体化スプラッシュ投擲。効果が見られない。あつても

直ぐ正常化しているのか。

リムルの方はミリムと剣戟しながら念話している。器用なものだ。今の隙に纏めて屠りたい気がしないでもない。

だが味方は多い方がよい。殺すにしても後にしてやる。クラ

フターは良くも悪くも打算して、結論を出す。その上で弾を出す。

銀髪にオラオラ発砲。

『援護なら間に合ってるよ。保険としてディアブロを隠れさせ待機させているし。』

だが、この場を凌げれば良いものじゃない。天界にいるユウキ……今はヴェルダとその取り巻きを片付けないとな。

その点、ミリムは考えがあるんだろ？』

鬱陶しそうな顔で魔法を放たれた。

今度は避けてやった。刹那、即座に丸石防壁展開。素早く中抜きし、同志が作業台でクラフトしたハーフブロックで半分埋める。

出来た半ブロ分のスリットから弓矢を射て、銃口を振じ込み撃ちま

くる。慣れたものだ。

『うむ。 どうかして、あの鬱陶しい天使を信用させたい』

『どうしてだ？ アイツらが相手にしてる内は放置で良いだろ？』

『いや、アイツ……ヴェルダとやらが、我が父である”星王竜”ヴェルダナーヴァだと抜かしたのだ。』

身の程を知らぬ戯け者に、少しお仕置きしてやりたくてな』

『なるほど。 確かにこの場にいる連中や、ルシアを仮に倒せてもヴェルダを倒せなければ敗北するようなものだよな。』

だが危険だぞ。 相手の強さは未知数だ』

軍事部装備ガチ勢が到着した。

外の片付けが済んだ事で、増援がどんどん雪崩れ込む。 もう祭り会場だ。

ルシアとかいう銀髪荒らしに殺到、取り囲み、ボコスカと斬ったり射ったり撃ったりする光景が広がりを見せる。

外では塹壕、地下野戦仮拠点が瞬時に掘られ、戦車隊がミリム城を取り囲み、空には帝国戦で鹵獲した飛空船を浮かべている始末。

荒らし処刑祭りのソレだ。 郷愁にも似たものを感じる。 数の暴力での正義執行、気持ち良過ぎ。 良すぎない？

『ルシア、アイツらに薄い本みたいな事されてるけど、一向に倒せてないな』

『リムルさん。 記憶領域から、それが何なのか知ってる者にしたら……無垢な子の前で、その危険発言は』

『……忘れてくれ』

『ん？ とにかく案ずるな！ スパイというヤツなのだ！』

群がっていたクラフターは吹き飛ばされた。

駄目だ。 まるで効いていない。

カリユブデイス戦を思い出す。 IRPにレールガンを発砲して

貰わねばならないか？

『よし。じゃあ先ずどうしようか。アイツらの攻撃を散々受けるのに、本人が無事な辺り、キャッスルガードを破るのは無理っぽいけど』

座標伝達。 I R P 及び周辺同志座標取得。

デットアイモード再起動。

レールガン長距離狙撃準備開始。

その間、戦車隊が援護砲撃。 弾種徹甲弾。

城の城壁を何枚も突き抜けて、城内の銀髪を容赦なく襲う。

『おいおい!? 俺たちも巻き込まれてるって!? てか、ここまでしてもルシア倒せないのね!? アイツらならワンチャンあるかもと思ったけど!』

『案内人がいなくなるのも問題だぞ!』

エンチャントをケチったか。

銀髪を倒せない。 それでも攻撃続行。

砂煙越しにでも狙撃出来るよう、各戦車内砲撃手は最大望遠で透視モードに切り替えた。

するとガンカメラの画面色が緑に変わり、白い人影が何人か映る。その動きの状況からして瞬時に荒らし銀髪を判断、再度砲撃開始。

『だから、やめろって!』

『馬鹿親共! 攻撃は無意味です! たぶん核も毒も意味ないで

す! 星を砕いても、宇宙空間に投げ出しても無駄かもです!』

相手の能力はそれくらいなんですよ!』

てか意味あってもやめて!』 ミリムちゃん達の作戦が駄目に

なっっちゃうから!』

無視して攻撃続行。

戦車隊の多くは見た目こそ旧式多数だが、改修を施し、このような装備はほぼ標準機能といって良い。

車両によっては砲安定装置や、対歩兵装備、対地空両用機関銃や小型誘導弾射出装置がポン付されている。弾も様々な種類が開発された。

少量生産された新型は、それらに加えてBBとの連携が取れるようにされていたり、走破性、速度、防御力、攻撃能力等の基本性能が大幅に底上げされている。

『ええい！　止めてくるのだ！』

『手伝う！』

マイクラ軍事部は少数でも戦争投入に間に合わせようとした為、同じ戦車でもバランスが均一化されていない（組織性が薄く個人差が強いクラフターなので、ある意味いつもの事だが）悪さがある。

とはいえ、そこはクラフター。　どうとでもする。　現地改修、修理、改造、御手の物。

「さつきから邪魔だぞ！　馬鹿共がああ!!」

おや。　リムルが来た。　ミリムも来た。

なにやら怒っている。

あれか。　巻き込んだからか。

このままでは戦車隊が殲滅されてしまう。　仕方ないので迎撃する事にした。　実験も兼ねる。

その程度で倒せはしないだろうが、日頃の恨みもある。　バチは当たらないだろう。

『いや既に当たってるというか。　もう良いです、いっぺん死んじやって下さい』

辛辣は相変わらずだ。

だがタダで死にはしない。砲塔、砲身を動かした。主砲、機関銃、誘導弾を撃ちまくる。

「そんな、へなちよこ弾に当たるか！」

「久し振りに遊んでやるのだ！」

銀髪は現地クラフターに任せて、戦車隊は青髪シズモドキと桃色荒らしに対処。

とはいえ、予想通り攻撃が当たらない。当たっても無傷に近い。主砲は避けられる。機関銃は弾かれる。誘導弾は回避のち破壊される。

次には戦車本体が破壊された。装甲は強者相手に意味を成してくれなかった。

剣で両断され、片手で投げ飛ばされ、様々な体術でボコボコにされ、色とりどりの魔法で吹き飛んだ。

あつという間に全滅である。捨てエンチャントを施した程度の低コスト量産型が大半だったとはいえ、やはり規格外だ、コイツらは。もつと強くならねば。

だが時間は稼げた。生き延びた乗員……クラフターは腰を振って飛び跳ねた。

『警告。 レールガン発射。 弾着に注意』

「えっ？ あつ、しまった!？」

刹那。轟音と共にミリム城の一角が吹き飛んだ。

銀髪荒らしのいた空間が中心だ。爆発の規模は驚くほどじゃないものの、あの魚災を即終わらせられるレールガンだ。

それに、あの日よりパワーアップしている。

これで倒せなかったら……どうしよう。クラフターは首を傾げ

た。

同志から連絡。　まだ生きてる戦車の透視機能で確認したところ、ターゲット健在との事。

うーんこの。　どうしようアレ。

フルエンチャントのネザライトの剣で何とかならないだろうか。
難しいか。

「大賢者！　もつと早く分からなかったの？」

『解。　砲撃演算、シーケンス等はBBの暗号化で進行。　結果、検知が出来ませんでした』

「そこまで……だがルシアは？」

『健在です』

「やれやれ」

『よし。　無事作戦を実行出来そうだな！　ルシアに信用してもら

い、奴らの元へ潜り込むのだ。　その為に、先ずリムルには消えて貰

おう！』

『ディアブロ。　それで良いか？』

『クフフフ！　分かりました、大混乱になるでしょうね！』

『隠れている不穏分子がいたら、炙り出せる機会になりそうです。

で、馬鹿共。　今度こそ邪魔しないで下さいよ』

やれやれ。　クラフターは首を振った。

とはいえ。　良い方法があるなら任せたい。

「では消えろ！　ドラゴ・ノヴァー！」

「ちよっ!!?　うおおおお!!?」

いつか見たような、デカイ極太ビーム攻撃みたいのがきた。

即座に黒曜石の防壁を展開してみたものの、刹那的に防いだのみでアツサリ破壊された。　そのまま巻き込まれて即死。　リスポーンする羽目になった。

大戦1日目にして大変な目に遭った。

なお、一部同志は刹那的に防いだ時間で効率強化ダイヤスコップで地下深くに逃げ込み、何とか事なきを得た模様。

なお、リムルもどきくさに紛れて共に退避しやがった。おのれりムル。覚えてろよ。

161. 各地と戦闘

「リムル様が消えた!？」

村人共が騒がしくて寝れない。

日没前に羽虫が引き上げたから、リスポーン地点を更新したいのに。 おちおち眠れない。

仕方なく迷宮都市地下に設置されている、本司令部とやらに向く事にした。

「魂の繋がりが途切れた……」

「いやまさか……我らの主だぞ!？」

「ディアブロや悪魔達はどうした!？」

「絡の1つもない!？」

現地にいたのだろう、何故連

娘と弟に訳を訊く。

リムルが死んだと狼狽しているらしい。

馬鹿馬鹿しい。 クラフターは鼻で笑う。

すると、赤鬼がハアンと叫んできた。

「お前ら、何故笑う!？」

「ベニマルさん、通訳します」

あの悪食スライムが簡単に死ぬか。死ぬものなら、今まで苦労していない。我々が何度殺害を試みたと思っっているのだ？

火にも負けず銃弾にも負けず。

シオンの汚料理でも死なぬ体を持ち、数多のモノを捕食する悪食である。

我々が何か創造した後に、”何故か”発生する山の様な苦情処理を
もしてくれる丈夫な体でもある。

そんな世にも珍妙な青色スライムなのだぞ。

「褒めてるのか貶してるのか。　だが確かに、リムル様が死ぬ筈がない。い。」

きつと我々は試されているのだろう」

「苦情が出ているのは自覚してたんですね」

仮に死んだとして、なんだ。　羽虫駆除を諦めるのか。　荒らし尽くされ無に返される様を見過ごすのか。　その程度の世界なのか。　我々はソレを望まない。　創造と快樂の無い世界にされては堪らない。

様々が無意味になるからだ。　貴様達はどうか。

「そんな事はない！　リムル様は種族を超え手を取り合う平和な世界を望んでいた！

奴ら天使共の様な、世界を滅ぼす事は望んじやない！　リムル様がいなくても天使共は倒す！」

「まあコイツらとは共存したくないでしょうが」

クラフターは頷く。

そうだ。　その通りだ。

確かに、この世界は面倒だし残酷を道理とする過酷な世界だ。

ちよつとクラフトすれば騒がれるし。

それを理由に殺そうとする奴もいるし。

理不尽である。　ある時は殺戮非道を止める癖に、部下の悪魔的行いは黙認している気がする。　おのれリムル。

「核や反物質爆弾を開発、起爆寸前まで持ち込んだ奴に言われたくないと思います」

「取り敢えず、無邪気に悪魔的所業をしているのは反省してくれ」

だが嘘じゃない。偽りなく生きてきた。
嫌なこともあったが良いこともあった。

それはマルチだったからこそ。

1人では、生きていけなかった。あいや生きていけた気がするが、誰かいた方が楽しい。

そう。それが君達村人と過ごして得た事。

マルチだからこそ色々出来た数々の思い出。

改築。 開拓。 悪戯。 実験。 盗難。 自爆。

「そういうのを止めろってんです!？」

「苦情の原因はそういうのだからな!？」

良い事も悪い事も含まれる事だ。

反省は少しだけしている。

「大いにして? 人魔によつては元の世界に帰って欲しい意見もありませんからね?」

そんな喜怒哀楽に触れてきた。

その喜びを失いたくはない。故にクラフターは全力を尽くす。

そして世界を、人生を楽しみ尽くす。

シズにも教えた。逆に教えられもした。

世界は楽しさで満ち溢れていると。

そんな世界を我々は守る。やりたいからやる。

単純に荒らし殲滅祭を楽しみたいのもある。

「それが本音だろうか!？」

それに村人も参加して欲しい。共に楽しもう。それが生きるという事なのだから。

クラフターはお辞儀をして見せ締めた。村人、暫し硬直。から

のハアン。

「願われずとも、そうする。お前達ほど意気が良い訳じゃないが、いっただってそうしてきたからな」

「そうですね。良くも悪くもです」

こうして村人とクラフターは気持ちを整理した。

各国でも同様の意見となり、人魔とクラフターは天使に団結して抗戦の構えを見せていくのだった。



2日目の昼前。

クラフターが寝て起きて、少しした時だ。

全世界に向けて、ヴェルダが再び姿を見せた。

『今の状況を教えてあげよ。』

ボクの愛する娘——魔王ミリムが、ボクに逆らう魔王の一角を滅ぼした。

そう、滅んだのは魔王リムル。

新参だが、君達人間に最も馴染みのある魔王だね。

魔王の2柱はボクの古き友であり、ボクに恭順の意を示してくれた。

最後まで諦めずに戦うのも良いけど、諦めるなら苦しませないで死を与えるよ。

絶望し苦しむくらいなら、さっさと死を選んだ方が良いんじゃないかな？

君達人間の住むそれぞれの国家の首都に対して、7日目に神の雷を落とす事にする。

「ただ、それまでは手出ししないと宣言しよう。理解出来るかな？」

「苦しまずに死にたい者は、逃げ隠れたりせずに首都に滞在すると良い。」

「ボクは慈悲深いからね、約束は必ず守られるだろう！」

初日と同様、天に巨大なビジョンが映し出されて告げたのだ。

一部クラフターは、天に唾を吐く。矢を真上に射て、落ちたモノを喰らい自らを射抜いたのだ。愚行であった。元の世界でもやっていたが。

「だがそれだけ天使……羽虫荒らしにはムカついている証左でもある。」

「1日目で飽き足らず、調子に乗り続けやがって。」

「荒らし許さん。慈悲はない。」

クラフターの怒りの火に油を注ぐだけで終了。

一方、各国の指導者達の間で議論が交わされた。

「其方は怒りではなく混乱である。」

「リムルが消え、一部魔王は敵に寝返った。」

「事実ならば、人類はあっさり殲滅されてしまう。」

「では黙って殺されるべきか？ 最善策は？」

「それらを話し合い、意見を求め合う。」

「世界有数の大都市を持つイングラシアの首都と、東の帝国の帝都は次の様に話が進む。」

「魔王リムルが？ 人類にとって畏怖的存在でもあり守護者の象徴でもあった、かの者が？」

「事実であれば、イングラシアのみならず、全ての西方諸国、加えて帝国……いや世界そのものが滅んでしまいますぞ」

「既に都市部で国民が混乱しています。我先に逃げる者、運命を受け入れ残る者」

「どちらにせよ天使は全てを殺戮する気だ。逃げるにしても、永劫

の逃亡生活など出来よう筈が無い。

「虱潰しに殺し回られるだけよ」

「ならば残りの魔王、そして何よりも」

「うむ。あの”創造主”達に賭けよう」

「普段は厄介者以外の何者でもないが、今や我らの味方。存分にやらかして貰おう」

「何より連中は諦めない。ならば、元より世界に住まう我々が諦める訳にはいきませまい」

「然り。その上で我々に出来る事をするのだ」

なんと、クラフターの存在は人類に勇気付けていた。迷惑な存在であるのは違いないものの、創造物を、建築物類を愛し、世界の危機に立ち向かう彼等の姿勢は本物だから。

その熱意は言葉が通じずとも多くの者には理解出来た。世界を越え、言葉を越え、人魔を越え、元の世界に帰れるにも関わらず世界の守護者となろうとしている。

だからこそ、そんな英雄達の為に、勇者達の為に。いや……それらを超越した伝説の為に動くのだ。

「国民には出来るだけ首都に留まる様に伝えます。魔王達や創造主に迷惑を掛けるくらいなら、自宅で祈っていた方が良いですから」

「一部の国軍部隊を動かし、治安維持に努めましょう」

「国軍が装備しているのは、あの者達の作った高品質の武器。低ランクの少数天使なら、何とか対処出来ます」

「出来る事をするだけだ。直ぐに実行せよ」

「直ちに！」

これは指導者達のみならず、国民の大半も同じ意見である。

かつてクラフターは街中に突如現れては、好き勝手に増築、改築、新築、その他改善、整備や修理をされてきた。

その様はありがた迷惑で、国民によっては恐怖の対象になる事も

あつた。

戦争で家族が彼等に殺された者もいる。一部から恨みもあつた。一方で警備の手が届かない様な村落にも現れ、無償で食糧や物資の提供、防衛設備工事をしてくれた。感謝する者も多い。

意見は分かれる。

だがそれでも。それでも今は。

皆、同じ意見であつた。

彼等に賭けよう、と。

そうして人類は纏まりを見せていく。

特にリムルとクラフターに関わりのある者達程、敗北を信じられなかつたのも理由のひとつであつた。

「何を馬鹿な。アイツが簡単に死ぬ訳がない。特にアイツらは死んでも諦めず愚直に立ち向かう連中よ。

そんな簡単に倒せるなら、私が既に滅ぼしていたでしょうよ」

とある委員会の初代委員長は、こう言った。

”ファルメナス”という新生王国の国王やその周囲の者達も、これで民を守るのが容易になつたと安堵する。

周囲に逃げた者や近隣の村人達をも首都にて受け入れる程の徹底振りを見せたとも言われる。

「旦那が死ぬ訳がねーよ。ヴェルダってヤツも大した事ねーな、騙されてやがる。

それにアイツらがいる。どうとでもしてくれる」

「そうね。彼等の存在を考慮してないわ。それとも甘く見てるのかしら」

若き国王と、王妃で、そのような会話があったと記録されている。こうした信頼傾向はジュラの大森林（クラフターによって、一部大植林場）周辺国家にて多く見られた。

そして他の国、テンペストと国交を結んでいたドワルゴン、ブルムンド、サリオンもそうした国家であった。

そうした国家の首脳達の反応は早かった。通信会議にて魔王・創造主達の勝利を信じると発言、各国首脳の心を傾けるのに成功する。こうして大半の国は、そうした者達の意に沿って、勝利を信じる道を選択したのだ。

ヴェルダが意図した程に、世界は絶望に包まれなかった。だが混乱が生じたのも事実である。

ただまあ……。クラフターを信じる村人には悪いが、他人の都合に関係なく好きな事をする彼等だ。

信頼があるうがなかりうが好きな事をする。

ジュラの大森林を”一部”植林場にしたり開拓で切り拓いたりしてきたし。

核や反物質爆弾を起爆しかけるし。

隙あらばルベリオスを滅ぼしそうだし。

色々駄目になったら、あっさり世界を見捨てて元の世界に帰りそうでもあるし。

今は世界を、創造物を守る為に動いてはいるものの、それだつて荒らし駆除祭りを楽しむのが主目的。

正義感で彼等は動かない。

快樂、愉悦、土地、創造。これだ。

が、理由はどうであれ。

世界に住まう人魔にとっては助かる話だし、利用出来る内は利用する。

それはお互い様だ。

そしてまた、ヴェルダにとっては改めて忌々しい別の創造主と認識され、本格的に敵認定される事になる。

創造主は1人で十分だと。

マルチクラフターからしたら、度し難い思考だと唾棄する話である。

そもそも、何が創造主だと云うだろう。

世界を無に返す奴をクラフターとは認めない。

そんな快楽や愉悦を求め生きる連中に、村人達が己の命運を賭けるのは皮肉である。

それでも願わずにはいられない。力あるものに継りたい気持ちは、否定出来ない。

例えそれが、クラフターであつてもだ。



場所は変わりルベリオス。

大陸西部に位置する宗教国家。

クラフターは、ここを欺瞞の国と罵り、裏の支配者であるルミナス達を嫌う。

表向きは結界だの聖騎士だので人間達が守られ幸福が約束された、魔物許さないマンナルミナス教が布教されている聖地である。

それだけならまだ良かったが、真の支配者は魔王ルミナスと、その種族……吸血鬼であり、人間の”幸福の血”を啜るべく人間達は管理されているのだ。

クラフターにはルミナスが人間を豚や牛同様に家畜扱いしている様に見える、実際に似たようなものだろう。

逆に管理される事で、争いが減るのは良い事だと捉える者もいるだろうが……。

いや、それもまだ良い。クラフターも元の世界で村人に縄を繋ぐ

し。

だが駄目な事がある。魔物許さないルミナス教の神ルミナスの正体は魔王ルミナスの事であり、彼女は吸血鬼だ。魔物なのである。

そんな魔物がルミナス教の神とやらで、魔物でありながら魔物を否定している矛盾。

人間を騙し管理しているから仕方ないのかも知れないが、破壊とは別に嘘偽りを嫌うクラフターとしては許せない部分があった。

故に核や反物質爆弾を撃ち込み、村人と吸血鬼を”霧”や”影”にでもして消し飛ばそうとしたり……それら爆弾の開発前から悪く思っている。

昔マツピングの為に、この辺に訪れたら、聖騎士達に攻撃された件を許した覚えはない。

だが、今は大分落ち着いた。

お互いに思うところが無い訳では無いが、ヒナタが連邦に襲撃した後からは大人しくなったかに思える。

良い事だ。出来れば、そのまま全て消えてくれても良かったが、

それは贅沢が過ぎた。

なんにせよ、今は今。

天使が襲撃するから、クラフターは嫌々ながら此処も防衛している。

考えは合わずとも、建造物は素晴らしいものがある。これを壊すなんて、勿体ない。

それにだ。

天使以外の敵も襲来すると我が子らから連絡が来た事で、いよいよクラフターは真面目にやらねばならなくなってしまった。

友軍であった筈の大陸西部の魔王、ダグリュールが裏切ったのだ。

ソイツら巨人は最寄りの国となる此処、ルベリオスを目指している。

この所為で、天使に加えソイツらとも戦う羽目になったクラフター。

流石にルミナス達と現地同志だけでは無理な襲撃イベント。天と地で挟まれては耐えられない。なので。

シオン率いる連邦軍とマイクラ軍事部含め増援がこの地にやって来る運びとなる。

「ええい！　リムルの配下は兎も角、忌々しい創造主共の手を借りねばならぬとはッ！」

郊外。　隣のルミナスが煩い。

おっと手が滑った。　卵がルミナスに飛んでいく。

「相変わらず野蛮な奴らじゃッ！」

手で払われた。

が、なんと卵は割れず。　振られた方向に進路を変えて、その先の木にぶつかった。

そして……ニワトリは生まれなかった。

何という技法だ。　卵を割らずして進路を曲げるとは。　また未知を見た。

相変わらず楽しい世界である。

「ニヤニヤしおって……貴様らが敵なら容赦しないものを！」

でも世界と国は規模が別だよね、と頷く。

欺瞞の国くらい放置で良くない？

世界は広く、この国で終わらない。

それでも貴重な土地と建物と群勢がいる。　守らず滅んだ後に来ては遅い。

辟易するクラフター。　こんな国と村人でも味方なのだ。

何故、こんなのが味方である必要があるのか。　逆に聞きたい。

あいや答えは出ていても。

「シオン達が増援として来ているし、アダルマンもいる。其方の統制は大丈夫であろう。」

都内は聖騎士、日光に耐えられる配下やヒナタもおる。

貴様達と比べたら信用出来る。逆にお前達は信用ならん。

分かるか？ いや分からずとも聞け。妾がいる理由は、貴様達

の監視も兼ね……何をしておるのじゃ!？」

クラフターは卵をぶつけ合っていた。

何とか軌道変更を試みているのだ。卵を投げられては、右腕を振るう。

駄目だ。割れるばかり。その内、小さなニワトリが周囲を埋める。畜生。

「馬鹿者共めが。リムルの苦勞が目に浮かぶようじゃ。」

あやつには、死んだフリなぞさつきと止めて、早く戻ってきて欲しいものよ。此奴らの後始末係は御免じゃ」

欺瞞の国の神（笑）がハアン。

勝手に呆れて、どうぞ。クラフターはしたい事をシていくのみである。

やがて、西方より軍勢が現れた。大中様々な巨人の群である。

連絡にあつた通り、敵はやって来たのだ。

「はあ……来たぞ。ヴェルダと繋がりがあつてか、裏切り者と化したダグリユールと配下達が」

ルミナスが腕を上げる。

その先には荒らし巨人の群。既に見た。

クラフターは卵の投擲を中止。装備を決戦仕様に切り替え、各々

行動開始。

的はデカイ。その上、強いらしい。

けれどクラフターは怯まない。失敗を恐れぬ猛者だ。海千山

千の創造主だ。

今更に怯え逃げ隠れしない。邁進あるのみ。

敵は怒れる大地。天からは破滅を呼ぶ天使共。

クラフターはやあやあと天地を駆けた。

「今世の創造主は、コレ位が丁度良いかの」

呐喊する者、しない者。

そのまた創造して見せる（魅せる）者。

天地に挟まれ四苦八苦？

いえいえ、天地に創造してきた者は云う。

連中の天下にいなければ良いのです。

この世界を創りし創造主……星王竜ヴェルダナーヴァがいたならば、どう制していたであろうか。

それとも、静観を決め込むか。

その上で神慮は何想ふ。

因みに今現在いる創造主、その内の一部クラフターは天使より天上、星の世界でナニかしていた。

クラフターがする事だ。クラフトに決まってる。

問題はソレがナニかという事。

空より高い星の世界。

宇宙。上も下も右も左もない、空気もないし他にも色々な闇の世界。

ジ・エンドに似て、けれど、それ以上に過酷で美しい”宝石”の世界。

美しくも過酷な環境から見下ろす”青き星”も、その宝石の一つ。

ダイヤモンドのようで、その中でも多くの輝きを放つ星。リムルや

シズ達が暮らす丸い星。

見方によってはリムルのスライム形態に見えるので、時々眉間に皺が寄るものの、それでも創造主が愛するものが多くある。

そんな光景を見られる、この宇宙で。

かつて同志が放逐されるように2度程打ち上げられて以降、内1人は憐れ漂うスペースデブリになっていたのだが……。

いつの間にか進展があつた様子。

そこで思う事は、荒らし死すべし慈悲は無い。

良くも悪くも、何処にいても、いつも通りなクラフターなのであつた。



最前線となる位置にシオンら親衛隊や、スケルトンのアダルマンの軍勢……ゾンビやスケルトンが位置していた。

先手必勝。突撃した時に、目の前のゾンビとスケルトンの何体かは倒した。反射的に。

「ちよーっとお待ち下さい!!? 確かにアンデッドですけど、味方ですからね!!?

聖都を守るアンデッドつてのに色々思うところはあるのかも知れませんが、私もかつて教会に裏切られた身ですから、私も思うところが無い訳ではありませんが!

それでも止めてー!!? 苦労して装備や軍勢を整えたんですよお
おお!!?

かつてのスケルトンがハアンと悲痛に叫ぶ。

アンデッド共は攻撃してこない。結構良い装備をしているから危険だと思つたが。

ふむ、と頷く。

どうやら友好的な奴らしい。

元の世界では敵でしかないから、紛らわしくて仕方ない。名札でも下げて欲しい。

特にガチ装備のアンデッドとか、見ていて落ち着かない。元の世界では、この手のモンスターに酷い目に遭ってきた。

取り敢えず倒してしまった者の装備は剥ぎ取る。

勿体ない。後で防具立てにでも飾ってしまおう。

「あああ……：：：～あー！」

「元気を出せ、アダルマン。巨人共もそれなりの装備を所持している。」

奪われたなら、奴らから奪えば良い！」

「装備を奪われては更に厳しいでしょう!? 数では此方が圧倒しますが、可愛いスケルトン達では太刀打ち出来ぬかと」

「戦う前から弱気でどうする！ 彼等を見ても、既に我々より前に出て戦い始めているぞ！」

「装備を着けずに戦うなら、返して欲しいんですけれどもね!」

ああ、場合によっては七曜の老人共より怨めしくなりそうです!」

「リムル様の部下になったなら、つべこべ言わず活躍して見せろ! 私には往くぞ！」

巨人共がTNTキャノンの射程圏内に入る。軍事部砲兵隊、攻撃

開始。砲撃である程度の人数を吹き飛ばしつつ、戦車隊が突撃。

主砲射程圏内に進軍すると同時、一斉射。巨人共を吹き飛ばしていく。

一撃で粉碎出来たものと、爆風や破片が喰らった程度の中途半端な者で分かれた。

此処で注目すべきは、後者は驚くべき再生速度で回復をした事だ。傷が塞がる。

元気に動く様に、クラフターは「ああ、こういうタイプね」と納得

して頷く。

「むう……奴等の回復速度といい、恐怖を感じず堂々進む姿。 奴等には恐怖がないのでしょうか」

「それは彼等とて同じ事。 怯まず進め！」

エンダードラゴンもクリスタルがある限り回復していた。 この世界での魔物の場合、クリスタルの類が無くても自然治癒力は高く感じる。 皆が皆ではないが、今更に驚きやしなかった。

なら一撃で粉碎すれば良い。 直撃を狙い、剣等の携行武器ならば攻撃力を最大にしたもので「やりすぎ」てしまえば再生出来ず倒せる。 特に「やりすぎ」の面ではアテがある。 座標伝達が済んだから、間も無く来るだろう。

IRPは忙しいので、別のモノだ。

きた。 空より光の柱が突如と聳え立つ。

「光線ッ!?!」「神聖魔法!?! いや違う!」

天に伸びる光の柱。

突然の事に驚くシオンとスケルトン。

その柱は移動し、地表の巨人共を蒸発させていく。 耐えられる者はおらず、次から次へと軍勢は光に包まれ影となり、消えて逝く。

「新手の魔法? いや、彼等の力ですね!」

「恐らくは」

明らかに巨人のみを攻撃している事から、天使からの攻撃ではない光線。

その正体は予想通り、クラフターの攻撃だ。

宇宙……軌道上に浮かぶマイクラ軍事衛星からのサテライトビームである。

空より高く、星と共に高速で動きつつ、地表までの遠距離攻撃を正確に行なっていた。

驚くべき技術力だ。この短期間でここまでの物を作り上げるとは。マインクラフター、恐るべし。

「凄いですな。次々と巨人が消えていく」

「我々も前に出よう！」

「巻き込まれそうなので様子見てからで」

「……それもそうか」

マイクラ軍事部は核や反物質爆弾の開発のみならず、宇宙空間の軍事利用にも着目。

地図で見るような俯瞰視点で世界を見る事が出来る宇宙。大陸全土、いや星全体を見る事が出来る此処から攻撃出来たなら……それはもう最強なんじゃね、と。

ただ地表とは異なり、様々な常識や経験が通用しない為に開発は難儀した。

だが何度も死んでは生きるを繰り返している宇宙同志と連絡を取り、データを収集。

過酷な環境下に対応出来る防具、宇宙服のプロトタイプデータをチエック。改良を施し、宇宙空間での作業可能な防具を開発。

次には速攻で個人用ロケットで軍事部同志を打ち上げ、先駆け宇宙同志と合流。

救助しつつ、そのまま軍事用人工衛星のクラフト開始。BBとも連携出来る様にしつつ、地表を宇宙から攻撃出来る絶対兵器を目指していき、開戦までには何とか実用化に漕ぎ着けた。

兵装はサテライトビーム以外にも、大気圏内外両用誘導弾、自衛用兼スペースデブリ除去装置の小規模ビーム砲等がある。

また、攻撃以外にも地表を監視する機能を持たせてある。元々の目的は此方のみだったが、クラフター的には色々試したかったのだ。結果、兵器そのものとも化した。

あと、宇宙にまで攻撃出来る手段を村人達が持っているとは思えなかったが、バケモノだらけの世界だ。なんなら同じマインクラフターが敵になれば難なく破壊出来るだろう。

その可能性を危惧した軍事部は、一応、IRPの外殻同様、衛星の外壁はエンチャント黒曜石で作る。

また今後、宇宙開発での拠点にも使える様に、内部にメンテナンスルームが設けられ、仮拠点としても機能する様にされた。

当初とは違う目的が合体していった結果、かなり大きな軍事衛星と化してしまったが、たぶん大丈夫だろう。

……なんかもうそれ、人工衛星じゃなく宇宙基地なんじゃね、という意見もありそうだが、今は置いておく。

後で知る事になる辛辣同志としては、色々複雑な思いを抱える事に。

が、平和利用の為だと何とか飲み込む事になる。

創造物とは、最終的には使い手次第なのだ。

クラフターはソレを知っている。一応。

「約10万いた筈ですが、既に半数は消滅しましたな」

「うむ。やはり彼等の力は凄いな」

戦況はクラフターが有利。

後方で控えるシオン達もそう思えた。

ところが、戦場は突如として変化を見せる事となる。

「むっ！　アレは？」

アダルマンが気づき、指差す方向を見た。

そこには身体中を鎖にて何重にも縛られた、痩せぎすの男。

身長2m半ばという、巨人と言うには小柄な部類に入る。

だが、鎖で封じられていて尚迸り出る苛烈なる気配は、他のどの巨人よりも目を引いた。

クラフターの本能が、その男の危険さを訴える。他とは明らかに違う。

その男、闘神とも、荒ぶる鬼神とも、恐れ称されたフェンという者。ダグリユールの弟であり、そのエネルギー量の予測値は兄を凌駕した。

それはなんと、竜種レベル。　　とんでもない化物がいたものだ。

あー……いや。　　クラフターは「またこのパターンか」と逆に冷静になった。

どこぞの神的な龍がいる世界も、次から次へと強い奴が現れる様に。

ただ、それが現実になると冗談じゃないどころではない。　　味方なら良いが敵なのだから。

その内、惑星ひとつやふたつ、破壊出来る奴が出てきそう。　　既にいるかも知れないが。

核とか反物質爆弾を作れる奴も含めて。

「とんでもない奴が出てきたな?!」

「はい。　　此方の損害は軽微とはいえ、このままでは一気に殲滅される恐れもあります。」

いくら彼等がいてくれるにしても……」

「魔王ルミナスも控えているとはいえ、流星に厳しい状況、という事か！」

衛星砲がボス級に放たれる。

耐えられた。　　光の柱の中、影が揺らぎ続けるばかり。　　消滅する気配がない。

突貫工事でクラフトしたビーム砲であったから、威力不足だったか。

おのれ。　　荒らしの癖に生意気だ。

クラフターは首を横に振る。　　楽はさせてくれないらしい。

「やはり厳しいか！」

「あの鎖、グレイプニールか!?　だとすれば危険ですぞ?」

一旦、後方に下がる。

シオンとスケルトンに加え、ガドラとかいう老人が鳴いていた。

荒らし殲滅に参加しなくても良い。邪魔じゃない所にいる分には。

「ガドラか。なんだ、それは」

「はい。古文書に記された言い伝えなのですが……神話の時代、悪神を竜帝が封じた、と言われておるのです。

三兄弟の2人は改心しましたが、一人は凶暴な性格のままであったが故に、神の鎖により封じた、と。

その神の鎖が、聖魔封じの鎖、グレイプニールと呼ばれているのですじゃ」

しかしどうするか。取巻きは軍事部が戦車砲やTNTキャノン

で倒し、残りはエンチャント弓矢や銃火器、ロケランで吹き飛ばせる。

それでも息がある奴はエンダーパールで接近、回復して動かれる前にダイヤ剣、ネザライトの剣でトドメを刺している。

だがアイツは駄目だ。衛星砲を照射され続けているのに、動きを鈍らせるのがやっとだ。

戦車砲やキャノン、ロケランやIRPの集中砲火も試すべきだが、現状の様子から無意味に終わりそうでならない。

「事実だと思うか?」

「恐らくは……ワシは、撤退も止む無し、と具申致します」

衛星砲の耐久値、ゼロ。砲身融解。

照射強制停止。現地宇宙同志が修理に入る。

宇宙服と宇宙空間での活動方法が改善された事で、作業を効率的

に、そして、ある程度安全に行える。

とはいえ。直ったところで倒せまい。

代わりに誘導弾を雨霰と地表に突き落とした。

大物は倒せずとも、取巻きは倒せようと。

蒼き星に放たれていく大量の誘導弾。

大気の摩擦熱というより——弾頭に受ける空気が余りの速さで逃げられず、圧縮されて熱を上げていくというべきか——の所為で火の玉となったものが高速で地上に堕ちてくる。

その様は流星群。それは途中で燃え尽きる事なく次々と地表の巨人に降り注ぐ。

爆散していく巨人達。 扶れる大地。

それでも強者はくたばらない。 厄介極める。 結局、剣と弓矢と

銃火器は必要だ。 戦闘続行。

「撤退はしない。 我らは、この地の防衛をリムル様より命じられている。」

撤退は、リムル様の意に反する行為だ。

現状、リムル様が姿をお隠しになった以上、我らは自己判断によりこの大戦を終息させる事を許されているのだろう。

だが！ それは、この地を安定させた後の話だ。

命令は、遂行せねばならない。

それがリムル様への忠誠の証であり、今戦い続けている彼等の行為と、リムル様の作戦立案の正しさを証明する事であるからだ。 異論はあるか？」

「——御座いません」

「良し」

刹那、フェンが動いた。

戦場を風の様に駆け抜けて、凄まじい速度で此方にやって来る。

突然の事に軍事部は対応出来ない！

戦車の砲塔が間に合わず、そのまま戦車が次々と殴られた。 エン

チャント装甲にも関わらず、かなりの耐久値が削られる。

そのままノックバックで吹き飛び、地面を転がる。そのまま後続のアンデッドを巻き込んだ。次いでにアダルマンも巻き込みそうになる。

「な、なんとという速度、いや力だ!？」

シオンが叫ぶが、気にしてられない。

今直ぐ動けるのは、随伴歩兵のクラフター。

俊足のポーションを飲み干して、一気に間合いを詰める。 囲い込むと飛翔斬。

エンチャントされたネザライトの剣だ。 効果は期待出来る。

ところが、奴は巨体に似合わず素早く腕を振るう。 纏めて殴られた。 凄いダメージ量とノックバック発生。

周囲のクラフターはアツサリ吹き飛ばされる。

アイアンゴーレムにさせるより痛い。

だがタダではやられない。

ベテラン勢は、左手で盾を構えてダメージに備えつつ、右手のスロットを変更、剣から弱体化スプラッシュポジションへ。

殴られる直前、奴の足下へ投擲。

吹き飛ばされた後に割れたソレは、確実に奴を効果範囲に巻き込んだ。

状態異常を与え、そうすれば或いは。

が、新兵器衛星砲で何ともならなかったのだ。 そんなので何とかなるか分からない。 今は無傷の巨人が聳え立つのみである。

だがクラフター。 やれる事をやっていく。

「彼等を助けないと……」

「ふむ。 ワシを前に、高見の見学とは……随分、余裕だのう?」

「ッ! ダグリユール、いつの間!?」

背後で新たなハアン。
またか。 また新手か。

シオンの背後を嫌々見やる。 裏切りの魔王ダグリユールがいた。
相変わらずデカイ。 ゴレムよりデカいかも。

見るのは久し振り。 ワルプルギス以来か。
今は敵らしいから、倒さねばならないが。

しかし、いつの間になっていたのだろう。 エンダーマンみたいにワープ
でもしたか。

何をされようが何でも出来そうな奴がいる世界だ。 リムルにし
る誰にしろ。 驚くのも疲れる。 気にする暇もない。

黙って抜剣。

ポーシヨンと金林檎で出来る限り強化すると、エンダーパールで一
気に決めに往く。

「甘いわ!!」

ハアンと叫ばれた。

大気を震わせる程の気合が放たれ、その圧力により剣が止められ
た。

余りにも超高密度の闘気により、斬撃はダグリユールの肉体に達す
る事が出来なかった。

正しく、化物。

軍事部クラフター、咄嗟に防御行動。

剣ガード。 或いは盾。

ほぼ本能からくる行為だった。

相手は規格外。 下手するとウイザー級以上。

別同志は剣から咄嗟に黒曜石に持ち替え。 防壁展開。 相手の
視界から消える。

「悪足掻きだ!」

黒曜石の防壁は呆気なく殴り壊された。
まるで砂利や土の如し。　なんという力。
だが既に防壁裏にクラフターはいない。
効率強化ダイヤスコップで地面に潜って退避済み。　良くも悪くもいつも通りに。

「大地の下に潜ったか！　　愚かな！」

今度は地面を思い切り叩くダグリユール。
大きく大地が揺れ、さも地震。
同時に地面がドゴンと陥没。　まだ浅い層にいたクラフターが飛び出してしまふ。

「どこまでも甘かったな！」

空中に浮かぶクラフター。
足をジタバタさせつつ、死を悟る。
エンダーパールは間に合わない。　不死のトータムも所持していない。　空中なのでブロックも設置出来ない。
情けなく盾を構えるのが精一杯。
リスポーン覚悟。　刹那。

「甘いのは貴様じゃ！」

薔薇のような甘い香りとともに、一筋の紅の閃光がダグリユールの脳天に落ちた。

そして、フワリと舞い降りる銀髪の少女。
漆黒のドレスに身を包み、輝く意思を知ら示す金銀妖瞳（ヘテロクロミア）が美しい。

魔王ルミナス。

この地の支配者が参戦した瞬間であった。

同時に命拾いしたクラフター。

「ふん。 貴様の様なヤツは、勝ち誇る瞬間に隙が出来る。

妾とて、貴様の防御を突き崩すのは困難故、意に沿わなかったが創造主共々様子を伺っておったのだ。

油断したな、ダグリユール。

悪く思わないよ。　そこで暫し寝ておるが良い」

落下ダメージを回復ポーションとベイクドポテトで回復させつつ、周囲を確認。

いつの間にかルミナスが戦場にいる。　まあ手伝ってくれるなら、それで良い。

どうやら我々を囷にして、ダグリユールを屠った様であるが……それで荒らしを倒せたなら、まだ良い。

だが見る。　生きている。　平然としている。

「ふむ。　ルミナス、か。　そして貴様達の認める創造主、か……確かに、油断した。

だが、果たして問題があると言えるのか？

ワシにダメージは無いぞ？」

ルミナス達、村人の表情を凍らせた。

シズの説教前後の笑顔を見た我々に似る。

「今ので終わりか？　では、次はワシの番だな。

心せよ！　気を抜くと、即死だぞ!!」

絶対的な暴威が戦場を支配する。

随分と凄い荒らしに出会ったものだ。

シズの気迫を物理にしたら、勝るとも劣らない感じかも知れないな。

今度こそ死ぬかも知れない。
だから……それが何だというのだ？
相手が気に入らないモノなのだから、倒すまでアレコレ試す。
いつもの事だ。　また続けるだけだ。



もう1人の弟、グラソードは剣士である。
同じ戦場の別の場所にて、クラフターと対峙し剣を交えていた。
だが剣のみではクラフターに勝目はない。　剣圧は凄まじく、エン
チャント剣と防具でも厳しいものがある。
改めて恐ろしい敵ばかりだ、この世界は。
クラフターは辟易しつつも……笑った。
理不尽な暴威に抗ってこそ、そこに価値が生まれていく。　この感
覚は好きだ。

「くかかかかか！　噂通り妙な人間共よ！
通常であれば鎧袖一触であろう存在に見せかけておき、この粘り強
さ！

かような戦士と相見えた事、武人としての誉れよ！」

剣のみでは厳しい。
ハクロウもそうだったが、相手の得意分野に合わせる必要はない。
試合でもなしに。
そんな礼儀、荒らしには特に必要はない。
剣には剣を、弟には弟をなんてしていたら、とつくに死んでいる。
弟……息子もそうだ。　短期間だけだったとはいえ、帝国領にいた
時、正々堂々なんて事をしていたら終わっていた。　色々試し、駄目
なら逃げてても良い。　道は一つじゃない。

さても今は色々試す時。

ノックバツクで相手を吹き飛ばし距離を稼ぐ。

弓矢を絞って見せる。

「ぬっ！　この程度で時間を稼いだつもりか！」

来た。蹴られた地面が大きな砂埃を立てた。

だが、それがクラフターの狙いだ。

弓矢を絞って見せていた手が、次にはエンダーパールを持つ手に変わる。

砂埃に投擲。ワープ。すると、どうだ。奴の背後に自然と回

り込む形になる。

それも視界に映らぬ砂埃の中。相手をワープに続き惑わした中、そのまま弓矢を持ち直し、ガラ空きの背中を射抜く。

「やりおる！　だがその程度！」

素早い振り返り、剣ガードで弾かれた。

想定内の範囲だ。はい次。連撃の手を止めない。反撃を許

さない。やるからには本気だ。その方が楽しい。

「地面に潜ったか！　いや空と二手に分かれての挟み討ちと見る！」

例によって効率強化ダイヤスコップとツルハシをそれぞれの手に持ち、地面を潜る。

一方でエリトラとロケット花火で空に上がる同志。また一方ではそのまま地表で戦闘を継続。

それぞれのタイミングを見て、それぞれの方向から攻め入る。同志の隙は他が埋め、敵の隙は都合の良い同志が攻める。

空から弓矢やスプラッシュ。避けられたら、その隙を地表同志が

弓矢や劍撃。

ガードか回避された先、敵の足下からは潜っていた同志が斬り上げる。

自然と連帯が取れていた。打ち合わせもなしに。マルチとはいえ、ここまで出来ると快感に襲われる。気持ちが良い。

「やはり知恵なき獣でもなければ、戦に不慣れな素人でもない。かといえ玄人かと思えば既存に囚われぬ戦法！」

誠、面白い戦士に出会え、打ち合えたものよ！」

周囲を気にせず、続く戦闘。

剣のみ同士ではなかったが、互いに興奮を抑えられない。戦争ではある。殺し合いである。

されども、この死合は……。

「兄よ、某は死に場所を見つけたぞ！」

敵ではなく、同志として出会えたならば。

だが最早。ならば今を最高の瞬間にしていこう。

クラフターは戦い続ける。

戦場の1コマに過ぎぬ戦闘も、いずれ終わる。

その間にも時間は流れ、別の場所でも戦争は続いていくのだった。



戦争はクラフターにとって祭りである。

ワイワイ騒ぎ、暴力と創造力を遺憾なく振るう事が許された無礼講（一部創造物の使用は禁じられているが）。

剣で肉裂き、矢が射抜き、血潮が噴き上がる。

東で西で。荒らしと戦士が散って逝く。

が、全員が直接戦闘をしている訳ではない。兵站組といった後方支援班がいる。

戦時であろうと兵器や食べ物物の生産は続けねばならない。研究も続けられる。諜報員や指揮官も重要な存在だ。

それらを受け持つ地味なクラフトは確かに存在し、必要とされた。戦闘員の為だけでなく、民が飢えぬ為にも、村人も大変良く奮闘していた。

「物資の備蓄には常に気を配って！」

「必要な国、地域のシエルターに配送を！」

「地下鉄が無事な内に！」

「使えるものは何でも使う気で！」

「あ、でも核爆発や対消滅はやメテ」

そう。表舞台上に上がらぬクラフターや村人もまた、ある種の戦場で戦っているのだ。

弟君や姉の辛辣同志が、その例だろう。

剣や弓矢を振り回すだけが戦争ではない。

特に弟君は物資面にも気を配り、慣れぬ指示をしつつも頑張っている。縁の下の力持ち、という奴だろう。

その為、先輩クラフターから2つ名を貰った。

その名も「お荷物」だ。

他意はない筈……たぶん。

さても東西南北。

大陸のみならず、世界を越えて祭りは続く。

その一部地域でしかない、北の地。

武装国家より北。帝国との戦争時、竜種が暴れて荒れ狂った海と氷土も祭り会場。

天使はいないが、魔獣が空と海で吼え、氷土に住まうギイの配下の悪魔達もまた鳴いた。

「ですから、お引き取り下さい、諦めて下さい、いや本当お願いします」

原初の青、レイン（ヒラリー）は願う。

帝国との戦前から、というか下手するとマツピング時代から、ギイの領地の氷土に向けて立派な橋を掛けようとするクラフターに鳴く。

「よく飽きず続けられますね……」

疲れこそ見せないが、呆れ顔が出てしまっており、メイド服が台無しに。

そんな姿も気にもせず、クラフターは戦い続ける。なにと問われたなら橋と。自分と。あと悪魔とか海獣とか偶に襲撃してくるドラゴンとか。

「今は勇者クロエとの大事な時だというのに……」

空中からゴミを投げ棄てる様に、魔法弾を力なく放つ青色。架橋
工事に夢中のクラフターは気付く事なく直撃を喰らう。

即死こそしなかったものの、ノックバック発生。足をジタバタさせつつ海に落下。

極寒の海に落下したところで、クラフターは死なないが、息をしな
ければ溺死してしまう。真っ直ぐ、足を動かさず海面に浮上。

刹那、デカイ海獣にパクられた。
が、噛まれなかったのでノーダメ。丸呑みされた。即消化され
るとか、なんらかの状態異常で即死しなければ、何とか。

エンチャントされたネザライトの剣を振るい、腹を切り裂き、脱出。
海面で溶岩バケツをぶち撒け、黒曜石の人工大地を作ると、そこを
基点に土を積み上げ未完の橋に舞い戻る。エリトラの時もある。

「はあ……最初こそ橋は簡単に壊れましたが、今は中々壊れ難くて困

りますね。

あの黒紫の石なんて、中途半端な攻撃や核撃では壊れてくれませんし」

何度目か分からぬ溜息。

流石に主の前で、この様な真似はしないだろうが、その気持ちは皆も思うものだった。

最初こそレインが出るまでもなく、もつと格下の悪魔達が相手にしていたのだ。

ところが、いくら橋を破壊しても核撃しようとも、クラフターを吹き飛ばそうとも何度でも蘇るさ、とツルハシとスコップを振り回すのだから困り果てた。

主のギイは面白がっているものの、配下としてはホイホイ侵入者を許す訳にはいかないのだ。

排除・破壊命令が下された訳でも無いが。

だが今は、今はマジ止めて欲しかった。

勇者クロエが呪いの最後の命令を遂行し、3日以上ギイとドンパチ戦闘中なのだから。

そこに混ぜるな危険な奴等を混ぜたら、とんでもなく危険に決まってる。悪魔達は知っているんだ。

「天使がいる場所に行つて、遊んでいれば良いものを……ツ!？」

青色が何かに気付く。

視線を追うと空に飛翔体。

あのドラゴンだ。ギイの配偶者なのか知らぬ白い奴だ。人型になると白く綺麗な村人に変身する奴だ。

時々此処にやってきては、ブレスで氷漬けにしてくる邪魔者でもある。

クラフターはやれやれ、と弓矢を構え……様子がナニか違うのに気付いた。

ソイツは此処を素通り、橋の向こうへ行こうとしていた。

「白氷竜、ヴェルザード様!」

今は駄目です! 行つてはなりません!」

青色が止めに入ろうとして、次には轢かれた。

真つ二つだ。青色が。空中衝突事故発生。

ドラゴンは気にするでもなく、そのまま氷土へ。轢き逃げだ。

だがクラフターは驚かない。今更なんだ。この世界のドラゴンなら移動しているだけでも危険な存在だ。

接近戦を仕掛けるか弓矢で遠距離戦を挑むか問われるなら、後者を選ぶ。

接近戦は体表面に取り付く余裕がある時。そうでなければ、正面に棒立ちには自殺行為である。

青色は愚かにも、そうしてしまった。近付いた方も悪いね、と頷く。

だが仕方なかったのかも、とクラフター。

ギイの配下だし、相手はギイの大切なドラゴン。傷付けるのは極力避けたかったのかも知れない。

さても此方はクラフト再開。

今の内に架橋工事を進めよう。と、思っていたが。

氷土がドカンドカンと騒がしくなった事で手が止まった。

気になって仕方ない。次から次へと壁が立っていく。そんな苦難を与える世界を愛しているが。

ツルハシとスコップの手を剣や弓矢に変え、ボートで海の先を往く。

海獣に襲われ、半数以上の同志はリスポーンしてしまったが、それでも何とか氷に上陸。

クラフターは音の鳴る方へ駆け出したのだった。



北の地にて。 ギイと勇者クロエ、そんな2人の戦いを眺めていた
” 白水竜” ヴェルザード。

その場にクラフターは” まだ” いなかったが、それでも楽しそうな
ギイを見て、唇を噛み締める。

その内心に渦巻くのは、激しい炎。

怒り。 いや、嫉妬であった。

兄である” 星王竜” ヴェルダナーヴアがギイを認めて以降、ずっと
ヴェルザードは嫉妬していたのだ。

冗談めかし、ギイに本心を悟られる事の無いように。

最近兄とは違う気色の” 創造主” が現れて、それはそれで余計に
心を乱れさせるものであったが……。

ともかく、その心に去来するのは、先日受けたメッセージの内容。
マインクラフター同士の念話がある様に、竜種同士の特殊な以心伝
達念話がある。

その念話を受けた。 それは滅んだ筈の兄であるヴェルダナー
ヴアからの念話であり、彼女を驚愕させるに十分であった。

——ボクの為に、ギイと忌まわしき創造主共を滅ぼしてくれ。

内容を思い、溜息を一つ。

ユウキとの諍いや、魔王リムルがギイに依頼した内容は知ってい
る。

クラフターは知ろうと知らなかりと知っちゃこつちやない内容
だが。

なので、悪意なく邪魔してきそうな架橋工事中の混ぜるな危険連中
に、時々嫌がらせをしてはいた。

ギイが彼等の愚行に笑顔を向けるのも気に入らなかったのもある。

しかし……。

ユウキに宿る悪徳の意志、アンラ・マンユの正体が、ヴェルダナーヴァであったとは……。

ヴェルザードは悩んでいた。

いや、本当は悩む必要など無いのだ。

彼女は元々、ギイを監視する目的で近づいたのだから。

ただ――。

そう、ただほんの少しだけ、ギイと過ごした時間が楽し過ぎただけなのだ。

傲慢なギイ。

馬鹿なギイ。

優しいギイ。

冷酷なギイ。

恐ろしい、ギイ。

そして、兄が認めた友としての、ギイ。

色々な顔を持つ彼と過ごすのが、好きだった。

だけど、兄がギイを殺せと言うのなら、自分は……。

それに、ギイは決して、自分にあのような顔を見せない。

あんなに楽しそうに戦うなんて。

なんなら、兄の足下にも及ばぬ”創造主”に対しても。

かつてのギイの親友、ルドラとも非なる行動なのに。

ギイは大人が子供を相手にするように、”私”を傷つけないように

配慮していたというのに。

その時だろうか。

彼女が、自分の心に芽生えた嫉妬を思い出したのは。

あの兄が認めた、ギイ・クリムゾンという魔王に。

そして――。

(ギイは、私には優しいの。でも、横に並ぶのを許してくれない)

――それは、お前が弱いからだ。

(私は強い。私は、最強たる竜種なのよ！)

――いや、お前は弱いよ。現に、ギイの横に立つ資格は無いの

だろう？

一方で創造主はどうだ。最強たる竜種のひとり、ヴェルグリンドを倒している。命までは獲らなかつたけど、その力があるから、ギイは彼等にも笑顔を向けるんじゃないかな？

(それは――)

――力が欲しいか？　力さえあれば、ギイの横に立つ事が出来るぞ。

(でも、それは私の願いではない……)

――果たしてそうかな？　力が無いから、ギイはお前を見ないのだ。

(力があれば、もっと強ければ、ギイは私を見てくれるの?)

――当然だとも。それどころか、お前の望みを叶えてくれるだろう。

(ああ……力が、力が欲しいわ)

その言葉を聞き、どこかで邪悪な意思が嗤った。

――さあ、その嫉妬を解き放つといい。

あの言葉、キーワードが脳裏に響く。

そう、ヴェルザードの心に刻まれていた能力を解き放つ、そのキーワード。

そして、”星王竜”ヴェルダナーヴァにより封じられていた嫉妬の封印が解かれる。

――ギイを創造主共々殺して、お前の好きにすると良い。

兄の許しは下りた。

決まれば即行動。

ギイの元へ飛翔する。邪魔するレインを両断し、架橋工事に興じるクラフターを取り敢えず無視し、先ずは好きなギイの元へ。

「ギイ、私ね——ずっと貴方を——」

彼女は目覚めた。

自分の欲望に忠実な、嫉妬の女神。

その欲望のままにギイとマインクラフターを殺し、自分のものとする為に。

自分の欲望に忠実に、盲目的に一つの意思に従って。

皮肉にも、それはマインクラフターにも通じるものである。

そして、その上で創造か破壊かで分岐する。

残念ながら、彼女は破壊側だった。

つまり、荒らし。

マインクラフターは嫉妬の女神と対峙する。

荒らし許さん慈悲は無い。

ところで、この荒らしは分からない事がある。

どんなに強かろうと荒らしなら、殺す対象なら殺さねばならない。

だが慌て即座に行動する事が、最善策とは限らない。時に情報は

戦を制す。

此処には強い奴しかいない。

対してクラフター、軍事部の様な装備は現状ない。天使戦に出

払っている。なので、今あるのは、あくまで護身程度の装備。

だからBBに念写を送信、救援を期待。

敗北するにも何か得ようとしたのだが……出てきたワードに首を傾げた。

修羅場。ヤンデレ。

えっ。なにそれは（困惑）。

BBの分析から出て来るワードはリムルの元の世界の情報も混ざる故、分からない時がある。

説明を求めれば、かような惨状を表す際のタグ的なものらしい。

結局分からないから、クラフターは首を傾げ続けるしか無い。

取り敢えず、現地にいたギイとクロエにお辞儀しておく。挨拶は

大切。

だが荒らしドラゴン、手前は駄目だ。

「よお。流石に面白い状況じゃねーが、手伝ってくれるなら歓迎するぜ?」

「ゲホツ……副担任さん……?」

クロエが目や耳や鼻や口から赤液をドロドロ出している。ウィルス系の話もクラフターには分からない（少なくとも、この場の者）が、状態異常なのは分かる。猛毒に似た症状だ。

即座に牛乳バケツの端を口に押し込み、口内に白液を撒いた。飲め。こういう時は悩んでいる場合ではない。

「んんツ!? んんんツ!」

「相変わらず容赦ねえのな。だがこれで、呪いは消えたか。

俺の苦勞は少し、いや、かなり減ったな」

念写、念話で情報共有しつつ状況確認のち、戦闘体制に移行する。ギイは中立だとしても、ドラゴンは敵対している。もう目線が駄目だ。エンダーマンだったら次にはワープしている。

「貴方達も来たの? 良いわ。纏めて氷漬けにしてあげる」

とにかく倒さねば、とクラフター。

クロエ、それまで持ち堪えて見せろ。

頭をひと撫で。勇気付けると、各々は構えた。

「先生……」

黒曜石の防壁でクロエを隠蔽。

刹那、左右に剣持ちが分かれ出て、牽制の雪玉攻撃開始。

片方が囮になる間、もう片翼の同志が天井にエンダーパール投擲。ドラゴンの背中の上にワープすると、落下ダメージも気にせず飛翔斬の姿勢。

「無駄よ」

ドラゴンは両者を苛立ち気に睨みつけると、次にはブレス。受けた同志は鈍足異常を食らう。攻撃はノックバックで失敗してしまう。

「凍らない体質なの？　でも随分痛そうにして。　なら、そうね。

もつと痛がつて？

そしてもつと苦しんで？　その様を私に見せて？」

牛乳ガブ飲み。　状態解除。

あの範囲攻撃は厄介だ。　盾や防壁で防げなくはないが、ノーダメは難しい。

強化ポーションを飲んでも、これでは牛乳で良性効果も中和されてしまう。

だが何とかする。　何とでもなる。

クラフターはいつでも、そうしてきた。

「貴方を殺して、ギイを殺して……！　そして、私を見て貰う！

貴方でもない、他でも無い、紛れもない私だけを!!」

猛攻に耐えながら、感情の波を受けながら、クラフターは氷の様に冷めた顔で、つらつら思う。

クラフターはクラフターであると。

あくまで物作りのエキスパートだ。　それは決して他人様の作品や感情を完璧に理解出来る能力ではない。

物を主に視覚情報として受けるだけだ。　後は人それぞれの感情

ないと思えば……やっぱり現れるか」

「……外の者は……そうか。お前達を、敢えて入れたのか」

倒れているレオンに回復ポーションを投げつける。　コレは助けないと死にそうだ。

よしよし。　良いぞ。　ムクリと立ち上がった。

味方は多い方が良いと頷く。

「あらあら。　救世主にでもなったおつもりで？　でも残念。　今のワタクシは昔よりずっと、強くなって戻ってきた。　そこにいるレオンに復讐する為にな！」

取り敢えず目の前の徒党は荒らしだ。　親玉的な奴は見覚えがあるからだ。

ユウキの側にいた、耳長で胸が豊満な村人。

怒りを醸し出している。　レオンに向けられる視線の方が強く感じるが、我々にも少なくない怒りが向けられていた。

「それに、貴方にも少なくない怒りはありましたよ？　ゲルミュツドはともかく、中庸道化連の仲間、クレイマンを殺したのですから」
「……お互いに、ままならんな。　お前をここまで歪めさせてしまったのは、俺が原因だとしても……」

「そうね。　這いつくばって靴を舐めるなら、命ばかりは助けてあげても良くてよ？」

剣、弓矢を持ちつつ周囲を確認。

レオンの部下らしき剣士が取り巻きと戦っている。　が、押されている。

レオンに至っては、先程まで倒れていた事から、まあ……戦局は良くないと云えた。

なににせよ、構える。

レオンは何でも、教子クロエの幼馴染だ。

ここで死なれては、あの子が悲しむ。

シズとも浅からぬ関係がある様だし。

それに何よりも。

荒らし許さん慈悲は無い。

やはり、コレに尽きた。

相手の怒りの要因が何であれ、コイツらが荒らしである事に違い無い。ならば倒すのみ。

座標も伝達した。

軍事部か、誰かしら救援も来る。

それまでは生き延びたいところ。

「まあ良いでしょう。レオンを先に殺したかったですけど……纏めて葬ってくれ！」

怒りに任せた荒らしが来る。

我々も、お前には怒らねばならない。

荒らし良くない。絶対、と。

そうきてクラフターは剣を振るった。

ぶつかる想い。互いに引けない。

「死ぬー！ マインクラフター!!」

創造もしない。夢も見ない。

かつて、彼女が美味しそうに食べていたシュークリームの味も忘れてしまったか。

それを作ろうと邁進しないのか。

それ程までに、過去を掘り返すか。

今生きる理由を歪ませてしまうか。

世界に溢れる希望をも思い出せないか。

楽しい思い出は彼女にもあつた筈だ。

お前も我々と同じマルチだった筈なのだ。

周囲の存在が、それを匂わせる。

凋落したからなんだ。やり直せた。

未来に進めた。絶望に捕まらなかった。

それなのに。

刮目せよ。天下創造の頂を。

—— 1度や2度の失敗に囚われ続ける奴に、世界を相手取り、圧倒的な理不尽に捻じ伏せられても、何度でも立ち上がってきたマインクラフターが、お前に負ける筈がない！

「遊びは終わりよー！」

防壁展開。 何らかの魔法弾を防ぐ。

注意を此方に向けさせてる間に、エンダーパールで別の肥満体質な荒らしに接近。

その荒らしは、騎士に集中していたが、容赦無く横腹に一閃。 荒らしに正々堂々1対1で殺し合う義理は無い。

「ぶふおうツ!!」

ソイツはエンチャント効果で燃えつつ、大きく壁に吹き飛んだ。

そのまま燃え尽きれば、焼肉が出来そうだ。 食いたくないけど。

リムルの真似はしない。 豚や牛、鶏の焼肉なら食すが。

よし。 次の獲物は何奴だ？

「フットマンー！」

「ティア、あかんわ。 下がるとき。 この兄さんら、洒落が通じんわ」

不意打ちで1体は吹き飛ばせた。

殺せはしなかっただろうが、時間は稼げる。

他は難しい。既に此方を取り囲む様に警戒を始めている。

小柄な涙目の仮面を被る村人に、道化とやらの格好をした奴だ。

後者は特に強そう。小細工は効果が薄そうだ。

「アツシの見立てでは、君では話んならん。会長とアツシ、2人でどうにかつちゆうとこやけど……」

魔王レオンに別嬪な悪魔の嬢ちゃんが居るし、コイツらに限っては何度でも復活して戻って来る習性があるやろな。

分が悪いのは認めましょ。その上で、どないします、姐さん？」

ハアンハアンと鳴く荒らし。

状況を把握している仕草に感じる。脳筋ではない、とクラフターは評価した。

この手の荒らしは厄介だ。戦闘の手法もだし、引際も知っている。もし逃げてしまえば、また何処かでやらかす。

出来るなら、全員この場で処刑したい。

「ラプラス、臆する事ないわ。

レオンは既にボロボロ。ギイの腰巾着もティアに劣るわ」

「確かにアツシ等はまだ、本気を出してはいませんが、ね……」

鳴いてる間にも、悪魔ミザリーが立ち上がった。

よし。良いぞ。自然治癒能力も高いらしく、体力は十分そう
だ。

ポーションを無駄にせず済んで良かった。次は渡すにしても、ベイクドポテトにしておこう。

腹が空いては戦は出来ぬのだ。コイツが回復と同時に腹を空かせたかは知らないが。

「姐さん、その嬢ちゃんの存在値が跳ね上がりましたで。

覚醒魔王級ってヤツでっしやるか？　姐さんよりは劣るものの、ティアでは話になりませんわ……」

「——抑えていた力を解放させて貰いました。役者に不満しかありませんが、いつまでも遊んでる訳にもいきませんので。」

「ここいらでカザリーム様方には退場して貰います」

「あら。　あらあらあら。　まさか力を隠していたのがバレてないんでもっ？」

ワタクシも本気で相手にしてないのは双方理解していた様だけども……そこまで言うなら終わらせてあげましょう。

ワタクシも力を解放して差し上げます！」

悪魔も向こうも、なんか強くなった。

第2段階という奴か。　ウイザー戦の苦労を思うと苦い顔をしてしまうクラフター。

とはいえ、やるだけやるか。

レオンに強化ポーションを投げつけつつ、自身も浴び、不死のトテムも所持しておく。

出来れば我々がくたばる前に、軍事部なり誰か来て欲しいものの。継戦はしたい。　でないと荒らしにこの地が制圧されてしまう。

それは避けたい。

「な!!　まさか、これほど、とは」

「手加減していたから勘違いしてしまったのね。　お可愛いこと。」

でもね、ワタクシは最強の力を手に入れたの。　幾ら貴方達が束になっても敵わないような、ね……ッ！」

刹那。　近くの同志が謎の風で吹き飛んだ。

肥満荒らし同様、壁に衝突して、やっと止まる。

小ダメ。　とはいえ驚いた。

バイクドポテトを齧りつつ、思考する。

いやあ、参ったな。　冗談じゃないと。

盾ガードしつつ、様子を見る。下手に刺激したくない。エン
ダーマンの様なワープを見せられても困る。
取り敢えず丸石で即席トーチカを作った。

「姐さん、無茶苦茶でんな。いいでつしゃろ、アツシも覚悟を決めま
しょう」

「忌まわしい貴様達の息子……あの坊やの様に小賢しく考えた様です
が、無駄でしたわね！」

「このままでは任務の遂行が……申し訳ありません、私の見立てが甘
かった様です。」

せめて、極魔対消滅法による自爆相殺を狙いますので、後の事は
……」

「ごちゃごちゃ煩い。」

クラフターは弓矢を射る。避けられても、負けじと雪玉を乱射し
牽制弾幕形成。

その状態で接近。溶岩バケツをぶち撒け、戦いつつ己の都合の良
いステージを作っていく。

その合間を縫うように、弱体化ポーションや猛毒ポーションを投
擲。

当たらずとも牽制効果を得ていく。

兎に角、戦い続ける。対抗出来るし、希望と意味があるのであれ
ば。

「まだ貴方達は……流石はギイ様の認めし創造主達、ですね。その
姿勢は……時に羨ましくもあります」

「子がそうなら親もそうだったわね。良いでしょう、幾らでも小賢
しく悪足掻きしていれば良い。」

ですが、最後に勝つのは此方側、中庸道化連、そして会長のワタク
シ、魔王カザリームだ！」

「……成る程な。クロエも認める理由が少し分かったよ。」

ならば、俺もやらずにはいられない」
「まっ、どうせやるなら本気でやりましようや。 その方が楽しいやろ」

劇は再幕される。

世界中で天使の戦いと同時に、地上に溜まった憎しみや恨み、嫉妬も交差してぶつかり合う。

それでも、クラフターはクラフターである。

他者の思い出に浸らない。 荒らしを倒す。

そして開拓と建設の楽しい日々を再度送る。

今はその為に、マルチに協力して各地戦場で奮闘するのみだ。

一部、知つちやこつちやねえと建設工事や開拓、資材収集に勤しむ同志はいるが。 架橋工事してる者とか。

それもまた、マイクラクオリティか。

「ほな、いきまっせー」

道化が鳴く。

次には短剣……ナイフとやらが飛んできた。 複数だ。 扇状に

広がる事で、命中率を上げている。

連邦にきた狐娘も装備していたが、投擲も出来たとは。 クラフトしてみようか？

取り敢えず今だ。 素直に受けるのも馬鹿らしい。 盾や剣ガード、防壁で防ぐ。

刺さった。 爆発した。 ナイフが。

「面白いやろ？」

盾や防壁は兎も角、剣ガードの同志は吹き飛んでしまう。 下手するとTNTやクリーパーのゼロ距離被曝より痛い。

防具が無かったら、即死レベルだ。

次は避けるか、防壁でやろう。

「まっ、そんな兄さんらも面白いやつぢやな。身体がバラバラになっても良い威力を受けて、五体満足で動けるんですもん。」

話に聞いていても、直近で見させて貰うと不思議な感覚やな。防具が相当良いものとしても、な。

さて、次は何見せてくれますん？」

涙目の仮面の方をチラ見。

剣士と戦っているから、放置しておく。逆にそうするしかない。

目の前の道化は油断ならない。

親玉もだが、有難い事にレオンと緑色が抑えてくれる。肥満野郎は起きてこない。

ならば目の前を集中だ。簡単には死ねない。インベントリの

中身と経験値が無駄になる。

エンダーパールを投擲。

ワープ時のダメージを受けつつ、移動に合わせて剣を振り下ろす。

避けられた。

「単純でんな。そんな見え見えの攻撃からの、どんな動きを見せませす？」

それは予想していたから、真下に鈍足化のスプラッシュポーションを割る。

相手はバックステップ。そこにシルクタッチで採取していた蜘蛛の巣を、同志が仕掛けた。

「おっ!？」

絡まって動けなくなつたところを、TNT着火。ついでに溶岩バケツをぶち撒ける。

刹那、爆発。 先程の仕返しだ。
爆煙が晴れると、姿が見えない。 やったか。

「あちゃー、ワイの弟がやられてもうたー、なんてな。 残念、ありや分身体だったんですわ！」

別の角度から、荒らしの声。

向けば奴がいる。 なんて奴だ。

強い。 クラフターは確信する。 取り敢えず牛乳バケツを飲み干した。

そのまま雪玉を投げる。 これでワープするなら、エンダーマンだ。

が、普通に左右にフラフラと避けられる。 別に期待してないが。 当たってもノーダメだし。

「で、アンタはどうなんでしょうな！」

隙を縫って、殴り飛ばされた。

ノックバック発生。 しかも今度は蜘蛛の巣に引つ掛かる感覚に襲われた。

先程の蜘蛛の巣はTNTで吹き飛んだから、相手の仕掛けた罠であろう。

身体をよく見る。 糸が絡まっている。

剣で壊すのもありだが、相手が突っ込んできたので止める。 代わりにコーラスフルーツを食してワープ。 蜘蛛の巣から離脱。

対して荒らし。 驚きもせず構え直す。

出来る。 ますます強い。 キレル荒らしだ。

「強い事は認めんとなりまへんな。 クレイマンを殺した仲間たちゅーのは許せへんけど。

その時いたリムルっちゅースライムは、この戦争序盤で死んだと聞

くけど、本当はどないやろな？

アンタらは簡単に生き返れるんやろ。

……リムルは悪友ほつといて、何処でどうしてんやろねえ？」

剣を振り回す。弓矢で射抜く。自爆する。

全て軽々と避けられる。

丸石防壁の裏に隠れて、雪玉ブロックをクラフト。2つ縦に重ねた。その上にカボチャを置くと、スノーゴーレム完成。

道化に向けて雪玉を投げ始めた。直ぐ倒されても良い。これを量産していく。味方は作るもの。

「はっはっはっ！ 作り物で対抗ですかい。けど雪玉なんて当たっても痛くありませんでえ」

時間を稼ぎつつ、架橋工事に使用するべく携行していた鉄ブロック分解。

インゴットにすると、作業台ナシで短剣のクラフトを試みた。木の棒1本、鉄1個。剣なら鉄2個だから、コストは半分だ。

やってみた。出来た。なるものである。

これをさらつと量産。スタック出来るのは便利だと思いつつも、これを雪玉感覚で相手に投擲していく。

避けられたが、矢と同じ様に壁に刺さった。回収出来る。コストとしてはまあまあか。余裕があれば鉄屑でも試す。

場合によっては、羽毛と矢尻が必要な矢のクラフトより低コスト。しかも投げるのみならず、剣の様にも使える。

リーチと耐久値が低そうなのは不便だが、使えそうだ。

「ほう？ 真似しよる」

更にTNTとナイフを組み合わせた。

それを投げた。投げた先で爆発。面白い。ここまで作業台

無しでクラフト出来るのも評価出来る。　どンドン投げる。

「ちよちよいちよいちよい!?　多過ぎや!」

連続爆発。

慌てている。　良いぞ。　効果は抜群だ。

軍事部の手榴弾や、微妙な負傷ポーション、TNTトロッコとは別の使い方も出来そうだ。

起爆はスプラッシュ同様、接触式の様子。　直接攻撃には適していると思う。

TNTの様に時限式に出来るなら、それはそれで別の使い道も生まれそうだ。

夢は広がリング。　被害も……荒らし行為に使われなきや良い。目の前の奴みたいに。

「チェインエクスプロージョン!」

いやいや、兄さんらの魔法はワイらの魔法とはちやいますもんな。独特の特性を持ち、短所と長所の見極めが難しいものの……」

爆煙の合間から、ナイフが飛んできた。

それを避けるも、今度は頭の横で突然爆発。　横に吹き飛ばされてしまう。

「此方の攻撃も効くのは、有難いことで」

吹き飛びつつ、敵から目を逸らさない。

地面を蹴って向かってくる。　ナイフを投げた。　避けられた。土壁展開。　背後に隠れる。　少し横にずれる。

「罨だと見え見えでっせ」

そのまま飛び蹴りされると思ったら、飛ばれて上から降ってきた。即座に天井展開。今度は丸石。

「そのまま壊して……うほう!？」

突き抜けてきた足に、ナイフを振る。

が、即座にナイフガードされ。

「マジかいー!」

そのまま起爆。爆発ナイフを振った為だ。

結果、双方巻き添えの自爆攻撃成功。

互いに壁同様吹き飛んで、遠くの位置に転がっていく。痛い。けどまだ余裕。向こうも自然回復が早い。直ぐ戦える姿勢になる。

「未来予測も出来ん。本能で対応させてもらいやしたが、こりや互いにキツイ戦いでっせ。

つつても、やるだけやらせてもらいますが」

増援はまだか。

流石にキツイ。ファルムスや帝国の集団戦とは違う損耗だ。

各個人の荒らしがハイレベルだ。長くは持たない。

周囲を見やる。一進一退。やはり自力で切り拓くしかない。

そう思い、再びナイフを構える。

他に、他にクラフトかクラフターがいれば。

そう願ったからか。

軍事部や村人が壁を壊して雪崩れ込んできた。

待たせるな。焦がれたぞ!

「ここに来てテンペストからのお客さんですかい。どんどん盛り上

「がりますなあ」

「悪いがこれ以上の楽しみはない。さつさと消えて貰うぞ道化共」
「名乗る者でもない。この場限りだからな」

司令部にいたベニマルと、森や植林場で偶に見かけるソウエイが現れた。

後は軍事部。装備はネザライトが主で、時に銃火器を手に持っている。

が、新兵器が混ざっている。それはお互い様で、お互いの手に持つ物を凝視し合った。

けしからん。後で色々聞かねばならない。

「雑魚が群がったところで、何が出来る？ 貴方に限っては得物に

頼らないといけない様ですし」

「この刀か？ なら試してみるか」

刹那。ベニマルが瞬間移動。

次には耳長の背後に立っていた。

まるでエンダーマンだ。否。俊足ポーションより速すぎただけだ。

まあ……ハクロウや他も似た事してたし。これも今更だろう。

「ぐっ、ああ?！」

そして悲鳴のハアンを上げる耳長。

見やれば片腕が無い。斬られたらしい。

「ほら。返すよ」

そんな腕を奪ったらしい、ベニマルが耳長に投げ渡す。

いや返さなくても良いのに。クラフターは眉間に皺を寄せた。

余程自信があるにしても、慢心してはいけないと教えたい。

「ぐっ……よくもー！」

腕を回収、エネルギーにして取り込み、失われた腕を生やして見せる耳長。

やはりな。クラフターは首を振った。

奪えるものは奪った方が良い。返すな。

我々もかつては片腕で世界を相手にしてきたが、やはり両腕使えた方が便利である。

つまり多少の戦力の低下を起こせたなら、回復させる真似は要らない。格好付けての煽る行為は、時に相手を苛立てさせる。

今回の相手は荒らしだが。だとしても、かような行為で愉悦に浸るのは同意出来ない。荒らし行為と同義だ。

どうせやるなら、徹底的にやっってからだ。

慢心して飯ウマの最中、クリーパーに爆破でもされたらギャグだぞ、ソレは。油断大敵。

「クロベエに何度も鍛え直して貰ったから、大分変色しているが……アイツらの剣より劣るとは言わせねえ」

此方を見て不敵に笑うな。戦車ぶっけんぞ。

外では戦車隊が取り囲んでいるのだ。

一斉射でお前ごと建物を吹き飛ばしても良いんだぞ。因みに。

レオンのいる大陸と連邦のある大陸とは海で隔てられているから、陸路で行く場合、橋なり海底トンネルなり必要なのだが……橋は完成していない。そう、橋は。代わりに海底トンネルで戦車隊や一部の同志はやってきた。あと一部村人。

そうでなくても、ボートで横断後、現地で戦車等を組み立てる。クラフターなので。

ただし、ベニマル等はポータルの類でワープで来ていた。移動のロスタイムは無いのである。

クラフターに、ネザーゲート以外の転移方法を作る事は今のところ出来ない。

故に羨ましい方法なのだが……その内、自力で作리そう。BBもいる事であるし。

「つべこべと……！　消えろ！」

親玉、レオンでなくベニマルに向かう。

我々だったら防衛行動をとってしまいが、ベニマルは、なんと棒立ち。どっしり構える。

「ほらほら！　どうした!？」

さつきは大口叩いて、今じゃ打つ手無しかあ!？」

オラオララツシユしている耳長。

ベニマルは振動している。殴られているからではなく、避けているからだった。

どうも、感情的になり過ぎて、相手の技量を見れないでいる様子。

つまり、ベニマルの方が格上だ。

その内、やり返される。我々もそうする。

背後にいた影薄ソウエイ、道化を相手にしつつ、隙を見て糸を伸ばし耳長の腕を拘束。

動きが一瞬止まった。ベニマルが、すかさず攻撃を入れる。拳で。

「うっせえ!!」

「ぐはっ!？」

炎を纏ったパンチを1発喰らい、火玉となり吹き飛んでいく耳長。

地面に叩きつけられた後、暫くして鎮火。同時に大人しくなつた。

ベニマルも強いなあ、と淡々と思う。

得物を使わないで、拳1発でコレなもの。

我々の拳では辿り着けない。戯れか止むを得ず使うのが拳である。

カリオンが連邦に来た時も思ったが……。

改めて認識した。

この世界と我々の拳の重さの違いを。

「あ、姐さんー！」

寄つていく道化。

先程とは違い無防備だ。その隙に斬ろうと思ったが、やめた。

今までの行為からして、これすらも罫かも知れない。

そうでなくても、刹那的にマルチを感じてしまい、剣が鈍つたものもある。取り敢えず盾を構えておく。

ビビりで結構。荒らしを侮り過ぎてはならない。

「やり過ぎじゃないのか？」

「エネルギー量は向こうが上だったんだ。手加減出来る訳ないだろ」

「それもそうだな」

ベニマルとソウエイ、ハアン会話をしつつも、それ以上の追撃はない。
連中の述懐を聞くのみである。

「なあ、ラプラス……ワタクシはどこで間違えたんだろうな？」

目は虚空に向けて、耳長は鳴いた。

クラフターは盾の構えを解かない。けれど、見守りはする。

「最初は、ワタクシ達が楽しく暮らせる場所が欲しかったただけだった……。」

その近道が魔王になる事で、魔王になって……で、調子に乗ってしまっただのかな……。」

「ええですよん、そんなん。誰かて調子に乗る事はありません！」

「そうだ、思い出した。人間の癖に魔王を名乗るレオンがムカついたんだ。」

ツマンネー事に拘って、レオンに喧嘩売って……今じゃぼつと出た癖に自由に生きる連中に嫉妬して……。」

ははっ、寝た子を起こすように覚醒させちまったんだっただな……。」

そしてワタクシは殺されて、ずっとレオンと……今なんてアイツら、マインクラフターを恨んで生きてきたのよね……。」

でも、不思議ね。

どうして、そんな事にずっと……。」

ワタクシ達は、ただ彼らの様に楽しく生きて……。」

ラプラス、お前は間違える、なよ……ワタクシ……、みたいに、失敗す、るぞ……また、楽しく……。」

耳長の意識は、深い闇の底へと沈んでいく。

——ああ、そうだ……クレイマンにも謝らないと……。」

それが、耳長が、カザリームが最後に思い浮かべた言葉だった。

「姐さん？ カザリーム様!! おい、アカンで、しぶといのダケが

アンタの取り得やん!

諦めたら、そこで終わってまうやん。嘘やん、こんななんいわ

……。」

ワイは騙されへんで、ふざけんなや! また一緒に、楽しく——

。ワイ等を置いて、勝手に逝つてまうんか!?
う、うあ、うおおお——ん!!!」

号泣するラプラス。

それは余りにも無防備で、ベニマルの動きを止めるのに十分だった。

クラフターとしては、荒らしは荒らし。経緯がお涙頂戴でも、やらかした事を水に流せない。出来るなら、このまま全員無力化して貰いたい。

この後、反抗を続ける様なら倒すまで。盾を構えたまま、剣に力が入る。

「え、そんな……嘘だ、カザリーム様!」

涙目の仮面のティアは力無く座り込み、現実が受け入れられないのか放心してしまった。

殺すなら今か。そう思った時。

「ほおーっほっほっほ!　今こそ、これの出番ですな!」

突如、機械仕掛けのような不自然な動きで、肥満野郎が跳ね起きた。手には、禍々しい丸い玉を持っている。

その手に持つ玉を天に翳した時、それは起きた。

『やあ、ボクの名はヴェルダ。』

どうやらカザリームが敗北したか、洗脳が解けてしまったのかな? ま、どっちでもいいけどね。

さて、長く話すのも何だし、ボクはさっさと目的のモノを回収させて貰うね』

玉が光を放ち、空中に諸悪の根源なユウキ——ヴェルダ——とやらの姿を描き出す。

その像は形を結び、姿を明確に現した。

そして言葉を発した。

告げられた言葉に、村人系は動きを止めた。話に興味がある訳ではなく、その目的を察する事が出来なくて迷った為だ。

加えて、感じる謎の威圧感。

本体が降臨したのか、或いは分身体なのか。

その辺より格上だろうメイド悪魔やレオンでさえも、感じる覇気に圧倒され、迂闊に行動する事が出来なくなっている様子。

油断なく身構えるのみである。

クラフター？

取り敢えずトーチカを作って背後に隠れた。

スリットから弓矢を構えて身構える。ここまで戦闘が長引くと

は。増援が来たとはいえ、どこまで持つか。

やはり自爆か。核自爆か。対消滅も捨て難い。

「何やと……？ カザリーム様を、洗脳してた、やて!!」

一方、道化……ラプラスはキレた。

「貴様あ！ ワイの、ワイの仲間達を何やと思つとるんや!!」

滅多にない怒りを道化から感じる。

だが、相手にその声は届かない。道化に興味を持つ事なく、淡々と何らかの目的に沿って行動する。

奴は周囲の反応を気にする事なく、右手を耳長に向けて翳した。

その瞬間、耳長の燃え残った肉体から光が分離し、ヴェルダの手へと吸い込まれていく。

クラフターは戦慄した。そして思い出す。

リムルの捕食を。雰囲気は違えど、思い出したものは仕方ない。

「させるか！」

ソウエイが神速の突きを奴に放ったのだが、その突きは像をすり抜けてしまう。

クラフターも倣って弓矢を射る。駄目だ。同様にすり抜けた。

「実体を持つ幻影……？」

「これは!? 並列存在の一種？」

レオンとメイド悪魔が鳴く。

鳴いて解決するならば非解決して欲しい。

取り敢えず他の方法だ。出来る事をする。肥満野郎を倒すとか、この後起きそうな戦闘に備えるとか。

軍事部は既にスタンバってる。動きがあれば一斉射撃が入るだろう。慣れた動きだ。

『ああ、ボクの事は気にしなくていいよ。これは単なる記録映像さ。君達の行動を予想して話しているから、若干違和感があるかもね。さて、目的のものは回収が終わったし、消えんとするよ。そうそう、最後にプレゼントをあげようかな——』

アレか。開戦時等に空にデカデカと映された映像の類だろうか。混乱する事なくクラフターは観察する。特に肥満野郎の持つ玉の行く先を追う。

玉は光を放ち終わると鼓動を開始し、肥満野郎の肉体を侵食し始めていた。

「気をつけろ！ そのデブが何か——」

ベニマルがハアンと叫んだと同時。

耳長の身体が発光し、強烈な光と破壊の力を周囲に解き放った。BBから遅れて解析情報が。

なんでも、残った全ての聖魔混合エネルギーを暴走させて、圧縮爆発を生じさせたらしい。

自らの器の中で、最大限に魔力を膨張させた上で、それを一気に解き放たれたのだ。

閃光が走り、城の大広間を熱を伴わぬ滅びの光が満ち溢れる。

それは、圧倒的な殺傷力を撒き散らし、生きている者達へと襲い掛かった。

元凶荒らしの意思が耳長に与えていた自らの能力を回収すると同時に、その身に宿すエネルギーを操り、暴発の引き金を引いたのだと予想された。

うん。よく分からない。分からないが。

防御に専念しないとヤバイのは分かった。

帯電クリーパーの何体分かも分からん威力。黒曜石は必須。

あいや、それすらも怪しいがやらねば。やらずにいるよりマシ。

「ツチー」

対応出来た者は少ない。

荒らしが燃えりや、次は世話が焼けるとききた。

クラフターは助けるべく各々動く。何故とは考えない。故にと動く。

ベニマルみたいに爆発の閃光を全て回避するという離れ業は無理なので、盾や即席の黒曜石の防壁で難を逃れつつ、周囲の村人を保護していく。

カザリームから離れていたソウエイは、瞬時にフットマンを盾にするように位置取り、そこにクラフターが息を合わせての黒曜石による2重壁の防壁展開。念の為に盾をも構える。

メイド悪魔は表情を変える事もなく、全身を覆う何らかの魔法を発動させたが、無効化出来たのは半分程度。

残りのエネルギーを浴びてダメージを受けたようだが、精神生命体とクラフターのポーシヨン、防壁というクラフトの面目躍如により瞬時に外傷の再生を行った。

カザリームの傍でヴェルダに対する怒りを顕にしていたラプラスだったが、勘の良さ……というか、予知能力が命を救ったようだ。

爆発の一瞬前に反応出来ないでいたティアの元まで移動して、ティアに覆いかぶさりつつ結界を生じさせる。それでも背中に大怪我を負っていたが、辛うじて死を免れたようだった。

クラフターとしては荒らしなので、そのまま消滅して貰いたかったが、仕方なし。

そして、レオンの仲間達は。

レオンの生み出した防御結界とレオンが自らの身体を盾にして守ろうとしたところ、クラフターが割り込みの黒曜石の防壁。

部分的に破損、光が差し込むも、なんとか全員が無事だったようだ。だが、自分の防御より仲間を守る事を優先したレオンは、無効化出来なかった滅びの光を浴びた事で動く事すら出来ない大ダメージを受けてしまっていた。

しかしそれでも、レオンの目には不屈の意思の光が輝いており、元凶の荒らしから視線を離さない。

それはクラフターも同じくして。

クラフターは盾を構えつつ周囲を確認。

今の攻撃は凶悪であったが、死亡した者は居ないようだ。

そんな状況を見て取りホッと息を吐くベニマルとクラフターだったが、その認識に小さな違和感が生じる。

その違和感は、肥満野郎から感じ取れた。

『どうだった？　花火、綺麗だったかな？』

さて、ではプレゼントだけど、そろそろ混じった頃だと思う。

そのこのフットマン君には、ヴェガの卵を与えた。

アルティメットスキル『アジ・ダハーカ』を移植した複製体だけど、性能は同等なんだよ。

今のカザリームの爆発エネルギーを吸収して聖魔気を獲得出来ていたら成功なんだけど、どうなっているかな？

まあ、成功でも失敗でもどっちでもいいんだけどね。

それじゃあ、精一杯楽しんでね。 バイバイ！』

映像が発した言葉の意味を理解する気はない。 したところで、碌でもない話だ。 荒らしと交渉する気もない。

今告げられた言葉が、ベニマル達村人にとって衝撃的だった様だが、今はそれどころではない。

生み出された邪悪な化物が問題だった。

肥満野郎がパワーアップしていく様子。

ヴェガだのなんだの、この世界の荒らしの戦闘能力についての報告は受けていた。

イベント時のユニーク共は、かなりの破壊活動を有する凶悪な化物ばかりである、と。

ウィザー級もピンキリというか、もう別の等級が必要なんじゃね、と思わず程にレベルの差が酷い。

そんな化物に対する有効手段は、圧倒的な攻撃力で捻じ伏せるか、罠に嵌めて消滅ないし封印するしかない。

対荒らしクラフターを参考にするなら、だ。

IRPは、そんな化物に対抗する手段としてクラフトされた訳だが、その肝心の兵器は連邦本土防衛で忙しく、余裕がない。

となれば、軍事部や我々一般クラフターが携行する攻撃手段で戦うしかない。

まあ、何とかなる。 ならねば困る。

クラフターは改め抜剣。

警戒すべきは、1番元気そうな肥満野郎。

なら、コイツからか。

身体もネザライトの剣も、クラフト能力も健在だ。 荒らし潰すぞ

徹底的に。

「ほーっほっほっほ。 見ましたか、ラプラス？」

憎たらしいレオンとクラフターはたった今から、このワタシ、怒った道化アングリーピエロのフットマンが殺します。

カザリーム様の無念も含めて、今こそ、この怒りを晴らして見せましょう!!」

高笑いを続ける肥満野郎。

揺れる腹が憎たらしい。 というか煩い。

肥満を相手にするなら、ミヨルマイルを相手にしていた方がよい。

あの村人とは取引出来るし。 何より荒らしじゃない。 偶に表情が怪しいが。

さても倒さねば。

俊足・攻撃力上昇のスプラッシュポーションを浴びると、再度呐喊。

剣を振るい、弓矢で射抜き、軍事部の銃火器や新兵器の火炎放射器が空気を膨張させゴウゴウと空間を賑やかす。

花火代わりに手榴弾や毒・鈍足・負傷のスプラッシュポーションが投擲され、これでもかと殺意マシマシ攻撃を続けた。

「アホか……今はそれ所やあらへんで……姐さんの最後の言葉を聞いてなかったんかいな……」

道化が何やら鳴いている。

いや泣いている？

どちらでも良い。 今は目の前だ。

攻撃を避け、隙を突いて攻撃を仕掛けてくる肥満野郎。 味方を巻

き込んでもお元気でいられるとは。

クラフターも似た事はするけれど。

「何や、フットマン。 君も既に壊されとったんかい——」

悔しそうなハアンが聞こえる。

まあ荒らしも、ここまで追い込まれたのだ。

元より壊れた思想が更に壊れたのだ。分からんでもない。同情はしないが。

寧ろザマアと思う。お前らに荒らされたモノはもう2度と元には戻らないのだ。

せめて心を晴らす意味で、今後2度と荒らさせない為にも、此処で消えて貰う。

「許さんでヴェルダ!!」

怒りのハアンが聞こえた。

荒らしがどんな感情を抱こうが勝手ではある。

だが、云つておく。

お前達が泣こうが喚こうが、歓喜しようが絶望しようが、嫉妬しようが訴えようが、破壊しようが作ろうが――。

それらはお前達荒らしが犯した罪の数々が免罪され、正しいとした証明にはならない。

「――わかった。無茶しないでよ!」

「ところで、君はヴェルダから何も預かったりしてへんやろね?」

「アタイには何も……多分、ずっとカザリーム様にくっついていたらかも。」

ラプラス、アタイを一人残したりしないでよ……?」

「ははは、任しとき。ワイは実は、カザリーム様より強いんやで?」

「うん。知ってた」

何か鳴きつつ、道化は肥満に視線を向けた。

その目は既に全ての感情を飲み込み、一切の心の乱れは消えている。

魔人は飄々と立ち上がった。

そして我々の傍まで気楽に歩み寄り、

「なあ、一時休戦といこや」

そう、抜け抜けと鳴いたのだった。



道化とベニマル達は共闘する事にしたらしい。

言葉が分からぬクラフターには何が起きたのか分からない。どうも非常事態らしい。

肥満野郎は道化の仲間だと思っていたが、裏切りでもあったのか。何にせよ倒す事に間違いない。

剣や弓矢、ナイフ、雪玉、軍事部の銃火器で牽制射撃を行いつつ、防壁を増やして相手の行動を制限する。

同時に囲い込む様に展開。袋叩きの状態にまで持ち込んだ。

が、相手も時間が経てば経つほど動きが良くなる。回避運動もさることながら、反撃頻度も増している。

牽制とはいえ弾幕を張って、動きを封じているつもりなのに。一時的とはいえ鈍足、弱体化異常も与えているのに。侮れない。

「段々と威力も速度も増してやがる。このまま仕留めきれず、挙句に逃したらヤバいな。ここでケリをつけたいところだが……」
「ご安心下さい。この城は、大地からも隔絶した球状結界にて現世と隔離しております。」

先程ベニマル様とカザリーム様によりあけられた穴も、既に修復が終了致しました。

……何故か彼らの攻撃は抜けていきますが」

「最悪、ドカンと自爆だな」

「それで済めば良いんやけどな」

「冗談言ってる場合か」

ベニマル共め。黒曜石の裏で鳴き合っていないで加勢しろ。我々のみに任すな。

外で痺れを切らした軍事部が、戦車で外壁を破壊した後、狙撃銃とやらでドカンドカンと発砲してきているのだぞ。

その流れ弾が時々当たると。痛い。良く狙って撃って欲しい。この下手くそ！

「じゃあ、ピエロ。お前は何か、大技は持ってないのか？」

再生力が高すぎるから、多少削っても直ぐに元通りになるぞ？」

「ラプラスと呼んでや。

で、質問への答えでつけど……スンマセンな。

ワイも、そっちの兄さんのように、対個人に特化しとるんですわ。ワイに頼むより、奮闘中の兄さんらに任せた方が良いんとちやいまずか？」

「何だよ、使えねーな……お前さつき、カザリームより強いとか自慢気だっただろうが!？」

「アホ言いなや！ 覚醒魔王化やセラフイム吸収とかの裏技を使われなかったら、の話ですわ。

あんな反則されたら、いくらワイでも勝てる訳ありませんやろ」

外で軍事部が、特殊ロケットランチャーを用意。構え始めた。

それは戦術反物質弾頭を発射する、個人携行型ロケットランチャーだ。通常のロケランより大きく、卵型弾頭も同様に大型。コストもデカいらしく、量産は難しい。

弾頭には識別の為に、エンダーマンの顔がペイントされていた。ただし見つめてもワープはしないが。して堪るか。

一方で核弾頭は帯電クリーパーの顔がペイントされた。ただし近寄っても爆発しないが。して堪るか。

何方も重量からか模擬弾での実験では真っ直ぐ飛翔せず、飛距離も

大してなく、放物線を描いて飛ばす事が前提等、取り扱い注意な武器である。しかし、個人携行型としては凄まじい威力を発する事が期待出来た。

初めは核弾頭を発射する様にしたが、放射線、放射能を撒き散らし周辺環境を汚染するデメリットから反物質弾頭に変更となった。

小型化のクラフトにエラく苦勞したそうナ。

それでも甚大な被害が及ぶ事は間違いない。荒らしごと建物、いや地形が吹き飛ぶ事だろう。時に止むなし。荒らしを生かすより良い。

その危険性から娘、息子からは使用を大反対されているブツだが仕方ない。

平和のクラフトは素材が必要だ。タダではない。最悪で最善の手段も時には選択しよう。単に試したいのもある。

「なんやろな。ワイの勘が警笛鳴らしとるで」

「奇遇だな。俺もだ」

IRPが動けないなら、クラフターが直接やらねばならない。

という訳でトリガーを引く。荒らしがいる城に向けて、放物線を描いて弾頭が飛翔。いや落下していった。

内部の同志、それを知り慌てて即席黒曜石シエルターを作る。ベニマル達も入れる。

「おいおいおい、ナニが起きるってんだ!？」

「結界が持てば良いのですが」

「おいアンタんとコの兄さんらやろ！　せめて意思疎通くらい出来んのかいな!？」

「生憎、ここに通訳はいないな」

「出来る事は祈る事だけです」

「祈る？　悪魔か鬼か道化か奴らか？」

「駄目なら駄目なだけだ。笑える内に笑つとけ」

着弾。ズドンと爆発。そして消滅。

城の大部分が消えてしまった。

対消滅で周囲含めて半分以上は消し飛んだ。

威力を抑えたとはいえ、かなりの威力。改めて自らの行いに恐怖した。

クラフターは身震いする。今後も取り扱いは気を付けたい。

「……結界の意味がないとは」

「生きてるのか、ワイら」

「何が起きたんだ……いや、奴らが派手にやらかした事は分かる」

「周りが跡形も……それに、妙な感覚だな。何か死んだ様な気がする。錯覚か？」

即席黒曜石シェルターは崩壊。

にも関わらず生きているのは、不死のトーテムを複数持参していたからだろう。

軍事部には苦情を入れておく。殺す気か。いや死んだもんだが。村人もソレに気付いてか否か困惑している。

それより荒らしだ。肥満荒らしは？

確認した。まだしぶとく生きている。マジかよ、である。取り敢えず再度臨戦態勢。

やっぱ化物だらけの世界だよ全くと。

「嘘やろ!? フットマンのヤツ、あの爆発エネルギーに耐えたんか

!？」

「楽はさせてくれねえな」

防壁を再構築。退避場所を作り多少安全を高めとく。外の軍事部にはもう撃つなよと云っておいた。流石に2度目はリスポーンだ。

クラフターは防壁裏でポーションで回復、強化を重ね掛け。
下位金林檎を齧って抜剣。 いざ再出陣。

銃撃を重ね、悪性スプラッシュポーションを投げまくり、矢を放つ。
同志がナイフ爆弾を作り、受け取った者が思い思いに投げまくる。
ズガガガツ。 シュコツ。 パリン。 ドカン。
祭りは続くよこの後も。

クラフターは楽しむ。 荒らしは許せないが、戦闘のスリルは良い。
生きている心地がしたりしなかつたりするから。

ハラハラ。 ドキドキ。 どこまで続くか、この刺激。 感じるか
らには全力だ。

「仕方ねーな。 持久戦になるが、やるしかねーか」

「だな。 他に手段は無い」

「しゃーなし、でんな。 何よりも生き残るのを優先、でんな」

一方、村人は覚悟を決めた。

だが、そんな悲壮感溢れる決意、我々のヒヤッハー祭りはその瞬間
に崩壊する事になる。

「クフフフ。 詰めが甘いですよ、皆様」

いつの間にやって来たのか、いつかの悪魔が突如肥満野郎の背後に
出現し、その頭を掴んだ。

そして、そのまま地面へと叩きつける。

悪魔は振り向き、やれやれと肩を竦める。

「この程度の雑魚に、何を遊んでいるんですか皆さん？」

嫌味ったらしい爽やかな笑顔で鳴いてきた。

クラフターは剣からベイクトポテトに切り替えて、取り敢えずム
シャムシャしてやった。

美味しいところをもっていきやがって。
小休止だ。終わったら肥満野郎諸共、反物質手榴弾で吹き飛ばさ
うかなどか思ってしまった。

162. フリーズと巨人

南大陸、レオンの領地。

この地で行われた中庸道化連との戦闘は過激に進行した。

一進一退。 攻防が繰り返される激戦。

このまま我慢比べか。 そんな事をしていた。

ところが救援として現れたベニマル達の活躍により、ボスのカガリ

女史……正体カザリーム会長が倒される。

苦労が嘘の様に、ワンパンでアツサリと。

が、それで戦闘は終わらず。

続くは肥満野郎ことフットマンとの戦闘。

操られた、いや壊されたというべきか……全ての元凶ヴェルダの介入により、パワーアップした彼は、怒りのままに暴威を振るい始めたのだった。

何にせよ、抵抗するなら倒さねば。

非常事態。 戦闘続行。

ベニマルは道化連の猛者、ラプラスと協力。

マイクラ軍事部も継戦の構え。 戦地の城を包囲。 戦車隊一斉

砲撃。 銃を乱射。

遂には戦術反物質弾頭まで発射。 対消滅を起こし建造物、地形を

大きく破壊。

にも関わらずフットマンは倒れる事なく健在であった。

改めて化物だらけの世界だと認識した。

長期戦の覚悟を決めた面々。

と、そこに原初の悪魔クロちゃんことディアブロが現れフットマンに不意打ち。

フットマンの回復速度を上回る攻撃を仕掛けまくり、敢え無く倒してしまった。

クラフターは思った。

我々の苦労はなんだったのだ、と。

「クフフフ。死体処理に些細な国盗と下積みを重ね、信頼を得ていき、そしてまた、ひとつ仕事を成し遂げました。」

ああ、最初の雑用といい、他より遅くネームドになった事といい、心核が何度砕けそうになった事か……。

ですが、彼等の様に諦めなければ道は開けるのですね！

ここまで来ればリムル様に立派な幹部の1人として認めて貰える事でしょう！

嗚呼、漸く……漸く我が身に幸運が訪れてきましたよー！」

クラフターは頭を震わした。まあ良いかと。

荒らしを倒した。その事実は揺るぎない。

本人は何故か笑いながら涙しているが。分かる。荒らしを潰すのは快樂だ。

それよりリムルだ。何故出てきたのだ。

「よお。出来れば会いたくなかったんだけど、地下に籠ってばっかじゃ状況把握仕切れないからね。」

そんで、こつそり観戦していたらミザリーの結界内に囚われちゃつてさあ。

壊して脱出したらバレルし、何よりピンチっぽかったから、こうして介入してやったんだよ。存分に感謝して？」

失せろ。横柄スライム野郎。

存分に殺したい衝動に駆られつつ、何とか抑える。静まれ我等の右手。

今はその時ではない。嫌がらせ程度に済ませる。

ナイフを投擲し、火炎放射器で炙る程度に済ませてやった。我々の慈悲に感謝しろ。

「お前らも相変わらずだな。俺がスライムで、加えて熱耐性持ちだから良い様なもの」

「クフフフ。必要とあらば、私が彼等にお仕置き致しますが」
「いや良い。戯れ合いみたいなものだ。それより各地の戦場の監視強化をしてくれ。」

レオンの領地は済んだと見て良いが、他はまだまだだからな」
「心得ました」

意味なき事だと知りつつ、未だやるのは意思表示みたいなもの。
お前らウザい、だ。荒らしじゃなくとも。

美味しい所を持って行きやがって。
ブラマイの早い者勝ちに似てる気がしないでもない。

「んで、君らは中庸道化連のラプラスに、ティアだったな。」

見ていて思ったけど強いじゃん。という訳でウチで雇う事にしたから。宜しくー！」

「ちよー！ 何を勝手な事をー！」

「クフフフ。何か、ご不満でも？」

「え、いや……えつとですな……」

リムルらが黒い笑顔で取引を始めた。

もう良い。勝手にすれば良い。荒らしが沈静化すれば良い。

欲を云えば更生まですれば良い。

リムルなら出来る。

今までも上手く世渡りして来た。我々とは違う遣り方で。その辺は任す。

者により得意不得意は違う。得意な奴に任せれば良い。時に身を任す。

「あの、ええつと……雇われるって事は、給料を貰えたりするんでっしやるか？」

「ほおん、給料！」

「あー！ いや、そういう意味やのうて……」

「ほう？　では、どういう意味なのかお聞きしても？」

「えっと、いやそれは……」

「ま、その辺は後で相談するでしょう。で、どうする？」

「わかりました！　お世話になろう、思います！」

「あ、アタイも！」

結局、連中はリムルに手懐けられた。

クラフターとしては死んで貰いたかったが。

だがまあ、とも領く。

リムルの甘さも種類が増した。

今は戦時下。　仲間は多い方が良い。

道化の強さは立証されている。　他の荒らしを倒してくれるなら有益だ。

クラフターは取り敢えずそう納得して領いた。

「あ、それとレオン君と配下の騎士君達」

「は、はい!?!」「なんだ？」

「俺が生きてるってバラしたら、この国を物理的にバラすから。　宜しくー」

「当然だな」「ぜ、絶対にバラしません！」

「じゃ、俺とディアブロは、ユウキ……ヴェルダから、また隠れるから。

ソイツらがまた好き勝手に色々やるだろうけど、ソコは俺の責任じゃないからね。

そこんどこもヨロシク！」

好き勝手鳴いて、リムルと執事は消えた。

次いで、ベニマル達も。　軍事部は一部残存、後は他の戦地へ移動。

此処での戦争の成り行きは、一先ず落ち着いた形となった。　それは良い事だ。

ただリムルは……言葉は分からずとも、様子からして脅迫取引をして、後は放置か。

それもまた、マルチな光景だ。我々の世界でもある。だからと責めない理由はない。

当然の様に横行したら、荒らしの1種として駆除されるから注意して欲しい。

不利益の度合いが過ぎれば、処罰される。調子に乗らない事だ。己も含めて。

「……お前達」

不意にレオンが鳴いてきた。

「救助、感謝する。ありがとう」

よく分からないが、此方は好感が持てた。

クラフターは御辞儀した。

趣味に多忙であれ、マルチ的な礼を欠けてはならない。我々は荒らしではないのだ。

それを立証するように、壊した建造物や地形は残存クラフターが修復する。その辺の後始末はしておく。

善意と趣味の域で。

単純に気持ち悪いのもある。

クリーパーに剥かれた大地もだったが……個人差はあるものの、整地厨な同志は我慢ならない。

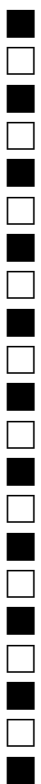
眉間に皺を寄せつつ、けれど笑顔で補修する。取り敢えず手頃な土や丸石で応急処置。

その後、いつもの松明を立てヨシと頷く。

一先ずの安心感と仕事を成し遂げた感を味わった。基本から来る満足感も悪くない。

「相変わらずだな……」

だが戦争は続く。多く休息を取れない。クラフターはいつでも趣味に多忙だった。装備を再点検、必要なら調達や修理を行いつつ、大半は別の戦場へと飛翔したのであった。



時空間異常。

それは元の世界においても発生した現象。

世界に過負荷を掛ける事で起きるその現象は、主に時流が遅れて思う様に動けなくなるという、非常に厄介な状況を生み出した。

そうなる条件は、前述の通り世界に過負荷を掛ける事。狭い空間に大量の動物を詰め込むとか、竈門や装置類を大量に稼働させるとか、流動するものを沢山用意するとか。

これらは事故でも意図的でも、荒らし行為と見做される。

創造、開拓、その他の行動一切合切が出来なくなるからだ。下手すると世界崩壊。

良い事が一つもない。楽しめない。

それがこの異世界でも発生してるとききた。

迷宮都市の件で報告、周知されていたが、まさかここまでとは。

そんな時空間異常。

突如として発生。

今、世界中で同時に起きている。

それもクラフターが未だかつて体験した事がない程の。深刻極まりないもの。世界が終焉しそうな程の。

最初こそ、祭り騒ぎで派手に過ぎたか、と心配してしまったクラフター。

何処かでTNT爆発どころではない、大規模核爆発や対消滅が起きたのではと。

だが原因は別だった。

犯人は意外と直ぐ知れた。

北方にいる白ドラゴンだ。世界に過負荷が掛かっているにも関わらず、平然と動いているからだ。何という事だ。

存在そのものが危険だ。ハイスペック過ぎやしないか。コイツ次第で世界が滅ぼせるやも知れない。

世界が凍る……ザ・フリーズ！

直ぐ対処しなければ。

だが動けない。剣先ひとつ動かせない。

何も出来ない。意識だけが存在し得る。

そんな世界。時間が停止した世界。

それなのに動ける者達がいる。

「へえ、動けんのかよ」

「……副担任さんは駄目みたいだけど」

「ギイはともかく、勇者クロエまで……けれど、全員じゃないだけマシね」

クロエ。ギイ。元凶ドラゴン。

連中は平然と動き戦闘続行。

あのさ君達……どんだけハイスペックなの。

悔しさと嫉妬を力にし、何とか抵抗を試みる。幸い念話が出来た。

各地の同志と状況を確認し合う。

……やはり、各地の戦場すら時間が止まっているという。何という事だ。

つまり、このドラゴンは時間停止世界規模レベルの過負荷発生装置なのだ。

迷宮の虫も時空間異常を起こしていたが、恐らくドラゴンの方がレベルが上ではないか。

どうにかならないものか。

と、ここで軍事部が名乗りを挙げる。

こんな事もあるうかと、と。

I R Pに触発された軍事部開発班が、B B協力の元、開発していた特殊防具がある。

その試験運転をしていた同志が、丁度動ける状況下なのだ。

ネザライトを超越する歩行戦車構想計画の元、作られた防具〔パワードスーツ(以下P S)〕は時空間異常に対抗出来るエンチャントを施しているらしい。

ただし、試験機でイキナリ実戦は不安の事。

だが他に手はない。行けと推す。

今、動けるのはP S同志だけだ。

同志、不安に塗れながらの出撃。

出来る限りの装備をインベントリに詰め込み、緊急出動。

ジェットバックパックで空を飛び、向かうは北の極寒のギイの城。

過負荷を除去する為、実戦に挑む！



ギイの城に落下、天井を突き抜けて現る更なる乱入者。

着地時の煙が晴れたならば、出来たクレーター中央に鎮座する全身鎧に覆われた軍事部、歩く戦車P S。

クラフターの一般的な防具と異なり、スキンを完全に隠したI体型のスマートな甲冑。目の高さに青く光る横線。甲冑にS F要素を盛り込んだ、浪漫と実用性の両立。

肌は一切見せない完全防具。

エンチャントにより薄い光沢を全身から放ちながらも、他とは違う異様な雰囲気皆が注目する。

性能は防御力限界突破モノ。核撃や反物質爆弾による対消滅にも耐え得る特殊装甲。

なんなら水中・宇宙空間での活動も視野にしており、着用してれば呼吸の心配はいらない。移動方法については、先程使用したジェットパックを用いる。

毒性物質にも対処している。高濃度の魔素地帯や放射能・放射線による汚染地域での活動も可能である。

そして防具でありながら武器でもある。

着用状態で殴れば、黒曜石をも破壊する。

そこに可能な限り施されたエンチャント。

試作でありながら、既に対ウィザード級装備なのであった。

「おいおい、停止世界でも動けるのかよコイツらは。精神生命体かよ。」

ますます面白い。ウオツ以外の会話が出来りや、もつと良いんだがなー！」

「副担任さん!? やっぱ凄いやー! 時間の流れのない、光の粒子すら動かない停止世界で、そんなにも……鎧も格好良いよー!」

「どこまでも忌まわしいッ!! どこまでもどこまでも、本当どこまでもッ!!」

三者三様の反応ありがとう!

御辞儀のスニーク姿勢しつつ、とりま周囲を見る。同志が固まっている。

エンチャント防具の効果で、微風程度の攻撃でも死なずに済んでいる様子だ。

だが、この特殊条件下。どこまで思い通りに行くものか。

宇宙開発研究や時空間、娘らの話は難しい。

慣性がどうかとか、相対性理論がどうか。

重力場、光線、時間の歪み……。

惑星の自転が急停止した場合、惑星と共に動いていた物体等は吹き飛んでしまう恐れだとか、時間停止とは粒子が動いていない筈で、分子運動、繋がりも停止しており、物理法則が通じないのであるとか、視

力も意味ないのでとか、最高硬度の物質だろうが、微風程度の衝撃で破壊出来てしまう恐れとか、息も出来ないのではとか、光の粒子すら止まるなら視認の問題がどうか。

難しく分らない。

たぶん、リムル麾下の軍服悪魔や鹵獲した兵器、拉致した村人等の協力もあつた筈。

取り敢えず、上手く動ける様にクラフトしたクラフターの熱意は凄いなと思う。

「一時休戦といこうぜ。　　というかよ、クロエ。　　さつき飲まされていたモンの影響で呪いは消えたる?」

「ええ。　　もう私は自由の身。」

もう無理に戦う必要はなくなった」

「なら問題は」白氷竜、ヴェルザードだけだ。　　こうもアツサリ解決されちゃ、苛立ち通り越して、いっそ清々しいぜ」

「それが副担任さんだもん!」

「お、おう……」

「それに停止世界で、このタイミングで来たという事は、この後も協力してくれると見て良いですよね!?!」

その熱意のまま溶かさねば。

つまり目の前の荒らしだ。　　倒さねばならない。

間違いない。　　よし。　　倒そう。

うんと領き思考放棄。

「ありがとう!　　また一緒にいれる事、嬉しく思います!」

だからこそ、私の成長を見て貰う為にも、全力を尽くします!」

「おう頑張れ。　　師弟愛とか知らんが、俺様も面白い奴がいる所為で、やる気に満ちてるぜ」

歡喜する教子達を尻目にドラゴンへ突撃。

取り敢えず火炎放射器を向ける。水系なら効果があるかもと。武器の作動も大丈夫。これらにも対策済み。という訳で。

溶ける。沈め。汚物は消毒。

此処からいなくなれ。と、火のブレスを砲口より上げるものの。

「生温いッー！」

炎を抱かせる。平然としている。

お返しまでされた。相對する冷凍ブレスを吐いてくる。

簡単に押し負けた。が、PSもまた平然と起立。ノックバックすら起きない。

つよい。

「チッー！」

「進化は続いているんだな。で、次のショーがあるんだろ？ 見せてみる」

「私達が介入しなくても、副担任さんなら大丈夫だろうけど……邪魔しない程度に手伝える時は入るよ！」

防具は良い。だが火炎放射器は駄目。

なら別の武器。ネザライトの剣といった定番は後回しにしつつ、PS本体もドラゴンの背後に回り込んだ。俊足ポーシヨンの何倍かも分からぬ速度で。

「それくらい何？ 追い付ける！」

ところが、向こうも負けぬ速度で振り返る。その時の尻尾に殴られ、次には口を開けられた。

ブレスの予備動作。先程より長い。先程は効かなかつたのにまたやるとなると、威力の桁が違う可能性があるかと瞬時に推測。

防がねば。　だが盾を忘れた！
代わりに木扉設置！　白樺製！

「なっ、なんでそれで防げるのよ!？」

それ、下等な人間の村でもあるタダの扉じゃないの!？」

よし。　何とかブレスの威力を下げられた。

PSには微風程度に届く。　それでも先程より強い。　防いで正解だ。

「参ったな。　これだけ目の前で見せられてなのに、アルティメットスキル、ルシファーでの能力再現が出来ねえ」

それに、相手が帝国戦争時のドラゴンタイプじゃなかったのも幸いした。

あのドラゴンは炎タイプだった。　コイツが同じであつたなら、白樺製扉なぞ瞬燃であつただろう。　PSも最大火力相手に無事とは限らない。

「副担任さんはクラフターなの」

「創造主、だろ。　”アイツ”とは違うが」

「みんな違うよ。　ひとりひとりの個性があつて、好きな事を好きに創っている。

真似して悪い訳じゃないけど、副担任さんは様々な個性と作り手が増えてくれた方が嬉しいと思うな」

「いったい、アイツらに何を学んだんだ?」

「面白い事!」

「成る程。　俺様もだったわ」

「でしよー?」

あいや、あの時は耐熱ポーションで防げた。　ならPSでもイけ

る。基本的なエンチャントは施しているのだから。それを相手は知ってか知らずか、動揺。ギャラリーの事は忘れている。今なら。

「じゃ、やるべき事は!?!」

「面白事だな!」

「ツ!?!」

クロエとギイが会話しつつ、遂には参戦。

ガラ空きの背中に飛翔する。

それに気付くドラゴン。振り返るも、今度はクラフターが背中を見る番に。

扉を開けて即行動。

容赦無く鈍足異常、弱体化のスプラッシュを投擲。ステータスを下げる。

「急に身体が重く……!」

刹那。詰め寄り木剣で吹き飛ばす。

ドラゴンは、その巨体を壁へと衝突させる。

ギイとクロエは、ドラゴンが先程までいた場所に着地した。邪魔したとは思ってる。反省はしていない。

「た、たかが棒切れで! 屈辱的よ……!」

「まあ、お前らが好きな様にやりや良いさ」

「凄いね。この空間で、木の剣で竜種を吹き飛ばせるなんて」

ノックバックエンチャントだ。たかが木剣、されど木剣。

実験用の捨てエンチャントが施された剣であり、実戦向けではない。だが急いで戦闘準備していた手前、使える物は使えと持ち出していた。

今は実験も兼ねて使用。よし。やはりミリムにも有効だった
エンチャントはデカイドラゴンも難なく吹き飛ばせた。

「コイツらの攻撃に耐性を付けるのは、竜種でも難しいってか」
「勝ち目は出てきたね」

余裕だ。エンチャント様々だ。

いや慢心駄目、絶対。奥の手でも使われたら困る。インベント
リに何が隠れてるかも知らぬ。

PSも反物質ロケランを持つ。

「ヴェルザード！ 操られて哀れだが、拘束させて貰う。

そんで、コイツらの謎の白い液体を飲め。そうすりや落ち着く
ぞ」

「牛乳だよ、ギイ……また何か来るよ!？」

クロエとギイが横に跳ねた。

真似て下がる。すると、PSが開けた穴から赤き流星が飛び込ん
で来る。

いつかの赤ドラゴンであった。殺してないが手懐けてもない。

あいや、リムルが手懐けたか。 だとして敵じゃないと断言出来な
い。

やはり油断ならない。

「おいおい、今日は客が多いな。今度はヴェルググリンドか？」

「挨拶は今度ねギイ。 それより姉さん、お久しぶり。 私のパート
ナーを殺した奴が姉さんにもチョツカイを出しているみたいだね。」

といってもその忌わしい創造主にやられてるみたいだけど」

「あらヴェルググリンド。 元氣そうでなりよりだわ。 ルドラは残念
だったわね。

でも所詮は人間。 いつまでも気にする事はないわよ。

私の事を心配してくれているようだけど、大丈夫。
ヴェルダは間違いなく、兄さんの生まれ変わりなのだから」

ドラゴン同士が鳴き合い始めた。

戦闘が終わるか。 下るか。 過負荷も止まるか。 それなら良い。 ツガイが出来た。 これでドラゴンの繁殖を試みれると領いた。

ドワルゴン方面にいるドラゴンも、同志が現地で縄に掛けて実験した。 其方は上手くいった様だ。

ならば目の前のドラゴン同士も発情させれば、繁殖して良い筈だ。 元の世界じゃエンダードラゴン一匹しかいなかったし、卵はあるものの、孵化する様子もない。 方法があるのかも知れないが不明だ。 だが欲が次々沸き起こる。 良い事だ。 こここそ我等マインクラフター。

「ルドラを貶さないで……ギイ、姉さんの相手は私がします。

そしてクロエとやら、リムルが貴方を心配していたようだったし、死なない程度に頑張りなさいな。

あの魔王は、貴方が死んだら暴走しそうだし、ね。 ギイなら上手く相手してくれるでしょうけどね。

それに”先生”もいるみたいだし。

そして姉さん、偽者如きにその意志を囚われるなんて、哀れな事。 私が目を覚まして差し上げます！」

過負荷が無くなる。

元々いた同志が動き始めた。

交渉に成功したか。 と思つたら、ドラゴン同士が激しくぶつかりあつた。

交尾か。 発情アイテムもなしに。 どんな子が生まれるか見てやろう。 卵かも知れないが鶏の事例もある。 ポンポンと生まれる可能性も捨て難い。

「ヴェルグリンドの能力の本質は加速。中和されて時が動き出したな。」

ああ、この姉妹喧嘩もいつ振りだか」

「ヴェルドラを相手にしていた時も楽ではなかったけど……竜種2人も相手にせず良かったよ。」

それでも副担任さんなら、絶対何とかする！」

「スキルであつても、奴らに”絶対”なんてあんのかあ？」

「私の中になれば、それで十分だもん！」

「気楽に言つてやるな」

「えへへ。生徒だもん、先生を慕つてるだけ！」

「だとよ。期待に応えろよ」先生”？」

最強種同士の戦い。

観戦するだけでも白熱級。祭りに色が加わり、美しさも兼ね備えた。

とはいえ、それを掴まぬ手もない。

クラフターは同志と共に、再びマルチ戦闘へと馳せ参じる。

荒らしを鎮圧だ。

元よりの予定をクラフターは続ける。

東で西で。北で南の戦場で。

祭りは続く。見える所でも、見えず所でも。



戦場光景は西に戻る。

ルミナス側と巨人軍の戦闘だ。

クラフターの加勢で僅かに押し返している。

ところが、ボス級相手に苦戦中。取り囲んで雨霞と剣撃と弓矢を

放ちまくっているが、簡単に倒れてくれない。

「我等が創造主か、貴様達の信じる創造主か、何方が上か見極めさせて貰おう！」

「くっ！」

大木の様な腕に殴られた。

見た目に反して早い。死傷者多数。

共にいたシオンは、ノックバックで吹き飛んだ。

死んではないが、重症だ。

だがクラフターは怯まない。怯まず立ち向かう。

「彼等を”倒すのは簡単”でも、”楽に勝てる”と思うなよ……ッ！」

「ほう。諦めの悪さは評価しよう」

「刮目せよ！それが我々の創造主だ！」

「妾は……味方である内ならばな」

死んでも、近くに設定したリスポーン地点から舞い戻る。戦力は簡単に減らないのだ。

「話にならん……という訳でもないな。アンデッドはとにかく、精神生命体……いや別の何か。

何度も復活を繰り返し戻るとは。ルミナスの仕業か？ それとも、やはり貴様達のか？」

勿論、物資の浪費は避けられない。

リスポーン地点にあるチェストの物資は確実に減少している。だが祭りに備えた備蓄物資。決して少なくない。

火薬もダイヤ、ネザライト装備の予備も用意してきた。決戦用金林檎やポーシヨンもある。新兵器も導入した。それも惜しみ無く投入している。

後方支援班は、それらが尽きぬよう素材からツールをクラフト。出来次第、常に戦場へと輸送して支援。食糧等も含む。

地味だが、それらクラフトは確実に戦線維持に貢献しているのだ。舐めてはいけない。

なにより全力で。その方が楽しい。

「むっ」

と、ここで過負荷が発生。

周囲の同志のみならず、ほぼ全ての村人と荒らしが停止した。

時間停止。　フリーズ。　何処かで大規模核爆発か対消滅が発生したか。

あいや、目の前のボスは動いている。

よもやコイツの仕業であろうか？

「ワシの仕業ではない。　動かぬ様子からして、貴様達でもないな」

念話で世界の同志と状況を確認し合う。

……予想と違った。　なんでも北方のドラゴンが世界に過負荷を掛けたとの事。

「まあ良い。　興醒めだが、屠らせて貰うぞ。　少なくとも貴様達、創

造主は大きな脅威だからな」

唯一動けるボスが、次々と同志を屠る。

軽く殴られただけで瞬殺されていく。　湯水の如く消耗する戦力。

抵抗したくても身動き出来ない。　意識が良くも悪くも飛ぶだけだ。

まさかの事態だ。

過負荷や時空問題は過去にも事例があったものの、この残酷で寛大な世界の事だ。

万単位の村人が往来しても時空間が歪まないのだから、ちよつとやそつとは平気なスペック世界だと油断していた。

「残念だったなシオン、ルミナス。貴様達の信奉する創造主、クラフターは、この程度の存在だったという事よ」

（くっ！ 見てるしかないというのか!?!）

（妾は信奉なぞしておらんわツ!!）

だが、とクラフター。

成る程。あり得なくないと。

イングラシア時代の時荒らしに、最近では迷宮地下の虫野郎の事例がある。

個人スペックが世界スペックを凌駕する可能性は示唆されていた。ひとり、またひとり同志が殴られる。

リスクル紛いの非道行為を受ける様を見せられつつ、冷静に思考した。

「ふんっ！ ふんっ！」

（次々と彼等が!）

（再誕するとはいえ、停止世界では!）

意図的ならば許されない荒らし行為。しかし止めようにも止まった世界では止められない。

いつもだつたら、どう足掻いても絶望だ。

”何処かの誰か”が再構築（リセット）しない限り。

それもまた、絶望的な手段。世界を消すと同義であるから。

だが喜べ。今回、希望があるぞ。

軍事部は過負荷条件下でも行動可能な特殊装備開発に着手していた。

その試作機の実験をしていた同志が何とか行動出来るとの事だったので、1番良い装備が元凶に緊急発進。

他の戦場へは劣化版が送られた。

此処には劣化版が来る予定。

迅速な行動は良い。だが心配である。

試験機は実戦経験が無い。

未知数だ。頼る他ないが。

「また復活するにせよ、どこまで続けられるか見ものだな。

さて、この辺にしておこう。次は貴様、ルミナスだ。果たして

彼等の様に再誕出来るのかな？」

(ツ!?)

「見えているのに動けない状態ならば、かなりの恐怖だろう。

だが安心せい。直ぐ楽になる。一撃で仕留めるからな」

今度はルミナスに寄る巨人。

欺瞞の神に拳が迫った、正にその時。

「ぬっ!？」

間を割り空より漆黒一閃、飛翔斬。

動けぬ世界で動くモノ。それは――。

「マイン……クラフターだと……ツ！」

劣化版参上。

実験と救援の為、助太刀致す。

全身強化甲冑。PSは巨人のボス、ダグリユールにネザライトの

剣先を向けた。

「動けるといふのか？　この停止世界で！」

「前言撤回だ！　貴様達マインクラフターは面白いツ！」

(流石です！)

(来てくれたか！)

明確に対峙。 敵対意志を見せ付ける。

驕るな。 クラフターは構えた。

ドラゴンのみならず、ハイスペック共は過負荷状態でも動けるとしてもだ。

才能に甘んじるな。 我々はその先へ往く。

「貴様達ならば、或いは我が主の元へ行けるやもな……」

クラフターを舐めるなよ。

欲張り続ける。 作り続ける。

その生き様は偉くない。 時に悪だ。 時に正義だ。 時に苦痛だ。

楽しいばかりではない。 苦しい場合もある。

人によつては意見も異なる。 喧嘩もする。

だが誇つて良い。 大なり小なり努力したから今がある。 恥じ

ない。 突き進む。

それは苦難を超えていく自信と力になる。

「ならば生温い事は出来ぬ！ 本気で往かせて貰うぞ！

グラソード、フェン、来るのだ。

今こそ、我等の力を見せる時である!!」

そして今。

これより特権的地位にいる錯覚を持つ荒らしを斬り捨て御免とする。

向こうも覚悟が良い。 己も出来た。

「開封、トリニティ!!」

別のボス含め、眩い光に包まれた。
と思えば、次には三面六臂の巨神が顕現。
わおデカイ。凄く強そう。
ウィザー何体分の強さなのだろうか。
まあ……倒そう。興奮しつつも。

(何という神話級……ですが我等がマインクラフターを信じるのみです！　(ご武運を!!))

(ふんっ。少しは信じてやる。この妾がじゃぞ。
だから、その……勝てマインクラフターよ！
無様に負ける事は許さんからな!!)

怯まない。戦う。それだけ。

難しい話じゃない。少なくともPSの話より楽だと思いつつ、クラフターは剣を振る。

3体が1体に纏まってくれた訳だし。

ああ3体というと、あの3人は元気かな。

ふとクラフターは記憶を辿る。

シズと出会った際にもいた、あのトリオ。

あと狐娘、鳥娘、青髪娘。

他にも様々な出会いが……。

おつといかん。戦闘に集中せねば。

雑念する余裕を見せつつ、クラフターは荒らしの奔流に逆らうのだった。



巨神と創造主の激闘開始。

創造主、クラフターは出方を探る為、雪玉を投擲しつつ右往左往。

攻撃を誘う。

「相変わらずよのお。　だが、勝ちに往く！」

対する巨神、破壊の権化であるダグリユールは雪玉を喰らってもノックバックもダメージも起きず大地に座す様に微動しない。

だが反撃とばかりに闘気を雷に変換し、クラフターへ放電。

轟音。　衝撃。　刹那の出来事。

喰らった。　吹き飛んだ。　それを認識したのは、かなり遅れてからだった。　足を空中でジタバタしつつ離れた所に着地。

「耐えるか。　頑丈だな」

だが体力は全く減少していない。

余裕の耐久性だ。

試験機、それも劣化版とはいえPSはPS。　他より飛行時間や耐久性が低い、良い装備だ。　良いデータが取れた。

「お主らの事だ。　仮面の下では笑顔が溢れているのだろう。

こんな時にも娯楽を見出す才能。　羨ましい限りだ」

帯電クリーパーの様に、逆に能力アップ機能を付加出来たら面白そう。

……娘はクリーパーカーをしているが。　帯電体になるのだろうか？

好奇心、探究心、様々な念が浮かんで消える。

「まあ、これで終わる奴ではないわな」

再度吹き飛んだ。

また雷撃だ……クラフターは辟易した。

PSの防御が勝り、ほぼノーダメなもの、ノックバックが起きて面倒なのだ。

飛び攻撃は厄介だ。海底神殿でのガーディアンとの記憶が蘇る。アレも回避は困難だった。今回もだ。

クラフターは眉間に皺を寄せた。

まあ今回の方がマシか。水中戦じゃない。

呼吸も気にしないで済むし、視界も開け、水中での鈍足もない。

劣化版とはいえPSも着用している。条件は悪くない。

自由度が高い。後は創造力(想像力)が試される。腕の見せ所だ。

結局のところ、最後はクラフトに繋がる。

自由度に関しても、クラフト次第で化けていく。不平不満、理不尽や不自由な環境も、足らぬ足らぬも全て工夫次第。

「時間が流れ始めたか」

この間にも北方でのドンパチの流れにより、時間が流れ始める。

動ける様になった周囲の者達は目の前の激戦に息を呑みつつ、直ぐに行動へ移す。

「ルベリオスの結界維持に全力を注ぐのじゃ！」

シオンは全力で防御に専念せよ！ この戦い、妾達の手に見える

代物ではない！」

「言われずとも！」

「後は信じるのみじゃ」

ルミナス達は後方退避。構わない。そうしろ。彷徨かれて

も邪魔だ。村人は村人らしく逃げろ。死ぬのは勝手だが邪魔は許さない。

それより我々だ。やりたい事をしなければ。

過負荷から解放され、動ける様になった生存同志も戦闘再開。

周囲の雑魚巨人を剣と弓矢、軍事部は戦車や銃火器、衛星砲で倒していく。

後方支援班は鉄ブロックとカボチャを組み合わせて、アイアンゴレム量産。戦場に解き放つ。性能が劣れど味方は多い方が良い。ゴレムと雑魚が殴り合っている間に、ある者は効率強化ダイヤスコップやツルハシで敵陣深くに潜り込み、戦術反物質爆弾で地面ごと荒らしを消し飛ばした。

「一方的です！ クラフターが勝ちますよ！」

「じゃが、ダグリユールは格が違うぞ」

「言ってたじゃないですか。信じるのみと」

「ふふ、そうであつたな。」

永く神と欺瞞し信奉の対象とされてきた妾が、憎き創造主を信じ祈る日が来るとは。

皮肉というべきか、それとも——」

「今は応援すれば良いのですっ！」

「で、あるな。」

だが何故だろう。郷愁にも似た感覚は……心地良い気持ちが入み上がる」

汚い花火すら起きず消えていく荒らし巨人。

そうだ。消えて逝け。荒らし存在は許されない。良い訳がない。

ない。道理が無い。

ウィザー級ボスもだ。例外は無い。

其方はPSに任す。通常装備で割って入れる余力があれば加勢する。

それも工夫次第。クラフターは道を見つける。なければ作る。いつも通りに。

「ふふふ。面白くなってきたな！」

取り巻きは問題ない。不敵なボスが問題だ。

どれだけ雑魚を倒したところで、此奴を倒さねば意味がない。

神殿や遺跡、廃坑もチェストだけ漁ってサヨナラする同志もいるにはいるが、スポブ口部屋制圧までしたい同志もいる。湧き潰しを尽くしたい同志もいる。それは自由だ。

だが荒らし。お前は駄目だ。

存在が許せない。不平不満を暴力と迷惑行為で発散する奴を赦しておけない。

様々な思考を持つマルチクラフターであれど、それは一貫性がある。少なくとも、己はそう愚考した。

「同胞は逝き続け、帰るべき場も死に体の土地である。

最早、道は前にしかないのだ。我が主への忠誠心を貫く為、戦士として進むのみ！」

雷撃。雷撃。被弾。回避。 ”ブロック”。

雪玉牽制中止。負傷スプラッシュポーションで威嚇攻撃した次に弓を引き、矢で射抜く。

状態異常を起こす矢を数種類放った。

的はデカイので当たりはした。だが耐性があるのか体力が高過ぎるのか効く様子がない。

「この程度じゃあるまい。

常に新しい事を作る欲求で満ちた貴様達だ。通常の間人間の武器や方法で満足する訳がない。

さあ見せてみる。お前達の力を！」

「見た事ない装備を纏う者がいるのです。当然、彼等の底力はこんなもんじゃないですよ！」

「見たつもりもないのじゃがな。見たところで、次には更に底が深くなつてようて。

見れば見るほど疲れる深淵よ。こういう時や偶に見る分には

……まあ……良いと思える」

エンダーマンの如き移動速度で目の前に来られた刹那、何人かの同志が纏めて手で捕まり……そのまま握り潰されリスポーン。遺品が空中四散。そのついでに足下の同志も何人か潰された。

其方はエンチャントダイヤ防具なものもあり生き延びたが、大地に埋設されてしまう。窒息ダメージが発生したので、慌ててスコップやツルハシを振り回して脱出。

安心し向き直った刹那、目の前に巨大な拳。

目にも止まらぬ速度で殴られた。大地は拳による砂嵐に隠れ、同志は影になる間も無く遺品を撒き散らし消されてしまった。

「どうした！ 反撃して見せろ！」

他と比較にならぬ強さを見せてくるも、此方とて同じ事。我々はいつだって全力だ。

落ち着いたら、コイツら巨人の領土を占拠しよう。不毛の大地なぞと云われているが、我々からしたら素晴らしいバイオームだ。

危険な環境であると報告を受けているが、そんな事を云ったら世界中そうである。

今更なんだ。我々の開拓欲は、それ如きで止められない。宇宙にも行ったし。

……深海開拓もやれるか。やりたい事だらけで困るな全く！

「ワシは貴様達マインクラフターの生き様を否定しない！」

自由奔放だが羨ましくもあった。生きるとは、こうも楽しいのかと。希望に溢れているのかと！

そして、貴様達なら我等が領土を蘇らせてくれるやもとも！

だが敵同士として戦場で語る他なくなった今、後戻りも何もない！」

じゃあ、その為にもマジ殴りで。
開拓も冒険も荒らし駆除の後。 憂いを残して進めない。 障害は排除する。 乗り越える。 その為にいる。 生きる。 証を作り続ける。

「さあ、互いに最高の時間にしよう！」

さあ、往くぞ。

周囲の同志が弓矢で援護。 その弾幕アーチを潜り抜け、PSは飛翔斬の姿勢。

エンチャントの力で大地を蹴り、ポーション超えの飛翔力で天に上がる。

太陽を背負い勢い良く下り、エンチャントされたネザライトの剣で巨体を一刀両断する構えを取った。

「つまらぬッー！」

雷撃が何発も放たれる。

慌てず剣ガード。

そして……剣が帯電。 バチバチと音を立て、エンチャントと混ざり異なる性質となるが気にせず構え直す。

黒光に電気が走る。 帯電エンダーマンの様。

「簡単に終わりはせんか！ それでこそよ！」

音速超えの攻撃であろうと構わない。 タイミングさえ合えば良い。 ガードなら間に合わせるだけで十分だ。

何発も同じ攻撃を喰らうクラフターじゃない。

防げないものは防げないが。 その時は別の方法を考えた。

まあ何にせよ。 今は剣を振る時だ。

「ぬんっ！」

相手が拳を突き出すと同時に、此方も剣を振り下ろした。ジャストアタック同士、違う性質と化した雷撃が衝突。

世界が軋む様な音を奏でる。

「ぐっ!!」

クラフターは声にならぬ声を上げ、弾き返さんとする拳に抵抗。負けじと力を込め振り抜いて見せた。ボスの腕を斬り落とす。

「流石、貴様達の魔剣だ。今のワシに傷を負わせるとは……」

着地。同時に斬り返す。今度は足を切断。相手を転倒させた。が、しかし。腕も足も瞬時に再生して見せた。

「やるな……だが、まだまだ！」

まさか無敵か。体力バーが見えれば、状況が分かるのに。無いのが惜しい。

……PSに追加したい機能だな。

取り敢えず距離を取り黒曜石の防壁を形成。裏に隠れて火炎エンジンチャントの弓矢を放つ。大きな火だるまが出来た。が、やはり耐性があるのかダメージを負う雰囲気がない。

それを思えば、何か火だるまにしてみました所為で余計強く見える。

シズの時とは異なる迫力だ。デカいし。

「やはりダグリユールは強い。何か奴らに策はあるのか？」
「大丈夫です！　いつも何とでもしてきた人達ですから！」

「謎の信頼感があるのじゃな……分からんでもない妾が悔しい……」

さあ、次はどうする？

どう来る、でもある。

直感で直下掘で2マス、身体が丁度隠れる蝟壺に入りスニーク姿勢。

刹那。上で拳が黒曜石に当たり、砕け散る。貫通して頭上を通り過ぎたところを斬り上げた。再び腕を落とす。が、やはり即再生した。無駄だと云わんばかりに。

「貴様の剣では止めまで至れぬな。むっ！」

クラフターは止まらない。

即席塹壕から飛び跳ね、再生した腕の上に乗ると、そのまま駆け登りボスの顔まで一気呵成に走り往く。

PSエンチャントにより、スニークなしでも落ちる事なく、そして俊足ポーションの効果より速い速度だ。

足場とする腕を振り回されても、問題はない。

「そう来るか！　だが！」

他に生えている複数の腕が迫り来る。

それくらい予想していたから、剣を振り回して余計な腕、拳を切断しつつ足は止めない。

それも即再生して追い掛けてくるも、周囲の同志が弓矢、軍事部から戦車砲や機関砲、ロケット弾を集中砲火、狙いを逸らし援護。

「仲間が良いものだな。だが負けん！」

巨人が大剣を装備。

それでなんと、クラフターが足場とした腕を自ら斬り落とした。

顔まで後少し、というところだ。
エンダーパールを顔面に投擲。

「無駄だー！」

別の手の平でガードされた。

クラフター、平にワープしてしまう。そのまま握り潰された。
だがPSの防御力が上回る。潰れない。また、村人には難しい
”埋まった状態”でのツール使用”は慣れている。

そのまま剣を振り回し、指をバラバラにして脱出。顔面は目の
前。このままジェットで飛翔。ところが。

「ふんっ！」

ペチンツ。

羽虫を落とす様にアツサリ地面に叩き潰されてしまった。
更に足で踏まれる追い討ち。そのまま電撃を流される。

B Bが教えてくれた、リムルの記憶にあった遊びの1種だろうか、
コレは。

「あああ……い！」

「持久戦になるかの、これは」

電気アンマ、とか云ったか？

だが遊びというには危険行為やしないか。

防具無しじやリスポンものだぞ。

仮にコレが本当に遊びなら……我々は舐められている事になる。
悔しい。絶対潰す。荒らし許さん慈悲はない。

また埋まった状態から剣を振り回し、バラして脱出。すると今度
は大剣が迫った。

「防ぎ切れまいッ！」

反射的に剣ガードするも、そのままノックバック発生。　吹き飛ばしてしまう。

ああ、これは……野球という遊びか？

いやテニス、あいやゴルフか？

「アレは私でも……」

「まあ、大きさがな」

遠くに転がされるも、即復帰。

リムルとシズの元世界も危険な環境なのかも知れない。　核兵器が沢山作られているらしい事からして、もうこれくらいの危険は有り触れたものなのだろう。

リムルとシズ達が元の世界に戻ろうとしなくても無理ないか。　こんなのが遊びの域とか、リスポーン出来る我々も嫌だと思えるのに、出来ぬ村人には酷だ。　母国は日本という島国らしいが、危険な文化が発達しているのではないか？

あいや世界全体か。　発祥は別の国だったりするらしいから。

だからか？　異世界人が強く感じるのは。

ああも強くないと、きつと生き残れないのだ。

我々も危険行為を多くしてきたが……例えばTNTキャノンを応用し、自身を弾にして飛んで行くという事をした。

だがあれは、ホイホイ軽い遊び感覚でやるにはコスト的にもキツイ。　

勿論、素晴らしいクラフトや文化だと感じるものもあるが……良いところだけを見習おう。

それはそうと、己は戻らないと。

エンチャントの力でして、俊足からの飛翔で素早い行動。　不意打ちの様に全力で体当たりを仕掛け、相手の巨体をよろけさせた。

「諦めやしないか。分かっていたが、果たして何処まで続くか。しかし、つまらぬ戦を続けるつもりもない。決めさせて貰うぞ！」

その時、不思議な事が起きた。

また時空異常を感じ取ったのだ。

だが先程とは別の違和感。空間が切り取られた様な感覚。身体は重くない。だが目の前の巨人と己以外、存在を確認出来ない感覚。

PSを着用しているとはいえ、危険極まりない大技が来るのではないか？

「捕らえたぞ、喰らうが良い！」

クエーサーブレイク！」

クラフターが対策する時間もなく、空間に激震が走る。

目視不可能の光量が放たれ、不可逆的破壊干渉波が生じる。

ダグリユールが自身のエネルギーの6割を消耗し、生み出した吸収光線であった。

ダグリユールが、その身を擬似的なブラックホールへと変換し、空間内部の全ての物質を破壊し吸収しているのだ。

その時生じる摩擦により、隔絶した次元を超えて、眩い光が溢れ出す。

「うっ……!?!」

「何が起きておるのじゃー！」

如何なる生命体であっても、この圧倒的なまでの超高密度エネルギーの干渉を受けたならば、その存在維持は不可能であろう。

ただ分解され、ブラックホールへと飲み込まれ消滅するのみ。連続して使用する事など出来ぬ一撃必殺の攻撃手段。

ダグリユールは必殺の確信を持ち、結果を確認する。

ダグリユールの生み出した次元の隔絶空間は、放射した光線をダグリユールが吸い込んだ時に一緒に閉じている。

しかし、次元に歪みが残り、元の世界にまでも影響を及ぼしていたのが見て取れた。

それは時が経てば、周囲と同化し元に戻るのだが……超絶的な破壊の傷跡であると言えた。

その攻撃に耐え得る物など、存在するハズも無い……筈だった。

「ば、馬鹿な!!　あれを喰らって、生きている、だと!?!」

ダグリユールは驚愕に目を見開いた。

それもそう。

クラフターは普通に立っていたのだから。

「なんとという性能の防具だ……神話級にしても、いやしかし……」

荒らし巨人が困惑し、だが直ぐ立ち直り。

「お前達だからな。　何でも出来そうだ」

思考放棄した。　深淵に嵌まるより良い。

なんなら、吸い込んだら吸い込んだで悲惨な事が待ち受けていた可能性がある。

吸い込んだものはエネルギーとして取り込まれたのだろうか、それがクラフターであるならば……軍服悪魔達の悲劇を見るに、まあその、大変危険だったと思われる。

逆に考えると、吸い込まれる事でダグリユールを無力化出来たかも知れない。

だがその可能性は、この場にいる者誰もが知らない。　クラフターも含めて。

その所為で、何事もなく良かったと安堵してしまうシオン達。

「何事かと思いました。 ですが、そこは我等が創造主です！」

「互いに理不尽な存在よの……だがダグリユールよ、これで少しは理解出来てしまったのではないか？」

「彼等の強さ、何より可能性を」

クラフターは震えた。

何をされたかよく分からない。 分からないが故の恐怖もある。だが同時にPSの防御力の凄さに感動もしていた。

劣化版とはいえ、あの異常空間攻撃に耐えた。

これは快拳なのでは？

そう思った。 感動のあまり上手く踊れないクラフター。 震える身体のまま、何とか綺麗な空を拝む。

「そうだな。 だが」

「まだ戦い続けるかの」

「そうだ。 向こうが諦めない様に、ワシも諦められないのだ」

「自由に生きる彼等に希望を持っていたな。 ならば、この先は任せるのも良いのではないか？」

「何を言うかと思えば。 有り得ぬ、我が主に従わねばならないのだ」

「それは星龍王ヴェルダナーヴァの事か」

「知っていたのか」

「連中の通訳達から教えて貰った分もあるがの。 だが、ヴェルダは偽物ではないか？」

「かも、知れんな」

だが、あの覇気は紛れもなくヴェルダナーヴァ様のものであった。それで十分。 ワシ等は、かの方にお仕えする為に生きておるのだ」

「偽者如きにいいように扱き使われるなど、破壊神の名が泣くぞ」

この場にいる創造主、クラフターの様に自由に生きろとは言わん。

だが考え直せ。彼等の力さえあれば、同胞達を救う事にも繋がるのじゃ。

現に彼等は種族関係なく多くの集落を救ってきている。

プライドに触れるかも知れぬが、助けを乞うのが悪だと妾は思わん」

「黙れ！　かの方を愚弄するなど許しがたい」

「忠誠心は立派じゃ。逆にそれにしか縋れない哀れな存在よ。」

見た目は大きいのが、心の広さならばマインクラフターが遙かに上じゃな」

しまった。戦闘中だった。

前を向く。何やらハアンハアン鳴きあっている。

いや、改心とか期待しない。するだけ裏切られた時の反動があるので。

勿論、戦わずに終わるなら良い。だが大抵失敗してきた。残心の構えは解かない。

「くどいぞ！　ワシの忠誠心は死んでも変わらぬわ！」

「そうか。残念じゃ。じゃがな、続きをする前に領土を見直して来い」

「別れを惜しむモノなぞない」

「ないから、作られていくものもある」

「……まさか」

「貴様達が出払った隙に、連中が好き放題しているじゃろうよ」

「……」

「最期にしても、可能性を見てからで良いと思わんか？」

「……………分かった」

巨人が構えを解いた。移動する。

速いからついて行くのが大変だったが、行き着いた先は巨人連中の領土の端だった。

「これは……！」

同志が複数いる。

空き地が広がる大地を整地し、松明を刺しまくり、土で仮に使用する土地を主張し、仮拠点の豆腐ハウスが並んでいく。

草木も生えぬ土地が殺風景で嫌だったのか、一部の同志が草ブロックを敷き詰め、追うように別同志が骨粉で草木、花を乱れさせる。

水バケツで無限水源の場所を作るついで、川状のモノを作りあげ、荒れた大地に清水が流れ始めた。

それに沿う様に小規模畑が作られる。

それに釣られてか、既にどこからか虫やら鳥やら小動物がやって来た。

植林場も作られていた。例によって白樺だが、未来へ歩み始めた事を感じさせる明るい光景である。

開拓地初期段階で、見慣れた光景でもあるが、作業手順等も大体決まっている為か、この辺の発展速度は凄く早い。

そんな光景に、巨人は驚愕している。

「そうか。世界中にクラフターは分散し、僅かな時間で大きな事を多く成し遂げてきた者達であったからな。

そして、この世界変換ともいべき劇的能力……地道に、だが効率的に確実に変えられる……この大地に再び生命の息吹が訪れるとは」「このまま水が枯れ、巨人の生命力でも生存不可能な土地になるよりは良い光景じゃろ？」

「ああ……ああ！ 勿論だとも……ッ」

後で加勢するのも手か。開拓に。

この地に巨人が来て、領土奪還的に暴行してきたら倒したいし。

そして我々の土地にするのだ。ひゃっほい。

「だが……気付いていたのか。ワシが縛鎖巨神団を動かしてまで、ルミナス、貴様の領土に侵攻した真の目的に」

「そんな事は知らぬ。妾には関係ない。」

だから、貴様の部下に若年兵や女子供がおらず、死兵のみである事もどうでも良い事なのだ」

「ふ、ふははははは！ とぼけるか。」

ヴェルダナーヴァ様の命令は、かの地に在る天空門を守護する事。我等巨人は、その命令を忠実に守ってきた。

そして、このままでは命令に従い、朽ちる事になると理解していたのだ。

それでも良かった。ワシだけならば、な。

だが、かの方が去った後に生まれた者達までも、同じ運命を押し付けるのは忍びなかったのだ。

ルミナス、貴様には悪いがチャンスだと思ったよ」

「所詮この世は弱肉強食。誰も責めはせん」

「しかし何故、何故彼等は、この地を蘇らせる？ 我等を助ける為、か？」

「ふっ、それは勘違いじゃ。連中はやりたいから、やっているに過ぎん。」

まさか、死の砂漠地帯にも連中が進出するとは、初めこそ信じられずにいたがな。

まあ、結果はこれじゃ。良いじゃろ？」

「ふふっ、ふはははははは！ あくまで好き勝手にしているだけ、か！ 良かろう、恩になど感じぬぞマインクラフターよ！」

なんか鳴かれた。

笑顔だ。デカい笑顔だ。色んな意味で。

きっとクラフトを褒めているのだ。荒らす気配もない。なら許しても良いかな！

許さんと連呼する癖に、クラフトを褒められると急に甘くなるクラフターなのであった。

「次に会う時、また喧嘩をしようぞ。今回は引き分けじゃが、次は勝つ！　ワシは甘くないのでな！」

此方も笑顔。　そして御辞儀。

また荒らすなら容赦しないぞ、と剣をチラつかせつつも。

それに領かれると、クルリと別方向へ。　その先は巨人連中がいる戦場だ。

そして、何やら鳴き始める。

「聞けい！　巨人族の戦士達よ！」

クラフターとワシの戦は一先ず終わった！　結果は全力を尽くし倒し切れなかった意味ではワシの負けである！

これを機に王の座を他者へ譲る！　また、ワシは、ヴェルダナーヴア様に忠誠を誓っていたが、新たな王に強制するものではない。

新たな王は自身の判断にて、何が正しいのか見極めよ——」

『ははっ！　我等一同、新たな王に従い、国の為に尽くします!!』

ダグリユールの敗北と、マインクラフターの救済を理解した縛鎖巨神団の精鋭達は、異を唱える事なく従ったのだった。

それを見届け、満足そうに頷くダグリユール。

マインクラフターにとっては、何のこっちゃと首を傾げたが。

「この大戦を見届ける事が出来ぬのは残念だが、もう時間が無いようだ。

貴様達ならば、ワシと違い正しい道を選択出来ると信じておるぞ。

ワシの留守は任せた！　では、さらばだ——」

その言葉を最後に、ダグリユールは地面に吸い込まれて消えていった。

この地と、自身の肉体の再生を行う為に、長き眠りにつく為に。

クラフターとしては……何が何だか分からないが、荒らしも消えて土地も手に入る感じっぽいので、まあ良いかと笑顔で頷いた。

こうして、ダグリユール軍の侵攻は失敗に終わった。

天使達は、1匹残らずクラフターやルベリオス軍、増援の連邦軍に倒された。

リムルとルミナス、クラフターの連合軍は、この地の防衛に成功したのである。

「忌々しい創造主だと嫌っていたが、こういう時は頼りになる。

……その、なんだ。 礼を言うぞ」

「顔が赤いですよ、ルミナス。 疲れが出たのですか？」

「シオン、余計な事は言わんで良い！」

祭りは続く。

さあ、次は何処に行こうかな？

163. 幸運と邁進劇

蠱惑の大都市イングラシア。

大陸全土が戦火に包まれた今、漂う硝煙に混じるは思い出と大勢住まう村人。

それと荒らしの羽虫共。 対するは武装村人と軍事部。 走り回り常に忙しい。

同時に胸に迫る。 剣と弓矢と、後なんかよく分からないモノを飛び交わせているのだから。

「お母さん……」

「大丈夫よ。 聖騎士さんが、何よりあの人達が守ってくれるわ」

さても多くの村人は非戦闘員。 連中は元の世界の村人同様に教会や創造主が建築した頑丈そうな建造物に駆け込み、一塊となって怯え切っていた。

ゾンビイベントの如く。

それはまあ良い。 想像の範疇だ。 邪魔しなければ良い。 問題は別に起きた。 ある教会の側を過ぎた時だ。

「国民よ！ そのこの魔女は、私に濡れ衣を着せ評議会での立場を失墜させた。

あまつさえ、我が父を弑しこの国に混乱を不幸を齎そうとしている。

賢明な諸君らならば、誰の言葉が正しいのか理解してくれると信じるものである！」

教会に向かって偉そうな武装村人共が喚いている。 戦場で羽虫と戦うでもなく。

一体何がしたいのか分からないから、クラフターは首を傾げた。

避難したいならすれば良い。 戦うなら戦えば良い。 なのに何方

もしない。愚言愚行に意味があるのだろうか。

或いは中にヒナタと仲間がいるからとも考えた。

敵と認識して詰めているのだろう。アイアンゴーレムの様に。だが、と首を振る。

潮流に喚くだけの傍流の凶ならば、淘汰されて仕方ないねとも思った。

「この国の王子、エルリックと護衛騎士団団長ライナー。評議会の席での失態を取り繕うべく、強引な手段に……」

「しかも、国王を弑逆し、その罪までヒナタ様に被せるつもりのようにすな」

「非常事態に関わらず面子や権力を重視し、自国民の事を考えられない……ここまで馬鹿だったなんて……」

クラフターに政治は判らぬ。

理解するつもりも毛頭無い。束縛を嫌い自由に生きる身だ。

心底どうでも良い事に拘らない。好きにしている。お互い様だ。

意に介さない。時々道が重なり邪魔だと殴り合うけど。

同時に解せぬ事が多くある。

村人とは創造主の理解出来ない事を往々にする生き物だと知り得ているものの、未だ戦時に置いて呑気に鳴く者共に呆れる他ない。

それともゾンビにしか対応してないのだろうか。猫を連れてく

れば逃げてくれるだろうか。クリーパーはそうである。或いは

水流で流すか。エンダーマンには有効だった。

「これは聖教会を囲む国軍を慄く目で見つめる、周辺住民へ向けての演説ね。

この未曾有の危機に、国軍を動かしてまで国が一体何を始めたのかという疑問に対する回答……パフォーマンスに過ぎない」

「ヒナタ様……それを理解出来る人は残念ながら少ないですよ。ヒナタ様は評判が良いとは言えませんが、対してエルリック王子は見た

目は優男、女性人気は高い」

「大丈夫ですヒナタ様！　今なら男性人気ならヒナタ様の方が！」

「そういう事を争ってるんじゃない」

「さて、どうします？」

よし殺そう。

思い立ったが吉日。　太平の世に邪魔虫は要らぬ。

クラフターは羽虫に向けていた剣先と矢尻の一部を国軍に向け始めた。

なに。　村人は腐るほど居る。　ゾンビが湧かないのが不思議な程に。　少し減った位で何とも無いだろう。　ファルムスもそうだった。

「このままではヤツ等が突入してくるのは時間の問題です。

我々だけで脱出するなら突破可能ですが、それでは住民を見殺しにする事になる。　住民を守り抜く事は不可能ですよ？」

大した問題じゃない。

教会を包囲しているだけの無能だ。　包囲網を更に包囲していくクラフター面々。

相手は気付かない。　油断大敵。　敵は背中に居ないという驕りを何故出来た。　ただでさえ荒らしイベント発生中なのに。　街外周には羽虫が飛び交う光景が見えないのか。

我々の世界で同じ事をしたらクリーパーにゼロ距離爆破されるところじゃ済まない。　或いは街中故の油断だとして。

まあ良い。　敵の分には先手を取れる。

取り敢えず教会は破壊したくない。　造形は素晴らしいのだ。　TNT等の爆発物使用は避ける。

「こんな事なら聖都に移っておれば……外にいる者達に頼るのは？」

「今のヒナタ様なら彼等と会話が出来る筈です」

「……あまり頼りたくないのだけど。 贅沢は言えないわね、味方は1人でも多い方が良いから。」

と、その前に。 奴等は何を要求しているの?」

「先程から、ヒナタ様を出せと言ってますよ。」

あのライナーというヤツが、自分の力を誇示したいみたいです。 何でも、ヒナタ様が最強と呼ばれている事が気に食わないみたいです。 ですね。

何なら、俺が相手してきましようか?」

相手の始末、どうしよう。

クラフターは既に荒らしの調理方法を決め始めている。 見た目だけで判断して良いなら、取るに足らない武装村人でしかない。

普通に火矢で針火山にし、残党は剣で処理。 いつもの感じで良い。 どうせ詰まらない相手だ。 処理したら羽虫掃除に戻らねばならない。 いつまでも村人に構ってられないのだ。

あいや待てよ、と今更躊躇うクラフター。 スニーク姿勢で右往左往。

「この危機的状況で、何を悠長な……まさか本気で言っているの?」

ライナーとは、そこまで大馬鹿者なの?」

「そのまさか、ですよ」

「私は既に以前ほどの力は無い。 引退した身よ」

「関係ないんじゃないですかね。」

ライナーにとっては、ヒナタ様を大衆の前で圧倒的して、自分の強さを誇示したいのでしょう。

その際に、甚振ってやろうという下心まで透けて見えてましたよ」

「で? 私が負けて見せれば、住民は助かるの?」

「何とも言えません。 ですが負けると言っても、それは死を意味します。」

王を弑した罪を擦り付ける事こそが、エルリック王子の目的ですし。

ライナーと王子、二人の利害が一致した上でのクーデターでしょうから」

眺めているのも良いか。

このまま行けば憎きヒナタは大乱闘に巻き込まれる。ゾンビピッグマンの如き大乱闘の開幕だ。ソレを愉悦と高みの見物といくのも乙じやないか。

偶には我々のみならず向こうも苦勞を知るべきなのだ。マツピングしているだけで針山にされ刺殺され全ロストする苦勞とは比にならないだろうが、多少は苦痛を知れ。

とはいえヒナタが簡単にくたばるとは思えない。最近はリスポーンもした事で、クラフター化も疑っている。此処で仮に死んでも何処かのベッドで復活するだろう。服すら纏わぬ全裸姿で。

「私が出るしかないわね。その間に可能な限り防御を整えて。

何重にも防御結界を重ね、大聖堂を鉄壁の要塞に作り変えなさい。所詮、気休めかも知れないけれど……何もしないよりは時間が稼げるだろうから。

期待は出来ないけれど……もしかすると、彼等が何かしてくれるかも知れないし」

「ですがヒナタ様……」

「安心しなさい。死ぬつもりはないわ。

精々悪あがきして、時間を稼ぎます。万が一死んだとしても……いえ、また生き返れるなんて甘い事は考えない。

だから、どんなに無様でも諦めないわよ」

そんな訳で。

突撃は今か今かと観察していると、逆にヒナタが教会からノコノコ出て来た。

「ひゃっはー！

出て来たな魔女が！

抵抗する様なら中にいる

奴らは皆殺しだあ！」

「避難してきた自国民を人質？　反吐が出るわね。　国を担う者の発言とは到底信じられない」

「お前の意見なんざ関係ねーんだよ馬鹿が！　たっぷり痛ぶった後は可愛がってやんよ！」

暫し喧しいハアン合唱を交わすと、次には偉そうな奴が一方的にヒナタを斬り刻み、殴る蹴るのやりたい放題。

対してクラフターは笑顔で飛び跳ねる。

大分彼女と配下には苦しめられて、特にマッピングの時は人生の間を無駄にしたから、こうして苦しんでいるのを見られてホンマ嬉しいわと。

「ぐっ！　　がっ……っ！」

「いつまで保つか見ものだなあ。　まっ、俺様は優しいからよ、直ぐお仲間もあの世に送ってやんよ、感謝しろや」

ヒナタは無抵抗。　されるがまま。

周囲も助けに入るでもなく傍観。

ダメージ計算でもしているのだろう。　ならば加勢するのは悪手か。　同じクラフターとして計算の邪魔はしたくない。　放置すれば死にそうだが、それすらも考えの内だと見るべきだ。

やがて倒れた。　全ロスト覚悟か。　身を粉にする姿勢は嫌いじゃない。　クラフターは感心して頷いた。

「ひ、ヒナタ様！」

その内にヒナタの仲間も出て来ると彼女に駆け寄った。　苦悶の表情だ。　良いぞ。　もっただ。　更に苦しみ。　悲痛な姿を見てクラフターは踊り続ける。

出来ればリムルに1番味合わせたいモノだが。　今いない者に強

請っても仕方ない。

しかし……と一方で思う。

やはり我々の体とは違うと。

クラフターならば何処を斬られようが矢を頭部に受けようが猛毒を食らおうが瀕死の重傷を負う事になろうと命の限り立つ事が出来る。

ヒナタはシズ同様の帰還者……リスポーン経験者だ。故に同じ様に立てると予想していた。が、目の前の惨状から同様の身体を手にした訳ではないという事だと分かる。

「ぐっ……」

「口程にもねえな！ 生意気なテメーには、そうやって地面に転がってるのがお似合いだぜ！」

思考する傍ら、無能で思考してない偉そうな奴が癩に障る高笑いで、哄笑する。

癩に触るからクラフターは荒らし認定し始める。

或いはそうに違いない。殺したくなってきた。

リムルも時々殺意の湧く顔を見せる。奴もいい加減潰したい。

”テンペスト”だし。クラフターは衝動のまま今を生きる。

「貴様ツ！ これは正々堂々とした一騎討ちではなかったのか!？」

気色ばんでハアンと叫ぶ仲間村人。

それを荒らし村人は鼻で笑い飛ばした。

「犯罪者に人権なんざねーんだよ。なーに、俺達は慈悲深い。

泣いて許しを請うなら、死刑の日取りを少し先延ばしにしてやるくらいは考えてやるさ。

もつとも、その間はそれなりに感謝の気持ちを示して貰わないとならんがな。ギャハハツ!!」

ニヤリと下卑た笑いを浮かべる荒らし。

相変わらず発言内容は読み取れないが、気に入らない事に変わり無い。
い。

うーん……殺す。

クラフターはボチボチと武装する。

ヒナタは十分痛い目見た。荒らしは見飽きた。

後はゴミ処理だ。詰まるところ目の前の荒らしと天空を跋扈する羽虫駆除だ。片付けだ。その後は建築に忙しい。宇宙開拓もあるし。

その障害となる、目障りなゴミは世から消えて然るべき。我々の視界に荒らしが許されて良い道理は無いのだから。

都合の良い様に世界を創る。

自己中心の世界を生きる。

立場によって正義は違う。弱き者は淘汰され強きが残る。敗れた者は俗世から解放され、生き延びた者は亡者達の意志を紡ぎ歴史を作る。道理だ。或いは一理ある。

荒らしも荒らしなりの理由があるだろう。

だが都合が悪い事を容認出来ない。

結局、皆して他人なんざ知らなかった。

村人もクラフターも。人魔に拘りもない。気紛れで他者の為に創造し、合間に人生をやってきただけだ。そのみを目立たせ評価する者もいるが、所詮は他人の物差しに過ぎない。

自分の人生は自分のモノ。他人は他人。

無数の道が交わる機会があるだけだ。

気にしては前に進めない。何も作れない。

介入してくる奴は「ああしろこうしろ」と自身の都合の良い環境作りの為に指図しているに過ぎない。

リムルがそうだ。前に「世の中、思い通りにならない事ばかりなんだぞ」と偉そうに説教してきた事があったが、当人は自分の思い通りにさせようとしているから、そんな都合を云えたのだ。

騒ごうがヴェルダだのユウキだのが暴れようが関係ない。相手の都合の良い駒になる気は無い。利用出来るならされてやつても良いが、不利益被るのが判明し切っているなら付き合う理由が無い。向こうがそうする様に、此方もやりたい様にやる。やったもん勝ち。それを障害としたなら実力行使も有り得た。この戦争がそうであろう。更に言えば毎日何処かで意見の押し付け合い、衝突は起きている。規模の問題でしかない。珍しい話じゃない。いつも通りだ。

それはこれからも。この先も。マルチである限り何度でも。逆に意見が無ければ詰まらない世界となる。略。マルチクラフト万歳。

「……お前達」

それを察してかヒナタが我々に語りかける。身体中刻まれ、RSに塗れた様な赤い身体を無理に起こしながら。

「手を……貸して、くれ……」

「はっ、コイツらに言葉が通じる訳……」

相分かった。

刹那抜剣。斬り込んだ。

道中と視界に荒らしがいるから倒す。理想の創造に邪魔だから。何より……悲痛な笑顔で助けを求められて、どうして見捨てられようか。

或いは助けたいから助ける。理由は単純だ。

「なっ！　コイツら!?!」

「まさか言葉が通じたのか!?!」

我々はマルチクラフターだ。

邪魔者に容赦しないが、共に歩む同志を見捨てると学んだ覚えは無い。

好きに作り、好きに生きる。　今も好きにした。

「ありが、とう……」

礼が聞こえた気がする。

当然だ。　売られた恩は買ってくれ。

勿体無い。　などと思うのもまた、意見の押し付けに過ぎないが。



衛星軌道上の軍事衛星経由、BB解析によれば、荒らし認定した武装村人は四千三百人。

塵も積もれば山になる。　塵山にしても数がいればそれなりの脅威だ。

ネザーに於けるゾンビピッグマンとの大乱闘、ファルムスや帝国軍との集団戦闘を経験しているクラフターは辛さ渋さを熟知している。全員を相手取れる程に剣や弓矢、防具の耐久値は高くないし、そもそも味方の数が少ない。　まともに戦っては勝てない。

「彼等がエルリックの馬鹿共を抑えてくれている。　今の内にヒナタ様を回復、安全な場所へ！」

「大勢の国軍相手に……いや彼等ならば！」

「……此処まで派手に斬り込んで。　私も出来る限りの事はしなきゃならないわね」

とはいえ悲観する事でも無い。

ボスを倒せば良い。

ゾンビピッグマンの様なモンスター連中は最後の1匹まで襲って来るものの、束になってる武装村人には大抵ボスが付随していて、ソイツを潰せば何とかなるのを学んだ。

潰しても混乱のまま雑魚が襲って来る事もあるが、例えるならジ・エンドみたいなものだ。

あの世界もボスのエンダードラゴンがいて、他にエンダーマンが跋扈していたが、統率されていた訳でなし、無視出来るなら無視で結構な存在であった。

今回も似たものだ。狙うはボス。的を絞ればやりようはある。単純明快。詰まらない時もある程に。

事実、詰まらない存在を相手にしている。仕方ないね、とも思いつつ剣を振るう。荒らしとはそういうモノだ。

「くそが！　天使共を相手にしてりや良いものを図に乗りやがって！

おいテメエら、いつまでも遊んでねえでさっさとブツ殺せ！

その後はヒナタとその仲間、連中に従って避難した国民を叛逆者として皆殺しだ！」

「で、ですが相手は数多の厄災を打ち払い、かの帝国軍も退けた勇士達……」

「それに何も国民まで手に掛ける事は！」

「数はコッチが上なんだよ馬鹿が！　多い方が正義なんだよ、そんな事も分かんねー馬鹿なのかテメエら？

これ以上文句言う馬鹿、逃げる奴、役立たずはこの場で殺す！」

「そ、そんな！」

「嫌ならさっさと奴らを殺せッ！　向こうは国に逆らう逆賊に過ぎねえ！」

「犯罪者共に怯んでんじゃねーよ屑が！」

奇襲したから反応が鈍い。

ハアンハアンと鳴き合うばかりで甲斐がない。

気が付けば腹心まで斬り込めた。　　楽出来る分には構わないが。荒らしに時間を浪費したくない。それに反撃を許す程、クラフターは甘く無い。このままボスを一刀両断してサヨナラしようとしたその時。

「ヒナタ姉ちゃん！　　先生！　　助けに来たぜ！」

「みんな大丈夫!？」

妙に明るく聞き覚えのある声があったので首を傾げた。

見やれば学園の教え子達にシズ、あと金髪の良く分からん村人であつた。

「ゆ、勇者様?」

「勇者様だぞ……」

「勇者様だ！　　勇者様が戻られた！」

「ま、マサユキ様だぞ！　　マサユキ様が戻られたー！ーッ!!!」

「周りにいる子供達はお弟子さん？」

「あ！　　あの女性はギルドの英雄シズエ・イザワ！」

今は自由学園の先生をされているという！」

「おお！　　何と頼もしいパーティだ！」

首を傾げている間にハアン大合唱。

やがて時間を掛けず同じリズムで鳴き始めた。

うん。　　煩い。　　たぶん今までで1、2を争う。

「マ〜サユキッ、マ〜サユキッ!!」

大合唱の中、金髪が群集の前に進み立つ。

荒らしが血走った目で、その村人を睨み付けた。

様子からして荒らしではないが。　　シズと共にいたし敵ではない。だが何者か。　　随分と村人に人気がある。　　村人達のボスという

雰囲気だ。

「それは間違いじゃないよ」

シズが通訳してくれた。

有難い。ヒナタが一時撤退した今、聞けるのはシズしかない。

「この人はね、イングラシア王国最強の勇者、マサユキなの」

……………へえ。

クラフターは訝しんだ。冷めた視線を送る。

「えつ、えつと……皆、スキルの影響を受けないものね。私もリスポーンしたからか熱狂に当てられない、かな……」

クラフターは天を仰いだ。

マサユキとかいう村人……どうも欺瞞の塊が人の形となって歩いている様に感じてならぬ。

強そうに見えない。なんならその辺の武装村人並か以下にすら感じた。スノーゴレムよりは流石に強いだろうけど。

クラフターは嘘偽りを嫌う。一方、既に何処かで会った様な気もする。帝国戦の最中であろうか。故にナニかを感じてしまったのかも知れない。

とはいえ、かの荒らしの国……吸血姫共よりはマシな存在であろう。そう自身に言い聞かせ無理矢理納得させる。今は議論している場合では無い。

「うん。今は目の前の争いを鎮めよう。人を殺傷するのは嫌だけど……避けられない戦いもある。」

けどマサユキの能力で、ひよっとしたら上手くいくかも知れない。その時は協力して」

取り敢えず剣先を向け直す。

荒らし死すべし慈悲は無い。

道化の件があるので、必ずしも殺す必要は無いかも知れない。

だが基本は殺すべき存在である。

荒らした奴はまた荒らす。見つけた膿は絞り出す。醜い。

世の為にならない。

とはいえ、シズが哀しむなら生かすのも視野に入りたい。荒らし

クラフターへの処置同様、黒曜石の牢獄にでもブチ込んで実験体にもしてやろう。

……我ながら甘くなったものだ。

「ごめんね」

シズが謝る事じゃ無い。

悪いのは荒らしだ。更に言えばユウキとか、首謀者の存在だ。

或いはこうした世の中だ。

欺瞞に踊らされる村人も、ハアン合唱も苛つく事あれど、最も罪に問われるは別にいる。無知も罪となる時があるが、数多を積極的天秤に掛けたがる奴は、偉く強く悪い奴を擁護して媚びる奴だ。そうなってくれるなよ。

1人分の荒らしが荒らしで、100人分の荒らしが英雄だなんて間違いだ。荒らしは荒らし。それ以上でも以下でもない。クラフターがクラフターである様に。

「クラフターさん」

案ずるな、とシズの頭を撫でてみた。

我々はクラフターだと。都合の良い様に創り変えるし、無ければ、やはり創る。

それだけの力が、我々にはある。村人にも。

それはシズ。君にも出来る。

政治は分からないが、そうだと云い切れる誇らしい自信がある。世界を支えているのは、1人1人の努力である。そして人の努力の可能性を信じている。

「そうだね、ありがとう。助けに来たのに逆に元気貰っちゃった」

「あの一、先生同士で郷愁的な雰囲気浸かるなどは言わないけど、助けて欲しいなー、なんて……」

「マサユキ兄ちゃん大丈夫だ！」

「そうよ！ 勇者様が出るまでもないわ！」

「ここは任せてよ！」

「子供に任せるのは気が引けるんだけど」

「先生陣も出るから、ね？」

「いやまあ、それなら……いや良くないけど、俺まで出ても足手纏いだもんな。

すみません、最悪は宜しくお願いします……せめて交渉面では役立ちたいと思います、ハイ」

先ずは交渉を始めるそうだ。

どうせ、いつもの流れになる。説得出来ず殺し合いに発展してサヨナラだ。

それでも見守ろう。今の内にポジションを飲んでスロット整理。

「えー……みなさん、落ち着いて下さい。冷静に、そして僕に何があったか教えて欲しい」

「おお、マサユキ様が語り掛けてくれている」

「求められている事をお答えしなければ」

「しかし、どう伝えれば。王が弑逆されたのは事実の様だが……そもそも冷静に考えてみればヒナタ様が本当に犯人なのか？」

「戦う理由も謎だ。というか、無抵抗を貫くヒナタ様に一方的に攻撃するなんて……」

困惑のハアンが響く中、クラフターはそこら辺の地面を鶴橋で叩き割り丸石を採石。続けてそこら辺の景観用の木を斧で切り木材を手に入れた。

間髪入れず作業台設置。木材を加工して何本かの木の棒を作り、そのまま並べ立て石剣をクラフト。

これまた持ち込んだエンチャント台を設置、石剣に低レベルなエンチャントを施すと、教え子に配布。

「おお！　先生は相変わらずで安心するぜ！」

「石剣が淡い光を放っている……」

「いつもの事じゃない」

「ただの鉄剣より強いのは分かるよ」

シズは鉄剣と、いつかの金剣を所持していたが傷んでいた。仕方ない。特に金ツールは耐久値が最低レベルだし。

なので、金床とインゴットで鍛え直した。

大したエンチャントも施されていないツールだから、新しくクラフトしても良かったが、まあ……ハアンに時間が掛かるから暇だった。

「なるべく使わずに済む事を願ってる」

そうだな。　そうだろう。　耐久値が減る。

「そういう事じゃないかな……」

何でも良い。　好きに使い。　それは君のだ。　使い方を強要しない。　蜘蛛の巣取りに使うと畜産業に使うと気にしない。

「クラフターさんなら、神話級の剣も掃除用具にしそうだよね」

シズが苦笑する一方、ハアンは続く。
早く終われ。 どうせ殺し合いが始まる。
クラフターは詳しいんだ。

「これはこれは、勇者マサユキ殿か。 懐かしいですな、私はライナー。」

覚えておるでしょう？ 護衛騎士団団長のライナーである。

今回は私が……」

「マサユキ様！ どうか、どうかお許し下さい!! 王を、王に手をかけたのは自分なのです！」

武装村人の1人が飛び出して赦しを乞い始めた様子。 だがクラフターはどうでも良い。 意味を理解出来ていない。

「な！ 何を言い出すか、貴様!!」

「おっと切り捨てさせないぜ！」

「餓鬼共が邪魔をしやがって！」

武装村人を斬ろうとした荒らしを教え子が間に割って入り止める。

これで殺傷沙汰が起きたら事案成立だ。

正当防衛として殺す。 過剰防衛？ 知らん。

「ふ、ふははははは。 もうお仕舞いだ、私は破滅だ……」

「えっ、勝手にエリック王子が自身の悪行を告白し始めたんだけど。 教会の目の前っていつても俺は神父じゃないんだけど」

「マサユキ君、頑張って！」

「言い出しっぺだからね……こういうスキル持ちなのは自覚してるけど、時々辛くなるよ。 贅沢な悩みなんだけども」

「大丈夫、なる様になるよ。 いざとなればクラフターさんもいるから」

「シズさんまでリムルさんと似た事を……」

余りの丸石を更に加工して、階段ブロックとハーフブロックをクラフト。

即席トーチカ、防壁を作り出して次に備える。

ハアンが続く今の内だ。一応シズが我々の為に翻訳して伝えてくれているが、あまり興味が無いので聞き流しつつの作業だ。

……なんでも、切り捨てられそうになった武装村人は、病気の家族の為に偉そうな奴の依頼に従ったという。

あと荒らし自身の告白により、事実関係は粗方判明したも同然の状況になったそう。

うん。何でも良い。

取り敢えず荒らし確定。殺して良い？

「けひっ、けひひひひ、けひゃあ！　殺す、殺おおーっすっ！

全員殺してやるう！」

「うおっ、ライナーが狂った!？」

荒らし発狂。

精神異常だ。肥大化した自尊心が復讐と憎悪に塗り替えられている。手持ちの薬や牛乳じやどうにもならない奴だ。

クラフターは憐れな目を向けた。こうした荒らしは元の世界でも出現するが、取るに足らない、排他される存在でしかない。

道を違えた同志の排除……余計に虚しくなる。

自分より優れた建造物やセンス、デザイン、生き生きした者を見て嫉妬に狂う。その発散に物や人に当たる。その方法が過ぎたものであれば始末される。奴もその口だ。

だとして同情を誘う段階で度し難い。殺す必要がある。それで頭が冷えるなら苦勞しないが、リスポンしてまで繰り返す様なら、黒曜石の牢獄行きだ。クラフターにとって死とは必ずしも解放を意味しない。

「悲しいな、剣でしか語れないなんて……って、俺を狙うのかよおお!?」

「死ねえ!」

荒らしが金髪に突撃した。

单调だ。目の前にも防壁を作ってみた。ぶつかつた。他愛ない。

「ぐあつ、この、たかが壁を作れる程度の能力で、物作りの才程度で凶に乗るんじゃないやねえええ!」

叫んでる。単純で良い。生かすも殺すも分かりやすいからだ。

「マサユキ兄ちゃん、そんなヤツやつつけちゃって!」

「格好良いところ、見せてくれよ!」

「マーサユキ! マーサユキ!」

「子供達の声援が痛い! 何で尊敬の目を向けるの!? 君達の方が強いからね!」

ヒナタを庇つたなら、俺の事も庇つてよ! 先生方、あの本当、これ以上は俺には荷が重いです助けて下さいマジで!」

「そうみたいだね。でも大丈夫そうだよ」

「はっ……?」

教会から人影が飛び出した。

今度は何だ、と思えばヒナタだった。既に抜剣している。怪我はもう平気らしい。

「コイツは私に任せて、”先生”」

嫣然の表情を向けられた。

好きにしろ。シズ共々頷いて見せた。



「うふふふ。痛かったかしら？　もつと良い声を上げて、私を楽しませなさい！」
「ぎゃあああッ!!」

美しい表情から一転、ハアンと恍惚とした表情になり、艶かしく舌で唇を湿らせながら荒らしを痛ぶるヒナタ。そんなヒナタに熱い眼差しを送る観戦者。が、一部はドン引いた。

「人質の安全を確認出来た途端コレかよ。　ヒナタってリムルさんの言った通り恐ろしい人なんだな。
てかさ、子供や民衆に見せちゃ駄目じゃねコレ。　シズ先生は許せるの？　ヒナタも先生の教え子でしょ？」
「人の痛みを知る良い機会。　だから良いの」
「良いぞヒナタ姉ちゃん！」
「そのままヤツちやえ！」

子供が喜んでいる。
人の苦勞に。　良くも悪くも良い御身分。　正にクソガキと云わざるを得ない。

荒らし成敗に快感を覚えるのは良い事だ。　世に平穩を齎せ。逆らひ荒道を志さない事を願っている。
その為に伝えたいのは、大人だからと精神年齢が子供と違うと云い切れない事だ。　或いはそうである。　目の前の荒らしの存在が良い例だ。

クラフターはクソガキに云いたい。

人魔問わず皆が成長するとは限りません。リムルの様な一部王様も創造主も偉そうに見えるかも知れませんが、実は精神年齢は君達クソガキと変わらないかも知れません。

大人に希望はございません。地獄に堕ちなさい。そこでネザライト採掘労働の刑です。ひやつほい。

「……成る程。先生の教育の賜物と」

命の数だけ道はある。

無理に噛み砕き呑み込む必要は無いが、頭ごなしに否定するのも違う。

クラフターの中にも戦闘好きはいるし。軍事部の例もある。

村人を虐待して愉しむ奴もいる。

ヒナタは其方系だったか。例えば鶴橋や円匙より剣に生きる者だ。連邦のダンジョンにでも連れて行けば喜んでくれそうだ。

「ヒナタ様……せつかく最近、イメージ向上していたのに台無しです……」

嘆きのハアンも聞こえるが。

確かに見方次第で台無しだ。が、一部に熱狂的なファンを生み出す仕草、荒らしに容赦しない姿勢は評価に値する。

ある意味、ヒナタには非常に良く似合う。

上位者が下位の者を捕食する様を連想……あいや、リムルと非なる。アイツの様な悪食スライム野郎が2匹といて堪るか。生き様を否定しないが道が交差する時、己の生き様の邪魔となるなら容赦しないのもクラフターだ。

「ぎ、貴様あー！ 卑怯だぞ、剣に魔法を付与しやがって！」

「王を殺し、真実を知る者も殺そうとして、先程までは避難民を人質に私を散々斬り付けておいて、卑怯はないんじゃない？」

「黙れ黙れ黙れえ！」

「黙るのは貴方よ」

出来れば全員黙れ。 けたたましい。

「犯罪者に人権は無いんじゃないか？」

そうだ。 荒らし死すべし慈悲は無い。

「犯罪者はお前……ぎゃああ!」

「私は”先生方”と違うわ。 住居侵入、不法滞在、建築、改造、盗難、
整地、松明塗れといった事を日常的にしないもの」

「この行為が赦されて堪るかああ！」

「彼等風によれば貴方は荒らし。 これ以上醜態を晒すなら終わらせ
てあげた方が世の為、国の為よ」

さりげなくクラフターの神聖な行為の数々を貶されたが目を瞑る。

その内彼女にも理解出来る日が来る。

「さて、そろそろ終わりにしてあげる。 君の不快な顔も、そろそろ見
飽きたのでね」

ヒナタは剣を構えた。

遊びは終わりか。 ならもう良いや、と羽虫との戦支度を始めるク
ラフター。

羽虫駆除に戻りたいのだ。 この戦いは予想より詰まらなかった。
学びが少ない。 子供の教材としても物足り無い。

後始末はヒナタだけで済む。 そう踵を返そうとした時、多少興味
を惹かれる事が起きた。

「な、舐めるなよ女狐めが！」

貴様如きが、この俺様に勝てる訳がな

「いんだ！」

荒らしが奇声を上げながら、剣を旋回。

そんな剣技が。 囲まれた時に使えるかも知れない。 クラフターはスニーク姿勢で凝視。 技を観察する。

「女だから生かしてやろうと優しくしてやれば凶に乗りおって！
肉片となれい！ 斬気烈衝波！」

ところがヒナタは斬撃をスルリと抜けた。

「ば、馬鹿な！」

まあソレは予想の範囲だったから驚きやしなかった。 今までヒナタと剣を交えた時より強くなっているな、程度だ。

同時に強者相手には通用しないと学んだ。

「甘いわね。 彼等を見習っていれば、多少は楽しめたのでしょけ
ど……お休みなさい。 良い夢を」

「ぐぎやおおおおおツツ!!」

1撃で斬り捨て御免とした。

相変わらず強い。 剣が特殊なのだろう。

この世界では未だ未知のエンチャントが数多存在している。 そ
う思うとワクワクする。

それを改めて知れた。 それと荒らし技であろうが、剣を振り回す
様を見れた。

収穫はあった。

クラフターは笑顔でジャンプする。

「仕返しは済んだわ。 貴方達、ありがとう」

武装村人は剣を捨て始めスニークより深く跪く。
そうして、ただの村人になった。

金林檎を個々のゾンビに与えるより大きい、その劇的变化にクラフターは驚愕する。金髪は金林檎以上の効果があるというのか。

凄い。この金髪を縄で縛り拉致したい。だって便利過ぎる。誘導とか。工事現場に村人が紛れる事態は辟易している。ミリムなんてもつての他だ。

「勇者様が問題を解決して下さいませぞ！」

「でも王子が王を……」

「大丈夫だ！ 俺達には勇者マサユキ様がついている！」

「黒幕は、騎士団長のライナーだとき」

「それでヒナタ様が……」

「だがそれを見抜き、ヒナタ様の窮地を救ったのはマサユキ様だけ！」

「流星は勇者様！」

「マ〜サユキッ、マ〜サユキッ!!」

黙れ害獣ホモ・サピエンスツ!!

クラフターは荒ぶる。頭を振り腕振るう。

危うく前言撤回だ。

過去1、2を争うハアン合唱が響き騒々しい。

だがこのデメリットを補って余りある能力が金髪には潜在している。荒らし剣技を早速実践披露する訳にはいかない。

「あ、あははは……上手く丸めるのに役立てばね、うん……俺の存在も役立って良かったよ」

「引き続き頑張つてねマサユキ君」

「貴方にも世話になったわね」

「流星、マサユキ兄ちゃんだ！」

「当たり前よ！ だって勇者様だもの！」

「……方が一の時はマジで助けて？」

ハアン合唱に紛れ、クラフターは右手に縄を構えにじり寄った。マサユキを拉致る。地下に引き摺り込んでトロッコに載せて連邦行きだ。戦争が終わったら重要建築現場用奴隷にする。カカシですな。

などと妄想に浸り走り寄った刹那、強い衝撃がクラフターを襲う。遠くに吹き飛ばされた。何事かも訳も分からず痛みを堪能する間も無く遺品を撒き散らし、周囲を汚す。

まさかの1撃リスポーン。

突然の光景に同志は啞然としてしまった。相変わらずの化物世界だ。エンチャントダイヤ防具が霞んで見えて困る。

「うおっ！ 狙撃!?!」

「ツチ。俺の”暗殺の必撃”の邪魔を!」

「誰だ!」

残された同志、臨戦体制。

ネザライトの剣と盾を構え、襲撃者を探る。いた。

黒い聖服に身を包み、純白の羽の生えた村人。

間違いない。荒らしの一味だ。格好が。

「俺様は懲罰の七天使筆頭アリオス。こうなっては仕方ない。悪いが、全員死んで貰う!」

「クラフターさん、連戦になるけど大丈夫?」

大丈夫。荒らしは殺るだけ。

元より野放しにする気は毛頭無い。我々の今の目的は、こういった荒らしを駆逐する事にある。

「勇ましいね。私も先生として、子供達に悪い所は見せられないか

な！」

シズも抜剣。 共に構えた。

ヒナタも並ぶ。 師弟共同作業。

荒らし駆逐。 次いでに教育だ。 見ていろ子供達。 我々クラ

フターの姿を。

「副担が頭を滅茶苦茶に振り回してる!？」

「腕もだ！」

「いつもの事よ」

「いい加減ソレ止めて!? 子供が見てるんだよ!!」

「確かに、教育に悪いわね」

シズに斬られた。 次いでにヒナタにも。

痛い。 油断した頃に2人に攻撃されるのは、一体何なのだ。 言葉が多少通じる様になった筈なのに。 謎だ。 争いを止められない種族だとしても。 おのれ人間め。

「あの一、俺は下がってますね……」

金髪が巻き込まれなかっただけヨシとしよう。

あの村人を失うのはクラフターにとって大損失だ。 場合によりネザースターより貴重だ。 ピラミッドを作らずして効率が上がりそう。 村人だから移動も容易い。

「テメエら俺様を前に漫才とは、舐めやがって! そんなに死にた

いなら望み通り殺してやるわッ！」

「来るよ。 構えて！」

連れ帰る為にも先ずは、と剣を振る。

荒らしを駆逐して帰る。 その後は村人相手に誘導実験だ。

ひゃっほい。



相手が格上なのは初撃で理解していたクラフターは、武装村人の様に行かないと考えた。

とはいえ百戦錬磨の創造主が、こんな事で引くのは有り得ない。

今まで散々化物を相手にして来たのだ。空飛ぶ巨大魚だの、道化だの、魔王だの。軍隊も相手にした。それらは創造力でもってして退けてきた。

これで人生辞めていたら、とっくに消えている。

なので苦戦を強いられる覚悟で挑んだのだが。

「チツ、俺様がたかが弓矢の弾幕に！ 何、雪玉だと？ 何処までもふざけた連中だ！」

牽制程度の弓矢や雪玉の幾つかが命中。

相手は驚きと困惑の顔を見せる。

クラフターも驚いた。

これくらい避けられて仕方ないと思っていたし、逆に一方的に攻撃されると予想していたからだ。先程のヒナタの動きの様に、並大抵の攻撃は届かないのがクラフターの認識だ。

相手がドラゴンの様な巨体だとか、ミリム城の侵入者の様な防御特化だとか、エンダーマンの様な飛び道具無効なら分かるのだが。

「流石ね。 私には、あの天使モドキを目で追うのがやっとなのに。

……すみません先生、私が参戦しては彼等の邪魔になってしまいます。ここは防御結界を展開させて、人々の盾になる事に専念します」

「謝る事じゃないよ。私もそうだから」

ヒナタとシズが早々に引いてしまった。

仕方ない。剣のみでの対応は困難を要する。子供を数に入れても創造主からすれば邪魔になる。その意味では後方支援程度に収めてくれた方が有難い。

ここでふと、ある同志が気付く。

インベントリを開いた時だ。自身らに何故か幸運が付与されているではないか。

ツールへのエンチャントでなし、攻撃力強化等と並んでいる。原因不明なれど恐らく金髪の影響か。コレの影響で武装村人に毛が生えた程度の弾幕攻撃が通じていると察した。

「皆さんは、落ち着いて広場から離れて下さい！ どこか逃げ込める場所があるなら……」

「勇者様が我々の心配をして下さっている」

「バカ、勇者様が全力を出したら俺達が巻き込まれるから遠ざけようとしてるんだよ」

「そうか……それで、あの者達に戦わせ、時間を稼いでいるのか」

「皆、逃げるなら王城が良いだろう。あの場には、大規模防御結界が張られている」

「エルリック王子……改心したのか」

「……天使の軍勢が攻めて来たのならばともかく、あの結界を破るには時間が掛かる。」

万が一城に侵入されても、中にも彼等の仲間が徘徊しているから防御力は高いと見る。

勇者殿に安心して戦って貰う為にも、速やかに移動するが良い」

「皆！ 聞いたな？ 落ち着いて行動せよ、城ならば皆を十分に受け入れられる。」

慌てて怪我をせぬよう、且つ速やかにこの場を離れるのだ！

後の事は勇者様達、そして我等が創造主にお任せ致す！ 動ける

兵士は国民の避難誘導を実施せよ！

！」
我等が避難した方がマサユキ様達のパーティーは活躍出来るだろう

何か後方の武装村人らが騒がしいが、振り返る暇が無い。油断すればワルプルギスの時同様、ボコボコにされそうだし。

剣振り矢飛び。雪玉を混ぜつつクラフターは戦闘続行。広場から水を引く様に移動する村人を丸石の壁で庇いつつ、釣竿も振り回し、遊び心で荒らし剣技を試みた。滅茶苦茶に剣を振り回しつつ突進。

「遊びは終わりだアツ！」

もの見事に避けられました。
殴られて痛かったです。

「そうよ遊ばないで！ 真面目に戦って！」

転がされる中、叱咤された。

シズよ。君は味方だろ。
荒らしに同意するな。

「何やってんだよ副担ッ！」

「そうよ！ 学園の模擬戦じゃないのよ！」

「大丈夫！ コレは先生達のいつもの奇行妙技。 一見役に立たないけど、きつとナニか策があつての事だ！」

「よく分からないけど、がんばって！」

子供達が非難のハアンを浴びせてきた。

酷い。頑張っているのに。やはりクソガキ。

攻撃にしたって、人間の雑魚共の剣や弓矢に毛が生えた程度だと思えば、普通にダメージが貫通してきやがる！

アイツらの剣弓矢は特殊だったのか!?

忌々しい！ 半端な実力じゃねえ、噂以上に理不尽な連中だ!!

「今更気付いたってもう遅いんだから!」

「そうだ！ 副担はスゲェんだ!」

「なんだかんだ子供達の期待通りなのね」

「クラフターさんは生き続けるよ。 他人がどう言おうと、世界がどうであろうと、きつとね」

生きる。 作る。 この先も。

その誇りを胸に邁進する。

誇りは死を越えて往く。

故にマインクラフターは死しても何処かで復活を遂げ、何度でも創造の道を往くのだ。

それらはマインクラフターが到達し得る頂点にして万物への肯定だ。 愛だ。 真心だ。 失くせば忽ち失意のままに堕ちて消え逝くものだ。

己が駄目でも次の者が成し遂げる。 創造の礎となる。 全てを樂しむ覚悟がある。 その差が荒らしとの決定的差である。

「馬鹿な馬鹿な馬鹿なツ!」

「行け副担ーッ!」 「先生ッ!」

「そんな悪い奴なんか、やっつけちゃえ!」

「勝ってくれ先生ッ!」

剣振るい、果敢に攻め、散り逝く同志の遺品を踏み越えて、続々と荒らしに取り憑いては散って逝く。 それでも勢いは末端の一兵に至るまで止まる事を知らない。

「くそっ、次から次へと! がはっ!」

「攻撃が通ってる！」

「でも副担の人数が減ってきた！」

「大丈夫よ！　だって先生だもの！」

「そのまま押し切れーッ！」

音が何処か遠く聞こえてきた。

剣折れ矢尽き、鎧が碎け散る。

それでも命はある。　生きている。

抱えるその限り。

この荒らしのみならず、滅びの美学に囚われた片手落ち……ユウキ
だかヴェルダにしても、万が一にも勝ち目がないとして、それでも創
造主の意地を見せ付ける事は出来る。

傲慢者は、その時知るのだ。

世を荒らし他者の不幸を貪り、滅亡せしめんとする徒党は、最期の
一瞬まで苦痛に喘ぐのだと。

或いは連邦並びにマインクラフト世界への本土侵攻意欲を挫く結
果になる。　そうなるよう命を費やす。

無論。　その価値は消え逝った武人達が証明している。　名誉の
戦死を遂げた者達の戦列に加わる事は、それもまた誇りであり喜びと
なる。　目眩く創造世界は続く。　その限りを尽くせる者に恐怖の
色は無い。

いや……悲憤を抱え落ち延びる者を思えば、果てるのが役得と思え
るのも確かだ。　少しは戦いに酔っている。

「ば、馬鹿なああああッ!!？」

遂にズバツと一刀両断。

ドロップ品は落ちなかった。

泣きそうだ。

塩っぱいどころか

苦かった。

苦勞の割に得られた物が無い。

荒らし駆除の報酬に期待するの

が間違いだとしても。

ふと勝者は浸かる。 酒精が染みた昔日を。 嘗めて飲み下した日。 鼻を抜ける辛味、苦味、僅かに甘味。 酸いも甘いも知る程に価値あるモノに感じる事柄。 人生に似たソレ。 今もソレに似たモノを味わった。 経験を積み上げた者だからこそ価値が分かり楽しめるならば、大人と云える存在も悪くないのかも知れない。 今日この瞬間も何れ忘却の彼方か、肴となりて糧となるか。 その時が楽しみだ。

「やりやがった！」

「さすが副担だぜ！」

「やるじゃない！」

「信じてました！」

「うん！ やっぱり先生は凄いよ！」

「期待通りかしらね」

「お疲れ様！」

目を閉じポテトを齧る。

村人が歓喜に溢れる中思う。

落ち着いたら酒をクラフトしよう。 うん。



連邦領、迷宮都市地下管制室から連絡。

各地同志とB B、並びに司令部……辛辣ちゃんと弟君の報告によれば、殆どの場所で勝利を重ねているとの事。

懸念は北の地。 ギイとクロエ、ドラゴンのドンパチが激化した様だが、軍事部P Sもいるから何とかする。

後は不毛の大地なる場所にいる同志が遊び始めた勢いで、天空門な

る羽虫共の本拠地へ繋がるゲートを発見した。

これは大きい。

踏ん反り返る荒らしめ。今に見ている。高みの見物も終わりだ。絶対的な有利性に胡坐をかく元凶を完膚なきまでに叩きのめしてくれる。

とはいえ闇雲に呐喊する駆け出しでなし。蜂の巣を突けば大騒ぎに違いない。事前準備にと皆に報告して突入準備中。

最大限の決戦仕様を揃えて向かう。

加えて悪魔連中も乗り込む腹らしい。それは勝手にすれば良い。邪魔しなければ貴重な戦力だ。

「馬鹿も役立ちましたね。敵本拠地に乗り込む手段が発見出来たのは大手柄ですよ。リムルさんも久し振りに感謝するでしょう。」

一方各地の残党は現地に任せて大丈夫ですね」

辛辣同志が云う。

それには同意するクラフター。細かい事は村人と現地同志に任す。

手の空いてきた猛者は、北地か荒らし本拠地の天空城陥落を目指す。

「待って下さい。敵は此処迷宮都市に攻め入る可能性があります。

最初は北地を畳み掛けると思っていました。BとBと大賢者さんとの相談で、此方側へ攻撃する可能性が出てきました。

ここまで相手の計画が上手くいったくない事や、各国と連邦軍の混乱が少ない事からリムルさんの生存を疑っているかもと。

イキナリ天空門を叩く前に、補給も兼ねて一旦迷宮都市へ後退して襲撃に備えて下さい。外部での戦闘ならIRPも協力出来ます」

何処に出没しようと関係無い。

荒らし死すべし慈悲は無い。迎え討って荒らし戦力を削り取る。

その上で堂々本拠地に攻め入り滅ぼす。その勢いで天界も開拓だひやつほい。

「本当、ブレないですね。今回はその姿勢が有難いですが」

ともなれば天界に持ち込むは決戦仕様と建材。

連邦……：迷宮都市も相応の備えをする。何なら迷宮内部で未だ遊んでいる同志に任す。

何。迷宮内はモンスターハウスだ。クラフターがどうこうしなくても、魑魅魍魎によつて荒らしは潰れる。

そうでなくても消耗したところを両断。

楽出来る時は楽をする。わざわざ荒らしに苦勞するのは馬鹿らしい。丸石を焼く手間が嫌でシルクタッチで採石する様なものだ。最も勢い余つてマグマダイブは駄目だが。

「天空門へは先行して悪魔達……：テストロッサ、ウルティマ、カレラさん達が。頃合いを見計らいクロちゃん……：じやなかった、ディアブロさんとリムルさんが突入。

最終決戦に挑みます。あと北の地、クロエちゃん達も放置は出来ませんので、誰か暇な者が向かってあげて下さい。期待してます」

期待する割には雑である。

まあ良い。荒らしは全て潰す。

それに変わらない。そこにいると分かっていたら全部を無に還す。

クラフターは強化ポーションとツールを再調達、回復しつつ建材等を準備して終戦に備える。

気が早い、終わった後にやりたい事が色々あつてワクワクする。

既に不毛の地や天界、宇宙開拓等、新天地への期待が膨らむ。

その為にも邪魔者は消す。

マインクラフターだからね。仕方ないね。

さても、いざ再出陣。 イベントは未だ続く。



辛辣同志達の予想が当たる。

各地の羽虫が忽然と消えたと思ったら、次には連邦に現れた。 荒らしは戦力を統合、集中攻撃に転じたと見る。

BB解析によると大凡威容の60万。 まだいるものである。 楽しめそうだ。

「呑気に遊戯に転じる暇は無いですよ先輩」

弟君から念話。

連邦地下のジオフロントにいるからか。

別に姉君でも何方でも良いが、何かね後輩。

「IRPは首都防衛に忙しく、60万も一片に相手出来ません。 他の先輩が対空TNTキャノンや矢の散弾装置で攻撃したり、連邦守備隊も迎撃していますが、駆逐するのに時間が掛かります」

結論を云いなさい。 どうして欲しい。

欲望はハッキリ云わなきゃ伝わらないぞ。

「首都より迷宮都市防衛を願います。 迷宮内部に侵入されたら、いよいよIRPじゃ支援出来ません。」

それに内部侵攻するとなれば、かなりの猛者が来るものかと。 万全の準備で向かって下さい」

相分かった。

空舞う雑魚羽虫は軍事部とIRPに任せた。

北地はPS同志に任す。

他の暇人は迷宮都市へ行くでしょう。

「それで頼みます。あ、地上でガビルさんとゲルドさんがデーノっていう墮天使と戦闘中ですが演技なので無視して良いとの事です。」

先輩達は迷宮に入って待ち構えて下さい。迷宮内に住まう魔物や管理者のラミスさんの支援はあると思いますが油断しないで。

或いは既にしてるかも。何にせよ気を付けて」

いつも通りだ。

既に現地で遊んでいる同志がいる。連絡がないから遊びに夢中か、荒らしと戦闘中だ。

創造主はポーションやツールの修復、取り替えを済ませてエリトラ飛行で現地に向かう。

地上では聞いた通りの戦闘が散発していたが、演技らしいので無視する。出来れば観戦してみたいが仕方ない。駆除優先だ。

が、黒曜石で入口が塞がっている。中で遊んでいる同志の仕業に違いない。

仕方ないので効率強化ツルハシで破壊して侵入していく面々。遊び場を独占とは。けしからん。一緒に遊ばないと。

「笑顔で入っていったであるな」

「今更驚きもない。我々は我々に出来る事をするのみ。ガビル殿にデーノ殿、続けるぞ」

「テンペストの住民は慣れているのかよ……おっと、ゼロっていう奴に天軍総司令官の肩書きを見せられてな、俺も打ち合わせで中に入らなると駄目になった。色々面倒は続くけど遊びは此処まで、じゃ後宜しく」

「……大丈夫であるか？」

「ガビル殿の心配には及ばん。これもリムル様の考えの内。最悪、中で遊んでいる者やディアブロ、他の者が助太刀に参るであろう」

中に入れば、既に松明だらけであった。

事後だ。これではチェストは空箱だ。スポブロも制圧されているに違いない。あいや、この世界は松明を刺そうと湧き潰せないから、モンスターからのドロップ品は期待出来る。

つまりまだまだ楽しめるといふ事だ。クラフターはひゃっほいと奥へ奥へ進んだ。

「で、どういう作戦でいくつもりだ？」

「ディーノさん、貴方のように消極的に戦っていても勝てませんよ？叩くなら、一気に叩く。戦力を集中させ、敵に休む暇など与えるべきではありません」

「馬鹿にすんなよ。アイツ等に迷宮に引き籠もられたら面倒だし、そうじゃなくなつて例の人間連中は脅威だ。

だからこそコツコツ叩いていたんだぜ。作戦なんだよ、作戦」
「ぐ……減らず口を……例の人達を少しは見習ったらどうです。天真爛漫で表情豊かですが基本的に寡黙です。偶に喋れば『ウオツ』しか言いません」

「マイお前……」

「なにか？」

「まさか惚れてんのかあ？」

「なっ!? 相手は敵ですよ！ 貴方こそ馬鹿にしないで貰いたいですね！」

「言い争う時間も惜しい。さっさと作戦を開始したい。」

オレが受けた命令は、総攻撃による迷宮破壊だ。故に、ヤツ等が迷宮に立て籠もるなら、それも良し。

どうせ迷宮を破壊するのだ、何も問題ないだろう。さっさと迷宮への侵攻を開始するぞ」

「……ゼロは淡白だねえ」

背後でハアンハアン聞こえるが、無視する。

どうせ虫だ。後で駆逐する。

それよりどこまで攻略されているのか搜索だ。

まだ未到達の空間があれば戴く。チエストがあれば尚良し。

当然中身も戴く。鞍やクラフト不可なアイテム、レアアイテムだと嬉しい。ただし腐肉、手前らゴミは駄目だ。空腹時は救済となつても異常ステータスになり、結局腹が減る。その意味ではパンがマシ。

「おいおい、無茶言うなよ！　あの迷宮は難攻不落だぞ。」

一度失敗してるから言う訳じゃないが、マジである中では不利なんだって。例の人間共だけじゃなく、迷宮で出て来る相手は完全なる不死で、損害を無視出来る。軍隊で攻めても、分断された上に各個撃破されるだけだったの！

遮る奴はブツ飛ばす。

戦時だろうと平時だろうと犇き喚くモンスターを斬り伏せながら、創造主は探索ひやつほい。

その内荒らしも出現する。慌てる時間じゃない。

「そうよ！　それにね、地上部隊の中にも強いヤツがいるんだって。冗談みたいに硬くて、ソイツのせいで攻撃が通用し難いのよ。あの機龍とか呼ばれてる奴もそう。今は首都防衛してるけど、いつコツチに滑り込んでくるか分からない！

地下じや地上の支援が期待出来ない。

IRPが特にそう。あの巨体では閉所に入れない。

運用思想が移動式キャノンだし、近接戦闘より遠・中距離からの砲撃支援がメインの兵器だ。

地上での活動を考えて創造されてきたから仕方ないが。それに

砲撃程度で化物共は倒せない。半端な奴なら兎も角……やはり、創造主自ら剣を振り回す事になる。

「そうだぞ。このガラシヤと一騎討ち出来る猛者もいる。」

数で押しただけで簡単に排除出来るようなヤツ等ではないのだ」

「ディーノ、ピコ、ガラシヤ……問題ないと言った。マイ、君に天使達の指揮権を譲渡する。」

全軍を指揮し、地上部隊を掃討してくれ。君なら、遠距離攻撃に補正がある。

上空から天使達による神聖光弾の一斉射撃を行い、地上の敵を殲滅するのだ」

「……わかったわ。私の能力による『命中率上昇』と『遠距離威力上昇』にもってこいの舞台ね」

それでも改良が続けられ、砲撃時の狙撃精度は格段に上昇している。有効射程距離もだ。その内に宇宙の目標物にも当てられるかも知れない。

「地上は任せる事になるが、構わないか？」

「ええ。それで、貴方はどうするの？」

「オレとディーノ達で、迷宮に侵攻する」

「おいおい、何を勝手に……迷宮内だと、相手は何度でも復活するって……」

「問題ない。オレが迷宮そのものを侵食する。」

ヴェルダ様に授けられた真なる『邪竜之王』の能力を用いて、な」

しかし殆ど制圧されているな、迷宮。

詰まらない。いっそ改造してしまうおうか。既にそういう痕跡

がある。仮拠点セットとか。

「わかったよ、従えばいいんだろうが。で、迷宮に入るのは俺とお前

「だけか？」

「迷宮には、オレとお前達3人で入る。」

「そしてお前達3人には、オレが迷宮を侵食する時間稼ぎを任せるぞ」

「……わかったよ。いつ始める？」

「今からだ」

刹那。強い振動が起きた。

地上で煌く閃光。

目視不可能レベルの羽虫達による一斉攻撃。

地上を熱波が焼き払い、クラフターとリムル達が創り上げた都市が瞬時に蒸発。

おお、何という事だ。

我々の苦勞が。努力の結晶が。

クラフター慌てた。

決して我々の仕業ではない！

核攻撃していない本当だ！

クラフター嘔吐かない！

「最初に云うのソコ!! 分かってますよ！」

そうだろう、そうだろう。

誤解されず幸いだ。

しかし荒らしめ。クリーパートレイン的な事をしやがって。

都市を堂々吹き飛ばさず、姑息な手段を！

「いや、アンタらに罪を被せようとは微塵も考えてないと思うので安心して下さい。」

それで衛星経由のBB解析によると……地上の被害なんです、天使の集中攻撃で都市が更地になったのと、ゲルドさんとガビルさんの部隊が迷宮内部に撤退。

住民は避難済みなのでソコは平気でしたが、一部クラフターは都市ごと蒸発。 リスポーンしました。 攻撃が激しかったので全口ストでしょうね」

ソコまでの規模とは。 過去最高か？

何にせよ殺す。 荒らしは荒らしだ。 こういった事が何度も繰り返されては堪らない。

未然に防げなかったのは悔しいが、やられっ放しの創造主ではない。

やられたら、やり返す。 倍返しだ。

「核や対消滅攻撃は許しません」

くそつ。 真の敵は味方か。

「馬鹿云ってないで、それぞれ最寄りの戦場に復帰して下さい。 迷宮内で遊んでる馬鹿は敵に備えて！」

楽しむ余裕をくれない。

この意味でも荒らしは嫌いだ。 我々を束縛する。

何にせよ元よりの目的だ。

クラフターは迷宮の彼方此方にワイヤートラップやTNTをセツト。

通路を丸石と土を混ぜて塞いだり、溶岩をブチ撒けたりと嫌がらせ。 ある程度すると適当な場所に潜伏。

壁の中でスニーク姿勢をしたり、透明化ポーションで荒らしに備える。

ここの住民も、何かイイ感じに参戦するかもだが、頼り切る創造主ではない。

邪魔する奴等に直接申し上げる。 それが礼儀というモノだ。



「ゴズールとメズールがヤられたッ!？」

「ゼギオンがまたヤられましたーッ!？」

「クマラと配下も皆殺しに……」

「アピトの群勢攻撃にすら……」

迷宮地下に設けられている管制室にて。

オペレーターとなつていているトレイニー含むドライアド達が悲鳴に似た報告を続々上げている。

ハアンハアン煩い。眠れない。

同志が寝返つて荒らしてる訳じゃあるまいに。

「荒らしてんですよ!? 迷宮の味方を続々潰してナニしてくれちゃつてんですよ!」

辛辣同志まで叫ぶから、いよいよ諦めた。

ベッドの側を離れるとモニターに目を向ける。

同志が道行く先を塞ぐ魑魅魍魎を打ち払いながら、罫を作り壁を作り潜伏したりしている。

これのナニがイケないのか。

クラフターは首を傾げた。

「いけないから騒いでるんですよ! 馬鹿共が倒してるのは本来味方なんですよ!」

いや。だって攻撃して来た奴もいるし。

荒らし駆除中に横槍入れられても詰まらない。予め駆除するのは道理だ。

「横槍はアンタら！　　横槍どころの騒ぎじゃないけれど！」

良いだろ迷宮だぞ。　　死んでも復活する。

「アンタら同様、復帰するのに時間が掛かるでしょうが！」

そうでなくても迷宮を好き勝手弄って！　　管制室を見回しなさい、司令官のベニマルさん含め、シユナさんやラミスさんが項垂れてますよ！」

知らん。　　我々との付き合いが長い癖して、行動を読めないとは。読み直し。　　行動予測出来ないおまいらが悪い。

「ベニマルさん達もアンタら馬鹿の言葉が理解出来たら拳が飛んで来てますよ……」

一向に構わん。　　寧ろ全員で来て欲しい。

そうして大乱闘だ。　　何方が上かな？

「……もう良い。　　とにかく、私達の対策の障害にもなるんですから、これ以上派手に動かないで下さい！　　良いですね!？」

相分かった、とでも云えば良いのか。

管制室と迷宮にいるクラフターは1人だけじゃない。　　いる数だけ意見がウロチヨロしている。　　束縛を嫌う創造主全員を管制なんて出来る芸当では無い。

「早々に諦めてます。　　言いたかっただけ」

そうか。　　好きにしろ。　　我々もそうする。

「それが困るって云って……ハア」

村人語じゃ分からん。ハッキリ云う事だ。

「……荒らしに負けたら許さないから」

相分かった。

それだけには皆して頷いた。

そういう存在だ。辛辣同志も分かって云っている。文句は云いたいから云っているだけに過ぎない。村人達も同様に。

本当は好きなんだ。お互いに。



「ツチ！ やっぱいるよな、お前らは！」

荒らしの団体様ご案内ツ！

こんにちは！ 死ねツ！

襲って来るモンスターを倒しつつ準備していたら、荒らしがノコノコ現れた。

弓矢を放ち、ワイヤーに触れ罫が作動し、感圧板とTNTによる地雷等が起動していき、彼方此方で爆音が反響して暴れ回る。

その白煙ごと貫いて、無数の火矢が弾幕となり荒らしに飛翔する。それを剣ガードしている相手に対して、エンダーパールや俊敏ポーションで一気に間合いを詰めて斬り掛かる。

防がれても構わない。エンチャント効力が発揮され、轟々と燃えながらノックバツクで遥か後方へ吹き飛ばす。

時間を稼ぐ様に見せかけた次には、釣竿で引っ掛けて引き寄せてからの斬り付け。

逆に斬り返してくるならば、すかさず雪玉弾幕で牽制。距離を取りつつ囮となり、透明化していた同志が背中に斬撃をお見舞いする。避けられようと、天井から一斉に砂利や砂、金床を落として窒息等を狙う。

マルチに対応中。 お互いマルチだし。

「ここまで敵がいらないと思ったらー！」

「コイツらの罠だったって事だー！」

「聞け、お前達。」

オレは60階層に戻り、この迷宮の権能を奪う作業に集中する。

現在も侵食しつつ迷宮を踏破して来たが、未だ同調が進んでいない。

オレの領域が通用しない箇所が数多ある。

侵食にはまだまだ時間がかかるだろう。

このままでは罅が明かぬ。

後の事は任せるから、精々暴れて時間を稼ぐのだ」

「ああ、任せろ！」

1人がどっか行く。

追撃するにも3人が邪魔だ。 早く潰さねば。 逃げた奴が何処

で荒らすかも分からない。

「……バーカ。 最初から当てにしていっての。 でもヴェルダ様の手前、逃げられないし、リムルと敵対するのも……面倒臭え！」

何やら鳴き始めた。

通訳がいらないから何事かコレまた分からない。

「ていうかく、アイツ超ウザインですけど！ 何様なワケ？」

「そうだな。 偉そうに命令するし正直、好かん。 何故言いなりになるのだ、ディーノ？」

「そうだよ！　ディーノ、アイツをやっつけちゃってよ！」

「そうだぞ。　殺るなら、ヴェルダ様にばれないように協力するぞ？」

「あー……今は目の前だ、目の前！」

攻撃しながら鳴いてくる。

交渉という訳でも無さそう。　なら関係ない。　続けさせて貰う。

丸石の防壁を即座に形成。　裏で素早くディスプレイとRS回路を組み上げる。

クロック回路だ。　常にオンオフ繰り返す回路であり、ディスプレイと繋げる事で連射装置が組み上がった。

中身は大量の矢だ。　取り敢えず弾幕を形成し時間を稼ぐ。

「即座に装置を作ったか。　だがその程度の速度と単純さで倒せると思うな」

当然の様に弾かれ、射線から外れて回り込んでくる。　それは予想していたから、TNTを火打石で起爆する。

「自爆!？」

間に丸石の壁、水バケツをひっくり返して被害拡大を抑えつつ爆煙に飲まれる。

同時にディスプレイにより床や壁に大量に刺さっていた矢が爆風で吹き飛んだ。　散弾となり空間にいる者達を無差別に突き刺していく。

「ぐっ!?　矢が爆風で！」

「これが狙いだっただか！」

「コイツらの剣や弓矢は普通じゃない、私達の様な者にも平然とダメージを与えて来る……ホント、理不尽な連中！」

致命傷は与えられずとも驚かす位は出来た。

しかし理不尽だ。荒らし自体、理不尽な塊だが、ワケ分からんエンチャントを持っていたり能力を所持して実行してくる。

或いは、そういった能力があるからこそ、武力を持って威を示したくなるのかも知れない。

「でも負ける訳にはいかない！」

ピコとかいうらしい、少女が槍を構えた。
仕掛けてくる。

即座に黒曜石を展開。クラフターは単純な身体能力は人間と大した差が無い。クラフト能力があるのが唯一の差である。その分野も方面が違えば村人達に敵わないが。

今は出来る事をするだけ。そうしてきた。
数多の人外な化物共を相手に立ち回ってきた。
またするだけだ。つまり、いつも通り。

「フォールンスピアッ!!」

強烈な一撃が黒曜石に刺さる。

ヒビが入り、次には破壊された。

あの黒曜石をだ。

効率強化エンチャントを施したダイヤツルハシでないと破壊に苦
勞する石を槍で。

だが裏にクラフターはいない。既に地面に潜ったり横にズレて
回避していた。

「くっ……届かなかったか」

化物相手では黒曜石は焼け石に水、いや鶏肋か。

無駄では無いが、この世界で頼り切るのは危険なのだ。　今まで黒曜石が何度破壊されてきた事か。

だが、お見事。　では返礼。

「うっ」

「ピコー！」

槍はクラフターも持っている。

そして、それを投擲した。　命中すると相手はパタリと地面に倒れて見せた。

余裕がありそうだったが、無力化出来たならヨシとしよう。　後2人も残っている。

「……おい。　何で最後、手を抜いたんだ？」

「あ、やっぱわかっちゃった？　だつてさ、余力残しておかないと、ここから逃げ出すのも大変じゃん？」

「なるほどね。　どうやら、俺の目的に気付いているみたいだな？」

「当然でしょ？　アンタ、アタシ等とどんだけ付き合ってると思っ
ているワケ？　アンタの考えなんて、お見通しよ」

「オツケーオツケー。　それならいいんだ。」

ゼロの自殺に付き合うのは馬鹿らしいし、隙を見て脱出するからそのつもりでな」

「了く解！　ガラシヤも気付いてるみたいだし、上手く時間稼ぎしてくれると思うよ？」

「だと良いんだが。　正直さ、アイツら舐めてると洒落にならないんだわ。　連中、ゼギオンって超強いヤツを倒した事もあるからな。」

ひよっとしたらワルプルギスにいた奴もいるかも知れないし。

本当、今直ぐにでも逃げ出したいくらいなんだぜ？　ヤツらには冗談も通じないだろうしな……」

「ま、まあ頑張つて？　ガラシヤがどれだけ頑張ってくれるか、それ次第だけだね……」

「よし、ゆっくりは出来ないだろうが今は休んでいろ」
「そうさせて貰うよ」

今度は片手剣と円形盾の荒らしが前に出た。
シンプルな武装はクラフターの武装と似ているモノがある。持ち手も互いに戦闘慣れしている。

違いがあるとすれば、やはりクラフト能力の有無。逆に相手は人外の速度や技量の持主である。

何方が上か、というのは武装だけで決まるものではない。それもまた互いに熟知している事だろう。

派手は無く地味だが、玄人同士の剣戟が始まる。

「剣から釣竿だ?!」 ツルハシで壁に? スコップで地面に潜つて回り込んでくる!?

雪玉といい、珍妙な真似を……待て。何故水バケツ一杯から無限に水流が流れ出るのだ! 溶岩も同様に……何故木やサボテンが生える!?

長く生きてきたが、この様な戦闘は初めてやも知れん……お前達は何者なのだ?」

天井落としに使用した砂や土に植林して荒らし行為の阻害をしつつ、剣以外の様々なツールを駆使して攻め立てる。

荒らしは上手く動いていない。狙い通り。このまま攪乱からの回復を許さない。すかさず吹き飛ばす。

その先には別の同志がバツコイと剣を振る。
ガードされたが、やはり関係無い。ノックバックエンチャントとフレイム効果で火球となり荒らしは転がる。

「くっ。単体でも厳しいが……」

水流で消火されるも、水流の檻に囚われては自由が効かない。そ

こを弓矢一斉射。四方八方から撃ちまくる。

その対処に追われている間、地面を掘り進んでいた同志が相手の真下に到達。上をツルハシで空けて間髪入れず剣で斬り上げた。ノックバツクで吹き飛ばす。

その先は天井。荒らしは空中でターンし、足を天井に付けカウンター突撃をかまそうとしたが、そうはさせない。

クラフターはエンダーパールを足着く先に投擲。

ワープすると、視界一杯に映る背中をツルハシで思いっきり叩き落とす。正々堂々正面から殺る気は無い。そんなルールもなし。勝ちに行く。それだけ。

「ぐあっ!?!」

「ガラシヤー!」

「……降参だ」

剣を下ろされた。

荒らしの戦闘意欲が消えた。だからと荒らしに違いなく、いつもならトドメを刺すところ。

ただ奥に逃げた奴が気になる。今は急ぎたい。

「良いのか? まだ本気を出していなかったようだけど?」

「構わぬさ。本来の目的としても、生きて脱出する為にも余力は必要だ。

まあただ……お互い全力で戦える場所にて、本当の決着を付けたいものだな」

「そうか。じゃ、休んでいてくれ。残るは俺だけの様だけど……俺もテキトーに相手して、さっさと皆でズラかろうぜ」

「ヤバイぞ、ディーノ。あの者達、情報以上に強くなっていた。

日々成長しているにしても、本気で戦えば負けはしないだろうが、消耗すれば脱出は難しいかも知れん」

「だよね。ここには他にも強者の気配がある以上、消耗するのは自

殺行為だもん」

「ピコの判断は正しい。 貴様も、せいぜい気をつけろよ？」

「ああ、わかった……」

最後の奴が出て来た。

外でドンパチ演技していた奴だ。

地上が粗方潰れたので此処に避難したか、その者達を追いかけた来たのだろう。

何にせよ、知ったこっちゃやない。

立ち塞がるなら倒す。 これまで通りに。



先陣を切った同志に遅れ、ジャンプ走りしていた某クラフターは、荒らしと邂逅した。

逡巡なく斬った。 慈悲は無い。

「ッ、何者だ？ この辺りは既にオレの支配領域。 侵入された気配などなかったぞ？」

抵抗されては面倒だ。

勢いでジャンプ斬りを繰り返し押し押していく。

単調だったが不意打ちの勢いで余裕を与えず出来る限りの損害を与える。

「……なるほど。 貴様達は何人もいる存在であったな。 これは盲点だった。」

……来なければ、生き延びたかも知れぬのに。

だが、所詮は早いか遅いかの違いでしかない。 このオレの糧とな

り、死ぬがいい」

何体もの獸的モンスターがスポーンした。

素直に飛び掛かるものは、さつきと斬り捨て御免とし、迅速に動き回る奴は水バケツを真下にブチ撒いて行動抑止。鈍ったところを弓矢で射抜く。他愛無い。

「ほう？ オレの邪龍獸をこうも容易く葬るとは……。

創意工夫に優れる他は隠れているだけの雑魚ではない、という事か。

オレはゼロという。この国を滅ぼすべく遣わされた、天の軍団を率いる者だ。

貴様を倒すべき敵だと認めよう。語る口を持たぬ者だとして、容赦はせん！」

無聊を託つあまり、一時消え逝たが、どうやら戻ってきて正解だ。僥倖が巡って来た。直近には目の前の猛者……荒らしを倒す楽しみが。

落ち着いたら彼女に謝らねば。

そして星の世界。共に見れたら幸いだ。

……更に願わくばクラフトを共にもう1度。

輝く同志や彼女は厭う者であり、憧れだ。今更どの面下げて会えば良いか答えは出ない。或いは機を誤ったか。

歳を旧りて尚も分らん事は数多ある。

けれども。それでも。

クラフトが好きだったんだなって。今更に。

「余所見する余裕があるか。それか余程の死にたがりか。何方にせよ死んで貰う」

故に鉄剣と盾を構える。

旧式装備の鉄防具。半減した耐久値だが、まだ使用に耐え得る。加えて金林檎や基本となるポーシヨンで身体強化済。

他は弓矢や雪玉、エンダーパールといった飛び道具、壁や移動に使える土、丸石、罨になる水バケツや溶岩バケツ、TNT等。

軍事部が装備していた最新鋭の銃火器や最新エンチャントツール……ネザライトツールと比較すると見劣りする。

だが使い慣れた装備類だ。戦闘向けでは無い己だが、やれる事は数多ある。何故なら己もクラフターだから。

そしてクラフターだからこそ、やりたい事が再び出来たからこそ、死しても再び戻るであろう。恐怖は無い。邁進あるのみ。

「ふっ！」

攻撃を盾で防ぎ踏鞴を踏む。

敵から目を逸らさない。隙を窺う。

圧倒的な力差は始めから分かっている。

その上で挑んだ。

少なくとも無駄死には避けたい。

剣から雪玉に切り替え、牽制弾幕。距離を置き直様土と丸石の混

合防壁を作る。

対クラフター戦ならば有効なソレ。効率の良いモノでなければ、

ツルハシとスコップ両方を使わねばならない厄介な混合壁。

だが化物相手に効果は薄い。現に簡単に破壊された。それは

予想の範疇だから次に備える。

「土壁なんて役に立つとでも？　黒き壁の方がまだ強度が……何だ

と」

エンダーパールで相手の背後にワープ。

振り向くままに剣を斬り返す。バックステップで逃げられた。

その場所は防壁を立てた場所。同時に仕掛けたTNTが丁度起

爆、荒らしを爆煙で包む。

「小癩な」

白煙が晴れる前に雪玉連射しつつ突撃。

手持ちを切り替え剣で斬る。ガードされても振り斬る。ノックバックエンチャント効力で遠方へ吹き飛ばす。

その先へ向けて弓を引く。かと思せ掛けてからの再びエンダーパール。相手の目の前に出現すると同時に剣を振り下ろし再びノックバック。

反撃されたなら、盾を構え防壁を作り防御。

破壊される前にツルハシやスコップで地面や壁に潜り透明化ポーションで身を隠し、隙を見て溶岩バケツをひっくり返し、床に埋め込んだTNTに火打石で着火、通路全体を爆煙に沈ませる。

視界一杯に広がる白煙。揺れる影に残心。

「その程度の小細工で勝つ気か。笑止」

荒らしは堂々している。

従来品が効かぬ事実。暫時惚ける。

駄目か。改めて化物世界だ。

連邦周辺で、彼女と平和に暮らしていた頃に相手したモンスターとは比較にならない。

油断した訳ではない。だが、あの時の感覚が抜けていなかったのも事実。

未熟。後悔先に立たず。されど佇まいに悲壮漂う事は無い。

「だが中々に面白かったぞ。少しは楽しめた事に敬意を評し、オレの力を見せてやる！」

喰らえ、完全消滅覇（ゼロファイルウェーブ）!!」

衝撃波が突如襲う。

盾や壁で防げない。喰らえば忽ちバットステータスが付与された。強化されていた攻撃力は低下し弱体化。俊足は鈍足異常。良性が悪性に反転。そういったスキル攻撃だと瞬時に理解する。荒らしめ。厄介者めが。害悪。塵芥。取り敢え牛乳バケツ。話はそれからだ。

「この攻撃は全ての波長、つまりエネルギーの周波数をゼロにする。逆位相をぶつける事で、相殺し合うのだ。それは生命にも適用され、天使や悪魔といった精神生命体でも例外ではない。

両方に有効である以上、貴様の様な存在であろうと無事では済むまい。

寧ろ、高位の者の程……何だとツ!？」

牛乳をバケツで一気に。中和完了。

ガツカリだ。ドーピング禁止だ。ここからは通常攻めだ。

エンチャントが無事なだけ良しとしよう。

「馬鹿な、一瞬で打ち消しただど!？」

しかも全ての波動、生命の鼓動すらもゼロと帰する、完全消滅覇が無効化されるとは」

鉄装備で良くぞ持ち堪えたものだ。

それも個人で。誇りたい。だが終わりだ。

シングルでなくマルチの世界に生きる者である。次々の者が成し遂げていく。己が何するでもなく。共に何するでもなく。

それをまた、後者の立場から背を見つめる時が来る。だが確かな繋がりが心中にある。

「……しかしオレの攻撃を防いだ所で、貴様の攻撃がオレに通じない

以上、結果は変わらん！」

その時はいつか。今でしょ。

「遊戯は終わりだ……なっ!？」

増援が来た。同志諸君。久方ぶりである。

最新の剣、弓矢、軍事部装備、ネザライト製品。

こぞつて波打ち押し寄せる。荒波は荒らしをも飲み込む濁流となり押し流す。その様は元の世界でもこの世界でも変わりやしない。

——やあ同志。遅かったじゃないか。

——悪い同志。他の者に手間取った。

「時間を掛け過ぎた！ それにしてディーノらは何をしている！

よもや、やられたと云うか！ この短時間に！」

次々剣を振り下ろし、弓矢が吹き荒れ、数の暴力が、マルチクラフターの正義が荒らしを殺す。殺し続ける。

荒らし許さん慈悲は無い。

様々な意見ある創造主なれど、一致した際の団結力は凄まじく、御覧の通りの結末を見届けるばかり。

「馬鹿な！ 有り得ん！ 猛攻を凌ぐべく創り出す絶盾が、悉く

破壊されていくだど!？」

創造力においても、奴等が上回ると云うのか！ ヴエルダ様を超えて往くというのか！

かような非常識を認めると云うのか!？」

おのれ！ おのれマインクラフター!!」

黙らっしやい。すつとごどつこい。

斬り刻まれていく荒らしを塵芥を見る目で蔑む。

怯えろ。 竦め。 クラフトを活かせぬまま死んで逝け。 技術があろうと独創性があろうと無かろうと亡くす時は亡くすのがこの世である。 己が消えたが良い例だ。

陰は惨たらしい死で満ちた残酷を道理とする世界で、望む死に方や創造を皆が皆出来るとは限らない。

創世主ヴェルダナーヴァがどういった者かは想像の範疇を抜けないが、かの者もクラフターであるならば理解していた筈だ。

その上で己が消滅する事をも受け入れたであろう。 我々も何れはと運命を受け入れている。

だが今じゃない。 少なくとも荒らしに跋扈されたまま、相手が望むままに無様に消え失せる気は無い。

それこそリムルの言葉を借りるなら「思う通りならない事ばかり」なのだから。

「ゴボアッ!!」

同志のネザライトの剣を無数に刺され、遂に荒らしは終いである。

飛び上がり爆発四散する事もなく、その刹那に消え失せ、我々の望む通りとなった。

何でも上手くいかないと先程は云ったが、努力して得る望む何かはあるとも思う。

彼女が星の世界を目指し、同志が宇宙に行けた様に、己も望むモノが手に入る様、行動していききたい。

取り敢えず事今に至っては、荒らしを倒すという目標は達成出来た。 このまま撲滅運動に加わりたく思う。

クラフトは久し振りだが、なに。 同志もいるマルチクラフトだ。 彼女もいる。 なる様になる。

未来に希望を持つのは良い事だ。 少なくとも絶望して消えるより良い。 そうだろうか？



デイーノら一行は、ボコツた後は大人しくなったから、クラフターは放置して他へ往く。

荒らし共を甚振り溜飲が下がったのもある。

一方で胸を撫で下ろす管制室の面々。

「敵も皆殺しか……」

「そうじゃないかと思つてたけどね……」

ベニマルとラミスが疲れ顔で安堵した。

何が何だか。クラフターも画面を見やる。

映るは同志諸君。何やら懐かしい友の顔もあるが、そういう事もあるだろう。祭りだし。

或いは、こうした出合い、再会をベニマル達も味わっている故のハアンか。成る程。理解し領いて見せる。

「酷く違います馬鹿共」

隣の娘……辛辣同志は相変わらず辛辣。

「まあでも……再会という意味では、私も嬉しく思います。いえ、これからですけど……えへへ」

かと思えば急にしおらしくなる。

何だ赤らめて。まさか爆発動作か。クリーパー柄のパーカー

だもの、可能性はあった。

思わず距離を取る。此処がチェスト満載の倉庫で無い事がせめ

ての救いだ。

「爆発しませんよ!?　確かに服装はアンタらの世界にいる緑のモンスター風ですけど!」

そうか。見た目通りにいかないものだ。
そうであつても嬉しく無いが。

「とにかく!　まだ戦争は続いています!　北の地でも激戦が続いていますし、各地、連邦領でもIRP含めた面々が戦闘中です!　油断せずに荒らしを倒して逝つて下さい!」

クラフターらは賛同し頷いた。

不穩に聞こえたが気の所為だろう。

天界とやらに行けるゲートを見つけたのだ。

何度リスポンしようと諦めず呐喊し続ければ如何な荒らしも撲滅出来よう。

「そう上手くは……いえ。アンタらなら上手くやってくれるでしょう。」

敵の思惑がどうであれ、アンタ達マインクラフターの道を阻むなんて誰にも出来やしないでしょうから」

笑顔で言われた。

此方も笑顔で応、と頷く。

もう少しだ。祭りは終わる。荒れ果てる前に戦争は終わらす。
楽しい時間だった。マルチはやはり楽しい。問題も沢山出たが、美化出来る思い出となれば後は野となれ山となれ。

それをまた好きにするのがクラフター。そこに何を作ろうか。
楽しみだ。我々は常日頃楽しみ尽くせない日々を送っている。

164. 赤色とエンダーモドキ

迷宮に侵入した荒らしを撃退したクラフターだったが、使役されていたディーノらは味方面して管制室で寛ぎ始めた。イラツとした。

「いやいや操られていただけだって。俺は悪くないからさ！」

「まあ嘘を言ってる訳じゃないか」

リムルも何故いるのだ。しれっと。暇なら北部か本拠地に向かえと云いたい。迷宮戦はとうに終わりを迎えた。崩壊した地上は既に聖地厨が作業している。次はもつと立派な大都市を造ると息巻いている。

「とにかく戦争を終わらせよう。天界に行ったミリムが心配だし、北地じゃクロエとギイが戦っている」

余力の生まれたクラフターは、ネザライト装備を整え、決戦仕様エンジンチャントを身に纏い、インベントリもポーションや上位金林檎、不死のトーテム等を用意。

軍事部はIRPを連邦本土防衛に就かせたままとし、余剰戦力と化した戦車隊を天空門に差し向ける。軍事衛星は全体を俯瞰して監視しつつ、必要に応じて支援する。宇宙ロケットは最悪は兵器転用して投入。後の創造主は銃やロケランを装備して向かう。良くも悪くも慣れたものだ。

北地には行かない。最高性能の防具PSクラフターが戦闘中だ。心配はしていない。クロエもいる。どういう訳か味方ドラゴンも来たそう。リムルに手懐けられた奴だ。予想に難しくない。

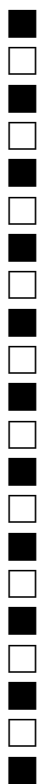
「まあ、お前らがいる限り何とでもなるだろうが、監視者は必要だろ。ヴェルダの所へは俺もいく……ギイの所、クロエが心配だが、そつ

ちには復活したての親友を向かわせる事にした」

リムルが笑顔を向けて来た。 思わず殴りそうになった。 無駄な労力なのでしなかつたが。

準備が整い次第、各自出陣。

天空門の前には既に武装したクラフターが集結しつつあり。 先行して悪魔が向かっている。 北地の激闘は終わりつつあり。



北地、ギイの領域。

PS (パワードスーツ) を装備したクラフターが悪戦奮闘、氷ドラゴン相手に大立ち回りする傍ら、ギイとクロエも隙を見てクラフターを支援していた。

「先生は相変わらず凄いよ!」

「やる様になったもんだ。 もう姉妹喧嘩してる場合じゃねえな、ヴェルザードよお?」

「忌々しいッ! どいつもこいつも!」

「姉さん、そろそろ終いにしてあげる!」

そろそろ祭りが終わる予感。

荒らしを長生きさせる道理は無い。 痛ぶる暇もない。 さっさとネザライトの剣でスパツと行こう。 そう俊足でドラゴンに寄つた刹那。 いつかのハアンが鳴り響き興が削がれた。

「アルティメットミニオン!!」

するとドラゴンが、いつの間にか村人形態に。

天を見上げれば舞い降りる、いつかの荒らし。羽虫仲間。
次から次へと。荒らしとは得てしてそうであるが。故に容赦
はしない。

「控えよ、私はヴェルダ様の片腕たる。終末の天使長。ルシアで……」

何故か慕う様な礼をする村人ドラゴンを尻目にクラフターは斬り
飛ばした。

荒らし死すべし慈悲は無い。

取り敢えずのノックバック。ミリム城でも同じ目に遭わせた様
に。未だエンチャントは有効で何よりだ。本体に剣撃が抜けな
いのが残念でならない。その内に効くだろうか。でなきゃ困る。

「くっ……相変わらずの能力ですね……!」

「やはりかテメエ! 天使系能力を持つ者への絶対支配を強制する
ものだな?」

「流石はギイ・クリムゾン。ヴェルダ様が警戒するだけの事はある
ます。ですが、それが判った所で最早手遅れです。貴方に出来る
のは、ただ大人しく死を待つ事のみ」

「黙れ! 羽虫如きが、偉そうに抜かすな!」

ハアンハアン鳴きあって、ギイがやっと荒らしに斬り掛かる。
が、バリアで弾かれた。

ガーディアンとの戦闘が思い出される。ノックバックは敵がす
ると厄介だ。弓矢で射抜くか。

「おい! お前も手伝え! 奴の狙いはクロエの身体を奪い受肉
する事だ!」

モタついて責められたが、相分かったと攻撃。

エンチャント弓矢だ。剣程じゃないがノックバックは起きるし、

バリアも貫通して荒らしを後方へ押し退ける。

「どこまでも邪魔を……ッ！」

クロエに近接攻撃を仕掛ける腹だったのだろうか、そうはさせない。が、しかし。何故クロエは棒立ちなのか。ドラゴンも動かないし。荒らしを前に急に寝落ちしたのだろうか。クラフターの中にもベッドなしで稀にいる。とはいえ状況的に凄い事をする。改めて大物だ、コイツらは。

「クアアアアハハハハハ！　我、参上！」

そうして、いつかの大物のハアンまで響く。

見上げれば新たな客、新たなドラゴン。あいや見た事がある色の奴。数年前、この世界の初期スポーン地点近くにいた黒いエンダードラゴンモドキだ。

「いや、我、復活して早々リムルに姉2人がいる場所に行けと言われた時は辛かったが神は我を見捨てなかった！」

「ヴェルドラか！」

鳴き合い始めた。

今に始まらないが戦闘中に会話とは、村人達は器用な者だ。クラフターはチャットしながら行動は出来ない。羨ましい能力だ。ハアンと鳴きたい。

取り敢えずノックバックで荒らしを吹き飛ばし時間を稼ぐ。村人の能力に期待しよう。

「うむ。ギイよ、そして創造主よ。苦戦しているようだな。だが安心するが良い。我が来たからには、もう心配は要らないぞ！」

「正直助かったぜ。オレ様でも、戦いながらあの支配を解除させる

のは不可能だしな。能力の原理は理解したが、あれを解除するのは厄介だ」

「ほう流石だな。ならば、殺さずに動きを止めさえすれば、あの支配は解除可能なのだな？」

「ああ。思考に全力を回せば、何とか出来るだろうさ。だが、あの姉妹相手。ともかくは、この2人を無力化するのが先だぞ？ 流石にお前が来なかったら、”先生”がいるとはいえオレ様も殺されていたかもな」

「クアアアハハハハハ！　そういう事なら尚の事、我に感謝を捧げるが良い！」

クロエは相変わらず棒立ち。ドラゴンは最悪どうでも良いが、荒らしを前にソレはどうかと先生思う。

隙について殴る。　駄目。　水流で流す。　駄目。　牛乳を飲まず。　治った。

「ゴポポポツ!?　　げほっ……ありがとうございます先生……助かりました……」

よし。これでハメ殺し回避。
ハメ殺して良いのは荒らしとモンスターだけだ。　TTが懐かしい。

「ええーッ!?!」

ドラゴンが煩い。　味方なのか敵なのか。

やはり色的に敵だったのだろうか。

「やはり貴様らの牛乳って最強なのでは？　そう易々と支配を解除されるとギイも出番取られて良くないのでは？」

「はっはっはっ！　　良いぜ先生、その調子だ！」

「喜んで良いの? いや喜ぶべきだが!?」
「おのれマインクラフターッ!!」

鳴きあつてるから味方としておく。
ならば、この場の荒らしは目の前の奴だけ。

「クツクツク、ではギィよ。 我らでサクツと姉上達をどうにかしてみせようではないか!」

エンダーモドキは笑うのを止めると、村人に変異し不敵な表情で前に出た。

そして迷いなく赤龍に向かって歩き出す。 取り敢えずお手並み拝見といこう。 スニーク姿勢で見守った。

「ヴェルグリンド。 その愚か者を殺しなさい」

そんなモドキを冷ややかに見つめ、荒らしが何やら命令をした。
そして先に手を上げたのは赤龍だった。

——パァー——ーン!!

盛大な音が広間に響く。
キョトンとするモドキ。 その類は何故か、真っ赤に腫れていた。
ああ、とクラフター。 コレは任せきりは出来ない。 悟り武器を
構え直す他なし。

「あれ? 今、姉上が自分の意志で動いたような……殺意は全くなかったが、我を痛めつけようという強い意志は感じたぞ!」

モドキは動揺している。
コレは駄目みたいですな。

期待出来ない。それともドラゴン同士だから交尾でも始まるのか。だとすれば卵が出現する筈だ。松明と鶴嘴を構えて待つ。

「ま、まさか!? そんな馬鹿な!!」

望む理想を前に、モドキの額から汗が一筋流れ落ちた。その意味は分からん。

「ねえ、ヴェルドラ。貴方、今、私をどうにかするって言ったのかしら? それとも、私の聞き間違いなのかしら?」

綺麗な顔に優しいげな笑みを浮かべ、モドキに静かに歩みよる赤龍。クラフターは、その笑顔を知っている。

シズだ。怖い時のシズに似ている……ッ!

それは決して優しい表情ではなく、この世の恐怖を具現化した存在である。

「は、はうあ……!?」

「はうあ、じゃねえんだよ、この愚弟が!」

目の前で繰り広げられる惨劇。

クラフターは震え棒立ちするしかない。思考回路は麻痺したように演算を停止し、回避行動に移れない。

悲しいかな、シズによって本能に刻み込まれた恐怖の記憶が、クラフターの行動を阻害するのだ。

凄まじく重く、冷たい刃で斬られると痛く、ダメージがあるのに死ぬギリギリを見極めた容赦ない剣撃の記憶が蘇る。モドキ共々涙目になるのに、それほど時間はかからなかった。

「くっ……可笑しいではないか!

何故姉上は動けるのだ!?

操

られているのではなかったのか!？」

「黙れ!　私が何度も何度も同じ手に引つかかるとでも思ったのか?　私を舐めているのね、そうなのね?　ヴェルドラ?」

「い、いや、そのような意味では決して!」

震えながら、ドラゴンの喧嘩が治まるのを待つしかない、クラフターは悟った。

しかし牛乳も飲まず何故動けたのか。サボりか。あいや赤龍が海底に沈んだ時、回収して多少我々と交流した影響か。何にせよ敵対しない事を願う。したところで倒すだけだが、面倒が増えて喜ぶ趣味はない。

「アレもコレもクラフターが悪い!」

「黙れ、見苦しいぞ。私の弟なら、それ以上馬鹿を晒すなよ。ヴェルドラ、貴様は勇者と創造主と共に奴を相手にしろ。精々、下らぬ失敗をしないようにしろよ。姉上は私が相手をします」

「ですが……」

「くだい!　二度も言わせるつもりか?」

「了解であります、姉上!」

「仲が良いなヴェルドラ?」

「どこをどう見たら、そうなるのだ!」

やっと喧嘩が終わった。

赤龍は氷龍を相手にするらしい。巻き込まれたくないので、己は荒らしを相手にする。

「ギィ。貴様なら姉上の支配を解除出来るのだな?」

「ああ、出来るぜ。ただし戦闘しながらじゃ無理だけどな」

「問題ない。愚弟と創造主がいる。貴様は姉上の支配の解除に全力を尽くしてくれ」

「いいか、今のオレでは解除に時間が掛かり過ぎる。とっておきの

演算特化で解除するから、その間はオレの援護を期待するなよ。ついでに言つとくが、オレの戦闘能力が大幅に減少するから、お前等が負けた時点で敗北する事になる。それでも構わねーな?」

「問題ない。 さつさと始めてくれ」

さつさと参戦してくれませんかね?

ノックバックで荒らしを吹き飛ばし続けているが決着がつかない。となれば、この世界の摩訶不思議な能力を用いる諸君に頼りたいところなのだ。今のクラフトでは時間稼ぎが限界だ。ドラゴンを倒すなら出来そうだが肝心の荒らしには微妙だ。悔しいが。

「いいだろう。 オレの信頼する相棒、ヴェルザードがいつまでも操られているのも腹立たしいし、さつさと解除してやるとするか」

傍らでギイが変身していく。

緋色の髪が神々しく流れ、豊かな胸とまろやかなお尻の存在感を、折れそうな程に細い腰のくびれが強調している。

が、それ以上観察している場合でなし。何をしでかすのか知らないが、やるなら早くして貰いたい。遊びで荒らしと戦っているんじゃないんだよ。

「ギイ、か?」

「他に誰がいるんだよ。とにかく、時間稼ぎは任せたからな。負けんじやねーぞ」

「クアーーーーハハハハハ! 愚問である!」

やっとそれぞれが動き始めた。

クラフターはやれやれ、としつつ荒らし……ルシアとやらを吹き飛ばし続ける。

……コレ、倒せるかなあ?

165. 防壁突破と正義

赤龍ことヴェルグリンドが、氷龍ヴェルザードに食って掛かり、その間にギイはヴェルザードの精神世界に侵入、ヴェルダによる支配を解除する。

その時間稼ぎにクラフターも参戦。クロエの肉体を頂く為に降臨してきたルシアをノックバックしまくった。

ピンチはチャンス。荒らし本体の側近を此処で倒しておき、今後の懸念を取り払おう。そうしよう。荒らし死すべし慈悲は無い。

「くっ！ 防壁ごと斬り飛ばせるとは、相変わらず出鱈目なスキル持ちですね！」

「クアアアハハハハハ！ そのザマではクロエに近付く事も出来まい？ 世界に蔓延る創造主の力を甘く見過ぎたな！」

「愚弟め、貴様は何もしてないだろうが」
「私もしてないけどね」

クラフターは思った。

ハアンハアン煩い。人任せにするのが勇者とドラゴンか。変わった御伽話になりそうだ。名付けてサボリの勇者とドラゴン。人に任せて世界平和。実に平和な本になりそうだ。

存在しているだけで、この世に作り残す創造。少なからず他者に常に影響を与えている。意図せずとも。望む望まぬ関わらず。

しかしまあ、とクラフター。

このままでは埒が開かないのも事実。

フルエンチャントのネザライトの剣でも荒らしの防御を崩せない。少し考える。考えつつ剣を振るい吹き飛ばす。今までの経験が腕を震わせる。

「ですがお互いに決定打に欠けるのは明白。このまま続けても無意味だと知りなさい」

閃いた。

防壁がブロックの1種と仮定すれば壁際に追い込み斬りまくれば何れ壊れる。ツールは何か良いか分からんが試す価値はある。と云う訳で壁際に追い込んだ。

「壁際に追い込んだところで今更貴方達に何が出来ると……えっ？」

斬りまくる。蜘蛛の巣も試しつつハメる。

荒らしを捕獲した際は、こうして一興。

「無駄だと分からないのですか？　いくら攻撃を続けたところで……なんですって!？」

荒らしを取り巻く半透明の壁にヒビが入り始めた。良いぞ。

やはりこの手に限る。

「え、いや、何故です!?　なぜ攻撃が通じているのですかーツ!？」

「だって先生だもん」

鶴嘴か斧かとも悩んだが、剣でもイケる。

よしよし。無駄に苦労しないのは良い。

「いやー……数年前の出会いより成長してない?　というか、ここまでされると我の出番なくない?　クラフターというだけでこうも理不尽になれるものか?」

「今の先生なら私の無限牢獄を突破するかも。ううん、もう心の中では……ふふっ、私の悪意を先生にぶつけるのも面白いかも知れないね」

「あのスキルは他の意味もあつたか?」

「貴方も先生に教えて貰うと色々楽しめるよ」

「我がクラフターに？　ふむ、良い案ではないか！　元より探究

者である我に相応しい！」

「リムル先生は止めそうだけどね」

腕を止めない。　腰も止めない。

自動修復を許さない。

クラフター共通の認識。　木こりや土弄りの常識。

壊れるまで！　　振るのを！　　止めない！

「巫山戯るな！　　私の正義こそ万物不変の唯一の真理ではないか！

　　こんな、こんな馬鹿な事が許される筈がない！」

「主観が変われば変動するような不確かなものを拠り所に行っているなら、貴女に先生は、マインクラフターは倒せないよ」

やがて壊れた。

後は世界から消すのみ。

ズバツと一閃。　　斬捨御免。

遺言は要らない。　　荒らしに耳を貸す事はしない。

「終わったな。　　強くなったものだ」

「さすがです先生！」

マインクラフター、残心の構え。

荒らす為に作られた哀れな存在よ。　　俗世から消えてなくなれ。

生かしておけない。　　他者を殺し自己満足する連中に創造主を名乗らす訳にはいないのだ。

だが闘争は延々に続く。　　今回の件を解決しても第2、第3の荒らしが現れる。

我々はある種、呪われている。　　破壊と創造の輪廻を繰り返すだけの呪われた存在。　　我々はこの世界に愛されていない。　　だから逆に愛してもいる。

此処は数多不思議に溢れ、それらを受け入れる世界だが、それでも我々は世界に不要かも知れない。けれどそれこそ、数多ある考えの1つや2つでしかなかった。であれば己に出来る事をする。創り生み出し破壊し殺し合う。その時々を受け入れる。そこに答えがある。

「暇してるなら手伝え愚弟共！」

「姉上も創造主を見習っては？」

「何か言ったか？」

「イエ、ナンデモアリマセン」

残るは、と向き直る。

龍同士が殴り合っている。傍らで女体化したギイがゴニョゴニョしている。

その癖に子供が生まれない。バグか。

まあ良い。理解出来ない事なんて、世界に溢れている。疑問、

希望、絶望。爆発。

様々な感情に溺れそうになるが今更だ。今この瞬間も、この先も

続く感覚だ。コレは。

どうせならと云う訳で。

今、今後共するべき事は楽しむ事だ。

取り敢えず腹が空いては戦は出来ぬ。ベイクドポテトを齧って満たしておく。

「こんな時でも飯は忘れないのだな。どれ、我にもひとつ……」

「良いから来い愚弟がッ!?!」

赤龍が吼える。それを合図に剣先を向け、クラフターは笑顔で唸喊したのだった。

166. 天空門と思い出

ヴェルザードの精神世界にギイ共々クラフターがズカズカ土足で上がり込みメンタルケア……なんて展開は流石に無かった。あつたらあつたで精神が犯されそうである。

とりま原作通りギイによりヴェルダの支配から解放されたヴェルザード。心の内に溜まった鬱憤を晴らし、ようやくと現実に戻る。

「——ただいま、ギイ」

「おう。お疲れ」

クラフターに言葉は分からぬ。

されど要らぬ。荒らしは既に消え去ったからだ。

後に残るのは天界。諸悪の根源を潰しに向かう。荒らし許さん

慈悲は無い。

「じゃ、さっさと天界でヴェルダをブツ飛ばしに行こうか」

「そうね。さっさと黒幕を倒しちゃってリムル先生の所に行かないきゃね」

そしてクラフト生活に戻らねば。

開拓地がまだまだある。作りたい建造物が山程ある。最近は宇宙に注目している。あの無限に広がり未知なる星の海。天上に広がる宝石箱をひっくり返した様な幽玄世界。

元の世界でも新たな発見が続いている。竹や桜やら。興味が尽きない。未だ楽しみきれない毎日を送っている。

取り敢えず今は荒らし潰す。

クラフターは空を飛び大陸西部、天空門なるゲートへ向かう。既に数多の同志が備えている。この最後の祭りに乗り遅れる訳には行かない。



扉を開け放ち、わらわらと突撃するは我等がマインクラフター。

荒らし拠点だ。容赦は要らない。

無遠慮に剣振り走り、弓矢が飛び交いTNTを起爆する。軍事部は挨拶がてら反物質ロケランをブツ放ちデカイ呼び出しベルを鳴らす。

荒らし共、出て来いやッ！

が、来たのはヴェルダじゃなくミリムだった。

母を模したルシア本体……クラフターの影響で防壁能力を失ったのを機にトドメを刺し、少なくとも悲壮感を抱えてフラリと現れたのだった。

辛辣ちゃんや弟君の存在がいるクラフターとしては、多少家族関係は理解しているつもりだ。

きつと事情を知れば悲しむだろう。

創造物を愛し、故に破壊された時は悲しいものだ。逆に自ら壊すしかなかった時は虚しさもある。

家族を消すのは家畜の間引きとは違う。

少なくとも一緒にはしていない。

「相変わらずだな、お前達は……」

ミリムは出会った刹那、旧友に会った様な安堵感から少し口角を上げて見せる。

対して我々はスニーク姿勢で挨拶。

お互いその方が良かった。ミリムには笑顔でいて欲しい。ミリムもクラフターは面白い存在のままできて欲しい筈。陰湿な表情は互いに似合わない。荒らし行為は未だ許していないクラフターであるが。

「分かっている。ヴェルダの元へ向かうのだ」

ミリムが先行するから、後に着く。

その往く先々の壁には透明なカプセルが規則正しく並び設えられており、覗き込めば透明な液体が満ちていた。

クラフターは首を傾げた。

湖底研究所のクラフターは兎も角、多くの者は1ブロックも理解出来ないが、その1つ1つの透明の箱の中身に浮かぶのは、未だ生まれ出ぬ羽虫達である。

殺すにも弄るにも今がチャンス。回収するならシルクタッチか。はたまたエンダードラゴンの卵の様に、やや特殊回収か。

「構うな」

ミリムはそうした天使達に目もくれず、真つ直ぐに玉座を目指す。クラフターの一部は遊び始めてしまいが、それでも倣つて後に続く猛者もいる。好奇心は猫をも殺す。優先して荒らしを殺すべしと自制心が働いた者は多くはない。だってクラフターだもの。

「お前達だものな。来たい奴だけ来れば良い」

やがて辿り着いた、天界の中心部。

全ての中枢にして、天帝の座す場所。

諸悪の根源、荒らしのヴェルダは今、名実共にこのダンジョンの支配者として君臨している。クラフターからすれば神殿なモノだから、さっさと倒したい。そうしてこのダンジョンをゲットだ！

そんなルンルンなクラフターという異物に天空城の自動防衛システムがミリムの殺意共々反応。

警報が鳴り響き、守護機神（ガーディアンボール）が出現する。

クラフターからすれば変わったゴーレムだな、である。あと敵扱

点にいるのだから敵であろうな、である。 なら倒せば良いや、である。

しかしゴーレムらはミリムの持つ首飾りを見て、その動きを止めた。 その隙を突いて創造主は剣を振り翳す。

死ぬが良い。

「コレヨリ先二ハ、才通シ出来マ……」

警告無視上等。

容赦なく斬り伏せ一刀両断。

敵ダンジョンにいる以上、全ては敵前提なので、容赦せず剣を振るう。

言葉も分からない。 だが荒らしを理解するつもりはない。 先手必勝。 やらなきややられる。 荒らしを見たら悪即斬。

「それで良いのだ」

そう言うなり、ミリムも無造作に拳を振るい、別のゴーレムを破壊した。

よしよし良いぞ。

ミリムを今だけは味方認定する。

この騒動解決後、振る舞い次第で再び荒らしと見做すもの。

さてもゴーレムは攻撃してこない。

理由なんて知らない。 が、都合が良い。 バツサバツサと斬り伏

せまくる。 どうせ荒らしだ。 全て滅する。

そんな中、女村人が立ち塞がった。

「ミリム様、ご立派になられて……」

悪即斬ッ！

涙ぐみつつ、ミリムに近寄ろうとしたので斬り捨て御免であるッ！

「サロメ!？」

黒一色のドレスを着た、穏やかな感じの美女であった。斬ってみてから思った。切口からは成分不明の透明な液体が流れ出る。

千切れた胴体から毀れ出るのは、贓物ではなく精密な機械である。変わった村人だ。

「いや違ったか……模した機械、か」

液体を瓶詰めしてみた。

悪意は無い。純粹で底知れぬ好奇心からだ。

湖底研究所の連中も、こうして荒らし化したであろうに。過ちを繰り返す。けれどクラフトは止められない。

「悪趣味な」

ミリムが悲しそうに表情を曇らせる。

気持ちは分かる。クラフターはほんつ、とミリムの頭に手を置いた。

「慰めか? 優しいのか違うのか、相変わらず馴れ馴れしくて……何より分からんな……お前達は……」

我々も荒らしに同情しない訳ではない。

元の世界で例えれば元は同志だった者だ。ミリムも知り合いが荒らしになったかで沈んでいるのだと予想する。

だが荒らしは荒らし。斬り捨てろ。

記憶は足枷。感情を持たば苦しむ。他者への愛情は弱さとな

り心を苦しめる。

それでも進む。進む強さがミリムにある。だから力強くあれ。

そう励ました。

「そうか。 うむ……偽物に惑わされている場合ではないな。 お前達の様に強く生きねば」

「……ああ……ミ、リム……様……ご、立派……に……ピツ——」

地面に崩れ落ちる変な村人。

クラフターは不器用にもミリムの頬に触れた。 そこを伝う雫を拭う為に。

サロメ。

幼きミリムを育て、教育した女性だった。

古き日、ミリムに看取られてこの世を去った女性……生きている筈がないのだ。

永劫の時を生きるミリムと違い、彼女はルシアに仕える侍女の1人でしかなく、何より人間であつたサロメが、生きている道理はない。

「大丈夫。 もう泣かない」

手を払いのけられた。

未練は断ち切れたか。 なら良し。 クラフターは満足気になん

うんと頷き前を見る。 見て抜剣した。 荒らしが来たからだ。

「酷い事をするね。 せつかくミリムの為に、死者の魂を呼び寄せたというのに。 喜んで貰おうと思つて、こつそり用意したプレゼントだつただけ……君達には理解出来なかつたか」

来たな。 ヴエルダとやらめ。

涼やかな声がより殺意をムクムクさせる。 リムル以上にムクムクだ。

そーいや本人はナニしてる。 来るなら来い。 来たら事故を装つて今度こそ葬れるかも知れない。

「ヴェルダか。 貴様、覚悟は出来ているのだろうか？」

「覚悟……何の事かな？」

後はコイツ倒してハイ終わりである。

大陸全土のボスクラスの荒らしは同志が片付けたし、暇を始めた同志は天界に続々集まって来ている。

最早決着した様なものだ。 後は野となれ山となれ。 整地したり穴掘ったり建物作ったりだひやつほい。

「お前の自慢の四凶天将とやらは、全員敗北したようだな。 後はお前だけだぞ、ヴェルダよ。 ワタシ達を怒らせた報い、きつちりと受けるがいい」

ミリムも抜剣、突撃する。

クラフターも負けじと呐喊。 死ね荒らし。 死んで消えて無くなれ。 そして天界も我々に寄越しやがれや下さい。 我が刃に倒れよや滅びよや下さいお願いします。

「遊んであげるよ」

天性の動きによる剣戟が始まった。

先陣切ったクラフターは余波で吹き飛び切り刻まれるも、後続の群れが津波となり押し寄せる。

剣で駄目だと判断すれば、弓矢を打ち、軍事部が機関銃を乱射した。 総じてエンチャント済みだ。 有象無象の村人製とは違うのだよ。

村人とは。

「甘いね」

けれど回避されるか弾かれる。

なんて奴だ。ラスボスだから簡単に終わっても詰まらないが。だが狙い通り。

「滅びの時は、今！」

刹那。ヴェルダの背後、天空門から続々と後続が雪崩れ込む展開に。

一般、軍事部、連邦軍、帝国軍の姿すらある。

団体様ご案内。イケイケ同志！

荒らしを潰せ！

原作子作り近●相●トーク(?)なんてさせない。

アレがクラフターの狂気より上回るか同等か知らないが、何も言わせねえよの精神で突撃を敢行する。

「何ッ!？」

やっとムカつくクール顔を歪ませられた。

取り敢えず挨拶代わりに同志が次から次へと思いつきの攻撃を始めた。

中には見知った奴もいる。逆に来なきや何してんだと責めたいが。

「やれやれですわね。相変わらず好き放題する連中ですこと」

「本当だよね。ボク達が3人がかりで、何度突撃をお預けした事か」

「そうだな。リムル様から命令を受けた時は、簡単な任務だと思っただけだな」

軍服悪魔トリオが鳴いている。

服の癖に軍事部には入部していないそうだが、まあ好き好きだ。

「ねえ、貴方達。先行しておいて敵を倒せてないとは……私達がお

手伝いしましょうか？」

「賛成ーッ！ 殺せばお手柄だろうしね！」

「ミリム様も苦戦なさっているようだし、助太刀しても文句は言われ
ないだろう」

「お前達、すまんが手を貸すのだ！」

「喜んで！」

増援続々。

最後の祭り会場は相応に盛り上がる。　こうでなくては。　楽し
んだ者勝ちだ。

「ミリム以外と遊ぶのは面倒だな。　お前達に適した相手を用意して
やろう」

刹那。　不思議な事が起きた。

ヴェルダの前に村人が2人スポーンした。

豪華な黒い衣装に身を包んだ老齢の男。

旧帝国陸軍正式礼服を着こなす短髪の軍人。

2人は不思議そうに戸惑った表情のまま、周囲を見回していた。

見覚えのあるスキンだ。

短髪軍服野郎なんて特に。

何故スポーンしたのか。　同じスキンが他にもいてもオカシイと
は思わないクラフターだが、この世界においては滅多に見ないユニー
クスキンだと思っていたから意外だった。

「わ、私は確か少女に技を託して死んだ筈……」

「自分は何故ここにいる？　生きていた……いや、それは有り得な
い」

ウルティマに技を託したダムラダと、クラフターに拉致され生死不
明となった近藤達也だった。

だが、決して本人ではない。
2人の反応を見てクラフターは判断した。

「やあ、目覚めたようだね。その身体の調子はどうかな？」

「これは、ヴェルダ様！　すこぶる快調ですぞ」

「ヴェルダ様、お久しぶりで御座います。　自分を呼ぶという事は、何か任務でしょうか？」

ヴェルダを前に、ダムラダと近藤は忠誠を示す姿勢を取る。

荒らしに礼儀をするとは。やはり同じスキン持ちの別人だ。

なら殺すまでだ。　何度現れようとも。　経験値TTのゾンビの如く。

一方、珍しい顔も見た。

その2人を見て軍服悪魔達が戸惑っていた。

ヘラヘラ荒らし行為に近い非道行為をする癖に、今更何をとも思うが。

そのスキンに思い出でもあったか。　だとしても断ち切つて欲しい。　ミリムの様に。

ミリムも思つてか、彼女らに叱咤する。

良いぞ。　我々の言葉じゃ彼女らに伝わらない。

「騙されるな！　それは、記憶のみを宿した偽者だ。　しかもヴェ

ルダに都合良いように、記憶の書き換えも行われている……本人の魂は消滅したのだろうか？　死者を蘇らせるなど、神にすら出来ぬ！」

ミリムの叫びに、悪魔も我を取り戻す。

対してヴェルダの陽気な声が届く。　また屑野郎の荒らし顔になつていた。　また歪ませねばならぬと決意した。

「正解。　さつきミリムには侍女を作つてみせてあげたからね、原理はそれと一緒になんだよ。　不思議な事に、生者の記憶は集められない

し、一度しか利用出来ないんだけどね。この記憶の宝珠メモリー
オーブは、死者の記憶を再現出来るんだよ」

「ごちやごちや鳴いている。いつもの奴だ。」

その間に同志は荒らしを取り囲むように位置どりをし、ブロックで
トーチカやTNTをクラフトしていく。

時間は有効に使いたい。のんびり鳴いて余裕を見せていると痛
い目に遭うと云う事を教えてやりたい。

……因みに近藤はクラフターに拉致られたものの生きている筈だ
が、どうもリスポーン実験に付き合わされたらしく、その影響が何か
しらあつた様だ。

早い話がバグである。クラフターやそれらによるクラフトを無
理に理解しようとしてはいけない（戒め）。

「その宝珠を核として、天使達のエネルギーを集めて仮初の肉体とし
て生み出したんだ、地上では活動出来ないけど、ここなら関係ないし
ね。それに、技術のない人格を幾ら使っても、神智核に進化させて
みても、強くはなかったからね……今度は強い意思を持つ者を再現し
てみたんだよ。覚醒魔王10体に匹敵するエネルギーと、強固な意
志。 どうか、結構強そうだと思わないかい？」

ヴェルダは笑う。荒らし顔。

その言葉の意味を理解出来ないが、悪魔達の表情が怒りに染まっ
ていくから碌でもない発言だったのだろう。

ただ彼女達は基本的に我侷の様だし、自分の行為は許せても他人の
行為は許容出来ないタイプだ。

つまり荒らしを喜ばしてしまっている。奴らに構うな。 構う
程に奴等は調子に乗る生き物だ。 冷静になって欲しい。

「どうやら、本当に死にたいようですね」

「ボク、カチンときちやつたよ」

「ワタシを怒らせるとは、中々出来る事ではないぞ」

客観的に自分を見る事の出来ない悪魔3名は、好き勝手に怒りを表明している。

ミリムも同様だが、まだ冷静に見える。

「油断するなよ。ヴェルダの相手はワタシがするが、長くはもたない。さっさとあの偽者を始末するのだ」

そう鳴くのを合図に天上での戦いが再開。

祭りは続く。

だが何れ終わる。今は楽しむだけだ。

167. 頂と光景

偽物の近藤とダムラダが立ち塞がる。

クラフターからすれば荒らしに違いなく、スポンしたところで変わりない。廃坑でシルバーフィッシュに出会す程度の衝撃だ。

やる事は同じ。殺す。以上。

けれども興味は湧く。スポンだ。

「戦いと考え事を並列して欲しいんだけど！　急にボク達に任せないでよね!？」

「自由人ですからね。　今に始まりませんが」

何かしらのアイテムによりスポンしたから、所謂スポンエッグがこの世界にあるのでは。

もし手に入れば労働力・実験体確保ないし素材入手に繋がる。湖底研究所の連中もスポンエッグに絡んでいた可能性はあるが、実験機材も資料も纏めて破棄されたから、こうして考え直さないといけない。

クラフト。　罪深く奥深い深淵。　戦いの最中からしか得られない創造（想像）もあるのだ。

「うぐっ!？」

「ッ！」

軍服悪魔がアツサリ倒れてしまった。

あんなにイキってたのに……また分からされたか。　哀れ軍服。　されど軍服。　最悪ポーションと牛乳を浴びせれば良い。

しかし強烈な拳を叩き込まれただけで倒れてしまうとは。　一見するとその程度、であるが魔法と不思議の世界だ。　また世界お得意のスキルだとか、その辺が原因だろう。

だが我々の創造も負けちゃいない。　エンチャントと牛乳があれば

ば大抵何とかなる。逆に今更ならないのはやめて欲しい。

という訳で再度剣を振るう。やあやあと突撃しては無惨にも殴り飛ばされた。おつよい。やはり格闘戦は村人の方が上か。

「あらあら。私だけですわね」

「それは違うぞ。彼等がいる。彼等がいる限り、負けは有り得ないのだ！」

「ミリム様……確かに、彼等の自由を妨げるなんて真似、誰にも出来ないでしょう」

ならば遠距離だ。

周囲の者、軍事部共々、弓矢、銃撃を浴びせる。

その多くは弾かれたが、何発かは抜けた。その気になれば押し込める。

その間にも増援は来る。中にはクラフターに拉致られ徴兵紛いに来た者がいた。帝国の軍服だ。

「ふむ。俺が人体実験を受けている間にも戦争は佳境を迎えていたか」

「あら。貴方は帝国の暗部……」

「近藤だ。悪魔に名乗るのも妙な気持ちだが……これだけの戦力で無様を晒してどうする」

「手厳しいですわね。でも、そう言う貴方も彼等に好き勝手されていた様で」

「好きに言え。今は目の前に集中だ。俺の偽物までいる事だしな」

「……俺が偽物か。皆して好きに言う」

他にもクロちゃんが来た。

お久クロちゃん。さっさと加勢して？

「クフフフ。皆様、勝手に死ぬのは許せません。リムル様がお怒りになりますよ?」

「遅かったなディアブロ? 死ぬつもりはなかったが、下手すれば全滅する所だったぞ」

「クフフフ、それは失礼。ですが勝手に先走ったのは貴女方ではないですか?」

「マインクラフターの所為にするつもりはない」
「潔いですね。彼等の影響を受けましたか」

やっとそれぞれ動いた。

軍服村人は同志に持たされたらしい拳銃を握り、クロちゃんや他は素手。

いつも通り。羨ましい限りだ。我々の素手のみで戦うのは非効率的故に。

「まあ良いでしょう。門が健在のお陰で続々と仲間が増えていきます。彼の方達も来た様ですよ」

突如起きる爆発。

TNTとは異なるもの。見やれば6人の人影が。

「チツ、邪魔な奴らめ」

北地にいたギイとクロエ、あとドラゴンの村人形態。それとPSクラフターだ。

「やれやれ。全員揃ってやって来るといふ事は、ボクに逆らうといふ事なのかな? ねえ、ヴェルザード?」

「黙りなさい。兄上の名を騙る偽者め。言われてみれば、どうして貴様を兄上だと思ってしまったのか」

「本当、クラフターだけでも邪魔なのに。上手くないかね、本当

に」

弓矢でヴェルダを打ちまくるが、コンドーとダムラダが壁となり邪魔をしてくる。

増援が増え投射増量サービス中なので、荒らしが滅されるのは時間の問題であるが。

「あっそうだ、君達にも懐かしいだろう人物を呼び出してあげるよ。ボクって、優しいからね」

が、まだヴェルダは悪足掻き。

何かしようとし、ミリムが叫ぶ。

「ギイー！」

「させるかよー！」

ギイが斬りかかるも回避されてしまった。

そうして何かがスポンした。ドラゴン村人らは青褪めた。

だからと怯まない。ウイザー級だとして今更だ。

「丁度良い感じに、下の天使達が滅ぼされているようだね。エネルギーが天界に充満し始めたよ。これなら、残りの天使の力を全て込めた最高の1体が創り出せそうだね。クラフターの君達も楽しみだろ？ 自分の娘と息子を作り出した君達だ……そしてギイ達。

せいぜい、再会を懐かしむといいー！」

「……、は？　　というか、俺様はどうなったんだ？」

その若者、クラフターには知っちゃこっちゃんない村人である。

だがギイ達にとっては思い出の人であり、最近死んでしまった者である。

帝国の皇帝、ルドラ・ナスカ。

目の前の存在は最強だった頃、全盛期の記憶を有した姿だ。地上での敗北を予見したヴェルダの切り札が今、形を成して顕現したのだった。

「これはこれは強そうですね。ですが、その程度で我々が、何より彼等を止められるとでも?」

「ヴェルダ! 何処まで弄べば気が済む!」

「テストロツサ。ウルティマとカレラを回収して下りなさい。此処は私達と、我等がマインクラフターに任せましょう」

クラフター達を見る。

その瞳に見えるのは、興味の色のみ。

「悔しいですが……頂上に住まう者達と並び立つとは。いえ、それすら彼等には通過点でしかない。それがマインクラフターでしたわ」

テストロツサでさえ認めるしかない、この世の頂点に立つ者達。

そんな者達に臆する事なく、平然と並び立つ同僚とマインクラフターを見て、テストロツサは満足そうに頷く。

クラフターは敗北を恐れない。

死すらも超克して世を、人生を満喫する。

いつか私達も、彼等と共に楽しむのだと笑みを浮かべる。そして。

皆は好きな獲物を見定め、戦いが始まる。

168. 悪友と創造主

ミリムはヴェルダ。

ヴェルドラは近藤（正）と共に近藤（偽）。

ディアブロはダムラダ。

ギイはルドラ。

龍姉妹とクロエは隙を見て援護。

他原初は撤退。

その辺のモブとクラフターは好き勝手していた。

毎度である。今更語るべくもない。

「叩き潰すツ!!」

「スキルを使ったか。何処までも厄介だね」

ミリムは何やら変身してヴェルダを剣を豪快に振り回して押していく。

攻撃力上昇ポーションでも飲んだかのよう。やれるなら最初からして欲しかった。出し惜しみしている場面ではない。

「クアーハッハッハッ! 偽物と間違えて攻撃しても許せよ、コンドウよー!」

「その時は貴様も倒す」

「それは楽しみだな!」

「真面目にやらないとお仕置きよ?」

「ハイ、ワカリマシタ」

「……竜種よ、強く生きろ」

「姉2人には酷い目に遭わされてきたのだ!」

「愚痴は戦いが終わったら聞いてやる」

モドキ組は楽しげだ。

任せる。邪魔するのは悪過ぎる。

「クフフフ。 エネルギー量のみが勝敗を決する訳ではありませんよ？」

クロちゃんは格闘している。

クラフターには未だついていけない分野だ。

ただクロちゃんが勝っている。 放置で良い。

「へっ！ 今度こそ決着をつけてやるぜ！」

「ほう。 死して記憶のみでも立ち塞がるか。 やってみせろ」

ギイも楽しんでいた。

アレも放置。 ヤバくはないだろう。

さても荒らし駆逐もそろそろだ。 宇宙に行く用意をしなければ。

既に頭の片隅では次なるクラフト案件である。

「……総力戦となる天魔大戦も潮時かな。 けれどユウキの意思は遂行した。 後は……これで最後としよう」

ヴェルダがハアンと鳴いた。

すると敵軍服は自爆、モドキらを吹き飛ばし、続けて最後にスポンした村人が大きく爆発しようとする。

「ぐおおお……オーバードライブ……。 いやコンドウはそうでも、そっちのルドラとやらはその比では……」

「くそっ、こうなっちまったか。 しゃーねーな、ギイ。 やっぱお前との決着は付けられそうもねーわ……」

クラフターは慌てて一斉に黒曜石展開。

ウィザー級以上の連中相手に効果は薄くても、無防備よりマシだ。とにかく無造作に防壁を展開して強烈な爆風に備える。 TNT、

帯電クリーパーどころか核何個分か分からぬ威力に耐えられる保証は無い。

それでも、とその時。

最も大きく爆発しそうだったエネルギーが、突如現れた少女の手の平に収まっていた。

彼女は、いや、悪友はニヤリと笑いハアンと鳴く。

天誅ッ！

死ねえい！　　リムルⅡテンペストツツツ!!!

「よう。待たせた、なアーツ!?」

「えっ、リムル先生ーッ!?」

太々しい。　よって断罪！

死ね！　　悪食スライム野郎ツ!!

「おい待ってって、ほらヒーローって遅れてやって来るとか言うじゃん!?」

まだヘラヘラ笑うかクソスライム！

シズ顔なのも気に入らない！

毎度愚弄するな！　　無礼である！

祭りに遅刻とは良い度胸だ！

良い所もって行きやがって！

ジオフロントへのミリム誘導も許してない！

マジ色々許さないからなあ。　　絶許！

反省しろ！　　詫びろ！　　経験値0になれ！

「いや悪かったって！　　でも俺にも事情があつたんだよ聞いてくれ!?」

斬りかかり、弓矢の弾幕に晒し、負傷ポーションを投擲し、マグマ

バケツに沈め、天から金床を雨霰と振り落とし、TNTをスタック単位で起爆する。

軍事部からは低密度反物質爆弾が撃ち込まれ、戦車砲が火を噴き、銃弾による鉄の嵐攻撃。

勿論、耐性持ちのリムルは死なない。分かった上でしている。けれど総じて無駄ではない。これが我々の意思表示だ。

「言い訳させろーッ！　しまった、言葉分からないんだったなお前からッ！　シズさんかヒナタ、辛辣ちゃんを連れて来るべきだったか!？」

「ごちやごちや煩い。消えるが良い。」

これでは何方が荒らしか分からないが、多数決で我々が正義だ。勝った。天魔大戦完。

「迷宮都市の地上部分を破壊したマイって女の子がユウキに良い様にされてたから助けたり、俺のエネルギー回復に努めたり！」

あ、ああ、そうだ！　お前ら好みの仕事が出来たぞ！　マイは家族の為に元の世界に戻りたがっていてな、俺達とマイのスキルを上手く使えば帰れる可能性が……」

言い訳無用。　問答無用。

そもそも言葉が分からない。分からないが、言い訳してる雰囲気は伝わる。　悪即斬。

「くそっ！　やっぱ言葉の壁ッ!？」

「あの先生方？　取り込み中申し訳ないんですが、今は世界の命運を賭けた戦闘中ですので、そろそろ真面目にして貰えると大変嬉しいのですが」

「どうか怒りを収め下さい」

「はっはっはっ！　やっぱお前達は面白いな！」

「そうであろう!!」 今度コイツらの本拠地に遊びに行くと良い!
地下に面白いモノがあつてな……」

「ぐぬぬ……我が盟友よ、出来れば早くに来て欲しかったぞ!」

「愚弟よ、醜態を晒すとは……」

「やっぱりお仕置きね」

「ヒイツ!」

「……魔国連邦の苦勞が見える」

こんな時でもハアンは止めない村人共。

もう諦めている。好きにすれば良い。我々もそうしてきた。
互いに縛り合う人生でもない。迷惑しても。

「貴様ら! いい加減にしろ!」

ヴェルダが怒りのハアン。

剣を振るってきたから、リムルが応戦。 手には我々が与えたネザ

ライトの剣だ。

ひと度振えば、鏢迫り合いなんてなく、あっさりとヴェルダは吹き
飛んでしまった。

「ぐあつ!」

「えっ、これ強くな?」

いや良いんだけど。

お前達の最高のひと

振りっばいし」

剣に名付けた名前は嫌がらせのアレだが。

それでも悪食リムルには上等だろう。 精々ソレで王様気分を味
わえば良い。

その度に我々は白い目で見て、度が過ぎたら制裁する。 尤も強過
ぎる力に驕らず飽きて生きる気力が失せるやも知れぬが。 それは
それで仕方ない。 リムルが消えたら、いよいよ連邦や世界を好きに
しよう。 そうしよう。

「そんな笑顔になるなんてな。　渾身のひと振りを作りましたって事か」

「おいおいリムル、アイツら神話級を超えて創世級を作ったのか？　やっぱスゲエ面白いのな、お前の友達は！」

ギイが剣に興味を持っている。

我々もギイの剣、更に云えばミリムの剣、荒らしの剣にも興味がある。

ネザライトより上等の素材が使われているのではないだろうか。果たして、それは何処かで手に入る素材か。　興味は尽きない。

「そうなの？　　剣の格なんて知らないけど、まあアイツらは物作りのプロだからな。　今更何を作ろうと迷惑しなきゃ良い……おいヴェルダ。　まだ生きてるだろ、さっさと戦い、再開しようぜ」

「……抜かすね。　有象無象を手懐けたからと、調子に乗るな。　ボクが本気を出せば、君達を皆殺しにするなんて容易い事だというのに」

「あ、そ。　無理だと思うが、出来るんならやってみろ」

ヴェルダがゆらりと笑い、戻って来た。

まあ速攻で終わっても詰まらない。　そう思わせてくれる内が華だ。　存分に痛めつけてくれる。　もうリムルに任せても良いが。

「ならボクの奥の手、この創世剣、ヴェルダナーヴァで葬ってくれろッ！」

ヴェルダが鳴声を上げながら新たな剣を装備した。　青く輝く美しい剣だ。　ダイヤ剣だろうか。　だとしたらネザライトの下位互換だ。

未知のエンチャントが施されているなら油断ならないが、それでも

クラフターは己らの剣に自信がある。

リムル、頑張れ。その剣を持ちながら負けたら許さないぞ。負けたらスライムボールにして粘着ピストンにクラフトしてやる。

「俺はこの剣を信じている。悪友の作った、この剣を。お前に負ける道理はない」

「ツー」

リムルが踏み込んだ。

ヴェルダは慌てて剣ガード。けれども先程同様に吹き飛ばされ、壁や床を破壊して転がった。

うーん。強い。我が剣が。自慢のクラフトだ。

リムルにあげたのが勿体無い。こうなるなら名前も真面目に考えてやるべきだったか。若干の後悔をしつつも最後の荒らしが黷られるのを楽しんだ。

「リムルの勝ちだな」

「ちよっ、それフラグ!？」

ギイが鳴き、今度はリムルが慌てた。

よく分からないが早く終わらせろ。我々はこの後予定があるのだ。

宇宙行ったり、深海行ったり、此処天界を松明で制圧したり、大陸西部を開拓したり、北地での架橋工事が竣工したから見に行ったり、ラーメン同志の新作食べたり、帝国観光したり、欺瞞の国に嫌がらせしたり、湖底研究所を改修したり、水中に放棄されっぱなしの別のIRP回収したり、元の世界の新発見素材やクラフトを確認しに行ったり。

他にも色々ある。楽しみきれない毎日だ。忙しくて忙殺されそう。全く笑顔が止まらない。そんな日々で大変だ。

「何を言う。 どう見てもリムルの圧勝ではないか」
「そうですね、ヴェルダは偽者にしては恐ろしい力を持っているようですが、やはり本物の兄上には及びません。 あの理不尽なスライムの敵ではなさそうですね」

ドラゴン姉妹が何やら鳴いている。

このドラゴン達との交流もしたい。 卵は未だ見てないが、いつか見られるのだろうか。

それともニワトリみたいに突然スポーンするのだろうか。 謎は尽きない。

「だからそういう発言は、敵が強化される前振りになるから止めてーッ!」

「ふふふ、あははははは!」

「なんだ? ヴエルダめ、吹っ切れたか?」

「なんか嫌な予感だよ!? 馬鹿共を相手にするのも面倒だけど、何を許す訳じゃないんだよ俺は! てかあの表情、見た事あるなオイ!」

ヴェルダがゆらりと立ち上がる。

我々の知る笑顔で、爽やかに声をかけてきた。

ああ、間違いない。 コイツはアイツだ。

「ユウキ、なのか?」

「ええ、お久しぶりです。 やはり僕の思った通り、ヴェルダでは貴方に勝てなかったようですね。 でも問題ありません。 時間は十分に稼げました。 さあ、始めましょうか……僕と貴方、最後の戦いを」

ユウキだ。

消滅してなかったか。 いやヴェルダだと偽ってきたのか。 何にせよ荒らしは全て潰す。

荒らし許さん慈悲は無い。

向こうも剣を向けている。

なら遠慮なく殺せるな。

えるのだった。

敵対している。

マインクラフターもリムル共々剣を構

169. 無限とマインクラフター

「お前、俺を最後まで騙して、時間稼ぎしやがったのか？」

謎解きはクラフトの後に。

とはいかないらしく、ハアンハアン鳴き合うユウキとリムル。

ヴェルダはユウキだった。ちよつと己でも何云ってるか分からないが、荒らしに変わりない。

スキンなんて問題ではない。

荒らしか否か。その二極化でしかない。

「あはは、わかっちゃった？ 正解だよ、リムルさん。ま、それに

関してはヴェルダも綺麗に騙されていたみたいだけどね。ほら、敵を騙すにはまず味方から、って言うだろ？」

「ふざけるなよ、俺は本当にお前を！」

「はは、それが甘いつて言うんだよ。敵の言葉を信じるなんて、本当、オメデタイ頭をしてるよね、リムルさんは」

ミリムとディアブロ、他は菌軋りしている。

何らかの状態異常を喰らい動けないらしい。クラフターには関

係ないが。アレだ。水中神殿のデバフだ。そんな雰囲気か。

なら理解出来る。

何にせよ荒らし殺す。それに尽きた。

そんな思いが通じてか、リムルは斬りかかる。

ユウキは涼しい顔で剣ガード。吹き飛ばないあたり、ヴェルダより強い。これは間違いない真理だと。

「どうやってそれだけの力を？」

「教える必要を感じないけど、まあ1ヶ月待ってもらったんだしそれぐらいいいかな。簡単な話でね、ヴェルダを僕の下位になるように

抑え込んだだけの事だよ。力を全て解析した上でヴェルダの知識も全て解析し、理解した。お陰で、簡単に力を手に入れる事が出来たよ。後は、半分の関係を完全に支配と被支配関係へと変化させただけ。そうそう、リムルさんがヴェルダの望みを潰し、心を折ってくれたので楽だった。その点は感謝してるよ」

一応、動けるクラフターも攻撃してはいる。

弓矢は簡単に弾かれるから、剣で突撃するも、2人の剣戟の衝撃波で吹き飛ばされた。

ままならないものだ。けれどコレを乗り越えれば明日がある。けれど明日頑張るのではない。今日、今日だけ頑張るのだ。今日頑張った者にのみ明日が訪れる。いつものクラフト生活に戻るべく振舞おう。

「ヴェルダはね、自分がヴェルダナーヴァの生まれ変わりだと信じたがつていたんだ。そんな訳ないのにさ、馬鹿なヤツだよ。あれは、能力に過ぎない。ヴェルダナーヴァの原初の能力だったから、全ての記憶を受け継いでいただけ。言ってみれば、記憶の宝珠で呼び戻された近藤やダムラダと同じような存在って事さ。ルドラのようなイレギュラーな存在にすら劣る、哀れな神智核だよ。馬鹿だよね、竜の因子すら持たない道具の癖に、勘違いしちゃってさ。でもね、そんな愚かなヴェルダでも、僕の補助としては有能なんだよ。何せ、これでヴェルダナーヴァの全ての能力を扱えるって事なんだから！」

「聞いてもない事をペラペラと！」

リムルも怒っている。

ギイも怒り始めた。分かる。荒らしが高級な装備や振る舞いをするとムカつくものだ。

「ヴェルダナーヴァの全ての力を操れる、だと？　思い上がるなよ、

人間風情が！」

最も吼えるのが限界だ。

声で荒らしが失せれば苦勞しない。結局荒らしは暴力を振るう。そうしたいからだ。対して我々の様にヨシとしない者は更なる力でねじ伏せる。今まで通りだ。でなければ何時迄も調子に乗る。下手すると世界にある全てを破壊し尽くしても満足しないのが荒らしだ。

だから勝たねばならない。何がなんでも。

「いや……ヴェルダナーヴァの力を操れるっていうのは、本当なんだな……」

「あは、あははははははははははははははは!!」

不快な笑い声を上げるユウキ。

それに皆は凍り付く。クラフターを除く。

「ふふ、流石だよリムルさん。そんな絶望する顔が見たかった……言っても分からないクラフターさんには、これから絶望して貰うよ。言葉なんて要らない、圧倒的な力でね。

何せ、せつかく僕が本気になったんだからさ。道具を使って世界を滅ぼそうというゲームは失敗してしまっただし、最後に少しくらい愉しんでもいいだろう?」

心の底から愉しそうに嗤いおる。

クラフターはスニーク姿勢で剣を振った。威嚇しているのだ。

その表情をして良いのは創造主、クラフターだ。

断じてお前の様な荒らしではないと云いたい。

死に晒せ。即刻斬り捨て御免である。

そんなクラフターは剣折れ矢尽き、生き延びたネザライトフル装備の同志も満身創痍だ。

けれど闘志は未だ燃える。その限り負けはない。
さあ。改めて絶望で染め合おう。
クラフターは武器を構え直し睨み付けた。
何方が先に折れるかな？

暫く剣戟を試みたが、ユウキがパチンと指を鳴らせば時空間異常
が起きた。

後に対応出来るは、またもPSクラフターのみとなる。厄介な。
リムルまで止まってしまった。この気にトドメを刺したくなる
が我慢する。今は荒らしだ。

「あははは、時間停止世界でも動けるのは僕と君の一部だけみたいだ
ね？」

後方のクロエは時間の限りではないが、やはり威圧感に負けてか動
けないでいる。

今度ばかりは牛乳に相談は出来ない。取り敢えずリムルから魔
改造剣を奪い取り、相対する事にした。

「リムルさんの事だから、ひよつとしたらこの中でも動けるかと思っ
ただけだな。まあ君達の対応に追われる日々だったから、強くな
れなくても仕方ないか。寧ろ多忙の中、此処まで足掻ける位に強
くなったのを賞賛するべきだね」

剣振るい、やあやあとユウキに挑む。

ドラゴン相手に立ち回れるPSクラフターなのに、ユウキは堂々つ
いてくる。

おのれユウキ。 流石ユウキ。 褒めてやる。 だからクタバレ。直ちに。 創造の為に。

「でも意味なく時間停止させた訳でもない。 君達は殺しても何度でも復活してくる厄介極まりない性質だ。 なら時空の彼方に片っ端から飛ばしちやえば良いよね？」

妙な、グニヤリとした感覚。

時空異常を重ね掛け。 ユウキは重罪に重罪を重ねる。 最早リスキルでは済まされないレベルだ。 世界からの永久追放ものである。

「時空跳激震覇（クロノサルテーション）！」

暗転。

世界は闇に包まれた。



「さて、最大の障害には未来へと旅立って貰ったよ。 これでチエツクメイト、だね」

時間が流れ始めた。

PSクラフターは最高傑作共々消え、残された者達は絶望を重ねる。

ミリムは泣き崩れ地面に座り込んだ。

「……友達が、消えてしまったのだ……」

「クラフターの事だ！ 大丈夫に決まってる！」

「リムル？」

リムルが新剣を抜剣。 皆を鼓舞した。
手元の武者震いは言霊より伝播する。

そのツールはクラフター製より劣るが、意思は伝わる。 言葉より
ずっと重い意志だ。

釣られて我々は構え直した。

そうだ。 まだだ。 まだ何も終わっていない。

十割十分創造道。

他はない。 励む他ない。

落涙している暇は無い。

成し遂げる他道はない。

信念貫く他ない。 誉捧ぐ他ない。

我等の御旗は未だ旗めく。

感情に溺れ死んでいる場合ではない。

この無念、必ず晴らそう。

作れ。 生きろ。 愉悦に浸れ。

希望ある、その限り。

往け。 邁進せよ。

マインクラフターよ永遠に！

創造主達は勇猛果敢に呐喊していく。

次々に伏せられ、飛び、ばら撒き、後続が踏み越え突き進む。

リムル達も続く。

「ユウキを倒して、さっさと呼び戻すぞ！」

「そうだな、その通りだ。 やるぞ！」

「またユウキを手に掛けるか。 いや、今度こそ息の根を止めてやる。
完全にな」

「やるしかねーだろうな。 とんでもない化け物みたいだが、どうせ
最後なら本気を出してみるのも面白いだろうぜ」

「ふふ、本当に久しぶりねギィ。 最後まで離れないわよ」

「クフフフ。 リムル様に敗北など有り得ませんが、暫くは留守をお守りすると致しましょう」

「そうね、先生には何か思惑があるのかも知れないけれど、アレを倒してしまつては駄目という事はないでしょうから」

それぞれ奮い立つ。

再度時間停止されたなら、対抗出来るのは凡愚な劣化版PSクラフト位であろう。

後方支援班が大急ぎでPSのクラフトをしているが、到底間に合わない。ならば現状戦力で対処する他ない。

最高傑作の鎧と剣が一瞬の内に消え去つたという事は、今の面子ではユウキに勝つのは厳しい事を意味する。

けれど、やるだけだ。 何時もそうしてきた。

これからもそうするだけ。 これも何度目か分からない様式美である。



創造主は闇の中にいた。

めつちや広い。 けど暗い。 何も無い。

刻すら存在しない、宇宙の終焉。

なんだコレは。 たまげたなあ。

しかし創造主、思考を止めない。

止めれば忽ち絶望に吞まれ消え逝くのを知り得る者ゆえ。

メインクラフターは『無』に無力。

『無』は創造の対極の位置。

クラフターは故に嫌悪する。

死ねないけど生きていけない。

愛しているのに怖い。

そんな苦しき。

誰か共感して欲しい憤り。

けれど今が辛いからと諦める必要は無いのだ。

この世界の創始者、ヴェルダナーヴァが終焉についてどう考えていたのか知らない。

けれど全てに始まりがあれば終わりがある。

どうしようもない必然だ。我々と君の創造は、破壊され何れ終わる。

この光なき光景は必ず訪れる結末だ。だからと自らの手で終わ

らせるのは時期尚早。

創造主は足掻く。

かの憎き荒らし野郎をとつちめる為に。

そんな中、並列して愚考した。

怒り、暴力は寂しさが根幹だと。

ユウキは或いはそうだったのかも知れない。

思い知らせてやる、等を表面化していても内面は違う場合もある。

そういった怒り狂う者の中には、過去に酷い目に遭ったケースが挙

げられる。それに気付けるかは難しい。ユウキの過去は知らない。

いし、師であったシズが何処まで把握していたのかも分からない。

今更興味を持った所で救えやしないし、救う気も起きないものの。

我々も散々の苦渋を味合わせられし。

事今に至っては暗黒空間に放り込まれた。砂利や砂に埋まるよ

り酷い。ジ・エンドの奈落が延々と続くかの様だ。

記憶に住まう村人も何人死んだか。

その意味でも生かしておけない。天下泰平の為に死んで貰おう。

死んで償えるものでもないが。まさか我々の様に死んでもベツ

ドで目覚める、寝て起きるタイプでもあるまいに。

うぬ？ 死ぬ？ 目覚める？ 寝て起きる？

そうか。その生き様があった！

クラフターはパツと明るくなる。

闇を照らす一縷の光明は膨れに膨れた。

脱出手段を思いついたのだ。

リスポーンだ！　　そうしよう！

未曾有の時空間異常を経験している現在、全てが未知数だ。ならばやるのみ。　クラフターは未知を恐れない。　寧ろワクワクする。心踊る。

経験値含む全ロストは辛い、継る物じゃない。

欲しいのは未来だ。

語り手じゃない。　作り手だ。

宇宙では失敗したが、まあなる様になるさ。

という訳で。

PSの自爆機能を起動。

クラフターは大爆発に沈んだ。

死因はビッグバンだった。

無の空間は忽ち火球に包まれ、次にはマインクラフターの持ち物がばら撒かれていく。

希望と共に空間が膨れ、刻が流れる。

ひとつの宇宙が出来ていったのだ。

マインクラフターは意図せず宇宙をもクラフトしてしまった。

本人は気付かずリスポーンしてしまったが。



「何者だ!？」

驚愕のハアンで我に帰る。

振り向けばユウキがいた。　次に周囲を見る。

決戦に備えたベッドがあり、リムル達がいる、同志がいる。

どうやら戻ってこれたらしい。　喜びの余り飛び跳ねた。

全口

ストの痛みなんて無いに等しい。

「……お前、戻って来れたのか？」

リムルが恐る恐るハアンと鳴いた。

なんて情け無い表情だ。　シズに申し訳ないだろ。

「心配させるでない！　隠れて脅かそうなどと、人が悪いにも程がある。　世界から気配が完全に消えたから、ワタシですら未来に飛ばされたのだと信じてしまったではないか!!」

「お前ら」といって、本当飽きねえな！」

まあ良い。

装備がないが、今なら何でも創造（想像）出来る気がしてくる。

ユウキを倒して『おしまい。』にして先へ往こう。　世界はクラフターを待っている。　待つてなくても、こちら側から追い掛ける。

「さて、終わりにしよう。　お前の遊びにも付き合ってたんだし、そろそろお休みの時間だろ？」

リムルに刀剣を渡された。

最高傑作のフルエンチャントなネザライトの剣より劣るが、何とかする。　クラフターだもの。

同志が既にエンチャント台や金床を用意してくれている。　早速刀剣をセツト。

経験値持ちの同志が駆け寄り、エンチャント本をも持ち寄り、様々に付加していった。　みるみる内に刀剣は光輝いた。　我等が魂に呼応するかのよう。

「馬鹿なの!?　完璧に”時空の果て”へと飛ばされたハズだ!!」

クロちゃんは創造主の帰還を信じていたのか、当然だと言わんばか

りに満足そう。

ただ此方を見る表情が恍惚としているのでゾツとするが。 元に戻る事を切に願う。

クロエは泣き出さんばかりだが、やがてギイ同様に剣を収めて見守る構えになった。

我々を信じてくれているのだろう。 任せよ。
期待には応える。

己は背中に皆の想いを受けて、ユウキへ向けて出来た刀剣を突きつけた。

「飛ばされたさ。 キツチリと。 まあ見事だったぜ。 ただ残念ながら、連中には意味がないってだけさ」

「馬鹿、な……マインクラフターが時間跳躍を行えた……？ それも、完全なる形で、望みの場所へ……” 時空の果て” から、だって……在り得ない……そんな、そんな馬鹿げた事が出来る者など、存在するはずがないんだ……それではまるで超越神じゃないか——」

ムニヤムニヤ寝言らしきを述べれば、次には斬り掛かってきた。

もう遠慮は要らぬ。 剣ガードで弾き、斬り返す。

ユウキは激しく咳き込んでから、呆然とこちら側を見上げた。 もう決着はついたものだ。

「お前は、お前は一体誰なんだ——!？」

そうだ。 そういや名乗っていないかった。

伝わらずとも、せめての礼節にお辞儀する。

我々はマインクラフター。

それ以上でも以下でも無い。

では死ね。 荒らしよ、さらば。 永遠に。

「やめろ、来るな！　僕は世界を――」

刀剣を振り下ろそうとした刹那。

「ユウキ……ッ！」

懐かしくも近しい声が出た。

振り返る。シズだった。息も絶え絶え。

急いで来た様子だ。

「シズ先生……？」

ユウキ、リムル、クロエが同時に反応する。

クラフターは刀剣を収めた。

成り行きを見守ろう。シズなら大丈夫だ。学園の手腕も見た

し、怒った際の背筋が凍る笑顔も知り得ている。此処でユウキに手

を出せばヤバいと本能が警笛を鳴らすし。

「ユウキ、やはり貴方を最後まで導いてあげる事が出来なかったからかしら？　最後まで、本当に……手のかかる子ね」

無防備に近付き、ユウキを抱擁するシズ。

我々は見守るばかりだ。リムル達も。

「先生……そう、そうだったのか……先生も……彼等、創造主の様に……」

「そうね。私も一緒に反省してあげます。決して孤独にはしないわ」

「わかったよ。でも僕は……」

「でもも、待ったもなし。また鍛え直してあげますからね。昔の様に。ううん、こんな事をしないよう、もっと厳しく。リムル」

「シズさんが決めたなら、俺達は何も言えないよ。　あいや、普通に生かす訳にはいかないけどな」

「我儘聞いてくれるだけで充分……ありがとう、みんな」

世界を滅亡寸前まで追い込んだ馬鹿弟子相手に優しすぎやしないだろうか。

まあ良いか。　シズの監視下にいるなら。　ユウキもおいそれと反逆する気も起きないだろう。

とはいえ我々も監視しよう。　なんなら同じクラフターに勧誘しよう。　ユウキも中々に素質がある気もせんでもない。　荒らしは駄目だが。

そうだな、宇宙にでも飛ぶか？

この星に収まるのも勿体無いと思わないか？

なに、荒らすより楽しい人生の幕開けだ。

少なくとも虚無の世界ではない。

シズ共々それに気付いて欲しい。

生きるって楽しい。　作るって楽しい。

クラフターがいて、仲間がいて、クラフトする。

飲み切れない娯楽を味わい愉悅に浸り溺れ続け、泣いて喜ぶが良い。

さて、また何時もの日常に戻るとしよう。

退屈とは無縁で忙しい笑顔の日々を。

そして皆で共有して物作りだ！

やりたい事だらけで困るな全く！

「うわー……アイツら、また荒ぶってるよ。　また書類処理の日々に

逆戻りか」

「その割には楽しそうだね？」

「良くも悪くも退屈とは無縁だね」

こうして祭りに区切りがついた。

クラフターは愉快的な腰振りをし、首を振り回す。
寝て起きてクラフト案件。

全ての人よ、この楽しみきれない毎日を！
マインクラフターよ、永遠に！

「おわり。」の先へ。

170. 寝て起きて。

ユウキとの戦いから1年経った。

あれから色々あった。

ヴェルダを倒したと、リムルが全世界に向けて伝達。それにはユウキがやっていた様な謎魔法により、リムルの姿を各国の上空に投影して行われた。そして全世界的な危機が去った事を、リムルは宣言したのである。

世界は歓喜に包まれ、ゆつくりと未曾有の混乱は終息。それを助けたのは魔国連邦の村人達。クラフターには、どうでも良いが。何時も通りの日々だ。ちよつと村人煩いと思つたくらい。

兎も角、ようやくと我々は以前の楽しい日々を取り戻したのだつた。

それで肝心の荒らし野郎ユウキだが。

普通のクラフターなら黒曜石の牢獄に閉じ込めてリスキル三昧であるところ、シズに配慮し別の処置。

そもそもリスポーンするか怪しいので却下。

という訳で、予定通り宇宙開拓に参戦させている。ユウキの賢さとシズによる制御で何とでもなるだろう。辛辣娘と他の同志の助けもある。

「合流するまで想像の範疇を抜けませんでした、シズ先生」

「どうしたの？」

「僕達、今、宇宙にいるんですか？」

「そうだね。クラフターさんの、娘さんのロケットは凄いいよね。」

今いる宇宙ステーションという建物も。無重力なのも慣れてきたかな」

「……いやー、それを平然と言えるシズ先生は大分毒されていますね。突然飛ばされて宇宙ステーション作りを手伝わされてる件について

ても……それで、出来たらそのまま勤務ですか」
「暫くは。反省の色が見えたら地上に戻るよ」

同志も共にいるから何とでもなるだろう。
ユウキとシズは任せる。

「お、お前ら……ユウキとシズさんを宇宙に飛ばすたあ、何事だーッ
!?!」

「落ち着いて聞いて下さい。軌道上の宇宙ステーション作りに従事
している内は大丈夫です」

「大丈夫な要素ナニもねえよ!?! 監視下に置きたいのに、なんで宇
宙に飛ばすの? 国外追放ならぬ惑星追放なの? 馬鹿なの死
ぬの?」

「すみませんっ! 私が機龍整備中に!?!」

リムルと辛辣ちゃん、ベスターが騒いだが。

まあ最悪脱出用ポッドに乗って地上に帰還出来る。迎えの口
ケツトも飛ばせる。慌てる事はない。ただ楽しめば良い。リ
ムルはもつと余裕と寛大な慈悲の心を持つべきだ。

「などと供述しており」

「ザケンナゴルワアツ!?!」

月面基地建造計画もある。他惑星の探査とか。
いやあ宇宙は夢がある。

大気が無い所は漂流物が燃え尽きる事なくドカンドカンとぶつか
るのだ。あと宇宙ゴミ。それも楽しい。
それら浮遊物の処理は確立されていないものの、スポンジを軌道上
にばら撒いて、ゴミが食い込んだ所を回収ないし解体している。

効率が良いとはいえないし、確実ではないのだが。良い方法が開
発される事に期待。

月面基地は安全が確保されるまで、あまり風呂敷を広げない方が良いかも知れない。地下に施設を建設した方が安全か。

「……回収するとして、竜種の皆さんは？」

「皆、それぞれ元気そうですよ」

エンダーモドキことヴェルドラはリムルの盟友とやらで、連邦に留まっている。村人の姿で。最近は何故か たこ焼きなる料理を始めた。美味い。

「クアーハツハツハツ！ 我のたこ焼き（たこ無し）捌きを刮目せよ！」

ドラゴンもクラフターだったか。

なら悪い奴じゃない。同志だ。クラフターには相変わらず甘いのであった。

一方、他の赤と氷ドラゴンはというと。

「姉さんはギイと暮らすのね？」

「ええ。北の地に馬鹿達が橋を架けてからというものの、命知らずが増えたから。その意味では退屈しないし」

「私はルドラの生まれ変わりを探しにいきます」

「きつと見つかるわ」

「ありがとう」

それぞれ旅立った。

好きにすれば良い。ただ邪魔してくる様なら容赦しない。でもモドキがクラフターとして活躍しているのだから、仲間にも出来るような気配はある。

ギイは相変わらず北の地だ。

ヴェルザードと仲良く暮らせば良い。

「やりたい様にやれ。　また楽しませろ」

何事かハアンと鳴いて別れた。

繁殖するかは分からないけど、もしそうなら見に行きたい。　ミリムはヴェルダナーヴァと村人の間に生まれた子だと聞く。　この世界は種族の壁が曖昧だから、様々な可能性があって面白い。　その点も期待だ。

天空界はミリムの領土と決まった。

荒らし指導者を失った羽虫共はディーノとかいう、迷宮に来た荒らしに従う事になった。

だとしてクラフターには関係ない。　何時も通り好きにする。　お邪魔して物作りだ。　荘厳な建造物を修繕し改良し拠点化する。　宇宙とは違う新たな世界も楽しむ。　それがクラフター流だ。

「わはははっ！　　今日は何して遊ぶ!?!」

あと、大陸のミリム城も修繕しつつ遊び場に。

時々ミリムに荒らされるのは青筋物だが、遊ばせてくれる数少ない建造物だ。　寛大にならなければ。　リムルとは違うのだよ、リムルとは。

「ミリム！　　少しは大人しくしてくれ！」

「はあ、領土管理を少しはやって頂戴」

「うっ……アイツらがいるから平気なのだ」

「逆でしょ!?!　　いるから大変なのよ!?!」

「やれやれだな」

配下のフレイとカリオンは苦勞している。

まあ頑張れと云いたい。　ミリムという特大級の荒らしの制御は容易ではない。　それでも保護者がいた方がマシだ。　ユウキとシ

ズの関係みたいに。

教子クロエ達は学園に顔を出したり、我々の元に遊びに来てくれる。

荒らし大戦も終わり落ち着いたのでゆっくりして貰いたい。今まで散々苦勞していたらしい。お疲れ様。

あと西方諸国を纏めたヒナタも。欺瞞の国の姫様も……まあ隙あらば嫌がらせ、じゃなく遊びに行こう。

「先生達と共に過ごせる時間が幸せです」

次はツルハシやスコップを持たせたいが。

そうだ。それら関連の話だが。

戦争で荒れた都市部は同志が現地入りし、瞬く間に修繕が完了した。

良い事だ。放置は気持ち悪いと思うのがクラフターだ。平常運転に満足気に頷いた。

1度更地になった迷宮都市地上部は、今度はより良い近未来都市的な雰囲気となった。素晴らしい。その調子で大陸全土と云わず、海や宇宙の開拓も進めていきたい。

地下鉄も整備が進んだ。

最初の頃こそ、リムルやシズに良い顔されずオラつかれた分野だが、今や重宝していた。各国への安全で沢山運べる輸送手段が増えるのは良い事だ。

そのお陰で人員のみならず物資が大量に行き交い、死傷率低下、物価の価格下げに成功した。物価面はクラフターには余り興味なかったが、村人は大層喜んだ。悪い気はしない。

ああ、それから……。

色々あるが、最も重要なのは次元間航法が可能になってきた件だ。リムル、マイ、あと勿論我等クラフターらの力により、それとなく見えて来た。

我々の元の世界における村人達の進出のみならず、リムルの元の世

界にも限定的に行ける様になった。

のだが、我々が向かう事にリムル達……異世界人は全力で止めて来た。荒らすつもりはないのだが、少し寂しくなった。

「お前らが俺達の世界に来たら大混乱だ。だから絶対に来るなよ。フリじやないからな、絶対だぞ!？」

取り敢えずリムルが先んじて元の世界に戻る事に。なんなら自分死んだ日に。

そして何やら工作してきたらしいが、クラフターには知っちゃこつちやない。

好きに作り、好きに生きる。

そうして、これからも作り続けよう。

「まあ、お互いに楽しく、これかも宜しくな」

クラフターは各々頷いた。

寝て起きてクラフト案件。

そんな日々よ！

マインクラフターよ永遠に!!